

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 192

# 久田堀ノ内遺跡

苫田ダム建設に伴う発掘調査

3

(第1分冊)

2005

国土交通省苫田ダム工事事務所  
岡山県教育委員会



1 中世居館



2 堀3断面



縄文土器・土製品



縄文時代の石器・石製品



1 弥生時代の水田



M2



2 弥生時代中期の土器群・竪穴住居9出土のヤリガンナ



1 中世の掘立柱建物群



2 堀1~3南辺

卷頭図版 6



瀬戸・美濃産陶器



白磁





青磁



1 青磁・青白磁・青花



2 天目・常滑・唐津・焼締陶器

卷頭図版10



1 硯・温石・砥石、磁器転用砥石



2 和鏡



中世の武器・武具

巻頭図版12



1 近世の掘立柱建物と堀3北東部



2 近世墓出土遺物

# 序

本書は、岡山県の北部奥津町から鏡野町にかけて計画された苦田ダムの建設に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を実施した久田堀ノ内遺跡の記録です。

岡山県教育委員会は、ダム建設によって影響を受ける埋蔵文化財の保護と保存のため、国土交通省（旧建設省）や関係各課と協議を重ねた結果、水没部分や湖岸道路によってやむなく削平を受ける部分につきましては、記録保存の措置を講じてまいりました。

本書は、平成11～13年度に発掘調査を実施し、平成14年度から整理・報告書の作成を行った成果を収載しています。

そして、苦田ダム関連遺跡の発掘調査報告書としては、3冊目にあたります。

久田堀ノ内遺跡は、中国山地の山間部に特有な旧吉井川の氾濫や堆積によって育まれた谷底平野に営まれ、縄文時代から江戸時代の遺構と遺物が数多く見つかっています。とりわけ縄文時代では、膨大な量の石器と列島各地からもたらされた土器が出土し、また中世では、堀をめぐらした居館の存在と貿易陶磁器類が出土するなど、重要な成果が得られています。

本報告書が、文化財の保護と保存に活用されること、さらに地方史研究の一助となることを願ってやみません。

発掘調査の実施と報告書の作成にあたりましては、苦田ダム建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方から有益な御指導と御助言を賜りました。また、国土交通省苦田ダム工事事務所ならびに、奥津町、奥津町教育委員会、地元の皆様方や関係各位から多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

岡山県古代吉備文化財センター  
所長 正岡 睦夫

# 例 言

- 1 本書は、苫田ダム建設事業に伴い、岡山県教育委員会が国土交通省と岡山県の委託契約に基づき実施した、<sup>くたほりのうち</sup>久田堀ノ内遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課（旧文化課）が行い、発掘調査および報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 遺跡は、<sup>とまたぐんおくつちょうくたしものほら</sup>苫田郡奥津町久田下原に所在した。平成17年3月に鏡野町ほかと合併し、現在は鏡野町であるが本文では旧来の町名字名で表記している。
- 3 遺跡の一次調査は平成9年度に調査第三課が実施し、引き続いて全面調査を平成11～13年度に調査第二課が担当した。発掘担当者は、伊藤晃、岡田博、江見正己、福田正継、二宮治夫、岡本寛久、赤井義典、杉山光紀、平井泰男、山本道夫、佐乗信也、三船幹也、権田俊朗、弘田和司、砂泰将、常安伸、奥野光廣、根木智宏、蛭原啓介、小嶋善邦、佐藤寛介、小林利晴、河合忍、上栴武、和田剛、梶田亜友美、坪井聡子である。なお、調査面積は52,885㎡である。
- 4 発掘調査および報告書作成にあたっては「苫田ダム建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、次の方々に委員を委嘱した。委員各位からは有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

稲田 孝司（岡山大学）  
白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）  
橋本 惣司（岡山県遺跡保護調査団）  
船津 昭雄（岡山県遺跡保護調査団）  
湊 哲夫（津山市郷土博物館）  
宗森 英之（岡山県遺跡保護調査団）
- 5 調査にあたっては、国土交通省苫田ダム工事事務所ならびに、奥津町および奥津町教育委員会の関係各位から多大なる御協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。
- 6 本書の作成は、平成14～16年度にかけて行った。平成14年度は岡山県古代吉備文化財センター西川原事務所において、伊藤晃・江見正己・岡本寛久・弘田和司・蛭原啓介・河合忍が担当した。次年度以降は岡山県古代吉備文化財センターにおいて実施し、平成15年度は江見・弘田・小嶋善邦・河合が、平成16年度は弘田が担当した。全体編集は、弘田が行った。
- 7 本書の執筆は、発掘担当者および整理担当者があたり、文責はそれぞれ文末に記した。
- 8 本書全般にわたっての鑑定・分析・保存処理については次の方々および機関に依頼し、有益な教示を得た。また、一部の成果については報告文をいただいた。記してお礼申し上げる次第である。

陶磁器鑑定	家田 淳一（佐賀県立博物館）
胎土分析	白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
石材鑑定	妹尾 護（倉敷芸術科学大学）
植物珪酸体分析	（株）パリノ・サーヴェイ
花粉分析	環境考古研究会
和鏡の修復および付着物分析	（財）元興寺文化財研究所
- 9 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
- 10 本書に記載した出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 本報告書に用いた高度値は海拔高であり、方位は、地形図および全体図などは平面直角座標第Ⅴ系の座標北を示し、古代以降の遺構図については磁北と座標北を併記した。そのほか特に示さない限り磁北であり、遺跡付近の磁北偏差は西偏 $6^{\circ}30'$ を測る。

また、平成14年4月から経緯度の基準が世界測地系へと移行しているが、本書では日本測地系に準拠している。

- 2 グリッドは奥津町箱の北西に位置する $X=-92.0\text{km}$ 、 $Y=-41.2\text{km}$ を基準とし、それぞれの軸上に100mごとに0~50、およびA~Uを付す。さらに、100mを10分割し、Aa~Aj、00~09のように小文字および半角数字で表している。なお、グリッドの基本杭は北西の杭としている。

- 3 図面の縮尺については明記しており、一部例外があるものの次のように統一している。

遺構 竪穴住居 1/60 掘立柱建物 1/60、1/100 井戸 1/40 土墳墓・土壇 1/30  
遺物 土器 1/4 土製品・金属器 1/3 石製品 1/2、1/3、1/8

- 4 全体図では遺構名を以下のように略称を用いている。

竪穴住居：住 掘立柱建物：建 柱穴列：列 土墳墓：墓 井戸：井 袋状土壇：袋  
焼成土壇：焼 土壇：土 火処：火 柱穴：P

- 5 掲載遺物番号については、遺跡ごとに土器、土製品、金属器、石製品、木製品、骨製品に分けて通し番号を付け、土器以外については次の略号を番号の前に付している。

土製品C 金属器M 石製品S 木製品W 骨製品B

- 6 土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径復元に不確実性のあることを示す。

- 7 掲載した遺構上の点描等は以下の範囲を示すものである。



被熱(強)



被熱(中)



被熱(弱)

- 8 遺構一覧表の土壇などでは、断面形の立ち上がり形態をⅠ：袋状、Ⅱ：筒状、Ⅲ：逆台形で表し、床面については、a：平坦、b：中央がくぼむもの、c：中央が高くなるもの、d：溝が巡るもの、e：凹凸が著しいものとしている。



# 目 次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

第1章 発掘調査の経緯 .....	1
第1節 調査の経過と体制 .....	1
1 調査の経過 .....	1
2 調査の体制 .....	6
第2節 整理の経過と体制 .....	7
1 整理の経過 .....	7
2 整理の体制 .....	8
第2章 久田地区の地理的・歴史的環境 .....	11
第3章 発掘調査の概要 .....	15
第1節 遺跡全体の概要 .....	15
第2節 縄文時代の遺構と遺物 .....	19
1 概要 .....	19
2 袋状土壌 .....	29
3 焼成土壌 .....	32
4 土壌 .....	32
5 火処 .....	50
6 溝 .....	60
7 土器溜まり .....	62
8 窪地 .....	90
9 河道 .....	96
10 遺構に伴わない遺物 .....	120
第3節 弥生時代の遺構と遺物 .....	151
1 概要 .....	151
2 竪穴住居 .....	164
3 掘立柱建物 .....	179
4 袋状土壌 .....	181
5 土壌 .....	182
6 火処 .....	191

7	水田	191
8	溝	192
9	河道	198
10	洪水砂関連遺物	209
11	住居跡周辺出土遺物	211
12	遺構に伴わない遺物	216
第4節 古墳時代の遺構と遺物		221
1	概要	221
2	竪穴住居	223
3	土壙墓	224
4	土壙	225
5	火処	229
6	土取り跡	230
7	土器溜まり	232
8	窪地	234
9	河道	234
10	遺構に伴わない遺物	237
(第2分冊)		
第5節 古代・中世の遺構と遺物		241
1	概要	241
2	掘立柱建物	261
3	柱穴列	313
4	竪穴遺構	314
5	墓	316
6	焼成土壙	335
7	埋甕遺構	335
8	集石土壙・集石遺構	339
9	石敷土壙	342
10	土壙	343
11	堀	397
12	溝	415
13	火処	424
14	土器溜まり	424
15	窪地	429
16	柱穴	432
17	遺構に伴わない遺物	436
第6節 近世以降の遺構と遺物		463
1	概要	463

2	掘立柱建物	470
3	柱穴列	482
4	井戸	485
5	墓	487
6	土壙	509
7	堀	517
8	溝	519
9	柱穴	521
10	遺構に伴わない遺物	521

(第3分冊)

第4章	まとめ	525
第1節	縄文時代の遺構について	525
第2節	縄文後期の土器をめぐって	527
第3節	縄文晩期の土器について	531
第4節	縄文時代の石器について	537
第5節	弥生土器について	543
第6節	弥生時代の水田について	551
第7節	中世の遺構と遺物について	555

自然科学的分野の研究

1	久田堀ノ内遺跡出土土器の胎土分析	岡山理科大学自然科学研究所 白石 純	571
2	久田堀ノ内遺跡における植物珪酸体分析	(株)パリノ・サーヴェイ	581
3	久田堀ノ内遺跡における花粉分析	環境考古研究会	590
4	久田原・久田堀ノ内遺跡出土和鏡の付着物分析	(財)元興寺文化財研究所	593

遺構一覧表

遺物観察表

掲載遺構新旧対照表

写真図版

報告書抄録

# 巻頭図版目次

(第1分冊)

巻頭図版 1	1	中世居館	巻頭図版 6	瀬戸・美濃産陶器
	2	堀3断面	巻頭図版 7	白磁
巻頭図版 2	1	縄文土器・土製品	巻頭図版 8	青磁
巻頭図版 3	1	縄文時代の石器・石製品	巻頭図版 9	1 青磁・青白磁・青花
巻頭図版 4	1	弥生水田		2 天目・常滑・古唐津・焼締陶器
	2	弥生中期の土器群・竪穴住居9出土の ヤリガンナ	巻頭図版10	1 硯・温石・砥石、磁器転用砥石
巻頭図版 5	1	中世の掘立柱建物群		2 和鏡
	2	堀1～3南辺	巻頭図版11	中世の武器・武具
			巻頭図版12	1 近世の掘立柱建物と堀3北東部
				2 近世墓出土遺物

# 図目次

第1図	遺跡位置図 (1/2,000,000) ……………	1	第18図	縄文時代主要遺構部分図③ (1/500) ……………	24
第2図	遺跡周辺位置図 (1/200,000) ……………	1	第19図	縄文時代主要遺構部分図④ (1/500) ……………	25
第3図	苫田ダム関連遺跡 (1/50,000) ……………	2	第20図	縄文時代主要遺構部分図⑤ (1/500) ……………	26
第4図	苫田ダム周辺遺跡群詳細位置図 (1/10,000) ……………	2	第21図	縄文時代主要遺構部分図⑥ (1/500) ……………	27
第5図	久田堀ノ内遺跡周辺地形図およびトレンチ 位置図 (1/4,000) ……………	3	第22図	縄文時代主要遺構部分図⑦ (1/500) ……………	28
第6図	トレンチ断面 (1/100) ……………	3	第23図	袋状土壌1 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3,1/2) ……………	29
第7図	発掘調査経過図 (1/8,000) ……………	4	第24図	袋状土壌2 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3) ……………	30
第8図	旧調査区配置図 (1/4,000) ……………	5	第25図	袋状土壌2出土遺物 (1/4) ……………	31
第9図	調査地周辺の遺跡分布図 (1/60,000) ……………	12	第26図	袋状土壌3 (1/30) ……………	31
第10図	上層遺構全体図 (1/2,500) ……………	15	第27図	袋状土壌4 (1/30) ……………	31
第11図	下層遺構全体図 (1/2,500) ……………	16	第28図	焼成土壌1 (1/30) ……………	32
第12図	微高地・河道と土層柱状図位置 (1/6,000) ……………	19	第29図	土壌1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	32
第13図	縄文時代基本層序 (1/60) ……………	20	第30図	土壌2 (1/60)・出土遺物 (1/2,1/3,1/4) ……………	33
第14図	縄文時代後期遺構全体図 (1/2,000) ……………	20	第31図	土壌3 (1/30) ……………	34
第15図	縄文時代晩期遺構全体図 (1/2,000) ……………	21	第32図	土壌4 (1/30) ……………	34
第16図	縄文時代主要遺構部分図① (1/500) ……………	22	第33図	土壌5 (1/30) ……………	34
第17図	縄文時代主要遺構部分図② (1/500) ……………	23	第34図	土壌6 (1/30) ……………	34

第35図	土壙 7 (1/30)・出土遺物 (1/4)	35	第73図	土壙45 (1/30)・出土遺物 (1/4)	47
第36図	土壙 8 (1/30)	35	第74図	土壙46 (1/60)・出土遺物 (1/4)	48
第37図	土壙 8 出土遺物 (1/4,1/3)	36	第75図	土壙47 (1/30)	48
第38図	土壙 9 (1/30)	36	第76図	土壙48 (1/30)	49
第39図	土壙10 (1/30)・出土遺物 (1/4)	37	第77図	土壙49 (1/30)	49
第40図	土壙11 (1/30)・出土遺物 (1/4)	37	第78図	土壙50 (1/30)	49
第41図	土壙12 (1/60)・出土遺物 (1/3)	38	第79図	土壙51 (1/30)	49
第42図	土壙13 (1/30)・出土遺物 (1/4)	38	第80図	土壙52 (1/30)・出土遺物 (1/4)	50
第43図	土壙14 (1/30)	38	第81図	土壙53 (1/30)	50
第44図	土壙15 (1/30)	39	第82図	火処 1 (1/30)	51
第45図	土壙16 (1/30)・出土遺物 (1/4)	39	第83図	火処 2 (1/30)	51
第46図	土壙17 (1/30)	39	第84図	火処 3 (1/30)	51
第47図	土壙18 (1/30)	39	第85図	火処 4 (1/30)	51
第48図	土壙19 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2)	40	第86図	火処 5 (1/30)	51
第49図	土壙20 (1/30)	40	第87図	火処 6 (1/30)	51
第50図	土壙21 (1/60)	40	第88図	火処 7 (1/30)	51
第51図	土壙22 (1/30)	41	第89図	火処 8 (1/30)	51
第52図	土壙23 (1/30)・出土遺物 (1/4)	41	第90図	火処 9 (1/30)	52
第53図	土壙24 (1/30)	41	第91図	火処10 (1/30)	52
第54図	土壙25 (1/30)	42	第92図	火処11 (1/30)	52
第55図	土壙26 (1/30)	42	第93図	火処12 (1/30)	52
第56図	土壙27 (1/30)	42	第94図	火処13 (1/30)	52
第57図	土壙28 (1/30)	42	第95図	火処14 (1/30)	52
第58図	土壙29 (1/30)	42	第96図	火処15 (1/30)	53
第59図	土壙30 (1/30)	42	第97図	火処16 (1/30)	53
第60図	土壙31 (1/30)	43	第98図	火処17 (1/30)	53
第61図	土壙32 (1/30)	43	第99図	火処18 (1/30)	53
第62図	土壙33 (1/30)	43	第100図	火処19 (1/30)	53
第63図	土壙34・35 (1/30)	44	第101図	火処20 (1/30)	53
第64図	土壙36 (1/30)	44	第102図	火処21 (1/30)	53
第65図	土壙37 (1/30)	44	第103図	火処22 (1/30)	54
第66図	土壙38 (1/30)	44	第104図	火処23 (1/30)	54
第67図	土壙39 (1/30)・出土遺物 (1/4)	45	第105図	火処24 (1/30)	54
第68図	土壙40 (1/30)	46	第106図	火処25 (1/30)	54
第69図	土壙41 (1/30)	46	第107図	火処26 (1/30)	54
第70図	土壙42 (1/30)・出土遺物 (1/2)	46	第108図	火処27 (1/30)	55
第71図	土壙43 (1/30)・出土遺物 (1/4)	47	第109図	火処28 (1/30)	55
第72図	土壙44 (1/30)	47	第110図	火処29 (1/30)	55

第111図	火処30 (1/30)・周辺出土遺物 (1/3) ……	55	第149図	火処70 (1/30) ……	60
第112図	火処31 (1/30) ……	55	第150図	火処71 (1/30) ……	60
第113図	火処32 (1/30) ……	56	第151図	火処72 (1/30) ……	60
第114図	火処33 (1/30) ……	56	第152図	火処73 (1/30) ……	60
第115図	火処34 (1/30) ……	56	第153図	溝1 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2) ……	61
第116図	火処35 (1/30) ……	56	第154図	溝2 (1/30) ……	61
第117図	火処36 (1/30) ……	56	第155図	溝3 (1/30) ……	61
第118図	火処37 (1/30) ……	56	第156図	溝4 (1/30) ……	62
第119図	火処38 (1/30) ……	56	第157図	溝5 (1/30) ……	62
第120図	火処39 (1/30) ……	56	第158図	溝6 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3,1/4) ……………	62
第121図	火処40 (1/30) ……	56	第159図	土器溜まり1 (1/60)・出土遺物① (1/4)……………	63
第122図	火処41 (1/30) ……	57	第160図	土器溜まり1出土遺物② (1/2,1/3) ……	64
第123図	火処42 (1/30) ……	57	第161図	土器溜まり2-A出土遺物① (1/4) ……	65
第124図	火処43 (1/30) ……	57	第162図	土器溜まり2-A出土遺物② (1/4, 1/3)……………	66
第125図	火処44 (1/30) ……	57	第163図	土器溜まり2-A出土遺物③ (1/2, 1/3,1/6) ……	67
第126図	火処45 (1/30) ……	57	第164図	土器溜まり2-B出土遺物① (1/4) ……	68
第127図	火処46 (1/30) ……	57	第165図	土器溜まり2-B出土遺物② (1/2, 1/3)……………	69
第128図	火処47 (1/30) ……	57	第166図	土器溜まり2-B出土遺物③ (1/6, 1/3)……………	70
第129図	火処48 (1/30) ……	57	第167図	土器溜まり2-C出土遺物① (1/4) ……	71
第130図	火処49 (1/30) ……	58	第168図	土器溜まり2-C出土遺物② (1/2, 1/3) ……	72
第131図	火処50 (1/30) ……	58	第169図	土器溜まり2-D出土遺物① (1/4) ……	72
第132図	火処51 (1/30) ……	58	第170図	土器溜まり2-D出土遺物② (1/2, 1/3)……………	73
第133図	火処52 (1/30) ……	58	第171図	土器溜まり2-E出土遺物 (1/4,1/3, 1/2)……………	74
第134図	火処53 (1/30) ……	58	第172図	土器溜まり2その他の地点 出土遺物① (1/3,1/2) ……	75
第135図	火処54 (1/30) ……	58	第173図	土器溜まり2その他の地点 出土遺物② (1/3) ……	76
第136図	火処55 (1/30) ……	58	第174図	土器溜まり3出土遺物① (1/4,1/3) ……	76
第137図	火処56 (1/30) ……	58	第175図	土器溜まり3出土遺物② (1/2,1/3, 1/4)……………	76
第138図	火処57 (1/30) ……	59			
第139図	火処58 (1/30) ……	59			
第140図	火処59 (1/30) ……	59			
第141図	火処60 (1/30) ……	59			
第142図	火処61 (1/30) ……	59			
第143図	火処62 (1/30) ……	59			
第144図	火処63・64 (1/30) ……	60			
第145図	火処65・66 (1/30) ……	60			
第146図	火処67 (1/30) ……	60			
第147図	火処68 (1/30) ……	60			
第148図	火処69 (1/30) ……	60			

	1/6)……………77		
第176図	土器溜まり4出土遺物①(1/4,1/3)……………78	第209図	河道1中流部東斜面出土遺物(1/4,1/3)……………104
第177図	土器溜まり4出土遺物②(1/2,1/3)……………79	第210図	河道1中流部東斜面①出土遺物(1/4,1/3)……………104
第178図	土器溜まり5出土遺物①(1/4)……………80	第211図	河道1中流部東斜面②出土遺物(1/4)……………105
第179図	土器溜まり5出土遺物②(1/4)……………81	第212図	河道1下流部出土遺物①(1/4)……………105
第180図	土器溜まり5出土遺物③(1/4,1/2,1/3)……………82	第213図	河道1下流部出土遺物②(1/4,1/3)……………106
第181図	土器溜まり6出土遺物①(1/4,1/2)……………83	第214図	河道2上流部土層断面図(1/100)……………107
第182図	土器溜まり6出土遺物②(1/2,1/3)……………84	第215図	河道2上流部東斜面出土遺物①(1/4)……………108
第183図	土器溜まり7出土遺物①(1/4)……………84	第216図	河道2上流部東斜面出土遺物②(1/4)……………109
第184図	土器溜まり7出土遺物②(1/4,1/3,1/2)……………85	第217図	河道2上流部東斜面出土遺物③(1/2,1/3)……………110
第185図	土器溜まり7出土遺物③(1/1,1/3)……………85	第218図	河道3上流部土層断面図(1/120)……………111
第186図	土器溜まり8出土遺物(1/4,1/2,1/3)……………86	第219図	河道3中流部(南側)土層断面図(1/60)……………112
第187図	土器溜まり9出土遺物(1/4,1/2,1/3)……………87	第220図	河道3中流部(北側)土層断面図(1/40)……………112
第188図	土器溜まり10出土遺物①(1/4)……………88	第221図	河道3中流部東斜面出土遺物①(1/4)……………113
第189図	土器溜まり10出土遺物②(1/4,1/3)……………89	第222図	河道3中流部東斜面出土遺物②(1/2)……………114
第190図	窪地1(1/60)・出土遺物①(1/4)……………90	第223図	河道3下流部(北側)土層断面図(1/80)・出土遺物①(1/1,1/3)……………114
第191図	窪地1出土遺物②(1/3,1/2)……………91	第224図	河道3下流部(北側)出土遺物②(1/4)……………115
第192図	窪地2(1/60)……………92	第225図	河道4上流部西斜面出土遺物①(1/4)……………116
第193図	窪地3(1/60)・出土遺物(1/4)……………92	第226図	河道4上流部西斜面出土遺物②(1/2,1/3)……………117
第194図	窪地4(1/40)……………92	第227図	河道4上流部西斜面出土遺物③(1/3)……………118
第195図	窪地4出土遺物(1/4)……………93	第228図	河道4下流部土層断面図(1/30)……………118
第196図	窪地5(1/30)……………93	第229図	河道4下流部西斜面出土遺物(1/4,1/3)……………119
第197図	窪地5出土遺物(1/4,1/3)……………94	第230図	河道5下流部出土遺物(1/4,1/3)……………120
第198図	窪地6(1/60)・出土遺物(1/4,1/3)……………95	第231図	包含層地区別範囲図(1/4,000)……………120
第199図	窪地7(1/60)・出土遺物(1/4,1/3)……………96	第232図	A地区出土位置判明遺物(1/4,1/2,1/3)……………121
第200図	河道1最上流部土層断面図(1/150)……………97	第233図	A地区出土遺物(1/4)……………121
第201図	河道断面・遺物出土位置(1/4,000)……………97	第234図	B地区出土位置判明遺物(1/4)……………122
第202図	河道1最上流部上・中層出土遺物(1/4)……………98	第235図	B地区出土遺物①<晩期下層>(1/4)……………122
第203図	河道1最上流部上・中層出土遺物(1/2,1/3)……………99	第236図	B地区出土遺物②<晩期下層>(1/4)……………123
第204図	河道1最上流部下層出土遺物①(1/4)……………100	第237図	B地区出土遺物③<晩期下層>(1/4)……………124
第205図	河道1最上流部下層出土遺物②(1/2,1/3)……………101		
第206図	河道1上流部上層出土遺物(1/4,1/3,1/2)……………102		
第207図	河道1中流部土層断面図(1/60)……………103		
第208図	河道1中流部土層断面図(1/120)……………103		

第238図	B地区出土遺物④<晩期上面> (1/3,1/2)	125	第265図	G地区出土遺物⑤<後期包含層> (1/4,1/3)	144
第239図	B地区出土遺物⑤<晩期上・中層> (1/3,1/2)	125	第266図	H地区出土位置判明遺物① (1/4)	144
第240図	B地区出土遺物⑥<晩期下層> (1/2,1/3)	125	第267図	H地区出土位置判明遺物② (1/3)・出土状況 (1/10)	145
第241図	B地区出土遺物⑦<晩期下層> (1/3)	126	第268図	H地区出土遺物①<微高地1出土> (1/4, 1/3)	145
第242図	B地区出土遺物⑧<各層出土：後期土器> (1/4)	127	第269図	H地区出土遺物②<微高地2出土> (1/4)	146
第243図	B地区出土遺物⑨<各層出土> (1/3)	127	第270図	H地区出土遺物③<微高地2出土> (1/4)	147
第244図	C地区出土遺物①<上層> (1/4)	128	第271図	H地区出土遺物④<微高地2出土> (1/3, 1/2)	148
第245図	C地区出土遺物②<上層> (1/2,1/3)	129	第272図	I地区出土遺物① (1/4)	149
第246図	C地区出土遺物③<上層> (1/3)	129	第273図	I地区出土遺物② (1/2,1/3)	150
第247図	C地区出土遺物④<下層> (1/4)	130	第274図	弥生時代遺構全体図① (1/3,000)	151
第248図	C地区出土遺物⑤<下層> (1/4,1/2)	131	第275図	弥生時代遺構全体図② (1/1,500)	152
第249図	C地区出土遺物⑥<下層> (1/3)	132	第276図	弥生時代遺構全体図③ (1/1,500)	153
第250図	D地区出土位置判明遺物 (1/4,1/2,1/3)	133	第277図	弥生時代主要遺構部分図① (1/400)	154
第251図	D地区出土遺物① (1/4)	133	第278図	弥生時代主要遺構部分図② (1/400)	155
第252図	D地区出土遺物② (1/4,1/2,1/3)	134	第279図	弥生時代主要遺構部分図③ (1/400)	156
第253図	D地区出土遺物③ (1/3)	135	第280図	弥生時代主要遺構部分図④ (1/400)	157
第254図	F地区出土位置判明遺物 (1/4,1/2)	136	第281図	弥生時代主要遺構部分図⑤ (1/400)	158
第255図	F地区出土遺物① (1/4)	136	第282図	弥生時代主要遺構部分図⑥ (1/400)	159
第256図	F地区出土遺物② (1/2,1/3)	137	第283図	弥生時代主要遺構部分図⑦ (1/400)	160
第257図	G地区出土位置判明遺物①<柱穴出土> (1/4)	138	第284図	弥生時代主要遺構部分図⑧ (1/400)	161
第258図	G地区出土位置判明遺物②<晩期包含層> (1/4)	138	第285図	弥生時代主要遺構部分図⑨ (1/400)	162
第259図	G地区出土位置判明遺物③<後期包含層> (1/4)	139	第286図	弥生時代主要遺構部分図⑩ (1/400)	163
第260図	G地区出土位置判明遺物④<各層出土> (1/2,1/1,1/3)	139	第287図	竪穴住居1 (1/60)	164
第261図	G地区出土遺物①<晩期包含層> (1/4)	140	第288図	竪穴住居2 (1/60)・出土遺物① (1/4)	165
第262図	G地区出土遺物②<晩期包含層> (1/2,1/3)	141	第289図	竪穴住居2出土遺物② (1/2, 1/3)	166
第263図	G地区出土遺物③<晩期包含層> (1/3)	142	第290図	竪穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/2, 1/4)	167
第264図	G地区出土遺物④<後期包含層> (1/4)	143	第291図	竪穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/4)	168
			第292図	竪穴住居5 (1/60)	169
			第293図	竪穴住居5 a・b (1/120)・出土遺物	



	(1/3,1/2,1/4)·····	170	第327图	土壙71 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	187
第294图	豎穴住居 6 (1/60)・出土遺物 (1/4) ·····	171	第328图	土壙72 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	188
第295图	豎穴住居 7 (1/60)・出土遺物① (1/6) ·····	171	第329图	土壙73 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	188
第296图	豎穴住居 7 出土遺物② (1/4) ·····	172	第330图	土壙74 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	189
第297图	豎穴住居 8 (1/60) ·····	172	第331图	土壙75 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	189
第298图	豎穴住居 9 (1/60) ·····	173	第332图	土壙76 (1/30) ·····	190
第299图	豎穴住居 9 (1/120)・出土遺物① (1/4,1/1,1/2) ·····	174	第333图	土壙77 (1/30) ·····	190
第300图	豎穴住居 9 出土遺物② (1/3) ·····	175	第334图	土壙78 (1/30) ·····	190
第301图	豎穴住居10 (1/60) ·····	175	第335图	土壙79 (1/30) ·····	190
第302图	豎穴住居11 (1/60) ·····	175	第336图	土壙80 (1/30) ·····	191
第303图	豎穴住居12 (1/60) ·····	176	第337图	土壙81 (1/30) ·····	191
第304图	豎穴住居12出土遺物① (1/4) ·····	177	第338图	火処74 (1/30) ·····	191
第305图	豎穴住居12出土遺物② (1/2,1/3) ·····	178	第339图	水田 1 (1/30)・出土遺物 (1/2) ·····	192
第306图	豎穴住居13 (1/30) ·····	178	第340图	溝 7 (1/30)・出土遺物 (1/3) ·····	192
第307图	豎穴住居13出土遺物 (1/4) ·····	179	第341图	溝 8 (1/30) ·····	193
第308图	掘立柱建物 1 (1/60) ·····	180	第342图	溝 9・10 (1/60,1/30) ·····	193
第309图	掘立柱建物 2 (1/60) ·····	181	第343图	溝11・12 (1/30) ·····	193
第310图	袋状土壙 5 (1/30) ·····	182	第344图	溝13 (1/30) ·····	193
第311图	土壙54 (1/30) ·····	182	第345图	溝13出土遺物① (1/4) ·····	194
第312图	土壙55 (1/30) ·····	183	第346图	溝13出土遺物② (1/4) ·····	195
第313图	土壙56 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	183	第347图	溝13出土遺物③ (1/4) ·····	196
第314图	土壙57 (1/30)・出土遺物 (1/3) ·····	183	第348图	溝13・14 (1/30) ·····	197
第315图	土壙58・59 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	183	第349图	溝15 (1/30) ·····	197
第316图	土壙60 (1/30) ·····	184	第350图	溝16 (1/30) ·····	198
第317图	土壙61 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	184	第351图	溝17 (1/30) ·····	198
第318图	土壙62 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	185	第352图	溝18 (1/30) ·····	198
第319图	土壙63 (1/30) ·····	185	第353图	溝19・20・21 (1/30) ·····	198
第320图	土壙64 (1/30) ·····	185	第354图	河道 6 (1/100・1/120) ·····	199
第321图	土壙65 (1/30) ·····	185	第355图	河道 6 出土遺物 (1/4) ·····	200
第322图	土壙66 (1/30) ·····	186	第356图	河道 7 上流部① (1/120) ·····	201
第323图	土壙67 (1/30) ·····	186	第357图	河道 7 上流部出土遺物 (1/4) ·····	202
第324图	土壙68 (1/30) ·····	186	第358图	河道 7 上流部② (1/100) ·····	203
第325图	土壙69 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	187	第359图	河道 7 中流部① (1/60) ·····	203
第326图	土壙70 (1/30)・出土遺物 (1/4) ·····	187	第360图	河道 7 中流部② (1/100) ·····	204
			第361图	河道 7 中流部出土遺物① (1/2,1/3) ·····	204
			第362图	河道 7 中流部出土遺物② (1/4) ·····	205
			第363图	河道 7 下流部 (1/100)・出土遺物① (1/2) ·····	206

第364図	河道7下流部出土遺物②(1/4) ……………	207	第389図	土壙84(1/30)・出土遺物(1/3) ……………	227
第365図	河道8上流部(1/120) ……………	208	第390図	土壙85(1/30) ……………	227
第366図	河道8下流部(1/150) ……………	208	第391図	土壙86(1/30) ……………	227
第367図	河道8上流部出土遺物(1/4) ……………	208	第392図	土壙87(1/60)・出土遺物(1/4,1/3) ……………	228
第368図	河道8下流部出土遺物(1/4) ……………	209	第393図	土壙88(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	228
第369図	河道9(1/60)・出土遺物(1/3) ……………	209	第394図	土壙89(1/30) ……………	229
第370図	洪水砂関連遺物(1/4) ……………	210	第395図	土壙90(1/30)・出土遺物(1/4) ……………	229
第371図	住居跡群周辺出土遺物①(1/3) ……………	211	第396図	火処75(1/30) ……………	230
第372図	住居跡群周辺出土遺物②(1/4) ……………	212	第397図	火処76(1/30) ……………	230
第373図	住居跡群周辺出土遺物③(1/4) ……………	213	第398図	火処77(1/30) ……………	230
第374図	住居跡群周辺出土遺物④(1/4) ……………	214	第399図	土取り跡1・2(1/200) ……………	231
第375図	住居跡群周辺出土遺物⑤(1/2,1/3) ……………	215	第400図	土取り跡1・2(1/100) ……………	231
第376図	住居跡群周辺出土遺物⑥(1/2) ……………	216	第401図	土取り跡1出土遺物(1/4) ……………	231
第377図	遺構に伴わない遺物①(1/4) ……………	217	第402図	土取り跡2出土遺物(1/4) ……………	232
第378図	遺構に伴わない遺物②(1/4) ……………	218	第403図	土器溜り11出土遺物①(1/4) ……………	232
第379図	遺構に伴わない遺物③(1/4,1/3) ……………	219	第404図	土器溜り11出土遺物②(1/4) ……………	233
第380図	遺構に伴わない遺物④(1/2,1/3) ……………	220	第405図	窪地8断面(1/30) ……………	234
第381図	古墳時代遺構全体図①(1/3,000) ……………	221	第406図	窪地8出土遺物(1/4,1/3) ……………	234
第382図	古墳時代遺構全体図②(1/1,500) ……………	222	第407図	河道10上流部(1/120) ……………	235
第383図	古墳時代遺構全体図③(1/1,500) ……………	223	第408図	河道10下流部(1/100) ……………	235
第384図	竪穴住居14(1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	224	第409図	河道10上流部出土遺物①(1/3) ……………	235
第385図	墓1(1/30)・出土遺物(1/3,1/4) ……………	225	第410図	河道10上流部出土遺物②(1/4) ……………	236
第386図	土壙82(1/60)・出土遺物(1/4) ……………	226	第411図	河道10下流部出土遺物(1/4,1/3) ……………	237
第387図	土壙83(1/60) ……………	226	第412図	遺構に伴わない遺物①(1/4,1/8) ……………	238
第388図	土壙83出土遺物(1/4) ……………	227	第413図	遺構に伴わない遺物②(1/4) ……………	239
			第414図	遺構に伴わない遺物③(1/3) ……………	240

## 写真目次

写真1 トレンチ10（南から）……………	2	写真8 河道1 中流部東斜面①（北から）……………	106
写真2 トレンチ20（南から）……………	2	写真9 河道2 上流部（北から）……………	107
写真3 平成12年度現地説明会および刊行された パンフレットⅡ……………	5	写真10 河道4 上流部（南から）……………	115
写真4 復元および図面作成……………	9	写真11 河道4 下流部（北から）……………	118
写真5 土器溜まり2-D土器出土状況（南東から）…	71	写真12 竪穴住居5・掘立柱建物1 調査風景（東から） ……………	179
写真6 土器溜まり4 土器出土状況（西から）……………	78	写真13 河道7 上流部調査風景（北から）……………	201
写真7 河道1 中流部（南から）……………	104	写真14 土取り跡1・2 全景（真上から）……………	240

## 表目次

表1 発掘調査経過……………	4	表3 対策委員会および現地説明会記録表……………	5
表2 久田堀ノ内遺跡担当者一覧……………	4	表4 整理担当者一覧……………	8

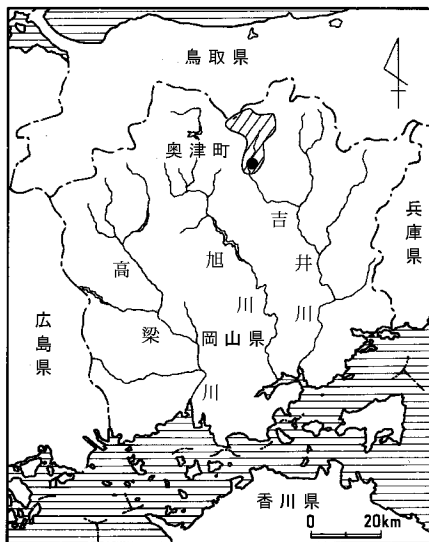
# 第1章 発掘調査の経緯

## 第1節 調査の経過と体制

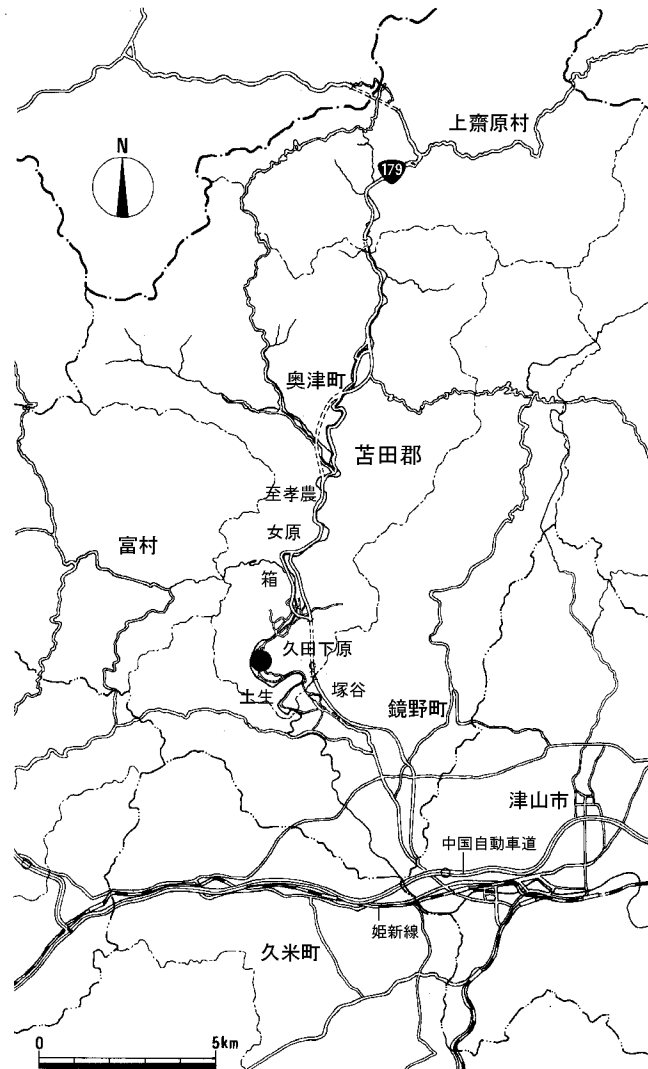
### 1 調査の経過

久田堀ノ内遺跡の存在とその広がり、その北方ですでに発掘調査が実施されつつあった久田原遺跡の成果から、地形的にも本来一体となるべき広範な遺跡として認識された。そこで、遺跡範囲の確認を目的として、遺構の存在や出土遺物の有無・時期的範囲など詳細に把握し、全面発掘調査を実施するための基礎資料を得るため、平成9年12月から翌年3月にかけて一次調査を実施した。

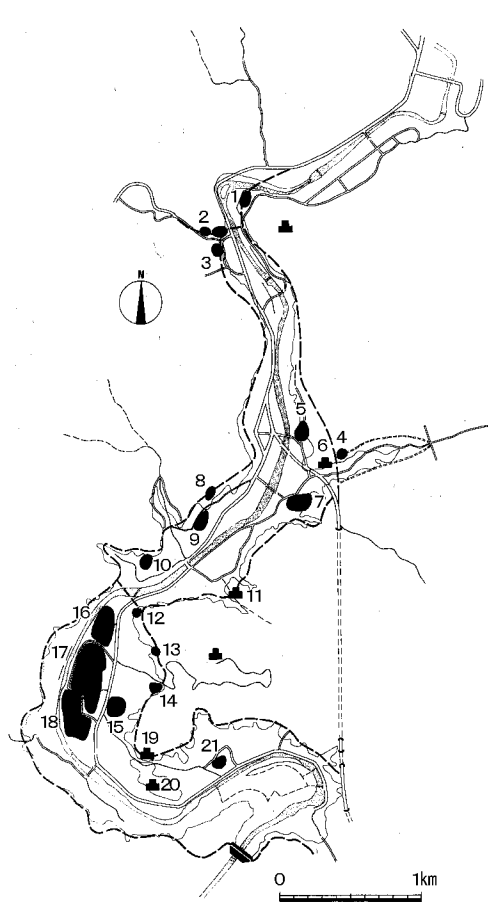
一次調査は、幅2m、長さ10m前後を基本としたトレンチを各所に25本設定し、調査着手時点で未調査箇所および宅地を除く南北約330m、東西約200mの範囲を対象として実施した。なお、一部未調査箇所での発掘調査の実施は、関係者の御理解・御尽力により実現できたことを付記しておく。発掘着手時の現状は、宅地跡・旧水田・畑地で、海拔約187mから189mを測る範囲であ



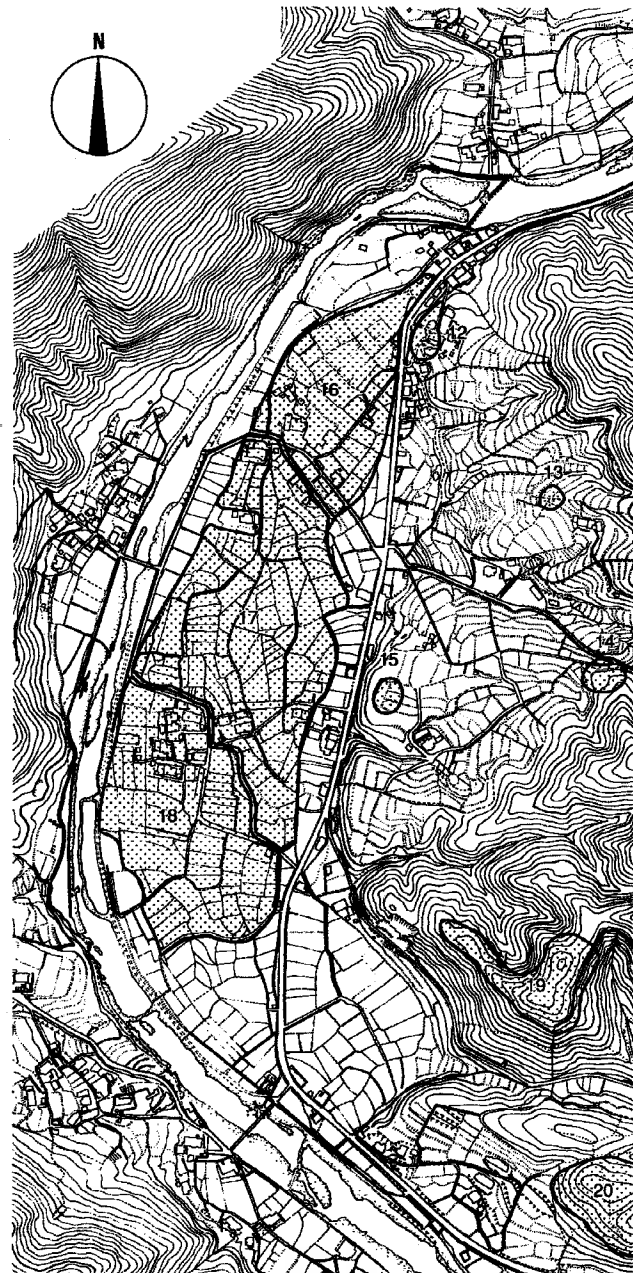
第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)



第2図 遺跡周辺位置図 (1/200,000)



- |           |            |
|-----------|------------|
| 1 杉正宗遺跡   | 12 久田神社古墳  |
| 2 箱E遺跡    | 13 北条高下遺跡  |
| 3 かなぼれB遺跡 | 14 峪畑遺跡    |
| 4 丸ヶ皿遺跡   | 15 岡遺跡     |
| 5 河内構遺跡   | 16 夏栗遺跡    |
| 6 河内城跡    | 17 久田原遺跡   |
| 7 河内遺跡    | 18 久田堀ノ内遺跡 |
| 8 ナル林遺跡   | 19 比丘尼ヶ城跡  |
| 9 勝の段遺跡   | 20 城峪城跡    |
| 10 下黒木遺跡  | 21 札ノ尾遺跡   |
| 11 久田上原城跡 |            |



第3図 苦田ダム関連遺跡 (1/50,000)

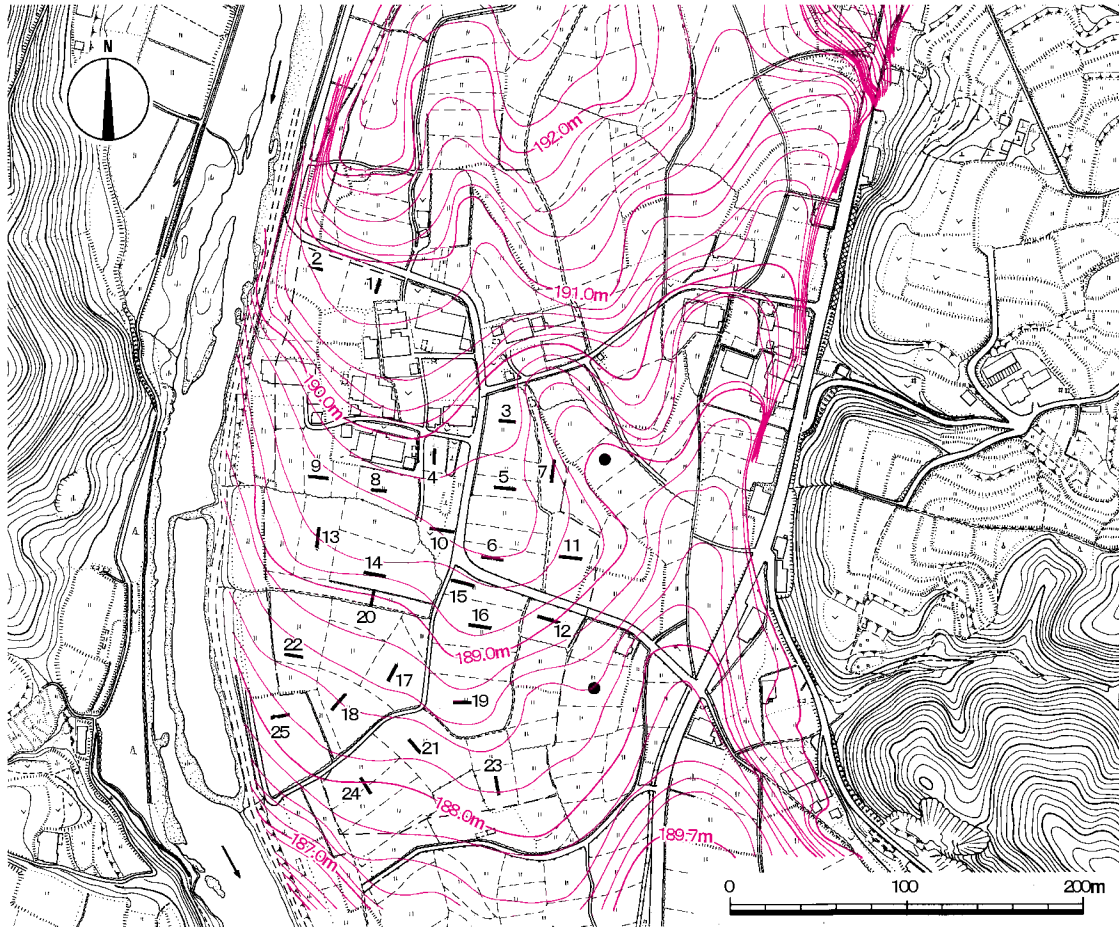
第4図 苦田ダム周辺遺跡群詳細位置図 (1/10,000)



写真1 トレンチ10 (南から)



写真2 トレンチ20 (南から)

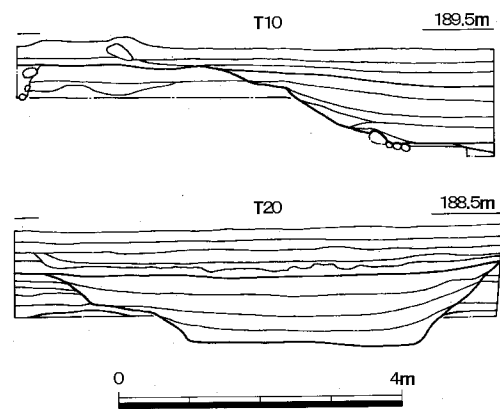


第5図 久田堀ノ内遺跡周辺地形図およびトレンチ位置図 (1/4,000)

る。約20cmほどの耕作土・表土を取り除くと、旧水田層や暗褐色の包含層あるいは、洪水砂で形成される安定した基盤層が検出された。

すでに遺跡の東側については、平成9年7月上旬、骨材採掘に伴うボーリング調査に立ち会い、第5図に示す2か所(●印)については久田原遺跡から続く旧河道が確認された。したがって、調査の主眼は、吉井川に近い北西部一帯すなわち「ヤシキ」、「堀」、「堀田」、「土居」など、屋敷地や居館にゆかりの字名(第415図)が残る地点で、柱穴や堀を確認することであった。




また、久田原遺跡の砂堆上に形成された遺構群(古墳時代～中世)の下位で検出された下層遺構群(縄文～弥生時代)についても、南方への広がりが見込まれた。まず、上層遺構の存在は、ほぼすべてのトレンチで出土遺物や柱穴・土塹・溝などの遺構が確認され、T10・T20では写真1・2や第6図に掲げるように堀の断面を検出することができた。

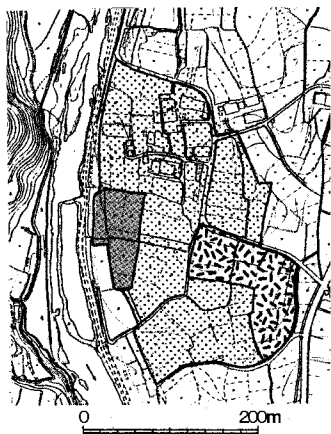


第6図 トレンチ断面 (1/100)

第1章 発掘調査の経緯

表1 発掘調査経過

平成9年度	一次調査面積 (㎡)	490	
平成11年度		9,070	
平成12年度	全面調査面積 (㎡)	38,025	
平成13年度		5,190	
	全面調査面積計 (㎡)	52,885	



第7図 発掘調査経過図 (1/8,000)

平成12年度は、遺跡名の付く契機ともなった遺跡北西部を中心に調査を進めた。結果は本文に詳しく記載しているが、A区からは中世の3重の堀とともに建物群が検出され、また、下層からは縄文時代晩期初頭を中心とした大量の土器・石器類が出土するに至った。さらに、7月から開始したC3区からは弥生時代水田跡の可能性の高い畦が検出された。

平成13年度には、A4区の調査にあたり、主に中世堀の南西部を明らかにし、10月末をもって久田堀ノ内遺跡の発掘調査は終了した。なお、平成12年10月14日には現地説明会を開催し、平成13年3月末には『発掘された久田の埋蔵文化財』Ⅱを刊行した。(江見正己)

また、T1でもT20の堀に対応するような断面が観察された。また、T4・T8などでは柱穴が多数検出され、国産陶磁器(備前焼・瀬戸)・輸入陶磁器など出土した。

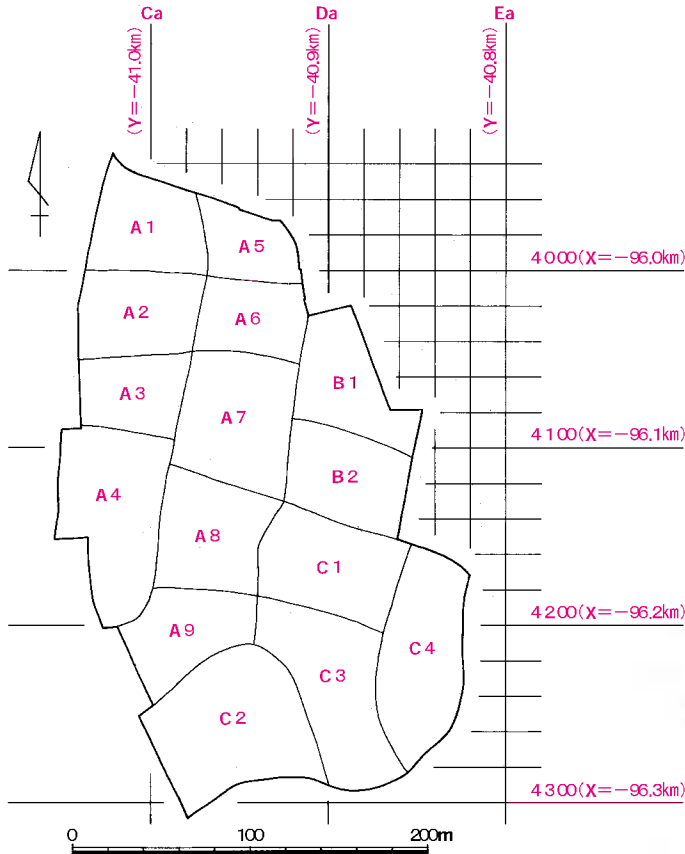
下層遺構に伴う遺物として、T3・T21からは縄文晩期土器、T11からは石鍬が出土し、弥生土器の出土とともに下層遺構群の存在は確実となった。(岡田博)

一次調査の結果、調査対象地は第5図に示す範囲となったが、隣接する久田原遺跡の調査範囲の拡大が図られたことにより、当該遺跡調査対象地は平成11年8月からの全面調査時には調査範囲が南東部に、また、後年次には西部の一部が拡張され、最終的には52,885㎡を調査することとなった。

調査は8月末、遺跡の南東部に当たるC1区から開始した。その後調査の主体を占めていた久田原遺跡との調整を図りながらA7区、B区、C4・2区、に移っていった。これによってC1・4区には久田原遺跡と同様に上層には中世建物群が所在し、下層には弥生時代集落の延びていることが判明した。

表2 久田堀ノ内遺跡担当者一覧

旧調査区名	発掘調査面積(㎡)	発掘調査担当者	旧調査区名	発掘調査面積(㎡)	発掘調査担当者
一次調査	490	岡田博・山本道夫・佐藤寛介	A8区	3,940	平井泰男・三船幹也・上柁武
A1区	3,250	弘田和司・権田俊朗・根木智宏	A9区	2,420	二宮治夫・内田博雄・坪井聡子
A2区	2,085	岡本寛久・佐兼信也・梶田亜友美	B1区	2,640	伊藤晃・奥野光廣・小嶋善邦
A3区	1,230	江見正己・河合忍・赤井義典	B2区	3,220	二宮治夫・内田博雄・根木智宏・坪井聡子
A4区	5,190	江見正己・河合忍・赤井義典	C1区	3,970	二宮治夫・内田博雄・根木智宏・坪井聡子
		弘田和司・常安伸・和田剛	C2区	6,100	平井泰男・根木智宏・杉山光紀
A5区	2,000	伊藤晃・福田正継・佐兼信也	C3区	5,100	福田正継・内田博雄・常安伸
A6区	2,440	弘田和司・権田俊朗・根木智宏	C4区	5,100	伊藤晃・福田正継・小林利晴・常安伸
A7区	4,200	岡本寛久・佐兼信也・梶田亜友美			福田正継・蛸原啓介・砂泰将
		江見正己・内田博雄・梶田亜友美			
		江見正己・河合忍・赤井義典			
小計	20,395	*一次調査面積を除く	全面調査計	52,885	*調査員延べ67名



第8図 旧調査区配置図 (1/4,000)



写真3 平成12年度現地説明会および  
刊行されたパンフレットⅡ

表3 対策委員会および現地説明会記録表

年度(平成)	埋蔵文化財保護対策委員会	現地説明会・展示会	パンフレット刊行
9	平成10年3月13日		
11	平成11年7月9日 平成11年10月28日 平成12年2月17日	平成11年11月3日	
12	平成12年7月3日 平成12年11月28日 平成13年2月19日	平成12年10月14日	3月「久田原遺跡と久田堀ノ内遺跡」
13	平成13年7月23日 平成13年11月15日		
14	平成14年7月24日 平成14年11月21日 平成15年2月18日		
15	平成15年7月17日 平成15年10月30日 平成16年2月23日		
16	平成16年11月8日	平成15年12月11・12日	12月「よみがえる久田の歴史」



## 2 調査の体制

平成9年度	
岡山県教育委員会	
教育長	黒瀬 定生
岡山県教育庁	
教育次長	平岩 武
文化課	
課長	高田 朋香
課長代理	白井 洋輔
課長代理	西山 猛
参事	葛原 克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 勝
文化財保護主任	大橋 雅也
主事	三宅 美博
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	藪本 克之
次長	正岡 睦夫
〈総務課〉	
課長	小倉 昇
課長補佐(総務係長)	井戸 丈二
主査	木山 伸一
〈調査第三課〉	
課長	柳瀬 昭彦
課長補佐(第一係長)	岡田 博
文化財保護主査	山本 道夫
主事	佐藤 寛介
平成11年度	
岡山県教育委員会	
教育長	黒瀬 定生
岡山県教育庁	
教育次長	宮野 正司
文化課	
課長	松井 英治
課長代理	佐々部和生
参事	正岡 睦夫
課長補佐(埋蔵文化財係長)	松本 和男

文化財保護主任	大橋 雅也
主任	奥山 修司
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	葛原 克人
次長	大村 俊臣
〈総務課〉	
課長	小倉 昇
課長補佐(総務係長)	安西 正則
主査	山本 恭輔
〈調査第二課〉 (発掘調査担当)	
課長	伊藤 晃
課長補佐(第一係長)	江見 正己
文化財保護主幹	杉山 光紀
文化財保護主幹	平井 泰男
文化財保護主査	内田 博雄
文化財保護主事	奥野 光廣
文化財保護主事	根木 智宏
文化財保護主事	小嶋 善邦
主事	梶田亜友美
課長補佐(第二係長)	福田 正継
文化財保護主事	蛭原 啓介
文化財保護主事	砂 泰將

平成12年度	
岡山県教育委員会	
教育長	黒瀬 定生
岡山県教育庁	
教育次長	宮野 正司
文化課	
課長	松井 英治
課長代理	佐々部和生
課長代理(埋蔵文化財係長)	松本 和男
文化財保護主査	福本 明
主任	奥山 修司
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	正岡 睦夫

次 長	能登原 巧	平成13年度	
〈総務課〉		岡山県教育委員会	
課 長	小倉 昇	教 育 長	宮野 正司
課長補佐（総務係長）	安西 正則	岡山県教育庁	
主 査	山本 恭輔	教育次長	國貞 忠克
〈調査第二課〉	(発掘調査担当)	文化課	
課 長	伊藤 晃	課 長	松井 英治
課長補佐（第一係長）	江見 正己	課長代理（埋蔵文化財係長）	松本 和男
文化財保護主幹	赤井 義典	課長代理	藤井 守雄
文化財保護主幹	平井 泰男	主 任	奥山 修司
文化財保護主査	三船 幹也	岡山県古代吉備文化財センター	
文化財保護主事	根木 智宏	所 長	正岡 睦夫
主 事	河合 忍	次 長	能登原 巧
主 事	上梶 武	〈総務課〉	
主 事	坪井 聡子	課 長	安西 正則
課長補佐（第二係長）	福田 正継	係 長	田中 秀樹
文化財保護主幹	岡本 寛久	主 任	小坂 文男
文化財保護主査	内田 博雄	〈調査第二課〉	(発掘調査担当)
文化財保護主査	権田 俊朗	課 長	伊藤 晃
文化財保護主査	佐乗 信也	課長補佐（第一係長）	二宮 治夫
文化財保護主任	弘田 和司	文化財保護主幹	福田 正継
文化財保護主任	常安 伸	文化財保護主幹	佐乗 信也
主 事	梶田亜友美	課長補佐（第二係長）	中野 雅美
		文化財保護主任	弘田 和司
		文化財保護主任	常安 伸
		主 事	和田 剛

## 第2節 整理の経過と体制

### 1 整理の経過

久田堀ノ内遺跡（52,885㎡）からは1,096の遺構が検出され、土器・石器など565箱の遺物が出土した。整理作業は平成14年度から16年度の3か年にわたって実施し、初年度は岡山市西川原に所在した古代吉備文化財センター西川原事務所で、次年度からは岡山県古代吉備文化財センターで行った。

平成14年度は、6名の調査員が報告書作成に配置された。上半期は久田原遺跡の整理に充てられ、下半期から久田堀ノ内遺跡の整理を実施する予定であったが、久田原遺跡の作業量が膨大であったこともあり、実際には12月中旬にずれ込んだ。なお、遺物565箱の洗浄・注記作業は既に奥津町の現場事

表4 整理担当者一覧

平成14年度						
遺物整理	伊藤	江見	岡本	弘田	蛭原	河合
平成15年度						
編集	江見	弘田				
調査区別担当	江見	A 7・8区				
	弘田	A 1・2・4・5・6区				
	小嶋	B 1・2区、C 1・4区				
	河合	A 3・9区、C 2・3区				
時代別担当	小嶋	縄文時代				
	河合	弥生～古墳時代				
	弘田	古代～中世、近世				
平成16年度						
編集	弘田					

務所で済ませており、そのうちのコンテナ200箱の遺物復元と380点余りの実測作業を実施した。

平成15年度は、報告書担当として10名が配置され、うち4名が久田堀ノ内遺跡を担当することとなった。まず、遺跡を調査区単位で4分割し、各担当者は個々の遺構・遺物の図面を仕上げた。次に、担当者を時代別に振り分けて、各時代の全体図作成から編集作業へと移った。しかしながら、前年度の整理作業がずれ込んできたため、遺物の実測・製図作業の一部や編集作業は次年度に持ち送ることとなった。

平成15年度は、整理担当者3名のうち1名が久田堀ノ内遺跡を担当し、遺物整理や編集作業を行った。また、パンフレットの作成や地元での展示・報告会を実施した。

この間、埋蔵文化財保護対策委員会は8回開催され、委員の方々からは数々の御指導と貴重な御指示を得た。  
(江見・弘田和司)

## 2 整理の体制

平成14年度	岡山県教育委員会	岡山県教育庁	文化課	岡山県古代吉備文化財センター	課長補佐（総務係長）	主任	〈調査第二課〉	課長	課長補佐（第二係長）	文化財保護主幹	文化財保護主査	文化財保護主事	主事	平成15年度	岡山県教育委員会	岡山県教育庁	文化財課
	教育長	教育次長	課長	所長											教育長	教育次長	
	宮野 正司	三浦 一男	西山 猛	正岡 睦夫											宮野 正司	三浦 一男	
	課長代理（埋蔵文化財係長）		松本 和男	藤川 洋二													
	課長代理		宮田 正彦	安西 正則													
	文化財保護主任		尾上 元規														
	主事		浜原 浩司														



写真4 復元および図面作成

課長	西山 猛		(本報告書担当)
課長代理	田村 啓介		
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 泰男	平成16年度	
文化財保護主任	尾上 元規	岡山県教育委員会	
主事	浜原 浩司	教育長	宮野 正司
岡山県古代吉備文化財センター		岡山県教育庁	
所長	正岡 睦夫	教育次長	釜瀬 司
次長	藤川 洋二	文化財課	
文化財保護参事	松本 和男	課長	芦田 和正
<総務課>		参事	田村 啓介
課長	中田 哲雄	総括副参事	
課長補佐(総務係長)	笏本 弘忠	(埋蔵文化財班長)	平井 泰男
主任	小坂 文男	主任	小林 利晴
<調査第二課>		主事	秋山 良樹
課長	伊藤 晃	岡山県古代吉備文化財センター	
課長補佐(第一係長)	中野 雅美	所長	正岡 睦夫
文化財保護主幹	岡本 寛久	次長(総務課長)	内田 猛
文化財保護主査	氏平 昭則	参事	松本 和男
文化財保護主事	上楯 武	参事	伊藤 晃
文化財保護主事	和田 剛	<総務課>	
課長補佐(第二係長)	江見 正己	総括副参事(総務班長)	笏本 弘忠
	(本報告書担当)	主任	小坂 文男
文化財保護主査	弘田 和司	主任	小川 紀久
	(本報告書担当)	<調査第二課>	
文化財保護主事	小嶋 善邦	課長	中野 雅美
	(本報告書担当)	総括副参事(第一班長)	岡本 寛久
文化財保護主事	河合 忍	主査	弘田 和司

協力機関・協力者（50音順 敬称略）

財団法人石川県埋蔵文化財センター・堺市埋蔵文化財センター・財団法人鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター・龍野市教育委員会・富山県埋蔵文化財センター・奈良県立橿原考古学研究所・井上喜久男（瀬戸・美濃陶器鑑定）・岡田憲一（縄文晩期土器鑑定）・高橋護（縄文時代全般）・千葉豊（縄文後期土器鑑定）・森村健一（貿易陶磁鑑定）

また、発掘調査から報告書刊行までに、数多くの発掘作業員・整理作業員の参加を得た。記して感謝致します。

## 第2章 久田地区の地理的歴史的環境

久田堀ノ内遺跡は岡山県苫田郡奥津町の南部、久田下原に所在する。奥津町は、美作三湯の一つ奥津温泉を擁する、緑豊かな山間の町である。岡山県の北端に位置し、北は上齋原村と県境を挟んで鳥取県三朝町、東と南は津山盆地西端の鏡野町に接する。中国山地脊梁部の南面にあたることから、町域には標高500~1,000m級の山並みが連なり、町面積約130万㎡のうち、実に89.1%が山林によって占められている。

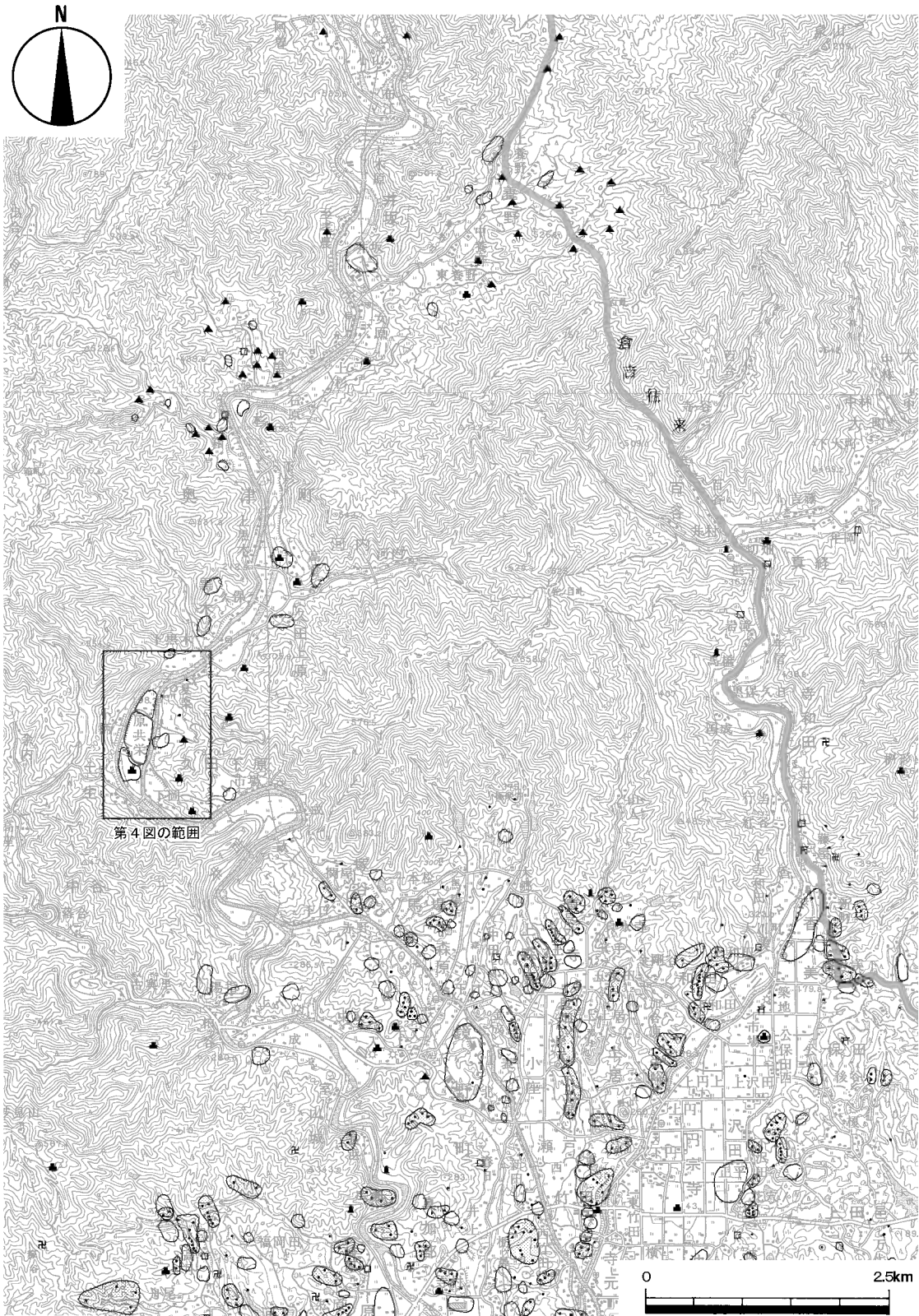
これらの山塊を東西に分かつように、町域のほぼ中央を岡山三大河川の一つ吉井川が南流する。さらに、樹枝状に展開する谷筋からは、数多くの中小河川が奔出し、吉井川へと注ぎ込んでいる。平野部は、これらの河川沿いに形成された谷底平野を主体としている。地形に制約されて狭長なものが多い中で、吉井川流域には胃袋状を呈するやや広まった平野が散在的に認められ、主要な生活の場、そして交通路となっている。特に久田地区には、周囲を比高100~300mの山々によって囲まれた、幅200~300mの平野部が長さ約4kmにわたって形成されており、吉井川上流域では比較的まとまりのある小盆地状の地形をなしている。

第9図は、久田地区を中心に奥津町南部・鏡野町西部の遺跡分布を示したものである。津山盆地の一面を占める鏡野町域では、低丘陵を中心に高い密度で遺跡が分布している。一方、奥津町域では吉井川流域に遺跡が集中するとともに、山間部に近世を中心とした製鉄遺跡が多数分布する状況を看取することができる。こうした特徴的な遺跡分布が示すように、この地域の歴史や文化を特色付けるものとして、吉井川および中国山地を介した各地との交流、そして鉄生産が挙げられる。以下、現在までの発掘調査成果を中心に、久田地区の歴史について概観する。

旧石器時代については、現在のところ確実な旧石器は確認されておらず、具体的な様相は不明である。しかし、吉井川を約20km遡った上齋原村恩原遺跡群で、良好な後期旧石器文化層が検出されていることや、下流の津山盆地で単発的にナイフ形石器が発見されていることを勘案すると、今後発見されることも十分考えられる。特に、恩原遺跡群では黒曜石やサヌカイトを素材に瀬戸内技法や湧別技法によって製作された石器が出土しており、中国山地を介した旧石器人の広範な移動があったことを示唆している。そのルートとして、吉井川流域が利用されたことは十分考えられる。

縄文時代については、主に早期と後~晩期の遺構・遺物が確認されている。早期については、箱E遺跡・河内構遺跡・岡遺跡・夏栗遺跡・札ノ尾遺跡で押型文土器が出土している。特に箱E遺跡では、4点の尖頭器が共伴しており注目される。しかし、量的にはいずれもわずかで、小集団が丘陵部を中心に短期間の移動生活を営んでいた状況を示している。後~晩期になると、丘陵部では岡遺跡、平野部では久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡で多数の遺物が出土しており、この段階から集落立地が平野部へと変わり、定住的な生活に移行したと考えられる。久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡では、晩期の竪穴住居や貯蔵穴が検出されるとともに、根菜類の採集に使用されたと考えられる石鎌が多数出土しており、当該期の集落構造や生業のあり方を解明する上で貴重な資料が得られている。また、特筆される遺物として、石刀や南九州産の緑色石材を用いた管玉、東日本の大洞式の特徴をもつ壺形土器などが出土しており、遠隔地との交流をうかがわせる。

第2章 久田地区の地理的歴史的環境



- 遺物散布地(集落)
- 古墳群
- 古墳
- 山城・居館
- ▲—製鉄遺跡
- その他

第9図 調査地周辺の遺跡分布図 (1/60,000)

弥生時代については、久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡で僅かながら前期土器片が出土しており、中期前～中葉には同じく上記遺跡で本格的な集落形成が始まる。中期後葉には、岡遺跡・峪畑遺跡・札ノ尾遺跡など周辺の丘陵部にも小集落が営まれるが、これらは平野部の集落から派生した分村的集落と評価できよう。後期になると、平野部では夏栗遺跡・河内遺跡・河内構遺跡、丘陵部ではナル林遺跡・河内城跡・岡遺跡・城峪城跡で遺構・遺物が確認されるようになり、集落域がさらに拡充した状況を看取することができる。さらに、久田堀ノ内遺跡では県北部で初例となる水田が、夏栗遺跡では集落内を縦断する大規模な溝が検出されるなど、山間地域における遺跡の分布や変遷、集落構造を全体的に把握しうる希有な調査成果が得られている。特筆される遺物として、久田原遺跡では石剣・鑄造鉄器片・碧玉製管玉とその未成品が、峪畑遺跡では銅剣を転用したと考えられる銅鏃が出土しており、久田地区の拠点性と山陰地域との密接な交流を物語っている。このように、中～後期にかけて順調な発展をとげる久田地区の弥生社会であるが、後期終末～古墳時代初頭に発生したと考えられる吉井川上流域の集中豪雨により、壊滅的な打撃を受けたようである。

古墳時代については、先述の大洪水の影響により前期の遺構・遺物は極めて希薄であるが、中期以降、平野部を中心に大規模な遺跡が形成される。本格的な集落の形成は5世紀中頃から夏栗遺跡で始まり、6世紀代にかけて数十軒の竪穴住居からなる大集落に成長する。これに呼応して、下流側の久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡では古墳の築造が開始される。6～7世紀代には、久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡まで集落域が拡大するとともに、古墳築造も最盛期を迎え、大小十数基の墳墓からなる久田古墳群が形成される。その一方、丘陵部の遺跡は極めて希薄で、ナル林遺跡で前期の竪穴住居1軒、久田神社遺跡で横穴式石室墳1基が確認されているにすぎない。なお、吉備の基幹産業ともいえる鉄生産については、久田古墳群の中に炉壁や鉄滓を副葬するものがあることや、城峪城跡・比丘尼ヶ城跡で7～8世紀に比定できる製鉄炉と横口付炭窯が確認されていることから、この地域においても古墳時代後期には開始されたと考えられる。

古代については、奈良時代を中心に大きな調査成果が挙げられている。和銅六年（713年）、備前国から6郡が割かれて美作国が成立し、このうち久田地区一帯は苫田郡能鷄郷に比定される。久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡では、合わせて数十棟もの掘立柱建物が検出され、古代村落の全体像が明らかとなった。建物群は側柱建物と総柱建物で構成され、小規模なものが多いものの棟方向や配置に規格性が認められる。また、出土した多量の遺物中には、円面硯や稜椀、丹塗り土師器など官衙遺跡に通有のものがある。さらに、建物群を区画する溝から多量の土器とともに陶馬・土馬が出土し、律令祭祀が執り行われたと考えられることや、鉄鉢形須恵器を骨蔵器に用いた火葬墓が検出されるなど、注目すべき文物が数多く発見されている。前代に始まった鉄生産は、美作国が調鉄の貢納国であることからこの時期さらに活発になったと考えられ、久田地区では峪畑遺跡・久田原遺跡で製鉄炉が確認されている。特に久田原遺跡では、複数の鍛冶炉に加え多数の鉄器や羽口、鉄滓が出土しており、集約的な鉄・鉄器生産が行なわれていたと想定される。こうした遺構・遺物のあり方から、先述の建物群は公的性格をもつとともに、鉄と鉄器の生産管理に深く関わっていたと考えられる。

中世については、久田地区一帯に比定されている久多庄の実体が発掘調査によって明らかにされている。久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡は久多庄の中心的な集落と考えられ、県内最大級のものを含む多数の掘立柱建物が検出された。特に、久田堀ノ内遺跡は大規模な方形居館であることが判明し、戦国期には美作国守護所の院庄館に匹敵する規模に拡張されることが明らかとなった。建物群



## 第2章 久田地区の地理的歴史的環境

の周辺では鍛冶工房と考えられる竪穴遺構や多数の鍛冶炉が検出され、前代同様、鉄器生産が盛んに行われたことをうかがわせる。さらに、水田や畑、土壙墓や火葬墓、石造物、各地で生産された陶磁器など、中世荘園の具体像を物語るさまざまな遺構・遺物が発見されている。また、杉正宗遺跡・河内遺跡・河内構遺跡でも、鎌倉～戦国期の集落が確認されている。一方、これらの集落を取り巻く丘陵上には大小の山城が高い密度で構築されており、このうち河内城跡・久田上原城跡・比丘尼ヶ城跡・城峪城跡について発掘調査が実施された。その結果、この4城は全国的にも調査例が少ない南北朝期の山城であることが判明し、当該期の城郭構造を検討する上で非常に重要な成果が得られた。美作地域は中世を通じて周辺勢力の脅威にさらされ、室町時代には伯耆の山名氏と播磨の赤松氏、戦国時代には山陰の尼子氏・安芸の毛利氏・備前の宇喜多氏が覇権を争った。これらの山城は、陰陽を結ぶルート上にある久田地区の重要性と、緊迫した社会情勢を物語っているといえよう。

近世の久田地区は、宇喜多氏・小早川氏の支配を経て、慶長八年（1603年）津山藩領、後に幕府領津山藩預地となり、北から箱村・黒木村・河内村・久田上原村・久田下原村・土生村が成立した。久田地区以北の丘陵部は花崗岩地帯で、たたら製鉄が盛行したことが数多くの製鉄遺跡の分布から読みとれる。また、美作と伯耆を結ぶ倉吉往来が整備され、箱村まで高瀬舟が運行するとともに、久田下原村には諸品の買集と津山城下への川下が許されており（「郷中御条目」）、吉井川の水運を活かした物流拠点として重要な役割を果たしたことがうかがえる。発掘調査では、久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡・河内構遺跡・札ノ尾遺跡で掘立柱建物や井戸、土壙墓などが検出され、近世村落の様相が捉えられている。特に札ノ尾遺跡では多量の銅滓が出土し、銅製錬を行っていたことが判明した。

近代以降、この地域は明治4年（1871年）北條県の管轄となり、同9年岡山県に合併された。久田地区の諸村は、明治22年（1889年）の合併により西西條郡久田村となり、昭和30年（1955年）に北部の泉村と合併し苦田郡苦田村となった。そして昭和34年（1959年）、苦田村と北部の奥津村・羽出村が合併して奥津町が誕生した。昭和32年（1957年）に発表された苦田ダム建設計画は、50年余りの歳月を経てついに平成16年（2004年）にダム本体の完成をみた。また、平成17年3月1日をもって奥津町と鏡野町、上齋原村、富村が合併し、新しい鏡野町が誕生している。（佐藤寛介）

### 参考文献

- 1 『岡山県の地名』平凡社 1988年
- 2 岡山県教育委員会『岡山県遺跡地図』第5分冊 1978年
- 3 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告26～32』1996～2002年
- 4 岡山県教育委員会『教育時報』第630号 2002年
- 5 岡山県古代吉備文化財センター『所報吉備』第20・25・26号 1997・1998・1999年
- 6 建設省苦田ダム工事事務所・岡山県古代吉備文化財センター『発掘された久田の埋蔵文化財』I 1997年  
国土交通省苦田ダム工事事務所・岡山県古代吉備文化財センター『発掘された久田の埋蔵文化財』II 2001年
- 7 岡山県教育委員会『福見口遺跡・殿釜遺跡・大高下遺跡・大柄畑遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告168 2002年
- 8 奥津町教育委員会『杉遺跡』奥津町埋蔵文化財発掘調査報告4 2000年
- 9 鏡野町『鏡野町史』考古資料編 2000年
- 10 上齋原村『上齋原村史』通史編 2001年

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡全体の概要

当遺跡は、久田原遺跡（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184所収）に南接しており、久田原遺跡の北側段丘上に立地する夏栗遺跡とあわせて一連の遺跡群を構成する。それは「久多庄」と呼ばれた中世のみならず、この地に人々が足跡を残し始めた縄文後期から近世にかけて途切れることなく継続している全ての時代についてである。先土器時代を除くすべての時代にわたり、またそのすべての時代において特徴的な遺構と遺物の検出・出土をみた希有な遺跡の調査であった。

#### 1 基本層序

堆積層は基本的に『久田原遺跡』と同様であるが、鍵層で久田原遺跡において最大で厚さ2mにおよんだ弥生時代末から古墳時代初頭にかけての洪水砂層は、当遺跡ではところどころが後世の削平によって確認できず、かわって旧表土や中近世の包含層直下が弥生時代中期の礫を多く含んだ洪水砂層となっていた箇所も多い。この2時期の洪水砂層の下においては、縄文時代後期中葉～弥生時代中期後葉までの遺構と遺物が確認できた。またその上層からは、古墳時代から近世にかけての遺構が多数の遺物とともに検出できた。

調査を行った各時代の遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、柱穴列、袋状土壇、焼成土壇、土壇墓、土壇、火処、溝、河道、土器溜まり、窪地などと多種におよびその総数は1,092基、遺物は縄文土器から近世の陶磁器類、石器、金属器、土製品など総数565箱を数えた。これらすべての遺物の観察や遺構に対する検討を加えたが、遺構のうち出土遺物がない、もしくは図化のできない、主に中近世の土壇の類は、全体図に位置を示したのみでその多くは割愛せざるを得なかったこと、遺物についても極力実測に努めたがその一部は未掲載となったことを初めにお断りしておく。

#### 2 時代区分について

各時代の小時期区分については、各時代の遺構と遺物の概要に詳しく述べることとする。当遺跡において、最古の遺物は、縄文時代後期初頭の中津式にはじまり、縄文時代の終わりは、突帯文土器のすべてを含んでおり、一部は弥生前期と併行する可能性がある。

弥生時代は、中期から後期が主体であって、その終わりは第370図に示す洪水砂層中の二重口縁の土器をもって画することにした。

古墳時代の節では、『久田原遺跡』にならい7世紀代の遺物も含んでおり、古代とは奈良時代～平安時代を指している。

本書における中世とは、時代区分における鎌倉時代（鎌倉幕府の成立）からいわゆる織豊期までを指す。近世の開始は、江戸幕府の成立、森氏の美作入封ころに基点を求め、肥前系陶磁では胎土目の出現を契機とする。そして遺構と遺物の年代は、西暦で17世紀前半あるいは1610年代などと表記する

こととする。

### 3 各時代の特徴

縄文時代では、おもに河道から出土した後期中葉の土器群や石器類、微高地上における土壙や包含層中から出土した後期末葉から晩期後葉にかけての土器、石器、土製品がある。とりわけ数百に及ぶとみられる打製の石鍬は、この遺跡の性格を表す代表的な遺物でもある。また、微高地上にみられる百基あまりの火処群は、いくつかのブロックに分かれてそれぞれが晩期前葉～中葉の土器溜まりを伴い、その場での生活の痕跡をうかがわせるものであった。そして岡山県下では例の少ないこの時期の充実した資料であるばかりでなく、その前後の時期も含めて大洞系・北陸系・関東の加曾利B式の土器や搬入されたヒスイ・黒曜石などの石器石材を含むものであった。

弥生時代では、中期後葉を中心とした集落と「水田」が明らかとなった。これは、当遺跡が中期中葉を中心とした久田原遺跡から後期を中心とした夏栗遺跡へと居住域を移動させた過渡期にあたり、三つの遺跡が連動した遺跡群と捉えられる。

中期後葉の円形の竪穴住居は、方形の竪穴と掘立柱建物のセットで存在した。方形の竪穴は円形の住居とくらべその規模は小さく柱穴もみられないが、火処を備えており、工房もしくは炊飯場としての機能を想起させるものである。「水田」は洪水によってパックされており、精査を行ったところ黒色を帯びた畔状のごく僅かな隆起が確認できた。ただし、土壌の断面観察から判断して長期的な使用は考えにくい状況であった。

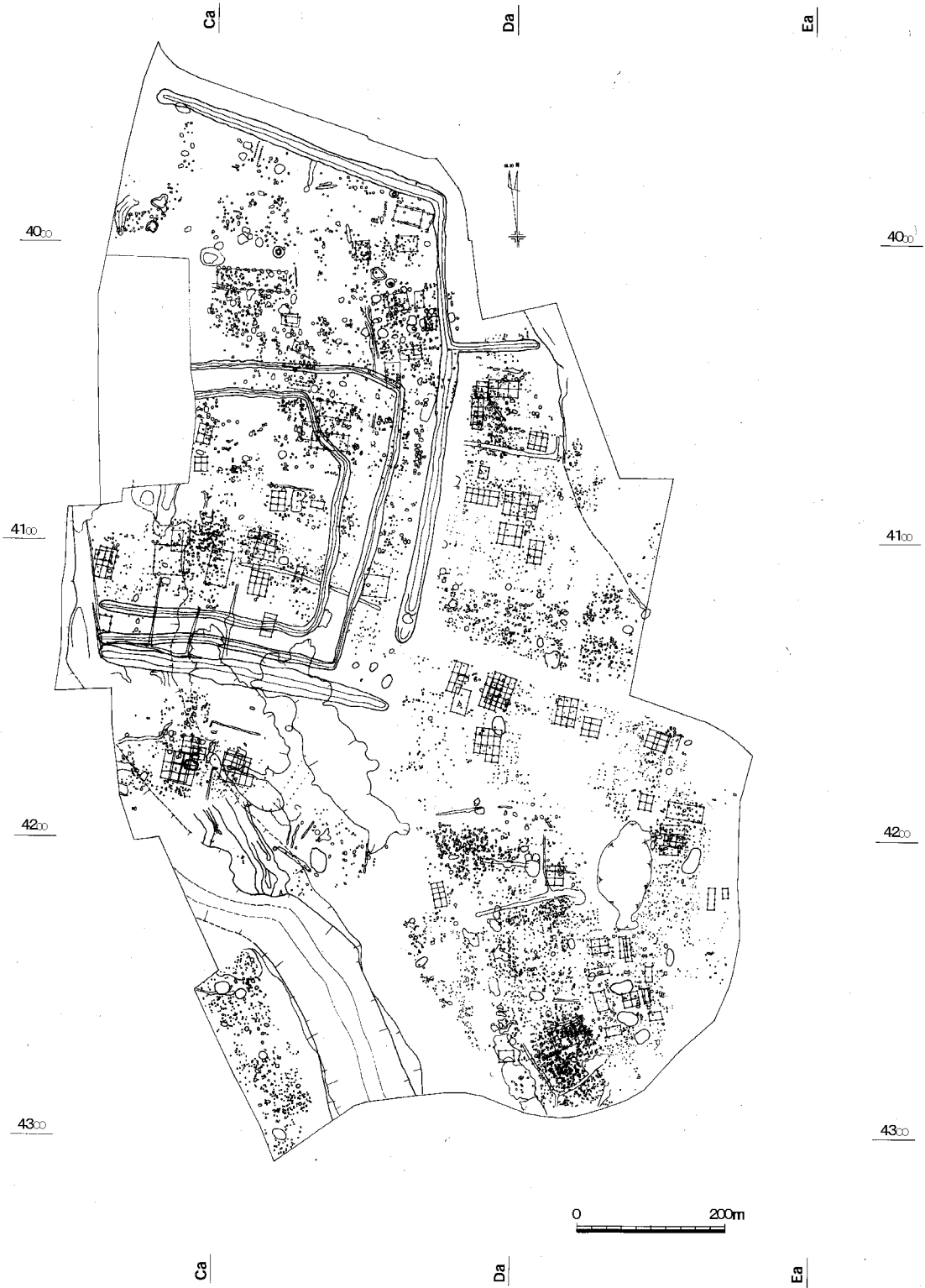
古墳時代では、前期の竪穴住居1軒、後期の土壙墓1基と土取り跡のほかは、数基の土壙や河道が存在する程度であった。

引き続いて古代に属する遺構と遺物も、極めて少なかった。遺構としては上部に集石を持つ土壙で、青白磁の合子と蓋に加工した和鏡を出土し「経塚」と推定できる遺構が、古代末～中世初頭に位置づけられる。このほかに平安時代の土器が少量みられるほかは生活の痕跡は乏しい。

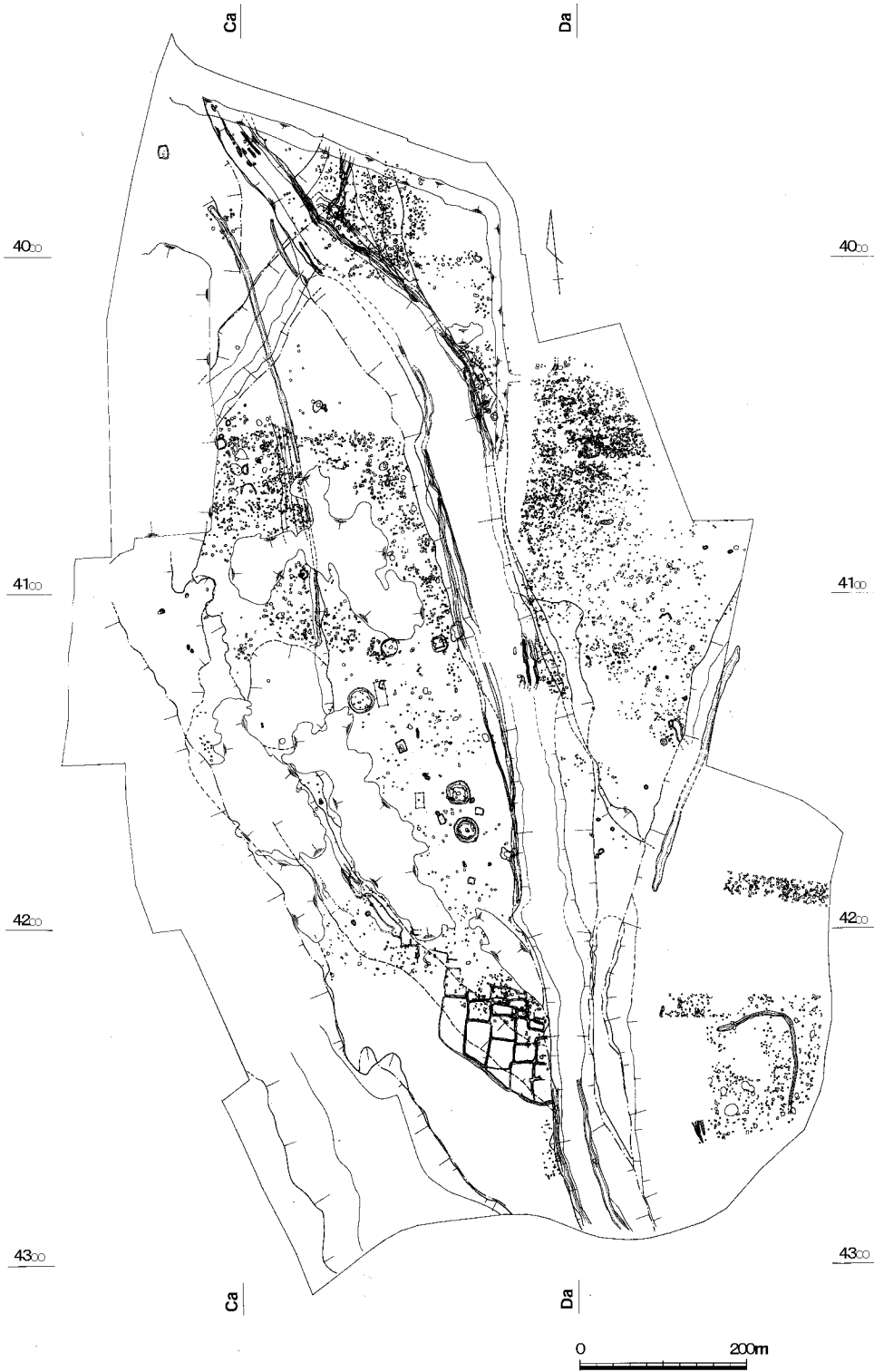
中世では、堀に囲われた居館部分とその周囲にも屋敷地が形成されており、戦国時代を中心にしながらも、鎌倉時代から織豊期にかけて途切れることのない遺物の出土をみた。また、在地産の土師器や瓦質土器のほかには勝間田焼、亀山焼、備前焼、吉備系土師器椀（早島式土器）、東播系須恵器、常滑焼、瀬戸・美濃焼、肥前系陶磁器、中国産の青磁や白磁、青白磁、青花、和鏡3面、硯、石鍋、武器・武具（甲冑の小札）などその種類や産地も多様であることが刮目に値する。戦国期初頭の文書に記載された「久多庄」の実態が明らかとなった。

江戸時代においても、少なからず遺構・遺物が認められた。屋敷地の範囲は前代に比べて限られた範囲にしかみられなくなるが、出土した肥前陶磁器類などから、中世から時間的にも連続していることがうかがえた。また、江戸時代を通しての墓の調査も行っており、なかには寛永通寶の緞銭、天保通寶を副葬した墓もみられた。

(弘田)



第10図 上層遺構全体図 (1/2,500)

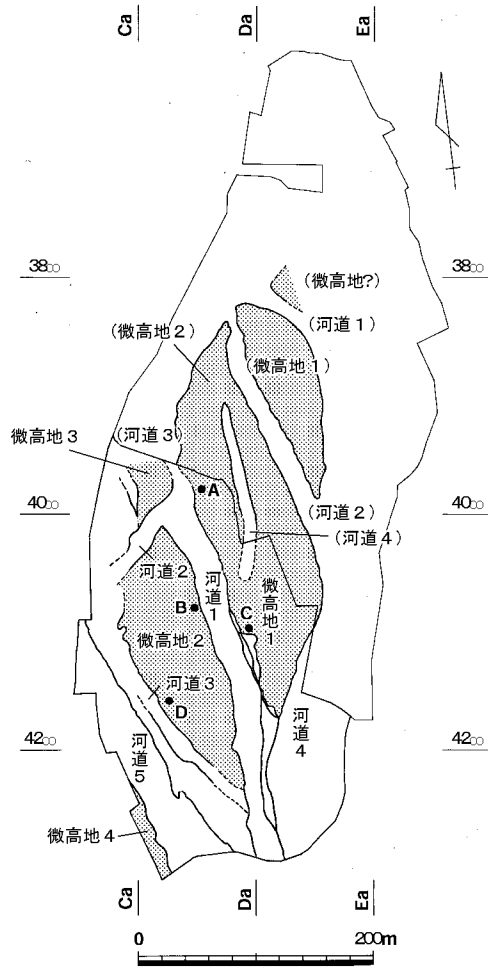


第11図 下層遺構全体図 (1/2,500)

## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

## 1 概要

久田堀ノ内遺跡は、第12図に示しているとおり、久田原遺跡から続いている微高地上に形成された遺跡である。微高地は大きく2か所、久田原遺跡から続いている微高地1（久田原遺跡では微高地2）と河道1を挟んで微高地1の西側に微高地2が確認された。さらにその様相は不明であるものの、微高地2の北西側に微高地3が所在し、現在の吉井川により西側の状況が不明であるが河道5の南西側に微高地4が検出されている。これらの微高地上では竪穴住居などの居住を示す明確な遺構を確認できなかったが、袋状土壇・焼成土壇・火処・土器溜まりなどの生活痕跡が残されていた。特に火処は97基確認されており、久田原遺跡と比較するとその多さが際だっている。河道は、弥生時代中期の河道がその流路を踏襲していたり、弥生時代後期～古墳時代初頭の大洪水による削平を受けているため、その肩を認識できる地点が少ない。そのため、久田原遺跡での状況や確認された河道の肩から流路を復元し、最終的に5条の河道を想定した。河道1は久田原遺跡河道3から続いており、北から南へと流走している。4102Da付近では3時期の肩が確認されており、東斜面②としている肩は縄文時代後期に帰属する。河道1は4000Cc付近で南西と南東に分岐しており、南西に流走しているものを河道2とした。河道3は久田堀ノ内遺跡の西側を画し、河道2との関係は後世の削平により不明である。河道4は久田原遺跡河道2から続いている河道で、遺跡の東側を画している。また、久田原遺跡で河道4としていたものは今回明瞭に確認されず、緩やかな谷状の地形を呈していた。



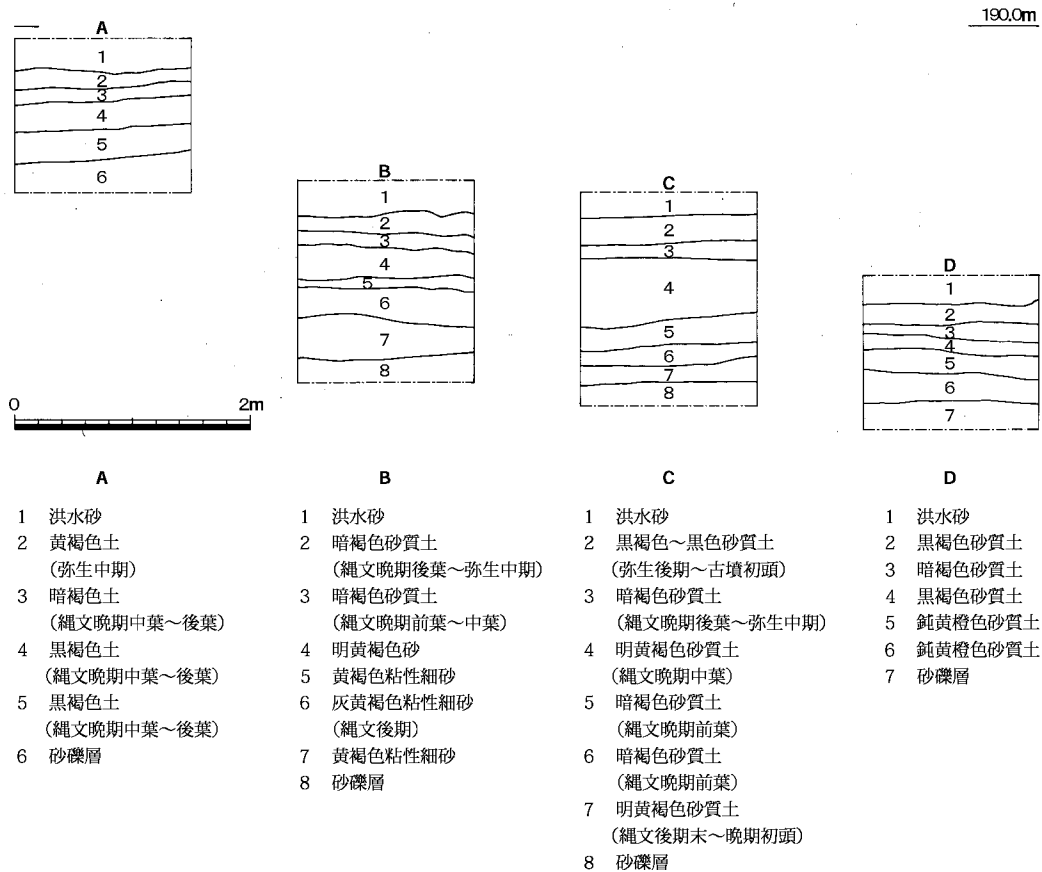
第12図 微高地・河道と土層柱状図位置 (1/6,000)

\* ( ) は久田原遺跡（県報告184）に掲載されている  
微高地・河道名

河道は、弥生時代中期の河道がその流路を踏襲していたり、弥生時代後期～古墳時代初頭の大洪水による削平を受けているため、その肩を認識できる地点が少ない。そのため、久田原遺跡での状況や確認された河道の肩から流路を復元し、最終的に5条の河道を想定した。河道1は久田原遺跡河道3から続いており、北から南へと流走している。4102Da付近では3時期の肩が確認されており、東斜面②としている肩は縄文時代後期に帰属する。河道1は4000Cc付近で南西と南東に分岐しており、南西に流走しているものを河道2とした。河道3は久田堀ノ内遺跡の西側を画し、河道2との関係は後世の削平により不明である。河道4は久田原遺跡河道2から続いている河道で、遺跡の東側を画している。また、久田原遺跡で河道4としていたものは今回明瞭に確認されず、緩やかな谷状の地形を呈していた。

土器は後期から晩期まで認められ、もっとも古い時期の遺物は、河道4肩部の下層中から出土した後期前葉（中津式）の土器（750）である。しかしこの時期の遺物は少なく、後期中葉（彦崎K I 式併行期）以降から量的安定がみられる。後期後葉（福田K III 式）以後、特に晩期においては他地域の土器が数多く出土しており、その交流をうかがわせる。その他の遺物としては、石鍬（打製石斧）や獣形勾玉などが出土し、特

第3章 発掘調査の概要



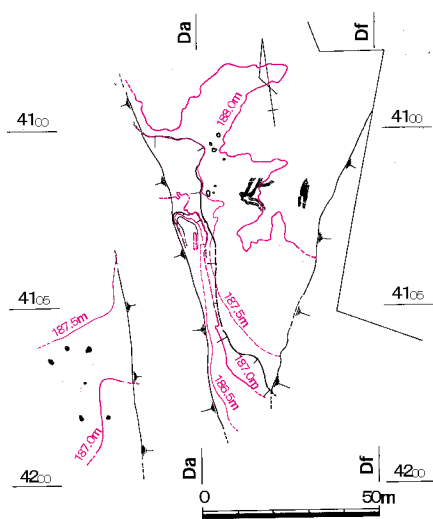
第13図 縄文時代基本層序 (1/60)

に石鏃の大量出土は特筆すべきであろう。

第13図は地点毎の層序を柱状図にして表したものである。久田堀ノ内遺跡の基本層序は後世の洪水等で削平を受けている地点が多いことを除けば久田原遺跡と大差ない。弥生時代後期から古墳時代初

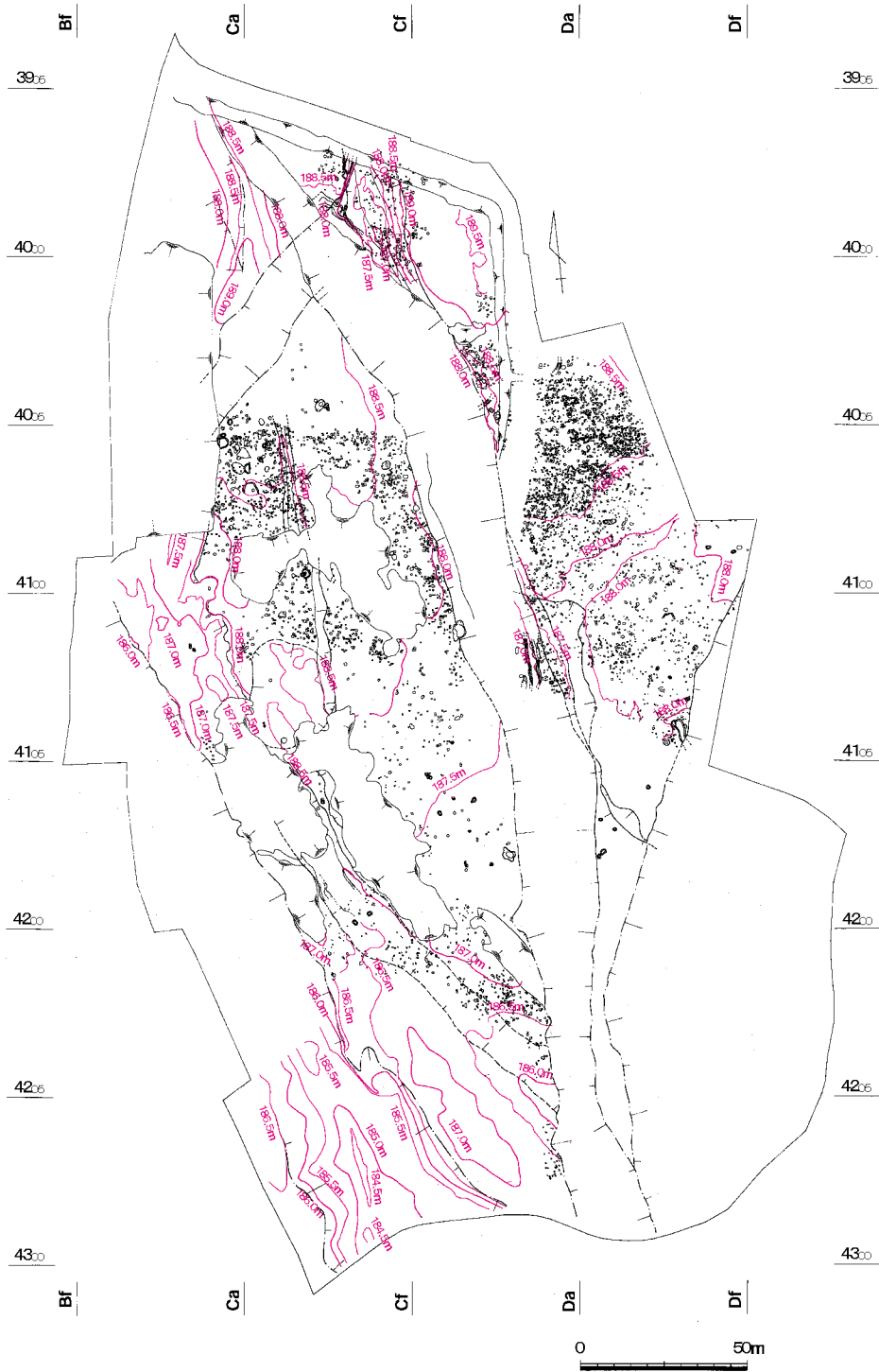
頭の洪水砂礫の下層に上から暗褐色土・明褐色土・暗褐色土の堆積がみられ、大まかな対応関係は上層の暗褐色土が縄文時代晩期後葉～弥生時代中期後葉、明褐色土が縄文時代晩期中葉、下の暗褐色土が縄文時代晩期前葉～中葉に比定される。さらに河道1中流部の東西両側では後期の包含層が確認されており(土層柱状図Bの第6層)、主に後期中葉～後葉の土器を包含し、後期前葉の土器も少量散見されている。

最後に主要遺構部分図について補足をする。河道は、縄文時代の河道の肩が確認されている所を実線、弥生時代以降の河道により削平を受けているがその流路が想定できる所を一点破線で表記している。主要遺構部分図では、袋状土壙・焼成土



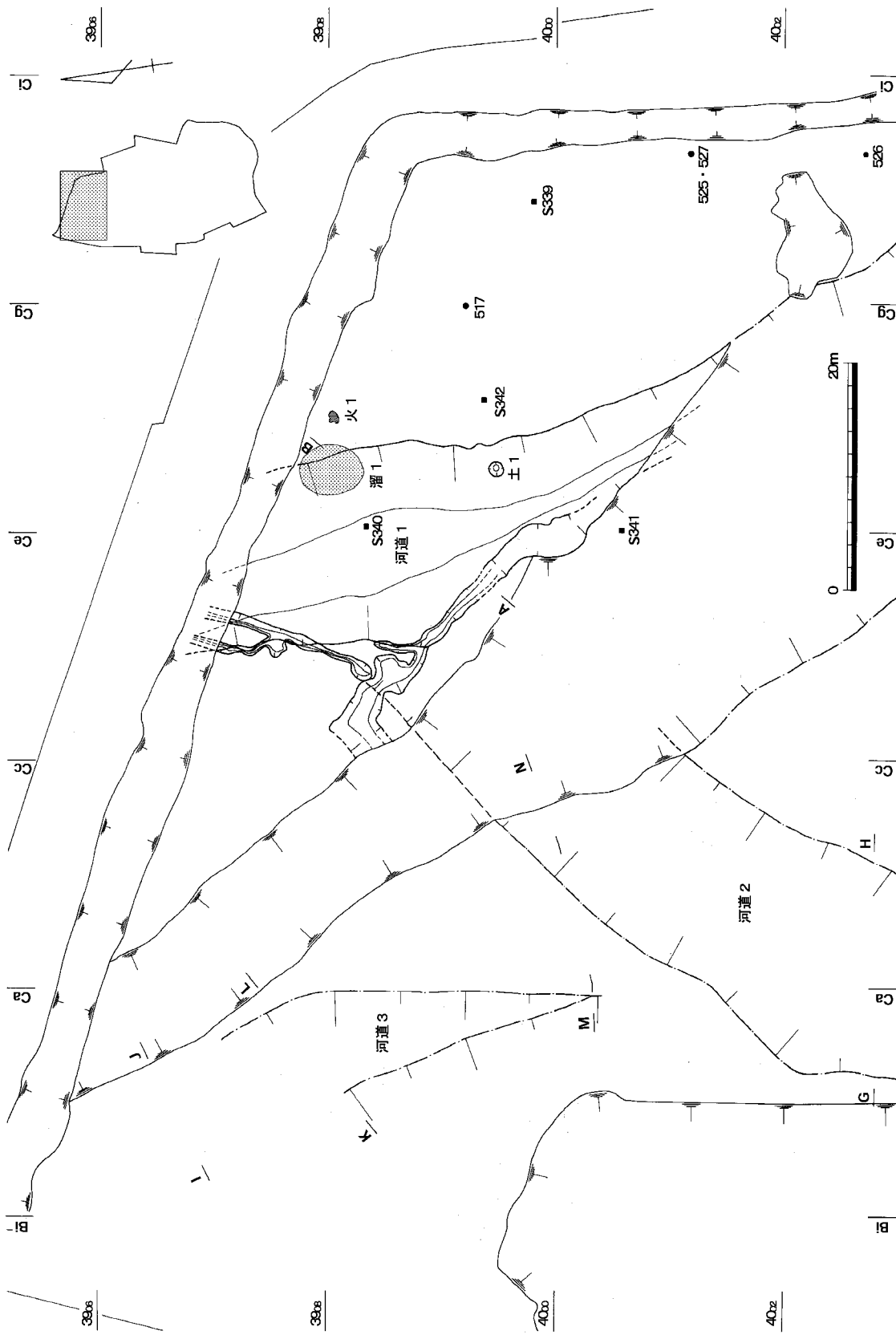
第14図 縄文時代後期遺構全体図 (1/2,000)

壙・溝・土器溜まり・窪地など個別遺構図を掲載している遺構のみ記載しているが、火処のみすべて掲載している。ピットなどは全体図のみに記載し、主要遺構部分図では割愛している。さらに包含層中ではあるが、その出土位置が特定できる遺物については、●（土器）・■（石器）のドットで位置を示し、掲載番号を記載した。  
 (小嶋善邦)

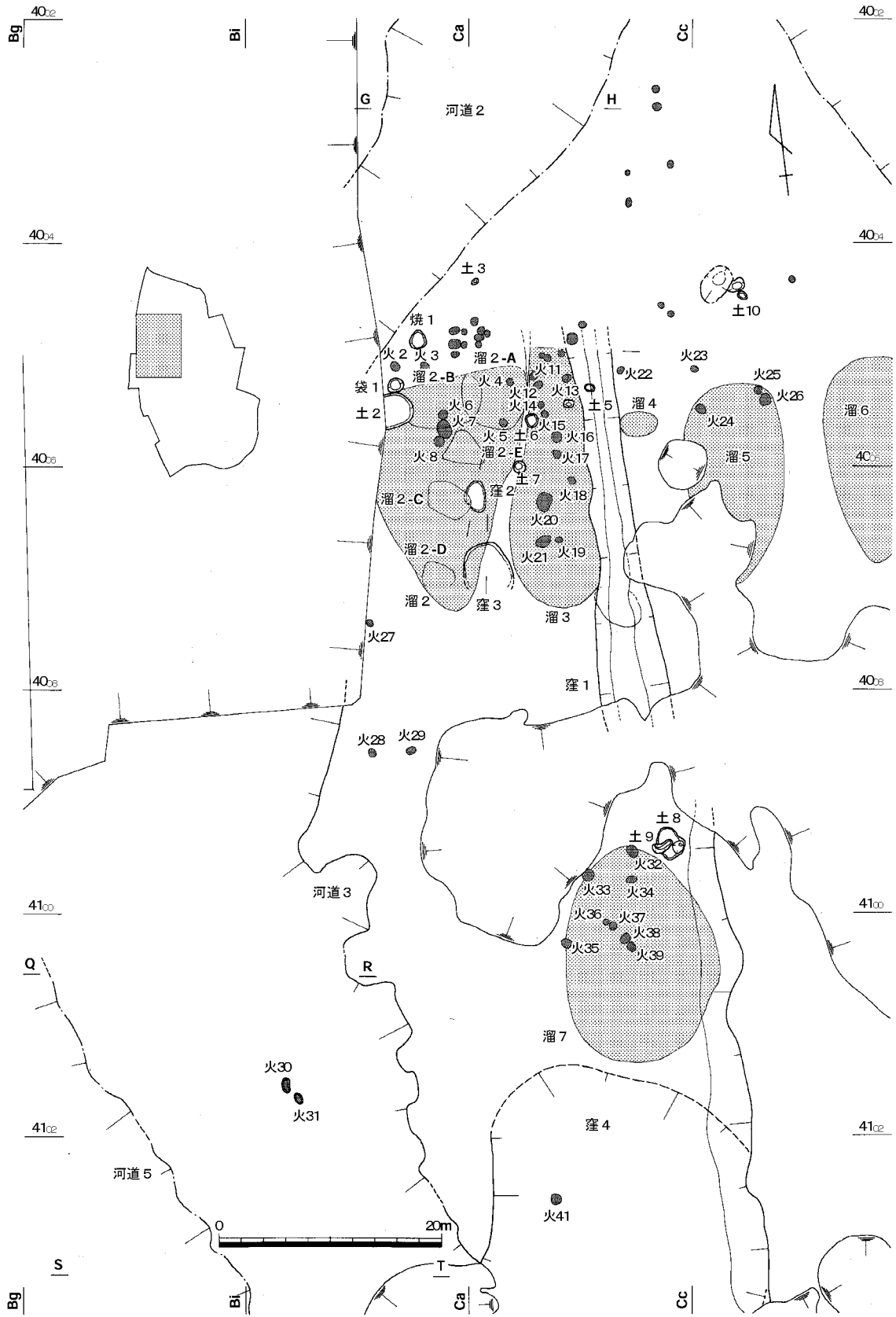


第15図 縄文時代晩期遺構全体図 (1/2,000)



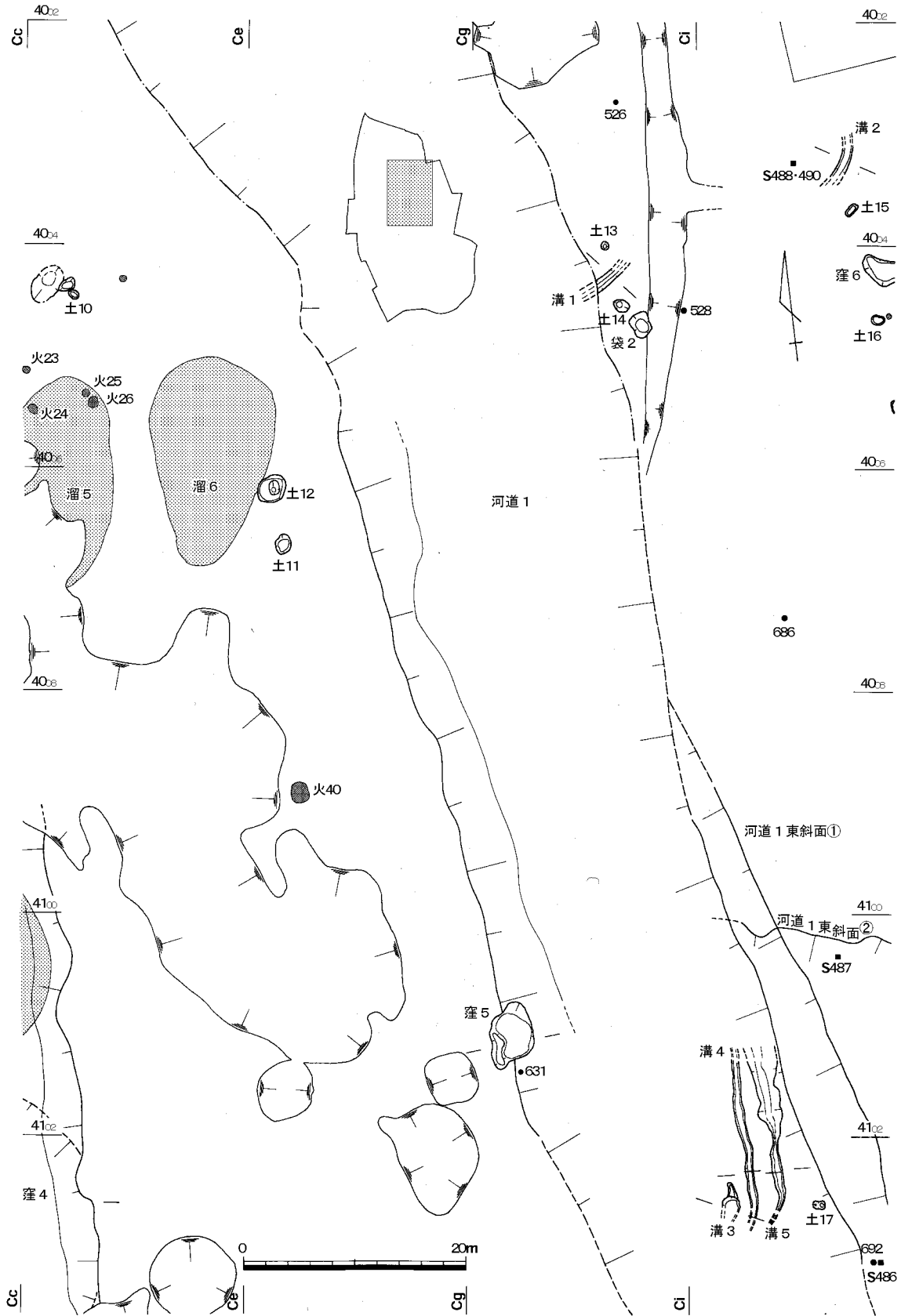


第16図 縄文時代主要遺構部分図① (1/500)

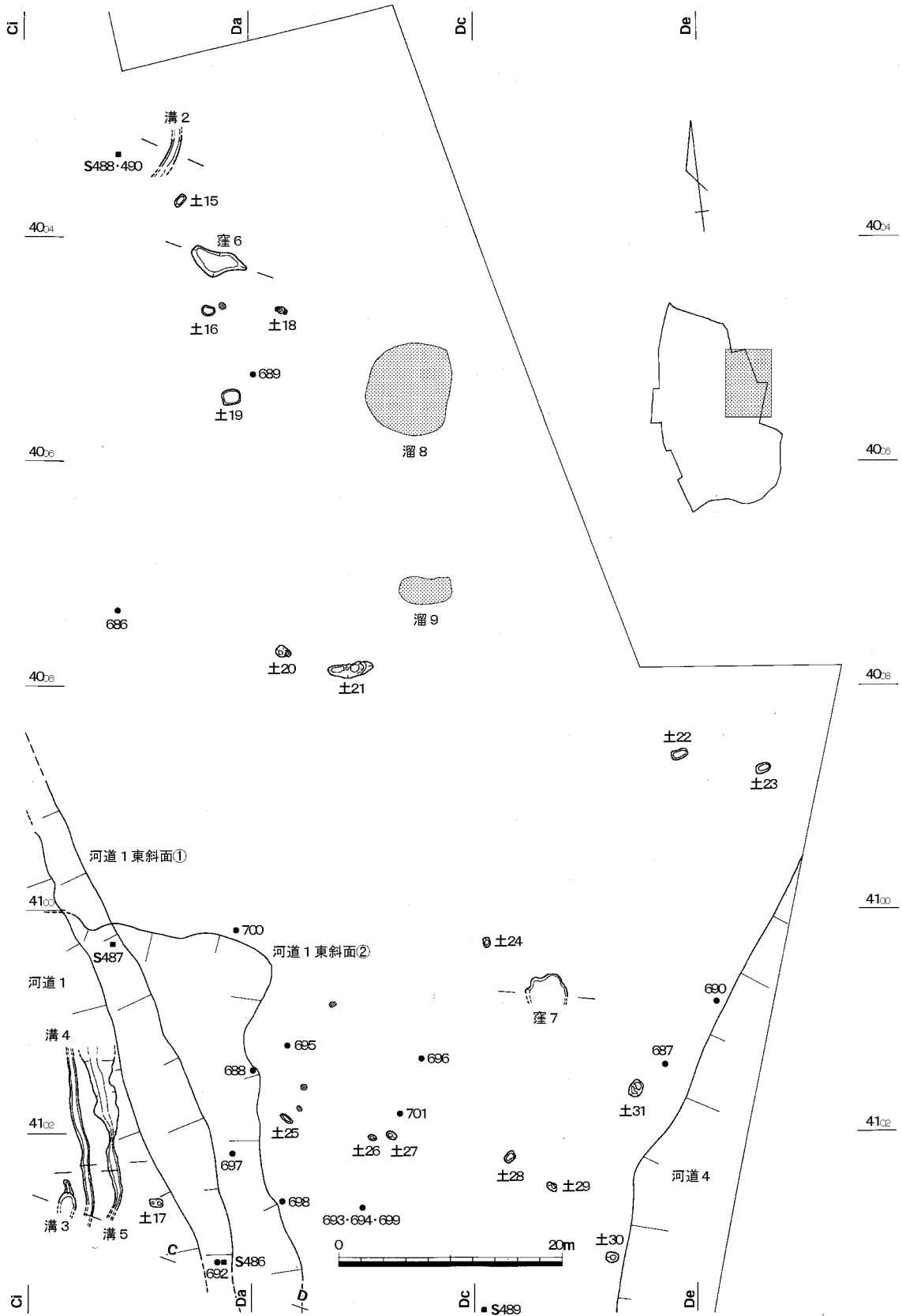


第17図 縄文時代主要遺構部分図② (1/500)

第3章 発掘調査の概要

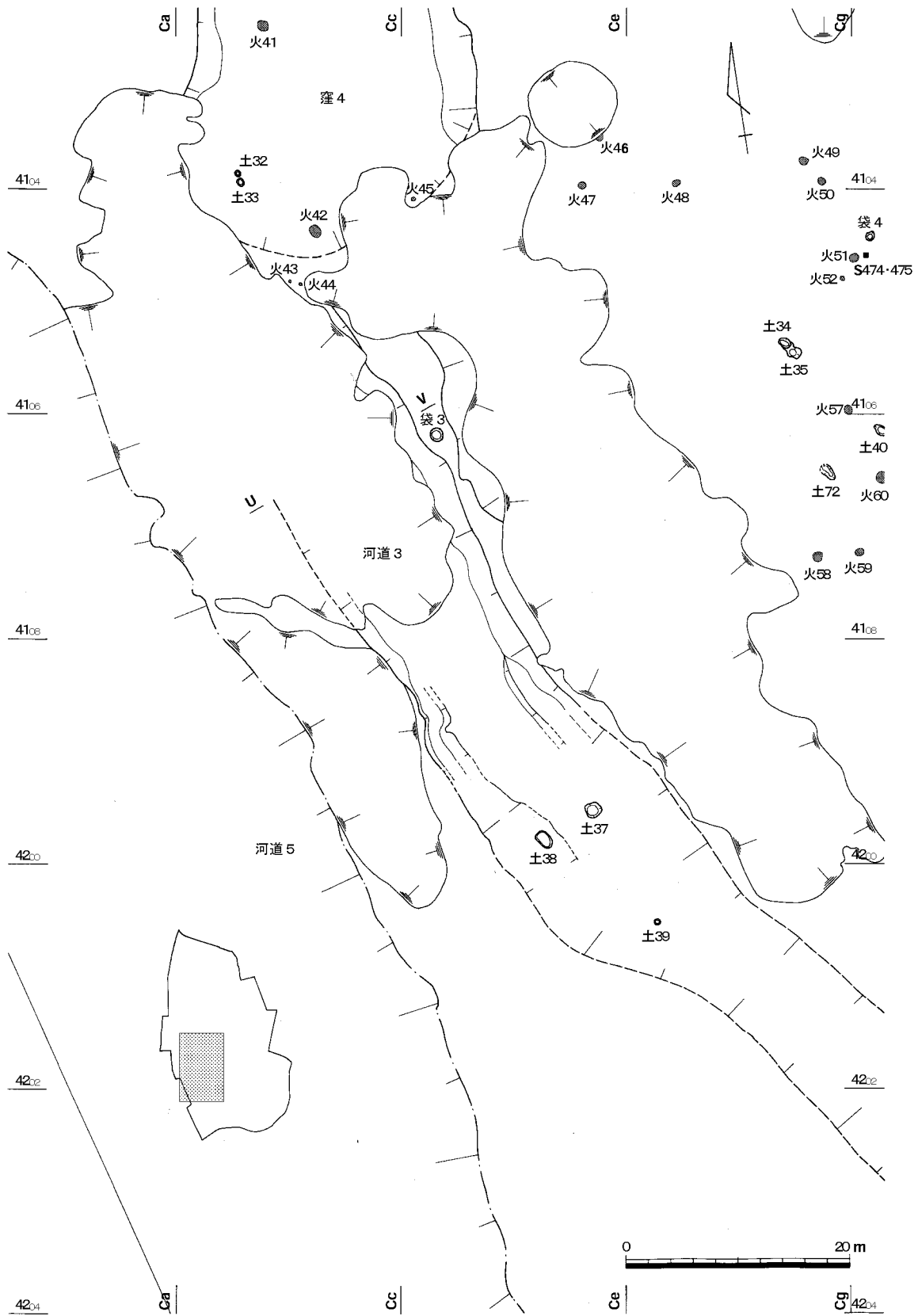


第18図 縄文時代主要遺構部分図③ (1/500)

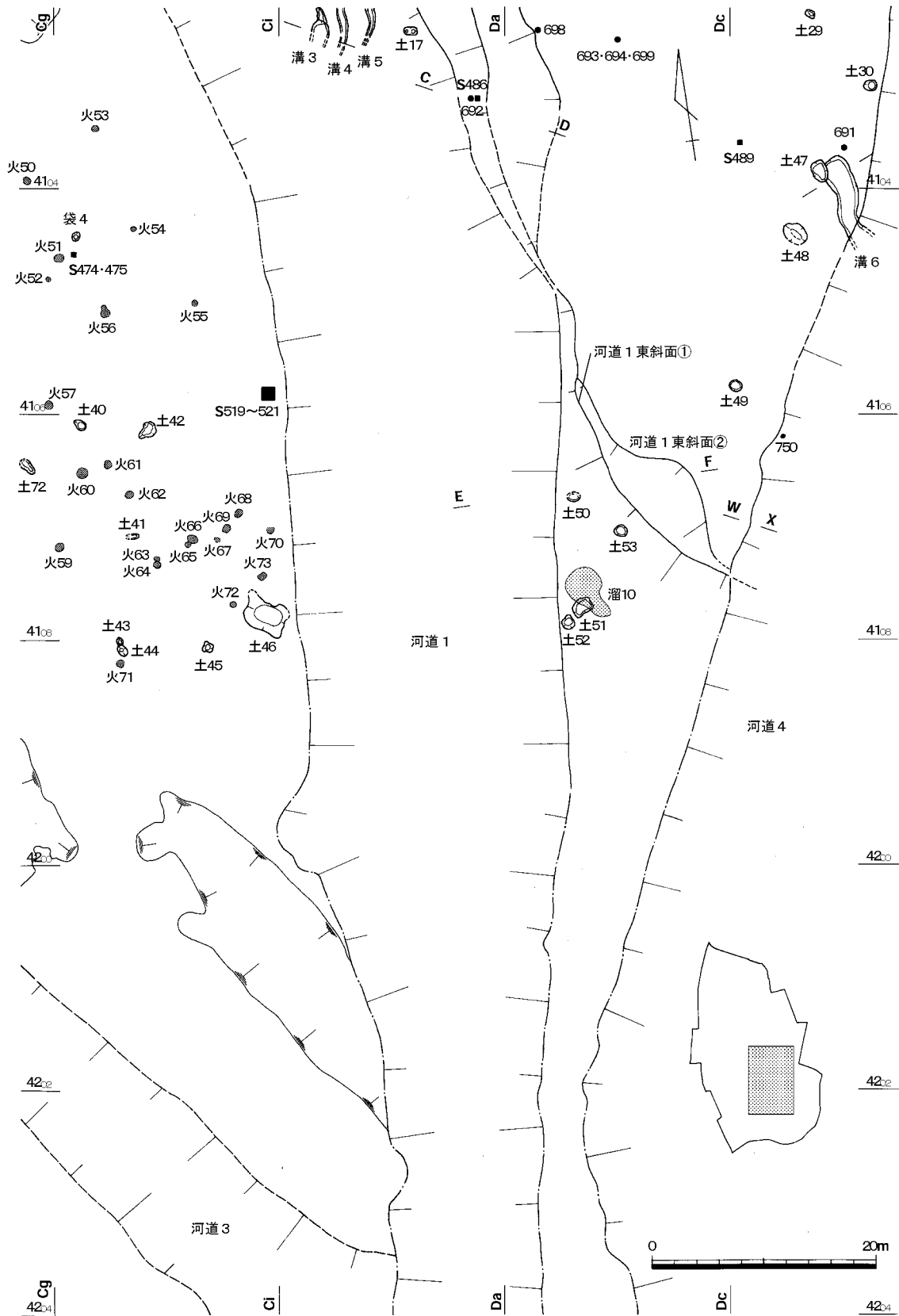


第19図 縄文時代主要遺構部分図④ (1/500)

第3章 発掘調査の概要

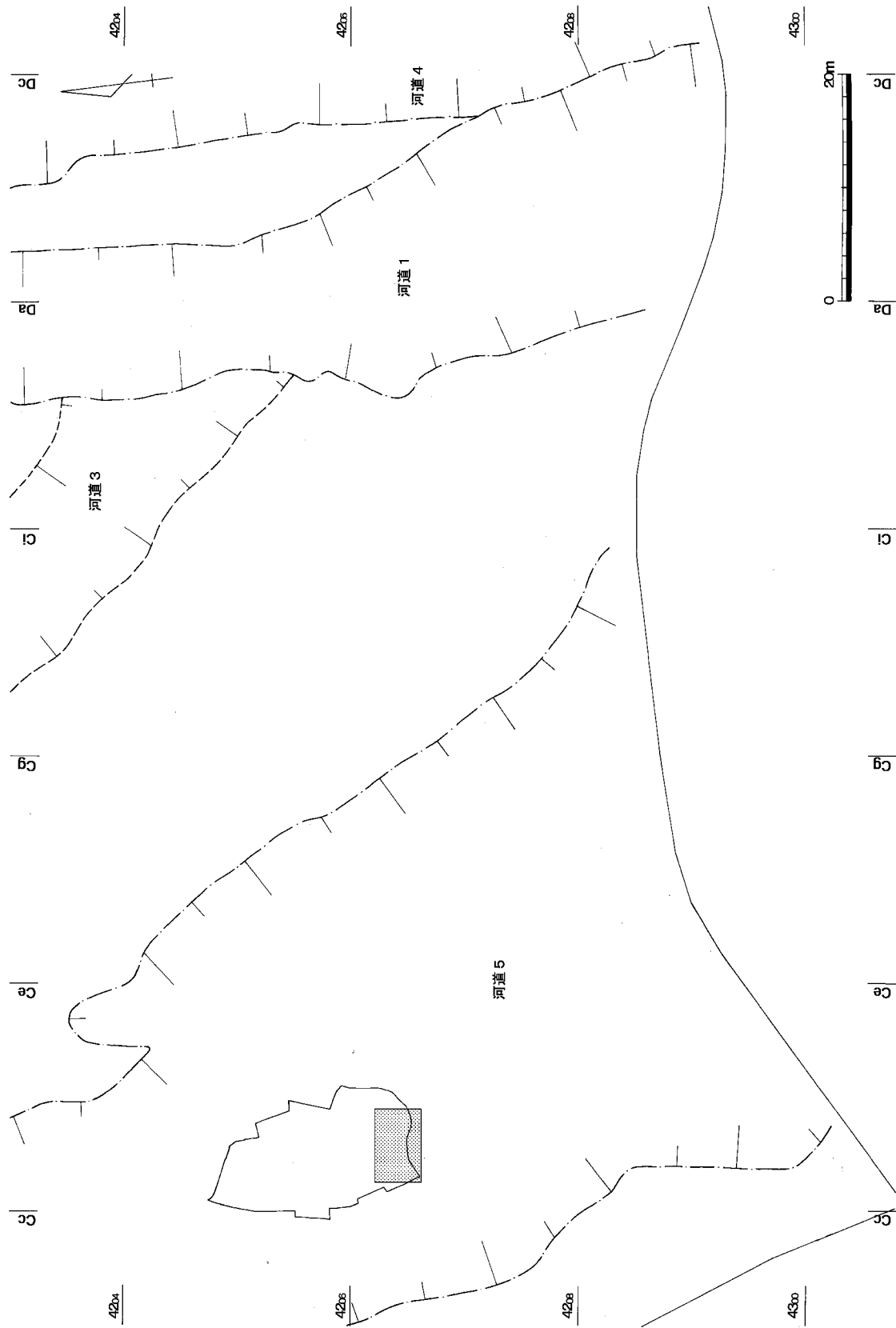


第20図 縄文時代主要遺構部分図⑤ (1/500)



第21図 縄文時代主要遺構部分図⑥ (1/500)

第3章 発掘調査の概要

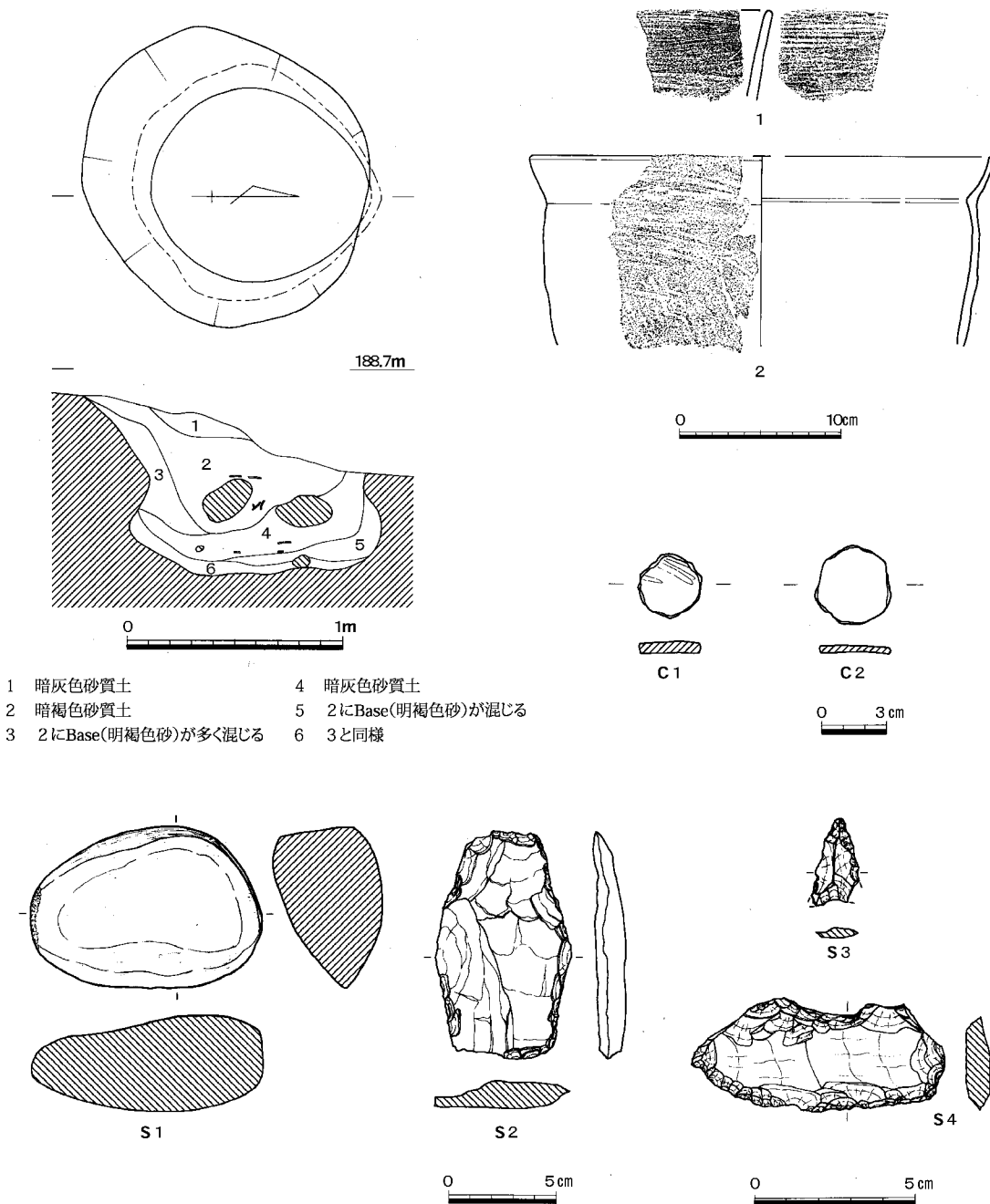


第22図 縄文時代主要遺構部分図⑦ (1/500)

## 2 袋状土壇

袋状土壇 1 (第17・23図、図版1・6・28・47)

4 005 Bj区に位置する。当遺構周辺の火処・土器溜まりとともに、縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土の除去後に検出された遺構である。長軸2.8m、短軸2.54m、深さ1.66mをはかり、袋部の最大径は2.33m、床面積は2.85㎡である。出土遺物には深鉢1・2のほか、土器を打ち欠いて再利用した円盤状土製品が確実なものとして2点、短辺の一方が尖る形態を有する磨り石S 1、石鏃S 2、



第23図 袋状土壇 1 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3,1/2)



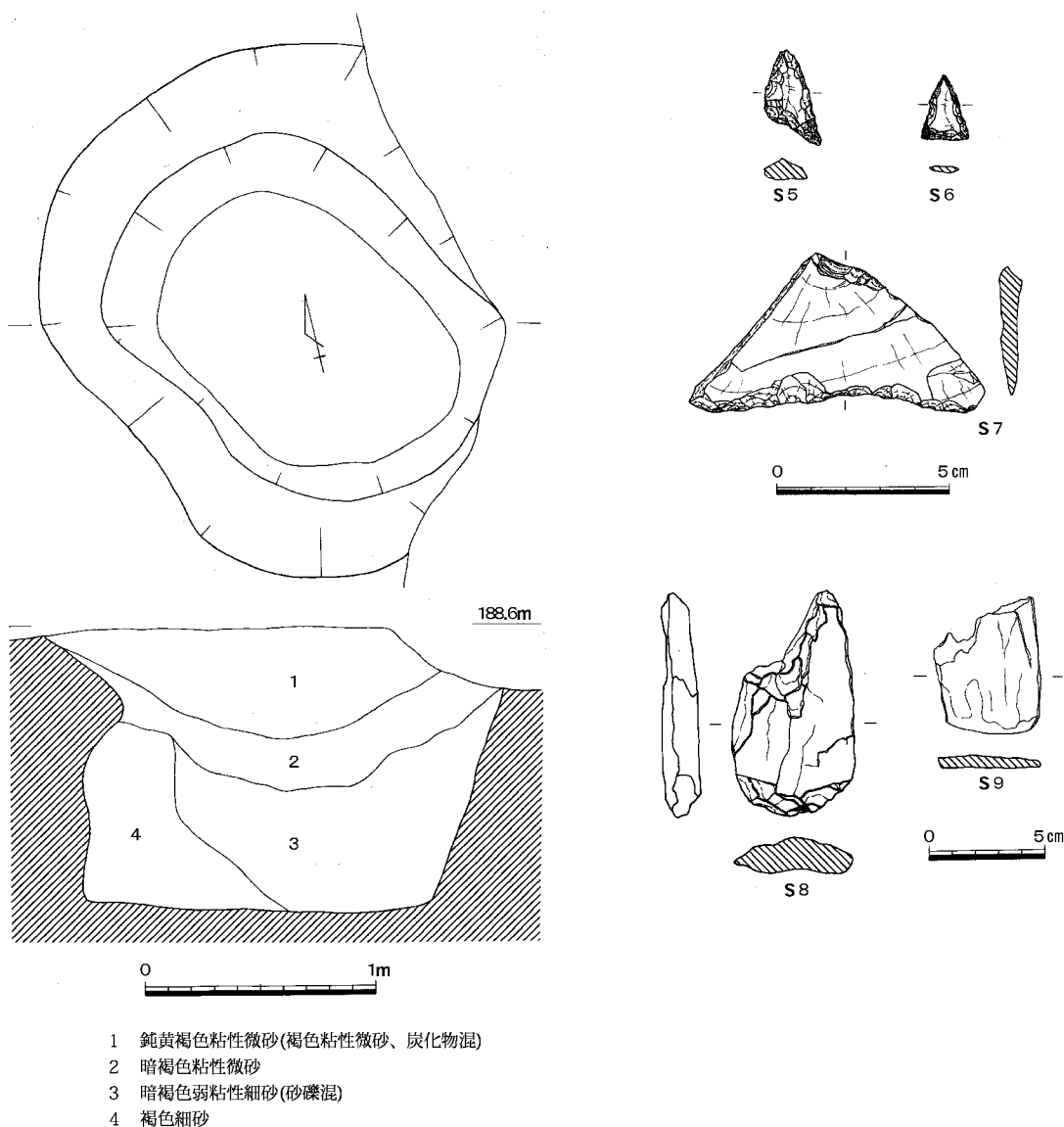
第3章 発掘調査の概要

石鏃S3、スクレイパーS4が出土している。これらの遺物は2～4層からの出土がほとんどである。遺構の検出レベルから判断して、近接する土壌2より古いものと判断できる。また当遺構のすぐ西は攪乱を受けているため詳細は不明であるが、元々は群在していた可能性もある。(河合忍)

袋状土壌2 (第18・24図、図版1・6・28)

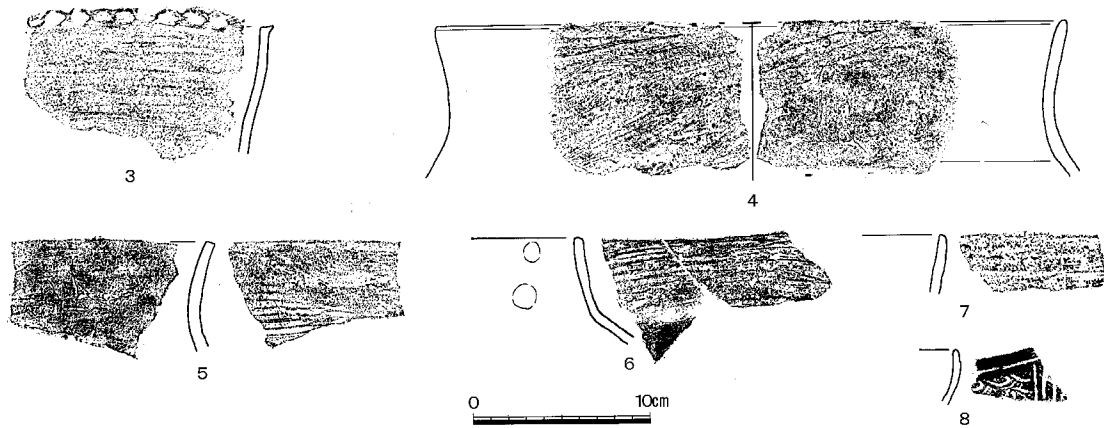
4 004Ch区の中の河道1左岸側肩部もしくは斜面部と考えられる位置にある。

出土した遺物には、土器3～8、石器ではサヌカイト製の石鏃S5・6、スクレイパーS7、緑色片岩製の石鏃S8・9がみられた。このうち土器については、後期の1点8を除けばいずれも晚期中葉に位置付けられ、4～7は舟津原式に、3は谷尻式に相当しよう。これら以外の貯蔵物については確認できなかった。この袋状土壌は、久田原遺跡の袋状土壌と位置的にも近く、またほぼ同時期と考えられるが、久田原遺跡では河道底に群在したのに対して、この土壌は微高地上に位置するという点で異なっている。(弘田)



- 1 鈍黄褐色粘性微砂(褐色粘性微砂、炭化物混)
- 2 暗褐色粘性微砂
- 3 暗褐色弱粘性細砂(砂礫混)
- 4 褐色細砂

第24図 袋状土壌2 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3)



第25図 袋状土壇2出土遺物 (1/4)

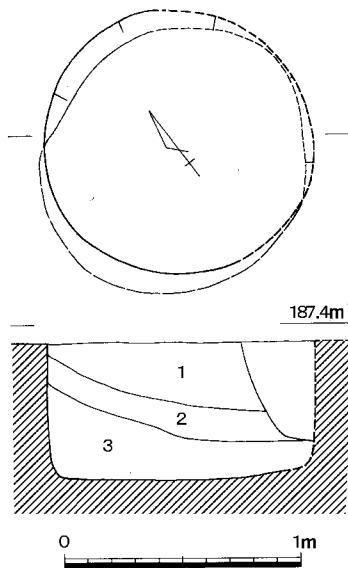
袋状土壇3 (第20・26図)

4 106Cc区において検出した。平面形は1.2×1.14mのほぼ円形で、深さは58cmを測る。約東半分が新しい遺構によって切られていたが、西南部の断面形は袋状を呈していた。底面はほぼ平らで、埋土は三層に分離できた。遺物は出土していないが、時期は縄文時代晩期であろう。(平井泰男)

袋状土壇4 (第20・27図)

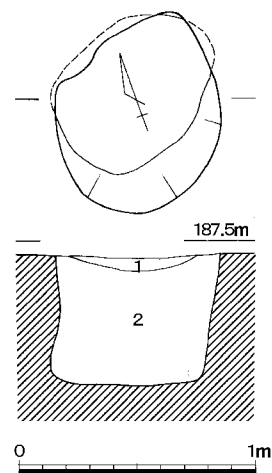
微高地2の中東部の4 104Cg区において検出した。平面形は86×71cmの不整楕円形で、深さは54cm残存していた。埋土は二層確認できた。

底面はほぼ平坦で、断面形が約北半分において袋状を呈していた。遺物は出土しなかったが、検出面や埋土の状況から時期は縄文時代晩期と考えている。(平井)



- 1 淡褐灰色砂質土
- 2 淡黄色砂質土
- 3 暗褐灰色砂質土

第26図 袋状土壇3 (1/30)



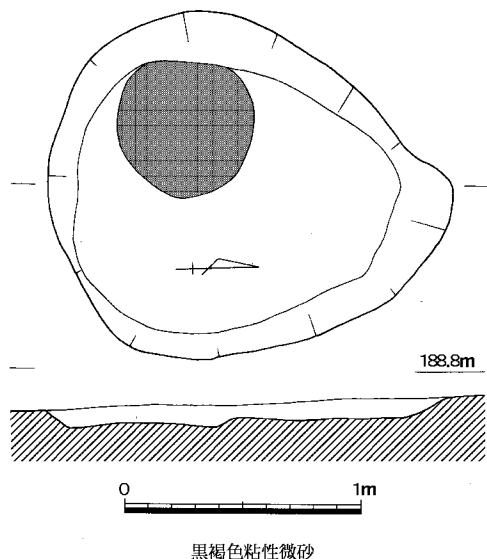
- 1 褐灰色砂質土
- 2 褐灰色砂質土

第27図 袋状土壇4 (1/30)

### 3 焼成土壌

#### 焼成土壌 1 (第17・28図)

微高地 2 上の 4 0 0 4 B j 区に位置する浅くて小規模な土壌である。周辺には火処とそれに関わる土器溜まりがみられた。土壌底は1.1~1.3mの楕円形に近い形をしており、そのうちに直径60cm程の被熱痕跡が認められた。



第28図 焼成土壌 1 (1/30)

周辺の火処も、本来はこのような土壌状の掘り込みを有していたのかも知れない。(弘田)

### 4 土壌

#### 土壌 1 (第16・29図、図版 1・6)

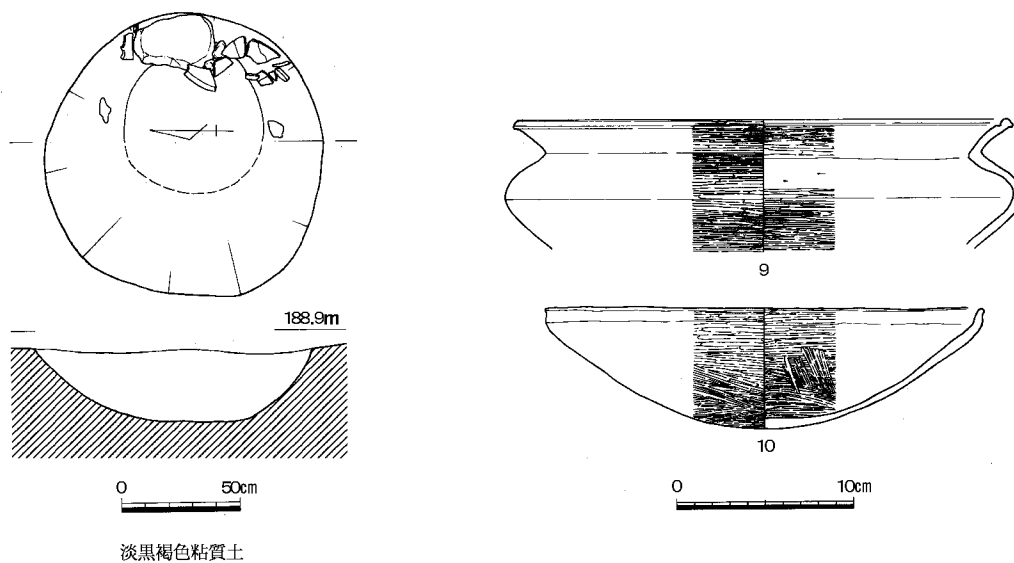
河道 1 左岸側の緩斜面部分において検出した。このすぐ北側において、久田原遺跡の晩期遺構群が展開する。

図示した遺物は、口縁端部内側に沈線をめぐらす9、短く直立した口縁をもつ10で、ともに精製の浅鉢である。

時期は、晩期後葉である。(弘田)

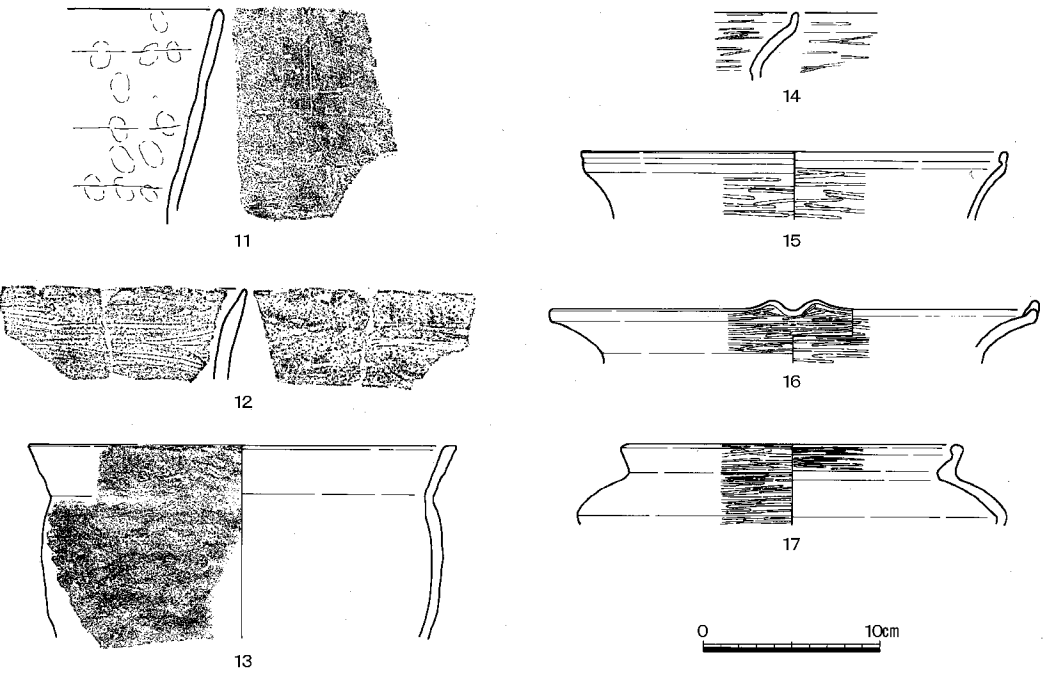
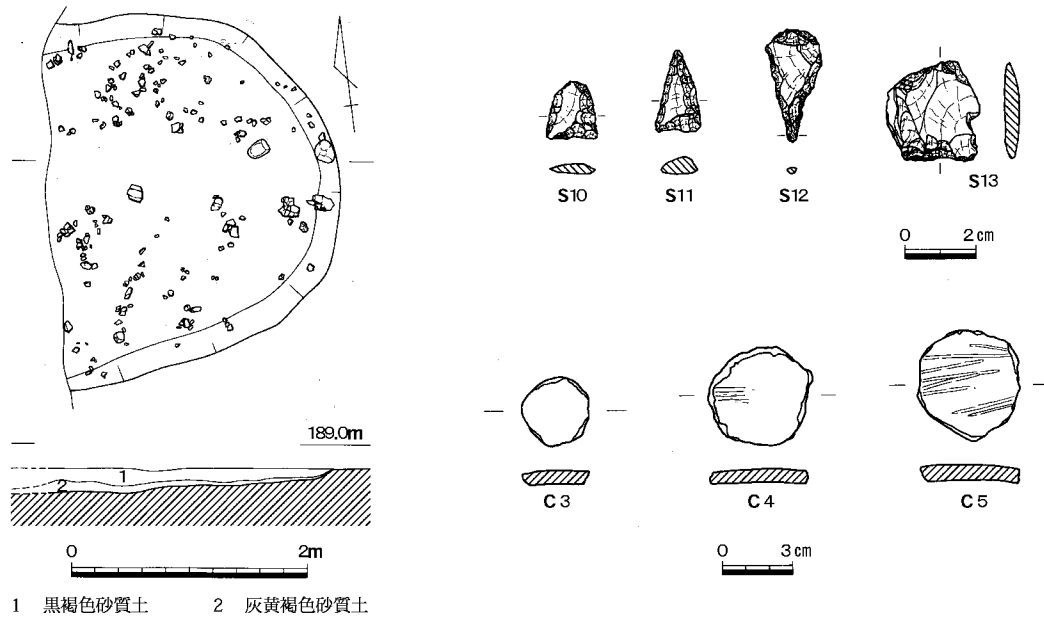
#### 土壌 2 (第17・30図、図版 2・6・7・28・47)

4 0 0 5 B j 区に位置する。縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土の掘り下げ中に検出された遺構であるが、その検出レベルは後述する土器溜まり 2-B~D と共通するものである。遺構は約半分が破壊を受けているが、現存部で短軸5.71m、深さ40cmをはかる。平面形は楕円形になるものと考えられる。床面は西に向け緩やかに下がっていくも

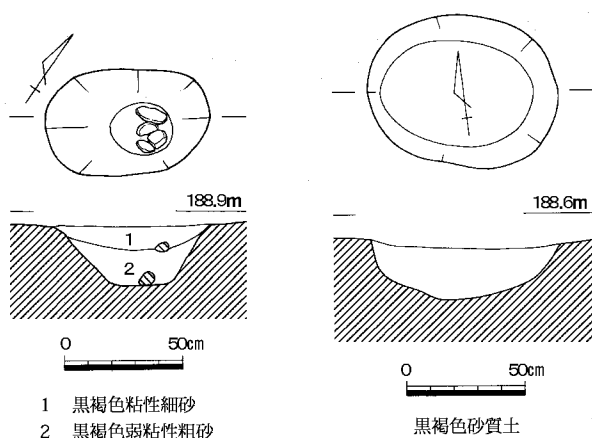


第29図 土壌 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

の、形態等から判断して、竪穴住居の可能性もある。遺物は遺構全体から出土しており、まとまった出方はするものはなかった。土器は深鉢11~13と浅鉢14~17を図化することができた。浅鉢は全て無文で、内外面に横方向のミガキを施している。このほか、土器を再利用した円盤状土製品が確実なものとして3点、石器には石鏃S10・11、石錐S12、スクレイパーS13があり、全てサヌカイト製である。出土土器は少ないものの、その様相は検出レベルが近い土器溜まり2-B~Dと近いものと判断できる。このことから遺構の時期は晩期前葉~中葉(古)の時期幅をもつと考えられる。(河合)



第30図 土壌2 (1/60)・出土遺物 (1/2,1/3,1/4)



第31図 土壌 3 (1/30)

第32図 土壌 4 (1/30)

土壌 3 (第17・31図)

4 004Ci区に位置している土壌である。平面形は楕円形を呈しており、その規模は長軸70cm、短軸47cm、深さ25cmを測る。海拔188.59mを測る土壌底面には10cm大の礫が置かれていた。

図化可能な遺物は出土していないが、その出土層位から縄文時代晩期に帰属する。(小嶋)

土壌 4 (第17・32図)

4 005Cb区に位置する。後述する窪地1の調査後に検出された遺構である。

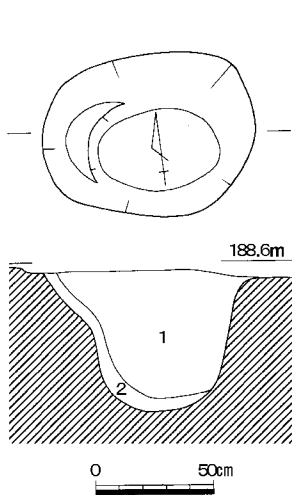
長軸80cm、短軸64cm、深さ25cmをはかる楕円形の土壌である。遺物は出土していないが、出土層位からみて晩期前葉に属すると考えられる。(河合)

土壌 5 (第17・33図)

4 005Ca区に位置する。後述する土器溜まり3の調査後に検出された遺構である。長軸90cm、短軸69cm、深さ60cmをはかる楕円形の土壌である。遺物は出土していないが、出土した層位から判断して晩期前葉に属すると考えられる。(河合)

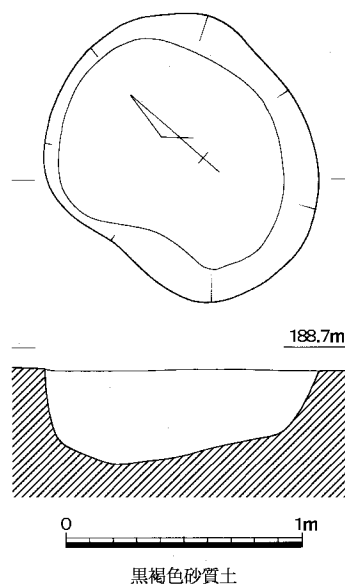
土壌 6 (第17・34図)

4 005Ca区に位置する。晩期前葉の遺物が出土した後述する土器溜まり3の調査後に検出された遺構である。長軸1.22m、短軸1.16m、深さ39cmをはかるやや大きめの不整形な楕円形を呈した土壌である。遺物は出土していないが、出土した層位や埋土等から判断して晩期前葉に収まるものと考えられる。(河合)



- 1 黒褐色砂質土
- 2 鈍黄褐色粗砂に1が混

第33図 土壌 5 (1/30)



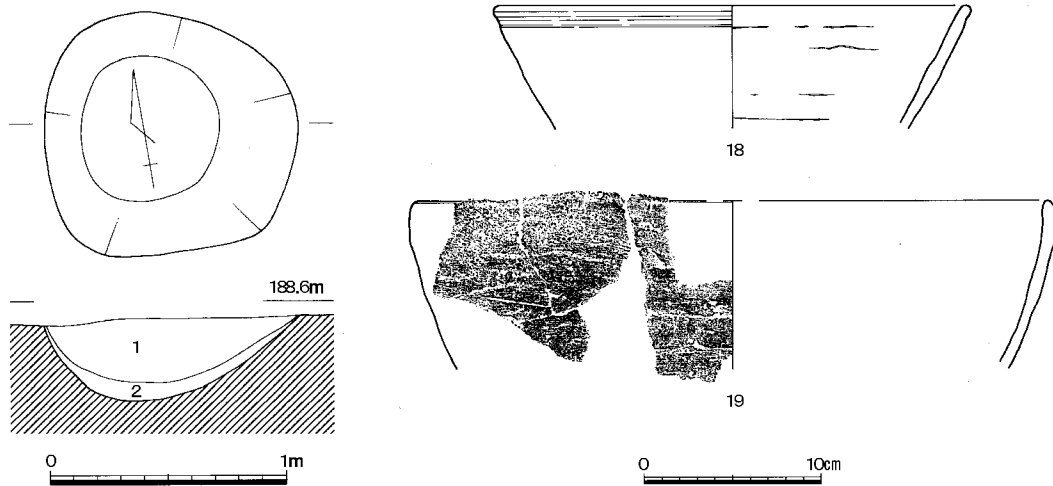
黒褐色砂質土

第34図 土壌 6 (1/30)

土壌7 (第17・35図、図版7)

4 006Ca区に位置する。後述する土器溜まり3の調査後に検出された遺構である。長軸1.22m、短軸1.16m、深さ39cmをはかる円形を呈した土壌である。出土遺物のうち18は浅鉢、19は深鉢と形態から判断されるが、ともに条痕後にナデを施している。これらは晩期前葉に位置づけられるものである。

(河合)



1 黒褐色砂質土 2 鈍黄褐色粗砂に1が混

第35図 土壌7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌8

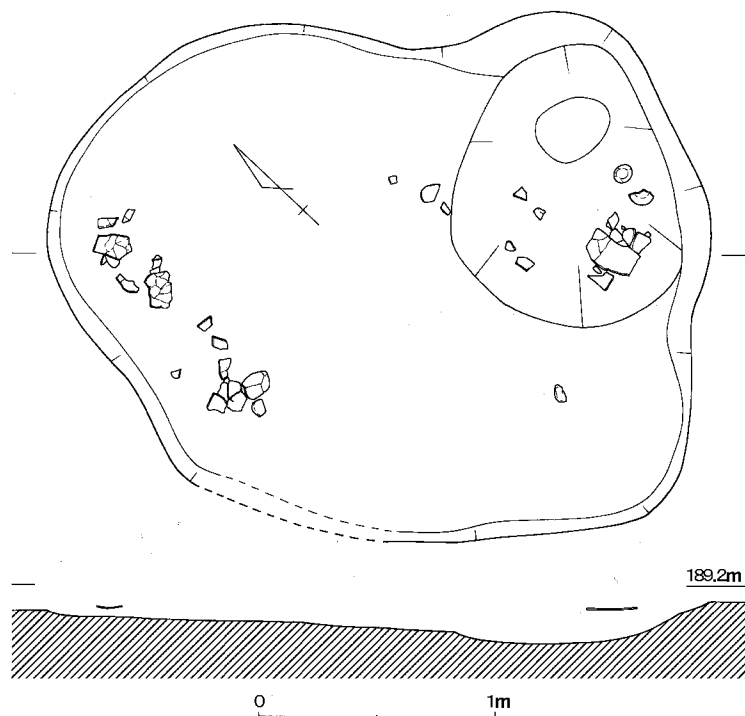
(第17・36・37図、図版47)

4 009Cb区から検出された不整円形の土壌で一部を土壌9に切られている。

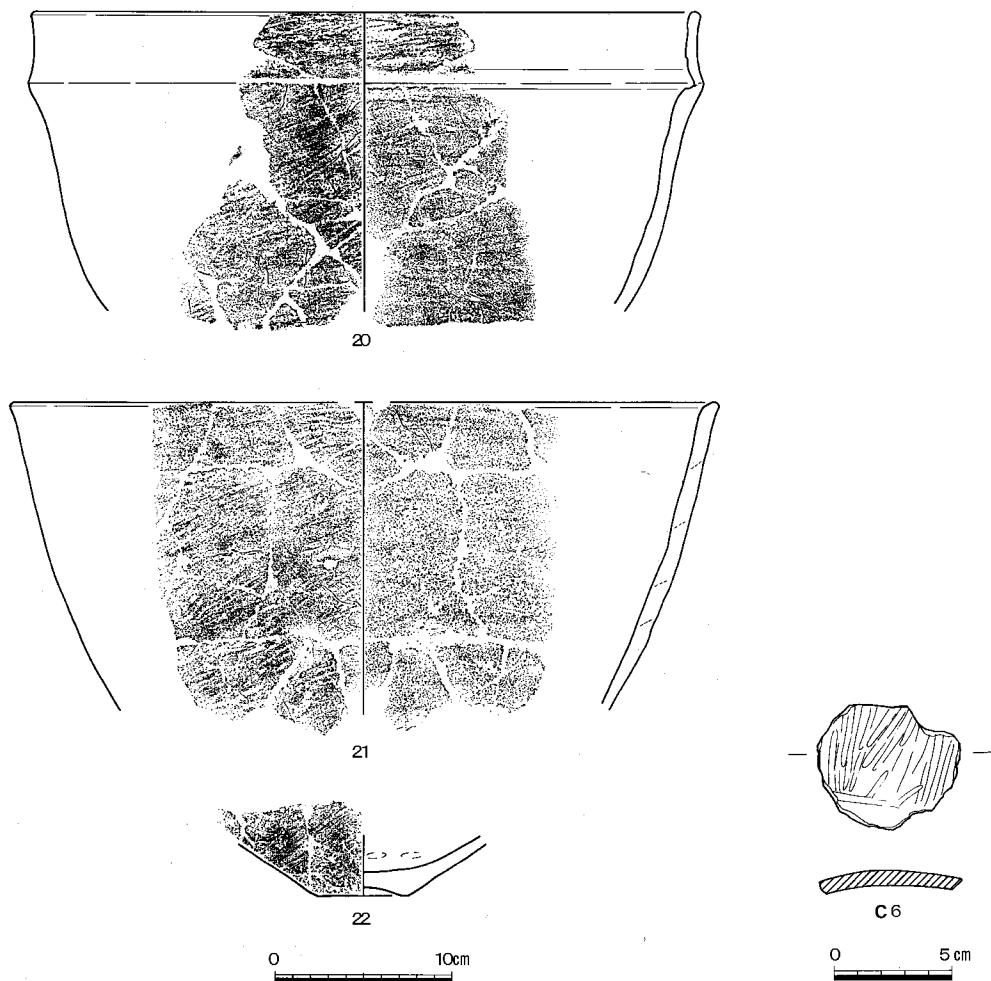
規模は長さ2.85m、幅2.43m、深さ18cmを測る。埋土は暗褐色砂質土で、土壌北西および南東から、深鉢を主体とする破片が拳大の礫に混じって出土した。また、C6の円盤状土製品も出土している。

20の口縁は類例に乏しいものの、21の形態や調整手法などから、これらの鉢は晩期前葉を示すものと考えられる。

(江見)



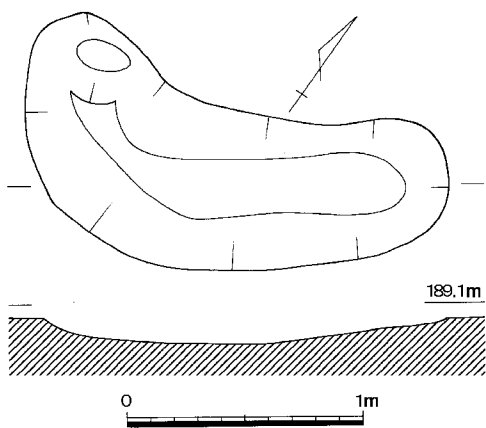
第36図 土壌8 (1/30)



第37図 土壌8出土遺物 (1/4, 1/3)

土壌9 (第17・38図)

土壌8を一部切って検出された不整楕円形を呈す土壌で長さ1.73m、幅90cm、深さ11cmを測り、西端からは円形を呈す。更に20cm余り掘り込まれた部分が検出された。埋土は暗褐色砂質土で、これに混じって縄文土器細片が出土したが、図示し得る遺物の出土は見られなかった。(江見)



第38図 土壌9 (1/30)

土壌10 (第18・39図、図版7)

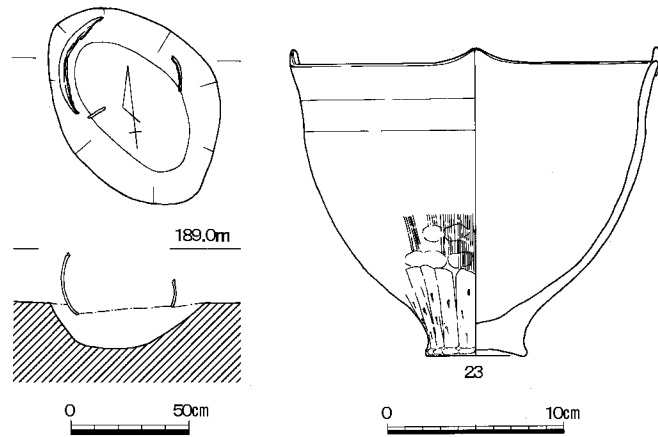
微高地2の土器溜まりや火処群から僅かに北に離れた4 004Cc区において検出した土器埋設の土壌である。

掘り方は深鉢23を入れる程度の小規模な物であった。土器内の内容物は確認できなかったものの、墓であった可能性がある。

時期は、晩期中葉と考えられる。(弘田)

土壌11 (第18・40図、図版7)

4 006Ce区から検出された、平面不整円形を呈す土壌である。規模は1.82×1.42m、深さ33cmを測る。埋土は2層からなり、底部は緩くカーブを描き、平坦ではない。遺物は浅鉢の破片が出土している。24は結節縄文の後沈線を巡らし、後期末葉の特徴を示す。25は口縁端部を上方に摘み出す晩期中葉のものと考えられ、24は混入と思われる。(江見)



第39図 土壌10 (1/30)・出土遺物 (1/4)

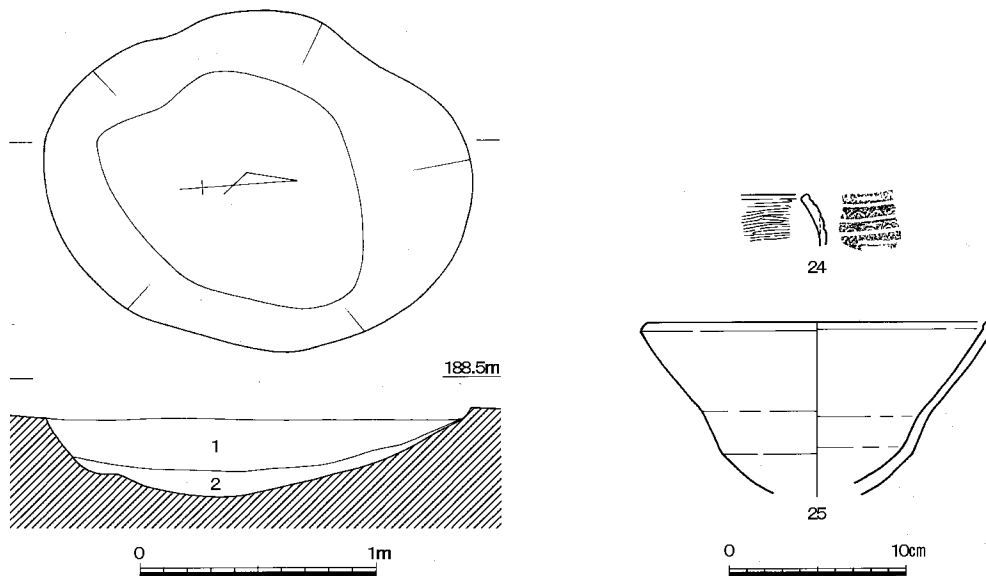
土壌12 (第18・41図、図版48)

土壌11の北5mから検出された比較的大形の不整円形を呈す土壌で規模は2.8×2.24m、深さ48cmを測る。埋土は2層からなり、これに混じって僅かながら土器細片が見られたが、特に土壌北東肩部からは耳飾りと考えられるC7が出土した。表面には黒漆が塗布されており、部分的に赤色顔料も確認された。周囲の状況から、晩期前葉の遺物と考える。(江見)

土壌13 (第18・42図)

河道1左岸にあたる4 003Ch区において検出した小規模な土壌である。出土したのは深鉢の口縁部26である。波状口縁となり、外面に1条沈線が巡る。波頂部から下は結節縄文がナデによって消されている。

この土壌の時期は、後期中葉の彦崎K II式併行と考えられる。(弘田)

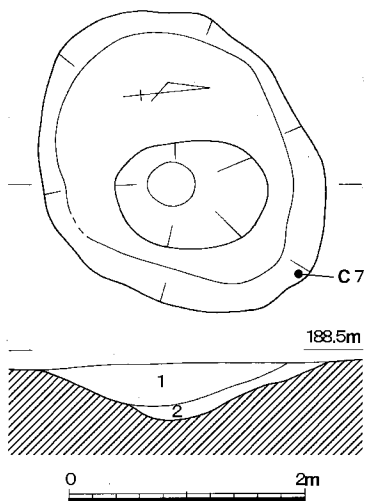


1 暗褐色砂質土 (粘性なし) 2 1に鈍黄褐色粗砂が混

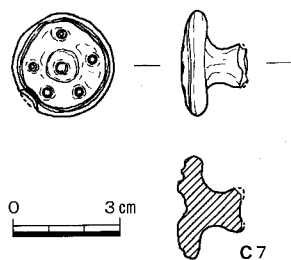
第40図 土壌11 (1/30)・出土遺物 (1/4)



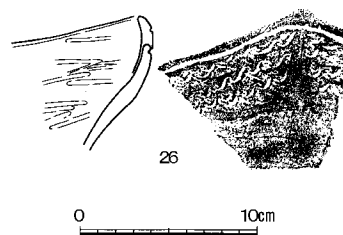
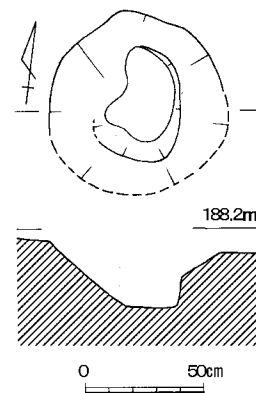
第3章 発掘調査の概要



1 暗褐色砂質土(粘性なし)  
2 1に鈍黄褐色粗砂が混



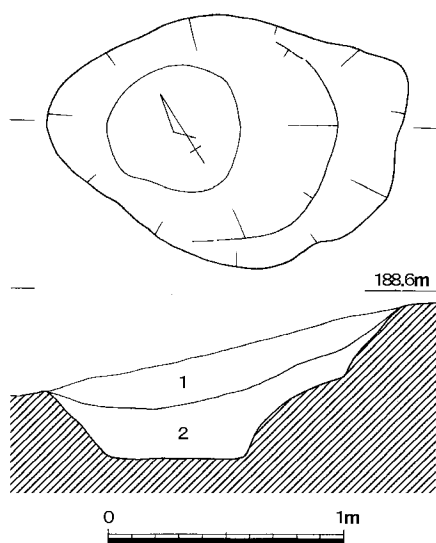
第41図 土壌12 (1/60)・出土遺物 (1/3)



第42図 土壌13 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌14 (第18・43図)

河道1左岸にあたる4 003Ch区において検出しており、西側上面は弥生時代の溝11・12によって削平を受けていた。



1 暗褐色粘性細砂 2 鈍黄褐色粘性細砂

第43図 土壌14 (1/30)

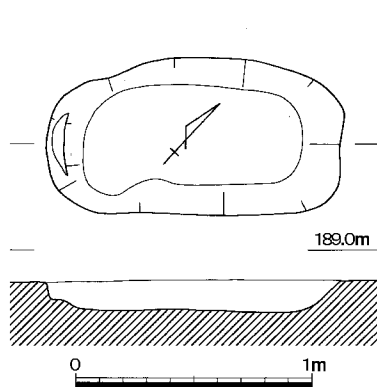
図化しうる程の遺物はみられないが、縄文晩期の遺構と考えられる。(弘田)

土壌15 (第18・44図)

4 003Cj区南東部分において検出され平面形は不整な隅丸長方形を呈した土壌である。長軸は北東-南西を示し、南西部にテラス状の段を有し、やや浅くなる。少し濃い目の暗褐色土が埋積する。土壌墓の可能性が有力である。出土遺物は皆無であった。(二宮治夫)

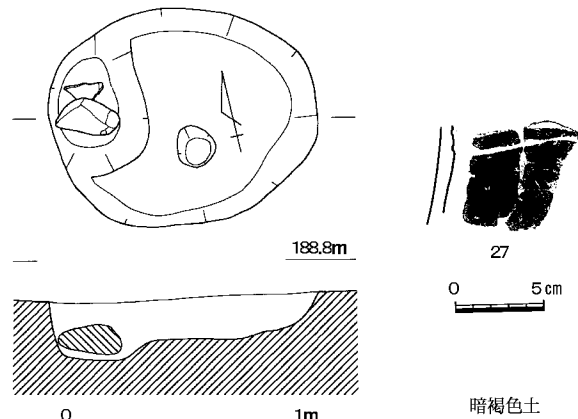
土壌16 (第18・45図)

土壌15から南へ約9mの位置で4 004Cj区で検出された土壌である。西側の底部には段差があり、人頭大の石がある。土壌の平面形は楕円形で、長軸1.15m、短軸90cm、深さ18~25cmを測る。土壌は暗褐色土で埋積し、埋土内より27の深鉢片が出土している。時期は、遺物、検出面から縄文時代と考えられる。(二宮)



暗褐色土 (少し濃い)

第44図 土壌15 (1/30)



暗褐色土

第45図 土壌16 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌17 (第18・46図)

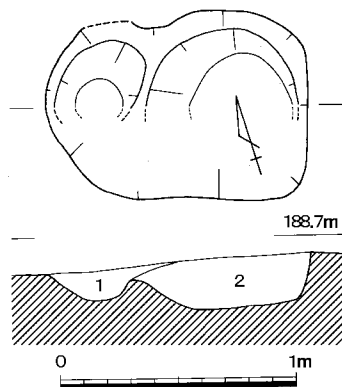
4 1 02 Cj区に位置し、溝5の東で河道1の法面で検出された。検出時の平面形は不整楕円形状を呈し、長軸1.12m、短軸78cmを測る。断面観察から大小の土塊が存在し、その形状は楕円形状を示し、深さは13cmと22cm。出土遺物はなく、検出面から推測し、縄文時代晩期が妥当であろう。(二宮)

土壌18 (第19・47図、図版7)

4 0 04 Da区で土壌16の約6 m東によった位置で検出された土壌である。検出時点での平面形態は不整楕円形状を呈するものであり、土壌17と類似している。規模は長軸1.12m、短軸55cm、最深部は中央部で26cmを測る。底面は不整形で凹凸をなしている。出土遺物はなかった。(二宮)

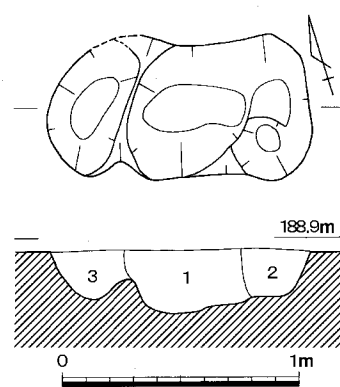
土壌19 (第19・48図、図版28)

土壌16からほぼ南6.5m下がった位置で、4 0 05 Cj区で検出された平面形態が隅丸長方形を呈する土壌で、東西に長軸を示す。規模は長軸1.64m、短軸1.17m、検出面からの深さ50cmを測り、平坦な底面ではほぼ垂直に立ち上がる壁面となっている。埋積土に混ざり数個の石も認められている。出土遺物には縄文土器片28、サヌカイト製の平基鏃S14の出土が認められている。(二宮)



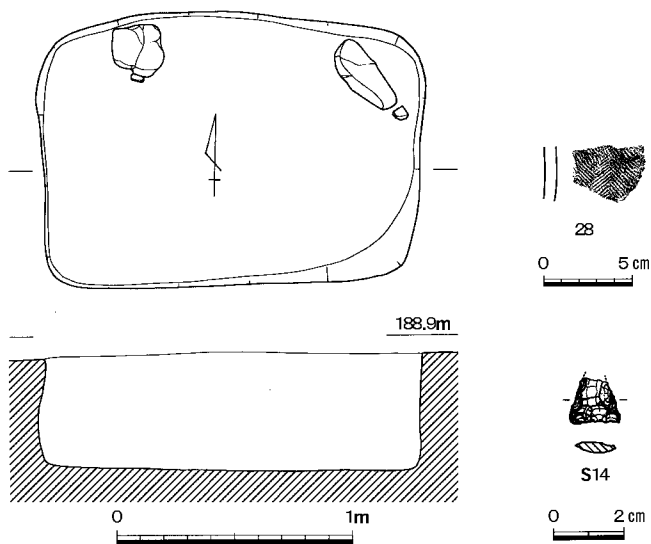
1 黒褐色砂質土  
2 暗褐色砂質土

第46図 土壌17 (1/30)



1 暗灰黄褐色土  
2 暗褐色土  
3 暗褐色土

第47図 土壌18 (1/30)



黄褐色弱粘質土・暗灰褐色弱粘質土・黒褐色弱粘質土のブロック含

第48図 土壌19 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2)

平面形は不整長方形を呈し、東西方向に長軸が向いている。規模は長軸4.05m、短軸1.2mを測り、検出面からの最深部は中央部にある。土壌の断面形態は、東側で一段目の掘り方が認められ徐々に段掘りを示し、ほぼ平坦な底面となすが中央部分で円形の深まりを呈し85cmを測る。 (二宮)

土壌22 (第19・51図)

4 008Dd区東寄りに位置した土壌で検出時の平面形態は、東西に長軸を示し、東部に丸みを示す長方形を呈する土壌である。規模は長軸が1.39m、短軸80cm、最深部で36cmを測る。検出された土壌の掘り方は、かなり不整形な掘削がなされ底面もかなり起伏の激しい形状を示す。 (二宮)

土壌23 (第19・52図、図版7)

4 008De区で土壌22の東に位置し約6m離れて検出された土壌である。

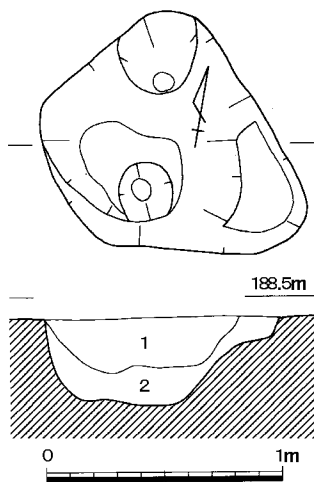
土壌20 (第19・49図)

土壌18よりさらに29m南方で4 007Da区やや南西よりに位置して検出された平面形が不整形を呈し、南西部に段を持つ。規模は長軸1.1m、短軸90cmを測る。検出面からの深さは36cmである。

土壌はほぼ逆台形状の掘り下げを行っていた。起伏がある底面をなし、南北に円形の窪みが出来上がっている。 (二宮)

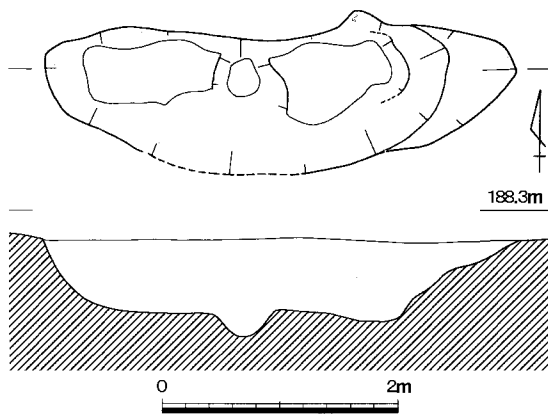
土壌21 (第19・50図)

土壌20のほぼ3.5m東に寄った位置で4 007Da・Db区南部に検出された土壌である。検出された



1 黒褐色弱粘質土 2 暗褐色弱粘質土 (細砂含)

第49図 土壌20 (1/30)



暗褐色弱粘質土

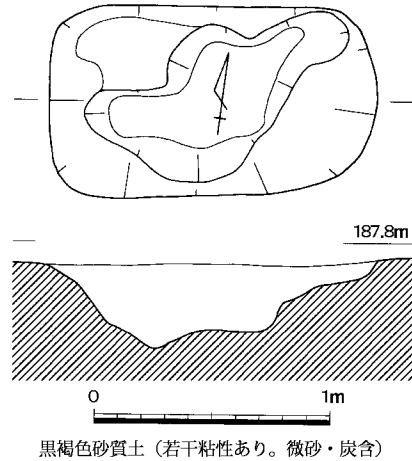
第50図 土壌21 (1/60)

土壙はほぼ東西に長軸を持ち、検出面での平面形は若干歪な長方形を呈し、その規模は長軸で1.36m、短軸87cm、深さ11cmと浅いもので、その断面形は皿形を呈する。埋土は暗褐色弱粘質土で黒褐色弱粘質土が混ざっていた。縄文土器片29が出土している。(二宮)

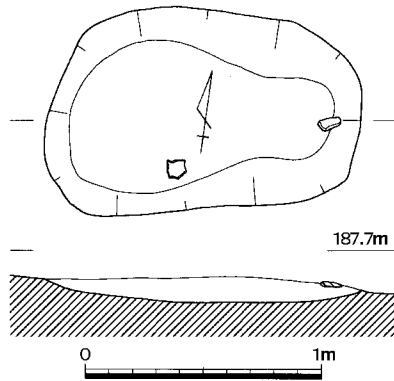
土壙24 (第19・53図)

4100Dc区の北西に位置した小形の土壙で、長軸をやや東に振った平面形が長楕円の形状を呈している。

検出された土壙の規模は長軸92cm、短軸62cm、深さ20cmを測る。断面形は内傾する掘り込みで、丸みをおび起伏のある底面で、黒褐色砂質土で埋積し、遺物の出土は見られなかった。(二宮)

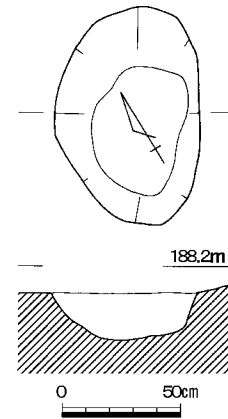


第51図 土壙22 (1/30)



暗褐色弱粘質土 (黒褐色弱粘質土混)

第52図 土壙23 (1/30)・出土遺物 (1/4)



黒褐色砂質土

第53図 土壙24 (1/30)

土壙25 (第19・54図)

4101Da区南西の河道1の肩部に近接する土壙で北西-南東に長軸を示している。

土壙の南東部が後世のピットに切られ長軸は不明、短軸は48cm、深さ24cmを測り、平面形は長楕円形を呈していたものと推測できる。底面はほぼ平坦、黒褐色砂質土で埋積する。(二宮)

土壙26 (第19・55図)

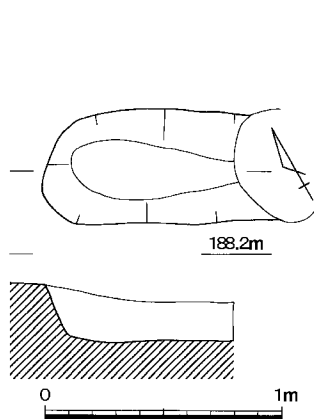
4102Db区で河道1東斜面10m東に位置して検出された小形の平面形が楕円形を呈した土壙である。検出された土壙の規模は長軸74cm、短軸50cm、深さ35cmを測る。土壙の掘り方は逆「ハ」字状の壁面をなし、若干丸みをおびた底面に仕上げ、黒褐色砂質土が堆積している。(二宮)

土壙27 (第19・56図)

4102Db区北辺で土壙26の約1m東に位置し、土壙26と同方向に長軸を示した土壙である。

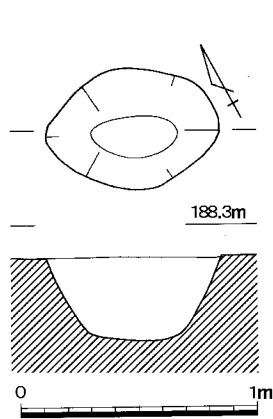
検出された土壙の平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸88cm、短軸65cm、下層に45×30cmの楕円形の掘り込みを確認し、深さは48cmであった。断面形から壁面は南東側は緩やかで北西はかなり急な傾斜を示している。埋土は黒褐色砂質土が堆積、出土遺物は見当たらなかった。(二宮)

第3章 発掘調査の概要



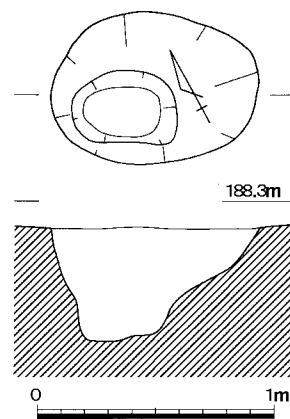
黒褐色砂質土

第54図 土壌25 (1/30)



黒褐色砂質土

第55図 土壌26 (1/30)



黒褐色砂質土

第56図 土壌27 (1/30)

土壌28 (第19・57図)

4 102Dc区北西部に位置し、河道4肩部11m西で検出した土壌である。検出した土壌は平面形が不整長方形を呈し長軸が1.13m、短軸78cm、深さは15cmを測る。土壌の底面は南西部にほぼ平坦面を持ち北東部の窪む形状を示し、壁面は逆「ハ」字状に立ち上がる。出土遺物は認められない。(二宮)

土壌29 (第19・58図)

4 102Dc区で土壌28の南東約3.5mの位置で検出した平面形が不整楕円形の土壌である。

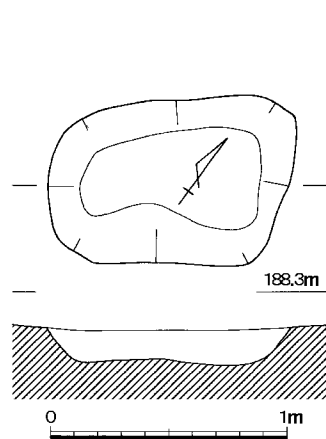
規模は長軸82cm、短軸68cm、深さは25cmを測り、底部は丸く仕上げる。

埋土、検出状況から判断し、土壌の時期は縄文時代晩期と考えたい。(二宮)

土壌30 (第19・59図)

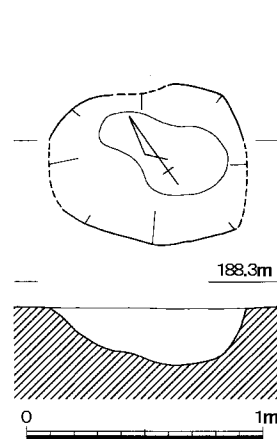
4 103Dd区で土壌29の7m南西、河道4の肩部に隣接して検出されている土壌である。

平面形は楕円形で、土壌の西にほぼ円形の張り出しがつくが、同一の遺構と考える。検出面での規模は長径1.09m、短径97cm、最深部で29cmを測り、断面形は「V」字状をなす。埋土は茶褐色弱粘質土で、土壌29と異なった土質であった。出土遺物は確認されなかった。(二宮)



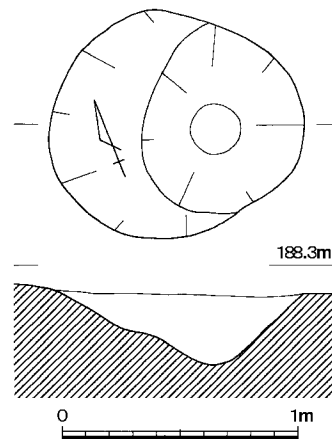
暗褐色砂質土

第57図 土壌28 (1/30)



暗褐色砂質土

第58図 土壌29 (1/30)



茶褐色弱粘質土

第59図 土壌30 (1/30)

土壌31 (第19・60図)

4 1 01 D d区中程で、土壌29の北東10.5mかつ河道4の西に位置する土壌である。

検出された土壌は楕円形を呈し、規模は長軸1.60m、短軸1.15m、深さ27cmを測った。

土壌の底面は北東側が高く南西に低い段状を呈する。埋土は暗茶褐色弱粘質土で、遺物は確認できなかった。(二宮)

土壌32 (第20・61図)

4 1 03 C c区において検出した。平面形は58×52cmの楕円形で、深さは10cm残存していたにすぎない。底面には凹凸があり、埋土は赤褐色砂質土であった。

遺物は出土していないが、検出面から時期は縄文時代後晩期と考えている。(平井)

土壌33 (第20・62図)

4 1 03 C c区において検出した。平面形は75×65cmの不整楕円形で、深さは17cm残存していた。底面には凹凸があり、埋土は暗赤褐色砂質土が一層のみである。時期は縄文時代後晩期と考えられる。検出状況から、土壌32と類似しており、いずれも火処であった可能性がある。(平井)

時期は縄文時代後晩期と考えられる。(平井)

土壌34 (第20・63図)

4 1 05 C f区において検出した。平面形は110×80cmの不整楕円形で、深さは20cm残存していた。断面形は不整形で、埋土は黒褐色砂質土が一層のみであった。人為的な遺構かどうか不明確であるが、時期は縄文時代後晩期と考えられる。(平井)

土壌35 (第20・63図)

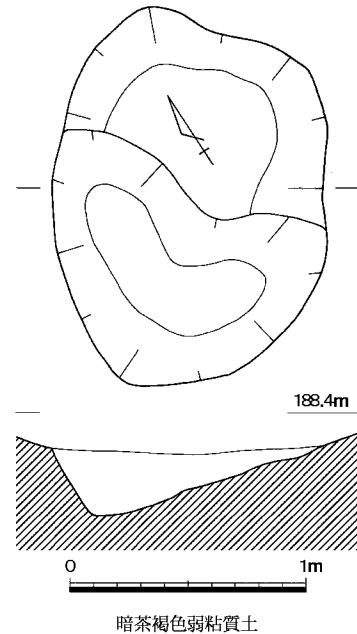
4 1 05 C f区において、土壌34に切られるかたちで検出された。平面形は160×90cmの不整形で深さは35cm残存していた。断面形は不整形で、埋土は褐灰色砂質土が一層のみであった。

平面形や断面形の形状から、土壌34と同じく人為的な遺構かどうか不明確であるが、時期は縄文時代後晩期と考えられる。(平井)

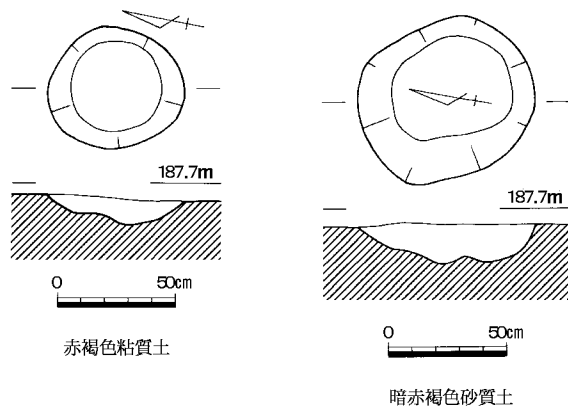
土壌36 (第20・64図)

4 1 06 C f区において検出した。西側がトレンチで切られたため長さは不明で、幅は90cm、深さは27cm残存していた。断面形は不整形で、埋土は褐灰色砂質土が一層のみであった。

平面形や断面形が不整形であることから、人為的な遺構ではないかも知れない。遺物は出土していないが、検出面や埋土の状況から、時期は縄文時代後晩期と考えている。(平井)



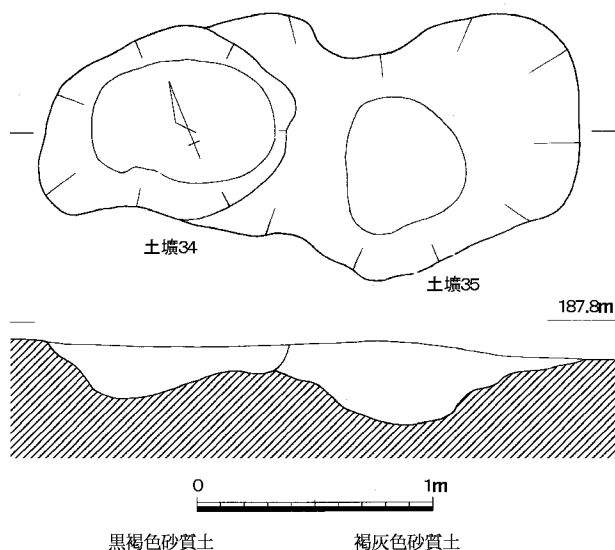
第60図 土壌31 (1/30)



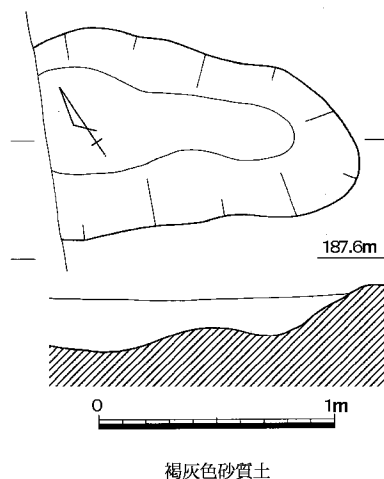
第61図 土壌32 (1/30)

第62図 土壌33 (1/30)

第3章 発掘調査の概要



第63図 土壌34・35 (1/30)



第64図 土壌36 (1/30)

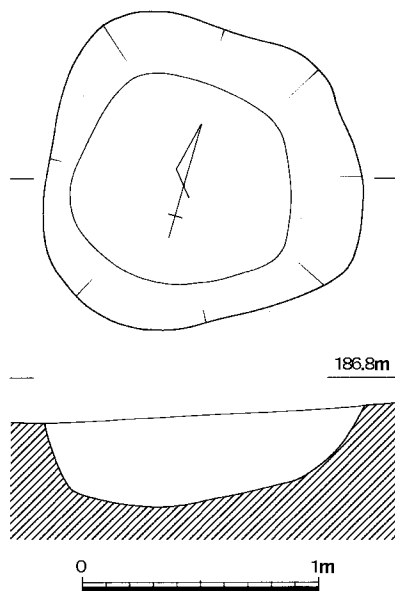
土壌37 (第20・65図)

4 109Cd区のほぼ中程に位置して検出された不整形形状を呈する土壌である。規模は長径1.38m、短径1.37m、検出面からの深さは42cmを測る。

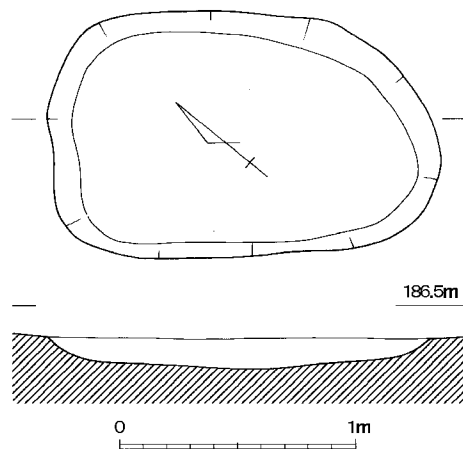
埋積土、検出面などの状況から判断して、土壌の時期は縄文時代晩期と考えられる。 (二宮)

土壌38 (第20・66図)

4 109Cd区で土壌37から南西約4mの位置で検出された、平面形態が楕円形を呈する土壌である。その規模は長軸1.67m、短軸1.07mを測り、検出面からの深さは12cmと浅く、底面は起伏がある。土壌の埋積土や検出状況から、時期は縄文晩期と考えられる。 (二宮)



第65図 土壌37 (1/30)



第66図 土壌38 (1/30)

土壌39 (第20・67図、図版2・7)

4 200Ce区の北西部で検出し、土壌37のほぼ南8.5mに位置している土壌で平面形は円形を呈する。規模は54×58cmを測り、検出面からの深さは4cmと非常に浅く残りの悪い土壌である。

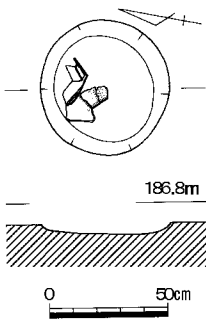
口径44.8cmを測る深鉢30は口縁部が波状をなし、外面には爪形文と刺突文を縦位に飾る。体部と口頸部の間には逆「C」字の爪形文を巡らす。時期は縄文晩期中葉に属するものと思われる。(二宮)

土壌40 (第21・68図)

4 106Cg区において検出した。平面形は131×83cmの不整楕円形で、深さは30cm残存していた。断面形も不整形で、人為的な遺構ではないかも知れない。遺物は出土していないが、検出面や埋土の状況から時期は縄文時代後晩期と考えている。(平井)

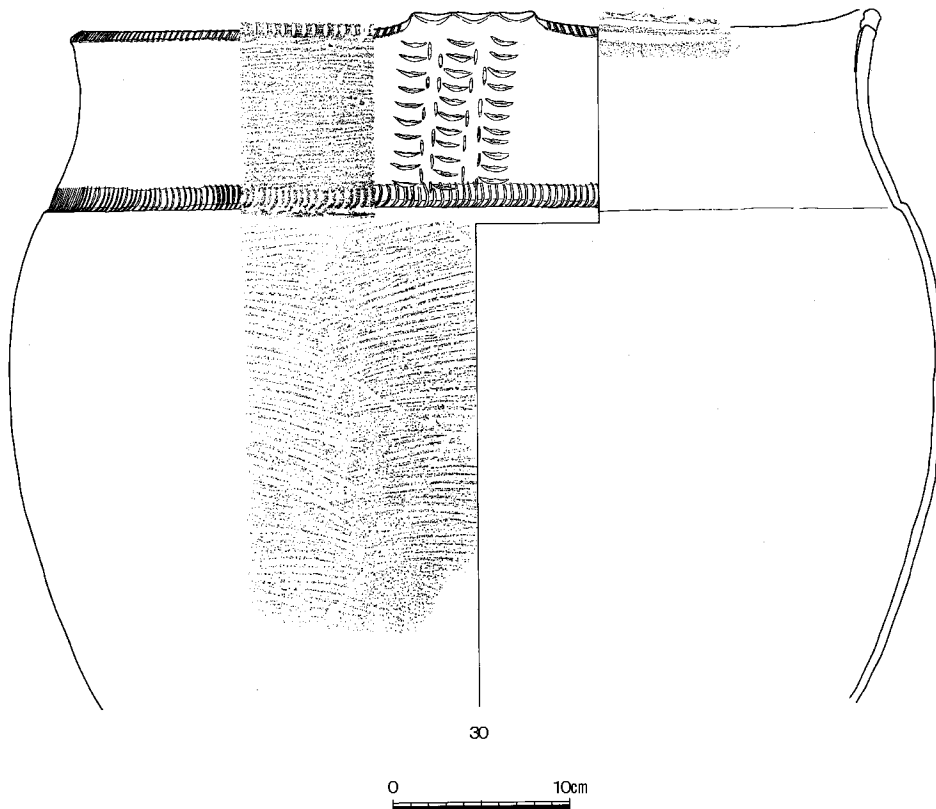
土壌41 (第21・69図)

4 107Cg区において検出した。平面形は長楕円形で、西端部が新しい遺構で切られているため長さは不明だが、幅48cmで、深さは17cm残存していた。時期は縄文時代後晩期と考えている。(平井)



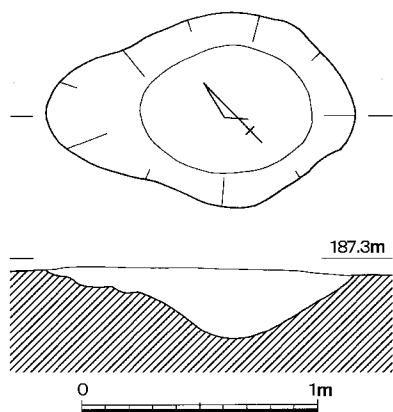
土壌42 (第21・70図、図版28)

4 106Cg区において検出した。平面形は1.81×1.24mの不整楕円形で、深さは43cm残存していた。底面には凹凸があり、埋土中からサヌカイト製のスクレイパー(S15)が出土している。時期は検出面や埋土から縄文時代後晩期と考えている。(平井)



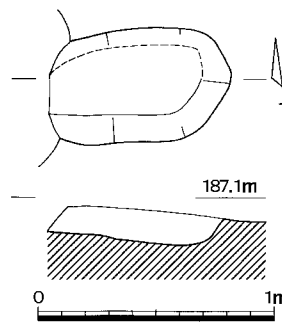
第67図 土壌39 (1/30)・出土遺物 (1/4)





黄褐～灰褐色土（粒子が細かく粘性を僅に帯びる。暗褐色土塊含）

第68図 土壌40 (1/30)



褐灰色砂質土

第69図 土壌41 (1/30)

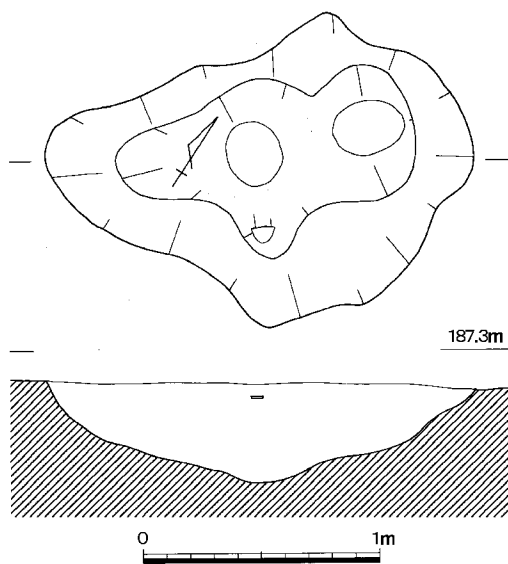
土壌43 (第21・71図、図版2・7)

4 108Cg区において検出した。平面形は62×58cmのほぼ円形で、深さは24cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は褐灰色砂質土が一層のみであった。

埋土中からは土器が出土した。32はある程度全体の器形がわかる深鉢で、口縁部と胴部の境に強いヨコナデを施しているのが特徴である。内面調整はナデ、外面調整は磨滅しているが二枚貝条痕ではなかろうか。33は浅鉢で、口縁部外面に沈線文がある。時期は縄文時代晩期である。 (平井)

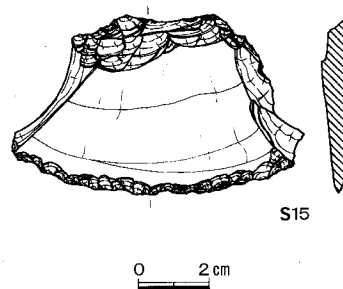
土壌44 (第21・72図)

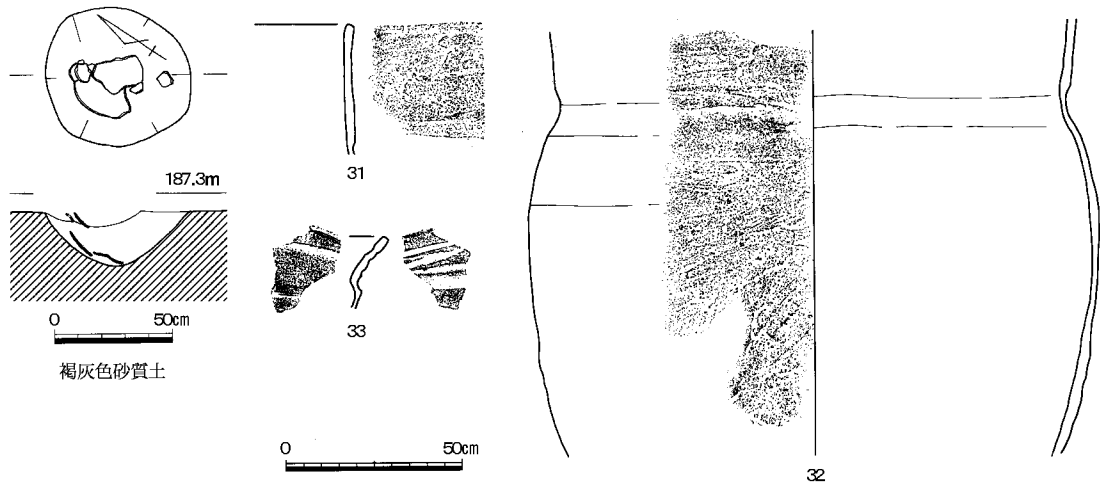
4 108Cg区において検出した。平面形は105×77cmの長楕円形で、深さは52cm残存していた。断面形は「U」字形で、埋土は褐灰色砂質土が一層のみであった。埋土中から土器の小片が出土しており、時期は縄文時代晩期と考えられる。 (平井)



暗褐色土

第70図 土壌42 (1/30)・出土遺物 (1/2)





第71図 土壙43 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙45 (第21・73図、図版7)

4 108Ch区において検出した。平面形は90×73cmの不整形形で、深さは11cm残存していた過ぎない。埋土中から浅鉢の破片(34)が出土している。口縁部外面に沈線文と刺突文を施すとともに、赤色顔料が観察できるのが特徴である。時期は縄文時代晩期である。(平井)

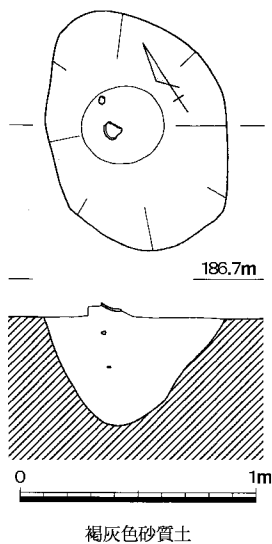
土壙46 (第21・74図、図版7)

4 107Ch区において検出した。平面形は3.84×2.79mの不整形形で、深さは50cm残存していた。断面形は不整形で、埋土は三層に分離することができた。

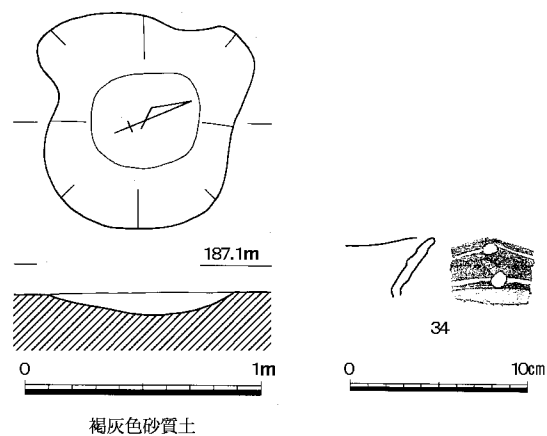
出土土器は図示したように、おもに上面から面的に出土した。35は深鉢で、内外面とも巻貝条痕のち横方向のミガキで仕上げている。また口縁部と胴部の境には凹線文が施されている。また37の口縁部内側に沈線による刻み目が施されているのも特徴で、時期は縄文時代後期末葉である。(平井)

土壙47 (第21・75図)

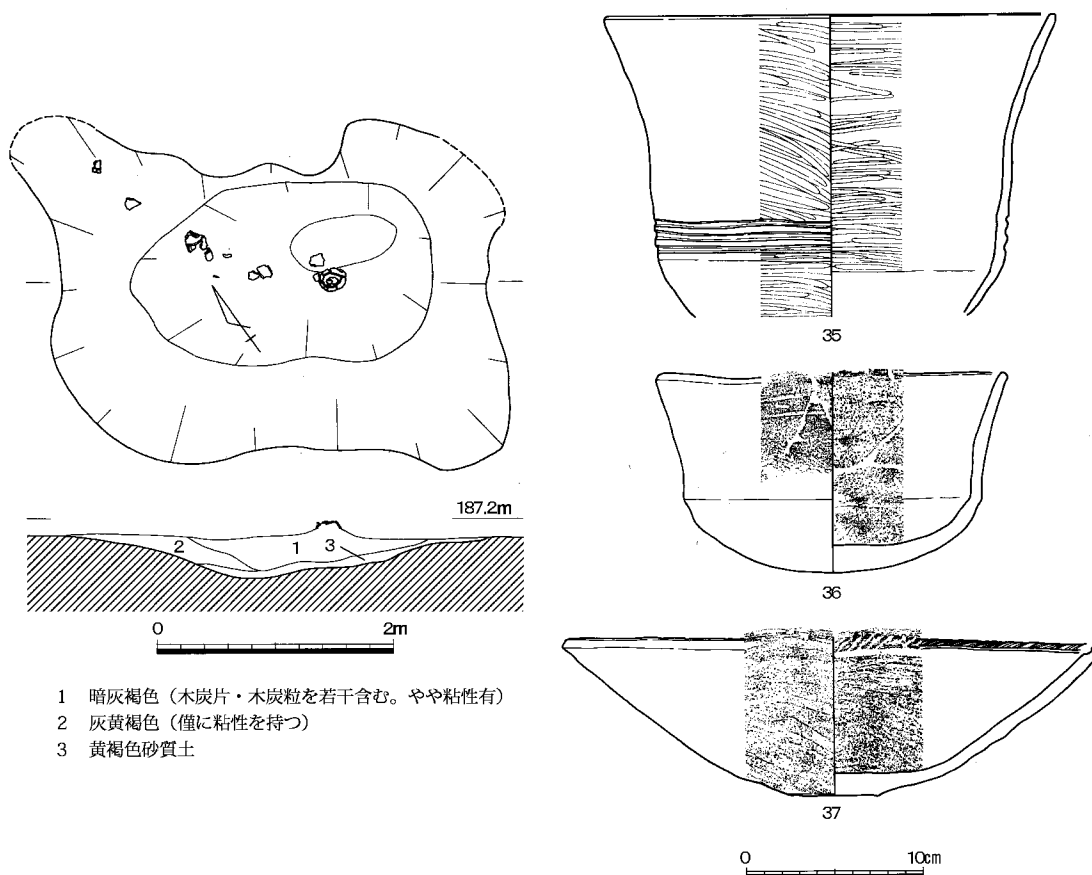
河道4に交叉する溝6を切って4 103Dc区南東隅に検出された不整形円形の平面形を示した土壙



第72図 土壙44 (1/30)



第73図 土壙45 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 暗灰褐色（木炭片・木炭粒を若干含む。やや粘性有）
- 2 灰黄褐色（僅に粘性を持つ）
- 3 黄褐色砂質土

第74図 土壌46（1/60）・出土遺物（1/4）

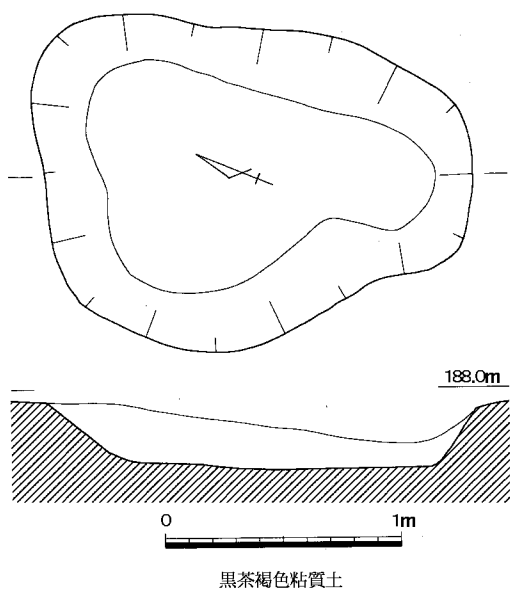
である。長軸はほぼ東西方向を示す。規模は長軸1.81m、短軸1.38m、深さは29cmを測り、土壌底面は比較的平坦な作りとなっている。黒茶褐色粘質土で埋積する。出土遺物は皆無である。（二宮）

土壌48（第21・76図）

4 104Dc区で土壌47の南西にあたり河道4の西3.5mの位置で検出された不整楕円形の形状の土壌で、壙底の起伏が著しく平坦ではない。形状から人工的な遺構との判断は困難である。植生の痕跡の可能性も考えられる。黒褐色を呈する弱粘質土が埋積し、出土遺物は皆無である。（二宮）

土壌49（第21・77図）

4 105Dc区において検出した。平面形は106×99cmのほぼ円形で、深さは24cm残存していた。断面形は不整形で、埋土は褐灰色弱粘質土が一層のみであった。底面には凹凸が見られ、人為的な遺構ではないかも知れない。遺物は出土しなかったが、検出面や埋土の状況から時期は縄文時代後晩期と考えている。（平井）



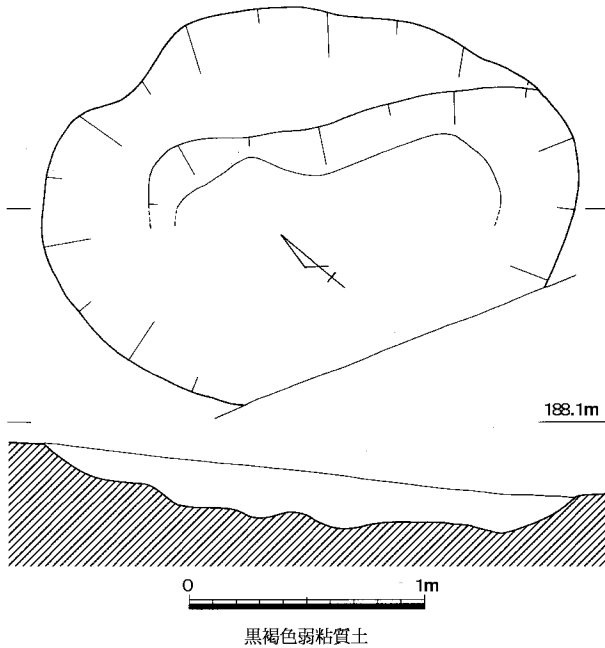
第75図 土壌47（1/30）

土壌50 (第21・78図)

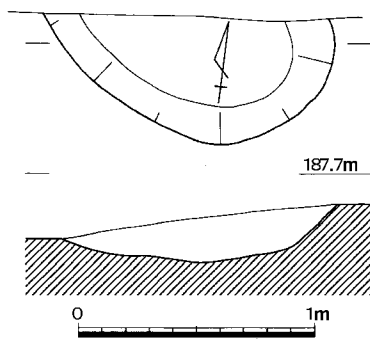
4 1 06Da区において検出した。平面形は北側がトレンチで切られているため不明だが、おそらく楕円形で、深さは23cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は暗褐灰色砂質土が一層のみであった。時期は検出面や埋土から縄文時代後晩期と考えている。(平井)

土壌51 (第21・79図)

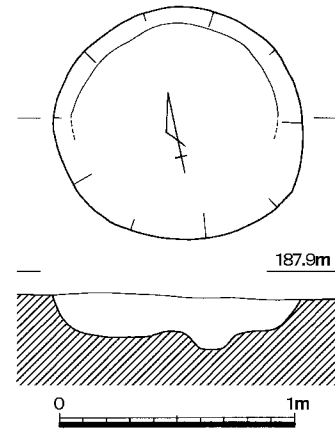
4 1 07Da区において検出した。平面形は約2×1.6mの不整楕円形で、深さは19cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は二層に分離できた。遺物は出土しなかったが、検出面や埋土から時期は縄文



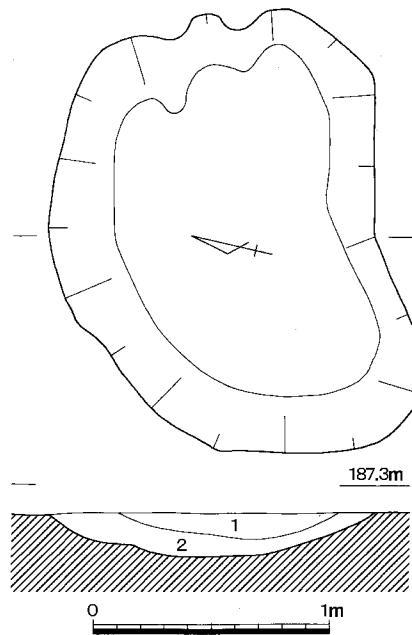
第76図 土壌48 (1/30)



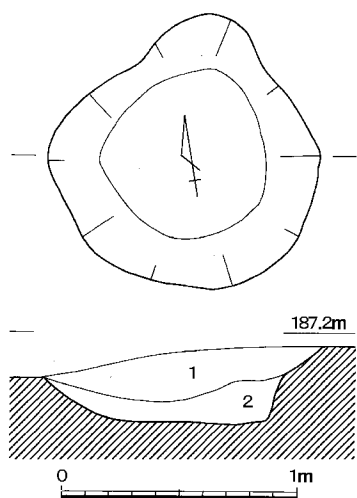
第78図 土壌50 (1/30)



褐色色弱粘質土 (炭片含)  
第77図 土壌49 (1/30)

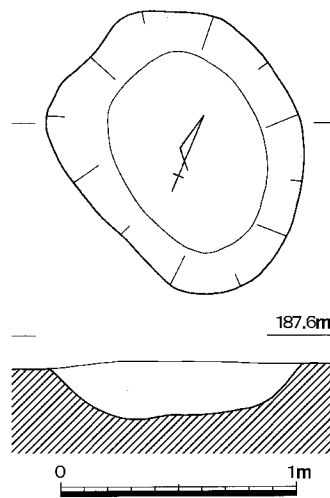
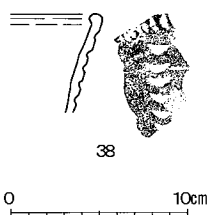


1 暗灰褐色砂質土 2 褐灰色砂質土  
第79図 土壌51 (1/30)



1 暗灰褐色砂質土 2 灰黄褐色砂質土

第80図 土壌52 (1/30)・出土遺物 (1/4)



暗褐灰色砂質土

第81図 土壌53 (1/30)

時代後晩期と考えている。

(平井)

土壌52 (第21・80図、図版7)

4 1 07 Da区に位置する。平面形は直径約1.2mの不整形円で、深さは33cm残存していた。断面形は不整形で、埋土は二層に分離できた。

38は深鉢の口縁部の破片で、突起部分に当たる。口唇部に刻み目を施し、外面には縦方向に爪形文が刺突されている。時期は縄文時代晩期中葉である。

(平井)

土壌53 (第21・81図)

4 1 07 Db区において検出した。平面形は約1.2×1 mの不整形楕円形で、深さは25cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は暗褐灰色砂質土が一層のみであった。遺物は出土しなかったが、検出面や埋土から時期は縄文時代後晩期と考えている。

(平井)

## 5 火処

火処 1 (第16・82図、図版4)

浅い土壙状の掘り込みをなし、その上面が焼けていた。土壙底部は2つに分かれその片側は炭が充填していた。また、被熱面上に土器底部片がみられた。

時期は、周辺の遺構と出土遺物から判断して晩期中葉の可能性が高い。

(弘田)

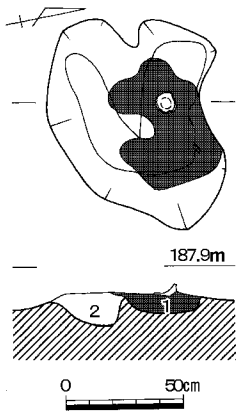
火処 2・3 (第17・83・84図)

4 0 05 Bj区に位置する。縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土の掘り下げ中に検出され、火処4～8と同様に土器溜まり2を調査中に発見された遺構群である。土器溜まり2とは有機的な関係を有すると考えられる。

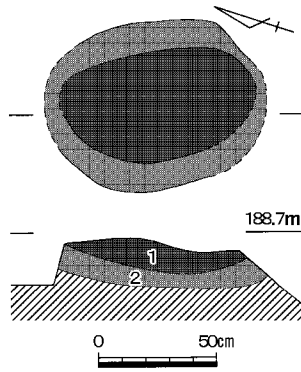
(河合)

火処 4～8 (第17・85～89図)

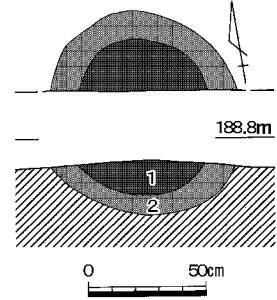
4 0 05 Bj～Ca区に位置する。縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土の掘り下げ中に検出され、火処2・3と同様に土器溜まり2を調査中に発見された遺構群である。火処はそれぞれ50cm強の大きさであり、不整形の火処7は2個分が接したものと考えられる。これらの火処は土器溜まり2の



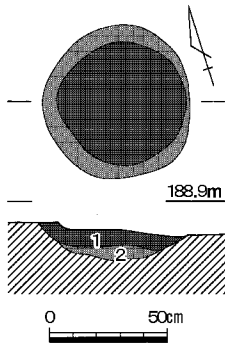
1 淡灰褐色土  
2 淡黒灰色土(炭層)  
第82図 火処 1 (1/30)



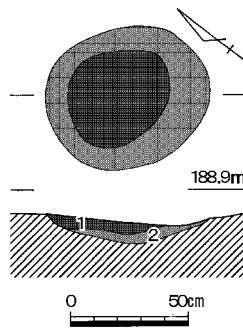
1 鈍赤褐色(被熱)  
2 暗赤褐色(被熱影響)  
第83図 火処 2 (1/30)



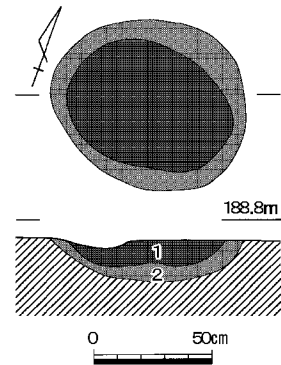
1 鈍赤褐色(被熱)  
2 暗赤褐色(被熱影響)  
第84図 火処 3 (1/30)



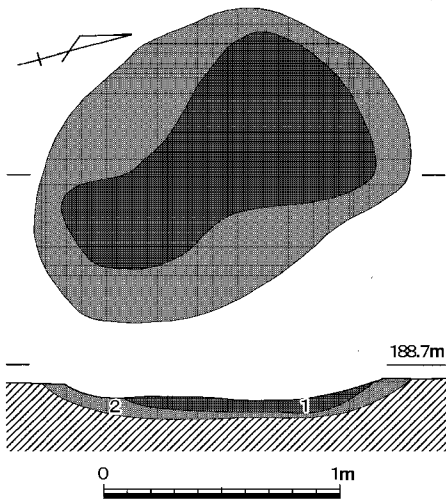
1 鈍赤褐色(被熱)  
2 暗赤褐色(被熱影響)  
第85図 火処 4 (1/30)



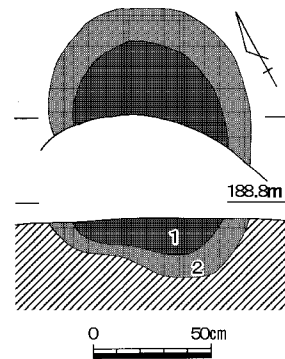
1 鈍赤褐色(被熱)  
2 暗赤褐色(被熱影響)  
第86図 火処 5 (1/30)



1 鈍赤褐色(被熱)  
2 暗赤褐色(被熱影響)  
第87図 火処 6 (1/30)



1 鈍赤褐色(被熱) 2 暗赤褐色(被熱影響)  
第88図 火処 7 (1/30)



1 鈍赤褐色(被熱)  
2 暗赤褐色(被熱影響)  
第89図 火処 8 (1/30)

第3章 発掘調査の概要

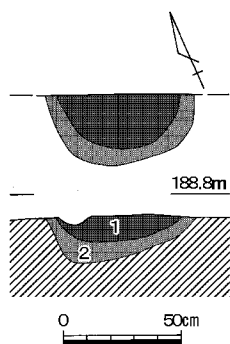
中でも遺物が集中して出土した土器溜まり2-A・B付近から出土しており、有機的な関係を有するものと考えられる。(河合)

火処9～21 (第17・90～102図)

4 0 05・06 C a区に位置する。縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土の掘り下げ中に検出され、土器溜まり3を調査中に発見された遺構群である。火処はそれぞれ50cm強の大きさが平均的なものであるが、不整形の火処10・11・20および21は2個分が接したものと考えられる。このうち、火処11・12・14～18は一列に配置されているようにもみえるが、意図的なものであるかは不明である。これらの火処は土器溜まり3と同様の広がりをもっており、上述した火処2～8と同様に土器溜まりとの有機的な関係が考えられる。その時期的な問題のみならず、土器溜まりの性格を考えていく上でも重要な情報を提供するものと考えられる。(河合)

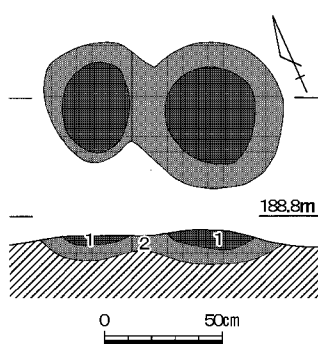
火処22・23 (第17・103・104図)

微高地2の北部中央から検出された。火処22は径50×35cm、厚さ8cmの平面楕円形を呈す被熱部分が検出された。火処22の東7mから検出された火処23は径50×40cm、厚さ3cmの不整形円形を呈す被熱部分が検出された。いずれも周囲の状況から晩期前葉のものと考えられる。(江見)



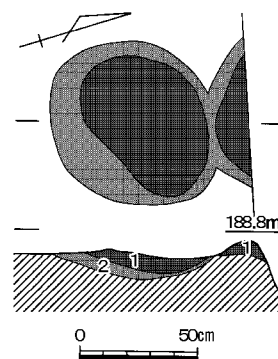
- 1 鈍赤褐色 (被熱)
- 2 暗赤褐色 (被熱影響)

第90図 火処9 (1/30)



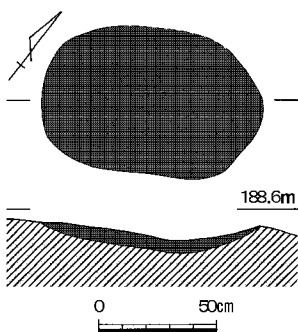
- 1 鈍赤褐色 (被熱)
- 2 暗赤褐色 (被熱影響)

第91図 火処10 (1/30)



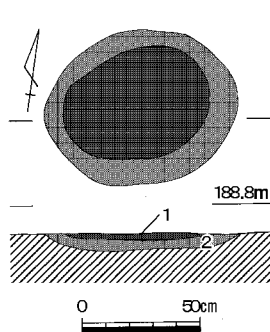
- 1 鈍赤褐色 (被熱)
- 2 暗赤褐色 (被熱影響)

第92図 火処11 (1/30)



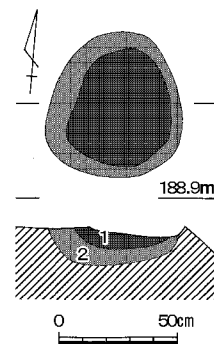
- 鈍赤褐色 (被熱)

第93図 火処12 (1/30)



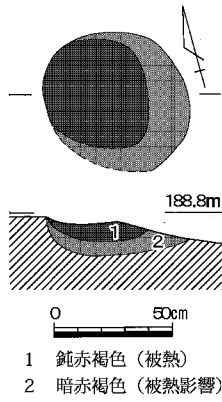
- 1 鈍赤褐色 (被熱)
- 2 暗赤褐色 (被熱影響)

第94図 火処13 (1/30)



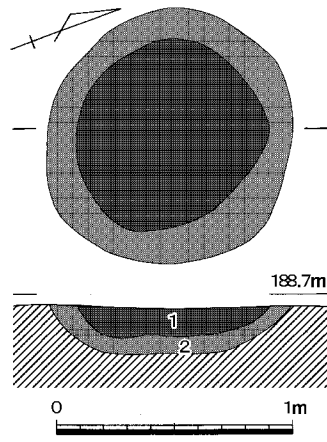
- 1 鈍赤褐色 (被熱)
- 2 暗赤褐色 (被熱影響)

第95図 火処14 (1/30)



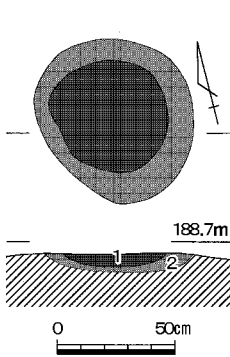
第96図 火処15 (1/30)

- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)



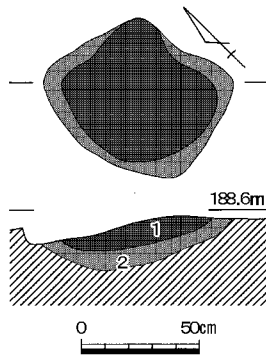
第97図 火処16 (1/30)

- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)



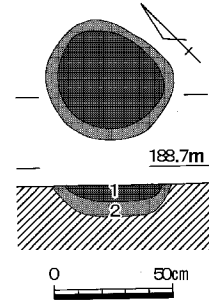
第98図 火処17 (1/30)

- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)



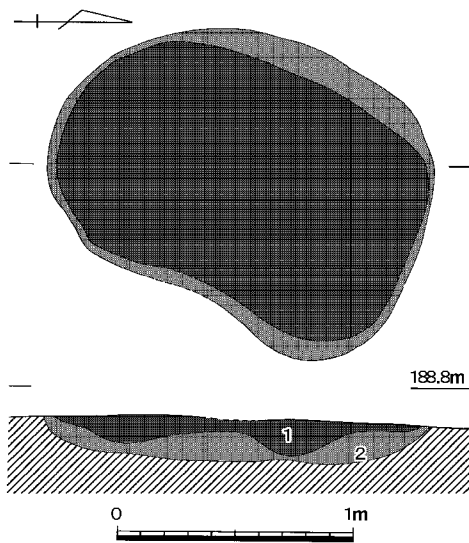
第99図 火処18 (1/30)

- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)



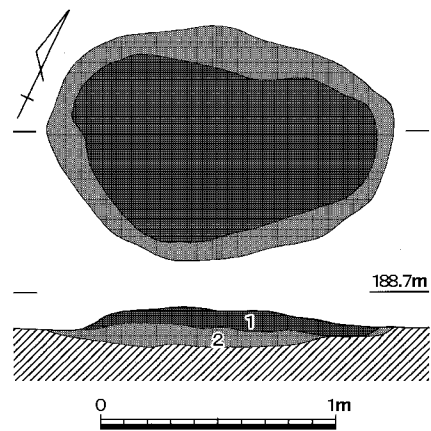
第100図 火処19 (1/30)

- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)



第101図 火処20 (1/30)

- 1 鈍赤褐色 (被熱)      2 暗赤褐色 (被熱影響)

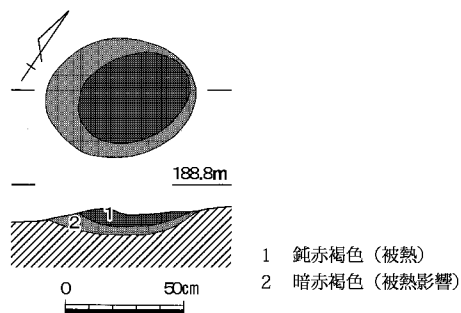


第102図 火処21 (1/30)

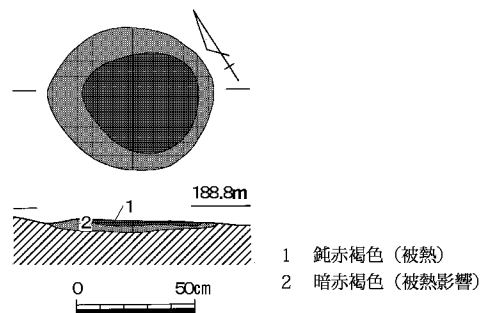
- 1 鈍赤褐色 (被熱)      2 暗赤褐色 (被熱影響)



第3章 発掘調査の概要



第103図 火処22 (1/30)



第104図 火処23 (1/30)

火処24~26 (第17・105~107図)

火処23の南4m、後述する土器溜まり5の範囲から検出された。火処24・25は被熱部分が径約60cm、厚さ2~4cmでほぼ同規模であったが、火処25の南から検出された火処26は比較的広い範囲にわたって被熱部分が認められたもので径約90cm、厚さ約5cmを測る。いずれも被熱部分は鈍赤褐色を呈す。

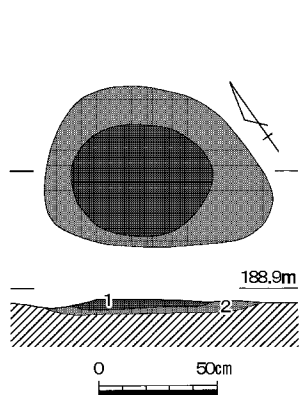
共伴遺物はないが、土器溜まり5の範囲に収まっていることや周辺の遺物出土状況から、これら火処は晩期前葉に伴った可能性が高い。(江見)

火処27~29 (第17・108~110図)

4 0 07・08 Bj区に位置する。縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土の掘り下げ中に検出された遺構である。これらは周囲に明瞭な土器溜まりの形成は認められないものの、火処2~21と同じ面から検出されており、周辺に散布している遺物も土器溜まり2・3と同時期の所産である。(河合)

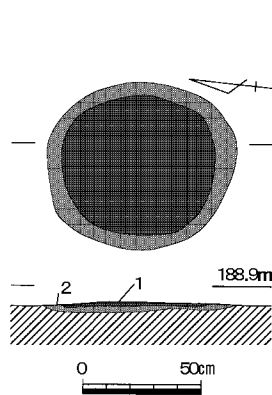
火処30・31 (第17・111・112図、図版28)

30・31ともに河道3の東側、現在の吉井川に緩やかに向かって下る斜面部の4 1 01 Bi区に位置し、第220図の第28層(突帯文土器を含む)を除去した後に検出している。楕円形で浅く皿状を呈する土壌を穿ち、埋土中には炭を含むが、それ以外に遺物の出土はみられなかった。土壌上面が焼けていたが、熱影響は砂層がベースによるためかあまり顕著ではなかった。検出層位からみて、時期はともに晩期の所産と考えられる。また、火処30に接して、片岩製の石鍬S 16が出土している。(弘田)



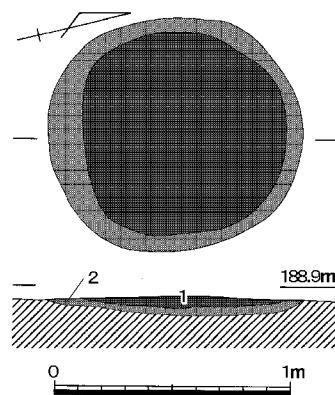
1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第105図 火処24 (1/30)



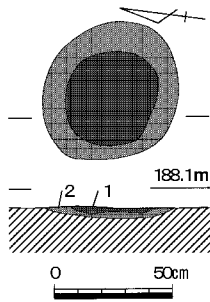
1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第106図 火処25 (1/30)



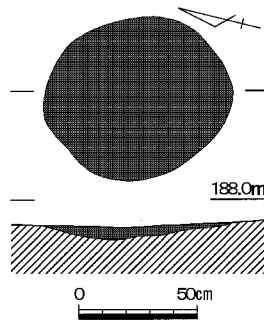
1 鈍赤褐色 (被熱) 2 暗赤褐色 (被熱影響)

第107図 火処26 (1/30)



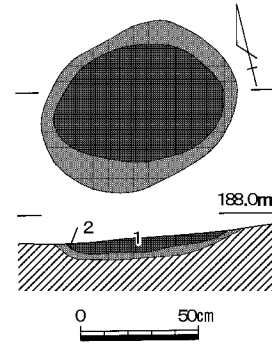
1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第108図 火処27 (1/30)



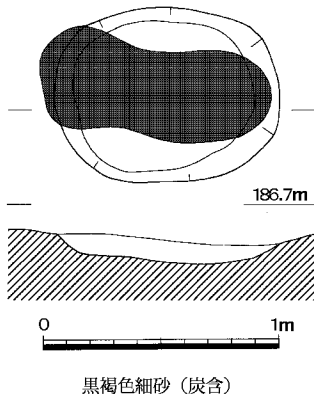
鈍赤褐色 (被熱)

第109図 火処28 (1/30)



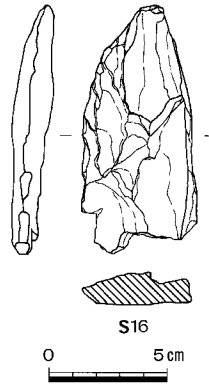
1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第110図 火処29 (1/30)

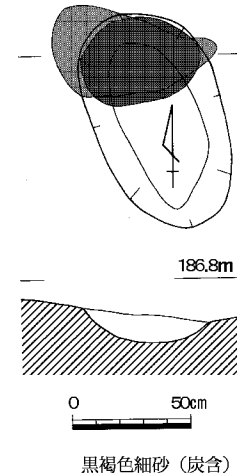


黒褐色細砂 (炭含)

第111図 火処30 (1/30)・周辺出土遺物 (1/3)



S16



黒褐色細砂 (炭含)

第112図 火処31 (1/30)

火処32～39 (第17・113～120図、図版4)

土壇8の南西、後述する土器溜まり7の範囲から検出された。被熱部分の平面形態は楕円形あるいは不整形円形を呈し、その範囲は最小で火処36の径45×35cm、最大で火処33の径85×75cmを測る。厚みは10cm余りを残すものが多く、前述した火処24～27の被熱影響部分の厚さと比較しても、これら火処はかなりの熱を受けたものと想像され、特に火処34の被熱の厚さは約15cmを測るものであった。

相伴遺物は認められなかったが、土器溜まり7の範囲に収まっていることや周辺の遺物出土状況から、これら火処は晩期前葉に伴った可能性が高い。(江見)

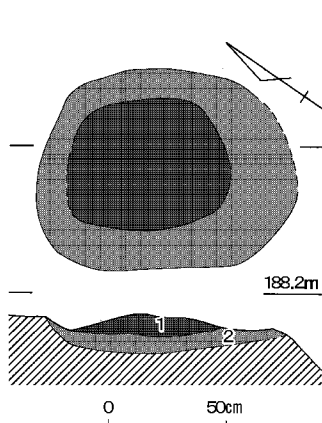
火処40 (第18・121図)

微高地2の中央東寄り、4 008Ce区から検出された。平面楕円形を呈し比較的広い範囲にわたって確認されたものである。被熱部分は1.1×0.9m、厚さ8cmを測る。被熱影響部分の厚さから被熱部分は若干の削平を受けているものと思われた。周辺の遺物出土状況から晩期のものであろう。(江見)

火処41～45 (第20・122～126図)

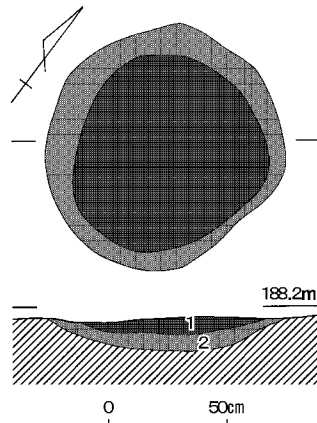
4 102Caから4 105Cb区付近の微高地2北部において検出した。平面形は不整形円形や不整形楕円形で、遺構検出の過程で地面が赤化した箇所が認められた。規模は大小認められた。これらは、断面観

第3章 発掘調査の概要



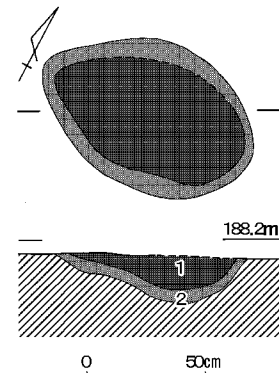
- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第113図 火処32 (1/30)



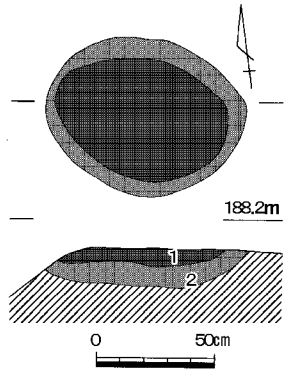
- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第114図 火処33 (1/30)



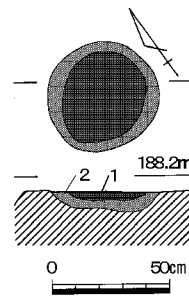
- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第115図 火処34 (1/30)



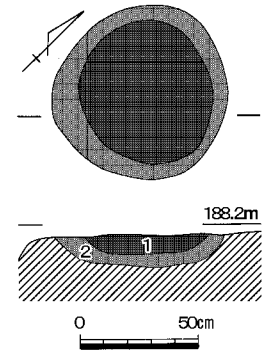
- 1 鈍赤褐色 (被熱) 2 暗赤褐色 (被熱影響)

第116図 火処35 (1/30)



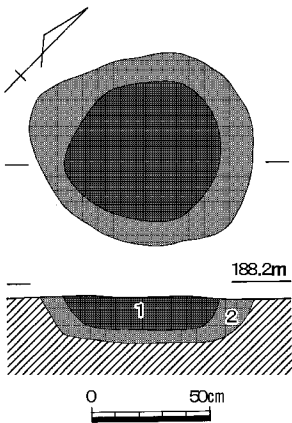
- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第117図 火処36 (1/30)



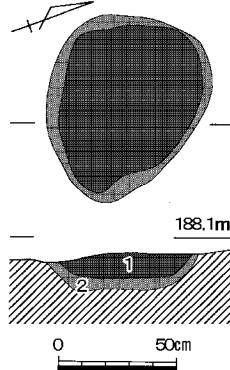
- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第118図 火処37 (1/30)



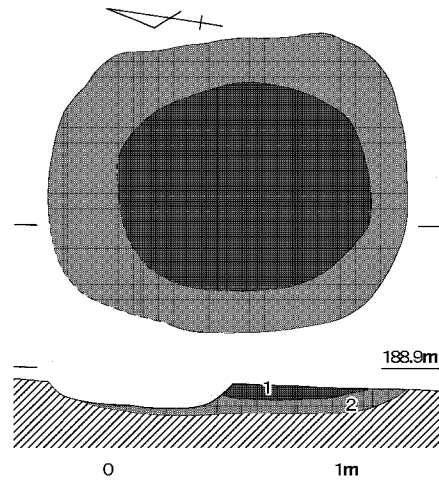
- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第119図 火処38 (1/30)



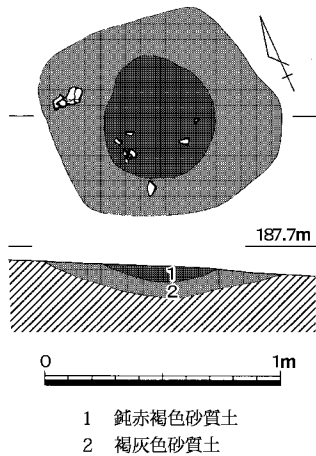
- 1 鈍赤褐色 (被熱)  
2 暗赤褐色 (被熱影響)

第120図 火処39 (1/30)

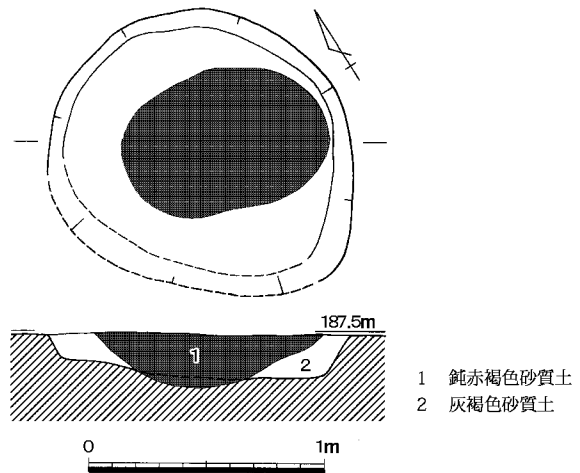


- 1 鈍赤褐色 (被熱) 2 暗赤褐色 (被熱影響)

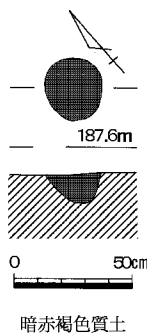
第121図 火処40 (1/30)



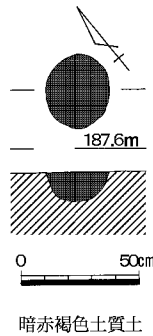
第122図 火処41 (1/30)



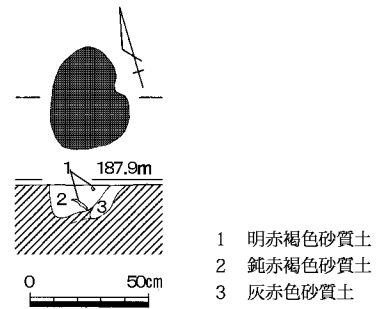
第123図 火処42 (1/30)



第124図 火処43 (1/30)



第125図 火処44 (1/30)

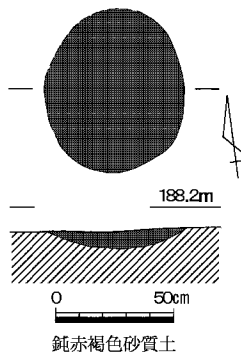


第126図 火処45 (1/30)

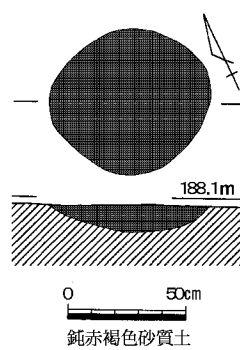
察の結果、掘り込まれたものではなく、火が焚かれた結果できた痕跡と考えた。時期は、窪地4の上面で検出しており、縄文時代晩期と考えている。(平井)

火処46～48 (第20・127～129図)

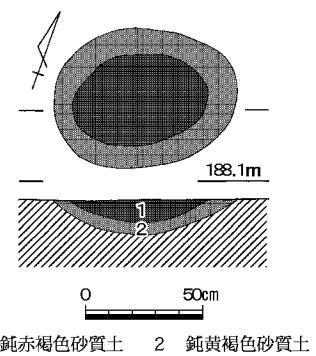
4 1 03Cd～4 1 03Ce区の微高地2の北部で検出した。平面形は楕円形で、規模は60～70cm前後であった。他の火処と同じく、遺構検出の過程で赤く変色した部分が認められ、断面観察の結果、火が焚かれた結果残された痕跡と考えた。時期は縄文時代晩期と考えている。(平井)



第127図 火処46 (1/30)



第128図 火処47 (1/30)

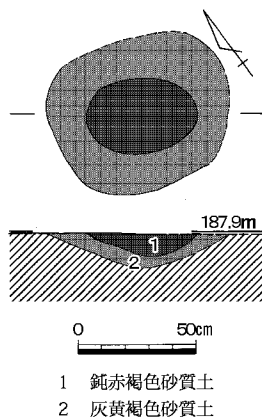


第129図 火処48 (1/30)

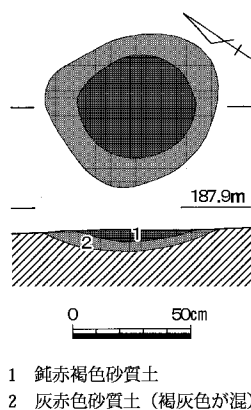
第3章 発掘調査の概要

火処49～56 (第20・21・130～137図)

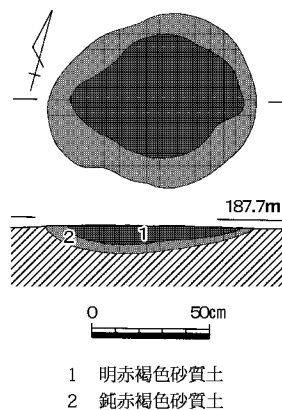
4 1 03Cf～4 1 05Cg区の微高地2北東部において検出した。平面形は不整形円形や不整形楕円形のものが多いが、これは既に述べたように火を焚いた痕跡と考えていることから、熱の影響が中心部において強く、周辺になるにつれて弱くなることと関連しているのであろう。なお、火処56については被熱が重複した結果かも知れない。時期を確実に示す証拠はないが、縄文時代後期ではなく縄文時代晩期ではなかろうか。(平井)



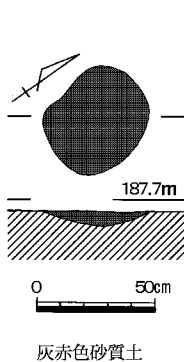
第130図 火処49 (1/30)



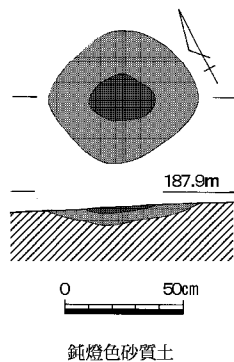
第131図 火処50 (1/30)



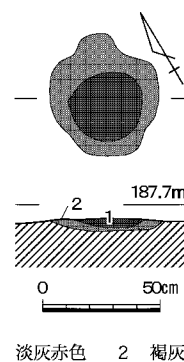
第132図 火処51 (1/30)



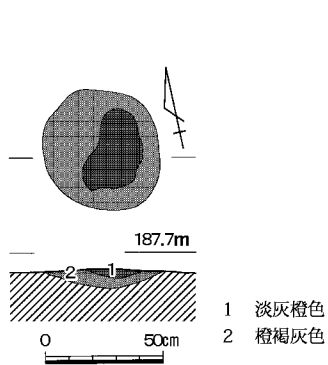
第133図 火処52 (1/30)



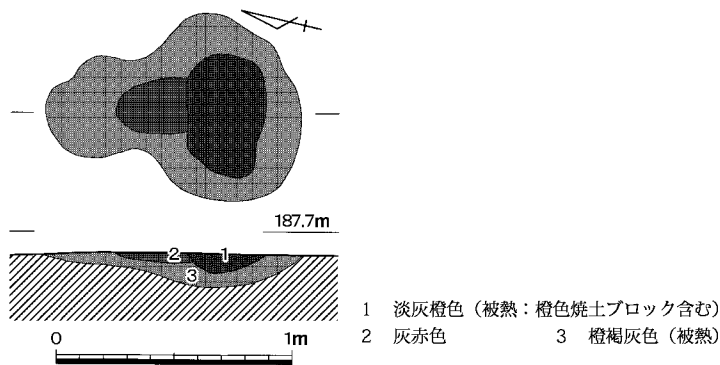
第134図 火処53 (1/30)



第135図 火処54 (1/30)



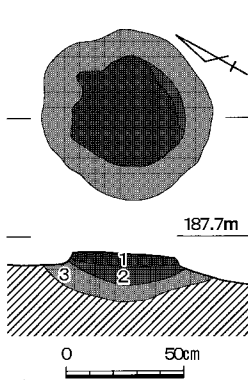
第136図 火処55 (1/30)



第137図 火処56 (1/30)

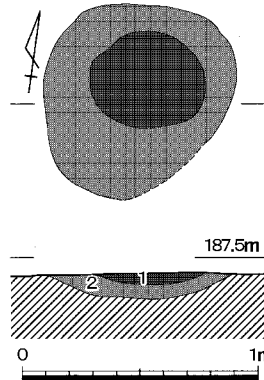
火処57～62 (第20・21・138～143)

4 1 05Cf～4 1 06Cg区の微高地2の北東部において検出した。これらの火処は一連の火処の中で最初に検出したもので、平面図では強く被熱した部分と弱い被熱部分を二重の線で表現しているが、必ずしも明確な線が引けるわけではなかった。なお、火処57は中央部が盛り上がったように図示しているが、これは検出面を示しているにすぎない。時期は他の火処と同じく、縄文時代後期の可能性もあるが、縄文時代晩期の可能性のほうが高いと考えている。(平井)



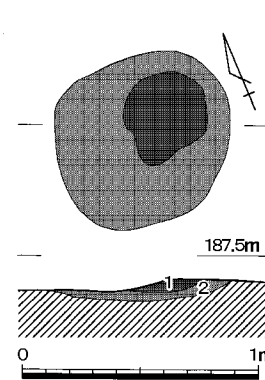
1 橙色焼土 3 褐灰橙色  
2 淡橙色

第138図 火処57 (1/30)



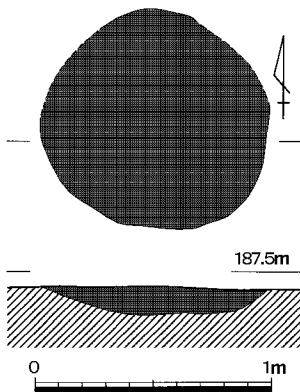
1 淡灰橙色 (やや強く焼ける)  
2 淡褐灰橙色 (被熱)

第139図 火処58 (1/30)



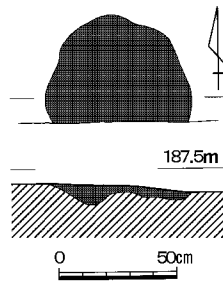
1 淡灰橙色 (やや強く焼ける)  
2 橙褐灰色 (被熱)

第140図 火処59 (1/30)



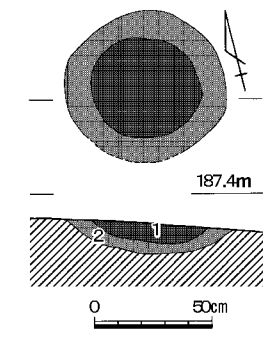
淡灰赤色 (被熱)

第141図 火処60 (1/30)



橙褐灰色 (被熱)

第142図 火処61 (1/30)



1 淡灰橙色  
2 淡褐灰橙色

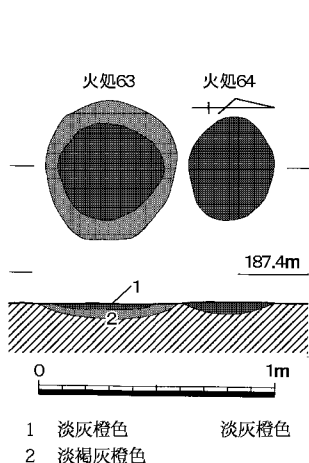
第143図 火処62 (1/30)

火処63～73 (第21・144～152図)

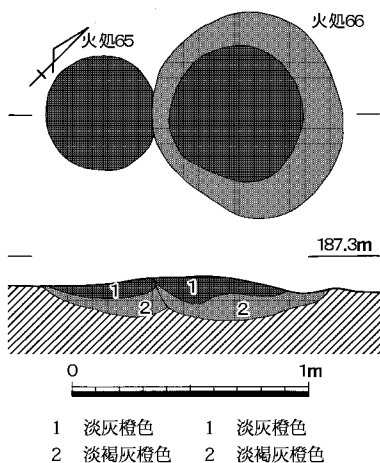
4 1 07Cg～4 1 07Ch区の微高地2南東部において検出した。平面形状は不整円形や不整楕円形で、規模は50～90cmとこれまで報告した火処と大きな違いは認められない。また、被熱はしているものの、焼土の状態になっていないこともこれらの火処の特徴である。このことは上面が削平されていると考えよりも、本来長期にわたって強い加熱が加えられなかった結果と考えておきたい。

時期については、この地域では縄文時代後期末の土壙46が検出されていることから、縄文時代後晩期としておきたい。(平井)

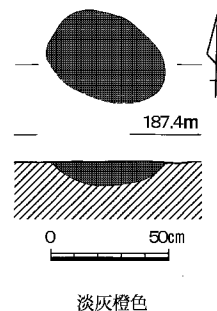
第3章 発掘調査の概要



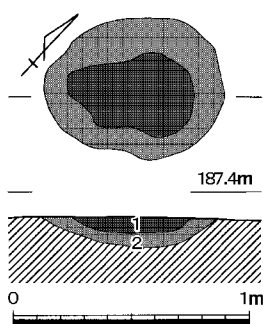
第144図 火処63・64 (1/30)



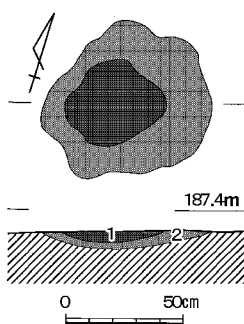
第145図 火処65・66 (1/30)



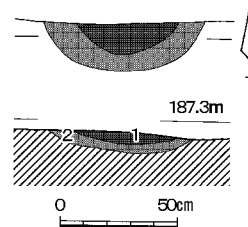
第146図 火処67 (1/30)



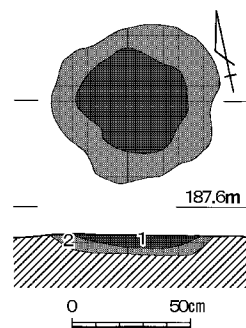
第147図 火処68 (1/30)



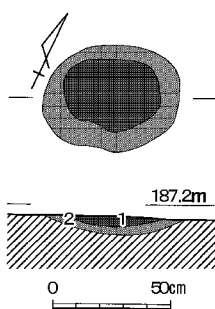
第148図 火処69 (1/30)



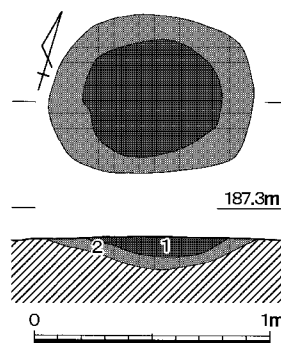
第149図 火処70 (1/30)



第150図 火処71 (1/30)



第151図 火処72 (1/30)



第152図 火処73 (1/30)

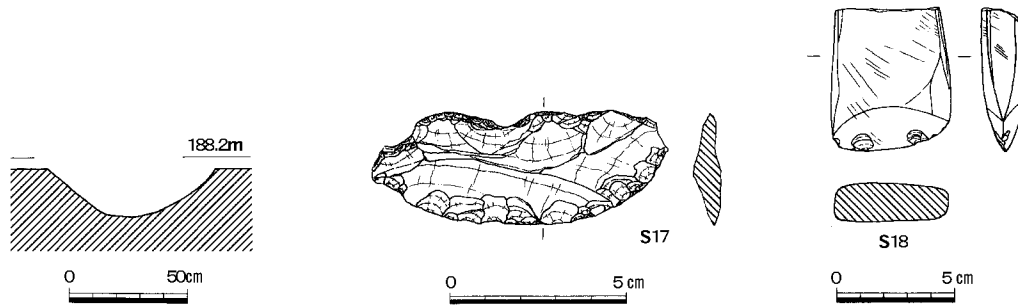
6 溝

溝1 (第18・153図、図版28)

4 004 Ch区に位置し、河道1に流入する溝である。幅は70cm、深さが20cm程を測る。ほぼ同じ場所に存在した弥生時代中期の溝よりも下層で検出したということ、周辺部に縄文時代の遺構と遺物が存

在すること以外に縄文時代としたことの根拠に乏しい。

出土したのは石器のみである。サヌカイト製の縦型の石匙S17は周辺部に細かい調整を施している。流紋岩製の磨製石斧S18は、基部を欠損している。(弘田)



第153図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2)

溝2 (第18・154図)

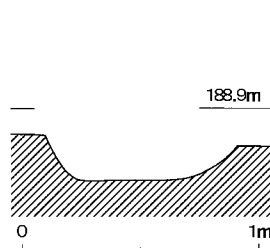
4 0 03 Cj区の北西部に位置し、北から南西へとわずかに湾曲した形状で検出した溝である。

溝の上・下流部は消滅し検出されていない。現存規模は幅81cm、深さ19cm、検出長は3m、底面平坦で逆「ハ」字状に立ち上がる壁面、埋積土内からの出土遺物は認められていない。(二宮)

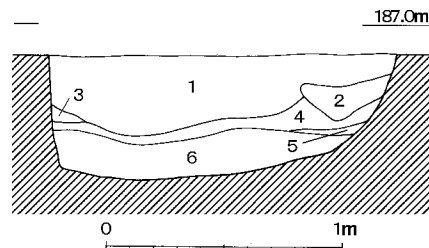
溝3 (第19・155図)

4 1 02 Cj区で3本の溝の北側で検出できた残存性の悪いものであった。

検出された溝は長さが2m程度、幅1.47m、深さ52cmを測る。第155図から推測すれば、土壙状の断面を呈する。本来は北側に付属した幅50cm、長さ1mのものが溝であったと考えられる。(二宮)



第154図 溝2 (1/30)



- 1 灰褐色弱粘質土
- 2 褐色砂
- 3 褐色砂質土
- 4 暗灰褐色粘質土
- 5 褐色砂質土
- 6 灰褐色弱粘質土 (褐色砂混)

第155図 溝3 (1/30)

溝4 (第19・156図)

4 1 01 Cj区から南側の4 1 02 Cj区までほぼ直線的に延びていた。検出面は縄文時代の砂層面であるが、この面から掘り込まれたかは確実ではない。溝は南北が検出不可能で、現存で15mの長さ、幅は66cm、深さ18cmを測り、断面形は逆「ハ」字状に立ち上がり、丸みをもった底面となる。(二宮)

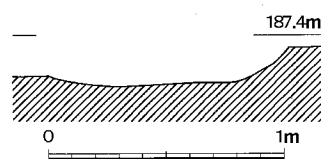
溝5 (第19・157図)

溝4の東に隣接して検出された並行する溝である。検出状況は溝4と同じで、同時期の可能性もあるが、掘り込み面は確実ではない。北から南へ流れていたとみられる。最大幅は北端で3m、南端では60cm、断面形は浅い皿状を呈する。前溝同様時期決定の遺物は認められない。(二宮)





第156図 溝4 (1/30)



第157図 溝5 (1/30)

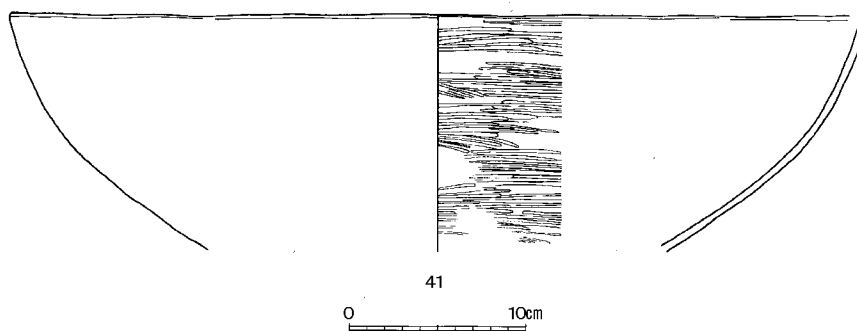
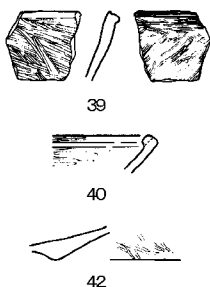
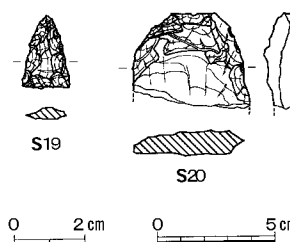
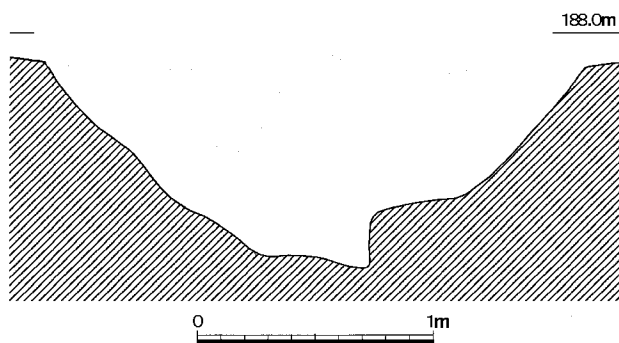
溝6 (第21・158図)

4 1 03 Dc区南東隅から4 1 04 Dd区にかけて検出された溝である。溝の北西端は丸く終わり、南東部は河道4の上面へと延び以下は検出不能で、確認できた長さは7 m程度であり、かなり蛇行する。断面形は「V」字状を呈するが、底面は起伏が激しく深さ89cm、幅は1.5~2.31mである。

埋積土内からはサヌカイト製の平基鏃S19、鉢形の縄文土器が出土している。

時期は、晩期中葉であろう。

(二宮)



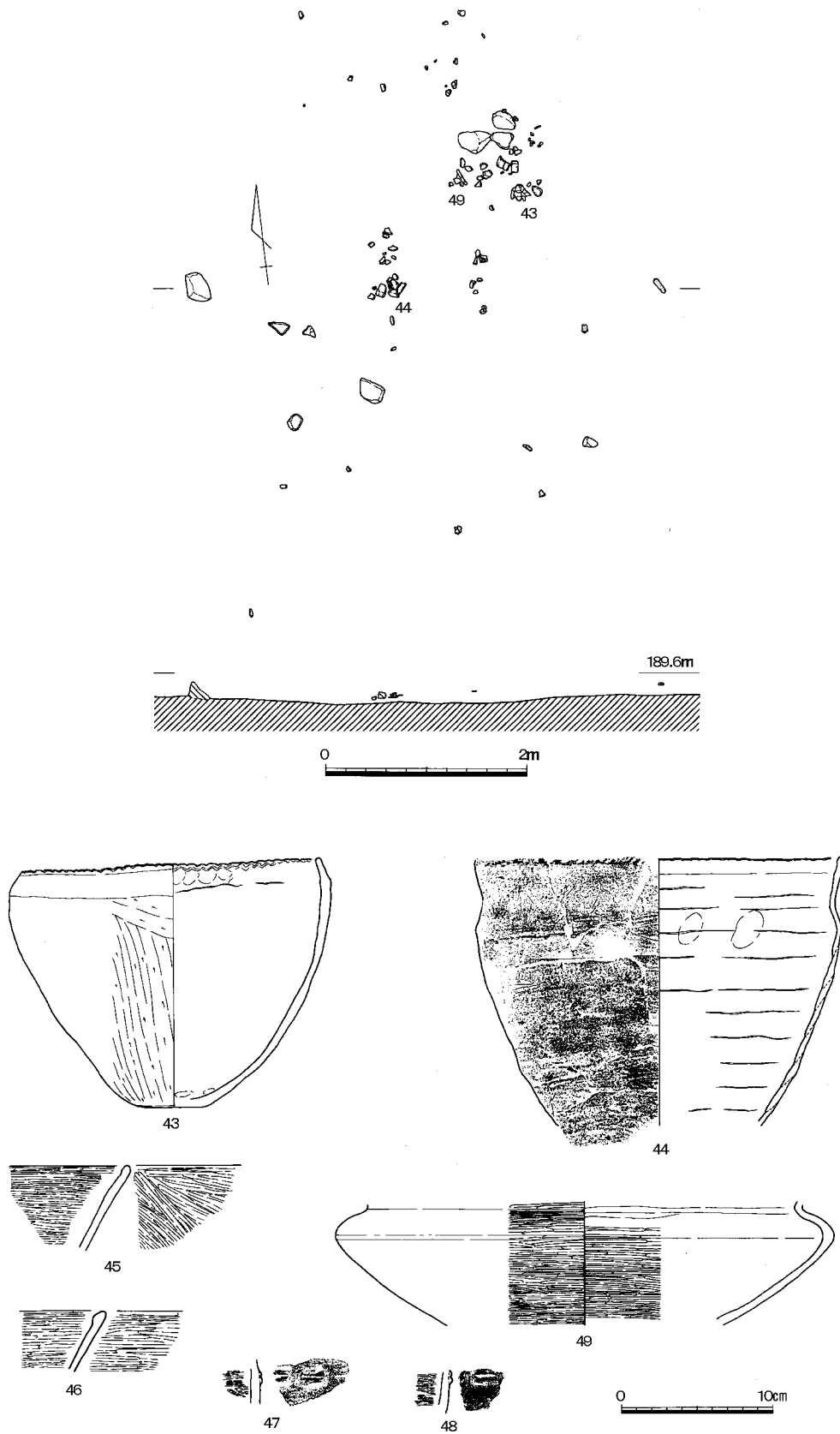
第158図 溝6 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3,1/4)

7 土器溜まり

土器溜まり1 (第16・159・160図、図版8・28・29)

河道1の左岸側斜面部である、3 9 08 Ce区に位置する。先述した火処1に接しており、径約5 mの範囲に土器、石器のまとまりがみられた。また、このすぐ北側は久田原遺跡微高地3であり、晩期の遺構が多くみられた場所にあたる。

出土した土器には、粗製の深鉢43・44と精製浅鉢45~47がある。47・48は、横位に連続した「コー



第159図 土器溜まり1 (1/60)・出土遺物① (1/4)

第3章 発掘調査の概要

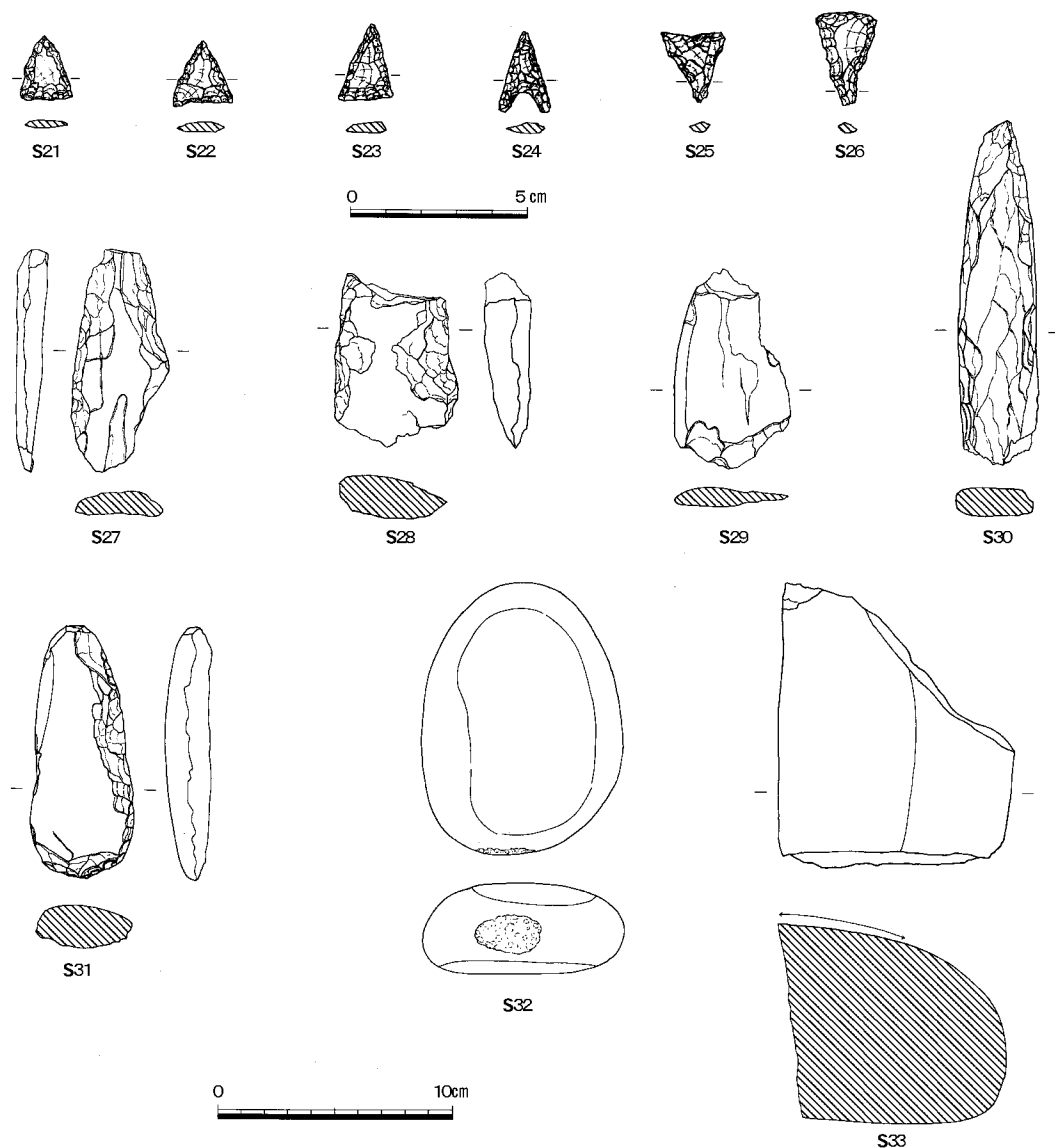
ビー豆状」の浮文をもつ。器形は分からないが、47からみて浅鉢などの屈曲する部位に付けられたようである。胎土は精良で、調整としてミガキを施す。県下では類例をみない。石器類では、図示した以外にサヌカイトの剥片も多い。時期は、晩期中葉に位置付けられる。 (弘田)

土器溜まり2 (第17・161~173図)

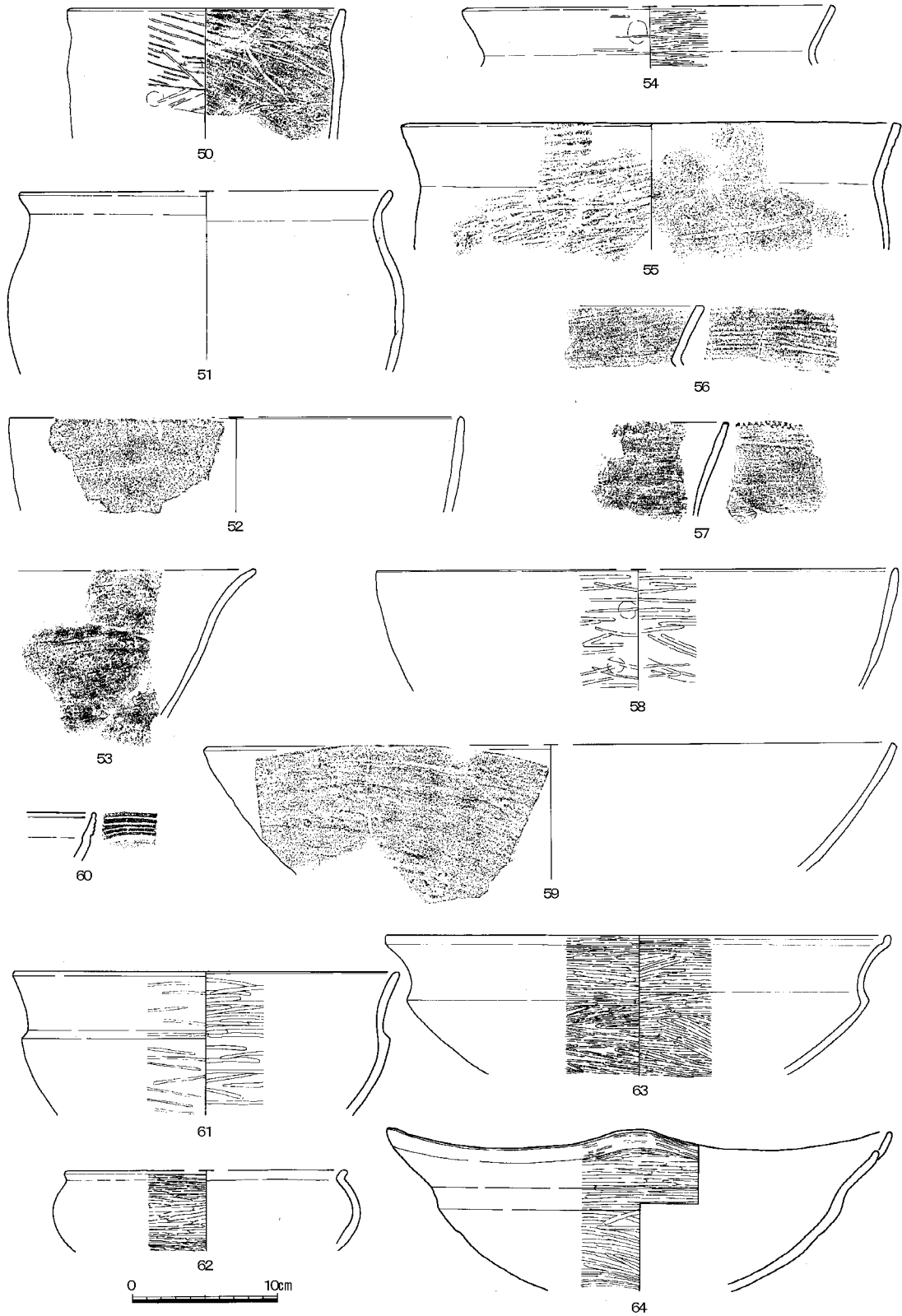
4 0 05~07 Bj区に位置する。縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土の掘り下げ中に検出された。付近には火処と若干の土壌のほかには明瞭な遺構は認められない。出土遺物は当土器溜まり全体に広がっていたが、この中でもいくつかの集中が認められ、後述するようにA~Eにまとまりごとに分けている。これらは検出レベルが若干異なり、土器様相にも若干の差異が看取されるのであり、土器の編年的位置づけを行う上で、重要な情報を提供するものと考えられる。 (河合)

土器溜まり2-A (第17・161~163図、図版3・8・9・29・47)

4 0 05 Ca区に位置する。次に述べる土器溜まり2-Bとは検出レベルが異なる。縄文晩期前葉の遺



第160図 土器溜まり1出土遺物② (1/2,1/3)



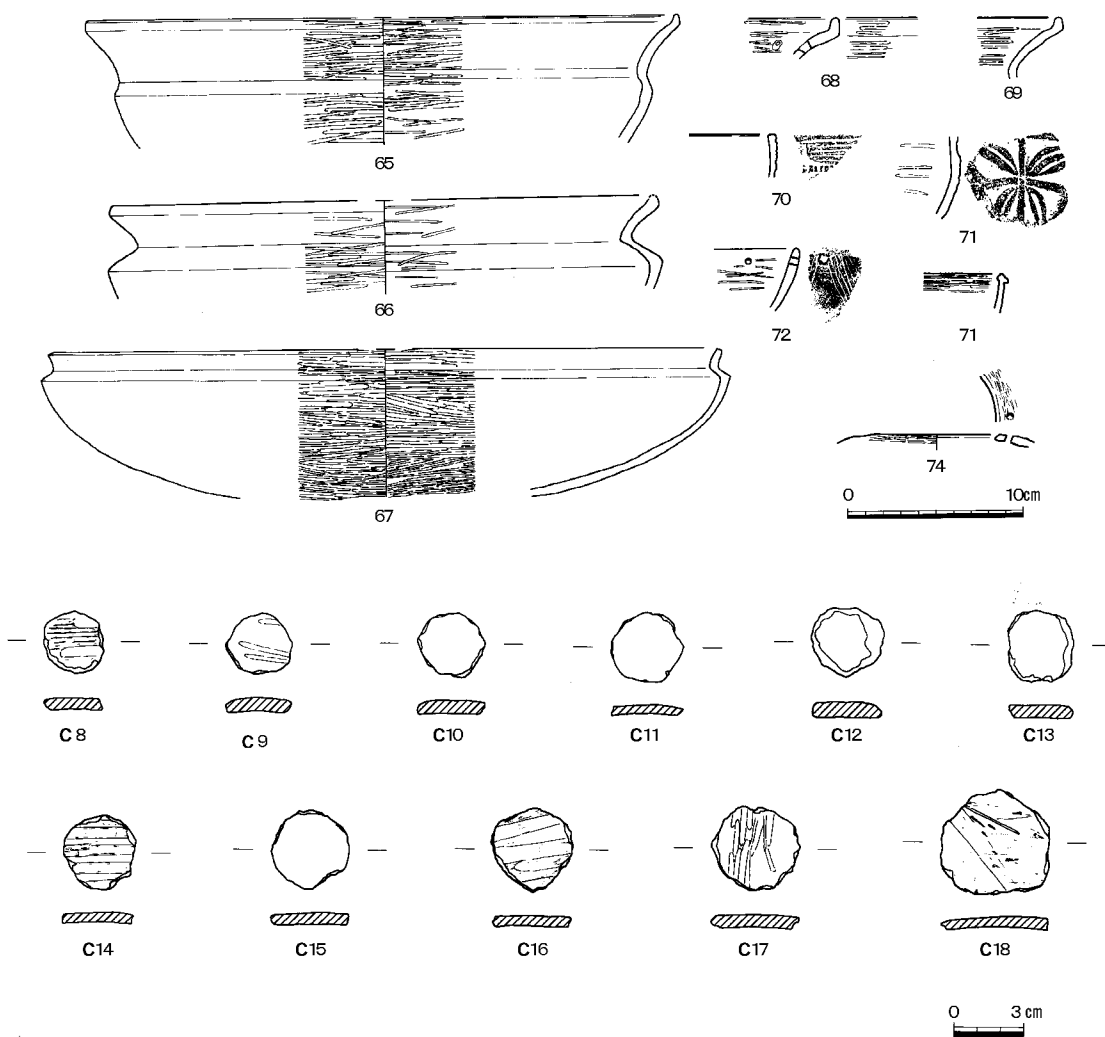
第161図 土器溜まり2-A出土遺物① (1/4)

第3章 発掘調査の概要

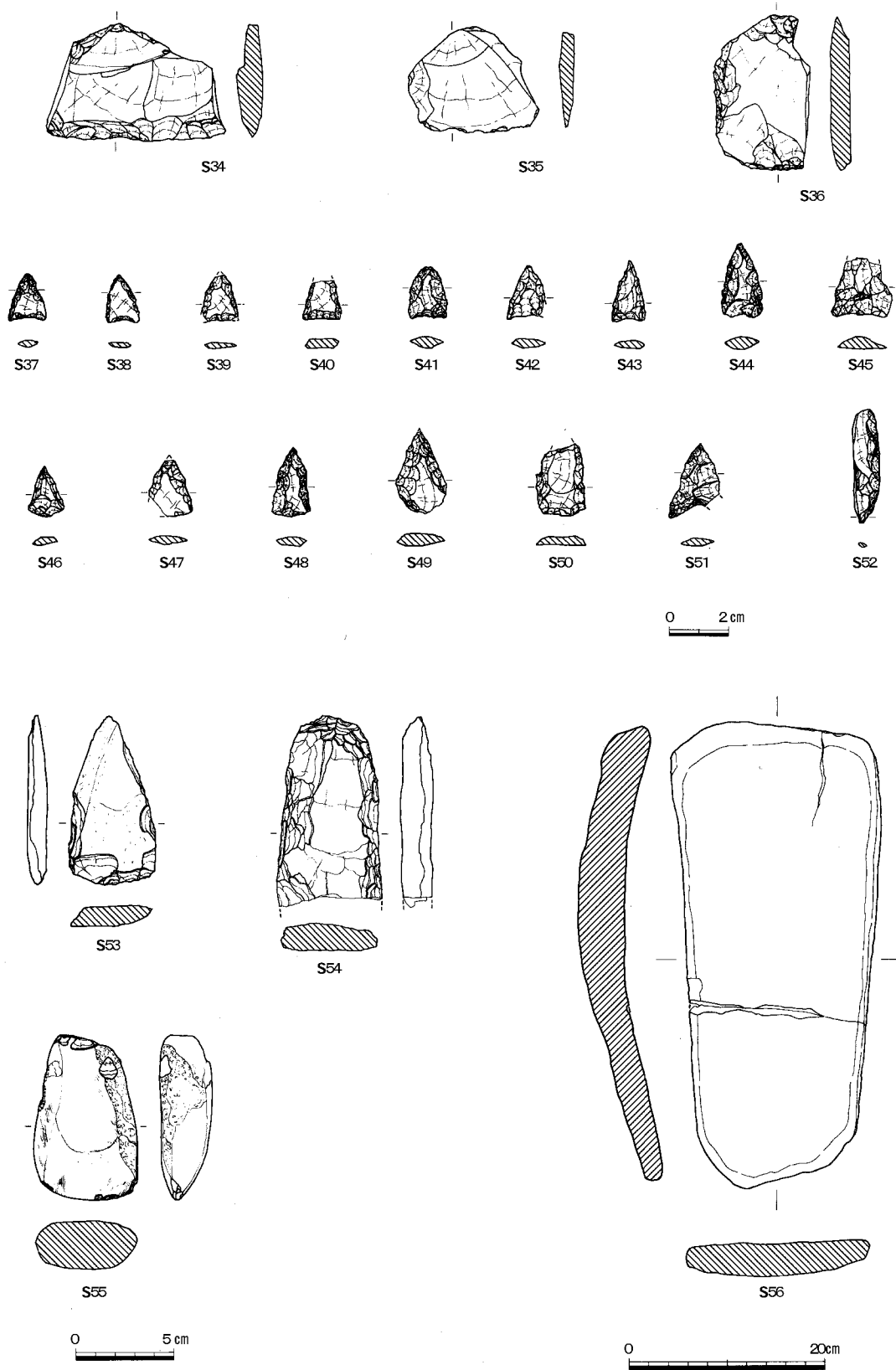
物を包含する暗褐色砂質土の掘り下げを行っていく際にまず確認されたのは当土器溜まりであり、その下を5cm掘り下げると土器溜まり2-Bが検出された。もちろんこの2者間で明瞭な間層をはさむことはなく、漸移的に移行しているため、両者を完全に分離することは不可能であるが、おおむね土器様相は前後の関係を示していると考えられる。出土遺物は多く、多量の土器のほか、土器片再利用の円盤状土製品が確実なものとして11点ある。石器もサヌカイト製スクレイパー(S34~36)、石鏃(S37~51)、石錐S52、緑色片岩製の石鏃S53・54のほか、磨製石斧S55、台石と考えられる大型のものS56がある。当土器溜まりには、図化していないものの、サヌカイト・緑色片岩の剥片が多く散布していることから、この周辺における石器製作を想定できる。土器は有文の60・70・71などに古い様相が看取できるものの、多くは晩期前葉~中葉(古)に属すると考えられる。(河合)

土器溜まり2-B (第17・164~166図、図版9・10・30)

4005Bj区に位置する。土器溜まり2-Aの検出後約5cm下から、遺物の広がりが確認できた。分布範囲の一部は土器溜まり2-Aの範囲と重複するが、これより西に向かって広がりが認められ、土壌2まで広がっている。出土遺物は多く、多量の土器のほか、石器も多く検出された。石鏃(S61~

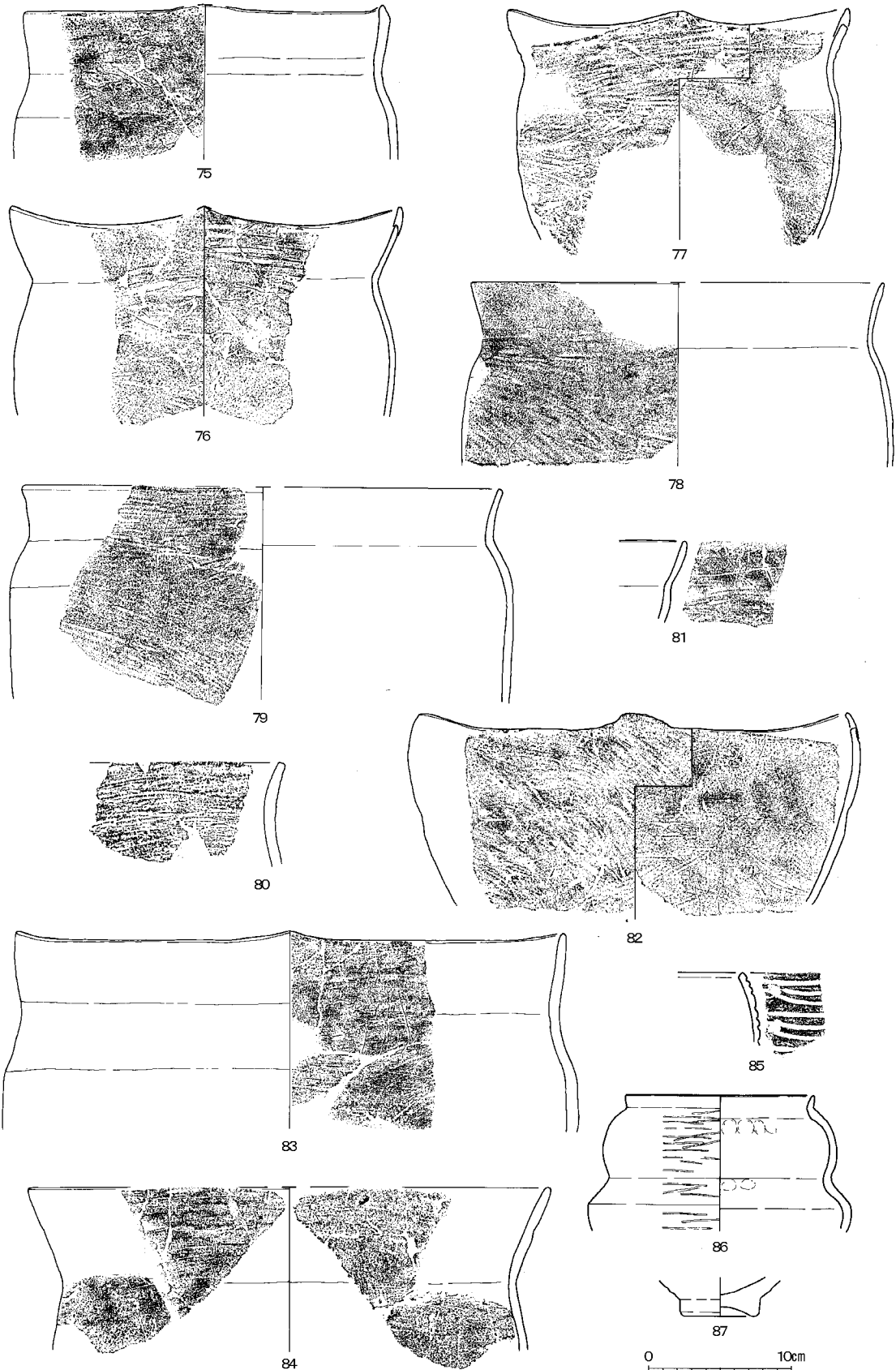


第162図 土器溜まり2-A出土遺物② (1/4,1/3)

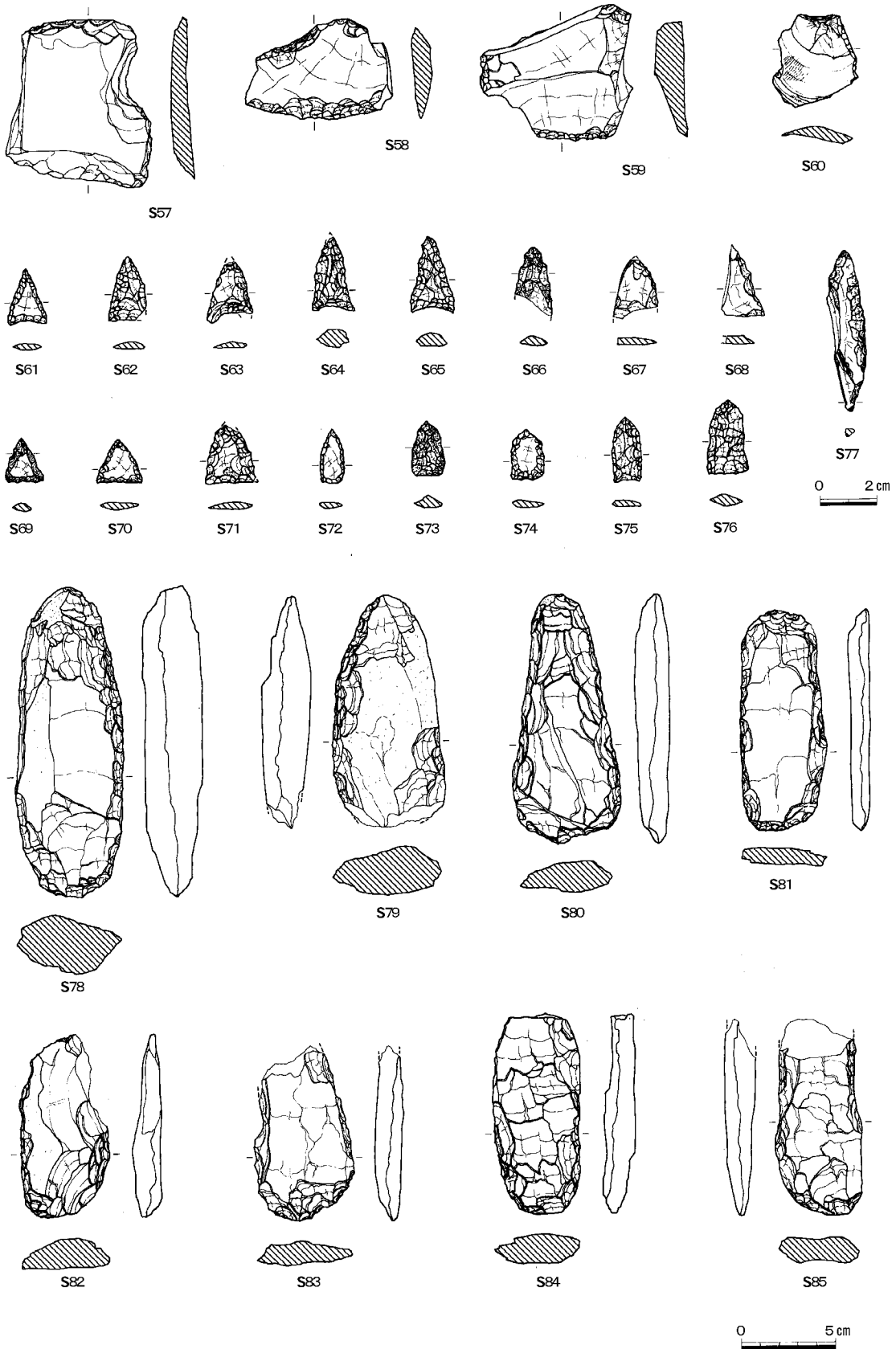


第163図 土器溜まり2-A出土遺物③ (1/2,1/3,1/6)

第3章 発掘調査の概要



第164図 土器溜まり2-B出土遺物① (1/4)



第165図 土器溜まり2-B出土遺物② (1/2,1/3)



第3章 発掘調査の概要

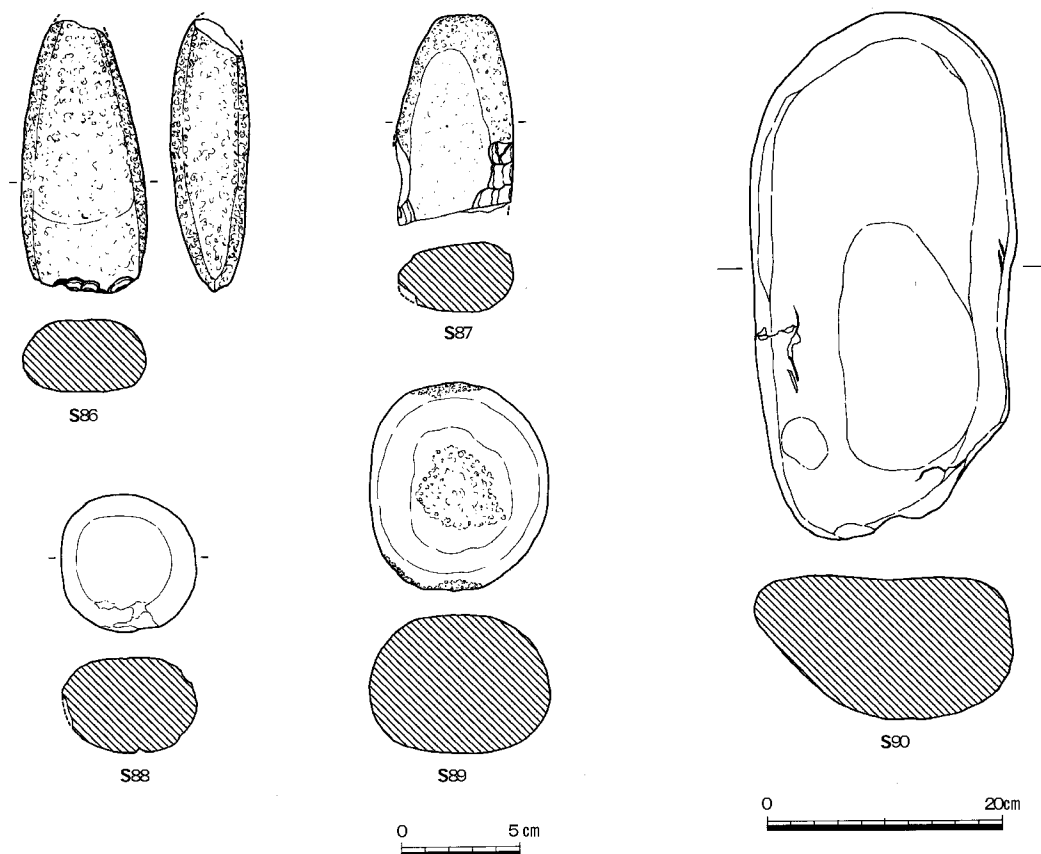
76)、石錐S77やスクレイパーの多く(S58・59)がサヌカイト製であり、石鍬が緑色片岩製である。そのほか、磨製石斧未成品S86・87、磨石S88や叩き石S89とセットになると考えられる大型の台石S90が出土している。ここでも、サヌカイト・緑色片岩の剥片が多く散布していることから、この周辺における石器製作を想定できる。黒曜石の剥片(S60)も数点であるが認められ、注目される。出土土器は深鉢が多く、二枚貝による条痕調整を外面に、条痕調整後ナデを内面に施すものが主体を占める。口縁部は「く」字形に外反し、口縁部が相対的に長いものが多く、口縁端部に内傾するものが含まれている(75~77・81~83)など晩期前葉でも古い様相を示すものから、新しいものまでを含む。また瓢形を呈する珍しい器種も含まれている。(河合)

土器溜まり2-C(第17・167・168図、図版10・31)

4 006Bj区に位置する。土器溜まり2-Bや後述する土器溜まり2-Dなどと近い面で検出された。出土遺物には深鉢(88~91)、浅鉢(92~96)のほか、石鍬S91・92、スクレイパーS93、石鍬S94、砥石S95がある。土器は深鉢の口縁端部に認められる内傾指向やいわゆる波状口縁をもつものが主体を占める、88・89にみられるように波状口縁の頂部に刺突を行う、口縁部と胴部の境に2条の沈線が施されるものがある(90)、浅鉢の口縁部外面に沈線文を施しているものがある(96)などの諸特徴から、晩期前葉に属するものと考えられる。(河合)

土器溜まり2-D(第17・169・170図、写真5、図版3・10・31・47)

4 006Bj区に位置する。土器溜まり2-Bや土器溜まり2-Cなどと近い面で検出された。出土遺

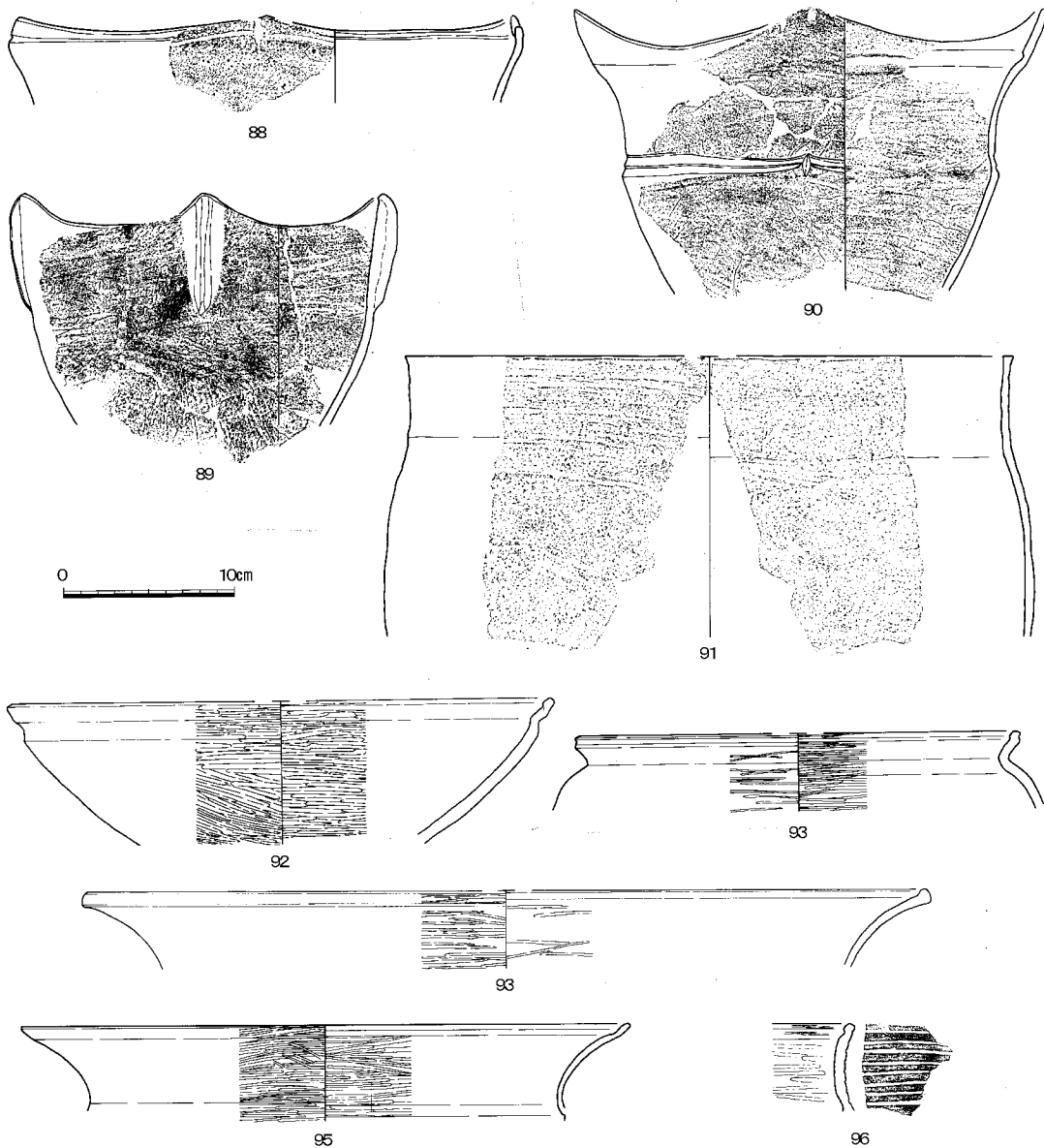


第166図 土器溜まり2-B出土遺物③(1/6,1/3)

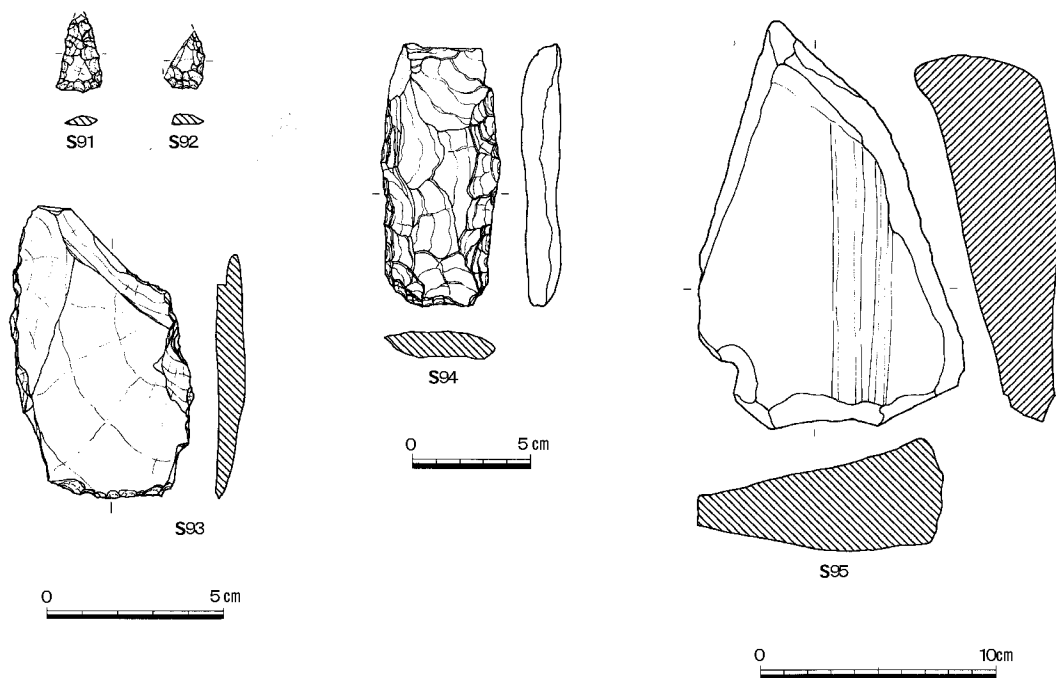
物のうち、土器では浅鉢(97~100)が主体であり、注口土器101・102(この2点は同一個体の可能性もある)も確認された。そのほか土器片再利用の円盤状土製品が確実なものとして3点ある。石器もサヌカイト製スクレイパー(S96・97)のほか、凹石S98と大型の石鍬がS99・100の2点(S99が緑色片岩製、S100が安山岩製である)、石棒の可能性のあるミガキがなされた緑色片岩製の石器S101が確認されている。S100も石鍬として使用するには強度が



写真5 土器溜まり2-D土器出土状況  
(南東から)



第167図 土器溜まり2-C出土遺物①(1/4)

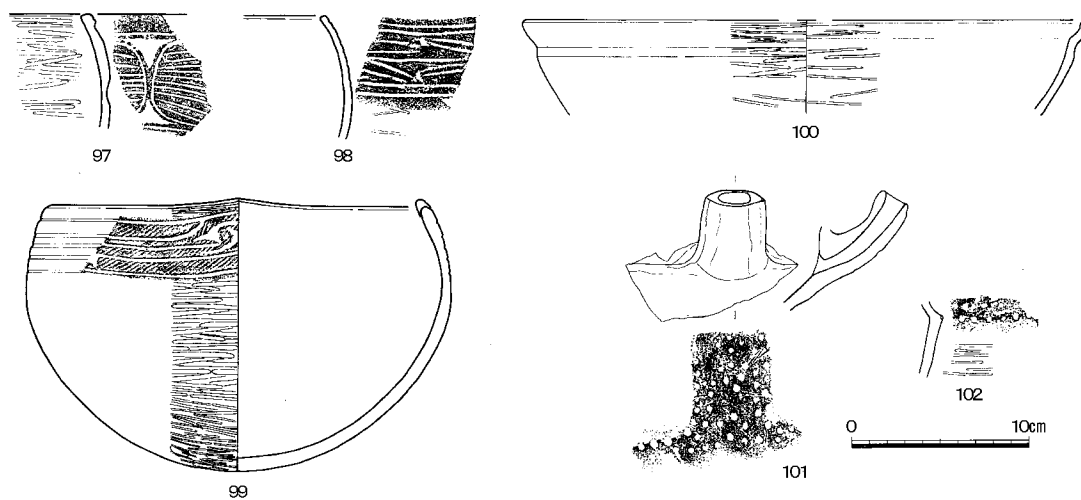


第168図 土器溜まり2-C出土遺物② (1/2,1/3)

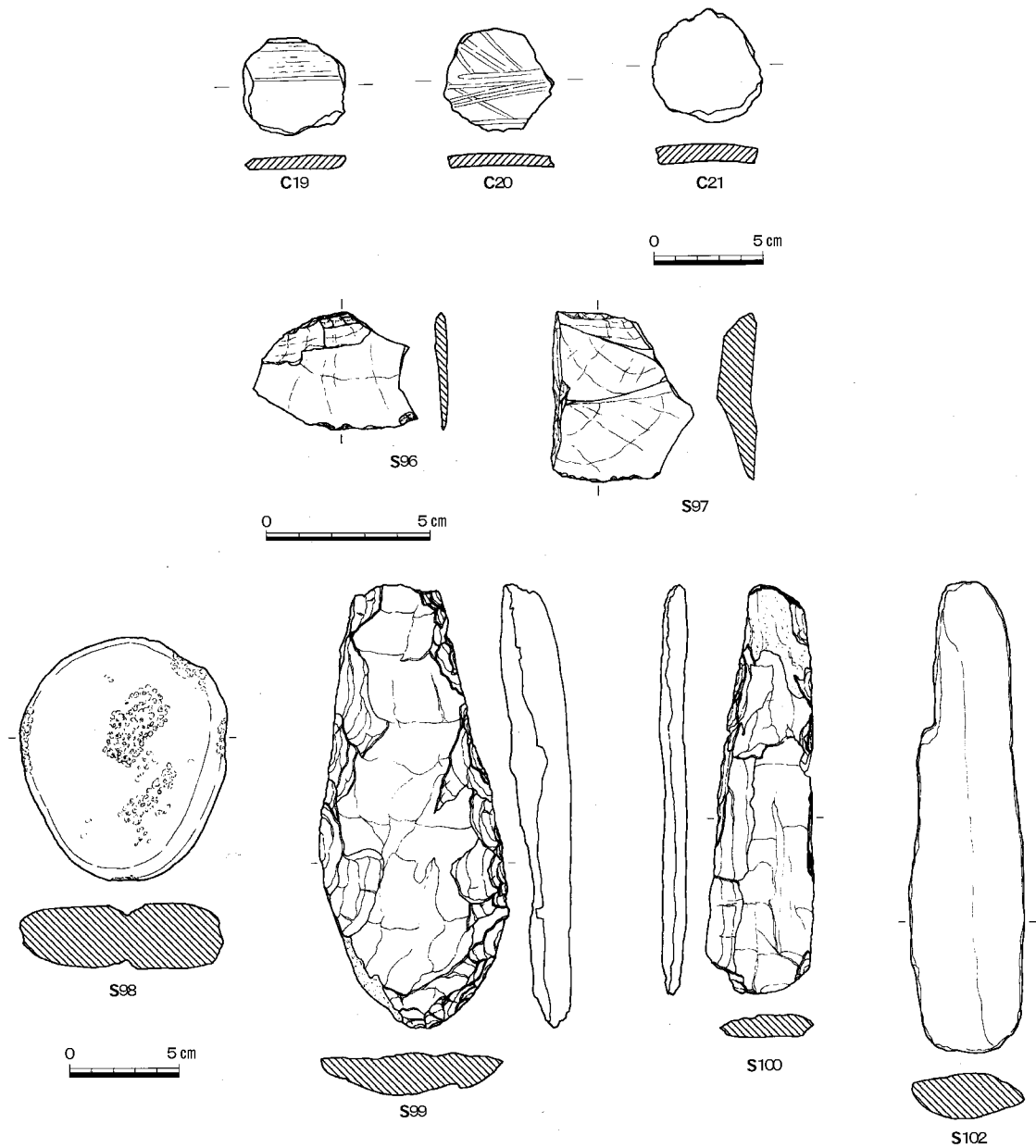
弱いため、S 101と同様の意味合いをもった遺物である可能性も捨てきれない。土器では99が注目される。関東地方の晩期初頭安行3式に比定でき、搬入品である可能性が高い。そのほかの土器もその特徴から晩期初頭に比定できることから、土器編年の併行関係を捉える上でも重要な資料として評価できる。(河合)

土器溜まり2-E (第17・171図、図版11・31・48)

4 0 0 5 B j区に位置する。土器溜まり2-Dよりも高い面で検出された。出土遺物には深鉢103、浅鉢104のほか、冠状?土製品C22、石鏃S 102~104、石鎌S 105・106、磨製石斧S 107・108がある。冠状?土製品C22は、平べったい突起が3つ円形の基部から上方に飛び出る形態を有しており、基部に



第169図 土器溜まり2-D出土遺物① (1/4)



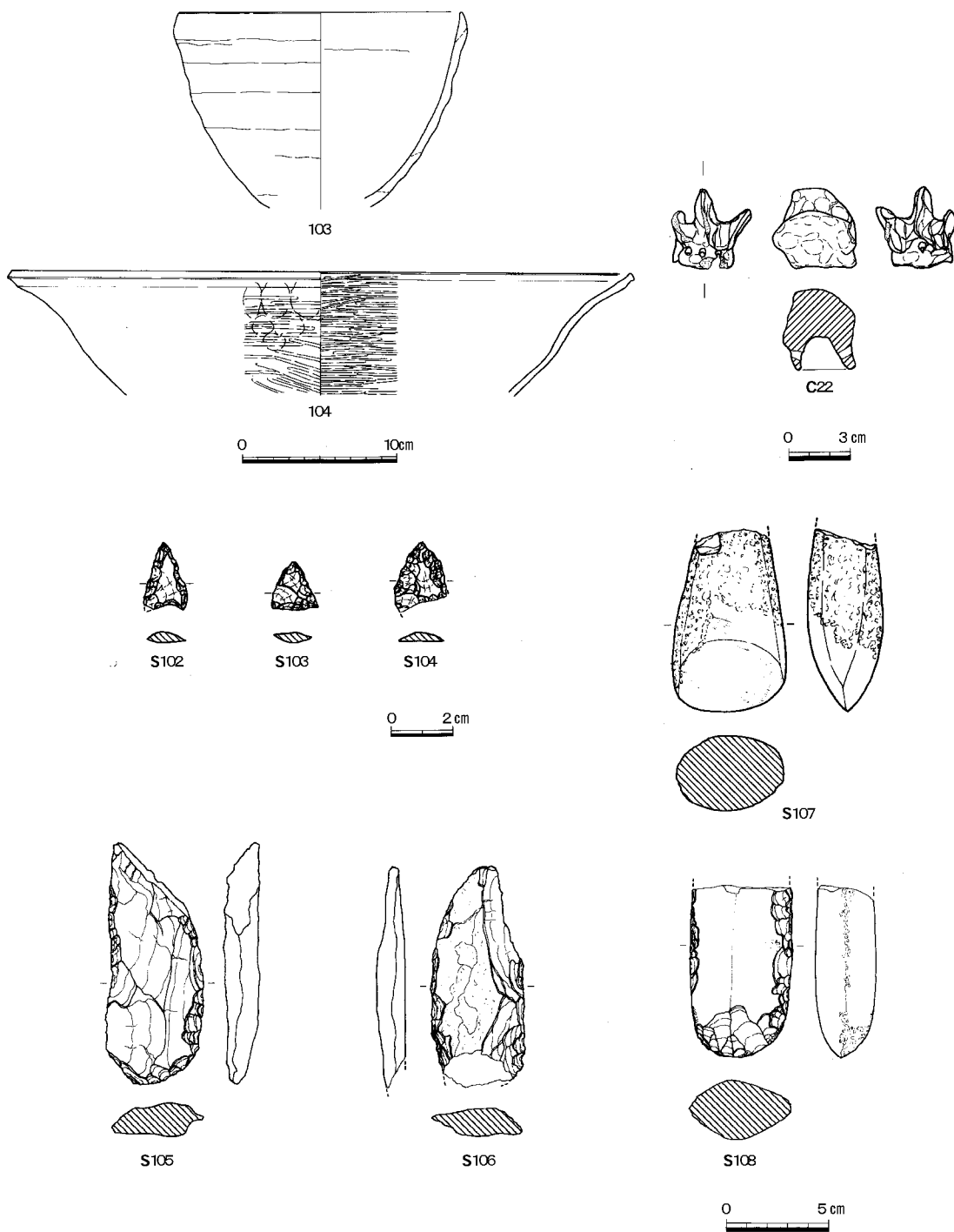
第170図 土器溜まり2-D出土遺物② (1/3,1/2)

は一方に3つ、もう一方には1つ孔がうがたれている。用途は不明であるが、孔の存在からひも状のものをここに通し、何かと組み合わせて用いられた可能性がある。出土土器は少なく、遺構の時期を判断する材料に乏しいが、遺構の出土位置および出土レベルから判断して、晩期前葉の範疇に収まると考えられる。(河合)

土器溜まり2 その他の地点出土遺物 (第17・172・173図、図版31・32・48)

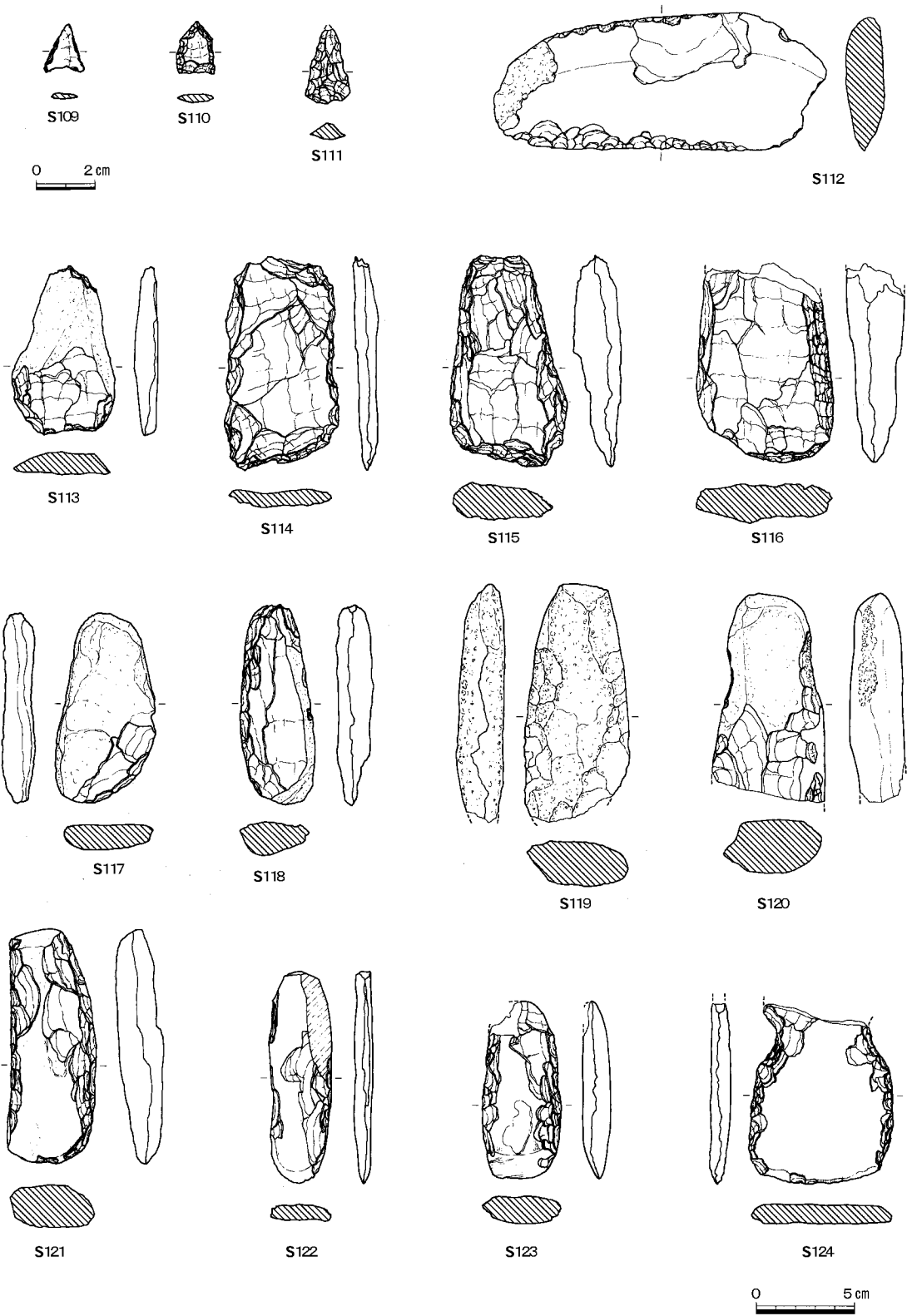
土器溜まり2からは上述したA～E地点の周辺からも多くの遺物が出土している。

そのうち石器では、石鏃S109～111、スクレイパーS112、石鏃S113～124の図化が可能であり、図化できなかったサヌカイトや緑色片岩の剥片も多く出土している。S124は胴部に挟り状の調整を施しており分銅形になるかもしれない。土器溜まり2-Aや土器溜まり2-Bでもふれたが、この周辺で

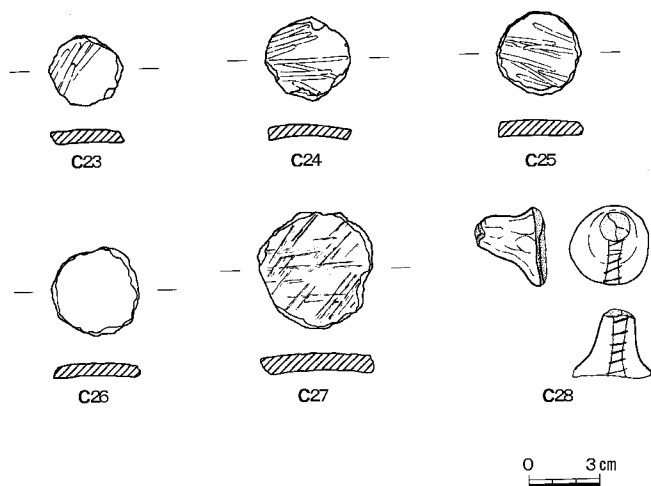


第171図 土器溜まり2-E出土遺物(1/4,1/3,1/2)

の石器生産がうかがわれる。土製品では、土器片再利用の円盤状土製品が確実なものとして5点ある。図化できなかったものの中には、円盤状土製品の未成品や成品の可能性のあるものも多く含まれている。そのほか、土製品には用途・器種不明のC28がある。これは土器の突起部の可能性もあるが、ここでは土製品として考えておきたい。突起部の一方には、2本の沈線を描いた後に、それらをつなぐ線が6本施されており、はしご状にも見える文様が施されている。(河合)



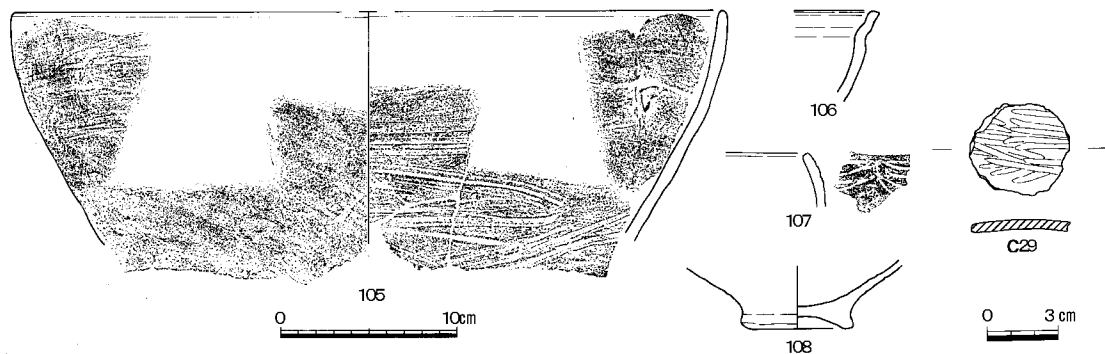
第172図 土器溜まり2その他の地点出土遺物① (1/2,1/3)



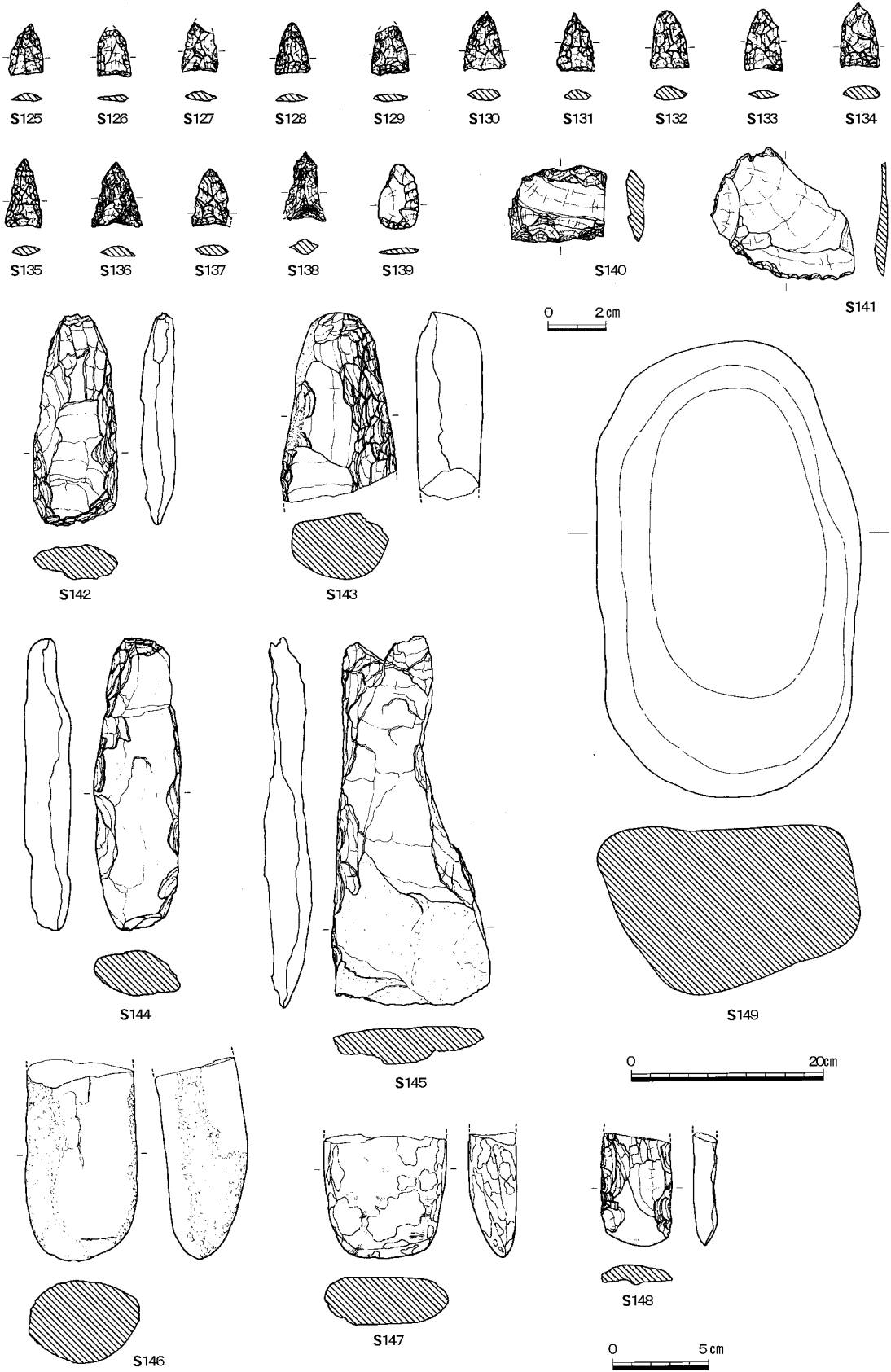
第173図 土器溜まり2 その他の地点出土遺物② (1/3)

土器溜まり3 (第17・174・175図、図版3・4・11・32)

後述する窪地1と土器溜まり2の間に形成された土器溜まりである。4005~07Ca区に位置する。縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土の掘り下げ中に検出された。付近には火処と若干の土壙のほかには明瞭な遺構は認められない。出土遺物は当土器溜まり全体に広がっていた。出土層位や土器の時期から、上述した土器溜まり2と一連のものである可能性も高い。出土遺物には図化できるものとして、土器105~109、土製品では、土器片再利用の円盤状土製品が確実なものとして1点ある。そのほか石器では、石鏃S125~139、楔形石器S140、スクレイパーS141、石鏃S142~145、磨製石斧S146~148、大型の台石S149がある。この土器溜まりでも、多くのサヌカイトや緑色片岩の剥片が大量のサヌカイト製の石鏃とともに出土しており、この周辺での石器生産がうかがわれる。大型で刃部に礫面を残す石鏃S145は土器溜まりに形成されたピットから検出された遺物である。磨製石斧S148はほかの2点と違い、刃部のみに研磨を施している。大型の台石S149は火処16の直上から出土した。上面が研磨された状態であり、この面を使用したことがうかがわれる。遺構の所属時期については、出土土器が少ないものの、浅鉢106や有文の107などの特徴から晩期初頭を含むものと考えられ、出土層位やレベルなどの情報から考え合わせれば、晩期前葉の新しい段階までの時期幅を持つ可能性も考えられる。(河合)



第174図 土器溜まり3 出土遺物① (1/4,1/3)



第175図 土器溜まり3出土遺物② (1/2,1/3,1/6)



第3章 発掘調査の概要

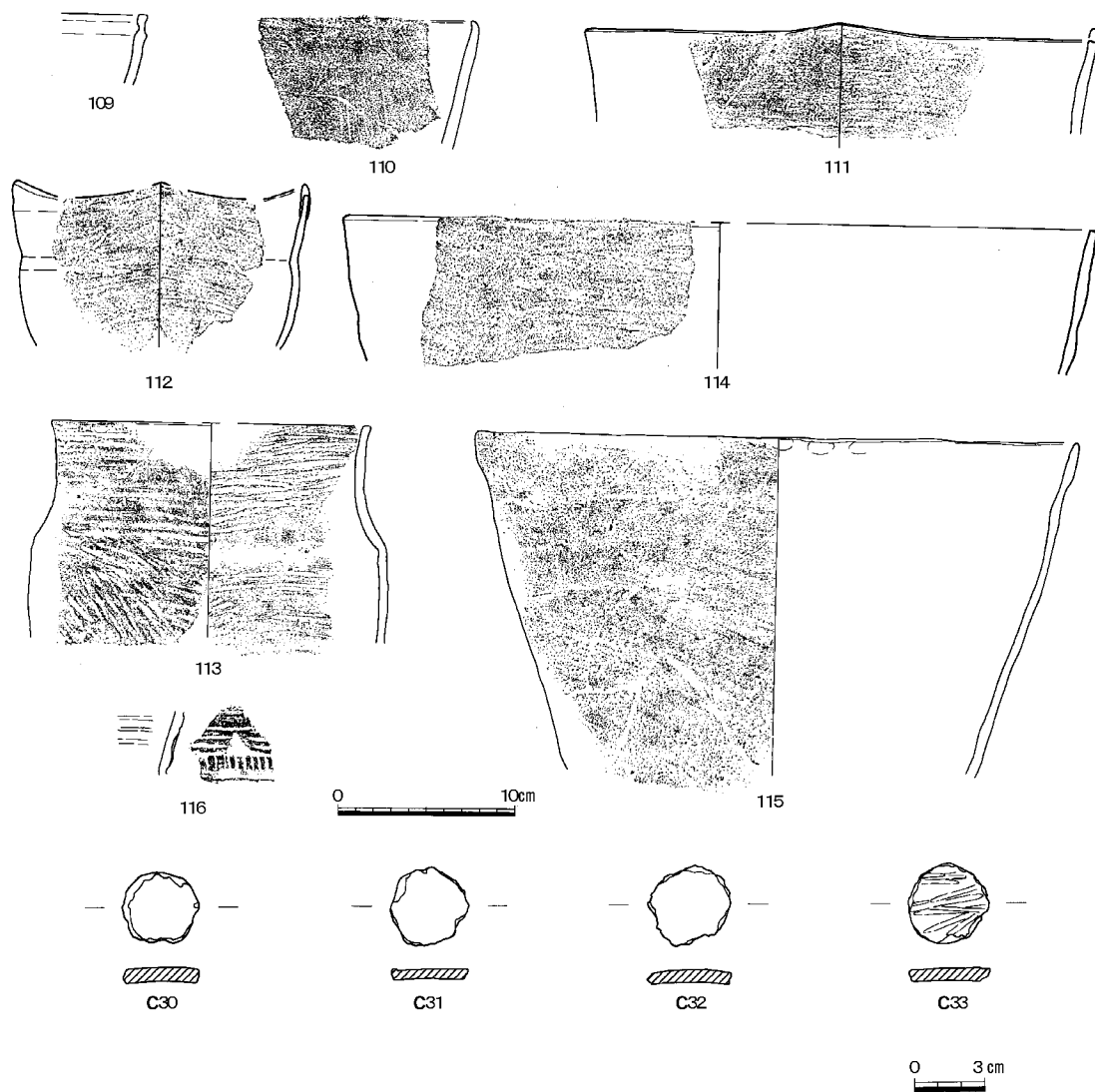
土器溜まり4 (第17・176・177図、写真6、図版11・33・47)

前述した土器溜まり3とは後述する窪地1を挟んだ位置に存在する。4005Cb区に位置する。

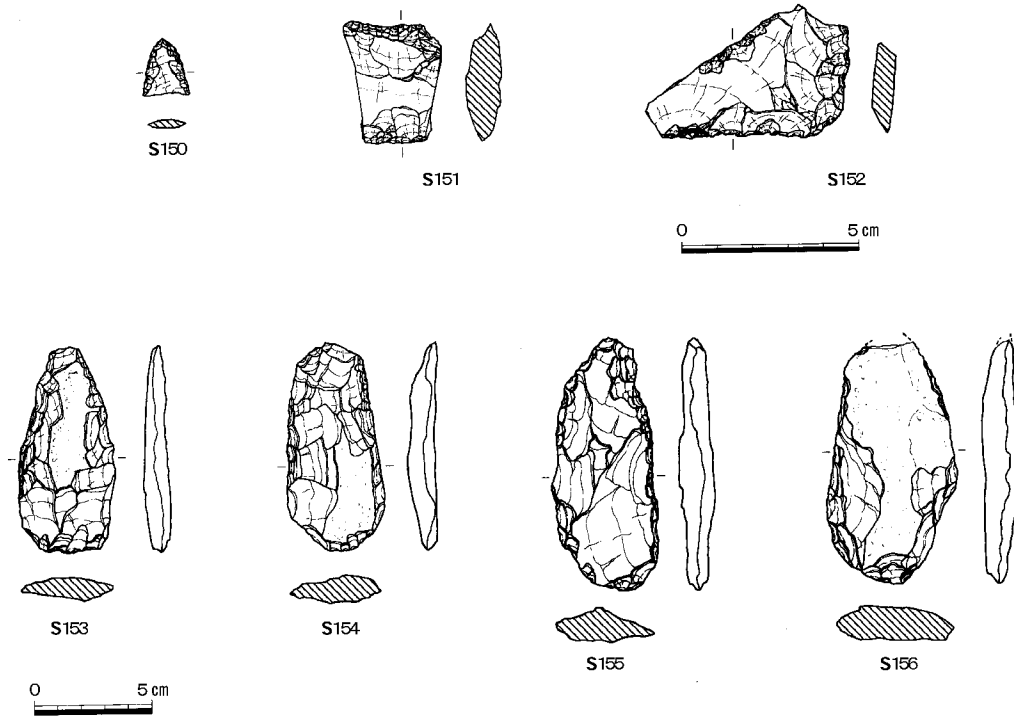
他の土器溜まりと同様、縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土の掘り下げ中に検出された。出土レベルは土器溜まり2-Aとほぼ同じであり、出土土器の様相も土器溜まり2-Aとほぼ同様である。出土遺物には深鉢109~115と浅鉢片116のほか、土器片再利用の円盤状土製品が確実なものとして4点ある。石器では石鏃S150、楔形石器S151、スクレイパーS152、石鏃S153~156がある。土器溜まりの形成時期は浅鉢片116が晩期初頭にさかのぼる可能性のあるものの、他は晩期前葉であり、中央を弥生時代の溝7により攪乱されていたが、まとまりのある資料として考えることができる。



写真6 土器溜まり4 土器出土状況  
(西から)



第176図 土器溜まり4 出土遺物① (1/4,1/3)



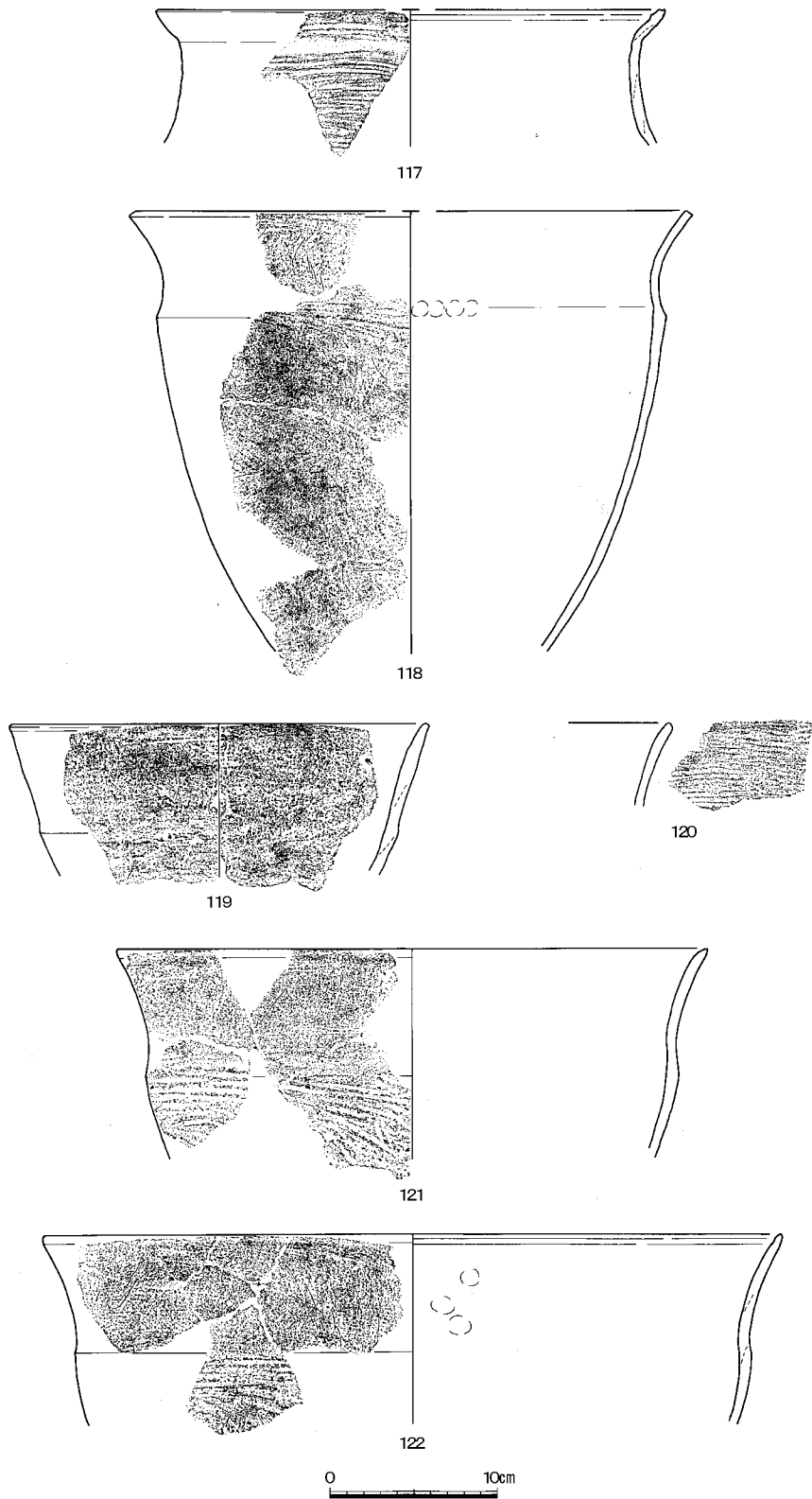
第177図 土器溜まり4出土遺物②(1/2,1/3)

## 土器溜まり5 (第17・178～180図、図版11・33)

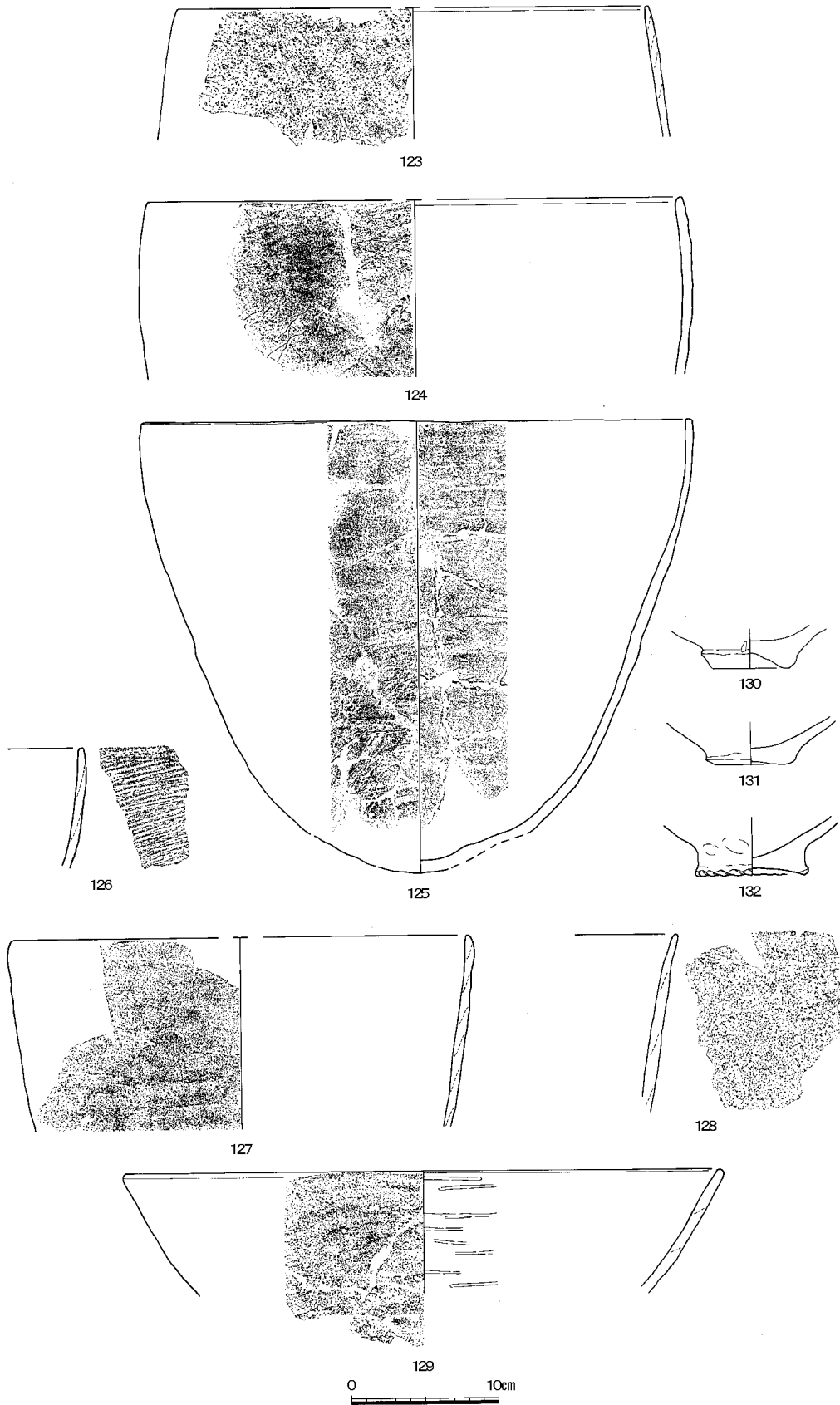
微高地2の北部、4 0 05Cb～4 0 07Cc区から検出された東西約9m、南北約18m、厚さ20cm余りの範囲に広がっていた土器溜まりである。土器溜まりの南西部は後世の削平を受けていたが、北部からは前述の火処3か所が検出されている。一帯からは深鉢117～128、浅鉢129・133～136などの土器類、石鏃S157～162、石匙S163、U.F.S164、スクレイパーS165、石鏃S166～169などの石器類が出土した。117は内傾する頸部から緩く外反し、外面には二枚貝条痕が施される。118～122は緩く外反し118の端部は角張っており他は丸く収めている。123～127は内傾気味に立ち上がる深鉢で、125は底部が欠落していた。133は口縁が屈曲して斜め外方に短く立ち上がるもので、体部上半に外面からの穿孔が1か所確認された。134～136はいずれも口縁部に沈線が施され、135・136はさらにヘラガキされている。浅鉢134～136の特徴から、これらはいずれも晩期前葉に伴うものとする。(江見)

## 土器溜まり6 (第17・181・182図、図版12・33・34)

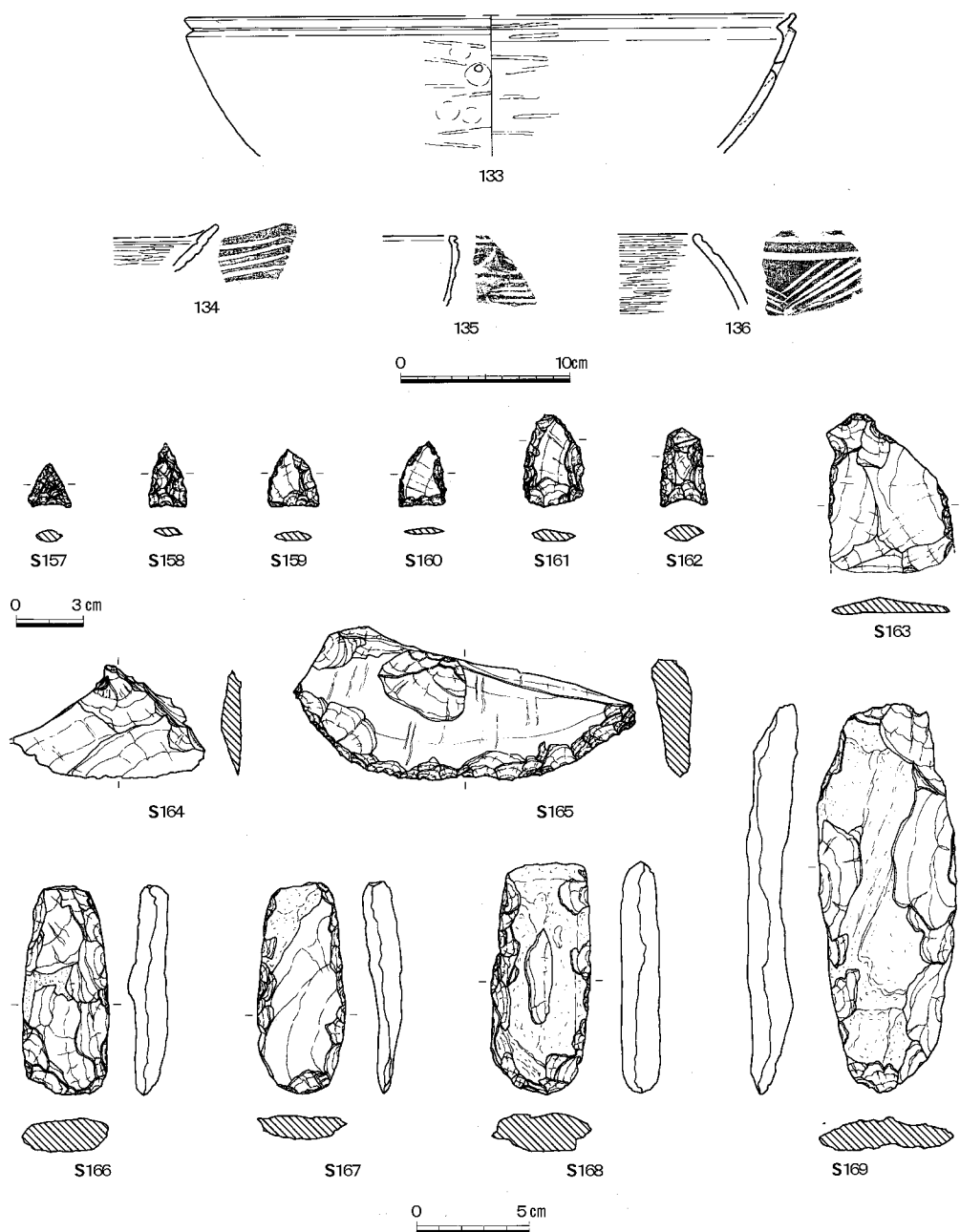
土器溜まり5の東、4 0 05Cd～4 0 06Ce区から検出された東西約12m、南北約19m、厚さ20cm余りの範囲に広がっていた土器溜まりである。図示し得た遺物は土器溜まり5と比較し土器類がやや少なかったが、石器類は石鏃が多く認められた。深鉢137は波状口縁で、口縁に沿って2条の沈線を巡らす。138は胴部が内湾気味に立ち上がり、ほぼ直立する口縁部につながる。浅鉢139は直立する口縁に、端部は斜め外方に延びる。140は緩く外反する口縁に、内側に沈線が施される。141・142は口縁が屈曲して斜め外方に短く立ち上がる。143は口縁外面にヘラ状工具による施文がなされ、下端には刻み目が巡らされている。石器類は石鏃S170～191、楔S192、R.F.S193、スクレイパーS194・S195、石鏃S196～200、石斧S201などが出土した。時期は波状口縁の深鉢や、沈線施文の浅鉢の特徴などから土器溜まり5とほぼ同様の晩期前葉とする。(江見)



第178図 土器溜まり5出土遺物① (1/4)



第179図 土器溜まり5出土遺物② (1/4)



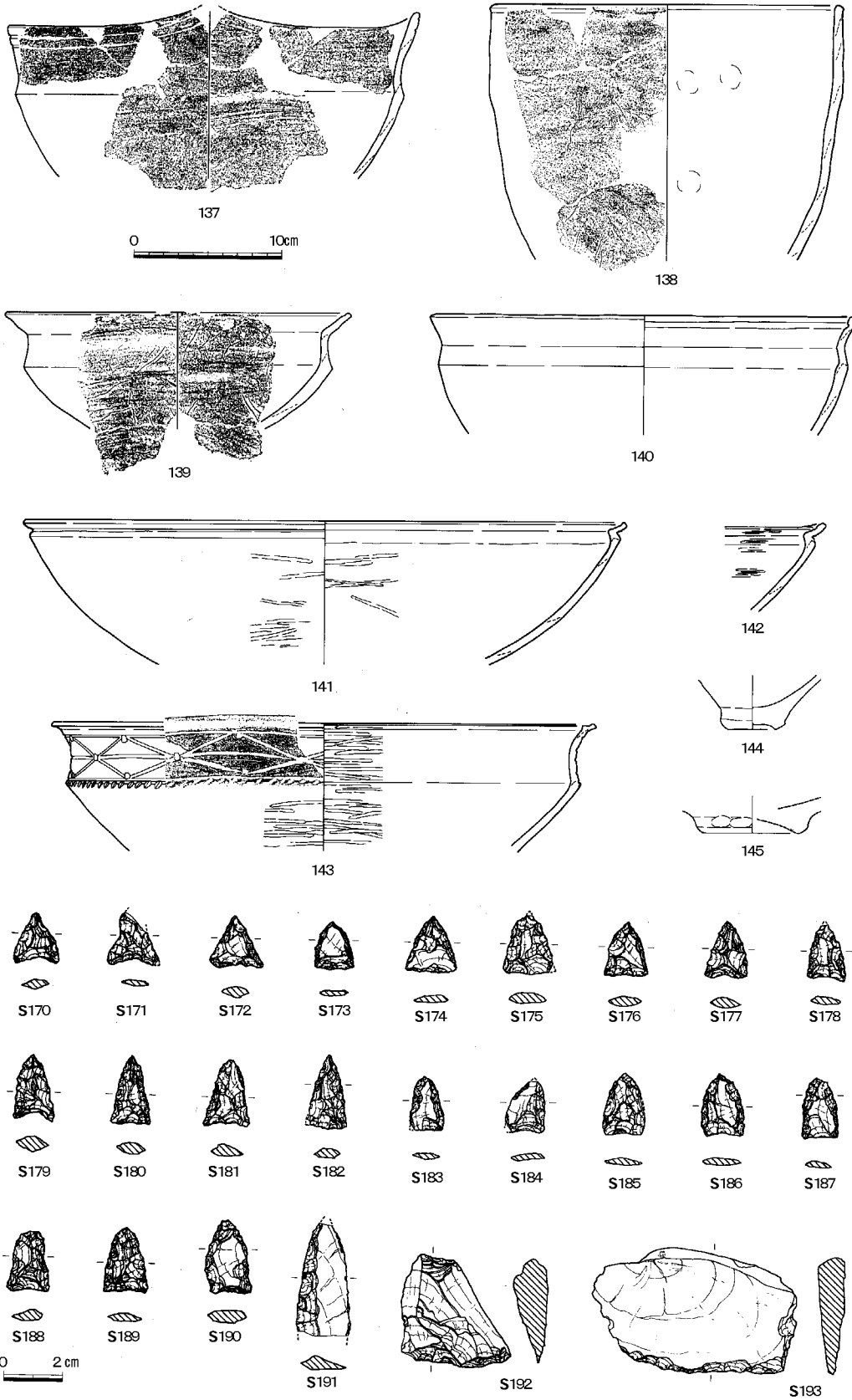
第180図 土器溜まり5出土遺物③ (1/4,1/2,1/3)

土器溜まり7 (第17・183~185図、図版34)

土器溜まり5の南40m、4 0 09Ca~ 4 1 00Cb区から検出された東西約11m、南北約15m、厚さ約20cm余りの範囲に広がっていた土器溜まりである。範囲内からは火処8か所が検出されている。

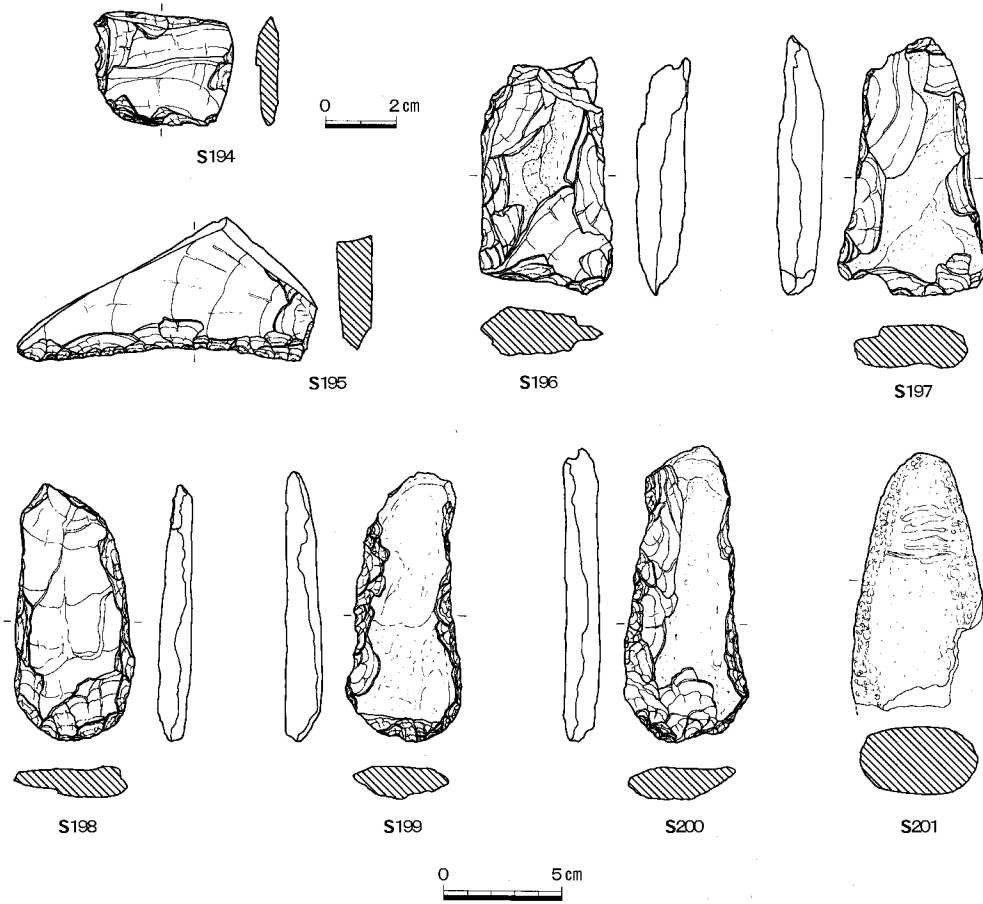
遺物は深鉢146~150、浅鉢151~155の土器類、石鍬S202~207、スクレイパーS208などの石器類に混じって、翡翠あるいは蛇紋岩製の丸玉S209や、円盤状土製品C34・C35などが出土している。

146は波状口縁で、口縁から胴部にかけて外面に二枚貝条痕が見られ、短く外反する147~149も同様の調整がなされている。他に内傾して緩く外反する150、口縁外面の沈線施文された155など、これら出土土器は晩期前葉の範疇のものと考えられる。(江見)

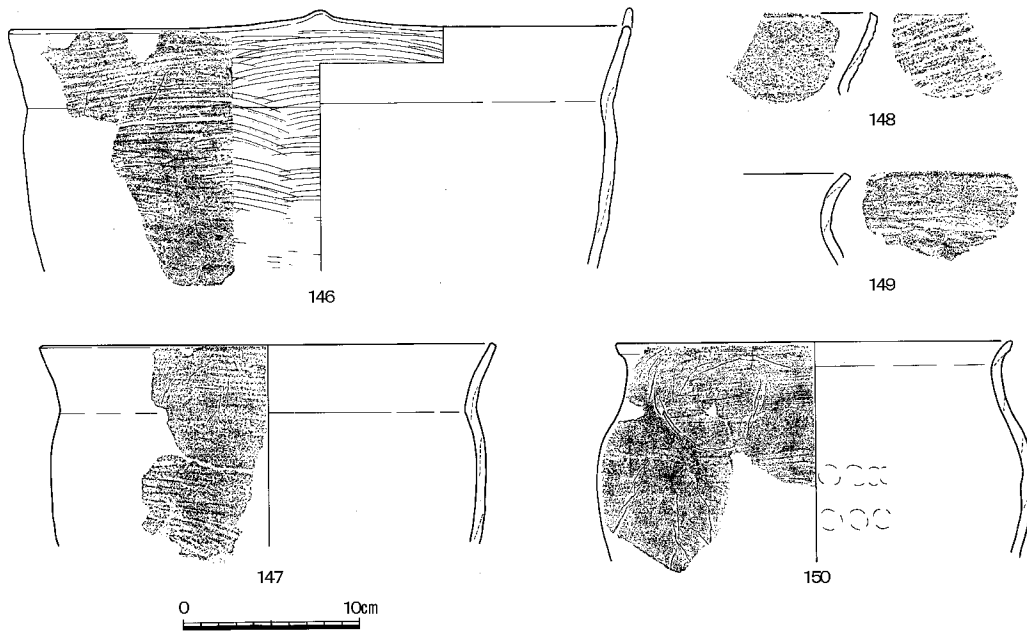


第181図 土器溜まり6出土遺物① (1/4, 1/2)

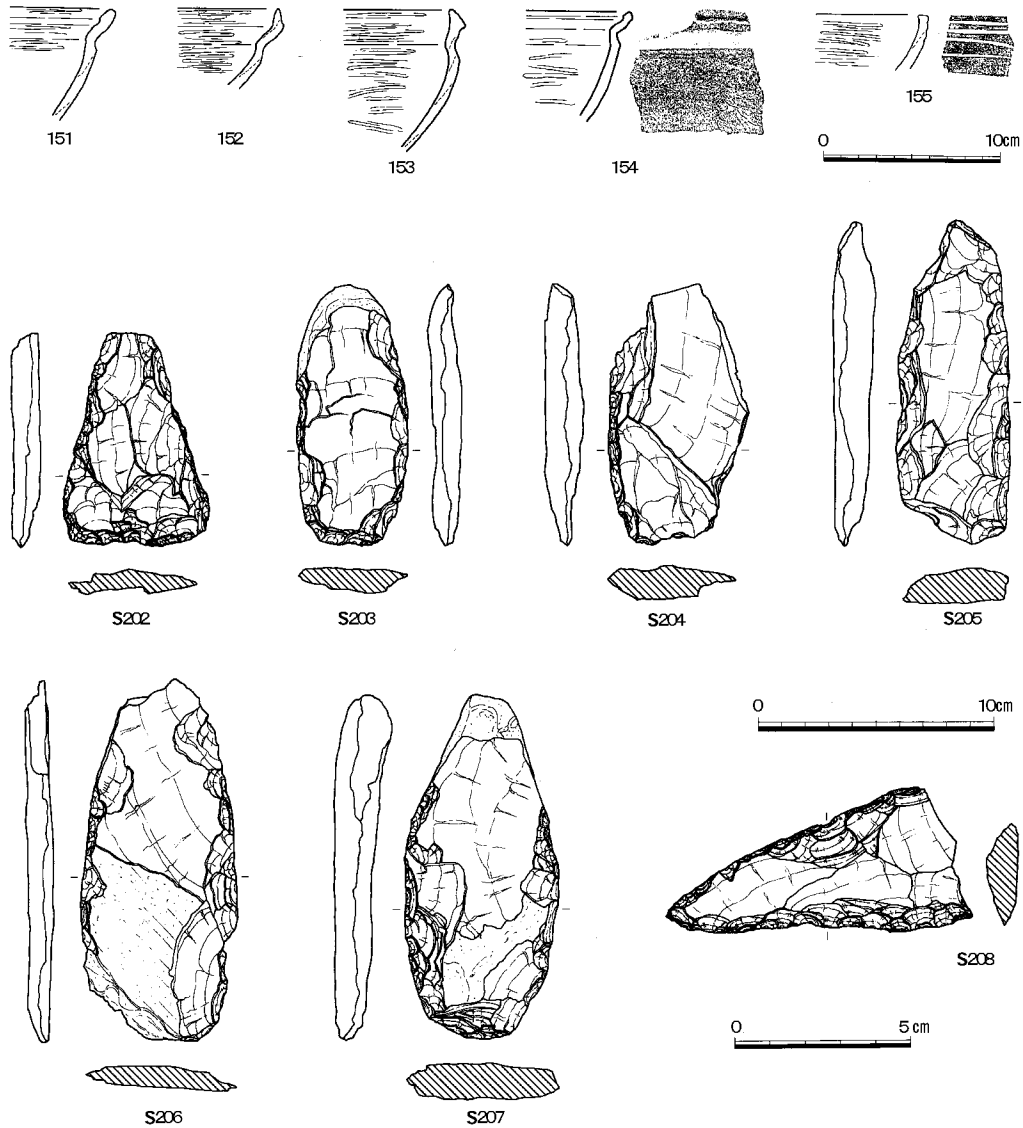
第3章 発掘調査の概要



第182図 土器溜まり6出土遺物② (1/2,1/3)



第183図 土器溜まり7出土遺物① (1/4)



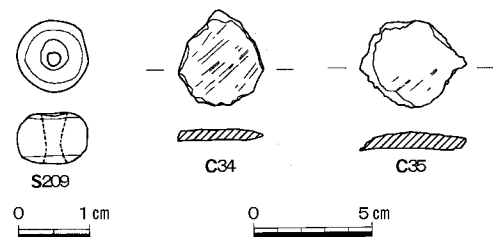
第184図 土器溜まり7出土遺物② (1/4,1/3,1/2)

土器溜まり8 (第19・186図、図版12・35)

4005Db区の微高地の若干窪みを呈する面において検出された。8×7.5mの範囲に土器片が集中し、土器溜まりを形成していた。土器片等は数cmの上下関係を示し検出されている。

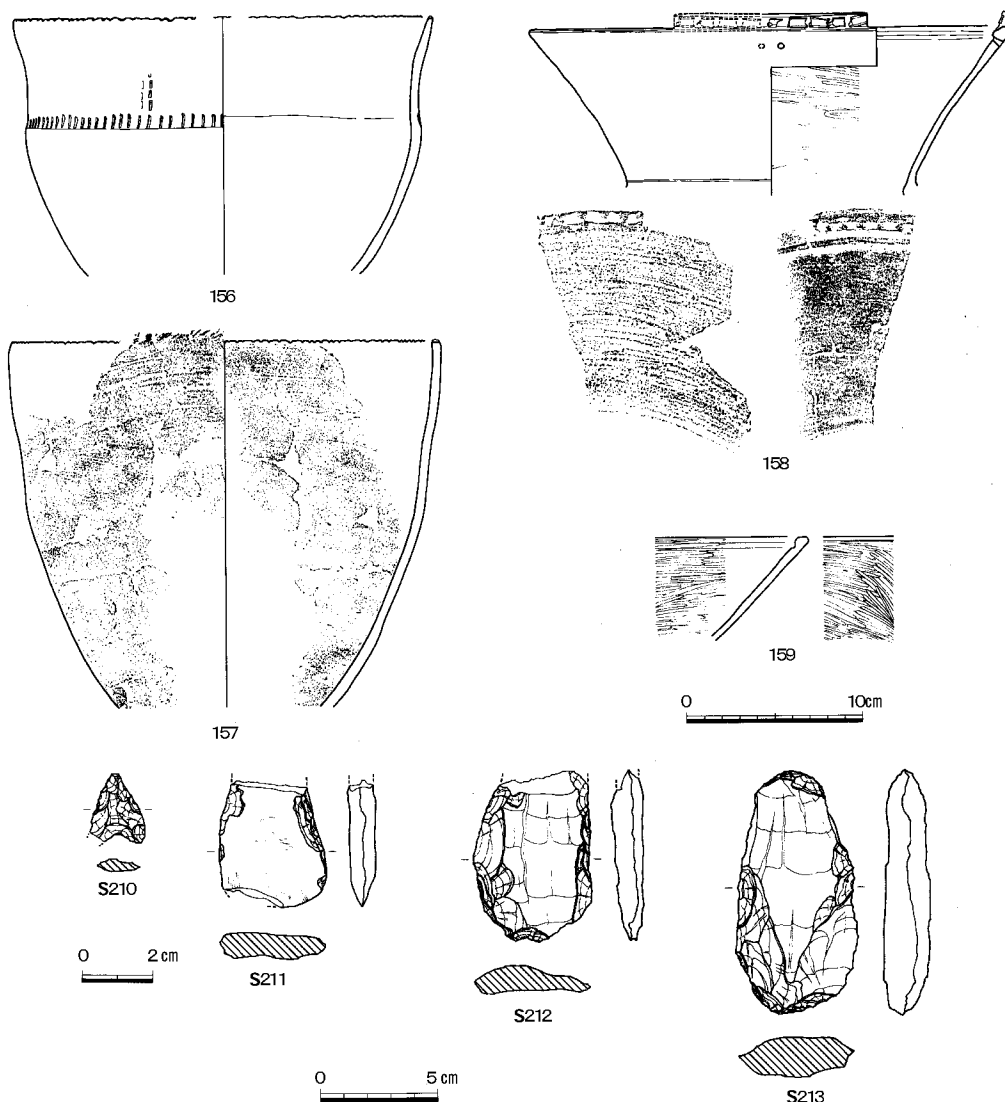
遺物の集中する地区は全体的に窪みが、北東から蛇行しながら南西方向へと続き、おおむね北が高く、南が低いという傾向が認められる。後世の洪水によって削平された部分である微高地に生活の拠点があり、そこで壊れた土器等を斜面下に廃棄したものと推測される。

出土した土器には精製・粗製の鉢、サヌカイト製、緑色片岩製の石器がある。



(二宮) 第185図 土器溜まり7出土遺物③ (1/1,1/3)





第186図 土器溜まり8出土遺物(1/4,1/2,1/3)

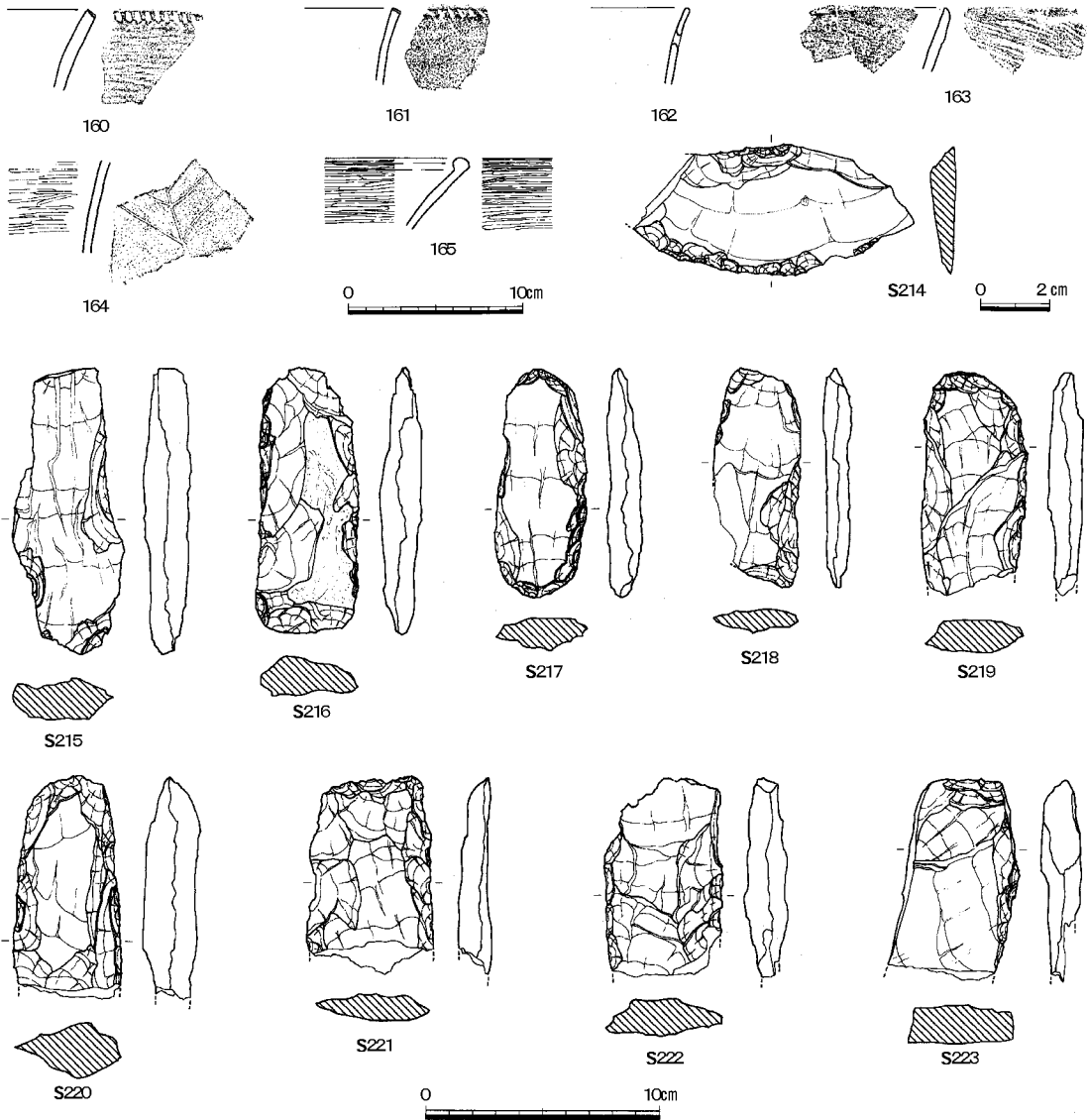
土器溜まり9 (第19・187図、図版12・35)

土器溜まり8から南へ約13m下がった4007Dd区北辺において検出された。東西5m、南北2.5m程度の範囲内にかなりの遺物が集中して土器溜まりを形成していた。微高地上で南北に延びるわずかな窪みで土器溜まり8と同様に遺物の堆積が認められた。

遺物の集中する位置は、土器溜まり8から続いて20数mの長きの範囲であったであろうが、窪み部分で最も深くなっていた場所にのみ残存し、その他は後世の洪水等の自然削平により、微高地上の生活面、それ以下おも消滅し、図示した範囲の位置でのみ廃棄されたものと推測される遺物の集中した部分を確認することができた。

この土器溜まり9への廃棄され投入された遺物で復元できる土器はなかった。

出土した土器の中には精製されたものや、粗製の鉢がある。160・161は有文の深鉢。164は内面、165は内外面を丁寧にヘラミガキを施した鉢。石器にはスクレイパーと石鋏とがある。スクレイパーS214はサヌカイト製、石鋏S215～223は緑色片岩製、縄文晩期に比定される。 (二宮)



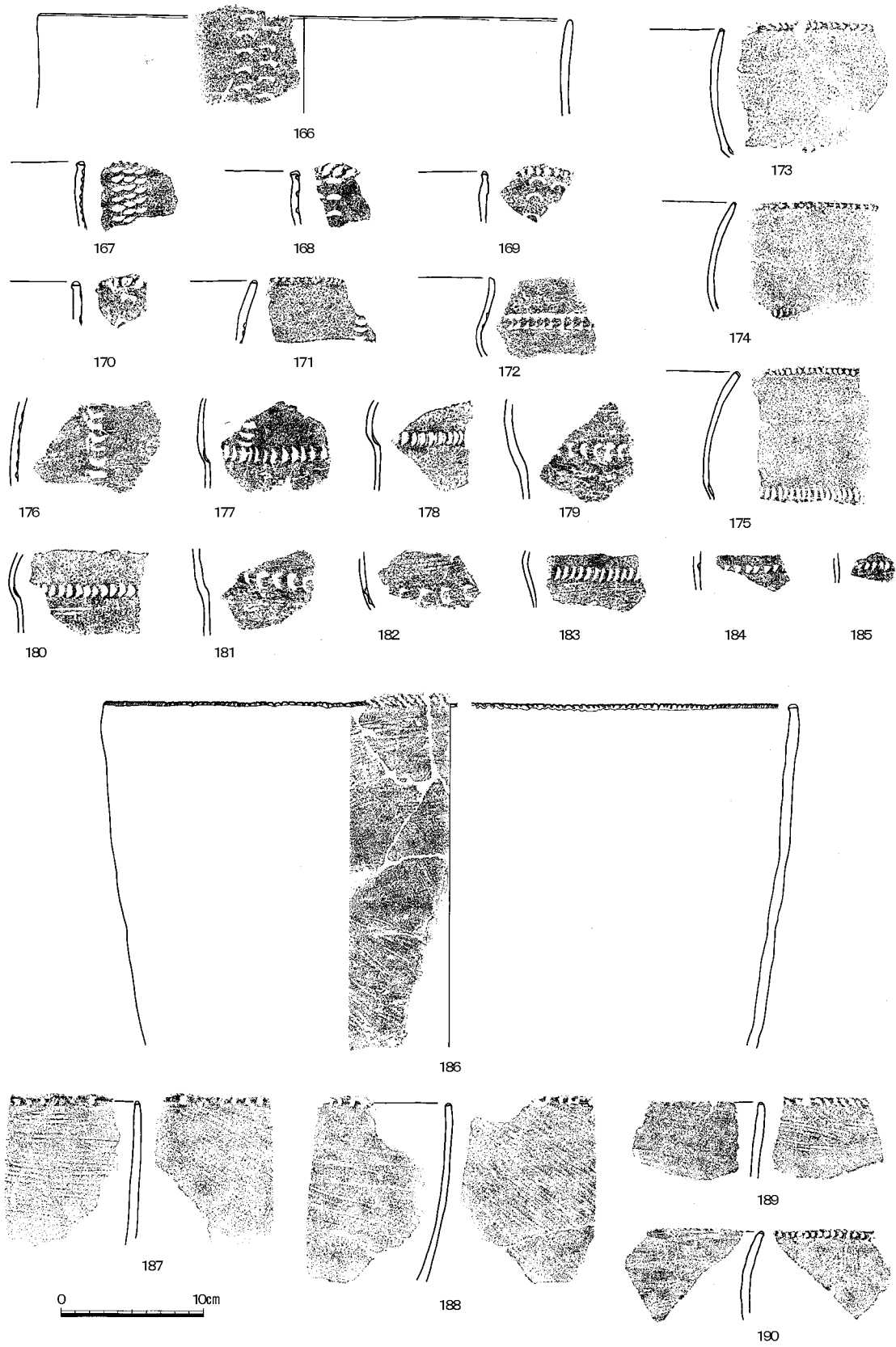
第187図 土器溜まり9出土遺物 (1/4,1/2,1/3)

土器溜まり10 (第21・188・189図、図版12~14・35)

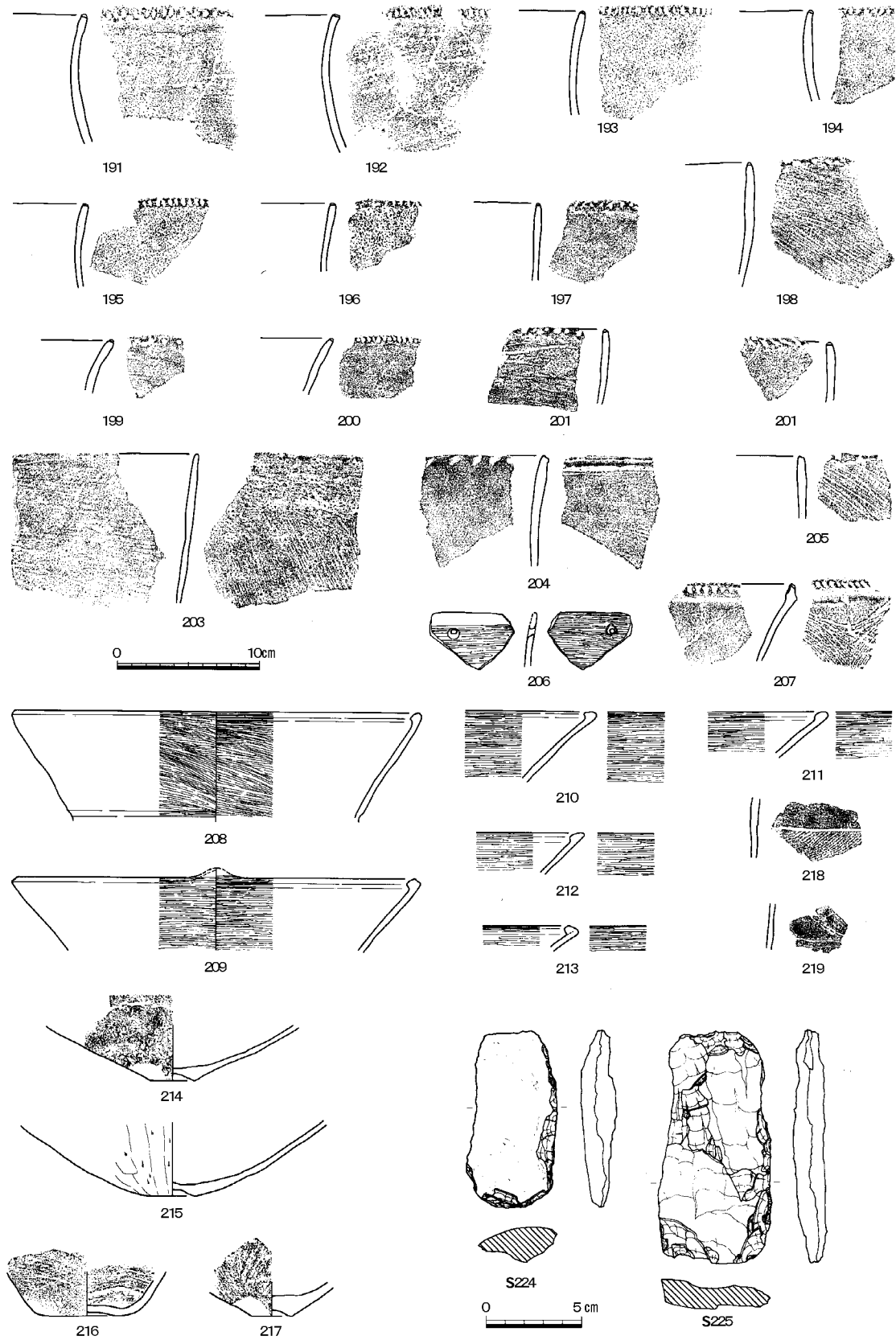
微高地1の4105Da区において検出した。河道1にむかって傾斜した部分の約5×3mの範囲から面的に土器がまとまって検出できたため、これらの土器群を土器溜まり10として報告する。

166~170は深鉢の口縁部で、突起部分にあたる。口唇部に刻み目があり、調整は内外面ともナデで、外面には縦方向に爪形文が認められる。171・176も深鉢口縁部で、外面に縦方向の爪形文が施されている。173~175は深鉢口縁部から胴部の破片で、口唇部に刻み目、胴部との境に横方向の爪形文を施している。177~185も口縁部から胴部で、横方向の爪形文が観察できる。186~188はバケツ形の深鉢で、口唇部に刻み目を施し、内外面とも二枚貝条痕仕上げである。191~200は爪形文をもつ深鉢と同じ破片であろう。208~213は浅鉢で、口縁部内面を肥厚させ、内外面とも丁寧なミガキが施されている。214・215・217はくぼみ底の底部である。以上のような土器は縄文時代晩期中葉と考えられる。218は縄文が施されており、彦崎KⅡ式であろう。S224・S225は石鍬である。 (平井)

第3章 発掘調査の概要



第188図 土器溜まり10出土遺物① (1/4)

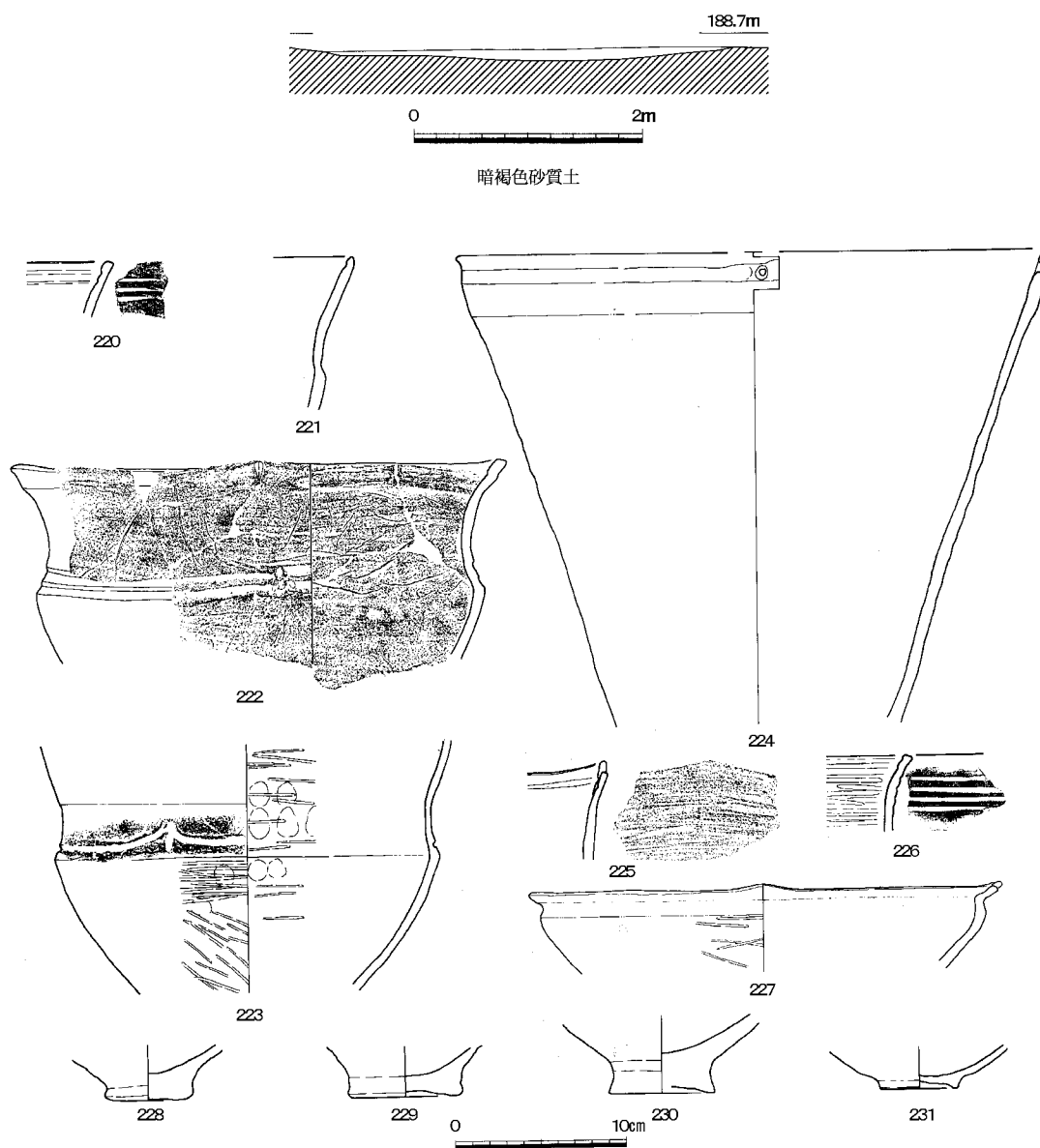


第189図 土器溜まり10出土遺物② (1/4, 1/3)

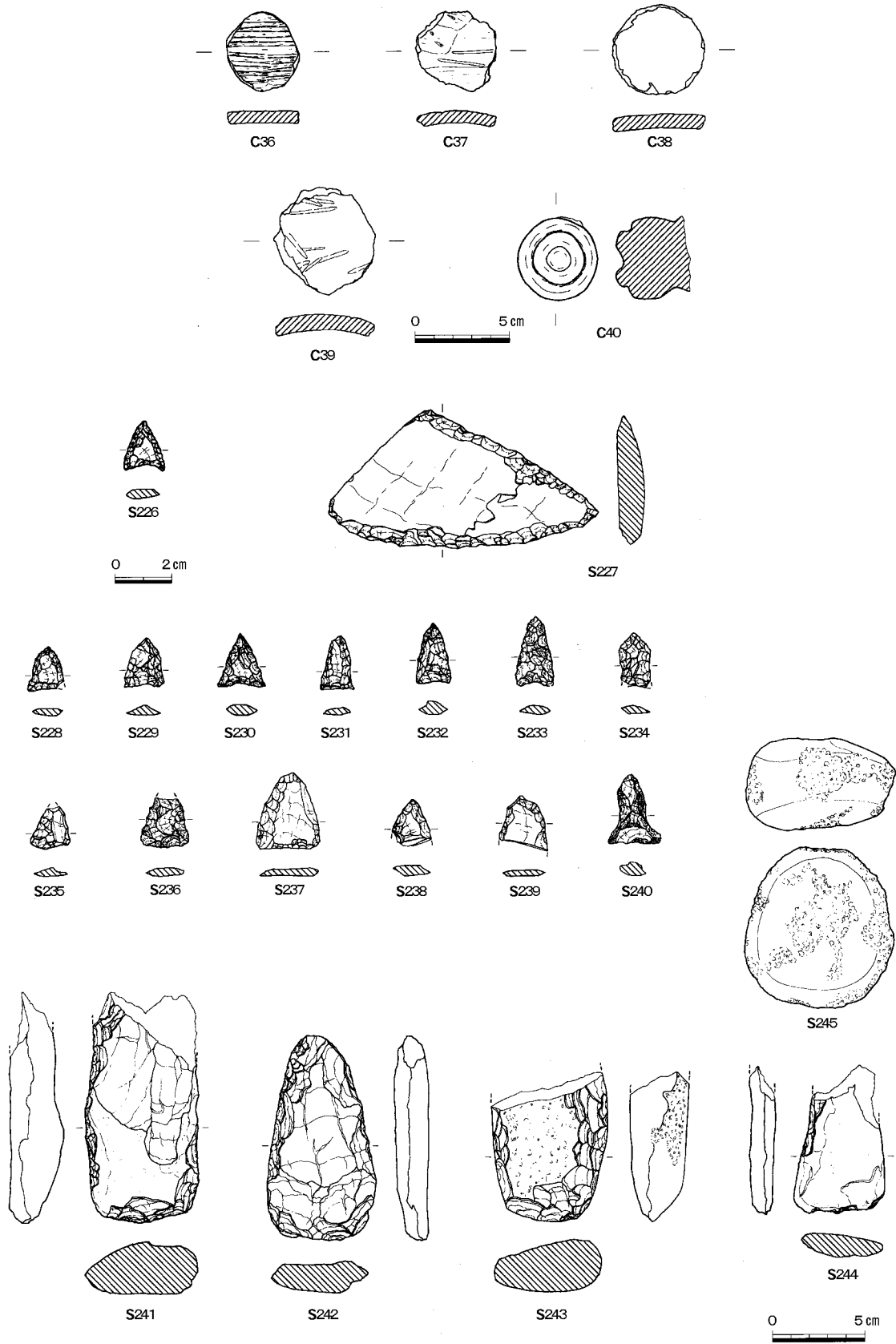
## 8 窪地

窪地1 (第17・190・191図、図版14・35・36・48)

4 0 05～4 0 08Cb区に位置する。縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土を除去した後に、窪地状になった部分が検出された。埋土は暗褐色砂質土である。当窪地は南に下ると西側の肩が不明瞭になるため、地形の段差部分に形成された土器溜まりとして理解するべきかもしれない。出土土器には図示が可能であったものとして、深鉢220～225と浅鉢226・227および底部228～231がある。深鉢の口縁端部は内傾し、内面には袈りや沈線が施され、口縁部と胴部の境には数条の沈線が施されるものも多く、また波状口縁をもつものが含まれるなど、晩期初頭の様相を示しており、層位からの検討とも矛盾しない。そのほかの遺物として土器片再利用の円盤状土製品が確実なものとして4点、不明土

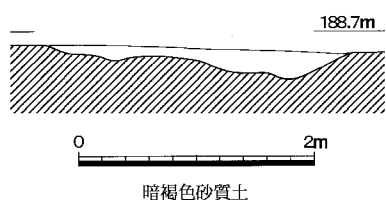


第190図 窪地1 (1/60)・出土遺物① (1/4)



第191図 窪地1出土遺物② (1/3, 1/2)

第3章 発掘調査の概要



第192図 窪地2 (1/60)

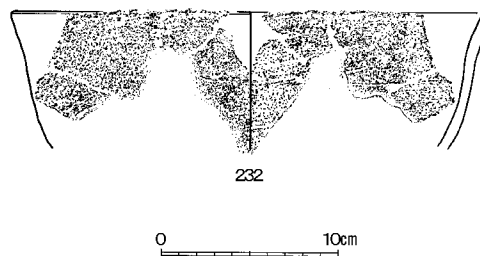
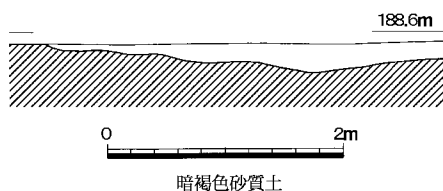
出土遺物はなく、自然に形成された窪地である可能性もある。遺構の時期は出土レベルから判断して、晩期初頭であると考えられる。

(河合)

窪地3 (第17・193図)

4 0 06Ca区に位置する。縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土を除去した後に、窪地状になった部分が検出された。出土遺物として深鉢232が検出されたのみで、自然に形成された窪地である可能性もある。遺構の時期は出土レベルから判断して、晩期初頭であると考えられる。

(河合)



第193図 窪地3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

窪地4 (第17・194・195図、図版14)

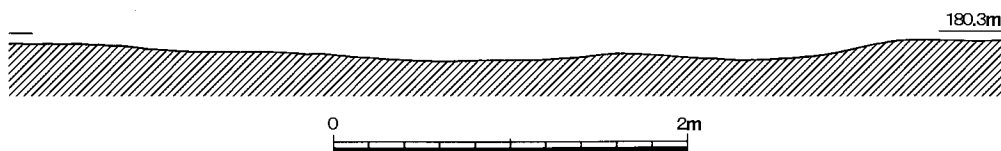
微高地2の北西部の4 1 01Cb～4 1 04Ca区において、約30×25mの範囲に窪地が検出でき、土器片が出土している。

図示できた遺物は少ないが、縄文時代晩期の深鉢と浅鉢である。233は口縁端部外面に少し面をもち、その部分にヨコ方向に沈線を、また波状口縁の波頂部には刺突を施している。237・238の口縁部外面にはやや幅の広い沈線が観察できる。243は浅鉢で、波状口縁の波頂部と肩部に刺突を施し、調整は内外面とも丁寧なヨコミガキである。これらの土器は縄文時代晩期前葉であろう。

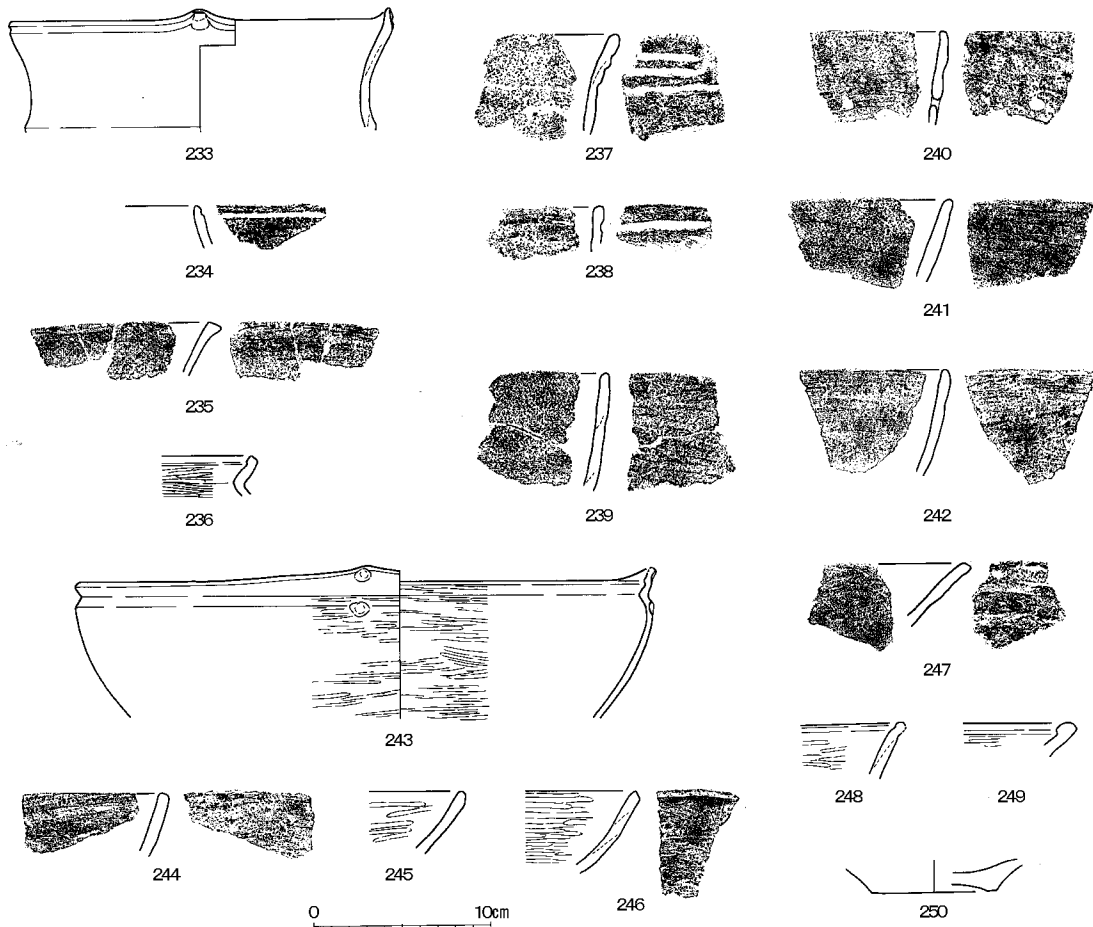
(平井)

窪地5 (第18・196・197図、図版14・47)

微高地2の中央東寄り、河道1の西岸にあたる4 1 01Cg区から検出された窪地で、洪水などにより何度か掘り窪められたものと考えられ、同様の窪地は周辺にも数か所検出されたが遺物を伴ったのは

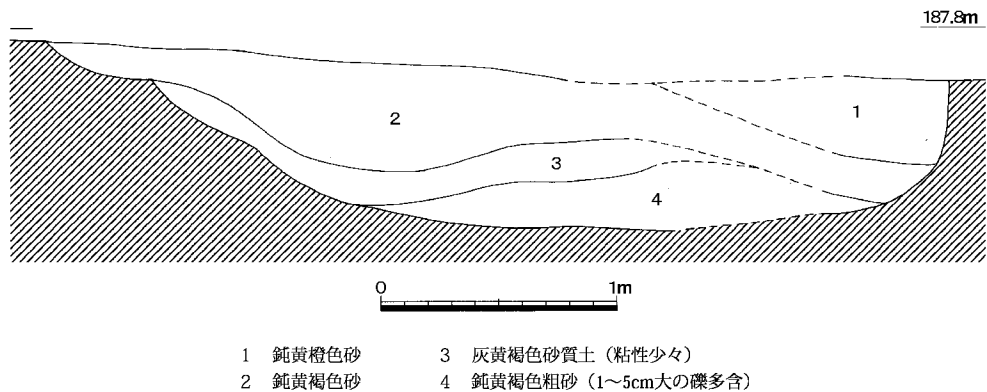


第194図 窪地4 (1/40)



第195図 窪地4出土遺物 (1/4)

当窪地のみであった。規模は7×4m、深さ約70cmを測り、窪地内からは深鉢251～258、浅鉢259～265、円盤状土製品C41～48などが出土した。土器は外面に縄文を施す264や結節縄文の265など後期後葉まで遡る浅鉢を始め、晩期前葉と考えられる深鉢251・253～255、浅鉢256・261～263、晩期中葉と考えられる深鉢252・257などがある。(江見)

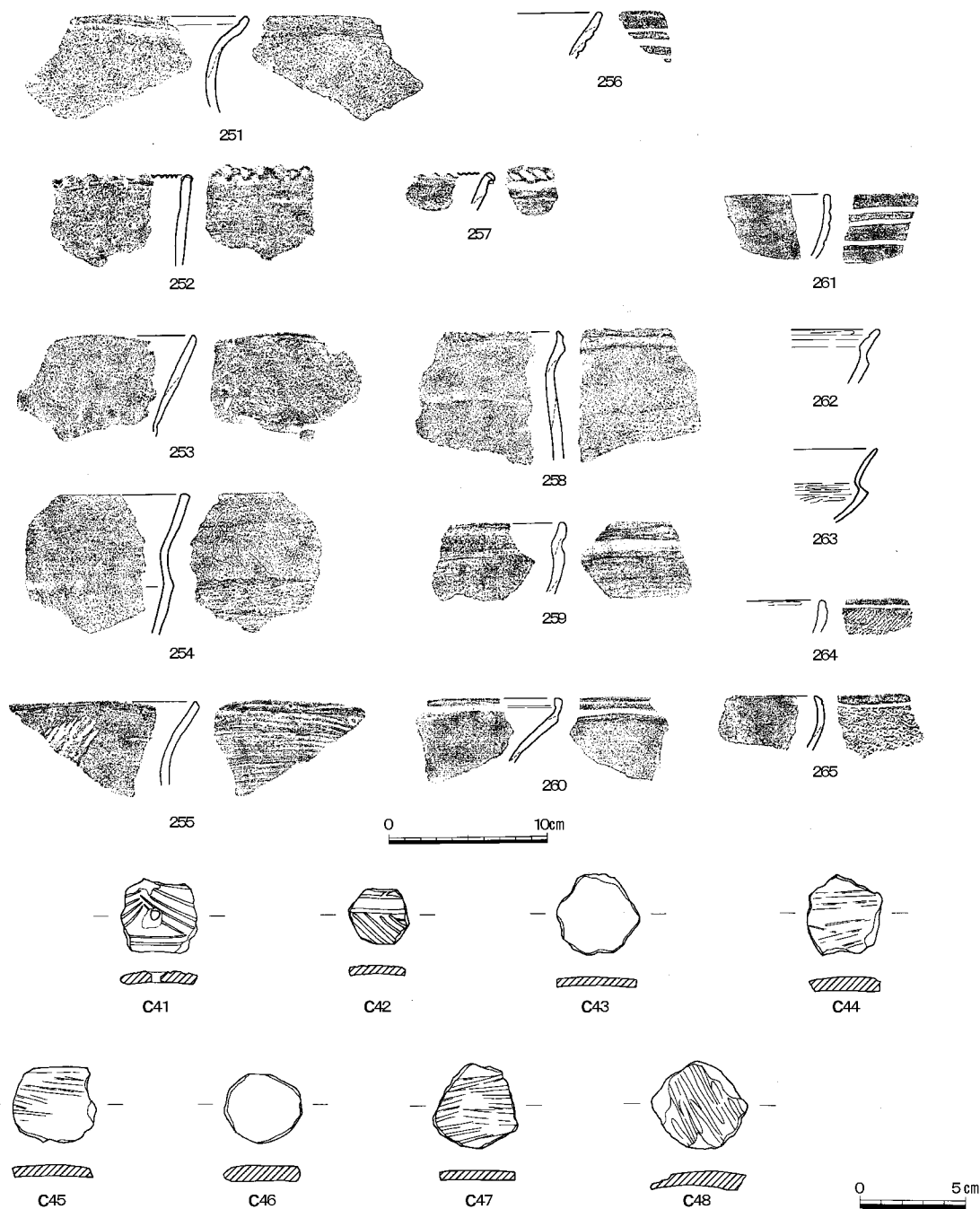


- |         |                      |
|---------|----------------------|
| 1 鈍黄橙色砂 | 3 灰黄褐色砂質土(粘性少々)      |
| 2 鈍黄褐色砂 | 4 鈍黄褐色粗砂(1~5cm大の礫多含) |

第196図 窪地5 (1/30)



第3章 発掘調査の概要

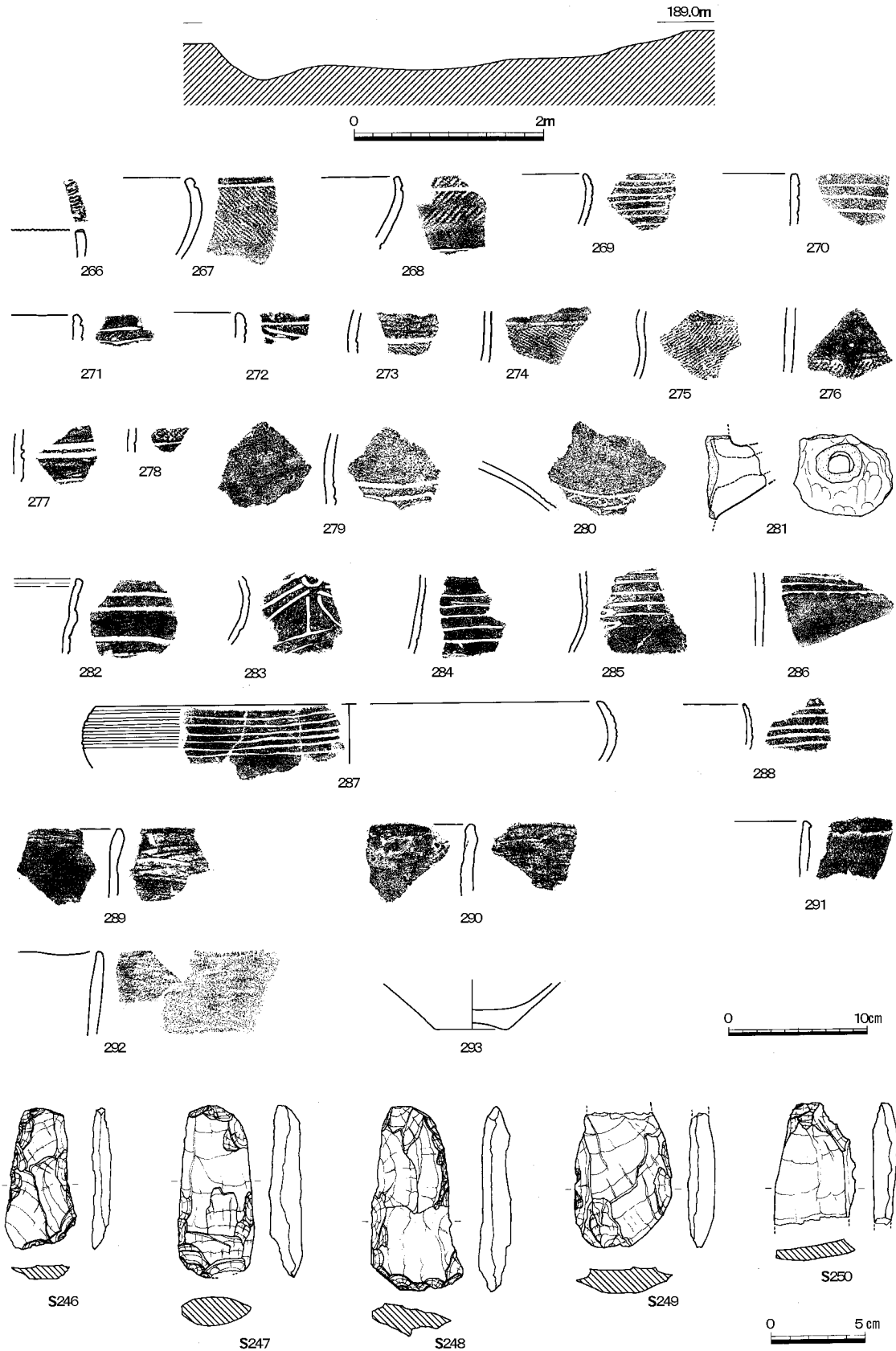


第197図 窪地5出土遺物 (1/4,1/3)

窪地6 (第19・198図、図版14・36)

4 0 0 4 C j区北東隅部によった位置で検出された平面が不整長楕円形の形態を呈し、長軸をほぼ東西方向に向けた一見土壇状の形状を示し長さ5.05mである。しかし、掘り方にいたっては何か不自然な形状で底面は徐々に北西に下がり、人為的と判定しがたく、洪水の削平でできたと判断したい。

窪地内から出土する遺物は土器溜まりと同様のものであり、精製されたもの、粗製のもの、さらに石器等である。土器では281の注口部分以外は鉢形である。石器は石鎌で緑色片岩製がS 246~249、S 250は黒色片岩製である。時期は縄文晩期と考えられる。(二宮)



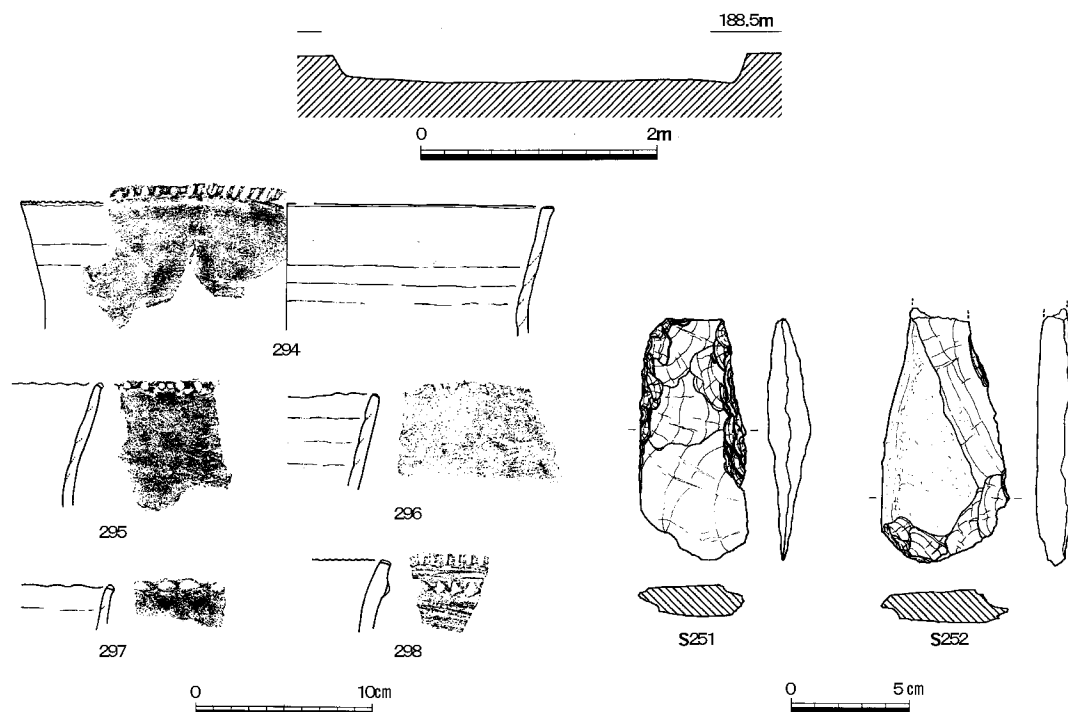
第198図 窪地6 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)

### 第3章 発掘調査の概要

#### 窪地7 (第19・199図、図版15・36)

窪地6から南東約83m下がった位置で、検出面での平面形の違いはあるが同様の状況で検出されるが全容は不明、現存の部分では不整形形状の平面形が推測でき、幅3.55mを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は逆「ハ」の字状に立ち上がる。深さは20cmを測る。

出土遺物は有文の深鉢で、298は突帯文を飾る。石器は緑色片岩製の石鍬でS252が基部を欠損する。時期は、縄文晩期と考えられる。(二宮)



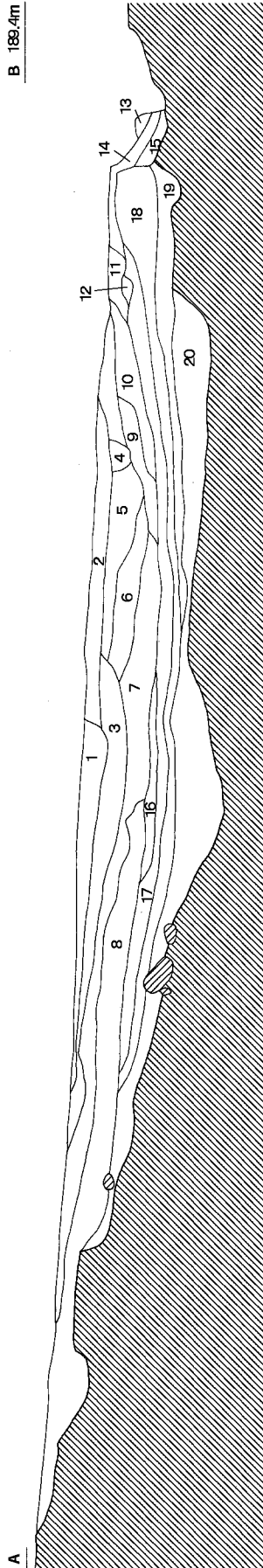
第199図 窪地7 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)

## 9 河道

#### 河道1最上流部 (第16・200・202~205図、図版5・15・16・36~38)

39 07Cd~40 01Cf区にかけて検出した。久田原遺跡の西を画す河道3Aから続く河道であり、これより下流は、弥生時代の河道4とほぼ流路が重なりながら南に流れる。

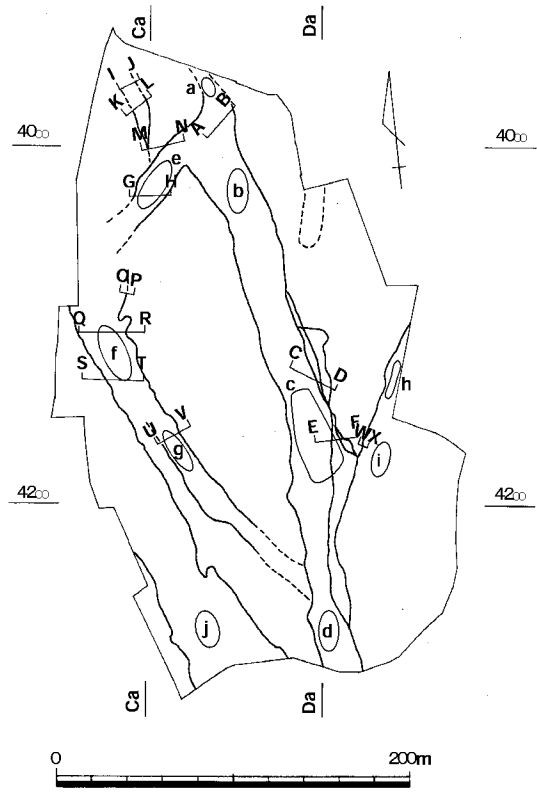
1~6層を上層、7~12層を中層、16~19層を下層、20層を最下層として調査を行った。299~308・312は、上層からの出土で、299や302は河道検出時に出土している。肩部に羊歯状文を飾る壺312は、308とともに他地域からの搬入品で、大洞C1~C2式に併行する。309~311・313~320は中層出土である。三叉文を飾る311は、壺もしくは注口土器で、大洞BC式に併行する。ほかには、注口土器317があり、浅鉢では口縁部内面に沈線をめぐらす。これらの多くは、8層に含まれていた。晩期中葉でも新しい様相を示すと考えたい。321~333は下層から、334~337は最下層から出土している。浅鉢326は、口縁外端部に沈線を施す。晩期前葉に位置付けられる。338~358までは、各層から出土した後期中葉から末葉までの土器である。結節縄文が目立つ。(弘田)



B 189.4m

- |                  |             |
|------------------|-------------|
| 1 灰黄褐色細砂         | 11 黄褐色微~細砂  |
| 2 明黄褐色微~細砂土      | 12 鈍黄褐色砂    |
| 3 鈍黄褐色微細砂        | 13 鈍黄褐色微細砂土 |
| 4 褐色細砂           | 14 明黄褐色細砂   |
| 5 鈍黄褐色細砂         | 15 橙色細砂     |
| 6 灰黄褐色細砂         | 16 鈍黄褐色細砂   |
| 7 浅黄褐色細砂         | 17 鈍黄褐色粘質土  |
| 8 灰黄褐色砂          | 18 黄褐色粘質土   |
| 9 鈍黄褐色細砂         | 19 鈍黄褐色粘質砂土 |
| 10 浅黄褐色砂粗砂 (小石含) | 20 鈍黄褐色細砂   |

0 10m



- |              |                  |
|--------------|------------------|
| a : 河道1 最上流部 | f : 河道3 中流部東斜面   |
| b : 河道1 上流部  | g : 河道3 下流部 (北側) |
| c : 河道1 中流部  | h : 河道4 上流部西斜面   |
| d : 河道1 下流部  | i : 河道4 下流部西斜面   |
| e : 河道2 上流部  | j : 河道5 下流部      |

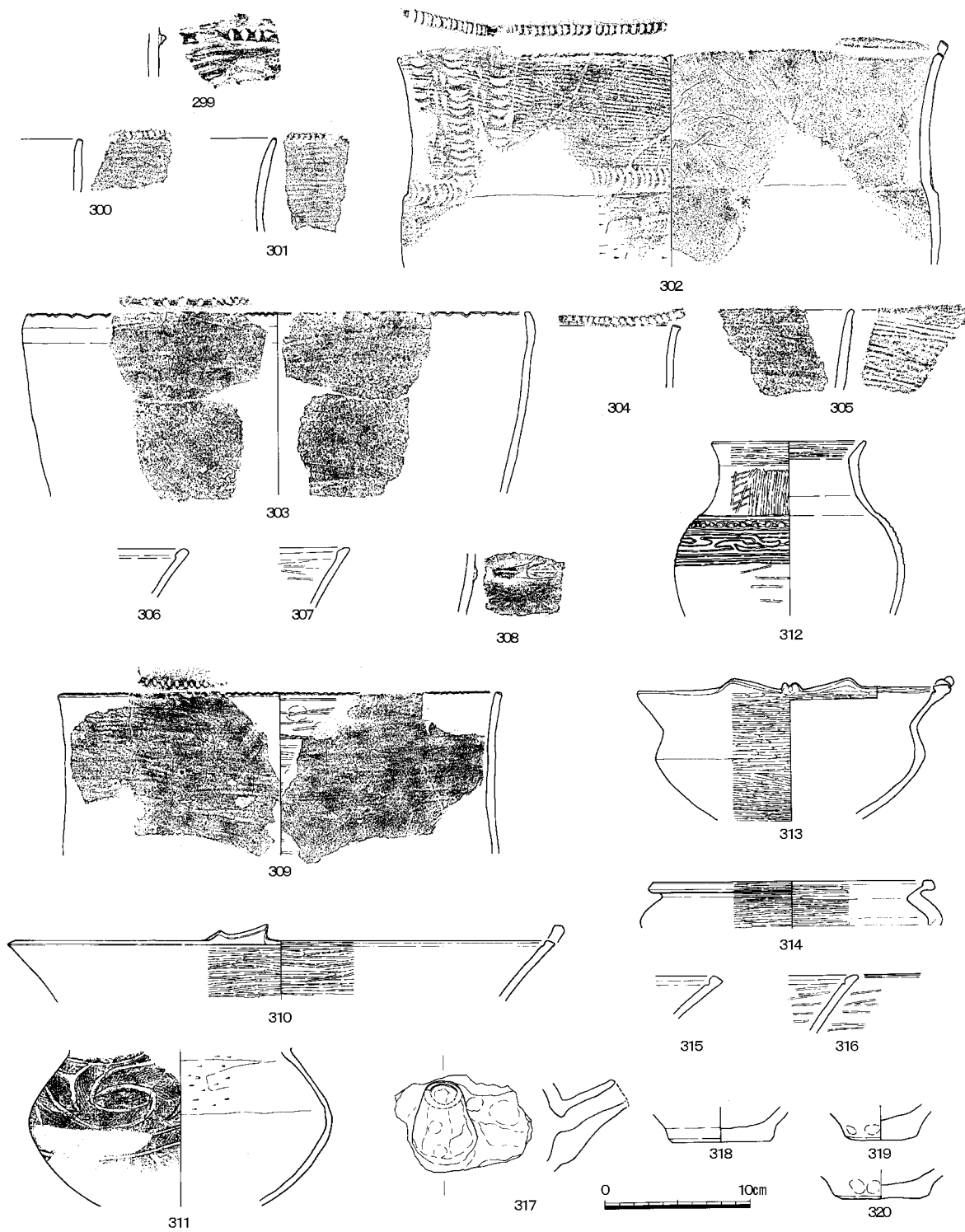
第200図 河道1 最上流部土層断面図 (1/150)

第201図 河道断面・遺物出土位置 (1/4,000)

第3章 発掘調査の概要

河道1上流部 (第16・18・206図、図版16・17・38)

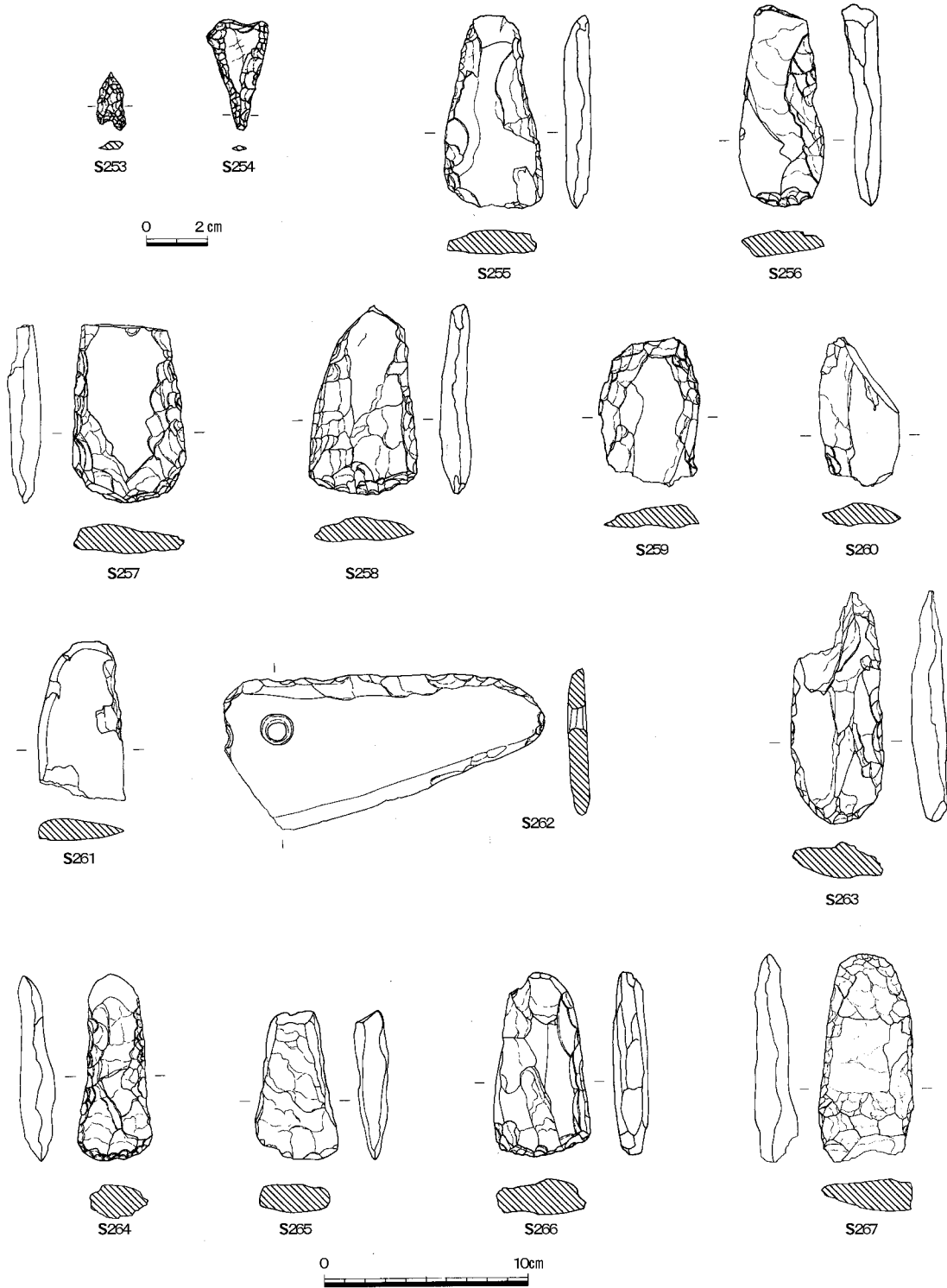
河道1と河道2の分岐部より南側、4 001Cc区から4 005Ch区の範囲を示す。この範囲は、ほぼ同一流路をとる弥生時代の河道7により大規模に削平され、河道両肩は検出されなかった。推定される



第202図 河道1最上流部上・中層出土遺物 (1/4)

河道幅は約25mである。掲載している遺物は河道7掘り下げ中ないしは河道7底面付近から出土しているものである。

出土遺物のうち土器は、後期中葉から晩期後葉までの時期幅が認められる。口縁内面に縄文および



第203図 河道1最上流部上・中層出土遺物(1/2,1/3)

第3章 発掘調査の概要

巻き貝による沈線を施文している359・360は彦崎K I 式に相当する。外面に結節縄文が施される362・364、口縁部外面を沈線で飾り縄文を施文する361・362・365~371などは、彦崎K II 式に併行しよう。372は、晩期中葉の谷尻式の深鉢、373は口縁部下に突帯を張り巡らせ、そこに刻み目が施される突帯文土器である。石器では、片岩製の石鍬S282~289、サヌカイト製の石鍬S290・291を図示している。出土した石鍬の形態は短冊形と撥形が認められる。石鍬の形態は無茎の平基鍬と凹基鍬が認められる。

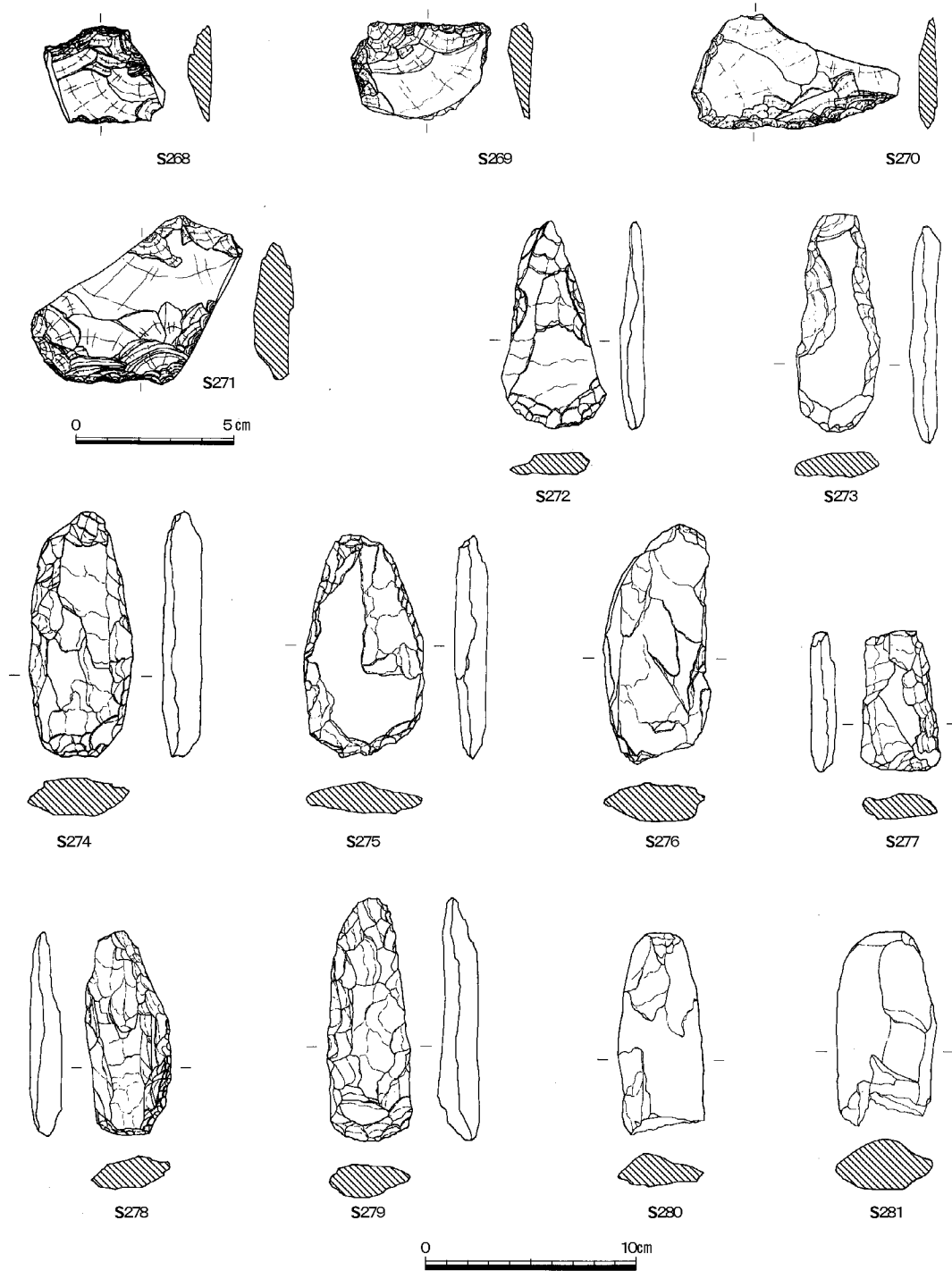
(小嶋)



第204図 河道1最上流部下層出土遺物① (1/4)

河道1中流部(第18・19図)

微高地2の中央東、4006Ce~4101Cg区から河道1中流部の西岸部分の長さ約70mを検出している。この辺りでの河道幅は約23m、深さ約1m測る。河道西肩から緩く斜めに下がり、断面逆台形状を呈す。第359図に示すとおり弥生時代(第8層)下の第9~第21層がこれにあたり、大きく第11・12層下と第21層下の二度の堆積が確認された。共伴遺物は少なく、図示し得た遺物は第251図の深鉢

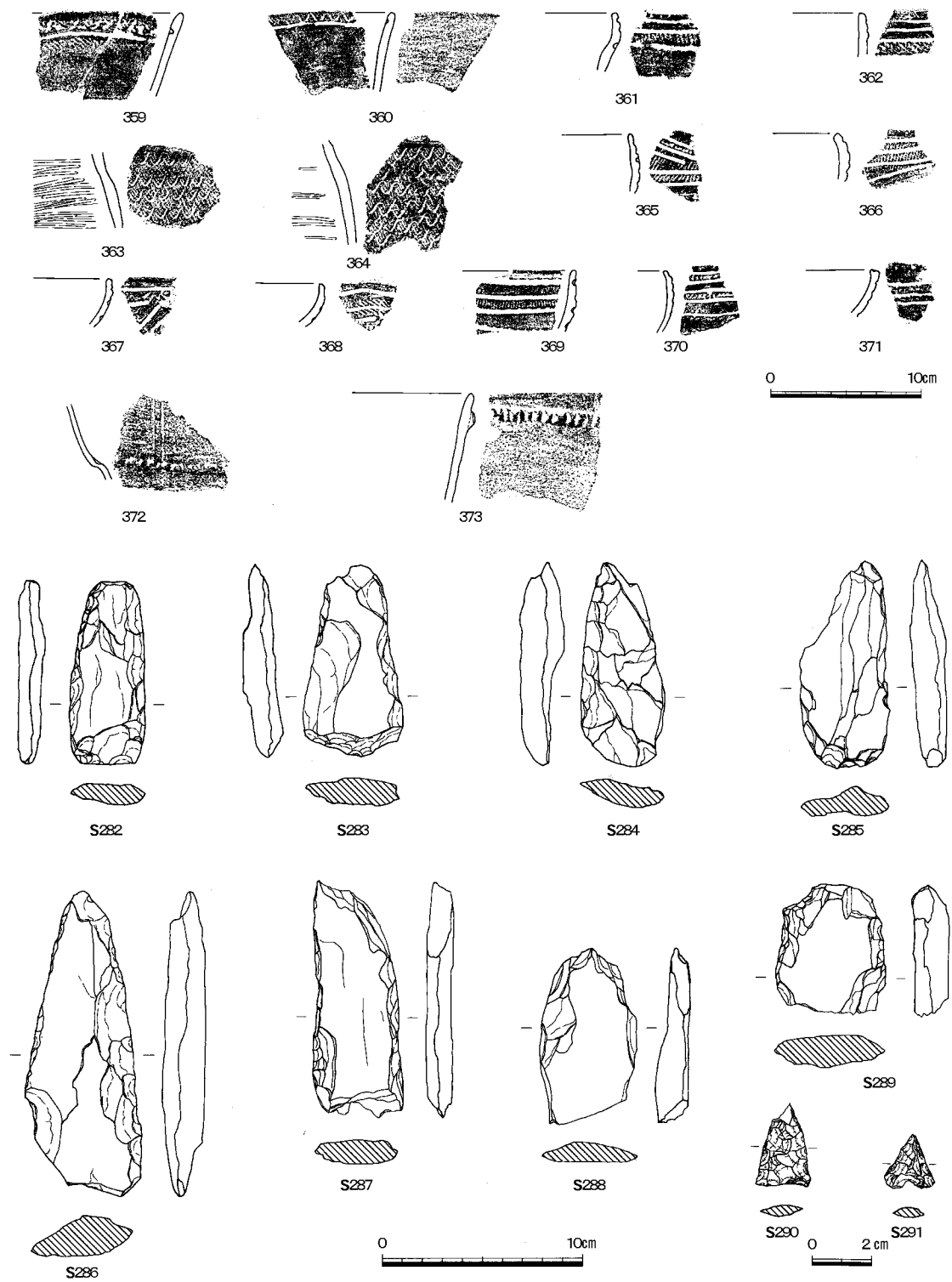


第205図 河道1最上流部下層出土遺物②(1/2,1/3)

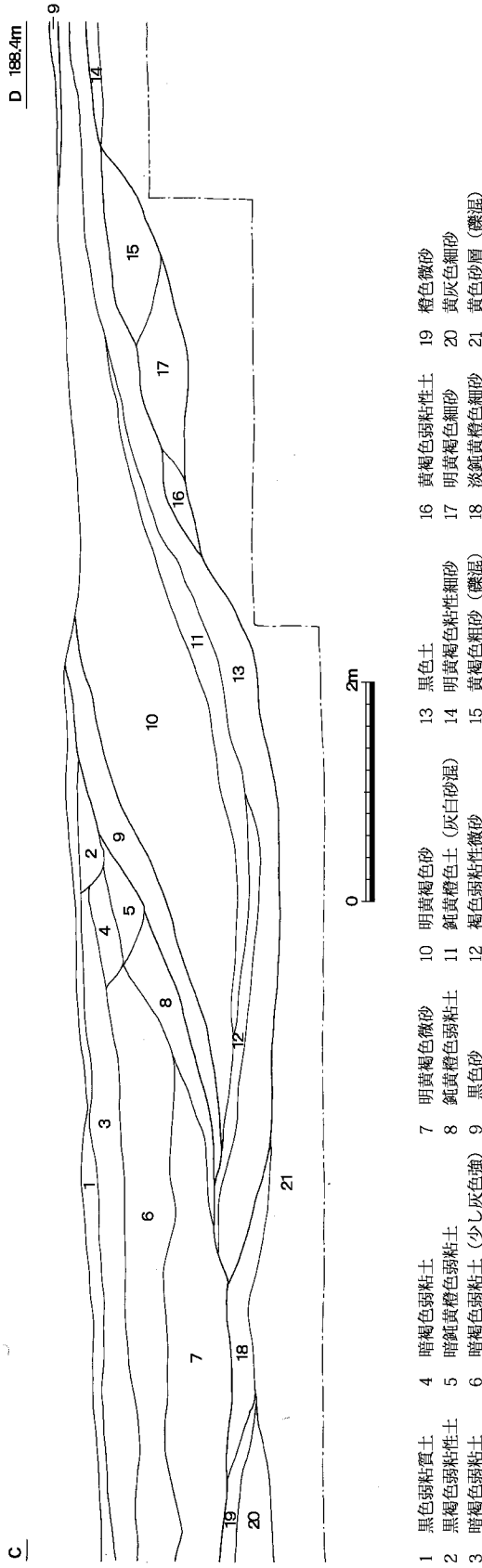


第3章 発掘調査の概要

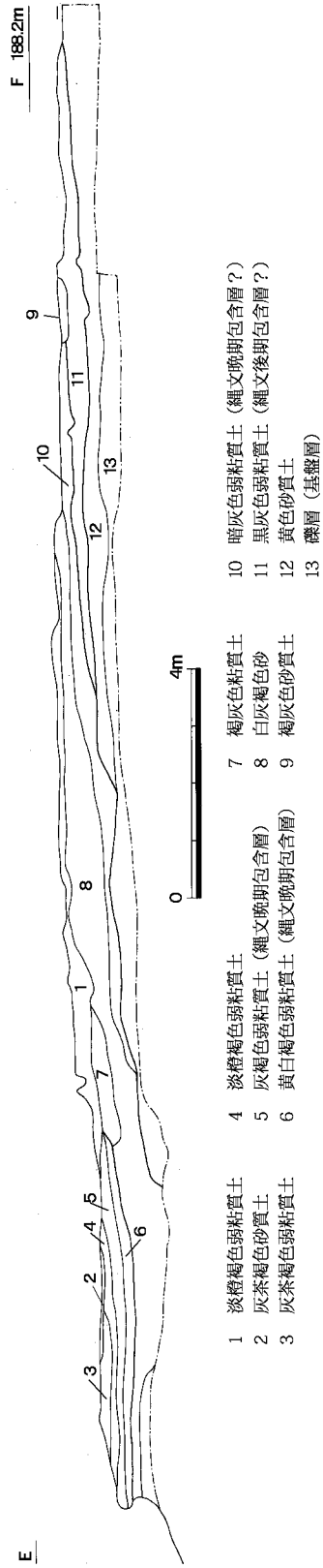
632・634・637、浅鉢641である。後期末と考えられる口縁外面端に縄文を施す637から、晩期中葉を示す口縁上面に刻み目が巡る634や蒲鉾状の粘土帯が張り付いた641、晩期後葉の突帯文が巡る632までの幅広い時代の土器が出土している。なお632は上部から、他は下部からの出土である。（江見）



第206図 河道1上流部上層出土遺物（1/4,1/3,1/2）



第207図 河道1中流部土層断面図 (1/60)



第208図 河道1中流部土層断面図 (1/120)

第3章 発掘調査の概要

河道1中流部（第18・19・21・209～211図、  
写真7・8、図版17・38）

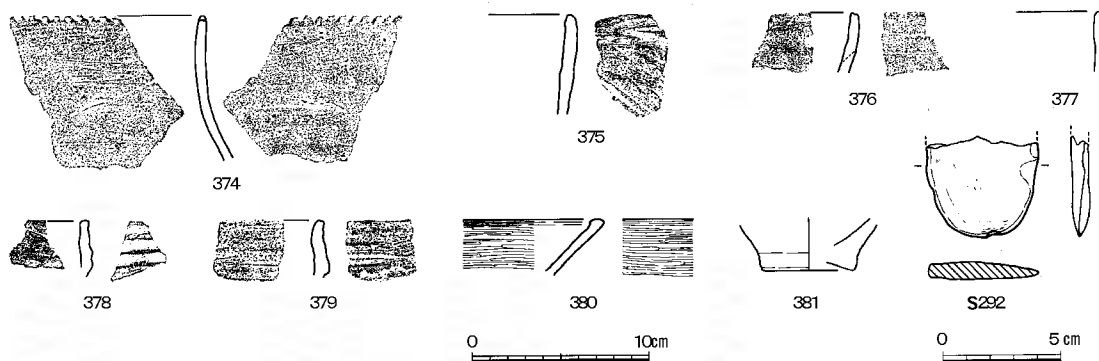
河道1のうち中流部の4 0 08Ch～4 1 03Da区の東斜面から出土した遺物を掲載している。

この部分の斜面部では、第207図の断面図に示したように大きく2回の時期の異なる堆積を確認することができた。

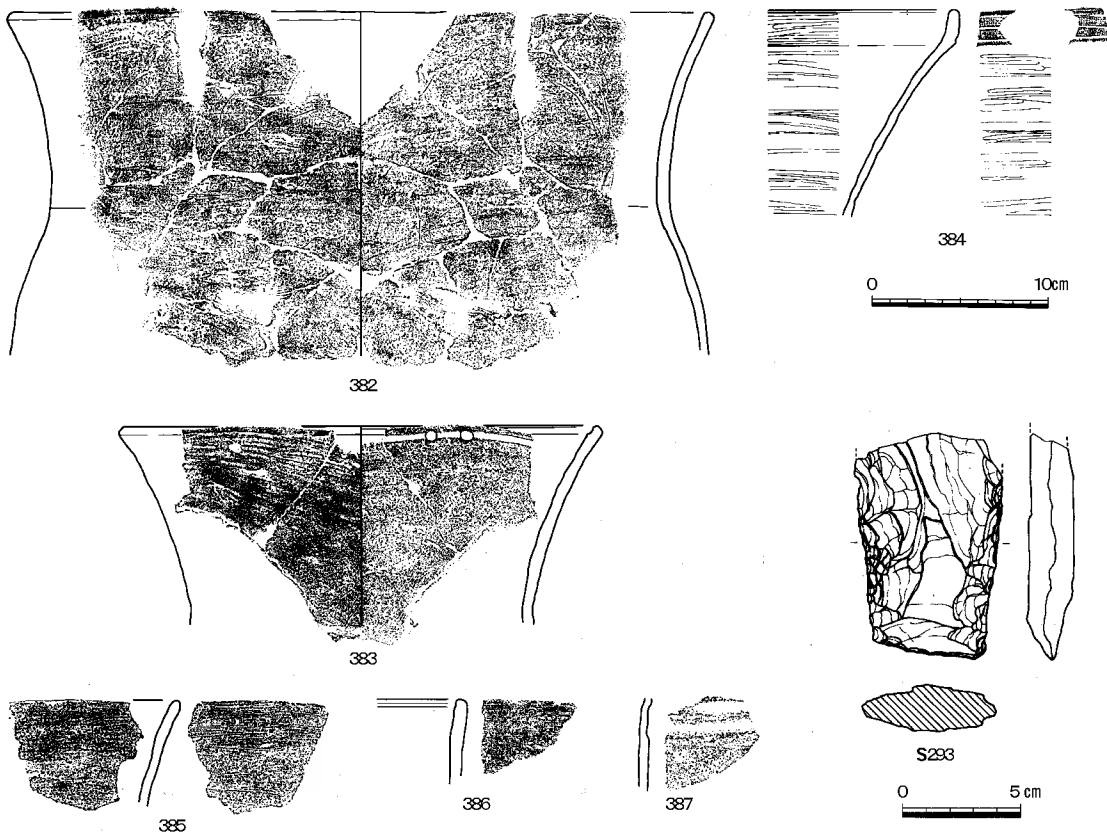
第207図に掲載した断面図では、1～9層から出土した遺物



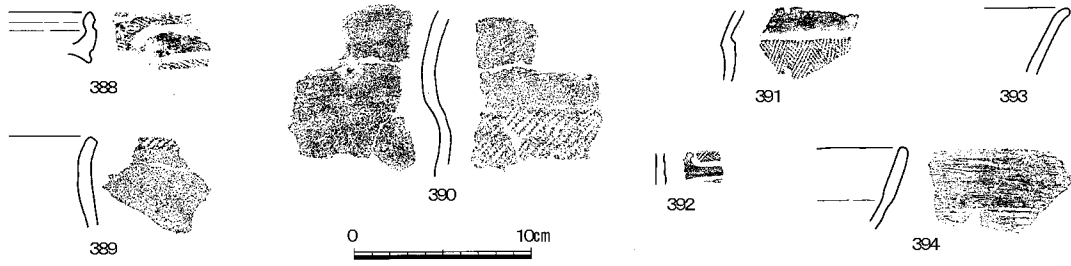
写真7 河道1中流部（南から）



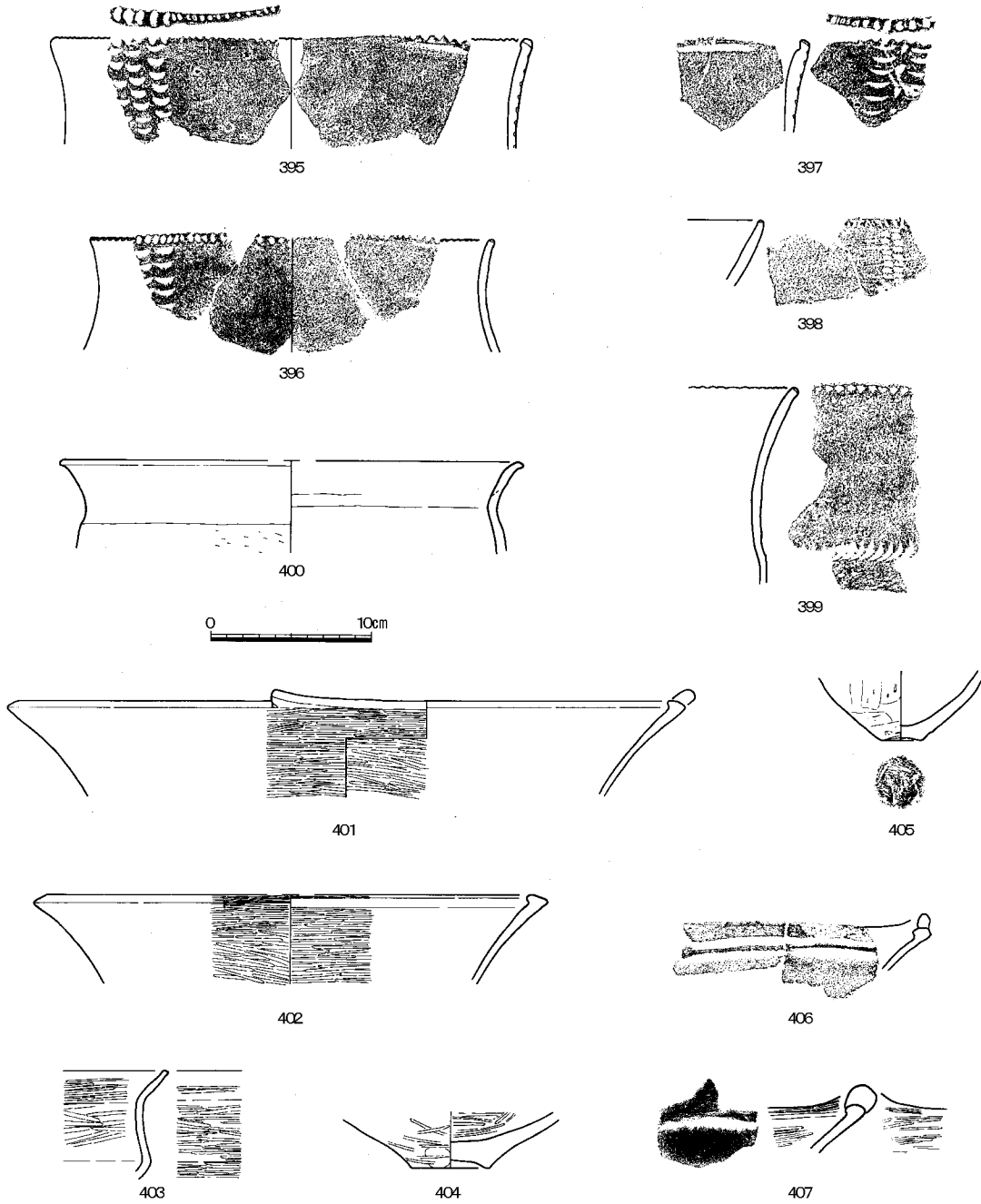
第209図 河道1中流部東斜面出土遺物（1/4,1/3）



第210図 河道1中流部東斜面①出土遺物（1/4,1/3）



第211図 河道1中流部東斜面②出土遺物(1/4)



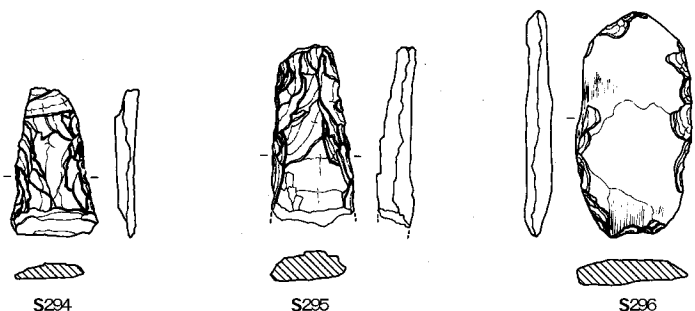
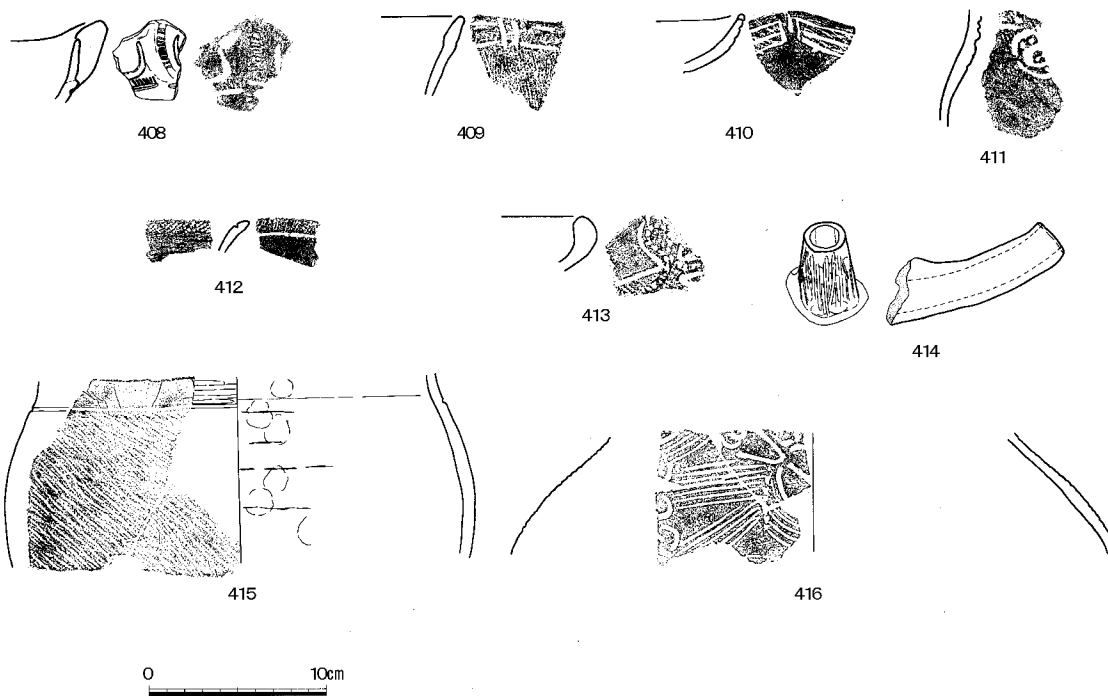
第212図 河道1下流部出土遺物①(1/4)



写真8 河道1中流部東斜面①(北から)

を東斜面①(第210図)、10~20層から出土した遺物を東斜面②(第211図)として掲載している。なお、第209図はどちらから出土したか不明の遺物である。

これらの土器のうち古いのは388で、口縁部を肥厚し外面には縄文地に沈線文を描いており、後期中葉である。次に384・389~393がその特徴から彦崎KⅡ式併行期であろう。次に378・383・387は巻貝条痕や凹線文といった特徴から福田KⅢ式併行期、そして374・380は「谷尻式」併



第213図 河道1下流部出土遺物②(1/4,1/3)

行期の深鉢と浅鉢であろう。その他375・385・394は晩期前葉の可能性が考えられる。

石器のうちS292は緑色片岩製の磨製石斧、S293は緑色片岩製の石鍬である。

こうしたことから、この部分の斜面は、394を除けば東斜面②が後期中葉に、そして東斜面①が後期末葉から晩期中葉に堆積したのではないかと考えられるが、断定するのは難しい。(平井)

河道1下流部 (第21・212・213図)

395~407は、晩期中葉(谷尻式)の鉢を中心にする。このうち400は、口縁端部に刻み目をもたず、体部にはヘラケズリを施す。408~416は、後期の土器である。408は中津式、409は肥厚する口縁部外面に文様帯をもち、その下に垂下条線を施す。津雲A式に併行する。410~413・415は彦崎KⅡ式併行である。注口土器414・416のうち、大形になる416の胴部は、3~4条の櫛歯状工具による集合沈線で飾る。加曾利B式併行で、搬入品の可能性が高い。(福田)

河道2上流部 (第16・17・214~217図、

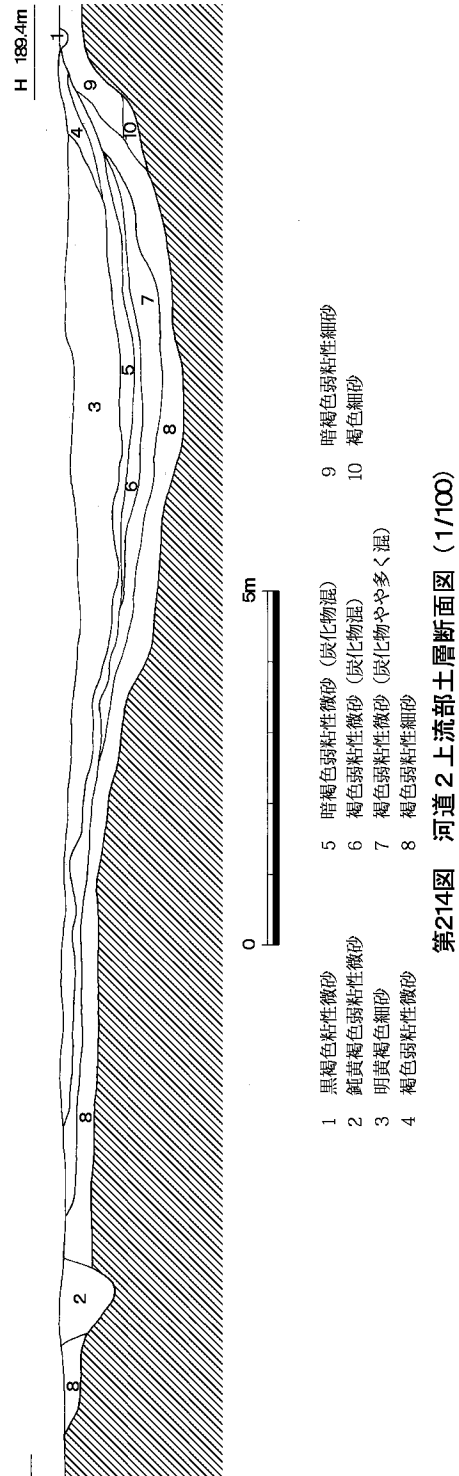
図版18・19・39・48、写真9)

3907Ce区~4002Bj区において、北東から南西にかけて流走する河道で、先述した河道1から分流するようであるが、ちょうど分岐点は弥生時代の河道7によって削り込まれている。また、この河道の起点は久田原遺跡の河道3東側にある谷状地形にある。なお、この河道2は弥生時代にも埋没せず深い窪地をなし、中期前葉から中葉にかけての土器を含んでいた。

遺物は、ほとんどが河道東側の斜面部からの出土であり、微高地2からの流入とみられる。後期から晩期末葉までの幅が存在する。なかでも417~431などの突帯文土器が、比較的多く出土している。口縁端部は先



写真9 河道2上流部 (北から)

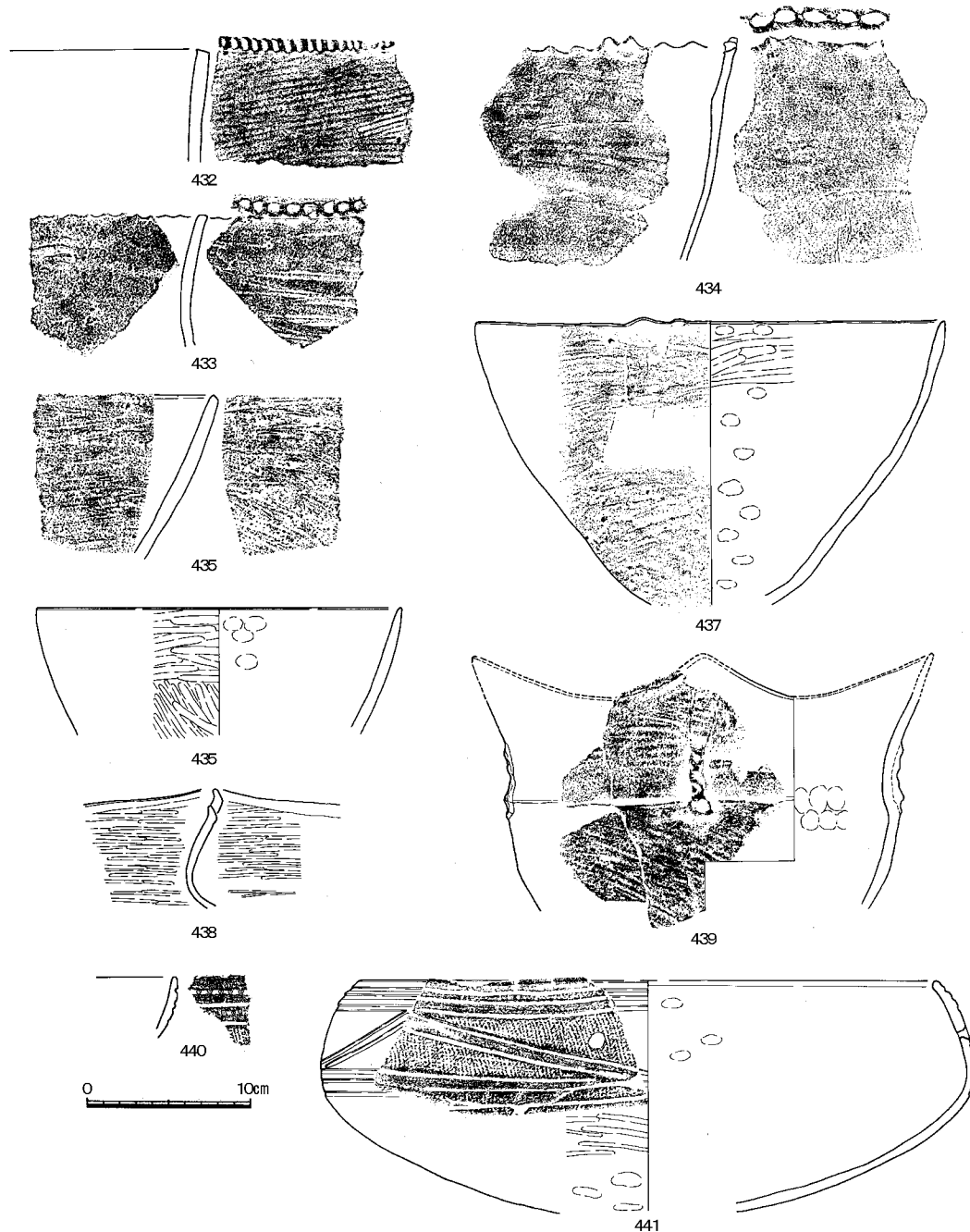




第215図 河道2上流部東斜面出土遺物① (1/4)

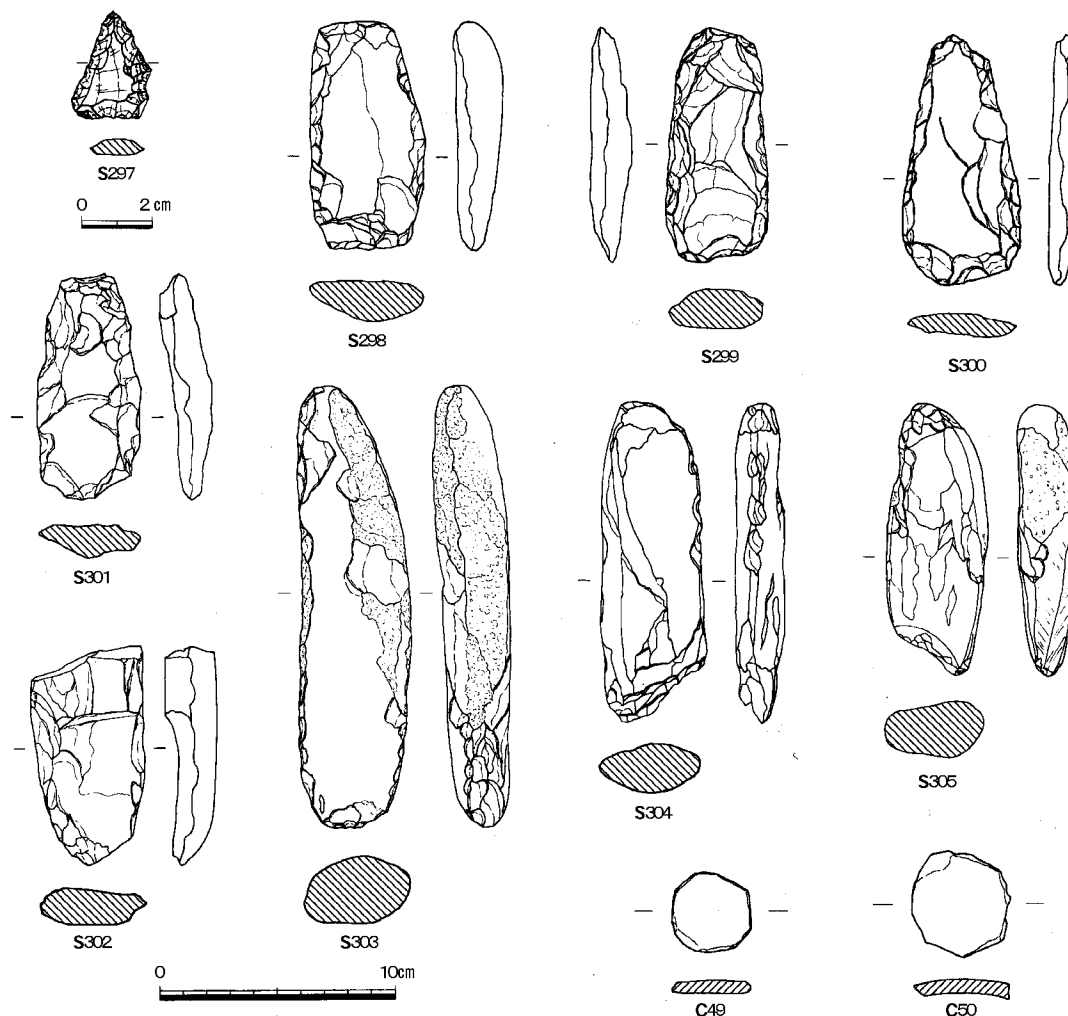
尖りで、その直下に突帯を付す。外面の調整はナデ・ミガキが多いが、擦痕のある420もある。突帯直下に沈線文を施すものは胎土が比較的精良であり、このうち426は2条突帯である。これらは突帯文でも新しい段階に位置付けられよう。432~439までは、晩期中葉の舟津原から谷尻式に相当する。また440・441は、後期の彦崎KⅡ式に併行しよう。

石器では、サヌカイト製の石鏃S297・306、緑色片岩製の打製石鏃S298~302・304・305、局部磨製の石鏃S303と土器片を利用した円盤状土製品C49・50がある。 (弘田)



第216図 河道2上流部東斜面出土遺物② (1/4)





第217図 河道2上流部東斜面出土遺物③ (1/2, 1/3)

河道3上流部 (第16・218図)

遺跡の北西隅部分であり、遺跡の西端を区切るように南流する河道である。また、久田原遺跡南西部で検出した河道3Bの東斜面に相当すると思われる。

このあたりは、弥生時代中期と考えられる礫を多く含んだ洪水砂層によって縄文時代の包含層は削平を受けており、調査当初はこの洪水砂層を基盤層と誤認していたため、三本のトレンチを入れて調査を終了している。M-N断面によると西側で河道の上がり確認できる（久田原遺跡の河道3Bも同じ）が、これもある段階（おそらく晩期）の河道肩で本来的には現在の吉井川に向かって上がる微高地斜面と思われる。

なお、トレンチ内においては、縄文土器は確認できていない。 (弘田)

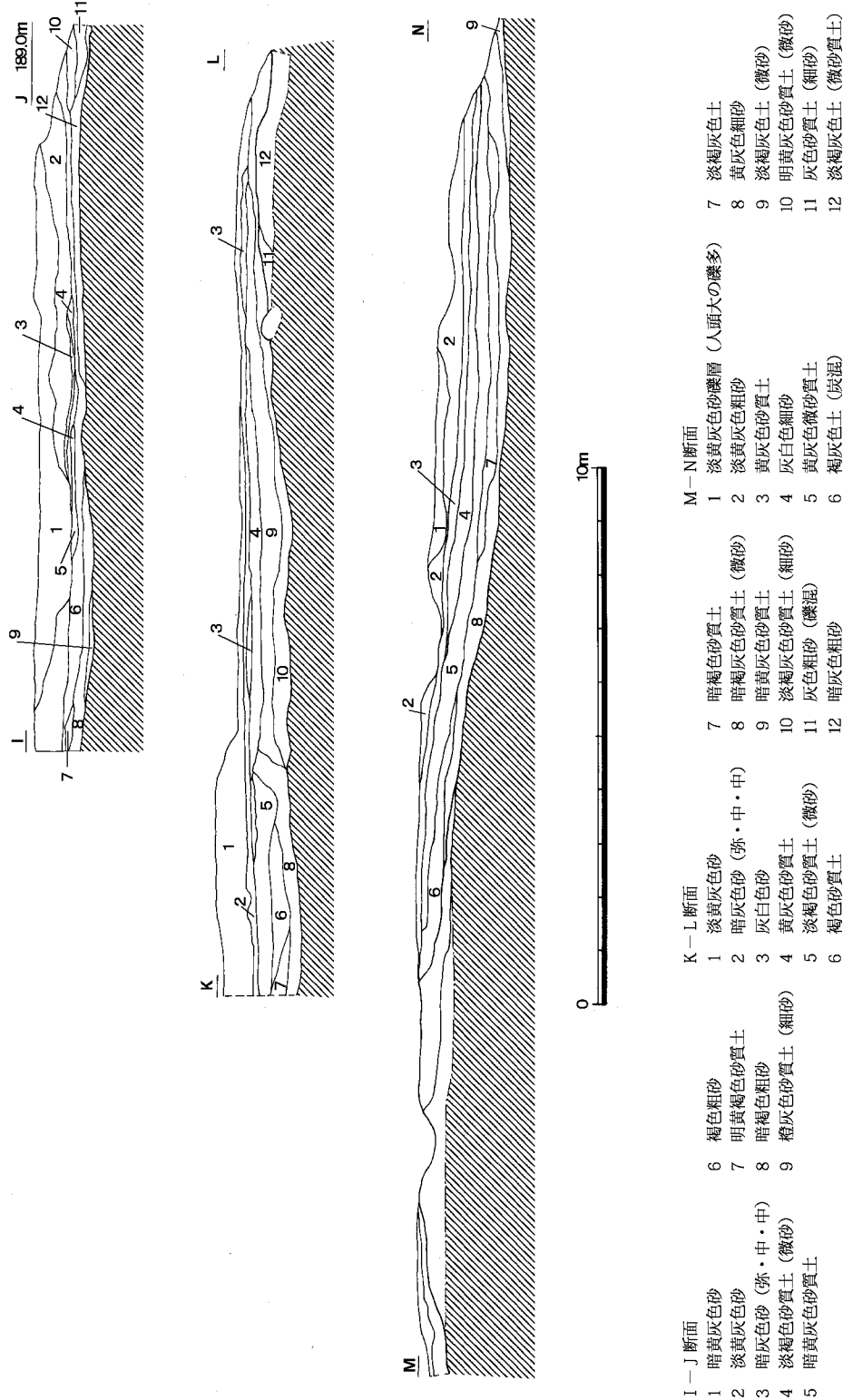
河道3中流部 (北側) (第17・219図)

4008Bi区に位置する。縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土を除去してゆくと、地形が西側の吉井川方面に向かって、強く落ち込んでいることが明らかとなった。当地点では出土遺物はないものの、検出された遺構面から判断して、当河道が形成されたのは縄文時代晩期初頭以前であると考えられる。 (河合)

河道3中流部（南側）（第17・220～222図、図版19・20・39）

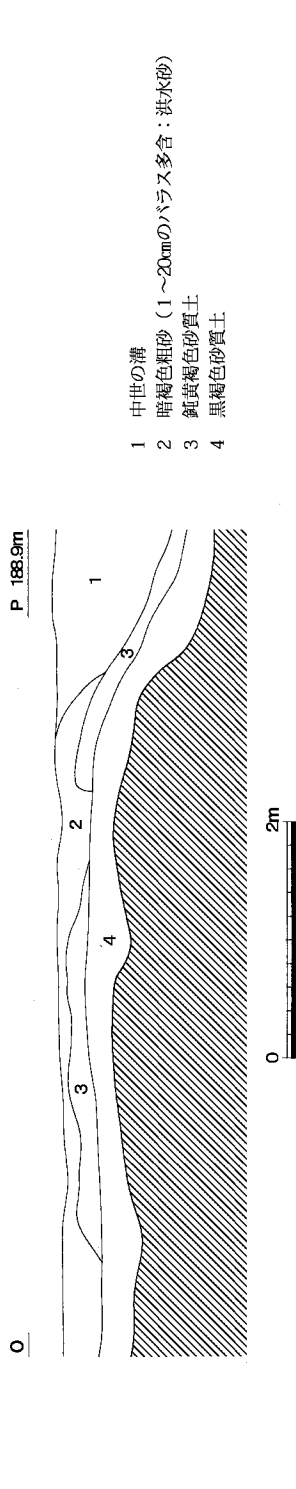
遺跡西側の斜面部である。北断面の6層、南断面の24層（弥生中期）以下が縄文の層となる。周辺に縄文の遺構もみられることもあり、遺物も比較的出土している。

442～444は突帯文で、晩期後葉でも古相をしめす。波状口縁の446、バケツ状の体部445・448、粗

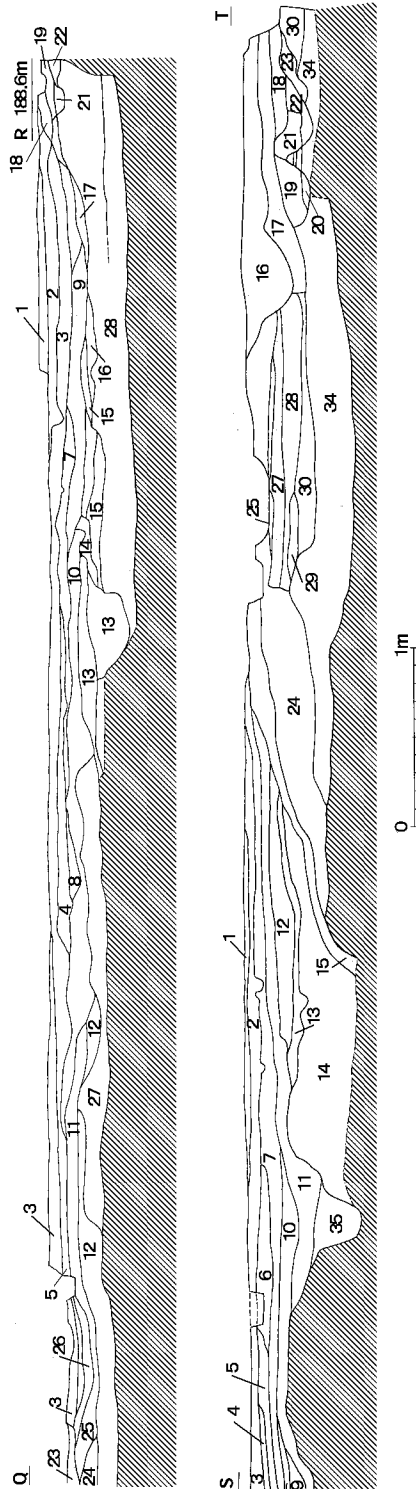


第218図 河道3上流部土層断面図（1/120）

大な爪形文を施し、体部に突起をもつ447、短く外反する口縁部に刻みを施す451は、晩期中葉であろう。447のように突起をもつ例は久田原遺跡にみられる。453・454は、口縁部直下にヘラによって円弧を描く。深鉢449や有文の精製浅鉢455とともに晩期初頭に位置付けたい。452は、後期末葉の凹線文土器、456・457は、近畿地方の元住吉山I式に相当し、貝殻による偽縄文がみられる。口縁部に縄文帯

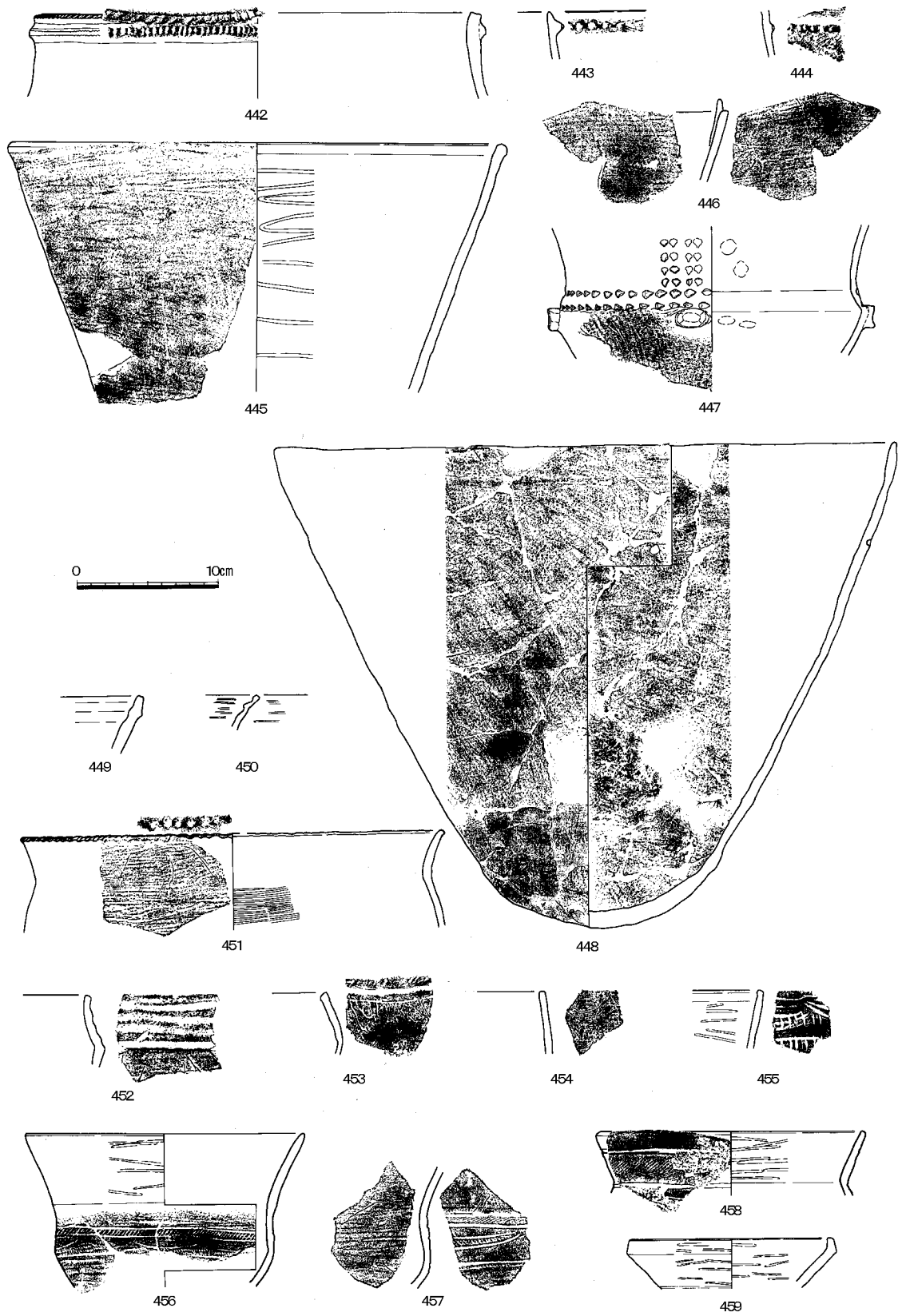


第119図 河道3中流部 (北側) 土層断面図 (1/60)

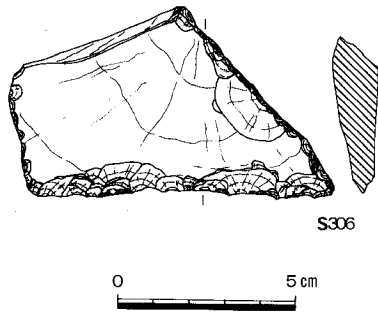


- |                 |                  |                 |                       |                   |
|-----------------|------------------|-----------------|-----------------------|-------------------|
| 1 褐灰色粘性細砂       | 8 黄褐色粘性細砂        | 15 黒褐色砂質土       | 22 暗褐色粘性細砂            | 29 黒褐色砂質土         |
| 2 褐灰色粘性微砂       | 9 褐色粘性細砂         | 16 黒褐色粘性砂質土     | 23 明黄褐色粗砂 (礫多含)       | 30 鈍黄褐色砂質土        |
| 3 明赤褐色粗砂 (礫多含)  | 10 暗褐色砂質土 (礫を僅含) | 17 灰黄褐色粘質土      | 24 黄灰色細砂              | 31 灰黄褐色粘性微砂       |
| 4 明黄褐色細砂        | 11 明褐色細砂         | 18 褐色粘性砂質土      | 25 鈍黄褐色粘性砂質土 (粘土粒を僅含) | 32 鈍黄褐色粘性微砂       |
| 5 明黄褐色粗砂        | 12 黄褐色粗砂         | 19 黄色砂斑褐灰色粘性砂質土 | 26 褐色粘性砂質土            | 33 黒褐色粘性微砂        |
| 6 褐色粘性砂質土 (礫多含) | 13 鈍黄褐色細砂        | 20 褐灰色粘性砂質土     | 27 褐色粘性砂質土 (粘土粒を僅含)   | 34 粗砂             |
| 7 黄褐色細砂         | 14 鈍黄褐色粗砂        | 21 黄褐色粗砂 (礫多含)  | 28 黒褐色細砂              | 35 橙色粗砂 (黒色粘土粒を含) |

第220図 河道3中流部 (南側) 土層断面図 (1/40)



第221図 河道3中流部東斜面出土遺物① (1/4)



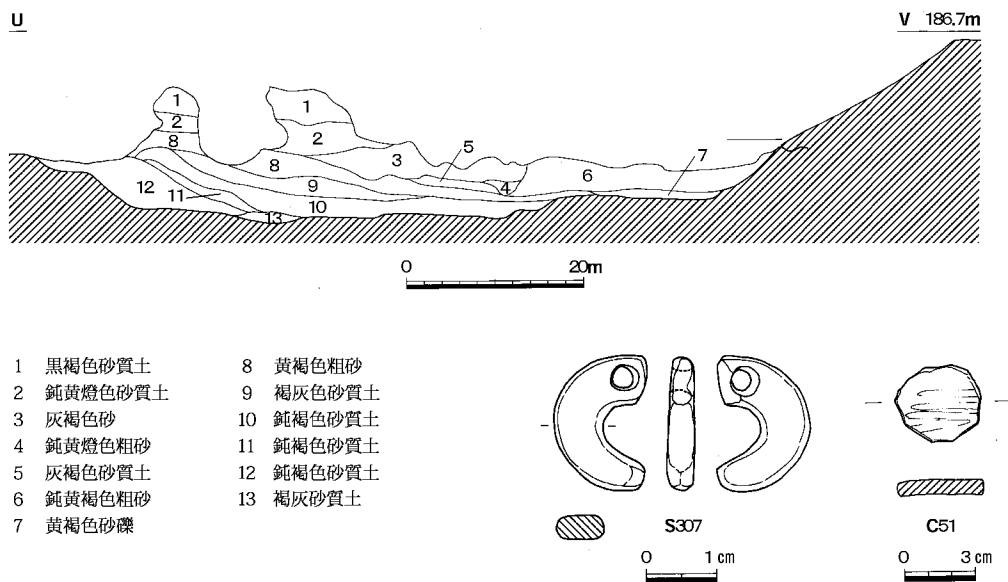
第222図 河道3中流部東斜面出土遺物② (1/2)

460・461は深鉢の口縁部で、口縁端部内面に凹線状のくぼみを持っているのが特徴である。462は浅鉢で内外面とも丁寧に磨かれている。外面には4条の平行沈線と縦の刻み目が、また口縁部内面にも1条の平行沈線が施されている。464の深鉢口縁部には押圧状の刻み目が観察できる。465は深鉢で、口縁部と胴部の境に横方向の爪形文を施している。468は鉢で、内外面とも粗い条痕調整のままである。469は精製浅鉢で内外面とも丁寧にヨコミガキが施され、口縁部が上方に立ち上がっているのが特徴である。471も精製浅鉢で、横方向に丁寧に磨かれている。S307は勾玉、C51は円盤状土製品である。これらの時期は、縄文時代晩期前葉と中葉と考えられる。(平井)

河道3下流部(南側)(第20~22図)

4107Cb区と4107Cc区にかけての幅約15mから左岸側が4205Cj、右岸は4201Cjラインでほぼ南北に方向を示した河道1と合流するまでの120m程度である。この間の河道の幅は狭い所で10mを測る。南側部分の始まり部分の上層では、左右に幅3mと4mで10~20mまで延びた溝の確認もできた。下流部の底面形状、深さについては不確実である。

遺物は図示可能なものは出土せず、土器細片のみであった。時期は、上流部の様相から晩期初頭以前に形成されていると思われる。(二宮)



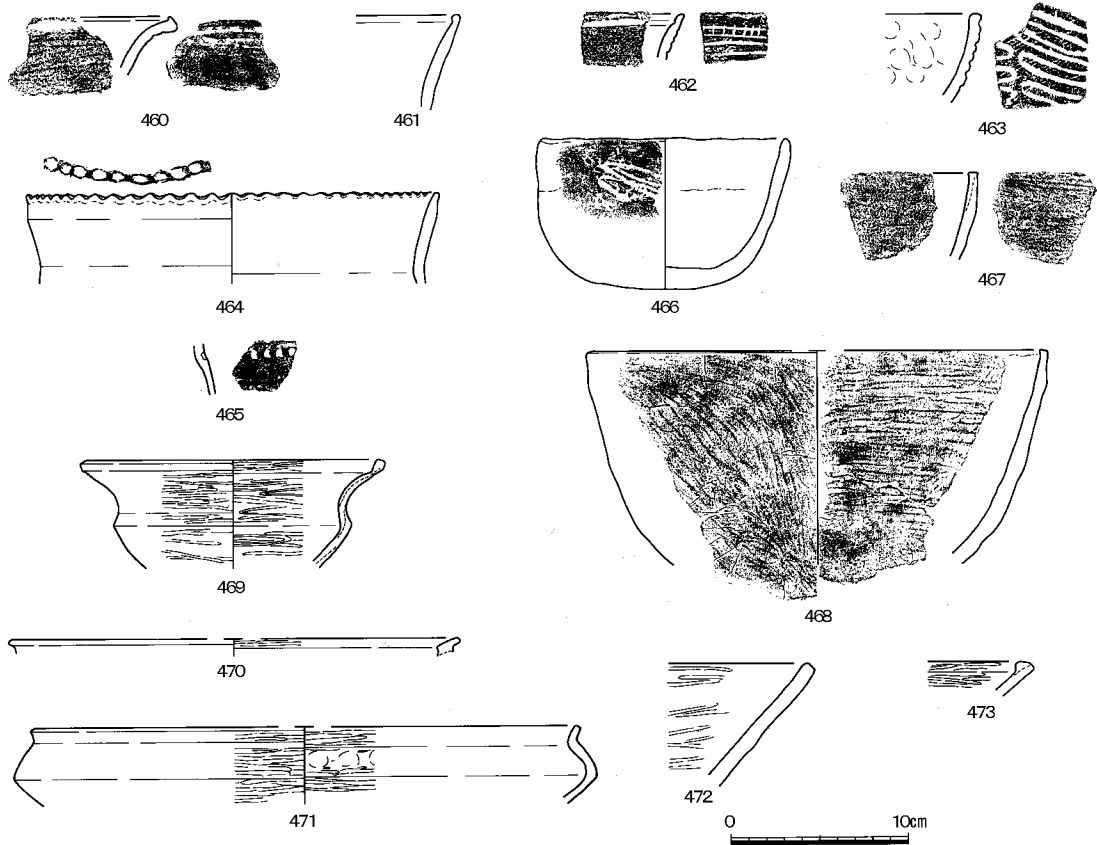
第223図 河道3下流部(北側)土層断面図(1/80)・出土遺物①(1/1,1/3)

のみられる458は、東日本あたりからの搬入であろうか。

土器以外の遺物としては、サヌカイトのスクレイパーS306がある。(弘田)

河道3下流部(北側)(第20・223・224図)

河道3のうち4108Cg区周辺から出土した遺物を掲載している。いずれも掘り下げ中に検出した遺物で、明確な層位は把握できていない。



第224図 河道3下流部(北側)出土遺物②(1/4)

河道4上流部(第19・21・225~227図、図版20・39、写真10)

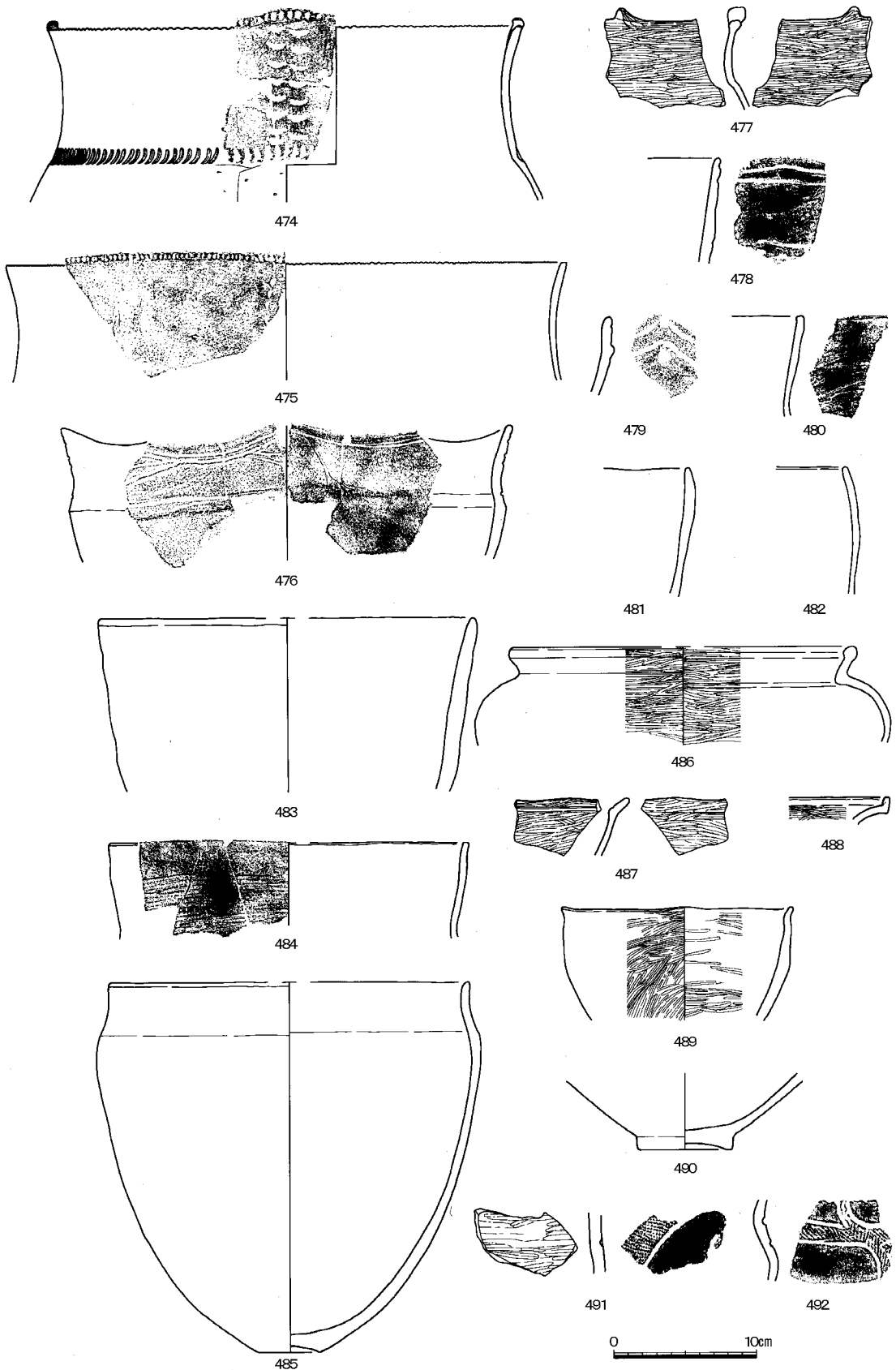
河道4は微高地1の東側を画し、久田原遺跡の河道2から続く河道である。弥生時代の河道により大規模に削平を受けており、西側の肩口のみ検出された。東側の肩口はその削平により確認されていないが、久田原遺跡などの状況から約20m幅の河道であったと思われる。河道4上流部とは3909から4104までの約50mの範囲を示す。

第225~227図に出土した遺物を図示している。土器は口縁部から2条の垂下する爪形文と頸部下端に爪形文を飾る474や口唇部に刻み目を施した475などの深鉢と、483~485のような無文の深鉢のほかに、口縁部に沈線を施す476・478や凹線文と貝殻の圧痕が認められる479、磨消縄文の491・492などが出土している。

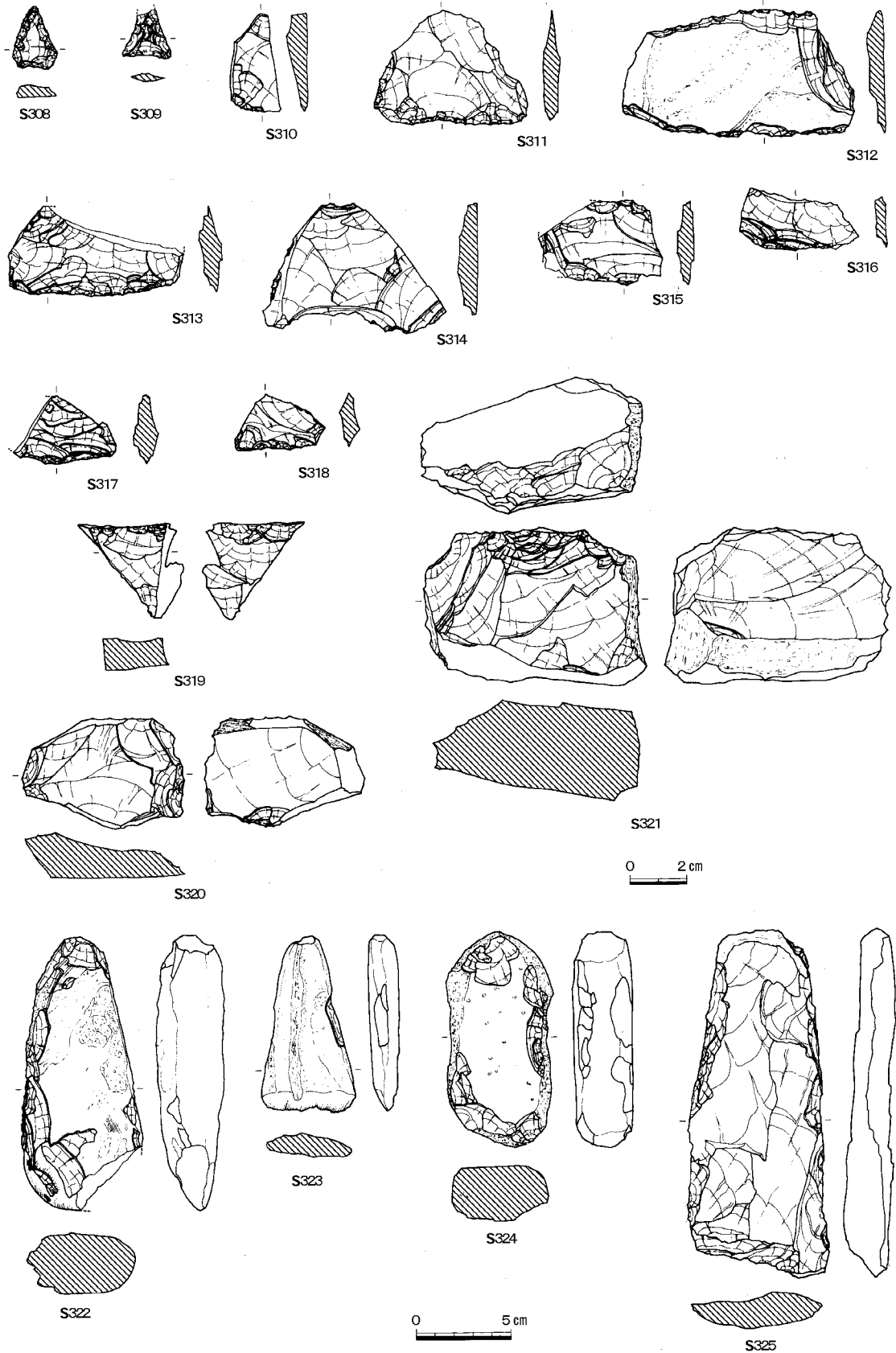
出土した石器の器種は、石鏃・スクレイパー・石核・石鋏などである。S319~321はサヌカイト製の石核で、S319のように残核に近いものからS321のように大きく原礫面が残存したものが認められる。S322~334は石鋏で、原礫面を器表面に残しているもの



写真10 河道4上流部(南から)

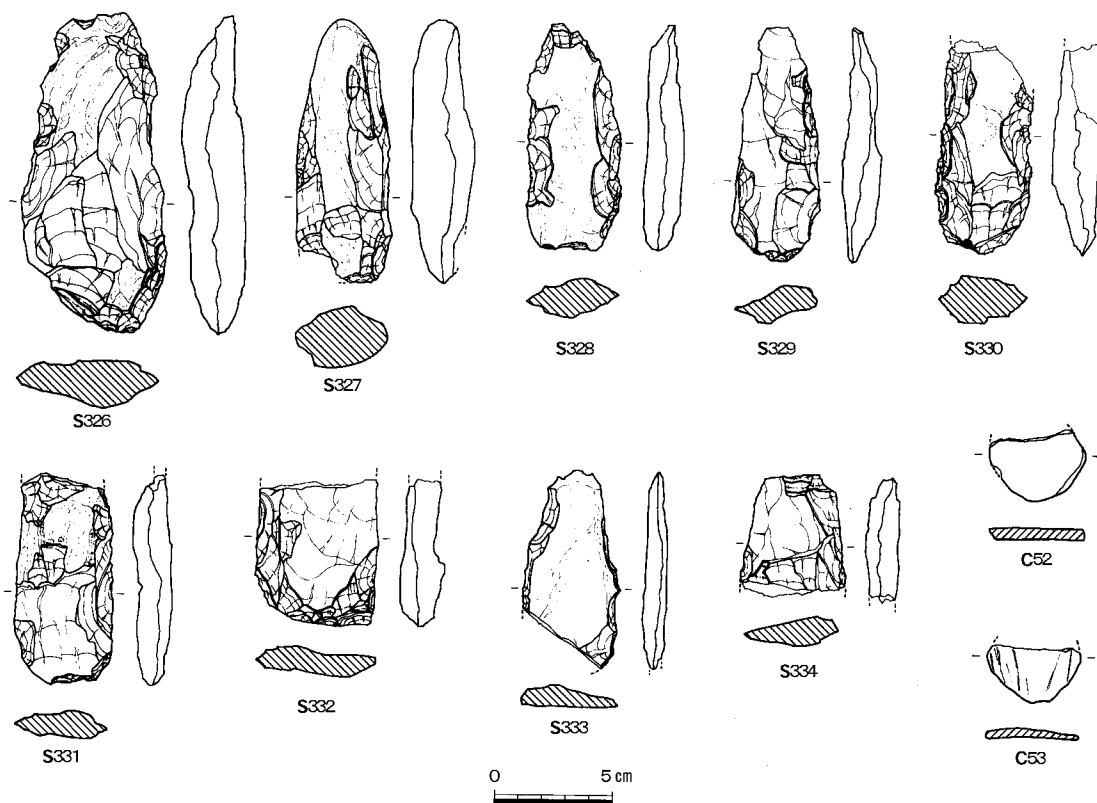


第225図 河道4上流部西斜面出土遺物① (1/4)



第226図 河道4上流部西斜面出土遺物② (1/2,1/3)





第227図 河道4上流部西斜面出土遺物③ (1/3)

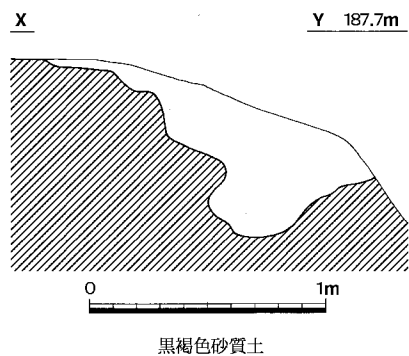
が多く、特に刃部まで礫面に覆われているものが認められる。また器表面が原礫面に覆われ、さらに刃部および胴部まで研磨が施されているものがS322・323である。S324は表裏両面には原礫面を残し、左右側面には敲打が施されている。

河道の時期は晩期中葉である。 (小嶋)

河道4下流部 (第21・228・229図、写真11、図版21)

河道4のうち4 106Dc区周辺から出土した遺物を掲載している。河道4下流部の西斜面断面については、抉れたような図を第228図に示しているが、すべての部分が抉れていたわけではない。

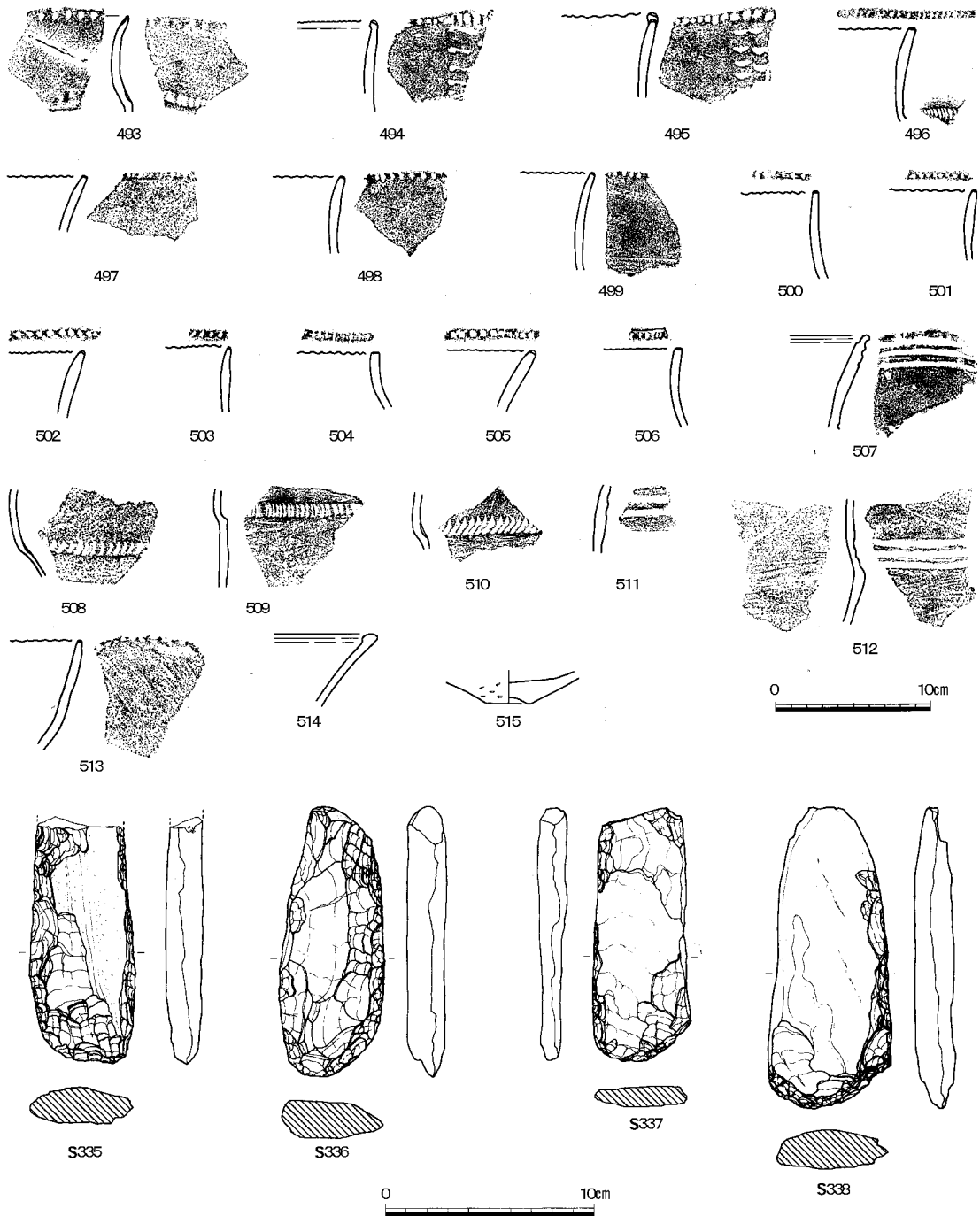
493~506は深鉢で、口唇部に刻み目を施しているのが特徴である。また、494・495は波状口縁の波



第228図 河道4下流部土層断面図 (1/30)



写真11 河道4下流部 (北から)



第229図 河道4下流部西斜面出土遺物（1/4,1/3）

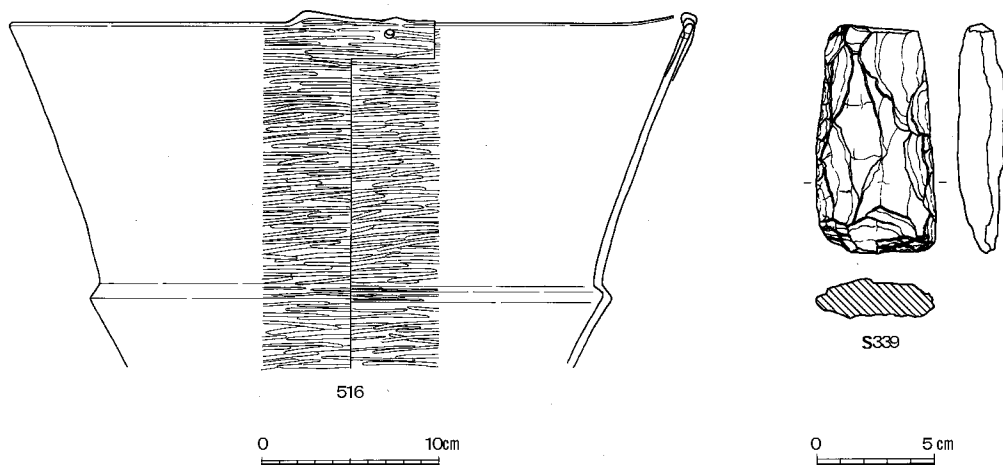
頂部で、縦方向の爪形文が、また493・496・508～510には胴部との境に横方向の爪形文が観察できる。これらは「谷尻式」の特徴をよく示しており、514の浅鉢と515の底部もその特徴から同時期と考えられる。なお、509・511・512は凹線文があり、福田KⅢ式である。（平井）

河道5下流部（第20・22・230図、図版21）

遺物の出土もごく少量であったため、調査時点において縄文時代の層を十分に追求できなかったが、遺跡全体の南限を画する斜面と理解している。

### 第3章 発掘調査の概要

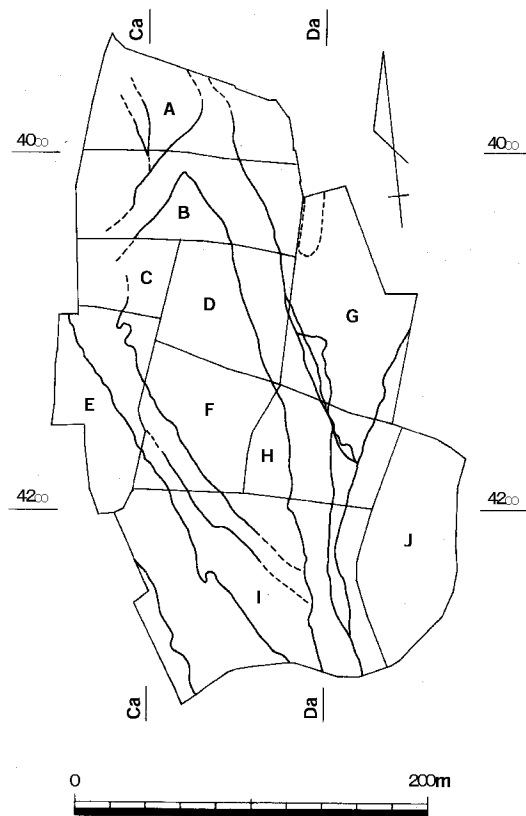
出土した遺物で図化できたものは口縁端部内面に突帯を巡らす516と石鍬S339の2点のみである。516は図よりももう少し外に傾くと思われる精製の浅鉢で、晩期中葉後半に位置付けられる。S339は短冊形を呈している。 (福田)



第230図 河道5下流部出土遺物 (1/4,1/3)

## 10 遺構に伴わない遺物

包含層出土遺物は旧調査区を基にしたAからJまでの地区に分けて掲載する。本来ならば報告書整理段階で一定の基準に基づいて土器を掲載すべきであるが、各調査区毎に土層堆積状況が若干異なり、さらに複数年にわたる調査や調査担当者への入れ替えなどの諸条件により、地区毎に掲載せざるを得なかった。A地区が旧A1・5区、B地区が旧A2・6区、C地区が旧A3区、D地区が旧A7区、E地区が旧A4区、F地区が旧A8区、G地区が旧B1・2区、H地区が旧C1区、I地区が旧A9・C2・3区、J地区が旧C4区に対応している。この内E・J地区については掲載に耐えうる遺物がなかったため割愛した。遺物は、各地区毎で出土位置が特定できるものとできないものに分けて掲載し、さらに出土位置が特定できない遺物については、層位別に取り上げている地区ではその層位ごと、そうでない地区では一括して掲載していることをお断りしておく。 (小嶋)



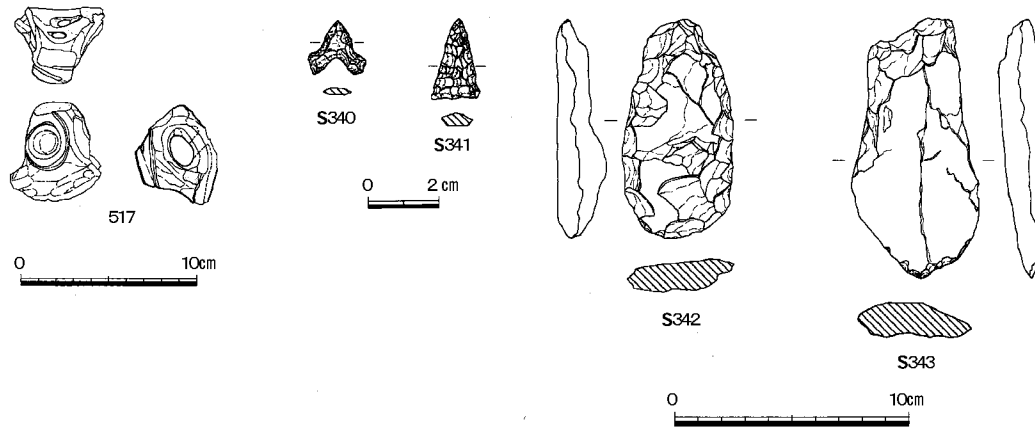
第231図 包含層地区別範囲図 (1/4,000)

A地区 (第231・233図、図版21)

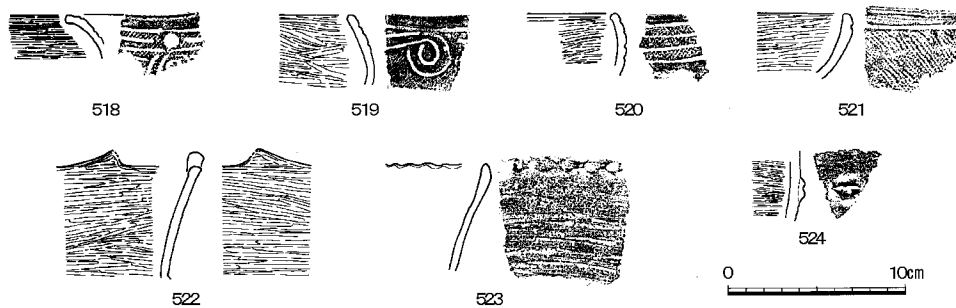
この地区は久田原遺跡の微高地3における晩期遺構群のすぐ南にあたる。包含層は、久田原遺跡同様で三層に分かれるが、弥生中期・古墳時代初頭の洪水砂によってかなりの部分削平を受けていた。

出土した土器517、石鏃・石鎌S340～343は、いずれもピットから、518～524は包含層中から出土している。517は注口土器の把手であろう。518～521は、概ね後期中葉の彦崎KⅡ式に併行し、519では、沈線内に刺突がみられる。521では、口縁外端部直下に沈線を引き、文様帯をつくる。522は晩期中葉の精製浅鉢、523は粗製の深鉢で、口縁端部に棒状工具を押すようにしていわゆる刻み目を施す。ともに下層からの出土である。

524は、同様の個体として土器溜まり1の47・48、河道1最上流部上層の308の3点が挙げられる。出土地点もそれぞれ近く、同一個体かも知れない。壺の体部が浅鉢の文様帯を考えるが、上下に接合するような破片はみられなかった。時期は晩期で、他地域からの搬入を考えたい。(弘田)



第232図 A地区出土位置判明遺物 (1/4, 1/2, 1/3)

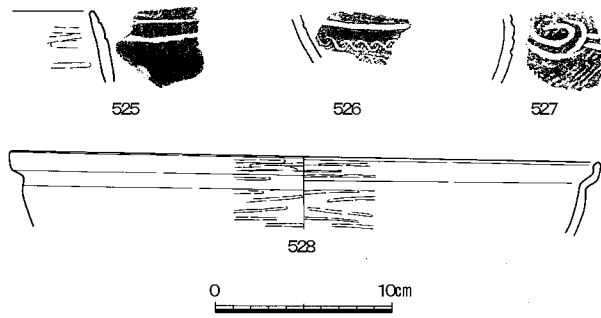


第233図 A地区出土遺物 (1/4)

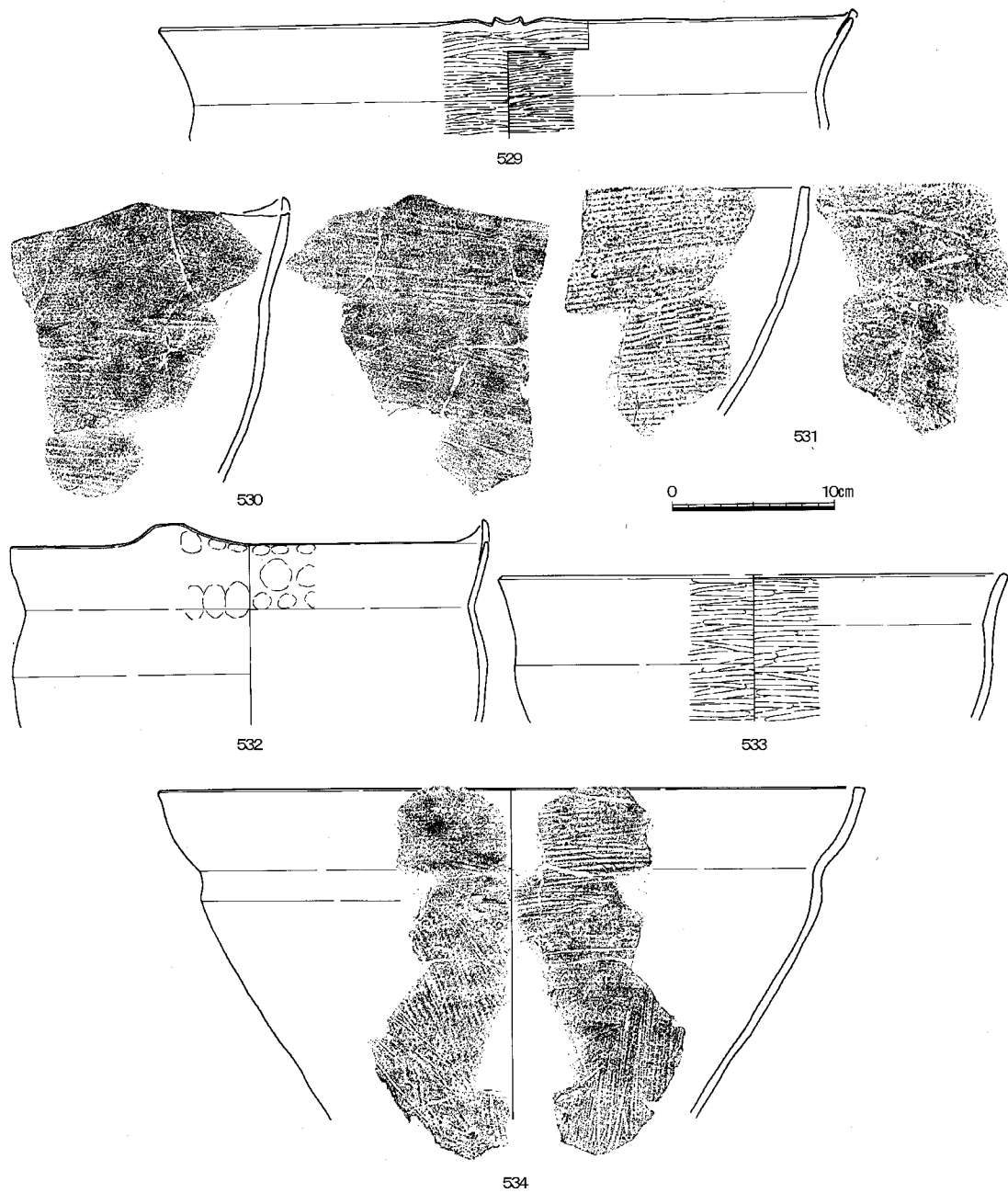
B地区 (第231・234～243図、図版22・40・48)

河道1・2によってはさまれた微高地2の北端部に相当する。この南には数十基におよぶ火処群とそれに関わって形成されたと考えられる土器溜まり2～6が存在した。このB地区も火処群の北限にあっていたようで、数基の火処が確認できている。縄文土器・石器を含んだ包含層は3層確認でき、上層の黒色土から下は、暗黄色の間層をはさみ暗灰色の下層をへて基盤層へといたる。このいずれの層からも晩期の土器が出土しており、後期の土器も存在するが、それを純粹に含む層はなかった。

第3章 発掘調査の概要



第234図 B地区出土位置判明遺物(1/4)



第235図 B地区出土遺物①<晩期下層>(1/4)

土器の大半は下層より出土した後期末葉から晩期中葉にかけての土器群である。529～537・541・542は晩期でも中葉前半に位置付けられる粗製で無文の深鉢である。538・534～544では、540・544が後期末葉に位置付けられる。そのほかは晩期前葉に属する深鉢で、538は口縁の波頂部と体部と頸部の境に押圧を施しており、岩田遺跡第4類に相当するが、外面調整にはナデを施す。

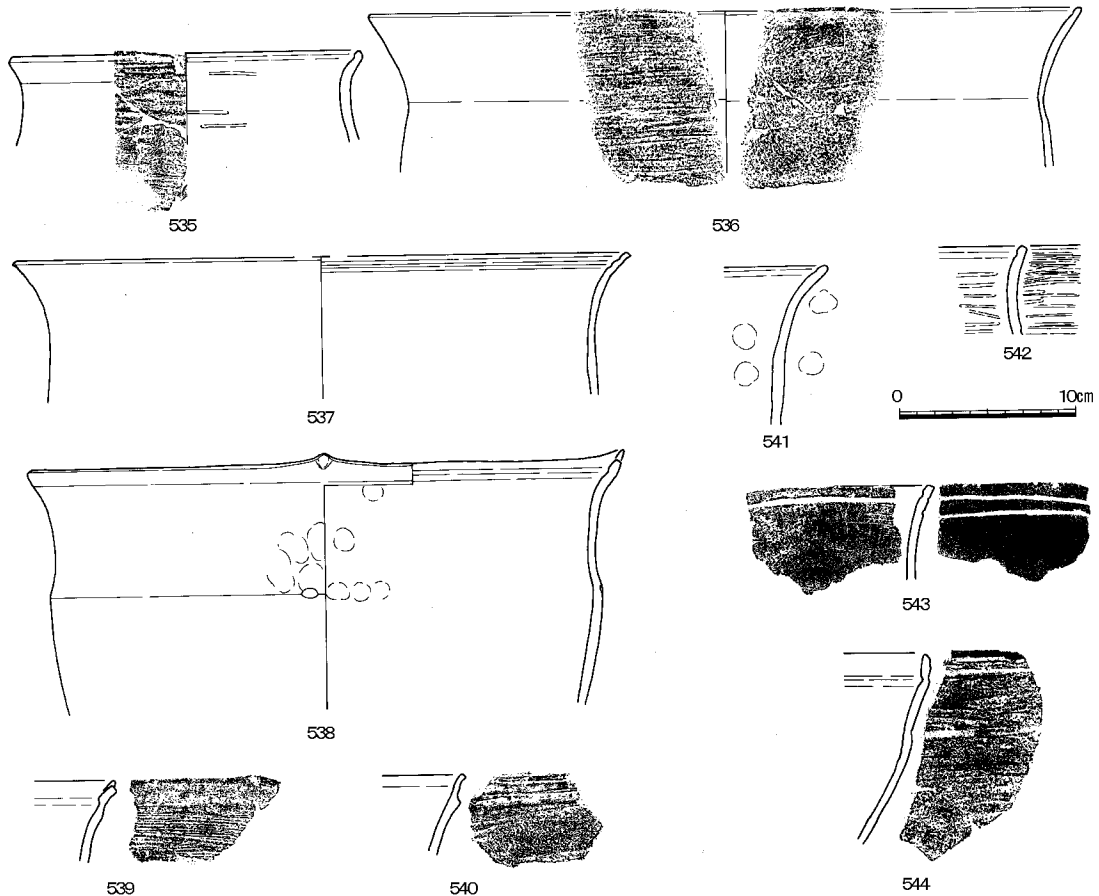
有文の浅鉢545～564では、器形が椀状のもの、強く屈曲する頸部を持つもの、弱い頸部を持ち口縁部が真っ直ぐ上方に立つものがあり、口縁端部内面に段ないしは沈線をめぐらすものとそうでないものに区別できる。また、口唇部に刻みを持つ545・557・563もみられる。文様は2～3条の直線ないし波形で構成される場合が一般的であるが、546～548のように、退化した「榎原紋様」をもつものもある。無文の浅鉢565～577では、晩期前葉の574～577を含みながらも、その多くは中葉に属する。注口土器578～580では、東日本系の578がみられ、注口基部の下端には粘土房を垂下させる。

石器は、各層中より多量に出土している。緑色片岩製の石鍬が最も目を引くが、S353・366等は未成品であろう。さらに、サヌカイト製の石鍬とスクレイパーや刃部磨製の石斧S363・369、磨製石斧S364、石錘S355などの多様な石材と種類がみられた。

後期の土器581～588は、彦崎KⅡ式併行の段階に相当する。結節縄文が多いことが特徴的であるが、582は巻き貝による偽縄文であった。

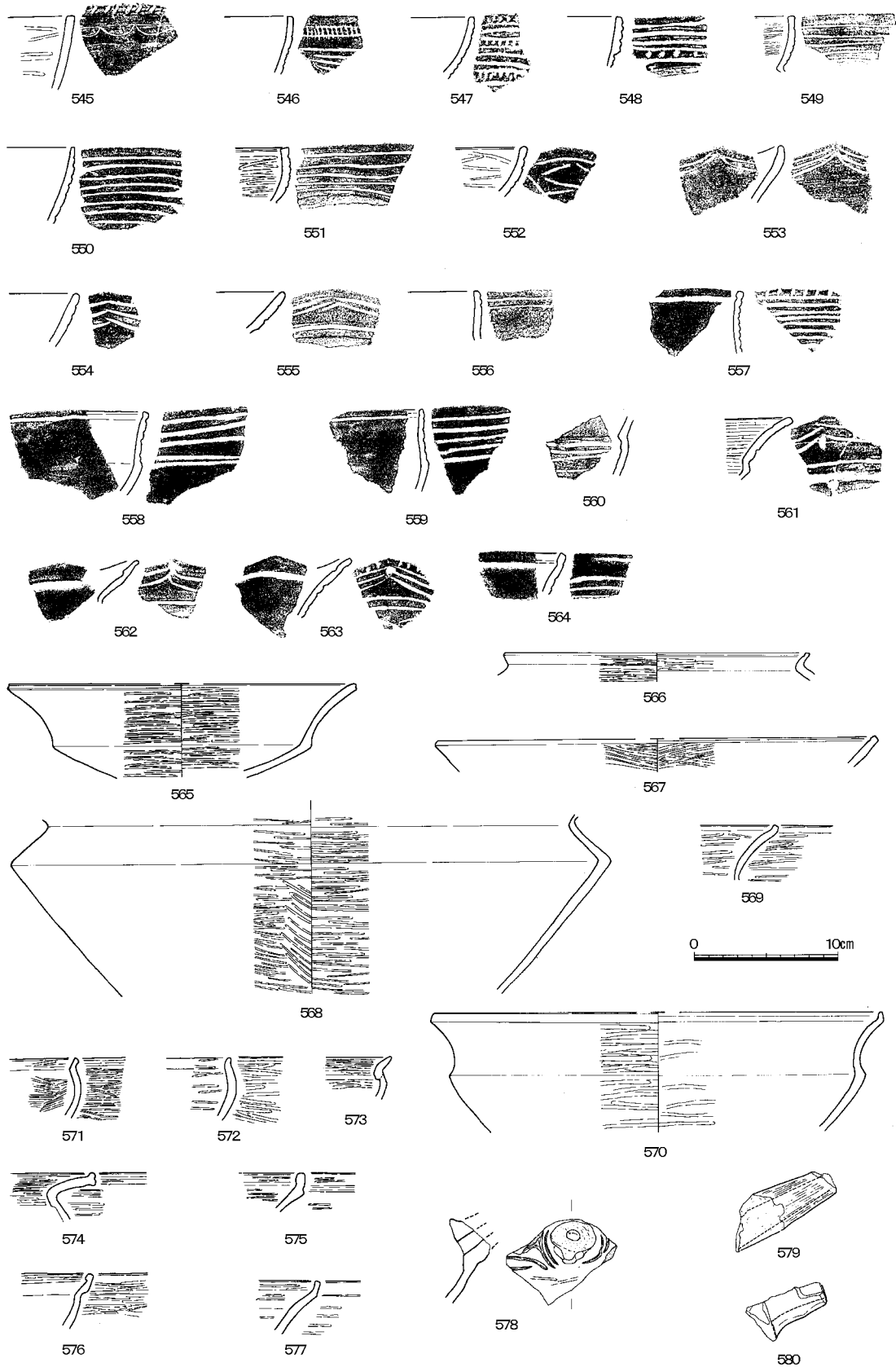
土製品には、円盤状のC54～69と粘土紐を渦巻き状に巻いたC70がある。

(弘田)

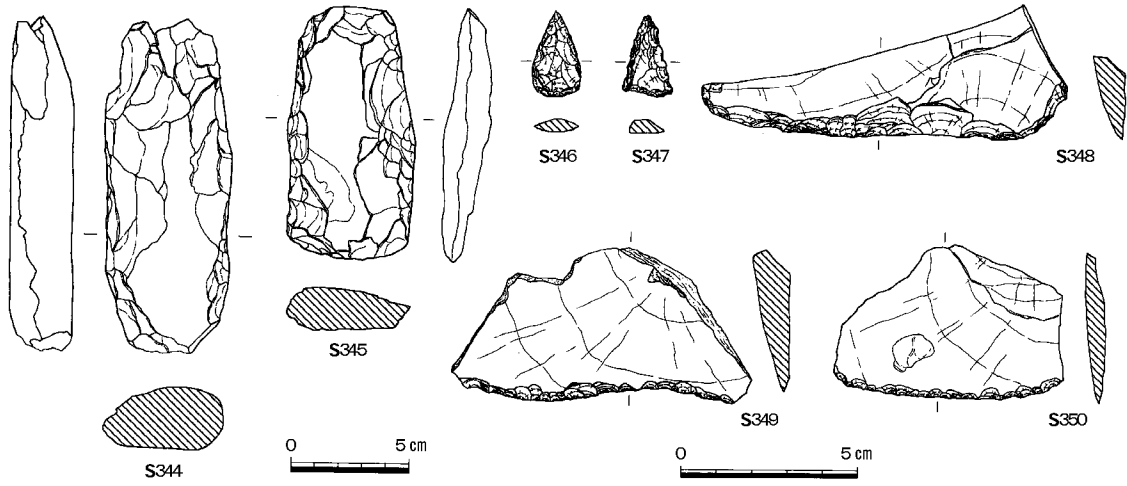


第236図 B地区出土遺物②<晩期下層> (1/4)

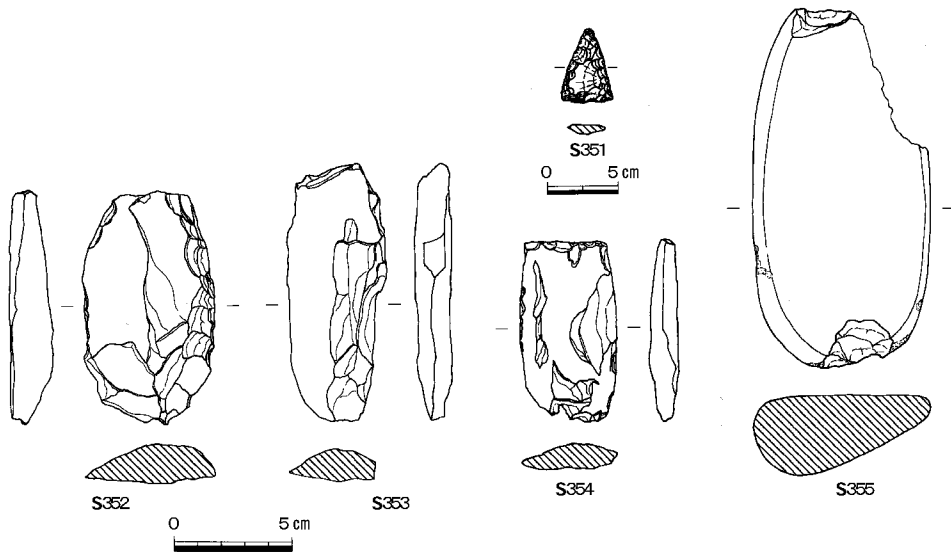
第3章 発掘調査の概要



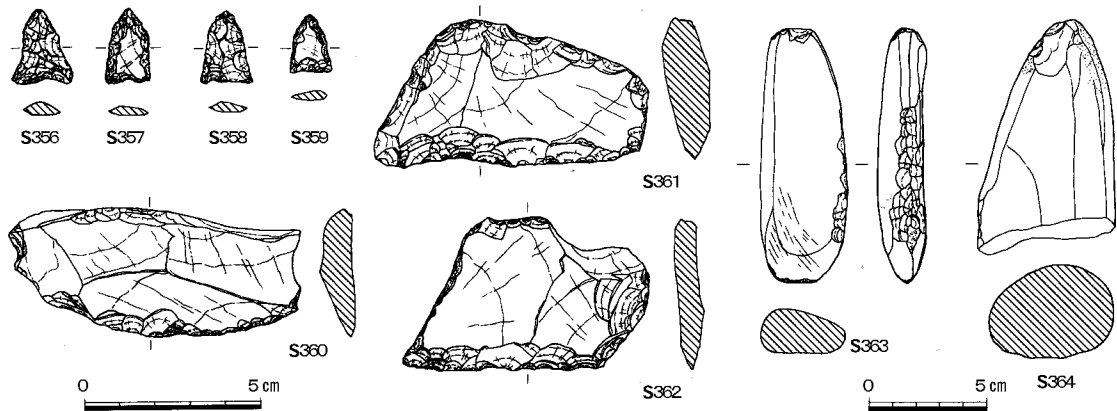
第237図 B地区出土遺物③<晩期下層> (1/4)



第238図 B地区出土遺物④<晩期上面> (1/3,1/2)

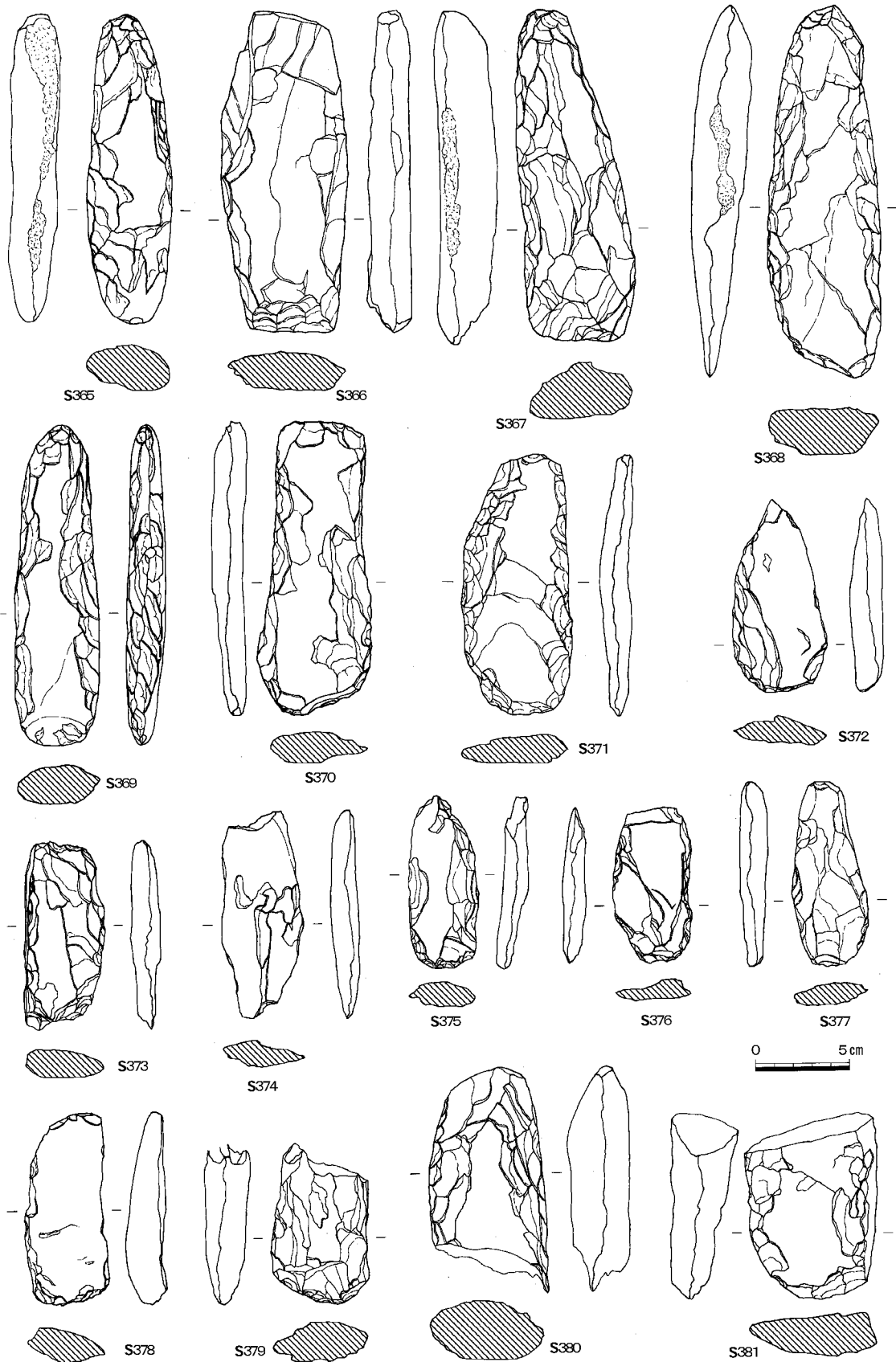


第239図 B地区出土遺物⑤<晩期上・中層> (1/3,1/2)

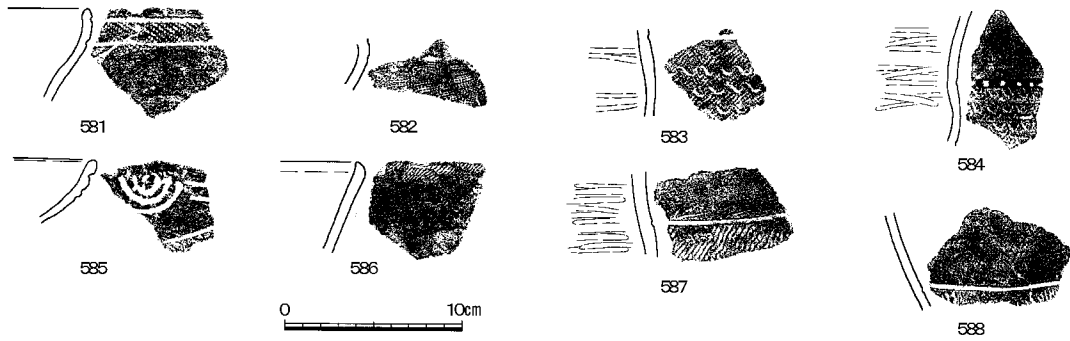


第240図 B地区出土遺物⑥<晩期下層> (1/2,1/3)

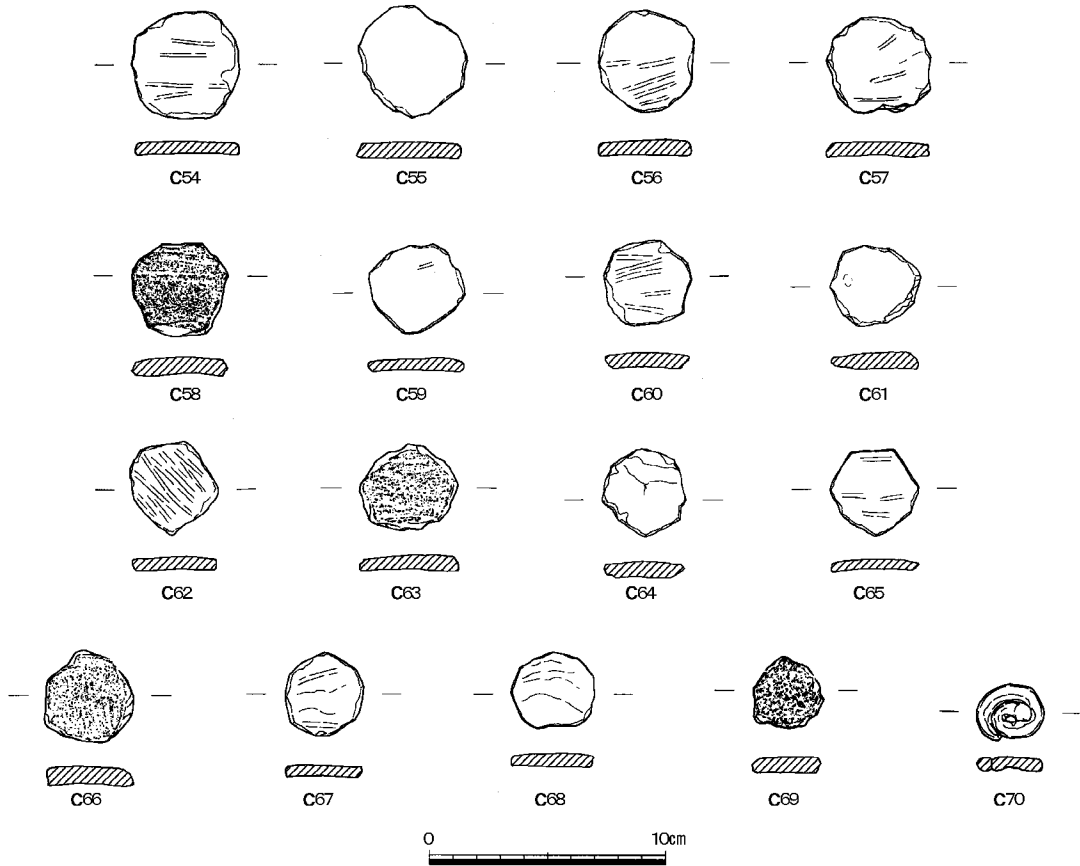




第241図 B地区出土遺物⑦<晩期下層> (1/3)



第242図 B地区出土遺物⑧<各層出土：後期土器> (1/4)



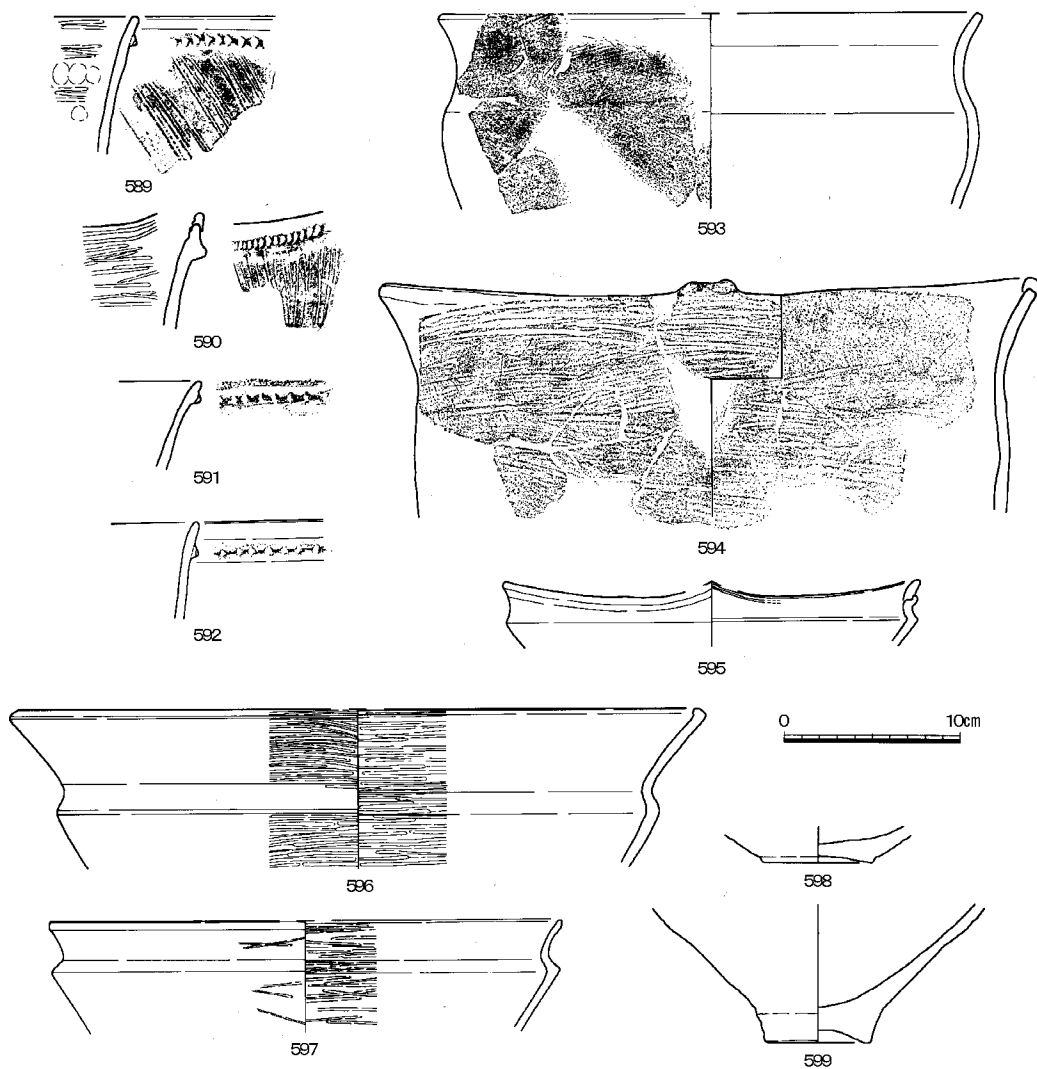
第243図 B地区出土遺物⑨<各層出土> (1/3)

C地区 (第231・244~249図、図版22・23・41・42)

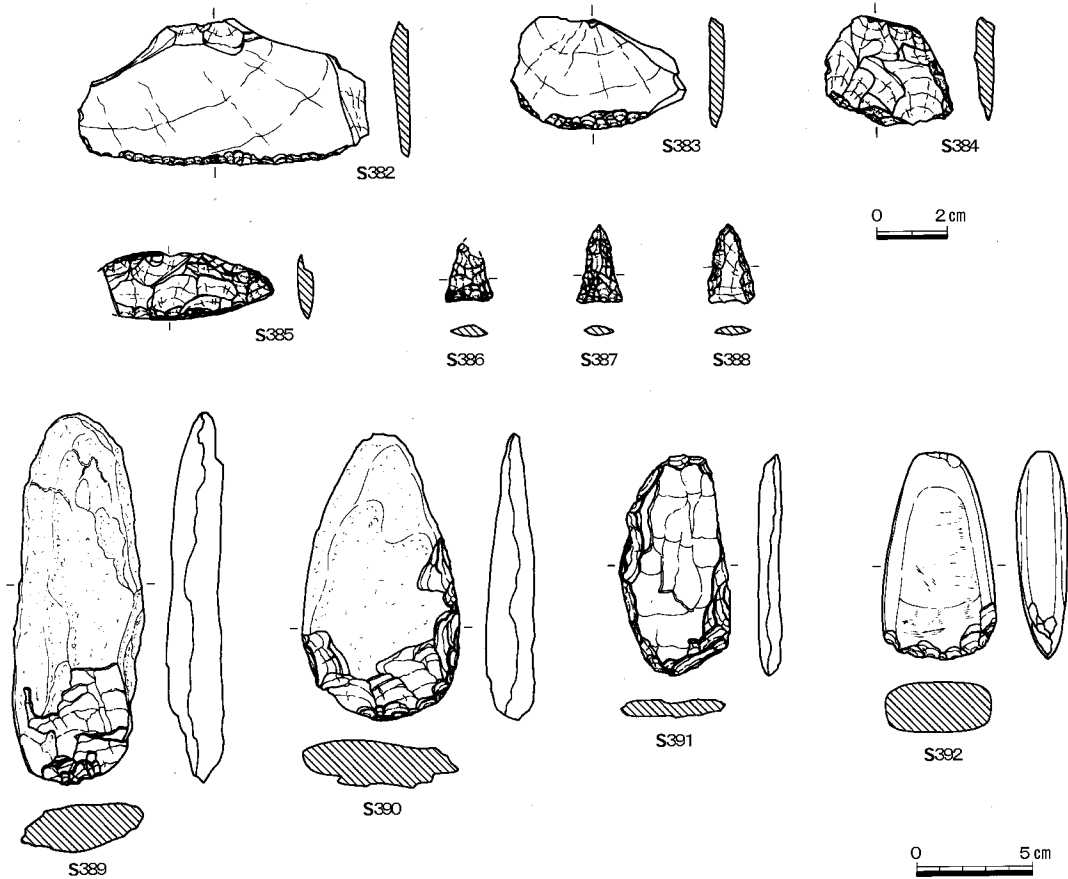
C地区は大きく上層・下層に分け、遺物を取り上げている。そのうち、下層はこれまで報告した土器溜まり2~4などが検出された縄文晩期前葉の遺物を包含する暗褐色砂質土に相当する。上層は晩期中葉~後葉の遺物を含む鈍い黄褐色砂質土である。ここからは深鉢589~594、浅鉢595~597、底部598・599のほか、スクレイパーS382・S383・S385、使用痕のある剥片S384、石鏃S386~388、石鋏S389~391、磨製石斧S392があり、土器片再利用の円盤状土製品も2点出土している。深鉢589~592は口縁端部直下に刻目突帯文が貼り付けられており、いわゆる晩期後半に編年されてきた突帯文土器である。589と590の口縁部外面には半裁竹管による施文が認められる。深鉢593・594、浅鉢595~

第3章 発掘調査の概要

597は晩期中葉の特徴をもった土器である。深鉢594は口縁端部に長方形の貼り付け突起をもち、口縁端部には刻み目をもたない。外面には二枚貝条痕が認められる。浅鉢595は短く外反する口縁部を有し、波状口縁である。浅鉢596は比較的長い直口気味の口縁部を有し、口縁端部に蒲鉾状の粘土帯が貼り付けられている。下層では土器溜まり2~4や窪地1などと同様、晩期初頭~前葉の土器が認められる。土器には深鉢600~606、浅鉢607~613、618~630、底部614~617があり、そのうち線刻の施された浅鉢612が注目される。内外面にナデ調整を行った後、外面全体にヘラ状工具により線刻を施している。口縁部に近い方に3条の直線文を、その下部に連続した半円状の文様をそれぞれ施している。モチーフは同じ層位から出土するいわゆる榎原式文様に類似する623・627・628・630などを意識したものであろうか。同様のヘラ状工具による線刻土器は岡山県・大阪府などで数例を数えるのみであり、重要である。そのほか石器では楔形石器S393~397、スクレイパーS398、石鏃S399~412、石鏃S413~417、刃部磨製石斧S418・419、凹石S420・421、敲石S422、石皿の可能性のあるS423があり、種類が豊富である。さらに、土器片再利用の円盤状土製品が6点出土している。(河合)



第244図 C地区出土遺物①<上層> (1/4)



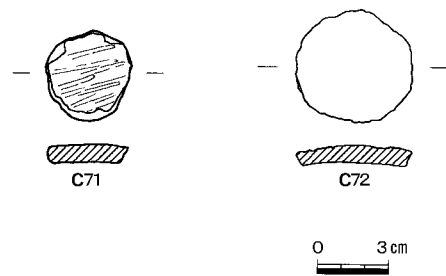
第245図 C地区出土遺物②<上層> (1/2,1/3)

D地区 (第231・250~253図、図版24・42・43)

D地区は主に晩期前葉の遺物が目立った一帯であったが、この時期を含め相前後する遺構に伴わない遺物を紹介する。

浅鉢631は河道1の西岸、窪地5の南に位置し、この一帯の縄文晩期の遺物を包含する暗褐色砂質土の下層にあたる黄褐色砂質土の基盤層にめり込んだ状態で出土した。波状口縁で、突起部は2~3か所と思われる。口縁端部および突起部にはLR縄文後沈線を施す。口縁部外面の下半も端部同様に縄文後沈線で施文しており、上半はミガキが施されている。後期末葉の遺物と考えられるが、これと同じ接合資料が南数十mからも出土しており、微高地2の北部にこれらに伴う遺構が所在したものと推定される。なお、他に後期の遺物としては深鉢637があるが、晩期の632・634・浅鉢641の3点とともに前述した河道1中流部の出土遺物である。

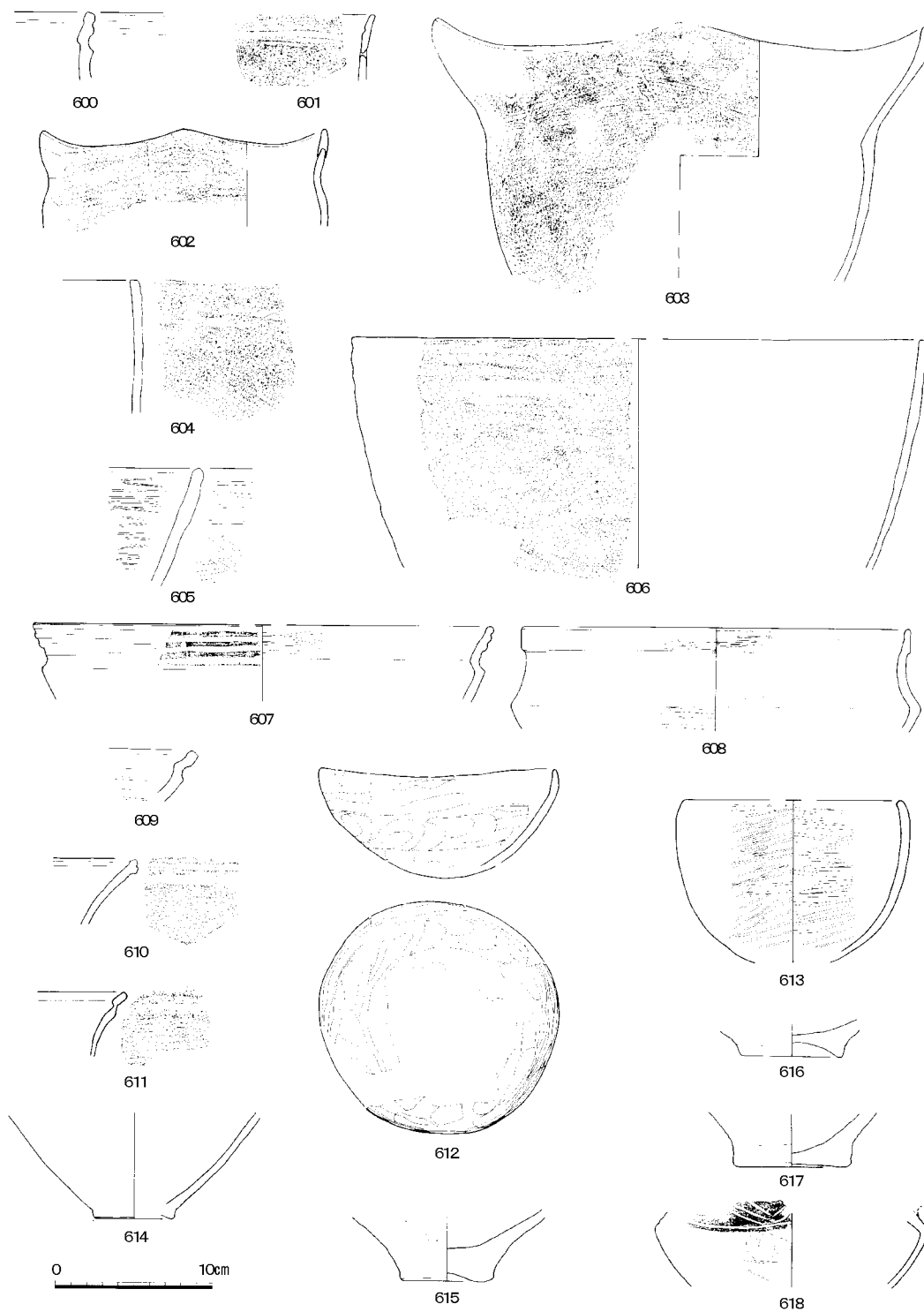
次に晩期の遺物として深鉢633・635~638、浅鉢639~657がある。638は波状口縁で、口縁外面に二枚貝条痕が顕著に認められるもので、635・636などと同様に前葉に入るものと考えられる。これとほぼ同時期と思われる浅鉢は口縁が屈曲して斜め外方に短く延びる642~645、口縁内面に沈線が巡る653、口



第246図 C地区出土遺物③<上層> (1/3)

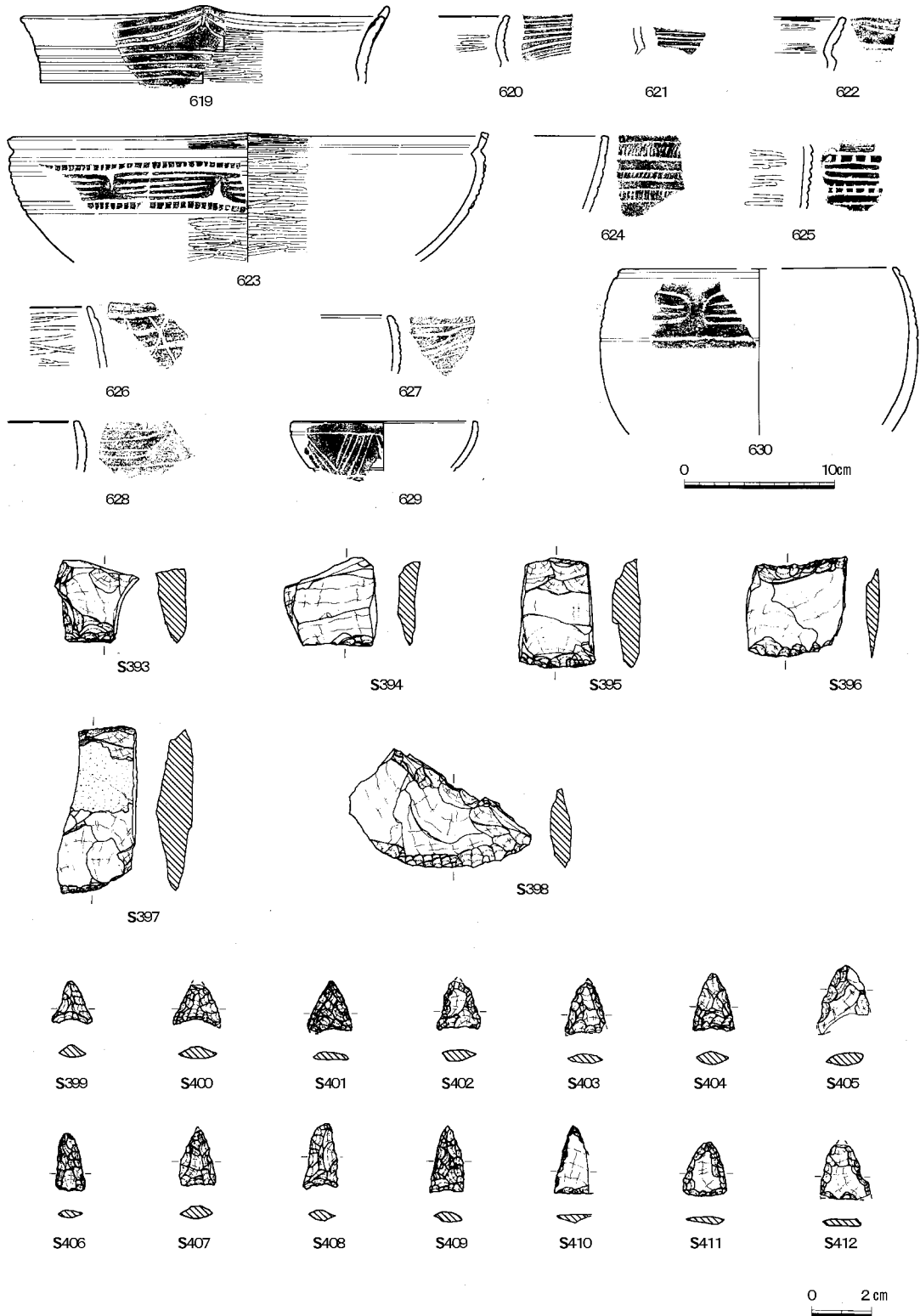
第3章 発掘調査の概要

縁外面にヘラガキによる施文を施した646や、沈線を巡らす648~656、口縁部が体部から「く」字状に内湾しながら延びる657などがある。なお、652は波状口縁で口縁外面に沈線で施文し、沈線間に刺突が巡っている。



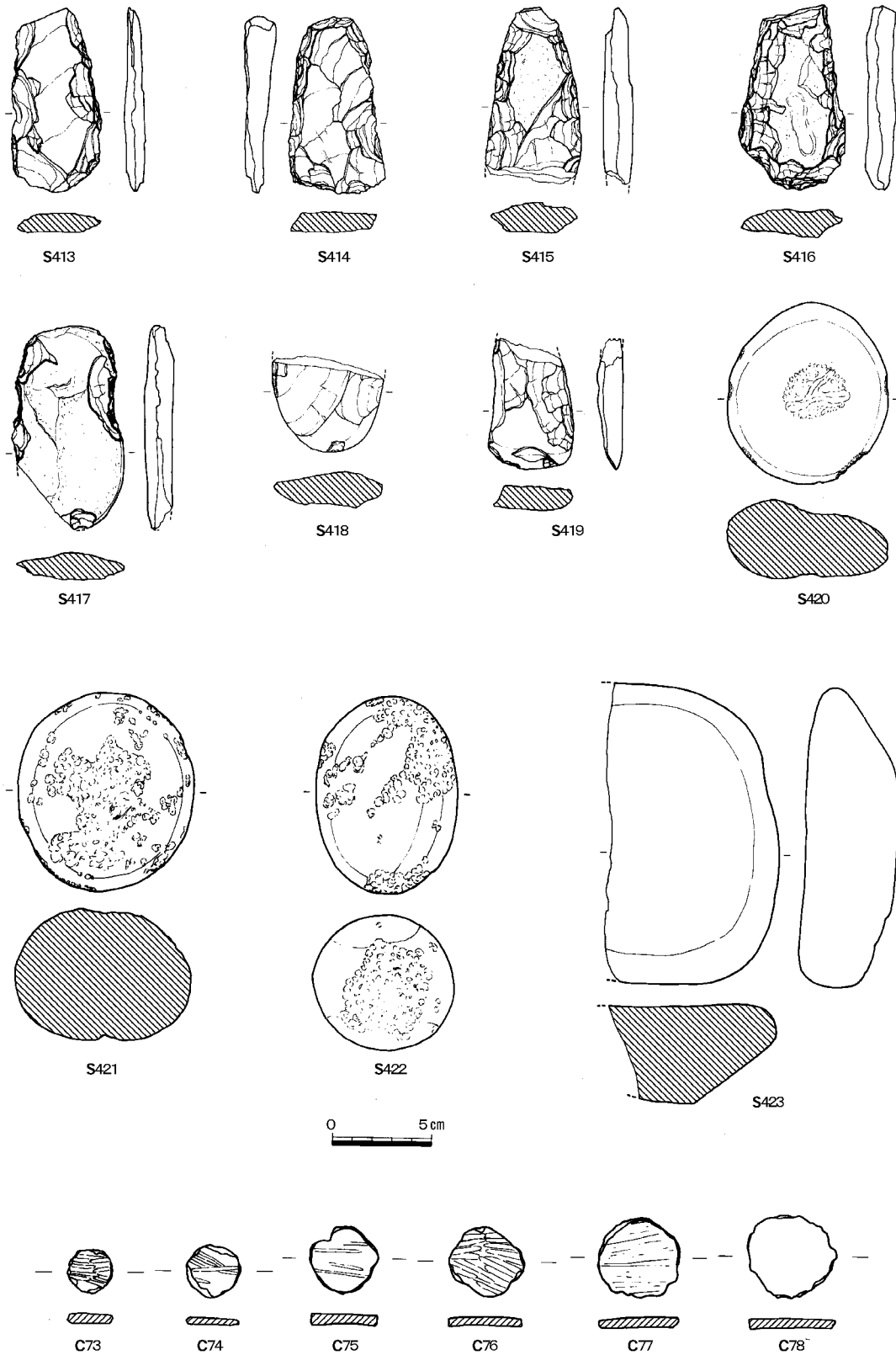
第247図 C地区出土遺物④<下層> (1/4)

晩期中葉の土器としては口縁端部に刻み目が巡る深鉢633、蒲鉾状の粘土帯を貼り付ける640や突出部をもつ639などの浅鉢がある。

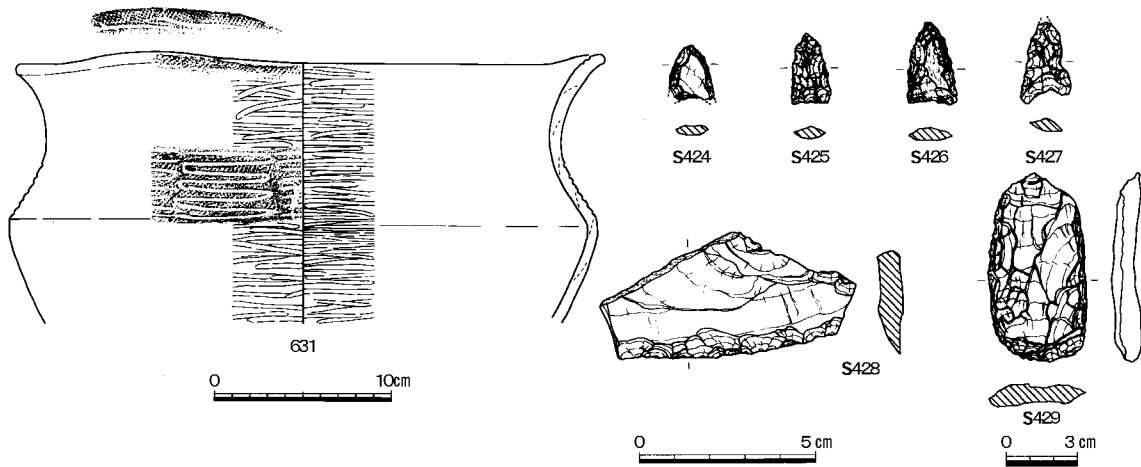


第248図 C地区出土遺物⑤<下層> (1/4,1/2)

第3章 発掘調査の概要

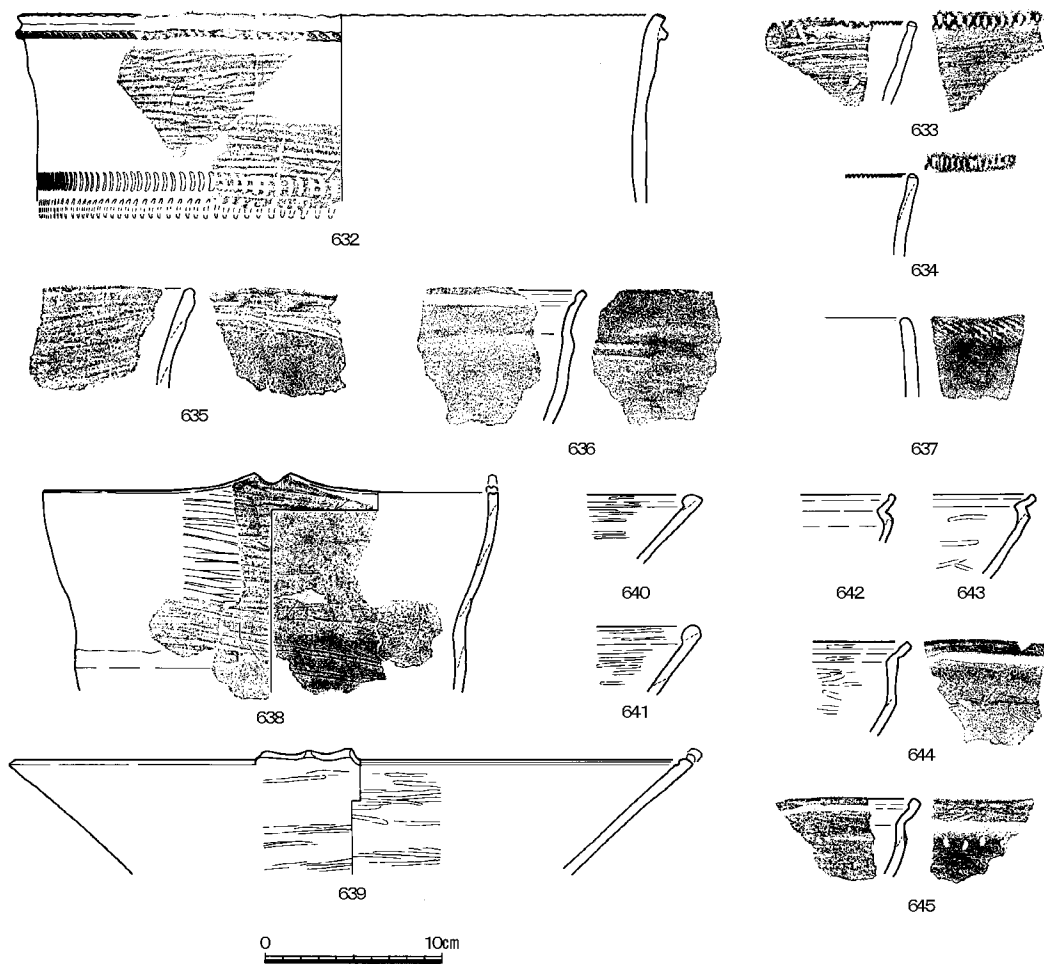


第249図 C地区出土遺物⑥<下層> (1/3)



第250図 D地区出土位置判明遺物 (1/4,1/2,1/3)

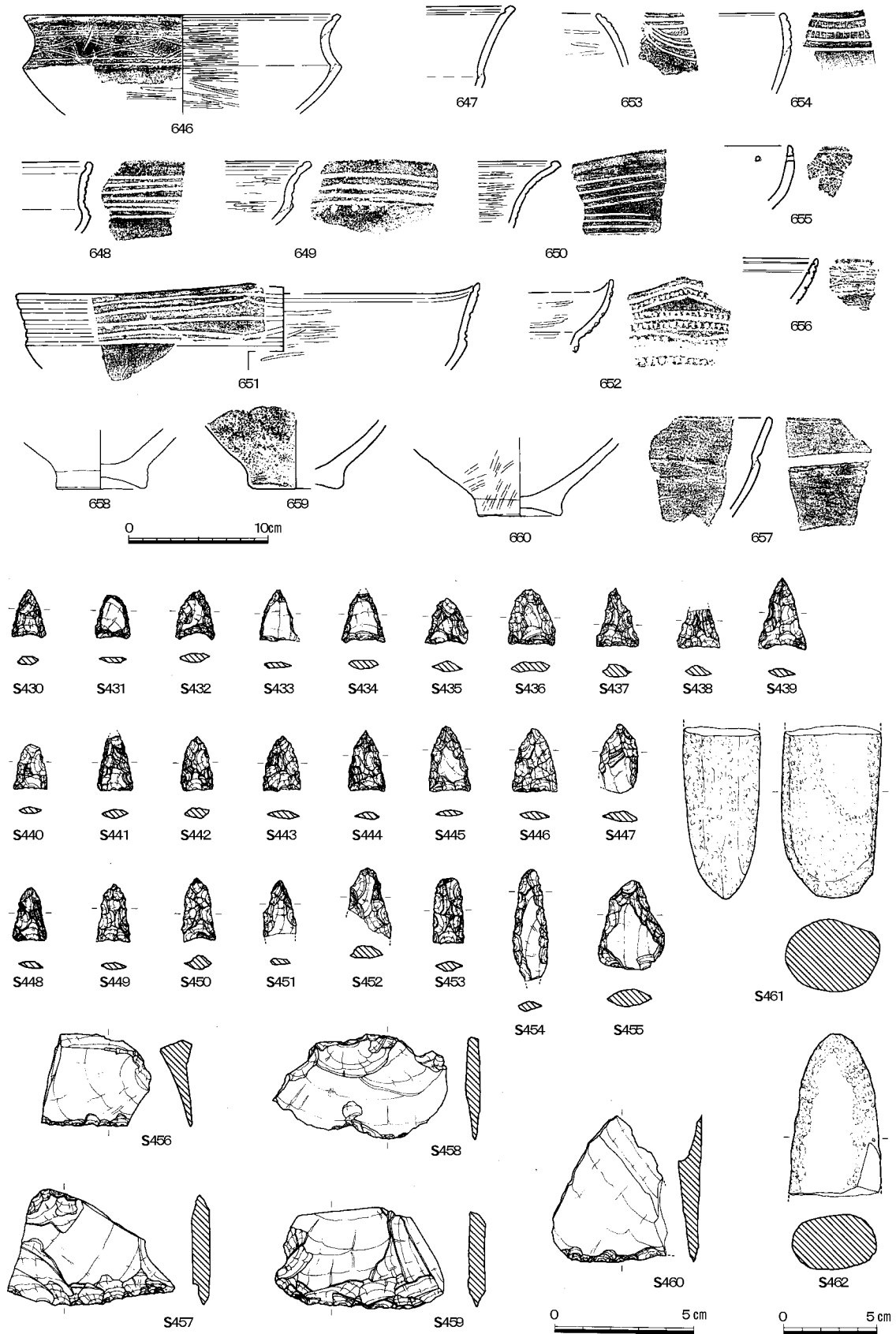
他に出土位置が明らかな石鏃S424～427、スクレイパーS428、石鏃S429をはじめ、一帯からは石鏃S430～455、R.F.S456、スクレイパーS457・S459・S460、磨製石斧S461・S462、石鏃S463～474などの石器類が出土し、また、円盤状土製品C79～87なども出土している。(江見)



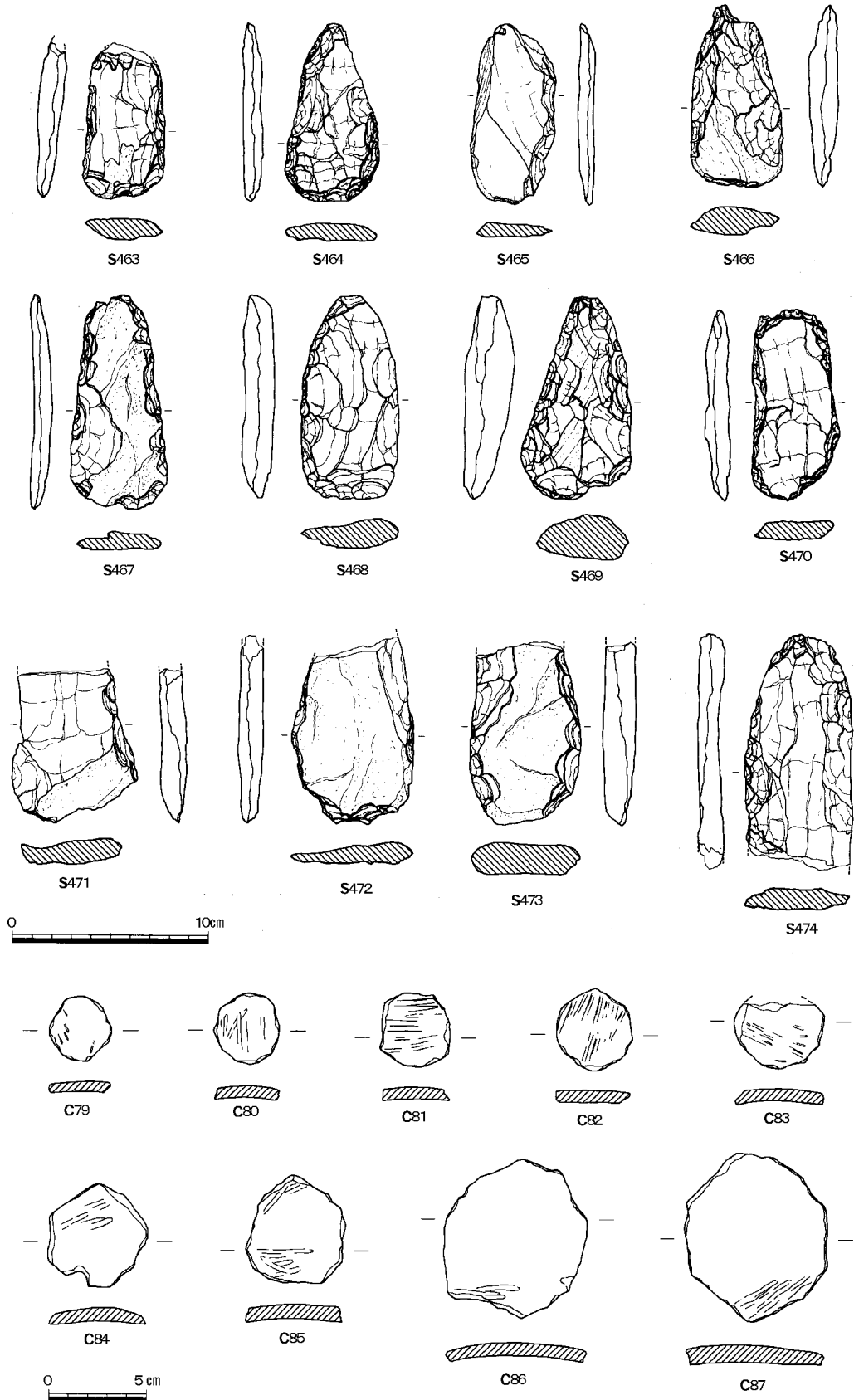
第251図 D地区出土遺物① (1/4)



第3章 発掘調査の概要



第252図 D地区出土遺物② (1/4,1/2,1/3)

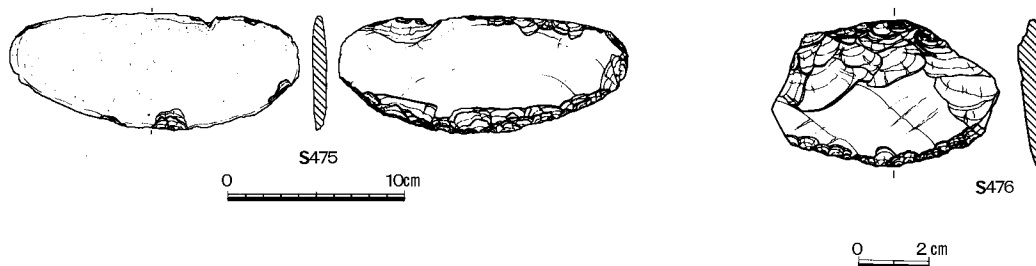


第253図 D地区出土遺物③ (1/3)

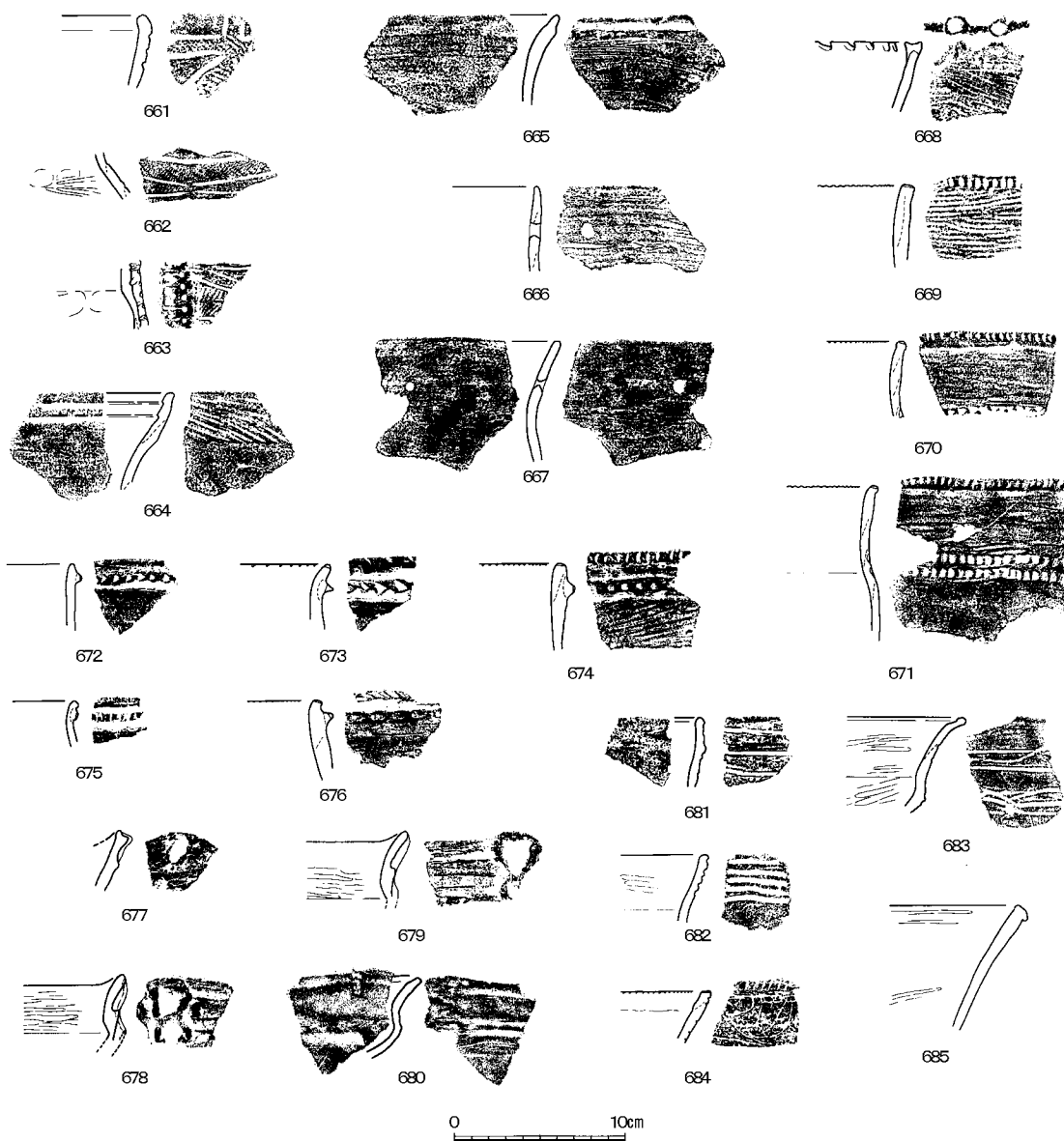
第3章 発掘調査の概要

F地区（第231・254～256図、図版26・43・44）

微高地2の中西部と河道3上流部を含む旧調査区A8区から出土した包含層扱いの土器・石器を掲載している。661は外面に2本沈線による磨り消し縄文が観察できる。口唇部は丸く納められており福



第254図 F地区出土位置判明遺物（1/4,1/2）

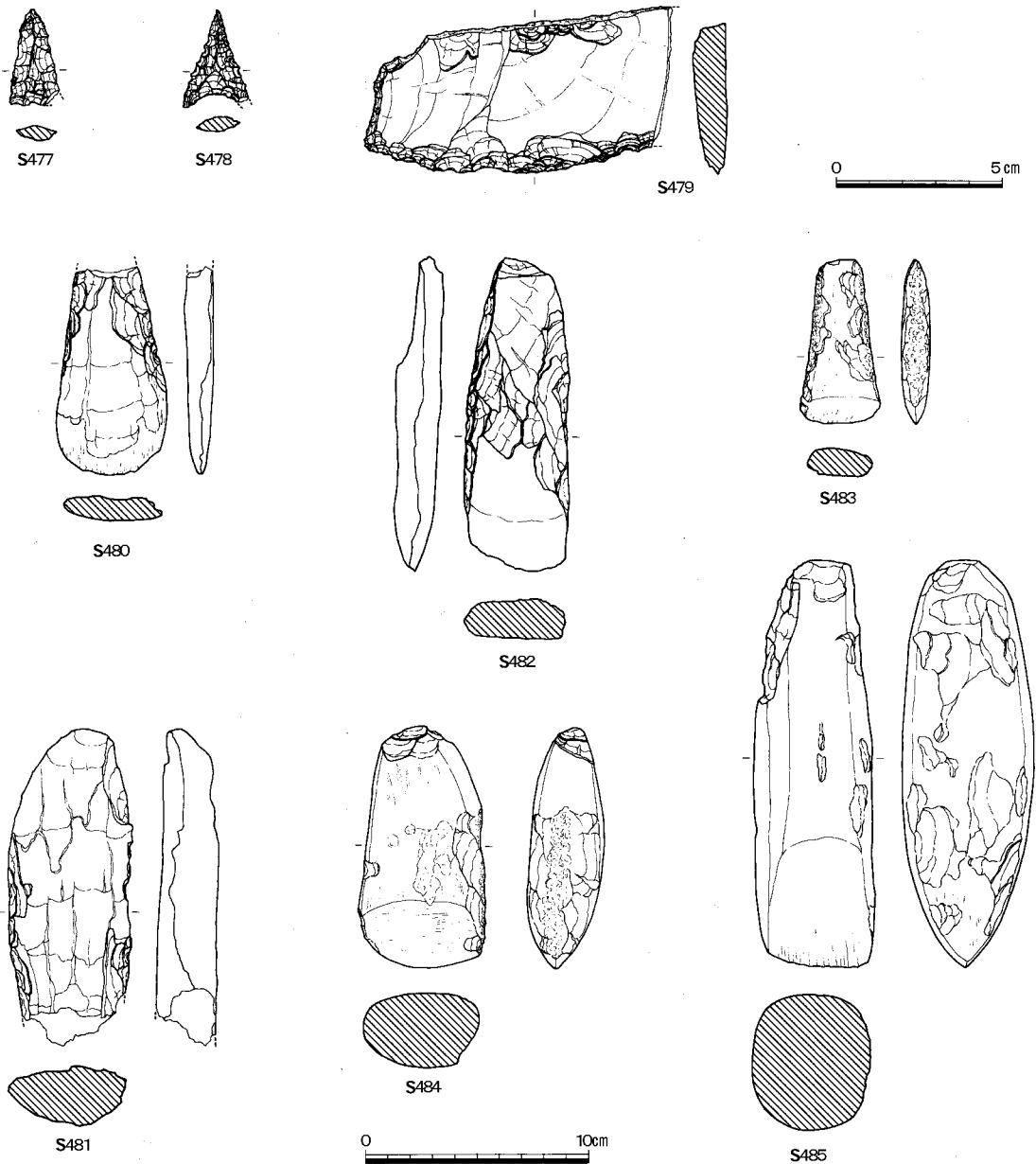


第255図 F地区出土遺物①（1/4）

田KⅡ式であろうか。662は細かい縄文地に、細い横方向の沈線が描かれており、彦崎KⅡ式と考えると良いであろう。663は縦方向に刻み目突帯が貼り付けられているが、662と同様な特徴が認められることから彦崎KⅡ式ではなかろうか。

677～680は深鉢の口縁部でいずれも波状口縁を呈している。外面には巻貝による横方向の凹線が3条ほど引かれると共に、波頂部には同じく巻貝による扇状圧痕が施されているのが特徴で、福田KⅢ式と考えられる。664についても口縁部内面に凹線文があることなどから同時期と考えてよいのではなかろうか。

683は浅鉢で、内外面とも丁寧に磨かれている。口縁部外面に沈線文が施されているのが特徴で、晩期前葉と考えるべきであろう。665・681・682も同時期ではなかろうか。



第256図 F地区出土遺物② (1/2,1/3)

第3章 発掘調査の概要

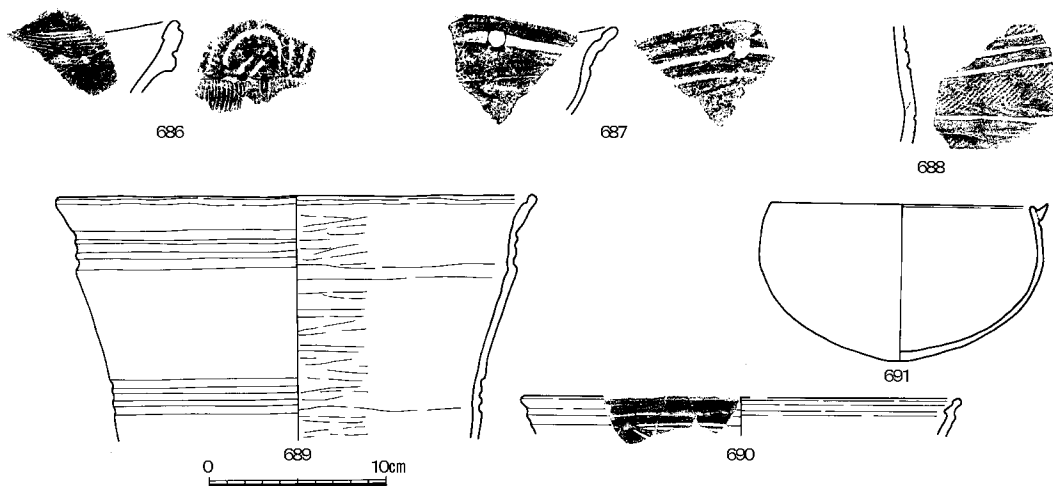
670・671は深鉢で、口唇部に刻み目、口縁部と胴部の境に横方向の小さな刺突文を施しているのが特徴で、晩期中葉と考えられる。おそらく完形品では口縁部に突起と縦方向の爪形文が認められるのではなかろうか。669も同時期であろう。

672～676は深鉢で、口縁端部外面に刻み目突帯を横方向に貼り付けているのが特徴である。673～676には口唇部にも刻み目が施されている。晩期後葉である。石器は一覧表を作成している。 (平井)

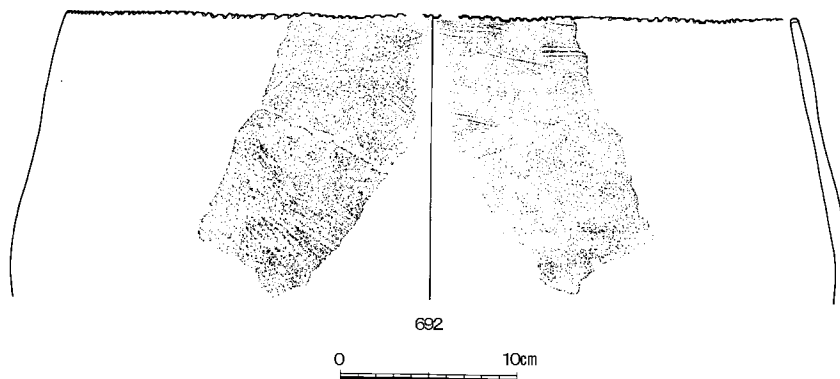
G地区 (第231・257～265図、図版24～26・43～45)

G地区は、久田堀ノ内遺跡の北東側に位置し、ほぼ微高地1全域に相当している。

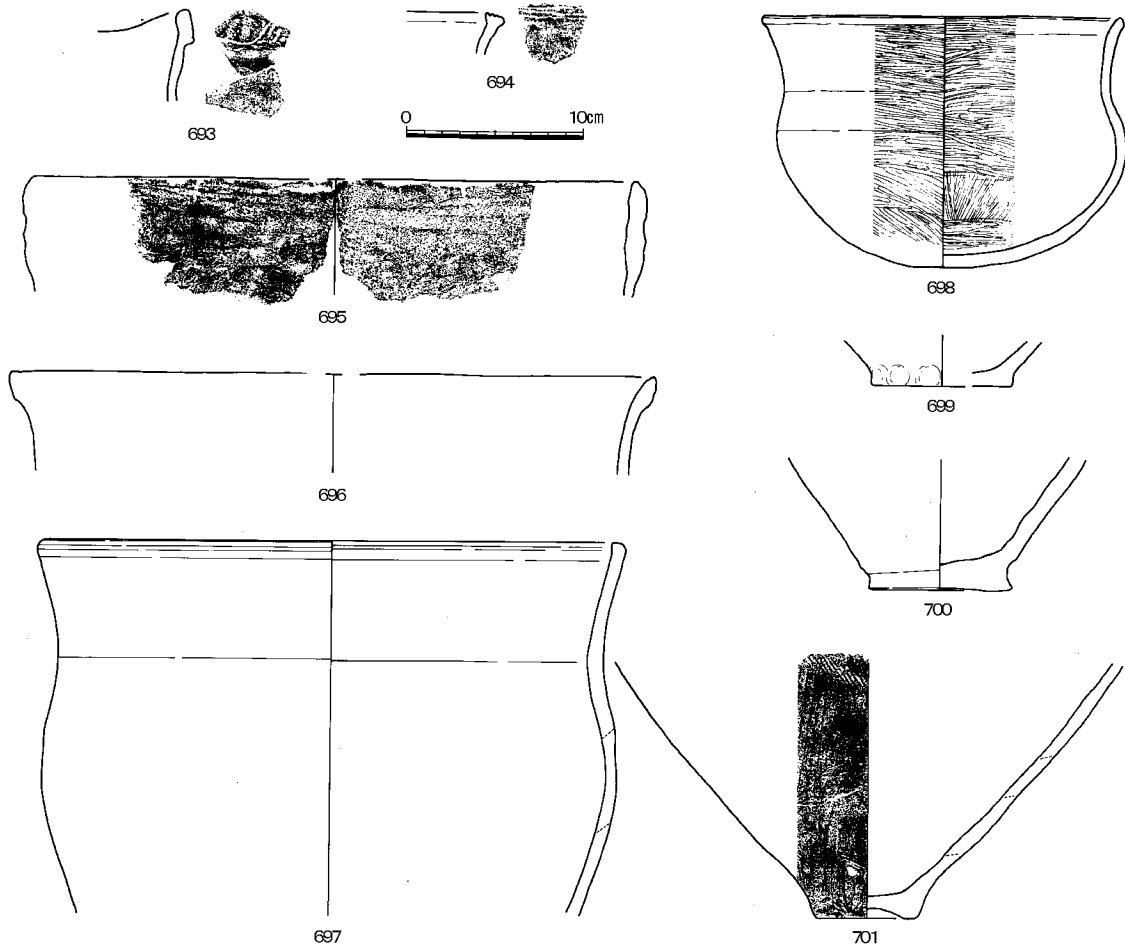
遺物はほぼ微高地全域から出土している。第257図にピット出土遺物を掲載している。後期から晩期まで認められ、686は屈曲した口縁部に文様を施している。687は内面に1条、外面に2条の巻き貝による凹線文を巡らし、凹線上に巻き貝による刺突を施している。691は胎土が黒色で、口縁部に受け部が認められる土器である。内外面ともナデが施されている。第259図は後期包含層中から出土した遺物で、G地区の南側から出土しているものである。693・694・699の後期前葉の土器は同一地点から出土し、ほぼ一括遺物として認識している。698は河道1東斜面②の肩口から出土した。内外面ともヘラミガキが施された鉢である。第260図は出土位置が判明している石器で、S487は河道1東斜面①を掘り



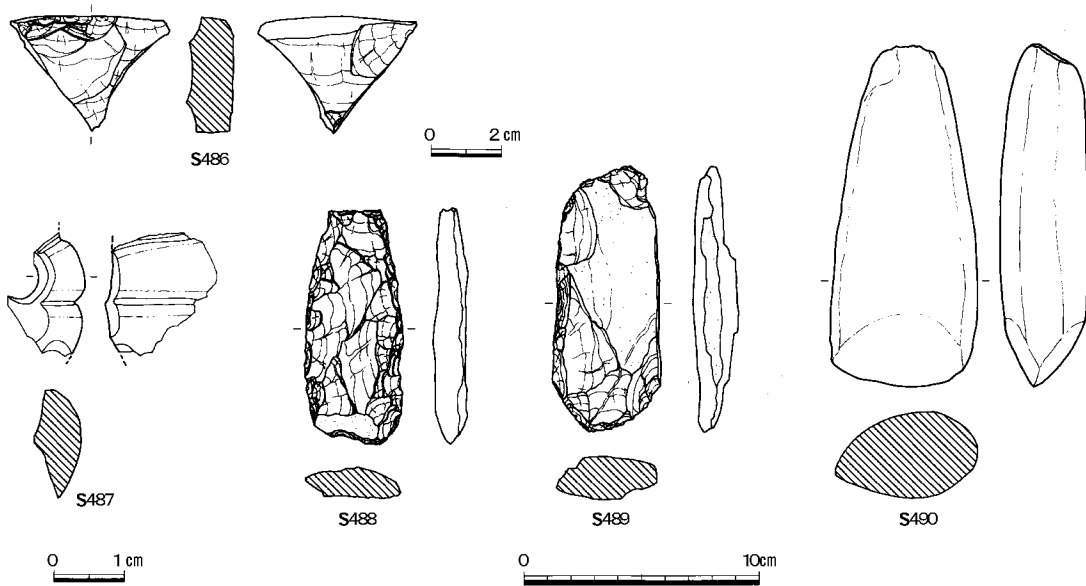
第257図 G地区出土位置判明遺物①<柱穴出土> (1/4)



第258図 G地区出土位置判明遺物②<晩期包含層> (1/4)



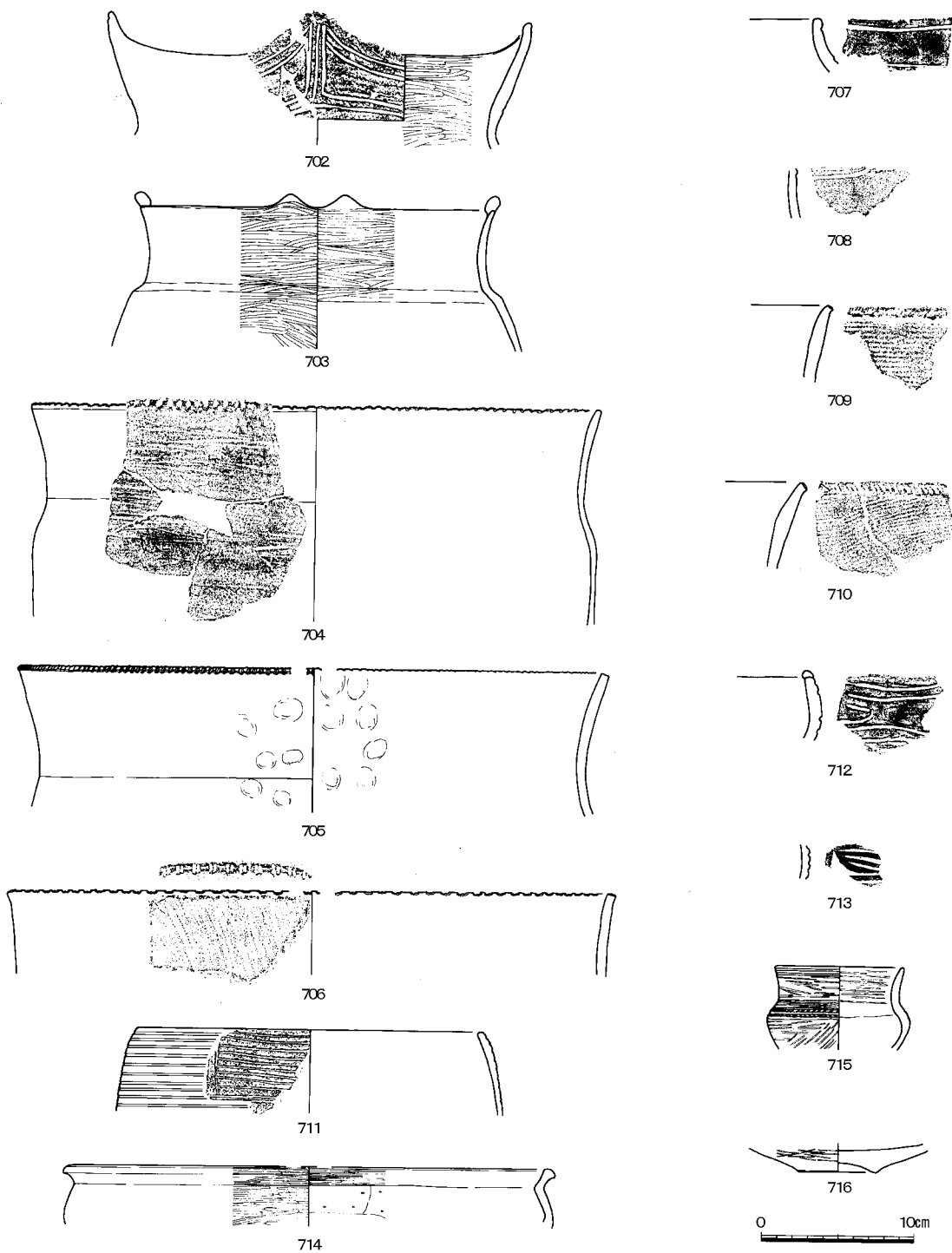
第259図 G地区出土位置判明遺物③<後期包含層> (1/4)



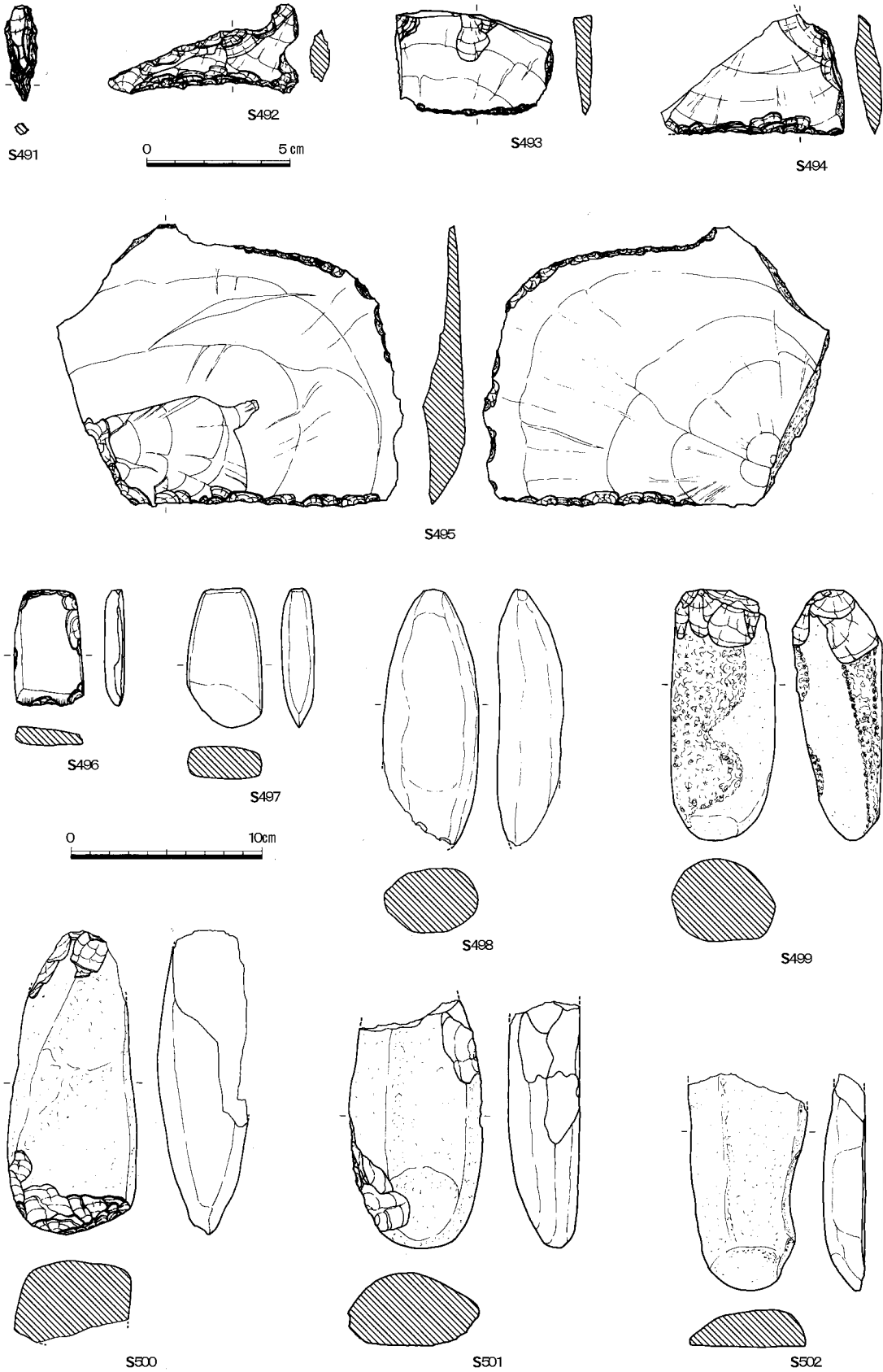
第260図 G地区出土位置判明遺物④<各層出土> (1/2,1/1,1/3)

第3章 発掘調査の概要

下げ中に出土した緑閃石製の獣形勾玉である。第261～265図は各包含層中からの出土遺物である。702は波状口縁の深鉢で、沈線の文様構成から滋賀里I式に近似しているが、口縁部から垂下している3条の沈線の上にLR縄文が施されている。715は口縁部下に2条の沈線、胴部に3条の沈線を巡らせ、沈線の上に刻み目を施した壺である。サヌカイト製の剥片石器では、S491の錐状石器、S492の石匙、

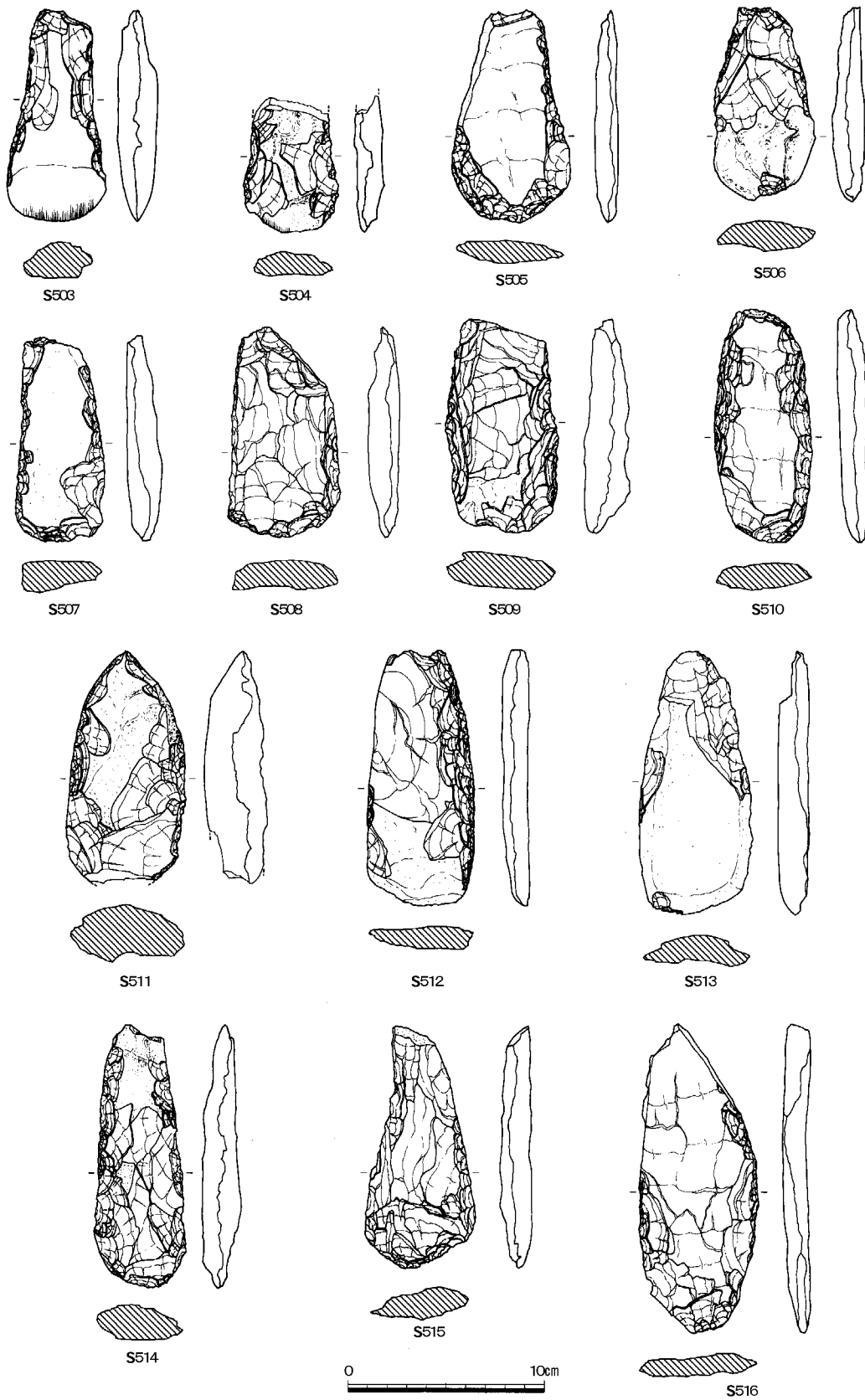


第261図 G地区出土遺物①<晩期包含層> (1/4)

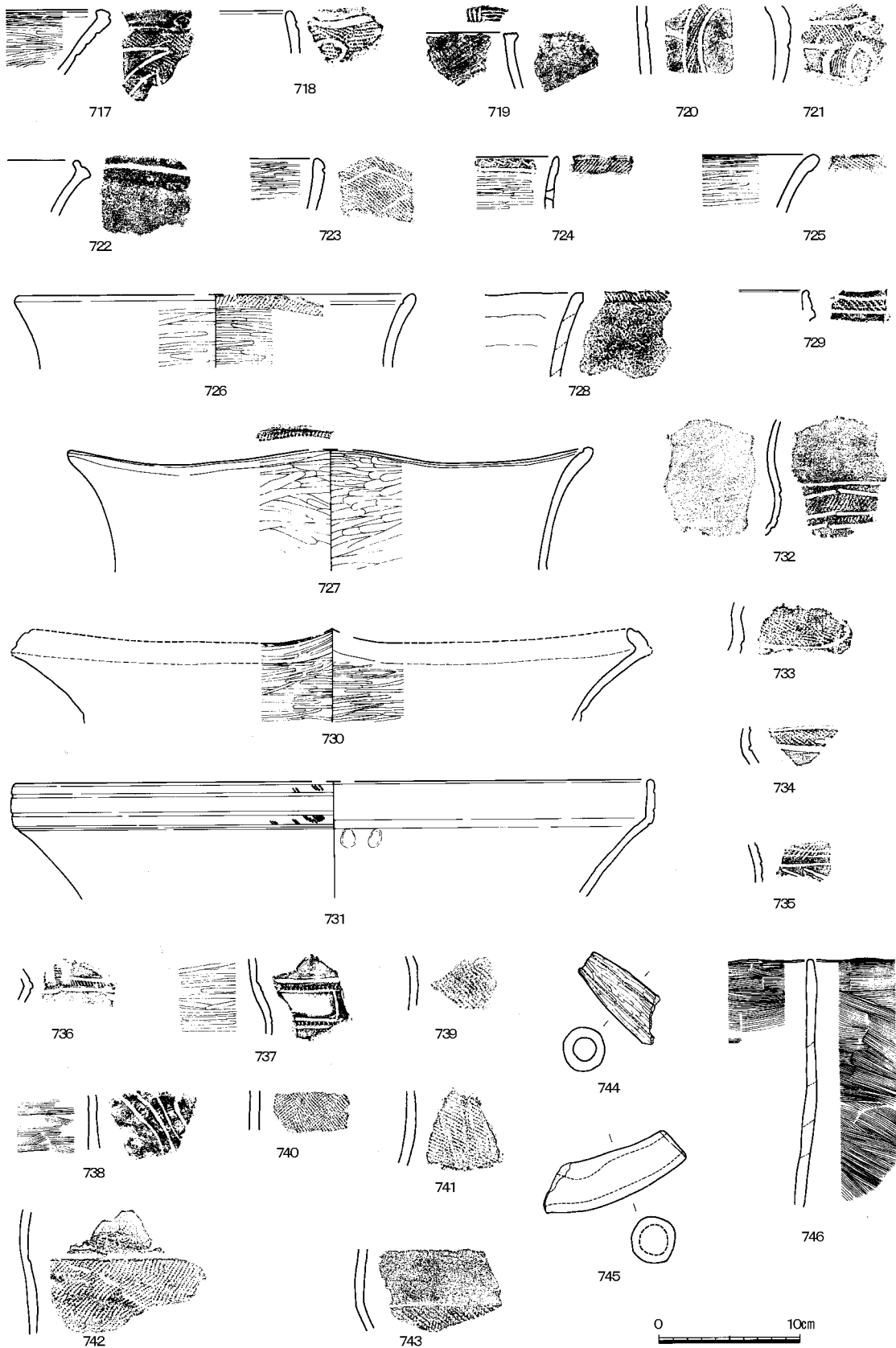


第262図 G地区出土遺物②<晩期包含層> (1/2,1/3)

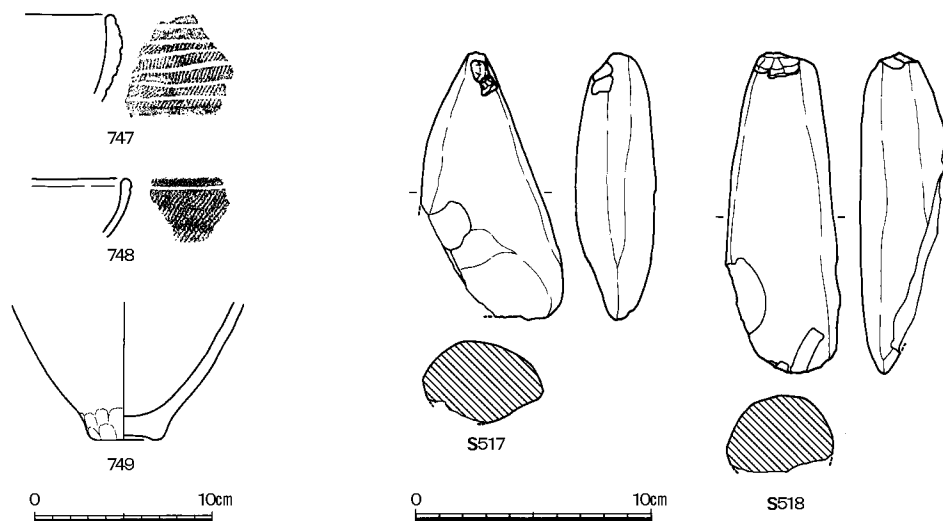




第263図 G地区出土遺物③<晩期包含層> (1/3)



第264図 G地区出土遺物④<後期包含層> (1/4)



第265図 G地区出土遺物⑤<後期包含層> (1/4,1/3)

S493~495のスクレイパー、実測図を掲載していないが石鏃などが出土している。S496~518は磨製石斧・石鋏である。S499は器表面に敲打痕と原礫面のみで、磨製石斧の未製品かもしれない。S500・501は器表面全体に原礫面が残されている石斧である。S503~516は石鋏で、S503は刃部が研磨されている。(小嶋)

H地区 (第231・266~271図、図版27・45・46)

微高地2の南西部と微高地1の南端部、および河道1・4の下流部を含む旧C1区調査区から出土した包含層扱いの土器・石器を掲載している。

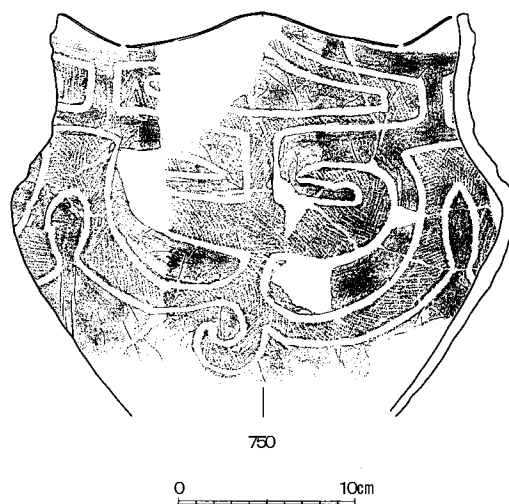
750は第21図に示した地点から出土した。底部を除いて器形が想定できる破片で、外面に磨消縄文を施しているのが特徴である。文様は2本沈線が途切れておらず、口縁部と胴部が一連のものとして描かれており、いわゆるJ字文も多用されている。口唇部は肥厚せず、やや角張っている。こうした特徴から中津式と考えることができよう。久田堀ノ内遺跡では最も古い縄文土器であろう。

751・752・754は2・3本の沈線文が認められることから福田KⅡ式と想定したいが、文様構成が不明なため明確とはいえない。

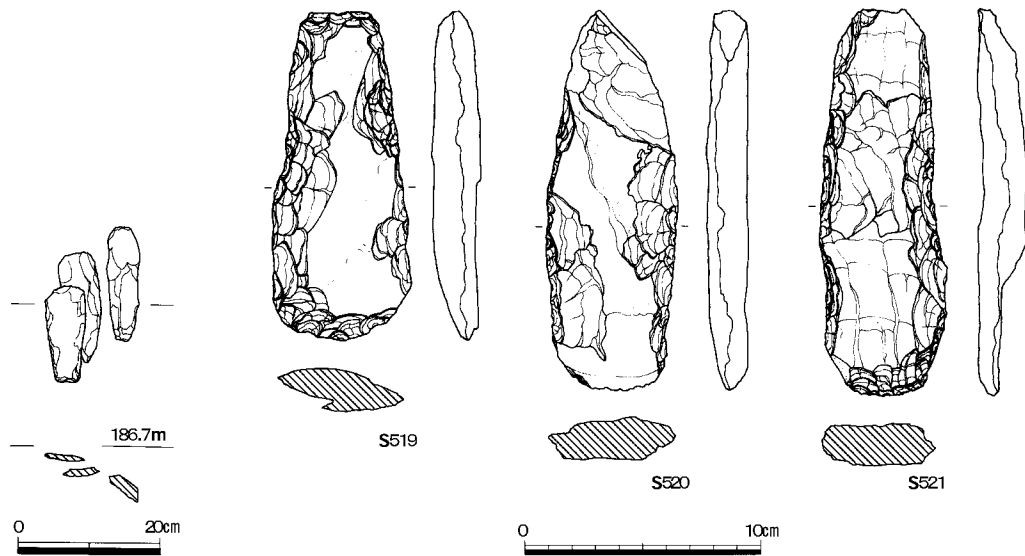
754は口縁部を拡張し、外面に円形の沈線文などを施しており、津雲A式の特徴を備えている。756も同時期ではなかろうか。

781は外面に横方向の磨消縄文と口縁部内面に平行沈線および縄文帯が認められることから、彦崎KⅡ式であろう。773も同時期ではなかろうか。

753は口縁部外面に巻貝による凹線文が施されており、福田KⅢ式であろう。760・820は後期中葉~後葉の注口土器である。



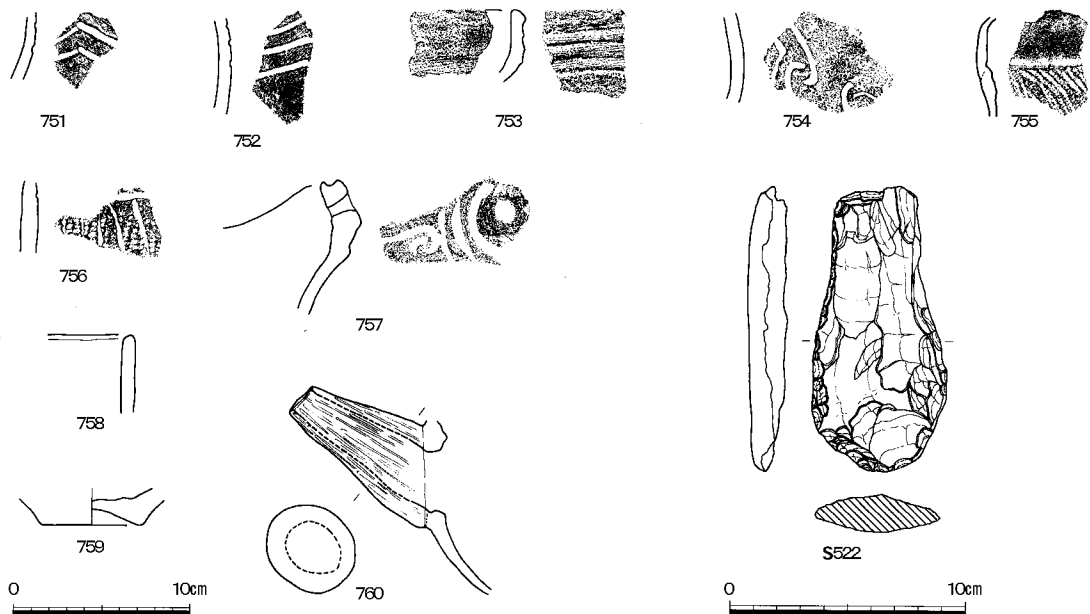
第266図 H地区出土位置判明遺物① (1/4)



第267図 H地区出土位置判明遺物② (1/3)・出土状況 (1/10)

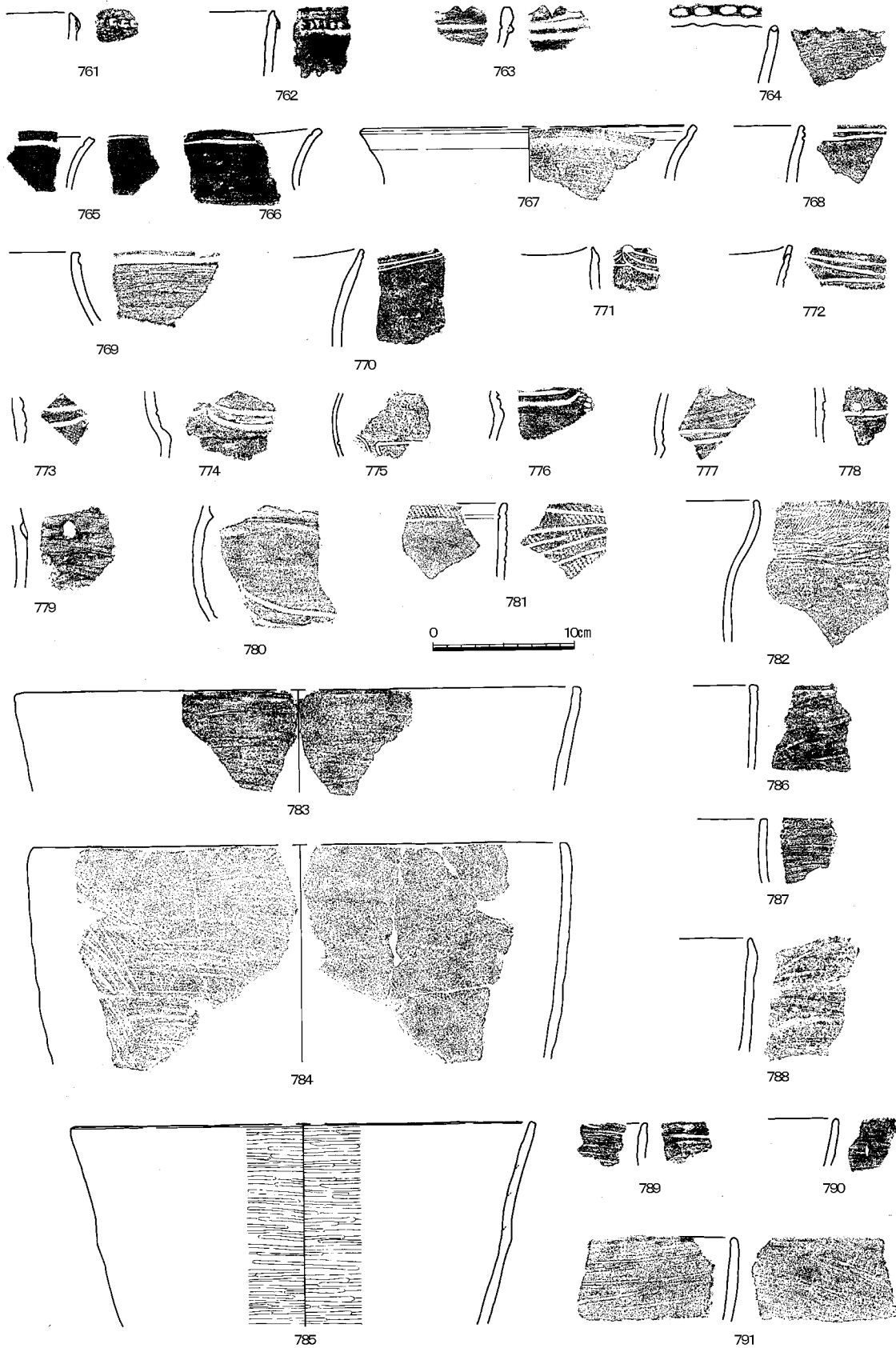
765～772は口縁端部内面に平行沈線や口縁端部外面に複数の平行沈線を施しているのが特徴で、晩期初頭と考えておきたい。774・776～778・780も胴部との境に沈線文があることから同時期と考えたい。792は口縁部と胴部の境に強いヨコナデを施しており晩期中葉、761・762は突帯文土器で晩期後葉である。813～816の浅鉢は晩期初頭と考えている。

S519～521は第21図に示した地点からまとめて出土した緑色片岩製の石鋤である。埋納壙は検出できなかったが、第267図のように刃部を揃えており、人為的な行為が想定できる。他の石器については一覧表を作成している。(平井)

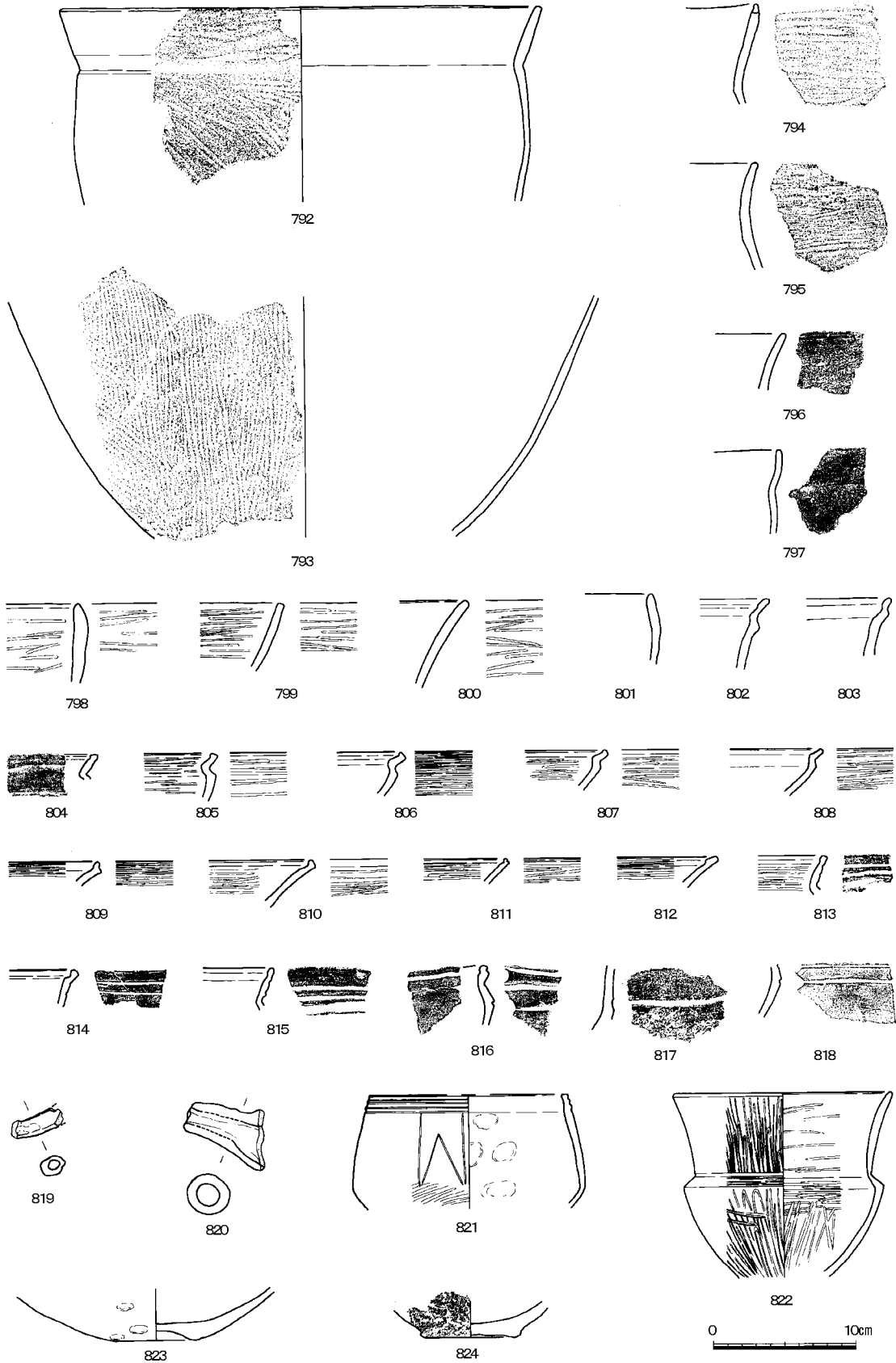


第268図 H地区出土遺物①<微高地1出土> (1/4,1/3)

第3章 発掘調査の概要

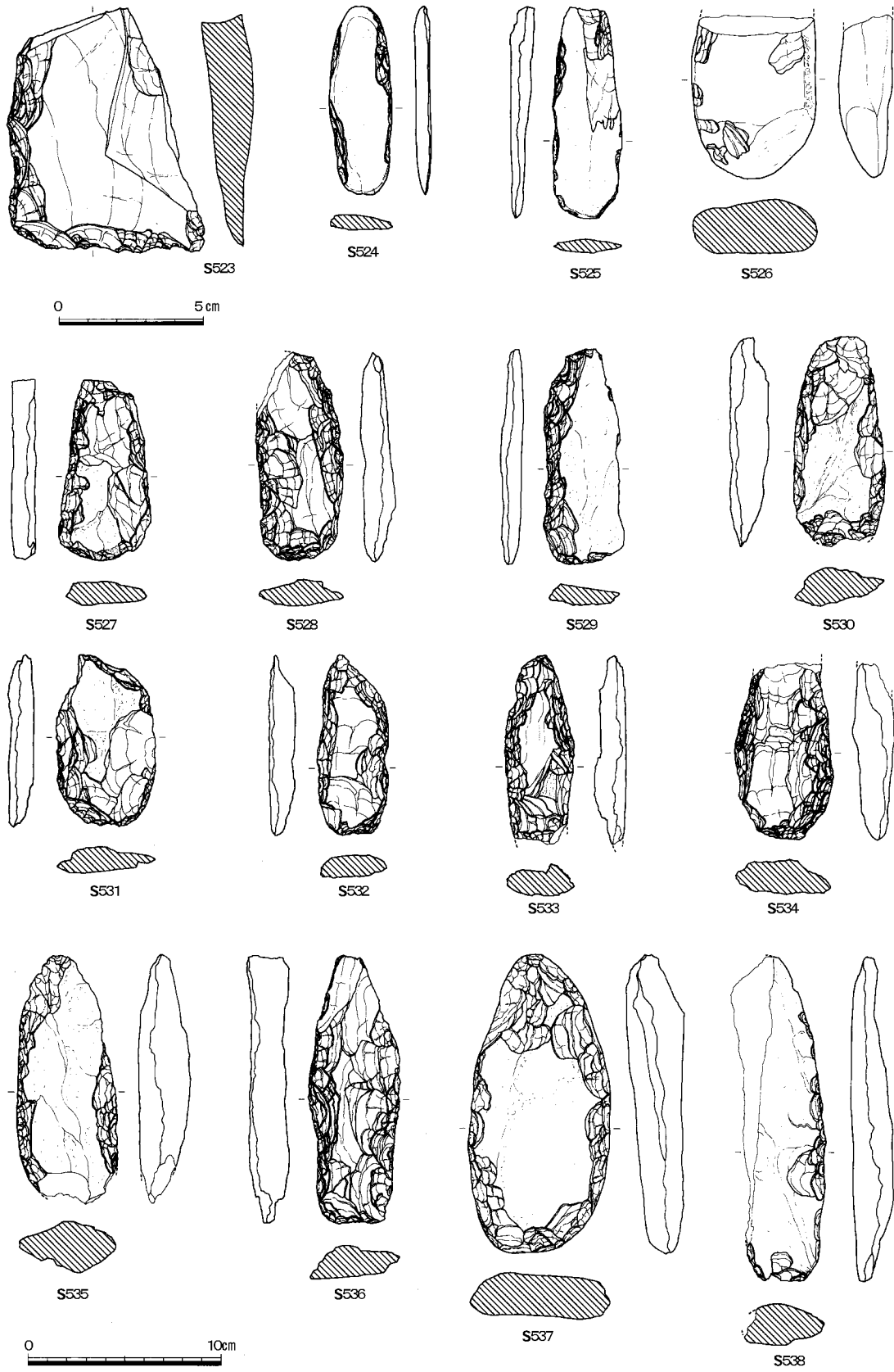


第269図 H地区出土遺物②<微高地2出土> (1/4)

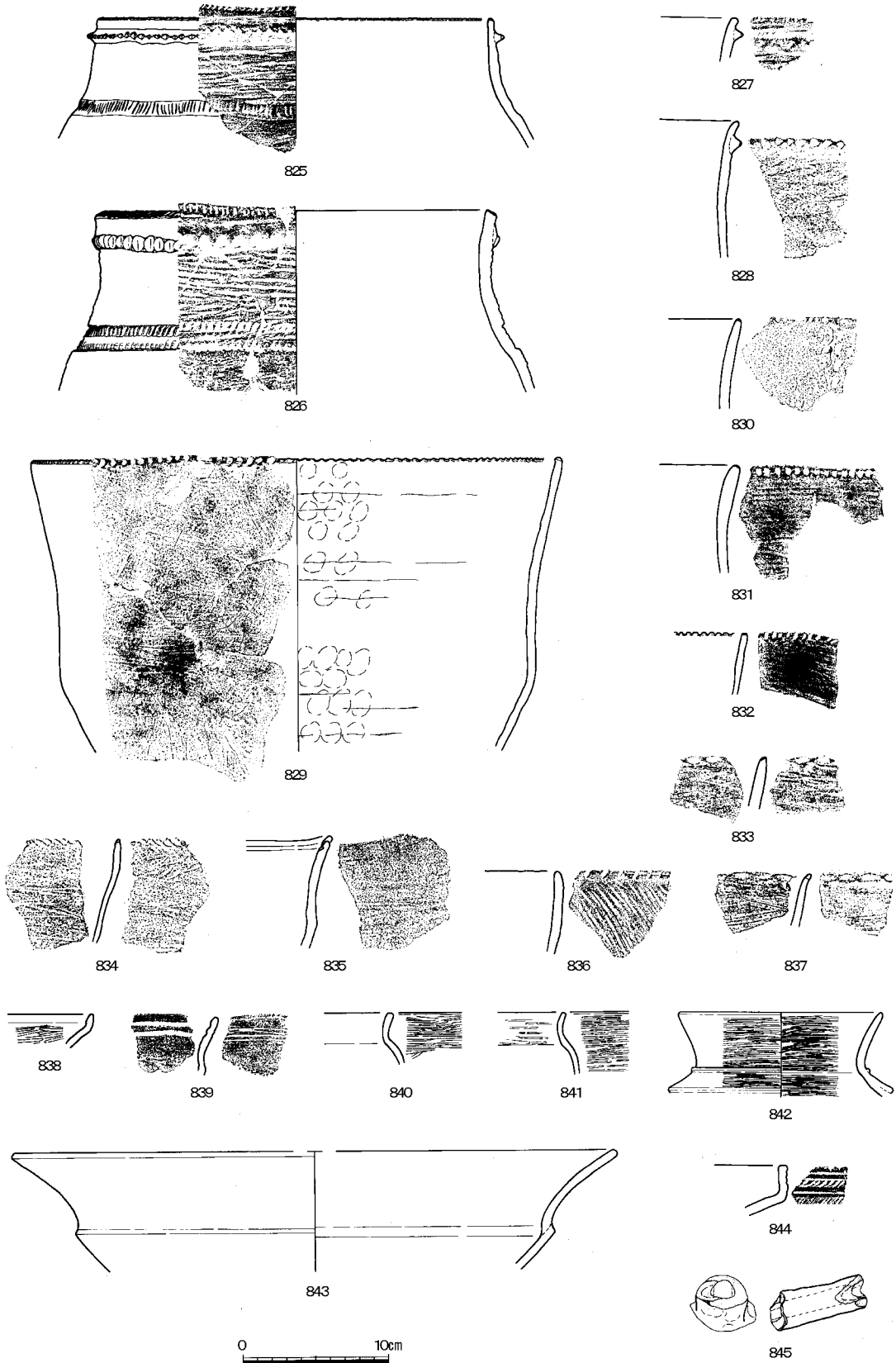


第270図 H地区出土遺物③<微高地2出土> (1/4)

第3章 発掘調査の概要



第271図 H地区出土遺物④<微高地2出土> (1/3,1/2)



第272図 I地区出土遺物① (1/4)

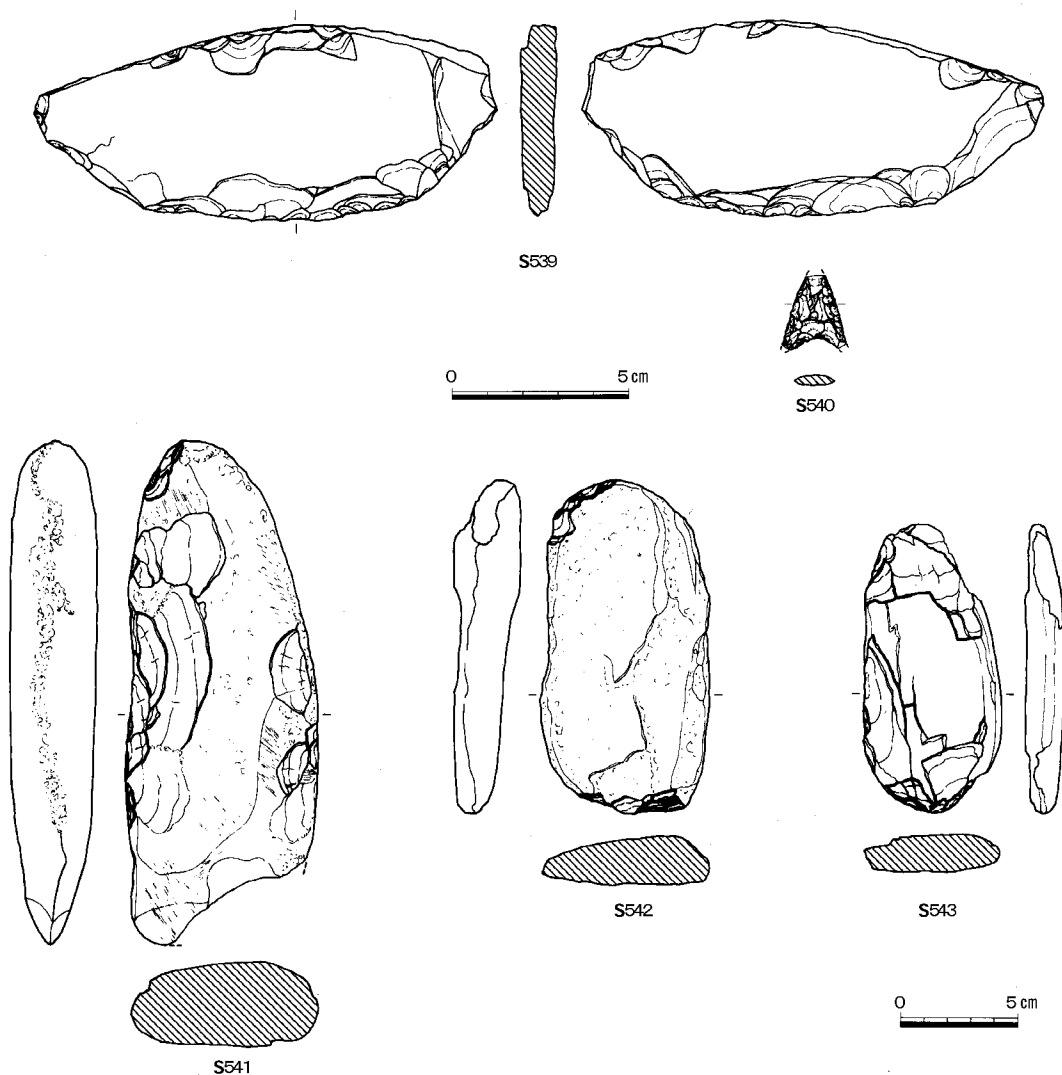


I 地区 (第231・272・273図、図版28・46)

晩期後葉の突帯文土器では、口縁端部が角張る825～827と丸みを帯びる828がある。このうち前者は頸部に押し引き文を施し、後葉古段階に属する。842は、黒色で器面をよく研磨した壺で、頸部と肩部に段をもつ。例を知らないが晩期後葉と考えておきたい。浅鉢では、843や緩やかに外反する口縁をもち、口縁端部は平坦な面をなす840、端面がわずかに凹部となる841がこの時期に属する。830～837は、晩期中葉段階の深鉢である。このうち835は、波状口縁で刻みはない。浅鉢838はこれらに伴うとみられる。有文の浅鉢838は、晩期初頭である。

後期の土器844は、5条の凹線を引いた後に巻き貝による押圧を加えた偽縄文で、後期末葉の土器である。845は、注口土器である。

剥片石器では、刃部が厚く器種認定に難を残すが横刃型刃器 S539 や石鏃 S540 が出土している。礫石器は磨製石斧 S541、石鏃 S541～543 があり、S541 は側縁部に敲打痕が残存し、石鏃は2点とも器表面に礫面を大きく残している。 (福田)



第273図 I 地区出土遺物② (1/2,1/3)

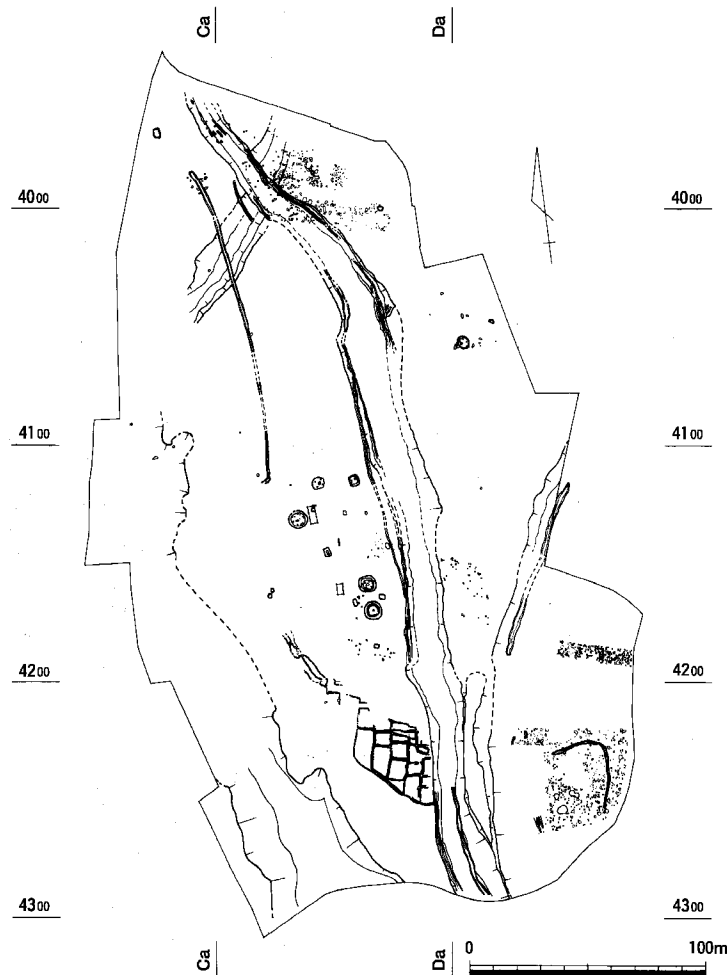
## 第3節 弥生時代の遺構と遺物

## 1 概要

弥生時代の遺構は調査区のほぼ全面から確認ができた。検出できた遺構は竪穴住居13軒、掘立柱建物2棟、袋状土壇1基、土壇28基、溝14条、水田、河道などである。遺構の時期としては、中期前葉～中葉と中期後葉および後期以降に大別できるが、中期後葉のものがほとんどである。

中期前葉～中葉の遺構は河道が検出されているのみであるが、久田原遺跡でも確認された弥生時代終末期～古墳時代初頭頃の洪水によって、調査区の西側が大きく削平を受けており、この地点から中期中葉段階の土器も出土することから当該期の遺構はこのあたりに展開していた可能性が高い。

中期後葉の遺構は調査区のほぼ全域にて検出されている。竪穴住居跡は調査区の北側と中央に分かれて存在し、前者は久田原遺跡西側の竪穴住居5と有機的な関係をもつと考えられる。後者は竪穴住居10軒（内小規模なもの5軒）、掘立柱建物2棟、土壇11基、火処1か所からなる群をなし、大きく削



第274図 弥生時代遺構全体図① (1/3,000)

### 第3章 発掘調査の概要

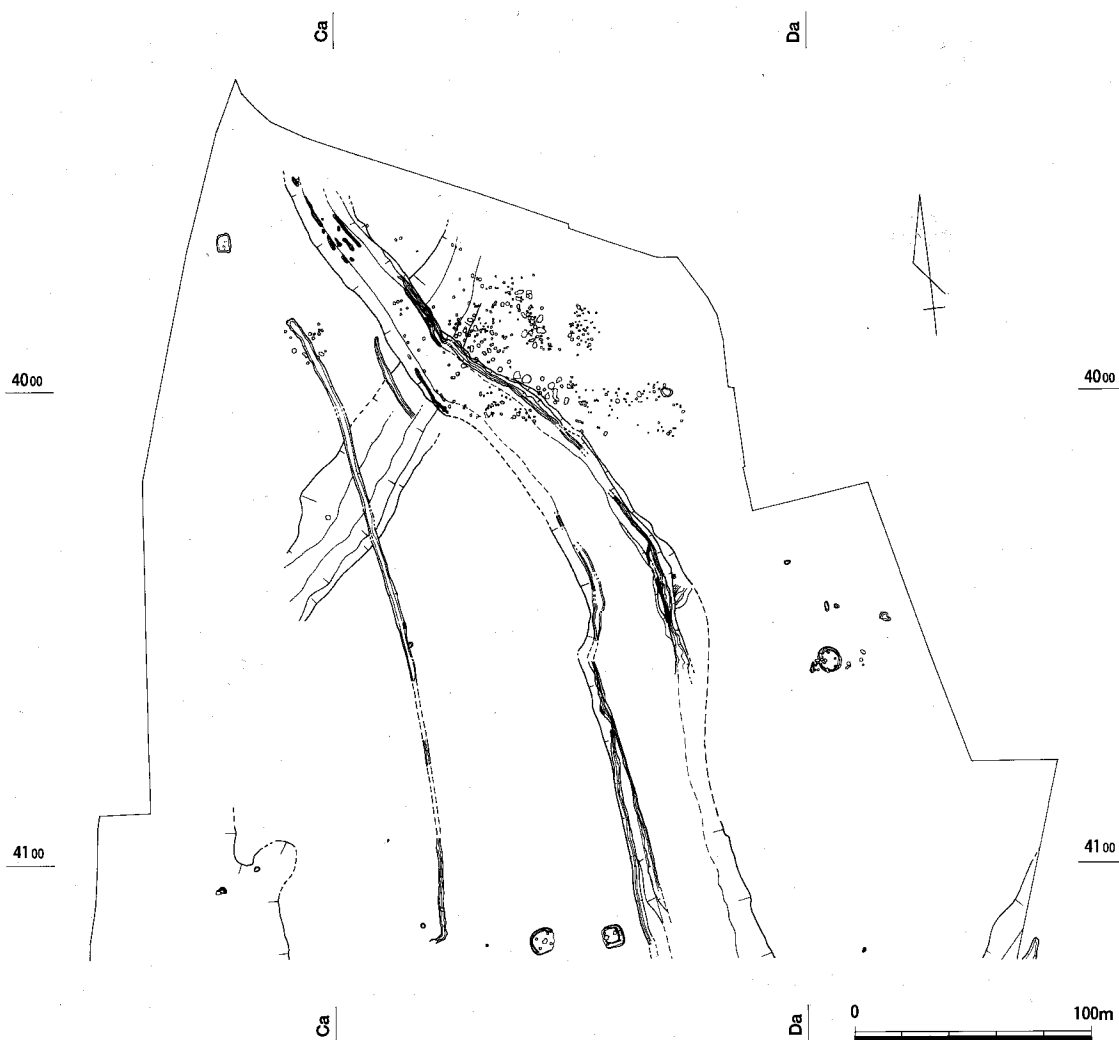
平を受けている調査区の西側にもさらに竪穴住居跡群が展開していた可能性が高いと考えられる。これら遺構は河道7が形成されることを契機として営まれた可能性があり、河道7に沿って多くの遺構が形成されている。調査区南方に検出された水田は中期後葉段階の洪水砂直下で検出されたことから、当該期に属するものと考えられる。そのことから、調査区中央に形成された住居跡群と有機的な関連性をもつものと考えられる。河道7に沿って形成された溝群は水田へと水を配する水路として機能していた可能性が考えられるが、それ以外の用途も考えられる。

後期の遺構は河道のほかに溝が数条検出されているのみであり、詳細はわからないものの、洪水砂中や包含層からも遺物が確認できるため、検出された以外に遺構が形成されていた可能性が高い。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての大洪水によって削平を受けていると考えられる。

そのほか、前期および終末期の土器も、洪水砂中や包含層から検出されているため、何らかの遺構があった可能性がある。

遺物としては、土器・土製品・石製品・鉄製品などが確認されている。

土器としては、中期後葉を中心として、前期から終末期にわたる各時期のものが確認されている。



第275図 弥生時代遺構全体図② (1/1,500)

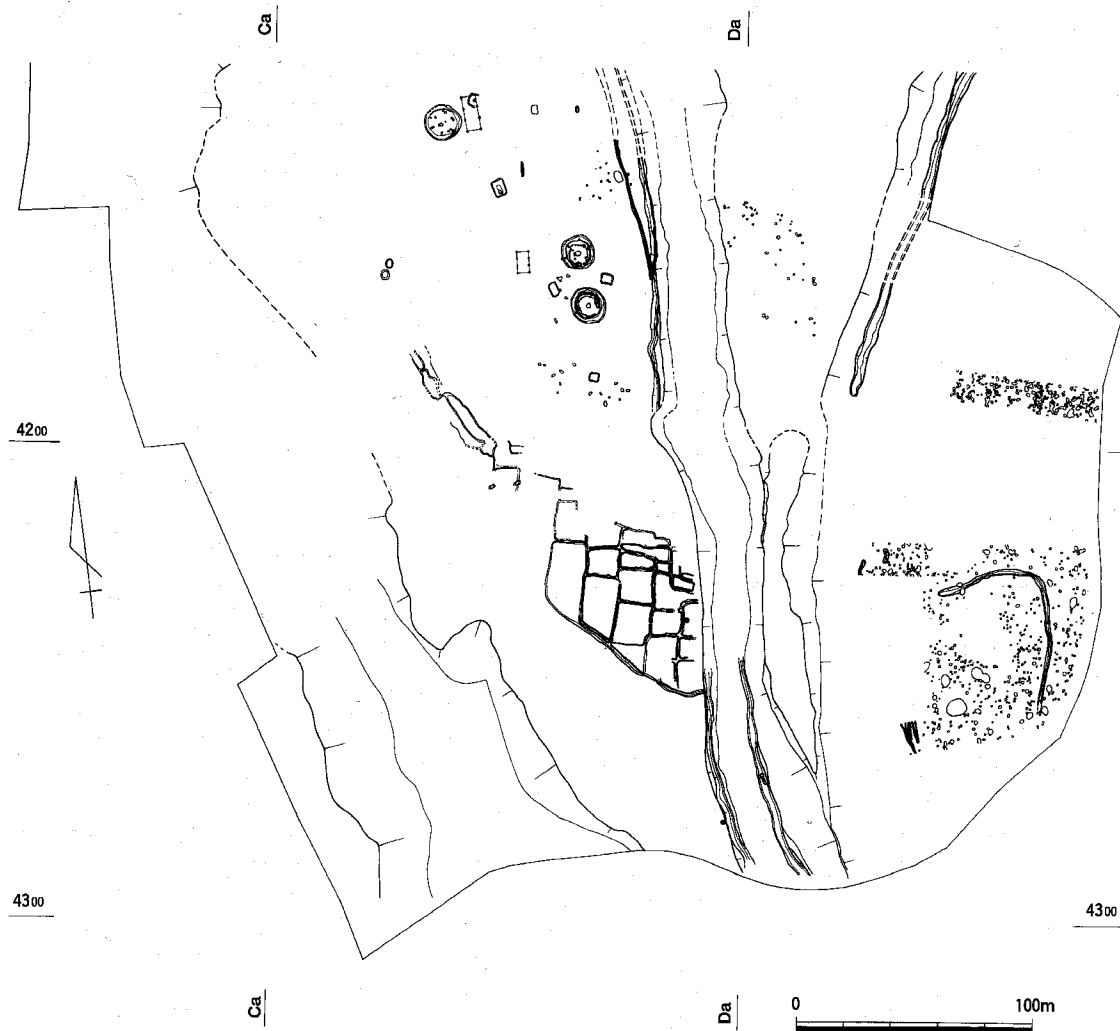
器種としては壺・甕・鉢・高杯・器台等各種が見られる。土器の中には鋸歯文を施した中に赤彩を施すものなどがあり、周辺地域との関係を考えていく上でも重要なものも含んでいる。

石製品としては、竪穴住居9から検出した中期後葉の碧玉製管玉の製品をはじめ、石鏃・石包丁・スクレイパー・磨製石斧・砥石など各種が竪穴住居等から確認されている。

鉄製品としては、後期の溝7から検出された鉄鏃のほか、竪穴住居9から確認された中期後葉の鍛造の木柄に装着された状態で出土したヤリガンナ及び近年類例が増加しつつある鉄器生産の存在を示す鉄片が注目される。

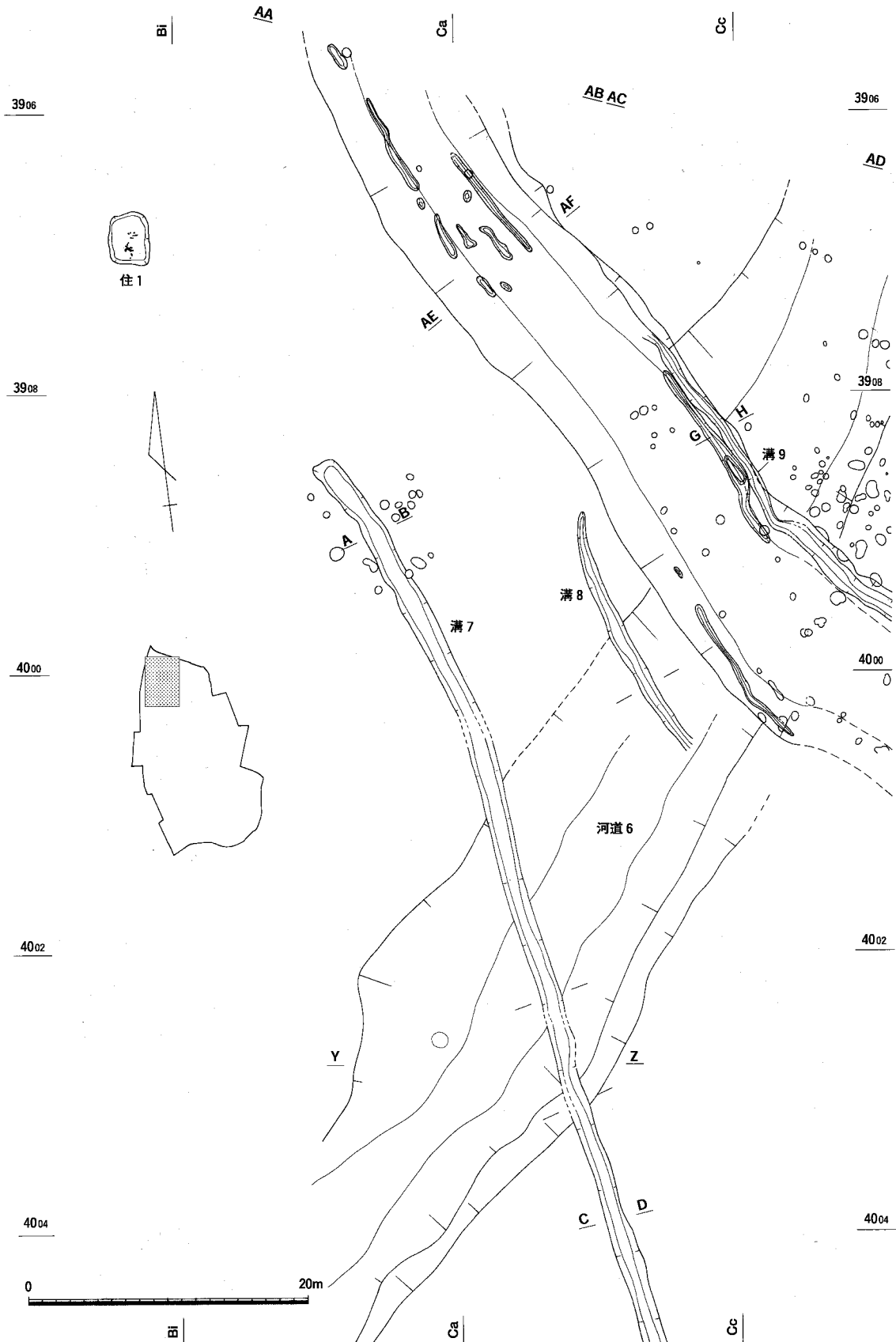
これ以外には、土器片転用の紡錘車が久田原遺跡中期初頭～中葉の遺構・遺物が主体のものに比べ量が少ないものの、6点出土している。

遺物は調査区全体から確認されているが、竪穴住居が集中する調査区中央部からの出土が特に多い。それは竪穴住居や土壇、溝、河道などから出土しており、全て中期後葉という同じ時期のものであることから、この集落に伴って使用され、廃棄されたものと考えられる。これは県北部の当該時期の遺物のセット関係を考えていく上でも重要な資料である。 (河合)



第276図 弥生時代遺構全体図③ (1/1,500)

第3章 発掘調査の概要

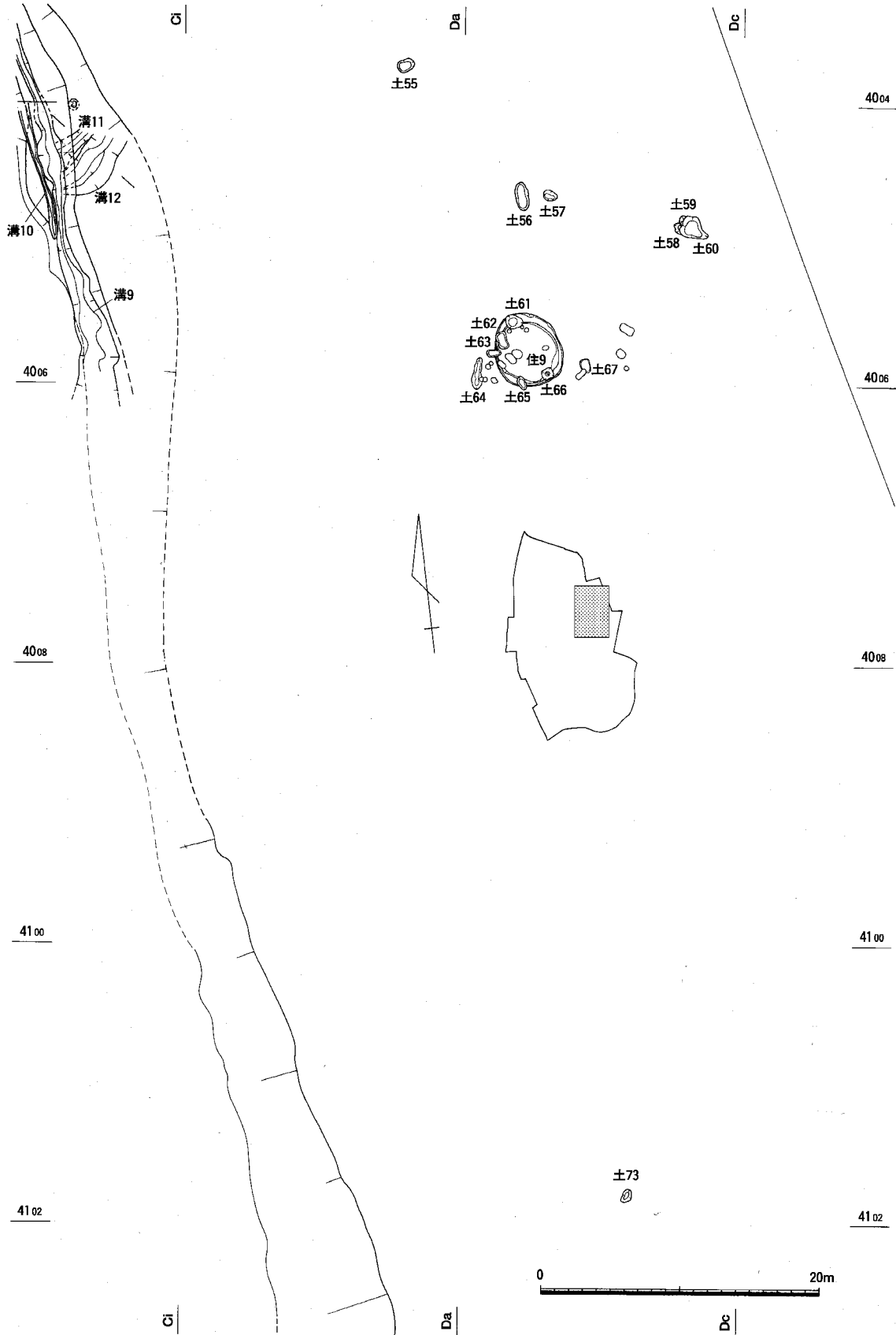


第277図 弥生時代主要遺構部分図① (1/400)

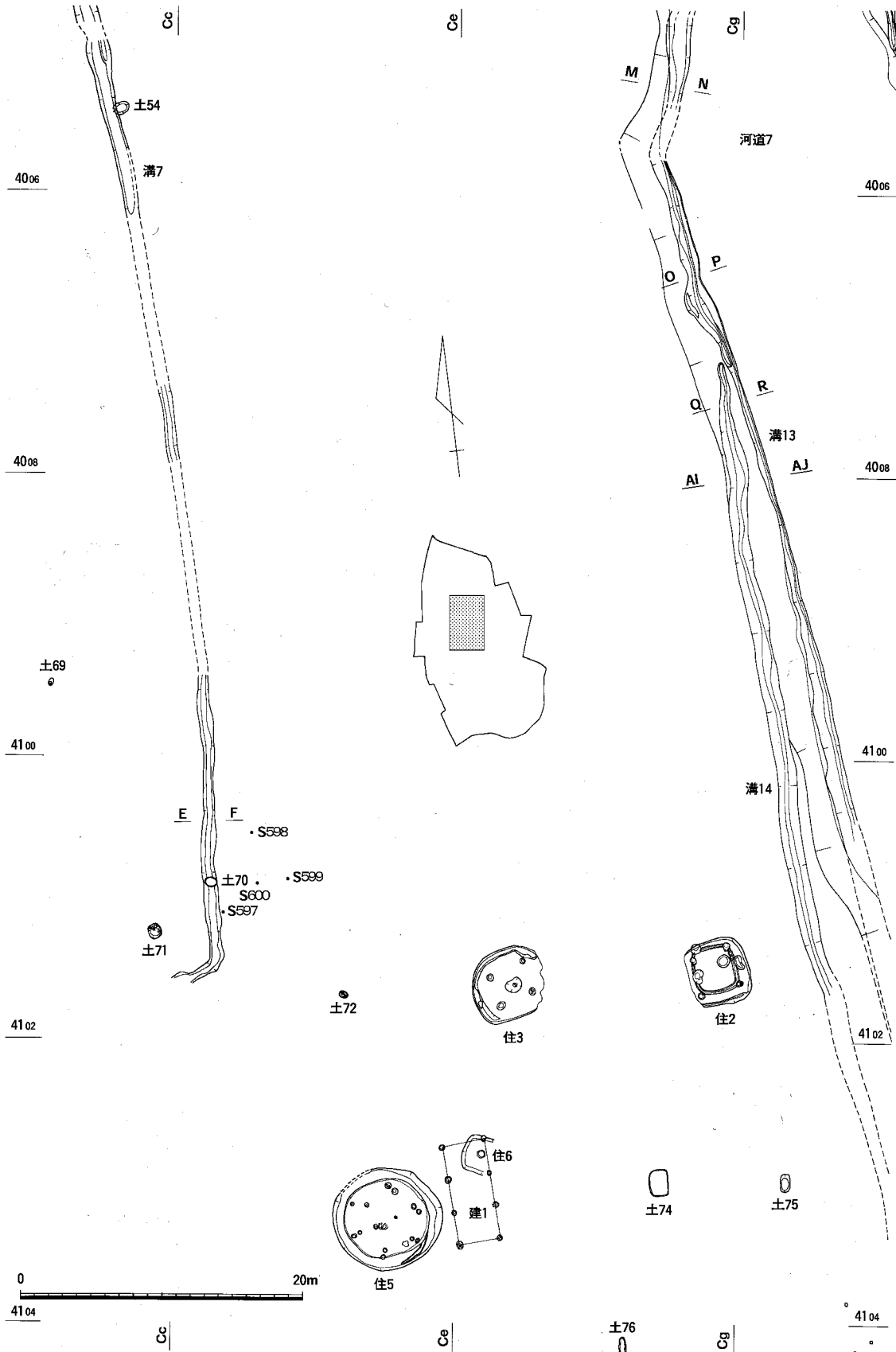


第278図 弥生時代主要遺構部分図② (1/400)

第3章 発掘調査の概要



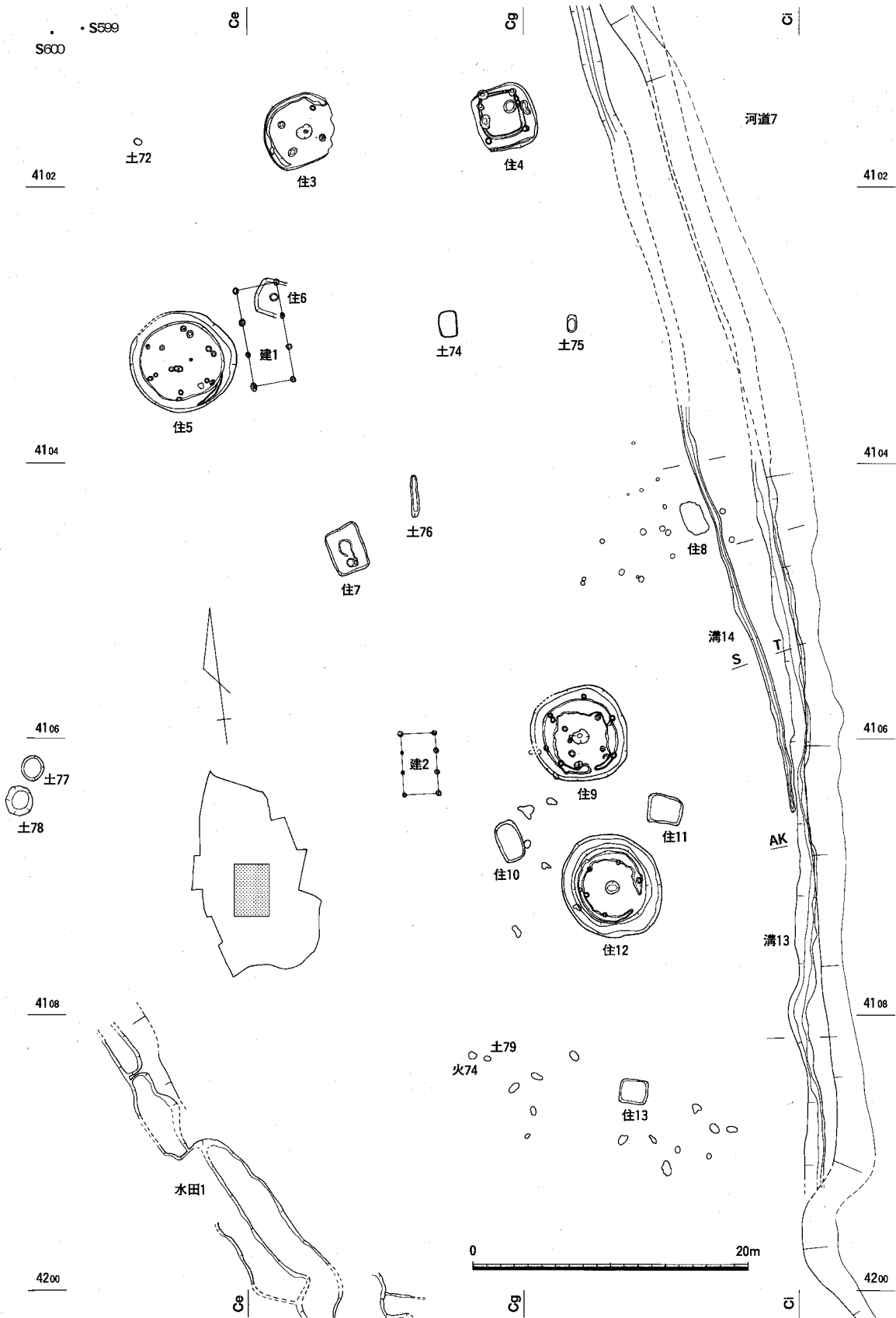
第279図 弥生時代主要遺構部分図③ (1/400)



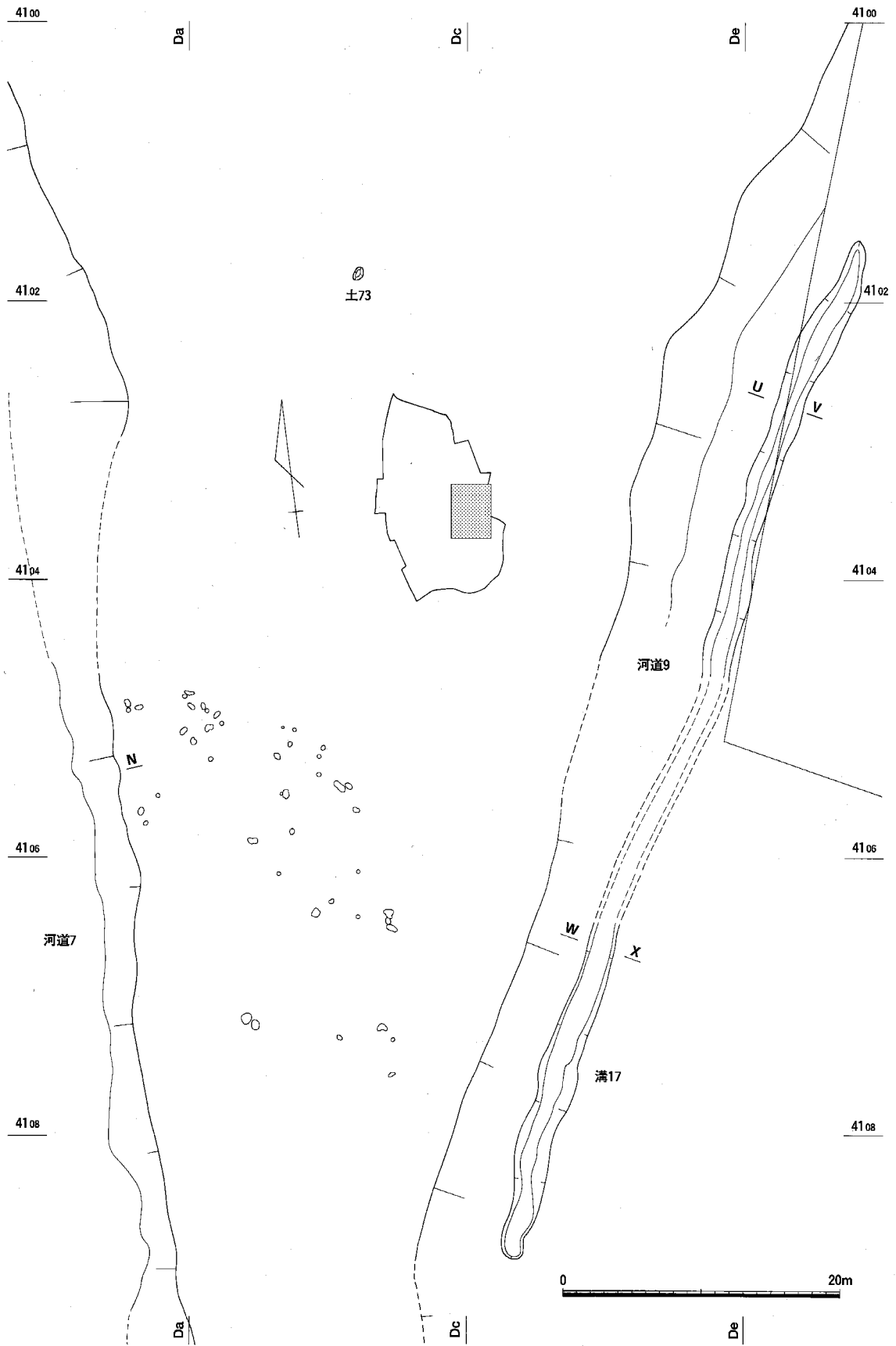
第280図 弥生時代主要遺構部分図④ (1/400)



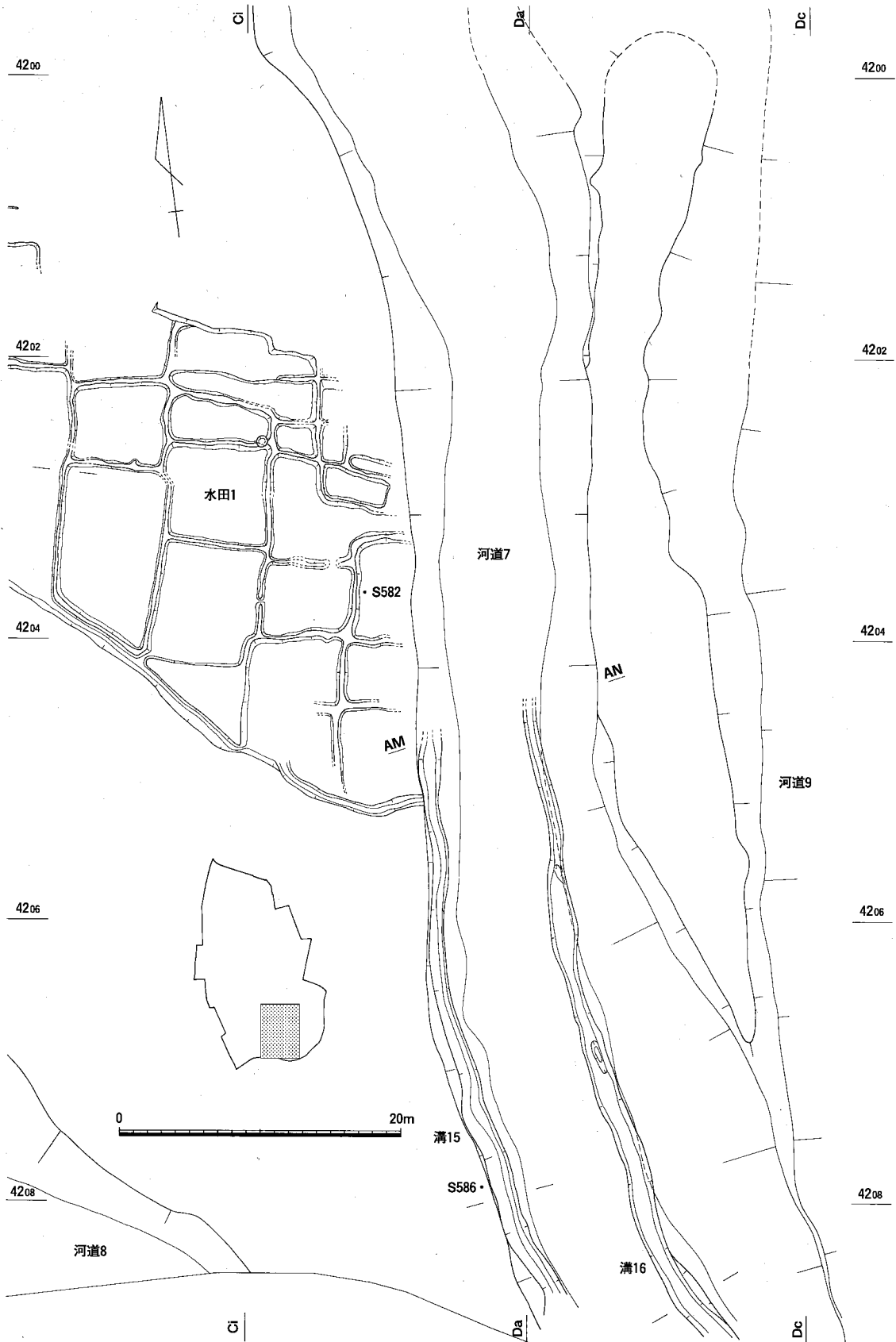
第3章 発掘調査の概要



第281図 弥生時代主要遺構部分図⑤ (1/400)



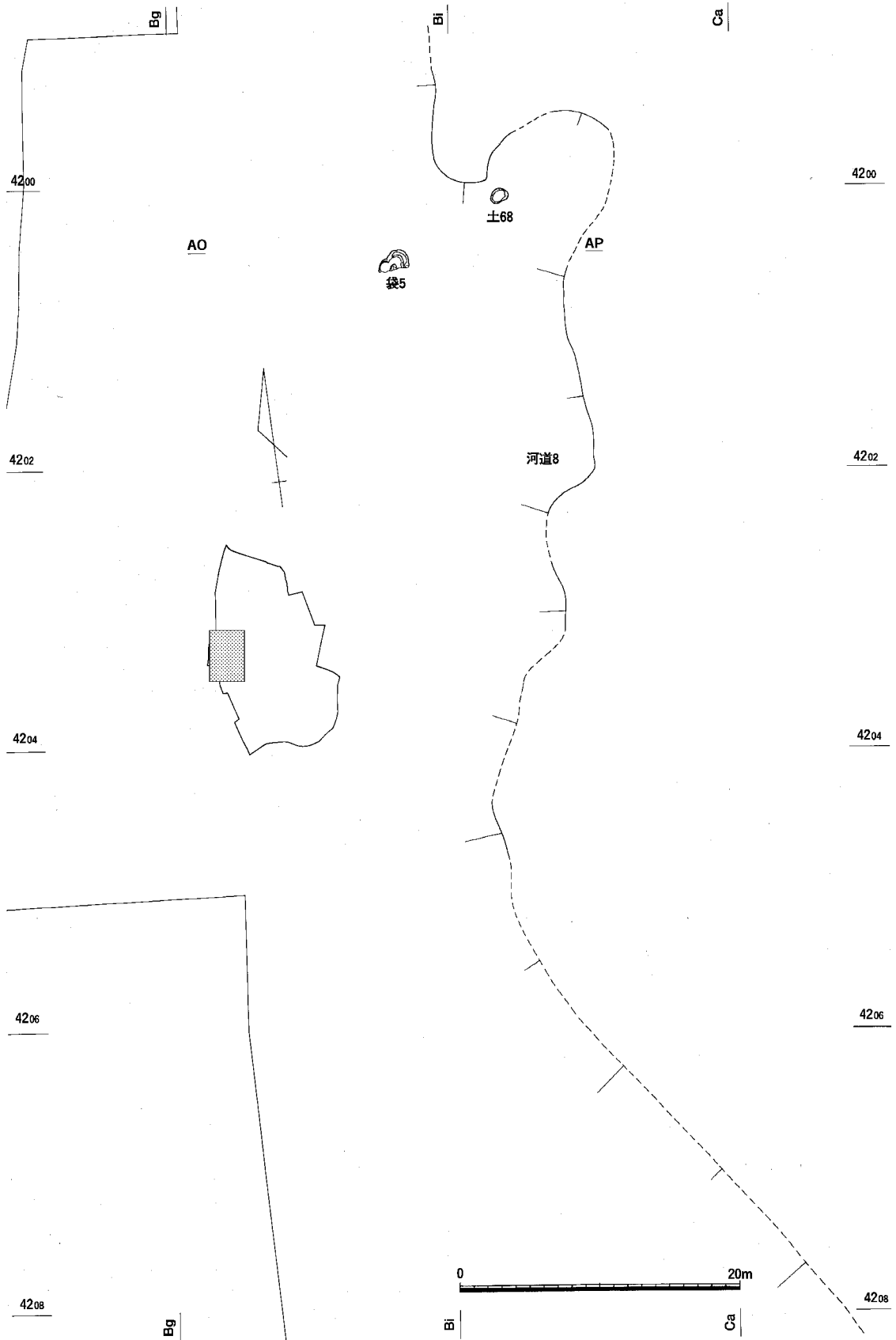
第282図 弥生時代主要遺構部分図⑥ (1/400)



第283図 弥生時代主要遺構部分図⑦ (1/400)



第284図 弥生時代主要遺構部分図⑧ (1/400)



第285図 弥生時代主要遺構部分図⑨ (1/400)

第3節 弥生時代の遺構と遺物

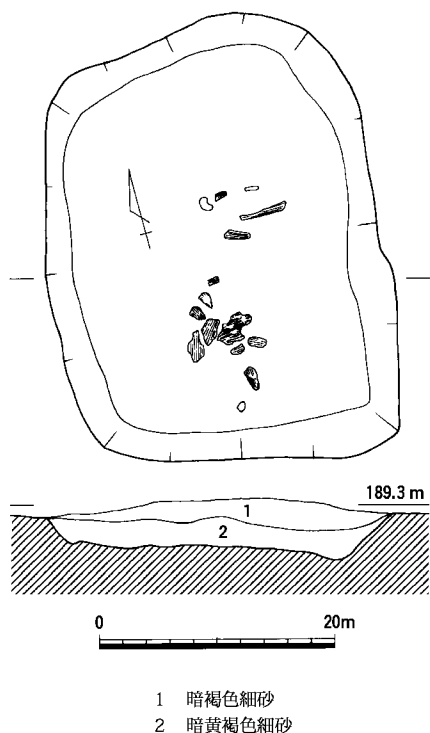


第286図 弥生時代主要遺構部分図⑩ (1/400)

## 2 竪穴住居

### 竪穴住居 1 (第277・287図、図版49)

遺跡の北西隅にあたる3906Bi区に存在した竪穴住居である。弥生後期の包含層を除去後に砂礫層(中期洪水砂層)の上面で検出した。平面形が長方形を呈する小型の竪穴で、長辺3.78m、短辺2.96mを測る。



第287図 竪穴住居 1 (1/60)

は検出面から30cm程度である。床面の周囲ではなく、一部分に深さ2~3cmの溝をめぐるせているが、その長さは80cmを測る。屋内施設は、先述の溝、中央穴、4本の柱が認められている。まず中央穴は、1.05×1mを測る隅丸方形で掘り込み、さらに45×40cmの楕円形の2段の掘り込みからなり、床面からの深さは22cmであった。その掘り方内の内面には2個の河原石が認められた。4個の支柱穴の平面形はいずれもほぼ円形で、掘り方は20~30cmと小さく、深さも床面から15~25cmと浅い。柱間はまちまちで1.84~2.25mで中央穴を中心に台形状の配置がうかがえられた。

出土遺物は全体にまばらに広がり、中程に分布の空白が認められる。平面図示は床面、直上のものである。846の無頸壺、847・848の甕、849の壺、中央穴からのC88の土器片を円形に加工した穿孔前の紡錘車。S544~552のサヌカイト製の石鏃で平基鏃と凹基鏃が見られる。緑色片岩製の磨製石包丁、流紋岩製の磨製石斧S555やS556・S557の砥石も流紋岩製である。S558は黒色片岩の石核である。S554の材質はサヌカイトである。

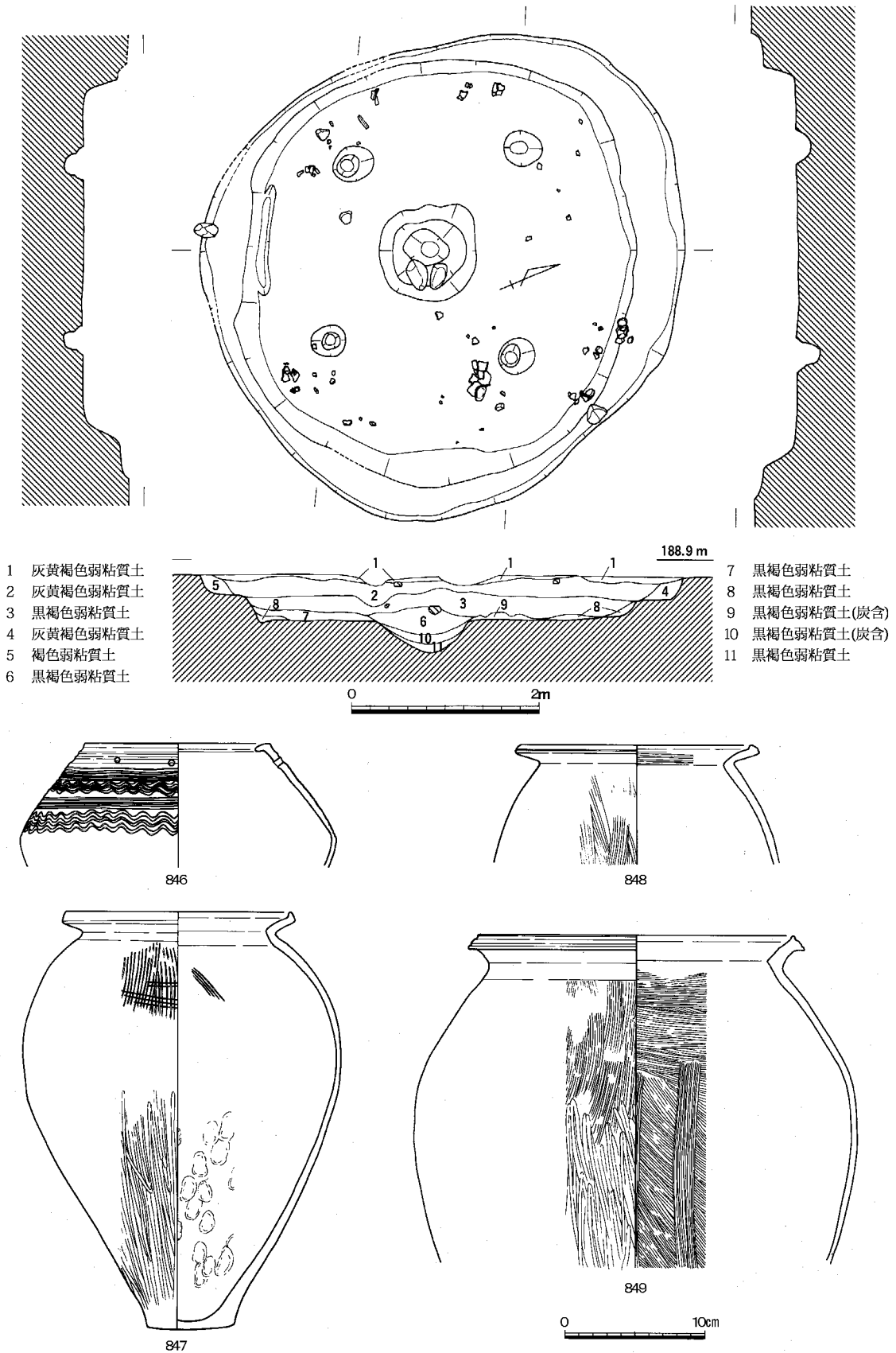
竪穴住居の埋土においては、整形や調整に失敗した未製品がかなりの量で含まれており、特に住居の床面全体にわたっての広い範囲においてサヌカイトのチップが散乱していた。その状況からこの場所での石器の製作がうかがわれる。住居の時期は弥生時代中期後葉に比定されよう。(二宮)

久田堀ノ内遺跡の居住域とはかなり離れており、最も近い久田原遺跡の住居5(円形)からも南に60m程離れる。壁帯溝、焼土面、中央穴や柱穴などは存在しなかったが炭化材が残っていたことから覆屋をもつ住居と考えたい。

遺物はごく小片が出土したのみであるが、中期の範疇にある住居と思われる。(弘田)

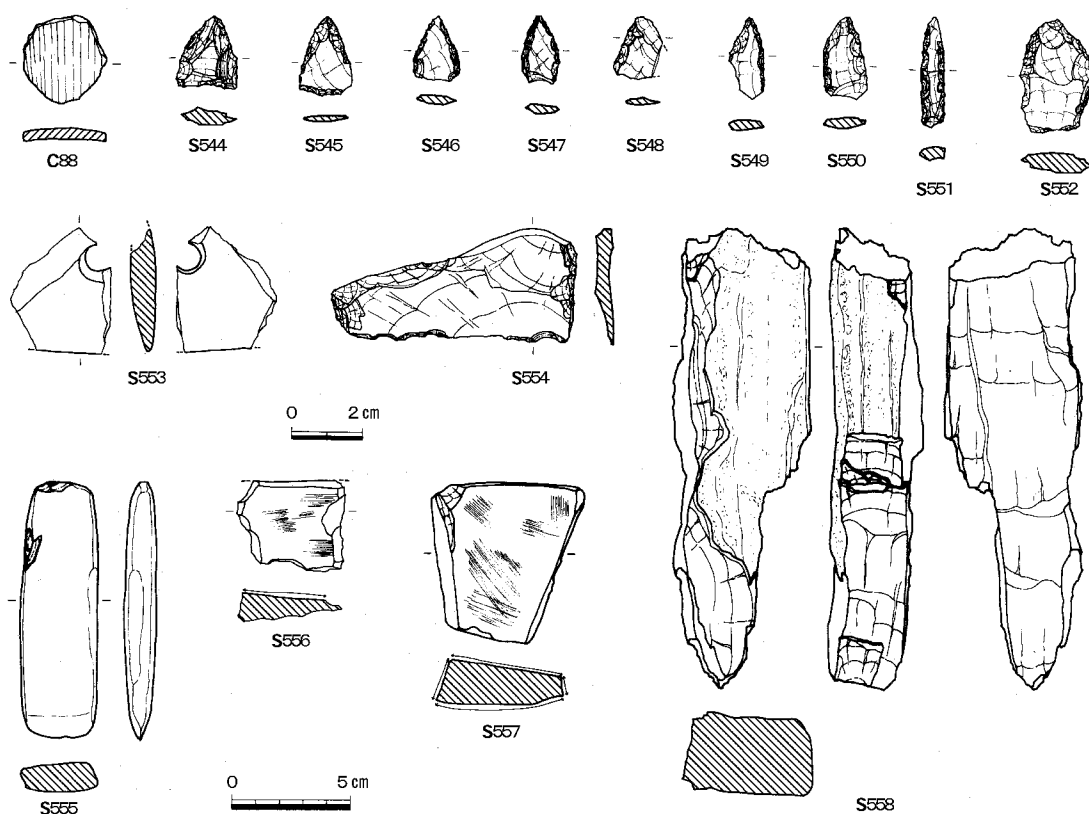
### 竪穴住居 2 (第279・288・289図、図版49・50・71・81・84)

4005Da区の南半に位置して検出された竪穴住居である。検出時点での平面形態は長軸5.4m、短軸4.75mとわずかに南北に長い不整形円形を呈し、深さ15cmにある1段目では海拔188.22mを測る。この1段目の掘り方の内部に、東西4.15m、南北4.2mを測る胴張りを呈した円形ともとれる隅丸方形の平面形を示した本体が確認された。全容が確認された住居床面までの深さは



第288図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物① (1/4)





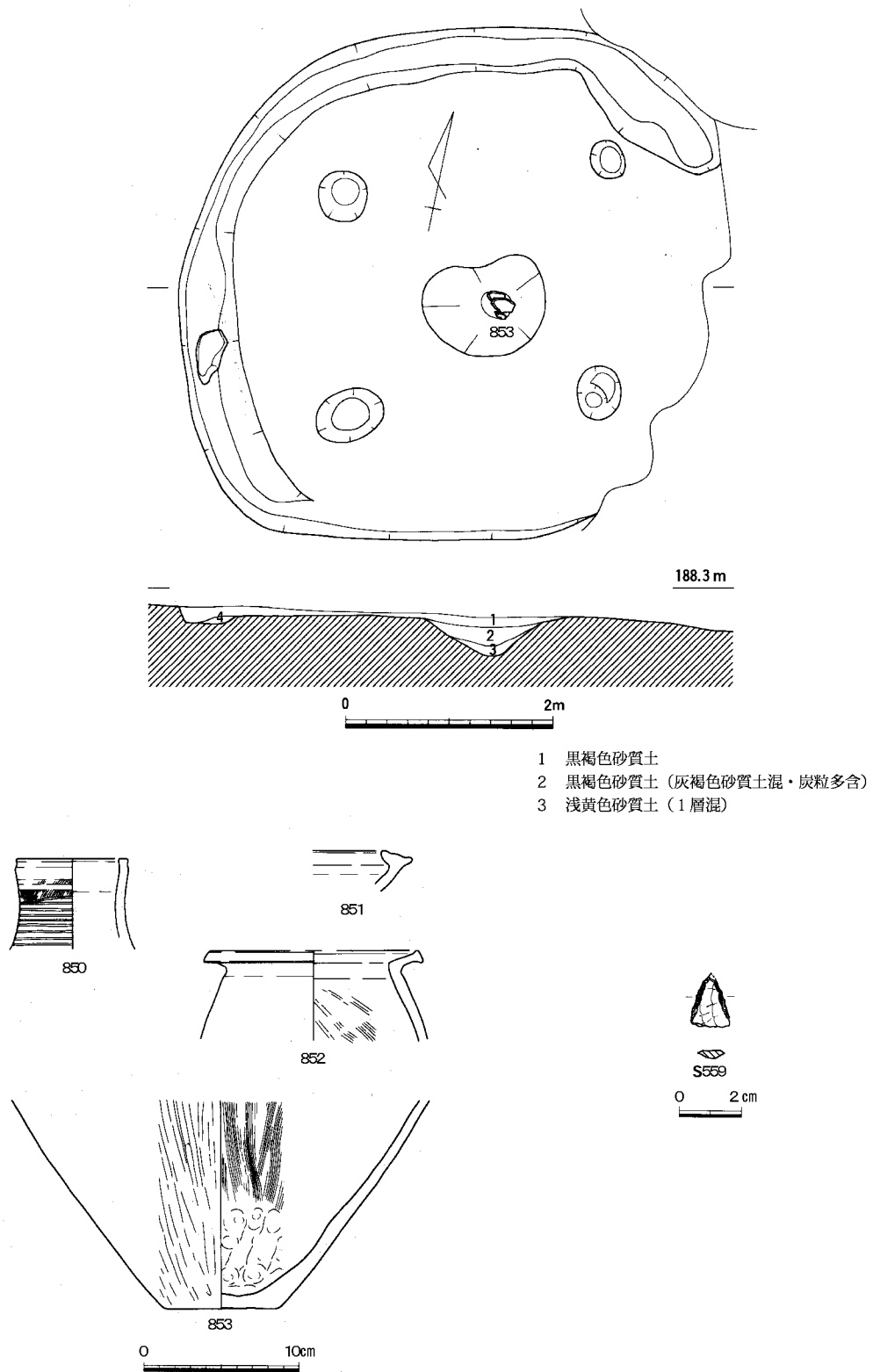
第289図 竪穴住居2出土遺物② (1/2,1/3)

竪穴住居3 (第280・281・290図、図版50・51・71)

竪穴住居2から南西約90m、4101Ce区から検出された平面隅丸方形を呈す竪穴住居で、東部の一部が床面まで削平を受けていた。規模は長軸5.52m、短軸5.16m、床面積17.09㎡余りと推定される。支柱は4本からなる。柱穴間距離は東西方向2.5m、南北方向2.3mを測り、その配置は矩形を呈さず、やや歪んでいた。柱穴は径70～30cm、深さ約40cmを測る。中央穴は平面不整形円形を呈し、断面は緩く傾斜している。規模は径1.2×0.92m、深さ約30cmを測る。埋土は黒褐色砂質土でこれに混じって853が出土している。一方、床面北西部からは石鏃S559が、南西部からは作業台に利用されたと思われる厚さ約10cmの扁平な礫が出土している。また、850～852が覆土中から出土している。土器の特徴から中期後葉に廃棄された竪穴住居と思われる。(江見)

竪穴住居4 (第280・281・291図、図版50・52・71)

竪穴住居3の東15mから検出された平面隅丸方形を呈す一度拡張された竪穴住居である。拡張前の4aは壁体溝の検出でその存在が明らかになったものである。しかしながら床面は平坦でなく、不安定な状況で、また、他に付随する遺構も確認されなかった。平面規模は3.4×3.16m、床面積7.3㎡を測る。4bは西側を削平されているが、平面規模4.76×4.64m、床面積16.92㎡余りと推定される。支柱は4本からなる。柱穴間距離は2.7m前後を測り、その配置は矩形を呈さず、やや歪んでいた。柱穴は径50～40cm、深さ50cm前後を測り、いずれも壁から近い80cm前後の位置に穿たれていた。他に当住居に付随する遺構と思われる平面円形の土壇が検出されている。径92×84cm、深さ26cmを測る。埋土は覆土と

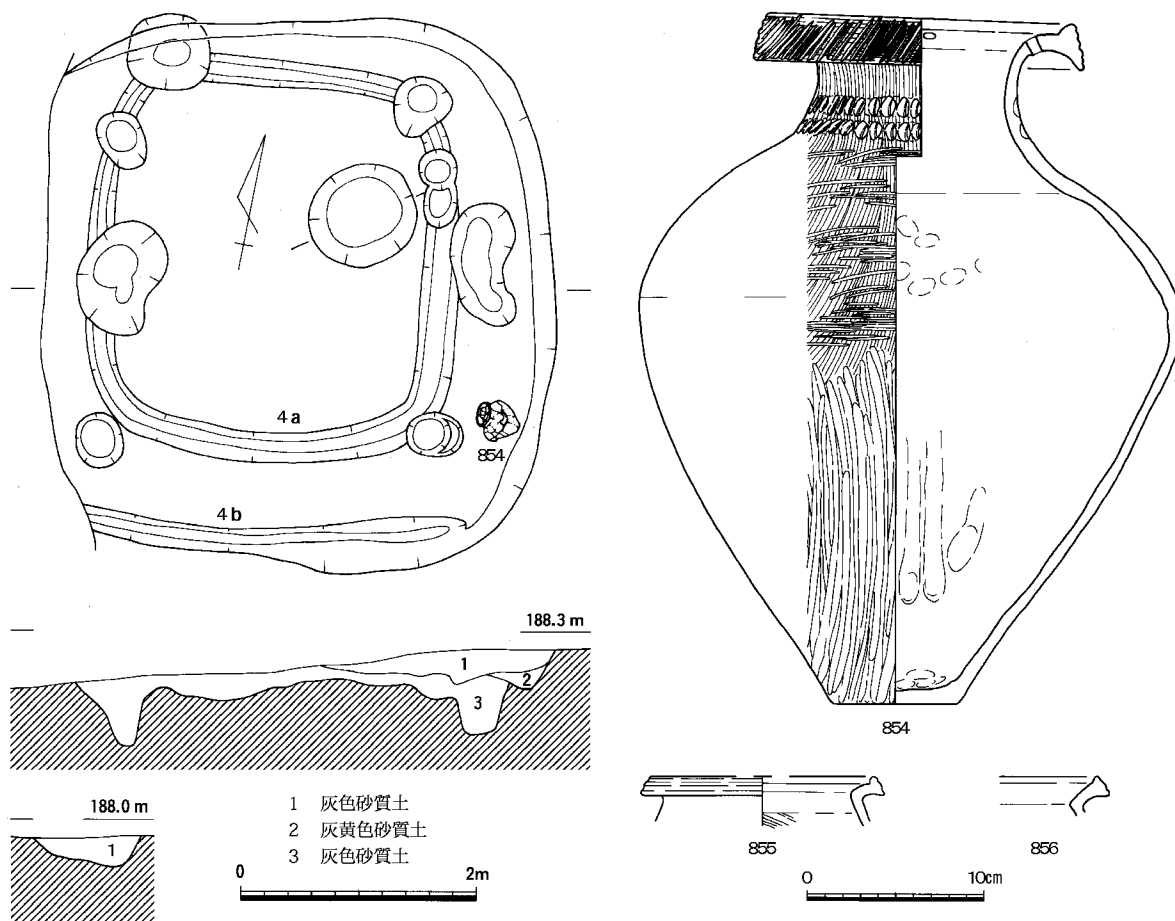


第290図 竪穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/2,1/4)

第3章 発掘調査の概要

同様の灰色砂質土で、一般に中央穴内に堆積する炭・焼土塊などは認められなかった。

遺物は住居南東壁際から完形の壺854が、内側にやや傾くような状態で、また、覆土中から甕855・856が出土している。土器の特徴から中期後葉に廃棄された住居と考えられる。(江見)



第291図 竪穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/4)

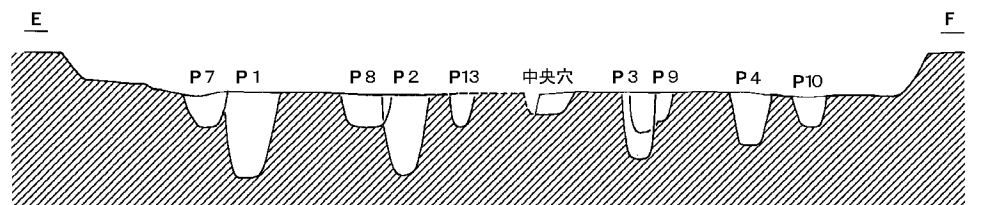
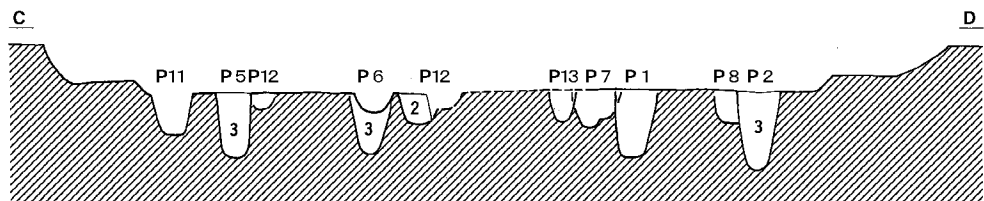
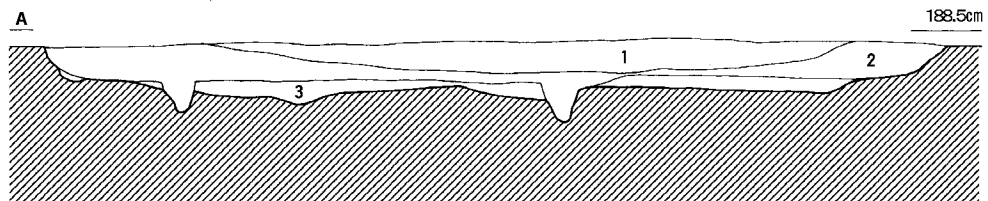
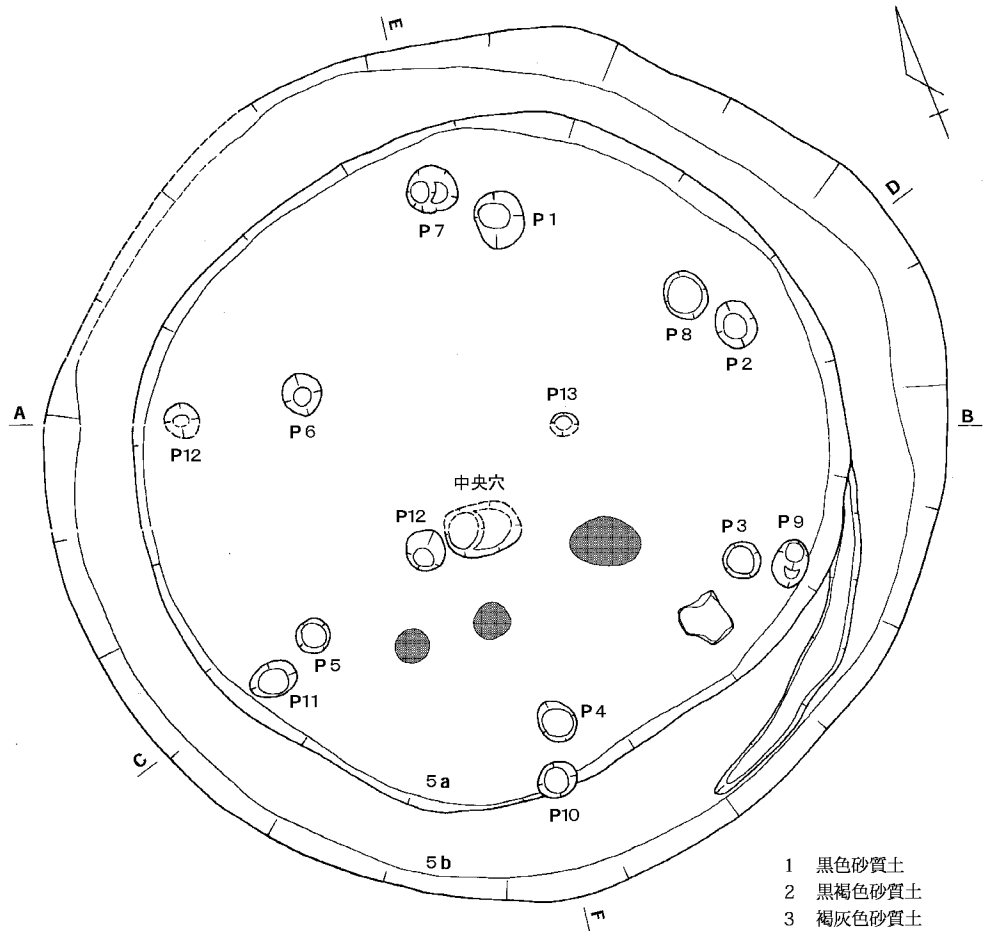
竪穴住居5 (第280・281・292・293図、写真12、図版53・54・55・71・81)

遺跡のほぼ中央部の4 1 03Cd区に位置している。北東側5mには竪穴住居6が、東側1mに掘立柱建物1が検出されている。

竪穴住居は柱穴の配置や個数、壁体溝の位置などから最低でも1～2回の建て替えが考えられる。ここでは古段階を竪穴住居5a、新段階を竪穴住居5bとして報告する。

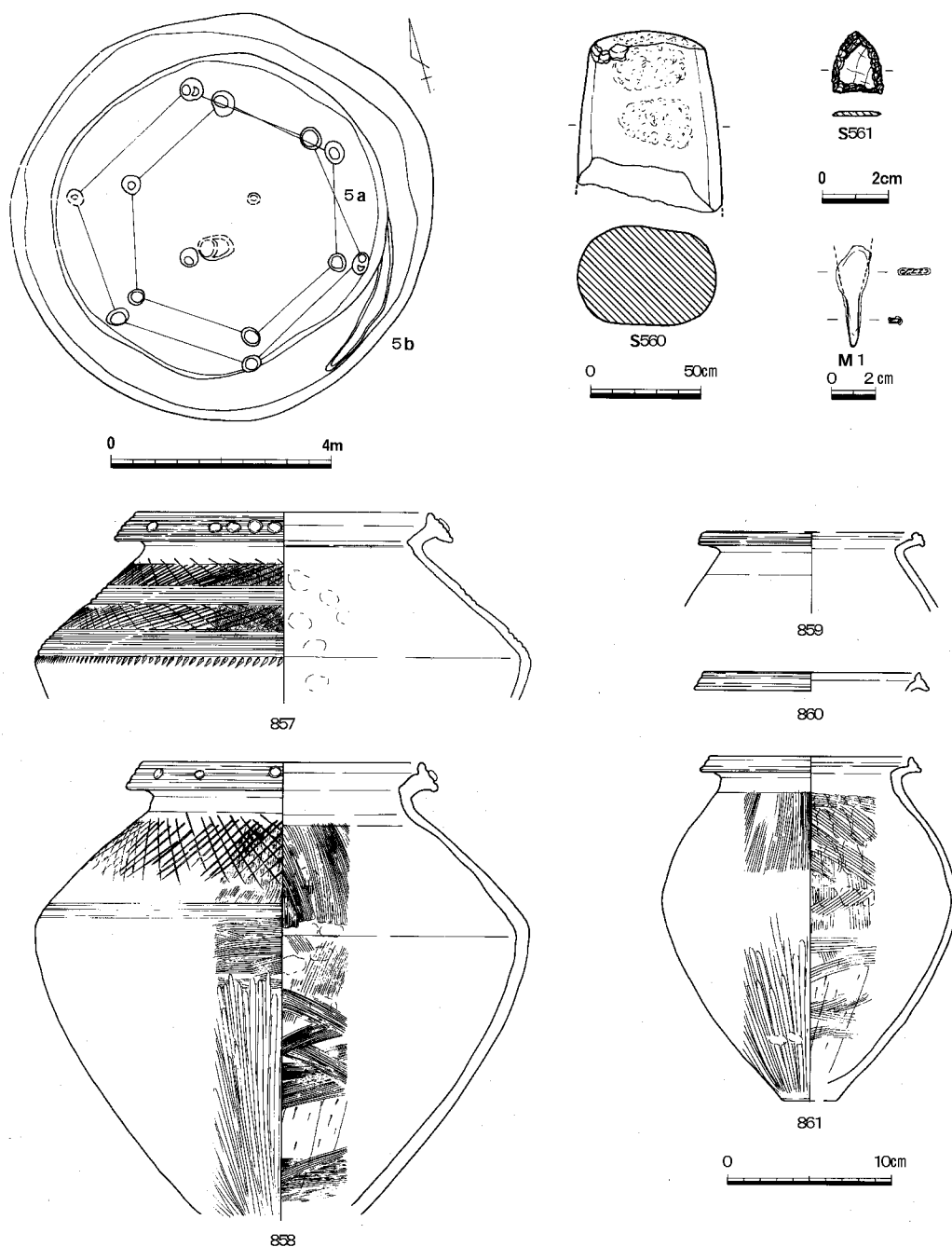
竪穴住居5aは直径5.8～6.2mの円形住居で、P 1～6が柱穴である。柱穴は円形もしくは楕円形である。柱穴の間隔は2～2.3mを測る。なお、壁体溝は確認できなかった。

竪穴住居5bは直径7.5～7.8mの円形住居で、P 7～12が柱穴である。柱穴は円形もしくは楕円形である。柱穴の間隔は2.4～2.8mを測る。なお、壁体溝は確認できなかったが、P 9の南東側30cmで緩やかに弧状を呈する溝を検出した。その長さは2.5m、幅は15～32cmを測る。溝は竪穴住居5aから延びるような位置関係であり、竪穴住居5aと竪穴住居5bの間の建て替えを示唆する。



0 2m

第292図 竪穴住居 5 (1/60)



第293図 竪穴住居 5 a・b (1/120)・出土遺物 (1/3,1/2,1/4)

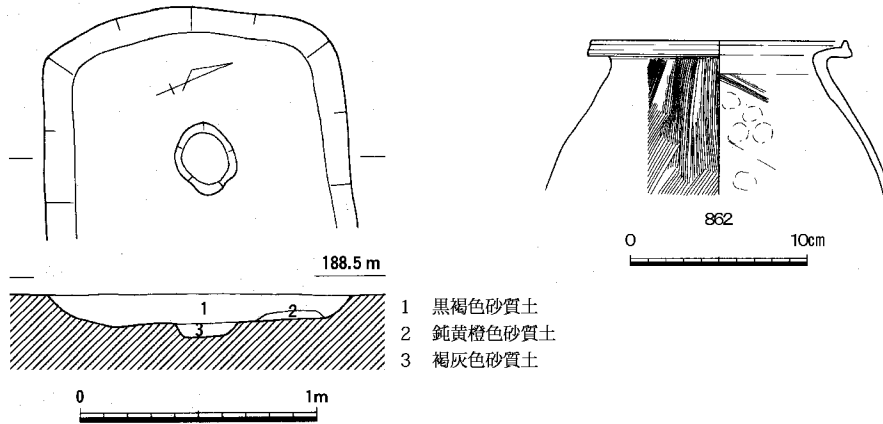
住居の中央部には中央穴が1基、それを挟む位置にピットが2基確認されている。また、それらの南側には焼土面が3か所確認できた。焼土面は薄い朱色を呈しており、被熱度合いはそれほど高くはない。焼土面の検出位置は一段低い床面にあるため、いずれも竪穴住居 5a に伴っている。P 3 と P 4 の間では表面が平坦な河原石が出土しており、台石としての使用が考えられた。

遺物としては弥生土器、石器、鉄器が出土している。857・858は甕で、いずれも竪穴住居 5b の床面で出土している。M 1 は鉄鏃であり、柱穴から出土している。時期は弥生時代中期後葉である。(上村)

竪穴住居 6 (第280・281・294図、図版54・71)

遺跡のほぼ中央部の4103Ce区に位置している。南西側5mには竪穴住居5が検出されており、掘立柱建物1の柱穴を切って構築されている。なお、東側は中世の堀1により切られていた。

南北長2.65m、東西残存長2mを測る。残存部の中央付近には深さ10cm程のピットが検出されている。時期は出土した弥生土器から弥生時代中期後葉と考えられる。(上村)

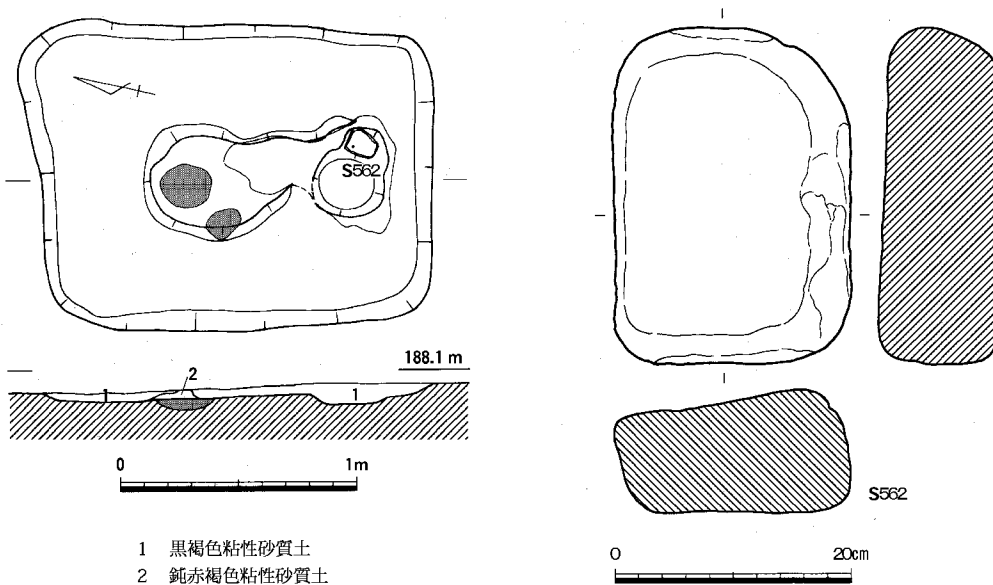


第294図 竪穴住居 6 (1/60)・出土遺物 (1/4)

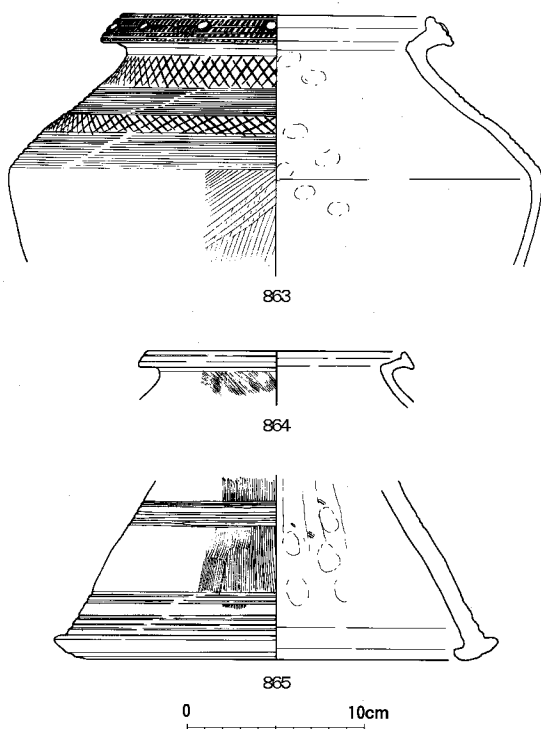
竪穴住居 7 (第281・295・296図、図版54・71)

遺跡のほぼ中央部の4104Ce区に位置している。北西20mには竪穴住居5が位置している。

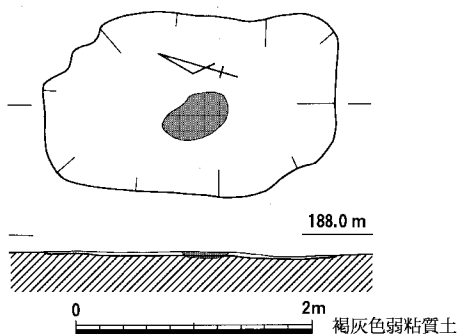
長さ3.5m、幅2.5mを測り、平面形は長方形である。中央部はわずかに高くなっており、そこで焼土面が検出された。焼土面は朱色であり、被熱度合いはそれほど高くない。また、高まりの50cm南側に



第295図 竪穴住居 7 (1/60)・出土遺物① (1/6)



第296図 竪穴住居7出土遺物② (1/4)



第297図 竪穴住居8 (1/60)

は土壇が掘られている。土壇は長さ90cm、幅60cm、深さ10cmを測り、倒卵形を呈していた。土壇から高まりの南側四分の一にかけては非常に硬く締まっていた。

土壇内の硬化面直上で表面が平らで長方形の川原石が出土しており、台石としての使用が想定される。

遺物は弥生土器と図示していないが鉄片が出土している。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(上柵)

竪穴住居8 (第281・297図)

4104Ch区に位置する。検出できたのは約2.5×1.5mの不整長方形で、深さは約10cm残存していた。床面のほぼ中央部分に不整楕円形を呈する被熱部分が確認できた。柱穴は検出できなかった。遺物は出土しなかったが、検出面や埋土から、時期は弥生時代中期後葉と考えたい。検出できたのは床面近くで、残存状況は良くないが、本来は、竪穴住居7もあわせて長方形の竪穴建物であったと考えている。(平井)

竪穴住居9 (第281・298～300図、図版55・

56・57・71・82・84)

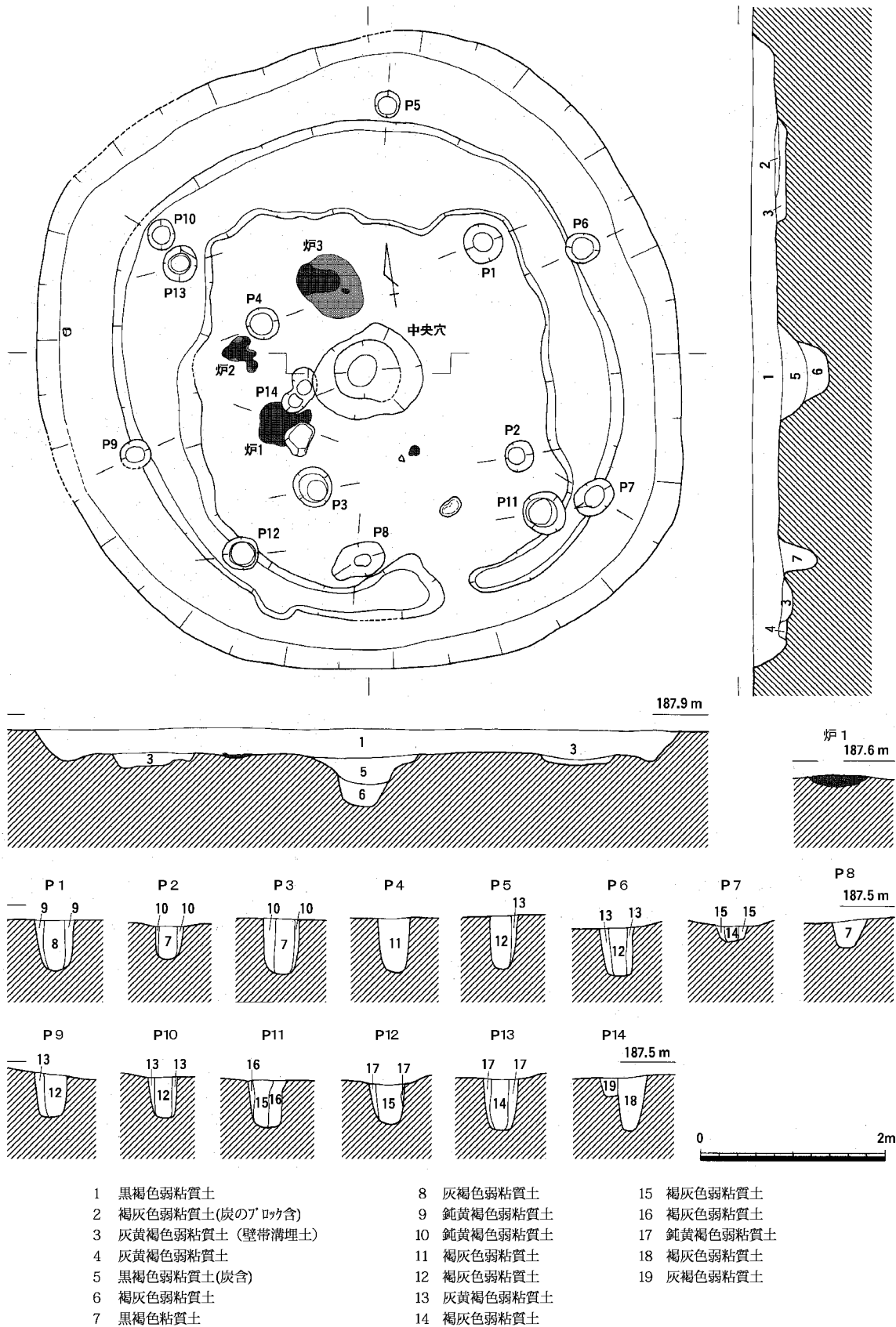
4105Cg区において検出した。平面形は直径約6.9mのほぼ円形で、深さは約25cm残存していた。床と考えられる面には3か所に被熱した部分が確認できた(炉1～3)。また作業台と考えられる平らな石が残存していた。床面のほぼ中央には穴が掘られており、規模は115×90cmの

不整円形で、深さは53cmであった。この中央穴の埋土は二層で、上層には炭片が含まれていた。

また、床面をさらに精査したところ、壁に沿うかたちで、ほぼ円形に溝状の窪みを検出することができた。これを壁体溝の痕跡と考え、後述する柱穴の数とあわせて、この住居が一度拡張したと想定することができる。

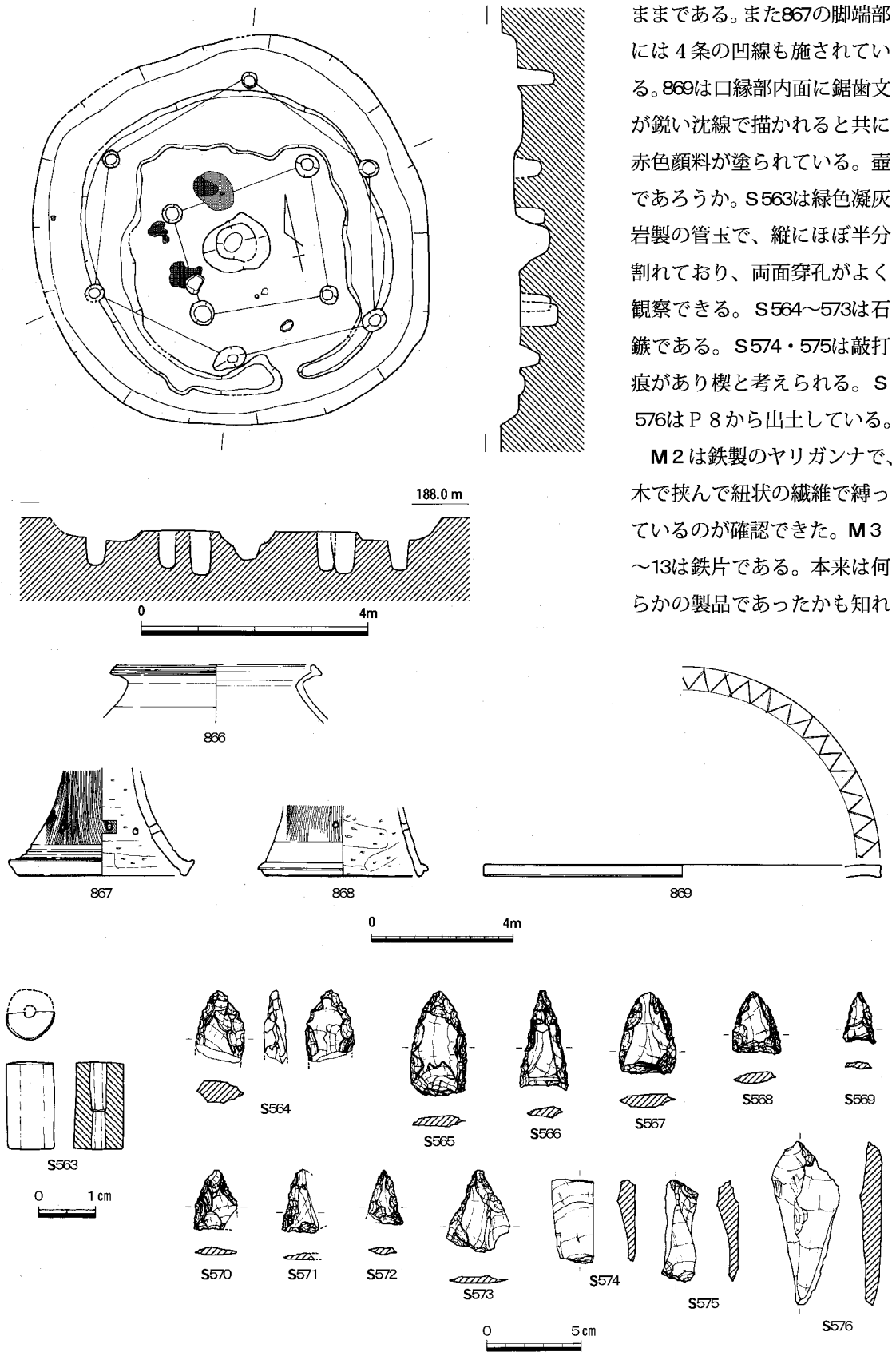
柱穴は最終的に14個検出できたが、その配置から古い段階の住居の支柱穴をP1～4の4個、新しい段階の住居の支柱穴をP5～10の6個と想定しておきたい。なお、配置からはP5・P6・P11～13の5個の段階も想定できるかも知れない。なお、断面の土層の観察から柱の大きさが推定できる柱穴も多く、ほぼ直径20cm前後であった。

遺物は土器、石器、石製品、鉄器・鉄片が出土した。866は甕で、口縁端部を拡張し凹線文を施している。867・868は高杯の脚部で、外面は縦方向のハケメで仕上げられており、内面はヨコ方向のケズリの



第298図 竪穴住居9 (1/60)



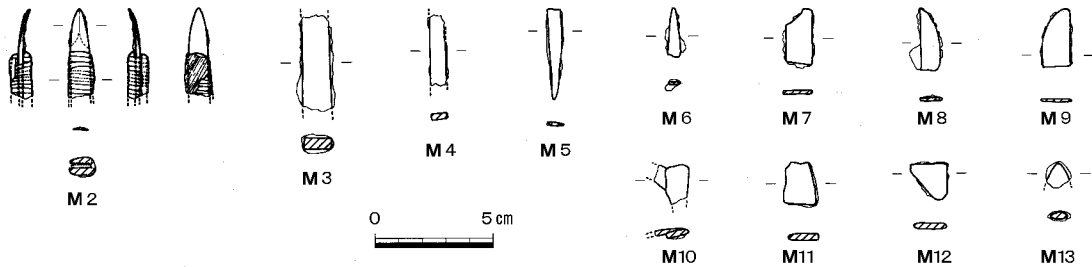


ままである。また867の脚端部には4条の凹線も施されている。869は口縁部内面に鋸歯文が鋭い沈線で描かれると共に赤色顔料が塗られている。壺であろうか。S563は緑色凝灰岩製の管玉で、縦にほぼ半分割れており、両面穿孔がよく観察できる。S564~573は石鏃である。S574・575は敲打痕があり楔と考えられる。S576はP8から出土している。

M2は鉄製のヤリガンナで、木で挟んで紐状の繊維で縛っているのが確認できた。M3~13は鉄片である。本来は何らかの製品であったかも知れ

第299図 竪穴住居9 (1/120)・出土遺物① (1/4,1/1,1/2)

ないが明確にしがたい。M7～13は薄い鉄片で、何らかの工具で切られたのではなろうか。M3が鑿の一部とも考えられ、鉄器製作に伴う鉄片が住居内に廃棄されていたと考えることができる。M8は柱穴からの出土である。時期は土器から弥生時代中期後葉と考えられる。(平井)



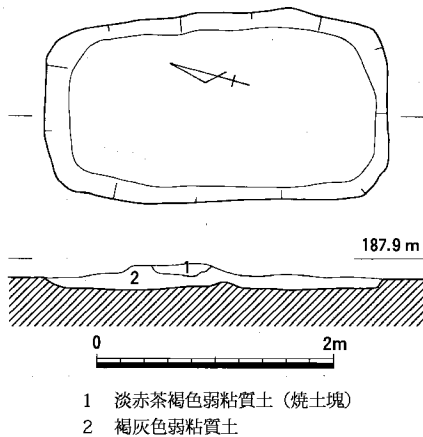
第300図 竪穴住居9出土遺物② (1/3)

竪穴住居10 (第281・301図、図版55・56)

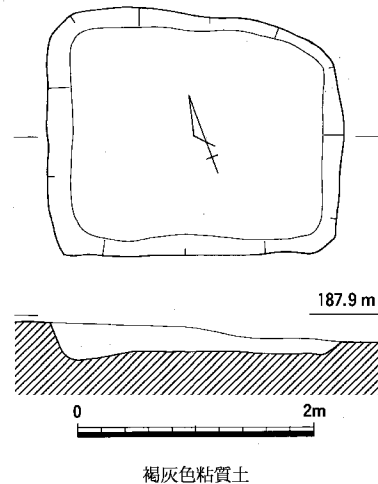
4106Cf区において検出した。平面形は長さ2.9m、幅1.6mの長方形で、深さは約20cm残存していた。柱穴や焼土面は検出できなかったが、規模や形状から竪穴建物として報告しておきたい。出土遺物はなかったが、時期は弥生時代中期後葉と考えている。(平井)

竪穴住居11 (第281・302図、図版55・56)

4106Ch区において検出した。平面形は2.5×2.1mの長方形で、深さは約30cm残存していた。柱穴や焼土面は検出できなかった。規模や形状から竪穴建物として報告するが明確ではない。遺物は出土しなかったが、時期は弥生時代中期後葉と考えている。(平井)



第301図 竪穴住居10 (1/60)



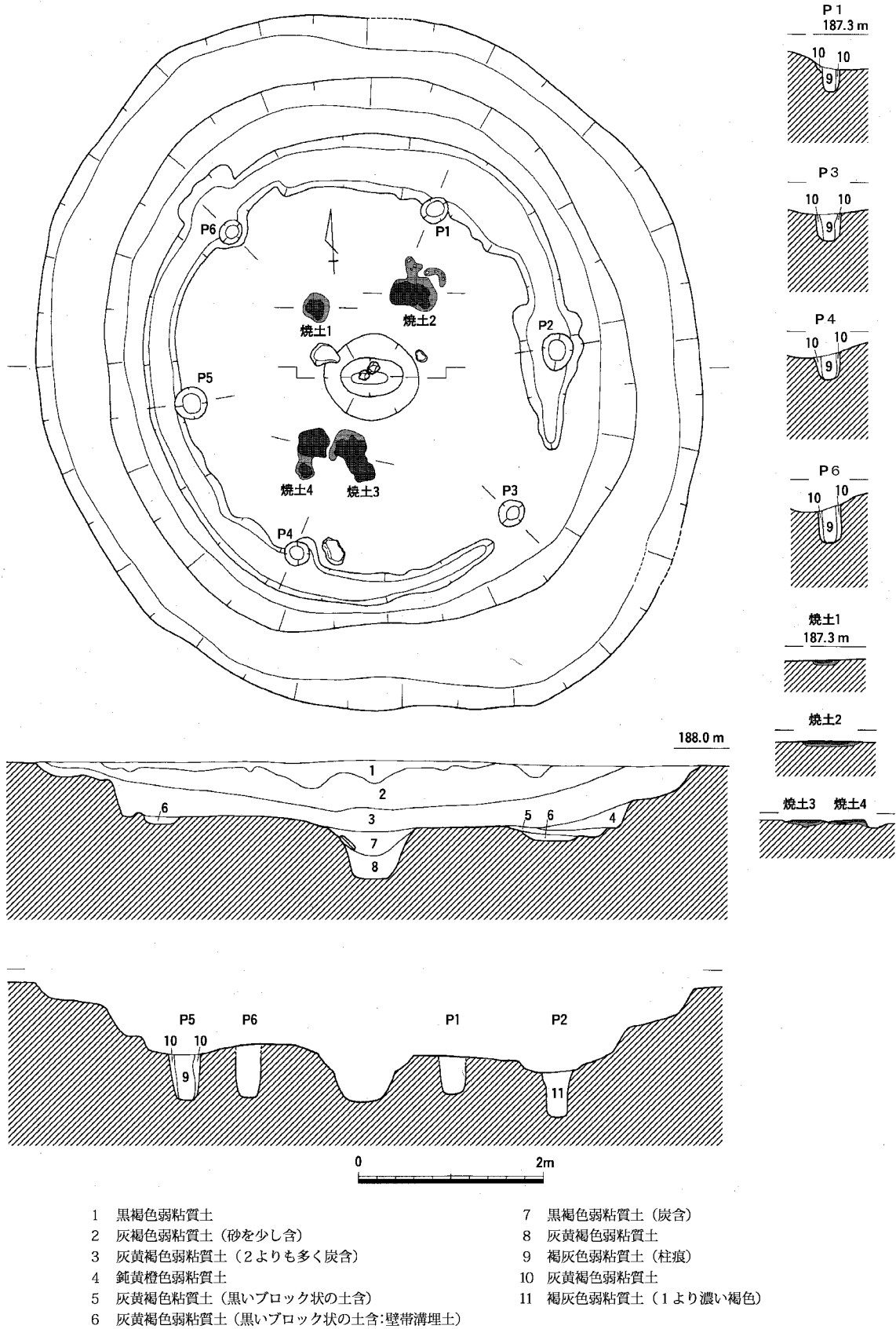
第302図 竪穴住居11 (1/60)

竪穴住居12 (第281・303～305図、図版55・56・57・72・82)

4106・07Cg区において検出した。検出できた規模は7.5×7.2mのほぼ円形で、床面までの深さは約70cm残存していた。

検出した規模は断面観察などの調査を進める過程で、第303図の断面図の形状や埋土の堆積状況から

第3章 発掘調査の概要



- |                               |                      |
|-------------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色弱粘質土                     | 7 黒褐色弱粘質土 (炭含)       |
| 2 灰褐色弱粘質土 (砂を少し含)             | 8 灰黄褐色弱粘質土           |
| 3 灰黄褐色弱粘質土 (2よりも多く炭含)         | 9 褐灰色弱粘質土 (柱痕)       |
| 4 鈍黄褐色弱粘質土                    | 10 灰黄褐色弱粘質土          |
| 5 灰黄褐色粘質土 (黒いブロック状の土含)        | 11 褐灰色弱粘質土 (1より濃い褐色) |
| 6 灰黄褐色弱粘質土 (黒いブロック状の土含: 壁溝埋土) |                      |

第303図 竪穴住居12 (1/60)

判断して、この竪穴住居が廃棄された後に肩口が崩れた結果であろうと考えた。したがって、本来の規模は6.1×5.6m程の円形であったと推測できる。

床面のほぼ中央には、平面形が102×94cmの楕円形を呈する穴が配置されていた。断面形は台形で、底はほぼ平らであった。深さは51cmを測る。埋土は二層あり、上層には少量の炭片を含んでいた。なお、被熱を受けた痕跡は認められなかった。

床面には4か所で被熱した面を確認することができた(焼土1～4)。また、中央穴の近くでは作業台と考えられる平らな石を検出した。

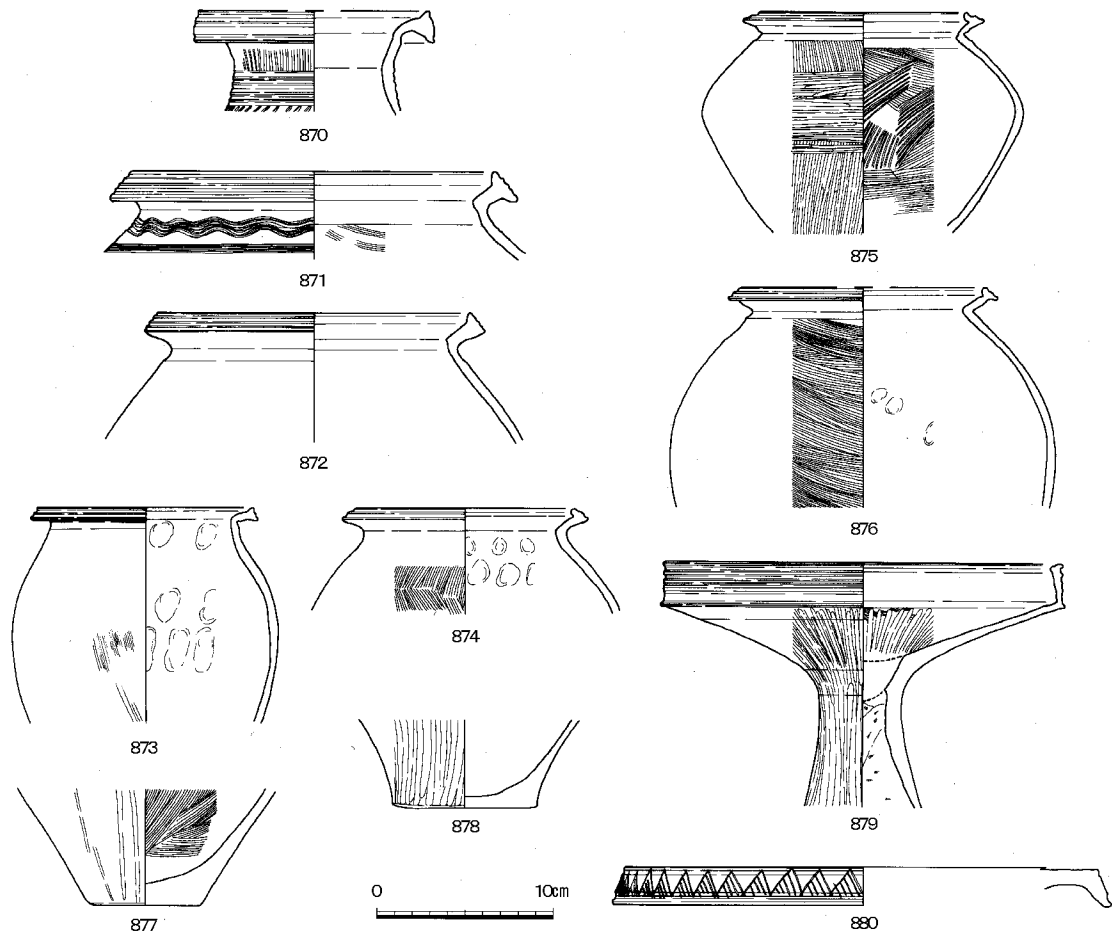
柱穴は壁に沿うかたちで6個検出することができた(P1～6)。柱穴の深さは50cm前後で、断面観察から柱は直径15cm前後と推測できる。

なお、床面下には、図示したように壁に沿って溝状の掘り込みが検出できた。

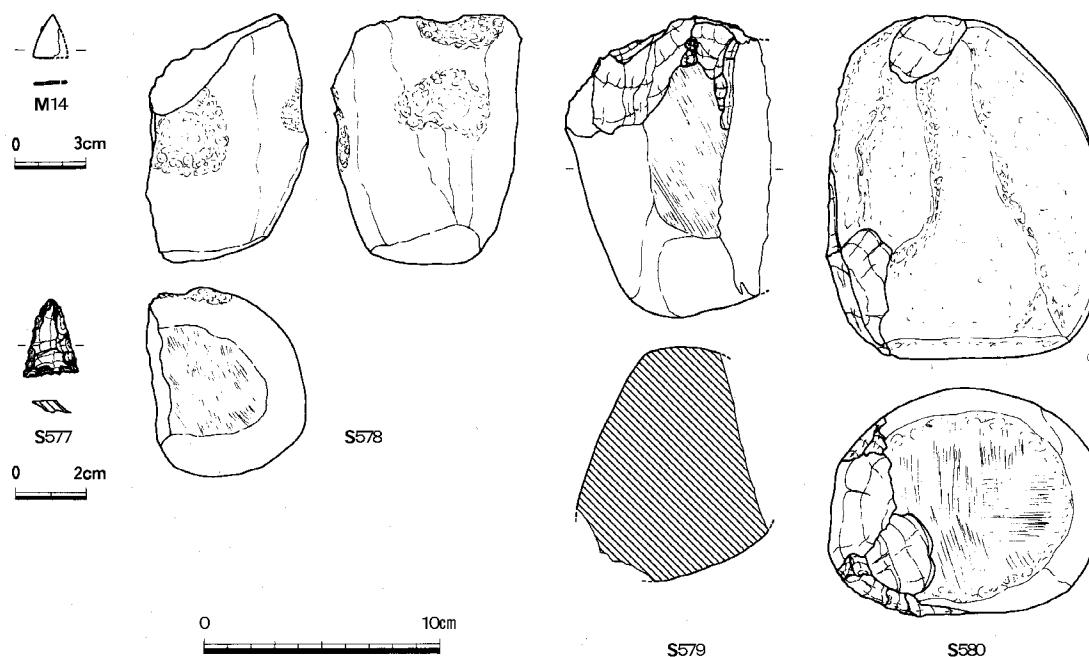
遺物は埋土中から土器・石器・鉄片が出土した。図示した遺物のうち870～880は土器で、870は壺、871～878は甕、879は高杯、880は器台であろう。870の頸部には5条の凹線文と刺突文が、871の肩部には櫛描き波状文・直線文が、また880の口縁部には鋸歯文が施されている。S577はサヌカイト製の石鏃、S578は玢岩製の石杵、S579・580は磨石と考えている。M14は薄い鉄片で、竪穴住居11から出土した鉄片と同じく鉄器製作に関連する鉄片と考えることができる。

時期は出土土器から弥生時代中期後葉と考えられる。

(平井)



第304図 竪穴住居12出土遺物① (1/4)



第305図 竪穴住居12出土遺物② (1/2,1/3)

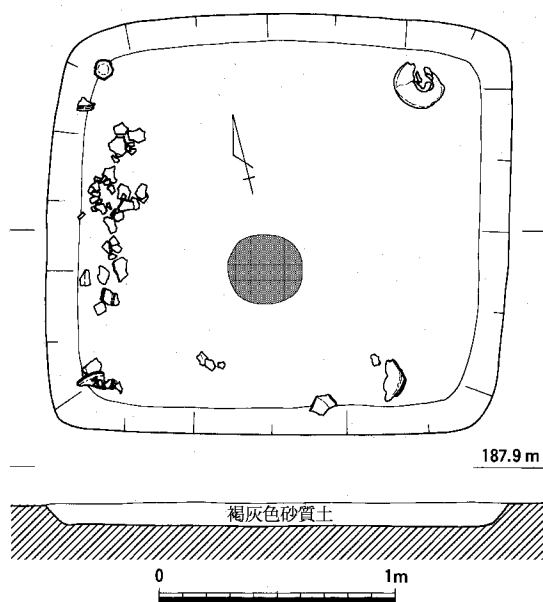
竪穴住居13 (第281・306・307図、図版58・72)

4108Cg区において検出した。平面形は1.96×1.8mの方形で、深さは約20cm残存していた。断面形は台形で、埋土は褐灰色砂質土が一層のみであった。底面はほぼ平らで、底面中央部南寄りにわずかに被熱した面が確認できた。柱穴は検出できなかった。

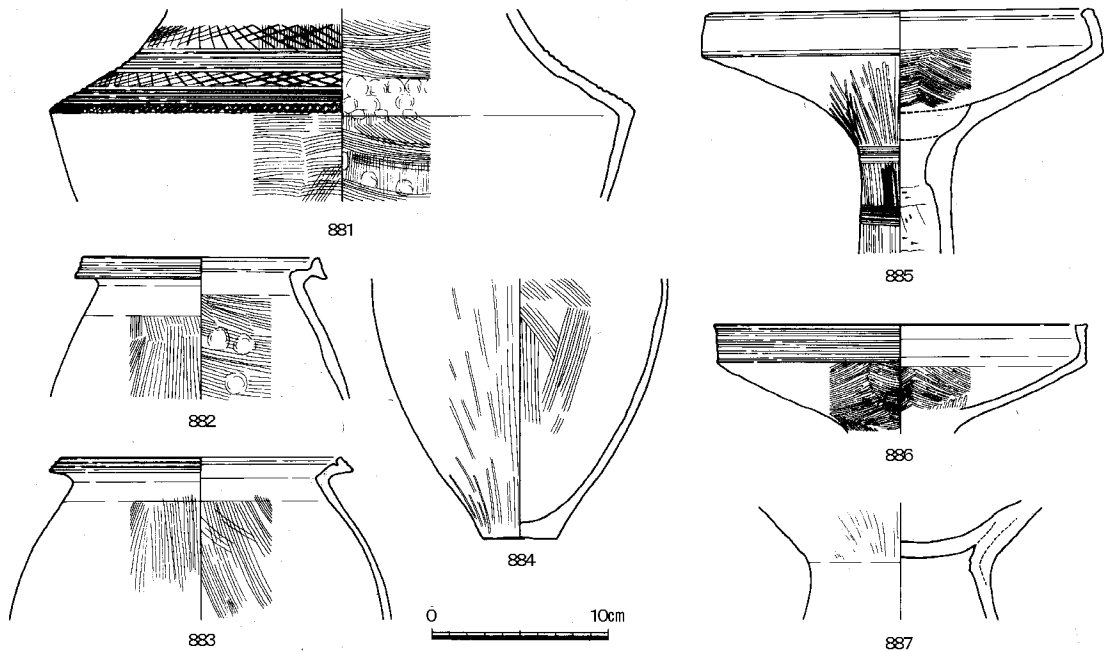
平面形が方形を呈し、ほぼ平らな底面の中央付近に被熱面が確認できること、また規模の面からも、

これまでに報告している竪穴住居7などと共通点があるものの、床面積の広さから考えて、日常的な住まいとは考えにくい。ただし、通常の土壙とも考えにくく、地面を掘り窪めた竪穴の建物であるとは考えたい。なお、この建物の用途については今回の検出状況からは推測しがたい。

遺物は、土器が図示したような状況で面的に検出できた。881は壺で、肩部に凹線文やへら描き斜格子文と刺突文が描かれている。882～884は甕で、口縁端部には凹線文が施され、体部上半は内外面ともハケメで仕上げられている。885・886は高杯で、口縁部外面に凹線文を施している。887は台付鉢であろう。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。 (平井)



第306図 竪穴住居13 (1/30)



第307図 竪穴住居13出土遺物（1/4）

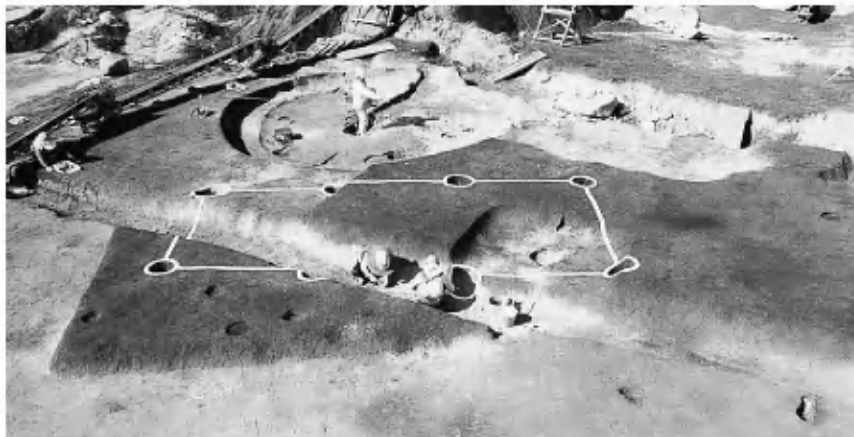


写真12 竪穴住居5・掘立柱建物1調査風景（東から）

### 3 掘立柱建物

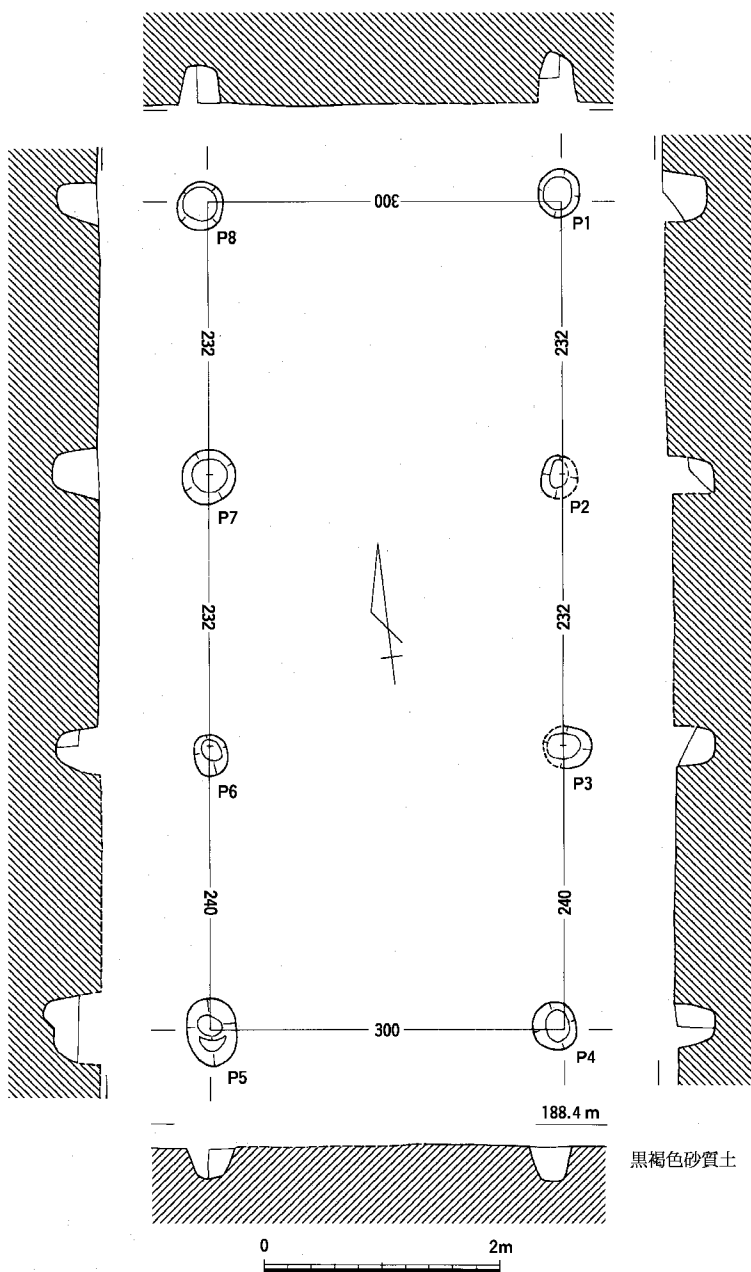
掘立柱建物1（第280・281・308図、写真12、図版55）

遺跡のほぼ中央部の4 1 03Ce区に位置している。竪穴住居6によりP1が切られている。また、中世の堀1によりP2・3が切られていた。

桁行3間、梁行1間であり、長軸線はほぼ南北である。柱間は桁行が2.3～2.4m、梁行が3mを測る。柱穴は円形もしくは楕円形状を呈しており、長軸35～58cm、短軸35～45cmである。なお、検出面からの深さは38cmであった。P5は二段状を呈しており、深い側の穴は直径20cmを測る。この大きさがほ

第3章 発掘調査の概要

ぼ柱の直径を示すと考えられる。竪穴住居5に近接する位置で検出したが同時併存とは考えにくく、竪穴住居3や4との関係が想定できる。また、規模の面からは、住居に伴う高床の倉庫とは考えにく



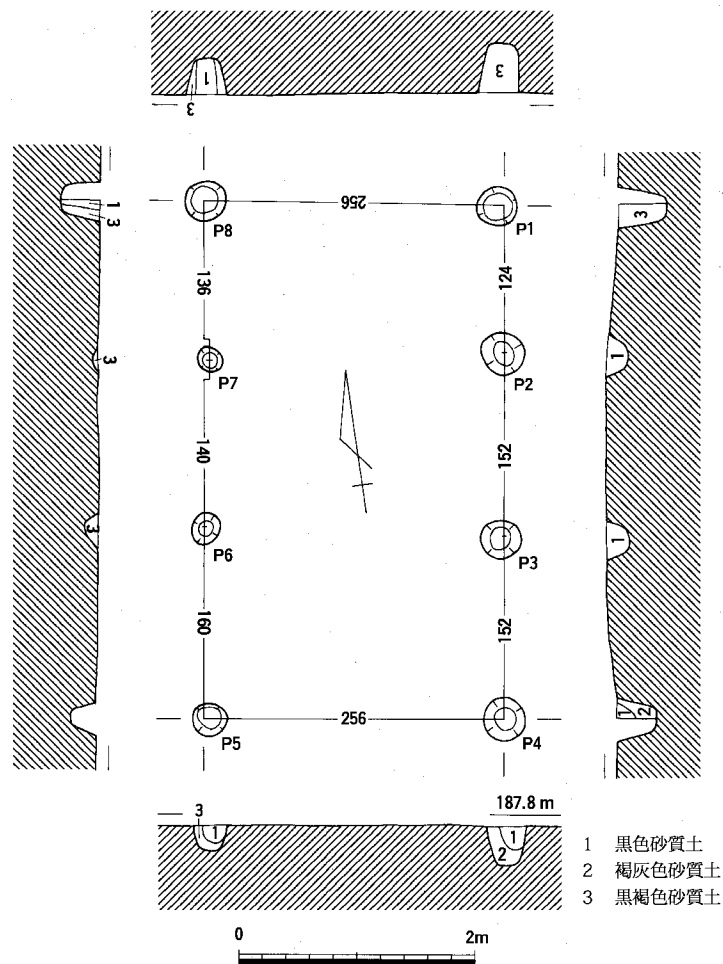
第308図 掘立柱建物1 (1/60)

い。

時期が特定できるほどの遺物は出土していないが、弥生時代中期後葉の竪穴住居6に切られていることからそれ以前の時期である。 (上榊)

掘立柱建物2 (第281・309図、図版58)

遺跡のほぼ中央部の4106Cf区に位置している。東側20m付近には、竪穴住居9～12が検出されて



第309図 掘立柱建物2 (1/60)

いる。

桁行3間、梁行1間であり、長軸線はほぼ南北である。柱間は桁行が1.24～1.6m、梁行が2.56mを測る。柱穴は円形もしくは楕円形で、長軸24～35cm、短軸20～35cmである。なお、深さは外側のP1、4・5・8が深く23～40cm、内側のP2・3・6・7が浅く5～20cmである。なお、P4・5・8では柱痕が確認でき、外側の柱の直径は18～20cmと分かる。(上村)

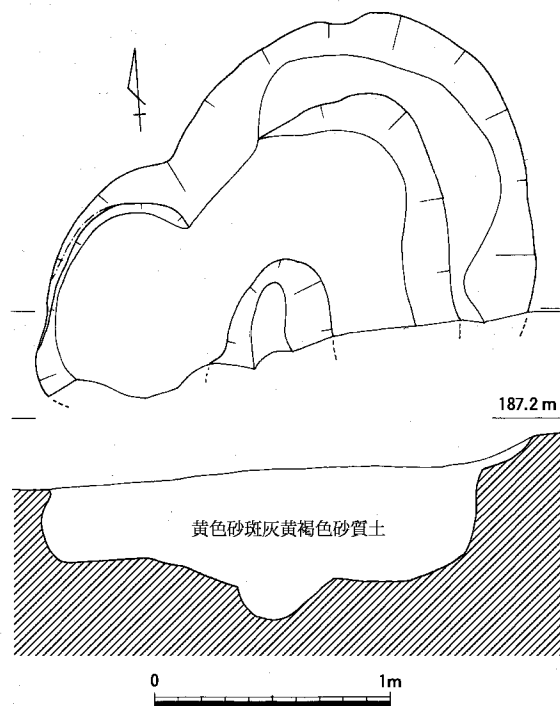
#### 4 袋状土壇

袋状土壇5 (第285・310図、図版59)

4000Bh区にあり、河道8斜面途中のテラス部に位置する。南半部はトレンチによって損壊したが、平面形が直径約2m程のやや不定形の円形を呈し、底面までの深さは76cmを測る。その底面は平坦な面であるが、中央は柱穴状の窪みをなす。

後述するが、河道8の堆積層である弥生中期の洪水砂礫層を除去後に検出したこと、細片であるが土器片の出土をみたことから弥生時代の遺構と考えている。ただし、埋土中からは土器以外の遺物は確認できていない。(弘田)



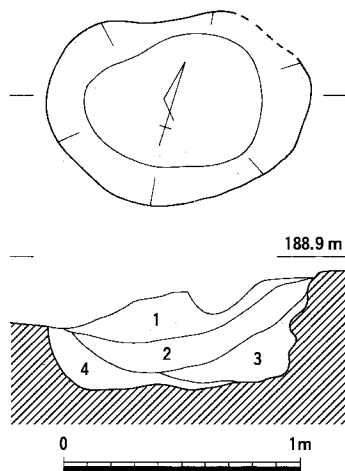


第310図 袋状土壌5 (1/30)

## 5 土壌

### 土壌54 (第280・311図)

4 0 05 C b区にて検出された遺構である。掘り方の平面形は不整楕円形を呈し、長さ1.12m、幅77cm、深さ46cmを測る。一部を後期の溝7に切られている。出土遺物は皆無であった。出土遺物は認められないものの、埋土や重複関係などから弥生時代中期後葉と考えておきたい。(河合)



- 1 暗灰黄色砂質土
- 2 黒褐色砂質土
- 3 暗灰黄色砂質土 (褐色砂質土混)
- 4 黄褐色砂質土

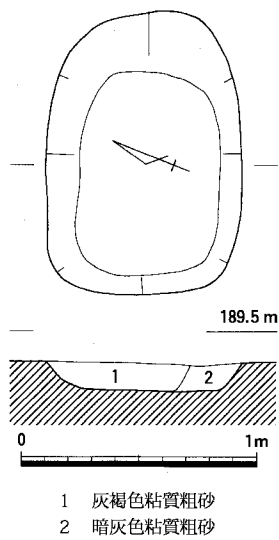
第311図 土壌54 (1/30)

### 土壌55 (第279・312図)

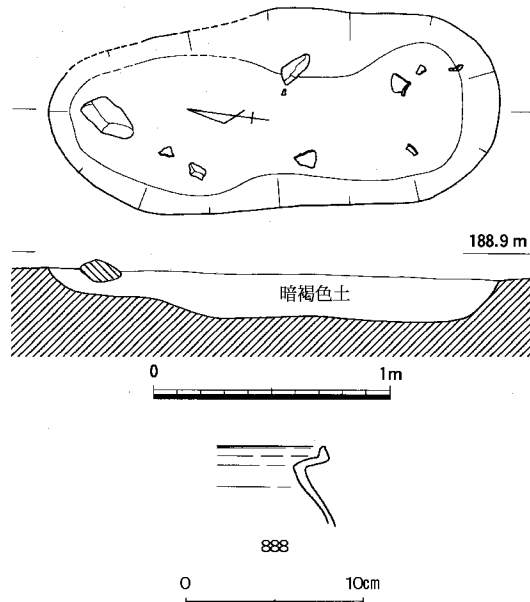
4 0 03 C j区において検出した土壌で、長軸をほぼ東西に向け、東側に丸みを持った長方形の平面形を呈している。検出された土壌の規模は長軸1.2m、短軸84cmを測る。深さは11cm、底面はほぼ平坦で壁面は逆「ハ」の状態に立ち上がる。壙内埋積土は2層に分類できたが、遺物は皆無であった。(二宮)

### 土壌56 (第279・313図)

4 0 04 D a区中程やや南西に位置し長軸をほぼ南北に示した土壌である。土壌の東側がわずかに胴張り気味の長楕円形を示し、長軸1.9cm、短軸84cmを測る。底面は北部がテラス状に1段高く緩やかな傾斜でほぼ平坦な底面となり22cmの深さを測った。埋積土は暗褐色土一色で、山石等の混入もある。糞388、その他に少量の破片も認められている。(二宮)



第312図 土壙55 (1/30)

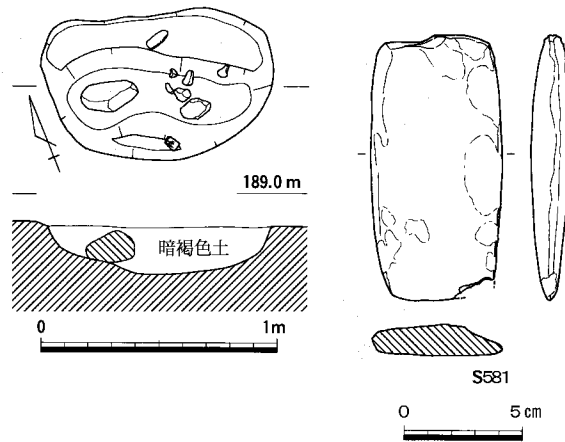


第313図 土壙56 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙57 (第279・314図、図版82)

4 0 04 Da区で土壙56の東に隣接して検出された小形の不整楕円形の平面を呈しわずかに南側に胴張りを示した土壙である。

土壙はほぼ東西に長軸を向け99cm、短軸は64cm、最も深い位置で20cmを測る。壙内の北側にはテラス状の段を持ち、南側の一部にも同様の形状が認められる。断面は丸みを持った掘り込みで、北側が一段高く皿形の底面となる。埋土中から石斧S581を確認する。(二宮)



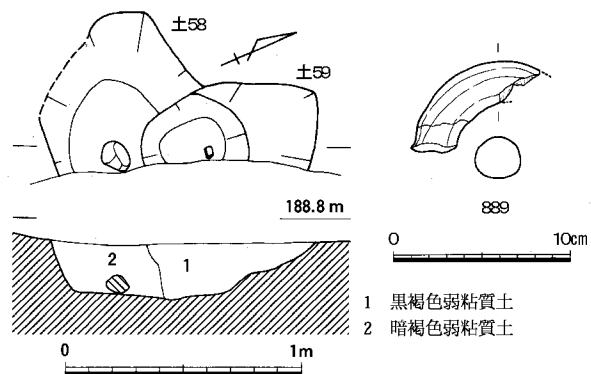
第314図 土壙57 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壙58・59 (第279・315図)

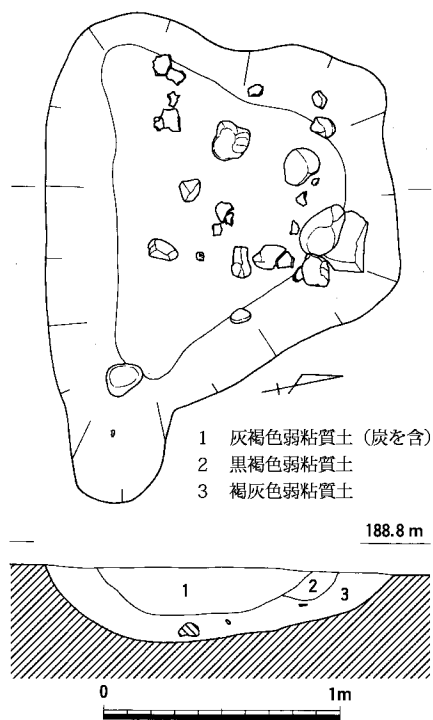
4 0 05 Dd区の南東部において検出され、2基の土壙が切り合っているものである。

検出された2基の土壙の平面形は、いずれも西側半分程度の残存のため全形は不明。楕円形状を推定する。双方の壁面南側は内傾する掘り込み、底面はほぼ平坦、北側は起状があり壁面も段差を持ち緩やかに立ち上がる。

埋積土は黒褐色と暗褐色の弱粘質土で、889の把手部分が出土する。(二宮)



第315図 土壙58・59 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第316図 土壌60 (1/30)

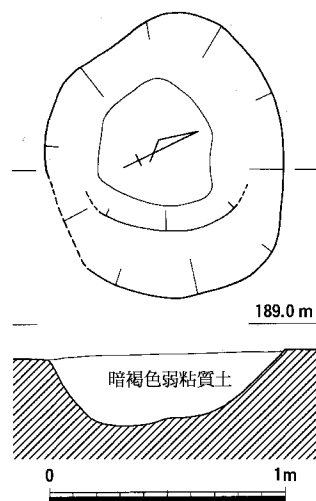
土壌60 (第279・316図、図版59)

4 0 05 Db区の南東部に位置し、土壌58・59と重複して検出された土壌である。検出時の平面形状は不整形を呈し、底面は三角形状を示すものである。東西軸は南側が2.07m、北側90cm、南北の短軸は1.5 m、検出面からの深さは32cmを測る。底面は楕形の形状で緩やかに立ち上がる壁面となっている。壙内には5～25cm程度の石が混入する。(二宮)

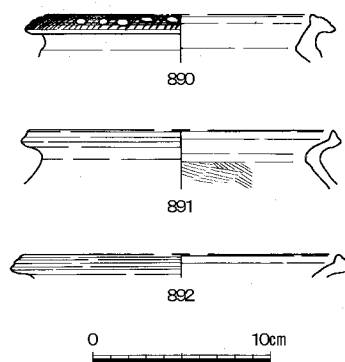
土壌61 (第279・317図、図版73・75)

4 0 05 Da区ほぼ中程に位置し、竪穴住居2を切り込んで検出された土壌である。平面形態は楕円形を呈し、東西に長軸を示し、1.2m、短軸1 m、検出面からの深さは32cmを測る。

土壌は楕形の掘り込みで丸みを持った底面で、緩やかな逆「ハ」字状に立ち上がる壁面、東側では、段を有する。埋土内からは壺890、甕891・892の遺物が確認されている。(二宮)



第317図 土壌61 (1/30)・出土遺物 (1/4)

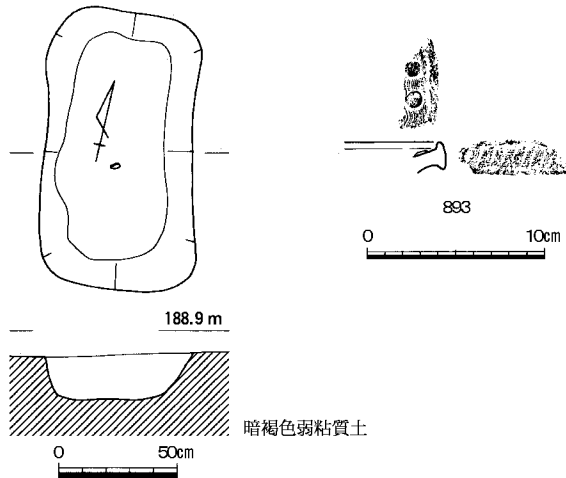


土壌62 (第279・318図)

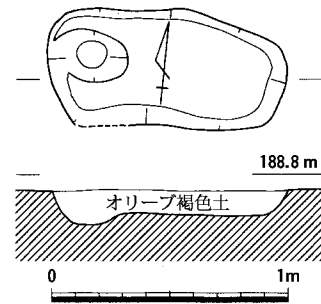
4 0 05 Da区内で土壌61の南西に近接する位置で、竪穴住居を切り込んだ状態で検出された。平面形態は長辺が若干歪な隅丸長方形でほぼ南北方面を示す。長軸は1.18m、短軸は62cm、検出面からの深さ20cmを測る。断面形は逆台形状で平坦な底面となる。壺893の小片を確認する。(二宮)

土壌63 (第279・319図)

土壌62の南西に近接した位置で長軸を東西に持ち、若干歪な長楕円形の平面形を呈している。土壌の規模は長軸1.02m、短軸50cm、深さは21cmを測る。平坦な底面をなすが、西辺で窪みを持ち、壁面



第318図 土壌62 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第319図 土壌63 (1/30)

は逆「ハ」字状に立ち上がる。後期に比定されよう。

(二宮)

土壌64 (第279・320図)

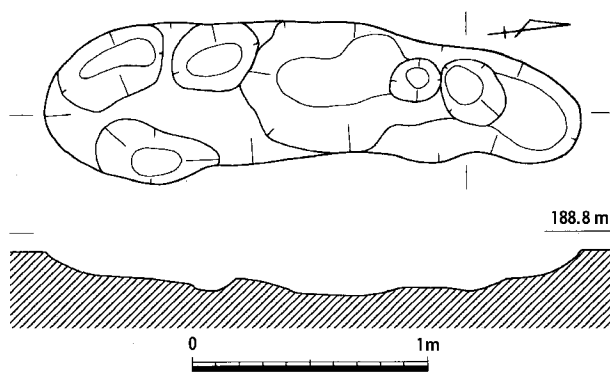
4 0 05 Da区南西で竪穴住居2に近接した位置で検出した南北に長い不整長方形の平面形を示す土壌で、長軸2.28m、短軸68cm、最も深い所の深さで34cmで、断面は「U」字形、長軸の底面は起伏が激しい形状を示す。平面形状から埋葬施設の可能性も考えられるが具体的な証は確認されなかった。

(二宮)

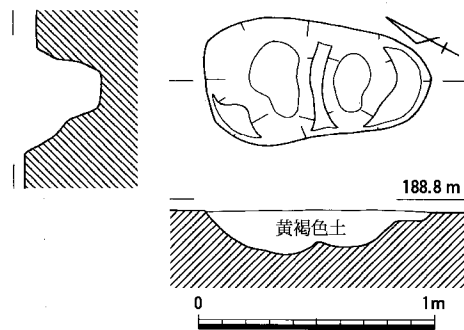
土壌65 (第279・321図)

土壌64の東2.5mで検出し、竪穴住居2を切り込んだ長軸96cm、短軸54cmの平面形が長楕円形を呈する土壌で、4 0 05 Da区に位置する。底面に2か所の窪みで、深さは15cmと18cmを測る。南側上段にテラス状の段を持っている掘り方である。黄褐色土で境内が充満し、遺物は皆無に近い。

(二宮)



第320図 土壌64 (1/30)



第321図 土壌65 (1/30)

土壌66 (第279・322図)

土壌65のほぼ東1.5m検出した長軸79cm、短軸70cmの若干歪な隅丸形状を呈する土壌で4 0 05区の竪穴住居2の中に重複している。検出面からの深さは最も深い位置で37cmを測った。

前述までの土壌と異なった様相を示す。時期の決め手の遺物は皆無といえる。

(二宮)

### 第3章 発掘調査の概要

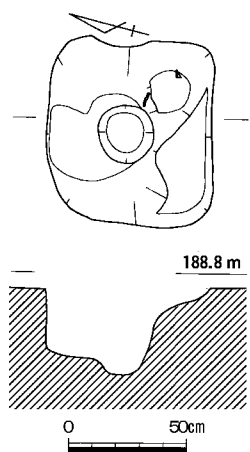
#### 土壌67 (第279・323図)

竪穴住居2の東1.2mで4 0 05 Da区で検出した長軸1 m、短軸70 cmの隅丸方形を呈する土壌で、深さは12 cmある。平坦な底面で壁面は逆「ハ」字状に立ち上がり、埋土内に礫が検出されている。時期を決定しうる遺物の確認はとぼしいが、検出面等から弥生時代後期と考えられよう。(二宮)

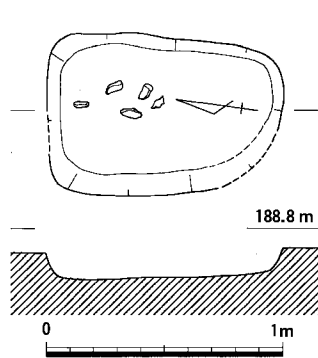
#### 土壌68 (第285・324図)

河道8斜面にあたる4 1 00 Bi区内で、先の袋状土壌5にも近い位置にある土壌である。平面形が不整形円形を呈し、長軸が1.26m、短軸は92cmを測る。

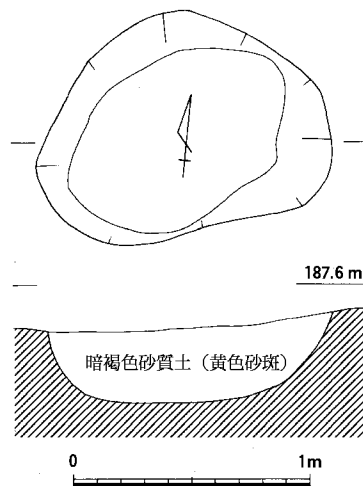
検出した層位からみてこの土壌の時期は、弥生時代中期と考えられる。(弘田)



第322図 土壌66 (1/30)



第323図 土壌67 (1/30)



第324図 土壌68 (1/30)

#### 土壌69 (第280・325図、図版59・73)

4 0 09 C b区にて検出された遺構である。掘り方の平面形は楕円形を呈し、長さ54cm、幅30cm、深さ30cmを測る。出土遺物には壺894がある。894は頸部から口縁部にかけてほぼ完形であり、口縁部を下に向けた状態で出土した。出土遺物から遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(河合)

#### 土壌70 (第280・326図、図版73)

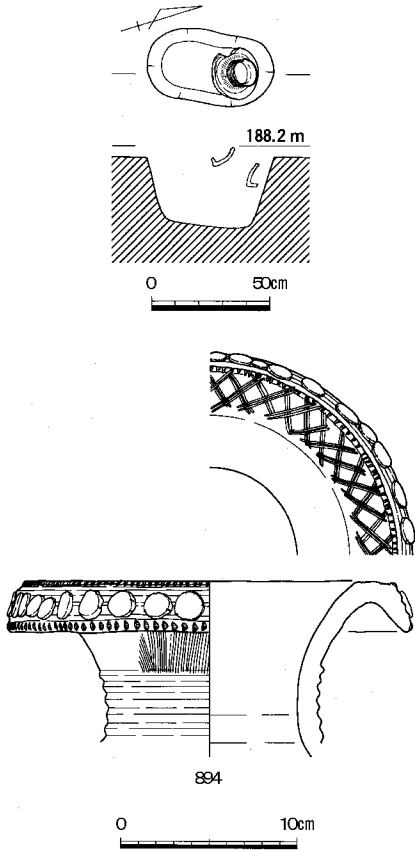
4 1 01 C c区にて検出された遺構である。掘り方の平面形は楕円形を呈し、長さ87cm、幅69cm、深さ17cmを測る。出土遺物には壺895がある。895は肩部が強く張り出し、頸部から肩部にかけて斜格子文・波状文・凹線文を施す。出土遺物から遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(河合)

#### 土壌71 (第280・327図、図版60・73)

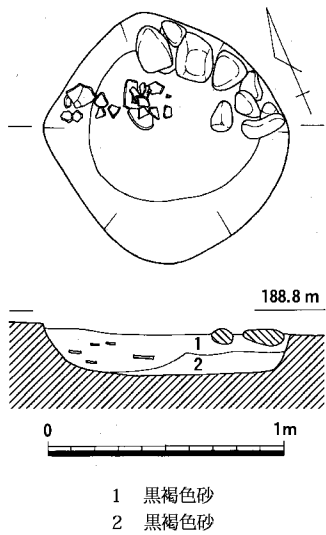
4 1 01 C b区にて検出された遺構である。掘り方の平面形は楕円形を呈し、長さ1.17m、幅98cm、深さ17cmを測る。出土遺物には壺896、甕897がある。897は完形に復元できる甕であり、器高29.4cmを測る。出土遺物から遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(河合)

#### 土壌72 (第280・281・328図、図版60・73)

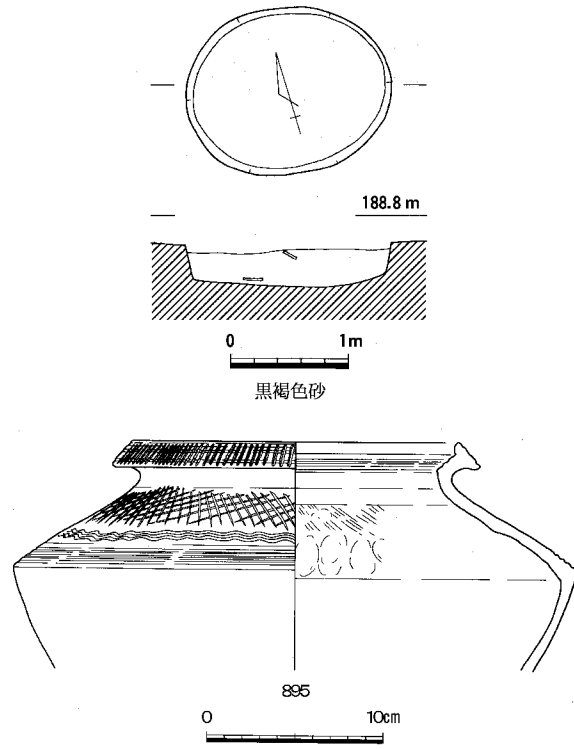
4 1 01 C d区にて検出された遺構である。掘り方の平面形は楕円形を呈し、長さ59cm、幅46cm、深さ9 cmを測る。出土遺物には甕898がある。898は大型の甕であり、内面胴下部にはケズリ、胴上部にはハケ後指押さえを施す。出土遺物から遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(河合)



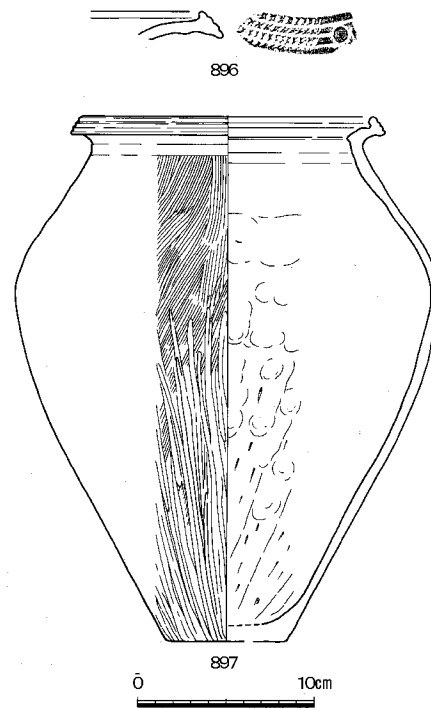
第325図 土壌69 (1/30)・出土遺物 (1/4)



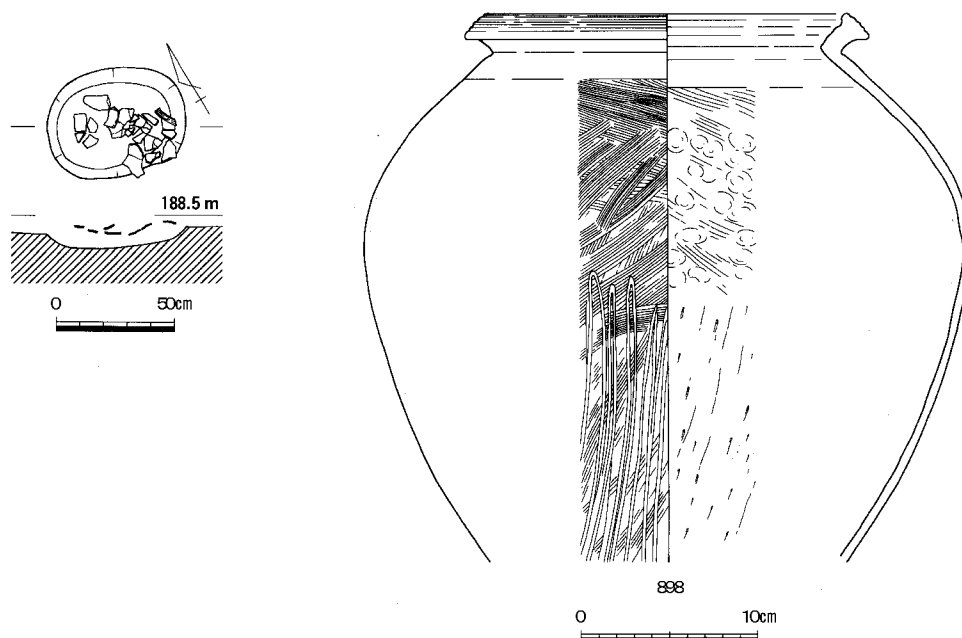
第327図 土壌71 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第326図 土壌70 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第3章 発掘調査の概要



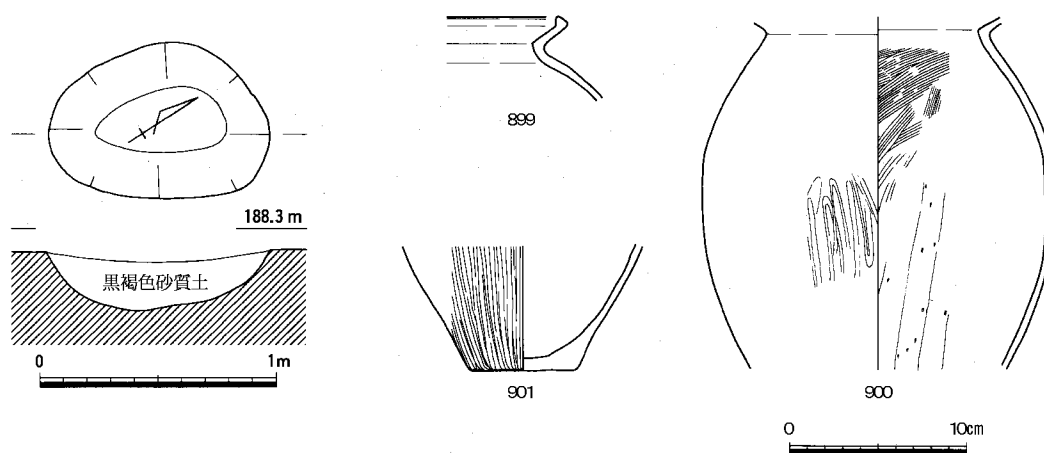
第328図 土壌72 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌73 (第279・282・329図)

竪穴住居2から南に58m下がった位置で検出した土壌で長軸94cm、短軸67cmを測る若干歪な楕円形を呈する土壌で、深さは26cmを測る。底面は丸底で浅く椀形をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。壙内は黒褐色砂質土で充満し、甕899・900、底部片901が出土する。

出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

(二宮)



第329図 土壌73 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌74 (第280・281・330図)

遺跡のほぼ中央部の4 102Cf区に位置している。東側12mでは竪穴住居6、掘立柱建物1が検出されている。

長さ1.9m、幅1.3mを測り、平面形は長形状を呈する。検出面からの深さは50cmを測り、壁体はほ

ば垂直に立ち上がる。貯蔵穴の可能性が考えられる。時期は中期後葉である。(上柀)

土壙75 (第280・281・331図)

遺跡のほぼ中央部の4 1 02 C g区に位置している。東側9 mでは土壙74が検出されている。

長さ1.28m、幅67cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは35cmを測り、壁体は斜めに立ち上がる。

埋土中から弥生土器が出土している。903は高杯の杯部である。内外面とも丁寧に磨いている。時期は中期後葉と考えられる。(上柀)

土壙76 (第280・281・332図、図版60)

遺跡のほぼ中央部の4 1 04 C f区に位置している。南西側5 mでは竪穴住居7を検出している。

長さ3 m、幅40~50cmであり、舟形を呈している。検出面からの深さは20~30cmであり、南側が深くなっていた。壁体は斜めに立ち上がっている。

時期は周囲の遺構などから中期後葉の可能性が考えられる。(上柀)

土壙77 (第281・333図)

遺跡のほぼ中央部の4 1 06 C c区に位置している。南側1 mでは土壙78を検出している。古墳時代の土取りに囲まれた状態で検出しており、当初は周辺に土壙が存在していた可能性もある。

直径1.7mの円形土壙である。検出面からの深さは40cmを測り、壁体はほぼ垂直に立ち上がる。底部はほぼ平坦であった。

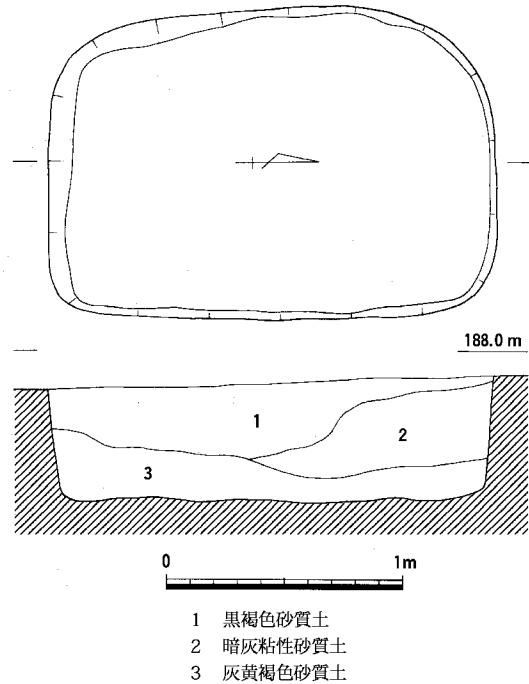
時期は、中期後葉の可能性がある。(上柀)

土壙78 (第281・334図)

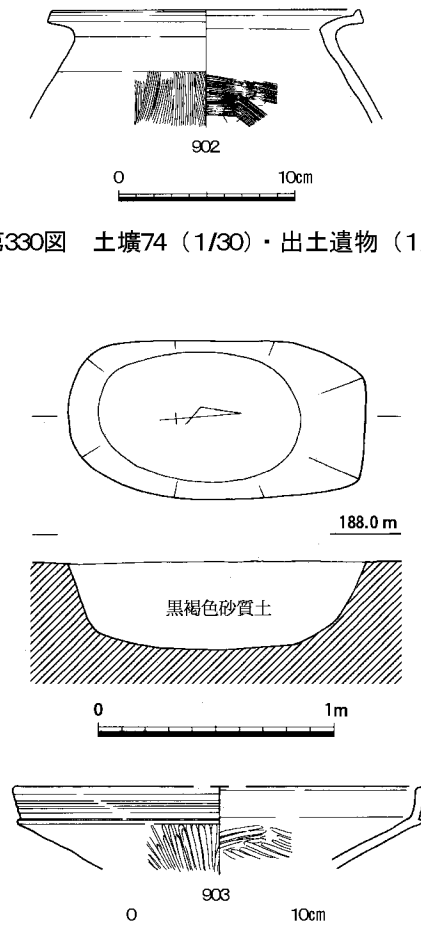
遺跡のほぼ中央部の4 1 06 C c区に位置している。北側1 mでは土壙77を検出している。

長さ2.2m、幅1.95mを測り、平面形は不整楕円形状を呈している。底部はボール状であり、最深部の検出面からの深さは70cmを測る。埋土の様子からは、掘り直しを繰り返した痕跡がうかがえた。

時期は、中期後葉の可能性がある。(上柀)



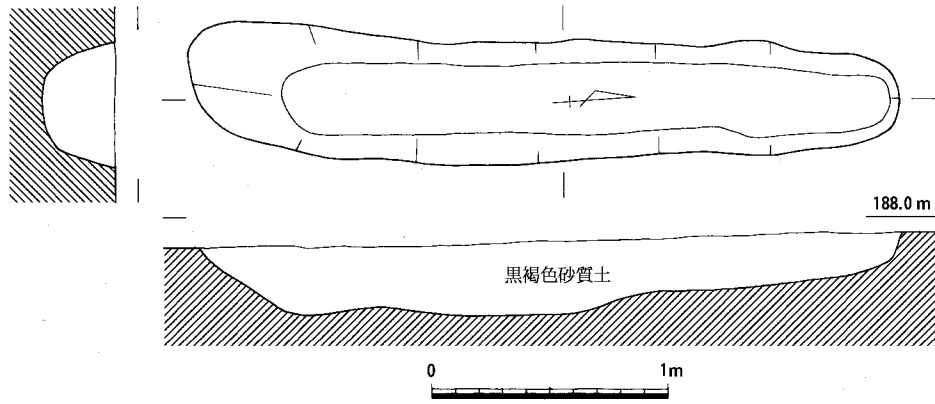
第330図 土壙74 (1/30)・出土遺物 (1/4)



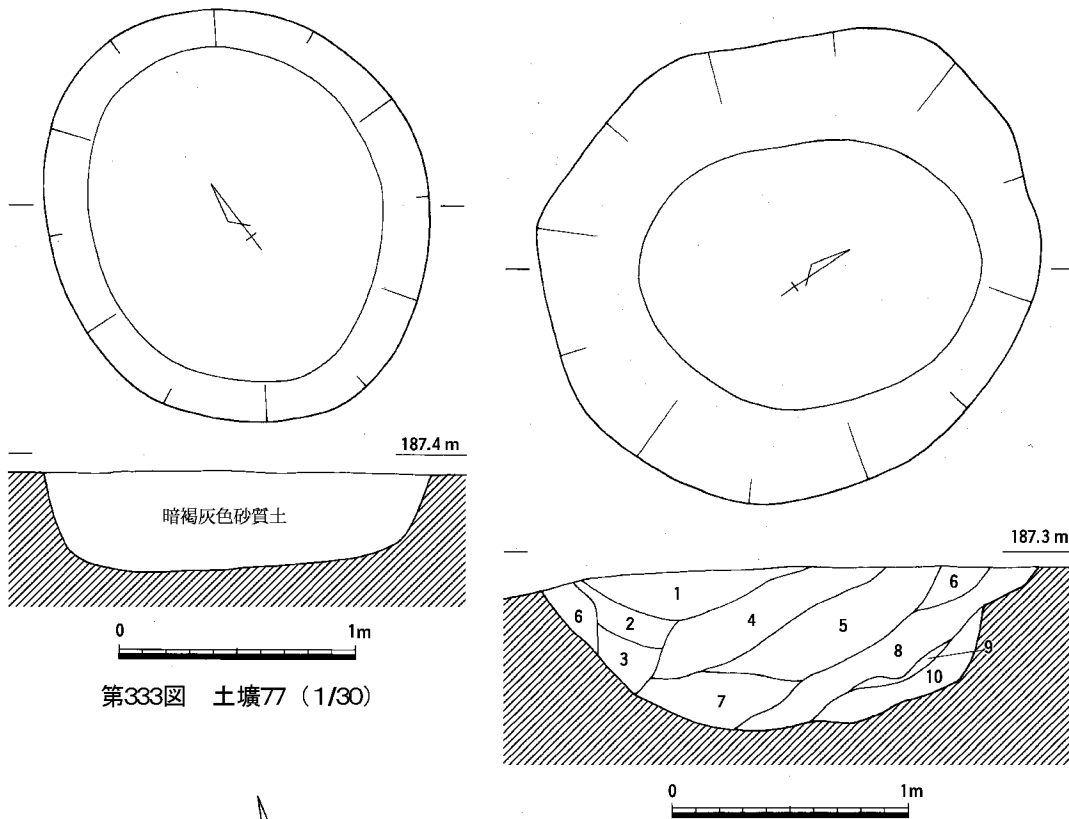
第331図 土壙75 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第3章 発掘調査の概要



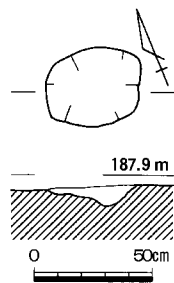
第332図 土壙76 (1/30)



第333図 土壙77 (1/30)

- |          |            |
|----------|------------|
| 1 浅黄色砂質土 | 6 鈍黄色砂質土   |
| 2 黄灰色砂質土 | 7 灰色砂質土    |
| 3 黄灰色砂質土 | 8 黄灰色砂質土   |
| 4 灰黄色砂質土 | 9 鈍黄色砂質土   |
| 5 黄褐色砂質土 | 10 暗黄灰色砂質土 |

第334図 土壙78 (1/30)



橙色砂質土+褐灰色砂質土

第335図 土壙79 (1/30)

土壌79 (第281・335図)

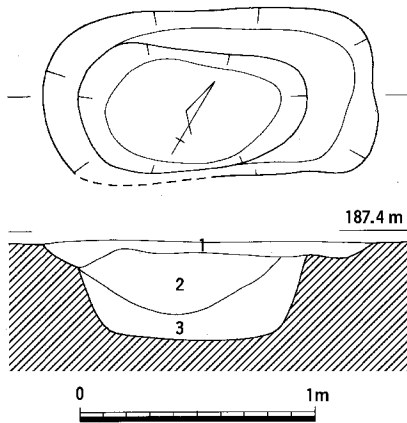
4 1 08 C f区において検出した。平面形は45×34cmの不整楕円形で、深さは8 cm残存していたにすぎない。断面や底面には凹凸があり、人為的な土壌ではない可能性がある。遺物は出土していないが、検出面などから時期は弥生時代中期後葉と考えている。(平井)

土壌80 (第286・336図)

4 2 00 C e区に位置する隅丸方形の土壌で、長軸1.4m、短軸69cm、検出面からの深さは約41 cmを測り、底面はほぼ平坦になっている。土壌は2段掘りで歪な楕円形の形状で断面形は逆台形を呈し、北東へと低くなっている。出土遺物は皆無だが、検出面などから弥生時代中期と考えられる。(二宮)

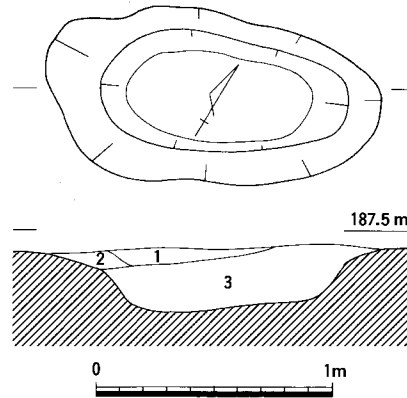
土壌81 (第286・337図)

土壌80の東4 mで検出し、4 2 00 C f区に位置するこの土壌は長軸1.39m、短軸77cmを測る楕円形の土壌で2段掘りとなっていた。検出面からの深さは27 cmを測る。底面は北東から南西へとゆるやかに下がっている。出土遺物は皆無だが、検出面などから弥生時代中期と考えられる。(二宮)



- 1 黒褐色弱粘性土 (濃い・少し粗いのも含)
- 2 黒褐色弱粘性土 (淡い)
- 3 暗褐色弱粘性土 (黒褐色に近)

第336図 土壌80 (1/30)



- 1 黒褐色弱粘性土 (濃い・少し粗いのも含)
- 2 黒褐色弱粘性土 (淡い)
- 3 暗褐色弱粘性土 (黒褐色に近)

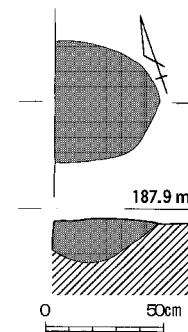
第337図 土壌81 (1/30)

## 6 火処

火処74 (第281・338図)

4 1 08 C h区において検出した。西側は調査区外で検出できなかったが、幅は51cmで、楕円形を呈するものと考えられる。

遺構検出中に橙色に被熱した面が検出できた。時期は、検出面などから弥生時代中期後葉と考えている。(平井)



淡橙色砂質土 (被熱部分)

第338図 火処74 (1/30)

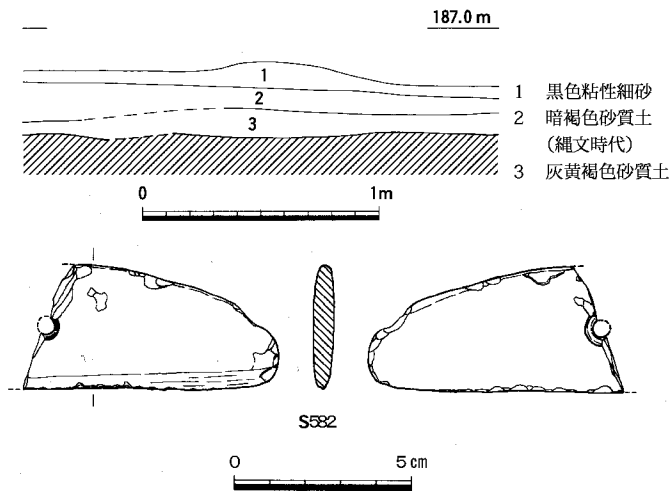
## 7 水田

水田1 (第281・283・286・339図、図版61～64・83)

河道7下流部の西側畔に、東西幅約26m・南北幅約30mの範囲で畦状に

第3章 発掘調査の概要

区画された平坦面が見つかる。畦自体の高さは5~10cmほどで低い。この遺構は弥生中期後半の洪水砂の直下から発見され、河道7の覽で後述するが、弥生中期後半の時期になる。この遺構は北西方向



第339図 水田1 (1/30)・出土遺物 (1/2)

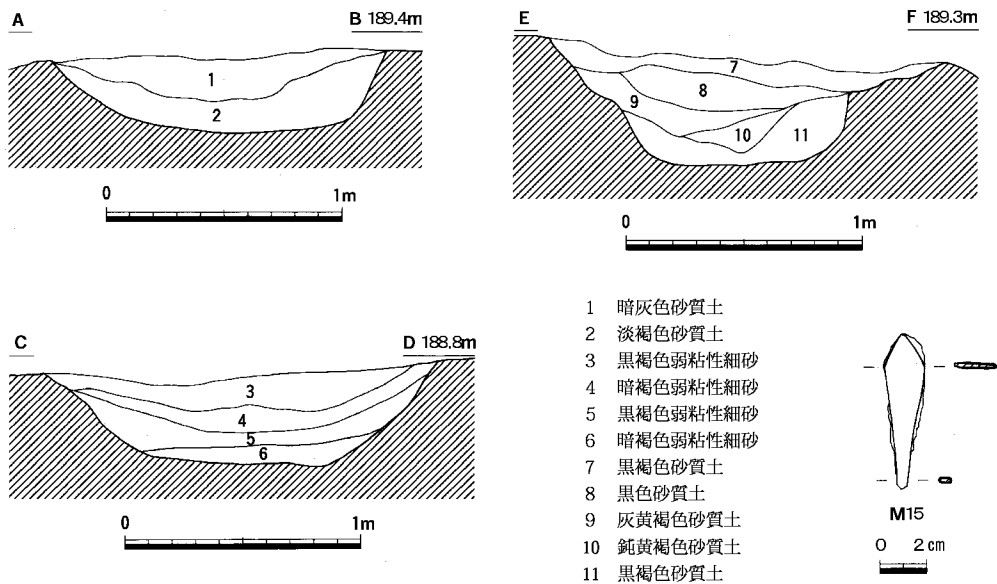
が高く、南東方向に向かって低くなり、約0.5mほどの差がある。それぞれの区画の面積は、標高が高い北側が小さく5~20㎡前後、最も広い箇所では77㎡ほどになるが、20~30㎡前後のものが多い。この区画内の数か所でプラント・オパール分析を行った結果、微量ながら稲の痕跡が発見されており、畦状の区画とともに、この区画内で稲作を行っていた可能性が高い。遺物は黒色層の直上から唯一S582が出土し、直線対半月形の磨製石庖丁である。(小林)

8 溝

溝7 (第277・280・340図、図版64・65・84)

河道7と8にはさまれた微高地上を北から南に走る溝で、居住域あたりで方向を西に変える。弥生後期の包含層を除去した後に検出しており、幅が1.4~1.7m、検出面からの深さは40~55cmを測る。

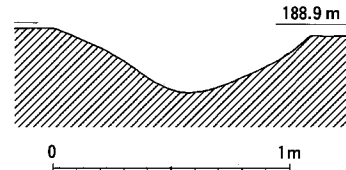
出土した遺物には広根式で三角形の鉄鏃M15がある。土器片には図示できるほどのものはないが、溝の時期は後期と考えている。(弘田)



第340図 溝7 (1/30)・出土遺物 (1/3)

溝8 (第277・341図)

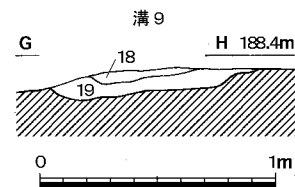
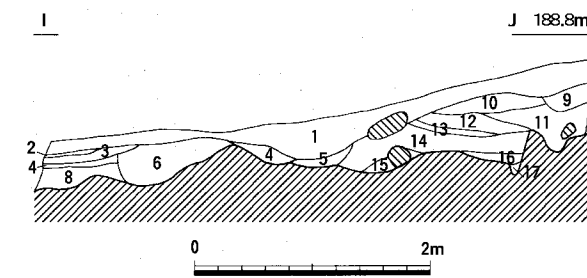
河道7西側微高地上にあたる3908～4000Cb区にかけてを河道7と平行に走るが、それより南は検出できなかった。ただし、遺跡中央部において河道7の西に平行した溝14に接続する可能性がある。出土遺物はなく時期の特定は難しいが、中期後葉から後期の間ではなかろうか。(弘田)



第341図 溝8 (1/30)

溝9・10 (第277～279・342図、図版65)

河道7左岸側の裾を流走する2条の溝である。断面の観察から、河道7の下半部が埋没した後に溝9が掘られ、溝9埋没後に改めて溝10が掘削されている。図示しうるほどの遺物はないが、溝の時期は中期から後期にかけてと考えられる。(弘田)

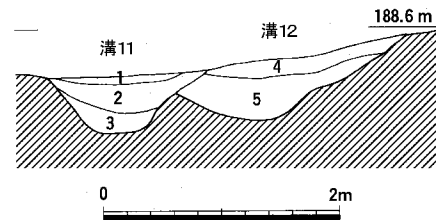


- |                   |                   |                   |
|-------------------|-------------------|-------------------|
| 1 黒褐色粘性細砂(河道7埋土)  | 5 暗褐色粘性微砂(溝9埋土)   | 9 暗褐色粘性微砂         |
| 2 黒褐色細砂(河道7埋土)    | 6 灰黄褐色粘性微砂(溝10埋土) | 10 暗褐色弱粘性細砂       |
| 3 黒褐色弱粘性細砂(河道7埋土) | 7 黒褐色細砂(河道7埋土)    | 11 黒褐色弱粘性微砂       |
| 4 鈍黄褐色粘性細砂(溝9埋土)  | 8 黒色粘性微砂(河道7埋土)   | 12 暗褐色細砂(鈍黄褐色細砂混) |
|                   |                   | 13 黒褐色弱粘性細砂       |
|                   |                   | 14 鈍黄褐色粘性微砂       |
|                   |                   | 15 暗褐色弱粘性細砂(礫混)   |
|                   |                   | 16 鈍黄褐色弱粘性微砂(礫混)  |
|                   |                   | 17 鈍黄褐色微砂         |
|                   |                   | 18 淡褐灰色砂          |
|                   |                   | 19 灰色砂            |

第342図 溝9・10 (1/60,1/30)

溝11・12 (第278・279・343図、図版66)

4004Ch区において検出した、河道7に流入する溝である。この溝は、その方向や2条の溝の切り合いなどから、水田水路とみられる久田原遺跡の溝13・15に該当する。時期は、弥生中期であろう。(弘田)

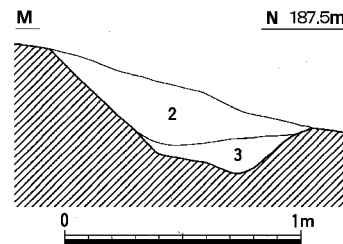
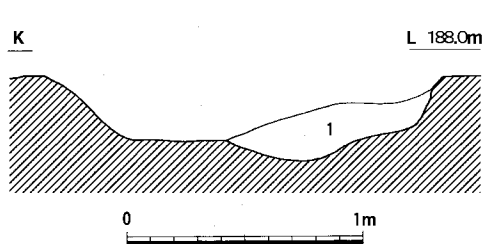


溝13 (第278・280・281・344～348図、  
図版66・73・74)

後述する遺跡の中心を南流する河道7の右岸に沿っ

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 1 黒褐色粘性微砂(溝11)   | 4 黒褐色粘性微砂(溝12)  |
| 2 鈍黄褐色粘性細砂(溝11)  | 5 鈍黄褐色粘性細砂(溝12) |
| 3 鈍黄褐色弱粘性細砂(溝11) |                 |

第343図 溝11・12 (1/30)

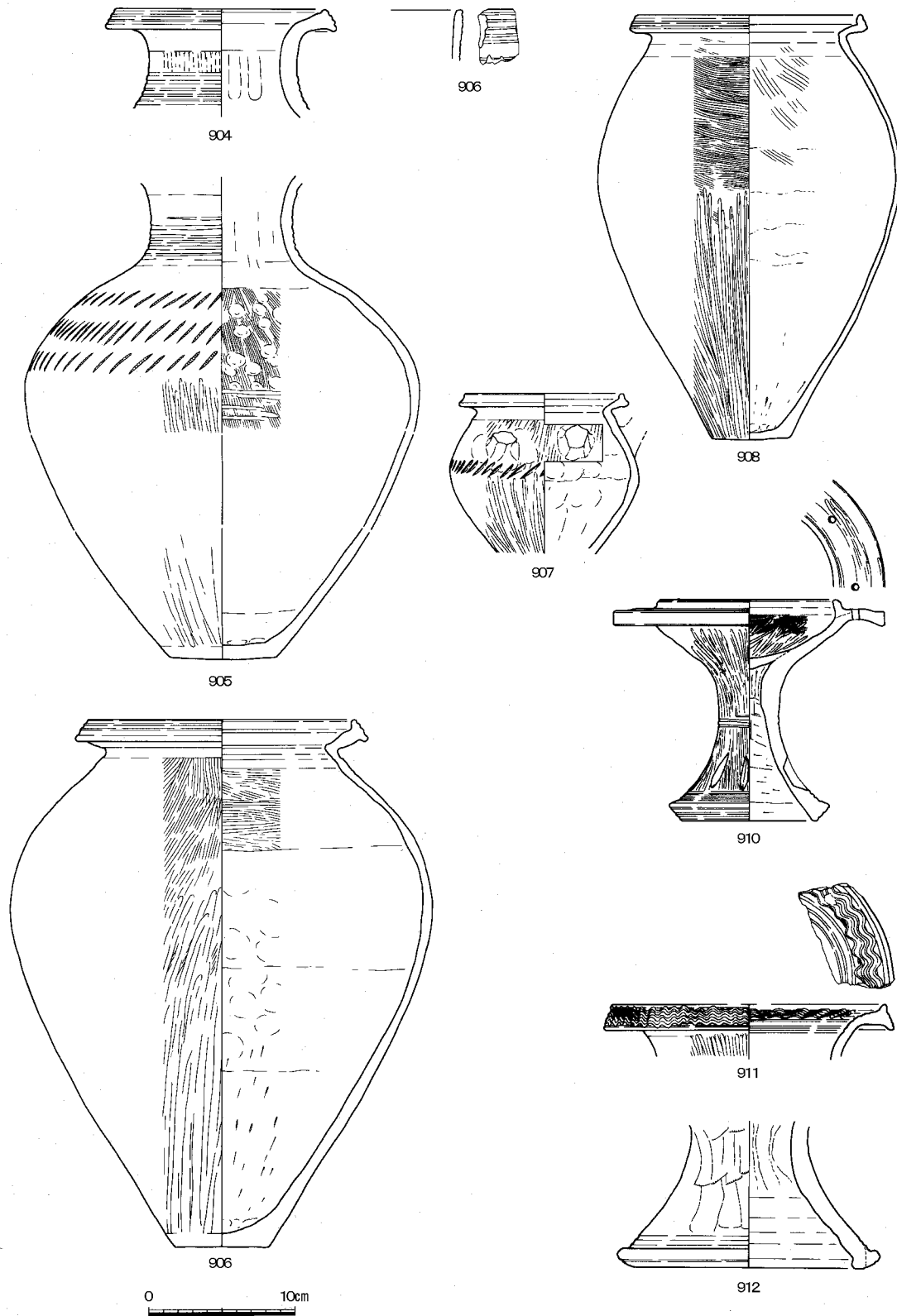


- |             |
|-------------|
| 1 黒色粘性細砂    |
| 2 暗茶褐色弱粘質土  |
| 3 淡黄灰褐色弱粘質土 |

第344図 溝13 (1/30)

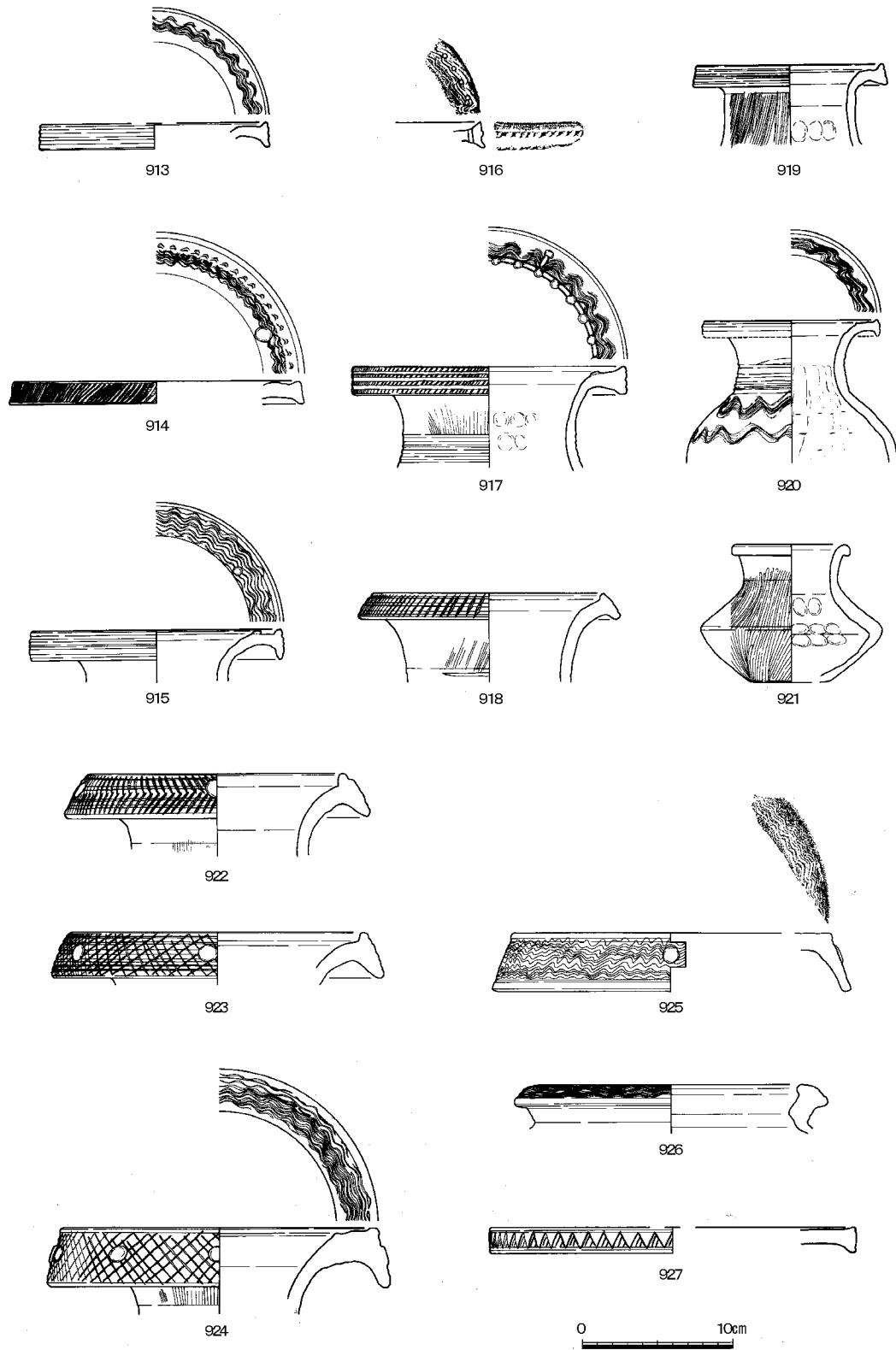
第3章 発掘調査の概要

て形成された溝である。当遺構は途切れ途切れであるが、もとは一連のものであったと考えられる。



第345図 溝13出土遺物① (1/4)

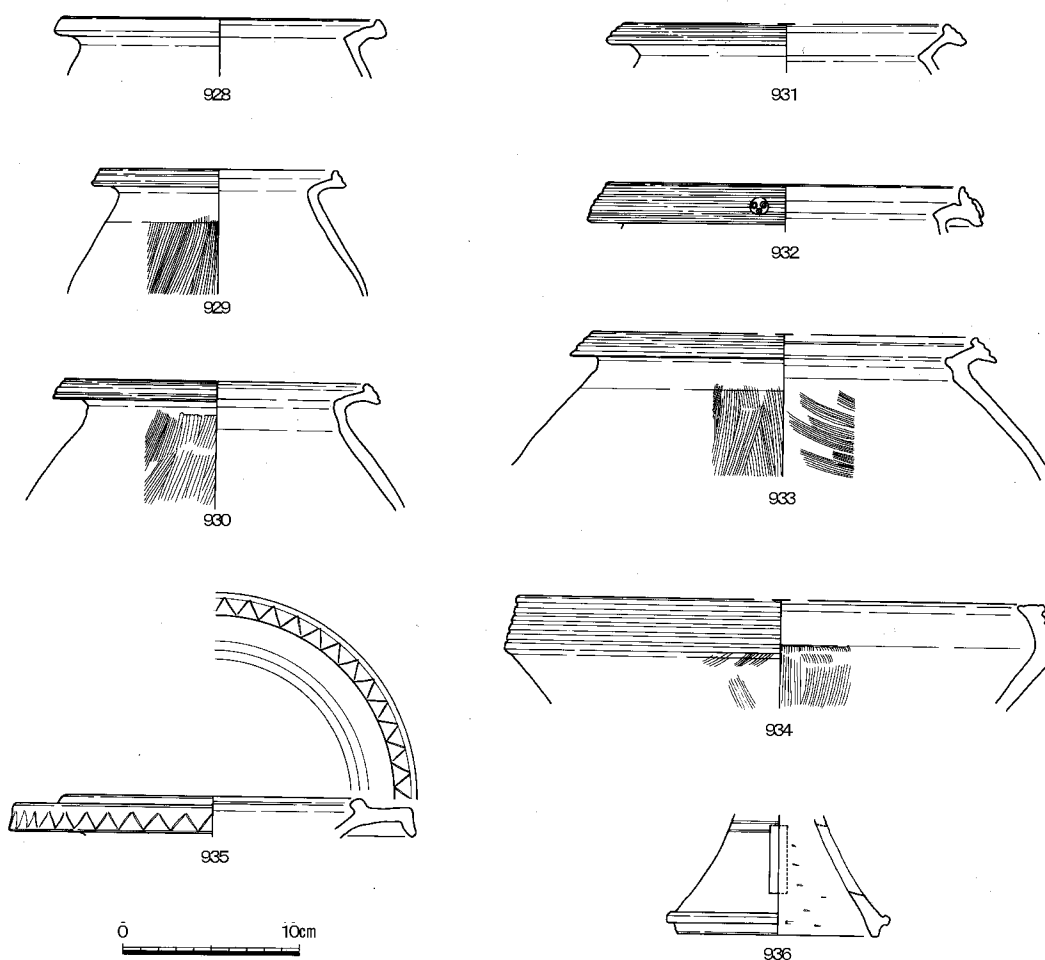
また当遺構は南流して溝15につながる可能性もある。当遺構からは第345~347図に示したとおり多量



第346図 溝13出土遺物② (1/4)

第3章 発掘調査の概要

の土器が出土しているが、全て中期後葉の住居や土壙等が密に検出された箇所隣接した地点からの出土である。このうち、905・907～910は一か所からまとめて出土している。そのほか、904・906・911・912と913～936がそれぞれ近くから出土している。904～906・911・913～927は壺、908・909・928～933は甕、934は（台付）鉢、910・935・936は高杯、912は器台である。把手付甕907は肩部に把手が付いており、外面全体にススが付着している。ほぼ完全な形に復元できた高杯910の脚部の透かしは未貫通である。927は壺の口縁部と考えているものであるが、その外面端部にはヘラ描きの鋸歯文を施している。高杯935はヘラで鋸歯文を表現しており、その中に赤彩を施している。この技法は付近から出土した器台1034などと同様であり、注目される。これらの遺物は全てが中期後葉に属するものであることから、竪穴住居3～12周辺から廃棄されたものであると考えられ、後述する住居跡群周辺出土遺物とも関連性をもつ遺物であると評価できる。 (河合)

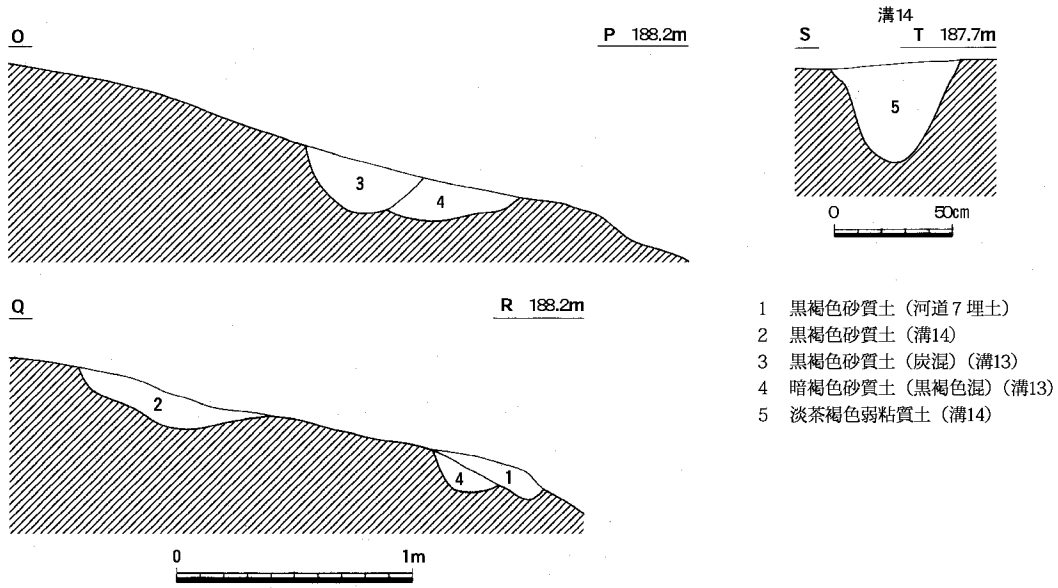


第347図 溝13出土遺物③ (1/4)

溝14 (第280・281・348図、図版66)

後述する河道7の右岸に沿って形成された溝である。溝14は溝13から派生し、また溝13に注いでいるように見えるが、Q-R断面図が示すように、溝13は一度掘り直しがなされており、溝13の掘り直し部と溝14が同時に機能していたと考えられる。遺構の時期は中期後葉であろう。 (河合)

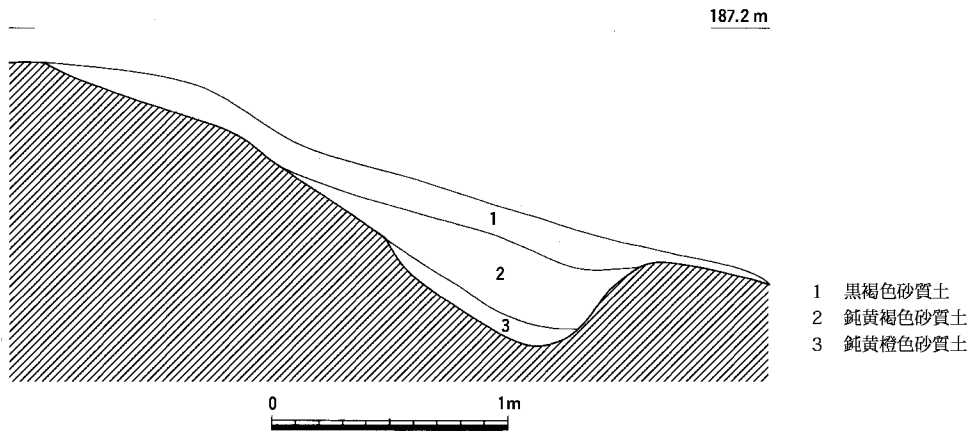
第3節 弥生時代の遺構と遺物



第348図 溝13・14 (1/30)

溝15 (第283・349図、図版67・68)

この溝は、北から南南東に向かって流れる。河道7の西側肩部付近に位置し、河道7にほぼ並行して流れる。西側肩部で水田層を切り、東側肩部は河道7に切られる。図示した箇所での深さは確認面から1.19m、断面形状はⅢeである。覆土中から弥生後期前葉の土器が出土する。(小林)



第349図 溝15 (1/30)

溝16 (第283・350図、図版67)

この溝は、北から南南東に向かって流れる。河道7の東側肩部付近に位置し、河道7にほぼ並行して流れる。肩部は両方とも河道7に切られるため、現存する深さは33cm程度であり、断面形状はⅢeである。時期は弥生時代と思われるが出土遺物は存在しない。(小林)

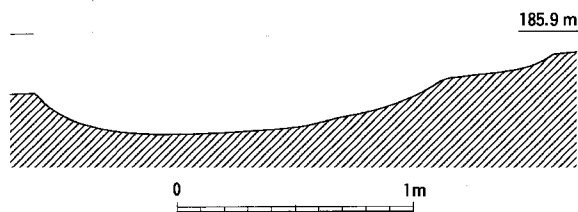
溝17 (第282・284・351図)

4 1 05Dd～4 1 08Dc区において検出した。検出できた長さは約80m、幅は2～3mで、深さは15

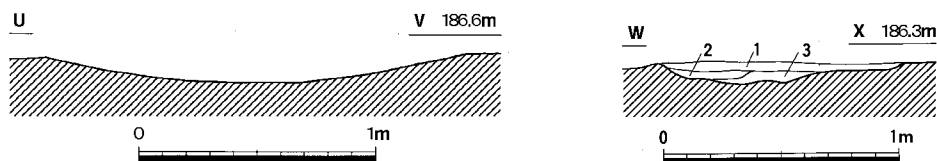


### 第3章 発掘調査の概要

cm前後残存していた。微高地の端部に沿って掘られた溝と考えられる。土器が少量出土しており、時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられるが明確ではない。(平井)



第350図 溝16 (1/30)



1 黒褐色砂土 2 褐灰色砂質土 3 褐黄灰色砂質土

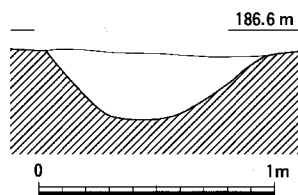
第351図 溝17 (1/30)

#### 溝18 (第284・352図)

4 2 02De区の南西端部から4 2 02Df区を経て4 2 02Dg区に至り、その調査区で大きく湾曲して南方向に流れる溝である。計測した地点での値は、幅92cm、検出面から底部までの深さは28cmであった。断面形は上方に開いた「U」字形を呈し、内部に褐灰色粘性砂質土が堆積していた。(福田)

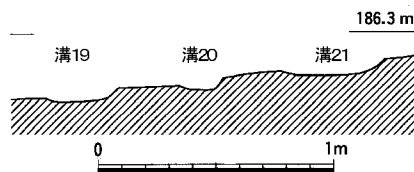
#### 溝19・20・21 (第284・353図)

4 2 05Dc区の削平された壁面を精査して検出した3条の溝で、いずれも底部がわずかに残存していた極めて浅い溝である。検出面での幅は、溝19が30cm、溝20が18cm、溝21が44cmで、断面形は浅い「U」字形であった。南側の痕跡を追求したところ、溝19が約7mで最も長く伸びていた。(福田)



褐灰色粘性砂質土

第352図 溝18 (1/30)

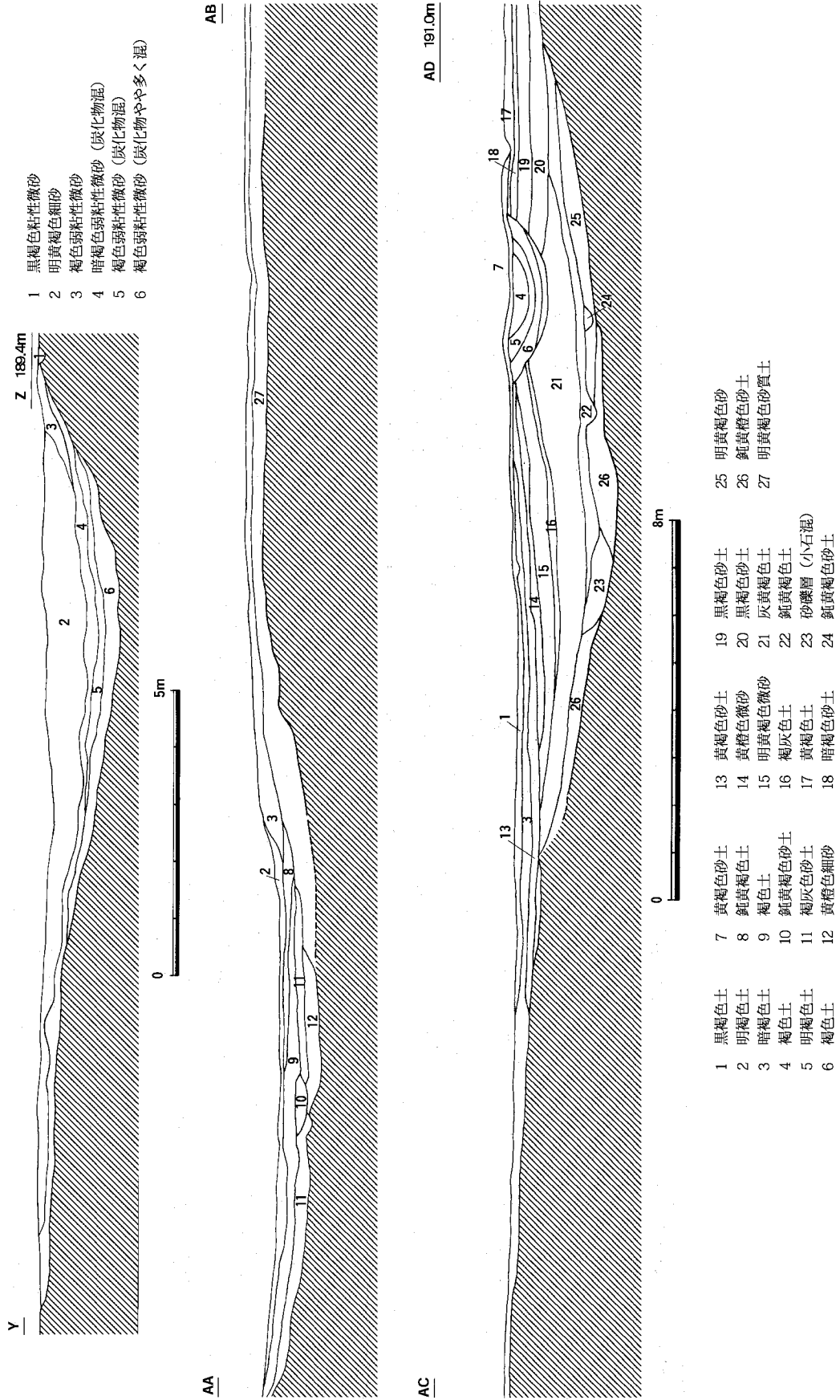


第353図 溝19・20・21 (1/30)

## 9 河道

#### 河道6 (第277・344・355図、図版75)

3 9 05Cc区～4 0 04Bi区にかけての北東から南西にかけてを流走する河道であり、また縄文時代河道2の上層にあたる。河道7によって切られていたが、最大幅は19m余りで、またその河道7の南

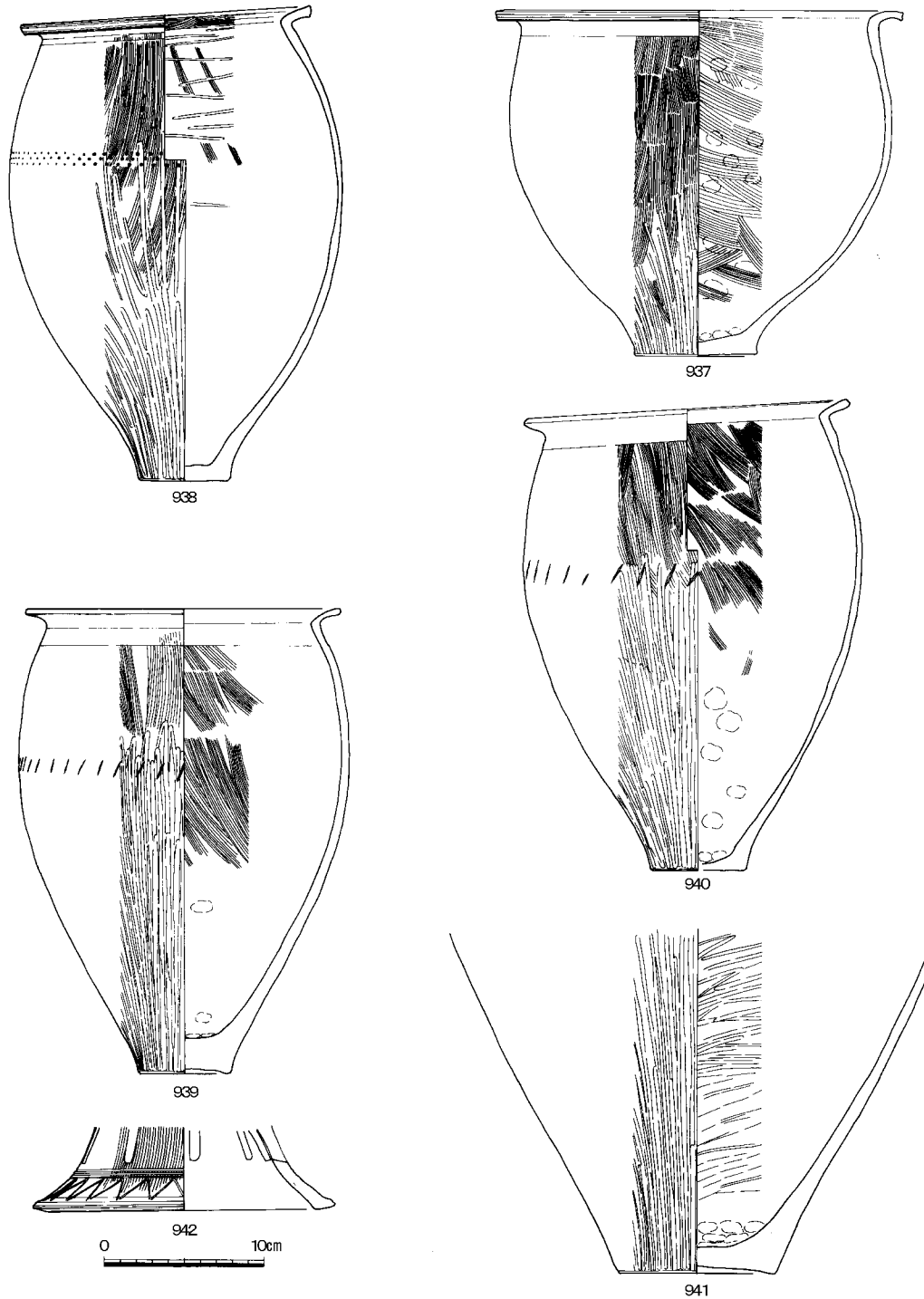


第354図 河道6 (1/100・1/120)

第3章 発掘調査の概要

側は急激に深さが増し、深さ1.2mを測る。この河道底部には1か所の土器溜まりがみられた。

出土したのは、甕938~940、甕もしくは壺の底部941、高杯脚部942である。937・938は、口縁部の外端面に凹線1条を巡らす。また、938は胴部中央に竹管文を、939・940は貝殻による刺突文を施す。なお、壺甕類はいずれも内面調整がハケ・ナデ・ミガキであり、ヘラケズリを施していない。これらの土器は、中期前葉新段階から中期中葉の古段階にかけての時期と考えられる。(弘田)



第355図 河道6出土遺物(1/4)

河道7上流部（第278・279・356～358図、写真13、図版67・68・75・76）

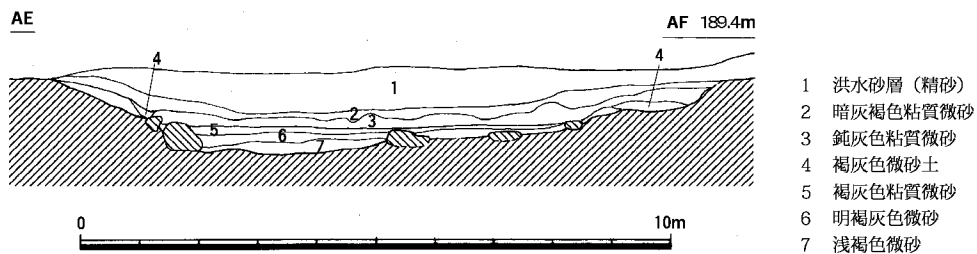
久田原遺跡（一部久田堀ノ内遺跡北東部を含む）の微高地と久田堀ノ内遺跡の微高地を二分するように、北西から南東に流走する河道である。また、その上流部においては、ほぼ直交するように流走する河道6を切っていた。

堆積土は、第2層から上を上層、第3層から下を下層として調査を行っている。2層以下は、微砂～粘質微砂で埋まっており、滞水に近い流水が幾度か繰り返されたのち、残りの上半部は弥生時代末に襲った洪水によって完全に埋められている。上流部での規模は、幅11m、深さ1.4mを測った。

出土遺物は土器のみで、943～950が上層から、951～958が下層から出土している。上層出土のうち、943・944が第1層の時期を示す以外は、壺945・946・高杯947～950ともに中期中葉新相から中期後葉にかけての範疇にある。

下層では、体部に凹線のめぐる壺952、甕では拡張する口縁の端部に凹線をめぐらす953・954と端部を内側に折り曲げるようにナデる955・956がある。953は後期初頭に位置付けられる。

以上の出土遺物からこの河道の時期は、中期中葉でも新相から後期末の洪水によって埋没するまでは存在していたと考えられる。 (弘田)

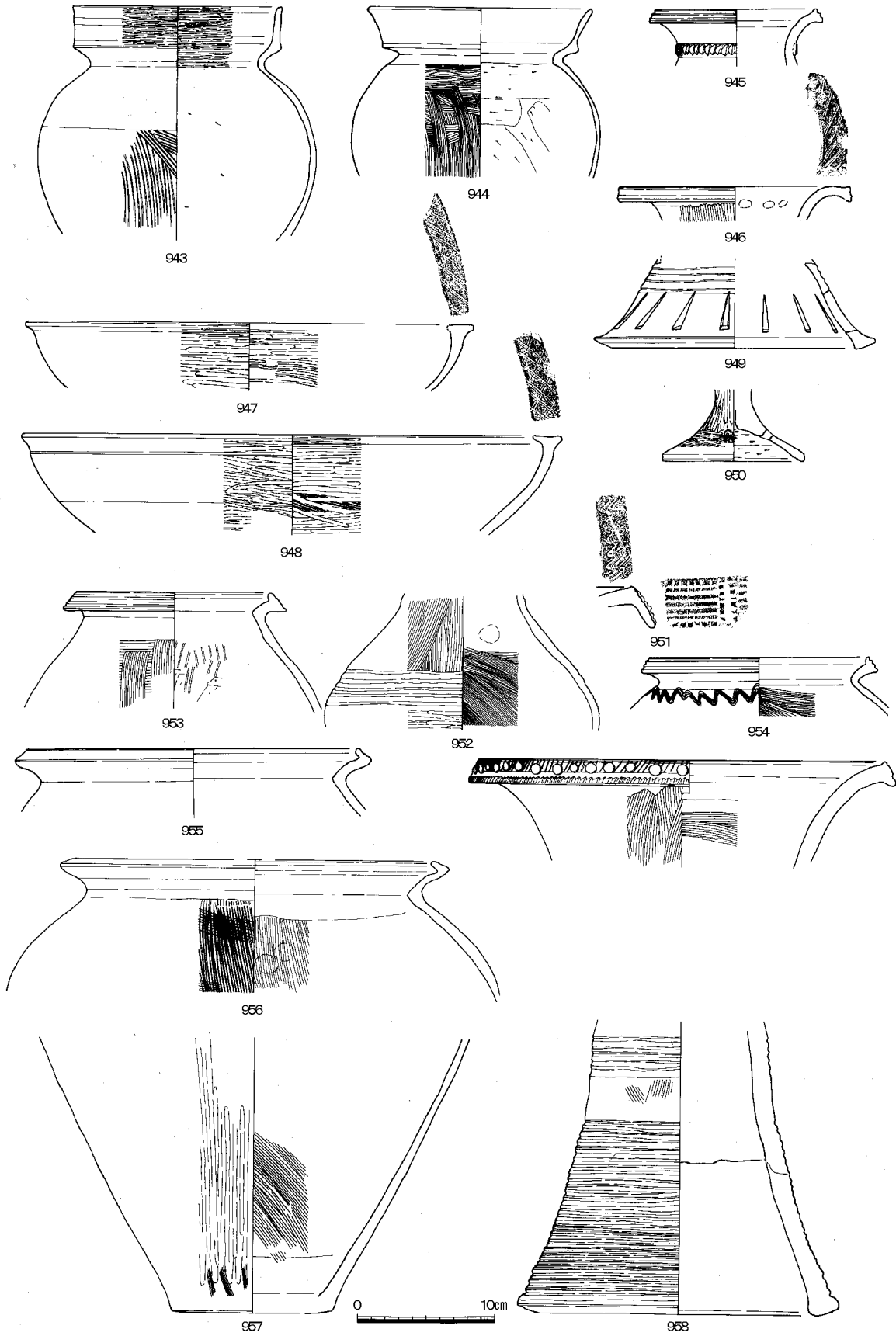


第356図 河道7上流部①（1/120）

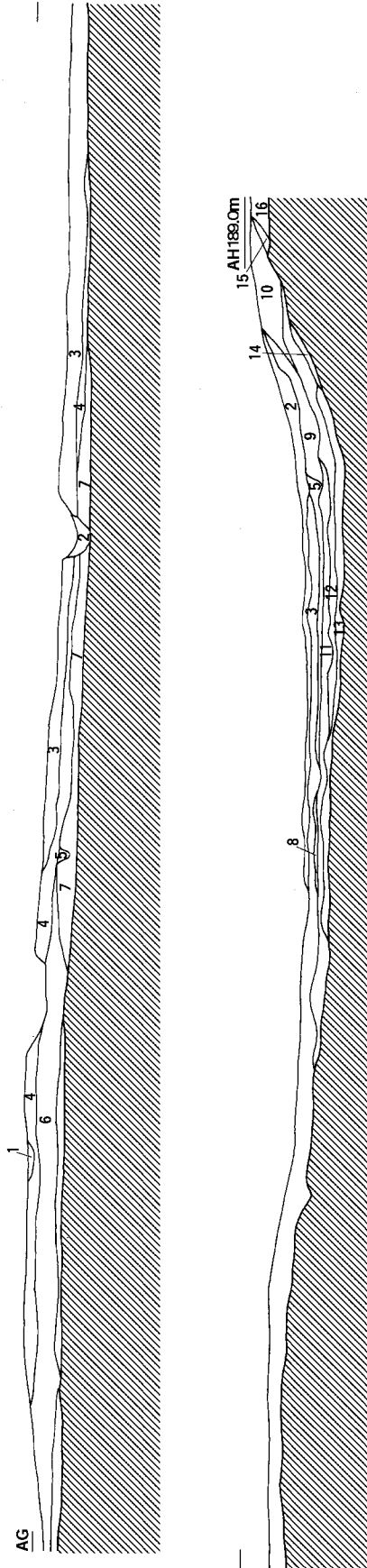


写真13 河道7上流部調査風景（北から）

第3章 発掘調査の概要

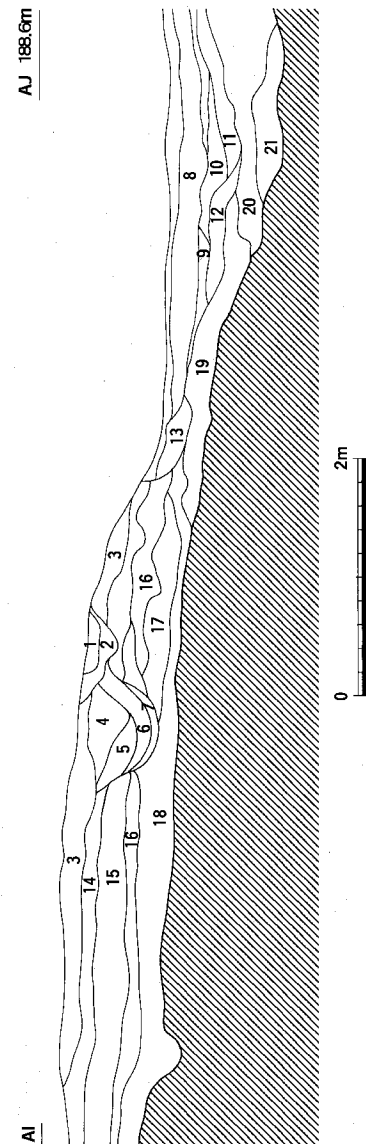


第357図 河道7上流部出土遺物 (1/4)



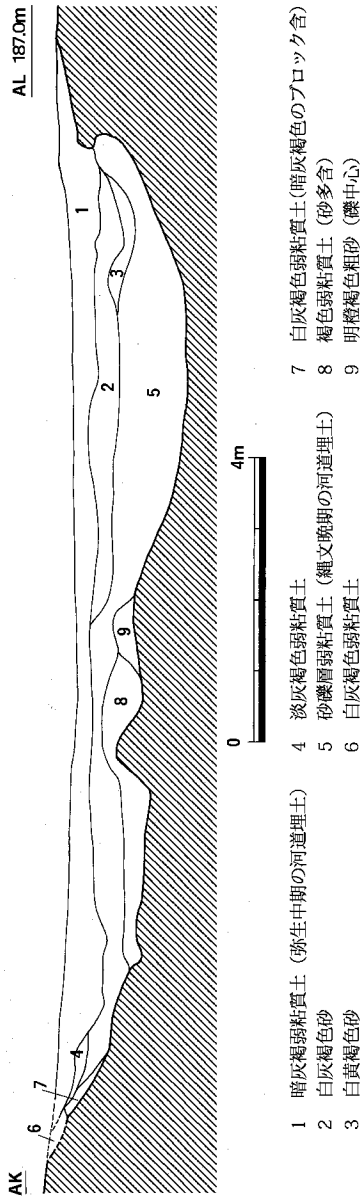
- 1 灰黄褐色粘性微砂(Fe混)
- 2 黒褐色粘性粗砂(暗褐色粘性細砂、上部に混)
- 3 黒褐色粘性細砂(Fe、褐色粘質土、少礫混)
- 4 黒褐色弱粘性細砂(暗褐色粘性細砂、褐色細砂球状に混)
- 5 暗褐色粗砂
- 6 暗褐色粘性細砂(褐色粘性細砂混)
- 7 黄褐色細砂(所により礫混)
- 8 黒褐色粘性細砂
- 9 暗褐色弱粘性細砂(砂礫混)
- 10 暗褐色粘性細砂(礫混、褐色細砂球状に混)
- 11 灰黄褐色粘性粗砂(Fe混)
- 12 鈍黄褐色粘性粗砂(Fe、黒褐色粘性細砂混)
- 13 黒褐色粘性細砂(Fe沈着)
- 14 黒色粘性微砂
- 15 暗褐色粘性細砂
- 16 黄褐色細砂

第358図 河道7上流部② (1/100)



- 1 黒色砂質土
- 2 黒色砂質土 (1より若干明るい)
- 3 黒褐色砂質土~黒色砂質土
- 4 黒褐色砂質土 (溝14埋土)
- 5 黒褐色砂質土 (4より明るい) (溝14埋土)
- 6 黒褐色砂質土~黒色砂質土 (3より明るめ) (溝14埋土)
- 7 鈍黄褐色砂質土 (粗砂混・6層混) (溝14埋土)
- 8 黒褐色砂質土 (3より明るめ) (砂粒粗)
- 9 鈍黄褐色砂質土 (砂粒粗)
- 10 褐灰色砂質土
- 11 黒褐色砂質土 (8より若干暗め)
- 12 鈍黄褐色砂質土 (粗砂混・1~5cmの小石混・10層混)
- 13 暗褐色砂質土 (黒褐色混) (溝13埋土)
- 14 暗灰色砂質土
- 15 明黄褐色砂質土
- 16 暗褐色砂質土 (淡い)
- 17 褐色砂質土
- 18 暗褐色砂質土 (暗い)
- 19 灰黄褐色微砂
- 20 橙色粗砂
- 21 浅黄褐色砂質土 (1~20cmの礫多含・黒褐色粘質土ブロック混)

第359図 河道7中流部① (1/60)



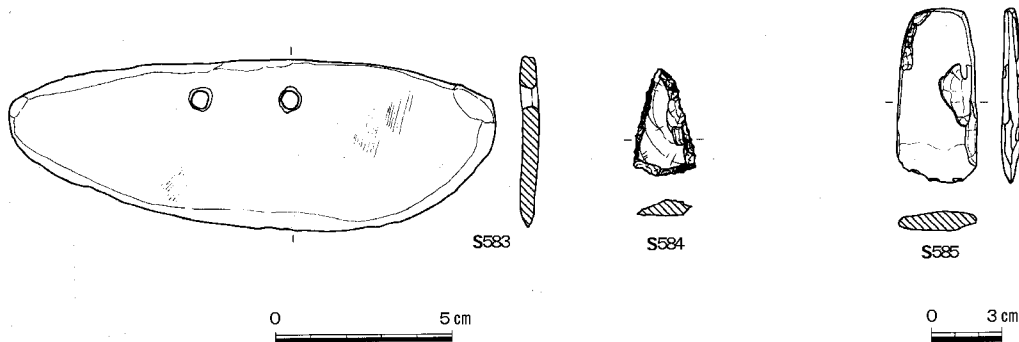
第360図 河道7中流部② (1/100)

河道7中流部 (第280~282・359~362図、図版56・68・83)

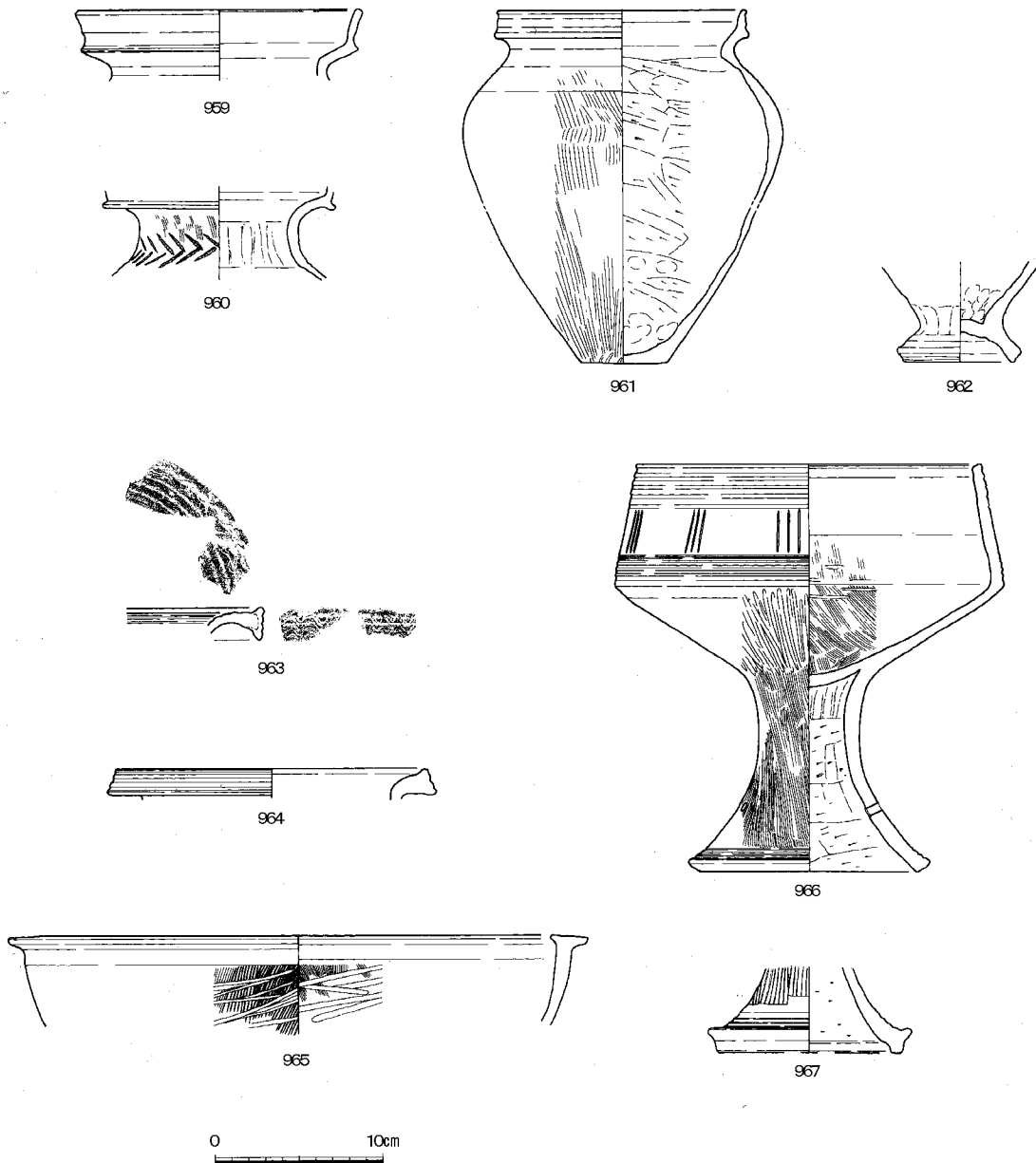
4 0 0 4 C 区から4 2 0 0 C j区にかけての河道7中流部は、中期後葉の住居や土壙が密に検出された地点に隣接した箇所である。ここでは北西方向から南東方向に向かって河道が流れている。当地点においても下層では縄文時代晩期の河道が検出されており、またその上層は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての洪水砂によって、埋土が一部削られている。

出土遺物は、石器としては磨製の石包丁S583のほか、石鏃S584や磨製石斧S585が認められるが、いずれも後述する中期後葉の土器が出土する中層からの出土である。土器では、上層から後期後葉の壺959、後期前葉の甕961などが、中層から後期前葉の壺960、台付鉢の可能性のある962と中期後葉の壺963、甕964、大型鉢965、高杯966・967などがそれぞれ出土している。959はその上層の洪水砂に含まれる可能性が高い。960は頸部外面に矢羽根状のハケ刺突文を施す。961は内面のケズリが頸部まで届いていることや口縁部の形態などから、後期前葉でも新しく、960も同様である。963は広口壺の口縁部であり、下流部の971のような胴部形態を有する。966は、受け部に5条の凹線文と3つ1単位のへら描文と6条の凹線文の組み合わせが認められる。3つ1単位のへら描文は8方向に巡るものと推定される。脚部には、3方向に円形の透かしが認められる。

土器などから河道7は中期後葉の段階には流れており、後期前葉には埋まりつつあったものと考えられる。ちなみに中期後葉の遺物の中でも残りのよいものは隣接する集落から投棄された可能性が高い。(河合)



第361図 河道7中流部出土遺物① (1/2,1/3)



第362図 河道7中流部出土遺物② (1/4)

河道7下流部 (第283・363・364図、図版55・69・76・77・83)

北西方向から南東方向に流れていた河道7は、下流部に至って一度ほぼ真南に流れ、調査区境付近で再び南東方向に進む。この河道7は、上層部を弥生後期終末から古墳前期初頭の洪水砂に削られているため、確実な深さは不明だが、確認面からは1.8m前後になる。断面形状は、確認した地点ではⅢaの形態になる。切り合い関係では、溝16を切り、後期前半の溝15に切られる。この河道7の時期は、後述する遺物から考えて、弥生中期の全期間に存在したものとする。

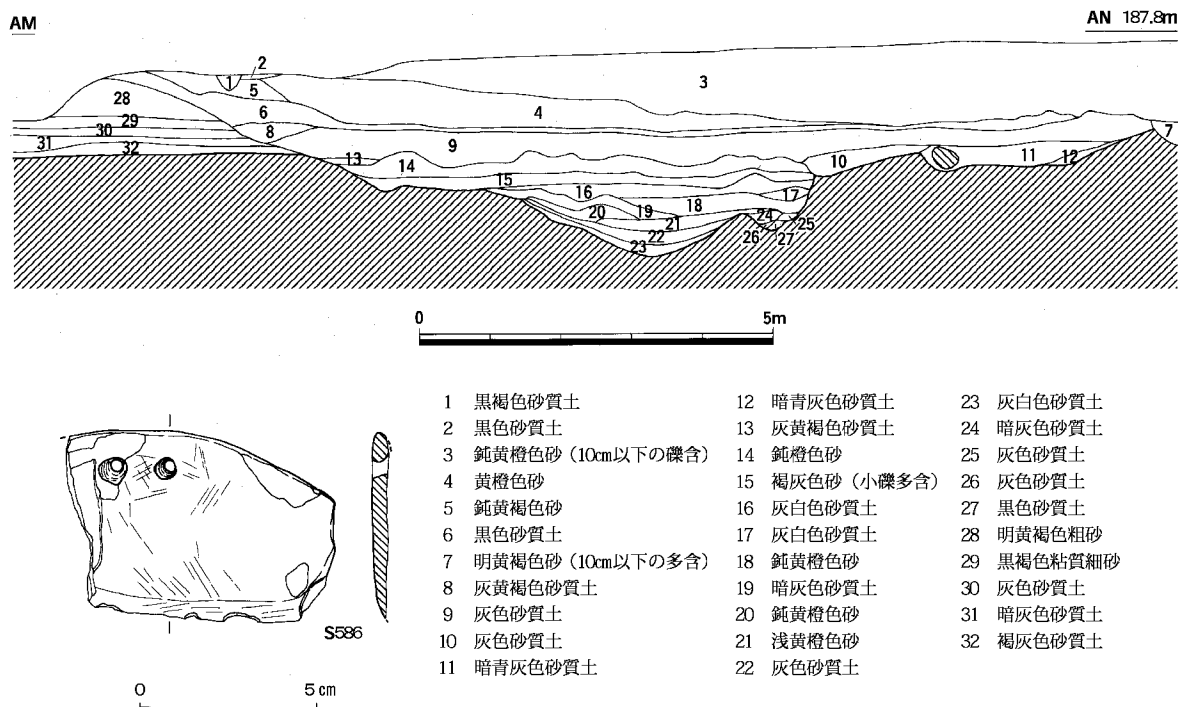
出土遺物には以下のものがある。S586は磨製石庖丁であり、破片ではあるが直線刃半月形であり、弥生時代中期の形態である。土器は968～975などがあり、弥生中期前葉から弥生中期後葉のものが主



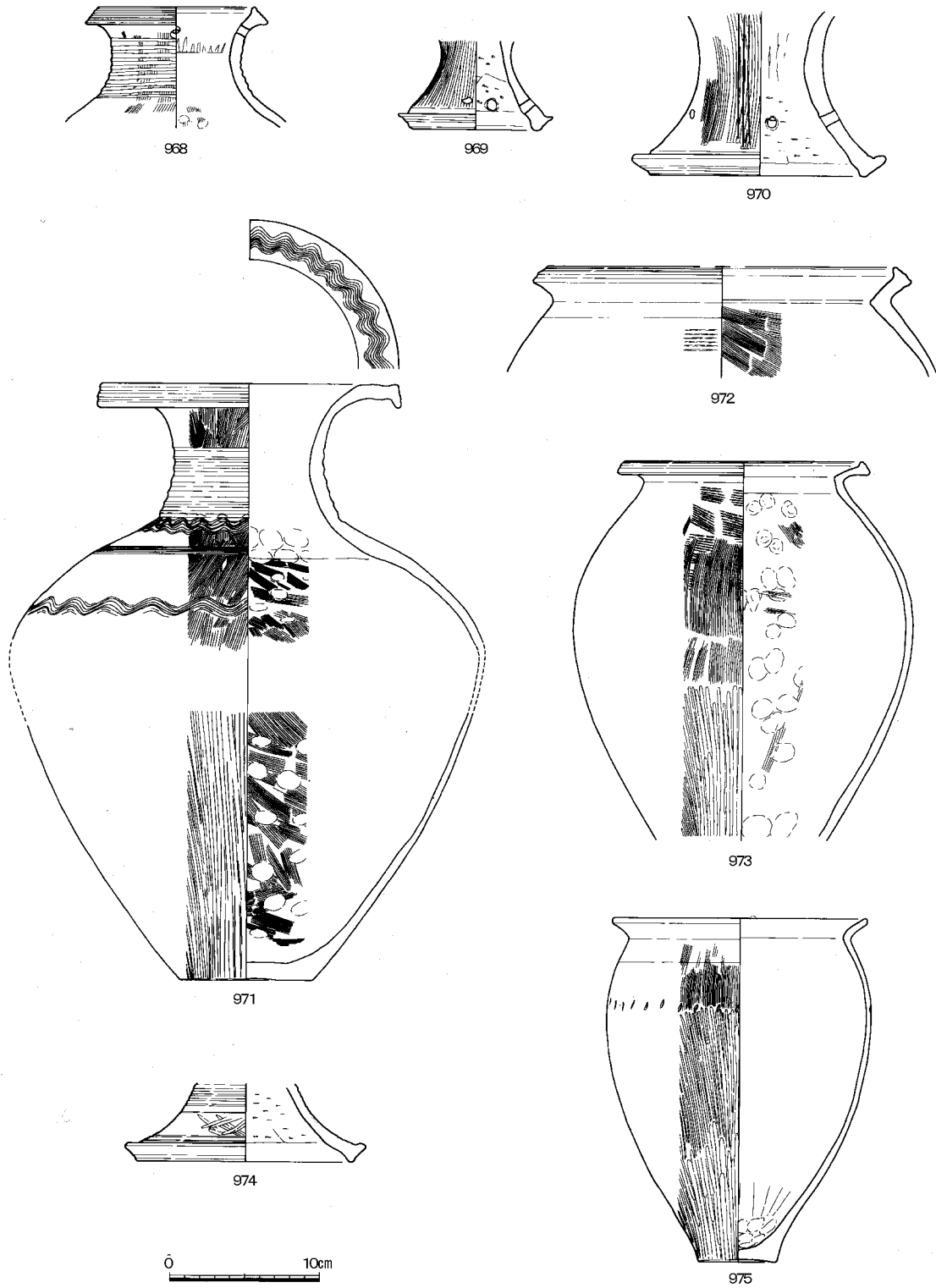
第3章 発掘調査の概要

体である。このうち975は甕であるが、胴部上半部までヘラミガキがあり、胴部最大径付近には列点文が施される。中期中葉まで遡ると思われる、下流部出土土器の中では最も古い。971～974は中期後葉になり、971は壺、972・973は甕、974は高杯の脚部である。971は頸部に凹線文があり、口縁部内側・頸部直下・胴部最大径付近に波状文が施される。969・970は後期前葉で高杯の脚部である。968は壺であるが、頸部に深めの沈線が施される。頸部上方には円孔が開けられる。時期は後期前葉になる可能性が高い。出土層位は第363図の8層と9層の間で、8層が溝15になるため、紛れ込みの可能性もある。

この河道7の下流部で注目されることの一つには、西側に近接する水田1との切り合い関係がある。この関係を第363図の層名で説明する。確実に河道7になる層は14～23層で、9・13層まで入る可能性がある。水田層は29層であるので、両者間には直接的に切り合い関係が存在しない。水田層29層の直上には洪水砂28層が存在し、間層が存在しない。洪水砂28層は6・8層の溝15によって切られ、さらに洪水砂3・4層によって切られている。当初洪水砂28層は洪水砂3・4層と同一のものと考えていたが、両者の間に溝15が存在するなど、別の時期のものであることが明らかとなった。ただ河道7下流部付近では、洪水砂28層の時期を確定できる出土遺物は存在しなかった。地点は違うが上・中流部には遺物が出土しており、これから弥生中期中葉であることが判明した。つまり水田1は、中期後葉の洪水砂によって埋まったものと考えられる。洪水砂と水田層に間層がなかったことから、水田は中期後葉に存在していたものと思われる。水田の時期は前述したとおり中期後葉になると判断する。水田層と河道7は、断面図付近では確実な切り合い関係はないが、水田1を中期後葉とすると、河道7は水田の存在していた時期に近接して流れていたことになる。つまり当時水田1と河道7は共存しており、水田の東端は河道7までで、それより東側には延びていなかったことになる。(小林)



第363図 河道7下流部 (1/100)・出土遺物① (1/2)



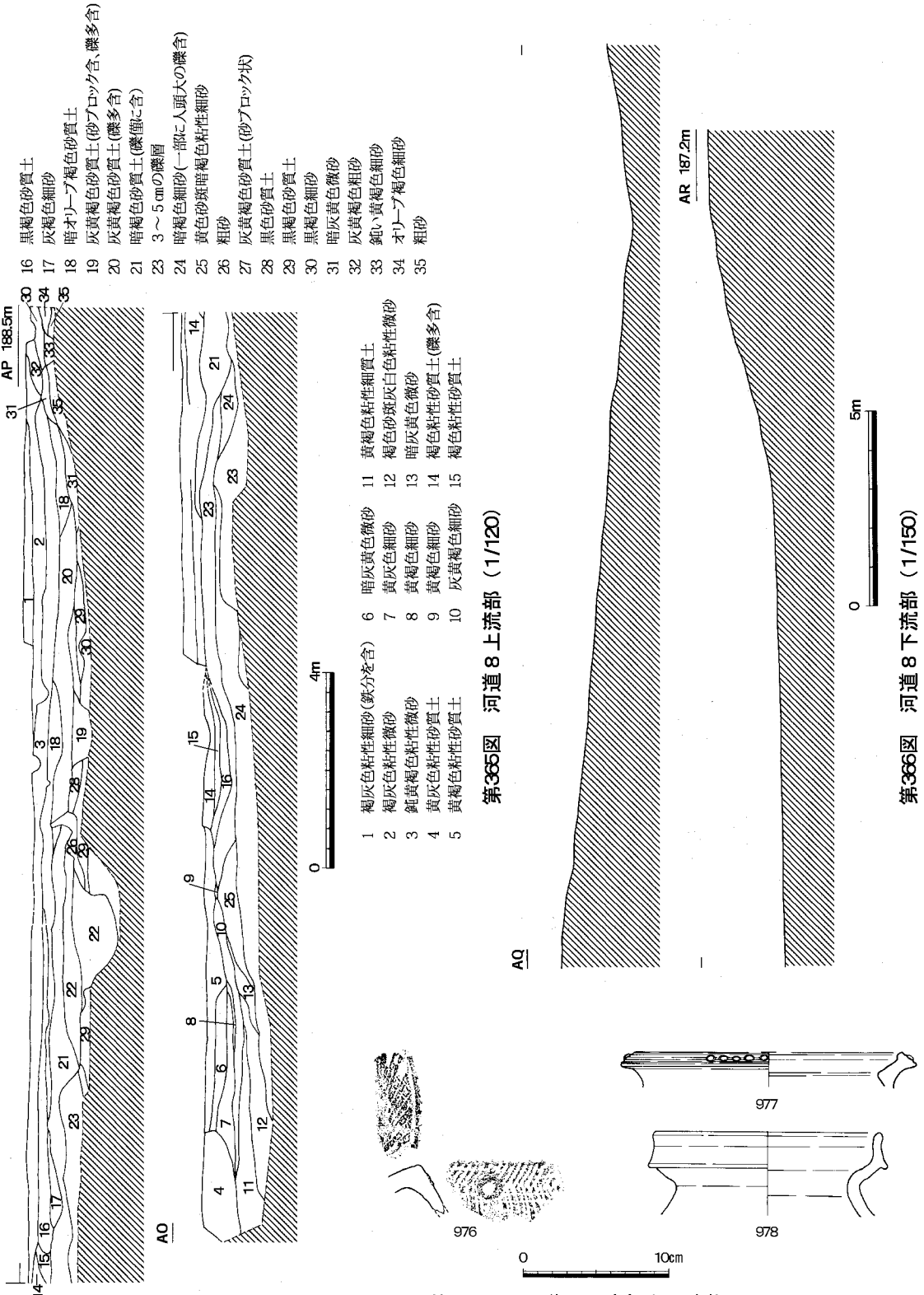
第364図 河道7下流部出土遺物② (1/4)

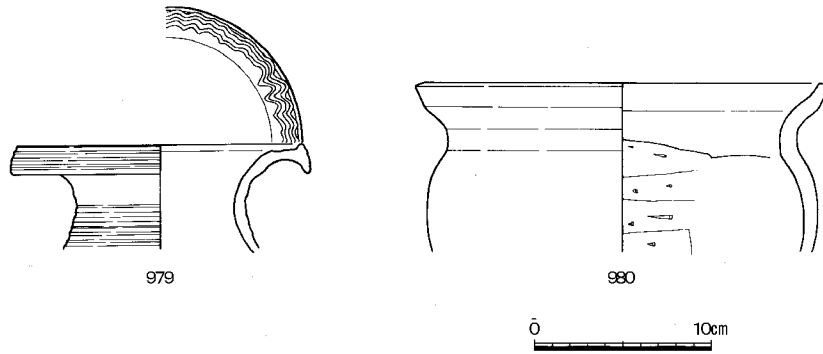
河道8 (第283・285・286・365~368図、図版69・77)

遺跡の西端を画し、縄文時代から踏襲された河道である。第365図の第7・10層は礫層で、遺跡西半では微高地上を覆い、河道斜面部にかけてもみられた。この礫層は、弥生時代末の洪水砂層とは異なる

第3章 発掘調査の概要

るが、間層を挟まなかったことから河道8の調査まで、下層遺構の時期を巡って混乱をきたした。河道10の下層で、微高地から連続して堆積する第7・10層中から壺976が出土したこと、その下に弥生土器を含む層や突帯文を含む黒色土が存在したことから中期の洪水層と考えている。(弘田)

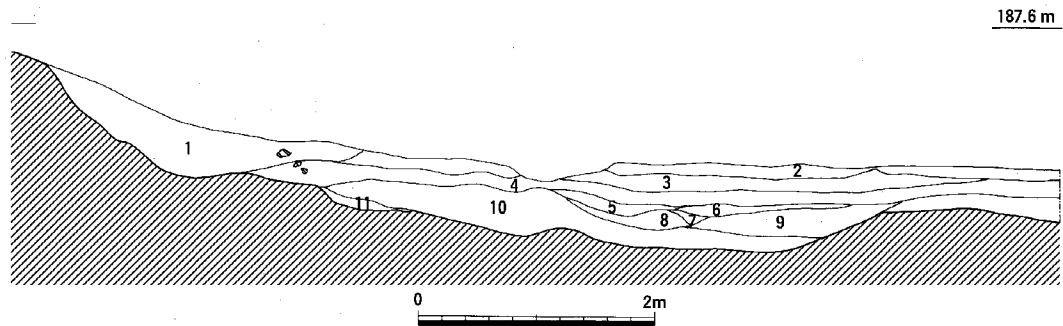




第368図 河道8下流部出土遺物 (1/4)

河道9 (第282~284・369図、図版69)

4 1 05 Dc~ 4 1 09 Db区において検出した。微高地の東端を挟るように流れた河道で、東側の端は確認できていないが、おそらく東に存在する丘陵裾部まで及んでいるのではないかと推測できる。検出できた深さは微高地面から約1.8mを測る。時期は、出土した少量の土器からは弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられるが明確ではない。S587・588は縄文時代の混入品であろう。(平井)



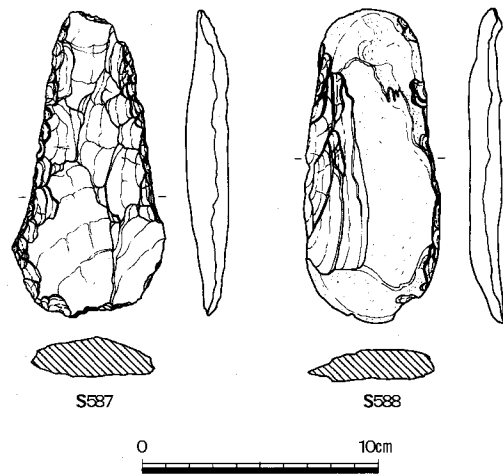
- 1 黄灰色砂質土
- 2 褐灰色砂質土
- 3 黄灰色砂質土
- 4 灰色砂質土
- 5 灰黄色砂質土
- 6 黄灰色砂質土
- 7 灰色砂質土 (粘質土を少々含)
- 8 暗灰色砂質土 (粘性土含)
- 9 灰色砂質土 (1mm程の砂を含)
- 10 灰オリーブ色砂質土
- 11 灰色砂質土

10 洪水砂関連遺物

洪水砂関連遺物 (第370図、図版70・78)

久田堀ノ内遺跡は久田原遺跡と同じく、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての大洪水に襲われていた。ここでは遺物の検討を行い、洪水の時期について考えてみたい。

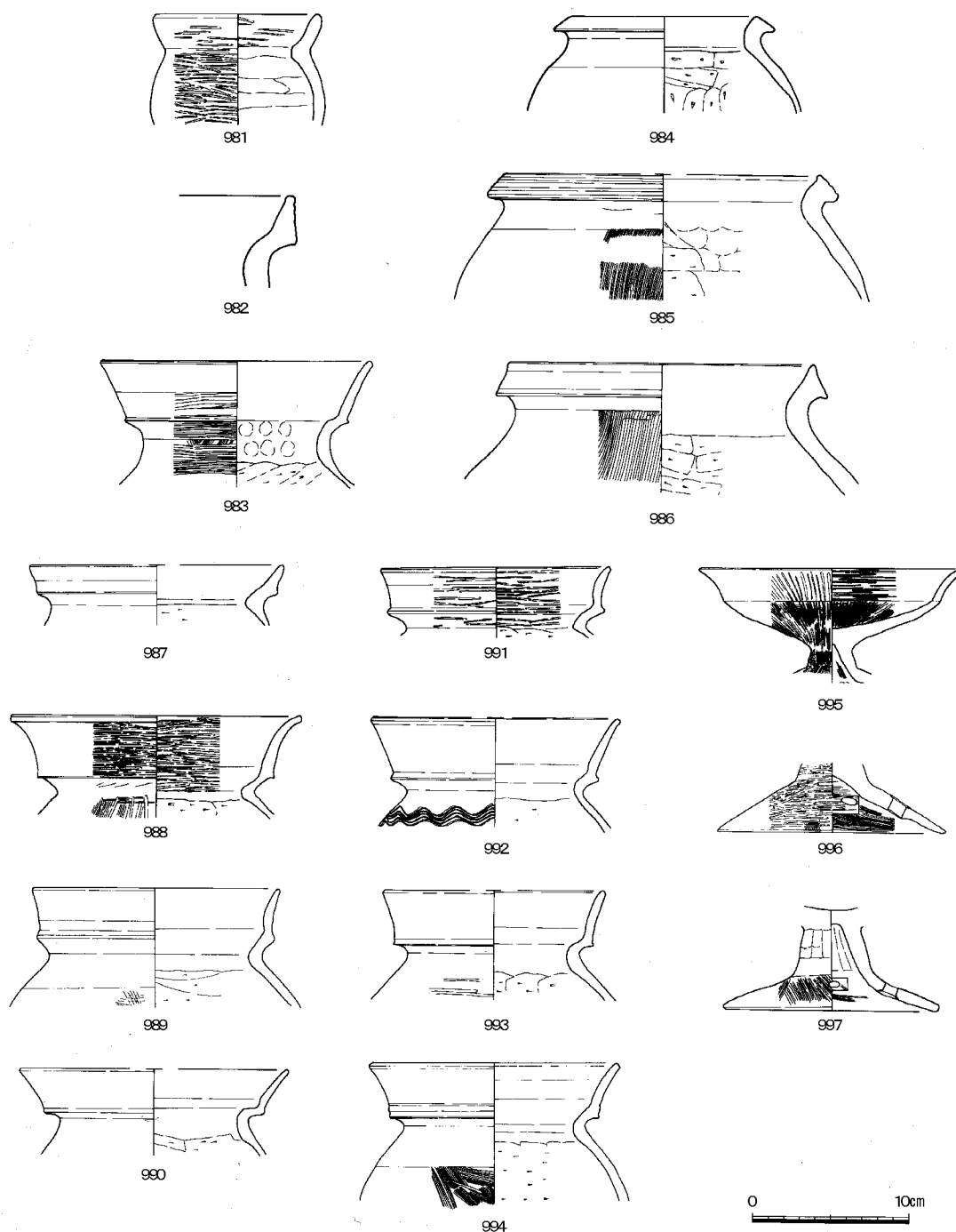
ここで掲載した遺物は全て洪水砂中から出土し、調査区全体から出土している。981~983は壺、984~994は甕、995~997は高杯である。土器の中



第369図 河道9 (1/60)・出土遺物 (1/3)

第3章 発掘調査の概要

には甕984~986のように後期前葉のものも含まれるが、壺983、甕992~994、高杯996のように、弥生時代終末期のものが含まれる。これらから洪水の時期は弥生時代終末期~古墳時代初頭、中でも後者に入ってから起こったものと考えられるが、古墳時代初頭の土器(997)が弥生時代終末期のものに比べて少ないことや時期的に古墳時代初頭以降の土器を含まないことなどから古墳時代に入ってからまもなく大洪水が発生したと考えられる。(河合)



第370図 洪水砂関連遺物(1/4)

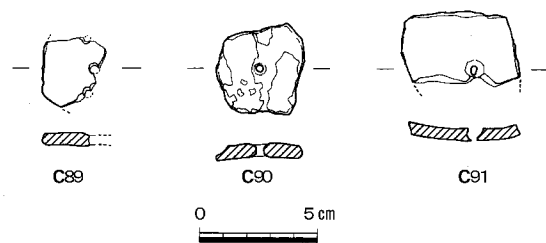
## 11 住居跡群周辺出土遺物

住居跡群周辺出土遺物（第371～376図、図版83・84）

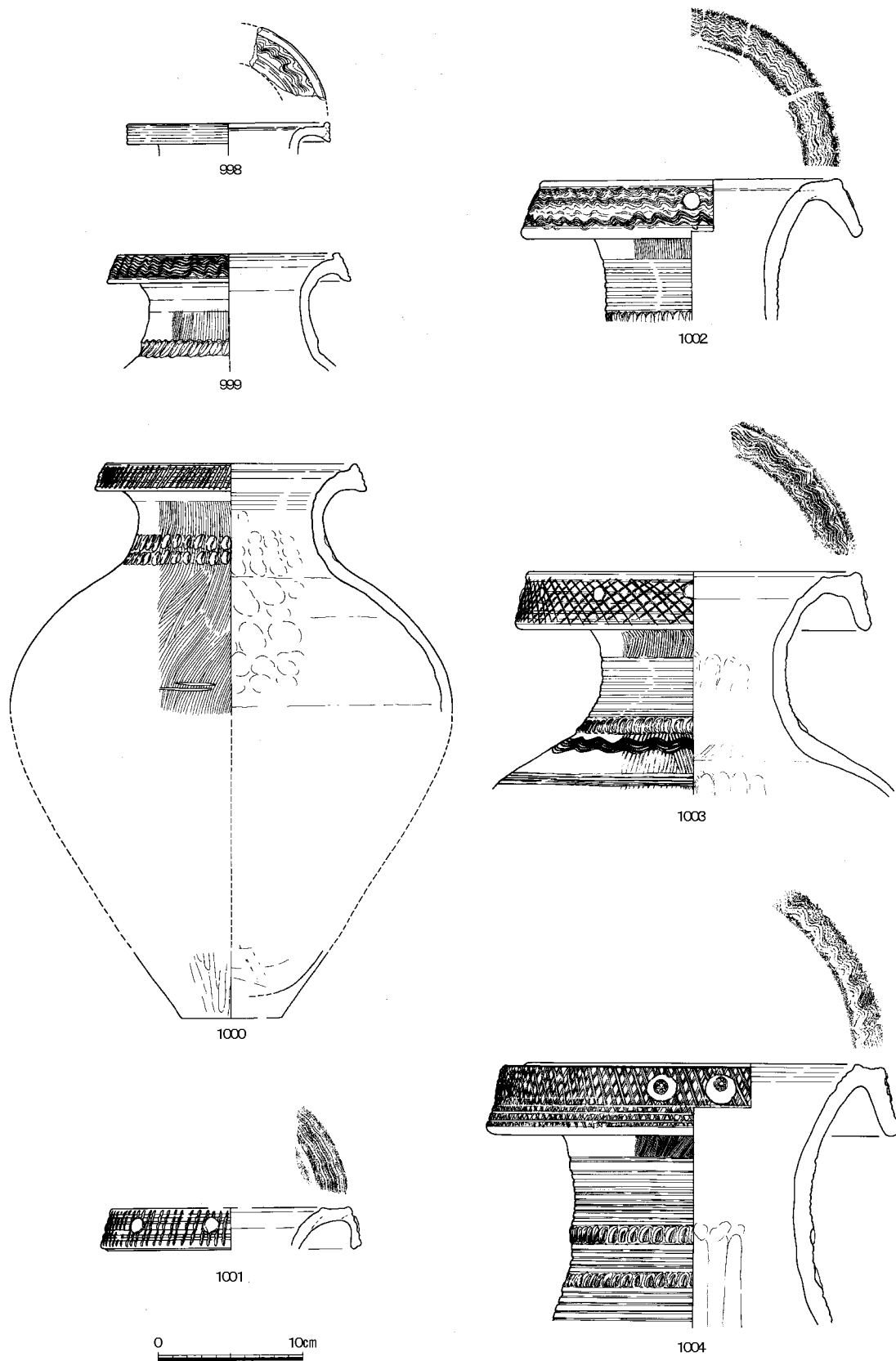
竪穴住居3～12を中心とした地点の包含層から弥生土器や石器、土製品が多く出土している。土器は弥生中期後葉に比定することができ、住居群の時期と符号する。そのためこれらの遺物と住居群には関連性をうかがうことができる。以下に遺物について報告する。

998～1034は弥生土器である。998～1012は壺である。998～1000は口縁端部を上下に引き出しており、そこに凹線文を施している。999は凹線文の上に波状文を、1000は連続刺突文を施している。998は口縁内面に波状文を施していた。1001～1005は口縁端部を大きく垂下させており、そこに凹線文を施していた。凹線文の上には連続刺突文（1001）、波状文（1002）、格子文（1003、1004）を施し、いずれもその上に円形浮文を貼り付けていた。口縁部上端には波状文（1001～1004）、格子文+円形浮文（1005）をそれぞれ施していた。頸部は凹線文を巡らせており、1005はその上から棒状浮文を貼り付けていた。1006～1012は口縁端部を上下に引き出す短頸の壺である。いずれも口縁短部には凹線文を巡らせており、1006、1007には円形浮文を貼り付けていた。また1009には連続刺突文を施している。頸部から肩部にかけては、1009、1010では格子文が施してあり、1001は波状文と格子文の組み合わせ、1012は波状文が2条巡っていた。1012は肩が強く張り出している。体部外面下半はミガキであり、内面下半はヘラケズリである。1014～1021は甕である。壺と比較して装飾性は乏しい。1016～1019は口縁端部を上方に引き出し、1020・1021は上下に引き出していた。口縁端部にはいずれも凹線文を巡らせていた。1023～1028は高杯である。1023は罌形高杯の杯部であり、内外ともに磨いている。1024の口縁端部は内外に引き出していた。内外面ともに横位のヘラミガキを施している。1025～1027の杯部はほぼ直角に屈曲する口縁部を持ち、1026・1027は口縁外面に凹線文を巡らせていた。1029～1032は高杯の脚部である。1029は円形の透かし穴があげられている。1027は円形の窪みがあり、穿孔はなされていない。1031には三角形の透かしが設定されているが、穿孔をなされていない。1033は注口付土器であるが、注口部は基部を除いて欠損していた。体部には斜格子文で充填した鋸歯文と凹線文を巡らせていた。体部外面下半には磨きを施しており、内面は上半を指押さえ、下半をハケメでそれぞれ調整していた。1034は器台である。口縁端部は大きく垂下しており、そこに鋸歯文と凹線文を巡らせている。鋸歯文は口縁部上端にも巡らせていた。いずれの鋸歯文も赤色顔料を塗彩していた。なお、鋸歯文は体部にも凹線文とともに巡らせている。

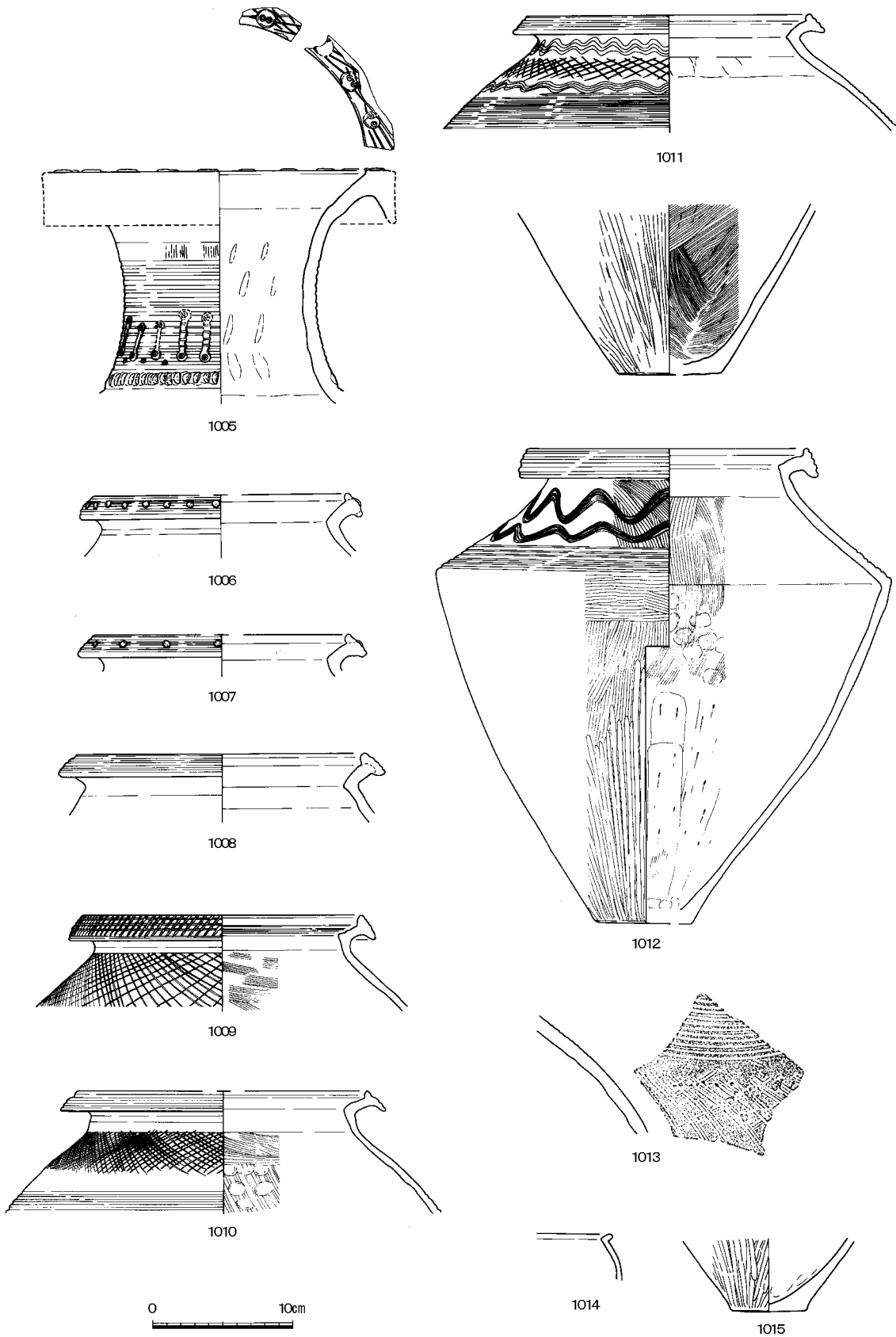
S589～596は石器である。S589～591は磨製石包丁であり、いずれも欠損していた。S592は穿孔の途中で破棄した石包丁の未製品である。S590・S592は敲打により穿孔部を薄くしており、S589・S591とは技法が異なっている。若干の時期差があるのかもしれない。S593は磨製石斧の未製品である。基部は大きく大きな剥離を施したのみであり、刃部は細かな剥離の後に磨きを行っている。S594は磨製石斧であり、基部を欠損していた。S596は砥石である。C89～91は土器を転用した紡錘車である。



第371図 住居跡群周辺出土遺物①（1/3）



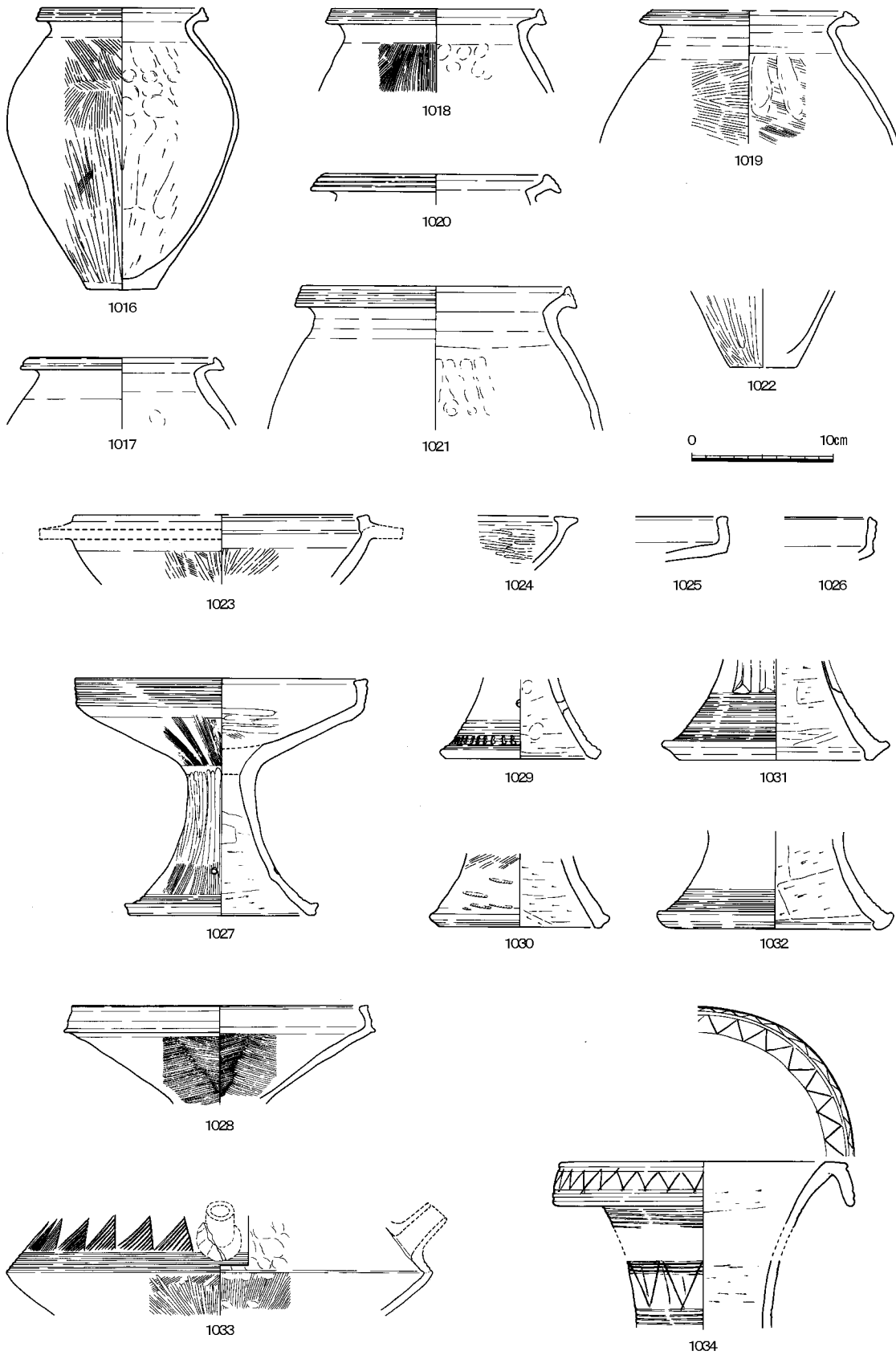
第372図 住居跡群周辺出土遺物② (1/4)



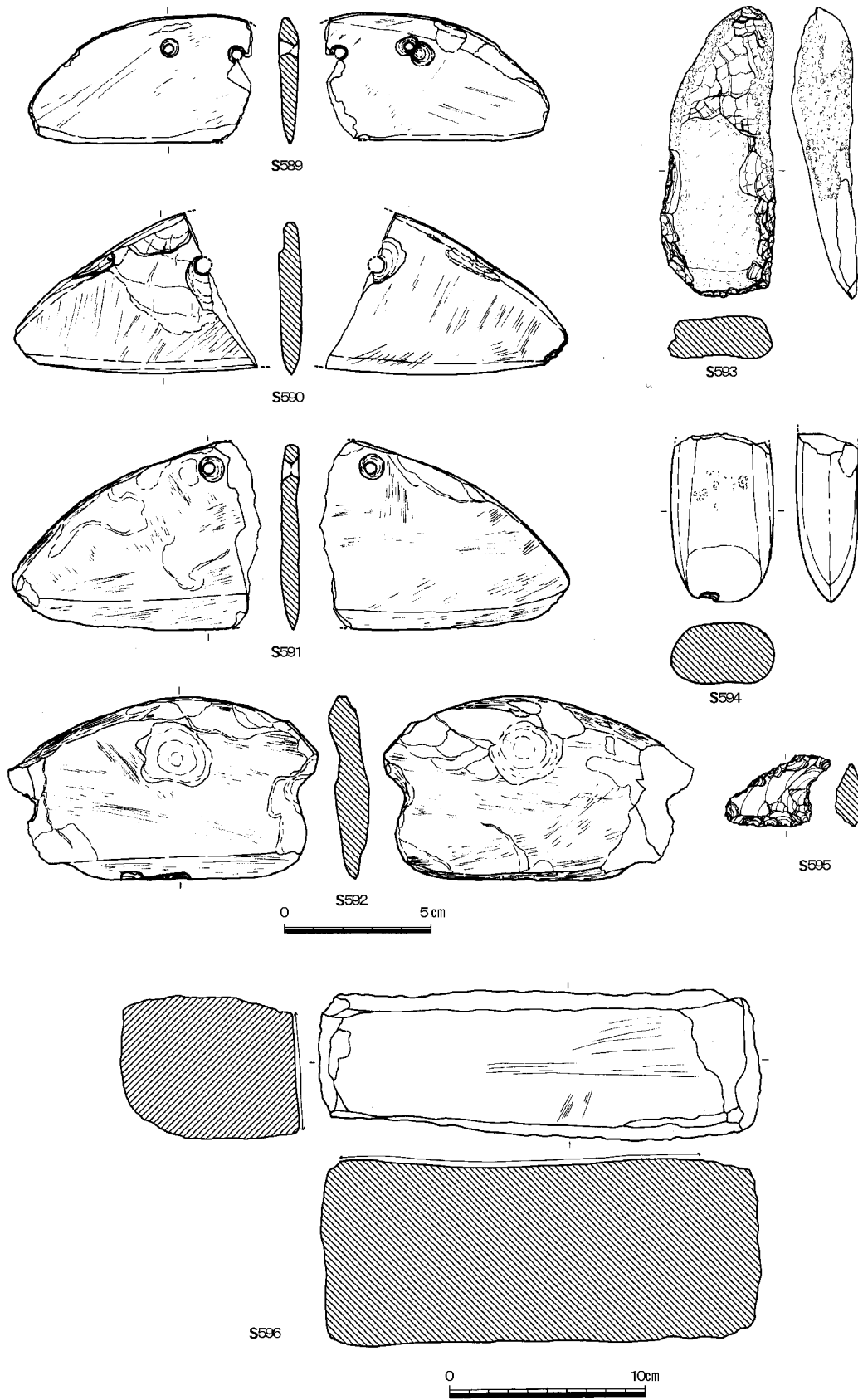
第373図 住居跡群周辺出土遺物③ (1/4)



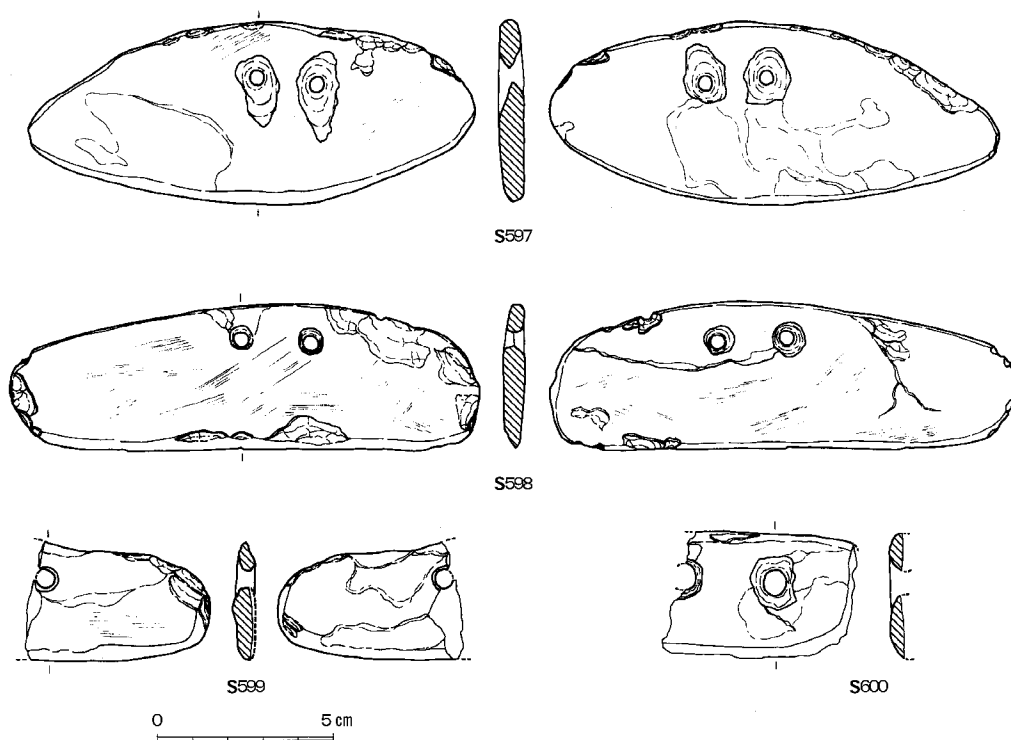
第3章 発掘調査の概要



第374図 住居跡群周辺出土遺物④ (1/4)



第375図 住居跡群周辺出土遺物⑤ (1/2,1/3)



第376図 住居跡群周辺出土遺物⑥ (1/2)

## 12 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第377～380図、図版78・80・84）

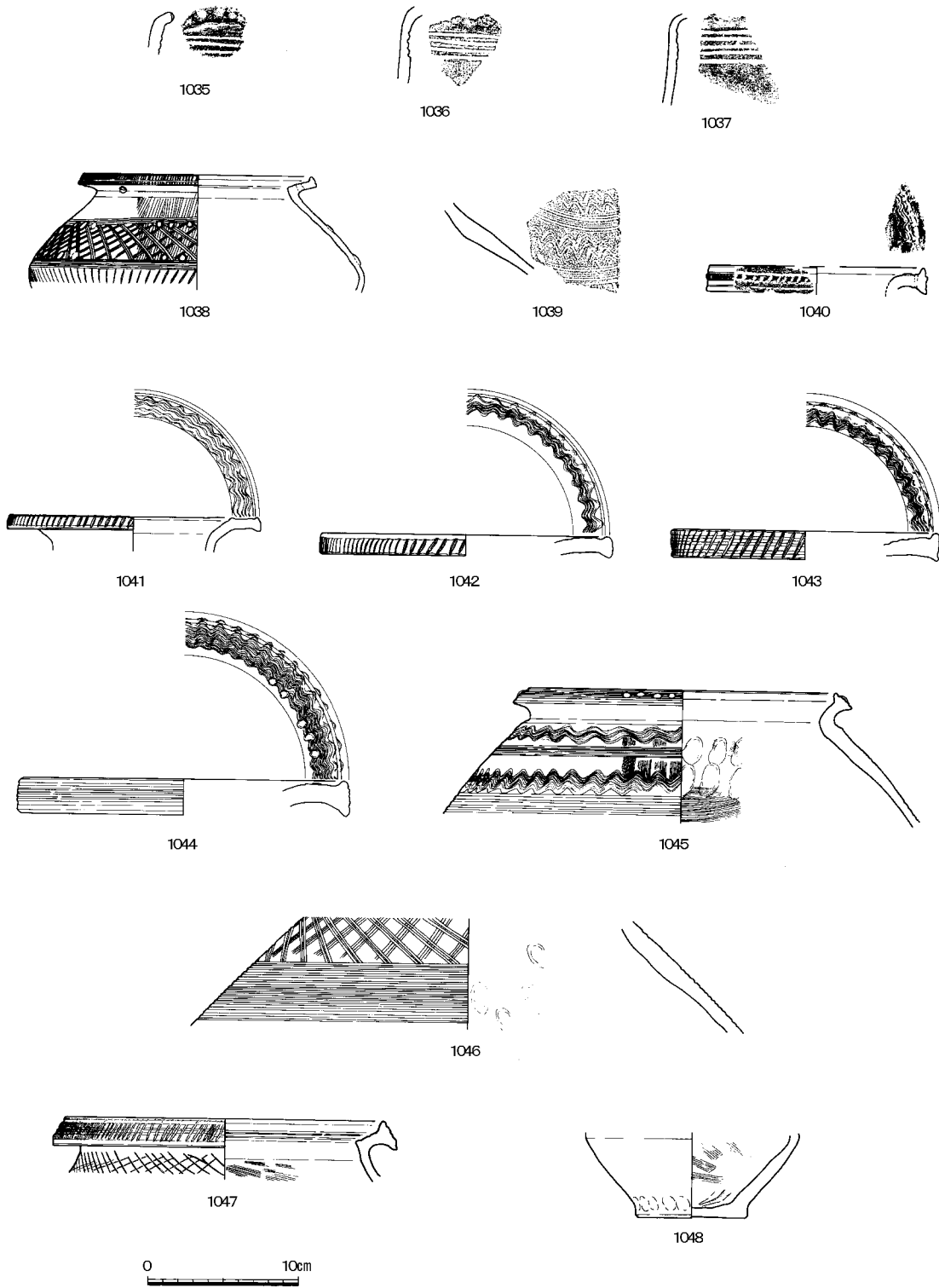
弥生時代の遺構に伴わない遺物については、遺構検出中に出土したものが多く存在する。そのうち、完形に近いものや特徴的と考えられるものを中心に図示している。

### 土器・土製品

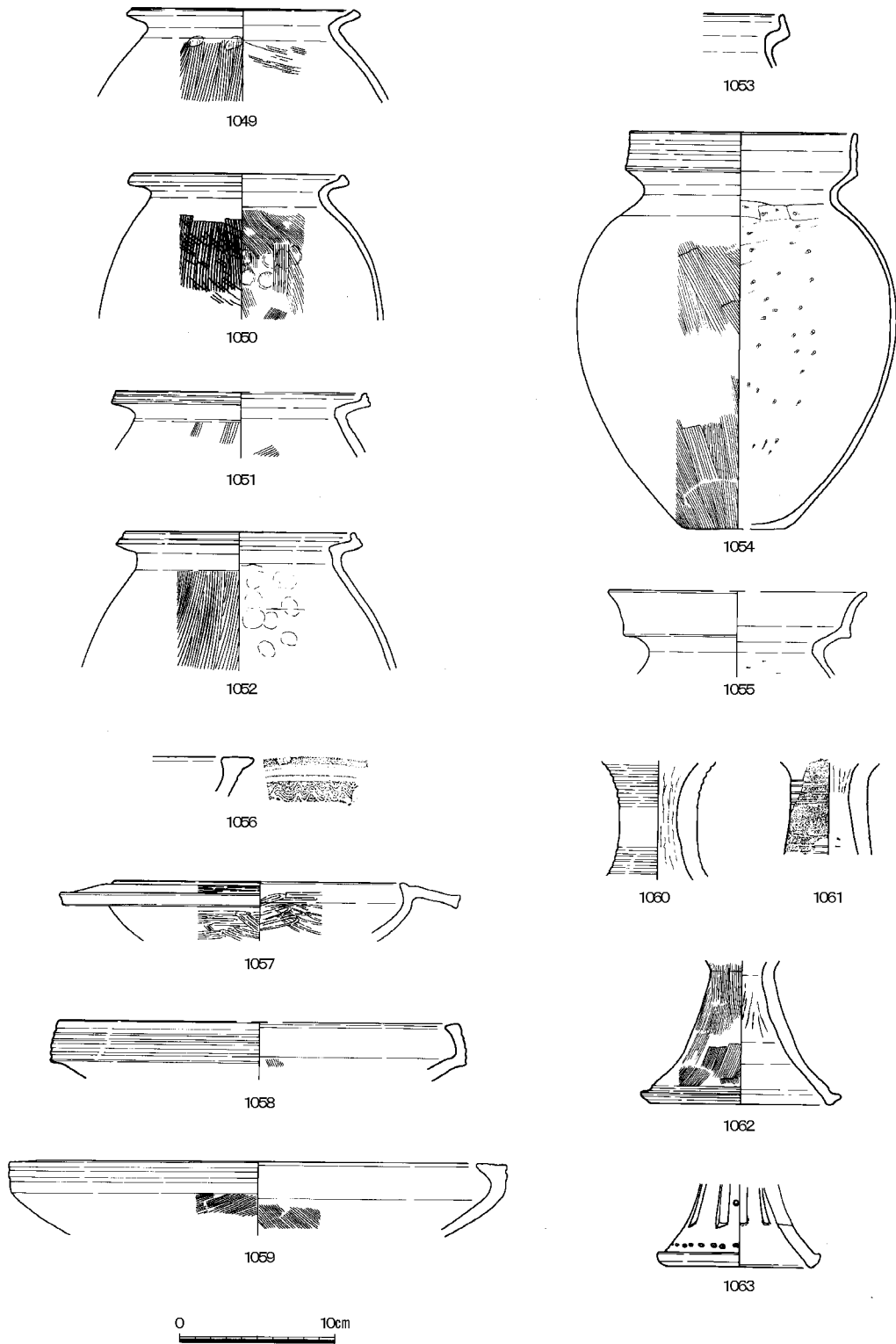
1035～1037は、前期の甕である。久田堀ノ内遺跡においては、前期の明瞭な遺構は確認できなかったため詳細は不明であるが、土器が確実に存在することから、何らかの遺構があったことを推測できる。

1038・1039・1049は、中期中葉の土器である。1038・1039は壺、1049は甕である。これらは、弥生時代終末期～古墳時代初頭頃の洪水によって大きく削平を受けた調査区の西側から出土しているものであり、当該期の遺構の存在を物語る。1038は、口縁部外面に連続刺突文を施した後に沈線を施している。胴部外面には櫛描直線文と斜格子文、列点文を施した後に円形浮文を貼り付けている。1039は、胴部外面に櫛描波状文と櫛描直線文を交互に施している。外面にはさらに稲粃の痕跡が確認できる。

1040～1047・1050～1052・1056～1065は、中期後葉の土器である。1040～1047は壺で、1050～1052は甕、1056～1063は高杯、1065・1066は台付鉢または鉢である。1040～1044は、広口壺の口縁部であり、口縁部内面には櫛描波状文を施している。口縁部外面には連続刺突文を施すもの（1041・1042）、凹線文と連続刺突文を組み合わせるもの（1040・1043）、凹線文を施すもの（1044）がある。甕1050の胴部外面には明瞭なタタキ痕が、胴部内面には指押さえ痕がそれぞれ観察できる。大型の台付鉢1064



第377図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第378図 遺構に伴わない遺物② (1/4)

の鉢部の外面にはヘラ描き斜格子文・凹線文・列点文が施されているが、これは、壺857などの文様構成と同様のものであり、器種の枠をこえた文様の共有が行われていることが注目される。壺1047もおそらく同様の文様構成を有するものと考えられる。高杯の脚部1061は、ヘラを用いて施文している。1063は、脚裾部外面に連続した竹管文を施し、長方形の透孔の間にも施す箇所がある。

1048・1053・1054は、後期に属する。1048は壺、1053・1054は甕である。1055は、終末期の甕である。

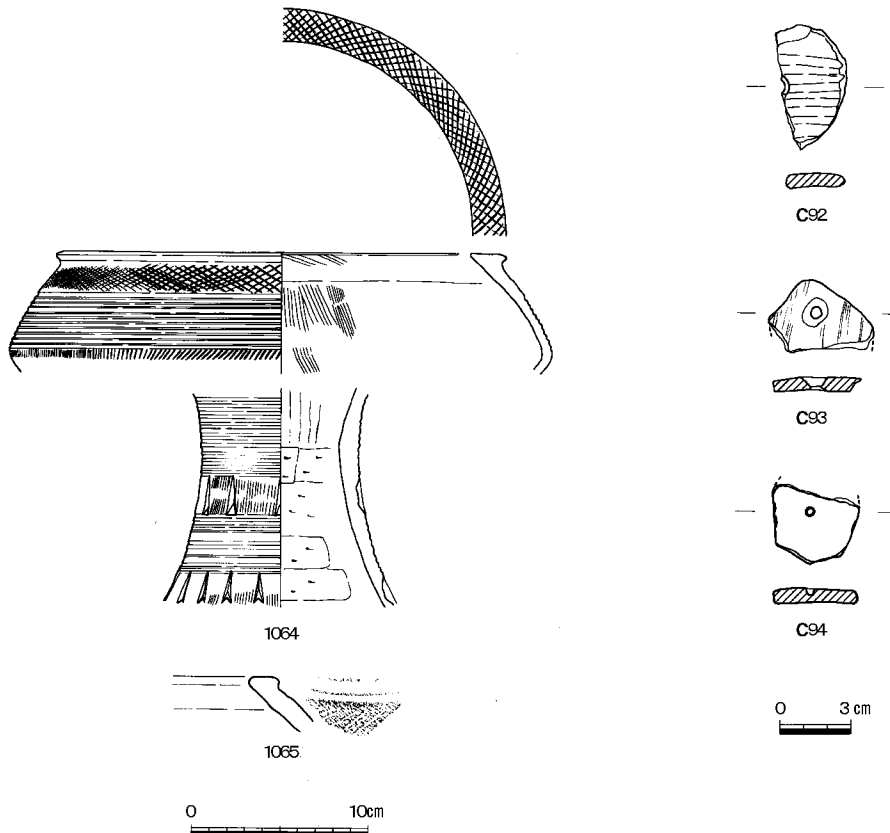
C92～94は、土器を転用した紡錘車である。出土位置から判断すると、C92が中期前葉～中葉に、C94が中期後葉に比定できる可能性がある。C93も、中期後葉に属する可能性を考えておきたい。

石製品

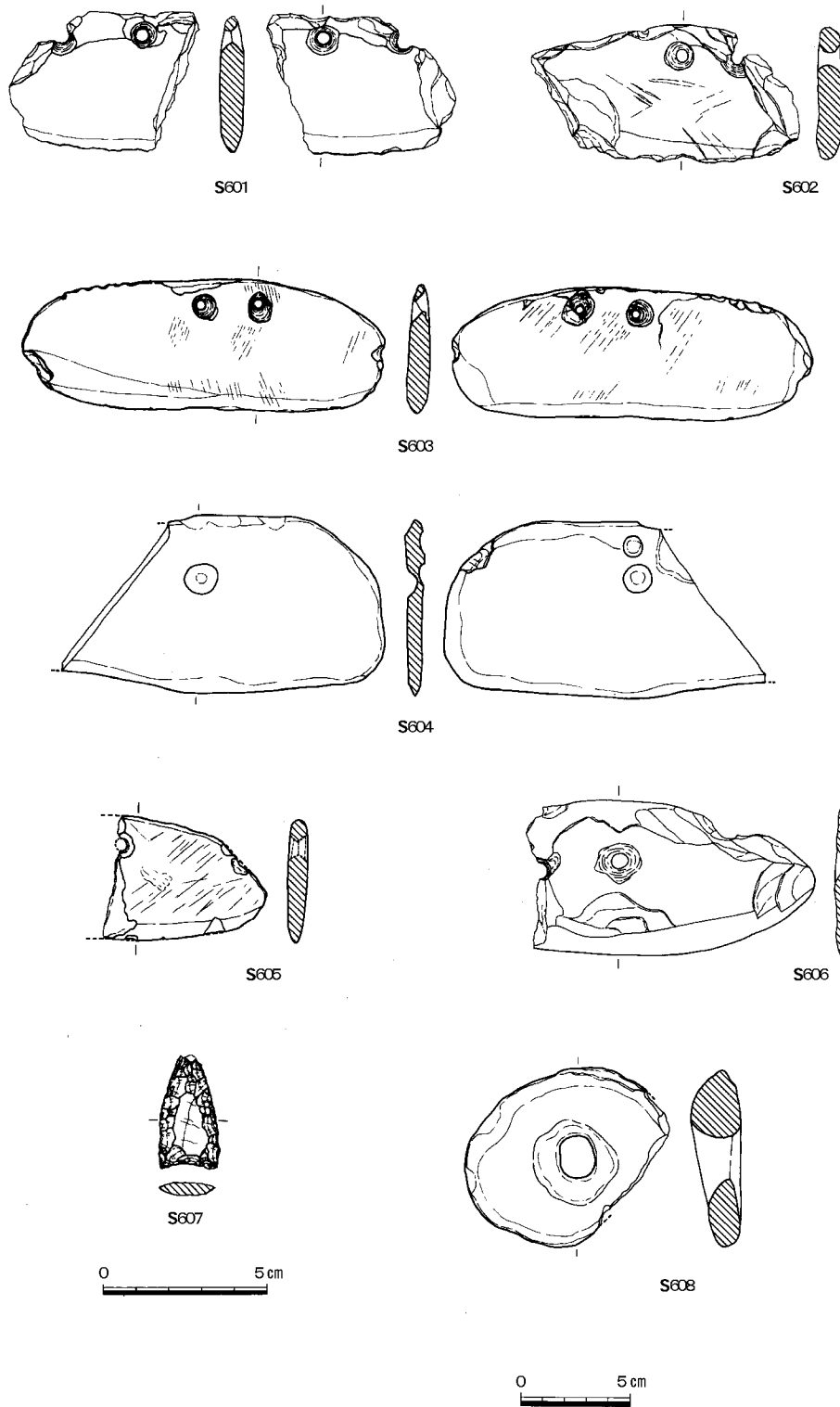
石製品は、ほとんどが中期後葉に属するものであるが、他の時期のものが含まれている可能性もある。S601～606は、流紋岩や緑色片岩製の磨製石包丁である。S603を除いて、欠損しているものがほとんどである。S604の紐孔は貫通していない。S603が直線的な刃部をもつ以外は、外湾傾向を示す刃部をもつものが多い。

S607は、サヌカイト製の石鏃である。先端を欠損しているものの現存長3.6 cmを測り、やや大型である。S608は、砂岩製の環状石斧である。調査区南東部から出土したもので、所属時期は不明である。

(河合)



第379図 遺構に伴わない遺物③ (1/4,1/3)



第380図 遺構に伴わない遺物④ (1/2,1/3)

## 第4節 古墳時代の遺構と遺物

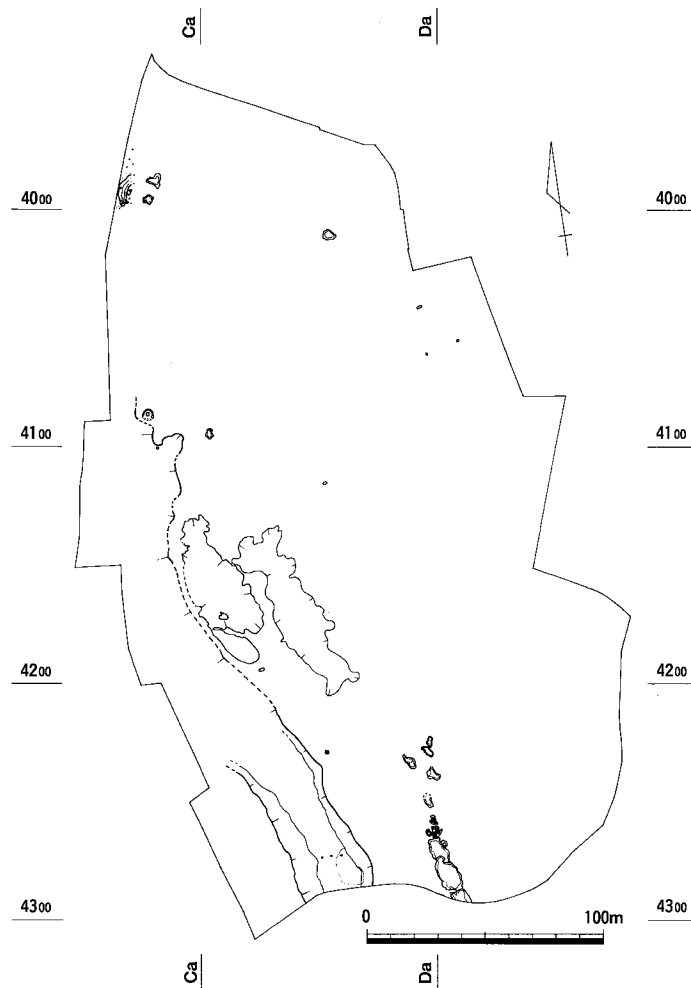
### 1 概要

古墳時代の遺構は希薄である。検出できた遺構は竪穴住居1軒、墓1基、土壙9基、火処、土取り跡、河道などである。遺構の時期としては、前期もあるが、多くは中後期に属するものである。

前期の遺構は竪穴住居1棟が検出されているのみである。前期でも後半期の遺構である。

中期の遺構は土壙数基が検出されているが、まとまって存在しているわけではなく、分布は散在的である。そのほか、土器溜まりにおいても中期の遺物を確認できる。

後期の遺構は墓1基、土壙数基、火処、土取り跡、土器溜まり、窪地などがある。墓は当遺跡においては1基のみの確認であるが、北に隣接する久田原古墳群と関連性をもつものと考えられる。土器溜まり11と一列に並ぶ火処75～77は河道10が埋まる過程において形成されたものであり、この両者が



第381図 古墳時代遺構全体図① (1/3,000)



第3章 発掘調査の概要

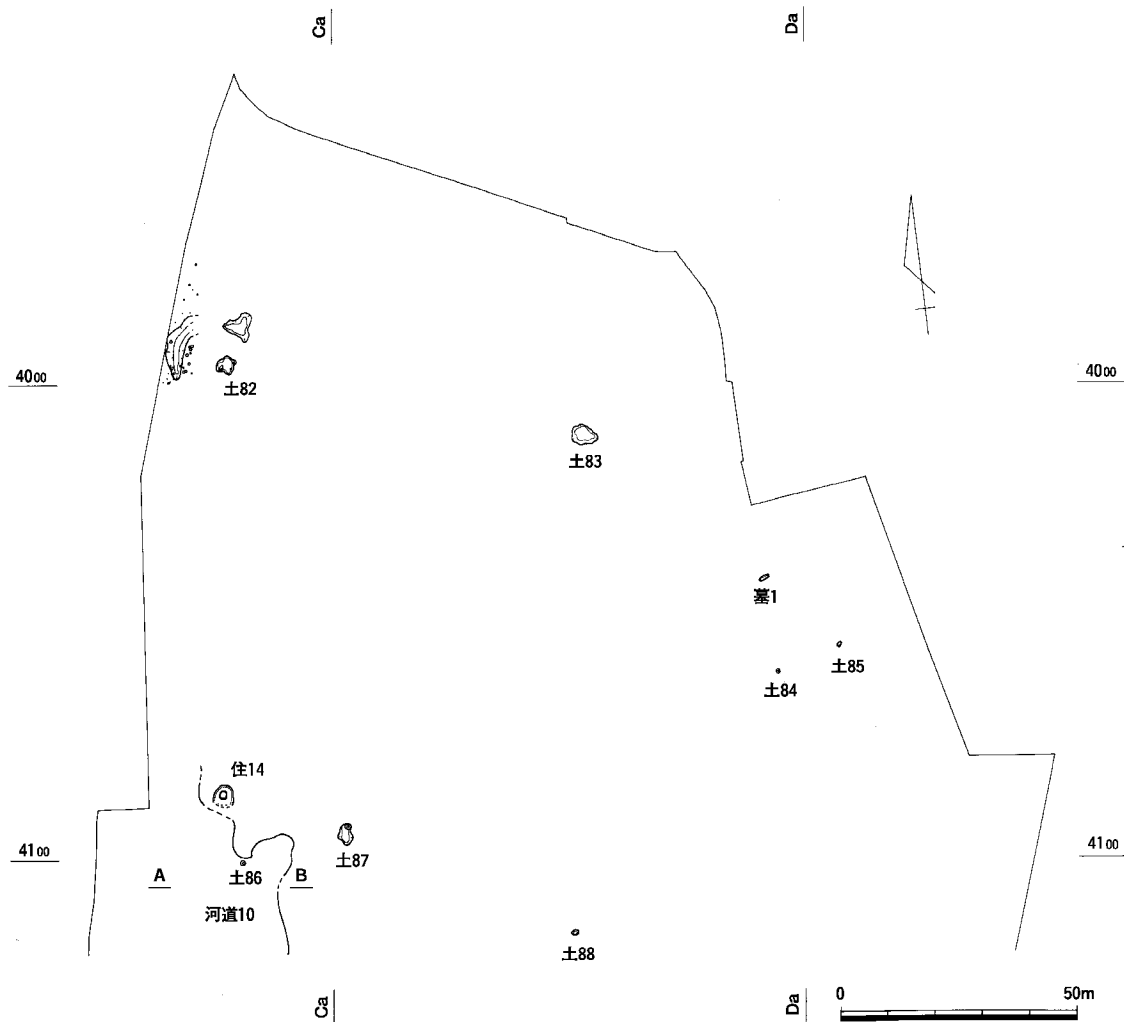
近接して存在していることや検出レベルが近いことなどから有機的な関係にある可能性が高い。窪地8は弥生時代の河道7が埋まっていく過程で形成された遺構であり、後期に属する土師器・須恵器のほか、鉄製鋤先と砥石が確認されている。土取り跡は2か所で検出されている。ともに全長約70m、幅20m以上、深さ約1mであり、かなり大型のものである。これは近接する久田原古墳群との関連性において注目される。両土取り跡で出土する遺物の時期が久田原古墳群のものと同時期であることや、久田原古墳群が厚い洪水砂が覆う平坦地上に築かれていることから、その盛土の供給の問題との関わりでその関連性を注目されるからである。

遺物としては、土師器・須恵器・土製品・石製品・鉄製品などが確認されている。

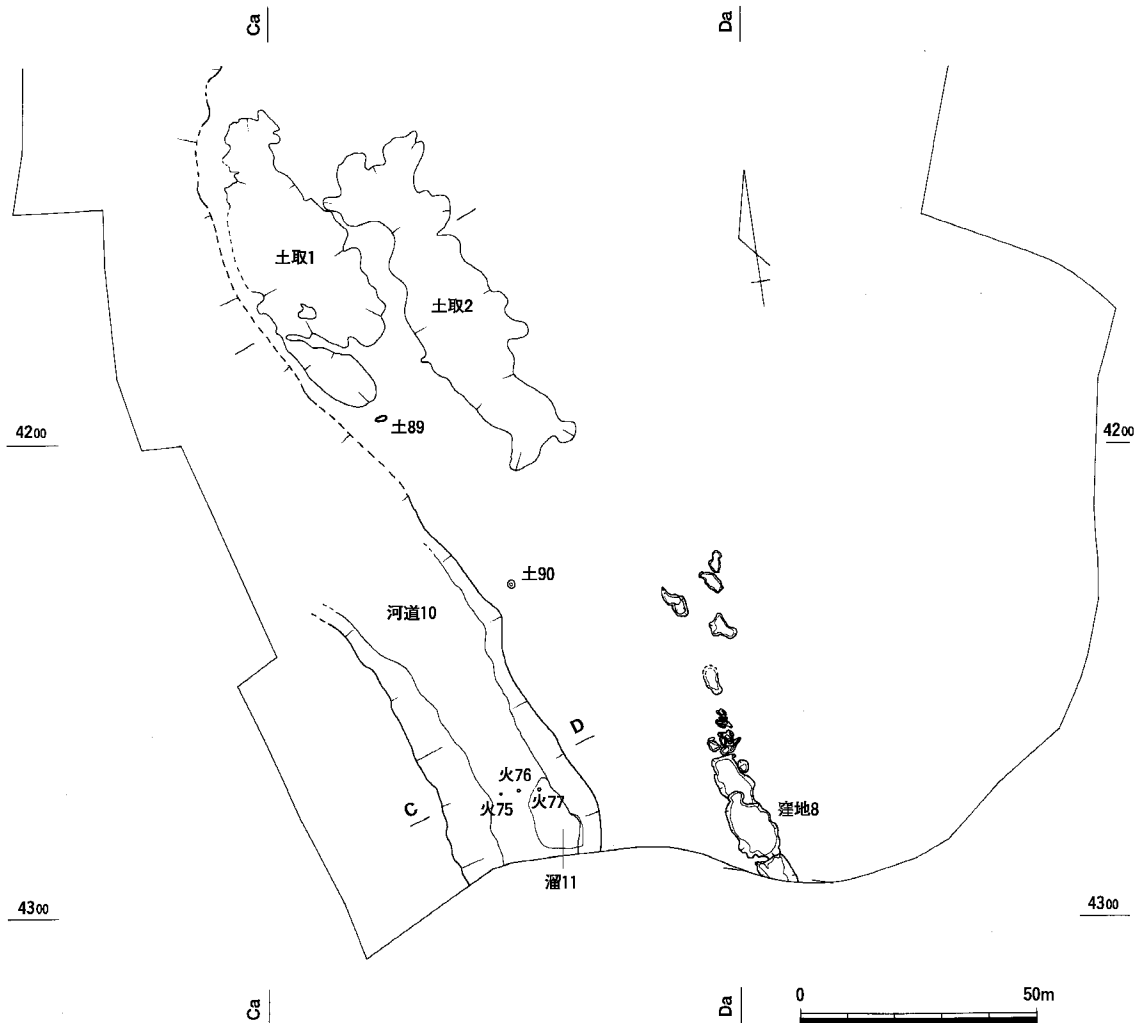
土師器としては、壺・甕・鉢・高杯・甕のほか手づくね土器も確認され、須恵器には杯・杯蓋・高杯・壺・甕が確認されている。時期的には中後期のものが多い。

土製品には鏡型土製品が、石製品には砥石がそれぞれ確認されている。

鉄製品としては、後期の墓1からまとまって検出された鉄鏃・刀子のほか、鋤先や鉄鎌なども確認されている。(河合)



第382図 古墳時代遺構全体図② (1/1,500)



第383図 古墳時代遺構全体図③ (1/1,500)

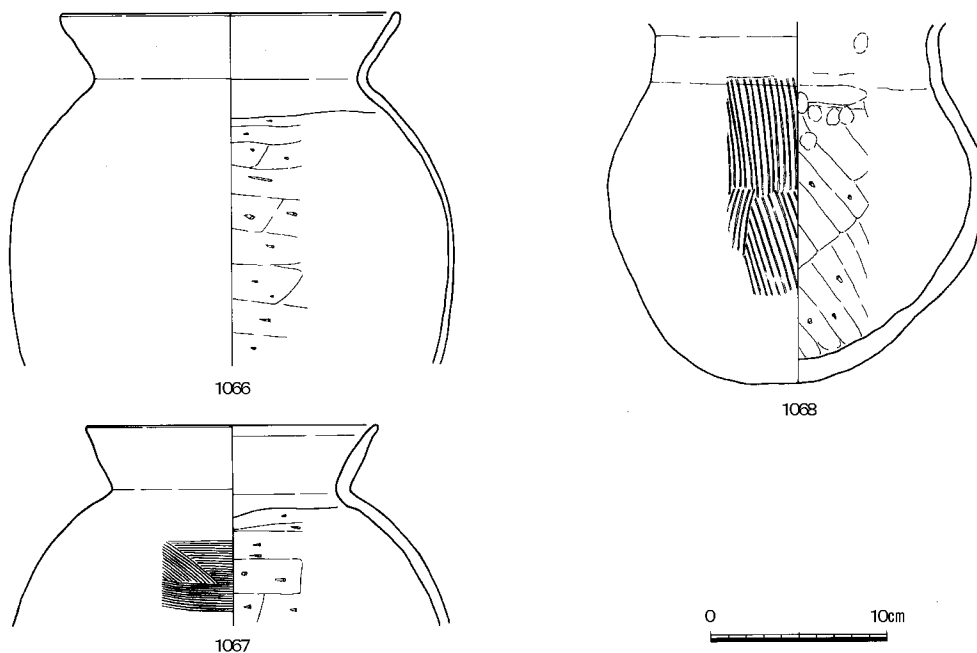
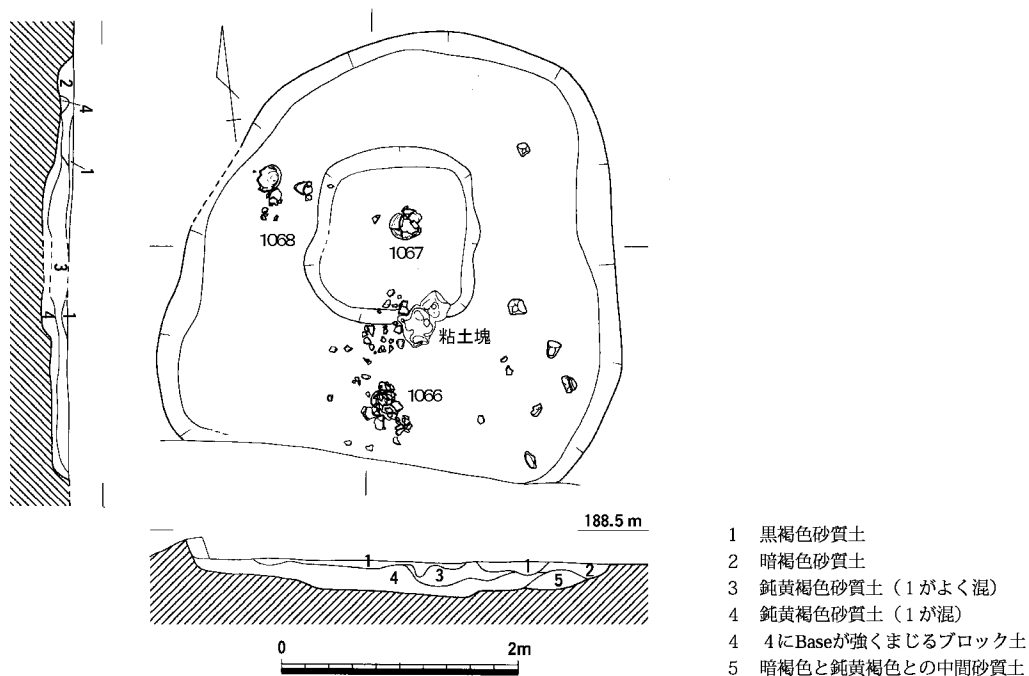
## 2 竪穴住居

竪穴住居14 (第382・384図、図版85・86・89)

遺跡の中央北寄り西端、4 0 08 Bh区から検出された高床部を持つ竪穴住居で、南部を河道によって切られていた。また、検出時には平面不整形円形を呈していたが、高床部内側の状況から、本来、隅丸方形を呈していたものと思われる。規模は一辺3.8m前後、床面積13㎡前後を測るものと思われる、床面中央部は一辺1.2m前後の範囲が、深さ約10cm程下がっていた。高床部の幅は推定80cmを測る。なお、支柱は確認し得なかった。

遺物はいずれも床面から押し潰された状況で出土している。北西から壺1068、中央から甕1067、南部から甕1066が、その周囲からも礫に混じって土器片が散在する状況であった。また、これらに混じって中央部東寄りの40×20cmの範囲からは、白色粘土塊も確認されている。甕の特徴から古墳時代前半に廃絶した住居と考えられる。

(江見)



第384図 竪穴住居14（1/60）・出土遺物（1/4）

### 3 墓

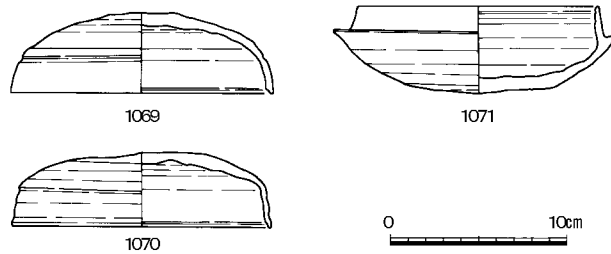
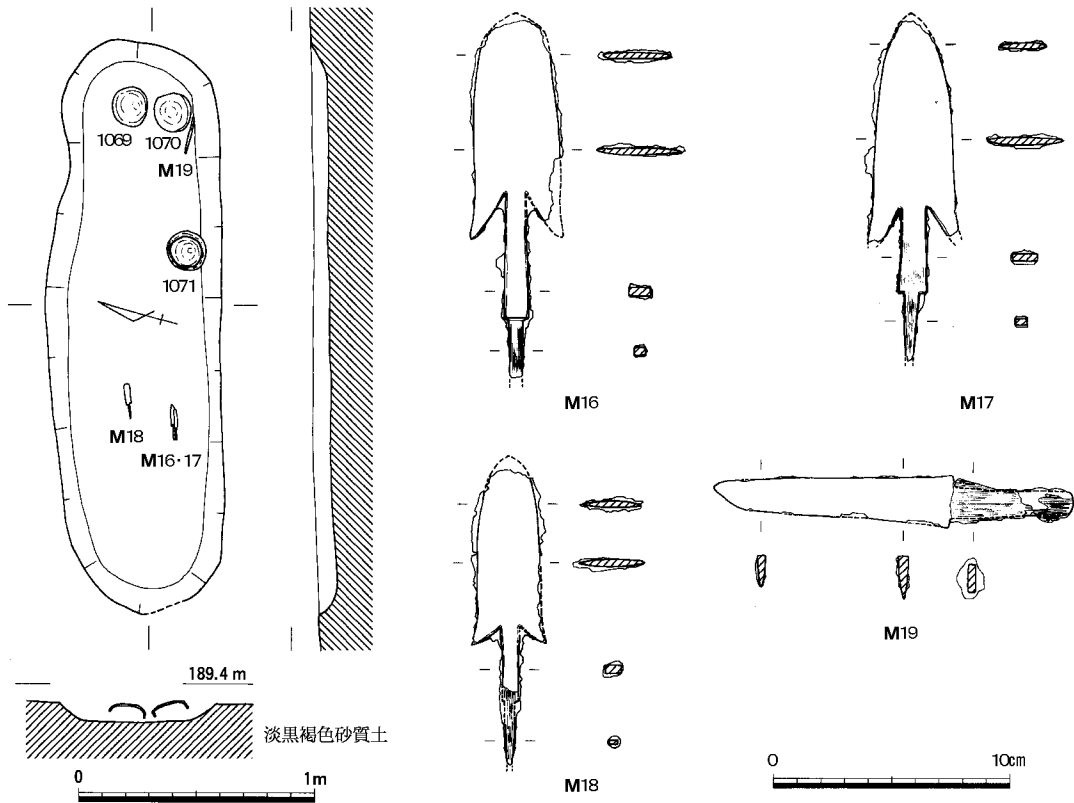
墓1（第382・385図、図版86・89）

4 0 04Cj区に位置する土墳墓である。上面は大きく削平され、検出面から墳底まで約10cmの深さを測るのみである。平面形は長楕円形を呈している。規模は長軸2.42m、短軸75cmである。埋土は淡黒色砂質土のみであった。

遺物はほぼ墳底直上から須恵器1069~1071、鉄器M16~19が出土している。1069・1070の須恵器杯蓋は東側小口に伏せられた状態で検出され、その状況から枕と想定される。1071は南辺東側から出土した。M16・17は南辺西側、M19は杯蓋の南側から出土している。

時期は古墳時代後半である。

(小嶋)



第385図 土墳墓1 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4)

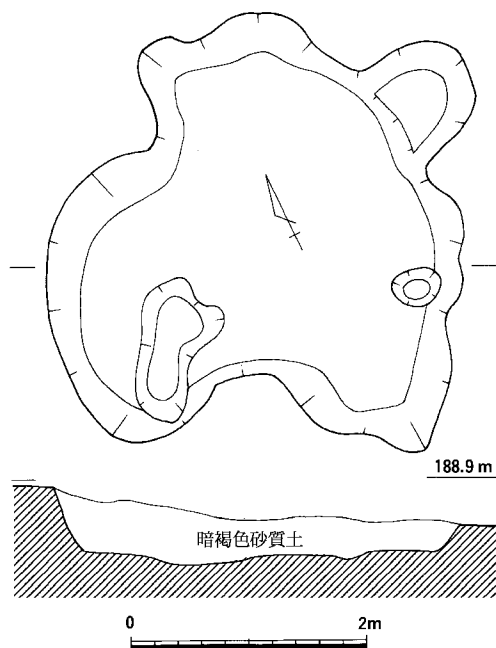
#### 4 土壇

土壇82 (第382・386図、図版89)

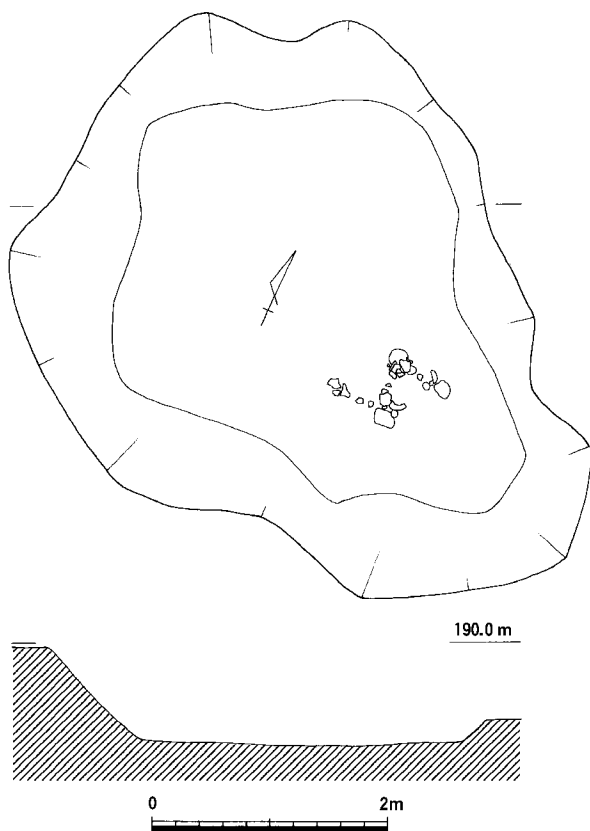
遺跡全体の北西隅にあたる3908Bg区に位置する。平面形が方形に近い不定形で、長軸4.3m、短軸3.9mを測る大型の土壇である。

土師器甕1072が出土しており、この土壇の時期は、中期の範疇にある。

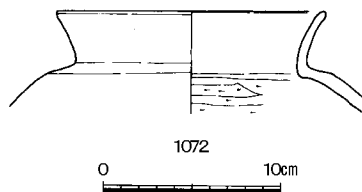
(弘田)



第386図 土壙82 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第387図 土壙83 (1/60)



土壙83 (382・387・388図、図版89)

4 0 01Cf区において検出した平面形が不定形を呈する大型の土壙である。底面での規模が1辺2.8m程で、深さは40cmを測る。本来は、矩形を呈していたと考えられなくもない。柱穴や焼土面などは確認できなかったが、竪穴住居の可能性も考えられる。

出土した須恵器の横瓶1073からみて、この土壙の時期は、古墳時代後期と考えられる。(弘田)

土壙84 (第382・389図)

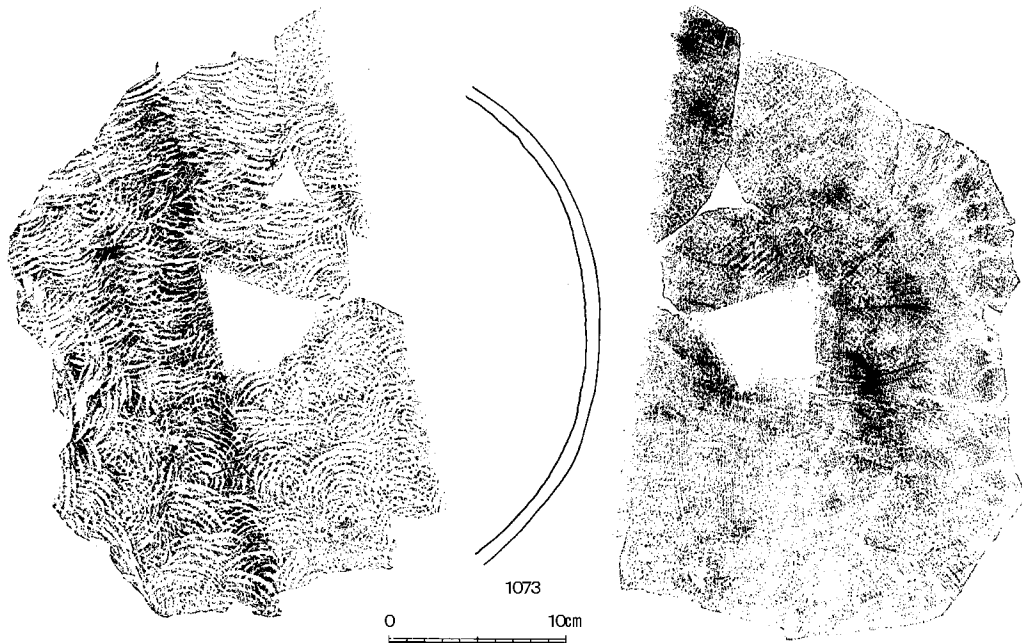
4 0 06Cj区にあり、長軸(南北)95cm、東西60cmの長楕円形を呈する。検出面からの深さ20cmを測る。底面の海拔高は189.07mである。周辺の古墳時代の遺構には土壙85がある。

土壙中央西側に有茎三角形鉄族M20が1本出土している。これは逆刺を持つ。全長15cmほどで関部まで10.6cmを測る。最大幅2.6cm、厚さ0.4cm、重さは33.6gである。(伊藤)

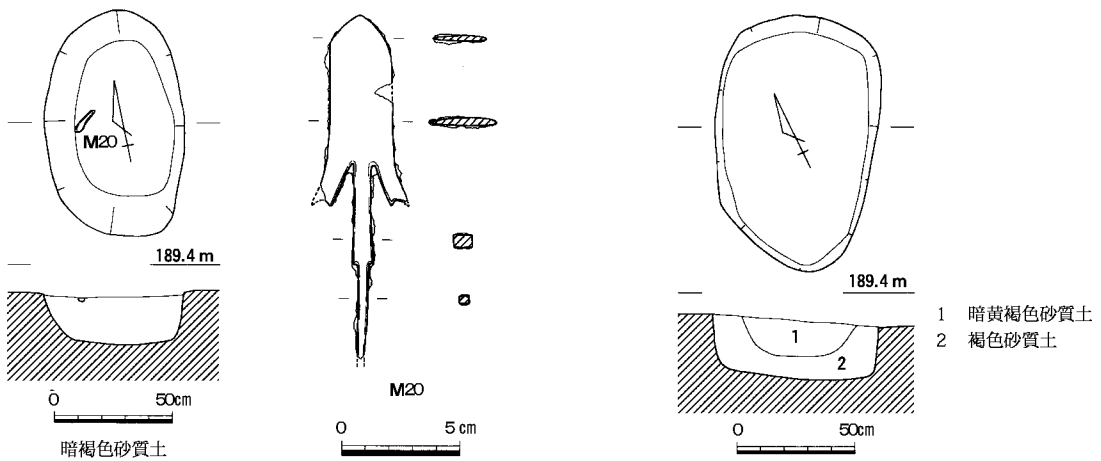
土壙85 (第382・390図)

4 0 05Da区にあり、土壙84の東15mの所に位置する。長軸(南北)1.08m、短軸70cmの長楕円形を呈する。検出面からの深さは28cm、底面の海拔は189.03mを測る。

出土遺物は見られなかった。古墳時代の土壙としたが、弥生時代の可能性も残る。(伊藤)



第388図 土壌83出土遺物 (1/4)



第389図 土壌84 (1/30)・出土遺物 (1/3)

第390図 土壌85 (1/30)

土壌86 (第382・391図)

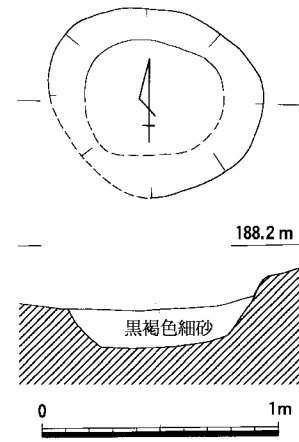
4 1 00 Bi区にあり、河道10の東斜面部に位置した。平面形が楕円形を呈する土壌で、規模は、長軸が90cm、短軸で80cm、深さは30cmを測る。

出土遺物には土師器の甕があった。それからみてこの土壌の時期は、中期と考えられる。(弘田)

土壌87 (第382・392図、図版89)

4 0 09 Ca区に位置した。平面形が不定形な土壌で、規模は、長軸で2.17m、短軸が1.50m、深さは5.4mを測る。

出土遺物のうち、土師器甕は短く外反する口縁を持つ1074と口

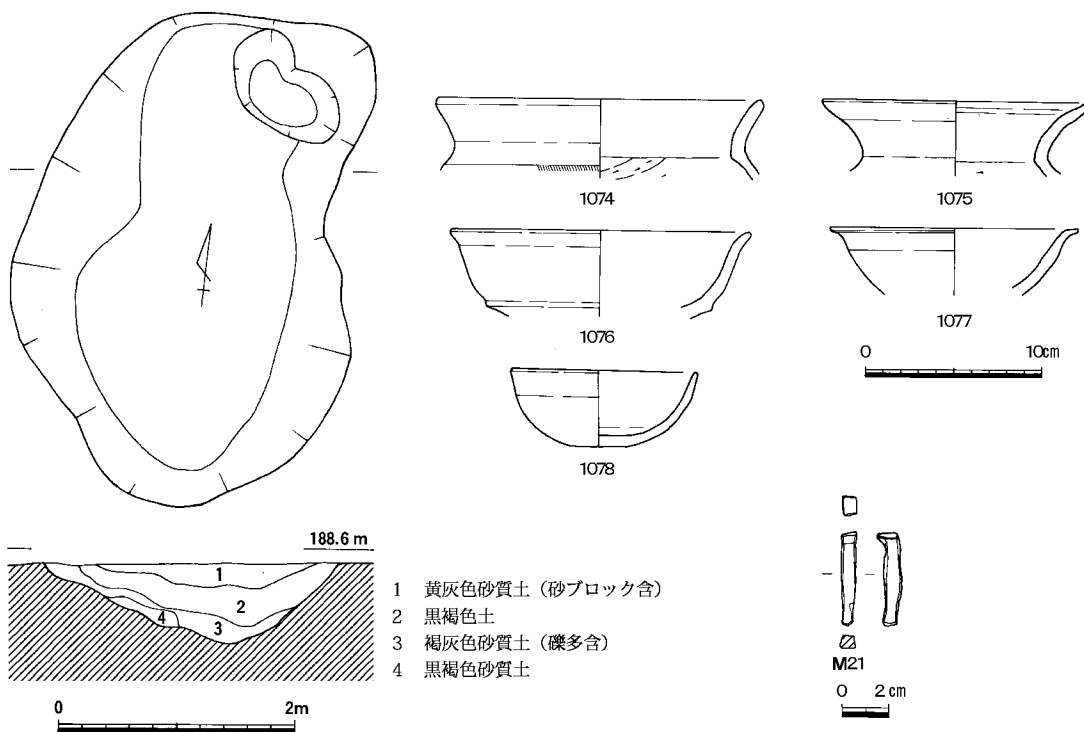


第391図 土壌86 (1/30)

第3章 発掘調査の概要

縁の上半部が強く外に屈曲した1075があるが、ともに口縁端部を丸く収める。高杯1076は、杯底部と口縁部の境に段をめぐる。そのほかにも、椀1078や鉄釘M21がみられる。

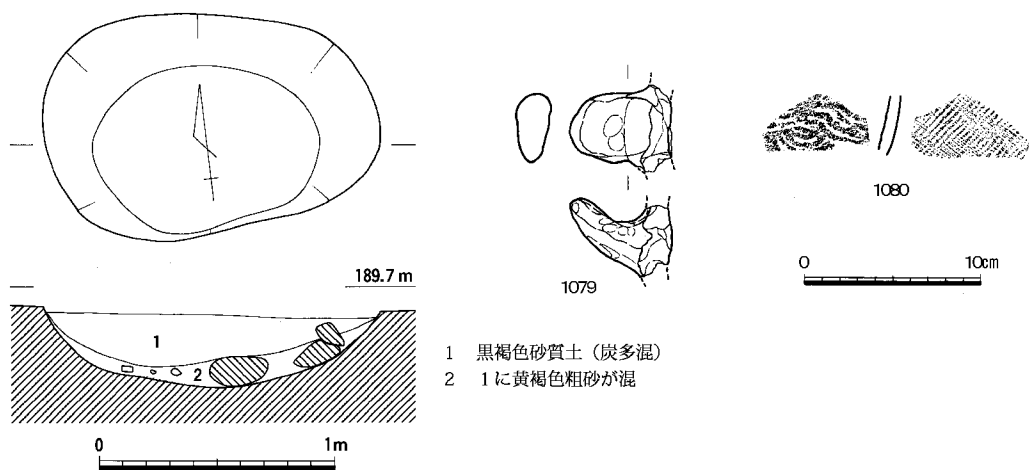
遺物の時期は布留式よりは新しく、この土壌自体も中期の範疇にあるとみて良い。(弘田)



第392図 土壌87 (1/60)・出土遺物 (1/4, 1/3)

土壌88 (第382・393図)

土壌87の南東18m、4 1 01 C f区から検出された平面楕円形を呈す土壌である。規模は1.43×0.97m、深さ31cmを測る。壁の傾斜は緩く、底部は丸い。埋土は2層からなり、第1層は黒褐色砂質土に炭粒



第393図 土壌88 (1/30)・出土遺物 (1/4)

が混入しており、特に土壙西部からは径10cm余りの部分に集中して検出される状況であった。また、第2層には5～20cm大の川原石が多く見られ、これに混じって土師器甕1079、須恵器甕1080などが出土した。いずれも小破片であったが、土器の特徴から古墳時代後半期のもと思われる。(江見)

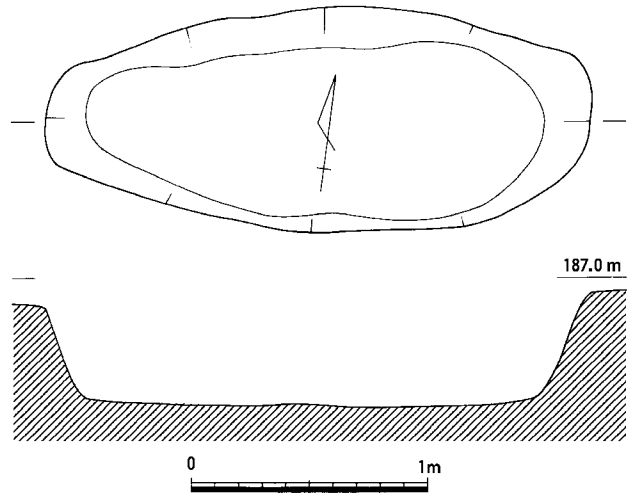
土壙89 (第383・394図、図版87)

4 1 09 Ca区の南西部に位置し、東と北には土取り1・2、西には河道10が検出されている。

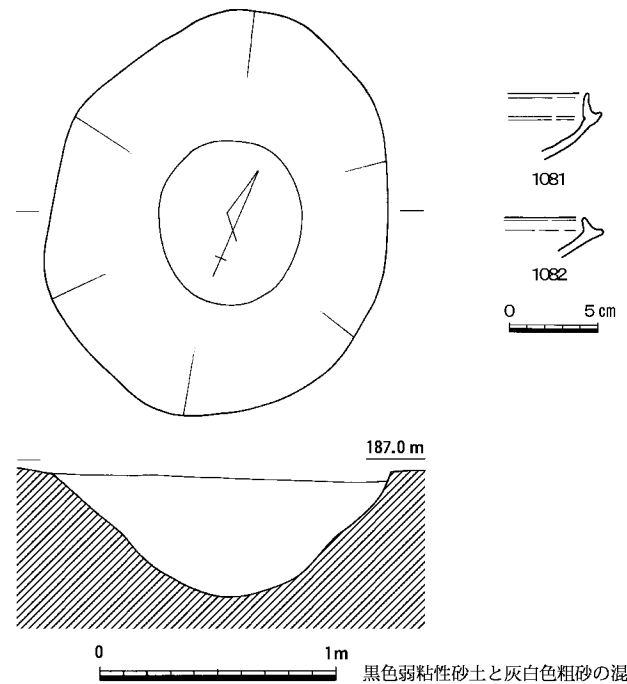
検出された土壙はほぼ東西方向に長辺を持ち、わずかに胴張りを呈した掘り方を示した長楕円の平面形態で、長辺2.35m、一方短辺の胴張り部分で95cm、検出面からの深さは45cmを測り、断面形は逆台形で底面はわずかに東側に傾斜している。土壙墓の可能性が考えられる。(二宮)

土壙90 (第383・395図)

4 2 03 C f 区に検出した土壙で、西側には河道10が存在している。平面形は長径1.10m、短径92cmの楕円形に近い形態を呈し、検出面から底面までの深さは38cmで、断面形はⅢaである。底面は緩やかに湾曲して丸くなり、内部には黒色弱粘性砂土と灰白色粗砂が混じった土砂が堆積し、須恵器の杯身片1081・1082が出土した。(福田)



第394図 土壙89 (1/30)



第395図 土壙90 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 5 火処

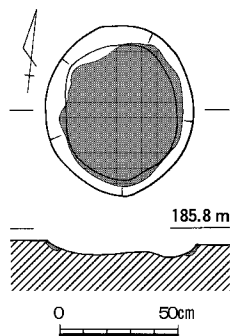
火処75～77 (第383・396～398図、図版87)

4 2 07 C f 区の河道10の内部に検出した火処で、3基が直線的に並んで存在していた。これらの火処は、河道10が機能しなくなって埋まる過程に造られたものである。西側に位置する火処75は、長径72cm、短径62cmの楕円形に似た平面形態を呈し、検出面からの深さは6cmで、断面形はⅢbになっていた。土壙周辺の法面が熱を受けて浅黄橙色に変化し、内部に黒褐色粘土が堆積していた。中央の火処76は、長径66cm、短径59cmの楕円形に近い不整形な形態を呈し、被熱部分が赤褐色になり、その下部に明黄

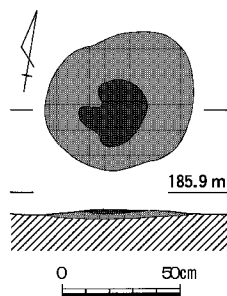


### 第3章 発掘調査の概要

褐色粘土に浅黄橙色粘土が混じった層が認められた。東側に存在した火処77は、長径78cm、短径70cmの楕円形に似た形態を呈し、熱を受けた橙色粘土の下位に、黒褐色粘土の薄い層が緩やかに湾曲していた。3基の火処に伴う遺物はないが、層位的に古墳時代である。(福田)

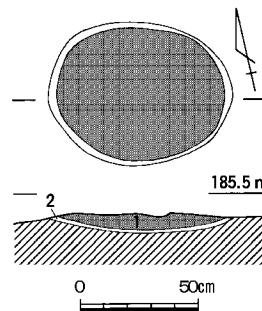


第396図 火処75 (1/30)



- 1 赤褐色粘土
- 2 明黄褐色粘土に浅黄橙色粘土が混

第397図 火処76 (1/30)



- 1 橙色粘土
- 2 黒褐色粘土

第398図 火処77 (1/30)

## 6 土取り跡

土取り跡1 (第383・400・402図、写真14、図版88・89)

遺跡の中央部西寄りの4 1 03Bj～4 1 09Cc区に位置している。東側には土取り跡2が隣接しており、西側では河道10を検出している。

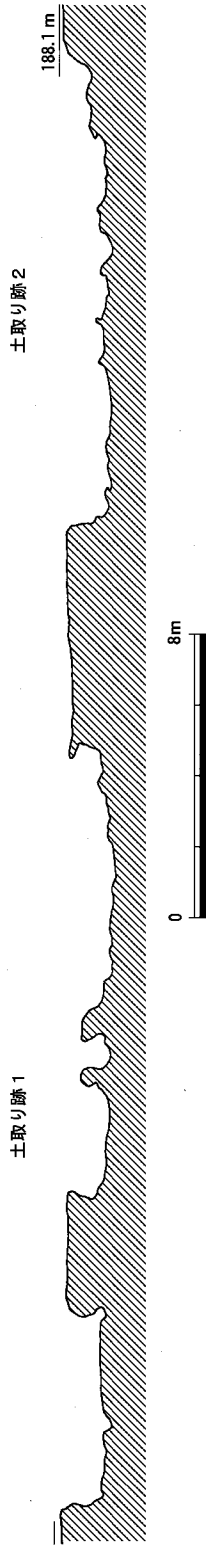
全長67m、最大幅25m、深さ1m前後を測る。平面は不定形で、底部は凹凸が著しく、土壌、ピットが連なっているような状態であった。また、壁体は大きく抉り込まれたような状態になっていた。大規模であることや底部の状況などから土の採掘跡と想定できる。土取り跡1は遺跡全体を覆う洪水砂の上面まで掘り込んでいることなどから、洪水砂の上部に堆積した土が目的と考えられる。底部の凹凸は採掘を繰り返したためと考えるのが妥当だろう。なお、粘土の採掘跡は総社市服部遺跡などの沖積地遺跡で検出しており、平面、底部の状況や大規模である点など共通点が多い。そのことも土取りと想定した根拠の一つである。

土取り跡1で目的とした土は黒褐色土から黄褐色土である。堆積土の利用方法としては久田堀ノ内遺跡に北接する久田原古墳群の盛土が考えられる。久田原古墳群は洪水砂が覆う平坦地に築造しており、墳丘に使用する土が周辺には存在していない。そのため久田堀ノ内遺跡で採掘して運搬した可能性が想起された。ただし、墳丘は後世の削平により失われており、相互確認は行い得ない。

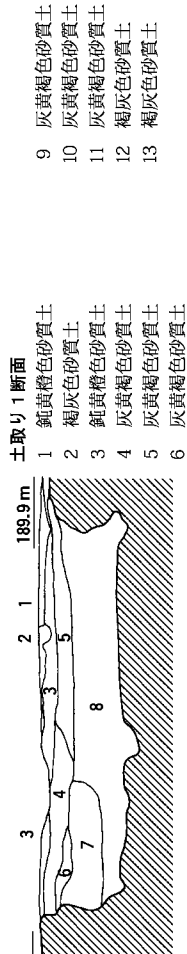
土取り跡1の埋土中からは須恵器の杯1083・1084が出土しており、7世紀初頭に比定できる。このことから土取り跡1が同時期の古墳築造のためのものと想定させた根拠である。(上村)

土取り跡2 (第383・401・403図、写真14、図版88・89)

遺跡の中央部西寄りの4 1 03Cb～4 2 01Cf区に位置している。西側には土取り跡1が隣接する。全長75m、最大幅20m、深さ1m前後を測る。基本的な特徴は土取り跡1と類似しており、目的も同様と考えている。埋土中から土師器、須恵器が出土しており、土取り跡1と近い時期に比定できる。久田原古墳群は7世紀に築造が盛況になり、土取り跡はその頃の遺構である。そのことから両者の結びつきが示唆される。(上村)



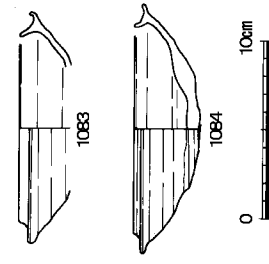
第399図 土取り跡1・2 (1/200)



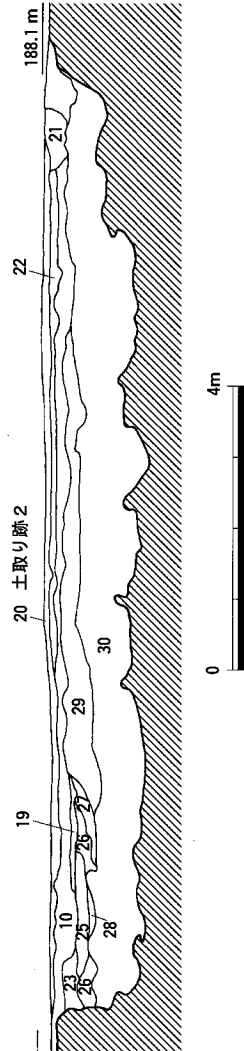
第399図 土取り跡1・2 (1/200)

- 土取り1断面
- 1 鈍黄褐色砂質土
  - 2 褐灰色砂質土
  - 3 鈍黄褐色砂質土
  - 4 灰黄褐色砂質土
  - 5 灰黄褐色砂質土
  - 6 灰黄褐色砂質土
  - 7 褐灰色砂質土
  - 8 鈍黄褐色砂質土と黒褐色微砂と黒褐色砂質土粗砂の互層
- 土取り2断面
- 9 灰黄褐色砂質土
  - 10 灰黄褐色砂質土
  - 11 灰黄褐色砂質土
  - 12 褐灰色砂質土
  - 13 褐灰色砂質土
  - 14 鈍黄褐色砂質土と黒褐色微砂と黒褐色砂質土粗砂の互層
  - 15 暗褐色砂質土
  - 16 黒褐色砂質土と褐灰色砂質土の互層
  - 17 黒褐色砂質土
  - 18 黒褐色砂質土
  - 19 鈍黄褐色砂質土と黒褐色微砂と黒褐色粗砂の互層

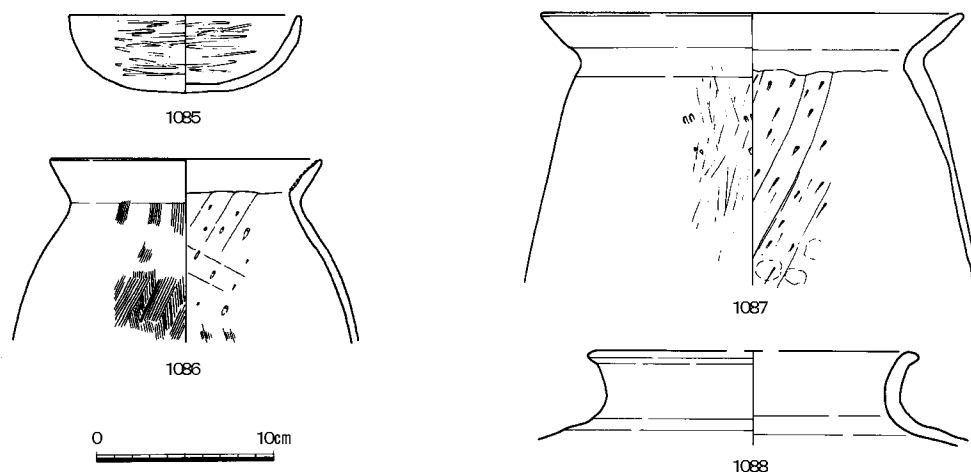
- 土取り2断面
- 10 灰黄褐色砂質土
  - 20 黒褐色砂質土
  - 21 黒褐色砂質土
  - 22 黒褐色砂質土
  - 23 灰黄褐色砂質土
  - 27 黒褐色粗砂と黒褐色砂質土微砂と明黄褐色砂質土の互層
  - 28 灰黄褐色粘質土
  - 29 黒褐色砂質土
  - 30 明黄褐色砂質土と黒褐色砂質土微砂と黒褐色砂質土粗砂の互層



第401図 土取り跡1出土遺物 (1/4)



第400図 土取り跡1・2 (1/100)



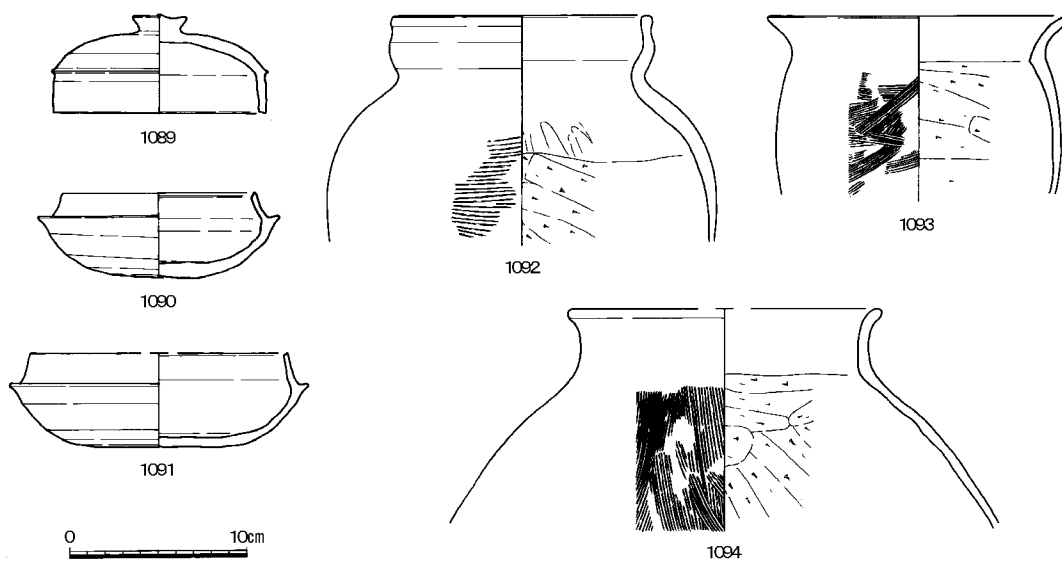
第402図 土取り跡 2 出土遺物 (1/4)

## 7 土器溜まり

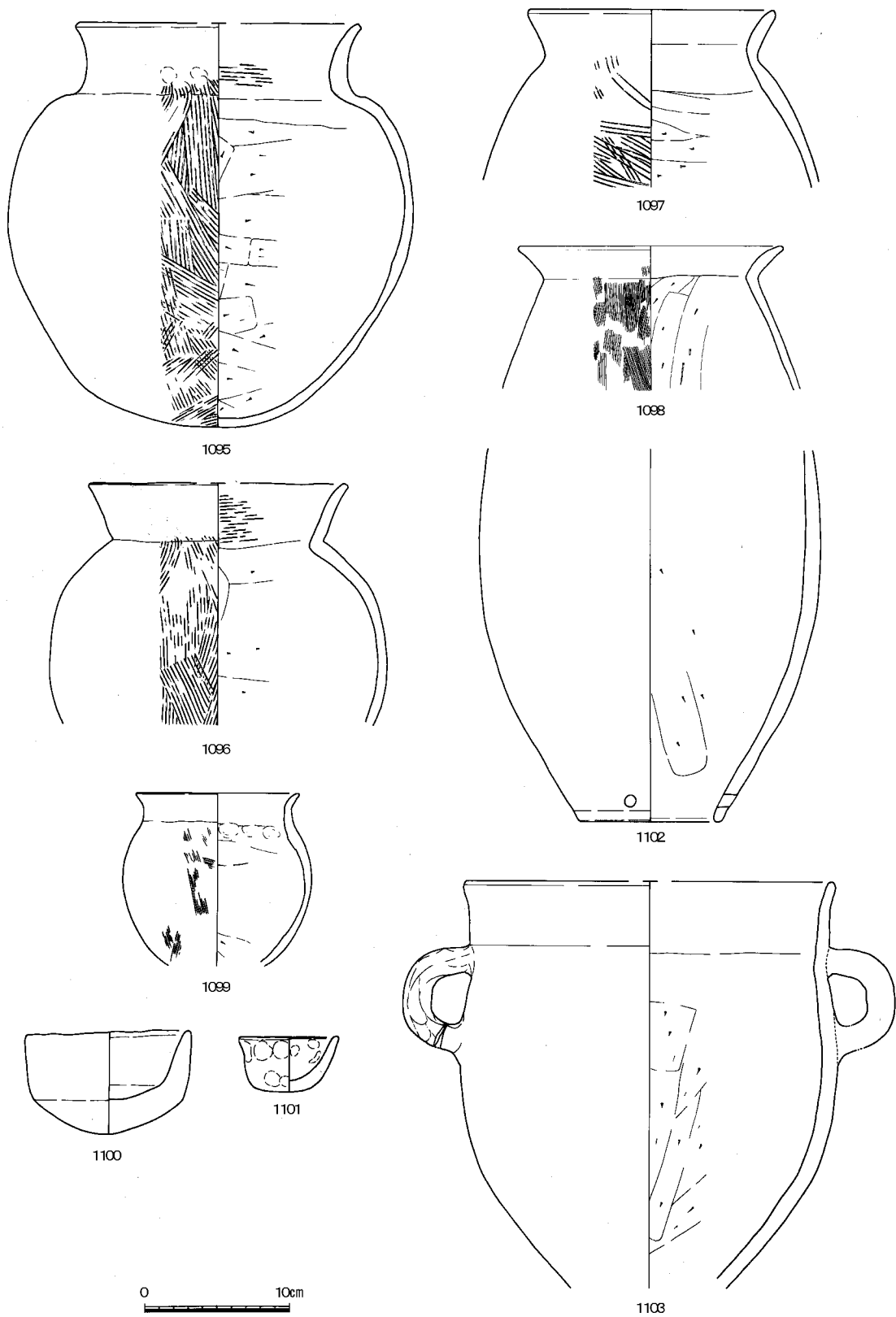
土器溜まり11 (第383・404・405図、図版90)

4 207Cf区の河道10の内部で検出した土器溜まりで、近接した地点に3基の火処(火処75~77)が確認されている。この土器溜まりは、3基の火処と同様に、河道10が機能しなくなって埋まる過程に成立したもので、河道10の肩部から底部にかけて土器が散布しており、土器は河道10の東側から搬入されたと思われる。この土器溜まりと3基の火処は、同一面の近接した位置に存在していたので、ほぼ同時期に形成されたことは明らかであるものの、両者は関係がない個別の遺構と考えられた。

出土した遺物として、須恵器の高杯蓋1089、杯身1090・1091、土師器の甕1092~1099、鉢1100、手づくね土器1101、甑1102・1103があるが、各時期の土器が混在している。(福田)



第403図 土器溜り11出土遺物① (1/4)



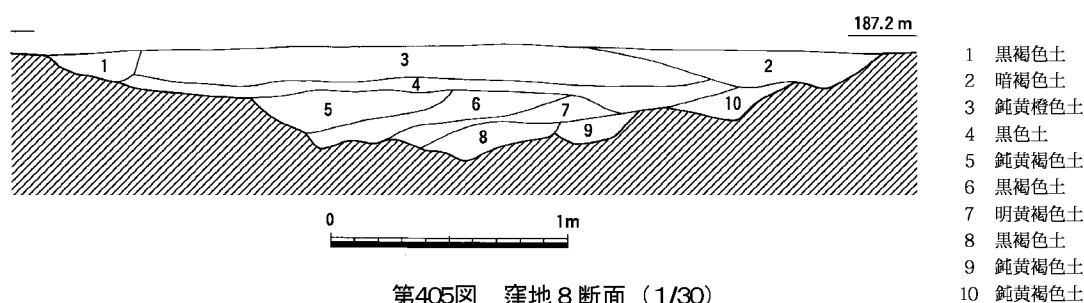
第404図 土器溜り11出土遺物② (1/4)

## 8 窪地

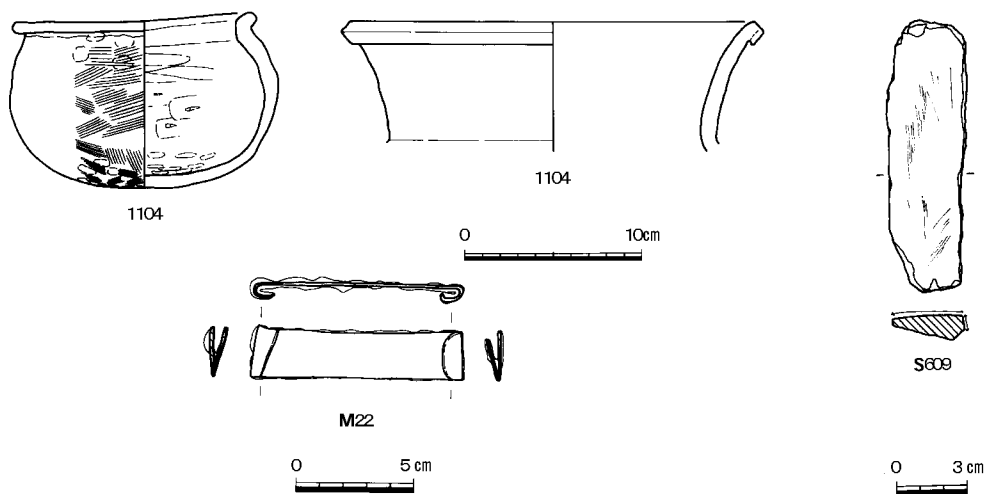
窪地8 (第383・406図、図版90)

4 2 06Cj区から4 2 08Da区にかけて検出した窪地で、西方向約10mの地点に河道10があるだけで、周辺には遺構が確認されていない。この窪地は、弥生時代の河道7が埋まった上面に存在していた。不整形な形態の平面形を呈する土塊状のものが連なっており、その方向は弥生時代の河道7と一致していた。上層に位置する3層の鈍黄褐色土と4層の黒色土は水平堆積していたが、下層に認められる5層の鈍黄褐色土から10層の鈍黄褐色土までは複雑な堆積状態になっていた。

出土遺物として、土師器の鉢1104、須恵器の甕1105、鋤先M22、砥石S609がある。 (福田)



第405図 窪地8断面 (1/30)



第406図 窪地8出土遺物 (1/4,1/3)

## 9 河道

河道10上流部 (第382・383・407・409・410図、図版90・91)

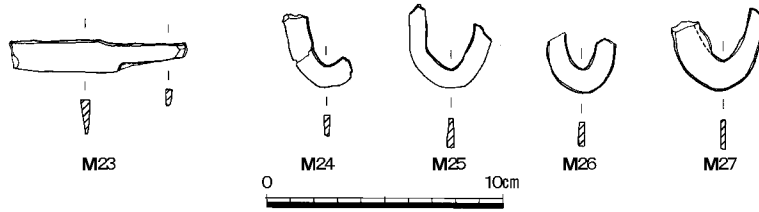
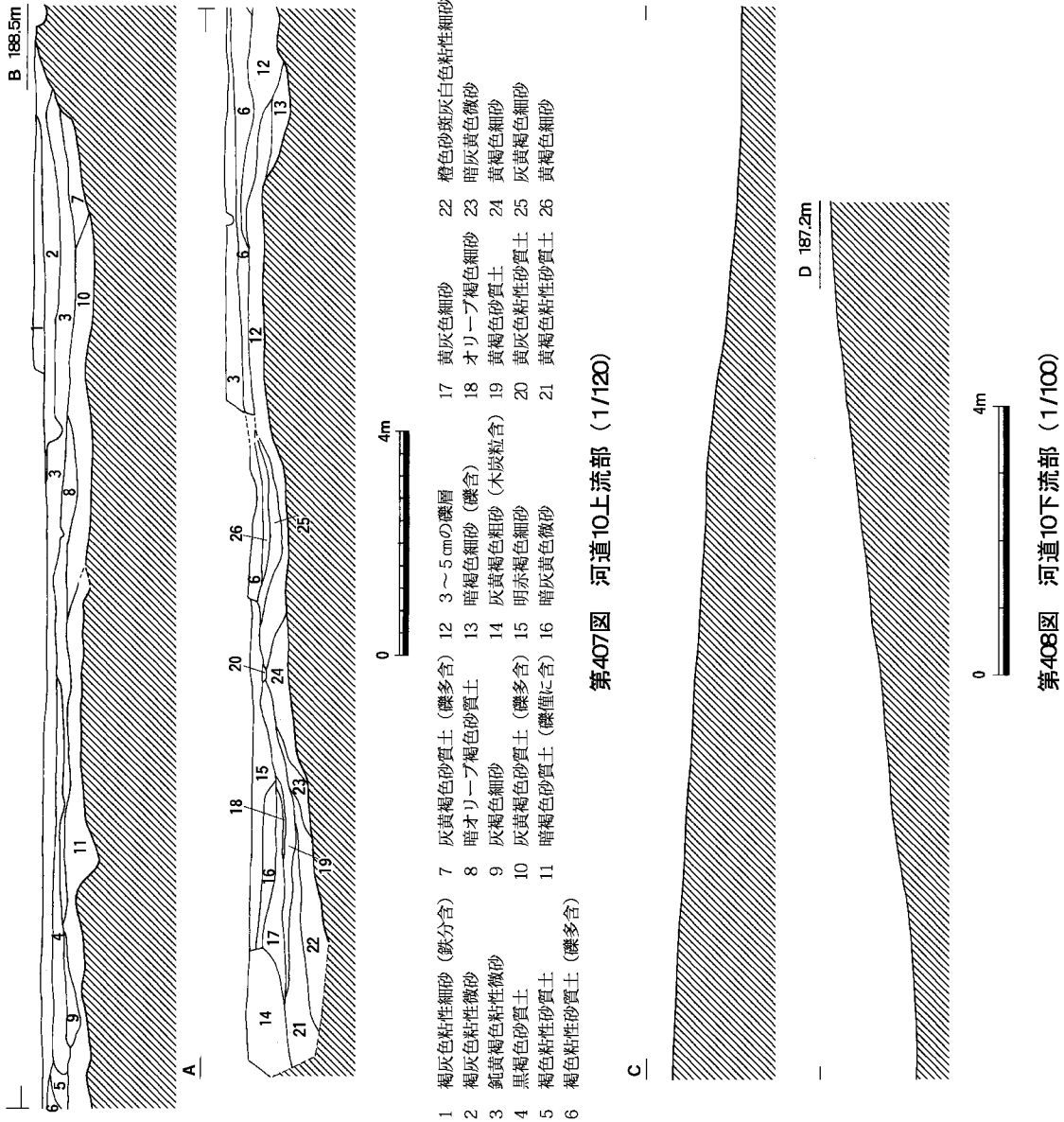
4 0 08Bg~4 3 00Cc区あたりにかけてを南流し、縄文時代から踏襲される河道で徐々に埋没しながら西へと河道の肩を移動させていったとみられる。遺跡の西端を画すその斜面部からは、多くの遺物が出土した。

出土遺物には、土器と鉄器がある。鉄器類では、刀子M23、環状を呈したM24~27がある。後者は、

いずれも欠損しており、扁平で楕円形をなす金具とみられるが、用途は不明である。

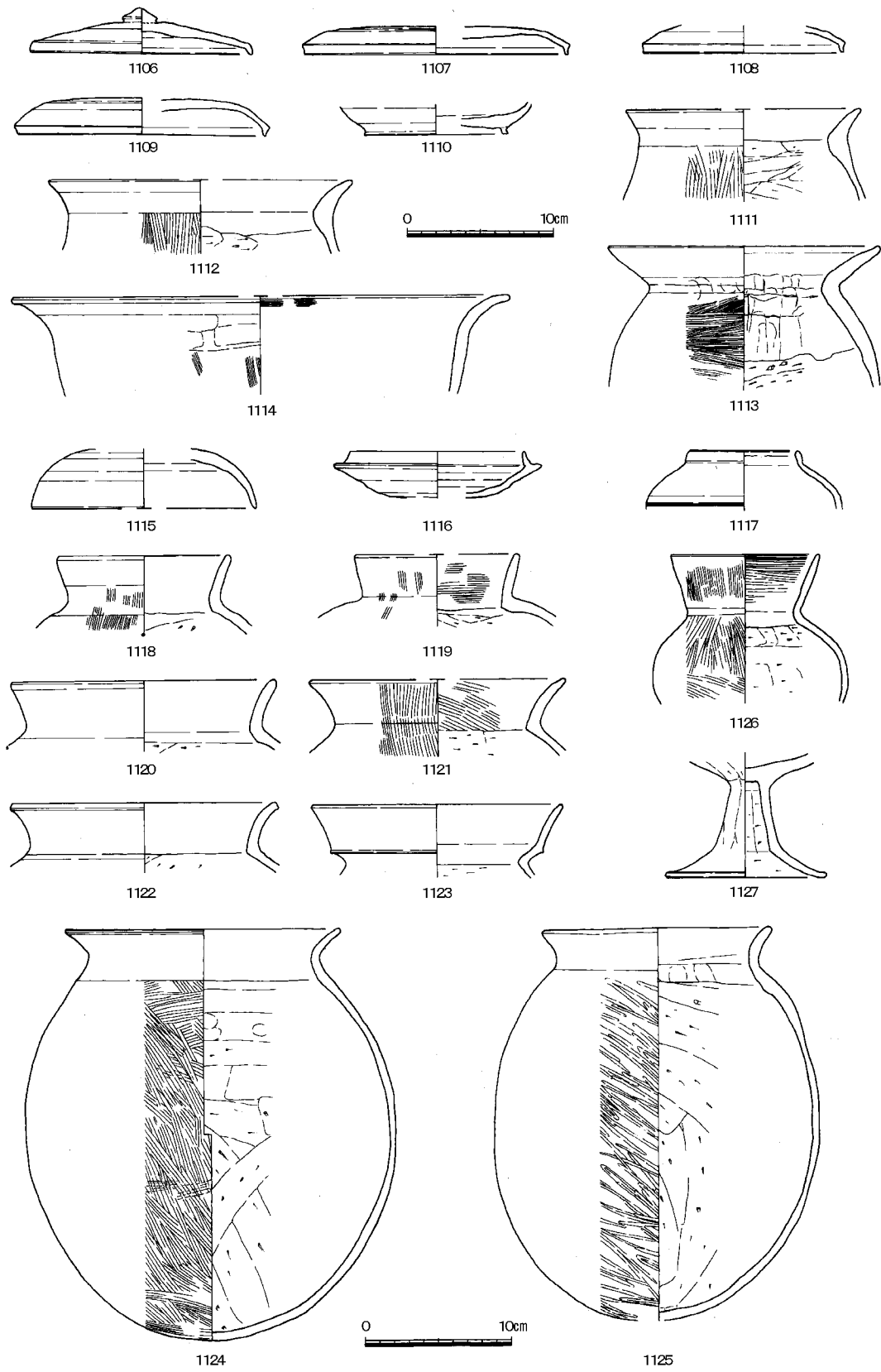
土器には、古墳時代前期から8世紀代に入るものまでの時間幅がみられるが、第6層より上層で出土した1106~1114、下層からの1115~1125に分けられる。

1106~1110は、須恵器の蓋杯類。1111・1112は頸部に対してやや胴部が張る土師器の長胴甕。甕1113



第409図 河道10上流部出土遺物① (1/3)

第3章 発掘調査の概要



第410図 河道10上流部出土遺物② (1/4)

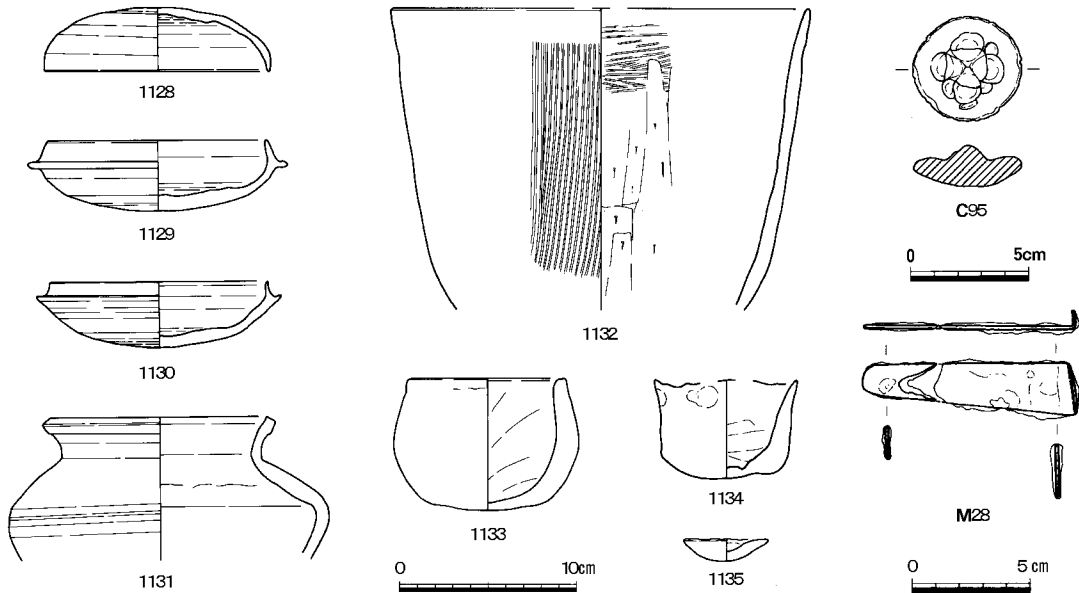
は、体部下半にヘラケズリが残る。上層の他例より古く、時期は5世紀後半頃であろう。1114は土師器の甌とみられる。7～8世紀代の資料である。

下層では、1115～1117が6～7世紀に属するほかはいずれも古く、とりわけ二重口縁の1123は前期に、ほかも中期（5世紀）に位置付けられる。（弘田）

河道10下流部（第383・408・411図、図版91）

4 200C区から4 208C区にかけての河道10下流部は、上流部の状態と様相が異なっている。河道10が本来の機能を失って埋まる過程に3基の火処が造られ、その近接地にほぼ同時期と推定される土器溜まり11が形成されていたのである。この土器溜まりには各時期の土器が混在し、3基の火処とは関係のない個別の遺構で、河道の東側から土器が搬入されたと思われた。

河道10下流部から出土した遺物として、須恵器の杯蓋1128、杯身1129・1130、壺1131、土師器の甌1132、椀1133、手づくね土器1134・1135、鏡形土製品C95、鎌M28がある。（福田）



第411図 河道10下流部出土遺物（1/4,1/3）

## 10 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第412～415図、図版91・92）

古墳時代の遺構に伴わない遺物については、遺構検出中に出土したものが少なからず存在する。そのうち、完形に近いものや特徴的と考えられるものを中心に図示している。

### 土器

1136～1151が須恵器、1152～1169が土師器である。

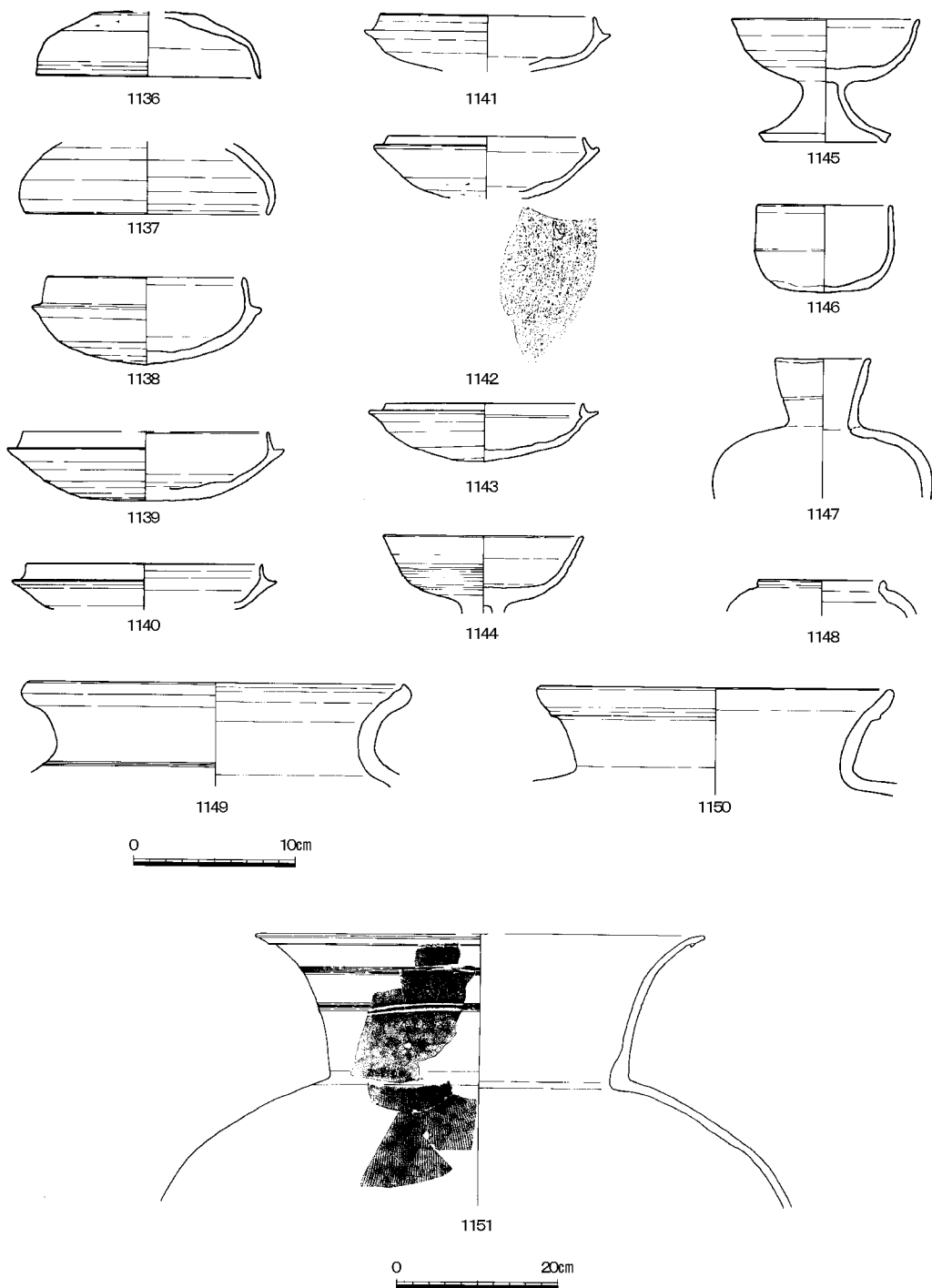
須恵器には杯蓋1136・1137、杯1138～1143・1146、高杯1144・1145、平瓶1147、短頸壺1148、甕1149～1151がある。後期のものが主体的であるが、1138のように6世紀前半に位置づけられるものから、7世紀に入るものまでを含んでいる。7世紀前半代に位置づけられる1145～1147は調査区中央北側、土壙88の北方からまとまって出土した須恵器である。時期的にもまとまった資料であり、遺物の時期



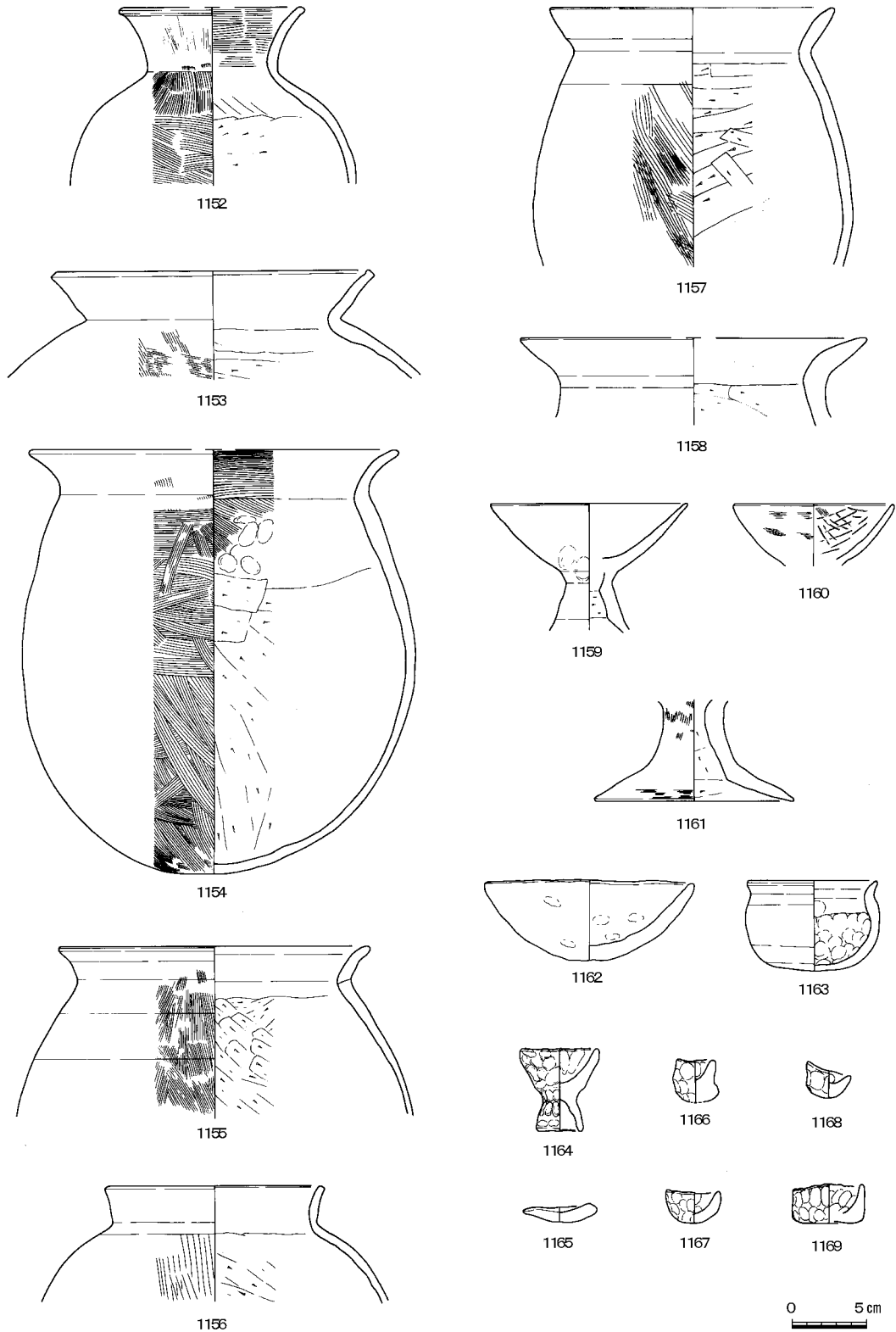
第3章 発掘調査の概要

的なものを考慮すれば、北に隣接する久田原古墳群と関連性も考えられることから、これらが削平を受けた古墳または墓の副葬品であった可能性もある。

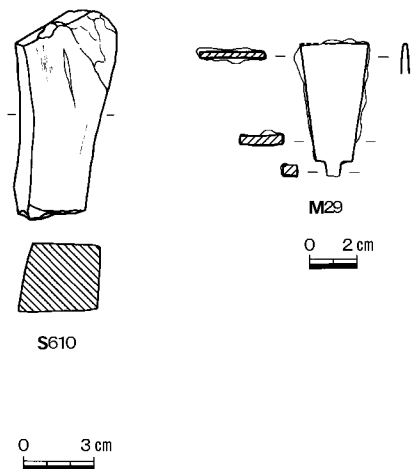
土師器には壺1152、甕1153~1158、高杯1159~1161、鉢1162、小型椀1163のほか、手づくね土器1164~1169がある。前期後半に位置づけられる高杯1159を含んでいるが、その多くは後期に属する資料で



第412図 遺構に伴わない遺物① (1/4,1/8)



第413図 遺構に伴わない遺物② (1/4)



第414図 遺構に伴わない遺物③ (1/3)

ある。小型椀1163と手づくね土器1165～1169は、前述した河道10が埋まる過程において形成された土器溜まり11・火処75～77の付近から出土している。これらは土器溜まり11と近接して出土したことに加えて、土器溜まり11にも手づくね土器や小型土器が出土していることから判断して、本来は土器溜まりに伴っていた遺物である可能性が高い。この遺物の存在は、河道左岸に形成された土器溜まりの性格を考えていく上で興味深い。

石製品・金属製品

S610は砥石である。四面全てを使用しており、研ぎ減りが著しい。鉄鏃M29は方頭形平根鏃である。基部を欠損している。 (河合)

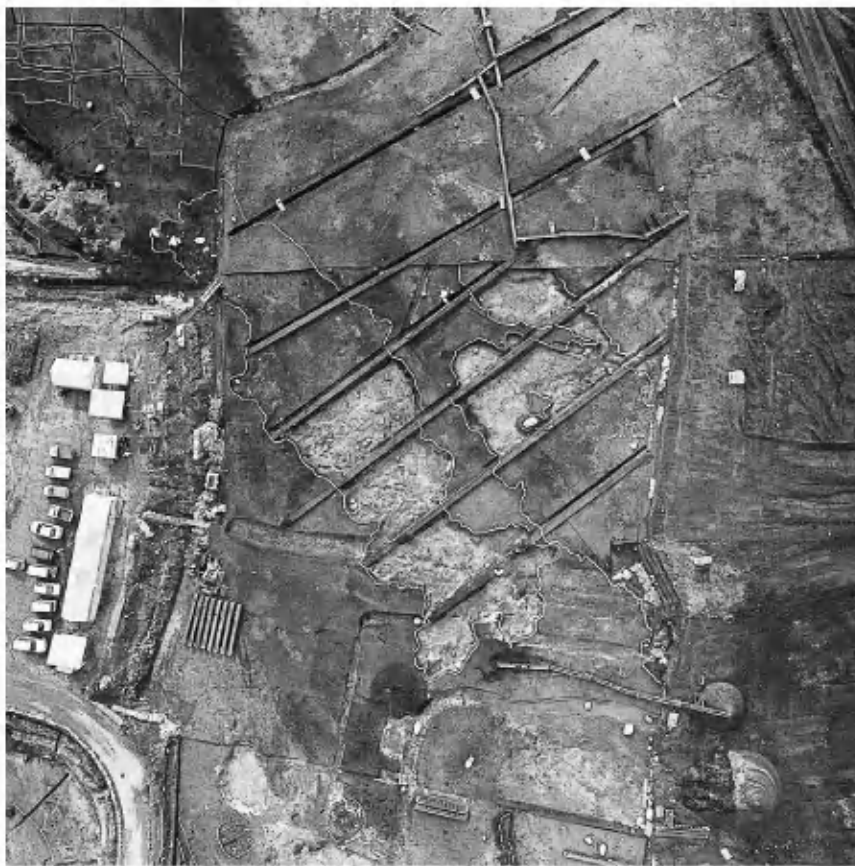


写真14 土取り跡1・2全景 (真上から)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 192

久田堀ノ内遺跡

苦田ダム建設に伴う発掘調査

3

(第1分冊)

平成17年3月18日 印刷

平成17年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行 国土交通省苦田ダム工事事務所  
岡山県苦田郡鏡野町久田下原1592-4

岡山県教育委員会  
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷 株式会社 中野コロタイプ  
岡山県岡山市玉柏390

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 192

# 久田堀ノ内遺跡

苫田ダム建設に伴う発掘調査

3

(第2分冊)

2005

国土交通省苫田ダム工事事務所  
岡山県教育委員会

## 第2分冊目次

### 第5節 古代・中世の遺構と遺物

1 概要	241
2 掘立柱建物	261
3 柱穴列	313
4 竪穴遺構	314
5 墓	316
6 焼成土壙	335
7 埋甕遺構	335
8 集石土壙・集石遺構	339
9 石敷土壙	342
10 土壙	343
11 堀	397
12 溝	415
13 火処	424
14 土器溜まり	424
15 窪地	429
16 柱穴	432
17 遺構に伴わない遺物	436

### 第6節 近世以降の遺構と遺物

1 概要	463
2 掘立柱建物	470
3 柱穴列	482
4 井戸	485
5 墓	487
6 土壙	509
7 堀	517
8 溝	519
9 柱穴	521
10 遺構に伴わない遺物	521

## 図目次

第415図 調査範囲と字 (1/3,000)	241	第422図 中世主要遺構部分図⑥ (1/300)	249
第416図 古代・中世遺構全体図 (1/2,000)	243	第423図 中世主要遺構部分図⑦ (1/300)	250
第417図 中世主要遺構部分図① (1/400)	244	第424図 中世主要遺構部分図⑧ (1/300)	251
第418図 中世主要遺構部分図② (1/300)	245	第425図 中世主要遺構部分図⑨ (1/300)	252
第419図 中世主要遺構部分図③ (1/300)	246	第426図 中世主要遺構部分図⑩ (1/300)	253
第420図 中世主要遺構部分図④ (1/300)	247	第427図 中世主要遺構部分図⑪ (1/300)	254
第421図 中世主要遺構部分図⑤ (1/300)	248	第428図 中世主要遺構部分図⑫ (1/300)	255

第429图	中世主要遺構部分图⑬ (1/300)	256		
第430图	中世主要遺構部分图⑭ (1/300)	257		
第431图	中世主要遺構部分图⑮ (1/300)	258		
第432图	中世主要遺構部分图⑯ (1/300)	259		
第433图	中世主要遺構部分图⑰ (1/400)	260		
第434图	掘立柱建物3 (1/100)・出土遺物 (1/2,1/4)	261		
第435图	掘立柱建物4 (1/100)	262		
第436图	掘立柱建物5 (1/100)	262		
第437图	掘立柱建物6 (1/100)・出土遺物 (1/4)	263		
第438图	掘立柱建物7 (1/100)	264		
第439图	掘立柱建物8 (1/100)	264		
第440图	掘立柱建物9 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)	265		
第441图	掘立柱建物10 (1/100)	266		
第442图	掘立柱建物11 (1/100)	266		
第443图	掘立柱建物12 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)	267		
第444图	掘立柱建物13 (1/100)・出土遺物 (1/2)	267		
第445图	掘立柱建物14 (1/100)	268		
第446图	掘立柱建物14出土遺物 (1/4)	269		
第447图	掘立柱建物15 (1/100)・出土遺物 (1/3)	269		
第448图	掘立柱建物16 (1/100)・出土遺物 (1/4)	270		
第449图	掘立柱建物17 (1/100)	271		
第450图	掘立柱建物18 (1/100)・出土遺物 (1/3)	272		
第451图	掘立柱建物19 (1/100)	273		
第452图	掘立柱建物20 (1/100)・出土遺物 (1/4)	274		
第453图	掘立柱建物21 (1/100)	275		
第454图	掘立柱建物22 (1/100)・出土遺物 (1/2,1/3)	276		
第455图	掘立柱建物23 (1/100)・出土遺物 (1/4)	277		
第456图	掘立柱建物24 (1/100)・出土遺物 (1/4)	278		
第457图	掘立柱建物25 (1/100)	278		
第458图	掘立柱建物26 (1/100)・出土遺物 (1/3)	279		
第459图	掘立柱建物27 (1/120)・出土遺物 (1/4,1/3)	280		
第460图	掘立柱建物28 (1/120)・出土遺物 (1/3)	281		
第461图	掘立柱建物29 (1/100)・出土遺物 (1/3)	282		
第462图	掘立柱建物30 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)	283		
第463图	掘立柱建物31 (1/100)・出土遺物 (1/4)	284		
第464图	掘立柱建物32 (1/100)・出土遺物 (1/4)	285		
第465图	掘立柱建物33 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/2)	286		
第466图	掘立柱建物34 (1/100)	287		
第467图	掘立柱建物35 (1/100)・出土遺物 (1/3)	288		
第468图	掘立柱建物36 (1/100)	289		
第469图	掘立柱建物37 (1/100)・出土遺物 (1/3)	290		
第470图	掘立柱建物38 (1/100)	291		
第471图	掘立柱建物39 (1/100)・出土遺物 (1/4)	292		
第472图	掘立柱建物40 (1/100)	293		
第473图	掘立柱建物41 (1/100)	294		
第474图	掘立柱建物42 (1/100)	295		
第475图	掘立柱建物43 (1/100)・出土遺物 (1/4)	296		
第476图	掘立柱建物44 (1/100)	297		
第477图	掘立柱建物45 (1/100)	298		
第478图	掘立柱建物46 (1/100)	298		
第479图	掘立柱建物47 (1/100)	299		
第480图	掘立柱建物48 (1/100)	300		
第481图	掘立柱建物49 (1/100)	301		
第482图	掘立柱建物50 (1/100)	301		
第483图	掘立柱建物51 (1/100)	302		
第484图	掘立柱建物52 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)	302		
第485图	掘立柱建物53 (1/100)・出土遺物 (1/3)	303		
第486图	掘立柱建物54 (1/100)	304		
第487图	掘立柱建物55 (1/100)	304		
第488图	掘立柱建物56 (1/100)	305		
第489图	掘立柱建物57 (1/100)・出土遺物 (1/3)	306		
第490图	掘立柱建物58 (1/100)	307		
第491图	掘立柱建物59 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)	308		
第492图	掘立柱建物60 (1/100)	308		
第493图	掘立柱建物61 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)	309		
第494图	掘立柱建物62 (1/100)	310		
第495图	掘立柱建物63 (1/100)	310		

第496图	掘立柱建物64 (1/100) · 出土遺物 (1/4)	311	第540图	墓36 (1/30)	334
第497图	掘立柱建物65 (1/100) · 出土遺物 (1/4)	311	第541图	烧成土擴2 (1/30) · 出土遺物 (1/3)	335
第498图	掘立柱建物66 (1/100) · 出土遺物 (1/4)	312	第542图	烧成土擴3 (1/30)	335
第499图	掘立柱建物67 (1/100)	313	第543图	埋甕遺構1 (1/30) · 出土遺物 (1/6)	335
第500图	柱穴列1 (1/100)	313	第544图	埋甕遺構1 出土遺物 (1/6,1/3)	336
第501图	柱穴列2 (1/100) · 出土遺物 (1/4)	314	第545图	埋甕遺構2 (1/30) · 出土遺物 (1/6)	337
第502图	柱穴列3 (1/100)	314	第546图	埋甕遺構3 (1/30)	338
第503图	豎穴遺構1 (1/60)	314	第547图	埋甕遺構3 出土遺物 (1/4,1/3)	339
第504图	屋内土擴 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	315	第548图	集石土擴1 (1/30)	340
第505图	墓2 (1/30) 出土遺物 (1/4)	316	第549图	集石土擴1 出土遺物 (1/4,1/3)	341
第506图	墓3 · 4 (1/60)	316	第550图	集石遺構2 (1/30)	341
第507图	墓3 出土遺物 (1/4,1/3)	317	第551图	石敷土擴1 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	341
第508图	墓5 (1/30) · 出土遺物 (1/8)	317	第552图	土擴91 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	342
第509图	墓5 出土遺物 (1/4,1/2)	318	第553图	土擴92 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	342
第510图	墓6 (1/30) · 出土遺物 (1/2)	319	第554图	土擴93 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/3)	342
第511图	墓7 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/2)	319	第555图	土擴94 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	343
第512图	墓8 (1/30) · 出土遺物 (1/3)	320	第556图	土擴95 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/3)	343
第513图	墓9 (1/30) · 出土遺物 (1/3,1/4)	320	第557图	土擴96 (1/30) · 出土遺物 (1/3,1/4)	344
第514图	墓10 (1/30) · 出土遺物 (1/2,1/3)	321	第558图	土擴97 (1/30)	345
第515图	墓11 (1/30) · 出土遺物 (1/3)	321	第559图	土擴98 (1/30)	345
第516图	墓12 (1/30)	322	第560图	土擴99 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	345
第517图	墓13 (1/30) · 出土遺物 (1/3)	322	第561图	土擴100 (1/60)	345
第518图	墓14 (1/30) · 出土遺物 (1/3)	322	第562图	土擴101 (1/30)	346
第519图	墓15 出土遺物 (1/3)	323	第563图	土擴102 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	346
第520图	墓16 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	323	第564图	土擴103 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	346
第521图	墓17 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/3)	324	第565图	土擴104 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	347
第522图	墓18 (1/30)	324	第566图	土擴105 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	347
第523图	墓19 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	324	第567图	土擴106 (1/30)	347
第524图	墓20 (1/30)	324	第568图	土擴107 (1/30)	348
第525图	墓21 (1/30) · 出土遺物 (1/3)	325	第569图	土擴108 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	348
第526图	墓22 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/3)	325	第570图	土擴109 (1/30)	348
第527图	墓23 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/3)	326	第571图	土擴110 (1/30)	348
第528图	墓24 (1/30) · 出土遺物 (1/3)	327	第572图	土擴110 出土遺物 (1/4)	349
第529图	墓25 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/3)	328	第573图	土擴111 (1/60) · 出土遺物 (1/4)	349
第530图	墓26 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/3)	329	第574图	土擴112 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	350
第531图	墓27 (1/30)	329	第575图	土擴113 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	351
第532图	墓28 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/2,1/3)	330	第576图	土擴114 (1/30)	351
第533图	墓29 (1/30) · 出土遺物 (1/3)	331	第577图	土擴115 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	352
第534图	墓30 (1/60) · 出土遺物 (1/3,1/4)	331	第578图	土擴116 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	352
第535图	墓31 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/2)	332	第579图	土擴117 (1/30) · 出土遺物 (1/4)	353
第536图	墓32 (1/30) · 出土遺物 (1/3)	332	第580图	土擴118 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/3)	353
第537图	墓33 (1/60) · 出土遺物 (1/2,1/3)	333			
第538图	墓34 (1/60) · 出土遺物 (1/4,1/3)	334			
第539图	墓35 (1/30) · 出土遺物 (1/3)	334			



第581図	土擴119 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4)	354
第582図	土擴120 (1/30)・出土遺物 (1/4)	355
第583図	土擴121 (1/30)・出土遺物 (1/3)	355
第584図	土擴122 (1/30)	356
第585図	土擴123 (1/30)・出土遺物 (1/3)	356
第586図	土擴124 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/6,1/3)	356
第587図	土擴125 (1/30)・出土遺物 (1/6,1/3)	357
第588図	土擴126 (1/30)・出土遺物 (1/4)	357
第589図	土擴127 (1/30)	358
第590図	土擴128 (1/30)・出土遺物 (1/3)	358
第591図	土擴129 (1/30)	358
第592図	土擴129出土遺物 (1/4,1/3)	359
第593図	土擴130 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3)	360
第594図	土擴131 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)	360
第595図	土擴132 (1/30)・出土遺物 (1/4)	361
第596図	土擴133 (1/30)	361
第597図	土擴134 (1/30)	361
第598図	土擴135 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)	362
第599図	土擴136 (1/30)・出土遺物 (1/4)	362
第600図	土擴137 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)	363
第601図	土擴138 (1/30)・出土遺物 (1/4)	363
第602図	土擴139 (1/30)・出土遺物 (1/4)	364
第603図	土擴140・141 (1/30)	364
第604図	土擴142 (1/30)	364
第605図	土擴143 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)	364
第606図	土擴144 (1/30)・出土遺物 (1/3)	365
第607図	土擴145 (1/30)	365
第608図	土擴146 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)	365
第609図	土擴147 (1/30)・出土遺物 (1/3)	366
第610図	土擴148 (1/30)・出土遺物 (1/4)	366
第611図	土擴149 (1/30)・出土遺物 (1/4)	366
第612図	土擴150 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)	367
第613図	土擴151 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)	367
第614図	土擴152 (1/30)・出土遺物 (1/3)	368
第615図	土擴153 (1/30)・出土遺物 (1/3)	368
第616図	土擴154 (1/30)・出土遺物 (1/4)	368
第617図	土擴155 (1/30)・出土遺物 (1/4)	368

第618図	土擴156 (1/30)・出土遺物 (1/3)	369
第619図	土擴157 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)	369
第620図	土擴158 (1/60)・出土遺物 (1/3,1/4)	369
第621図	土擴159 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)	370
第622図	土擴160 (1/30)・出土遺物 (1/3)	370
第623図	土擴161 (1/60)・出土遺物 (1/3)	371
第624図	土擴162 (1/30)・出土遺物 (1/3)	371
第625図	土擴163 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3)	371
第626図	土擴164 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)	371
第627図	土擴165 (1/30)・出土遺物 (1/3)	371
第628図	土擴166 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)	372
第629図	土擴167 (1/30)・出土遺物 (1/3)	372
第630図	土擴168 (1/30)・出土遺物 (1/3)	372
第631図	土擴169 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)	373
第632図	土擴170 (1/30)・出土遺物 (1/3)	373
第633図	土擴171 (1/30)・出土遺物 (1/3)	374
第634図	土擴172 (1/30)・出土遺物 (1/4)	374
第635図	土擴173・174出土遺物 (1/3)	374
第636図	土擴175 (1/30)・出土遺物 (1/3)	374
第637図	土擴176 (1/60)・出土遺物 (1/4)	376
第638図	土擴176出土遺物 (1/3)	376
第639図	土擴177 (1/30)・出土遺物 (1/3)	376
第640図	土擴178 (1/30)・出土遺物 (1/3)	376
第641図	土擴179 (1/30)・出土遺物 (1/3)	377
第642図	土擴180 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)	377
第643図	土擴181 (1/30)・出土遺物 (1/4)	377
第644図	土擴182 (1/100)	377
第645図	土擴182出土遺物 (1/4,1/3)	377
第646図	土擴183 (1/30)・出土遺物 (1/30,1/3)	378
第647図	土擴184 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)	379
第648図	土擴185 (1/30)・出土遺物 (1/3)	379
第649図	土擴186 (1/30)・出土遺物 (1/3)	380
第650図	土擴187 (1/30)・出土遺物 (1/4)	380
第651図	土擴188 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)	380
第652図	土擴189 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3,1/8)	381
第653図	土擴190 (1/30)・出土遺物 (1/4)	381

第654図	土壙191 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	381	第695図	堀1 東辺出土遺物 (1/4,1/3,1/2) ……	399
第655図	土壙192 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3,1/8) ……………	382	第696図	堀1 南辺断面 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4) ……………	400
第656図	土壙193 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	382	第697図	堀2 北辺断面 (1/30) ……	401
第657図	土壙194 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	383	第698図	堀2 北辺出土遺物 (1/4,1/3) ……	402
第658図	土壙195 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	383	第699図	堀2 東辺断面 (1/30) ……	402
第659図	土壙196 (1/100) ……	384	第700図	堀2 東辺出土遺物 (1/4,1/3) ……	403
第660図	土壙196出土遺物 (1/4,1/3) ……	384	第701図	堀2 南辺断面 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2,1/3) ……	404
第661図	土壙197 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	384	第702図	堀3 北辺断面 (1/40) ……	405
第662図	土壙198 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	384	第703図	堀3 北辺石貼平・断面 (1/300) ……	406
第663図	土壙199 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	385	第704図	堀3 東辺断面 (1/40) ……	407
第664図	土壙200 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	385	第705図	堀3・4分岐部断面 (1/30) ……	408
第665図	土壙201 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	385	第706図	堀3 東辺北部出土遺物 (1/4,1/3,1/2) ……………	408
第666図	土壙202 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	386	第707図	堀3 東辺南部断面 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	409
第667図	土壙203 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	386	第708図	堀3 南辺東部断面 (1/40) ……	410
第668図	土壙204 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	386	第709図	堀3 東辺南部・南辺東部出土遺物 (1/4) ……………	411
第669図	土壙205 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	387	第710図	堀3 南辺東部出土遺物 (1/4,1/3) ……	412
第670図	土壙206 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	387	第711図	堀3 南辺西部断面 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	413
第671図	土壙207 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4) ……………	387	第712図	堀4 断面 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	414
第672図	土壙208 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	388	第713図	溝22断面 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	415
第673図	土壙209 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	388	第714図	溝23平・断面 (1/30) ……	415
第674図	土壙210 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	388	第715図	溝23出土遺物 (1/4,1/3) ……	416
第675図	土壙211 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	389	第716図	溝24 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	417
第676図	土壙212 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	389	第717図	溝25 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……	417
第677図	土壙213 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	389	第718図	溝26 (1/30) ……	418
第678図	土壙214 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	390	第719図	溝27 (1/30) ……	418
第679図	土壙215 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	391	第720図	溝28 (1/30) ……	418
第680図	土壙216 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	391	第721図	溝29 (1/30) ……	418
第681図	土壙217 (1/30) ……	392	第722図	溝30 (1/30) ……	418
第682図	土壙218 (1/30) ……	392	第723図	溝31 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4) ……	419
第683図	土壙219 (1/30) ……	392	第724図	溝32 (1/30) ……	419
第684図	土壙220 (1/30) ……	393	第725図	溝33 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……	419
第685図	土壙221 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	393	第726図	溝34 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……	420
第686図	土壙222 (1/30) ……	394	第727図	溝35 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	420
第687図	土壙223 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	395	第728図	溝36 (1/30) ……	421
第688図	土壙224 (1/100)・出土遺物 (1/4) ……	395	第729図	溝37 (1/30) ……	421
第689図	土壙225 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	396	第730図	溝38 (1/30) ……	421
第690図	土壙226 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	396	第731図	溝39 (1/30) ……	421
第691図	堀1～4 断面位置 (1/1,500) ……	397	第732図	溝40 (1/30) ……	421
第692図	堀1～3 断面図 (1/160) ……	397	第733図	溝41 (1/30) ……	421
第693図	堀1 北辺断面 (1/30) ……	398	第734図	溝42 (1/30) ……	421
第694図	堀1 東辺断面 (1/30) ……	398	第735図	溝43 (1/30) ……	422

第736図	溝44 (1/30) ……………	422	第779図	I地区の遺物 (1/4,1/3) ……………	451
第737図	溝45 (1/30) ……………	422	第780図	J地区の遺物① (1/4) ……………	452
第738図	溝46 (1/30) ……………	423	第781図	J地区の遺物② (1/4,1/6) ……………	453
第739図	溝47 (1/30) ……………	423	第782図	J地区の遺物③ (1/4) ……………	454
第740図	溝48 (1/30) ……………	423	第783図	J地区の遺物④ (1/4,1/8,1/3) ……………	455
第741図	溝49 (1/30) ……………	423	第784図	J地区の遺物⑤ (1/3) ……………	456
第742図	溝50 (1/30) ……………	423	第785図	J地区の遺物⑥ (1/3) ……………	457
第743図	溝51 (1/30) ……………	423	第786図	K地区の遺物① (1/4) ……………	458
第744図	火処78 (1/30) ……………	424	第787図	K地区の遺物② (1/4) ……………	459
第745図	土器溜まり12出土遺物 (1/4) ……………	424	第788図	K地区の遺物③ (1/4) ……………	460
第746図	土器溜まり13 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	425	第789図	K地区の遺物④ (1/3) ……………	461
第747図	土器溜まり13出土遺物 (1/4,1/3) ……………	426	第790図	近世遺構群と現代の土地利用 (1/1,000) ……………	462
第748図	土器溜まり14 (1/4) ……………	427	第791図	近世遺構全体図 (1/2,000) ……………	463
第749図	土器溜まり15出土遺物 (1/4) ……………	427	第792図	近世主要遺構部分図① (1/400) ……………	464
第750図	土器溜まり16出土遺物 (1/4) ……………	428	第793図	近世主要遺構部分図② (1/400) ……………	465
第751図	土器溜まり17出土遺物 (1/4,1/3) ……………	428	第794図	近世主要遺構部分図③ (1/400) ……………	466
第752図	窪地9断面 (1/60)・出土遺物 (1/3) ……………	429	第795図	近世主要遺構部分図④ (1/400) ……………	467
第753図	窪地10断面 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	429	第796図	近世主要遺構部分図⑤ (1/500) ……………	468
第754図	窪地11断面 (1/120)・出土遺物 (1/4) ……………	430	第797図	掘立柱建物68 (1/100) ……………	469
第755図	窪地12断面 (1/100) ……………	430	第798図	掘立柱建物69 (1/100) ……………	470
第756図	窪地12出土遺物 (1/4,1/3) ……………	431	第799図	掘立柱建物70 (1/100)・出土遺物 (1/4) ……………	471
第757図	窪地13断面 (1/60) ……………	431	第800図	掘立柱建物71 (1/100)・出土遺物 (1/4) ……………	471
第758図	柱穴1～13出土遺物 (1/4) ……………	432	第801図	掘立柱建物72 (1/150) ……………	472
第759図	柱穴14 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	433	第802図	掘立柱建物73 (1/100) ……………	473
第760図	柱穴15出土遺物 (1/4) ……………	434	第803図	掘立柱建物74 (1/100) ……………	473
第761図	柱穴16出土遺物 (1/4) ……………	434	第804図	掘立柱建物75 (1/100) ……………	474
第762図	柱穴18 (1/10)・出土遺物 (1/2) ……………	435	第805図	掘立柱建物76 (1/100) ……………	474
第763図	遺構に伴わない遺物の地区割り (1/3,000) ……………	436	第806図	掘立柱建物77 (1/100) ……………	475
第764図	A地区の遺物 (1/4,1/2) ……………	437	第807図	掘立柱建物78 (1/100) ……………	476
第765図	B地区の遺物① (1/4) ……………	438	第808図	掘立柱建物79 (1/100) ……………	476
第766図	B地区の遺物② (1/3,1/8) ……………	439	第809図	掘立柱建物80 (1/100) ……………	477
第767図	C地区の遺物① (1/4) ……………	440	第810図	掘立柱建物81 (1/100) ……………	477
第768図	C地区の遺物② (1/4,1/3) ……………	441	第811図	掘立柱建物82 (1/100) ……………	478
第769図	C地区の遺物② (1/8,1/3,1/2) ……………	442	第812図	掘立柱建物83 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/8) ……………	479
第770図	D地区の遺物 (1/4,1/3) ……………	443	第813図	掘立柱建物84 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/2,1/3) ……………	480
第771図	E地区の遺物① (1/4) ……………	444	第814図	柱穴列4～6 (1/100) ……………	481
第772図	E地区の遺物② (1/4,1/8,1/2,1/3) ……………	445	第815図	柱穴列7・8 (1/100) ……………	482
第773図	F地区の遺物① (1/4) ……………	446	第816図	柱穴列9 (1/100) ……………	482
第774図	F地区の遺物② (1/4,1/3,1/2) ……………	447	第817図	柱穴列10 (1/100)・出土遺物 (1/8) ……………	482
第775図	F地区の遺物③ (1/3) ……………	448	第818図	柱穴列11・12 (1/100) ……………	483
第776図	G地区の遺物① (1/4) ……………	449	第819図	井戸1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	484
第777図	G地区の遺物② (1/2,1/3) ……………	450	第820図	井戸2 (1/30) ……………	485
第778図	H地区の遺物 (1/4) ……………	450	第821図	井戸2出土遺物 (1/4) ……………	486

第822図	井戸3 (1/30) ……………	486
第823図	墓37 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	487
第824図	墓38 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	487
第825図	墓39 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	487
第826図	墓40 (1/30) ……………	488
第827図	墓41 (1/30) ……………	488
第828図	墓42 (1/30) ……………	488
第829図	墓43 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	488
第830図	墓44 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	489
第831図	墓45 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	489
第832図	墓46 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2) ……………	490
第833図	墓47 (1/60)・出土遺物 (1/3) ……………	491
第834図	墓48 (1/30) ……………	491
第835図	墓49 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	491
第836図	墓50 (1/30) ……………	491
第837図	墓51 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	492
第838図	墓52 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	492
第839図	墓53 (1/30) ……………	492
第840図	墓54 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	493
第841図	墓55 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	493
第842図	墓56 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	493
第843図	墓57 (1/30) ……………	493
第844図	墓58 (1/60)・出土遺物 (1/3) ……………	494
第845図	墓59 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	494
第846図	墓60 (1/30) ……………	494
第847図	墓61 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2) ……………	495
第848図	墓62 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	495
第849図	墓63 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	495
第850図	墓64 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	496
第851図	墓65 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	496
第852図	墓66 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	497
第853図	墓67 (1/30) ……………	497
第854図	墓68 (1/30) ……………	497
第855図	墓69 (1/30) ……………	497
第856図	墓70 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	498
第857図	墓71 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	498
第858図	墓72 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	498
第859図	墓73 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	499
第860図	墓74 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3) ……………	499
第861図	墓75~77 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3) ……………	500
第862図	墓78 (1/30) ……………	500
第863図	墓79 (1/30)・出土遺物・出土遺物 (1/3,1/2) ……………	501
第864図	墓80 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	501
第865図	墓81 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	502
第866図	墓82 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3) ……………	502
第867図	墓83 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4) ……………	503
第868図	墓84 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	503
第869図	墓85 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	503
第870図	墓86 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2) ……………	504
第871図	墓87 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	504
第872図	墓88 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2) ……………	505
第873図	墓89 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3) ……………	506
第874図	墓90・91 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	506
第875図	墓92 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	507
第876図	墓93 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3,1/2) ……………	507
第877図	墓94 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2) ……………	508
第878図	土擴227 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	508
第879図	土擴228 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4) ……………	509
第880図	土擴229 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	510
第881図	土擴230 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	510
第882図	土擴231 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	511
第883図	土擴232 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3) ……………	511
第884図	土擴233 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	511
第885図	土擴234 (1/30) ……………	512
第886図	土擴235 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	512
第887図	土擴236 (1/30) ……………	512
第888図	土擴237 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	512
第889図	土擴238 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	513
第890図	土擴239 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	513
第891図	土擴240 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	514
第892図	土擴241 (1/30)・出土遺物 (1/3) ……………	514
第893図	土擴242 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	514
第894図	土擴243 (1/30) ……………	514
第895図	土擴244 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	515
第896図	土擴245 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	515
第897図	土擴246 (1/3) ……………	515
第898図	堀3 縦断面 (1/100) ……………	516
第999図	堀3 出土遺物 (1/4,1/3) ……………	517
第900図	溝52 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	518
第901図	溝53 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3) ……………	518
第902図	溝54 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	518
第903図	溝55 (1/30) ……………	518
第904図	溝56 (1/30) ……………	519
第905図	溝57 (1/30) ……………	519
第906図	溝58 (1/30) ……………	519
第907図	溝59 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	519
第908図	柱穴19 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) ……………	520
第909図	柱穴出土遺物 (1/4) ……………	520
第910図	遺構に伴わない遺物① (1/4,1/3,1/2)	

.....521  
 第911図 遺構に伴わない遺物② (1/4,1/2) .....522

第912図 遺構に伴わない遺物③ (1/4,1/2,1/3) .....522  
 第913図 遺構に伴わない遺物④ (1/4,1/2,1/3) .....523

## 写真目次

写真15 居館部分航空写真  
 写真16 掘立柱建物6作業風景(東から)  
 写真17 掘立柱建物18完掘状況(東から)  
 写真18 掘立柱建物19作業風景(西から)  
 写真19 掘立柱建物21完掘状況(北から)  
 写真20 周辺遺物出土状況  
 写真21 柱穴内礎石  
 写真22 掘立柱建物35・36完掘状況(北から)  
 写真23 掘立柱建物58・59全景(南から)  
 写真24 掘立柱建物64・65全景(東から)  
 写真25 柱穴列1・掘立柱建物48(東から)  
 写真26 竪穴遺構1遺物出土状況(西から)  
 写真27 墓3・4(南から)  
 写真28 墓5銭出土状況(南から)  
 写真29 墓7(南から)  
 写真30 幕15刀出土状況(南から)  
 写真31 幕23(北から)  
 写真32 幕31(南から)  
 写真33 合子出土状況(東から)  
 写真34 土壌114(南から)  
 写真35 土壌129遺物出土状況(北から)  
 写真36 土壌138(西から)  
 写真37 漆膜「吉」字  
 写真38 土壌129(東から)

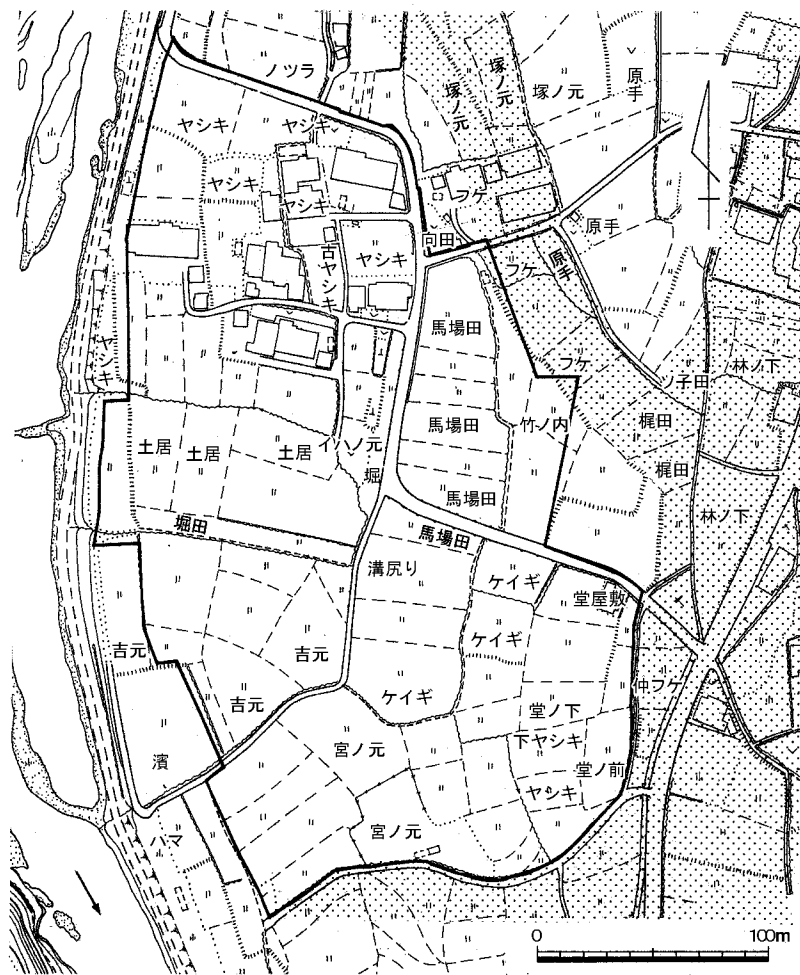
写真39 土壌215(南から)  
 写真40 土壌221(西から)  
 写真41 土壌225(南から)  
 写真42 堀1掘り下げ作業風景(東から)  
 写真43 堀2南辺作業風景(東から)  
 写真44 堀3石貼り部分  
 写真45 堀3掘り下げ作業風景(南から)  
 写真46 溝23遺物出土状況(南から)  
 写真47 窪地11完掘状況(東から)  
 写真48 柱穴14遺物出土状況(南から)  
 写真49 柱穴16遺物出土状況  
 写真50 柱穴17出土遺物  
 写真51 A地区全景(北から)  
 写真52 M604処理前状況  
 写真53 J地区の航空写真  
 写真54 近世遺構群(上空から)  
 写真55 掘立柱建物79(南から)  
 写真56 掘立柱建物80・81(南から)  
 写真57 掘立柱建物84作業風景(東から)  
 写真58 墓46(北から)  
 写真59 幕72(東から)  
 写真60 幕73・74作業風景(東から)  
 写真61 土壌227(南から)  
 写真62 堀3縦断面(西から)

## 第5節 古代・中世の遺構と遺物

## 1 概要

発掘当初より「堀」、「堀田」といった水田の字とその形状から、堀に区画された居館遺跡が想定されていた。その推定居館部分の北半部には、現代までの集落が存在し、それより南には水田が広がるといった景観を呈していたが、さらに発掘調査によって、堀の外である南側にも中世の遺構群が存在することが明らかとなった。また、北に接する久田原遺跡とは一連の存在と考えられ、便宜上水田畦境などで両遺跡間の線引きを行っている。ただ、両遺跡の間には、現在の水田にもその痕跡をとどめる旧河道が存在しており、これが本来的には両集落の境であったと考えられる。

検出した遺構には、堀、掘立柱建物、竪穴遺構、土墳墓、土塙、溝などがある。このうち推定居館を囲う堀は3条検出したが各々時期差があり、居館は新しくなるにつれ拡大してゆくことが明らかとなったほか、外堀から枝状に突出した堀1条もみられた。また居館区画外においても建物と矩形に囲う溝の存在から複数の屋敷地が展開していたとみられる。これらの遺構や包含層中からは、和鏡、賀



第415図 調査範囲と字 (1/3,000)



写真15 居館部分航空写真  
(平成11・12・13年度撮影の航空写真を合成)

易陶磁を初め多種多様な遺物が出土している。ただし、それらのほとんどが中世に属し、削平によるものか古代の遺構と遺物は皆無に等しかった。(弘田)



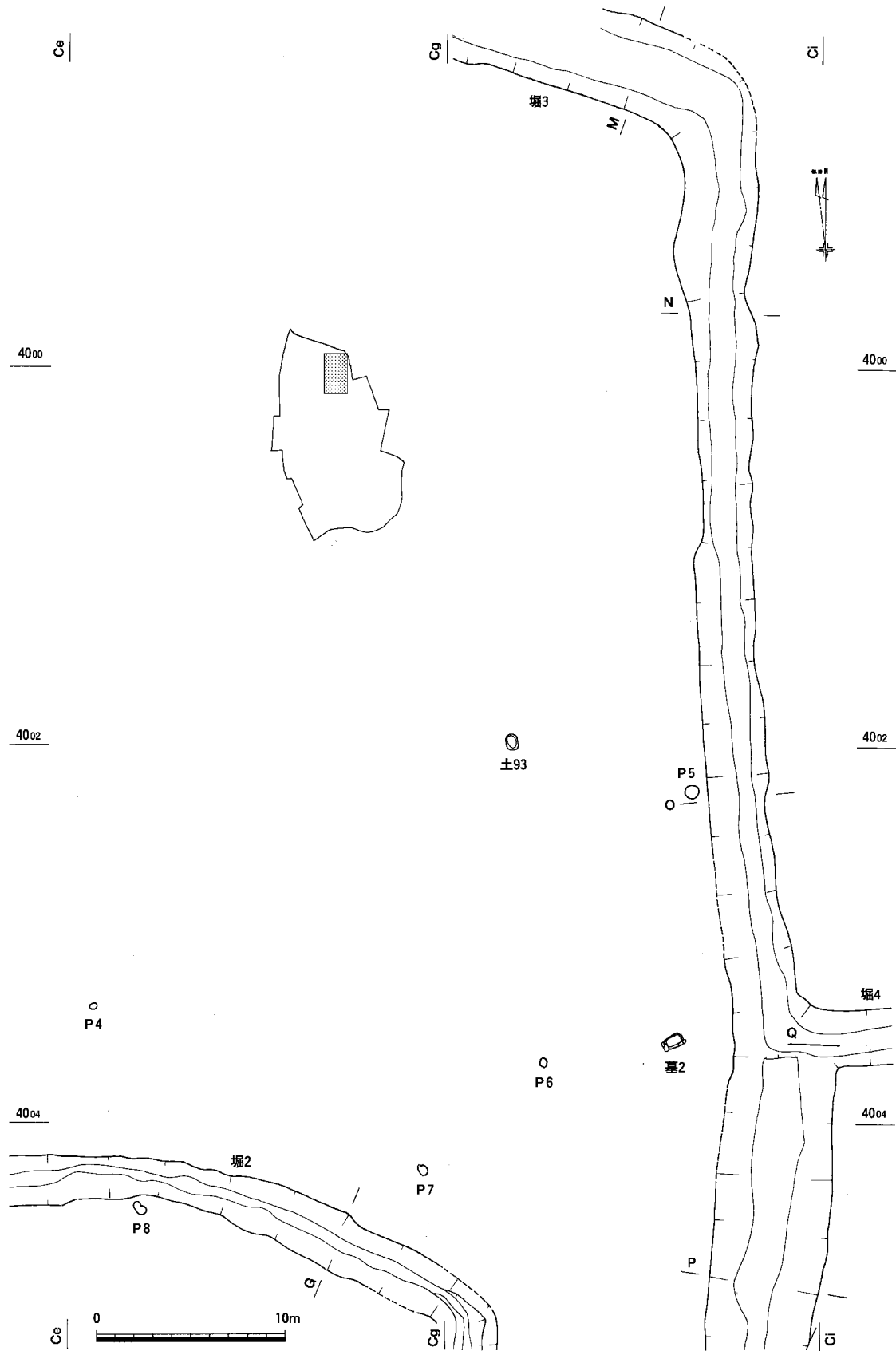
第416図 古代・中世遺構全体図 (1/2,000)



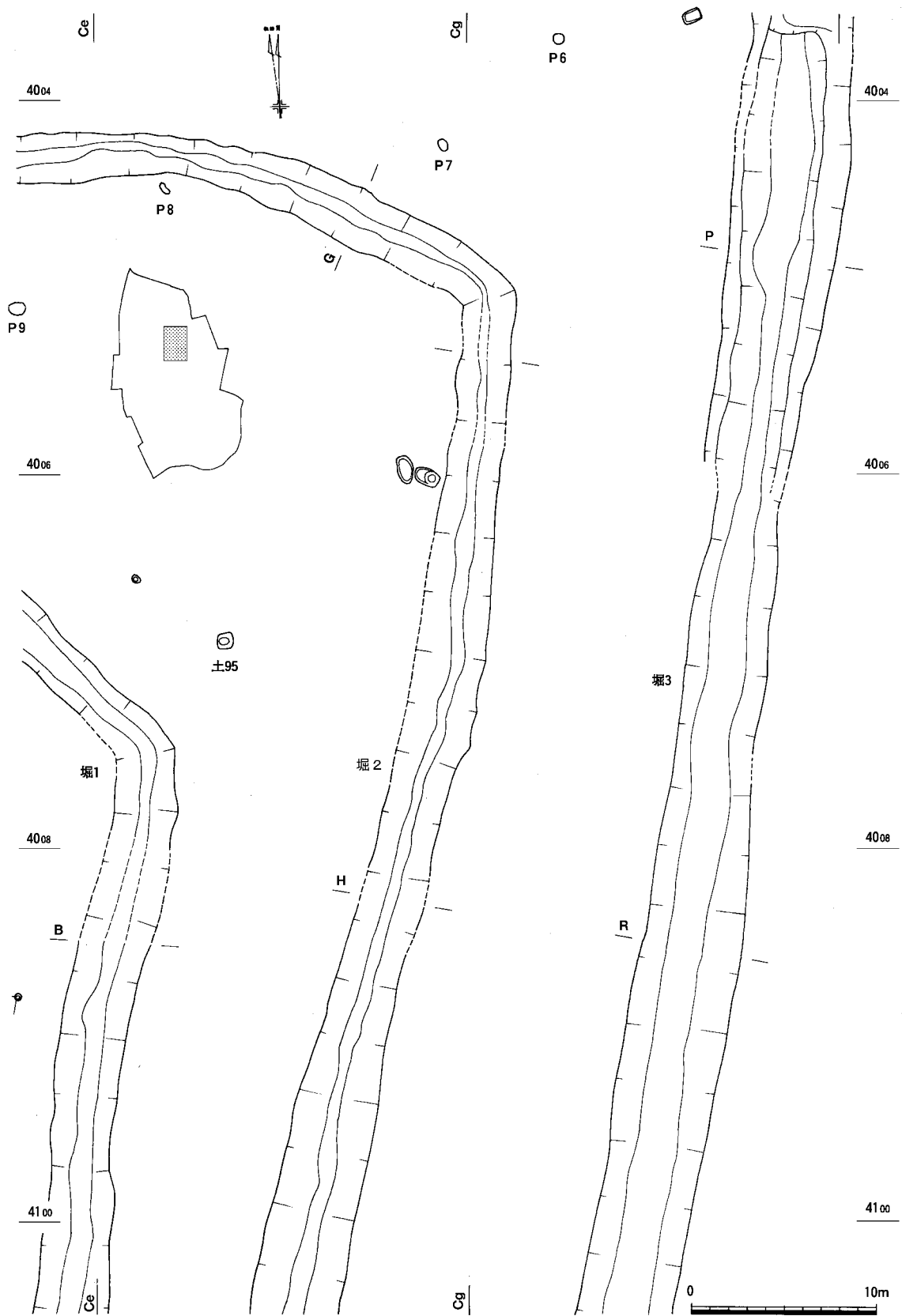
第3章 発掘調査の概要



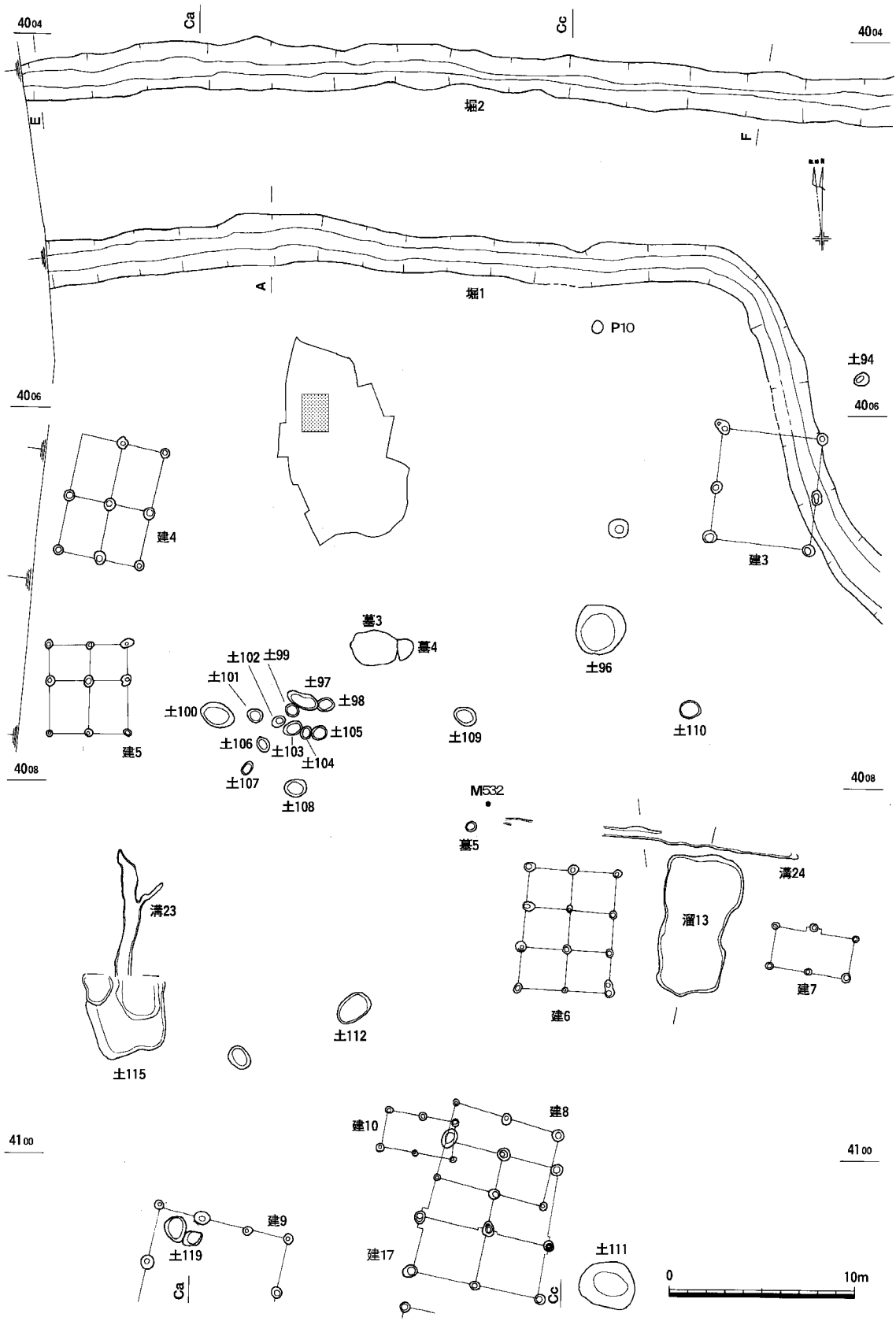
第417図 主要遺構部分図① (1/400)



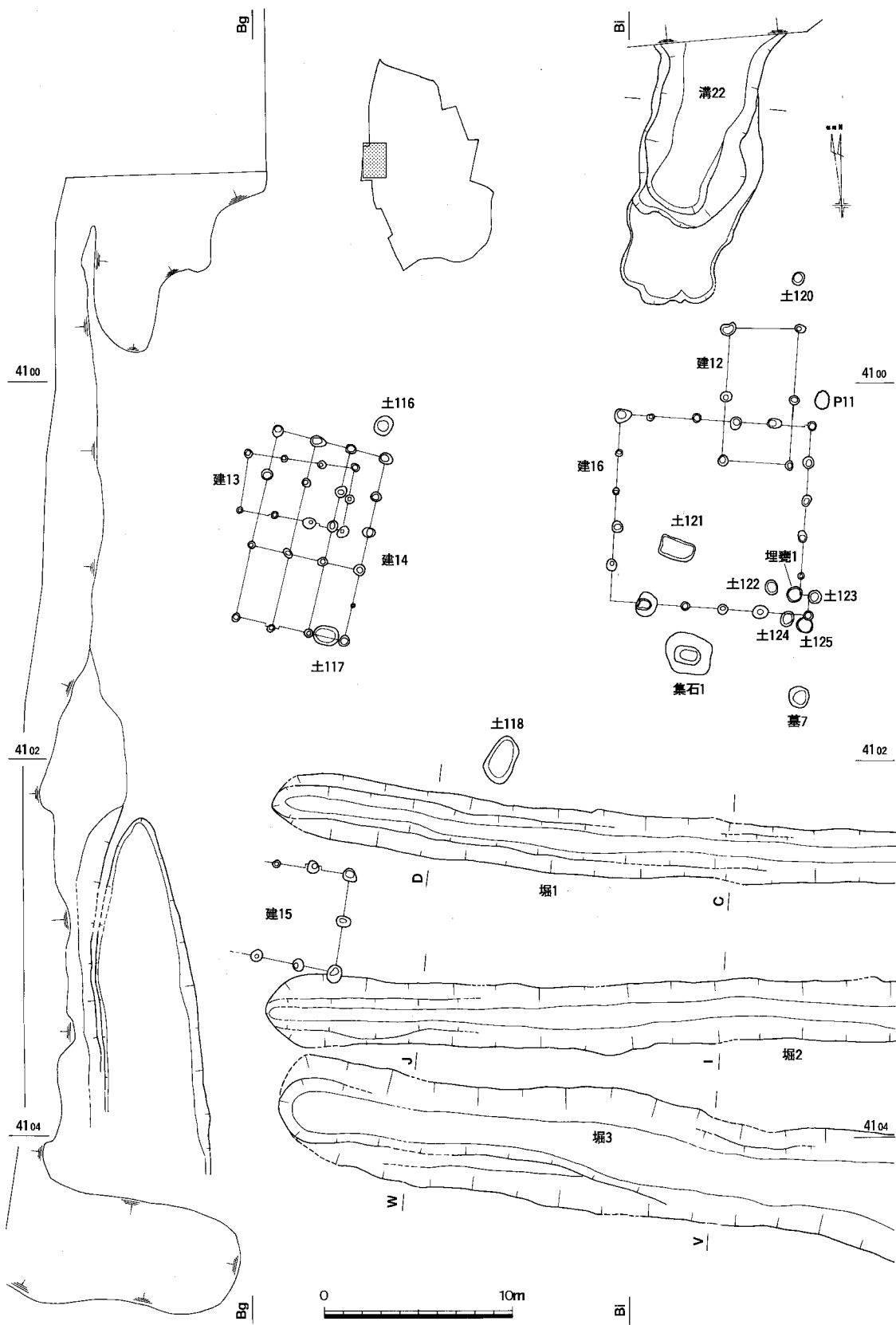
第418図 主要遺構部分図② (1/300)



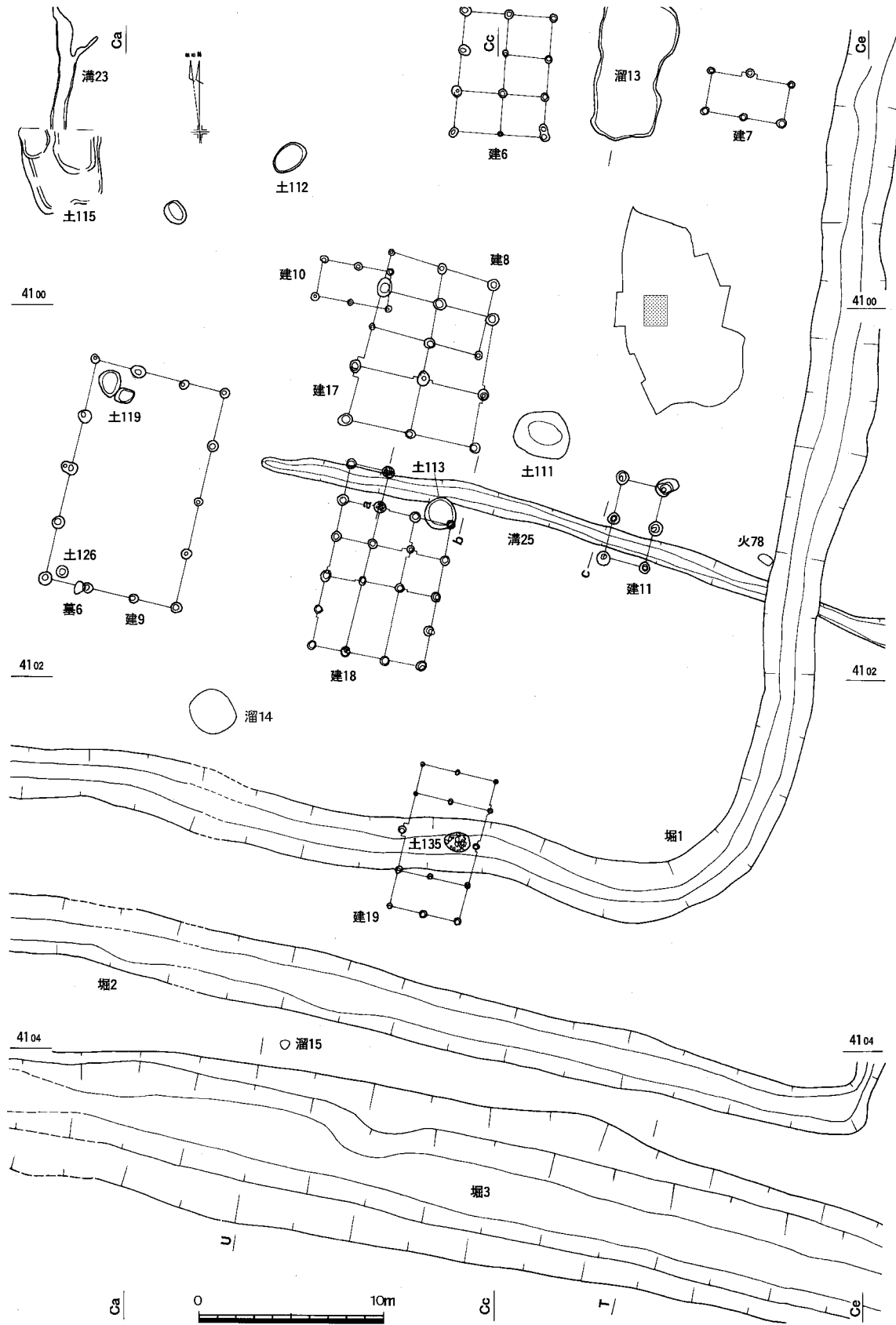
第419図 主要遺構部分図③ (1/300)



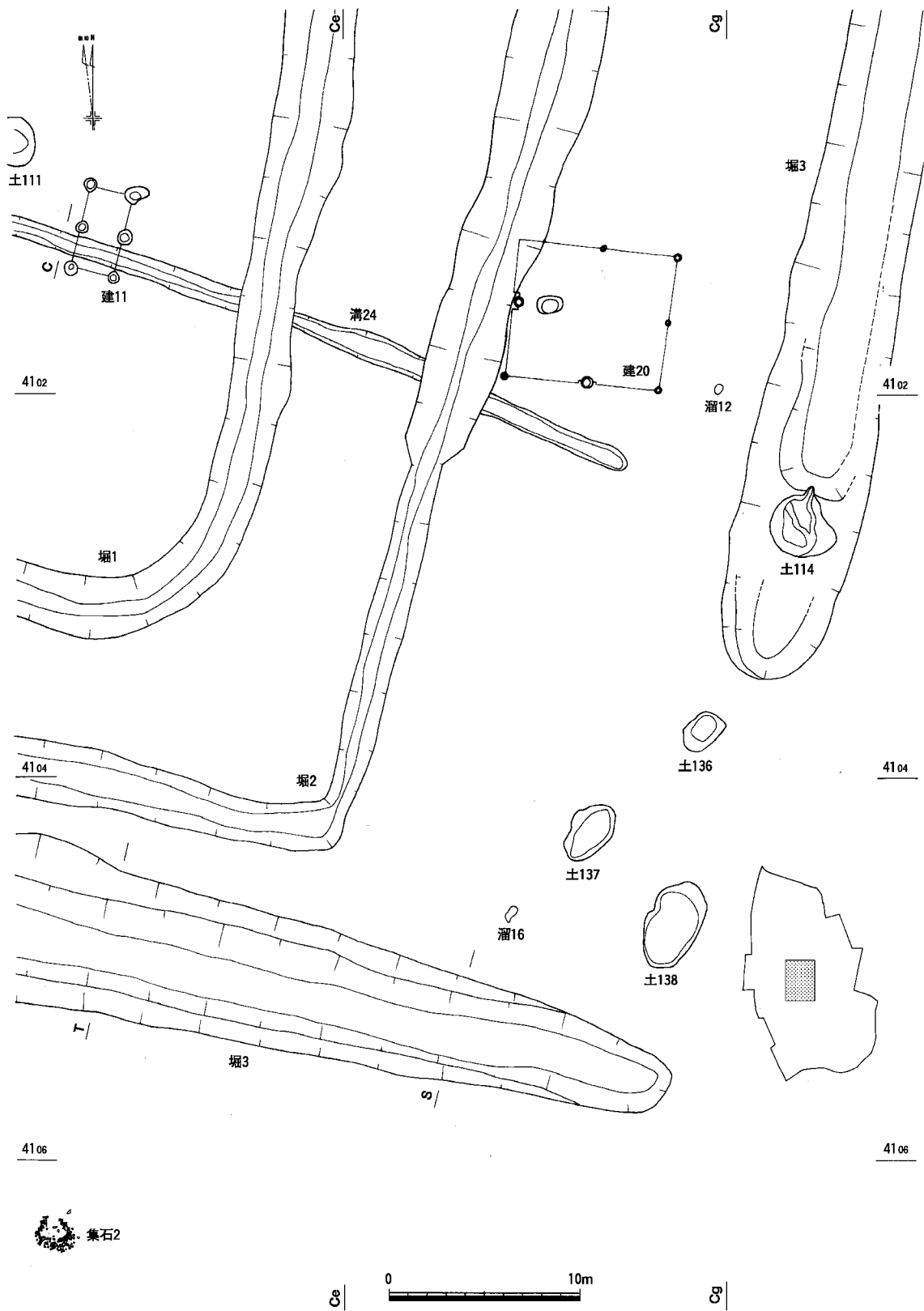
第420図 主要遺構部分図④ (1/300)



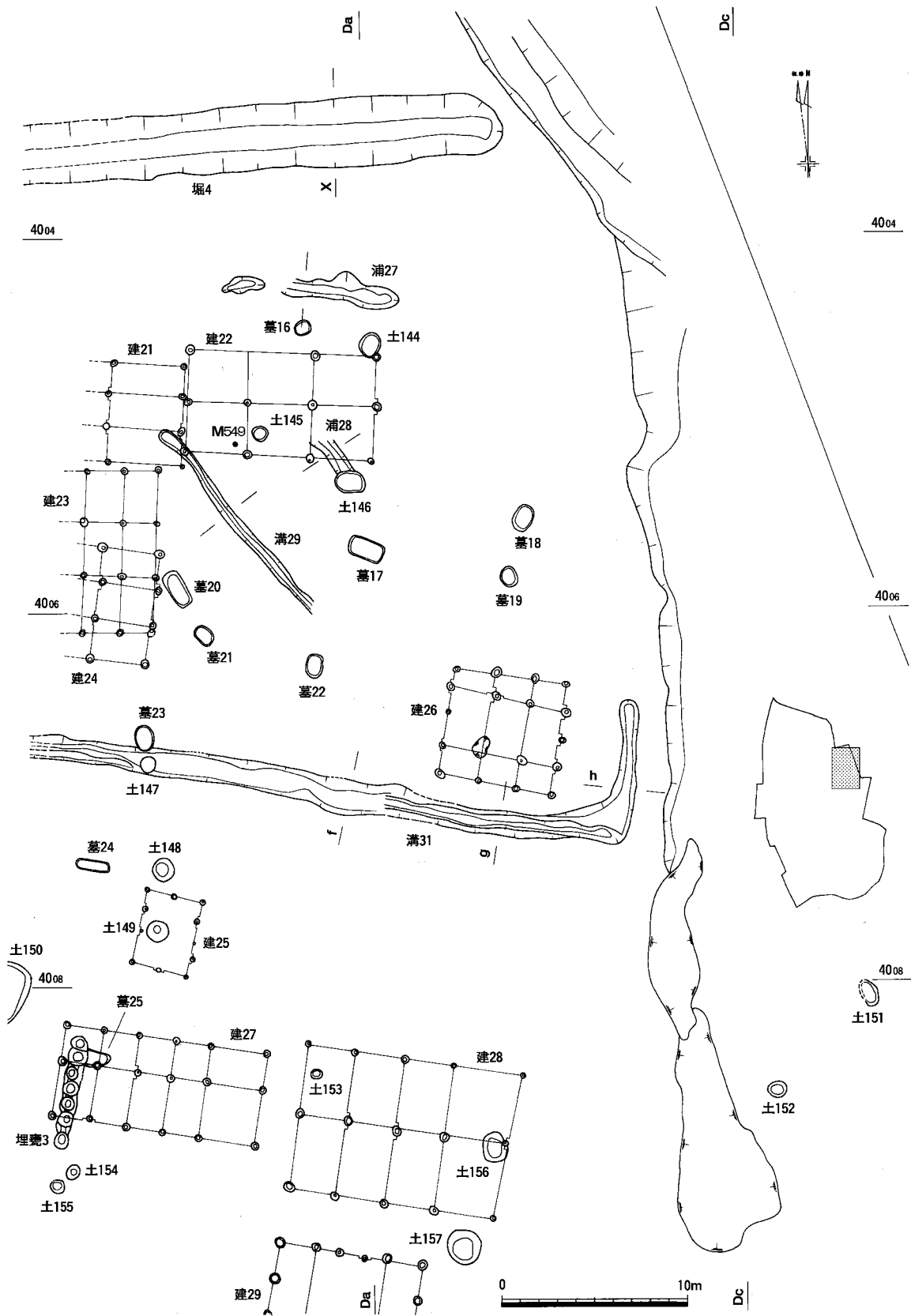
第421図 主要遺構部分図⑤ (1/300)



第422図 主要遺構部分図⑥ (1/300)



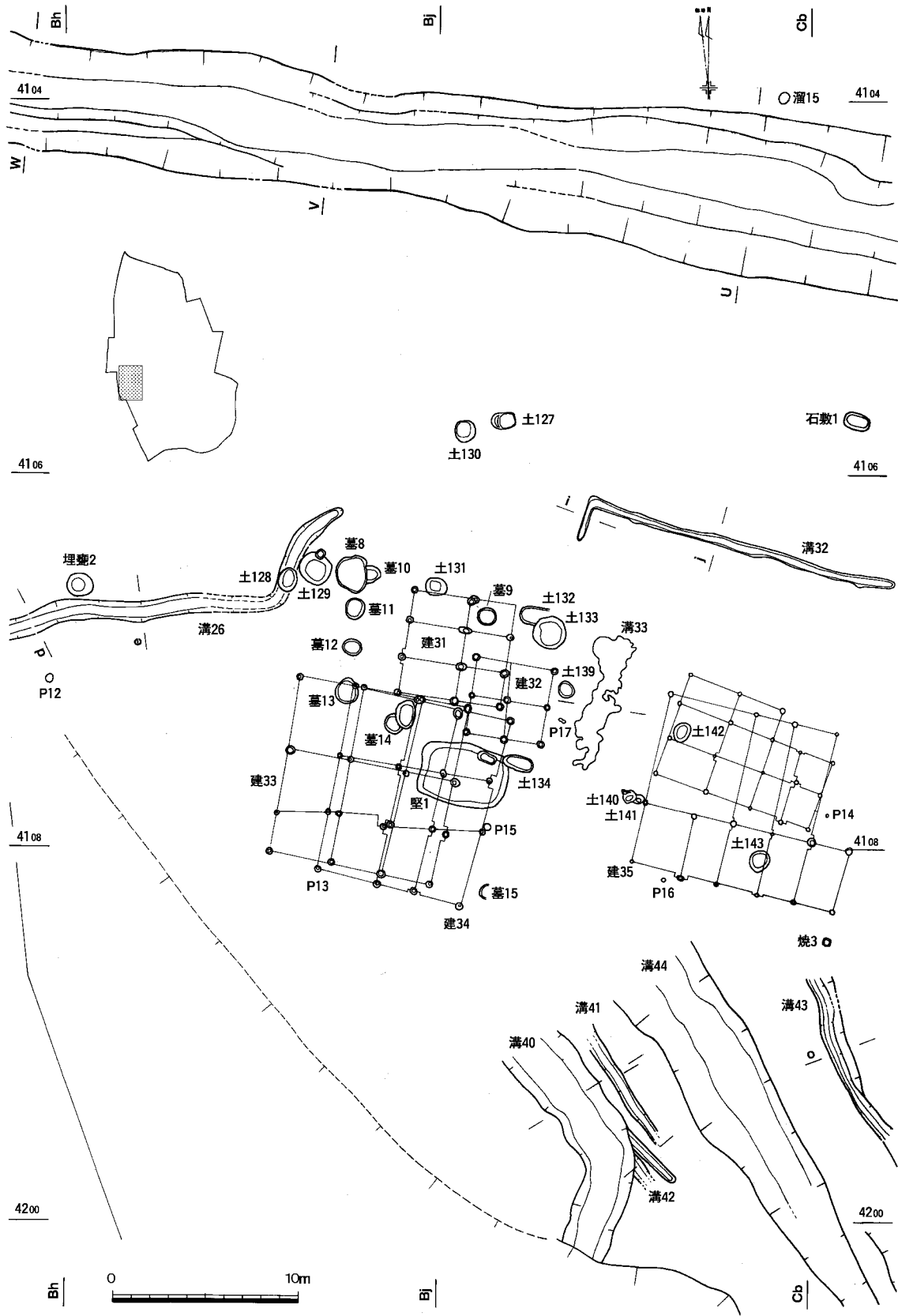
第423図 主要遺構部分図⑦ (1/300)



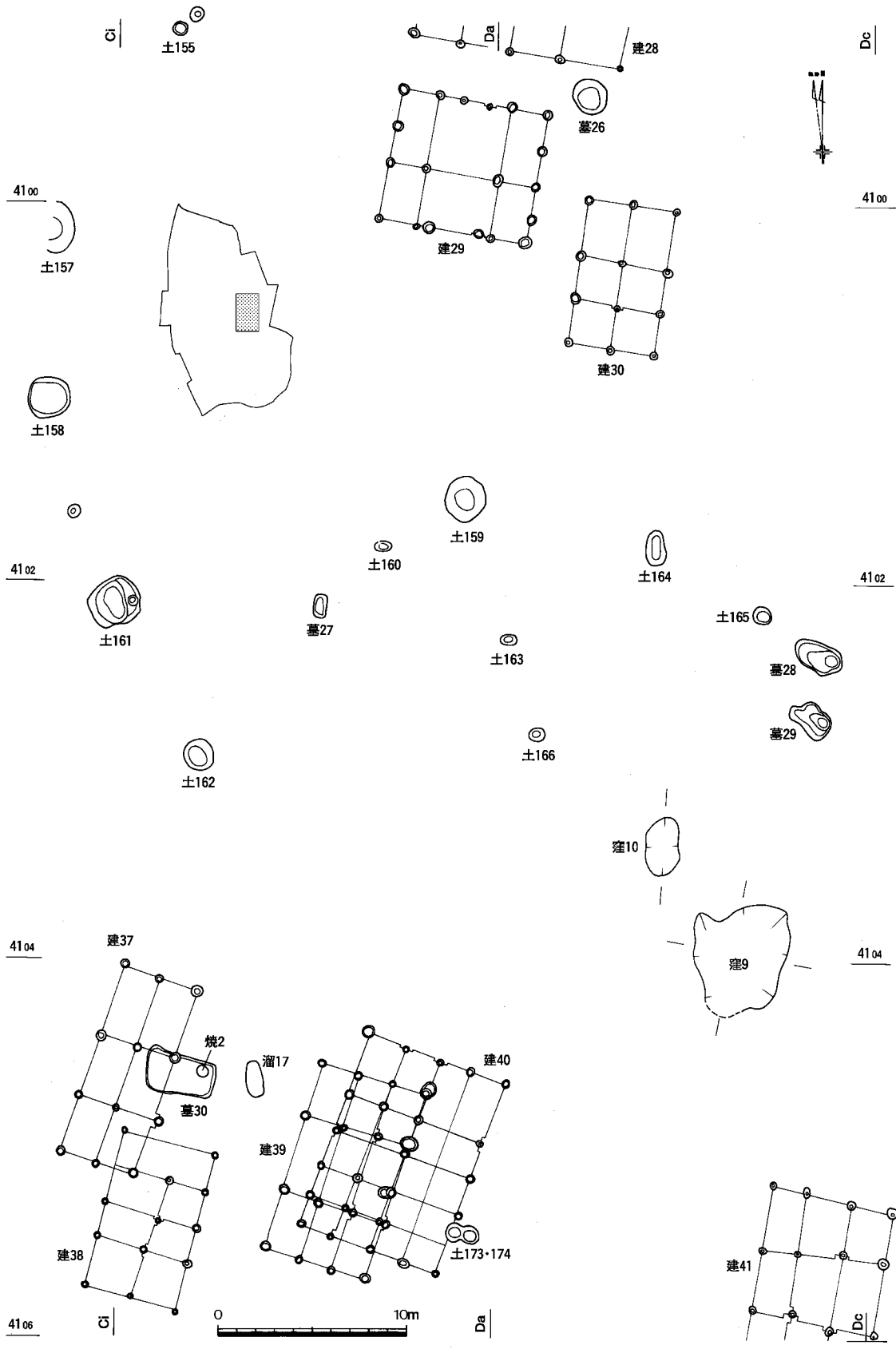
第424図 主要遺構部分図⑧ (1/300)



第3章 発掘調査の概要

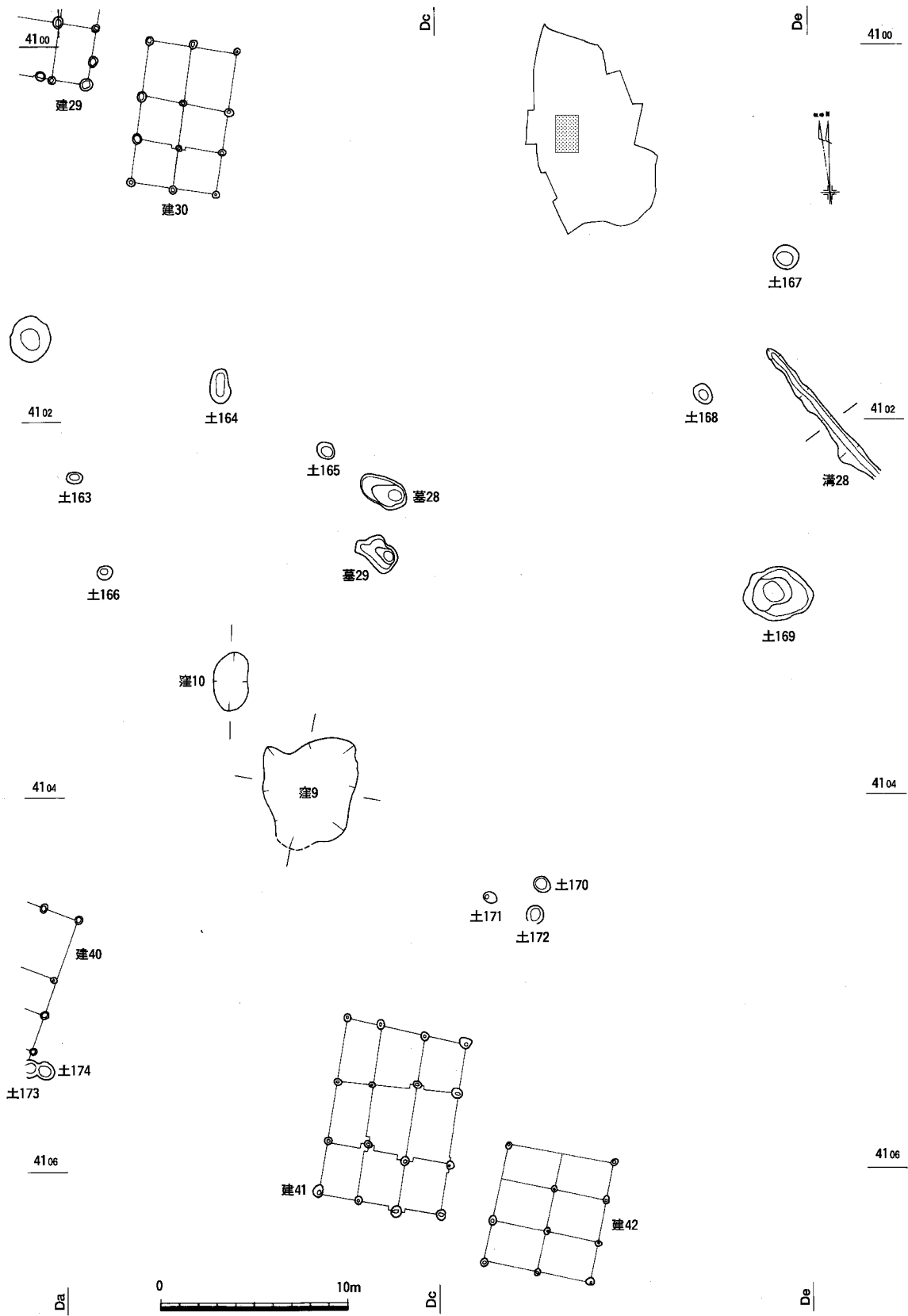


第425図 主要遺構部分図⑨ (1/300)

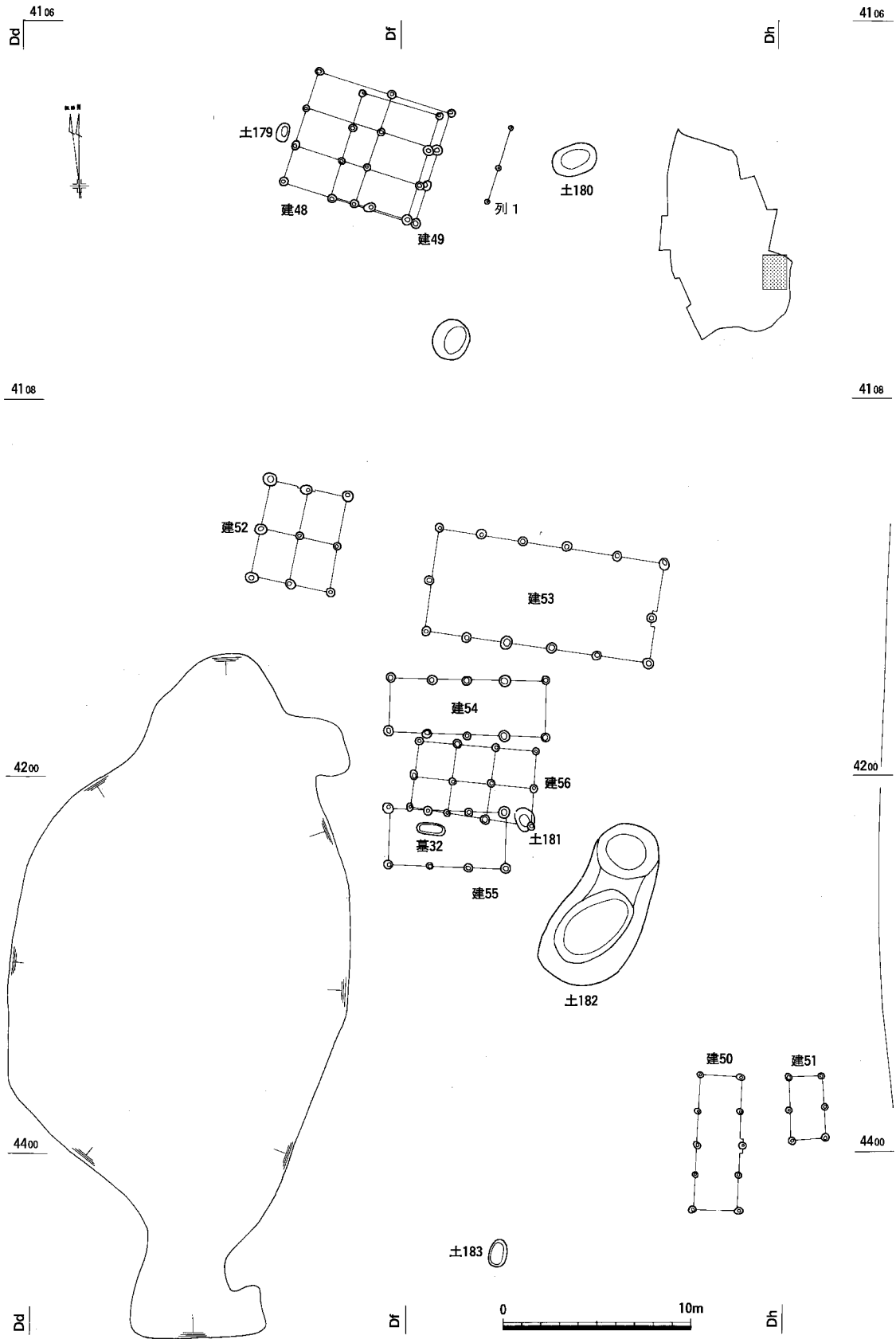


第426図 主要遺構部分図⑩ (1/300)

第3章 発掘調査の概要

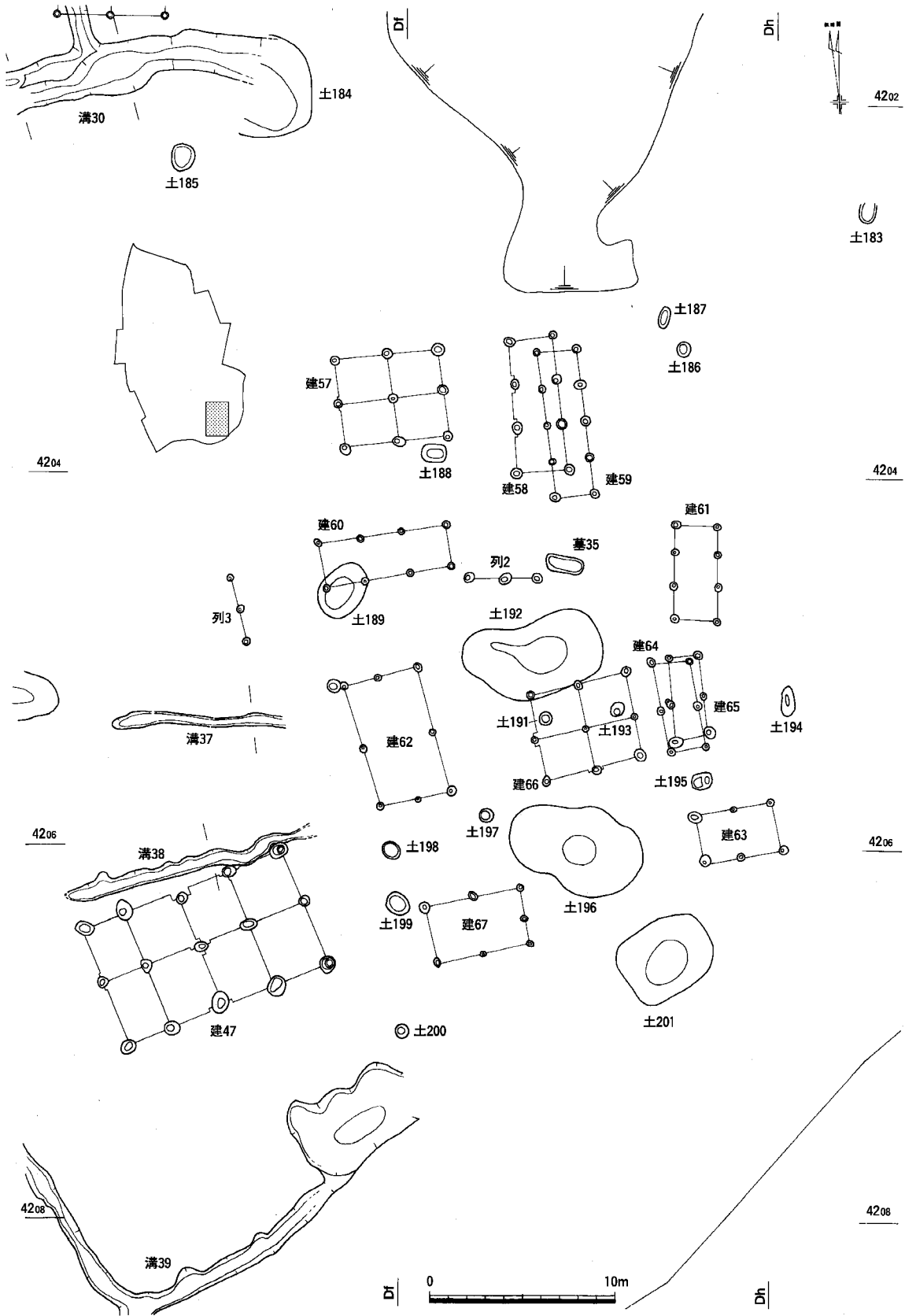


第427図 主要遺構部分図⑪ (1/300)

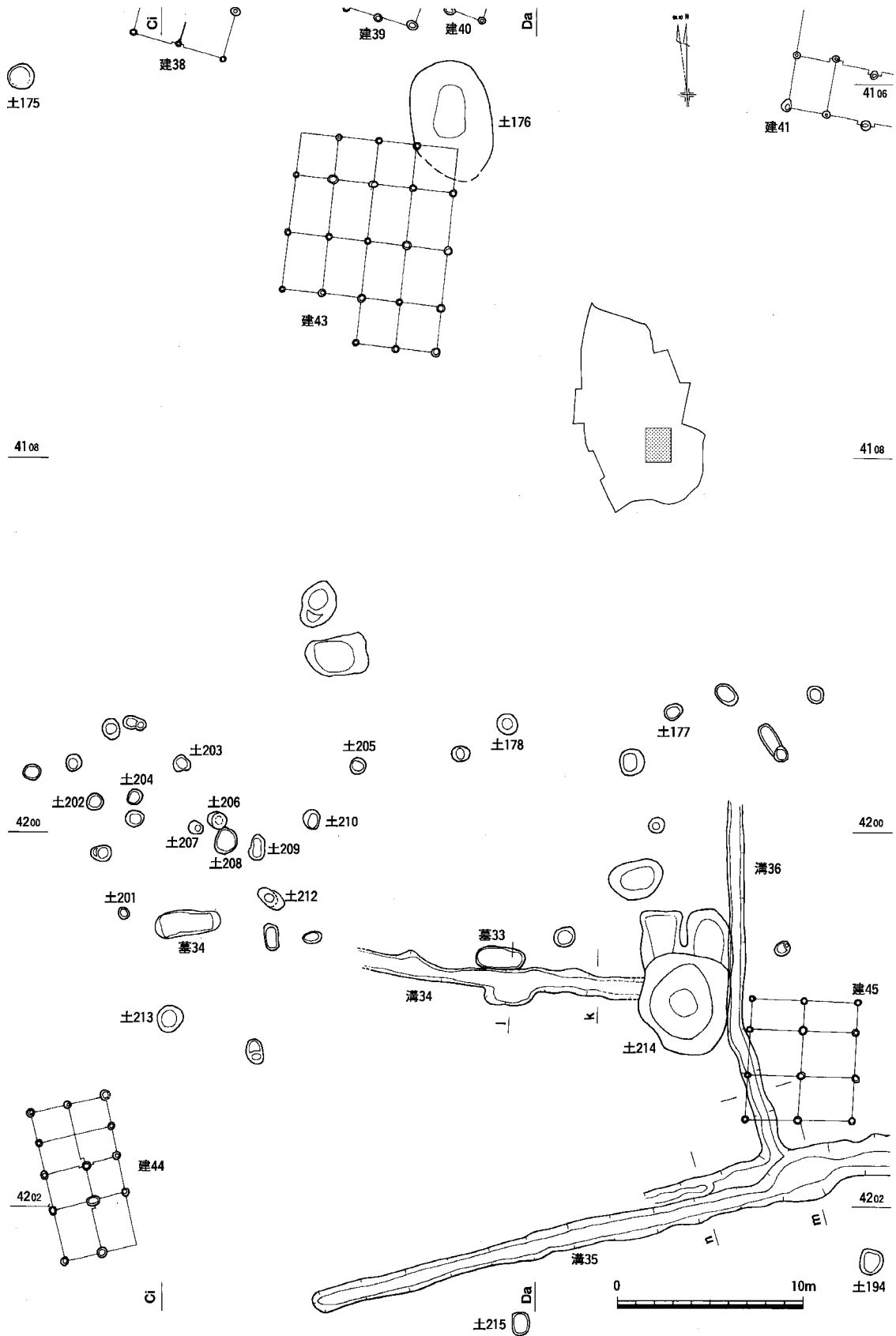


第428図 主要遺構部分図⑫ (1/300)

第3章 発掘調査の概要

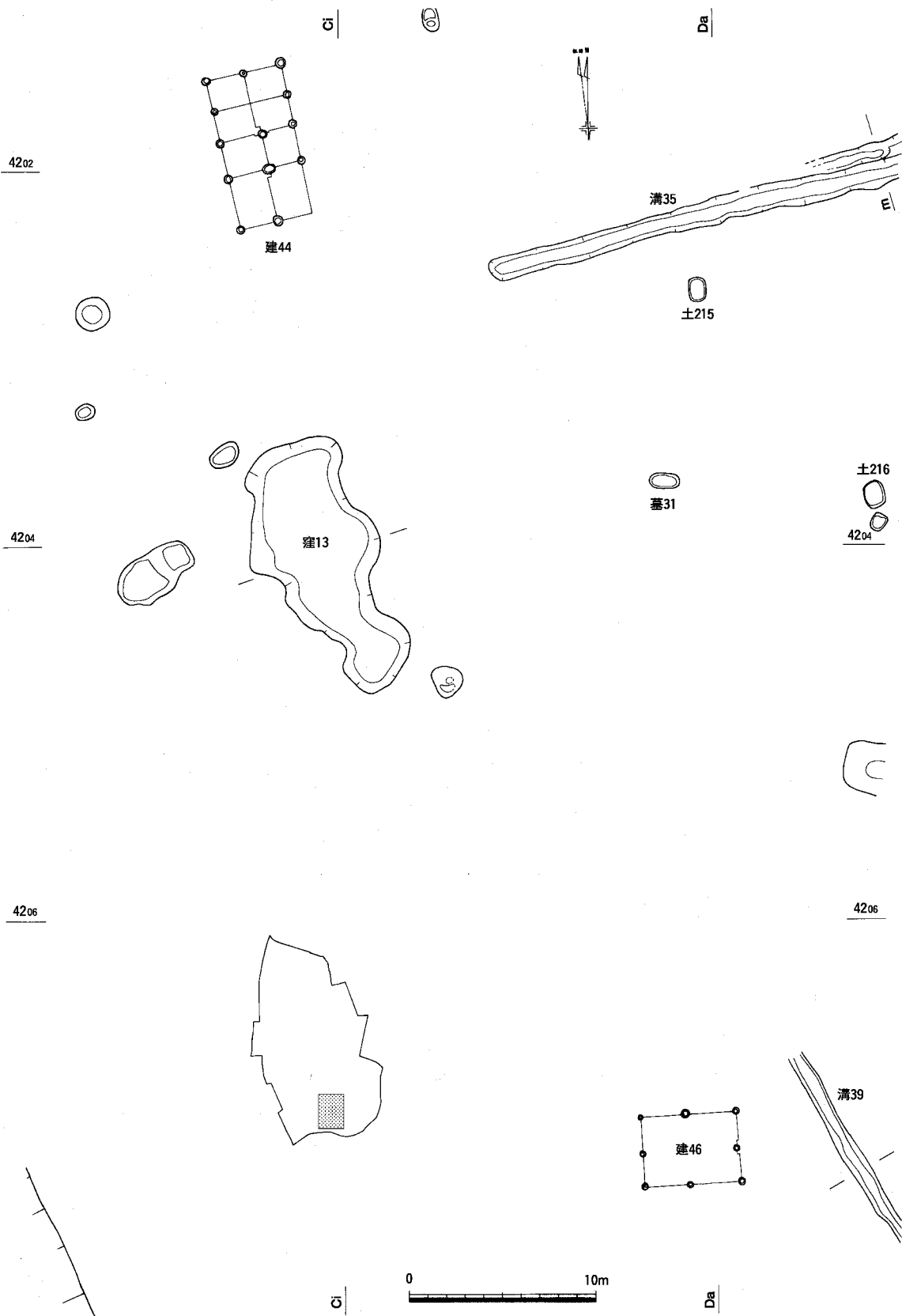


第429図 主要遺構部分図⑬ (1/300)

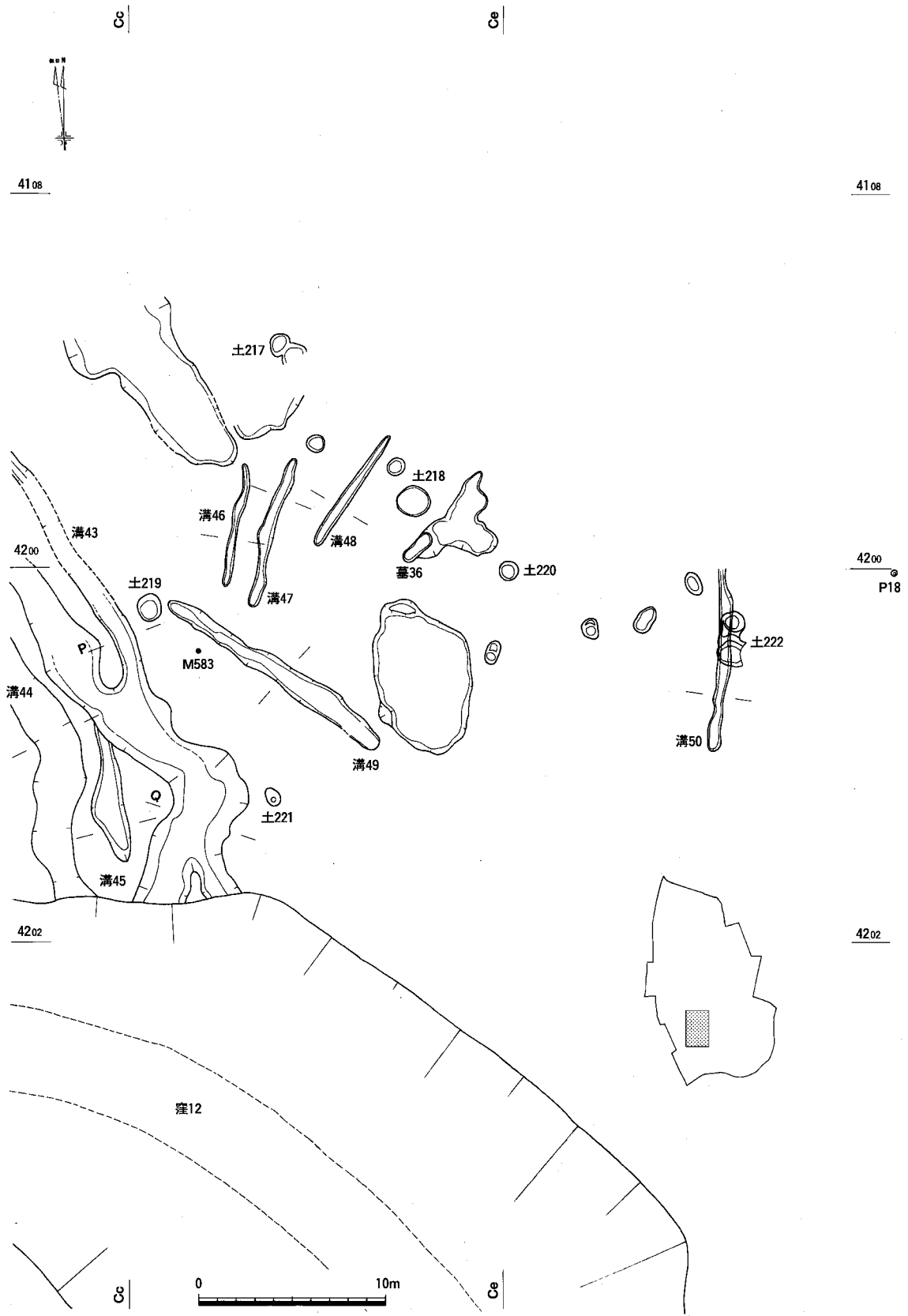


第430図 主要遺構部分図⑭ (1/300)

第3章 発掘調査の概要



第431図 主要遺構部分図⑮ (1/300)



第432図 主要遺構部分図⑬ (1/300)





第433図 主要遺構部分図① (1/400)

## 2 掘立柱建物

### 掘立柱建物3 (第420・434図、図版97)

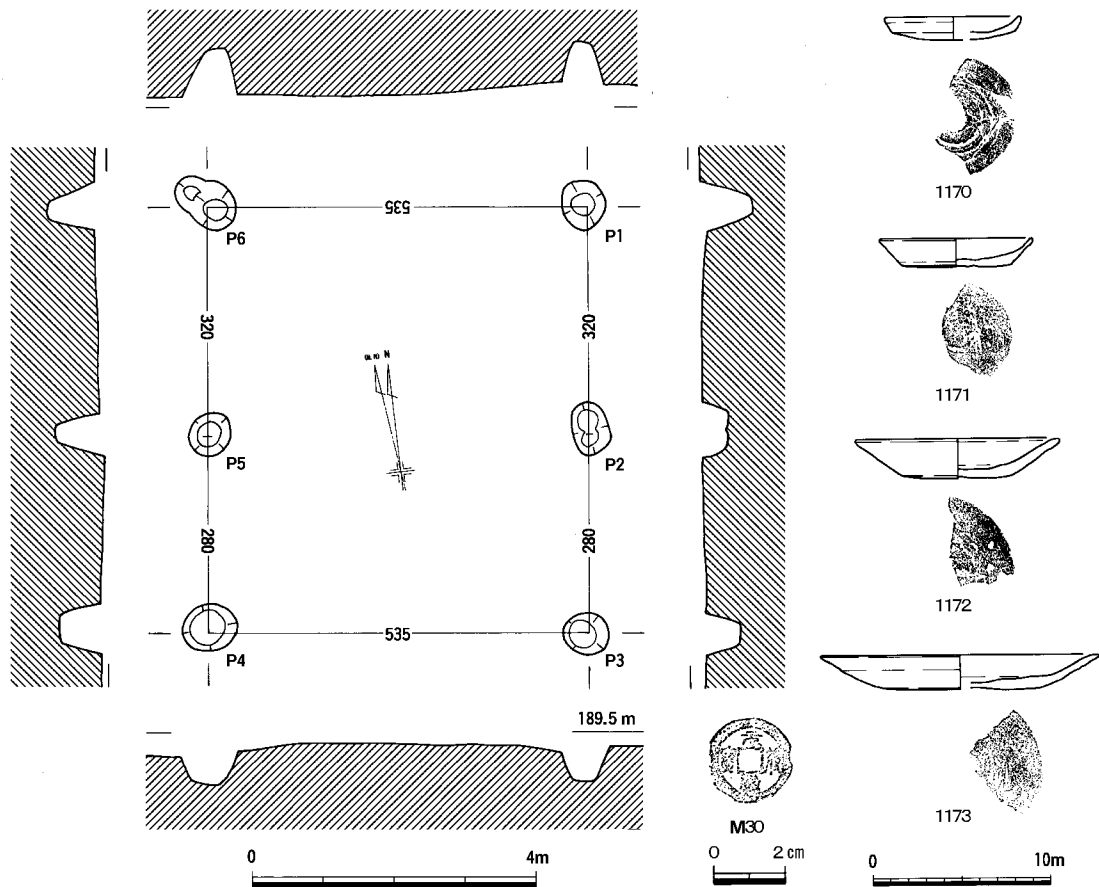
4006Cd区から検出された2×1間の南北棟で、後述する堀1の埋没後に一部これを切って建てられている。規模は桁行6m、梁行5.35m、床面積32.11㎡を測り、棟方向はN14°Eである。柱穴は径20cm前後、深さ20~12cmと小規模である。遺物はP1・2から土師器小皿1170・1171、皿1172・1173が、P5から北宋銭M30が出土している。土器の特徴から15世紀後半のものと考えられる。(江見)

### 掘立柱建物4 (第420・435図、図版97)

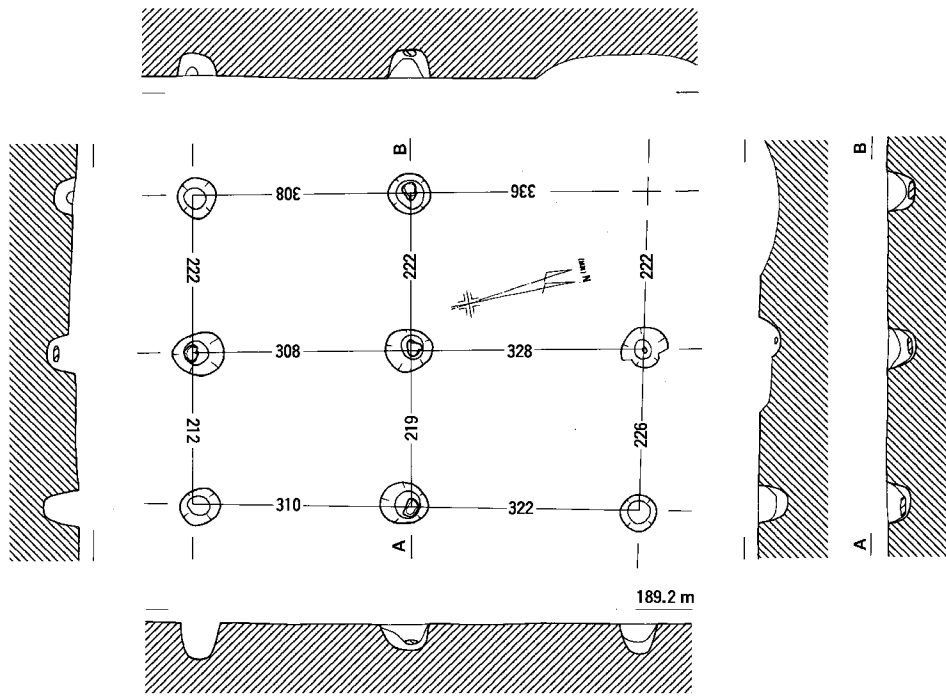
堀1の内部、4006Bj区に位置するが、どの時期の堀と共存するかは確証がない。隣接する建物5とは棟方向がずれるため、同時期ではないと判断する。桁行2間(6.44m)、梁行2間(4.48m)の南北棟である。柱穴間の距離は桁行3.36~3.08m、梁行2.26~2.12mを測る。多くの柱穴には扁平な河原石が据えられていた。建物の方位はN18°Eである。床面積は28.18㎡である。(河合)

### 掘立柱建物5 (第420・436図、図版97)

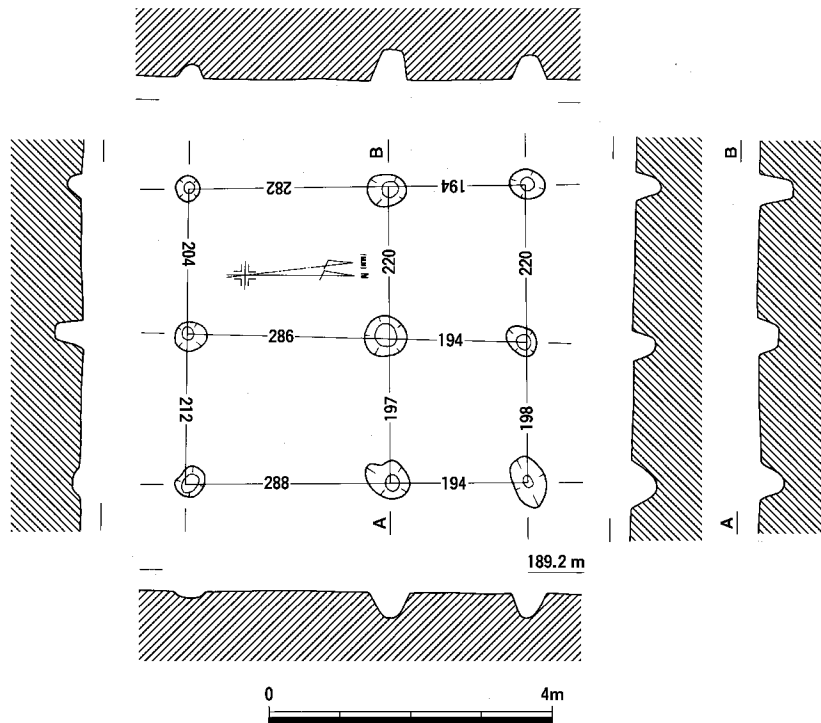
4006Bj区に位置し、堀1の内部に位置するが、どの時期の堀と共存するかは確証がない。隣接する建物4とは棟方向がずれるため、同時期ではないと判断する。桁行2間(4.82m)、梁行2間(4.18m)の南北棟である。柱穴間の距離は桁行2.88~1.94m、梁行2.2~1.98mを測る。建物の方位はN11°Eである。床面積は19.96㎡である。出土遺物は認められなかった。(河合)



第434図 掘立柱建物3 (1/100)・出土遺物 (1/2,1/4)



第435図 掘立柱建物4 (1/100)



第436図 掘立柱建物5 (1/100)

掘立柱建物6 (第420・422・437図、写真16、図版98)

掘立柱建物5の南東30m、4008Cc区から検出された、南北棟で、棟方向はN10°Eである。規模は桁行6.5m、梁行4.8m、床面積30.3㎡を測る。柱穴間の距離は桁行2.2~2.05m、梁行2.5~2.3mを測る。柱穴は径60~30cm、深さ60~30cmを測る。遺物はP7およびP9から土師器杯1174・1175が出土している。遺物はその特徴から14世後半ものとする。(江見)

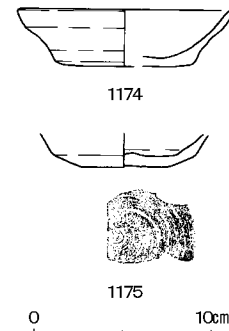
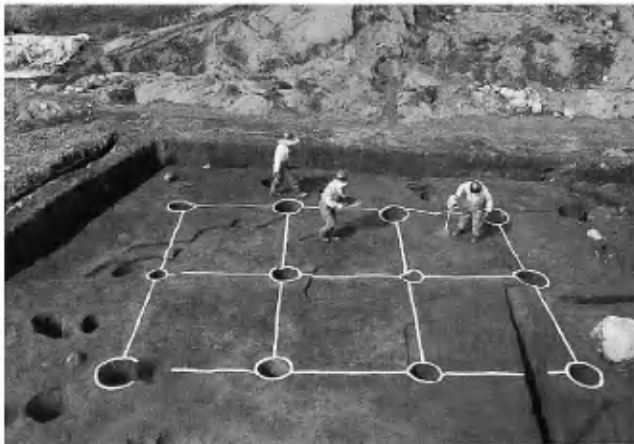
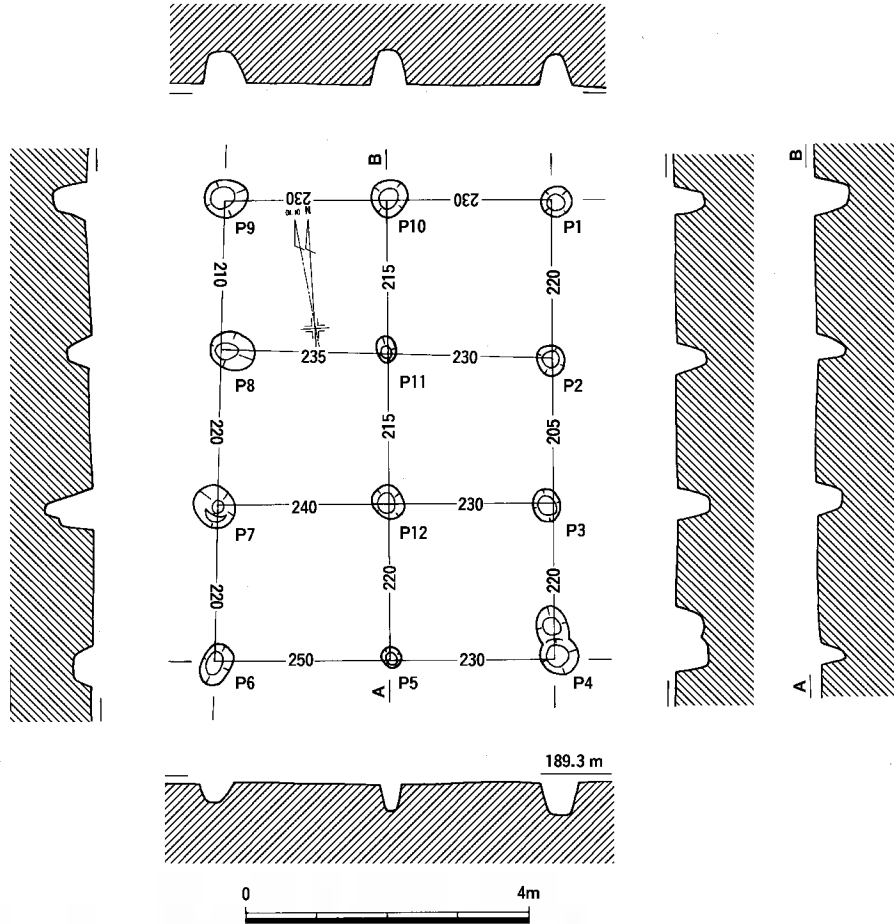
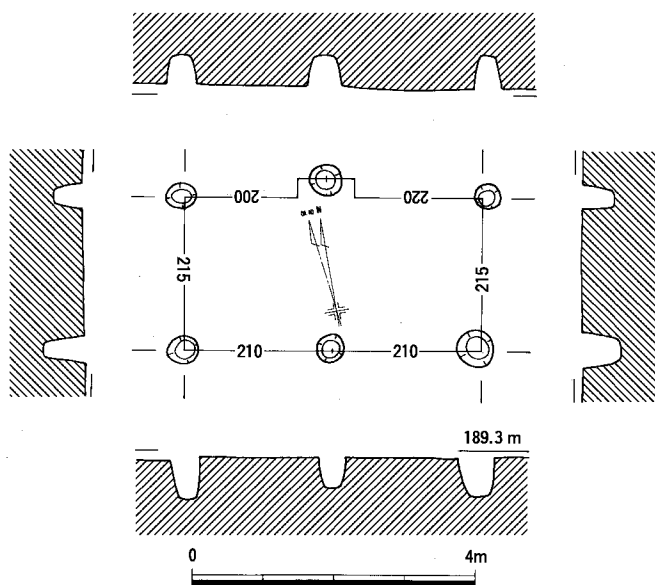
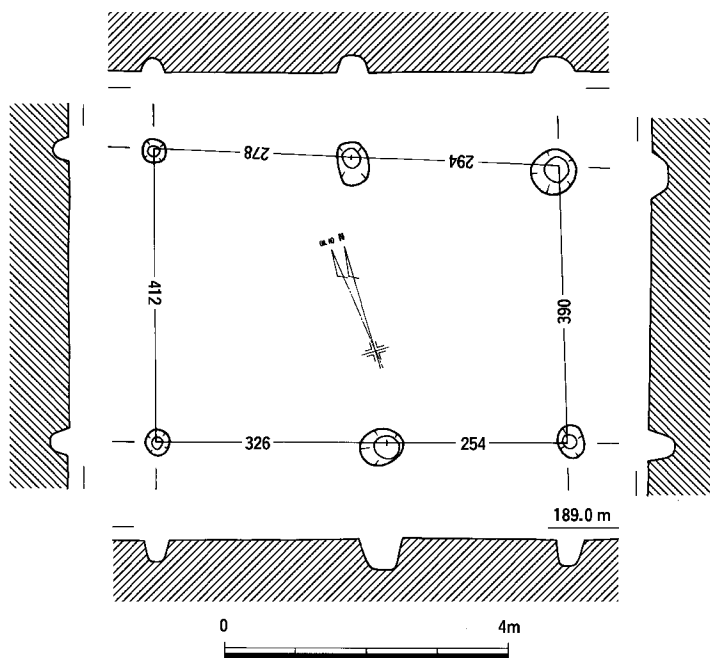


写真16 掘立柱建物6 作業風景 (東から) 第437図 掘立柱建物6 (1/100)・出土遺物 (1/4)



第438図 掘立柱建物7 (1/100)



第439図 掘立柱建物8 (1/100)

掘立柱建物7 (第420・422  
438図、図版98)

掘立柱建物6の東13mに位置する東西棟で、棟方向はN74°Wである。建物は桁行2間、梁行1間の小規模なもので、桁行4.2m、梁行2.15m、床面積9.03㎡を測る。柱穴は径50cm前後、深さ60~40cmを測る。柱穴埋土は褐灰色粘質土であったが共伴遺物は見られなかった。建物の方向から掘立柱建物3や、後述する掘立柱建物10などとの関連性を窺わせる。(江見)

掘立柱建物8 (第420・422・  
439図、図版98・99)

4009Cb区に位置し、堀1の内部に建てられているが、どの時期の堀と共存するかは確証がない。

近接する建物10・17とは重複関係にある。桁行2間(5.8m)、梁行1間(4.12m)の東西棟である。柱穴間の距離は桁行3.26~2.54m、梁行4.12~3.9mを測る。建物の方位はN67°Eである。床面積は23.06㎡である。

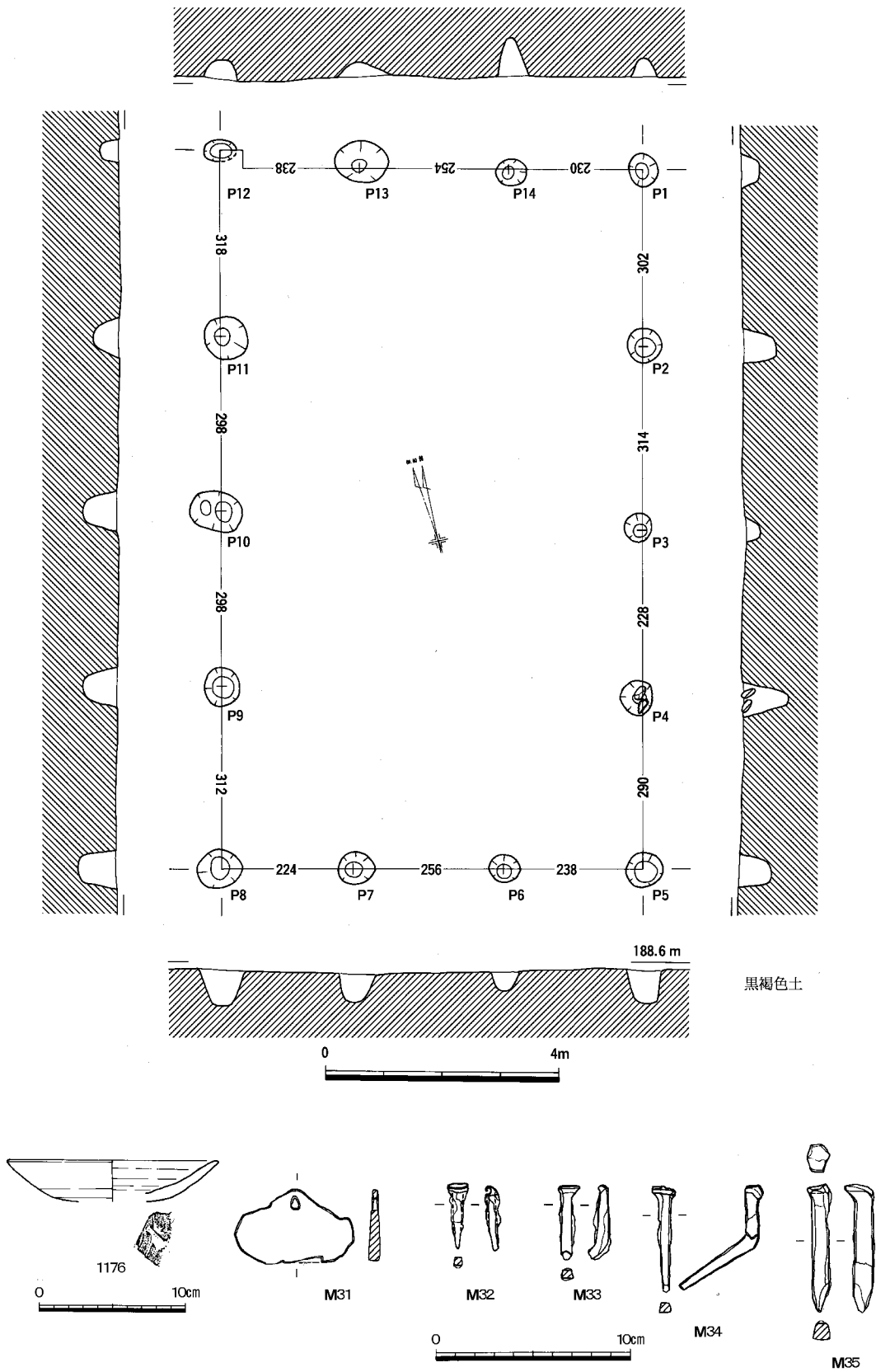
出土遺物は認められなかった。(河合)

掘立柱建物9 (第420・422・  
440図、図版99・132・148)

4100・01Bj~4100・  
01Ca区において検出した、

4×3間の掘立柱建物である。棟方向は、真北よりやや東に振る南北棟で、このすぐ東側に位置する建物17・18とは並行しており、時期的にも近いと考えている。

出土遺物としては、土師器皿1176と火打ち金M31、鉄釘M32~35がある。大皿の1176は、径高指数からみて、15世紀代であろう。堀1の内部に位置するが、時期的には堀3の段階に属すると考えて良



第440図 掘立柱建物9 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)

いであろう。

(弘田)

掘立柱建物10 (第420・422・441図、図版99)

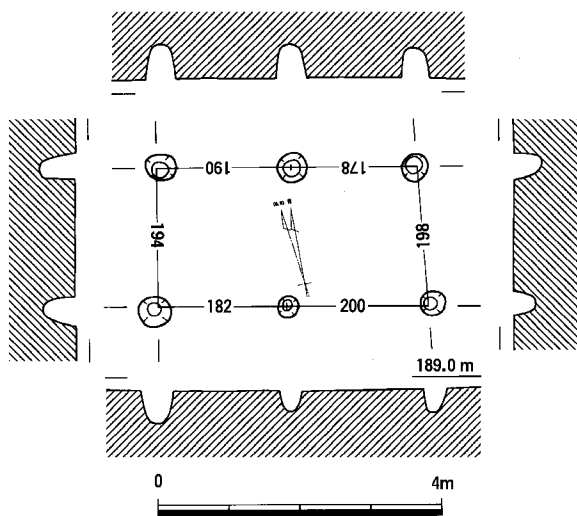
4 0 09Cb区に位置し、堀1の内部に位置するが、どの時期の堀と共存するかは確証がない。近接する建物8・17とは重複関係にある。桁行2間(3.82m)、梁行1間(1.98m)の東西棟である。柱穴間の距離は桁行2~1.78m、梁行1.98~1.94mを測る。建物の方位はN72°Eである。床面積は7.33㎡である。出土遺物は認められなかった。

(河合)

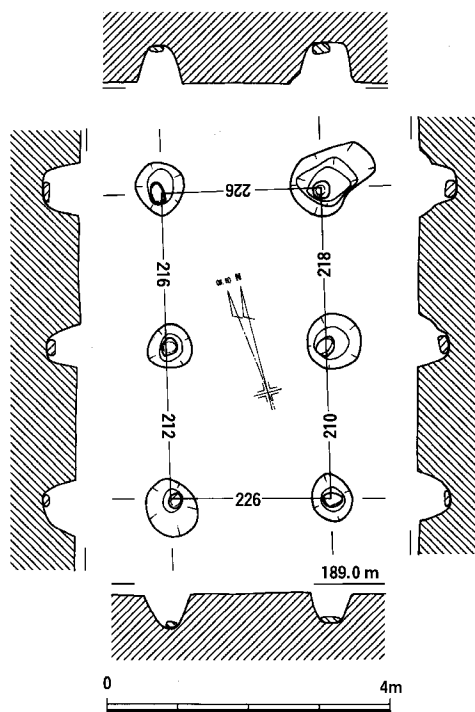
掘立柱建物11 (第422・423・442図、図版100)

4 1 01Cc区に位置し、堀1の内部に建てられているが、どの時期の堀と共存するかは確証がない。近接する建物17・18とは棟方向が揃っている。桁行2間(4.38m)、梁行1間(2.26m)の南北棟である。柱穴間の距離は桁行2.2~2.12m、梁行2.26mを測る。小型の建物には珍しく、すべての柱穴底部に扁平な河原石が据えられていた。建物の方位はN21°Eである。床面積は9.75㎡である。

(河合)



第441図 掘立柱建物10 (1/100)



第442図 掘立柱建物11 (1/100)

掘立柱建物12 (第421・443図、図版100・132)

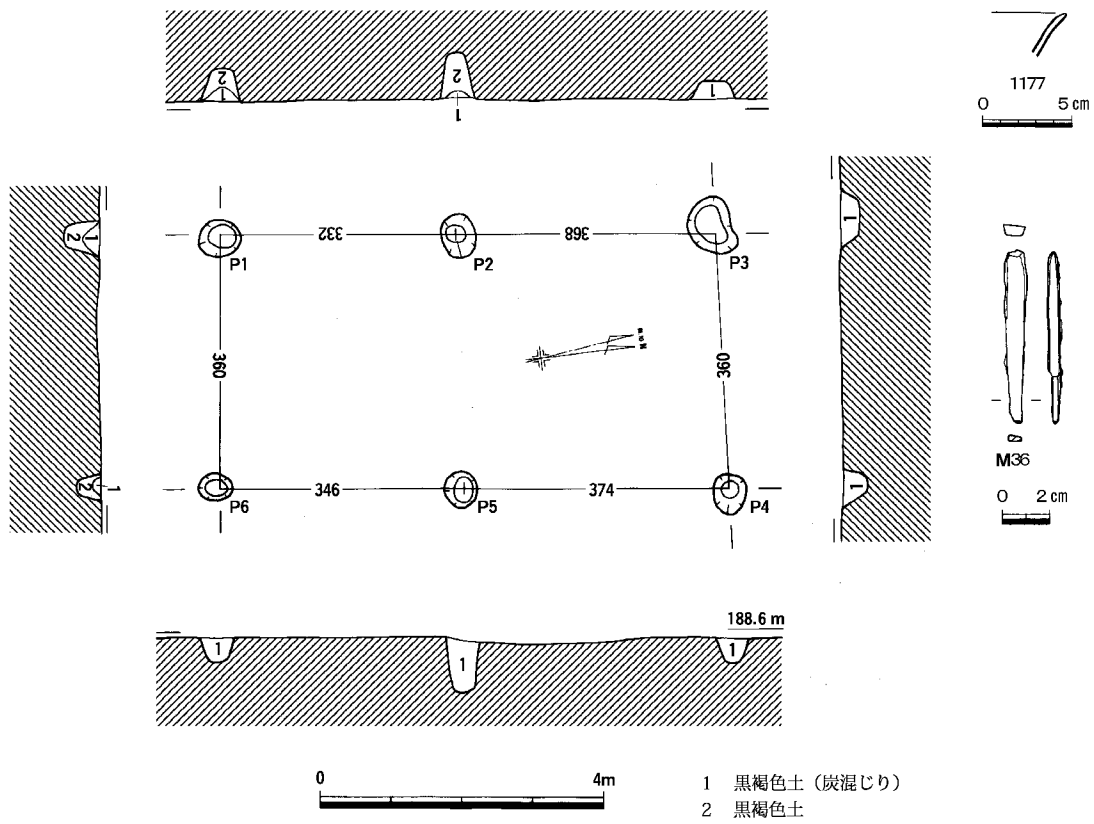
4 1 00Bi区に所在する2×1間の建物で、棟方向はN12°Eである。規模は桁行(P1~3)7m、梁行(P3~4)3.6m、底面積26.6㎡を測る。柱穴の深さは総じて30~60cmとばらつきがある。直径で50~70.0cmを測り、直径の大きいものは浅く、小さいものは深い傾向があるようである。1177は白磁の皿であり、この年代観から時期は中世前半である。

(和田)

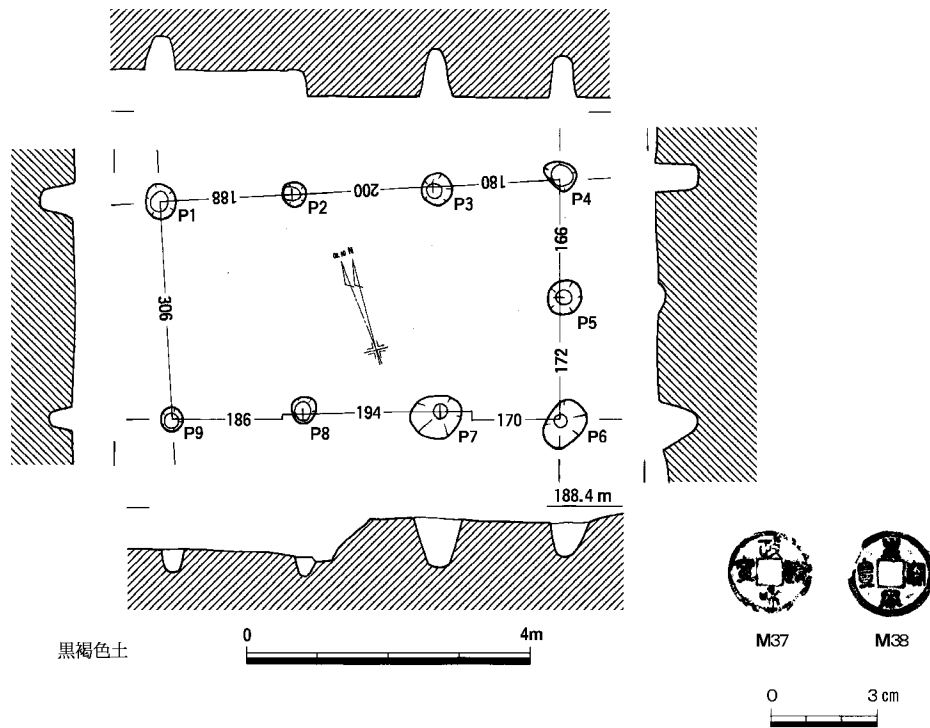
掘立柱建物13 (第421・444図、図版151)

4 1 00Bg区に所在する3×1間の建物で、棟方向はN69°Wである。規模は桁行(P1~4)5.6m、梁行(P4~6)3.4m、底面積19.4㎡を測る。柱穴の深さは総じて10~70cm、直径で30~70cmとばらつきがある。M37・38は成和通寶、皇宋通寶である。時期は中世前半である。

(和田)



第443図 掘立柱建物12 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/3)

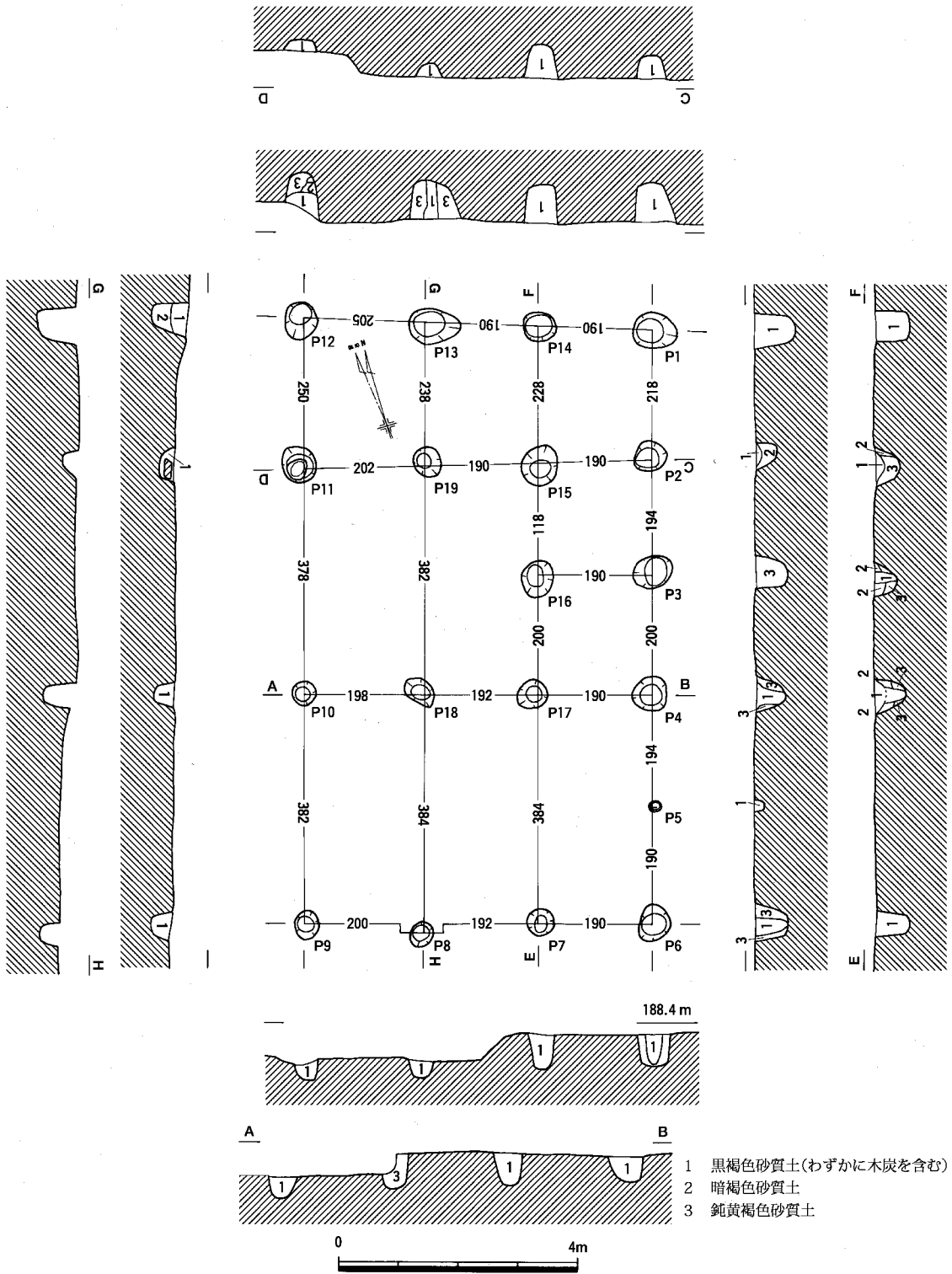


第444図 掘立柱建物13 (1/100)・出土遺物 (1/2)

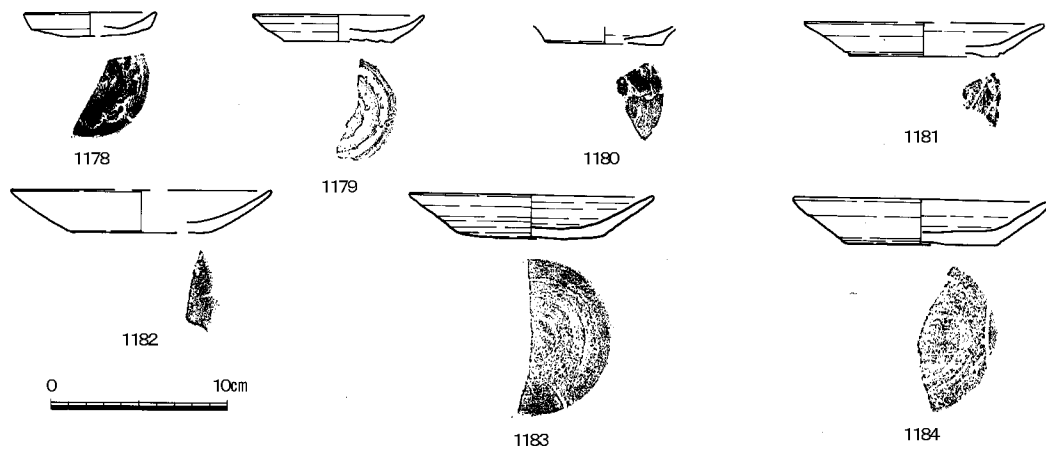


掘立柱建物14 (第421・445・446図、図版100・132)

4100Bg区に所在する変則的ながら3×2、ないしは3×3間の建物の南に底が延びた建物と推測



第445図 掘立柱建物14 (1/100)

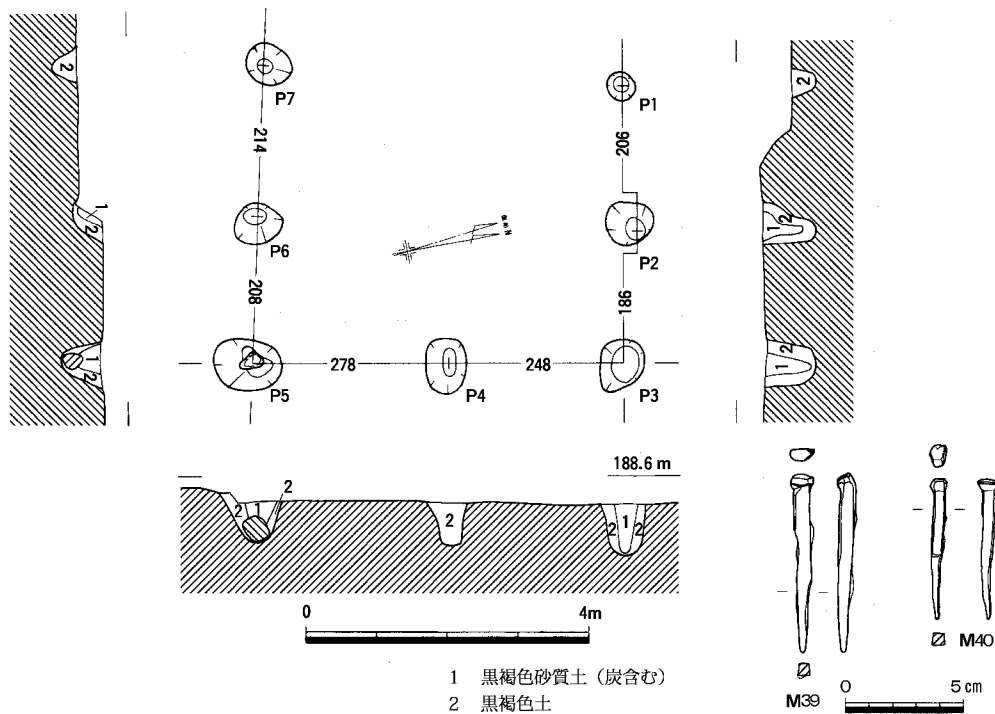


第446図 掘立柱建物14出土遺物 (1/4)

される。棟方向はN24°Wである。規模は桁行(P 6~9) 5.8m、梁行(P 9~12) 10.1m、底面積は底部分をあわせて58㎡を測る。柱穴の深さは、30~70cmとばらつきがある。P 3・16は束柱であり、建物中央のやや広い空間の東側を支えている。土間、ないしは玄関のような施設であろう。遺物には土師器皿1178~1184があり、回転ヘラ切りで仕上げている。時期は中世後半である。(和田)

掘立柱建物15 (第421・447図、図版154)

4 1 02 Bg区に所在する現状で2×2間の建物である。棟方向はN17°Wである。規模は桁行5.2m、梁行4.8mを測る。柱穴の深さは70cm程度とまとまりがあり、柱痕跡を残すものが多い。直径で100~



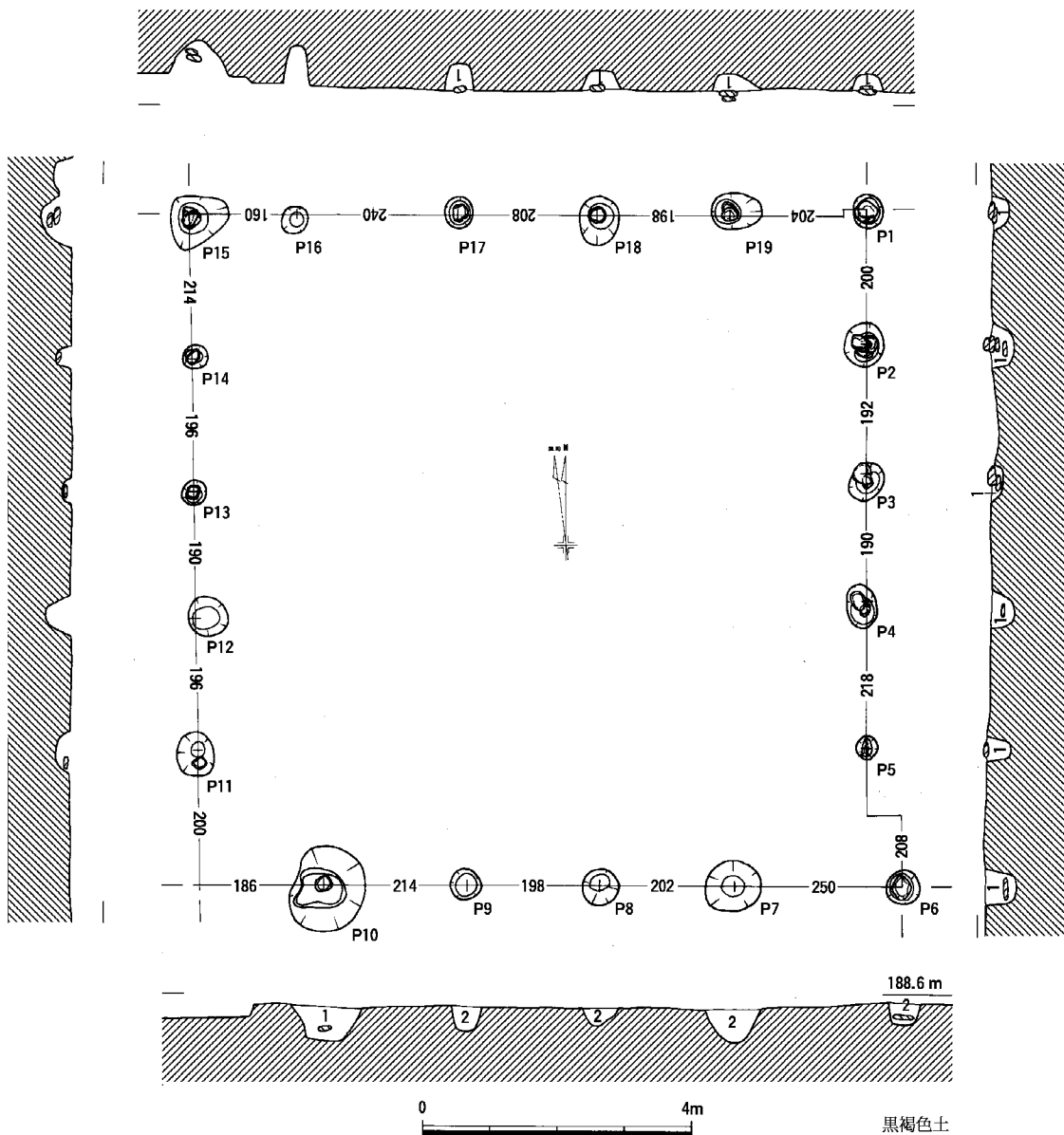
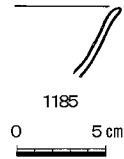
第447図 掘立柱建物15 (1/100)・出土遺物 (1/3)

第3章 発掘調査の概要

30cmとばらつきがある。P5では礎石が検出された。やや大きめの礫を用いて柱の高さを調節しているようである。出土遺物は釘のみである。時期は中世であると考えられる。(和田)

掘立柱建物16 (第421・448図、図版101)

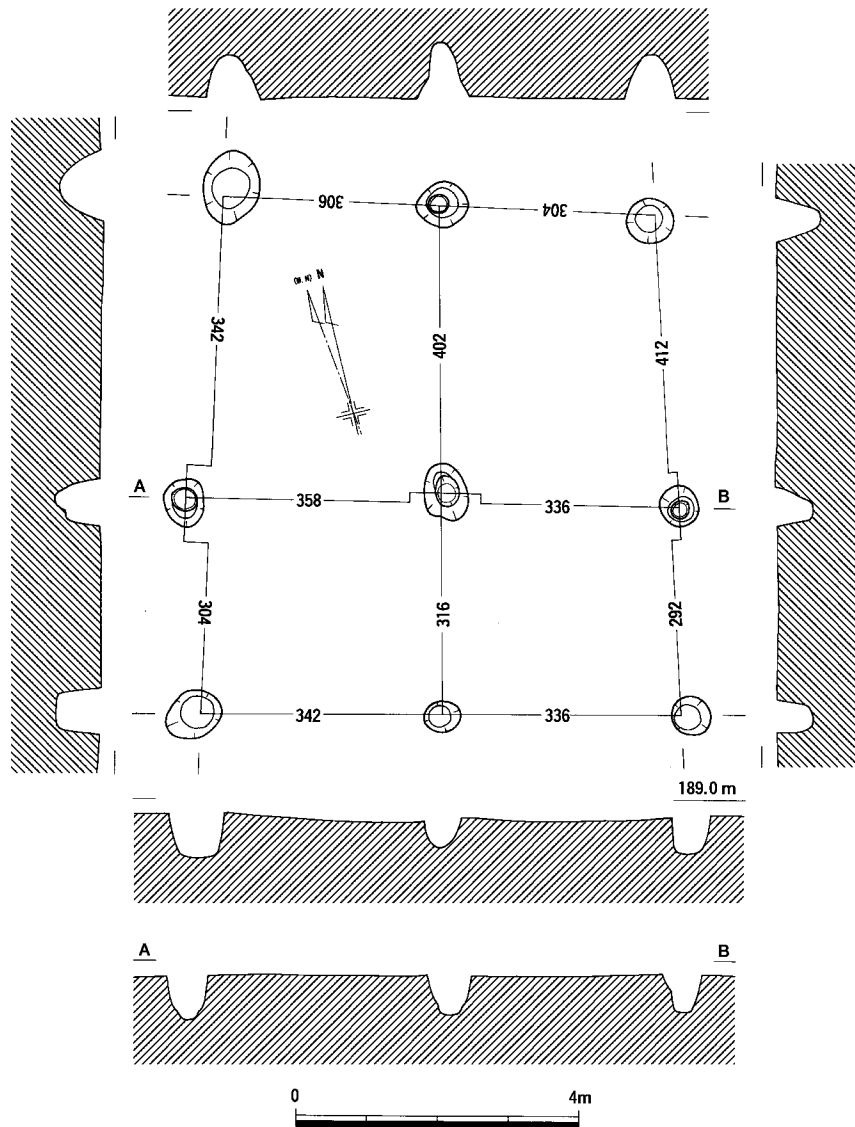
4100Bi区に所在する5×5間の建物で、棟方向はN6°Eである。規模は桁行(P1~15)10.2m、梁行(P1~6)3.6m、底面積102㎡を測る正方形の建物である。柱穴の深さは総じて20~60cmとばらつきがある。直径で30~100cmを測り、直径の大きいものは浅く、小さいものは深い傾向があるようである。礎石を持つものが多いが、検出レベルにばらつきがあり、柱の高さに差異があったものとする。1185は青磁の碗であり、この年代観から時期は中世中頃である。(和田)



第448図 掘立柱建物16 (1/100)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物17 (第422・449図、図版99・101)

4 1 06Cb区に位置し、堀 1 の内部に建てられているが、どの時期の堀と共存するかは確証がない。近接する建物 8・10とは重複関係にある。桁行 2 間 (7.28m)、梁行 2 間 (6.94m) の南北棟である。柱穴間の距離は桁行4.12~2.92m、梁行3.58~3.04mを測る。建物の方位はN21° Eである。床面積は46.33㎡である。出土遺物は認められなかった。(河合)



第449図 掘立柱建物17 (1/100)

掘立柱建物18 (第422・450図、写真17、図版101)

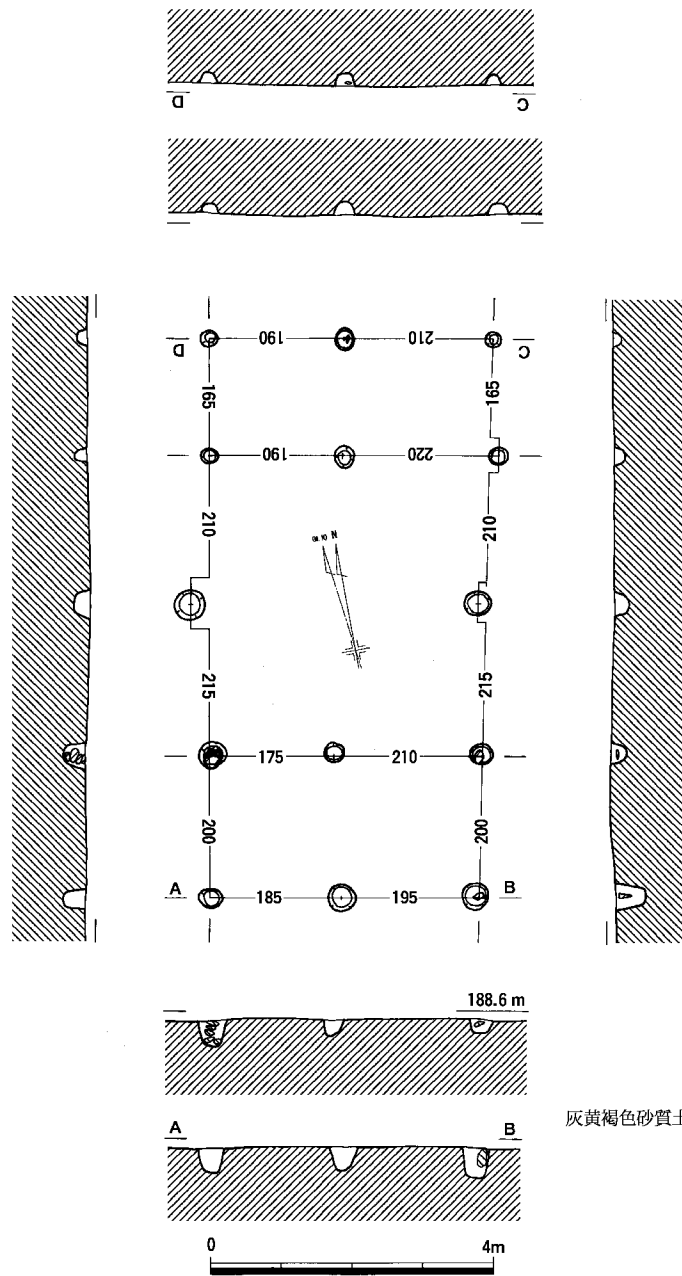
遺跡の中央部やや西寄りの4 1 01Cbに位置する。堀 1 に切られる溝24を切った状態で検出した。桁行 4 間、梁行 3 間であり、北東隅から 1 × 1 間北に延びていた。北側 2 間は総柱で、南側 2 間は側柱になっていることから、南側 2 間は土間とした可能性が考えられる。柱穴には礫が縦に積み重なる状態で出土する場合もあり、柱の抜き取り痕の中に礫を詰め込んだと考えられる。そこから復元で



掘立柱建物19 (第422・451図、写真18、図版102)

遺跡の中央部やや西寄りの4102Cbに位置する。堀1の埋土上面に柱穴を掘り込んでいた。

桁行4間、梁行2間である。建物の中央には柱穴が存在せず、2×2間の側柱建物の南北に庇が取り付く構造を呈している。柱穴の検出面からの深さは北側6個が10~20cmで、南側8個は20~40cmと差があった。平面からは南北両側に庇が延びる形状に復元できるが、最南部2個の柱穴は深さ50cmと深く、庇とは判断し難い面もある。それは柱穴の直径の差からも窺える。柱穴の中には礫を縦に積み重なった状態で出土する場合もあり、掘立柱建物18同様柱の抜き取り痕の中に礫を詰め込んだと考えられる。そこから復元できる柱は、直径が最大で20cmとなる。 (上榎)



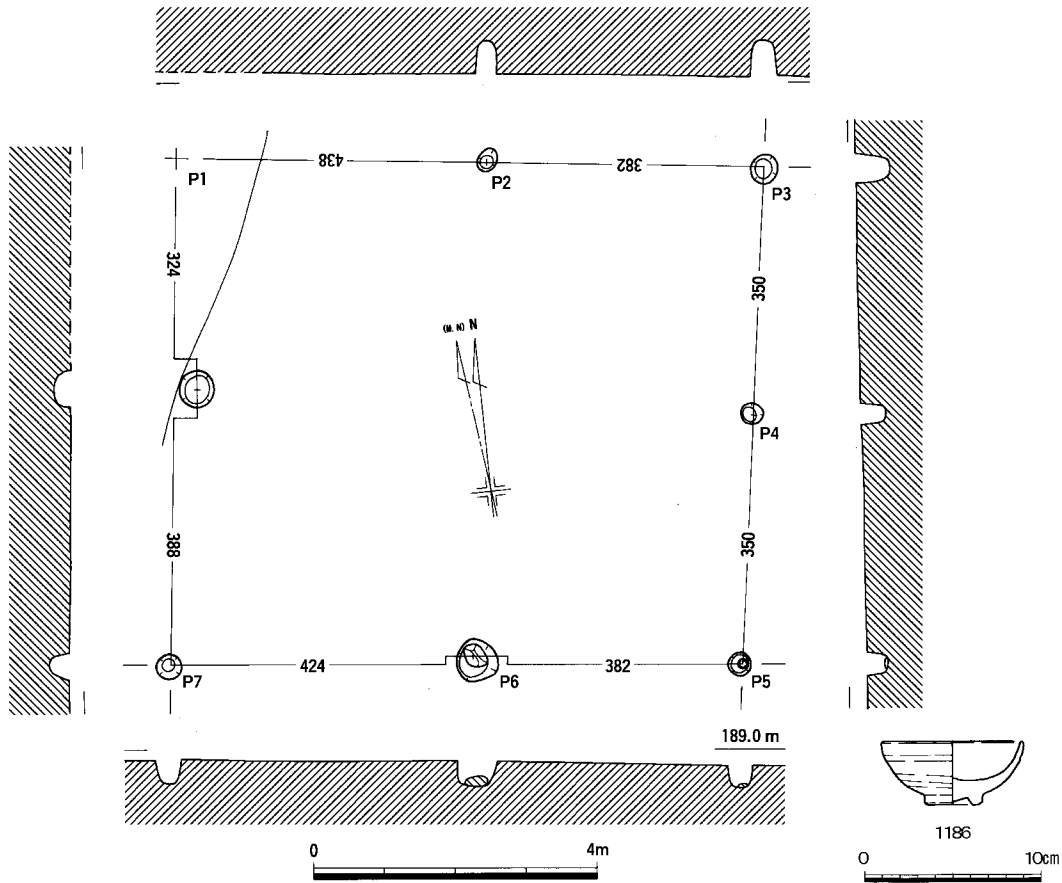
第451図 掘立柱建物19 (1/100)



写真18 掘立柱建物19作業風景（西から）

掘立柱建物20（第423・452図、図版102）

4 1 01 C f区から検出された東西棟建物で棟方向はN77° Wである。堀2と切り合い関係にあり、堀



第452図 掘立柱建物20（1/100）・出土遺物（1/4）

埋没後建てられたと考えるが、北西の柱穴は検出し得なかった。規模は2×2間で、桁行8.3m、梁行7.12m、床面積57.9㎡を測る。柱穴間の距離は桁行4.38～3.82m、梁行3.88～3.24mを測る。柱穴の径は60～30cm、深さ50～20cmを測り、P 5・6の底部には礎盤石が据えられていた。遺物はP 3から白磁碗1186が出土しており、その特徴は14世紀代を示す。(江見)

掘立柱建物21 (第424・453図、写真19)

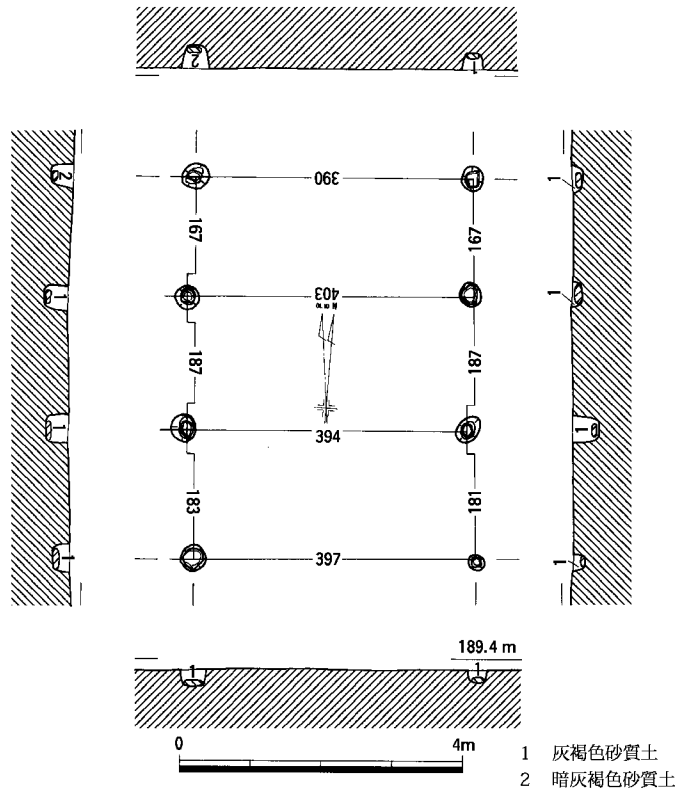
4 0 04Ci区に位置し、桁行3間(5.37m)、梁行1間(3.97・3.9m) + αの東西棟である。柱穴間の距離は、桁行1.87～1.67m、梁間4.03～3.9mを測る。梁列が真北に近くN 3°Wである。柱の掘り方は直径40～20cmで、深さ35～20cmを測る。

すべての柱穴底部に扁平な石をおいている。出土遺物は見られない。建物22・23とは接しすぎで時期が異なる。(伊藤)

掘立柱建物22 (第424・454図)

4 0 04Cj区に位置し、桁行3間10.13m、梁行2間5.7mの東西棟である。柱間の距離は、桁行3.52～3.15m、梁間2.95～2.63m、床面積55.23㎡を測る。

建物の方位は、梁列が真北に近くN 80° Eである。柱穴掘り方は、



第453図 掘立柱建物21 (1/100)

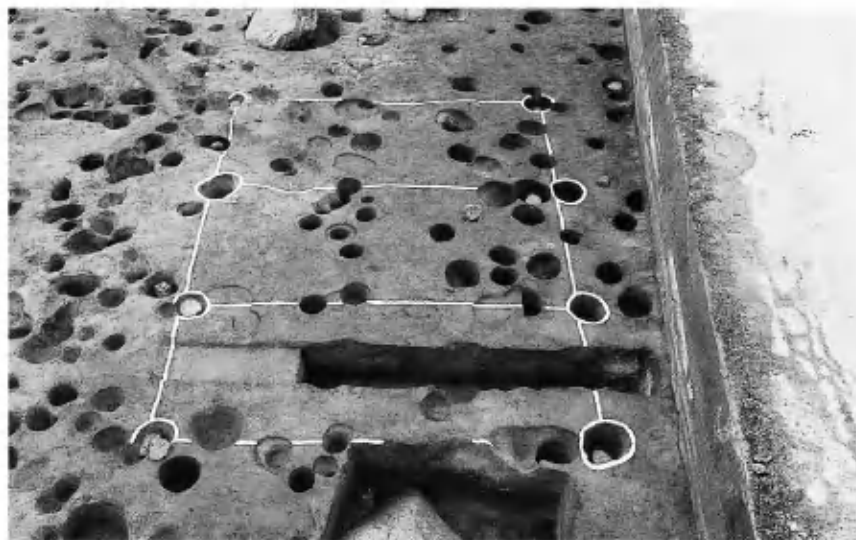


写真19 掘立柱建物21完掘状況 (北から)

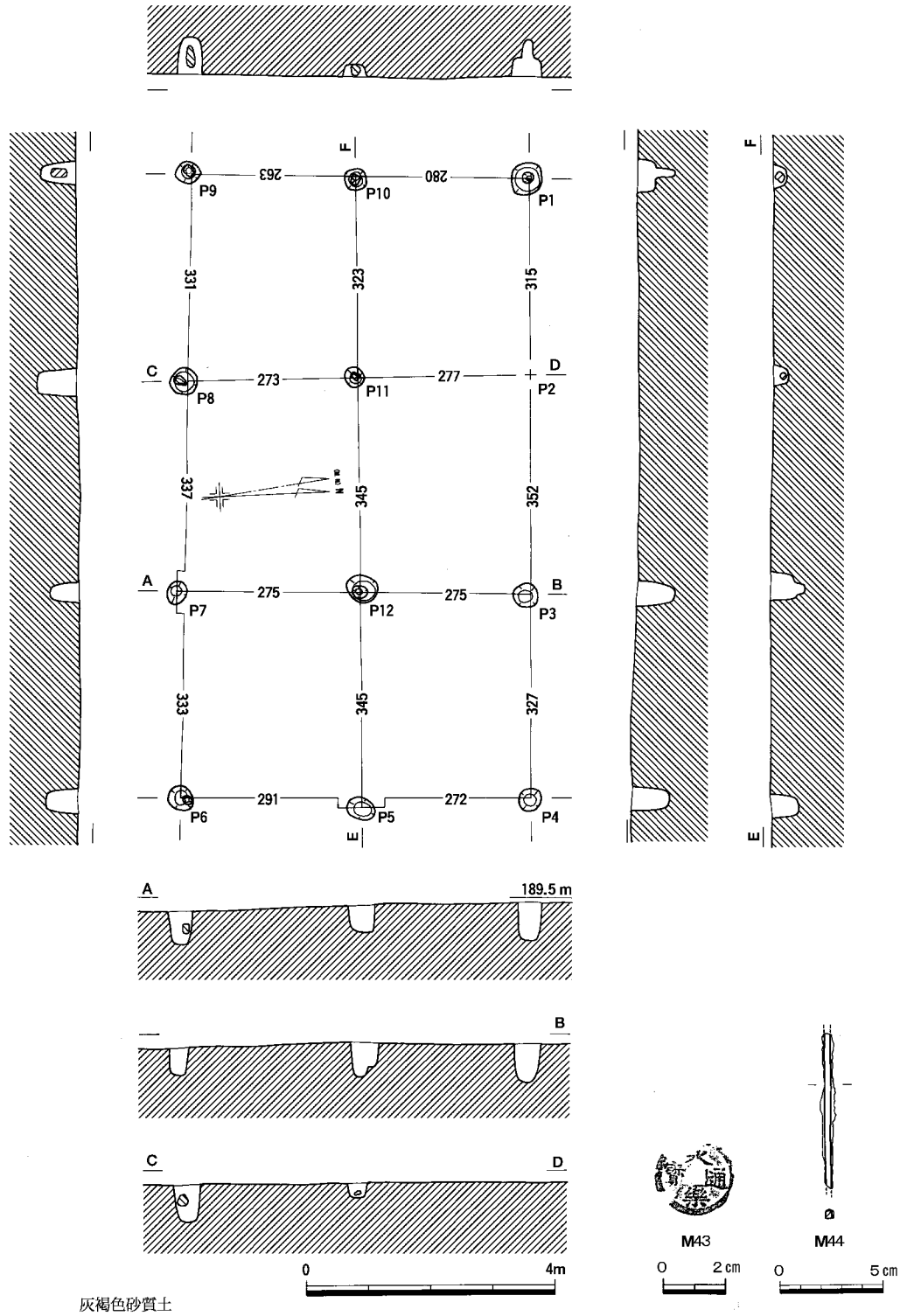


第3章 発掘調査の概要

50.3cm、深さ60~20cmである。柱穴から永楽通寶（初鑄1408年）M43が1枚、P3から釘M44が出土している。建物21などとともに溝31内の区画に建つ。

建物の時期は、南北朝以降室町時代と考えられる。

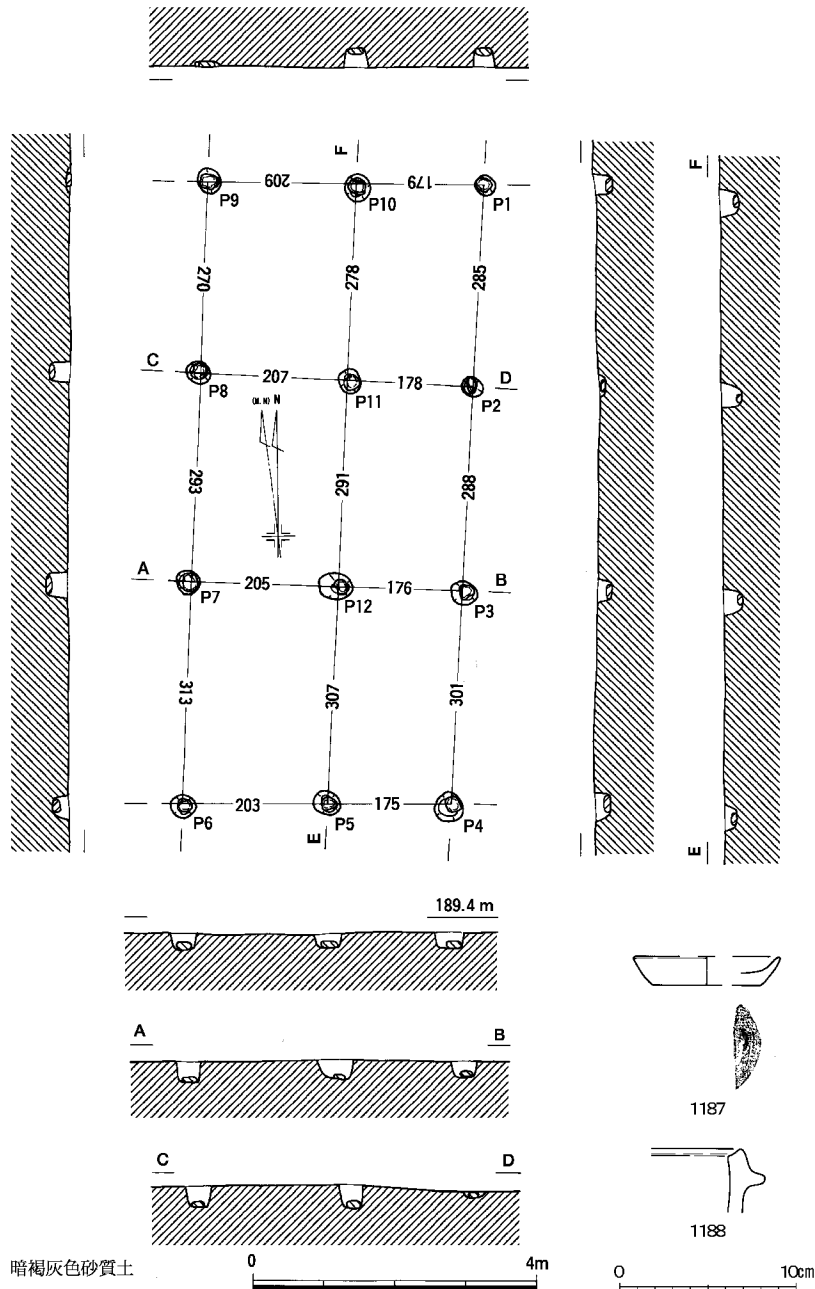
(伊藤)



第454図 掘立柱建物22 (1/100)・出土遺物 (1/2,1/3)

掘立柱建物23 (第424・455図、図版132)

4 0 05Ci区にあり、桁行2間 (+  $\alpha$ )、現存3.88m、梁行3間8.76mの東西棟と思われる。柱間の距離は、桁行2.09~1.75m、梁行3.13~2.7mを測る。建物の方位は、梁列が真北に近く N11°Wである。柱穴掘り方は、50~30cm、深さは30~10cmである。すべての柱穴底部に扁平な石を置いている。P12から土師器小皿1187、P5から瓦質羽釜の口縁部1点1188が出土している。この建物も溝31内に位置する。  
(伊藤)



第455図 掘立柱建物23 (1/100)・出土遺物 (1/4)

第3章 発掘調査の概要

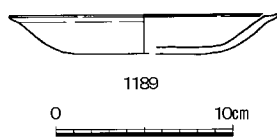
掘立柱建物24 (第424・456図、

図版102・132)

4 0 05Ci区にあり、桁行1間(+ $\alpha$ ) 3.11m、梁行3間6.12mの東西棟と考えられ、東1間分である。建物の方位は、N15°Wである。柱穴の掘り方は、50~30cm、深さ70~30cmを測る。P6からは土師器皿1189が出土している。これは復元口径12.5cm、器高2.2cmで、鈍い橙色を呈す。(伊藤)

掘立柱建物25 (第424・457図)

4 0 07Ci区に位置し、桁行3間4.12m、梁行2間3.15mの南北



第456図 掘立柱建物24 (1/100)・出土遺物 (1/4)

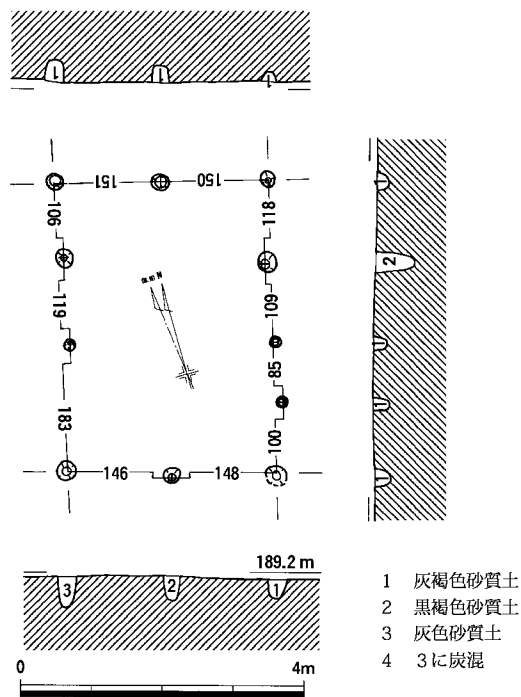
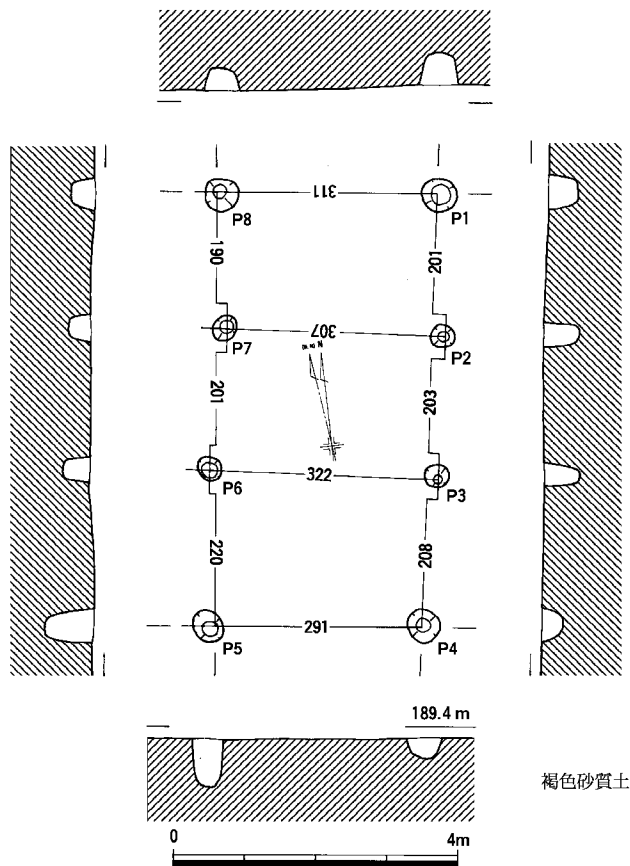
棟である。柱間の距離は、桁行1.19~0.85m、梁行1.51~1.46mを測る。周囲の建物と比べて規模は小さく、柱穴の掘り方も30~20cmと全体に小振りである。深さは、55~15cmを測る。建物の方位はN21°Wである。

出土遺物は見られないが、時期は中世後半であろう。(伊藤)

掘立柱建物26 (第424・458図、

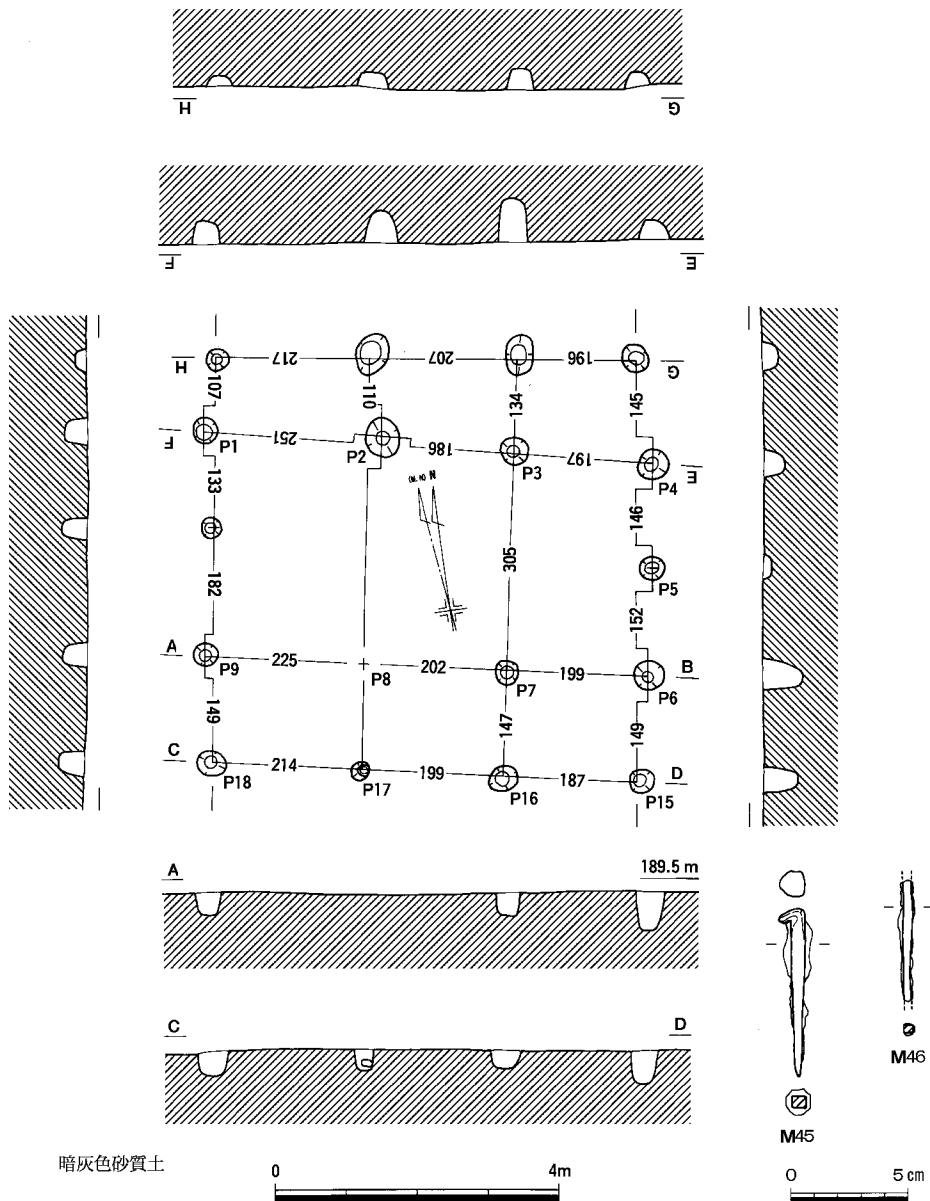
図版103・154)

4 0 06Da区に位置し、桁行3間6.34m、梁行1間3.05mに南北に1間ずつの庇が付く南北棟と考えられる。柱間の距離は、桁行2.51~1.86m、梁行3.15~2.98mを測る。東西両側列には、中



第457図 掘立柱建物25 (1/100)

程に束柱と考えられる柱がある。南側の庇の幅は、1.49m～1.07mである。建物の方位はN70°Eである。P7から釘2本、M45・46が出土している。溝31内の東南角に位置している。(伊藤)

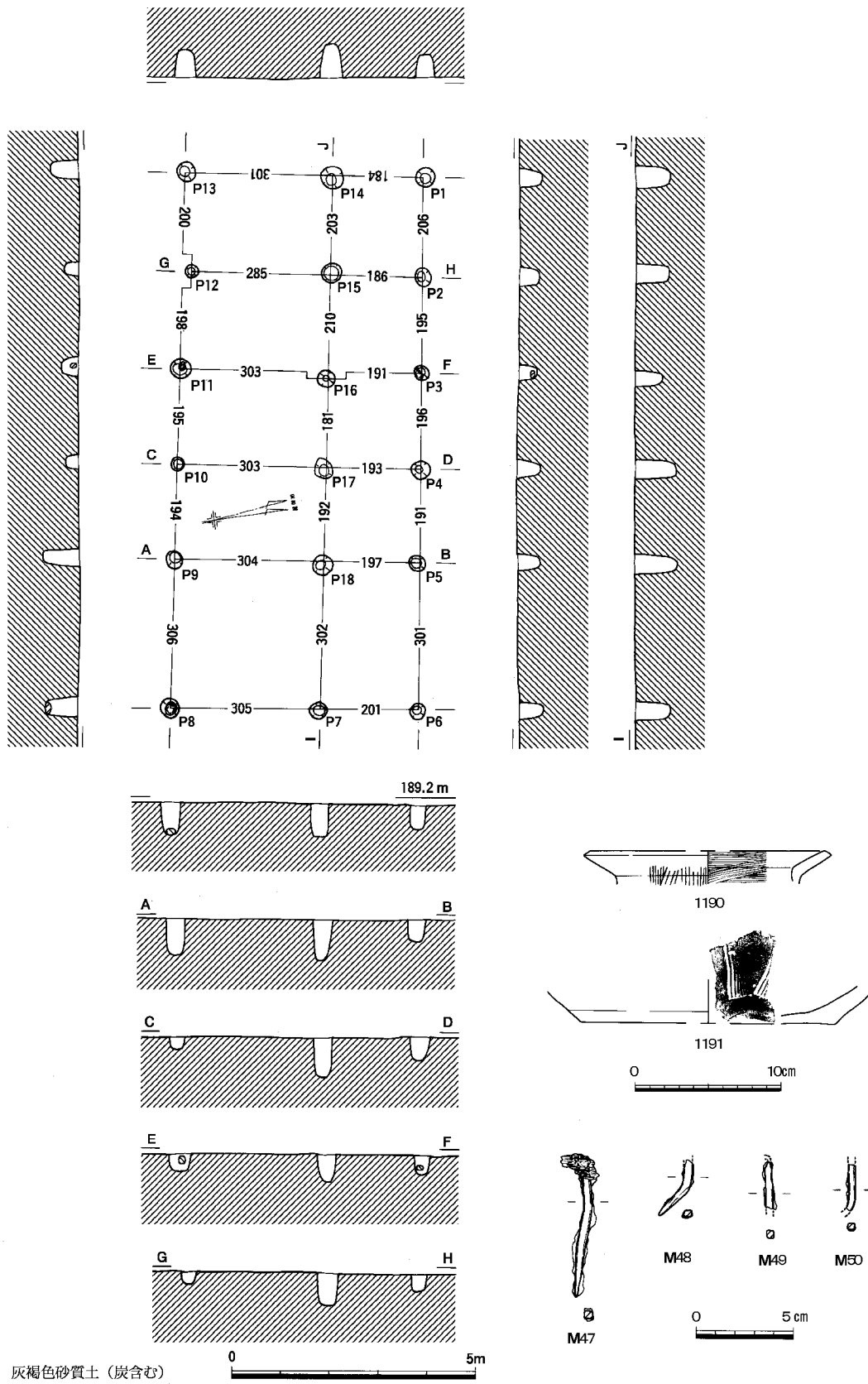


第458図 掘立柱建物26 (1/100)・出土遺物 (1/3)

掘立柱建物27 (第424・459図、図版103)

4008Ciに位置し、桁行5間10.93m、梁行2間5.06mの東西棟であるが、北側1間は庇の可能性もある。柱間隔は、桁行3.06～1.91m、梁行3.05～1.84mを測る。柱穴の掘り方は、40～25cm、深さ70～20cmとばらつきがある。建物の方位は、N73°Wである。床面積は53.91㎡である。P12から土師器甕が、P6から備前焼播鉢底部が、P18から釘2本、M47・48、P3からM49・50の釘が2本出土している。(伊藤)

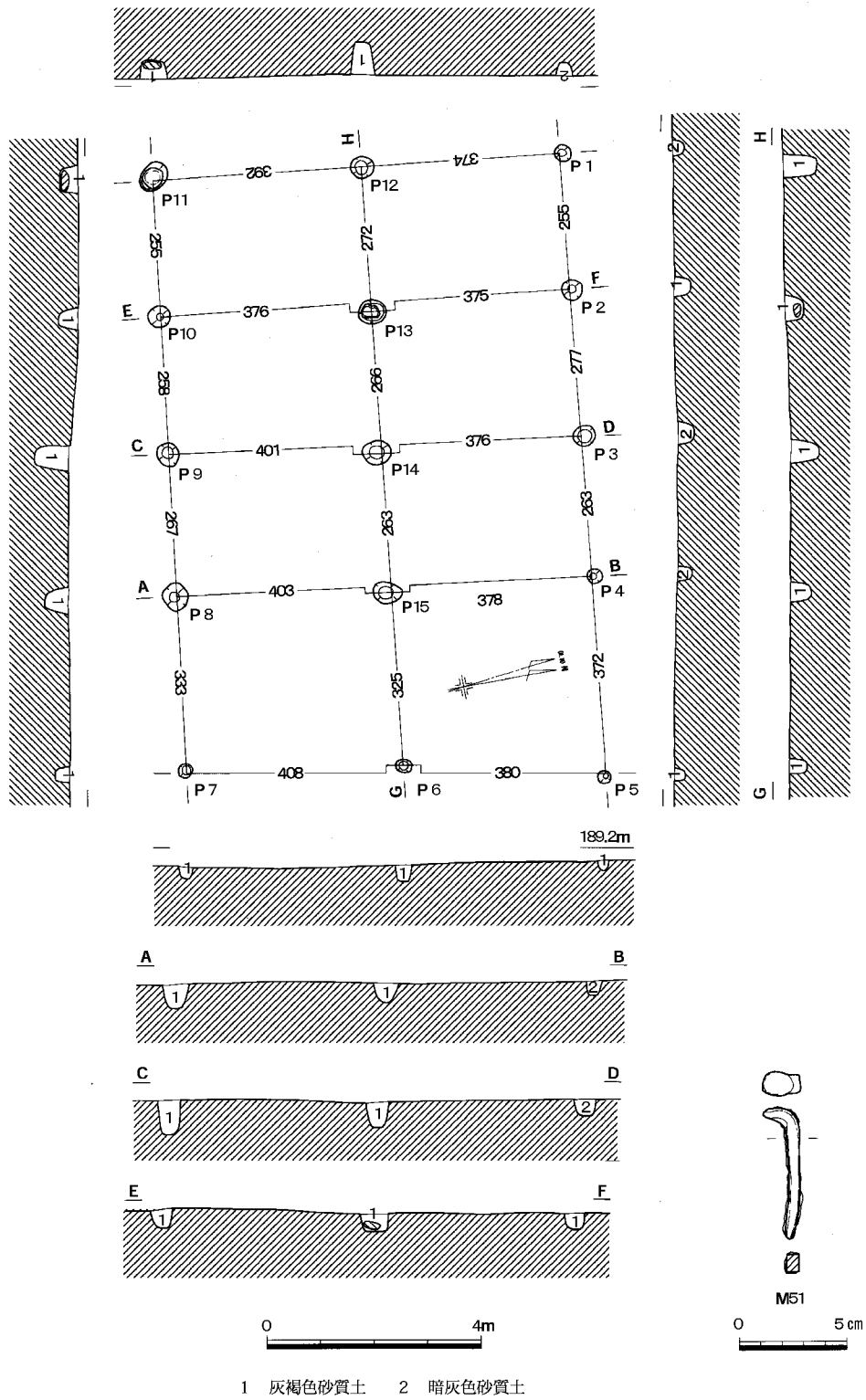
第3章 発掘調査の概要



第459図 掘立柱建物27 (1/120)・出土遺物 (1/4,1/3)

掘立柱建物28 (第424・426・460図、図版103)

4 0 08Daに位置し、桁行4間11.67m、梁行2間7.88mの東西棟である。柱間間隔は、桁行3.72~2.55



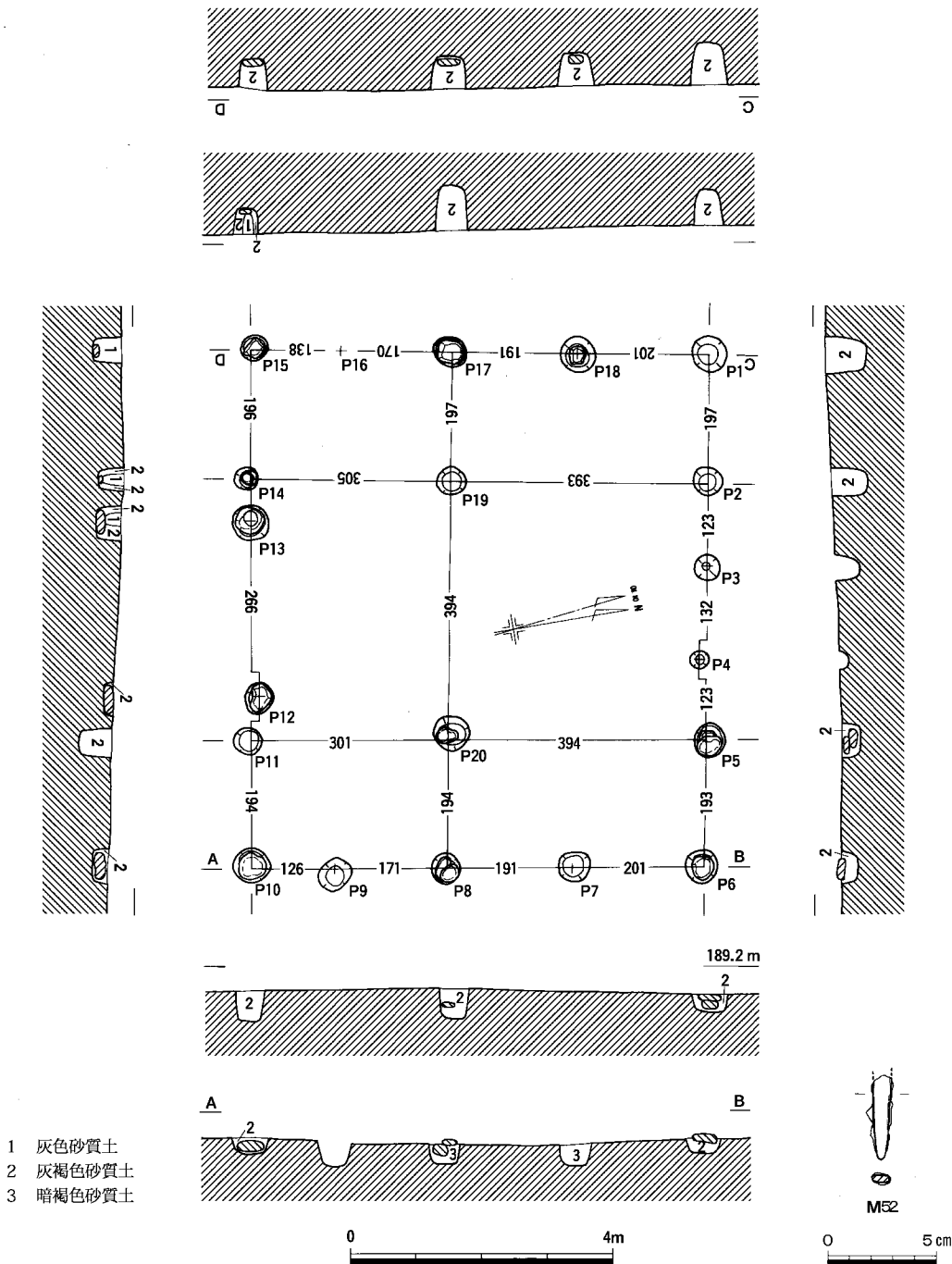
第460図 掘立柱建物28 (1/120)・出土遺物 (1/3)

第3章 発掘調査の概要

m、梁行4.08~3.74mを測る。柱穴の掘り方は、60~20cm、深さは、60~20cmである。P11・13の底部には扁平な石を配している。建物の方位は、N76°Eである。床面積は、88.36㎡を測る。P11からはM51の釘が1本出土している。(伊藤)

掘立柱建物29 (第424・426・427・461図、図版104)

4009Cj区に位置し、桁行3間6.98m、梁行2間3.97mの東西棟であるが、東西1間分は庇の可能性が高い。柱間隔は、桁行3.94~3.01m、梁間2.66~2.64mを測る。梁列北側東西両者に束柱が見られ

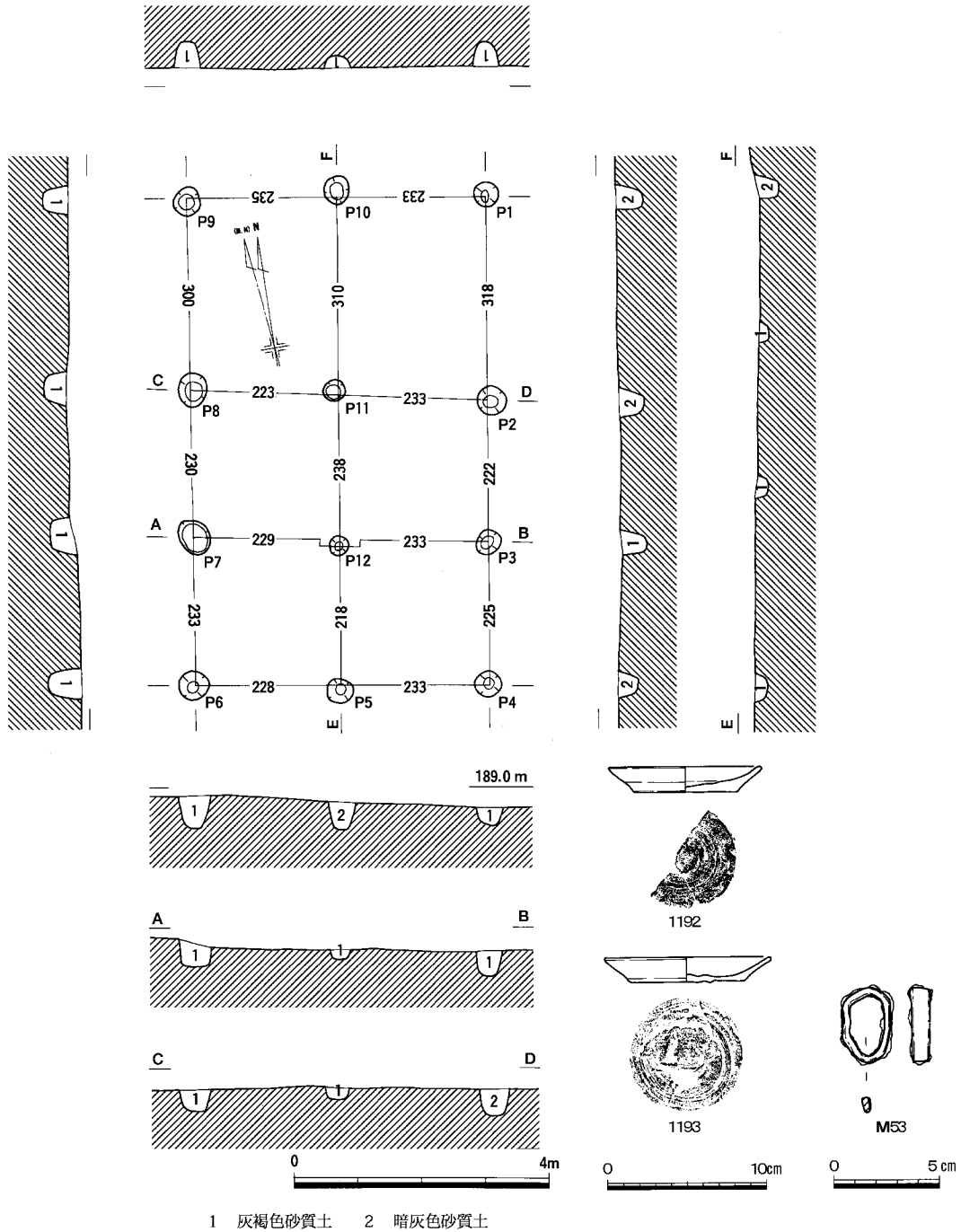


第461図 掘立柱建物29 (1/100)・出土遺物 (1/3)

る。また桁列南側・北側中央には、間隔は異なるが、それぞれ2本の柱穴がある。柱穴の掘り方は、60~30cm、深さは、70~20cmを測る。P 5・6・8・10・12・13・15・17・18の柱穴には底部に扁平な石を配し、P 14などは柱を押さえる支え石と考えられる。建物の方位は、N73°Wである。床面積は、底部を含め54.64㎡である。P 16から鏃(茎部?) M52が出土している。(伊藤)

掘立柱建物30 (第426・462図、図版104・132・149)

4 1 00Da区に位置し、桁行3間7.65m、梁行2間4.68mの南北棟である。柱間隔は、桁行3.18~



1 灰褐色砂質土 2 暗灰色砂質土

第462図 掘立柱建物30 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)



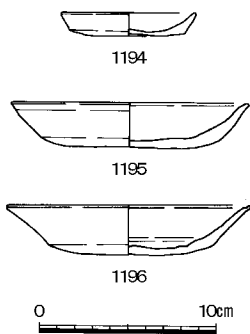
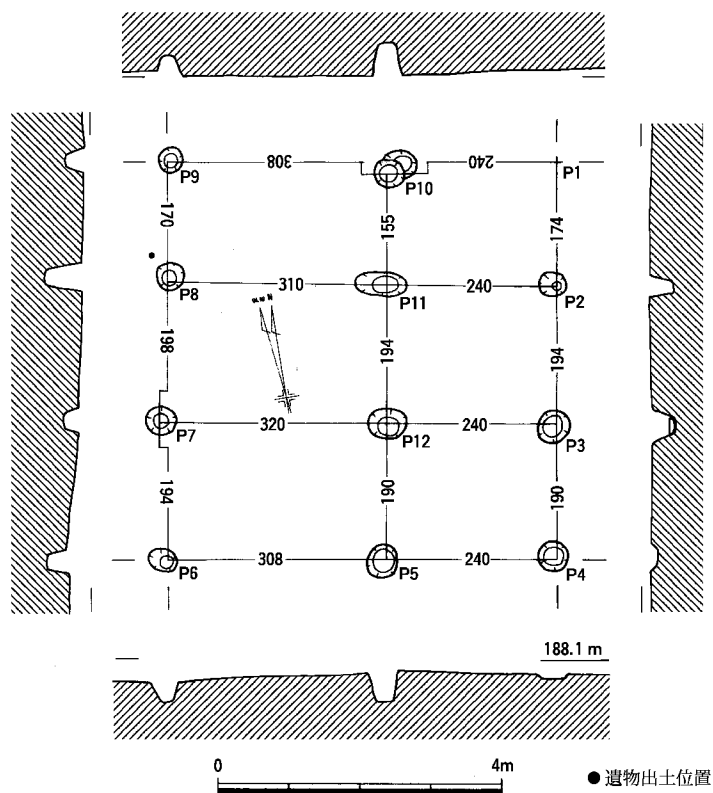
第3章 発掘調査の概要

2.17m、梁行2.35~2.23mを測る。柱穴の掘り方は、50~30cm、深さは50~15cmを測る。建物の方位は、N15°Wである。床面積は、35.57㎡を測る。P6から土師器皿が2点1192・1193、P12からM53の貴金具状のものが1点出土している。 (伊藤)

掘立柱建物31 (第425・463図、写真20、図版132)

4 1 06 B j区に位置する。調査終了後の整理段階において図上で復元した建物である。

出土遺物のうち、小皿1194はP2から出土している。1195と1196は、合わせ口の状態で検出した。明瞭な掘り方は確認できていないが、建物の縁側下に位置する。えな容器と想定したい。



第463図 掘立柱建物31 (1/100)・出土遺物 (1/4)

写真20 周辺遺物出土状況

時期は、15世紀後半以降ではなかろうか。 (弘田)

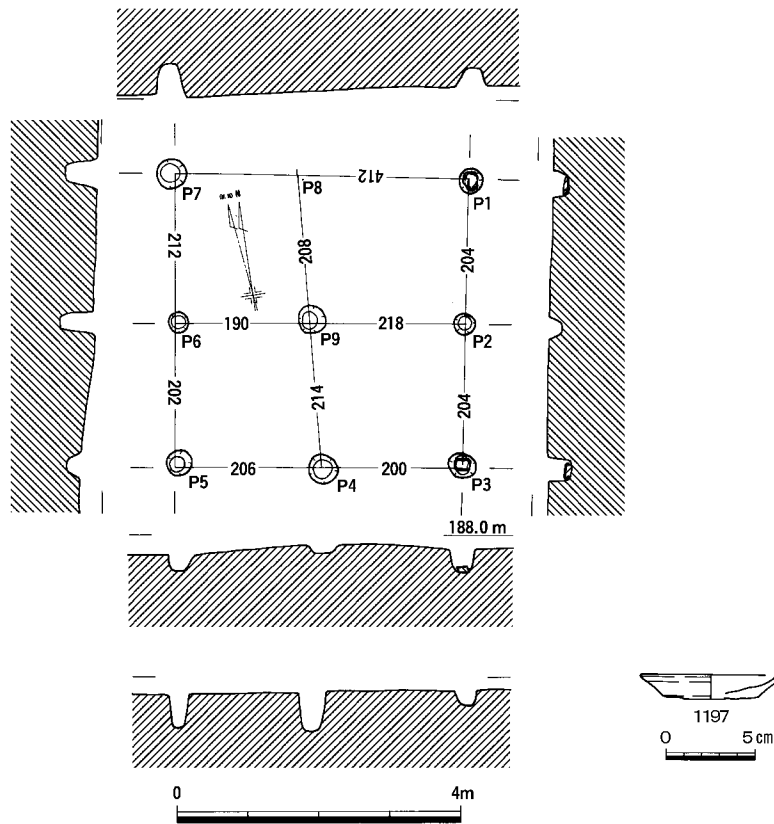
掘立柱建物32 (第425・464図、写真21)

4 1 07 B j区に位置する。調査時点では西側の梁柱列のみを柱列として認識していたが整理の過程で2×2間の総柱建物として復元できた。柱穴は、直径30~40cm程と小規模であり、柱痕は確認できなかったが、P 1とP 3では、柱穴底に扁平な河原石を敷いて礎板としていた。

P 9からは、土師器の小皿1197が出土している。それから判断して、建物の時期は中世後半の可能性が高い。 (弘田)

掘立柱建物33 (第425・465図、図版151)

4 1 07 B i区に位置する。この周囲にある建物31~34はいずれも整理の過程で復元したものであるが、



第464図 掘立柱建物32 (1/100)・出土遺物 (1/4)

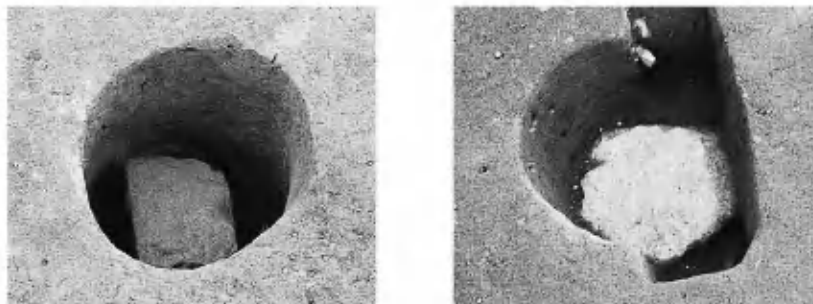
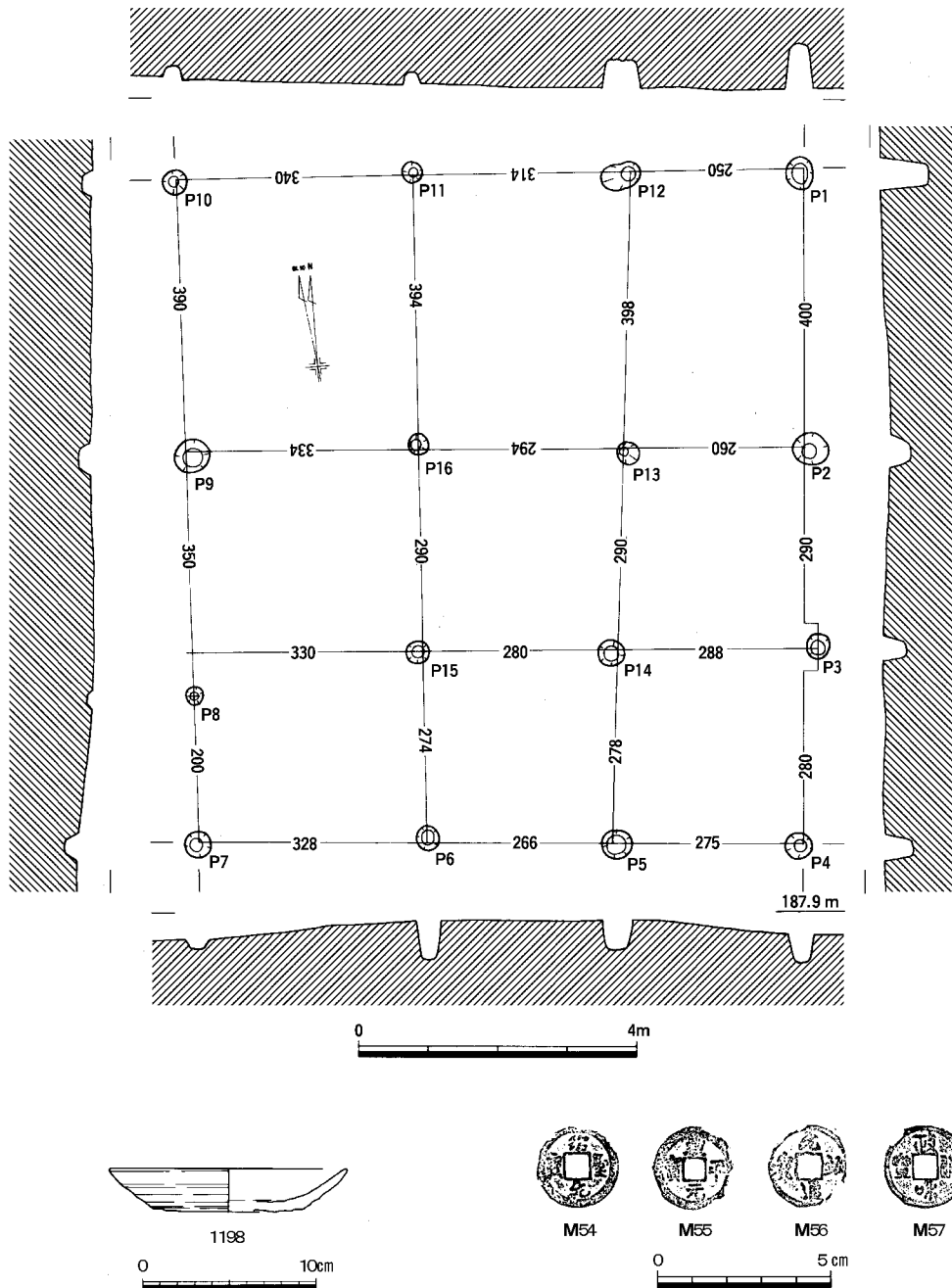


写真21 柱穴内礎石

第3章 発掘調査の概要

切り合った柱穴が同じ位置にみられたことから、この建物と後述する掘立柱建物34と2棟の建物に分離した。

出土遺物としては、P12から土師器皿1198、P1では紹聖元寶M54、P5からは□平元寶、P14では元祐通寶M55、P16からは政和通寶M56が出土している。建物34の柱穴とは便宜上分離したため、これらの柱穴のうち本来は建物34に含まれるものもあるかもしれない。他の建物の柱穴からも銭が出土する場合があります地鎮の可能性もある。



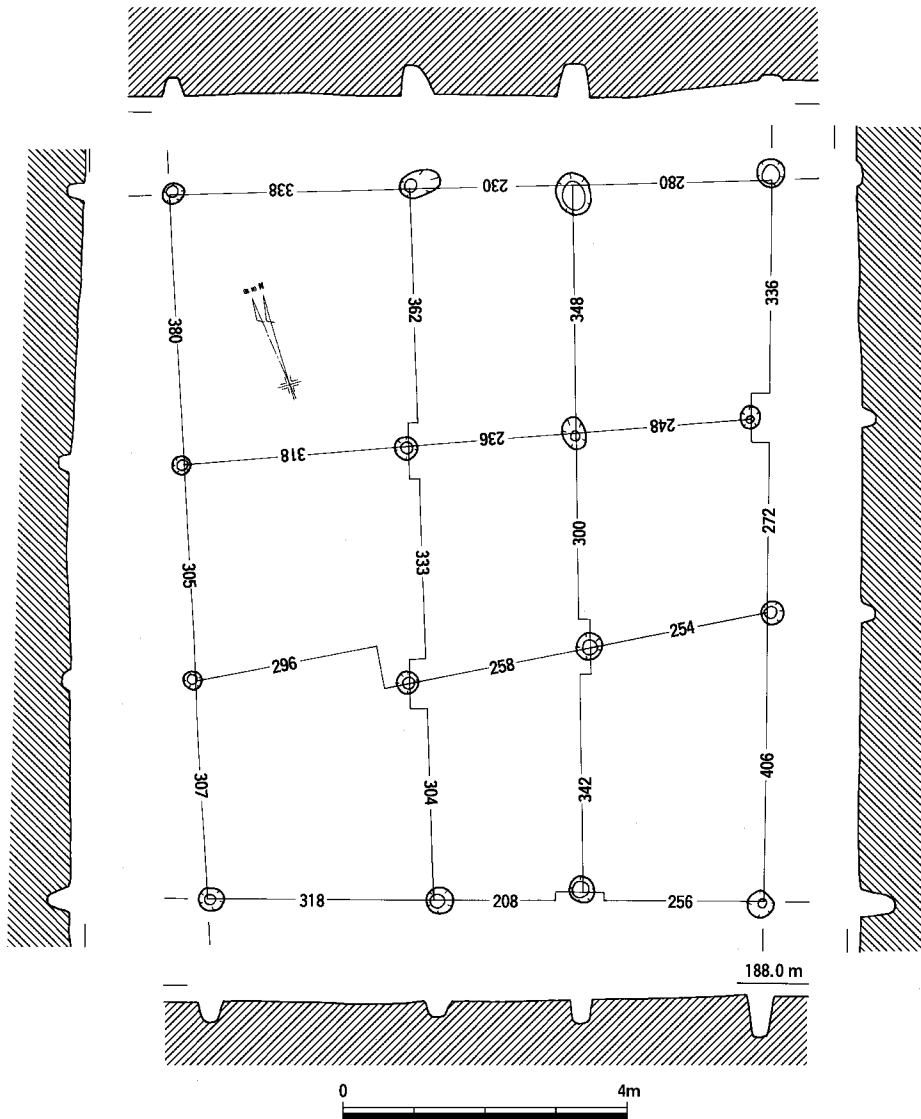
第465図 掘立柱建物33 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/2)

土師器皿からみて、時期は15世紀後半以降と思われる。(弘田)

掘立柱建物34 (第425・466図)

先の掘立柱建物33とほぼ重なる位置にあり、規模もほぼ等しい。鍛冶工房とみられる竪穴遺構1とも切り合い関係があり、この建物や周辺の柱穴からは鍛冶滓が出土していることから、竪穴1より後出すると考えられる。

時期を決定する土器はないが、この建物の時期も、建物33同様に15世紀代と考えられる。(弘田)



第466図 掘立柱建物34 (1/100)

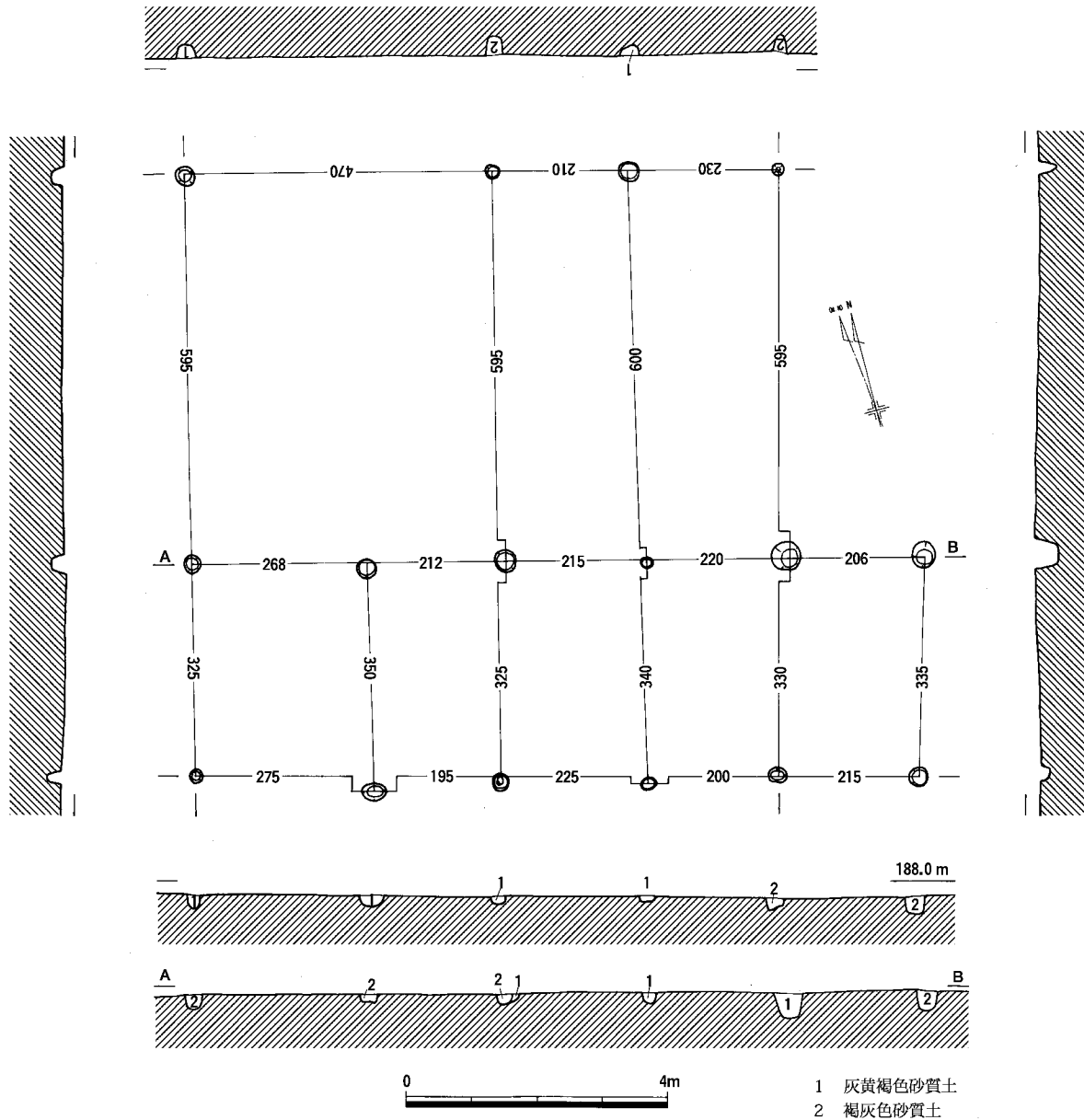
掘立柱建物35 (第425・467図、写真22)

遺跡の中央部西端側の4107Caに位置する。掘立柱建物36と重なる状態で検出した。また、北側90mにはL字状を呈する溝32がほぼ平行するような状態で検出されている。

5×1間の掘立柱建物から北側に3×1間分延びるような構造である。北側に延びる部分ではその

第3章 発掘調査の概要

中央部において東西方向のトレンチを設定したため柱穴が消失した可能性が高い。その場合、建物全体では桁行4間、梁行3間で、東側に1×1間延びる構造に復元できる。(上柵)



第467図 掘立柱建物35 (1/100)・出土遺物 (1/3)

掘立柱建物36 (第425・468図、写真22、図版104)

遺跡の中央部西端部の4 1 07 Caに位置しており、掘立柱建物35と重なる状態で検出した。

桁行3間、梁行2間の総柱建物であり、2×2間東に延びる構造と考えられるが、延長した2×2間の方が柱穴は大きく深い。柱穴の中には礫を縦に立てて入れた状態のものがあり、柱の抜き取り痕の中に詰めたと考えられる。また、柱痕が認められる柱穴も確認しており、そこから復元できる柱は直径もしくは一辺が最大で15cm程度となる。(上柵)

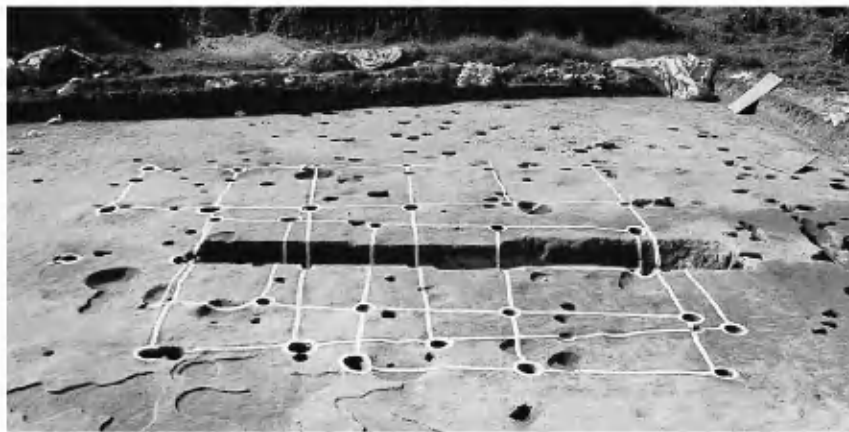
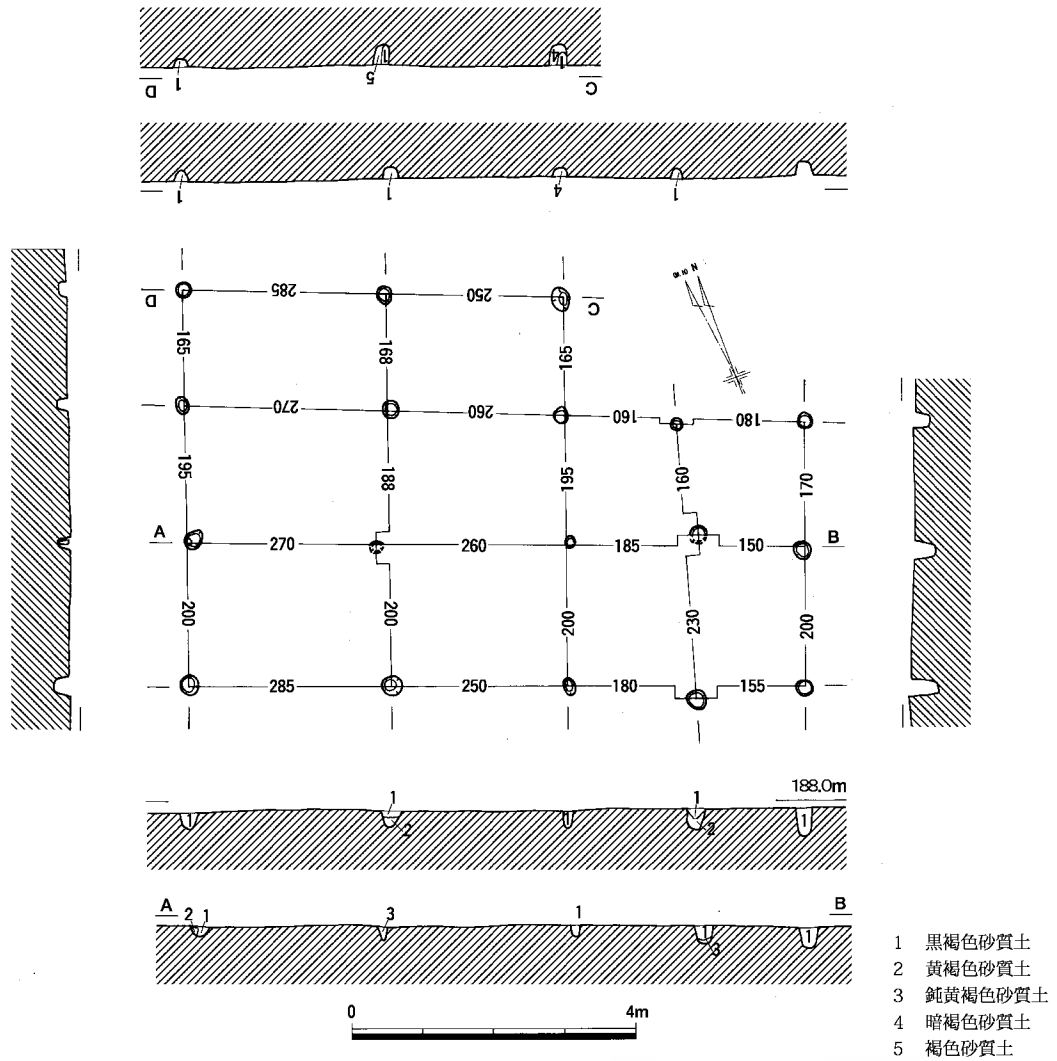


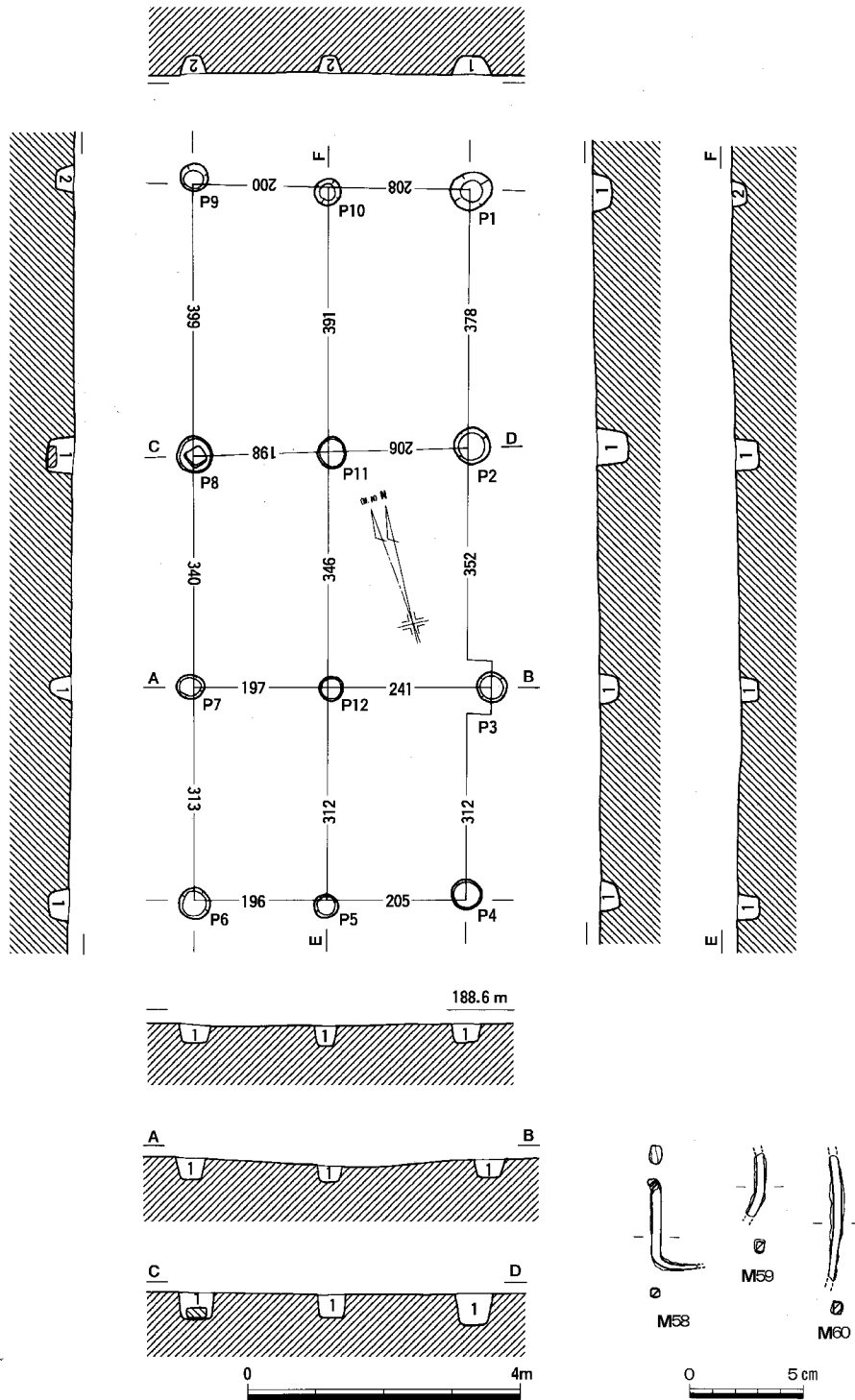
写真22 掘立柱建物35・36完掘状況 (北から)

掘立柱建物37 (第426・469図、図版105)

4 1 04Ch~Ci区において検出した。規模は桁行3間、梁行2間、面積42㎡の南北に長い総柱の建物

第3章 発掘調査の概要

である。柱穴は直径30~50cmの円形で、深さは最大で約50cm残存していた。また、P8には平らな石が据えられていた。遺物はP5からM58・59、P6からM60の鉄釘が出土している。時期は埋土や周辺の建物群との比較から中世と考えている。(平井)



1 暗灰褐色砂質土 2 褐灰色砂質土

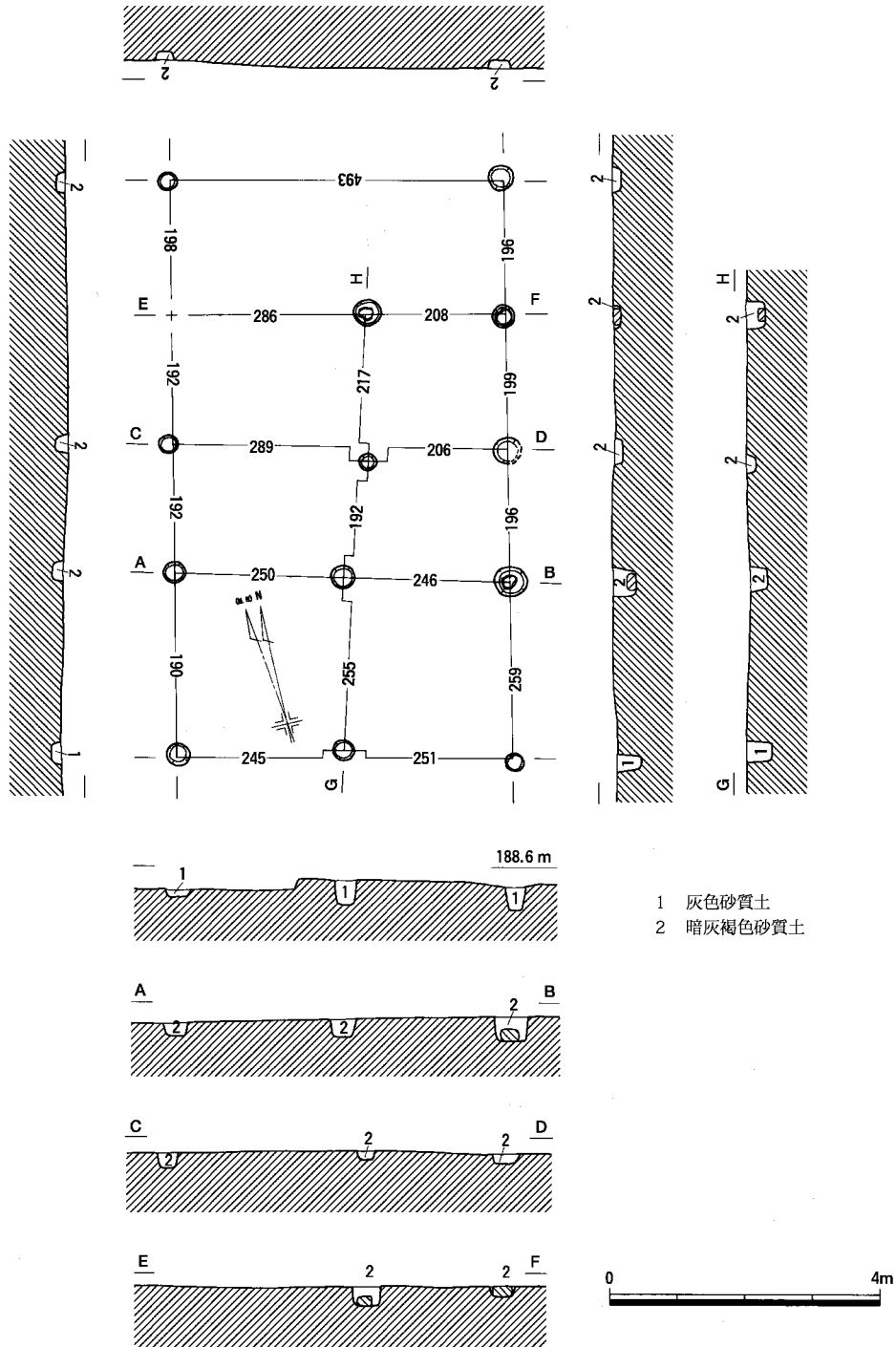
第469図 掘立柱建物37 (1/100)・出土遺物 (1/3)

掘立柱建物38 (第426・430・470図)

4 1 04Ch~Ci区において掘立柱建物37と一部重複して検出した。規模は桁行4間、梁行2間、面積42㎡の南北に長い建物で、内部にも一部柱を据えたものと思われる。柱穴は直径25~50cmの円形で、深さは最大で約40cm残存していた。また、平らな石を据えた柱穴が2本認められた。

遺物は出土していないが、時期は中世と考えている。

(平井)



第470図 掘立柱建物38 (1/100)

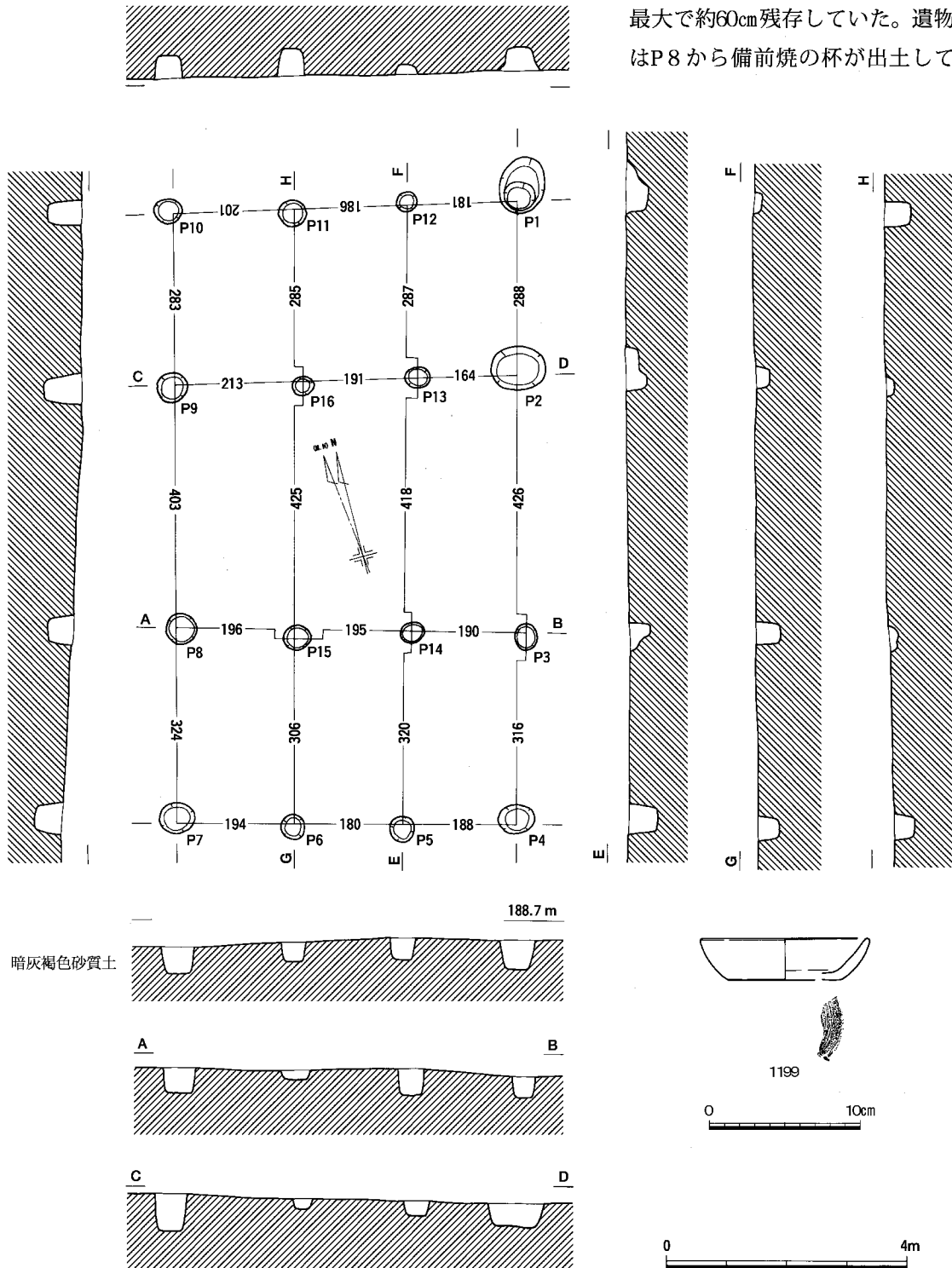


第3章 発掘調査の概要

掘立柱建物39 (第426・430・471図、図版132)

4 1 05Cj区において検出した。規模は桁行4間、梁行4間、面積57㎡の南北に長い総柱の建物である。梁間はほぼ一定ではあるが、桁行は南北に比べて中央の間隔が広がっている。柱穴は直径30～

50cmの円形のものが多く、深さは最大で約60cm残存していた。遺物はP8から備前焼の杯が出土して



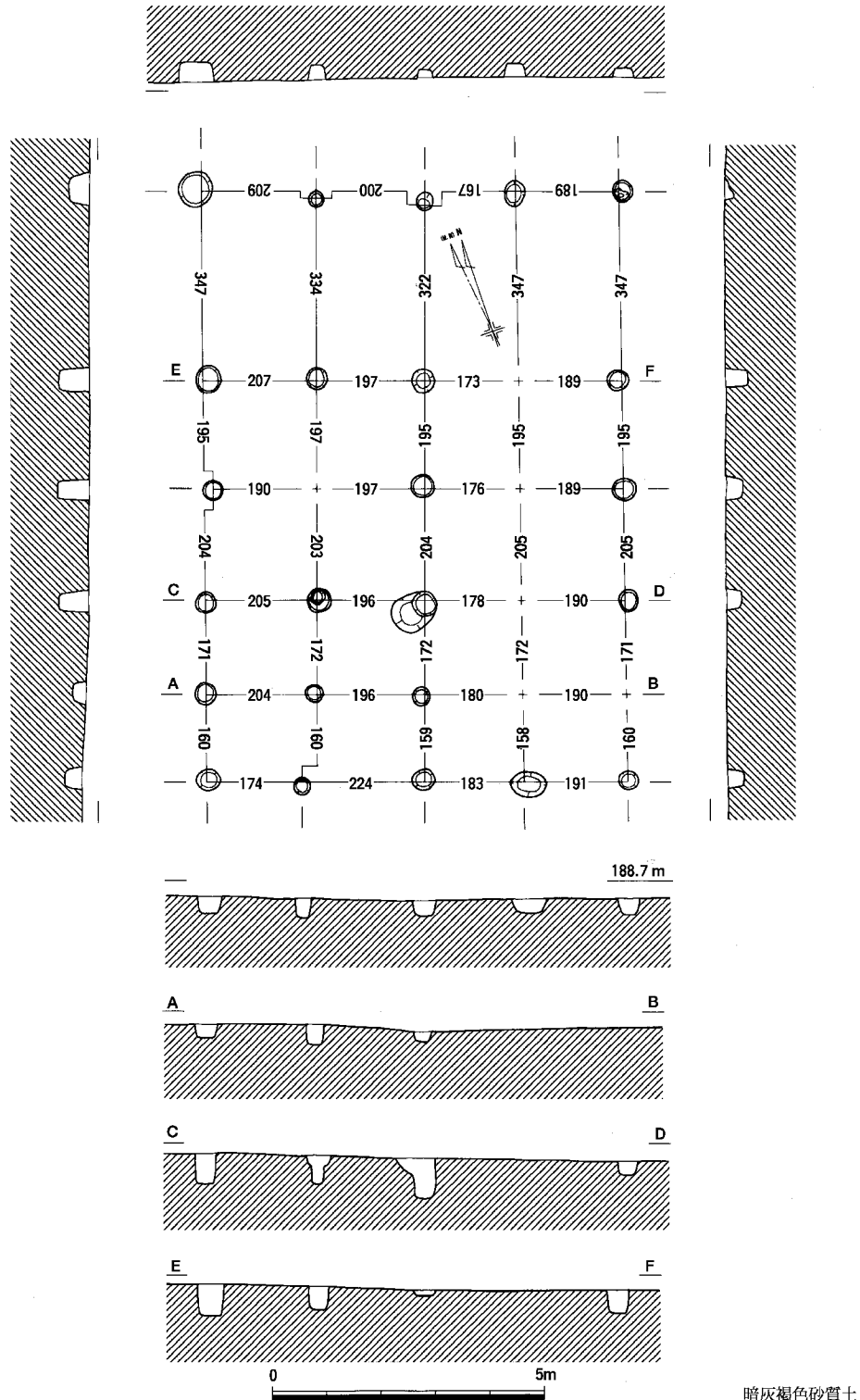
第471図 掘立柱建物39 (1/100)・出土遺物 (1/4)

おり、時期は中世と考えている。

(平井)

掘立柱建物40 (第426・427・430・472図)

4 1 05Cj区において検出した。規模は桁行5間、梁行4間、面積83㎡を測る大形の建物である。柱



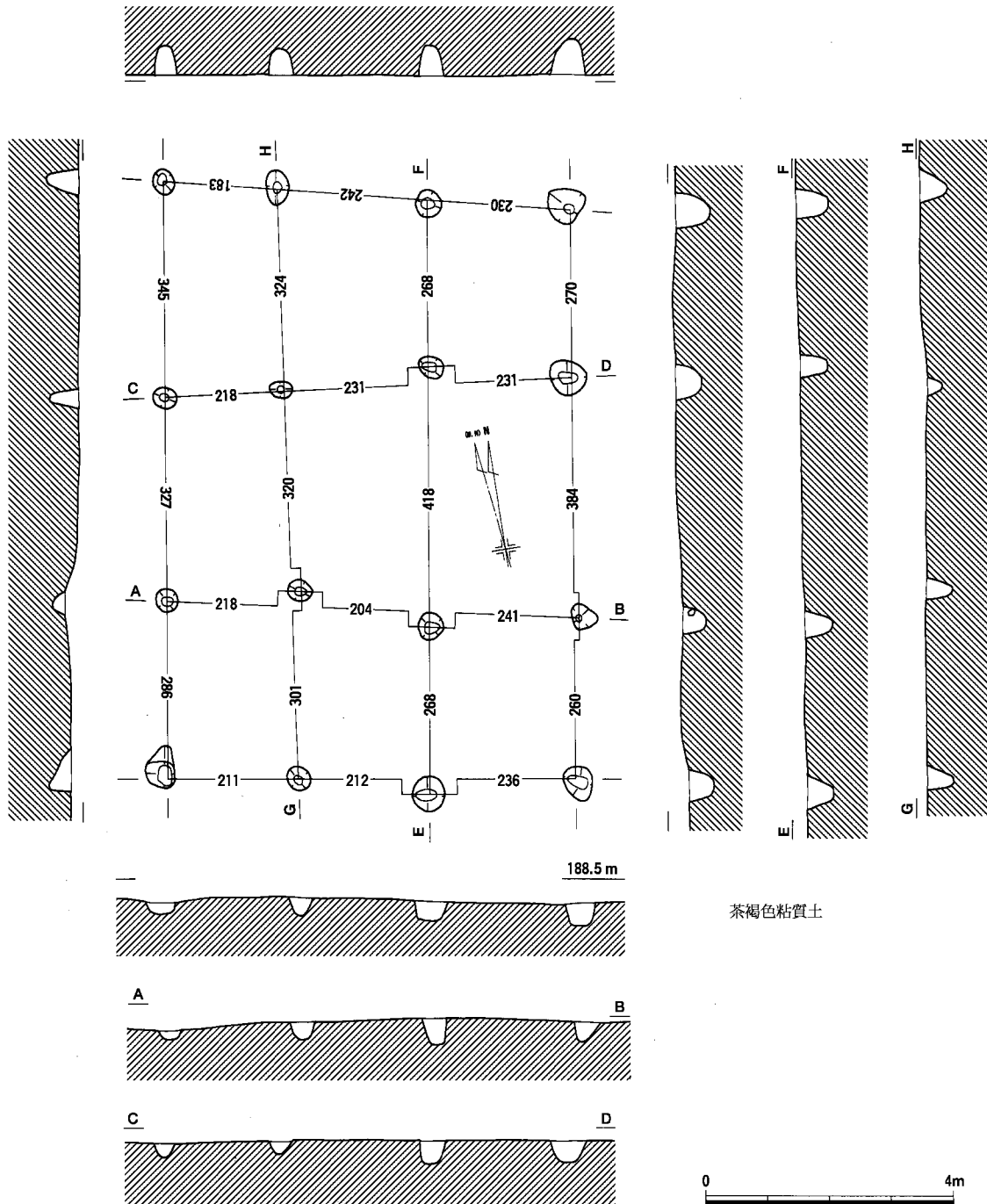
第472図 掘立柱建物40 (1/120)

第3章 発掘調査の概要

穴は砂地に掘られており、検出が困難であったが、総柱の建物であった可能性が高い。また、桁行の柱間間隔が一定ではないため、どのような建物構造になるのか不詳であるものの、全体的に矩形を呈していることから建物と判断している。時期は中世と考えている。 (平井)

掘立柱建物41 (第426・427・430・473図、図版105・132)

4 1 05 Db区で、先述した掘立柱建物40の東側約20mで検出した。棟方向は南北棟で、規模は桁行3



第473図 掘立柱建物41 (1/100)

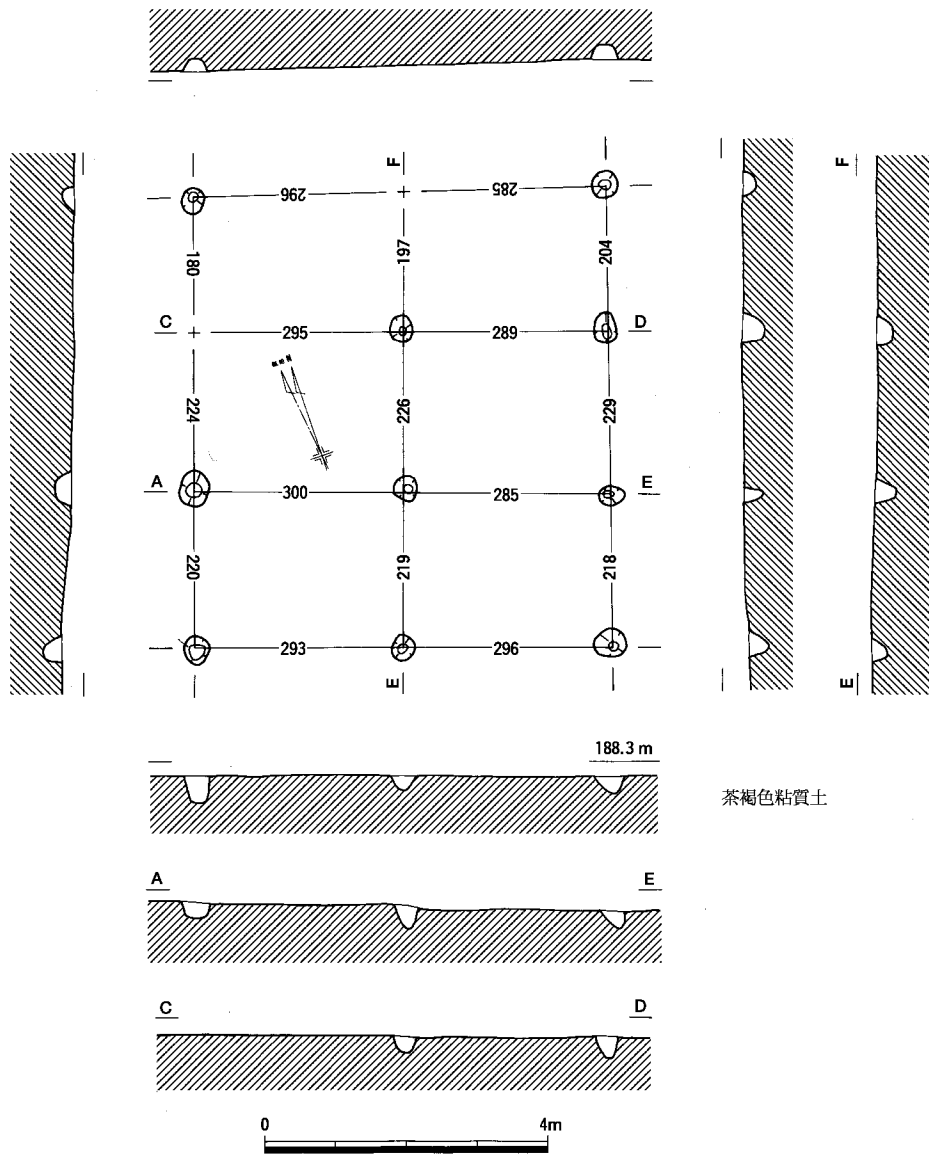
間、梁行3間で、床面積が61㎡を測る総柱の建物である。平面形は、北辺がややいびつで、柱間隔についても規格的とはいえないなど問題が残る。柱穴の平面形は円形で、深さは最大で約50cm残存していた。

遺物は出土していないが、時期は中世と考えている。 (平井)

掘立柱建物42 (第427・474図、図版105)

掘立柱建物41の東隣りで検出した。確認できていない柱穴もあるが、平面形が矩形を呈することから、桁行3間、梁行2間と想定している。柱穴は直径30~50cmの円形で、深さは最大で約40cm残存していた。床面積は38㎡である。棟方向が掘立柱建物41と酷似しており、両者に建て替えなどの関連性を考えることが出来よう。

遺物は出土していないが、時期は中世と考えている。 (平井)



第474図 掘立柱建物42 (1/100)

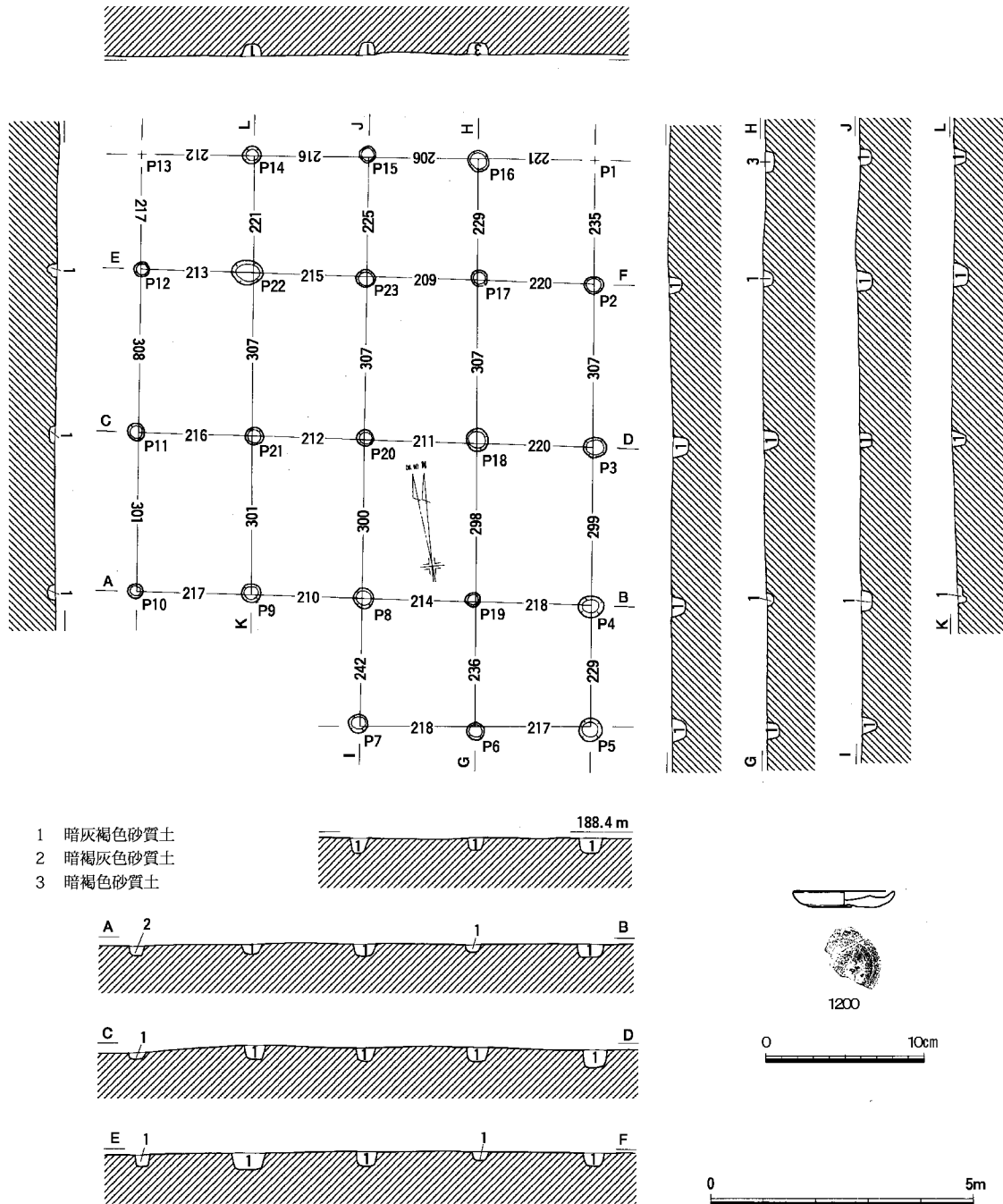
第3章 発掘調査の概要

掘立柱建物43 (第430・475図、図版105・132)

4 1 06Cj区において検出した。一部検出できなかった柱穴があるが、桁行4間、梁行3間と、南東部に2×1間の張出し部分を想定している。この想定は、周辺部に柱穴が存在しており、かつ砂地のため柱穴の検出が比較的困難であったことから、確実ではない。柱穴は直径20~40cmの円形で、深さは最大で約30cm残存していた。土壌176との切り合い関係は不明である。

遺物はP 6から土師器の小皿が出土しており、時期は中世と考えている。

(平井)



第475図 掘立柱建物43 (1/120)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物44 (第430・431・476図、図版106)

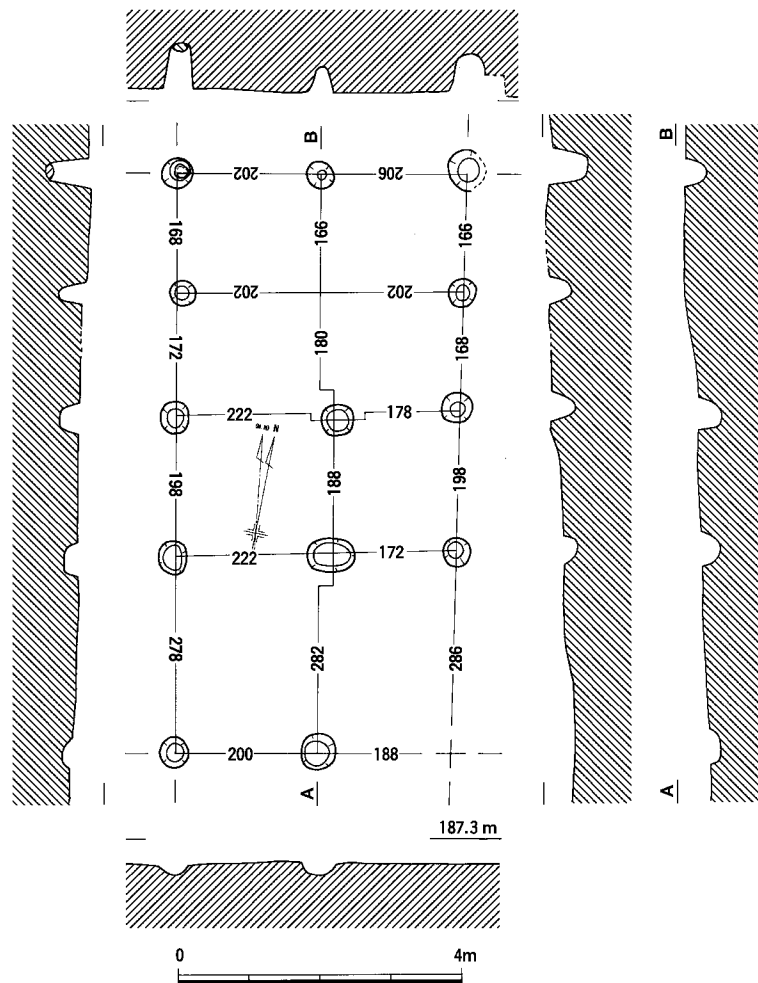
4 201 Ch区から検出された4×2間の掘立柱建物であるが、南東隅の柱穴だけが精査したにもかかわらず確認できなかった。桁行8.18m、梁行4.08mを測り、面積は32.53㎡であった。柱穴間の距離は、桁行2.86~1.66m、梁行2.22~1.72mで、最も南側に位置する桁行の距離が極端に長くなっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。(福田)

掘立柱建物45 (第430・477図、図版106)

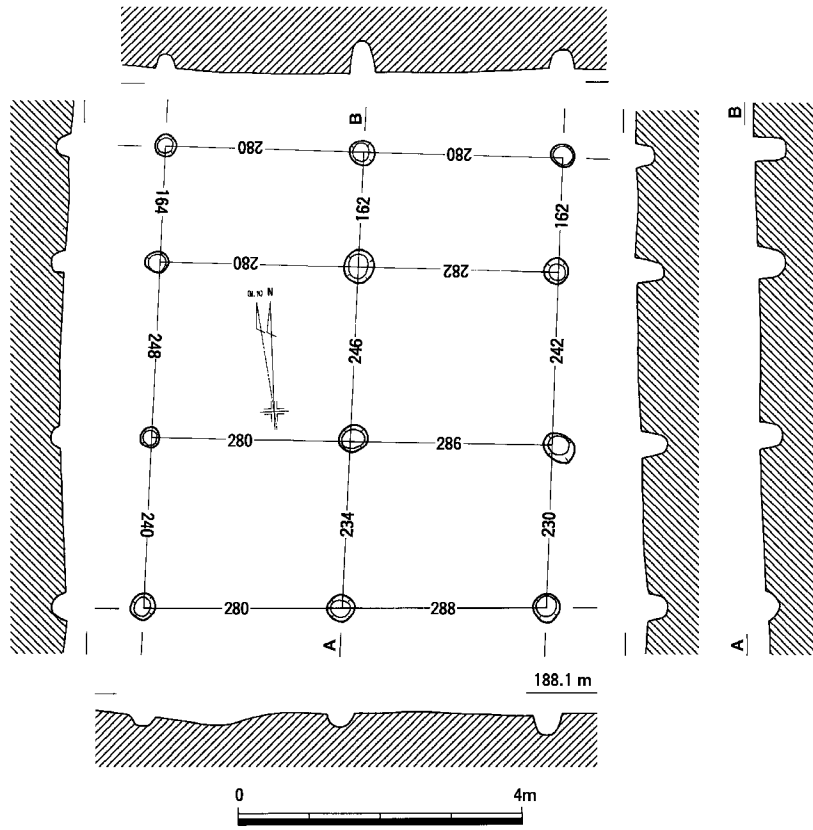
4 201 Db区から検出された3×2間の総柱の掘立柱建物で、南西部分が溝36と重複していた。桁行6.52m、梁行5.68mを測り、面積は36.31㎡であった。柱穴間の距離は、桁行2.48~1.62m、梁行2.88~2.80mで、最も北側に位置する桁行の距離が極端に短くなっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。(福田)

掘立柱建物46 (第431・478図)

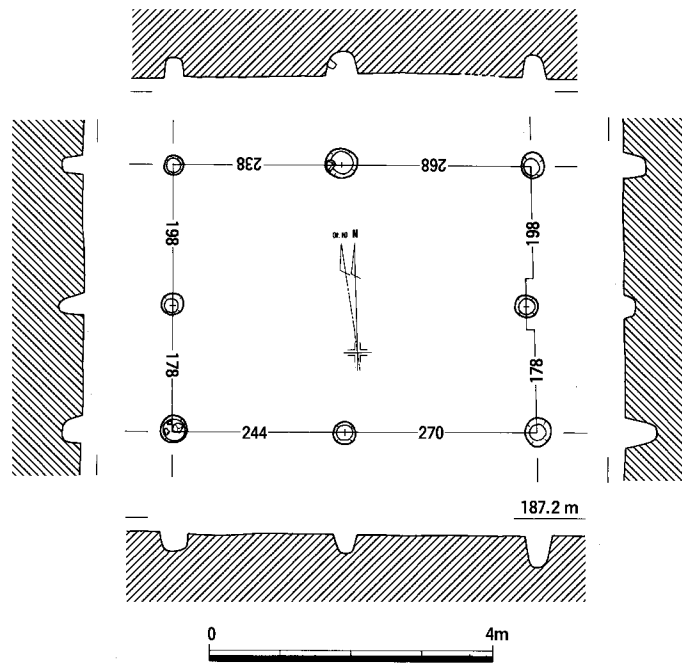
4 207 Cj区から検出された2×2間の側柱の掘立柱建物で、東方向約6mの地点には溝39が存在している。桁行5.14m、梁行3.76mを測り、面積が19.13㎡で、棟方向はN80°Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.70~2.38m、梁行1.98~1.78mになっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形で、断



第476図 掘立柱建物44 (1/100)



第477図 掘立柱建物45 (1/100)

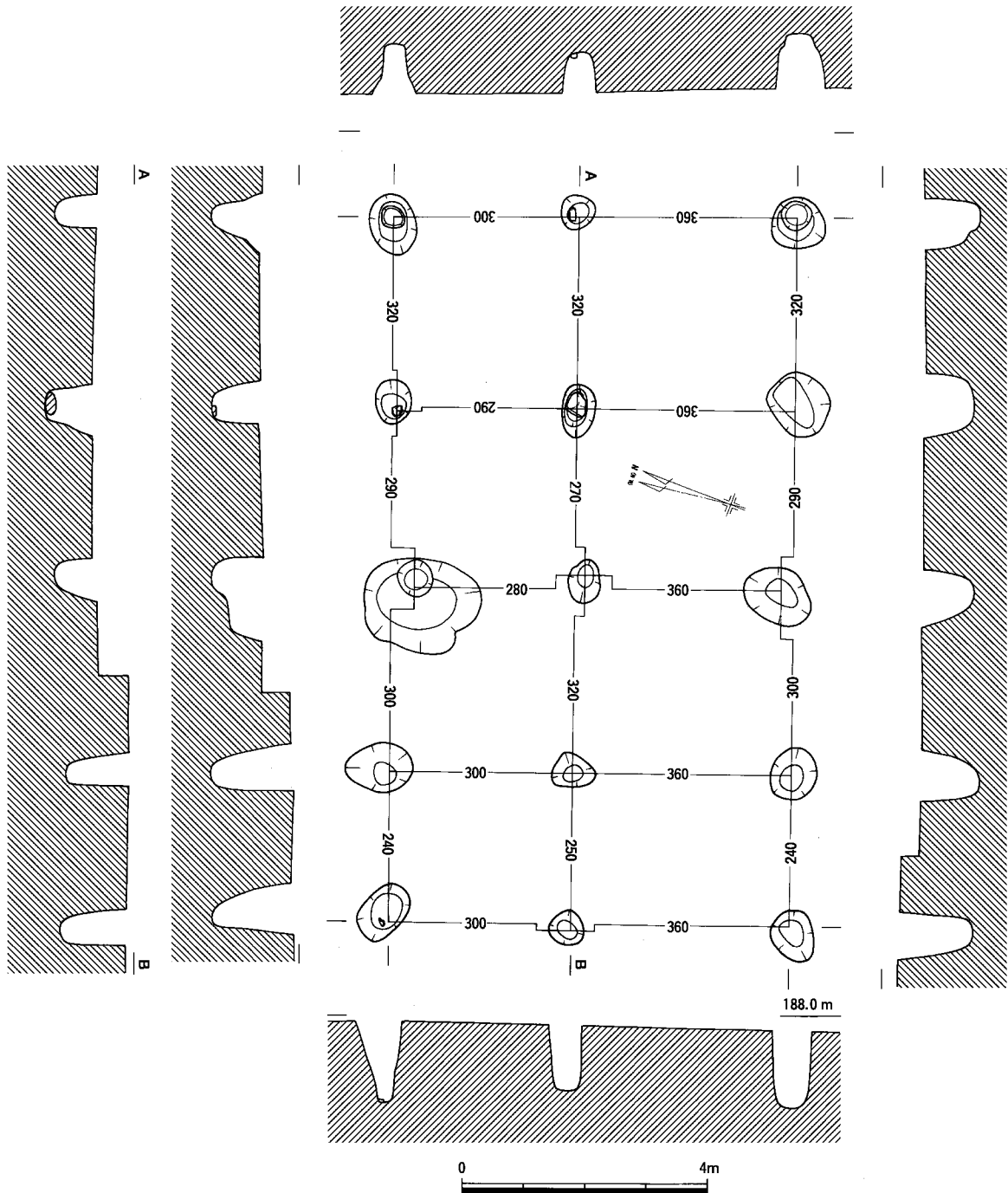


第478図 掘立柱建物46 (1/100)

面形は上方に開く「U」字形を呈し、2個の柱穴内に河原石が認められた。(福田)

掘立柱建物47 (第429・479図、図版106)

4 206Db区から検出された4×2間の総柱の掘立柱建物で、北側の近接した所には直線的に延びる溝38が、南側と西側には直角に屈曲する溝39が存在した。桁行11.60m、梁行6.60mを測り、面積は75.46㎡であった。柱穴間の距離は、桁行3.20~2.40m、梁行3.60~2.80mで、最も西側に位置する桁行の距



第479図 掘立柱建物47 (1/100)



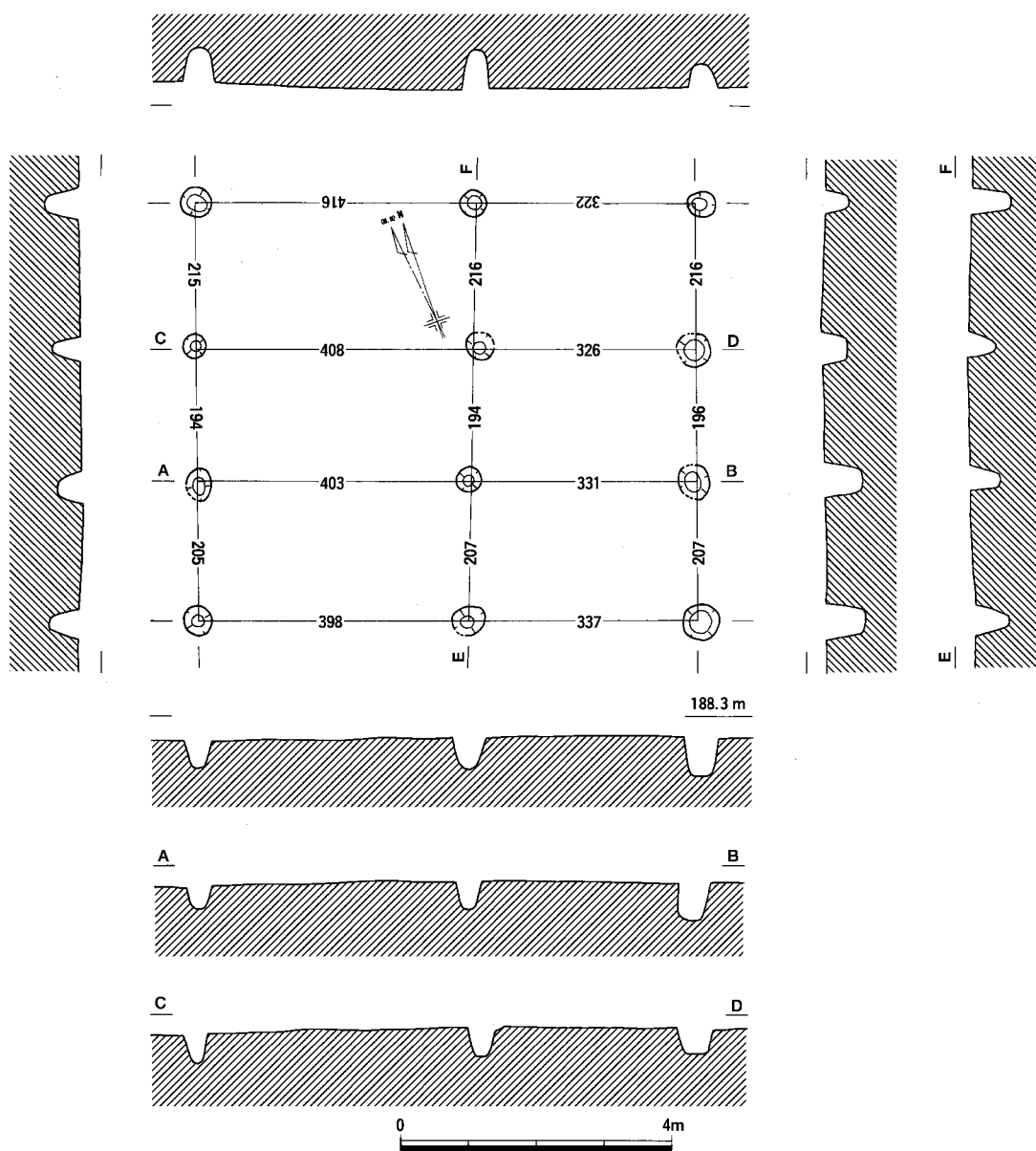
離が極端に短くなっていた。柱穴の底部に河原石があるものも認められた。(福田)

掘立柱建物48 (第428・480図、図版107)

4 1 06De区から検出された3×2間の総柱の掘立柱建物で、後述する掘立柱建物49と重複していた。東方向へ約3.30m離れた地点には、この建物の梁行方向と一致する柱穴列1が存在している。桁行7.38m、梁行6.19mを測り、面積が45.48㎡で、棟方向はN64°Eを示していた。柱穴間の距離は、桁行4.16~3.22m、梁行2.16~1.94mで、北西側の桁行の距離が極端に長くなっていた。(福田)

掘立柱建物49 (第428・481図、図版107)

4 1 06De区から前述した掘立柱建物48と重複して検出された、3×2間の側柱の掘立柱建物である。南東側桁行の柱穴の切り合い関係から、この建物が掘立柱建物48よりも新しいことが判明した。



第480図 掘立柱建物48 (1/100)

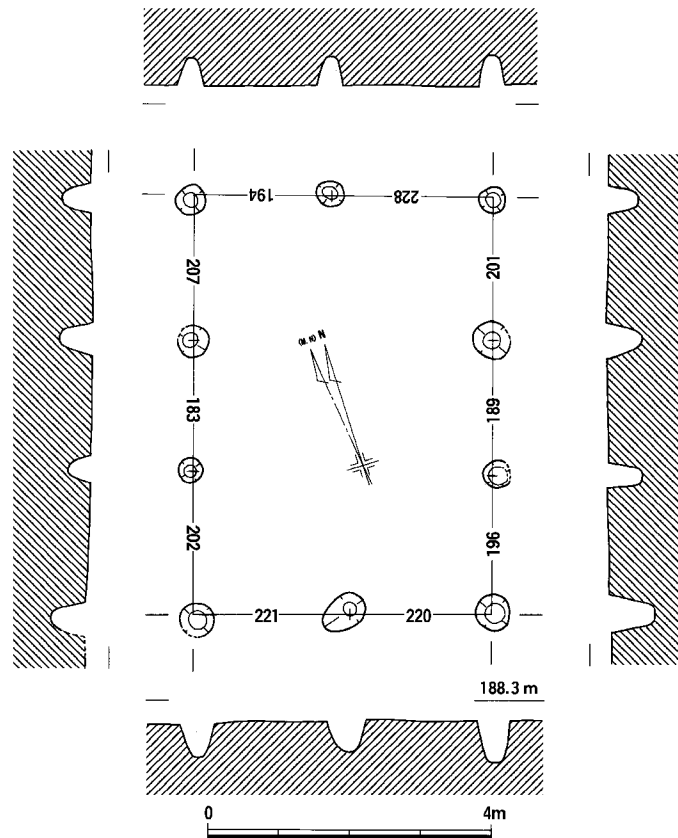
桁行5.92m、梁行4.22mを測り、面積が47.78㎡で、棟方向はN26°Wを示していた。また柱穴間の距離は、桁行2.07～1.83m、梁行2.28～1.94mになっていた。(福田)

掘立柱建物50 (第428・482  
図、図版107)

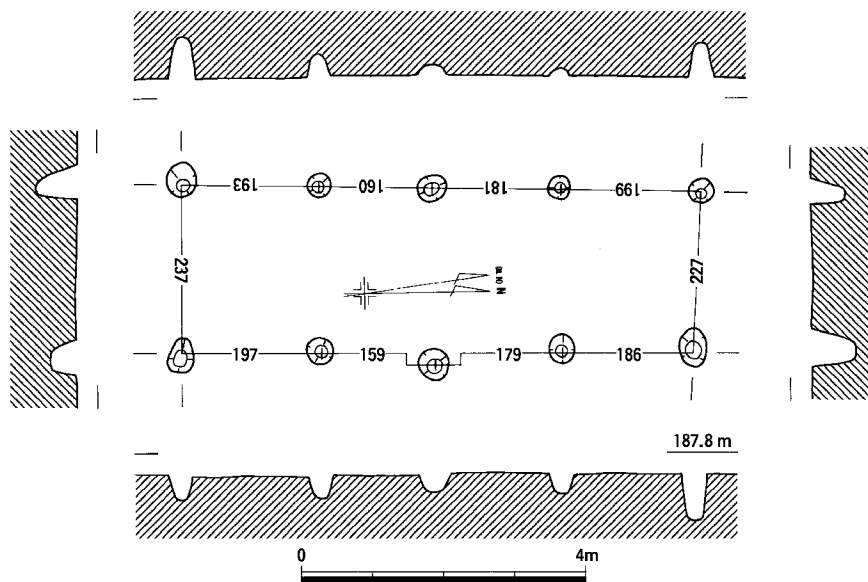
4 201Dg区において検出された4×1間の細長い掘立柱建物で、東側には後述する掘立柱建物51が存在した。桁行7.33m、梁行2.37m、面積16.90㎡を測り、棟方向はN9°Wであった。柱穴間の距離は、桁行1.99～1.59m、梁行2.37～2.27mで、柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形を呈していた。(福田)

掘立柱建物51 (第428・483  
図、図版107)

4 201Dh区に検出した2×1間の小規模な掘立柱建物である。桁行3.45m、梁行1.84mを測り、面積が6.16㎡で、棟方向はN5°Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行1.82～1.63m、梁行1.84～1.76m



第481図 掘立柱建物49 (1/100)



第482図 掘立柱建物50 (1/100)

第3章 発掘調査の概要

になり、柱穴の平面形は円形に近い形で、断面形は「U」字形を呈していた。(福田)

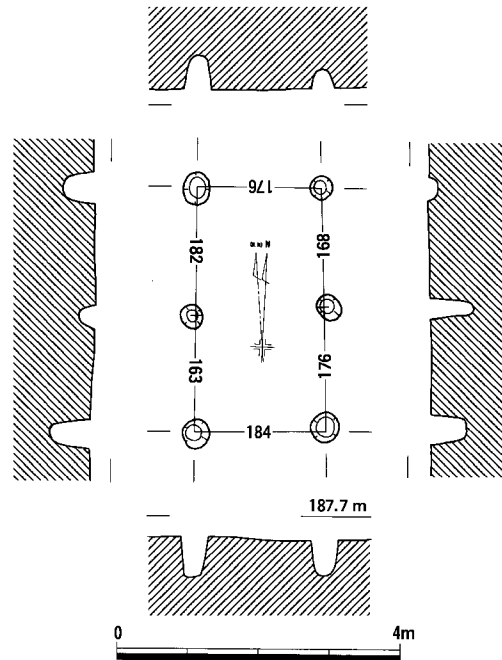
掘立柱建物52 (第428・484図、図版107・108・132・147)

4108De区から検出された2×2間の総柱の掘立柱建物である。桁行5.38m、梁行4.35m、面積が22.75㎡で、棟方向はN15°Wを示していた。柱間距離は、桁行2.72~2.55m、梁行2.20~1.79mで、東側の梁行がやや広がっていた。

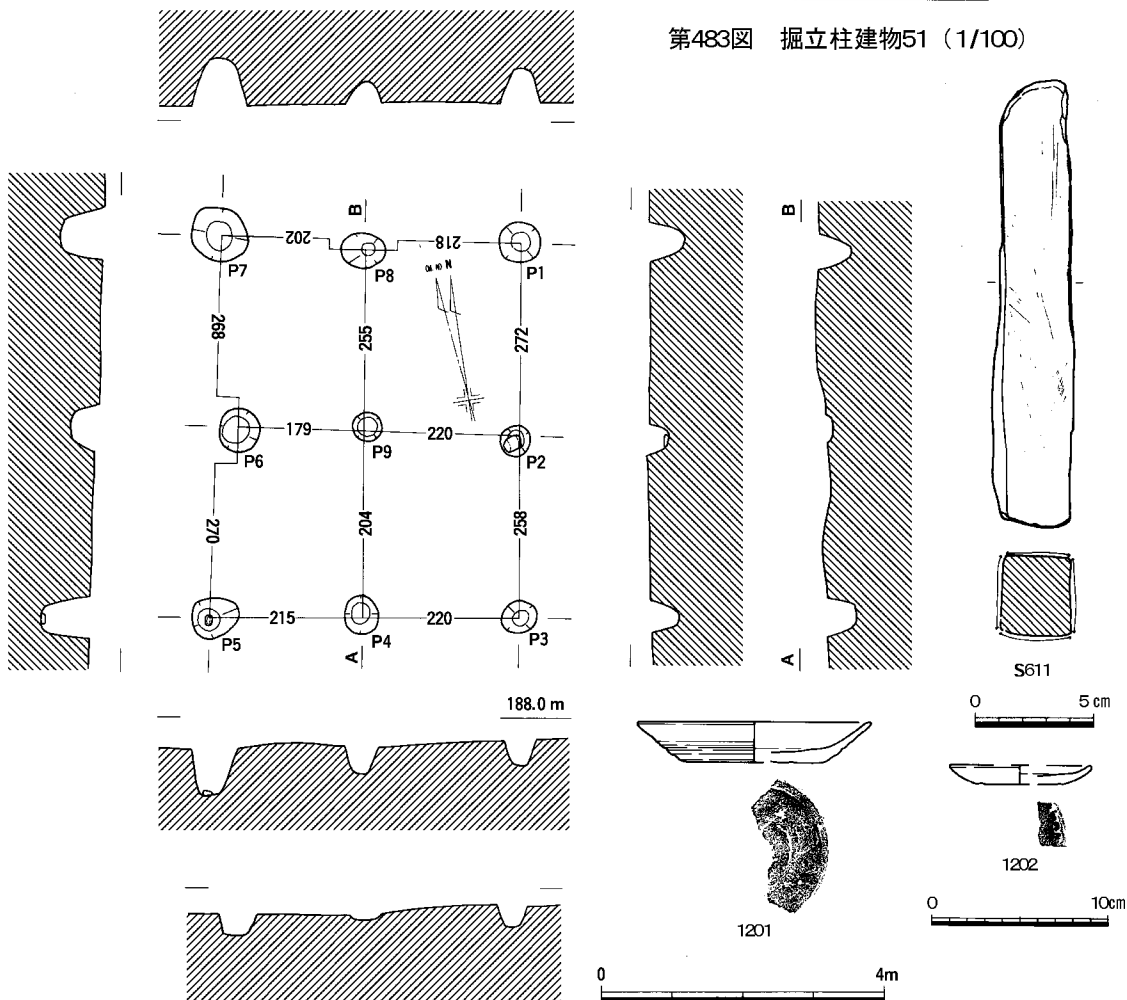
柱穴内から出土した遺物として、砥石S611、土師器の皿1201、小皿1202がある。(福田)

掘立柱建物53 (第428・485図、図版108)

4109Df区で検出した5×2間の側柱の掘立柱建物で、細長くて西側がやや開いた形になって



第483図 掘立柱建物51 (1/100)

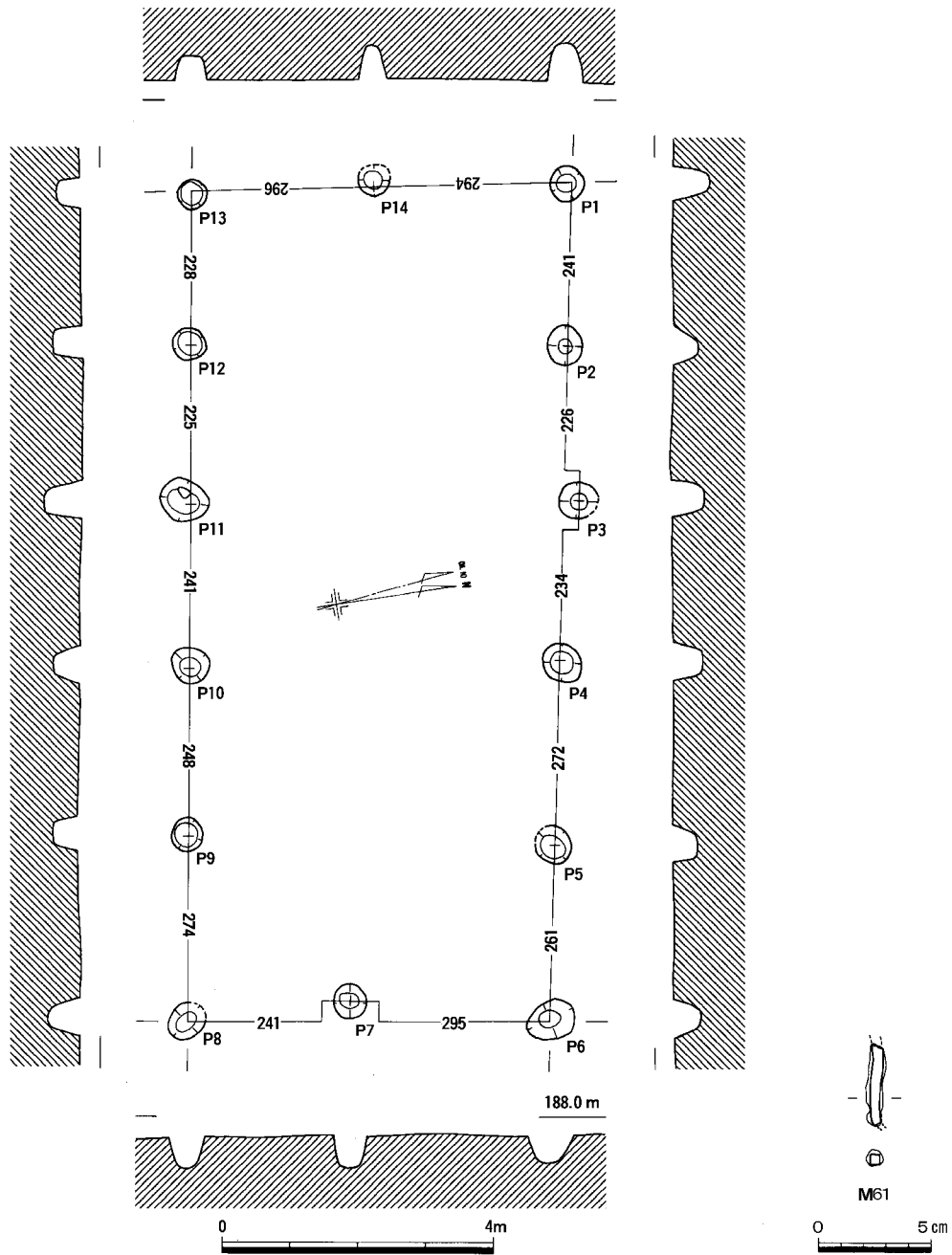


第484図 掘立柱建物52 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)

いる。桁行12.34m、梁行5.63mを測り、面積が67.66㎡で、棟方向はN74°Eを示していた。柱穴の平面形は円形に近い形で、断面形は「U」字形を呈し、釘M61が出土した。(福田)

掘立柱建物54 (第428・486図、図版108)

4109Df区の南西方向で、掘立柱建物53と掘立柱建物56の間に検出した4×1間の掘立柱建物である。桁行8.49m、梁行3.10mを測り、面積が26.02㎡で、棟方向がN78°Eを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.25~1.99m、梁行3.10~3.08mになっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。(福田)

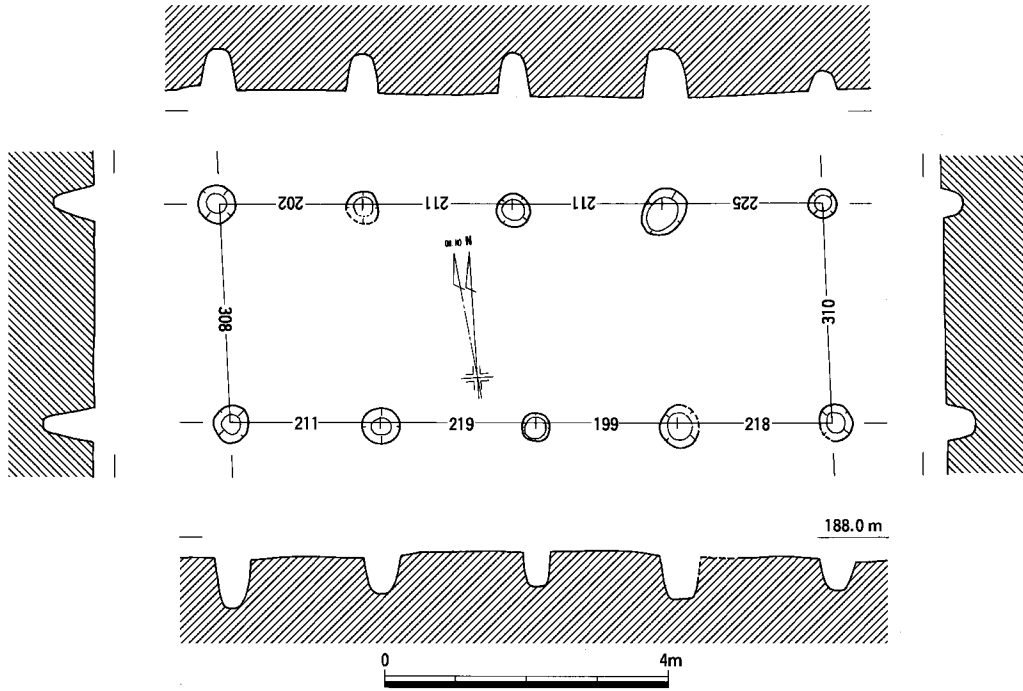


第485図 掘立柱建物53 (1/100)・出土遺物 (1/3)

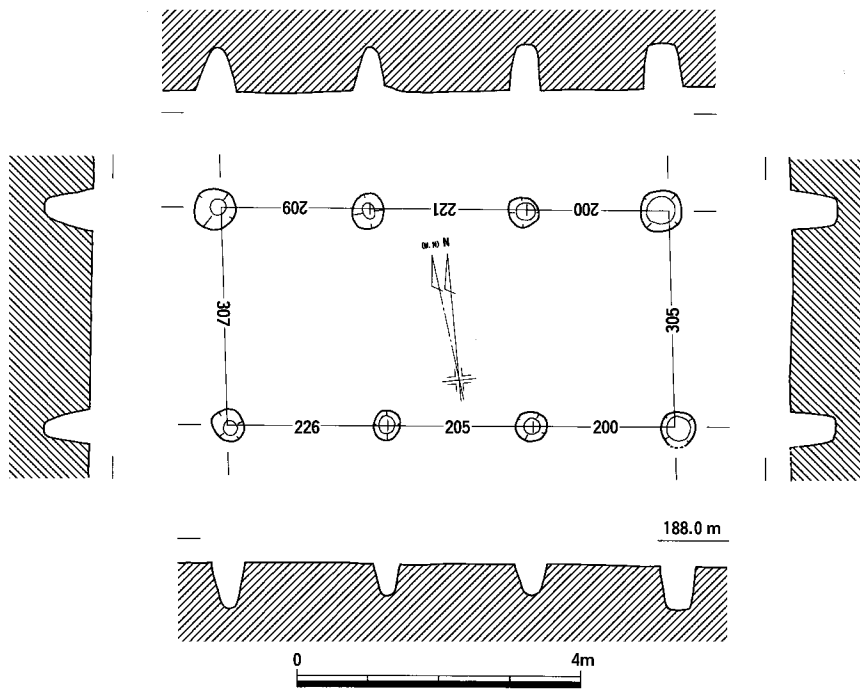
第3章 発掘調査の概要

掘立柱建物55 (第428・487図、図版108)

4 200D f区から検出された3×1間の掘立柱建物で、北側の部分は後述する掘立柱建物56と重複し



第486図 掘立柱建物54 (1/100)

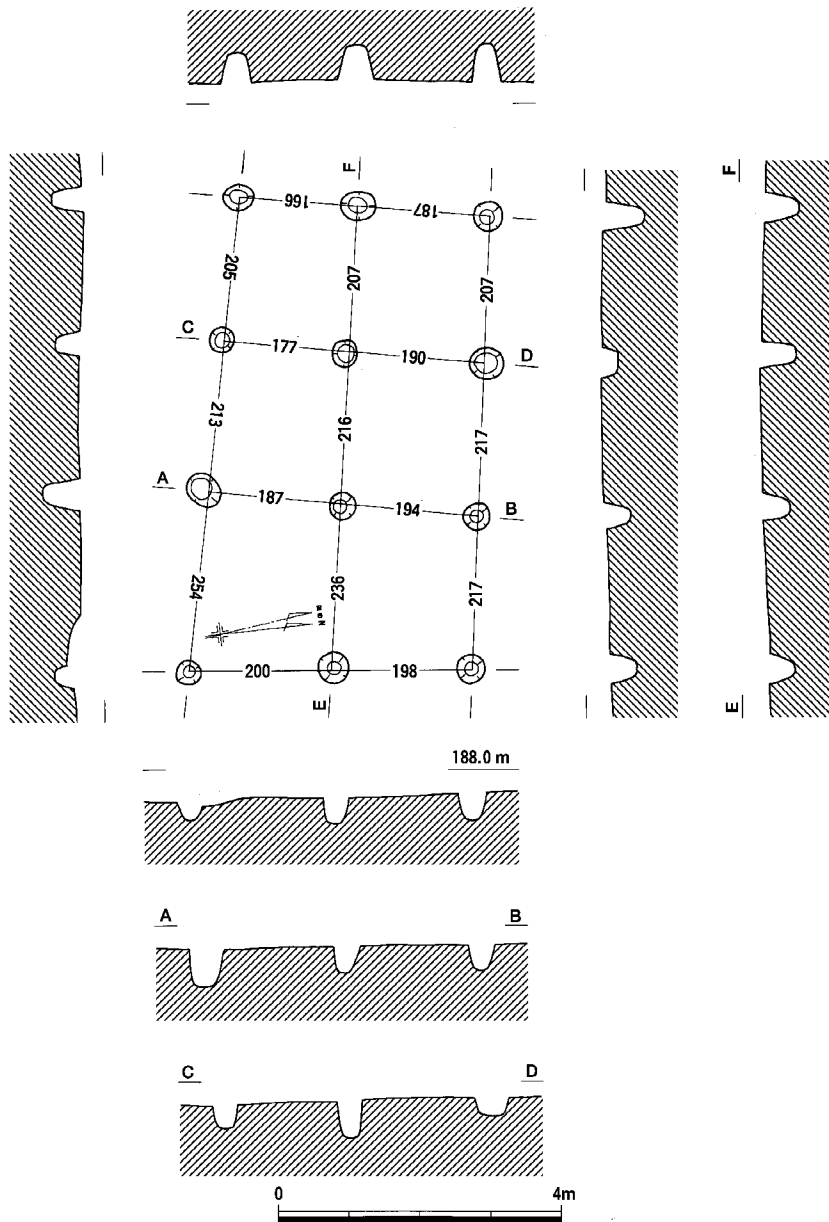


第487図 掘立柱建物55 (1/100)

ていた。桁行6.31m、梁行3.07mを測り、面積が19.14㎡で、棟方向が前述した掘立柱建物54とほぼ同じのN77°Eを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.26~2.00m、梁行3.07~3.05mになっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。(福田)

掘立柱建物56 (第428・488図、図版108)

4200Df区で検出した3×2間の総柱の掘立柱建物で、南側は前述した掘立柱建物55と重複し、南東隅の柱穴は土壌181を新しく切っていた。桁行6.72m、梁行3.98mを測り、面積が24.68㎡で、棟方向がN73°Eを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.54~2.05m、梁行2.00~1.66mで、東方向へ移行するにしたがって梁行の柱穴間の距離が長くなり、建物全体が東側に開いた形態になっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形で、断面形は上方に開いた「U」字形を呈していた。(福田)



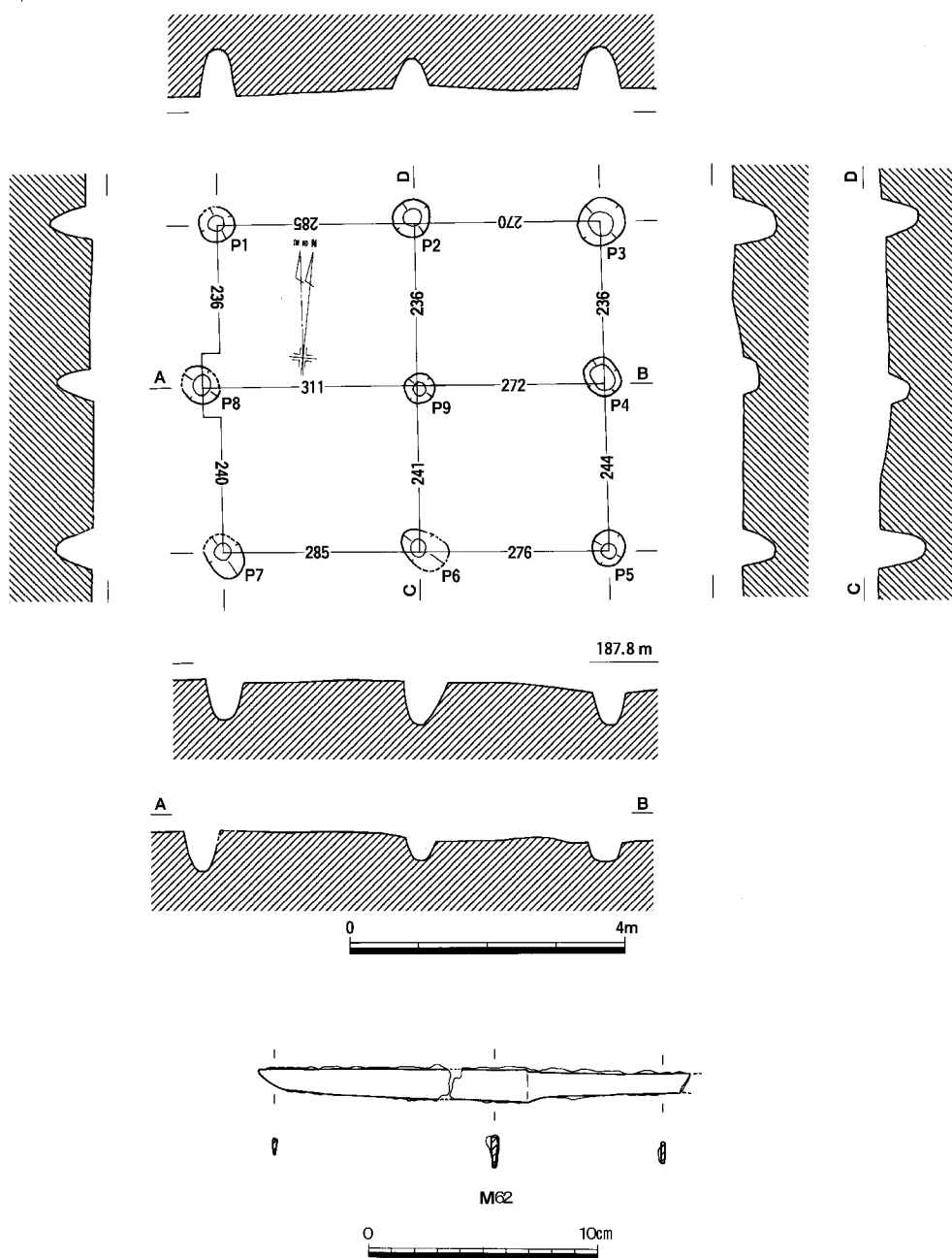
第488図 掘立柱建物56 (1/100)

第3章 発掘調査の概要

掘立柱建物57 (第429・489図、図版108・149)

4203Dc区から検出された2×2間の総柱の掘立柱建物で、南東側の近接した地点には土壙188が存在し、東方向には後述する掘立柱建物58と掘立柱建物59が重複した状態で確認されている。桁行5.83m、梁行4.80mを測り、面積が26.48㎡で、棟方向がN89°Eを示していた。柱穴間の距離は、桁行3.11~2.70m、梁行2.44~2.36mで、西側梁行の中央の柱が外側にやや外れていた。柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形で、断面形はいずれも上方に開いた「U」字形を呈していた。

柱穴内から出土した遺物として、刀身部が折れて茎端部を欠損した刀子M62がある。 (福田)



第489図 掘立柱建物57 (1/100)・出土遺物 (1/3)

掘立柱建物58 (第429・490図、写真23)

4 2 03 Dd区で検出した3×1間の掘立柱建物で、後述する掘立柱建物59と重複していた。西側には掘立柱建物57や土壌188が存在し、北東側には土壌186や土壌187が確認されている。桁行7.17m、梁行2.70mを測り、面積が17.73㎡で、棟方向がN 2°Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.49~2.31m、梁行2.70~2.32mで、西側桁行の中間に位置する2個の柱穴がやや内側に存在し、南側の梁行が北側よりも長くなっていた。柱穴の平面形は、円形または楕円形を呈していた。(福田)

掘立柱建物59 (第429・491図、写真23)

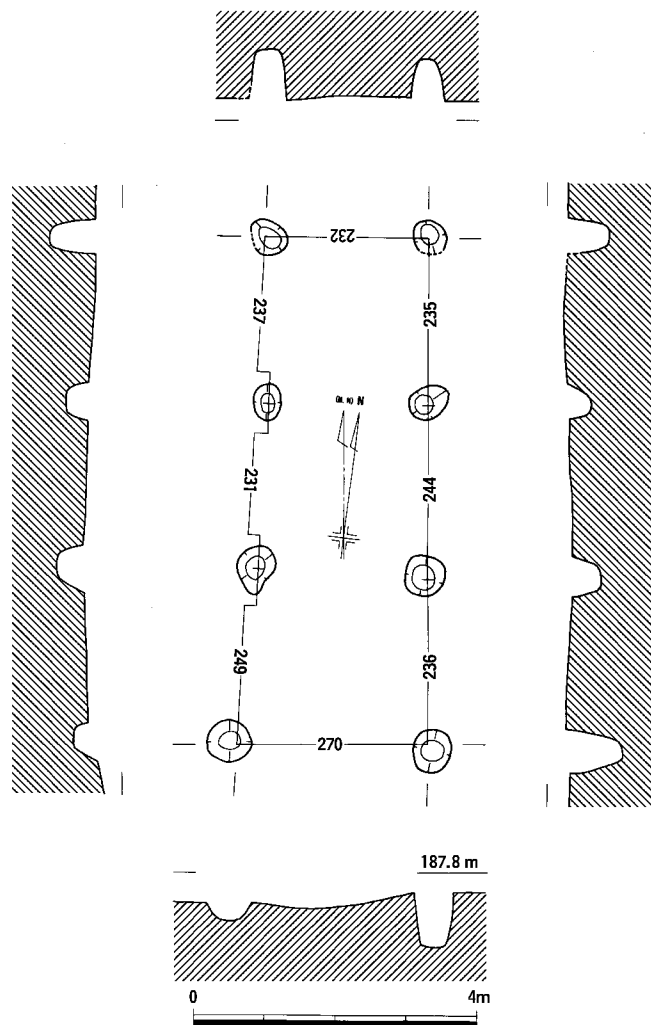
4 2 03 Dd区から前述した掘立柱建物58と重複した状態で検出された、4×1間の細長い掘立柱建物である。桁行7.91m、梁行2.14mを測り、面積が16.68㎡で、棟方向がN 1°Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.01~1.92m、梁行2.14~2.12mで、西側の桁行の中間に位置する柱穴の規模がやや小さくなっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形で、断面形はいずれも上方に開いた「U」字形を呈していた。

柱穴内から出土した遺物として、土師器の小皿片1203~1205と刀子の茎部片M63がある。(福田)

掘立柱建物60 (第429・

492図)

4 2 04 Dc区で検出した3×1間の掘立柱建物で、土壌189と重複していた。遺構の切り合い関係を精査したところ、この建物が新しく土壌が古いことが判明した。北側には掘立柱建物57や土壌188が、南側には掘立柱建物62や土壌190が、東側には柱穴列2や墓35が、西側には柱穴列がそれぞれ存在している。この掘立柱建物60の計測値は、桁行6.97m、梁行2.60mを測り、面積が16.98㎡で、棟方向がN 90°Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.45~2.12m、梁行2.60~2.33mで、西側がやや開いた形になっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形で、断面形は上方に開いた「U」字形を呈していた。(福田)



第490図 掘立柱建物58 (1/100)



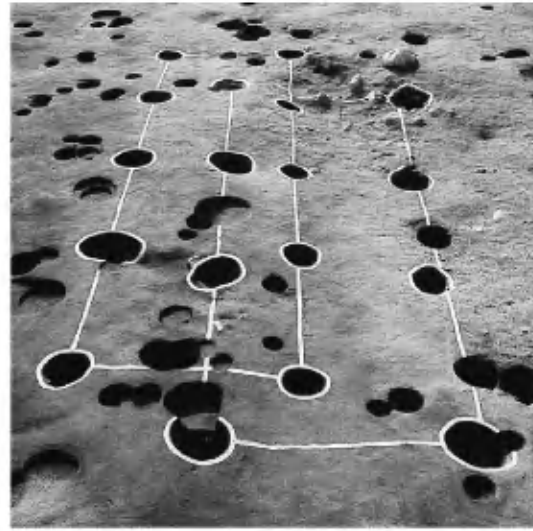
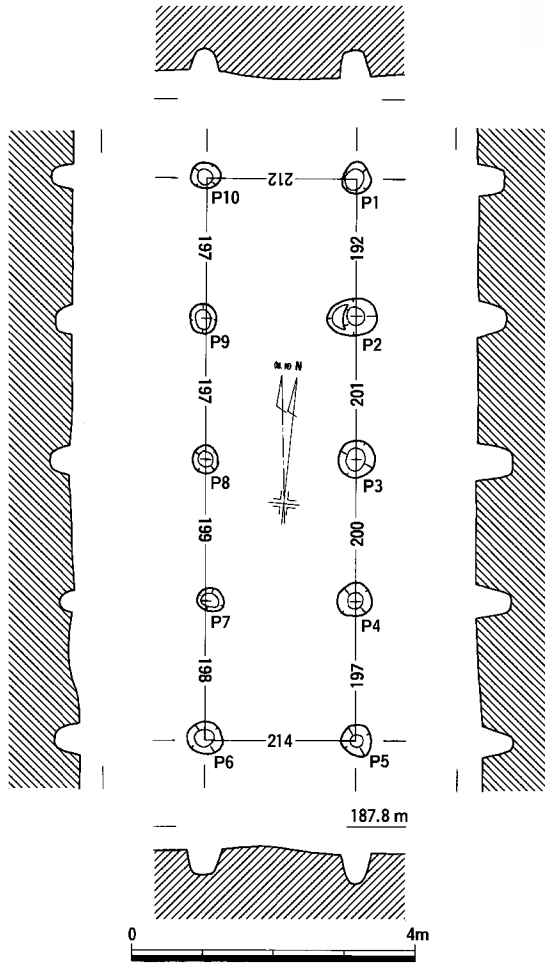
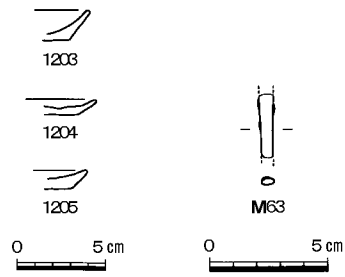
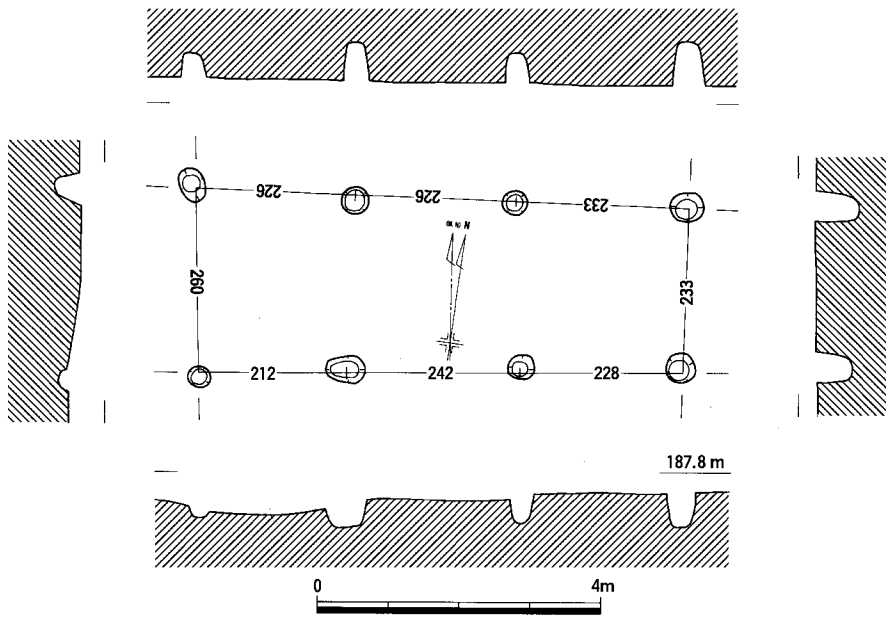


写真23 掘立柱建物58・59全景（南から）



第491図 掘立柱建物59（1/100）・出土遺物（1/4,1/3）



第492図 掘立柱建物60（1/100）

掘立柱建物61 (第429・493図)

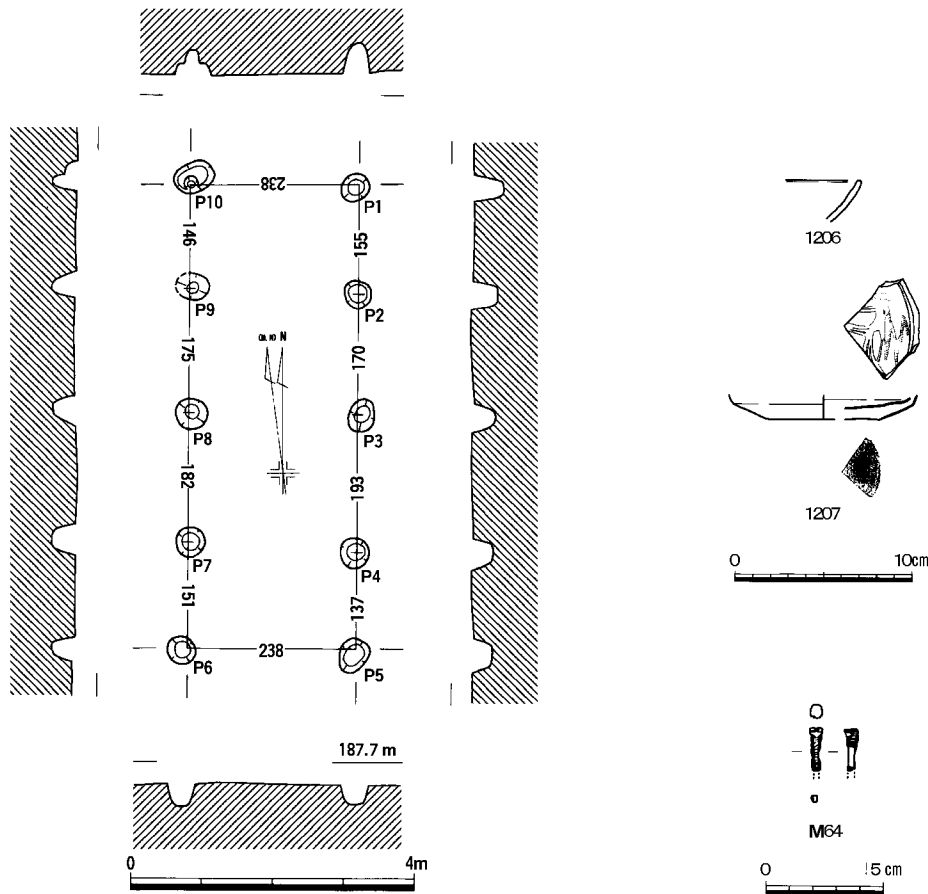
4 2 04 De区で検出した4×1間の掘立柱建物で、南側には掘立柱建物64と掘立柱建物65が重複して存在し、西側には墓35と柱穴列2が確認されている。桁行6.55m、梁行2.38mを測り、面積が15.61㎡で、棟方向がN 8°Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行1.93~1.37m、梁行2.38mになっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形で、断面形は上方に開いた「U」字形を呈していた。柱穴内から出土した遺物として、土師器の皿1206、同安窯系青磁皿1207、釘M64がある。(福田)

掘立柱建物62 (第429・494図、図版108)

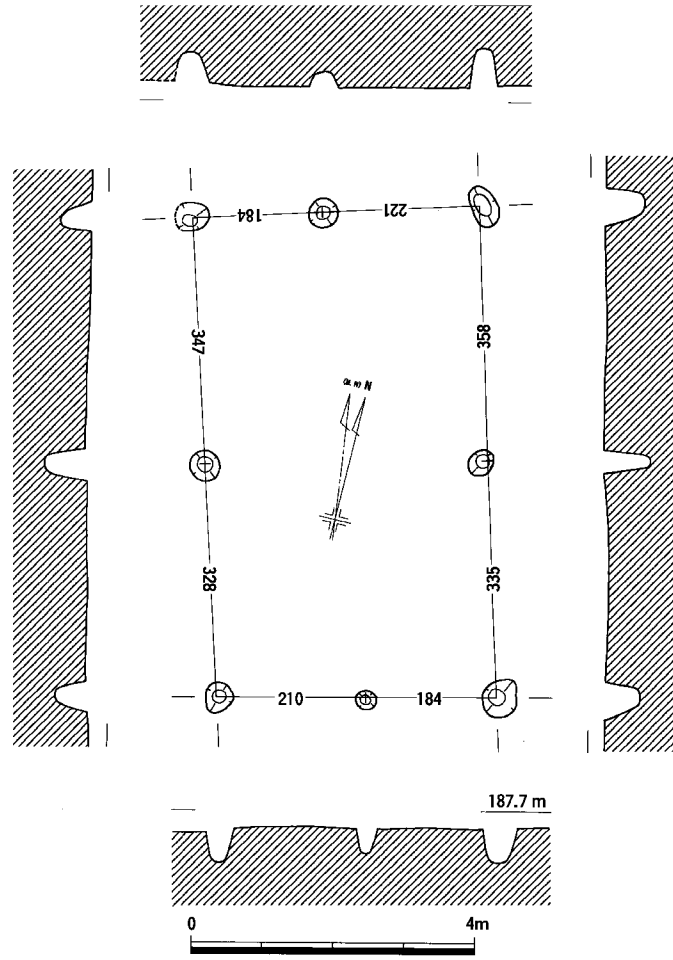
4 2 05 Dc区から検出された2×2間の側柱の掘立柱建物で、北西隅の近接した地点には土壇190が存在している。桁行6.93m、梁行4.05mを測り、面積が27.36㎡で、棟方向はN 8°Eを示すが、全体にやや歪んだ形態になっている。柱穴間の距離は、桁行3.58~3.28m、梁行2.21~1.84mであった。柱穴の平面形は円形または楕円形で、断面形は上方に開いた「U」字形を呈していた。(福田)

掘立柱建物63 (第429・495図)

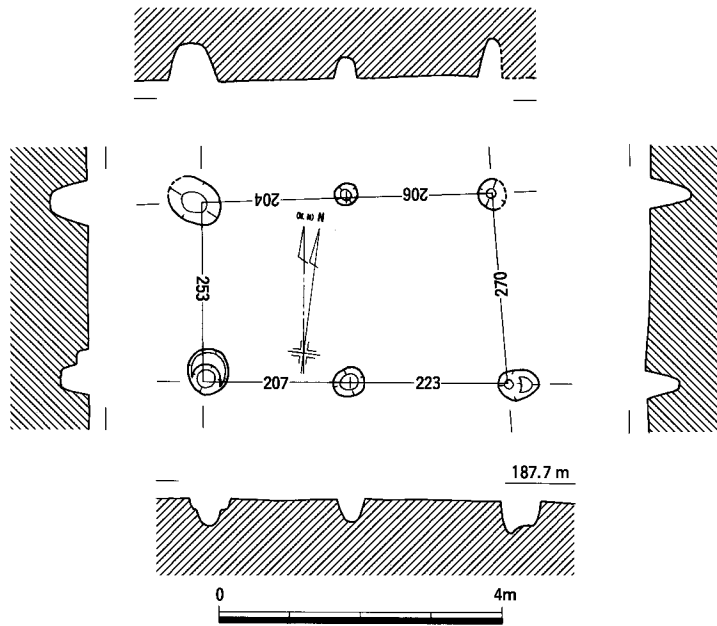
4 2 05 De区で検出した2×1間の小規模な掘立柱建物である。桁行4.30m、梁行2.70mを測るが、面積は10.98㎡で、棟方向がN87°Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.23~2.04m、梁行2.70~2.53mで、桁行の中間に位置する柱穴は、どちらも規模が小さくて浅くなっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形で、断面形はいずれも上方に開いた「U」字形を呈していた。(福田)



第493図 掘立柱建物61 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)



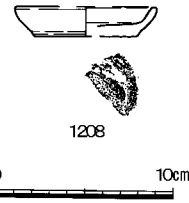
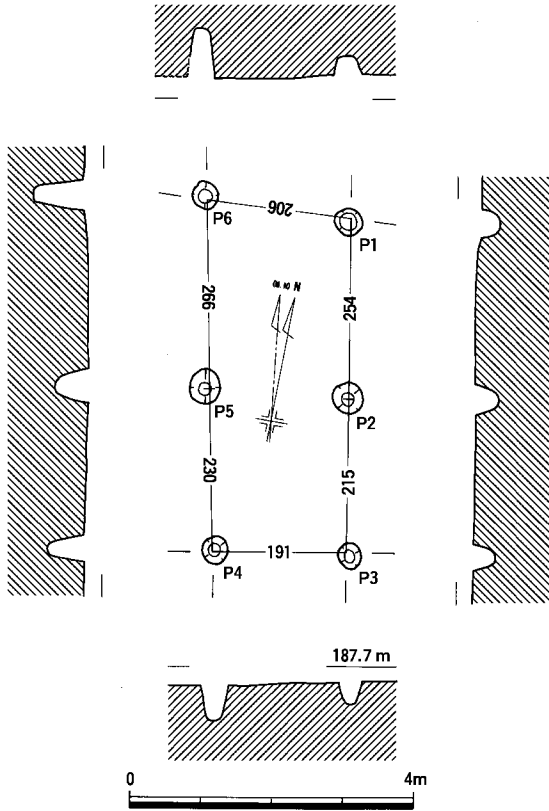
第494図 掘立柱建物62 (1/100)



第495図 掘立柱建物63 (1/100)

掘立柱建物64 (第429・496図、写真24)

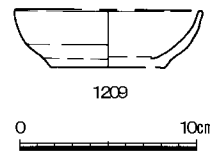
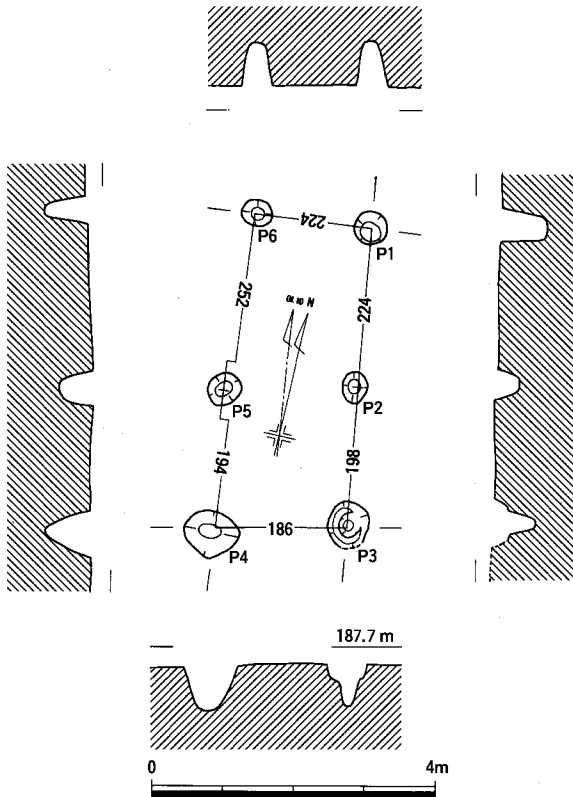
4 2 05 De区から検出された2 × 1間の掘立柱建物で、後述する掘立柱建物65と重複していた。西側には掘立柱建物66以外に、土壌191と土壌193が存在している。桁行4.96m、梁行2.06mを測り、面積が9.52㎡で、棟方向がN 2° Eを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.66~2.15m、梁行2.06~1.91mであった。柱穴の平面形は円形に近い形で、断面形は上方に開いた「U」字形を呈し、土師器の小皿1208が出土している。(福田)



第496図 掘立柱建物64 (1/100)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物65 (第429・497図、写真24)

4 2 05 De区で前述の掘立柱建物64と重複して検出した、2 × 1間の掘立柱建物である。北側には掘立柱建物61が存在し、東側には土壌194を確認している。桁行4.46m、梁行1.86mを測り、面積が7.59㎡で、棟方向がN 1° Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.52~1.94m、梁行1.86~1.66mになっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形で、断面形は上方に開いた「U」字形を呈し、土師器の杯1209が出土している。(福田)



第497図 掘立柱建物65 (1/100)・出土遺物 (1/4)

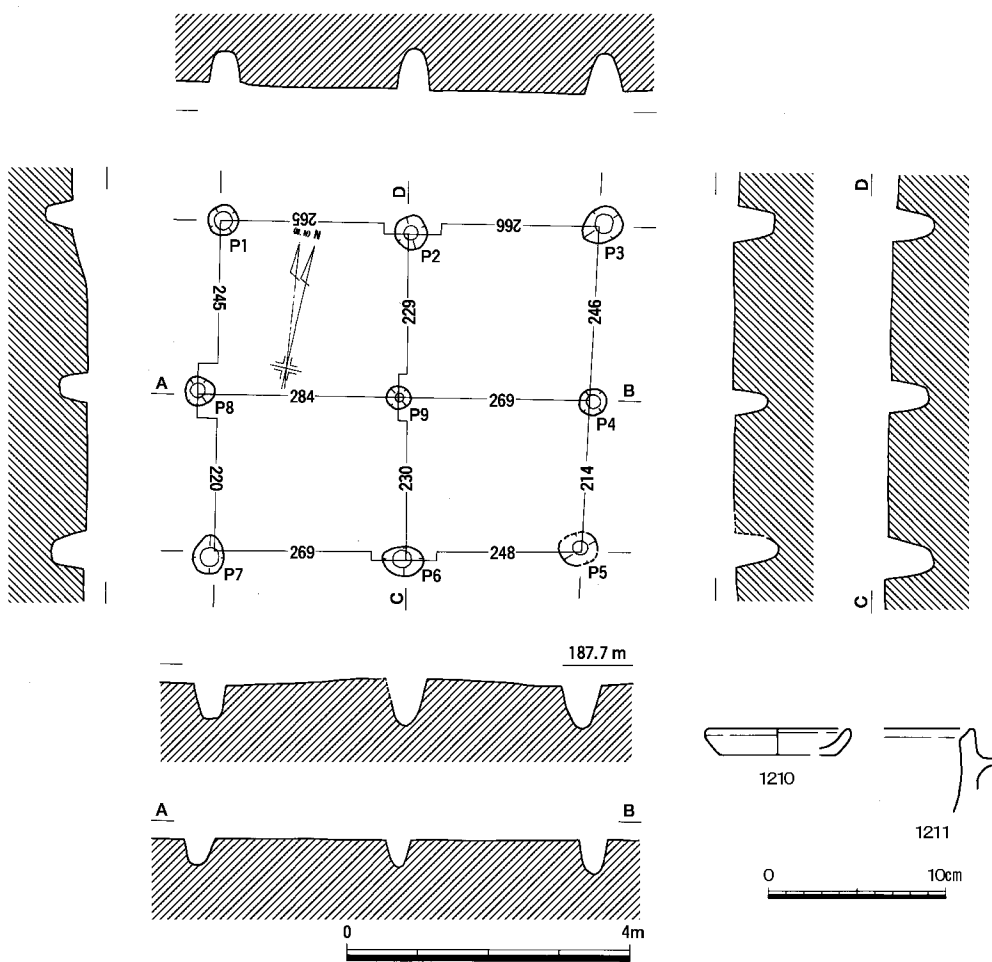


写真24 掘立柱建物64・65全景（東から）

掘立柱建物66（第429・498図）

4 2 05 D d区で検出された2×2間の総柱の掘立柱建物で、北側には土壙192が存在し、東側には掘立柱建物64や掘立柱建物65が確認されている。桁行5.53m、梁行4.60mを測り、面積が24.36㎡で、棟方向がN86°Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.84~2.48m、梁行2.46~2.14mであった。

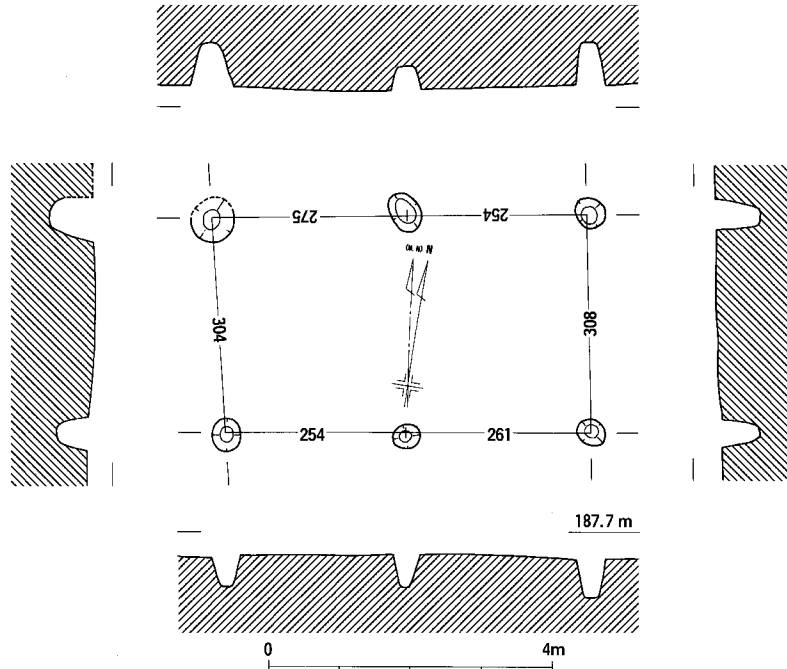
柱穴内から出土した遺物として、土師器の小皿2041と瓦質の羽釜片2042がある。（福田）



第498図 掘立柱建物66（1/100）・出土遺物（1/4）

掘立柱建物67 (第429・499図、図版109)

4 2 06 Dd区から検出された2×1間の掘立柱建物で、北東側には土壇196が存在し、北西側には土壇219が確認されている。桁行5.29m、梁行3.08mを測り、面積が15.95㎡で、棟方向がN87°Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.75~2.54m、梁行3.08~3.04mになっていた。柱穴の平面形は円形または楕円形に近い形で、断面形はいずれも上方に開く「U」字形を呈していた。(福田)

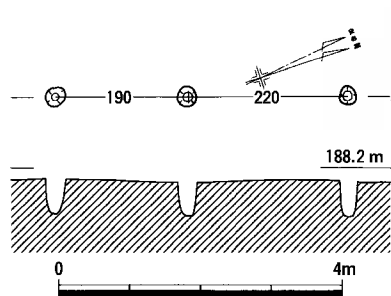


第499図 掘立柱建物67 (1/100)

3 柱穴列

柱穴列1 (第428・500図、写真25)

4 1 06 Df区で検出した2間の柱穴列で、全長4.10mになっていた。柱穴間の距離は2.20~1.90mを測り、方向はN64°Eを示していた。この柱穴列は、掘立柱建物81の棟方向と一致するから、その建物の目隠し塀と推定される。柱穴の平面形は円形で、断面形は「U」字形であった。(福田)



第500図 柱列1 (1/100)

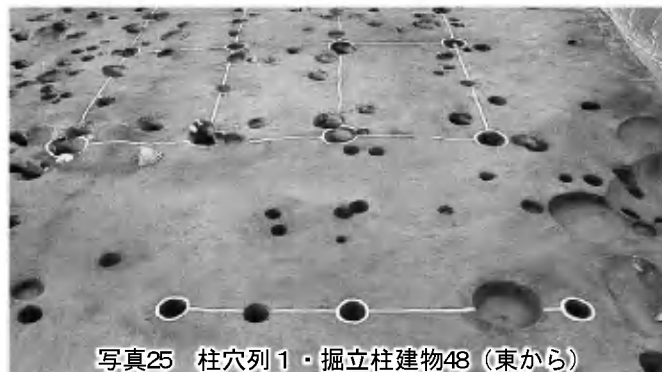


写真25 柱穴列1・掘立柱建物48 (東から)

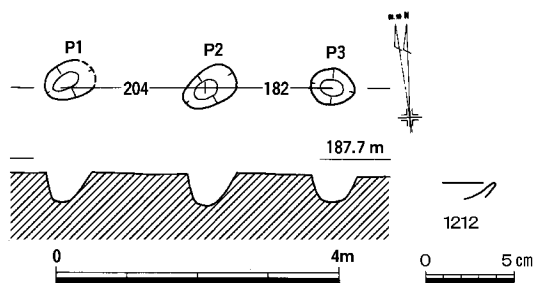
### 第3章 発掘調査の概要

#### 柱穴列2 (第429・501図)

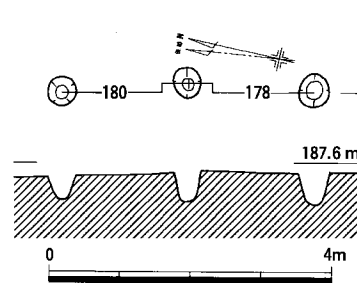
4 2 04 D d区で検出した2間の柱穴列で、全長3.86mになっていた。柱穴間の距離は2.04~1.82mを測り、方向はN 9°Wを示していた。この柱穴列は単独に存在したもので、周辺を精査したにもかかわらず、掘立柱建物としてまとまる柱穴は確認できなかった。(福田)

#### 柱穴列3 (第429・502図)

4 2 04 D c区から検出した2間の柱穴列で、全長3.58mになっていた。柱穴間の距離は1.80~1.78mを測り、方向はN84°Wを示していた。この柱穴列は、東方向に掘立柱建物60や土壇189が存在しているものの、やや離れた地点に単独で確認されたので、その性格は不明である。(福田)



第501図 柱列2 (1/100)・出土遺物 (1/4)

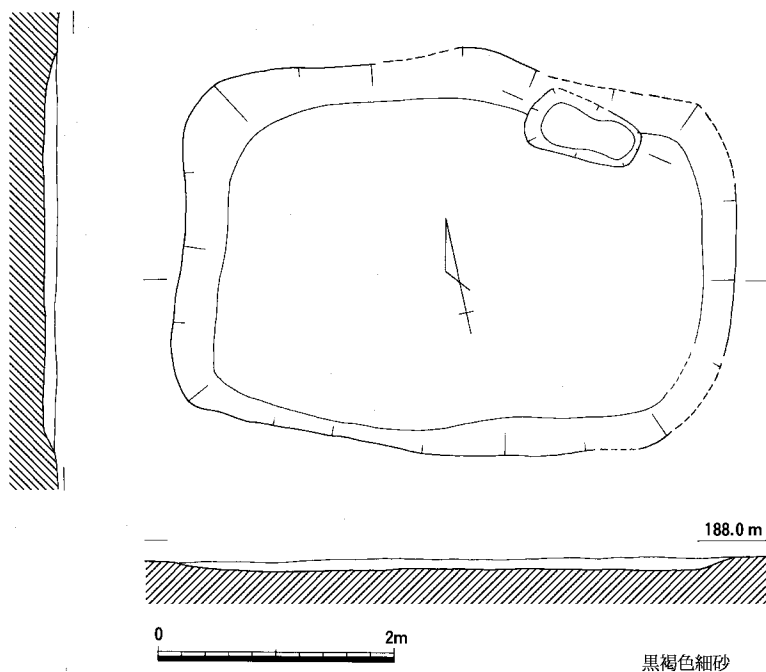


第502図 柱列3 (1/100)

## 4 竪穴遺構

#### 竪穴遺構1 (第425・503・504図、写真26、図版109・134)

4 1 07 B jに位置し長軸(東西)4.70m、(南北)短軸3.43mの長方形竪穴遺構である。深さは検出面



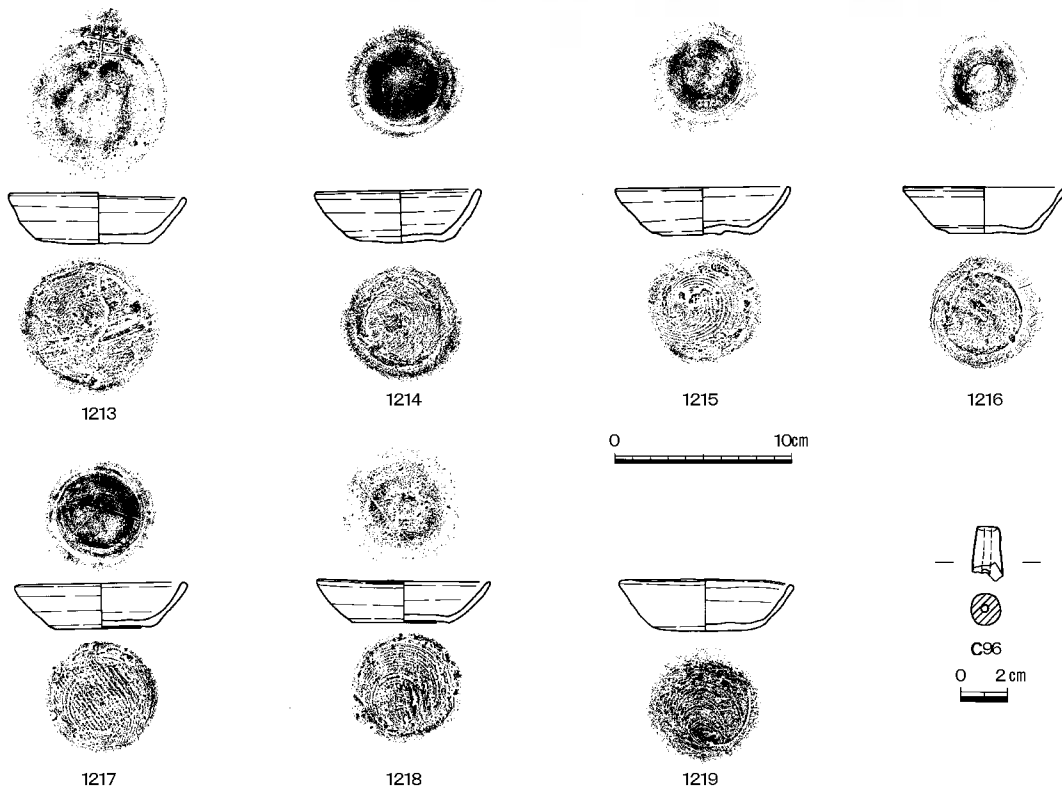
第503図 竪穴遺構1 (1/60)

から10cmと浅い。床面の海拔高は187.72mである。北東部に長径96cm、短径46cmの小判形の土壙があり、この東辺に備前焼小椀が集中してみられた。この深さは16cmあり、底面での海拔高は、187.60mである。中世の住居跡とも考えられるが、この時期まで竪穴住居が残るのかとの疑問が残る。久田原遺跡で見られた方形の鍛冶工房跡なども考えられるが、鉄屑なども見られず、現状では不明な遺構である。

土壙から出土した遺物は、備前焼小椀1213～1219までの7個と土錘C96 1点である。備前焼小椀は、口径が10.2～9.4cm内に納まり、器高は2.8～2.4cm内に納まる。

時期は15世紀後半頃であろう。

(伊藤)



第504図 屋内土壙 (1/30)・出土遺物 (1/4)

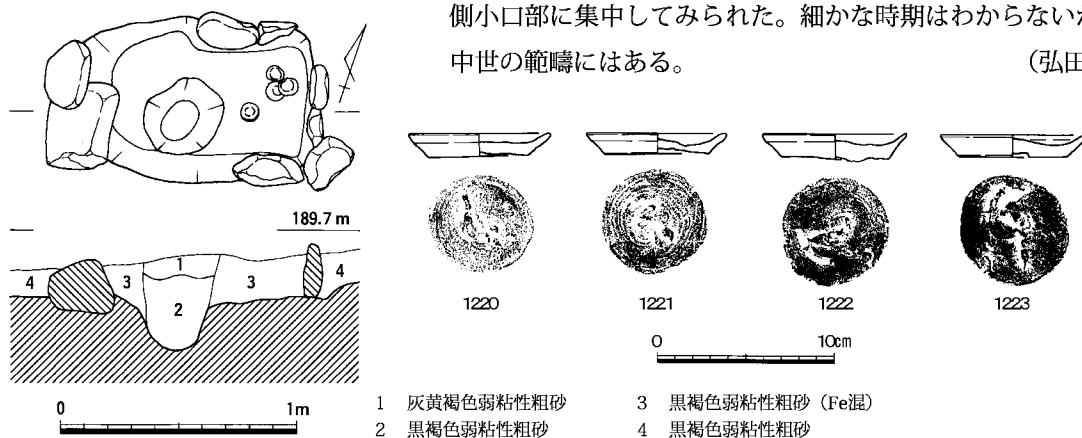


## 5 墓

### 墓2 (第418・505図、図版100・132)

4 0 03 Ch区において検出した。長方形を呈する掘り方の内側に沿って扁平な河原石を立てており、内法で長さが80cm、幅も40cm程の小石室状をなす。人骨は確認できなかったが、形態や出土遺物などから判断して墓として扱う。

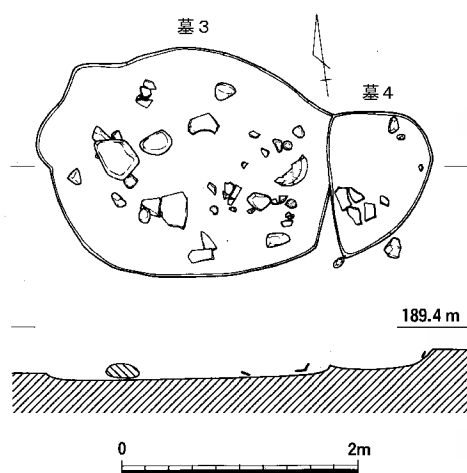
出土した遺物には、土師器の小皿1220～1223があり、東側小口部に集中してみられた。細かな時期はわからないが中世の範疇にはある。(弘田)



第505図 墓2 (1/30) 出土遺物 (1/4)

### 墓3・4 (第420・506・507図、写真27、図版132)

4 0 07 Cb区に位置し、土壌群97～108に近接して存在する。墓3と墓4との間に若干の時期差はあると考えられるが、遺物の散布や埋土に違いが認められないため、ここでは一括して報告する。掘り方上面での規模は長さが3.32m、幅が1.94mと大型であるが、深さは現存で24cmを測り、大部分が削平を受けている。遺物には備前焼甕1224、土師器皿1225、土師器杯1226のほか、鉄釘M65と土錘C97・98が確認された。遺構の時期は室町時代前半期と考えられる。(河合)



第506図 墓3・4 (1/60)

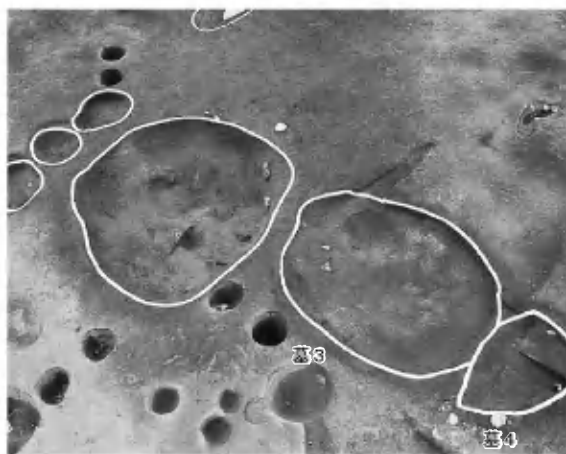
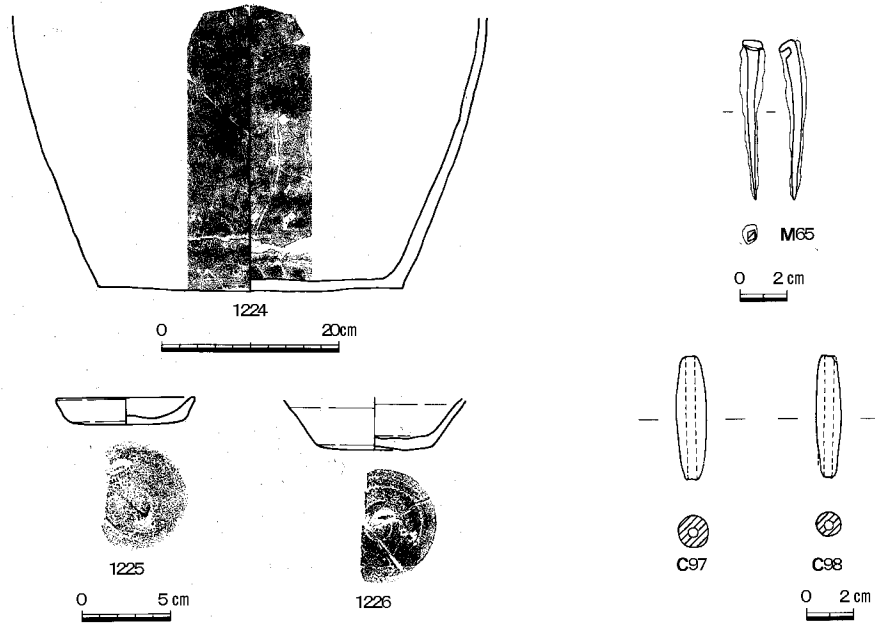


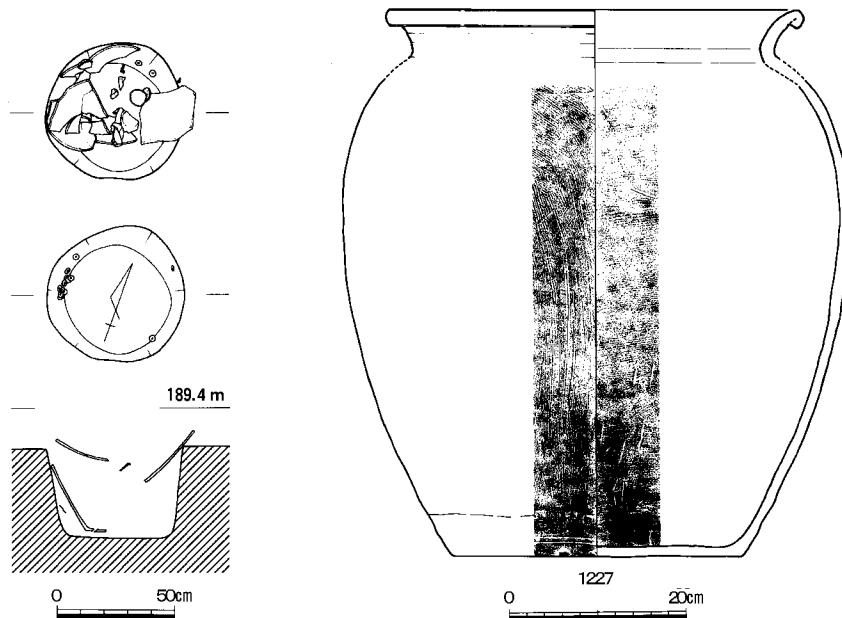
写真27 墓3・4 (南から)



第507図 墓3出土遺物 (1/8,1/4,1/3)

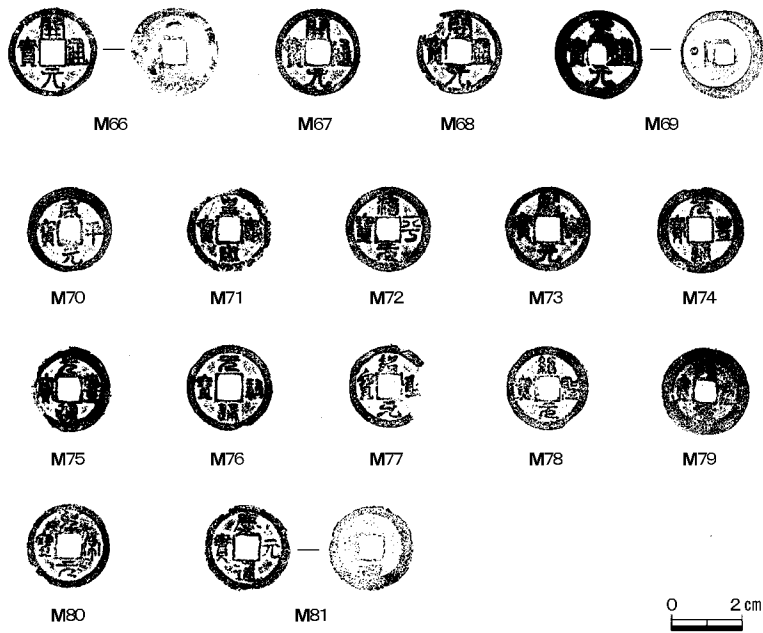
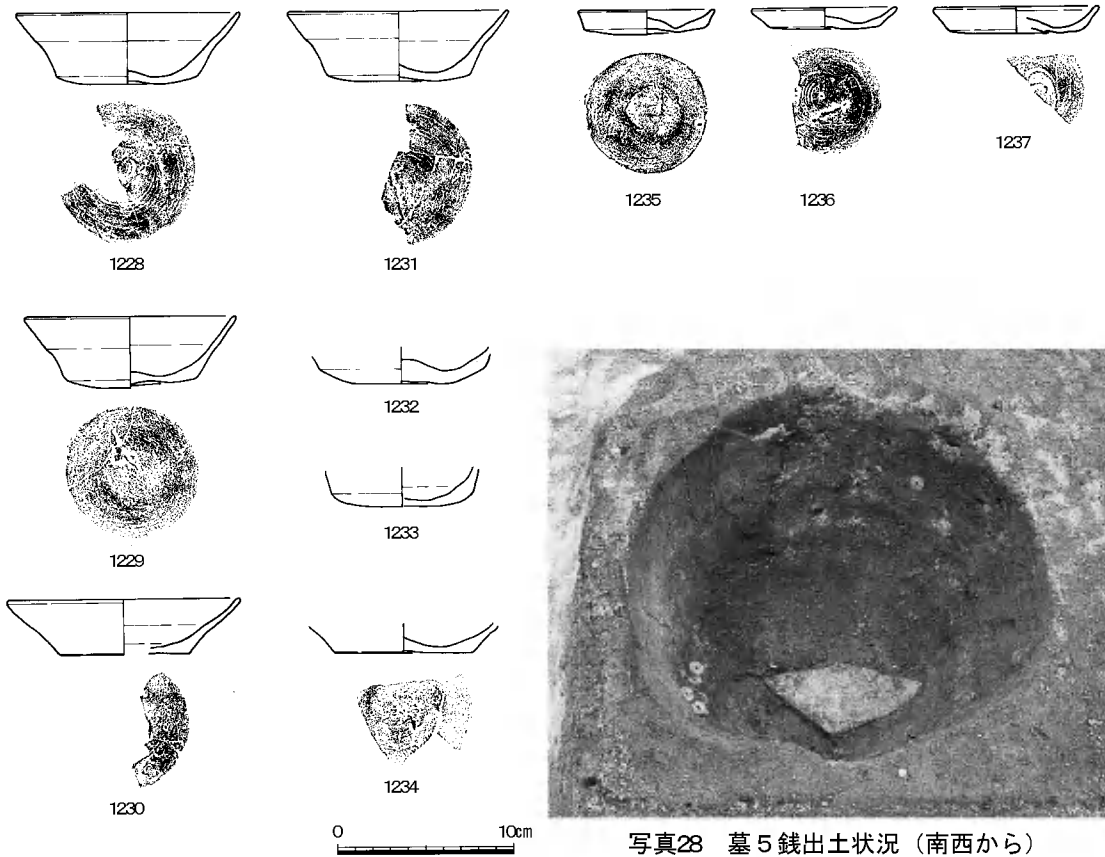
墓5 (第420・508・509図、写真28、図版100・132・133・151)

4 0 08Cb区に位置し、墓3・4の南東約10mに位置する。近接して和鏡M532が出土している。遺物は備前焼甕1227、土師器杯1228～1234、土師器皿1235～1237のほか、銅銭が16枚出土している。土器棺と考える備前焼甕1227の下から銅銭が14枚が出土しており、棺を据える前においたと考えられる。他の遺物は棺内から出土している。遺構の時期は14世紀前半～中頃と考えられる。遺物の出土状況から墓でなく、地鎮に関連した遺構の可能性も考えておきたい。(河合)



第508図 墓5 (1/30)・出土遺物 (1/8)

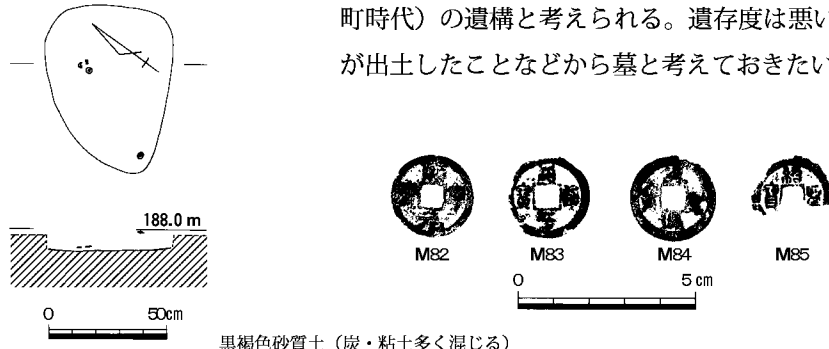
第3章 発掘調査の概要



第509図 墓5 出土遺物 (1/4,1/2)

墓6 (第422・510図、図版100)

4 1 01Bj区に位置し、掘立柱建物9に近接する。掘り方の平面形は不整形であり、遺存状態も悪く、詳細な情報は不明である。ただし、出土遺物には底部から張り付くような状態で、銅銭M82～85があり、いずれも宋銭であることから中世（埋土から判断して室町時代）の遺構と考えられる。遺存度は悪いが、多くの銅銭が出土したことなどから墓と考えておきたい。 (河合)



黒褐色砂質土（炭・粘土多く混じる）

第510図 墓6 (1/30)・出土遺物 (1/2)

墓7 (第421・511図、図版101・151)

4 1 00Bi区、建物16の南に所在する。検出レベルは188.5m。直径で約1.1m、深さ約80cmを測り、底面のレベルは187.8mである。ほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。座棺の可能性が高い。遺物には土師器の杯、皿、古銭がある。これらの年代から、時期は中世末～近世初頭か。 (和田)

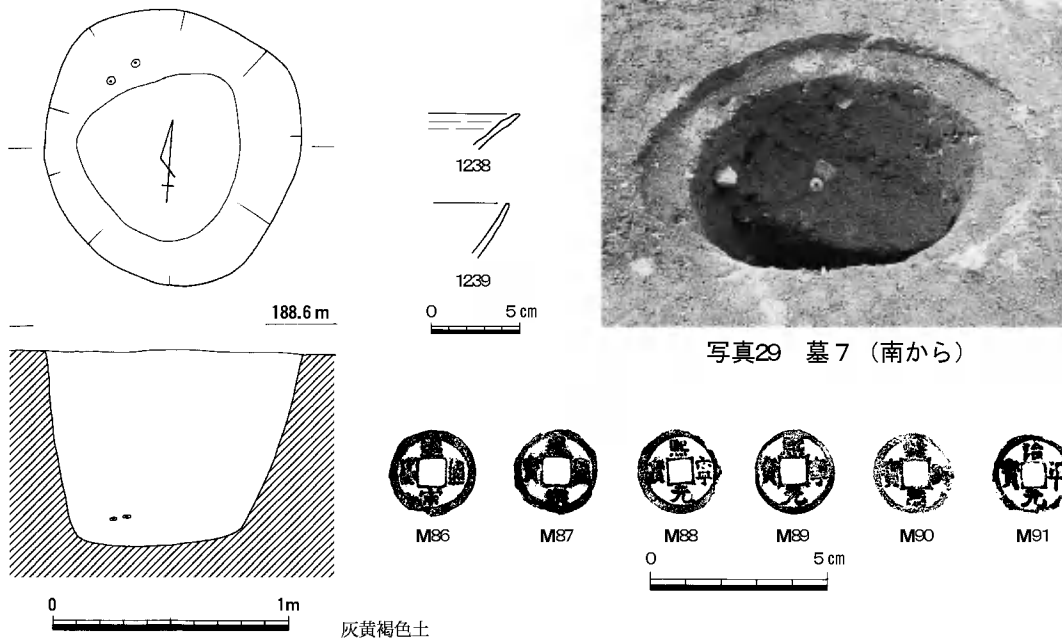


写真29 墓7 (南から)

第511図 墓7 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2)

墓8 (第425・512図、図版101)

4 6 06Bi区に位置し、長径2.03m、短径1.52mの楕円形を呈する。深さは、22cmを測る。底面の海拔高は、187.7mである。内部には大きいものでは40～30cm、人頭大から拳大の石がぎっしりと詰まって

第3章 発掘調査の概要

いる。内部から釘が4本M92～95が出土している。

(伊藤)

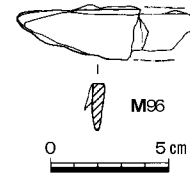
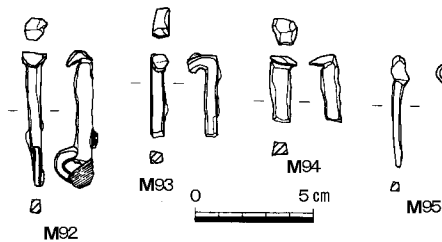
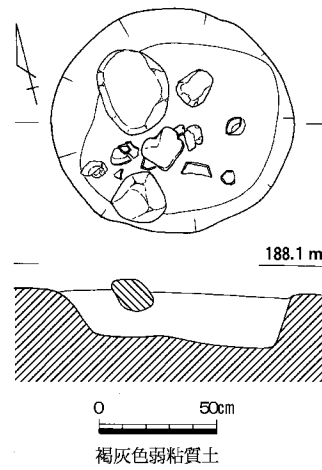
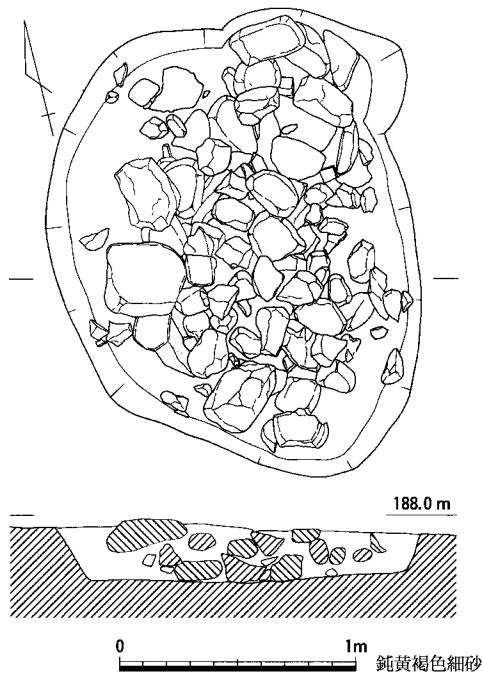
墓9 (第425・513図、図版101・133)

4 6 06Bj区に位置し、長径1.03m、短径96cmのほぼ円形を呈する。深さは、25cmを測る。底面の海拔高は、187.76mである。内部には、40cm大から人頭大、拳大の石が散在している。壙内からの出土

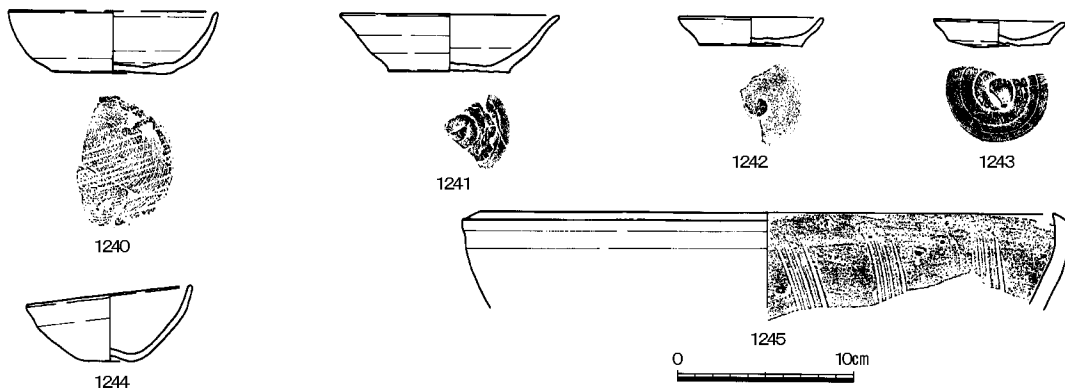
品は、鉄刀の刃先と考えられるM96、土師器椀1240、土師器杯1241、土師器小皿1242・1243、土師器椀(へそ椀)1244、備前焼IV A期播鉢1245などが出土している。

この墓の時期は、14世紀中葉前後と考えられる。

(伊藤)



第512図 墓8 (1/30)・出土遺物 (1/3)



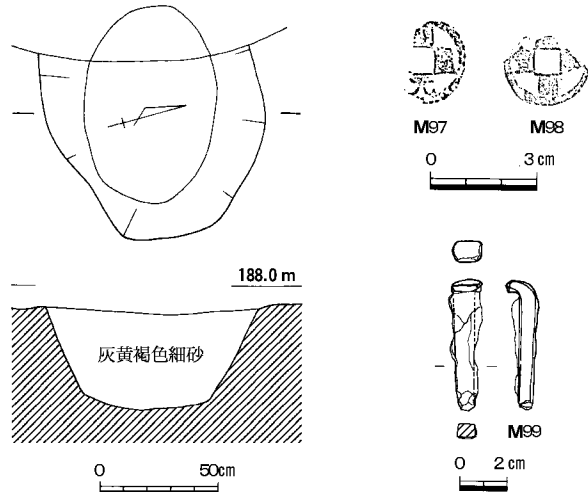
第513図 墓9 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4)

墓10 (第425・514図、図版151)

4 1 06Bi区に位置し、平面形は短径92cmの不整形円形を呈する。東側の約2/3が新しい土壌に切られており、長径は不明である。深さは42cmで、底面の海拔高は、187.46mを測る。

墓壇内からは、輸入銭の開元通寶(初鑄621年) M97、元祐通寶(初鑄1086年) M98、釘M99などが出土している。人骨は、みられなかったが周囲の遺構から墓と判断した。

この墓の時期は、中世でも前半と考えられる。(伊藤)

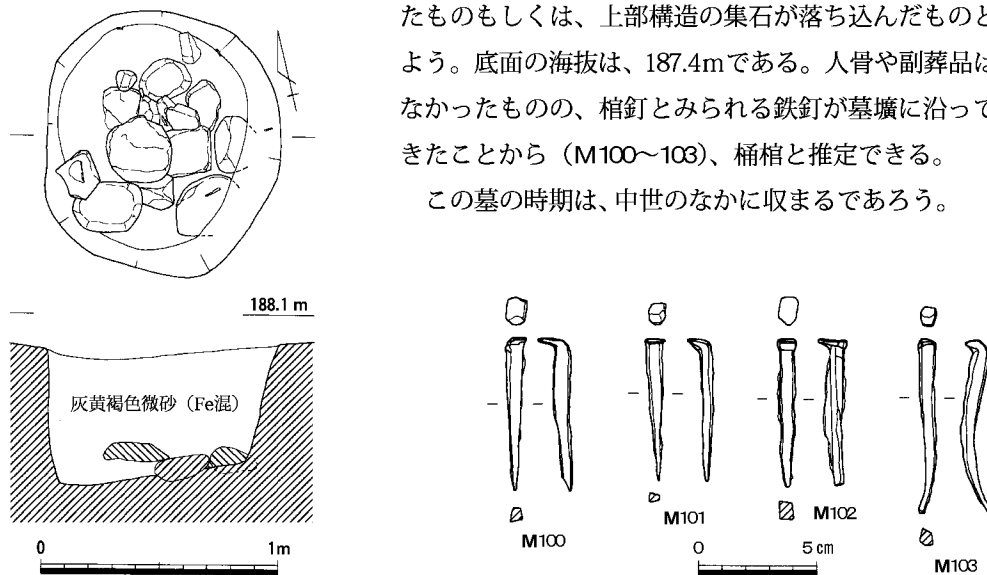


第514図 墓10 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3)

墓11 (第425・515図、図版102)

4 1 06Bi区において検出した、長径1.08m、短径1 m程のほぼ正円形を呈する墓である。深さは60 cmで、底面全体に人頭大の扁平な石がみられたが、敷いていたものもしくは、上部構造の集石が落ち込んだものとみなせよう。底面の海拔は、187.4mである。人骨や副葬品は出土しなかったものの、棺釘とみられる鉄釘が墓壇に沿って検出できたことから (M100~103)、桶棺と推定できる。

この墓の時期は、中世のなかに収まるであろう。(伊藤)



第515図 墓11 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓12 (第425・516図)

4 1 06Bi区に位置し、長径は1 m、短径が87cmのほぼ円形を呈する墓である。深さは47 cmを測り、底面に30cm前後の石が3個ほど残る。底面の海拔は、187.52mである。土壌内からは人骨や副葬品のたぐいは見られない。

墓11・13などと共通する所があり墓と考えた。(伊藤)

墓13 (第425・517図、図版102・147)

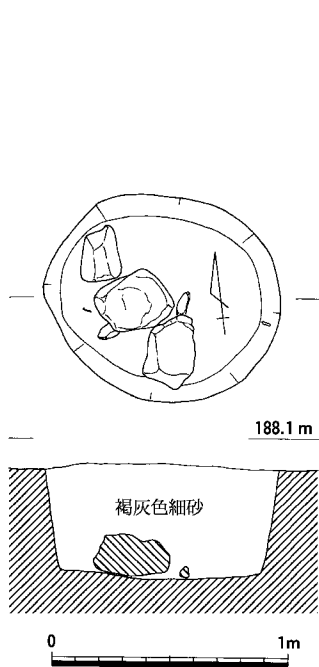
4 1 07Bi区に位置し、長径1.41m、短径1.24mの円形を呈する。深さは81cmを測り、底面より少し浮

第3章 発掘調査の概要

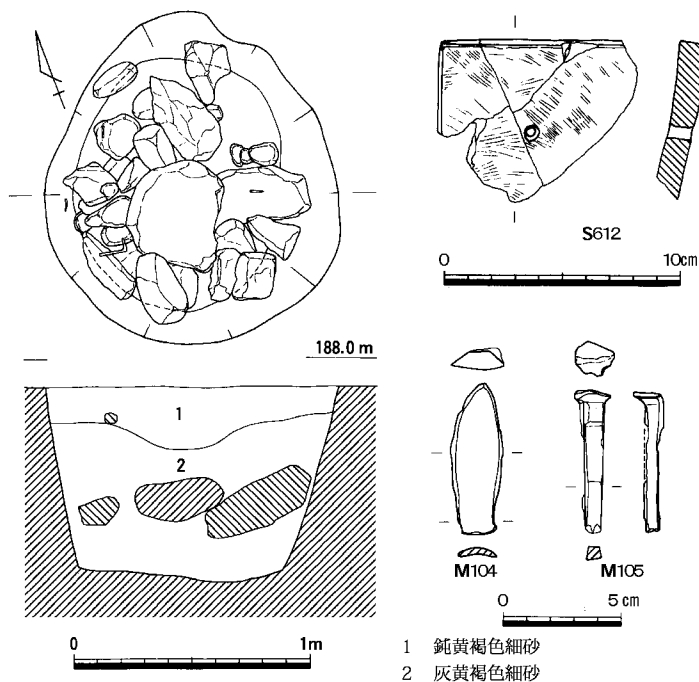
いた状態で50cm前後から人頭大・拳大の石が張りつめている。底面の海拔は、187.06mである。

壙内から、滑石製の石鍋片 S612、鉈の身部分 M104、釘 M105などが出土している。

石鍋片は、口縁部の下4cmの所に径0.3cmの孔が穿たれ、側面もきれいに切られており、温石として再利用されていたものと思われる。 (伊藤)



第516図 墓12 (1/30)



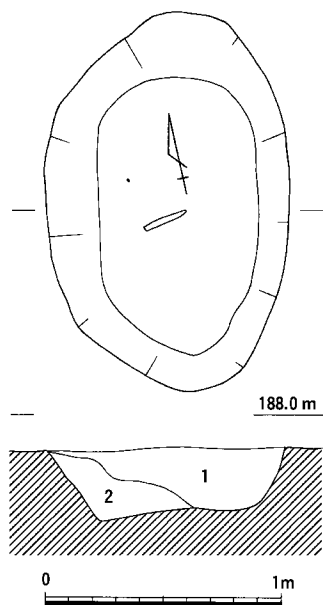
第517図 墓13 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓14 (第425・518図、図版149)

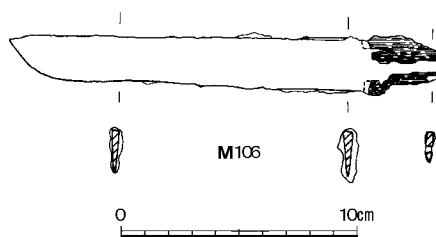
4 1 07Bi区に位置し、長径1.61m、短径1.03mの楕円形を呈する。深さは30cmを測り、底面の海拔高は、187.6mである。

壙中央部分より短刀 M106が一振り出土している。

人骨やその他の副葬品はみられなかったが、中世の墓と考えている。 (伊藤)



1 褐灰色細砂  
2 灰黄褐色細砂



第518図 墓14 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓15 (第425・519図  
、写真30)

4 1 08Bj区に位置し、当初ピットと考えていたが、底部には腰刀M107が1振り見られた。規模については、不明である。

刀は、茎部が一部欠損しているが全長24.2cm、切先から関まで21.8cm、峰幅0.65cm、幅2.8cmを測る。重さは129.48gである。関から2.5cmの所に目釘穴が1か所見られる。

時期は、中世であろう。(伊藤)

墓16 (第424・520図、図版102・149)

4 0 04Cj区にあり、長径91cm、短径78cmの楕円形を呈する。

検出面からの深さは、11cmで、底面の海拔は、189.3mである。

土壙内からは、人骨は出土していないが、土師器皿1246、小皿1247や実測不可能であったが漆椀の朱漆部のみが出土している。

この墓の時期は、室町後半から戦国国にかけてとみられる。(伊藤)

墓17 (第424・521図、図版103)

4 0 05Cj区にあり、長辺1.84m、短辺1.05mの長方形を呈する。深さは、検出面から51cmを測り、床面の海拔は、188.8mである。東側半部の所に人頭大の石が散在する。

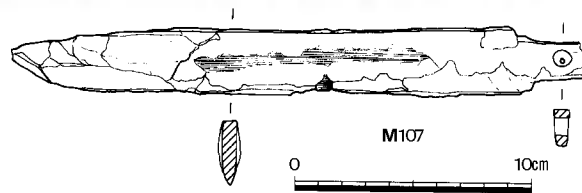
土壙内より勝間田焼椀1248、釘4本M108~111が出土している。この墓の時期は、鎌倉時代に比定できよう。(伊藤)

墓18 (第424・522図)

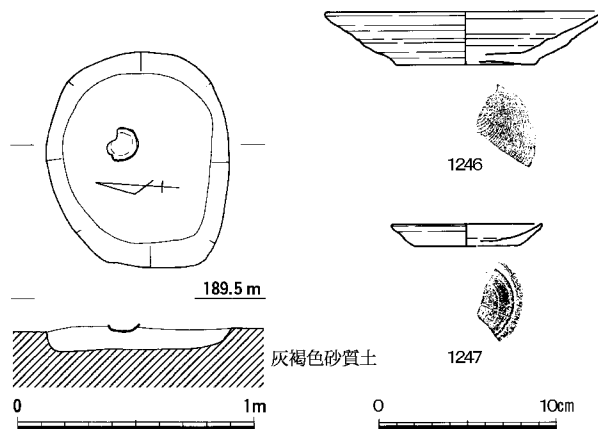
4 0 05Da区にあり、長辺1.84m、短辺98cmの長方形を呈する。深さは、検出面から28cmを測り、床面の海拔は、189.0mである。20cmの自然石が北側に2個、南側に1個見られる。出土遺物は見られない。(伊藤)

墓19 (第424・523図)

4 0 05Da区にあり、長径1.06m、短径90cmの楕円形を呈する。深さは、検出面から64cmを測り、床



第519図 墓15出土遺物 (1/3)

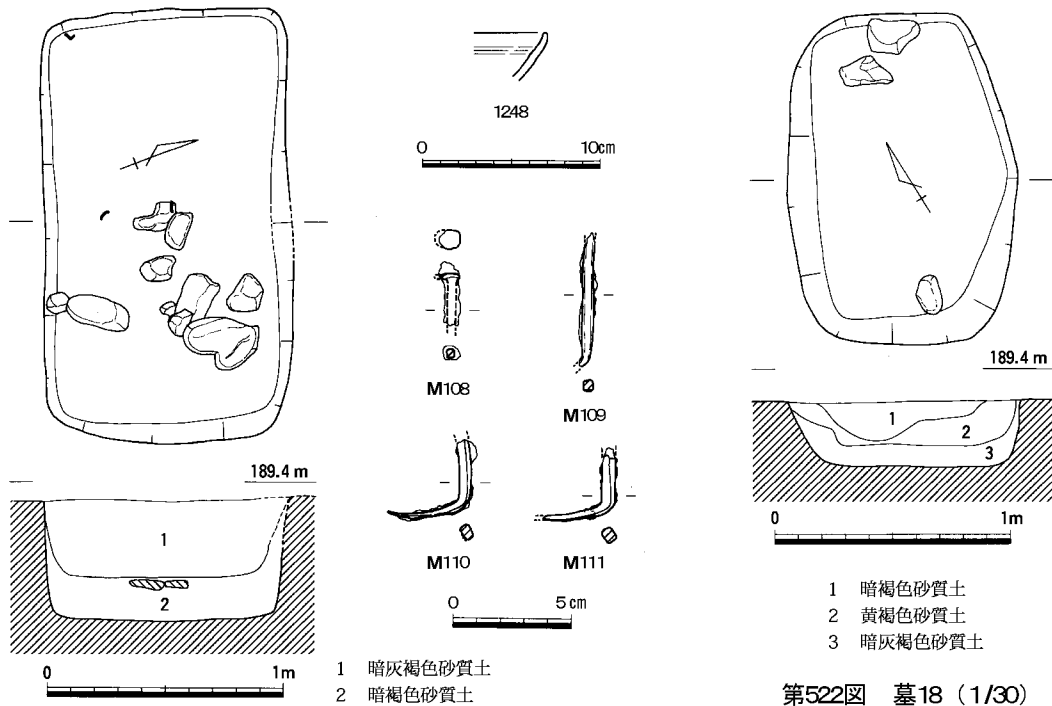


第520図 墓16 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第3章 発掘調査の概要

面の海拔は、188.7mである。形態から桶棺と考えられ、また底面近くに20cm前後の自然石が10個ほど見られるが、墓標が落ち込んだものであろうか。墓壙内より、土師器甕1249が1点出土しており、時期は中世である。 (伊藤)

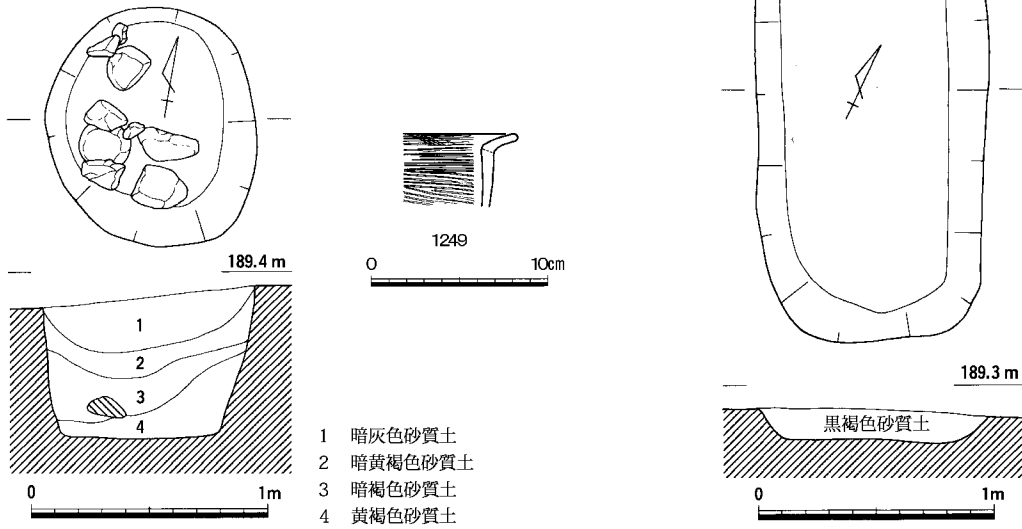


第521図 墓17 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

第522図 墓18 (1/30)

墓20 (第424・524図)

4 0 05Ci区にあり、長辺2.1m、短辺98cmの隅丸長方形を呈する。



第523図 墓19 (1/30)・出土遺物 (1/4)

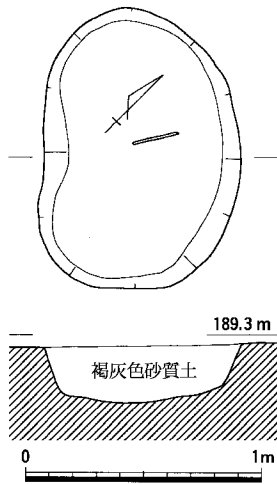
第524図 墓20 (1/30)

深さは、検出面から15cmを測り、床面の海拔は、189.0mである。

土壌内では、人骨、副葬品などの出土遺物は見られないが、時期は中世と考えている。 (伊藤)

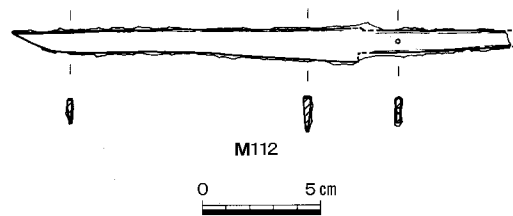
墓21 (第424・525図、図版103・149)

4 0 06Cj区にあり、長径1.2m、短径94cmの不整楕円形を呈する。深さは、検出面から25cmを測り、床面の海拔は、189.02mである。



壙内中央付近から刀子M112が1点出土している。これは、全長21.05cmを測るが茎の一部が欠損する。関までは15cmを測り、幅1.4cm、峰幅0.3cmである。関より目釘穴が1個見られる。刀身の中程はよく使用され弓状になっている。

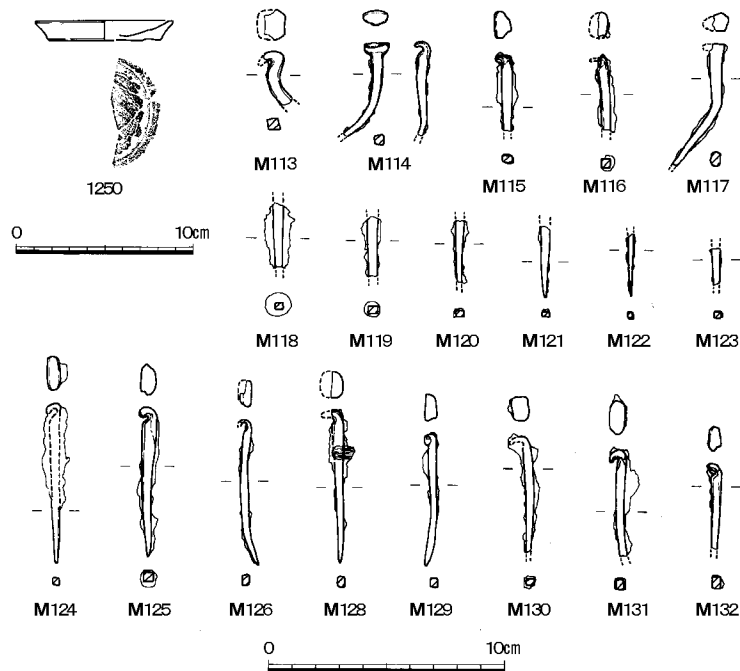
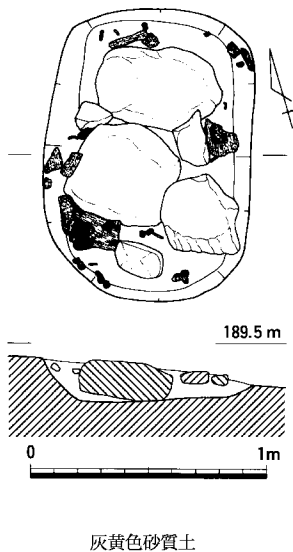
時期は、中世であろう。 (伊藤)



第525図 墓21 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓22 (第424・526図、図版103)

4 0 06Cj区にあり、長径1.24m、短径0.88mの隅丸長方形を呈する。深さは、検出面から19cmを測り、



第526図 墓22 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

第3章 発掘調査の概要

床面の海拔は、189.24mである。墳内の底部には50cm前後の大きな自然石2個と、30cm程のもの、詰め石状にぐり石が何個か置かれている。また墳内には炭化材が多く残り、石の表面も2次的に火を受けているようである。

墳内から土師器小皿1250、釘14本以上M113~131が出土している。 (伊藤)

墓23 (第424・527図、写真31、図版133・148・154)

4 0 06Ci区にあり、長径1.35m、短径0.9mの隅丸長方形を呈する。深さは、検出面から15cmを測り、床面の海拔は、188.94mである。東西に残る自然石は立てられた状態である。

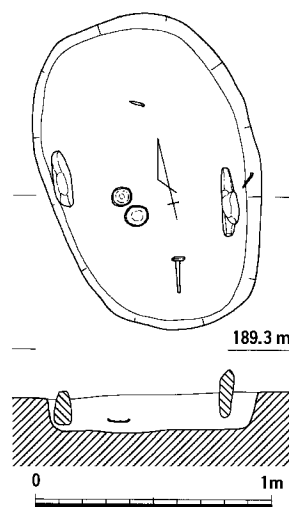
土師器小皿4枚1251~1254、鉄製紡錘車M132、釘2点M133・134が出土している。 (伊藤)

墓24 (第424・528図、図版104・149・150)

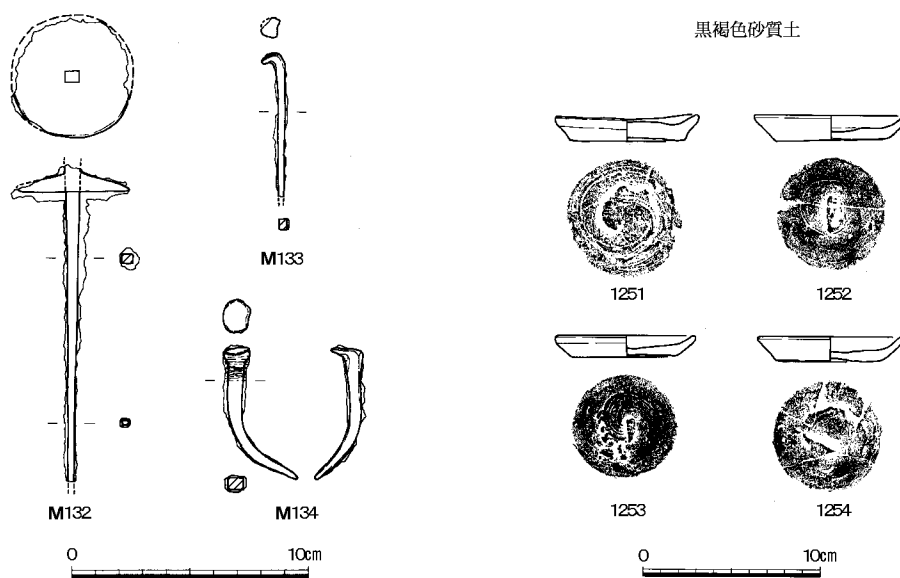
4 0 07Cj区にあり、南東端の一部が削られてれているが、長辺1.77m、短辺64cmの長方形を呈する。深さは、検出面から8cmを測り、西に高く東に低い。床面中央部の海拔は、188.6mである。



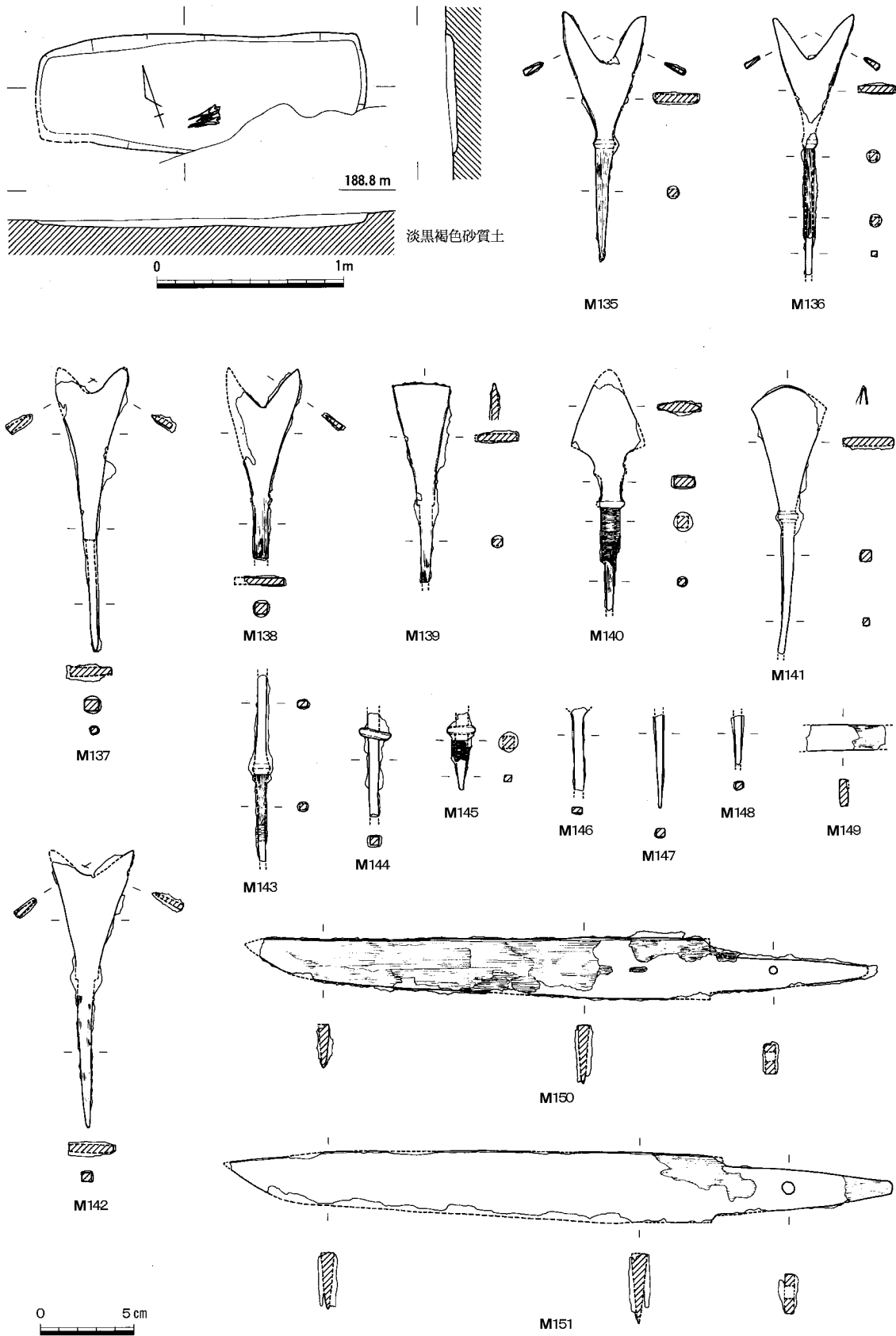
写真31 墓23 (北から)



黒褐色砂質土



第527図 墓23 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)



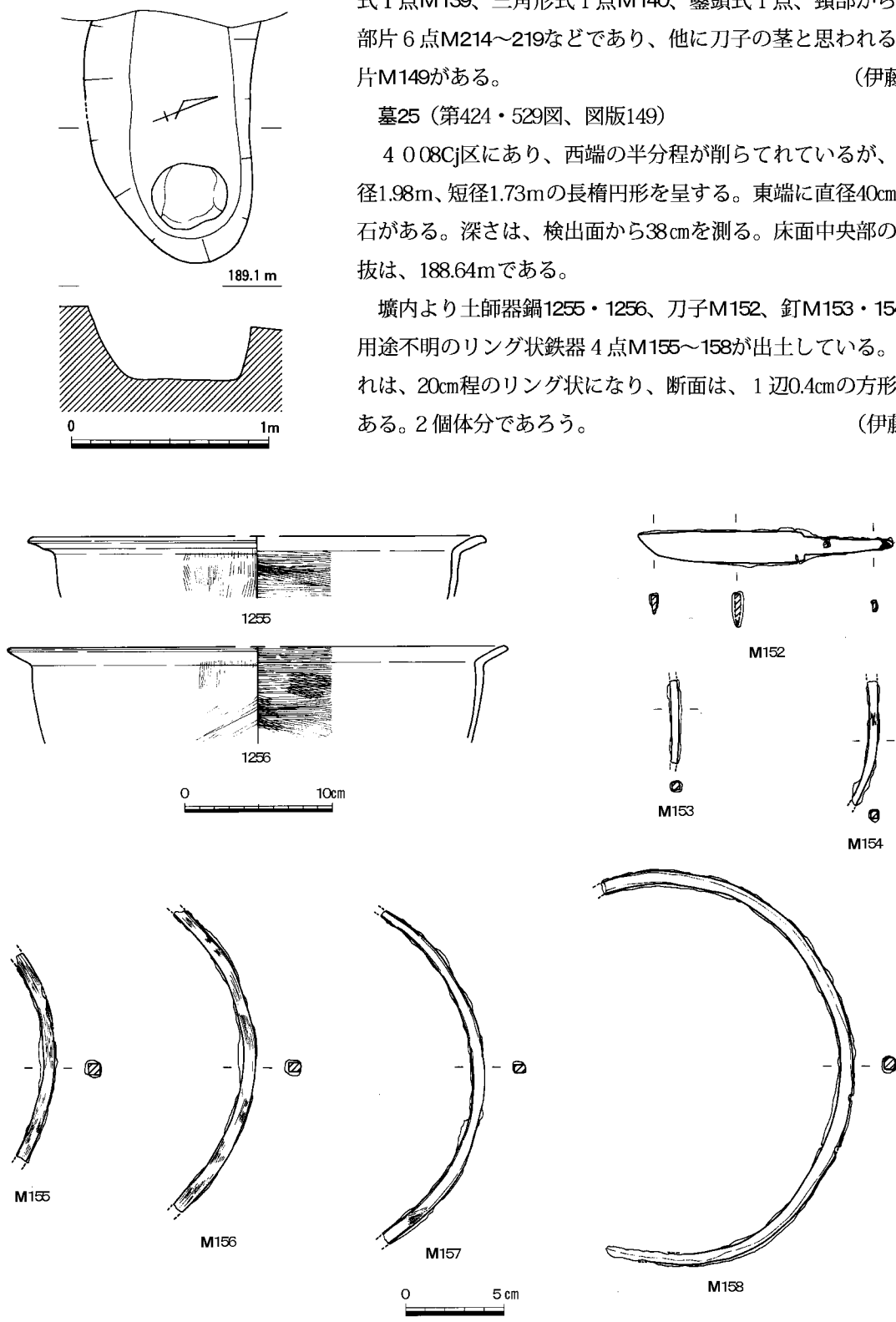
第528図 墓24 (1/30)・出土遺物 (1/3)

壙内中央部南寄りから鉄鏃8本以上、鉄刀2本がまとめて副葬されていた。鉄鏃は、雁又式5本M135~138・142、方頭式1点M139、三角形式1点M140、鑿頭式1点、頸部から茎部片6点M214~219などであり、他に刀子の茎と思われる鉄片M149がある。(伊藤)

墓25 (第424・529図、図版149)

4 008Cj区にあり、西端の半分程が削られていているが、長径1.98m、短径1.73mの長楕円形を呈する。東端に直径40cmの石がある。深さは、検出面から38cmを測る。床面中央部の海拔は、188.64mである。

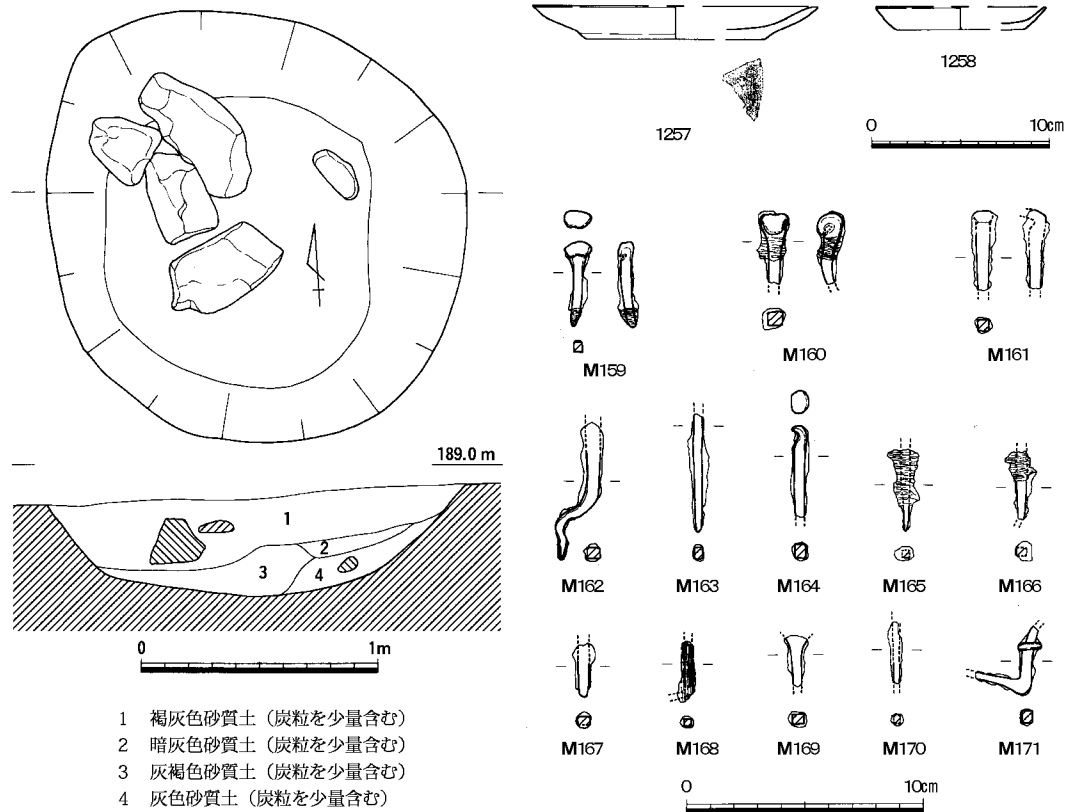
壙内より土師器鍋1255・1256、刀子M152、釘M153・154、用途不明のリング状鉄器4点M155~158が出土している。これは、20cm程のリング状になり、断面は、1辺0.4cmの方形である。2個体分であろう。(伊藤)



第529図 墓25 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

墓26 (第426・530図、図版133)

4 1 02Cj区にあり、長径1.28m、短径73cmの不整形円形を呈する。壙内には、60~25cmの自然石がある。深さは、検出面から17cmを測る。床面中央部の海拔は、188.44mである。



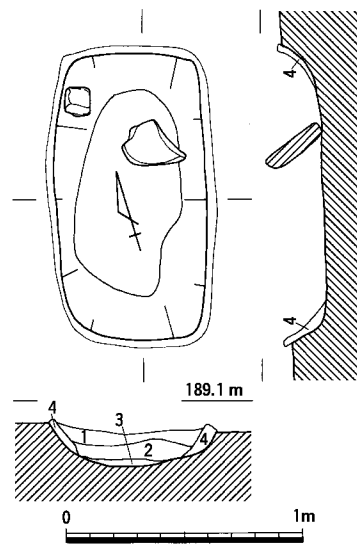
第530図 墓26 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

土壙内から、土師器皿1257、土師器小皿1258、釘6本以上M159~171が出土している。

時期は、中世の範疇にある。 (伊藤)

墓27 (第426・531図)

4 0 09Da区にあり、長辺1.28m、短辺73cmの長方形を呈する。壙内北側に1辺30cm程の扁平な石が立てられていたものが倒れかけた状態で見られた。また、第4層は木棺の痕跡と考えられたため、土壙墓と認定した。深さは、検出



第531図 墓27 (1/30)

- 1 褐灰色砂質土
- 2 黒褐色弱粘質土 (炭片を多く含む、骨片をわずかに含む)
- 3 灰褐色弱粘質土
- 4 淡赤褐色粘質土 (粘土壁?)

第3章 発掘調査の概要

面から17cmを測る。床面中央部の海拔は、188.44mである。

出土遺物は見られないが、時期は中世であろう。

(伊藤)

墓28 (第426・427・532図、図版154)

4 0 02 Db区にあり、長径2.64m、短径1.45mの長楕円形を呈する。西側が浅く、東側が深くなる。壙内に50~20cmの石が3個ある。深さは最も深い所で、検出面から1.1mを測る。床面最深部の海拔は、188.76mである。

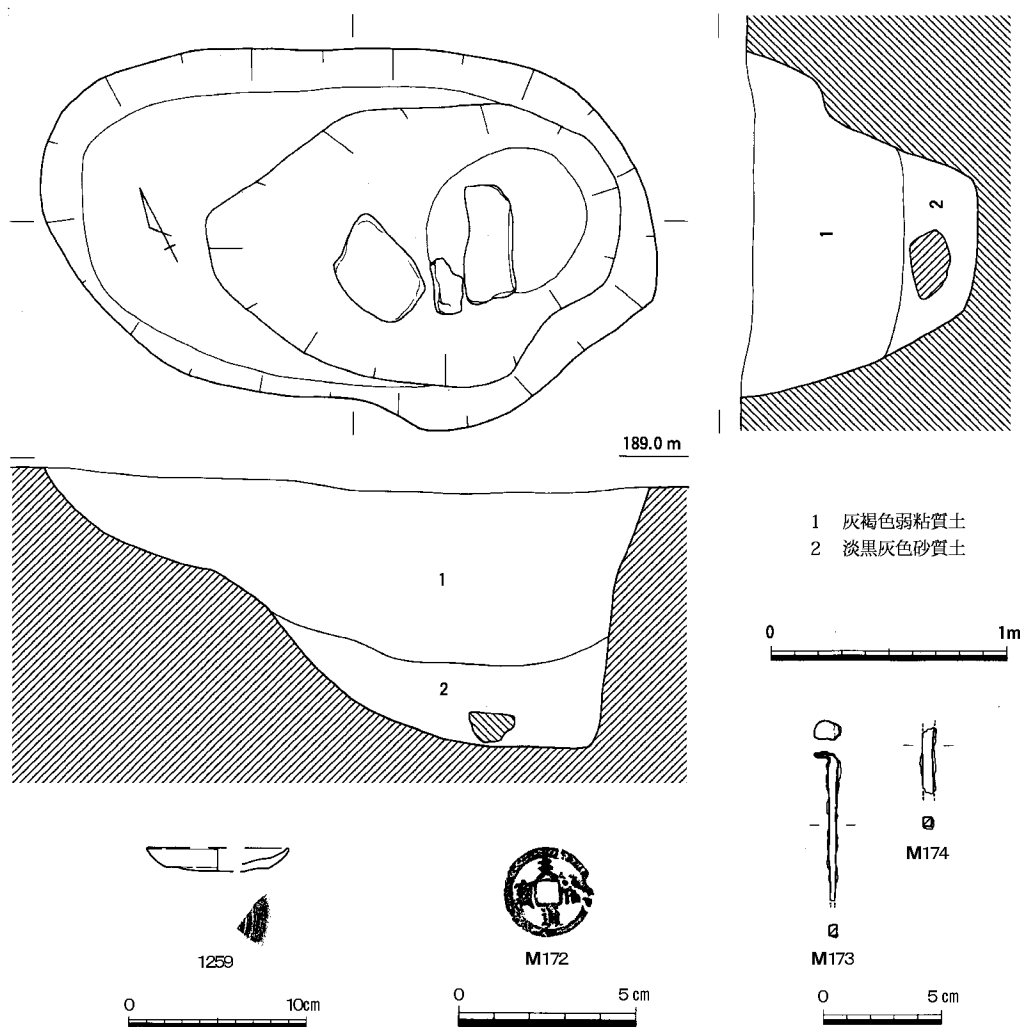
墓壙内より、土師器小皿1259、天禧通寶(初鑄1017年) M172、釘2本M173・174が出土しており、中世の墓とみられる。

(伊藤)

墓29 (第426・427・533図)

4 0 02 Db区にあり、規模は長径2.32m、短径1.45mを測る。不整円形を呈するが、2個の土壌によって切られているためであろう。北西の土壌には60~30cmの自然石が入る。西側が浅く、中央部が深くなる。深さは最も深い所で、検出面から1.03mを測る。床面最深部の海拔は、188.88mである。

壙内から刀子刀身部片M175、釘7本M176~182が出土している。



第532図 墓28 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2,1/3)

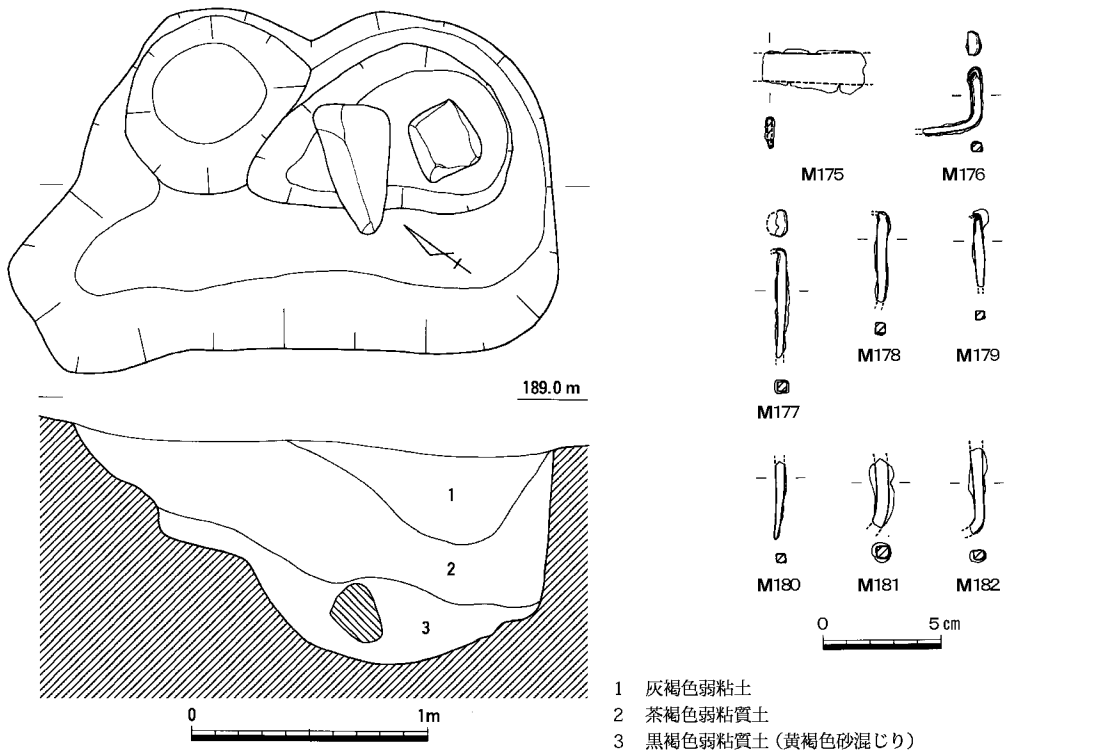
時期は、中世とみられる。

(伊藤)

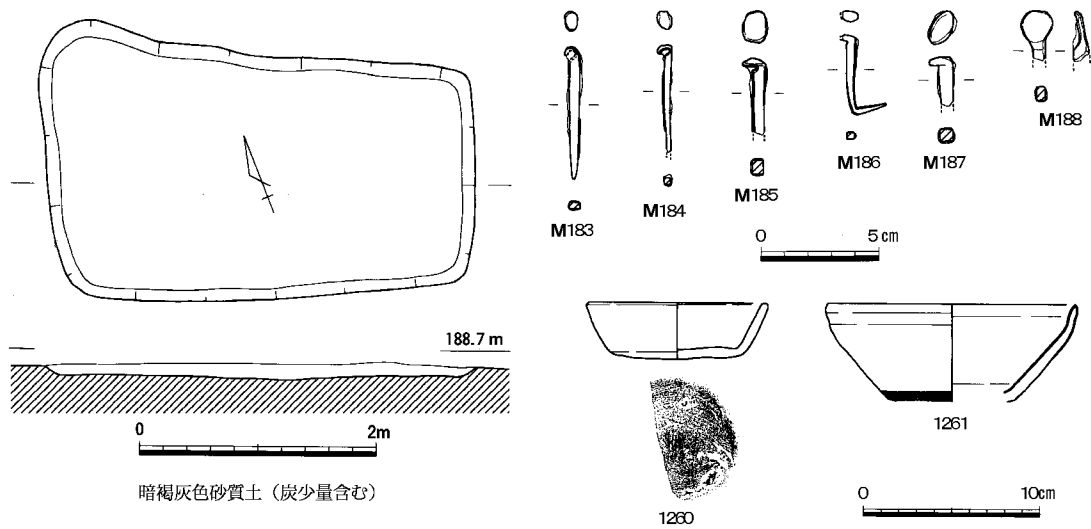
墓30 (第426・534図、図版104・133)

4 1 04Ci区に位置し、平面形は約3.6×2.4mの不整長方形で、深さは13cm残存していた。埋土中から鉄釘が6本 (M183~188) と備前焼椀、天目碗が出土しており、発掘時は意識していなかったが、墓の遺構と考えられる。また、検出規模については、埋葬時の規模ではなく、その後の掘り返しを考慮すべきかも知れない。

(平井)



第533図 墓29 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第534図 墓30 (1/60)・出土遺物 (1/3,1/4)



第3章 発掘調査の概要

墓31 (第431・535図、写真32)

4 2 03 Cj区から検出された墓で、北方向約10mの地点には土壙215が存在し、東方向約12mの位置には土壙216が確認されているものの、周辺に別の墓は見つかっていない。平面形は長径1.62m、短径

78cmの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは22cmになっていた。底面は周辺部が高くなって緩やかに湾曲し、断面形は上方に開く浅い「U」字形であった。内部には暗褐色土が堆積し、土師器の小皿1262・1263と銅銭M189が出土した。(福田)

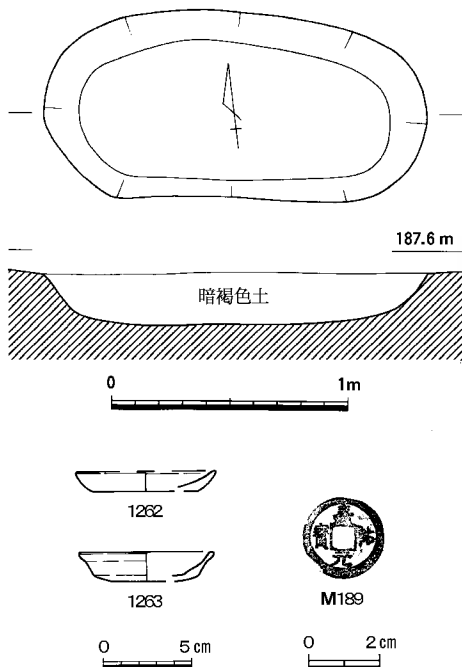
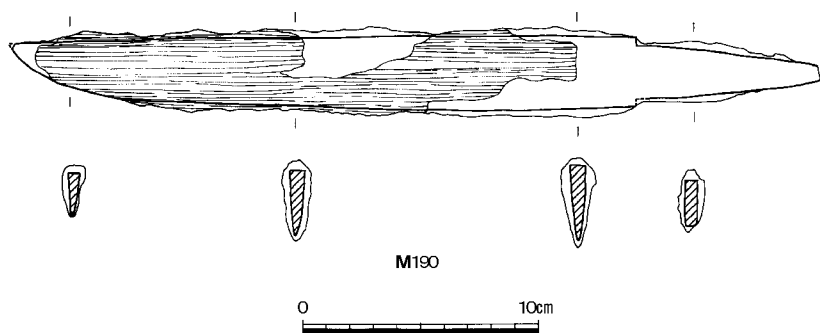
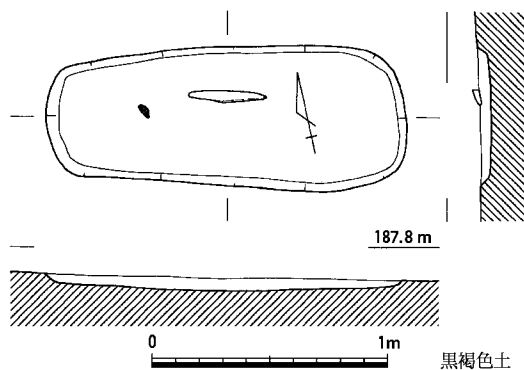


写真32 墓31 (南から)

第535図 墓31 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2)



第536図 墓32 (1/30)・出土遺物 (1/3)

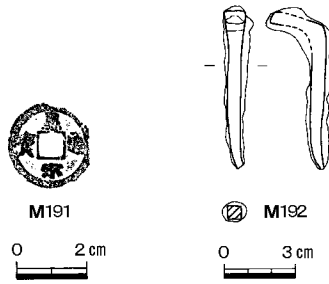
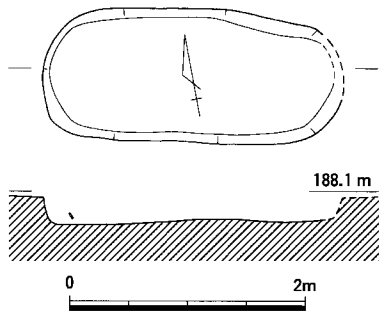
墓32 (第428・536図、図版105・149)

4 2 00 Df区から検出された墓で、前述した掘立柱建物55の北西部に存在していた。平面形は長径1.53m、短径62cmの隅丸長方形を呈し、検出面から床面までの深さは6cmと浅く、墓の上面が削平されていると思われた。床面は周辺部が高くなってわずかに湾曲し、断面形は上方に

開く極めて浅い「U」字形であった。内部には黒褐色土が堆積し、腰刀M190が出土した。茎部の端部を欠損しているが、長さ34.42cm、幅3.90cmを測り、刀身部に木質が付着している。 (福田)

墓33 (第430・537図)

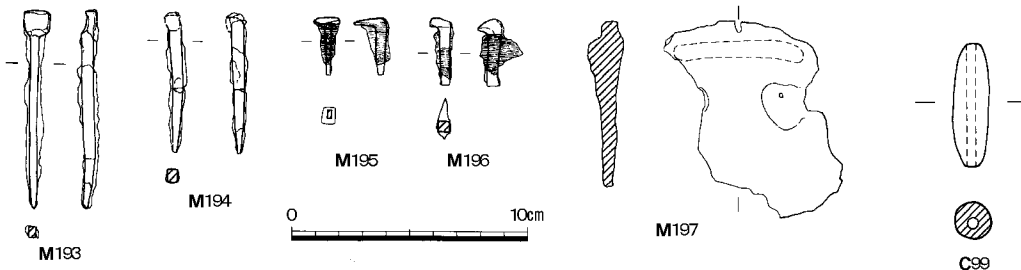
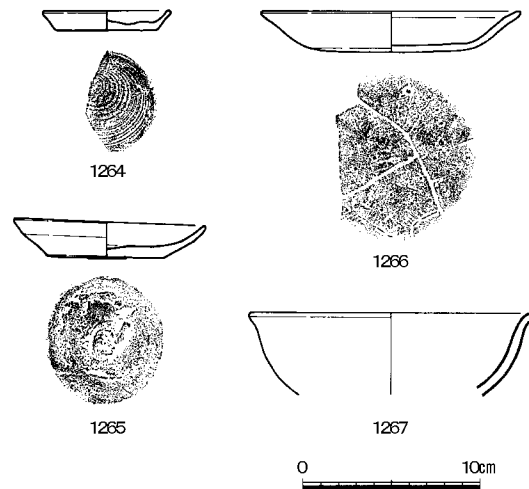
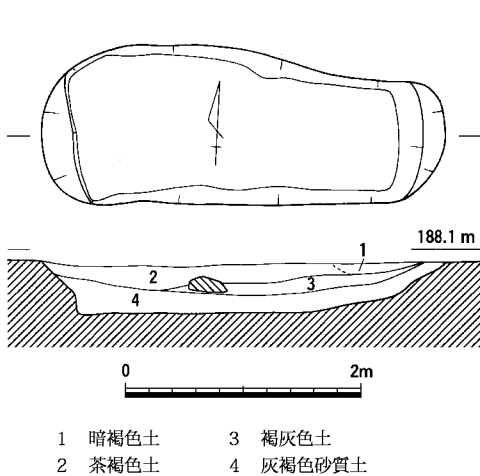
4 200 Ci区で検出した墓で、溝34の北側に接する状態で存在した。平面形は長径2.53m、短径11cmの長楕円形に近い形態を呈し、検出面から床面までの深さは23cmになっていた。床面は中央付近がわずかに盛り上がり、東側から西側に向かって緩やかに傾斜していた。この墓33から出土した遺物として、銅銭M191が1枚と曲がった釘M192の1本がある。 (福田)



墓34 (第430・538図、図版154)

4 200 Cj区で検出した墓で、北東方向から北西方向にかけての周辺には、10基以上の土壙が存在している。平面形は長径3.4m、短径1.32mの長楕円形に近い形になり、検出面からの深さは41cmで、2段掘りの様相を呈していた。底面の小口部分は西側が広く、内部には茶褐色土、褐灰色土、灰褐色砂質土が堆積し、土師器の小皿1264、土師器の皿1265・1266、青磁の碗1267、釘M193～M196、鉄片M197、土錘C99が出土した。 (福田)

第537図 墓33 (1/60)・出土遺物 (1/2,1/3)

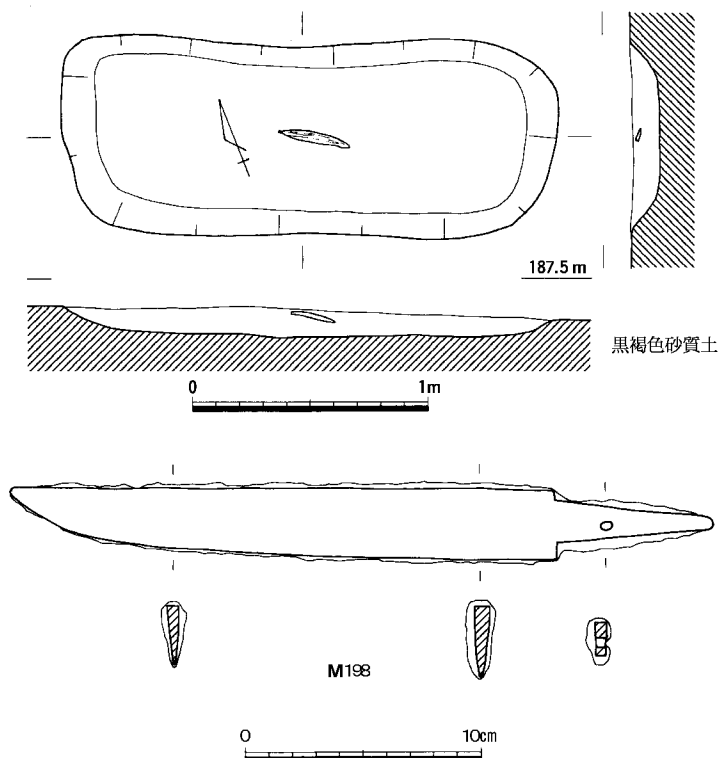


第538図 墓34 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)

第3章 発掘調査の概要

墓35 (第429・539図、図版105・149)

4 2 04 D d区から検出された墓で、北側には掘立柱建物58と掘立柱建物59が、東側には掘立柱建物61が、南側には土壙192が、西側には柱穴列 2 と掘立柱建物60が、それぞれ存在して遺構密度の高い地点になっているものの、周辺に別の墓は確認されていない。平面形は長径2.11m、短径84cmの隅丸長方形に似た形態を呈し、検出面からの深さは12cmと浅く、墓の上面が削平されていると思われた。内部には黒褐色砂質土が堆積し、底面から浮いた状態で完形品の腰刀M198が出土した。(福田)



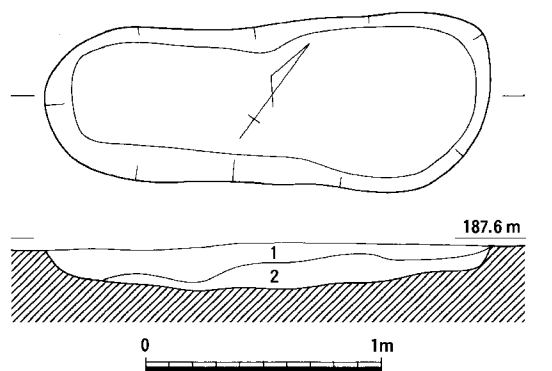
第539図 墓35 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓36 (第432・540図、図版105)

土器溜まり15が屈曲する北で、溝48の南東部にて検出されている。平面形が、長楕円形を呈した土壙墓である。

遺構は北東-南西に長辺を示し、北東側が広めに掘られている。規模は長辺1.9m、短辺が65~75cm、検出面からの深さは中央部が窪む形状を示した掘り下げがなされ、深さ20cmを測った。

時期は中世であろう。(二宮)



1 暗褐色土(薄い) 2 暗褐色土(全体的に薄い黒褐色が見られる)

第540図 墓36 (1/30)

## 6 焼成土壙

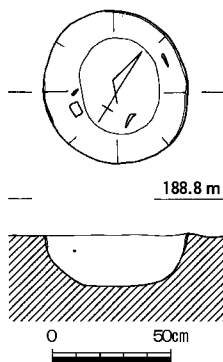
焼成土壙 2 (第426・541図、図版106・107)

4 1 04Ci区において検出した。平面形は直径約60cmの円形で、深さは20cm残存していた。埋土中には炭化材や小礫を含んでいた。壁面上端部が部分的に被熱を受けているのが特徴的である。埋土中から出土した鉄釘がこの土壙の用途に関連するのかどうかは判断できなかった。(平井)

焼成土壙 3 (第425・542図、図版106)

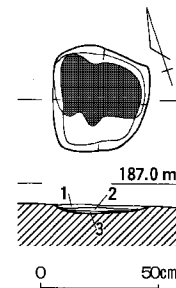
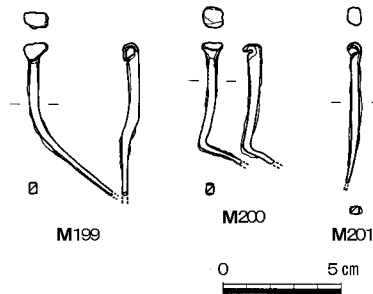
遺跡の中央部西端側の4 1 08Cbに位置する。北側2mでは掘立柱建物35を検出した。

長さ44cm、幅40cmで、平面形は不整長方形を呈する。床面が被熱して赤変し、埋土中には木炭粒が多く含まれていた。小炭生産を行った可能性が高い。(上村)



褐灰色砂質土 (炭化材 5~10cmの小礫を含む)

第541図 焼成土壙 2 (1/30)・出土遺物 (1/3)



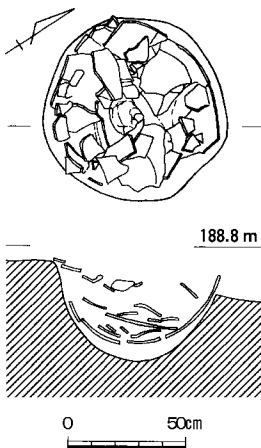
- 1 褐灰色砂質土 (木炭粒多含む)
- 2 炭粒
- 3 褐灰色砂質土 (木炭粒多含む)

第542図 焼成土壙 3 (1/30)

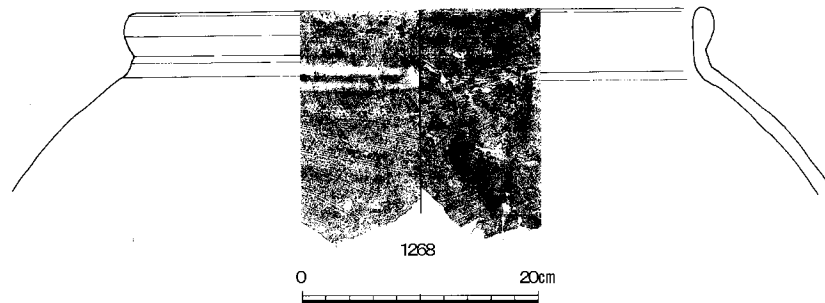
## 7 埋甕遺構

埋甕遺構 1 (第421・543・544図、図版106・134)

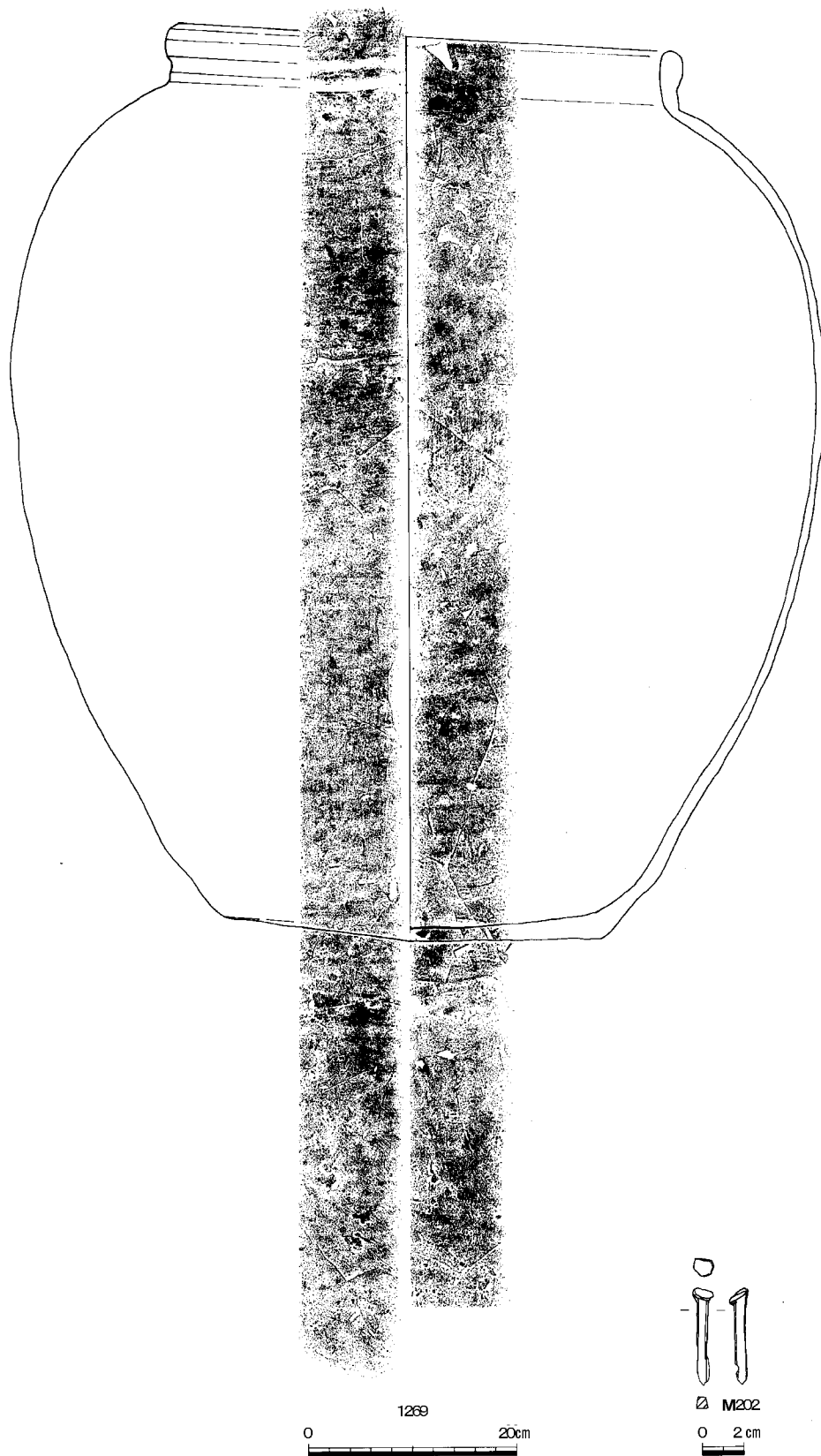
4 0 08Cb区に位置する。長軸85cm、短軸75cmの規模を有する土壙に備前焼甕1269が据えられたような状態で出土した。備前焼はさらにもう一個体出土している(1268)が、のちに廃棄されたものと考えられる。近接する土壙120・124~126からも備前焼の甕が出土し、関連性も考えられる。遺物の時期は15世紀後半である。(河合)



黒褐色砂質土 粘土・炭0.5cm大の小礫多混



第543図 埋甕遺構 1 (1/30)・出土遺物 (1/6)



第544図 埋壙遺構 1 出土遺物 (1/6,1/3)

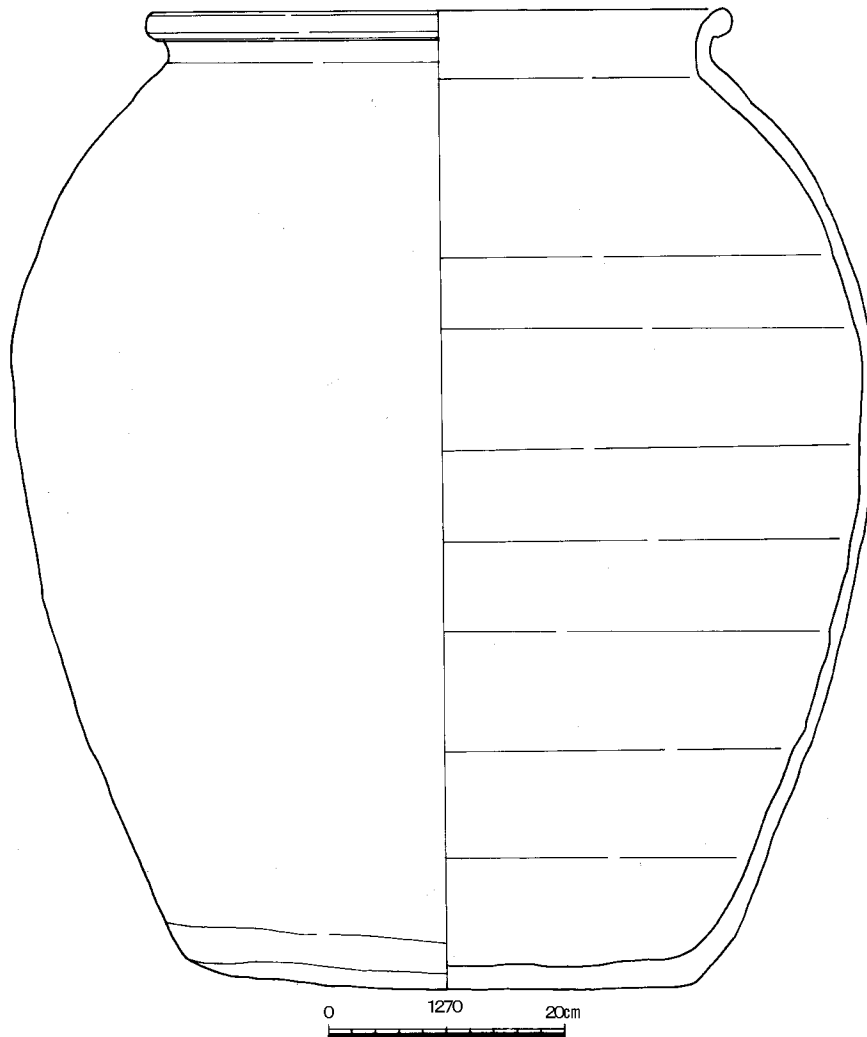
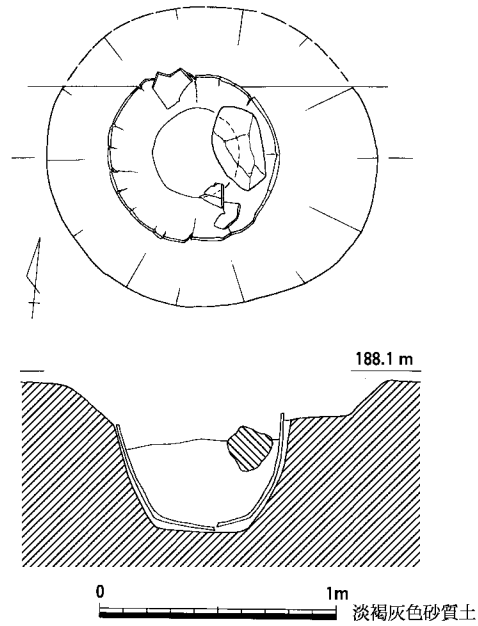
埋甕遺構 2 (第425・545図、図版106・107・134)

4 1 06Bh区西側に位置している。検出面での掘り方は東西1.4m、南北1.28mのほぼ円形を呈する。中には備前焼の甕が半分以上残されており、口縁部から肩部にかけてはほとんど中に落ち込み1個体に復元することができた。掘り方底部の海拔高は、187.42mである。

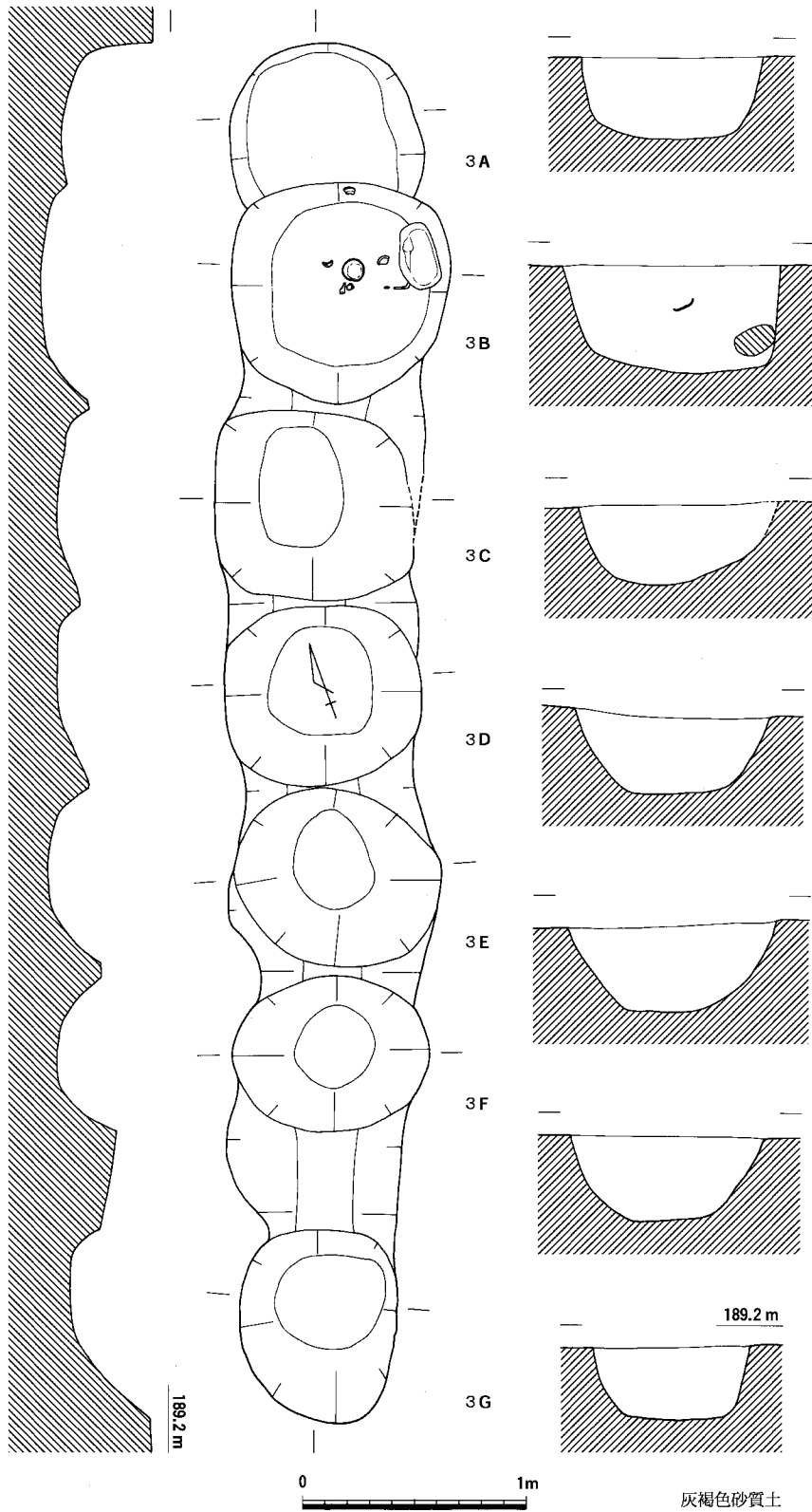
備前焼甕の口径は48cm、器高83.5cm、底径42cmを測る。胴部最大径は中程より上部にあり、73cmを測る。間壁編年のⅢB期に属し14世紀中頃に作られたと考えられる。(伊藤)

埋甕遺構 3 (第424・546・547図)

4 0 08Ci区にあり、建物27の西側の棟部分の下

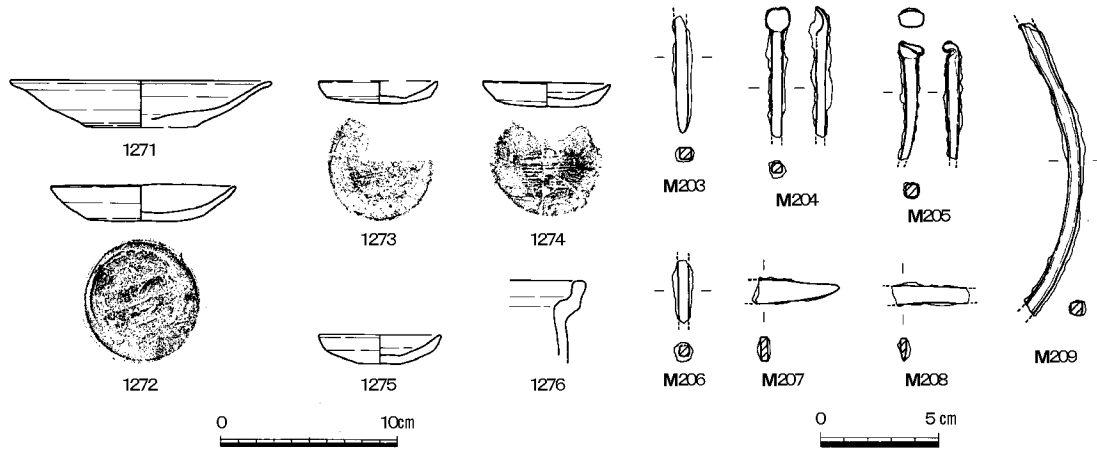


第545図 埋甕遺構 2 (1/30)・出土遺物 (1/6)



第546図 埋甕遺構 3 (1/30)

に位置し、6個の土壌が連続している。最も北側の3Aは、3Bに切られていた。3B以下3Gまでの6個は検出面から30~12cmの溝を掘り、さらに1個ずつ深さ86~57cmの穴を掘り、甕あるいは桶が埋められたものと考えられる。3Aは、直径86cm程の円形を呈し、深さは検出面から36cm、底面の海拔高は188.54mを測る。出土遺物は見られない。3B以下3Gまでは、東西98~70cm、南北100~70cmの円形から楕円形を呈する。深さは検出面から52~34cm、底面の海拔高は188.68~188.52mである。3Bから刀子の茎と思われる部分が2点M279・280、3Cからは釘が1点M275、3Fからは土師器小皿3点2103・2195・2106と用途不明の鉄器M280が1点、3Gからは土師器小皿2104、瓦質鍋2107、釘2本M276・277などが出土している。(伊藤)



第547図 埋甕遺構3出土遺物(1/4,1/3)

## 7 集石土壌・集石遺構

集石土壌1(第421・548・549図、写真33、図版107・134・148)

4100Bi区、建物16の南に所在する。検出面で長径2.3m、短径2.2mの不整円形を呈する土壌である。検出レベルは188.4mを測り、現状で深さ0.9mを測る。検出面で多量の礫群がほぼ土壌上面を覆うように検出された。土壌の中程に傾斜の変換点があり、長辺1.3m、短辺1mの長方形の低まりがほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦でレベルは187.5mである。傾斜変換点付近は比較的平滑で、低まりを掘り下げる際の作業面と考えられる。断面観察によると暗灰黄色系の埋土で187.9m付近まで埋まった後、暗灰褐色系の埋土で一度に埋まっており、上層で礫群を集積している。人為的に埋め戻した公算が高いであろう。出土遺物としては1277の青白磁の合子、1278の土師器の小皿、M120の和鏡がある。青白磁合子は身の部分で花卉状の装飾が施されている。和鏡は破片ながら外区に斜行子文が、内区には二羽の鶴が対をなすように配置されている。鏡は経筒の蓋に用いられる例があり、この遺構も経塚である可能性がある。出土遺物から時期は中世初頭である。(和田)

集石遺構2(第423・550図、図版108)

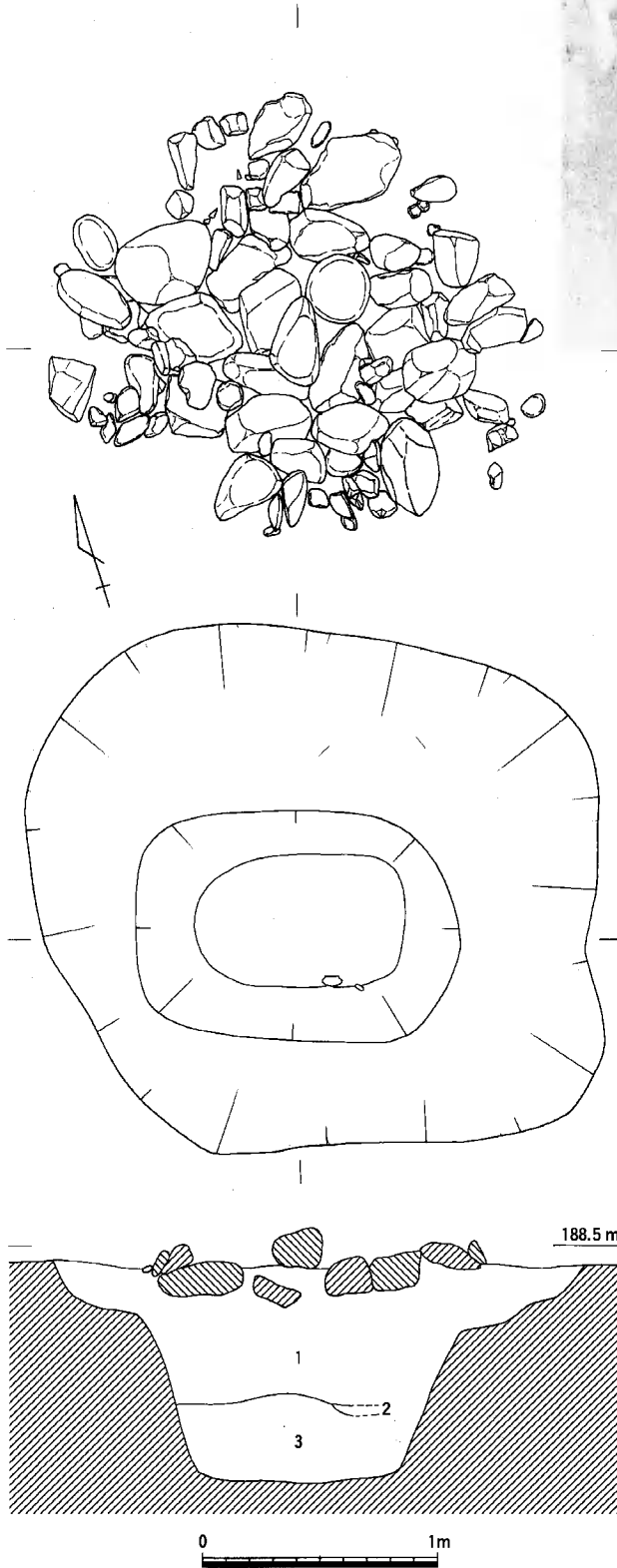
遺跡の中央部西寄りの4106Ccに位置する。堀3の南側12mで検出した。

長さ2m、幅1.8mの範囲に拳大から人頭大の礫が集中していた。中央部の長さ1.3m、幅1mの範囲は礫がほとんど検出できずに空隙となっていた。空隙部分はわずかに窪んだ状態になっており、墓塚の可能性も考えられたが、非常に浅く壁体も曖昧なため集石墓と判断できなかった。(上村)



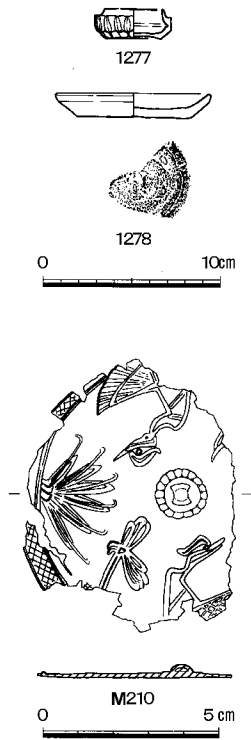


写真33 合子出土状況（東から）

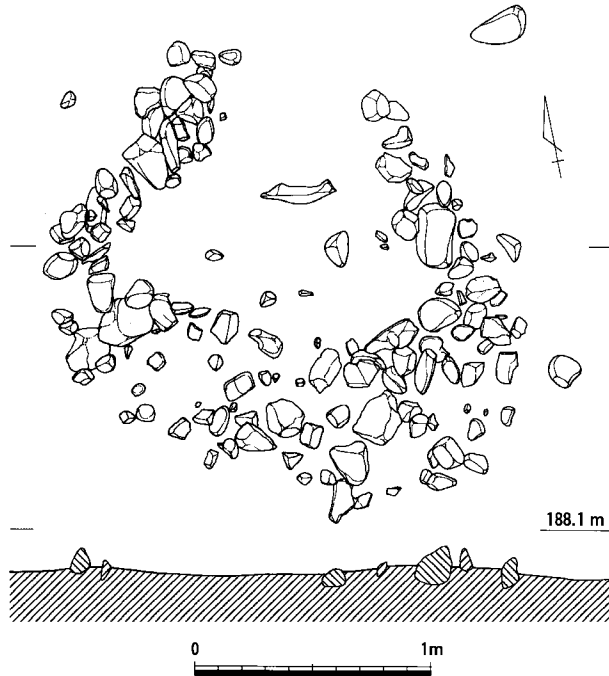


- 1 暗灰褐色土
- 2 鈍黄褐色砂質土
- 3 暗灰黄色土

第548図 集石土壇 1 (1/30)



第549図 集石土壇 1 出土遺物 (1/4, 1/3)



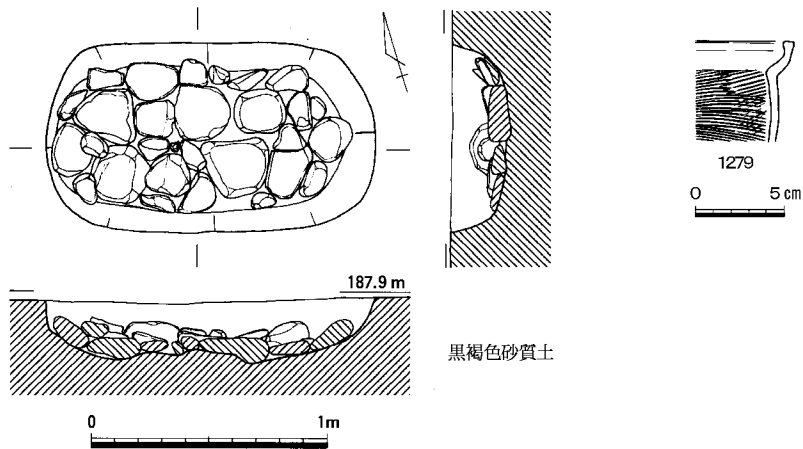
第550図 集石遺構 2 (1/30)

## 8 石敷土壇

石敷土壇 1 (第425・551図、図版108)

遺跡の中央部西寄り 4 1 05Cbに位置する。東南東15mでは集石遺構 2を検出した。

長さ1.4m、幅80cmの長方形土壇の底部に平たい石を敷いた構造である。大型の石を敷いた後に小振りな石で隙間を充填している。北接する久田原遺跡でも類似遺構が検出されており、釘の出土から土壇墓と考えられている。石には被熱痕は認められず、同様に土壇墓の可能性を指摘する。(上村)



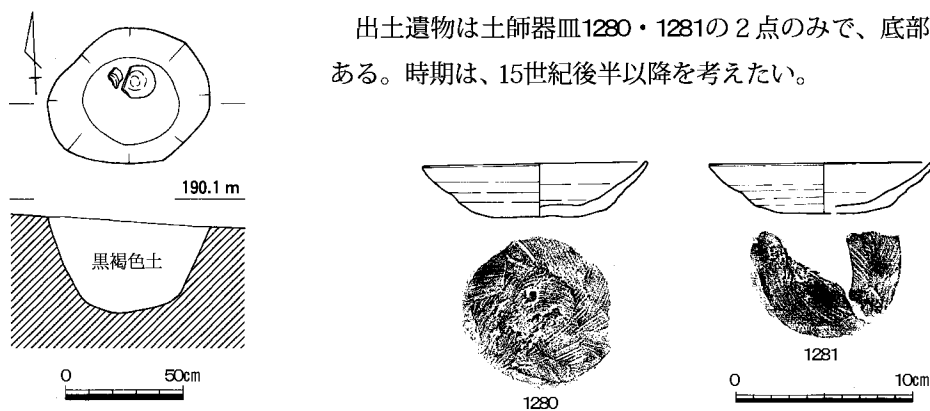
第551図 石敷土壇 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 9 土壌

### 土壌91 (第417・552図、図版108)

3 9 09Cb区に位置する。柱穴状の小規模土壌であるが、周辺には建物を構成するような柱穴は存在しなかった。

出土遺物は土師器皿1280・1281の2点のみで、底部は糸切りである。時期は、15世紀後半以降を考えたい。(弘田)

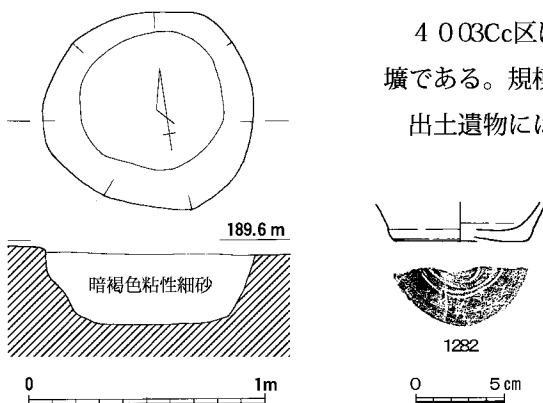


第552図 土壌91 (1/30)・出土遺物 (1/4)

### 土壌92 (第417・553図、図版108)

4 0 03Cc区において検出した、平面形が円形を呈した小土壌である。規模は、直径が1.75m、深さは60cmを測る。

出土遺物には土師器の杯1282がある。底部は糸切りで、口縁部は上方に立つ。時期は、鎌倉時代から南北朝期の幅の中には収まるとみられる。(弘田)



第553図 土壌92 (1/30)・出土遺物 (1/4)

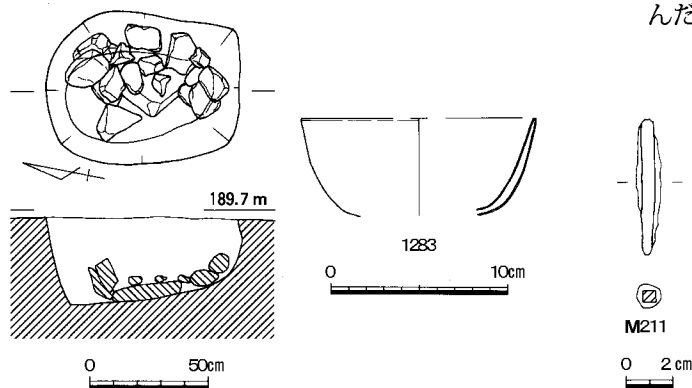
### 土壌93 (第418・554図、図版108・135)

4 0 01Cg区において検出した土壌である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸が82cm、短軸は65cmで、深さは37cmを測る。土壌底面には、上部から落ち込んだとみられる角礫の集石がみられた。

この土壌の形態や規模、類似する遺構からみて集石は墓の上部構造であった可能性も考えられる。

出土遺物には、青磁の無文碗1283や釘M211がある。

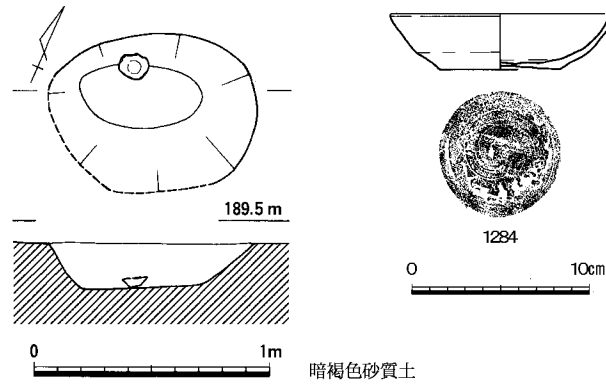
この土壌の時期は、室町から戦国期にかけての時期と考えられる。(弘田)



第554図 土壌93 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

土壌94 (第420・555図、図版135)

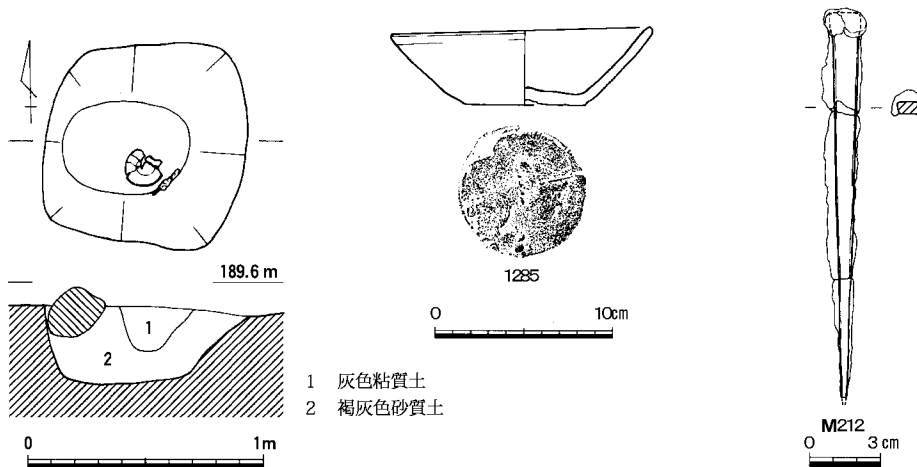
4 0 05Cd区、堀1の東から検出された平面楕円形を呈す土壌である。規模は90×67cm、深さ20cmを測る。底部は平坦で壁は緩く斜めに立ち上がる。埋土は暗褐色砂質土で、遺物は北部から土師器の杯1284が、土壌底部に置かれたように出土している。14世紀後半代のもと思われる。(江見)



第555図 土壌94 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌95 (第419・556図、図版135)

4 0 06Cg区から検出された平面方形を呈す土壌である。土壌中央は溝に切られ(第1層)、西端上部には人頭大の円礫が落ち込んでいた。遺物は土壌底部からやや浮いた状態で土師器の杯1285と釘M212が出土した。土師器の特徴から14世紀代のものであろう。(江見)

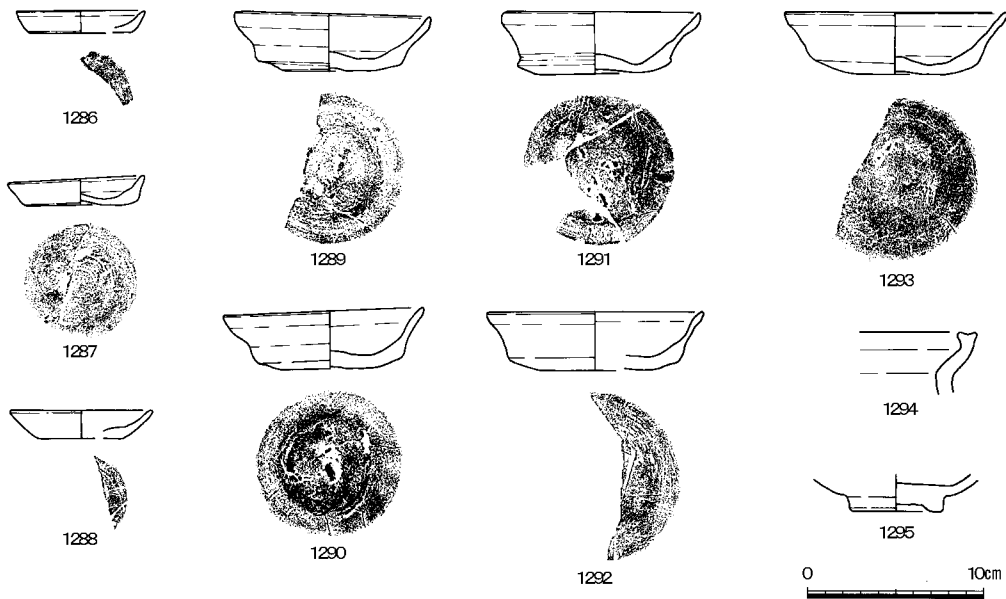
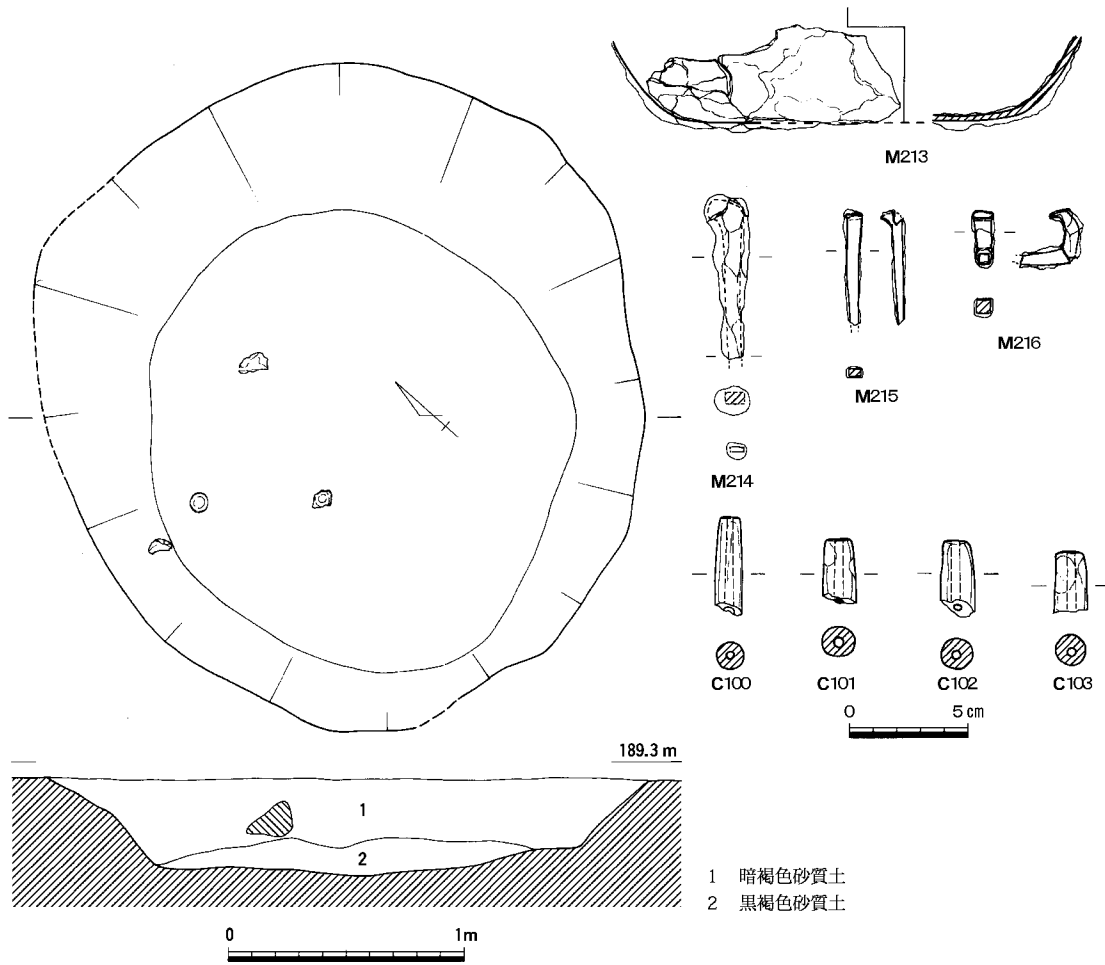


第556図 土壌95 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

土壌96 (第420・557図、図版135)

4 0 07Cc区、掘立柱建物3の南西10mから検出された比較的大形の平面不整形円形を呈す土壌である。規模は径2.7×2.45m、深さ40cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は反り返りながら立ち上がる。埋土は上下2層からなり、遺物は主に上層から出土している。遺物は土師器小皿・杯、瓦質鍋、青磁碗、土錘、鉄鍋・釘などが出土している。土師器の特徴から14世紀後半代のものである。(江見)

第3章 発掘調査の概要



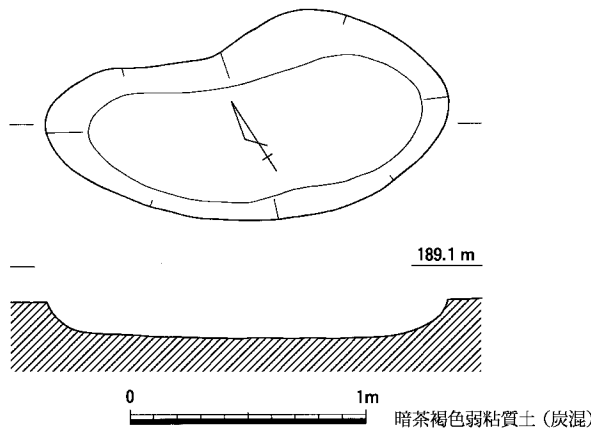
第557図 土壌96 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4)

土壌97 (第420・558図)

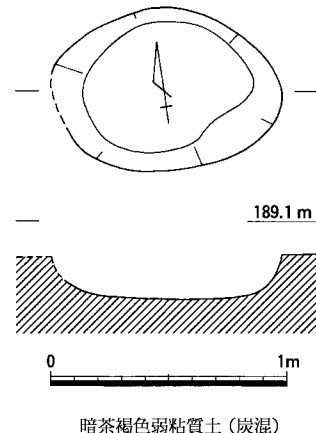
4 0 07Ca区から検出された平面不整楕円形を呈す土壌である。規模は1.69×85cm、深さ15cmを測る。底部は平坦で、壁はやや湾曲して立ち上がる。埋土はわずかに炭が混じる暗茶褐色弱粘質土であった。遺物は土器細片が出土しており、周囲の状況から室町時代の範疇のものと思われる。(江見)

土壌98 (第420・559図)

土壌97の東に接して検出された平面楕円形を呈す土壌である。規模は97×69cm、深さ18cmを測る。底部は平坦で、壁はやや湾曲して立ち上がる。埋土はわずかに炭が混じる暗茶褐色弱粘質土であった。遺物は見られなかったが周囲の状況から室町時代の範疇のものと思われる。(江見)



第558図 土壌97 (1/30)



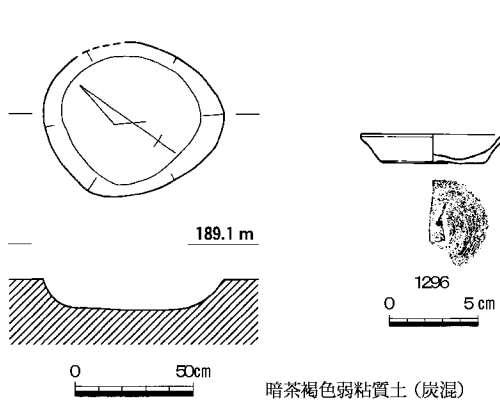
第559図 土壌98 (1/30)

土壌99 (第420・560図、図版135)

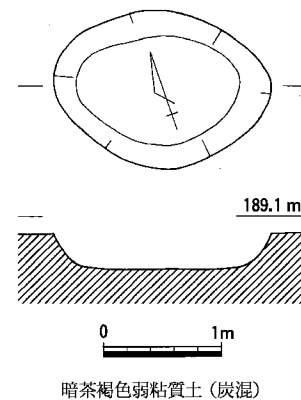
土壌97の南西に接して検出された平面不整円形を呈す土壌である。規模は径76×65cm、深さ13cmを測る。底部は平坦で、壁はやや湾曲して立ち上がる。埋土に混じって土師器小皿1296が出土している。底部は糸切りされており、14世紀代のものであろう。(江見)

土壌100 (第420・561図、図版105)

土壌99の西4mから検出された比較的大形の土壌で平面楕円形を呈す。規模は1.83×1.32m、深さ30



第560図 土壌99 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第561図 土壌100 (1/60)

第3章 発掘調査の概要

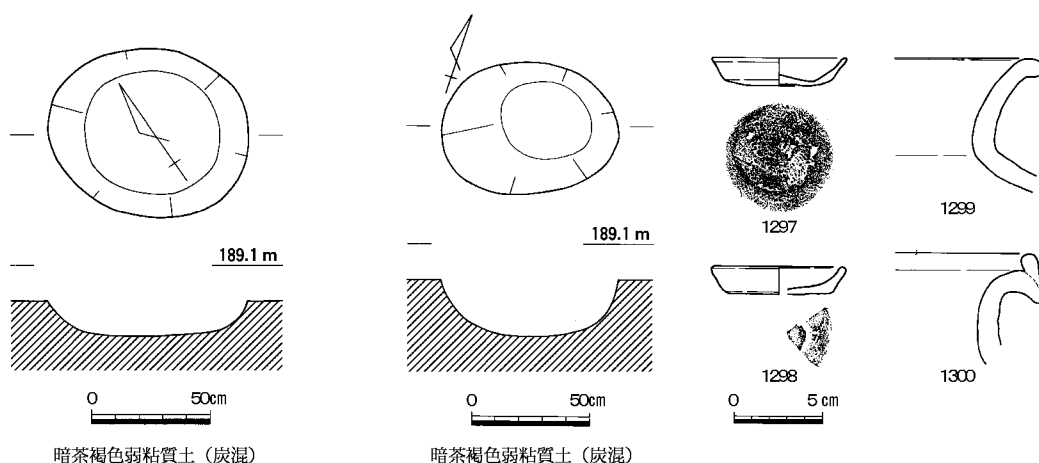
cmを測る。遺物は見られなかったが周囲の状況から室町時代の範疇のものと思われる。(江見)

土壙101 (第420・562図、図版108)

土壙100の東から検出された平面整円形を呈す土壙である。規模は85×72cm、深さ15cmを測る。遺物は見られなかったが周囲の状況から室町時代の範疇のものと思われる。(江見)

土壙102 (第420・563図、図版26・135)

土壙101の東から検出された小形の土壙で平面楕円形を呈す。規模は74×55cm、深さ24cmを測る。底部は窪み気味で、壁は緩く湾曲して立ち上がる。埋土は炭粒混じりの暗茶褐色弱粘質土であった。遺物は土師器小皿1297・1298、備前焼甕、常滑焼甕などが出土している。小皿の底部はいずれもヘラキリされている。備前焼1299はⅡ期の特徴を示し、常滑焼1300の口縁端部が内径気味に立ち上がるなど、甕はいずれも13世紀代の年代観をもつものであった。(江見)

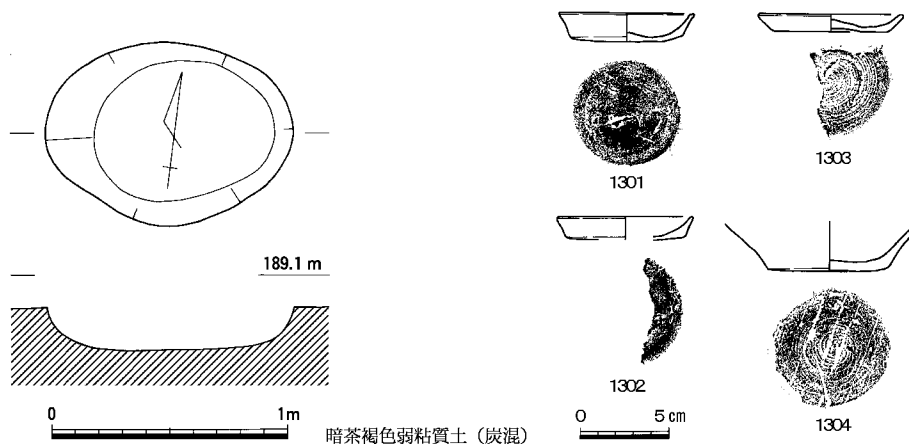


第562図 土壙101 (1/30)

第563図 土壙102 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙103 (第420・564図、図版108)

土壙102の南東から検出された土壙で平面楕円形を呈す。規模は1.05×0.77m、深さ18cmを測る。底部は平坦で、壁は湾曲気味に立ち上がる。遺物は土師器の小皿・皿などで、いずれも底部は糸切りさ



第564図 土壙103 (1/30)・出土遺物 (1/4)

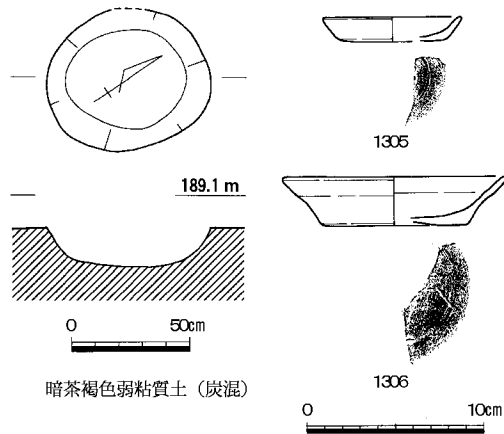
れているようである。(江見)

土壙104 (第420・565図、図版108・135)

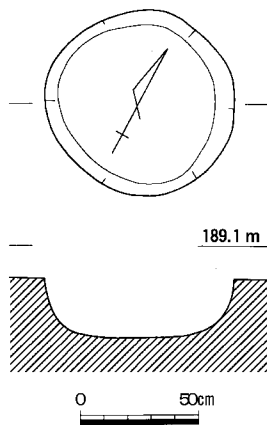
土壙103の東に接して検出された平面整円形を呈す土壙である。規模は70×60cm、深さ16cmを測る。底部は平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は炭粒混じりの暗茶褐色弱粘質土で、これに混じって土師器の小皿1305、皿1306などが出土している。15世紀前半のものと思われる。(江見)

土壙105 (第420・566図、図版26・135)

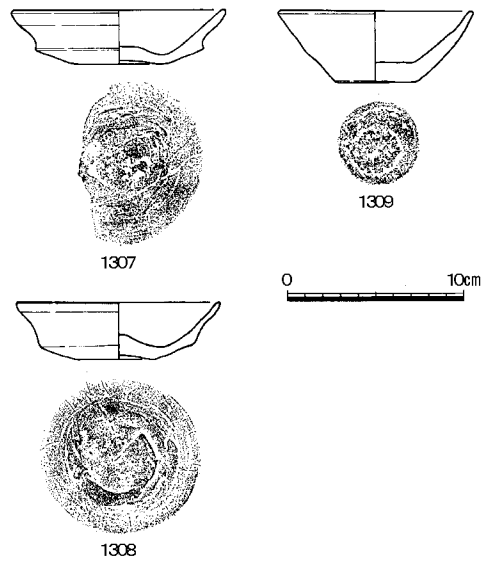
土壙104の東に接して検出された平面整円形を呈す土壙である。規模は80×77cm、深さ25cmを測る。底部は平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は炭粒混じりの暗茶褐色弱粘質土で、これに混じって土師器の杯1307～1309が出土している。14世紀後半のものと思われる。(江見)



第565図 土壙104 (1/30)・出土遺物 (1/4)



暗茶褐色弱粘質土 (炭混)



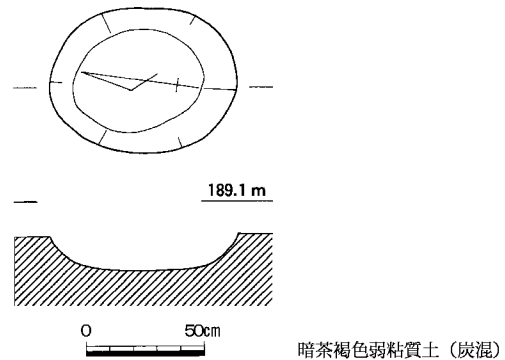
第566図 土壙105 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙106 (第420・567図、図版108)

土壙105の南西から検出された平面楕円形の土壙である。規模は80×61cm、深さ15cmを測る。底部は平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は炭粒混じりの暗茶褐色弱粘質土で、遺物は見られなかったが、周囲の状況から室町時代のものと思われる。(江見)

土壙107 (第420・568図、図版108)

土壙106の南西から検出された平面楕円形を



第567図 土壙106 (1/30)



第3章 発掘調査の概要

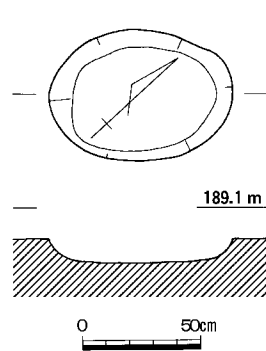
呈す土壌である。規模は77×55cm、深さ10cmを測る。

遺物は見られなかったが、周囲の状況から室町時代のものと判断された。(江見)

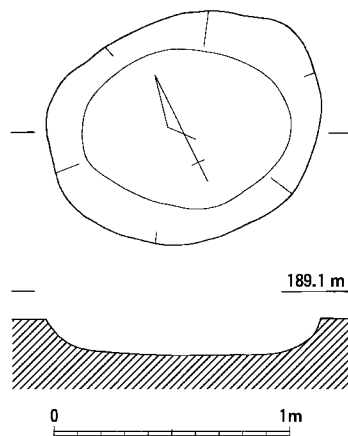
土壌108 (第420・569図、図版108)

土壌107の南東3mから検出された平面楕円形を呈す土壌である。規模は1.16×0.95m、深さ15cmを測る。埋土は炭粒混じりの暗茶褐色弱粘質土で、これに混じって土師器の小皿1310、土器細片などが出土している。

1310は底部へラ切りされており、14世紀代のものと思われる。(江見)



暗茶褐色弱粘質土 (炭混)  
第568図 土壌107 (1/30)



第569図 土壌108 (1/30)・出土遺物 (1/4)



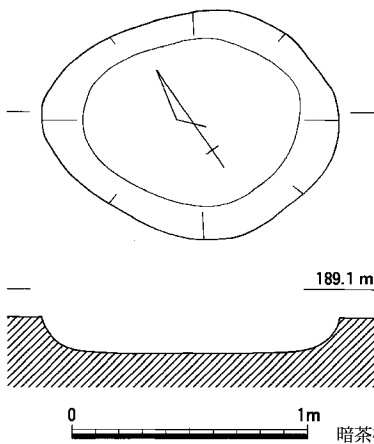
暗茶褐色弱粘質土 (炭混)

土壌109 (第420・570図)

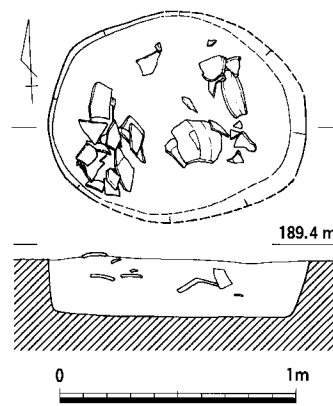
土壌108の北東10m、4 0 07Cb区から検出された平面楕円形を呈す土壌である。規模は1.25×0.97m、深さ15cmを測る。底部は平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は炭粒混じりの暗茶褐色弱粘質土で、遺物は見られなかったが周囲の状況から室町時代のものと思われる。(江見)

土壌110 (第420・571・572図)

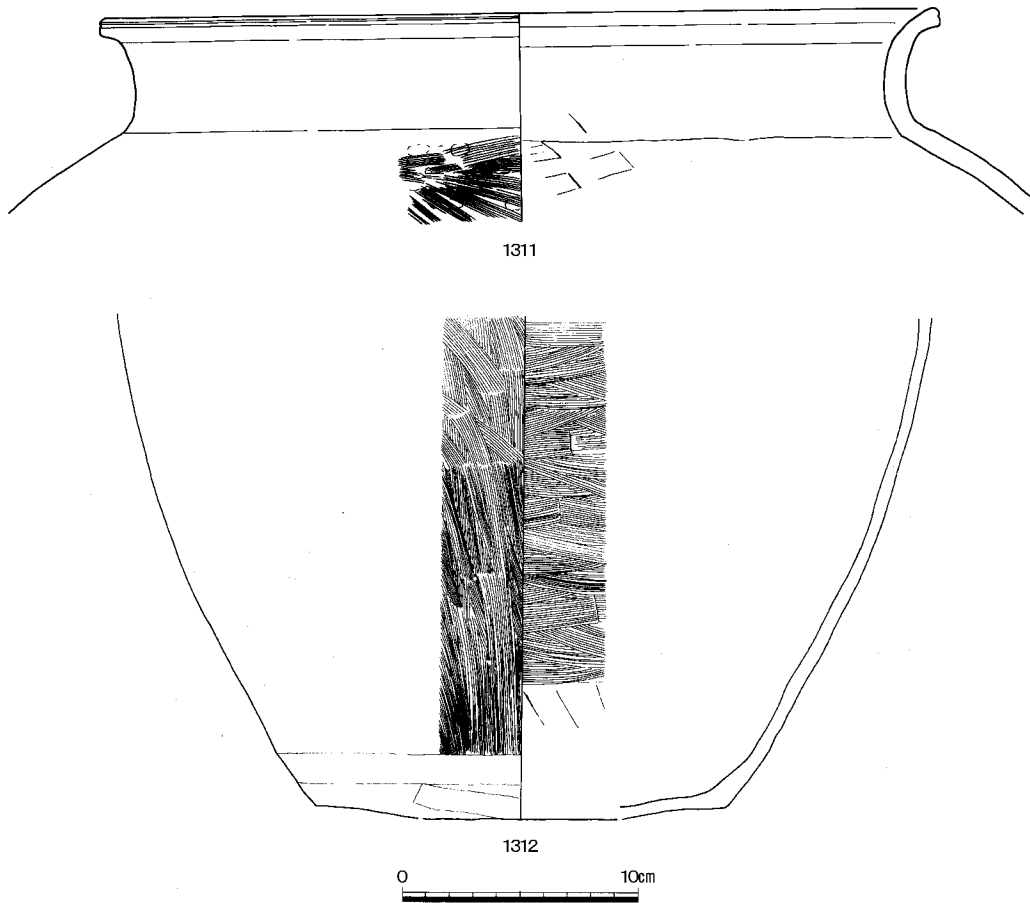
土壌109の東12m、4 0 07Cc区から検出された平面楕円形を呈す土壌である。規模は1.1×0.9m、深



暗茶褐色弱粘質土 (炭混)  
第570図 土壌109 (1/30)



暗褐色砂質土  
第571図 土壌110 (1/30)

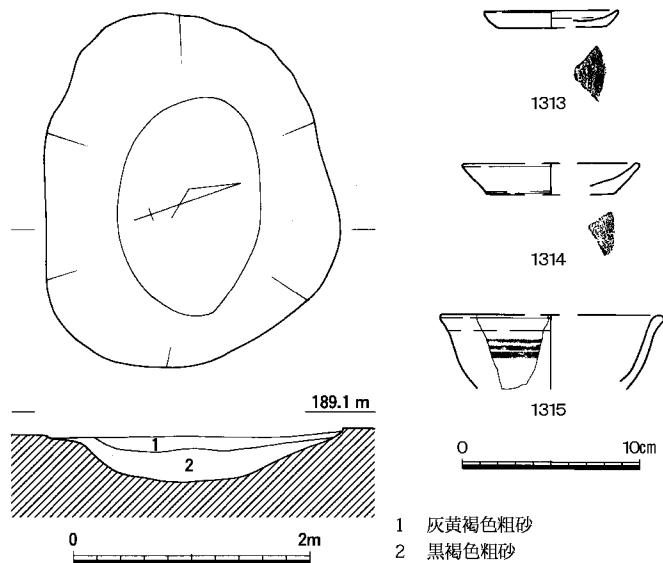


第572図 土壙110出土遺物 (1/4)

さ25cmを測る。土壙上部からは横  
 転し、押し潰された状態で備前焼  
 甕1311・1312が出土した。同一個  
 体と判断される甕は棺に利用され  
 た可能性も考えられる。鎌倉時代  
 のものであろう。(江見)

土壙111 (第420・422・423・  
 573図)

土壙110の南30m、4 1 00Ce区  
 から検出された大形の土壙で平面  
 楕円形を呈す。規模は2.92×2.56m、  
 深さ38cmを測る。底部は平坦で、  
 壁は斜めに立ち上がる。遺物は土  
 師器小皿、青磁碗など室町時代の  
 のものが出土している。(江見)



第573図 土壙111 (1/60)・出土遺物 (1/4)

- 1 灰黄褐色粗砂
- 2 黒褐色粗砂

第3章 発掘調査の概要

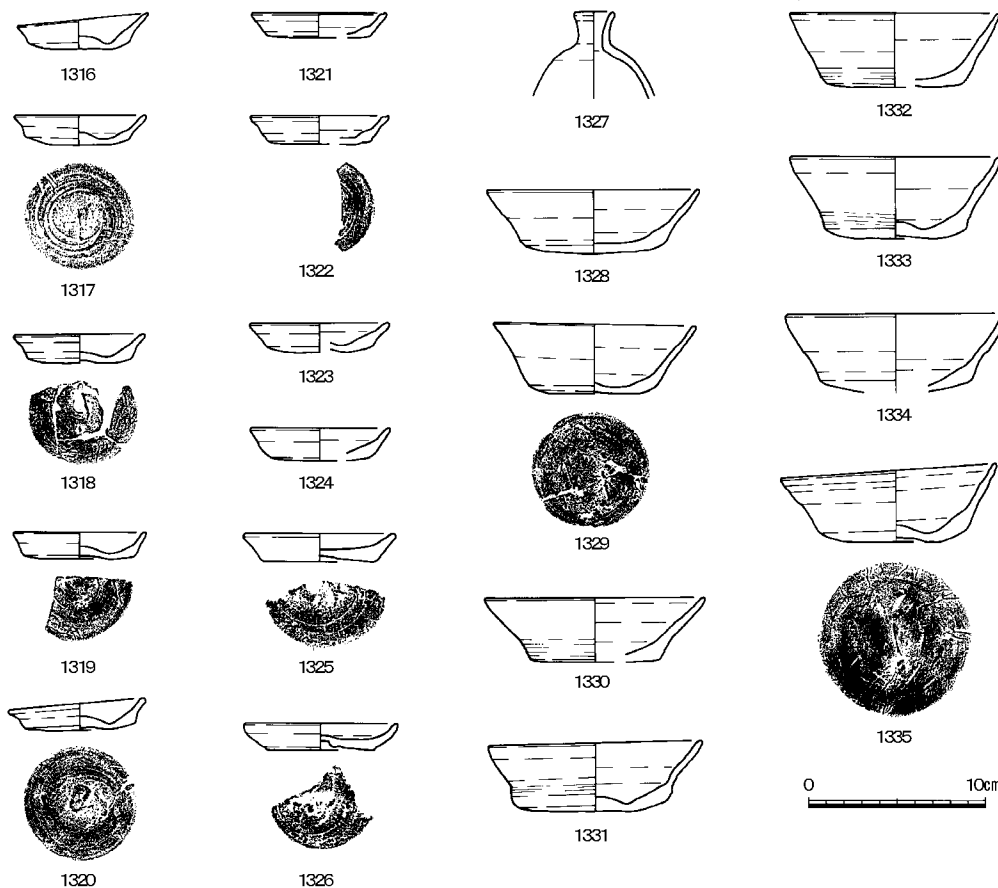
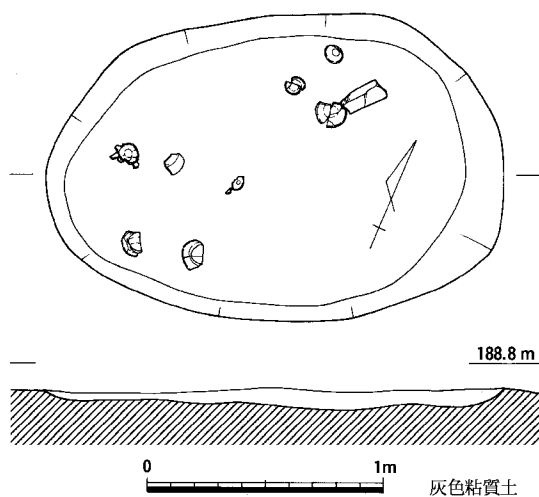
土壙112 (第420・422・574図、図版135・136)

土壙111の北西20m、4 0 09Ca区から検出された比較的大形の土壙で平面楕円形を呈す。規模は1.94×1.29m、深さ7cmを測る。底部は凹凸が見られ、壁は緩く立ち上がる。埋土は灰色粘質土であった。遺物は備前焼の小壺1327をはじめ、土師器の小皿1316~1326、杯1328~1335などが出土した。土師器

の底部は確認できる大半が糸切りされており、杯の形態などから14世紀代のものと思われる。(江見)

土壙113 (第422・575図、図版136)

土壙111の南西7m、掘立柱建物18に一部切られて検出された。平面は整円形を呈し、規模は1.68×1.65m、深さ19cmを残す。底部はほぼ平坦で、壁は斜めに緩く立ち上がる。土壙上部には10~30cm大の礫が堆積し、下部は黒褐色砂質土で覆われていた。遺物は上部の礫に混じって出土している。1337は瀬戸美濃の花瓶で、14世紀後半の年代観を



第574図 土壙112 (1/30)・出土遺物 (1/4)

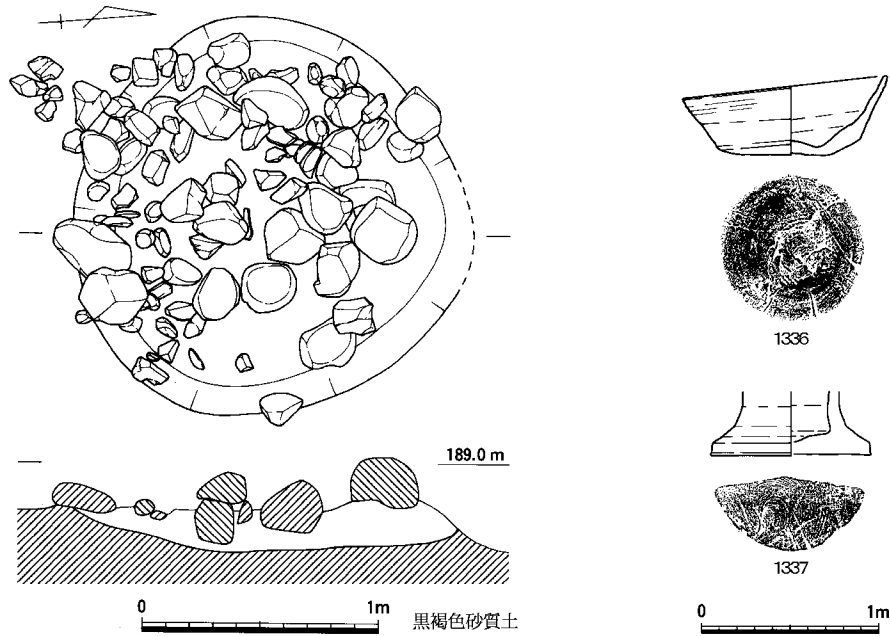
もつものである。土師器杯1336もまた同様時期と考えられる。

(江見)

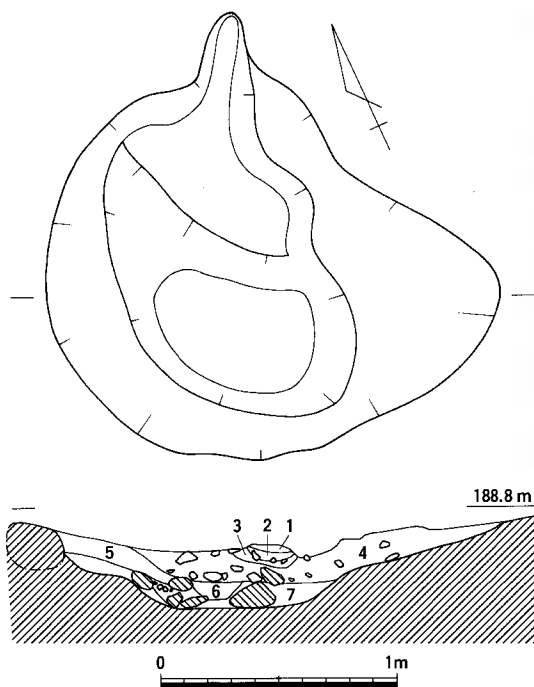
土壌114 (第423・576図、写真34)

4 1 02Cg区、堀3内から検出された平面不整形円形を呈す土壌である。規模は1.92×1.88m、深さ35cmを測る。埋土は7層からなり、土壌内には多くの礫が認められた。しかしながら遺物はわずかに土師器細片が出土するにとどまった。

(江見)



第575図 土壌113 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第576図 土壌114 (1/30)



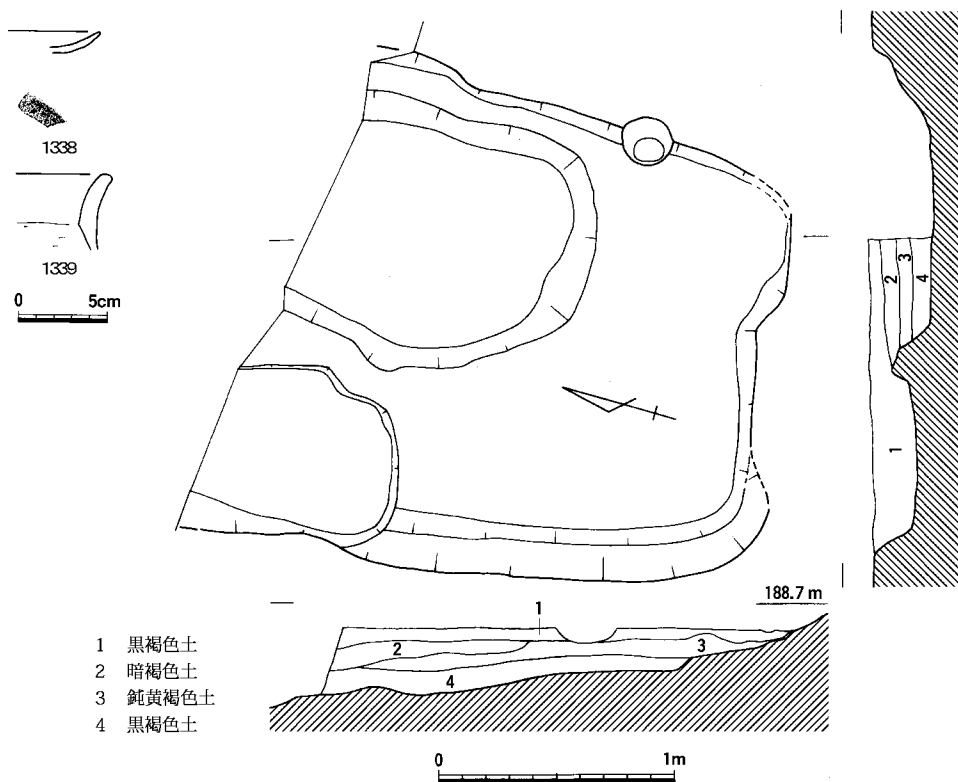
写真34 土壌114 (南から)

- 1 黒褐色粘質土
- 2 暗褐色粘土
- 3 黒褐色粘質土 (炭多混)
- 4 黒褐色砂質土
- 5 暗褐色砂質土
- 6 鈍黄褐色粗砂
- 7 黒褐色砂質土

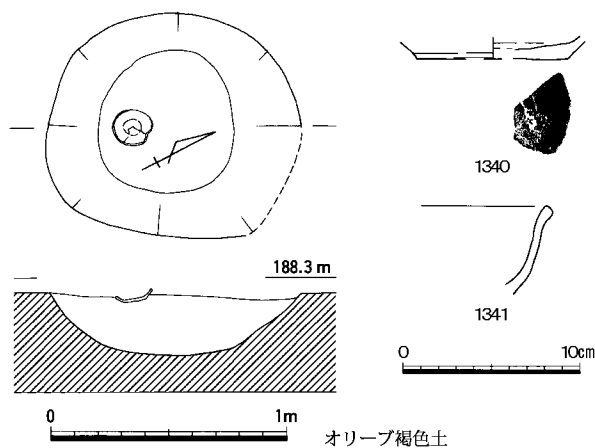
第3章 発掘調査の概要

土壌115 (第420・422・577図)

4 1 00Bj区に所在する現存南北長2.5m、東西2.2mを測る不整形の土壌である。検出レベルは188.7mで、深さはもっとも深いところが30cmを測り、底面のレベルは188.4mを測る。底面はいびつで2つのたわみ状の窪みを検出したが、断面観察からこの2つが異なる2つの土壌である公算もある。出土遺物には須恵器、土師器があるが、混入であろう。土色、検出レベルから、時期は中世である。(和田)



第577図 土壌115 (1/30)・出土遺物 (1/4)



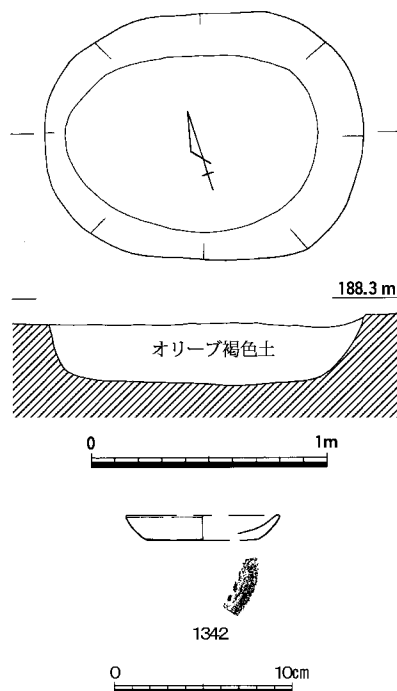
第578図 土壌116 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌116 (第430・578図、図版119)

4 1 00Bg区に所在する長径1.1m、短径0.9mを測る楕円形の土壌である。検出レベルは188.2mで、深さはもっとも深いところで25cmを測り、底面のレベルは187.9mを測る。底面は平坦で断面は舟形を呈する。オリーブ褐色一層で埋まっており、やや高いレベルで遺物が検出されている。人為的に埋め戻した公算もあろう。遺物には土師器の皿、および青磁の碗があり、出土遺物から時期は中世前半である。(和田)

土壌117 (第421・579図、図版120)

4 1 01Bg区に所在する長径1.3m、短径1.1mを測る楕円形の土壌である。検出レベルは188.2mで、深さはもっとも深いところで25cmを測り、底面のレベルは187.9mを測る。底面は平坦で断面は舟形を呈する。遺物には土師器の皿があり、底面はへら切りである。時期は中世後半である。(和田)



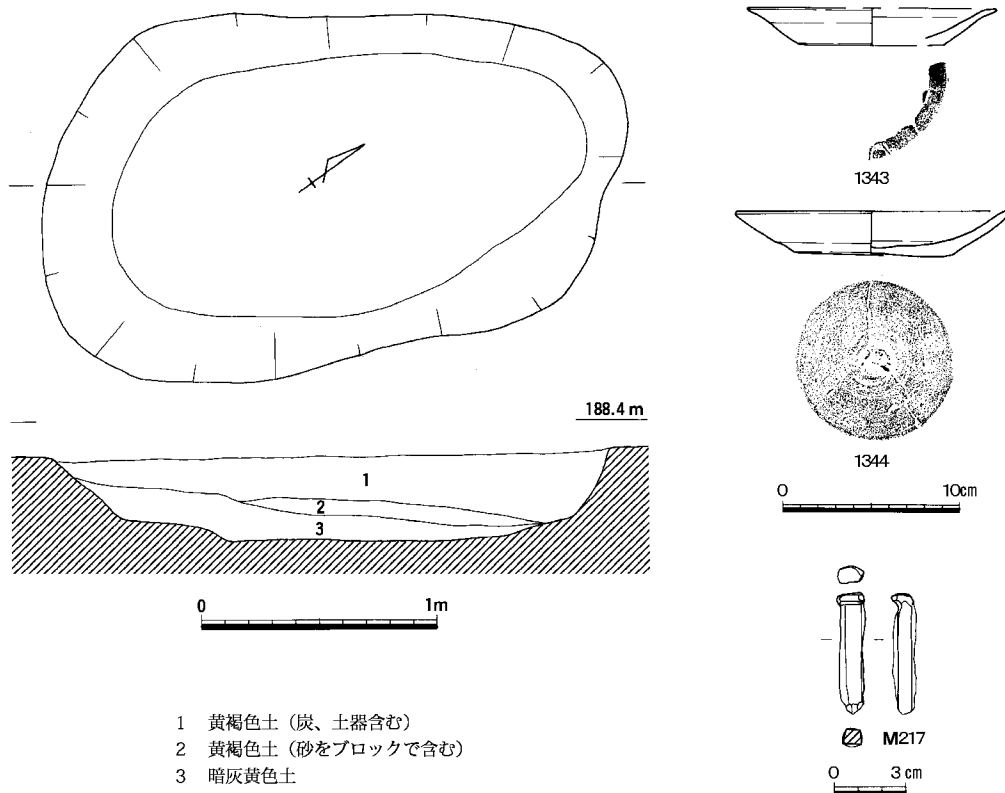
第579図 土壌117 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

土壌118 (第421・580図、図版136)

4 1 02Bh区に所在する長径2.4m、短径1.5mを測る楕円形の土壌である。深さは、もっとも深いところで36cmを測る。底面はほぼ平坦で断面は舟形を呈する。断面観察によると、西辺は東辺に比して掘り込み角度が緩くなっており、崩れている公算もある。遺物には土師器の皿および釘がある。土師器はいずれも底面はへら切りである。時期は中世後半である。(和田)

土壌119 (第420・422・581図、図版119・136)

4 1 00Ca区に位置し、掘立柱建物9に近接する。A・Bに分けて調査を行っているが、Bは遺物も存在せず、



- 1 黄褐色土 (炭、土器含む)
- 2 黄褐色土 (砂をブロックで含む)
- 3 暗灰黄色土

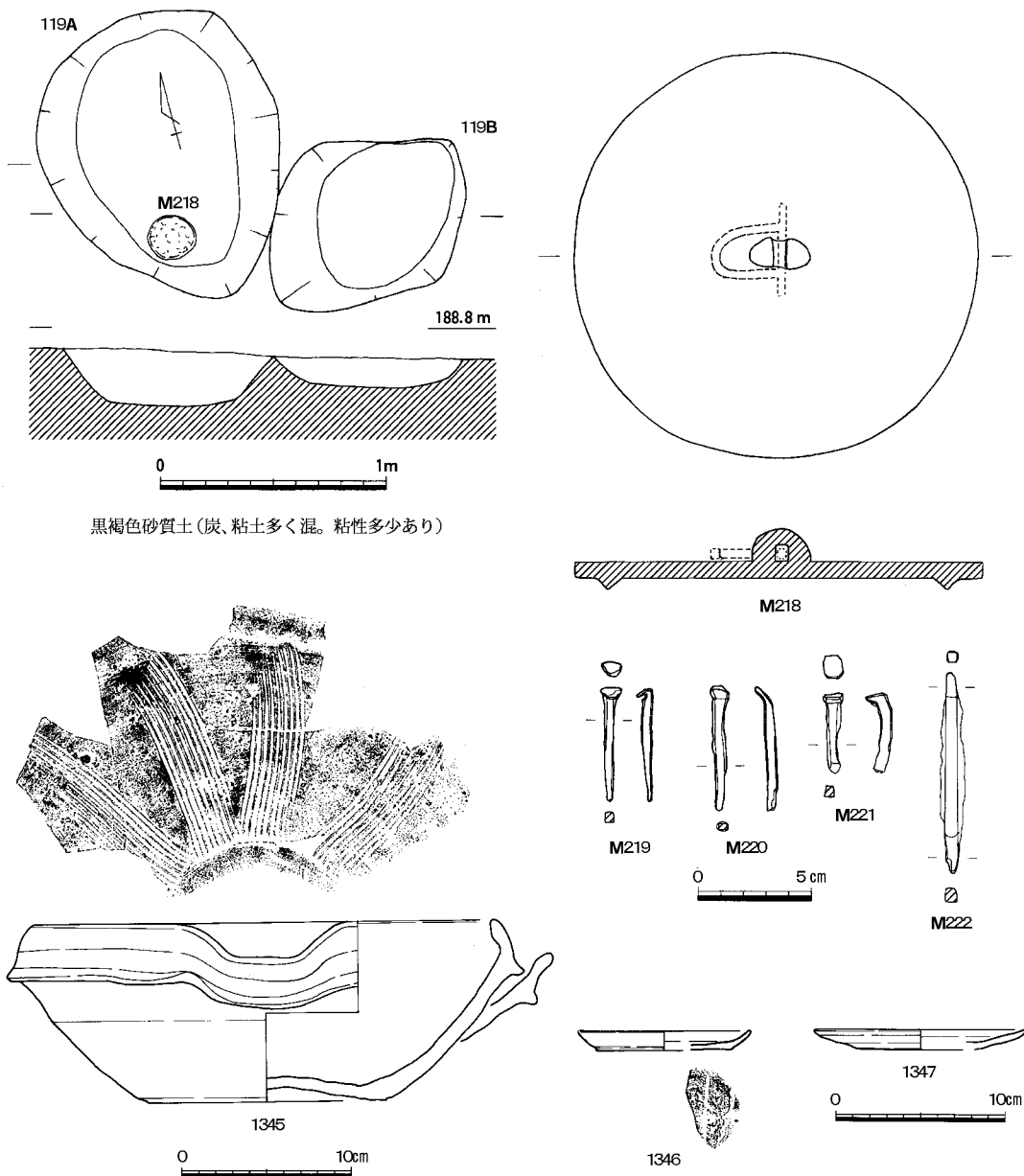
第580図 土壌118 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

第3章 発掘調査の概要

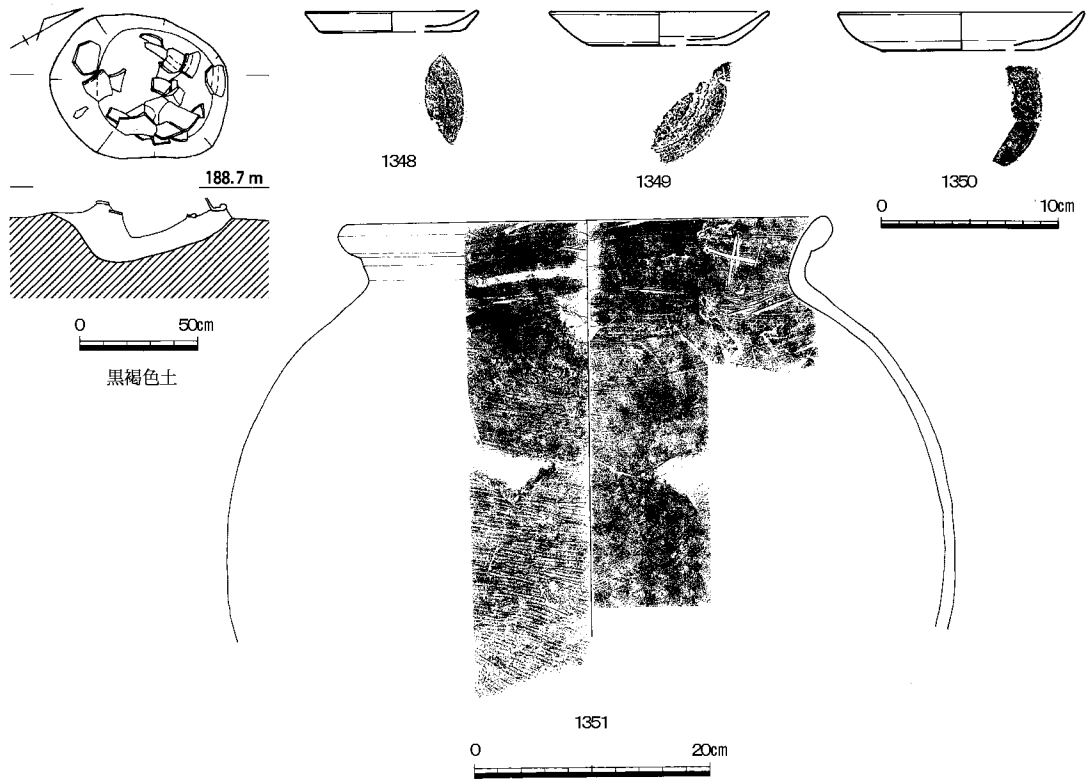
平面形も不整形であることから遺構でない可能性もある。遺物は全てAからの出土であり、備前焼播鉢1345、土師器皿1346・1347のほか、鉄容器の蓋M218、鉄釘M219～222がある。M218は上部につまみがついていたと推測される突起があり、下部にはずれないようにするための突起が2つ存在する。遺構の時期は備前焼播鉢1345から判断して、15世紀末頃と考えられる。(河合)

土壌120 (第421・582図、図版120・136)

4009Bi区に位置する。掘り方の平面形は隅丸方形形状を呈し、埋土は黒褐色土である。出土遺物は備前焼甕1351のほか、土師器杯1348、土師器皿1349・1350がある。出土遺物は土壌の床面より10cmほど浮いた状態で出土した。遺物の出土のあり方は後述する土壌125・126と共通する。遺構の時期は備前焼甕1351から判断して、15世紀後半と考えておきたい。(河合)



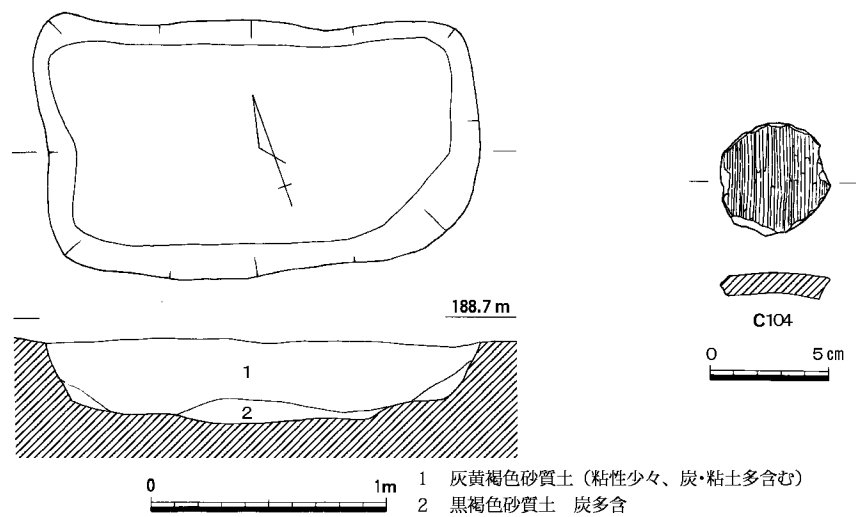
第581図 土壌119 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4)



第582図 土壌120 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/6)

土壌121 (第421・583図、図版155)

4 100Bi区に位置し、掘立柱建物16に近接する。掘り方の平面形は隅丸長形状を呈し、長さ1.88m、幅1.1mである。形態や大きさから墓の可能性もある。遺物には瓦質土器再加加工品の土製円盤C104がある。遺構の時期は埋土が類似する土壌120から判断して、15世紀後半と考えておきたい。(河合)



第583図 土壌121 (1/30)・出土遺物 (1/3)



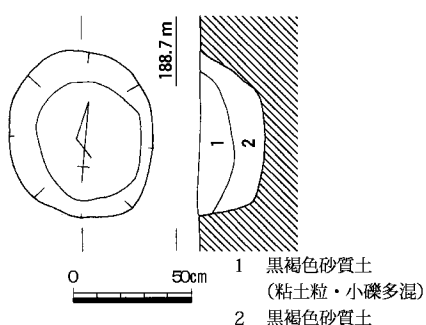
第3章 発掘調査の概要

土壌122 (第421・584図)

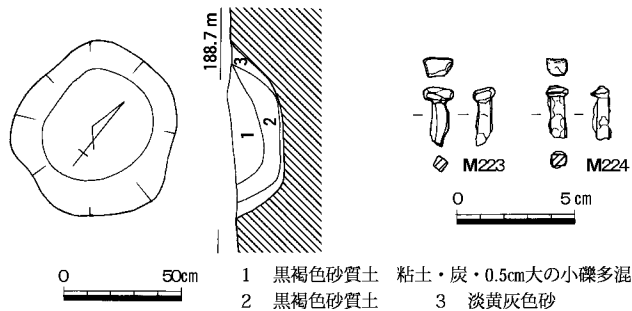
4 1 01Bi区に位置し、掘立柱建物16・埋甕遺構1・土壌123～125に近接する。掘り方の平面形は、ほぼ円形をする。出土遺物は認められないものの、埋土から判断して15世紀後半の範疇で考えておきたい。(河合)

土壌123 (第421・585図)

4 1 01Bi区に位置し、掘立柱建物16・埋甕遺構1・土壌122・124・125に近接する。掘り方の平面形はほぼ円形をする。出土遺物は鉄釘M223・224が認められる。遺構の時期は、埋土から判断して15世紀後半の範疇で考えておきたい。(河合)



第584図 土壌122 (1/30)

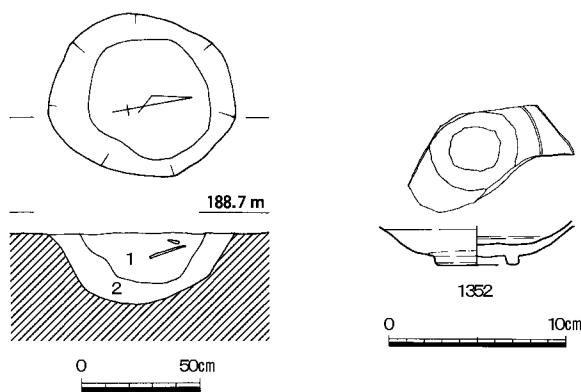


第585図 土壌123 (1/30)・出土遺物 (1/3)

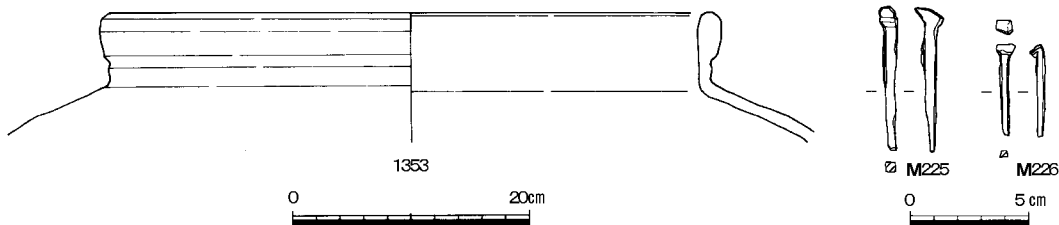
土壌124(第421・586図、図版136)

4 1 01Bi区に位置し、掘立柱建物16・埋甕遺構1・土壌122・123・125に近接する。掘り方の平面形はほぼ円形をする。遺物は第1層から出土しており、白磁碗1352・備前焼甕1353のほか鉄釘M225・226がある。白磁碗1352には内底部に蛇目釉剥が認められる。

この遺構の時期は、白磁碗1352・備前焼甕1353から判断して、15世紀代後半の範疇にあると考えられる。(河合)



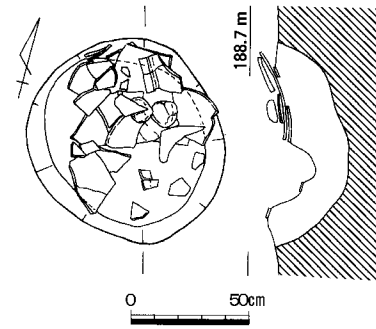
- 1 黒褐色砂質土 粘土・炭・0.5cm大の小礫多混
- 2 黒褐色砂質土



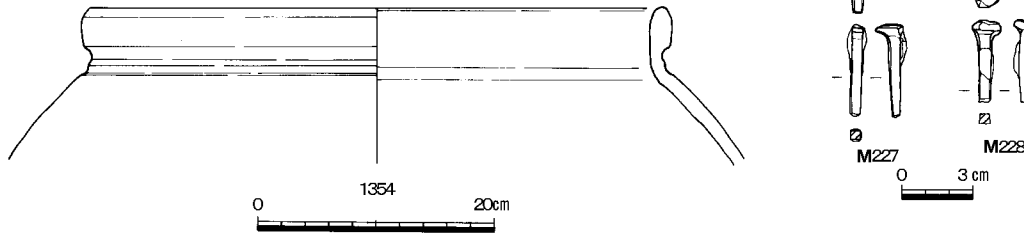
第586図 土壌124 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/6,1/3)

土壌125 (第421・587図、図版136)

4 1 01Bi区に位置し、掘立柱建物16・埋甕遺構1・土壌122～124に近接する。掘り方の平面形はほぼ円形をする。出土遺物には備前焼甕1354のほか鉄釘M227・228があり、遺物の出土のあり方は土壌120や後述する土壌126と共通し、底面よりやや浮いた状態で出土した。遺構の時期は、備前焼甕1354、および埋土から判断して15世紀後半であろう。(河合)



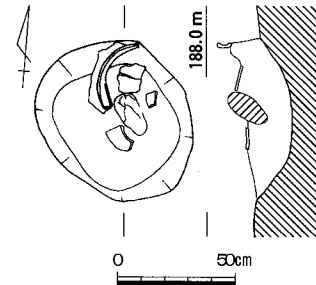
黒褐色砂質土 粘土・炭・3cm大の礫を多く含む



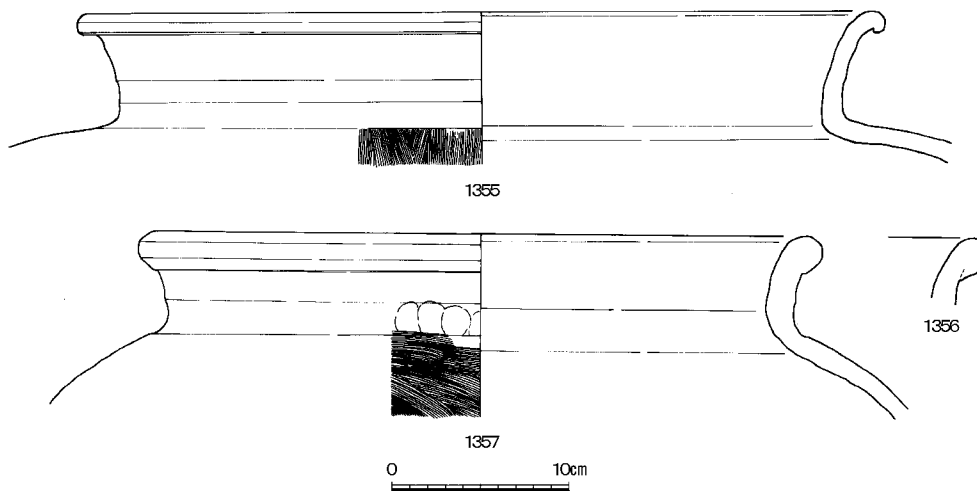
第587図 土壌125 (1/30)・出土遺物 (1/6,1/3)

土壌126 (第422・588図、図版120・136)

4 1 01Bj区に位置し、掘立柱建物9・墓6に近接する。掘り方の平面形はほぼ円形を呈し、埋土は小礫が多く混じる黒褐色砂質土である。河原石とともに備前焼甕1355～1357が出土している。その出土のあり方は土壌120・125と共通し、底面よりやや浮いた状態で出土した。遺構の時期は、備前焼甕から判断して14世紀前半の範疇で考えておきたい。(河合)



黒褐色砂質土 粘土・炭・0.5cm大の小礫多混



第588図 土壌126 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第3章 発掘調査の概要

土壙127 (第425・589図)

4 1 05Bj区に位置し、長径1.28m、短径93cmの隅丸方形を呈する。検出面で40~10cm前後の石が集中してみられる。検出面での深さは26cmあり、底面の海拔高は187.18mである。

土壙内からの出土遺物は見られない。

(伊藤)

土壙128 (第425・590図)

4 1 06Bj区に位置し、長径1.30m、短径90cmの楕円形を呈する。検出面での深さは31cmあり、底面の海拔高は187.60mである。

土壙内から土錘C105が出土している。

(伊藤)

土壙129 (第425・591・592図、写真35・図版121・137)

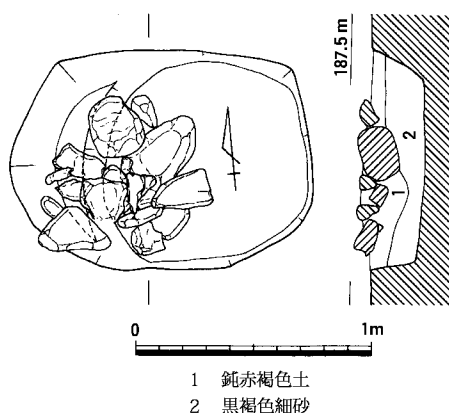
4 1 06Bj区に位置し、長径1.80m、短径1.63mの楕円形を呈する土壙の断面はⅢaのタイプで、皿状に立ち上がる。検出面での深さは23cmあり、底面の海拔高は187.70mである。

北西部に土壙129を切って別の小土壙を検出したが、これは長径54cm、短径46cmの小判形を呈している。

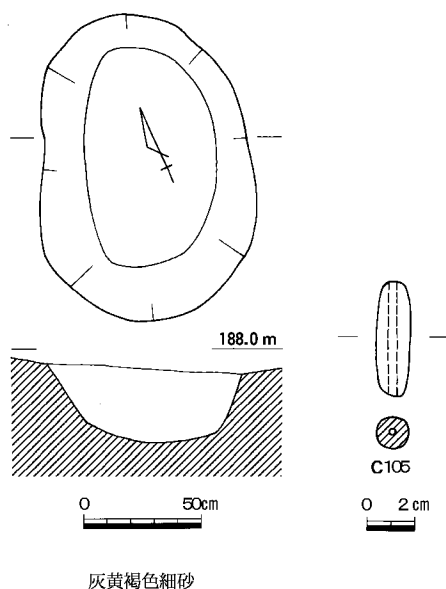
この土壙の内から土師器の小皿15枚1358~1372が、出土している。また小土壙の方からも土師器の杯8枚1373~1380、小皿6枚1381~1386が、また頁岩製の方形硯1点S613、釘3本M229~231が出土している。

この土壙の時期は、鎌倉から南北朝期にかけてと考えられる。

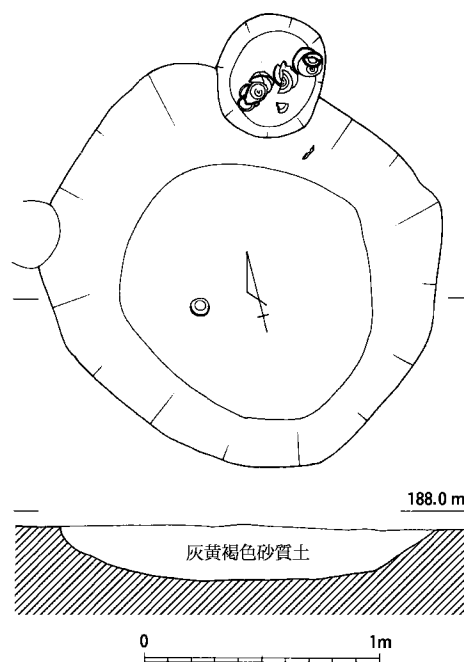
(伊藤)



第589図 土壙127 (1/30)



第590図 土壙128 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第591図 土壙129 (1/30)

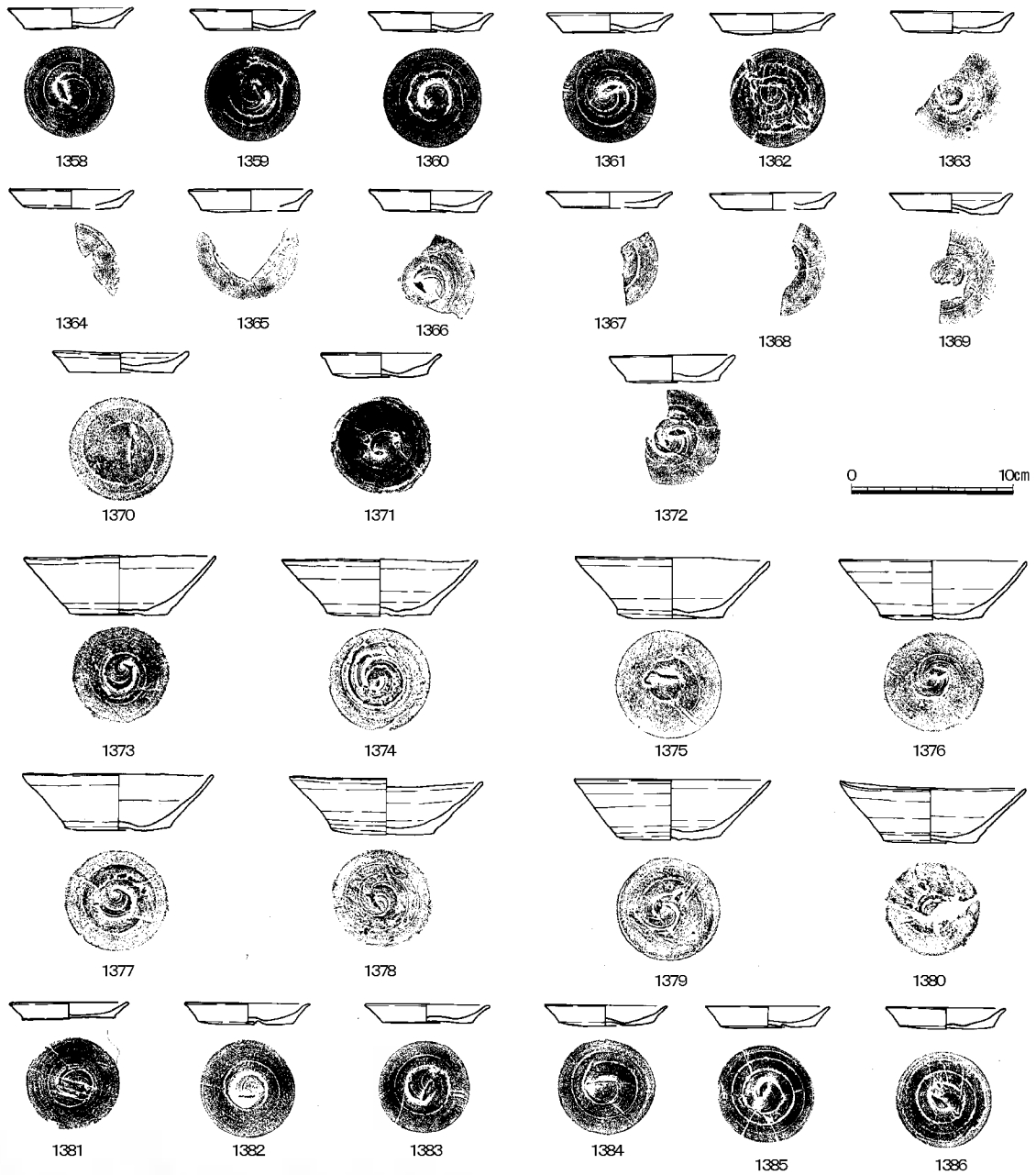
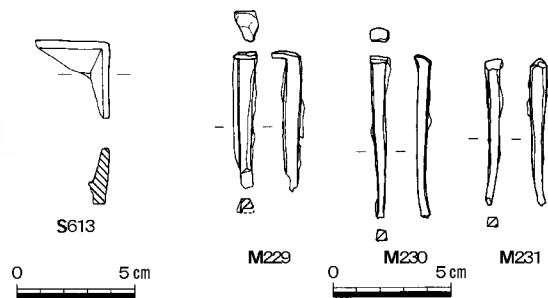


写真35 土壙129遺物出土状況



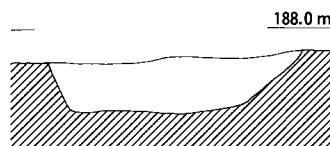
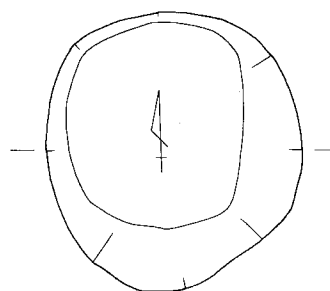
第592図 土壙129出土遺物 (1/4,1/3)

第3章 発掘調査の概要

土壌130 (第425・593図)

4 5 05Bj区に位置し、長径1.18m、短径1.08mの楕円形を呈する。土壌の断面はⅢaのタイプで、皿状に立ち上がる。検出面での深さは26cmあり、底面の海拔高は187.64mである。

土壌内からの出土遺物は見られないが、土壌の時期は中世であろう。(伊藤)



0 1m

黒褐色細砂 (木炭片を若干含む)

第593図 土壌130 (1/30)

土壌131 (第425・594図、図版121)

4 5 06Bj区に位置し、長辺1.14m、短辺91cmの隅丸方形を呈する。土壌の断面はⅢaのタイプで、皿状に立ち上がる。検出面での深さは32cmあり、底面の海拔高は187.68mである。

土壌内からは、土師器杯1387、土錘C106、釘M233、不明鉄板M232が出土している。この鉄板は、縦14.80cm、横10.9cm上方に抉りの入った長方形を呈し、厚さ0.66cm、重さ354.70gを測るものであるが、何に使用されたかは不明である。

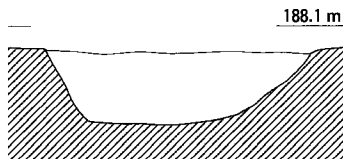
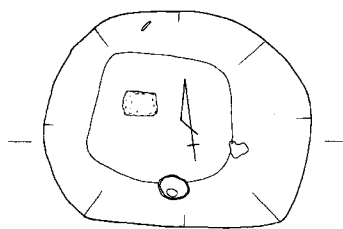
この土壌の時期は、1387からみて中世でも前半であろう。(伊藤)

土壌132 (第425・595図、図版136・148)

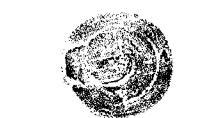
4 5 06Bj区に位置し、長辺の東側約半分ほどが削られており、短辺が1.07mの長方形を呈する。土壌の断面はⅢaのタイプで、皿状に立ち上がる。検出面での深さは28cmあり、底面の海拔高は187.72mである。

土壌内からは、土師器小皿2点1388・1389が出土している。

この土壌の時期は、中世であろう。(伊藤)



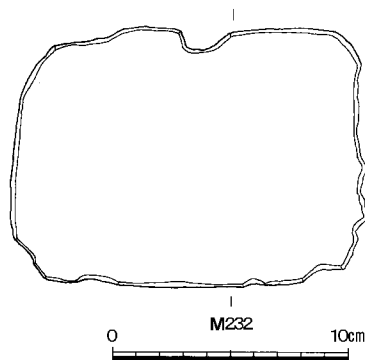
0 50cm



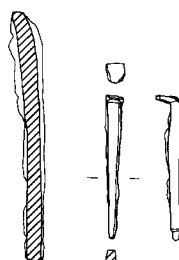
1387

0 10cm

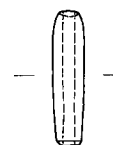
暗褐色細砂 (炭化物、Fe混)



0 10cm



M233



C106

0 2cm

第594図 土壌131 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

土壙133 (第425・596図)

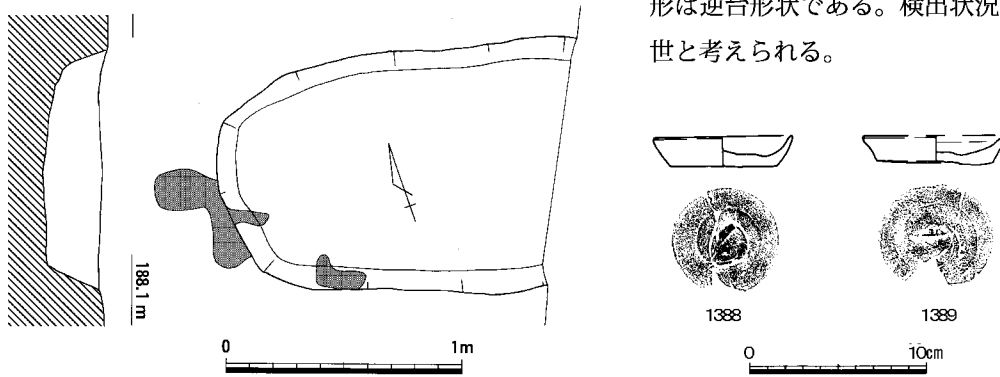
遺跡の中央部西寄りの4 1 06Bjに位置する。土壙132を切った状態で検出されている。

長さ1.75m、幅1.72mの円形土壙で、検出面からの深さは53cmを測る。壁体は比較的垂直近くに立ち上がっている。最下層には木炭が多く含む砂質土が堆積していたが、壁体や底部に被熱痕は認められなかった。(上榊)

土壙134 (第425・597図)

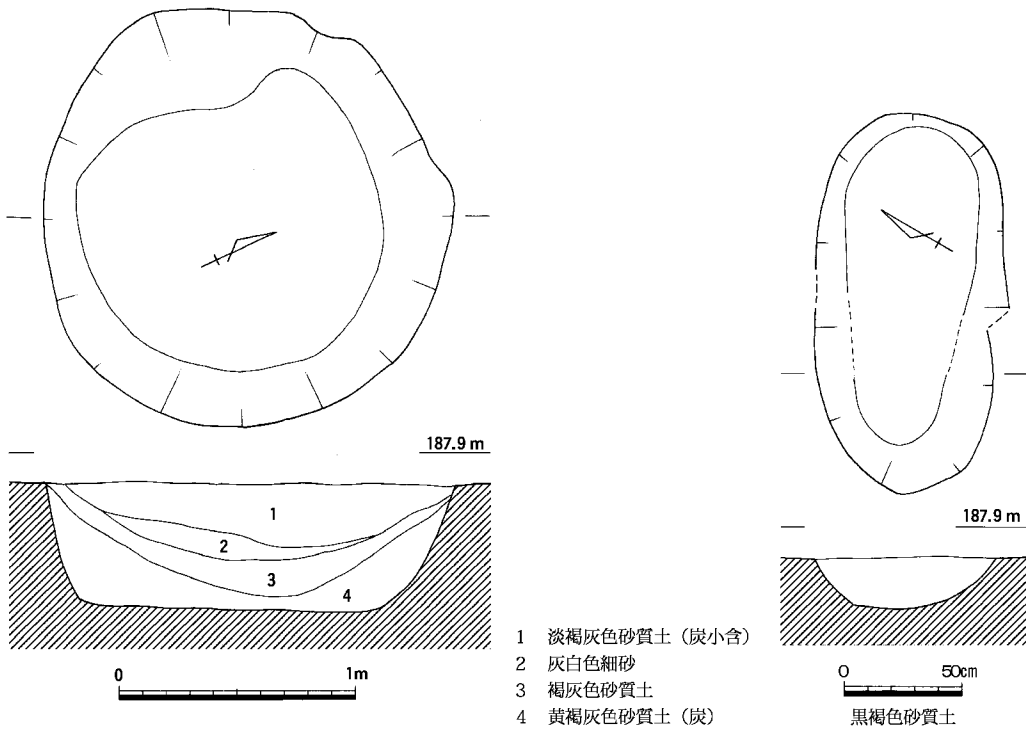
遺跡の中央部西寄りの4 1 07Bjに位置する。竪穴遺構1を切る状態で検出した。

長さ1.61m、幅85cmで、平面形は長楕円形状を呈する。検出面からの深さは22cmである。壁体は比較的緩やかに立ち上がっており、断面形は逆台形状である。検出状況から中世と考えられる。(上榊)



褐灰色粗砂～指頭大～拳大の礫及び木炭片を若干含む

第595図 土壙132 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第596図 土壙133 (1/30)

第597図 土壙134 (1/30)

第3章 発掘調査の概要

土壌135 (第422・598図)

遺跡の中央部西寄りの4 1 00Cbに位置する。掘立柱建物19の内側に位置しており、堀1の埋土に掘り込んでいた。長さ1.2m、幅95cmを測り、平面形は楕円形状を呈していた。土壌の上面では礫が多く出土している。遺物としては土師器の小皿や土錘が出土している。(上柙)

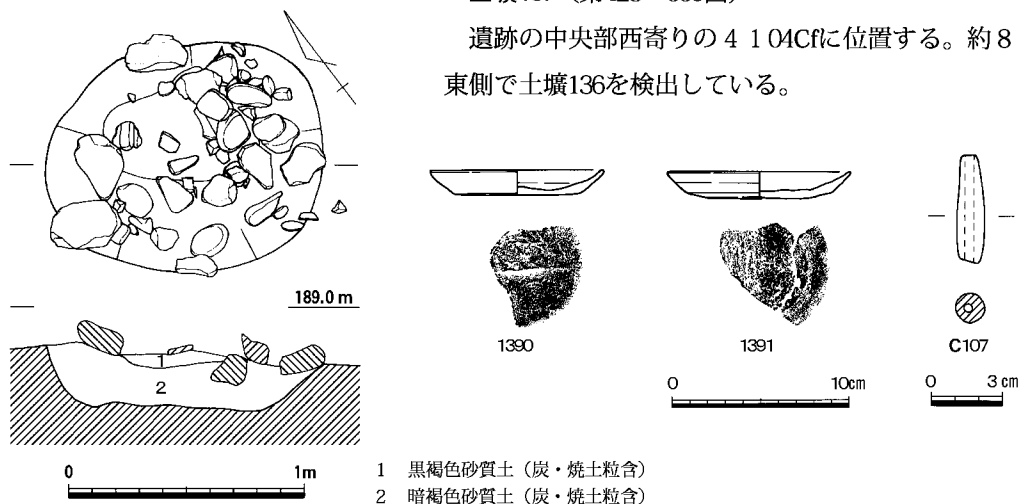
土壌136 (第423・599図、121・136)

遺跡の中央部西寄りの4 1 03Cfに位置する。堀3が途切れて陸橋状を呈する部分で検出した。

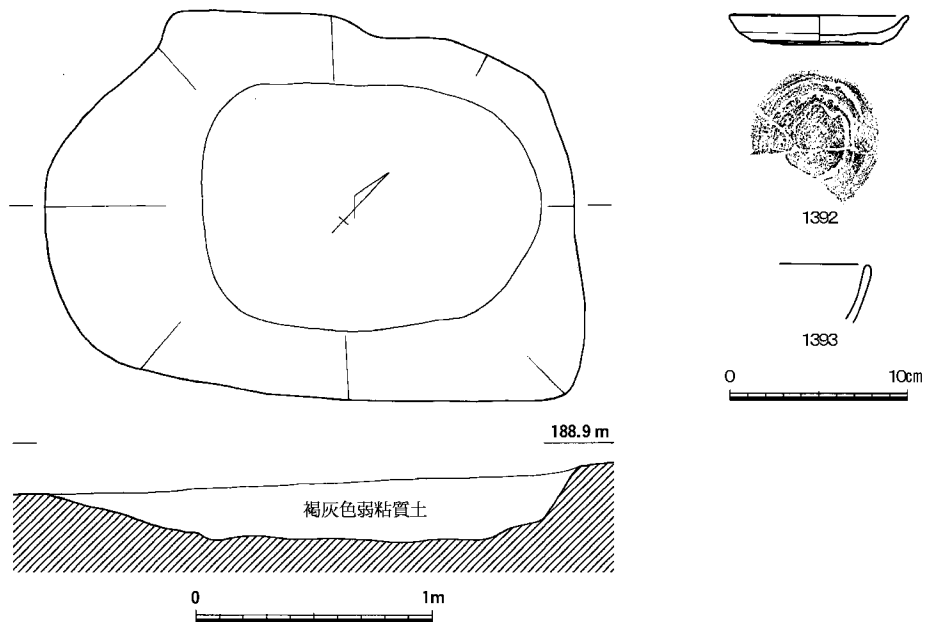
長さ2.25m、幅1.63mの長方形土壌で、検出面からの深さは22cmを測る。遺物としては土師器小皿1392、青磁碗1393が出土しており、中世に比定することができる。(上柙)

土壌137 (第423・600図)

遺跡の中央部西寄りの4 1 04Cfに位置する。約8m北東側で土壌136を検出している。

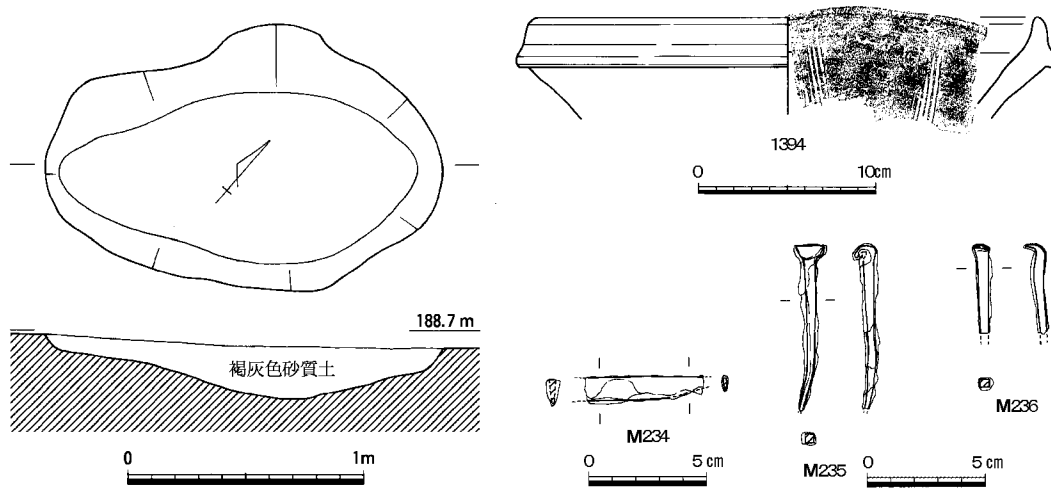


第598図 土壌135 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)



第599図 土壌136 (1/30)・出土遺物 (1/4)

長さ1.7m、幅1.1mの不整楕円形土壇で、検出面からの深さは23cmを測る。遺物としては備前焼の播鉢1394、鉄刀子、鉄釘が出土しており、15世紀中頃に比定できる。(上柵)



第600図 土壇137 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

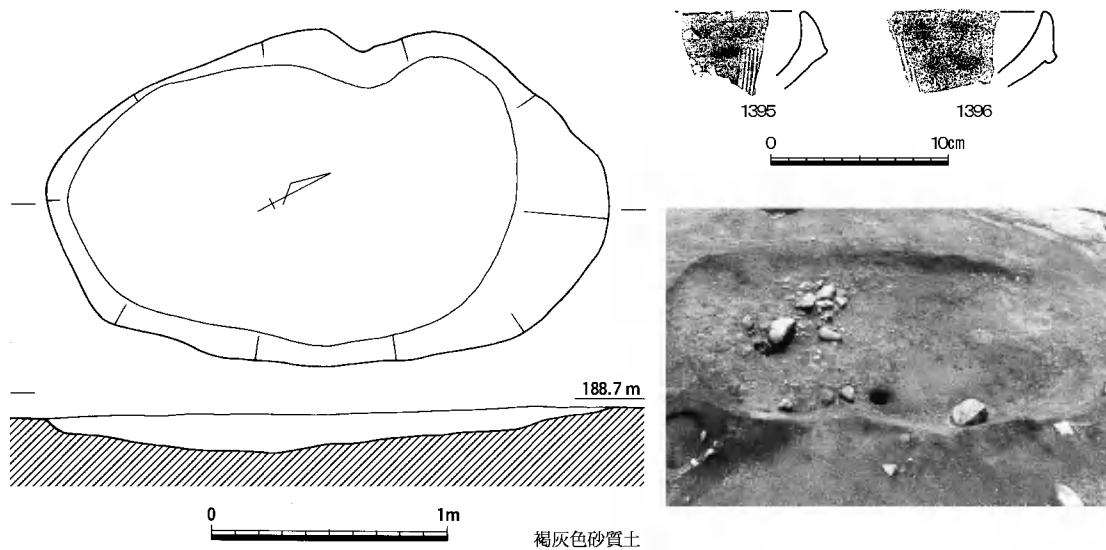
土壇138 (第423・601図、写真36)

遺跡の中央部西寄りの4 1 04Cfに位置する。堀3が途切れて陸橋状を呈する部分で検出した。長さ2.4m、幅1.4mの不整楕円形土壇で、検出面からの深さは17cmを測る。遺物としては備前焼の播鉢1395、1396が出土しており、15世紀中頃に比定できる。(上柵)

土壇139 (第425・602図)

遺跡の中央部西端側の4 1 07Bjに位置する。掘立柱建物32が西側に隣接して検出された。

長さ90cm、幅85cmの円形土壇で、検出面からの深さは48cmを測る。遺物としては土師器杯1397が出土している。時期は中世に比定できる。(上柵)



第601図 土壇138 (1/30)・出土遺物 (1/4)

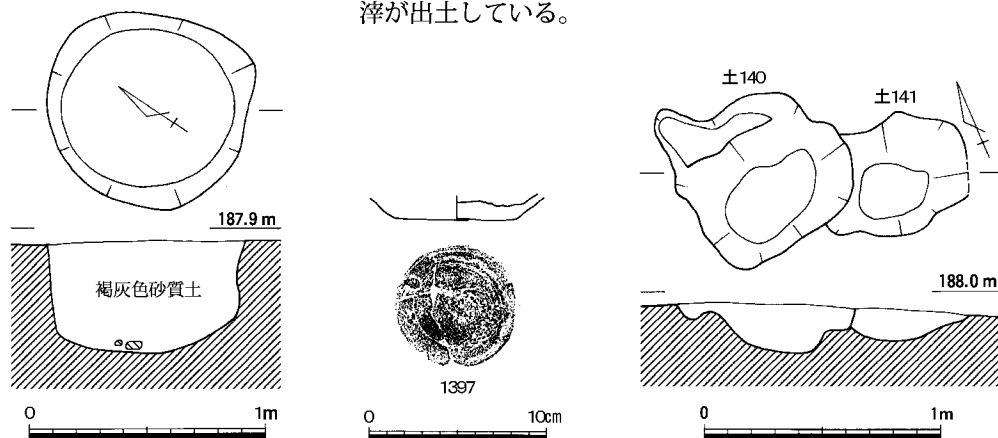
写真36 土壇138 (西から)



第3章 発掘調査の概要

土壌140・141 (第425・603図)

遺跡の中央西端側の4 1 07Caに位置する。西側7mでは竪穴遺構1を検出している。土壌140が141を切った状態で検出している。ともに平面は不整形であり、断面も凹凸が著しい。埋土中には鍛造剥片を多く含み、上面には鉄滓が固着していた。また、周辺でも鉄滓が出土している。 (上柵)



褐灰色砂質土 (鍛造剥片多含・木炭片・鉄滓含)

第602図 土壌139 (1/30)・出土遺物 (1/4)

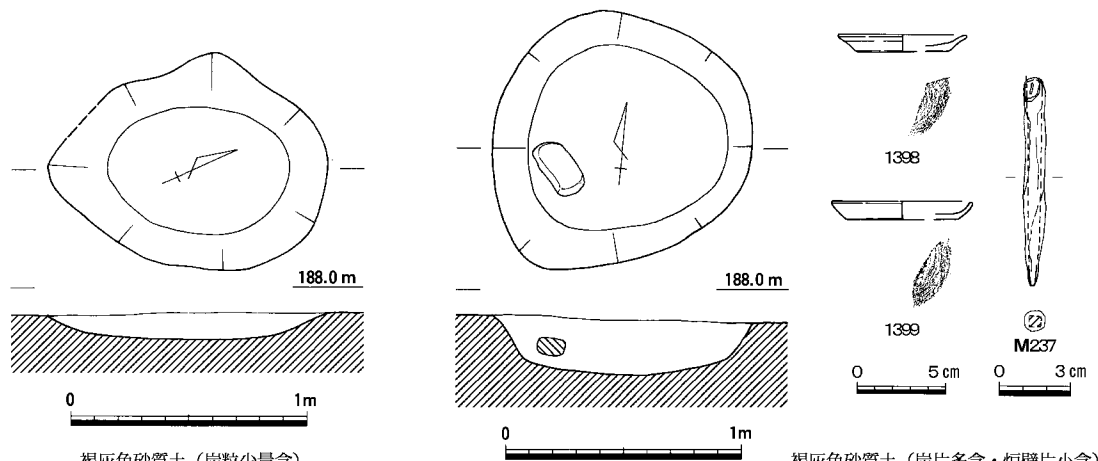
第603図 土壌140・141 (1/30)

土壌142 (第425・604図)

遺跡の中央部西端側の4 1 07Caに位置する。重なる位置関係で掘立柱建物35、36が検出されている。長さ1.2m、幅90cmの楕円形土壌である。検出面からの深さは11cmを測り、壁体は緩やかに立ち上がっていた。埋土の状況などから中世と考えている。 (上柵)

土壌143 (第425・605図)

遺跡の中央部西端側の4 1 08Caに位置する。重なる位置関係で掘立柱建物35が検出されている。直径1.1mの不整形土壌で、検出面からの深さは23cmを測る。埋土中から土師器小皿1398・1399、鉄釘M237が出土しており、中世に比定できる。 (上柵)



第604図 土壌142 (1/30)

第605図 土壌143 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)

土壌144 (第424・606図)

4 0 04Da区に位置し、長径1.4m、短径1.02mの楕円形を呈する。土壌の断面はⅢaのタイプで、皿状に立ち上がる。検出面での深さは33cmあり、底面の海拔高は189.14mである。

土壌内から釘M238が出土している。

(伊藤)

土壌145 (第424・607図)

4 0 05Ci区に位置し、長径83cm、短径79cmのほぼ円形を呈する。土壌の断面はⅢaのタイプで、皿状に立ち上がる。検出面での深さは11cmあり、底面の海拔高は189.2mである。

土壌中央付近において漆椀の朱の皮膜部分のみ検出したが図化はできていない。

(伊藤)

土壌146 (第424・608図、図版136)

4 0 05Cj区に位置し、長径1.59m、短径1.15mの長楕円形を呈する。土壌の断面はⅢaのタイプで、皿状に立ち上がる。検出面での深さは14cmあり、底面の海拔高は189.1mである。

土壌内から土師器小皿1400、備前焼ⅢB期の挿鉢口縁部片1401、無文青磁碗1402、釘M239などが出土している。

(伊藤)

土壌147 (第424・609図)

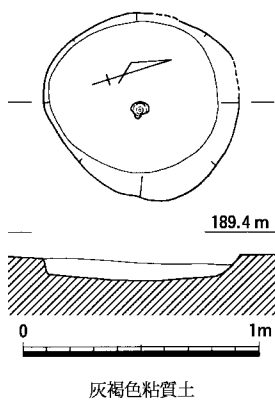
4 0 05Ci区に位置し、長径86cm、短径82cmの円形を呈する。土壌の断面はⅢbのタイプである。検出面での深さは41cmあり、底面の海拔高は189.56mである。

土壌内から鏝M240・241、貴金具の破片M242が出土している。

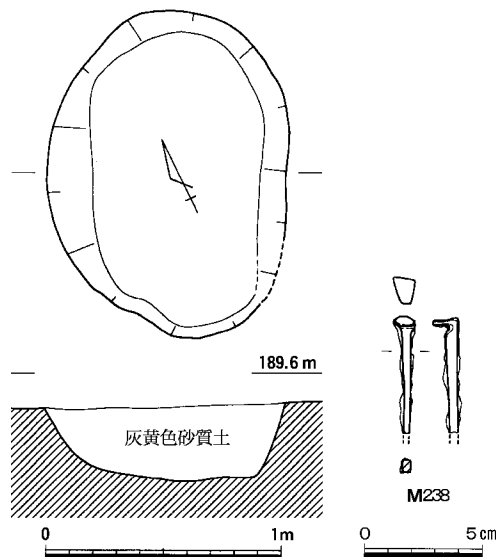
(伊藤)

土壌148 (第424・610図、写真37)

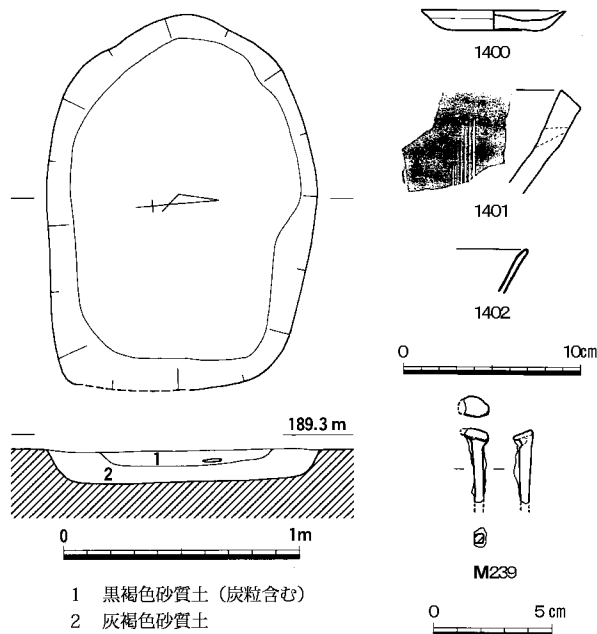
4 0 07Ci区に位置し、長径1.32m、短径



第607図 土壌145 (1/30)



第606図 土壌144 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第608図 土壌146 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

第3章 発掘調査の概要

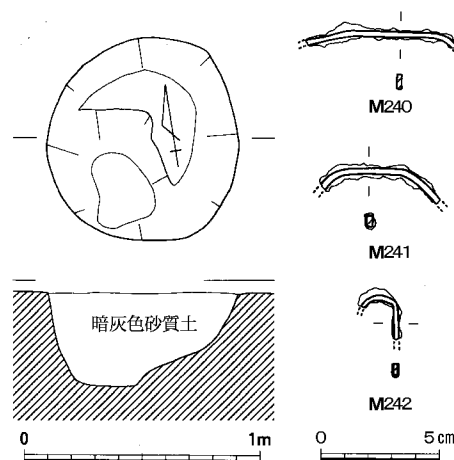
1.13mの楕円形を呈する。土壌の断面はⅢaのタイプで、皿状に立ち上がる。検出面での深さは78cmあり、底面の海拔高は188.32mである。

土壌内からは、土師器皿1403と漆碗底部の裏面に、黒漆上に赤漆で「吉」と書かれた皮膜断片が出土している(写真37)。(伊藤)

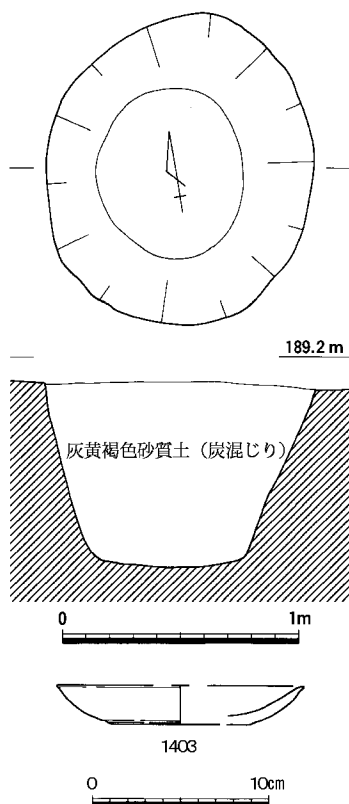
土壌149 (第424・611図)

4 0 07Ci区に位置し、長径1.18m、短径1.17mの楕円形を呈する。土壌の断面はⅢaのタイプで、皿状に立ち上がる。検出面での深さは72cmあり、底面の海拔高は188.4mである。

土壌内からは、無文の青磁碗小片1404が1点のみ出土しており、土壌の時期は中世の範疇にあるといえよう。(伊藤)



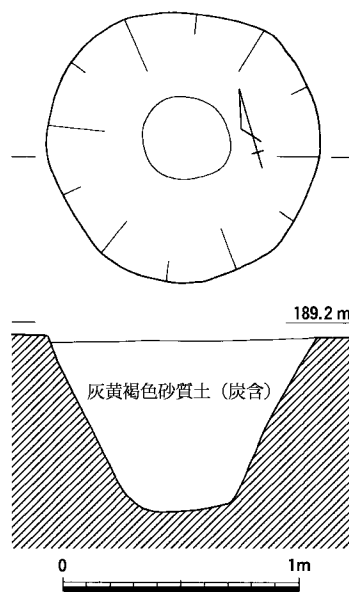
第609図 土壌147 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第610図 土壌148 (1/30)・出土遺物 (1/4)



写真37 漆膜「吉」字



第611図 土壌149 (1/30)・出土遺物 (1/4)

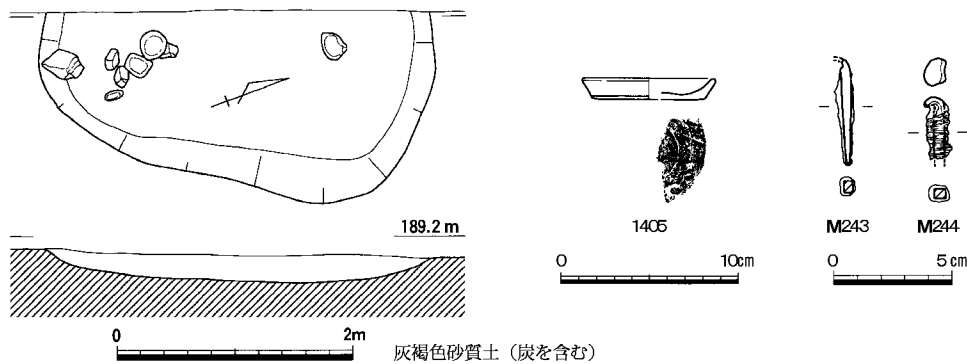
土壌150 (第424・612図、図版136)

4 0 08Ci区に位置し、西側約半分が検出できていないが、長径3.34mの楕円形を呈する。検出面での深さは24cmあり、底面の海拔高は189mである。

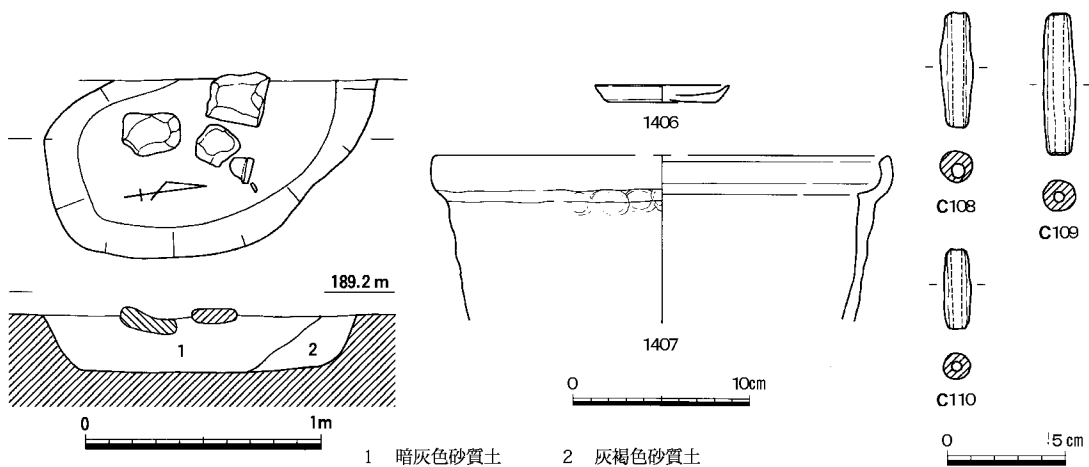
土壌内から土師器小皿1405、釘2本M243・244が出土している。(伊藤)

土壌151 (第424・613図)

4 0 08Dc区に位置し、西側約1/4が検出できていないが、長径1.47m、短径80cm程の楕円形を呈する。検出面の高さで30~20cmの石が3個みられる。検出面での深さは24cmあり、底面の海拔高は188.76mである。土師器小皿1406、瓦質鍋1407、土錘3個C108~110が出土している。(伊藤)



第612図 土壌150 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)



第613図 土壌151 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

土壌152 (第424・614図)

4 0 08Dc区に位置し、長径1.02m、短径92cmの楕円形を呈する。検出面での深さは19cmあり、底面の海拔高は188.84mである。

土壌内から釘2本M245・246が出土している。(伊藤)

土壌153 (第424・615図)

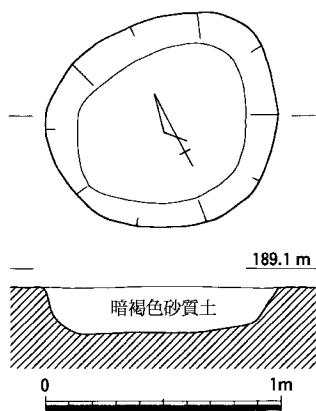
4 0 08Dj区に位置し、長径65cm、短径60cmの円形を呈する。検出面での深さは16cmあり、底面の海

第3章 発掘調査の概要

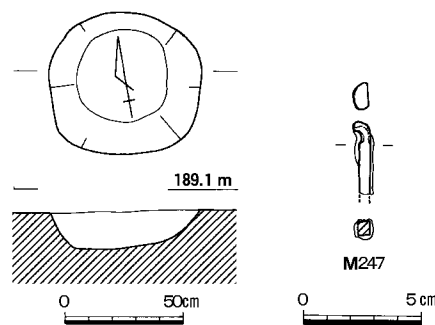
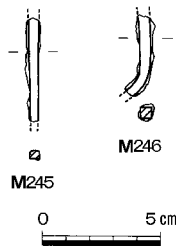
抜高は188.85mである。

土壌内から釘M247が出土している。

(伊藤)



第614図 土壌152 (1/30)・出土遺物 (1/3)



暗褐色砂質土 (炭粒、焼土粒を含む)

第615図 土壌153 (1/30)

・出土遺物 (1/3)

土壌154 (第424・616図)

4 0 09Di区に位置し、長径84cm、短径74cmの楕円形を呈する。検出面での深さは42cmあり、底面の海拔高は188.73mである。

土壌内から土師器皿1408が出土している。

(伊藤)

土壌155 (第424・426・617図)

4 0 09Di区に位置し、長径78cm、短径74cmの円形を呈する。検出面での深さは36cmあり、底面の海拔高は188.88mである。

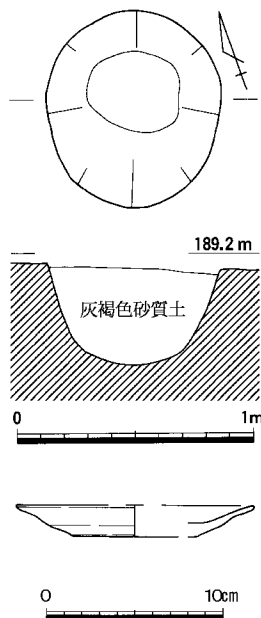
土壌内から勝間田焼椀底部1409、土師器小皿1410が出土している。

(伊藤)

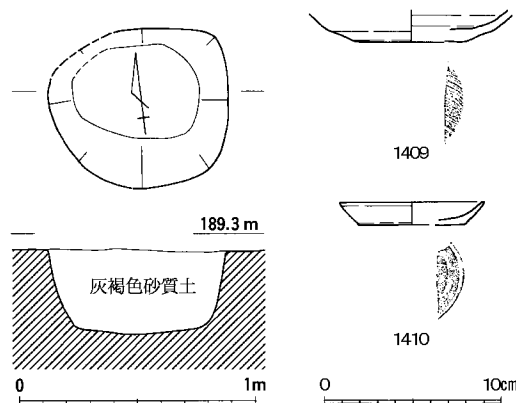
土壌156 (第424・618図)

4 0 08Da区に位置し、長径1.6m、短径1.3mの不整楕円形を呈する。検出面での深さは33cmあり、底面の海拔高は188.76 mである。

土壌内からは、釘M248が出土している。土壌の時期は、中



第616図 土壌154 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第617図 土壌155 (1/30)・出土遺物 (1/4)

世と考えている。

(伊藤)

土壌157 (第424・426・619図)

4 1 00Ch区に位置し、西側半分が調査できていないが、長径2.61mで楕円形を呈する。検出面での深さは43cmあり、底面の海拔高は188.70mである。

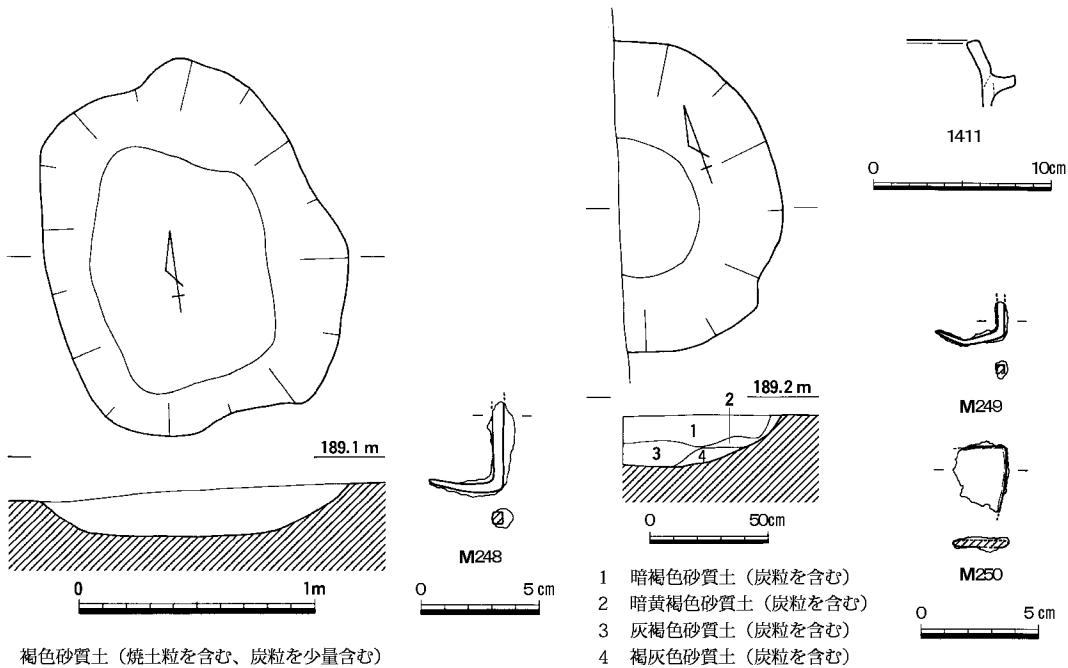
土壌内から瓦質羽釜1411、釘M249、不明鉄片M250が出土している。

(伊藤)

土壌158 (第426・620図)

4 1 01Ch区に位置し、長径2.36m、短径2.2mで円形を呈する。検出面での深さは29cmあり、底面の海拔高は188.73mである。土壌内から瓦質鍋1412、大形の釘M251、釘M252が出土しており、中世の土壌と考えている。

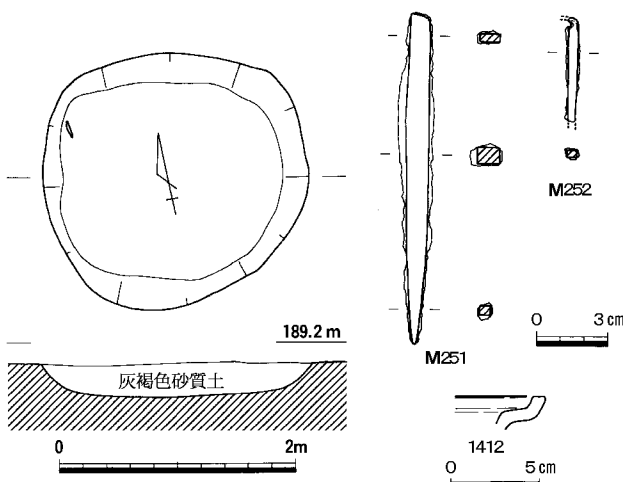
(伊藤)



褐色砂質土 (焼土粒を含む、炭粒を少量含む)

第618図 土壌156(1/30)・出土遺物(1/3)

第619図 土壌157(1/30)・出土遺物(1/4,1/3)



第621図 土壌158 (1/60)・出土遺物 (1/3,1/4)

土壌159 (第426・427・621図)

4 1 01Cj区にあり、規模は、長径が2.46 m、短径は2.2mを測る。平面形は、やや歪な円形を呈している。検出面での深さは44cm程あり、底面の海拔高は188.45mである。

土壌内からは、土師器皿1413、土師器小皿1414、釘3本M253~255が出土している。土壌の時期は、15世紀後半以降の年代を考えている。

(伊藤)

土壌160 (第426・622図)

4 1 01Cj区に位置する規模が長径90cm、

第3章 発掘調査の概要

短径67cmを測り、楕円形を呈する土坑である。検出面での深さは30cmあり、底面の海拔高は188.70mである。

土坑内からは、釘M256が出土している。 (伊藤)

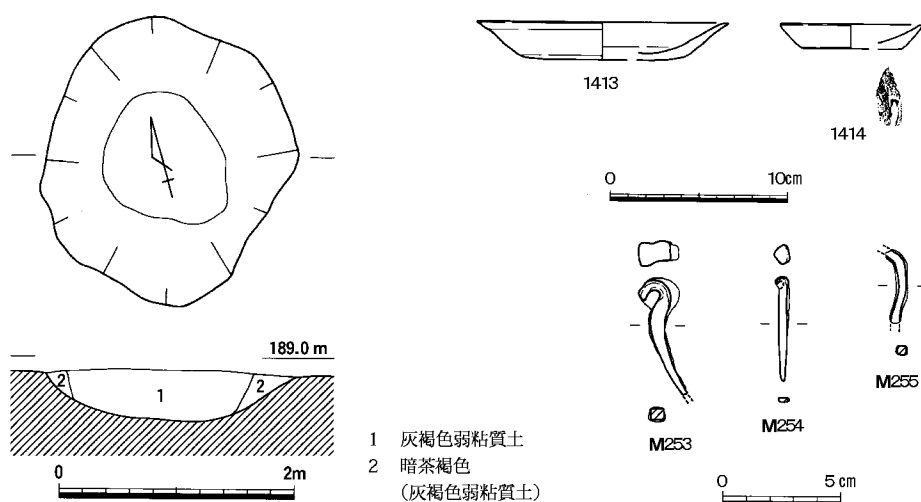
土坑161 (第426・623図)

4 1 02Ch区に位置し、長径2.88m、短径2.62mの不整形円形を呈する。検出面での深さは80cmあり、底面の海拔高は188.13mである。

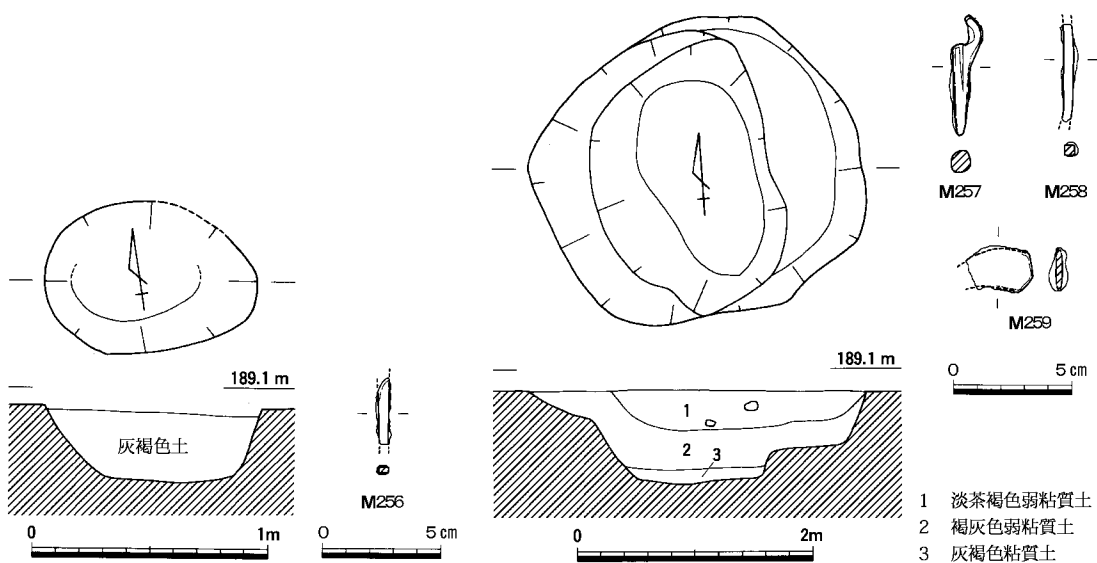
土坑内から釘2本M257・258、不明鉄片M259が出土している。 (伊藤)

土坑162 (第426・624図)

4 1 02Ci区に位置し、長径1.75m、短径1.48mの円形を呈する。検出面での深さは21cmあり、底面の海拔高は188.54mである。



第621図 土坑159 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)



第622図 土坑160 (1/30)・出土遺物 (1/3)

第623図 土坑161 (1/60)・出土遺物 (1/3)

土壙内から土錘C111が出土している。 (伊藤)

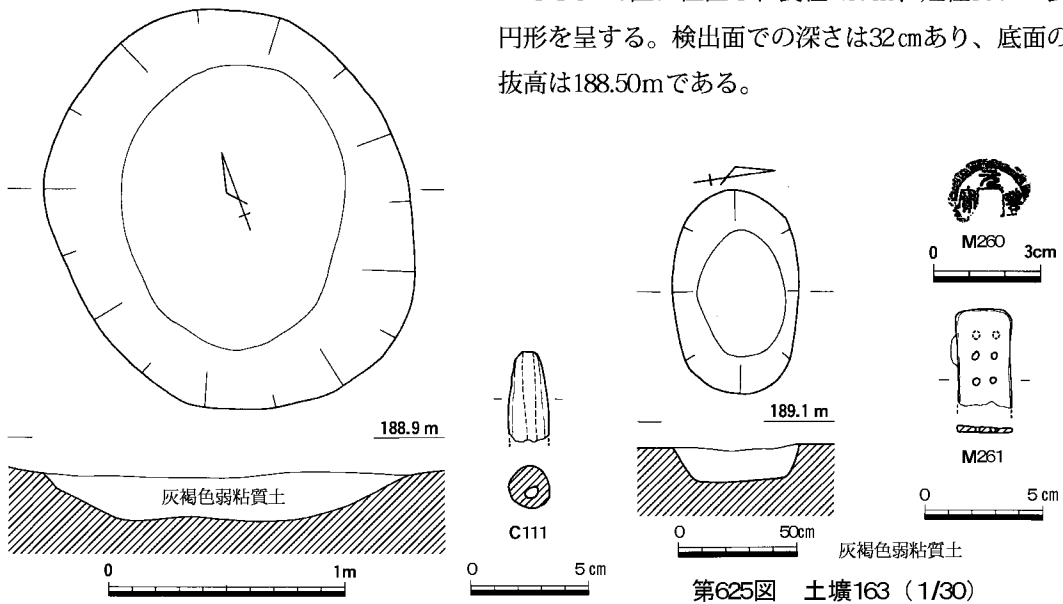
土壙163 (第426・427・625図、図版150)

4 1 02Da区に位置し、長径86cm、短径54cmの小判形を呈する。検出面での深さは13cmあり、底面の海拔高は188.85mである。

土壙内から元豊通寶(初鑄1078年)M260、小札状鉄片M261が出土している。 (伊藤)

土壙164 (第426・427・626図)

4 1 01Da区に位置し、長径1.97m、短径93cmの長楕円形を呈する。検出面での深さは32cmあり、底面の海拔高は188.50mである。



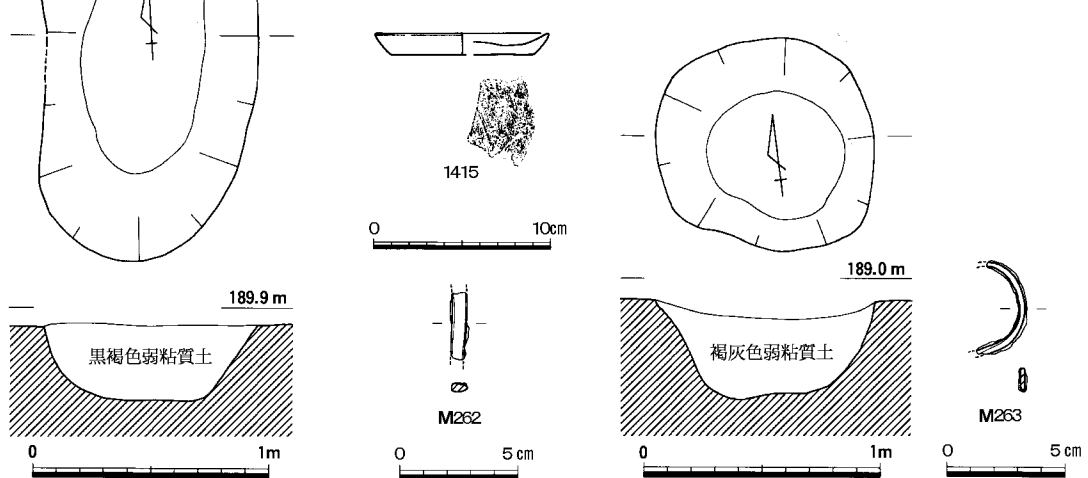
第624図 土壙162 (1/30)・出土遺物 (1/3)

第625図 土壙163 (1/30)  
・出土遺物 (1/2,1/3)

土壙内からは、土師器の小皿1415、鉄釘M262が出土している。時期は、中世の範疇にある。 (伊藤)

土壙165 (第426・427・627図)

4 1 01Db区に位置し、長径93cm、短径90cmの不整円形を呈する。



第626図 土壙164 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

第627図 土壙165 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第3章 発掘調査の概要

検出面での深さは41cmあり、底面の海拔高は188.49mである。

土壌内から直径4cm程の環状になる鉄器M263が出土している。

(伊藤)

土壌166 (第426・427・628図)

4 1 02Da区に位置し、長径81cm、短径75cmの不整円形を呈する。検出面での深さは91cmある。2段掘りになり、中央が深く柱穴の可能性が強い。底面の海拔高は187.96mである。

土壌内から瓦質鍋1416、備前焼播鉢底部1417、釘3本M264~266が出土している。

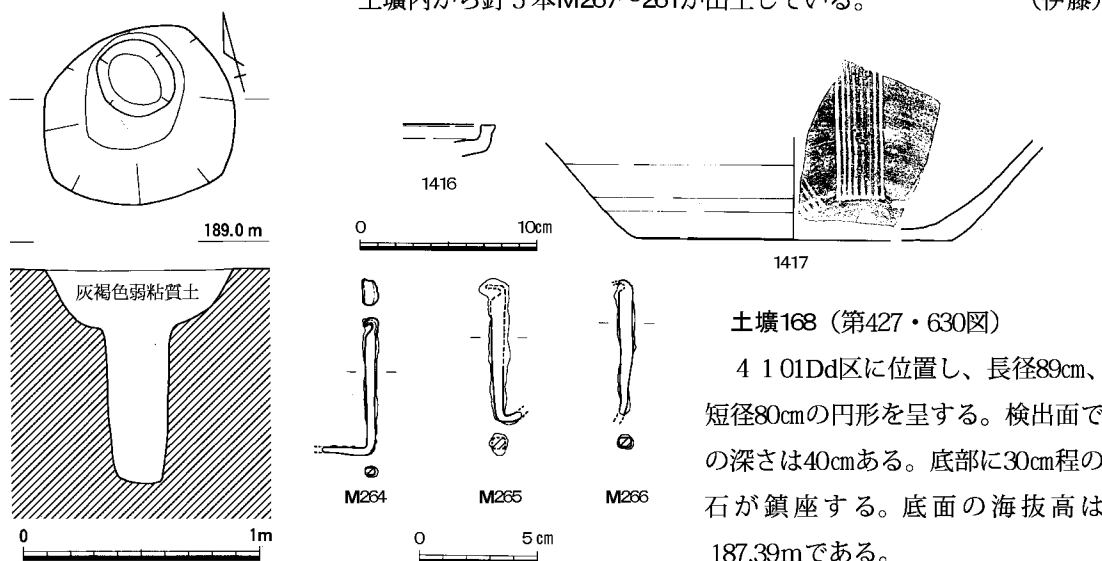
(伊藤)

土壌167 (第426・629図)

4 1 01Dd区に位置し、直径1.32mの円形を呈する。検出面での深さは40cmあり、底面の海拔高は188.31mである。

土壌内から釘5本M267~261が出土している。

(伊藤)



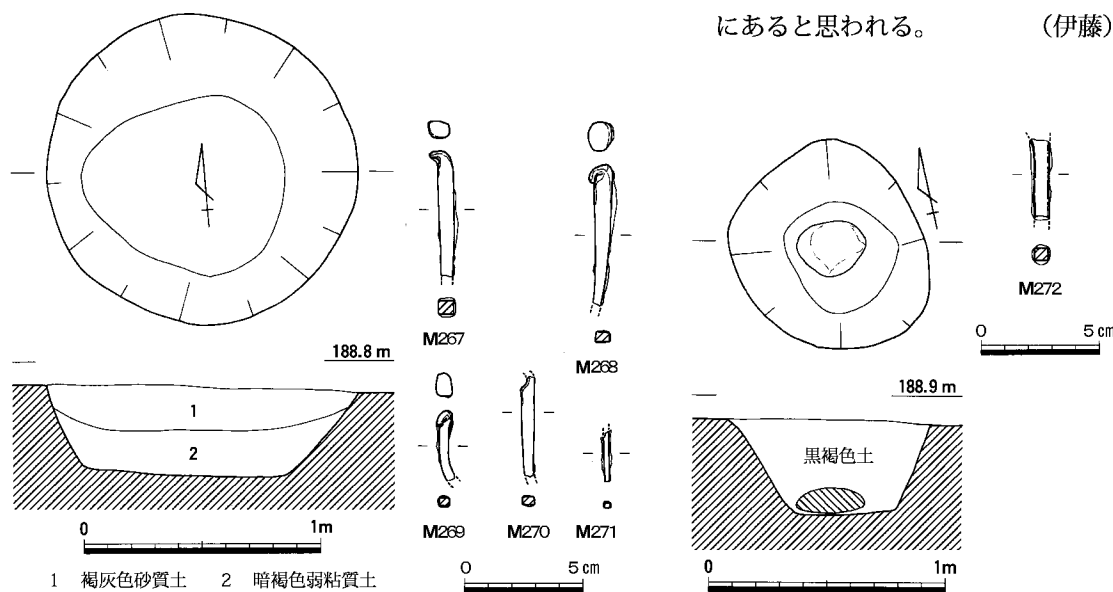
第628図 土壌166 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

土壌168 (第427・630図)

4 1 01Dd区に位置し、長径89cm、短径80cmの円形を呈する。検出面での深さは40cmある。底部に30cm程の石が鎮座する。底面の海拔高は187.39mである。

土壌内から釘M272が出土している。この土壌の時期は、中世の範疇にあると思われる。

(伊藤)

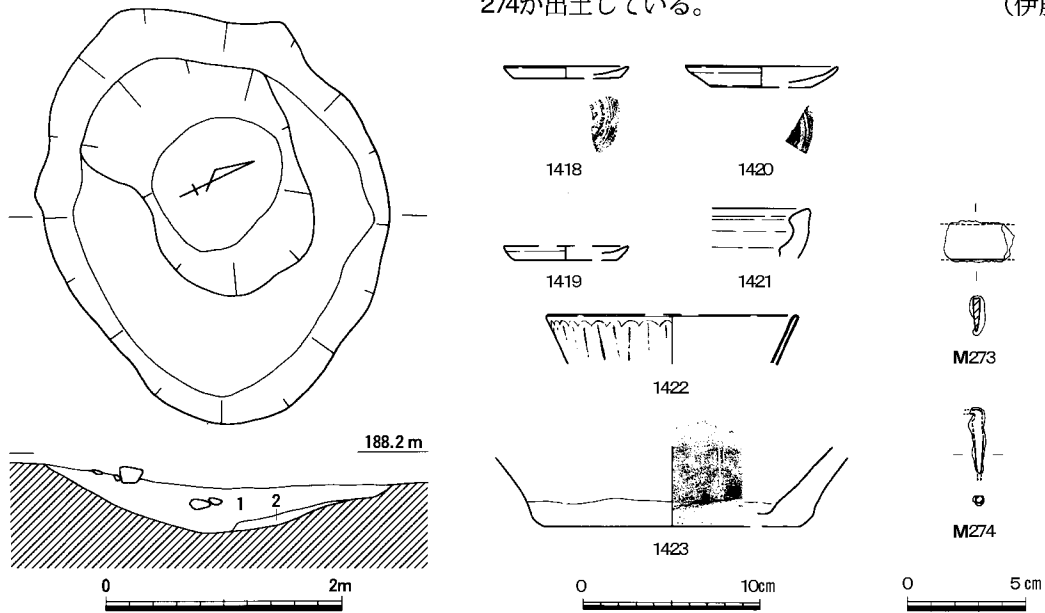


第629図 土壌167 (1/30)・出土遺物 (1/3)

第630図 土壌168 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壌169 (第427・631図)

4 1 02Dd区に位置し、長径3.64m、短径2.90mの不整楕円形を呈する。検出面での深さは42cmあり、底面の海拔高は187.50mである。土壌内から土師器小皿3枚1418~1420、瓦質鍋1421、細線文青磁碗1422、備前焼播鉢底部1423、刀子刀身部片M273、釘M274が出土している。(伊藤)



1 灰褐色弱粘質土 (遺物包含層) 2 暗燈褐色弱粘質土

第631図 土壌169 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)

土壌170 (第427・632図、図版149)

4 1 04Dc区に位置し、長径94cm、短径90cmの楕円形を呈する。検出面での深さは30cmあり、底面の海拔高は188.26mである。中央北側に柱穴状の穴がある。

土壌内からリング状の責金具M275、釘2本M276・277が出土している。(伊藤)

土壌171 (第427・633図)

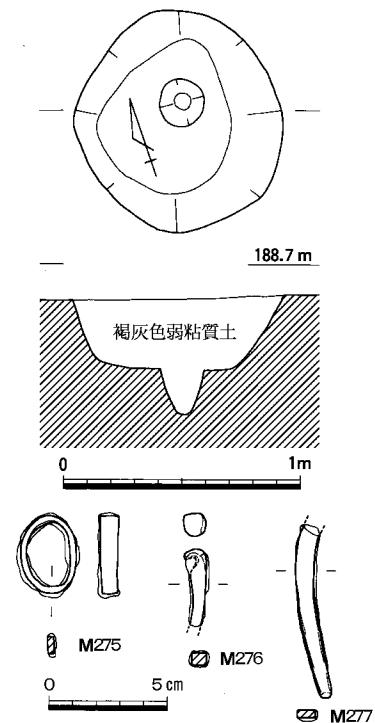
4 1 04Dc区に位置し、長径74cm、短径58cmの楕円形を呈する。検出面での深さは75cmあり、底面の海拔高は187.74mである。

土壌内から釘M278が出土している。(伊藤)

土壌172 (第427・634図)

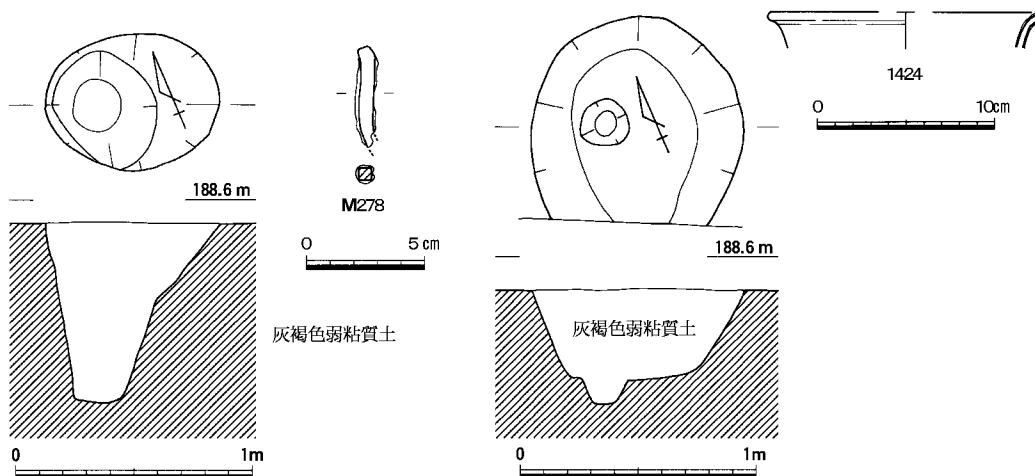
4 1 04Dc区に位置し、南側1/4が調査できていないが、短径91cmで楕円形を呈する。検出面での深さは48cmあり、底面の海拔高は187.97mである。

土壌内から無文青磁碗1424が出土しており、時期は中世と思われる。(伊藤)



第632図 土壌170 (1/30)  
・出土遺物 (1/3)

第3章 発掘調査の概要



第633図 土壙171 (1/30)・出土遺物 (1/3)

第634図 土壙172 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙173・174 (第431・432・635図)

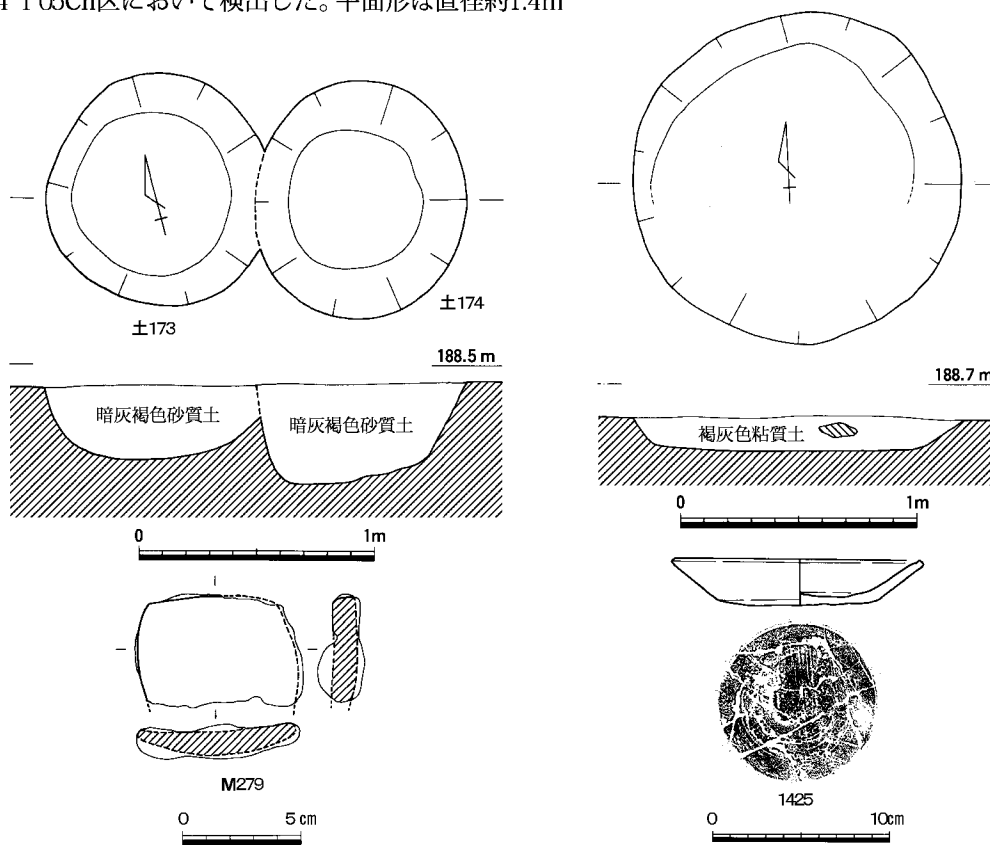
4 1 05Cj区において検出した。いずれも直径約1mの円形を呈し、埋土は暗灰褐色砂質土が一層のみであった。M279は不明鉄器で、土壙173から出土している。

時期は明確ではないが、検出面や埋土の状況などから中世と考えている。

(平井)

土壙175 (第430・636図)

4 1 05Ch区において検出した。平面形は直径約1.4m



第635図 土壙173・174出土遺物 (1/3)

第636図 土壙175 (1/30)・出土遺物 (1/3)

の円形で、深さは15cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は褐灰色粘質土が一層のみであった。埋土中から土師器の皿が出土しており、時期は中世と考えている。(平井)

土壌176 (第430・637・638図)

4 1 06Cj区に位置する。南端部が新しい遺構で切られているが、推定長辺7.2m、短辺5 m、深さ70 cmの不整長楕円形を呈する。断面形は皿形で、埋土は褐灰色弱粘質土が一層のみであった。また、中央部西寄りからは20cm前後の礫がまとまって出土したが、人為的に組まれているとは判断できなかった。遺物は備前焼や瀬戸焼、鉄釘、不明鉄器が出土しており、時期は中世である。(平井)

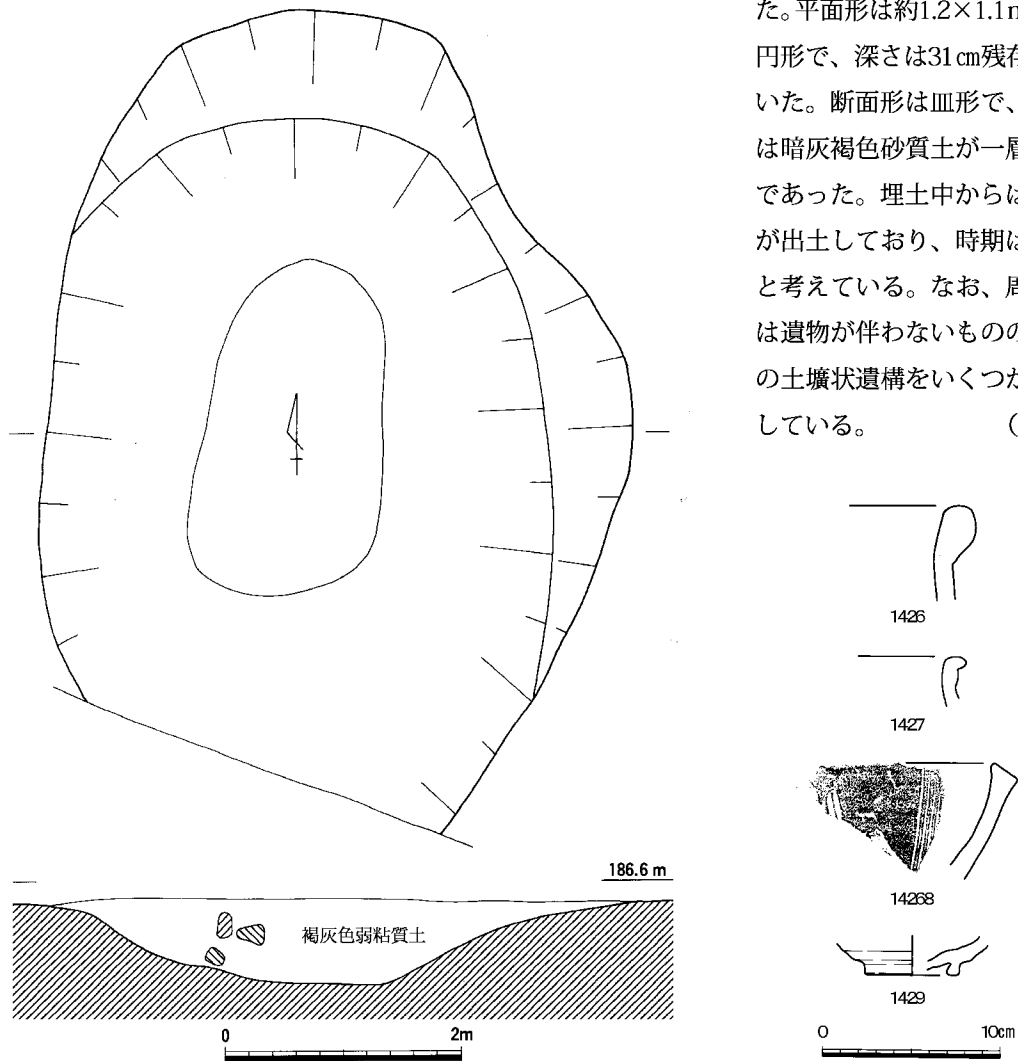
土壌177 (第430・639図)

4 1 09Da区において検出した。平面形は直径約1 mの円形で、深さは45cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は暗灰褐色砂質土が一層のみであった。

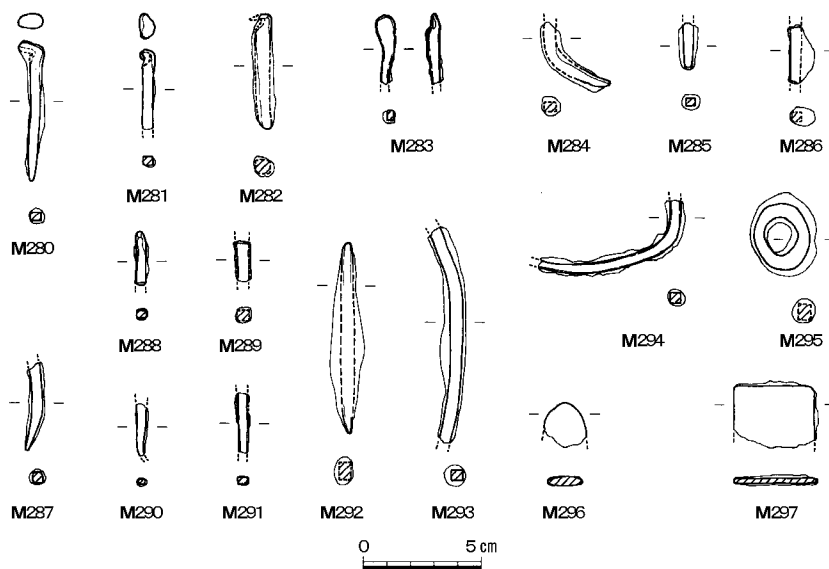
埋土中からは鉄釘が出土しており、時期は中世と考えている。(平井)

土壌178 (第430・640図)

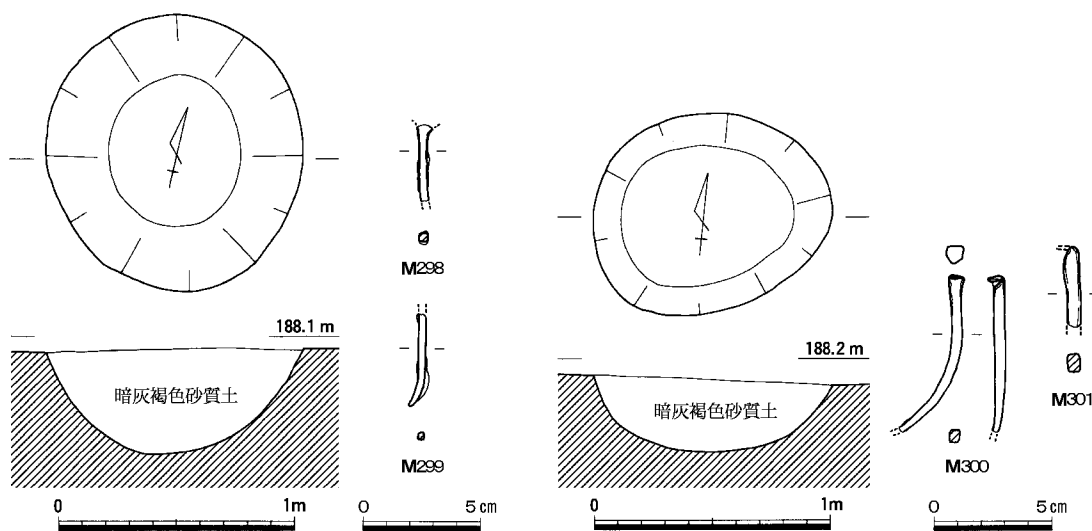
4 1 09Cj区において検出した。平面形は約1.2×1.1mの楕円形で、深さは31cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は暗灰褐色砂質土が一層のみであった。埋土中からは鉄釘が出土しており、時期は中世と考えている。なお、周辺では遺物が伴わないものの類似の土壌状遺構をいくつか検出している。(平井)



第637図 土壌176 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第638図 土壌176出土遺物 (1/3)



第639図 土壌177 (1/30)・出土遺物 (1/3)

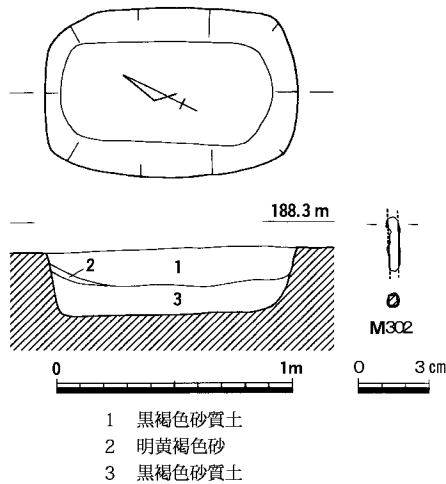
第640図 土壌178 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壌179 (第428・641図)

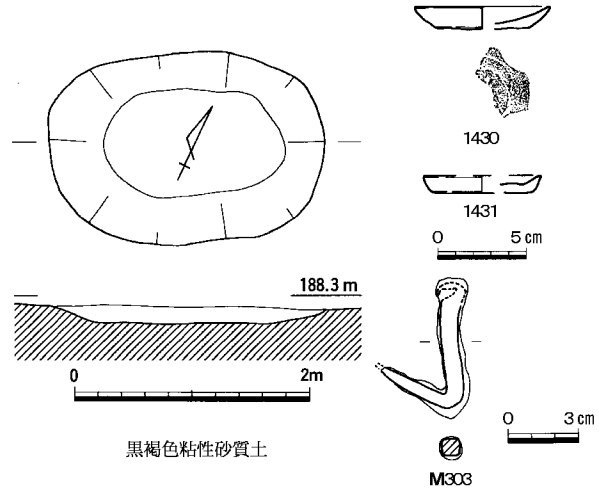
4 1 06De区から検出された小規模な土壌で、東側に近接して掘立柱建物48が存在している。平面形は長径107cm、短径72cmの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは27cmになっていた。底面は南東側から北西側に向かって緩やかに傾斜し、土壌内から折れた釘M302が出土した。(福田)

土壌180 (第428・642図、図版136)

4 1 06Df区から検出された土壌で、西側には掘立柱建物48の目隠し塀と推定される柱穴列1が存在している。平面形は長径2.36m、短径1.62mの楕円形に近い形態を呈し、検出面から底面までの深さは15cmで、断面形はⅢaである。底面にはわずかに凹凸が認められ、内部に黒褐色粘性砂質土が堆積していた。土壌から出土した遺物として、土師器の小皿1430・1431と釘M303がある。(福田)



第641図 土壙179(1/30)・出土遺物(1/3)



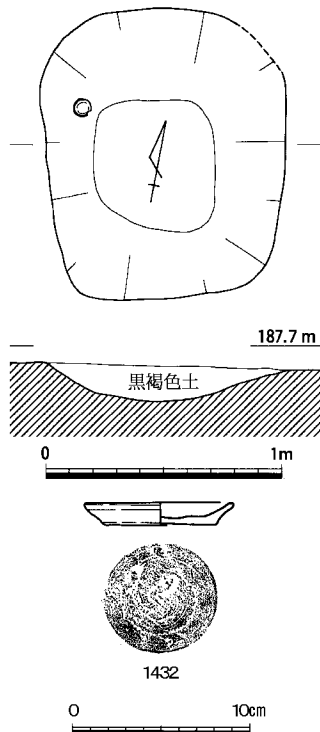
第642図 土壙180(1/60)・出土遺物(1/4,1/3)

土壙181(第428・643図)

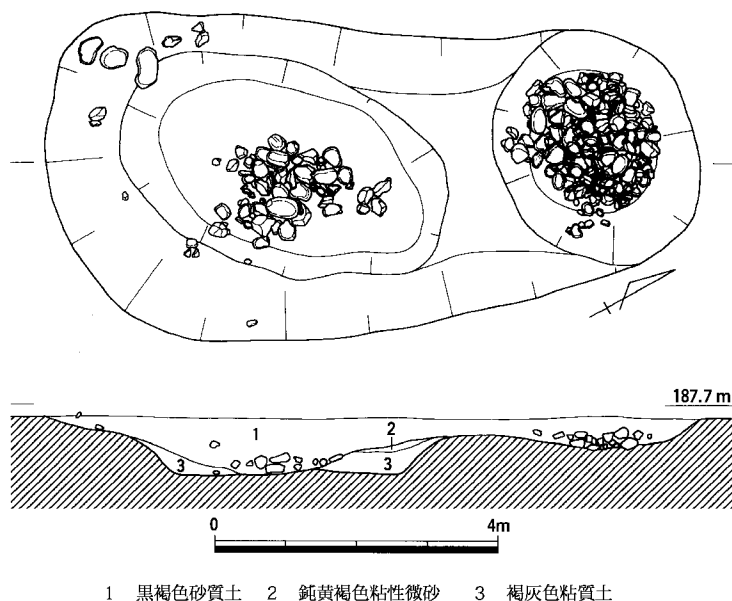
4 200Df区から検出された小規模な土壙で、掘立柱建物56の南東隅の柱穴に切られていた。平面形は長径1.25m、短径1.05mの隅丸長方形に近い形態を呈し、検出面から床面までの深さは15cmで、断面形はⅢbである。土壙内には黒褐色土が堆積し、完形品の土師器の小皿1432が出土した。(福田)

土壙182(第428・644・645図、図版122・136・138・147・150)

4 200Dg区で検出した大形の土壙で、北西方向に掘立柱建物55や土壙181が存在している。平面形は長径9.25m、短径4.6mの不整長楕円形を呈し、検出面から底面まで最も深い部分で80cmを測り、断面形はⅢeである。土壙内の底面には人頭大から拳大の河原石が数多く認められ、土器や陶器1433~1437、金属器M304~M327、土錘C112・C113、砥石S614などが出土した。(福田)

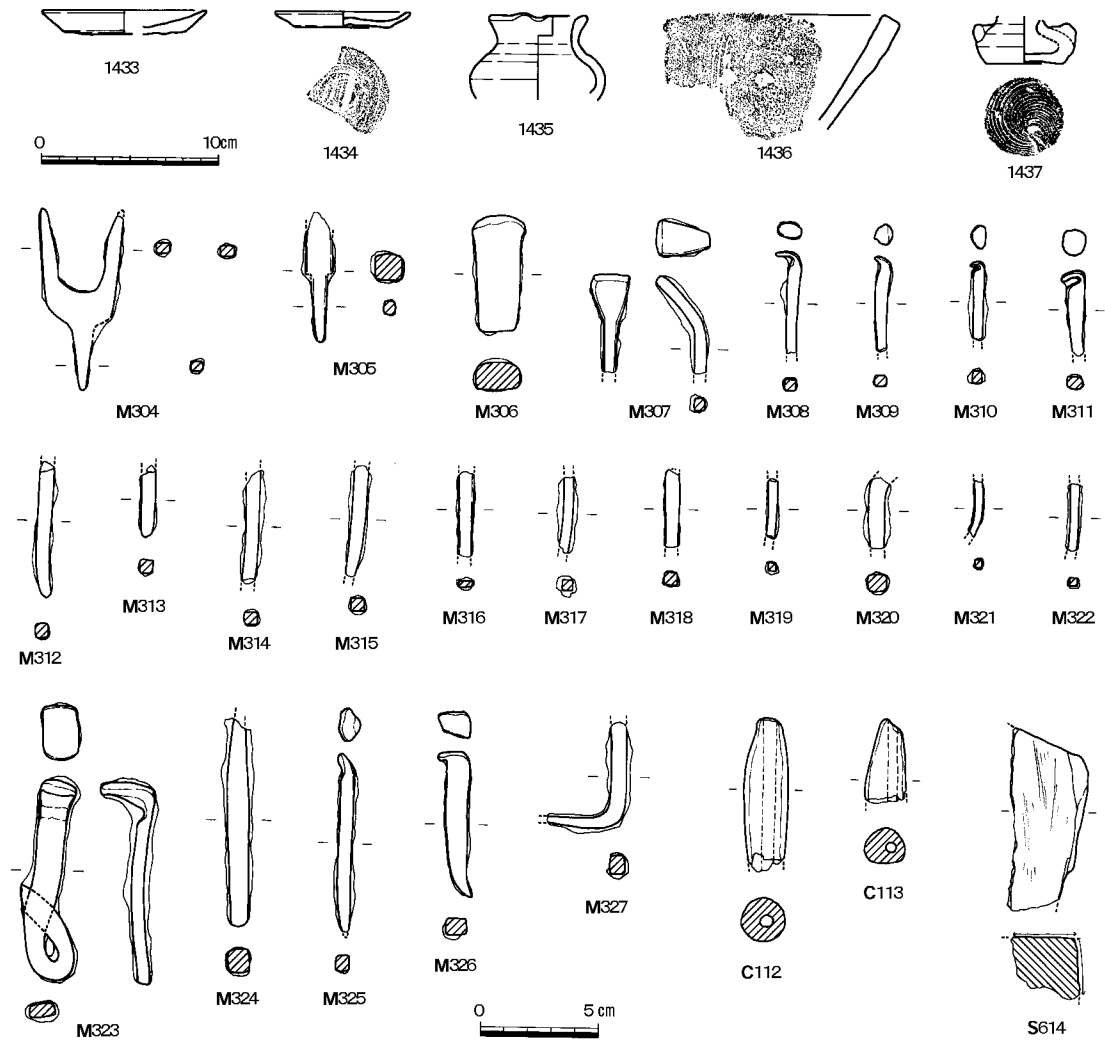


第643図 土壙181(1/30)・出土遺物(1/4)



第644図 土壙182(1/100)

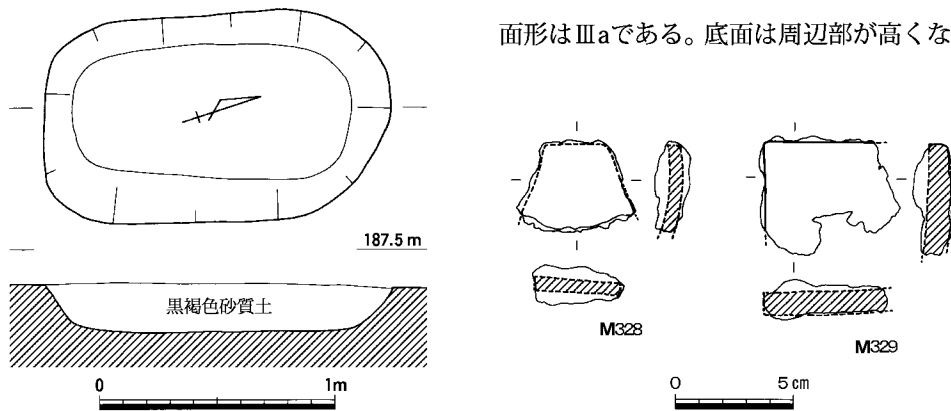
第3章 発掘調査の概要



第645図 土壌182出土遺物 (1/4,1/3)

土壌183 (第428・429・646図、図版46)

4 2 02 D f区から検出された土壌である。平面形は長径1.47m、短径90cmの長楕円形に似た形態を呈し、検出面から底面までの深さは22cmを測り、断面形はⅢaである。底面は周辺部が高くなって緩や

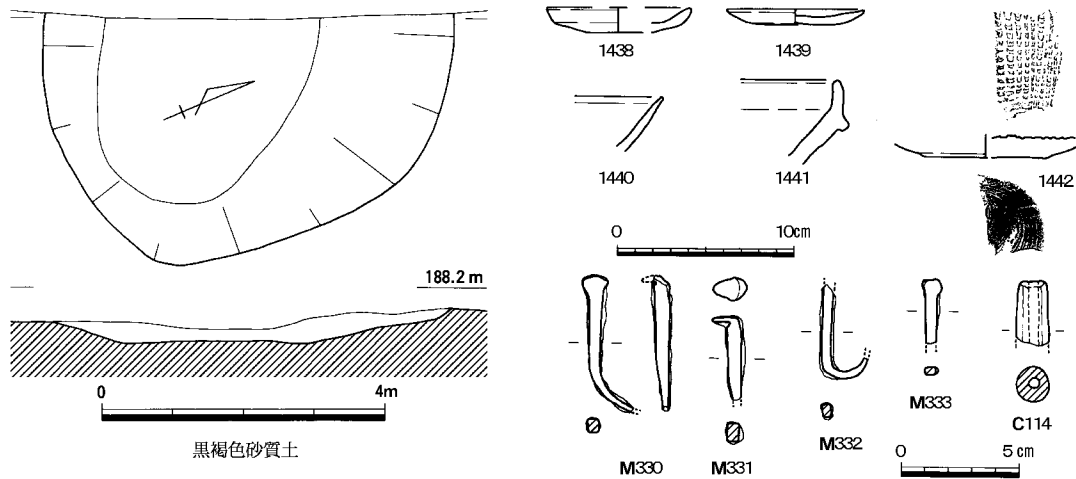


第646図 土壌183 (1/30)・出土遺物 (1/30,1/3)

かに湾曲し、堆積していた黒褐色砂質土内から不明鉄器M328・M329が出土した。(福田)

土壌184 (第429・647図)

4 201Dc区で検出した大形の土壌で、調査区の境界に位置していた。平面形は短径5.76mの楕円形に似た形と思われ、検出面から底面までの深さは51cmで、断面形はⅢaである。内部には黒褐色砂質土が堆積し、土器や陶器1438～1442、釘M330～M333、土錘S114などが出土した。(福田)



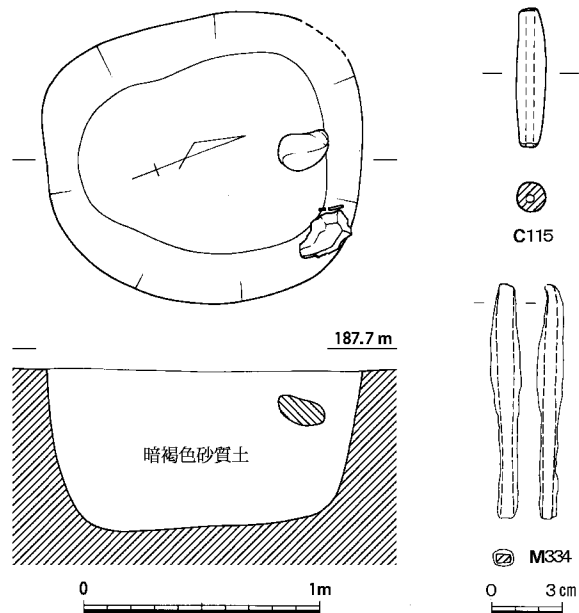
第647図 土壌184 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)

土壌185 (第429・430・648図)

4 202Db区で検出した土壌で、北側には溝30が存在している。平面形は長径1.37m、短径1.36mの楕円形に似た形態を呈し、検出面から底面までの深さは69cmを測り、断面形はⅢaである。底面は北側から南側に向かって緩やかに傾斜し、内部に人頭大の河原石や割り石を含む暗褐色砂質土が堆積していた。この土壌から出土した遺物として、完形品の土錘C115と欠損した釘M334がある。(福田)

土壌186 (第429・649図)

4 203De区で検出した土壌で、北西側約2mの地点には後述する土壌196が存在している。平面形は長径96cm、短径87cmの楕円形に似た形で、検出面から底面までの深さは9cmと浅く、断面形はⅢaである。底面は周辺部よりも中央部が深くなるように緩やかに湾曲し、塊状の不明鉄器M335が出土した。(福田)



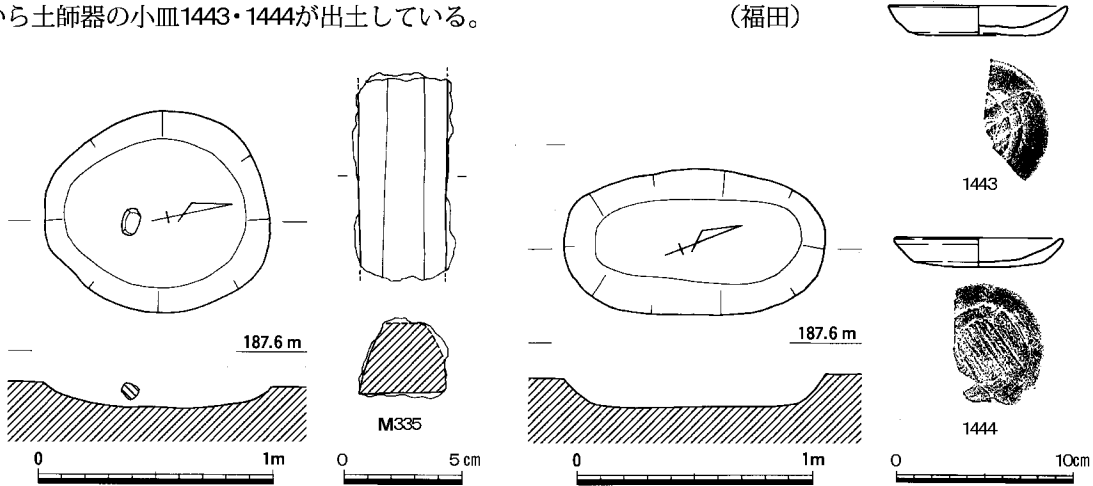
第648図 土壌185 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第3章 発掘調査の概要

土壌187 (第429・650図)

4 2 03De区から検出された小形の土壌で、南東側約2mの地点には前述した土壌186が存在している。平面形は長径1.11m、短径62cmの細長い楕円形に似た形態を呈し、検出面から底面までの深さは13cmを測り、断面形はⅢaである。底面は全体にほぼ水平になり、土壌内から土師器の小皿1443・1444が出土している。(福田)



第649図 土壌186 (1/30)・出土遺物 (1/3)

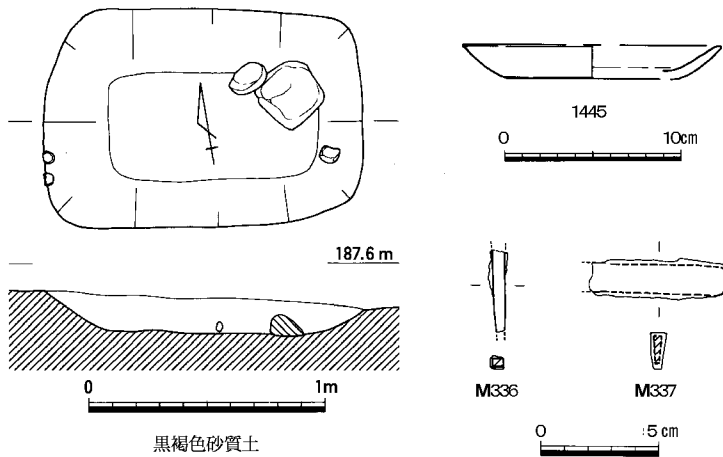
第650図 土壌187 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌188 (第429・651図)

4 2 03Dd区で検出した土壌で、北側には掘立柱建物57が存在している。平面形は長径1.35m、短径93cmの隅丸長方形に近い形態を呈し、検出面から底面までの深さは18cmを測り、断面形はⅢaである。底面にはわずかに凹凸が認められ、東隅には人頭大と拳大の河原石が置かれていた。土壌内には黒褐色砂質土が堆積し、土師器の皿1445、折れた釘M336、刀子M337が出土した。(福田)

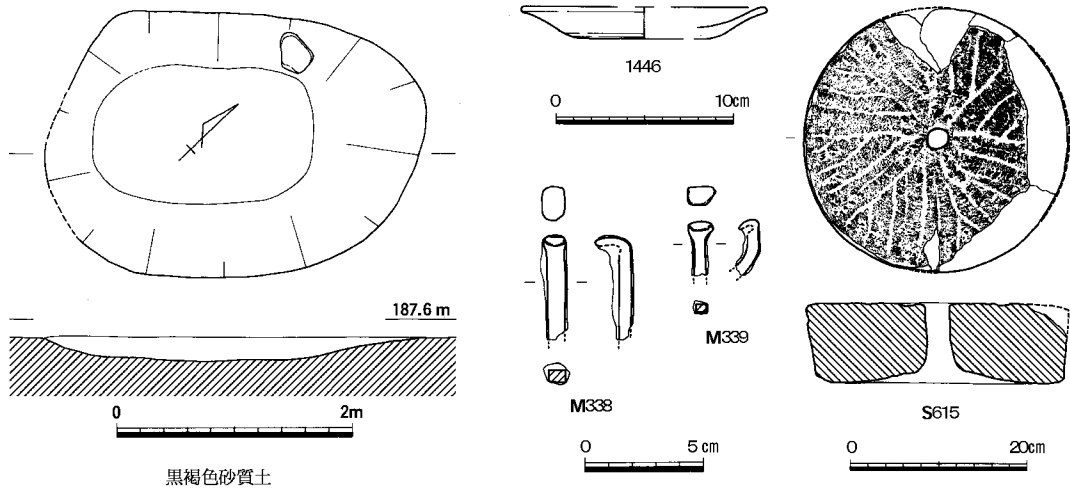
土壌189 (第429・652図、図版147)

4 2 04Dc区から検出された比較的大きな土壌で、掘立柱建物60の南西部分と重複していた。掘立柱建物60の2個の柱穴がこの土壌を切っていたので、この土壌が古いことが判明した。平面形は長径3.81



第651図 土壌188 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

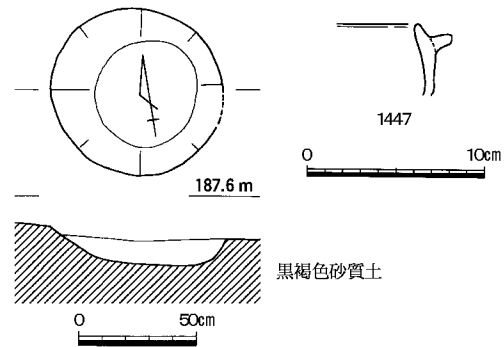
m、短径2.22mの長楕円形に近い形態を呈し、検出面から底面までの深さは80cmを測り、断面形はⅢaである。底面にはわずかに凹凸が認められ、平坦になっていなかった。土壌内には黒褐色砂質土が堆積し、土師器の皿1446や2本の釘以外に、流紋岩製の石臼S615が出土した。(福田)



第652図 土壙189 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3,1/8)

土壙190 (第429・653図)

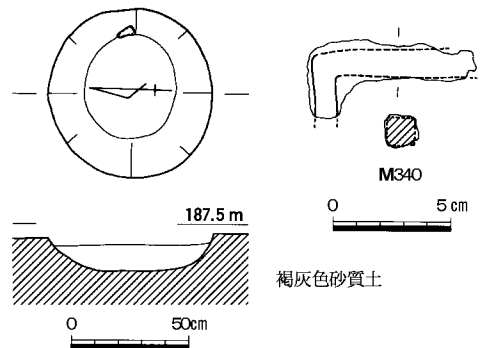
4 2 05Dc区で検出した小規模な土壙で、掘立柱建物62の北東端部に位置している。平面形は長径74cm、短径70cmの楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは18cmを測り、断面形はⅢaである。底面は西側から東側に向かって緩やかに傾斜し、内部から瓦質土器の鍋の破片1447が出土した。(福田)



第653図 土壙190 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙191 (第429・654図)

4 2 05Dd区で検出した小規模な土壙で、掘立柱建物66の北西部に位置する。平面形は長径71cm、短径70cmの円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは18cmを測り、断面形はⅢaである。底面は緩やかに湾曲し、内部には褐灰色砂質土が堆積しており、鋸と思われる断片M340が出土した。(福田)



第654図 土壙191 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壙192 (第429・655図、写真38、

図版55・147・149)

4 2 04Dd区で検出した大規模な土壙で、掘立柱建物66の北西端部と重複していた。掘立柱建物66の2個の柱穴がこの土壙を切っていたので、土壙が古いことが判明した。平面形は長径7.6m、短径4.86mの不整長楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは53cmを測る。出土遺物として、土師器の小皿1448~1450、備前焼播鉢1451・1452、天目碗1453、釘M341・M342、貴金具M343、土錘C116、茶臼S616がある。(福田)

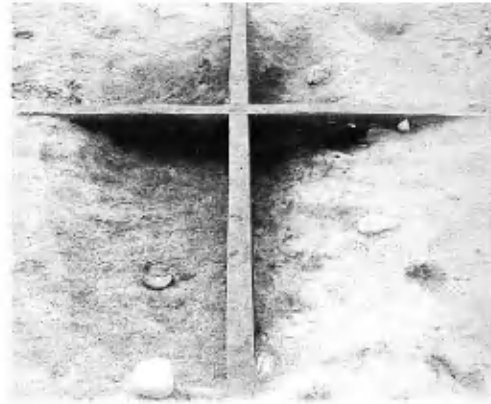
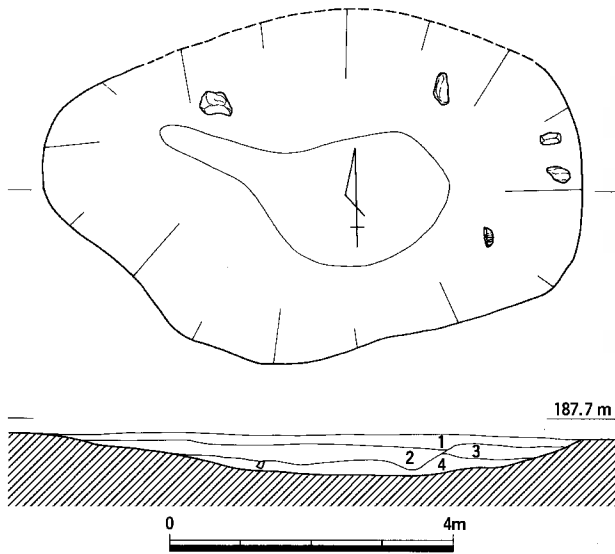
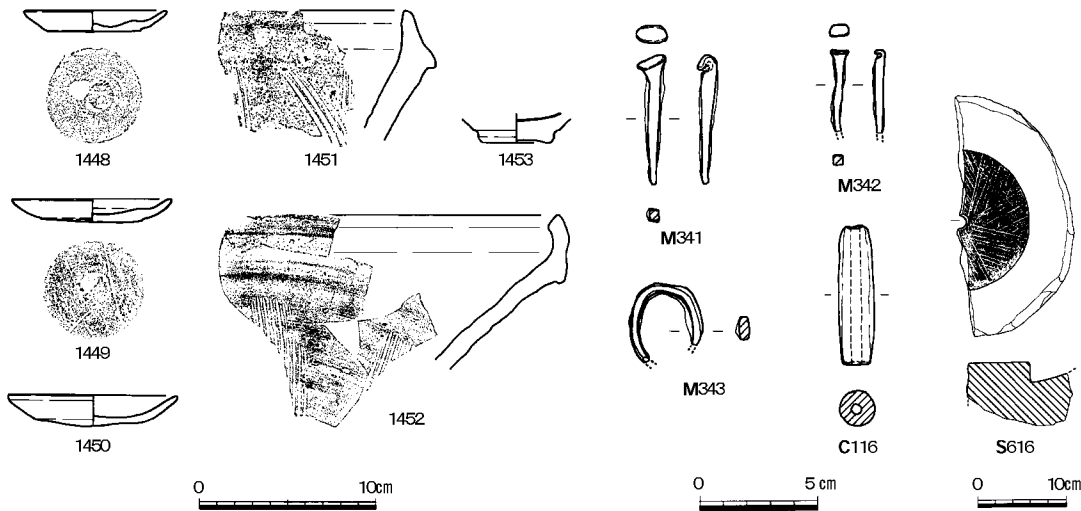
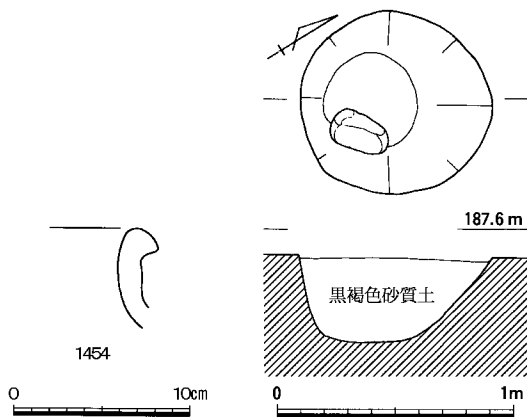


写真38 土壙192（東から）

- 1 暗褐色砂質土
- 2 鈍黄褐色砂質土（砂ブロック含）
- 3 黒褐色砂質土
- 4 褐灰色砂質土



第655図 土壙192（1/100）・出土遺物（1/4,1/3,1/8）



第656図 土壙193（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙193（第429・656図）

4 2 05De区で検出した土壙で、掘立柱建物66の北東部に位置している。平面形は長径82cm、短径78cmの楕円形に似た形態を呈し、検出面から底面までの深さは36cmを測り、断面形はⅢaである。土壙内には黒褐色砂質土を含んで人頭大の河原石が存在し、備前焼の壺の破片1454が出土した。（福田）

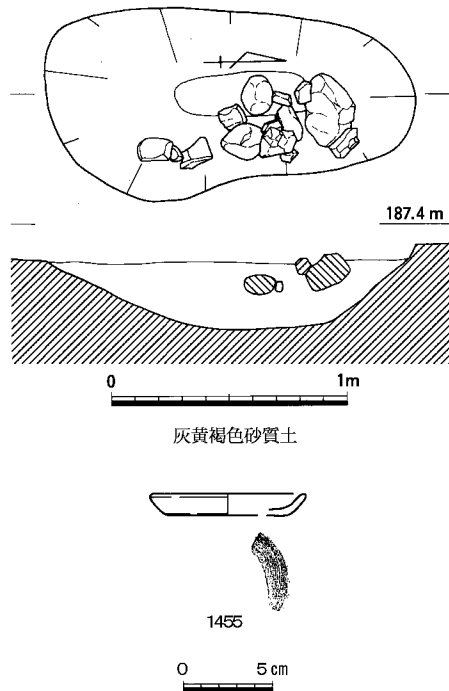
土壙194（第429・657図）

4 2 05De区で検出した土壙である。平面形は長径1.56m、短径82cmの長楕円形に近い形

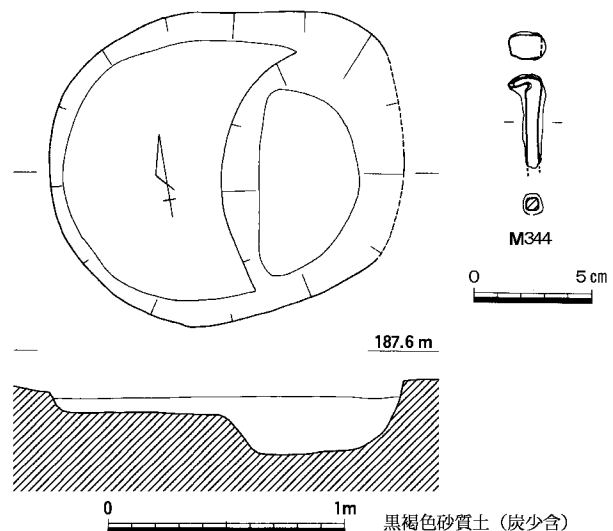
態を呈し、検出面からの深さは28cmを測り、断面形はⅢbである。土壌内には灰黄褐色砂質土が堆積して人頭大から拳大の河原石や割り石が認められ、土師器の小皿1455が出土した。(福田)

土壌195 (第429・658図)

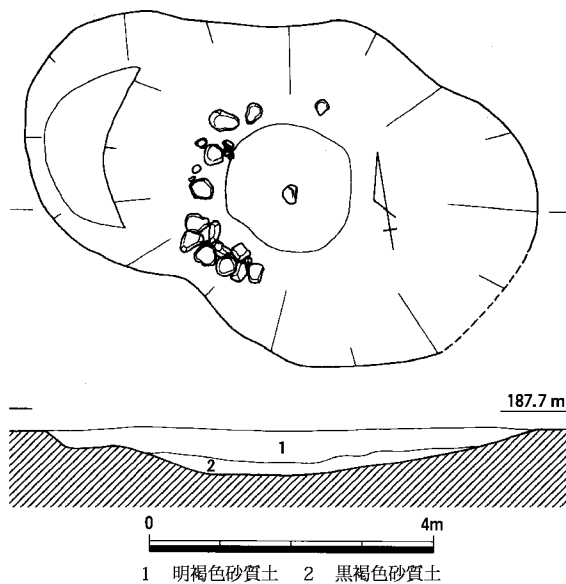
4 2 05De区から検出された土壌で、北方向には掘立柱建物64と掘立柱建物65が重複して存在し、南方向には掘立柱建物63が確認されている。平面形は長径1.5m、短径1.33mの楕円形に似た形態を呈し、検出面から底面までの深さは33cmを測り、断面形はⅢbである。この土壌は、東側が深くなって炭を少量含む黒褐色砂質土が堆積していた。東側の底面は湾曲し、西側の底面はやや傾斜していた。出土遺物として釘M344がある。(福田)



第657図 土壌194 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第658図 土壌195 (1/30)・出土遺物 (1/3)



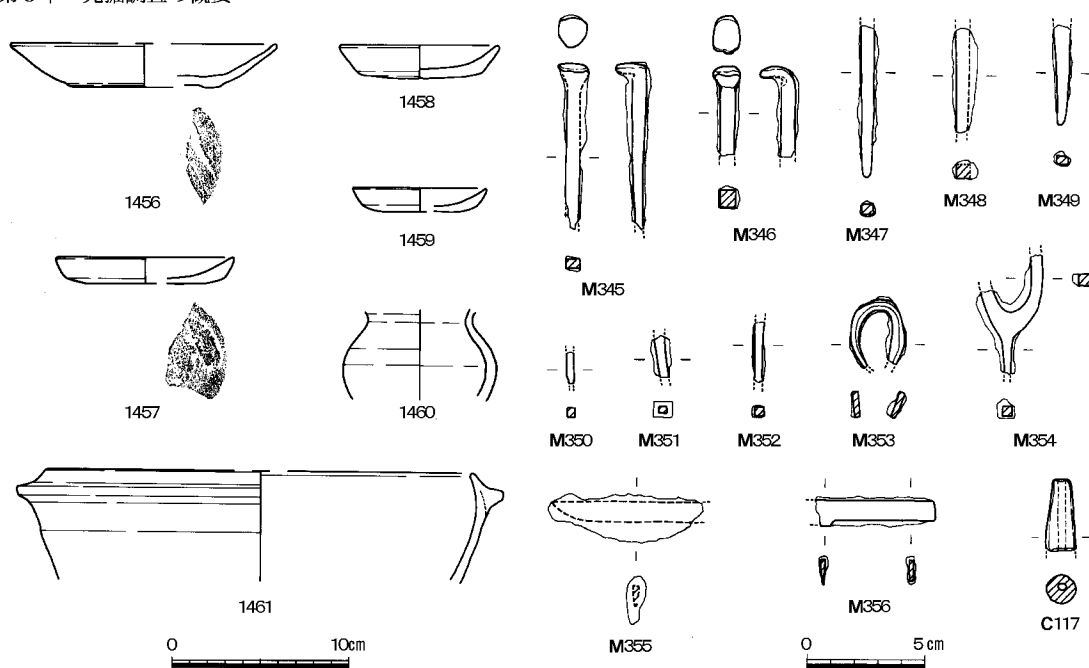
第659図 土壌196 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌196 (第429・659・660図、

図版138・149・150)

4 2 05Dd区で検出した大規模な土壌である。平面形は長径7.42m、短径4.63mの不整長楕円形を呈し、検出面からの深さは64cmを測り、断面形はⅢbで、内部に拳大の河原石が数多く認められた。出土遺物には、土師器の皿1456、土師器の小皿1457～1459、備前焼の小壺1460、瓦質土器の鍋1461、釘M345～M353、鏝M354、刀子M355・M356、土錘C117などが採集されている。(福田)

第3章 発掘調査の概要



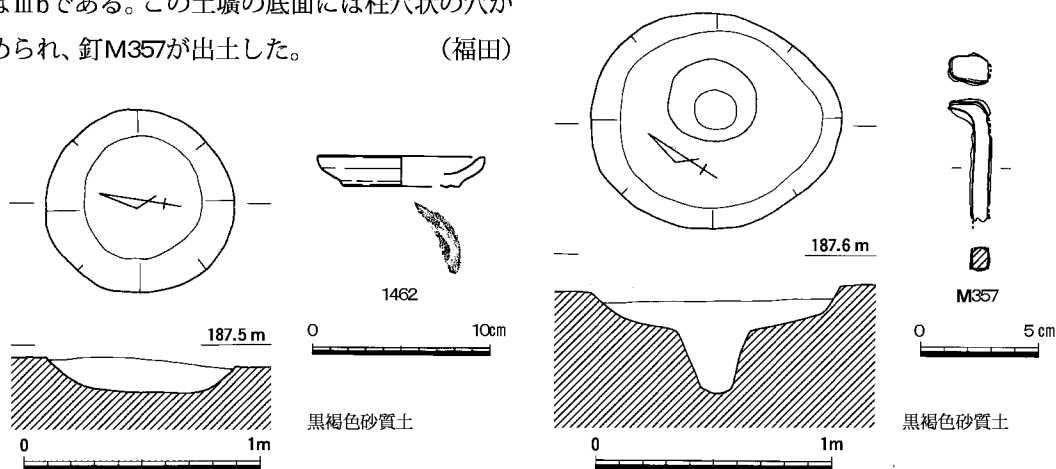
第660図 土壌196出土遺物 (1/4,1/3)

土壌197 (第429・661図)

4 2 05Dd区で検出した小規模な土壌で、南東方向には前述した土壌196が存在している。平面形は長径79cm、短径77cmの円形に近い形態を呈し、検出面から底面までの深さは15cmを測り、断面形はⅢaである。土壌内には黒褐色砂質土が堆積し、土師器の小皿1462が出土した。(福田)

土壌198 (第429・662図)

4 2 06Dc区で検出した土壌で、南方向約3mの地点には後述する土壌199が存在している。平面形は長径1.05m、短径91cmの楕円形に近い形態を呈し、検出面から底面までの深さは43cmを測り、断面形はⅢbである。この土壌の底面には柱穴状の穴が認められ、釘M357が出土した。(福田)



第661図 土壌197 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第662図 土壌198 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壌199 (第429・663図、図版147)

4 2 06Dc区で検出した土壌である。平面形は長径1.34m、短径1.09mの楕円形に近い形態を呈し、

検出面からの深さは29cmを測り、断面形はⅢaである。土壌内には底面から浮いた状態で割れた河原石や割り石が認められ、備前焼の播鉢1463、毛抜きM358、砥石S617が出土した。(福田)

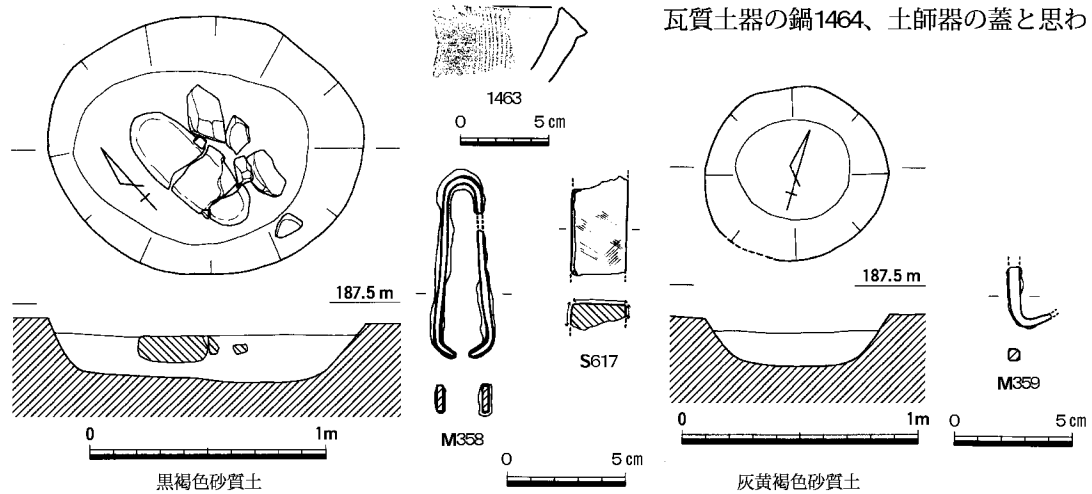
土壌200 (第429・664図)

4 2 06Dc区で検出した小規模な土壌である。平面形は長径78cm、短径75cmの円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは22cmを測り、断面形はⅢaである。底面は緩やかに湾曲し、内部に灰黄褐色砂質土が堆積していた。この土壌から出土した遺物として、折れた釘M359がある。(福田)

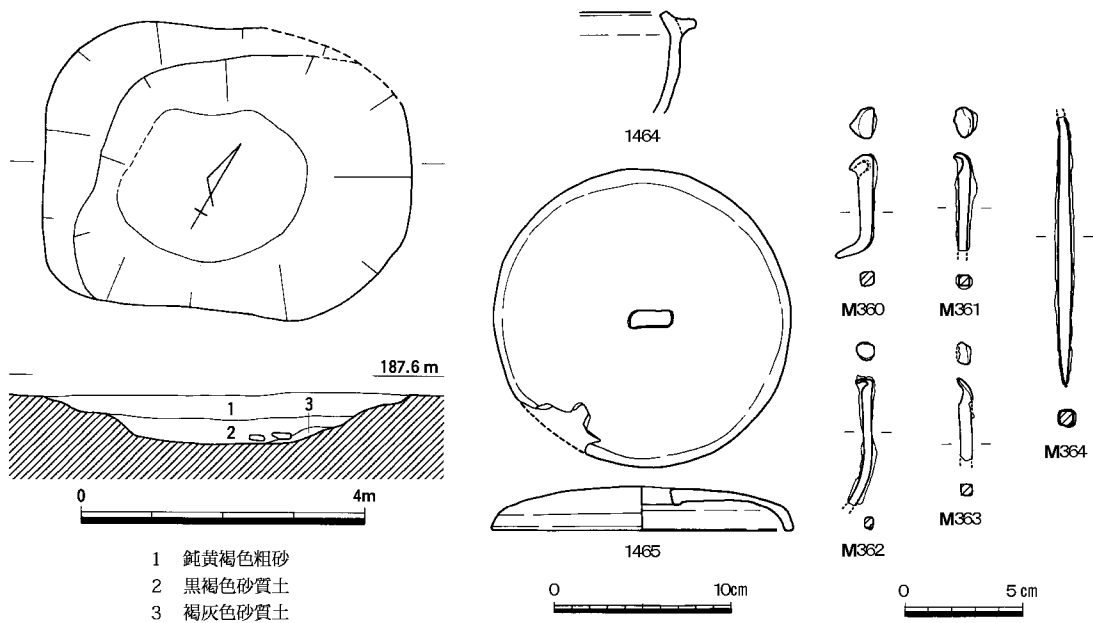
土壌201 (第429・630・665図、図版122・138)

4 2 06De区で検出した土壌である。平面形は長径5.13m、短径4.1mの隅丸長方形に似た形態を呈し、検出面からの深さは66cmを測り、断面形はⅢbである。この土壌は2段掘りの様相が認められ、

中央部が浅く窪んで緩やかに湾曲し、  
瓦質土器の鍋1464、土師器の蓋と思わ



第663図 土壌199 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3) 第664図 土壌200 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第665図 土壌201 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/3)

第3章 発掘調査の概要

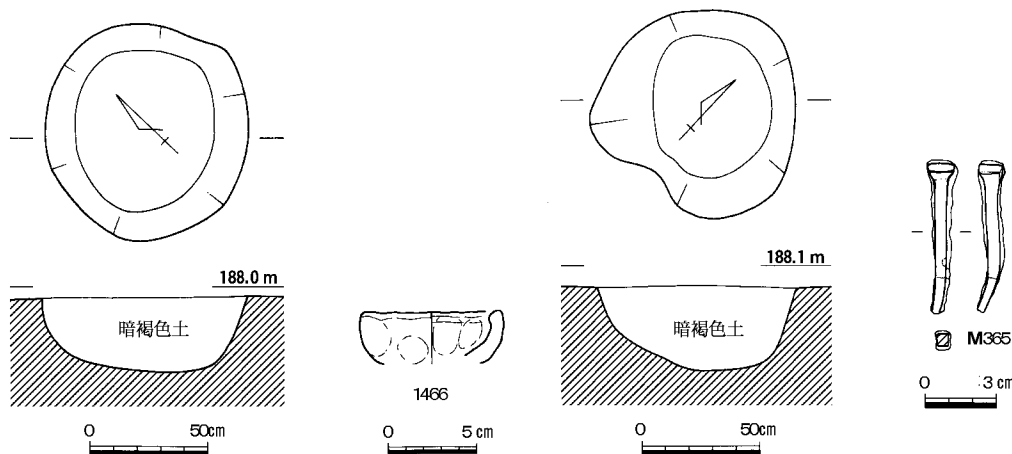
れるもの1465、釘M360～M364が出土している。(福田)

土壙202 (第430・666図)

4 2 08Cb区で検出した小規模な土壙である。平面形は長径1.26m、短径78cmの楕円形に似た形態を呈し、検出面からの深さは14cmを測り、断面形はⅢaである。底面は北から南に向かって緩やかに傾斜し、内部に暗褐色土が堆積していた。出土遺物として、土師器のるつぼ1466がある。(福田)

土壙203 (第430・667図)

4 1 09Ci区で検出した小規模な土壙である。平面形は長径89cm、短径88cmの不整円形を呈し、検出面から底面までの深さは36cmを測り、断面形はⅢbである。底面は緩やかに湾曲して、東部分が最も深くなっていた。土壙内には暗褐色土が堆積し、1本の釘M365が出土した。(福田)



第666図 土壙202 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第667図 土壙203 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壙204 (第430・668図)

4 1 09Ch区で検出した小規模な土壙である。平面形は長径92cm、短径81cmの楕円形に近い形態を呈し、検出面から底面までの深さは27cmを測り、断面形はⅢaである。底面は西から東に向かって緩やかに湾曲して傾斜し、内部には、灰褐色土が堆積していた。

出土遺物は、釘M366 1点のみである。時期は中世の範疇にある。(福田)

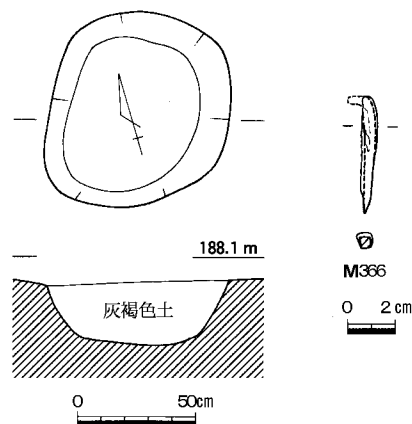
土壙205 (第430・669図)

4 1 09Cj区で検出した小規模な土壙である。平面形は長径86cm、短径82cmの楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは47cmを測り、断面形はⅢbである。底面は中央部が浅く窪んで緩やかに湾曲しており、内部に暗褐灰色土が堆積していた。

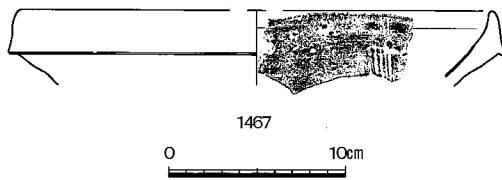
出土遺物として、備前焼の播鉢1467がある。時期は、15世紀後半である。(福田)

土壙206 (第430・670図)

4 1 09Ci区で検出した小規模な土壙で、南側に土



第668図 土壙204 (1/30)・出土遺物 (1/3)



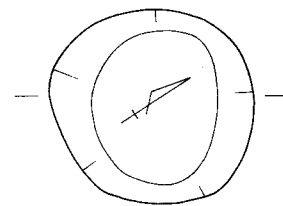
第669図 土壌205 (1/30)・出土遺物 (1/4)

壙208が接して存在している。平面形は長径1.1m、短径93cmの楕円形に似た形態を呈し、検出面から底面までの深さは55cmを測り、断面形はⅢaである。土壌内には暗褐色土が堆積し、人頭大から拳大の焼けた石が数多く入れられていた。

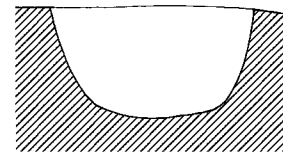
出土遺物は、釘M367・M368のみであったが、中世の土壌であろう。 (福田)

土壌207 (第430・671図、図版154)

4 1 09Ci区で検出した小規模な土壌である。平面形は長径84cm、短径72cmの楕円形に似た形態を呈し、検出面からの深さは60cmを測り、断面形はⅢbである。この土壌は東側に寄った部分がかつても深くなり、土師器の小皿1468、土師器の皿1469・1470、釘M369・M370が出土した。 (福田)

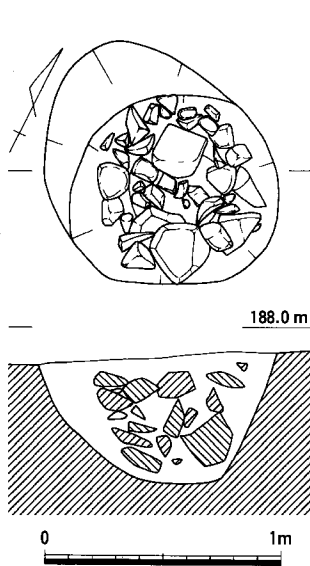


188.1 m

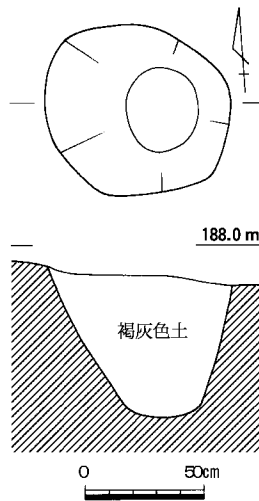
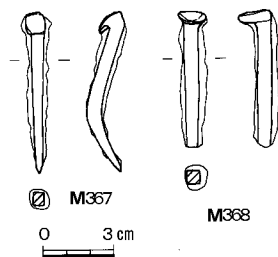


0 50cm

暗褐色土 (底に砂ブロック含)

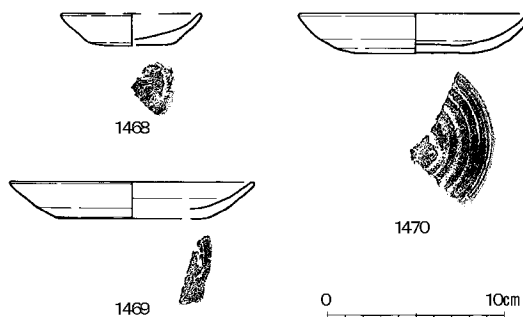
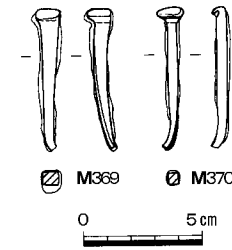


暗褐色土



188.0 m

0 50cm



第670図 土壌206 (1/30)・出土遺物 (1/3)

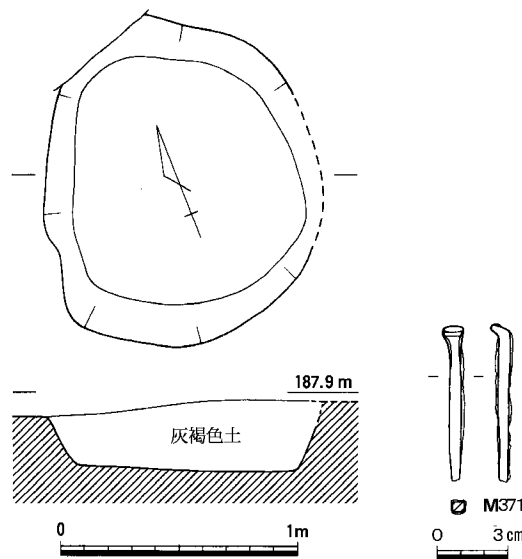
第671図 土壌207 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4)



第3章 発掘調査の概要

土壌208 (第430・672図)

4 2 00Ci区で検出した土壌である。平面形は長径1.37m、短径1.14mの楕円形に近い形態を呈し、検出面から底面までの深さは30cmを測り、断面形はⅢaである。底面は北西から南東に向かってわずかに傾斜し、内部には灰褐色土が堆積していた。出土遺物として、1本の釘M371がある。(福田)



第672図 土壌208 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壌209 (第430・673図)

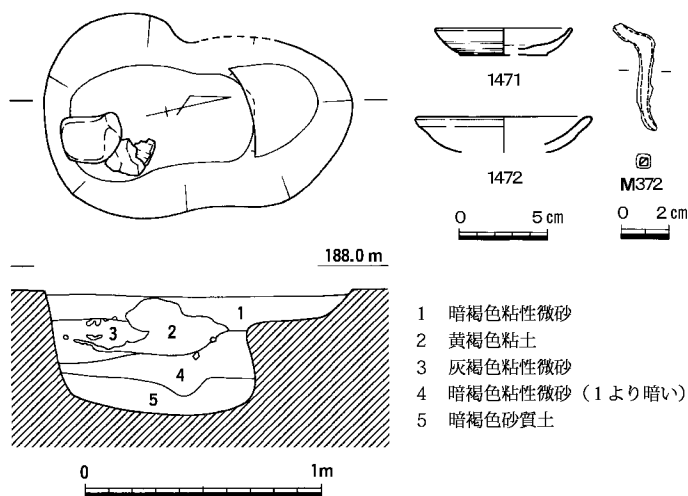
4 2 00Ci区で検出した土壌である。平面形は長径1.3m、短径87cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは52cmを測り、断面形はⅢeである。南側の深くなった部分が袋状になり、底面は緩やかに湾曲していた。この土壌の出土遺物として、土師器の小皿1471・1472と釘M372がある。(福田)

土壌210 (第430・674図、図版124・154)

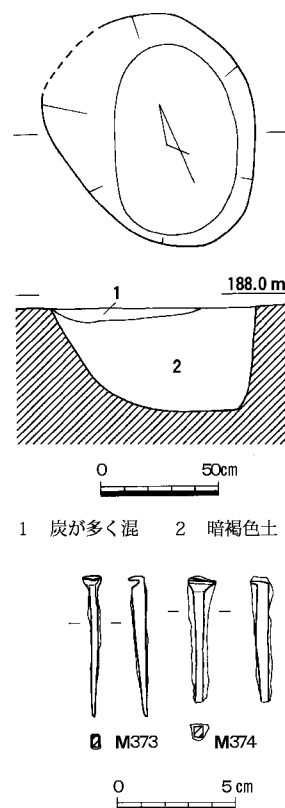
4 1 09Ci区で検出した土壌である。平面形は長径1.01m、短径82cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは44cmを測り、断面形はⅢaである。この土壌は南東側に寄った地点がもっとも深くなり、底面が北西から南東に向かって傾斜していた。土壌内からは、釘M373・M374が出土した。(福田)

土壌211 (第430・675図)

4 2 00Ch区で検出した小規模な土壌である。平面形は長径63cm、短径53cmの楕円形に似た形態を呈し、検出面から底面まで



第673図 土壌209 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)



第674図 土壌210 (1/30)  
・出土遺物 (1/3)

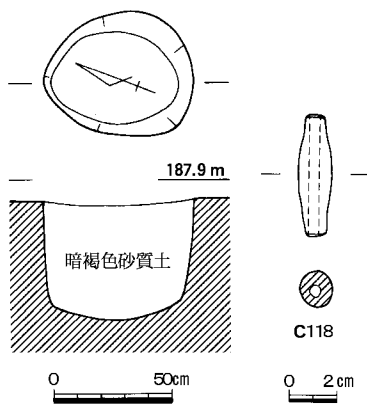
の深さは51cmを測り、断面形はⅢbである。底面は中央部が窪んで緩やかに湾曲し、内部に暗褐色砂質土が堆積していた。この土壌から出土した遺物として、完形品の土錘C118がある。 (福田)

土壌212 (第430・676図)

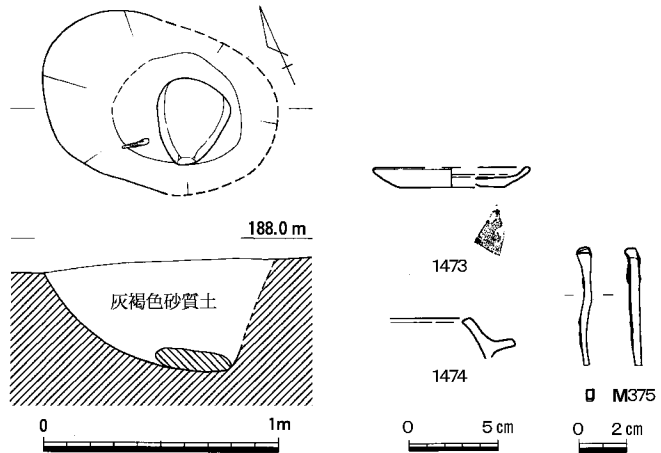
4 200Ci区で検出した土壌である。平面形は長径1.02m、短径70cmの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは48cmを測り、断面形はⅢbである。この土壌は南東部分が最も深くなり、底面に人頭大の扁平な河原石が存在した。土師器の小皿1473、瓦質土器の鍋1474、釘M375が出土した。 (福田)

土壌213 (第430・677図)

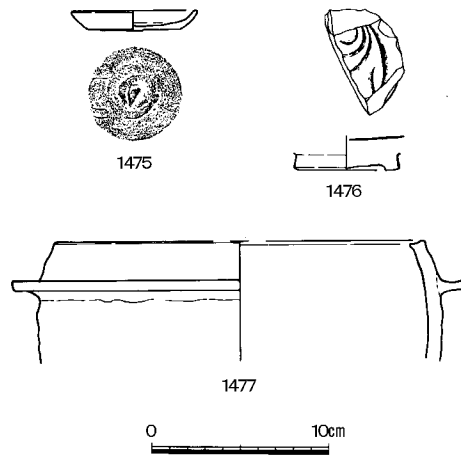
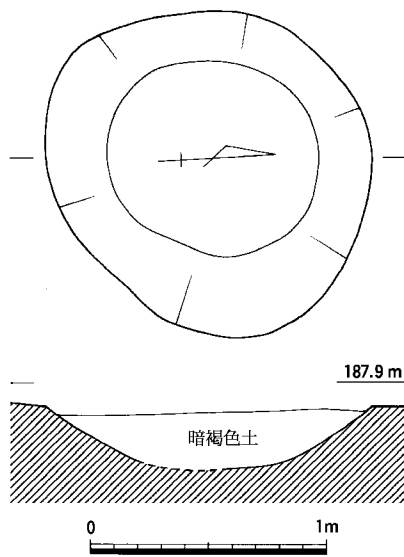
4 201Ci区から検出された土壌である。平面形は長径1.44m、短径1.31mの楕円形に似た形態を呈し、検出面から底面までの深さは37cmを測り、断面形はⅢaである。この土壌は中央部分がもっとも深くなって底面が緩やかに湾曲し、内部に暗褐色土が堆積していた。土壌内から出土した遺物として、土師器の小皿1475、龍泉窯系青磁碗の底部1476、瓦質土器の鍋1477がある。 (福田)



第675図 土壌211 (1/30)  
・出土遺物 (1/3)



第676図 土壌212 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

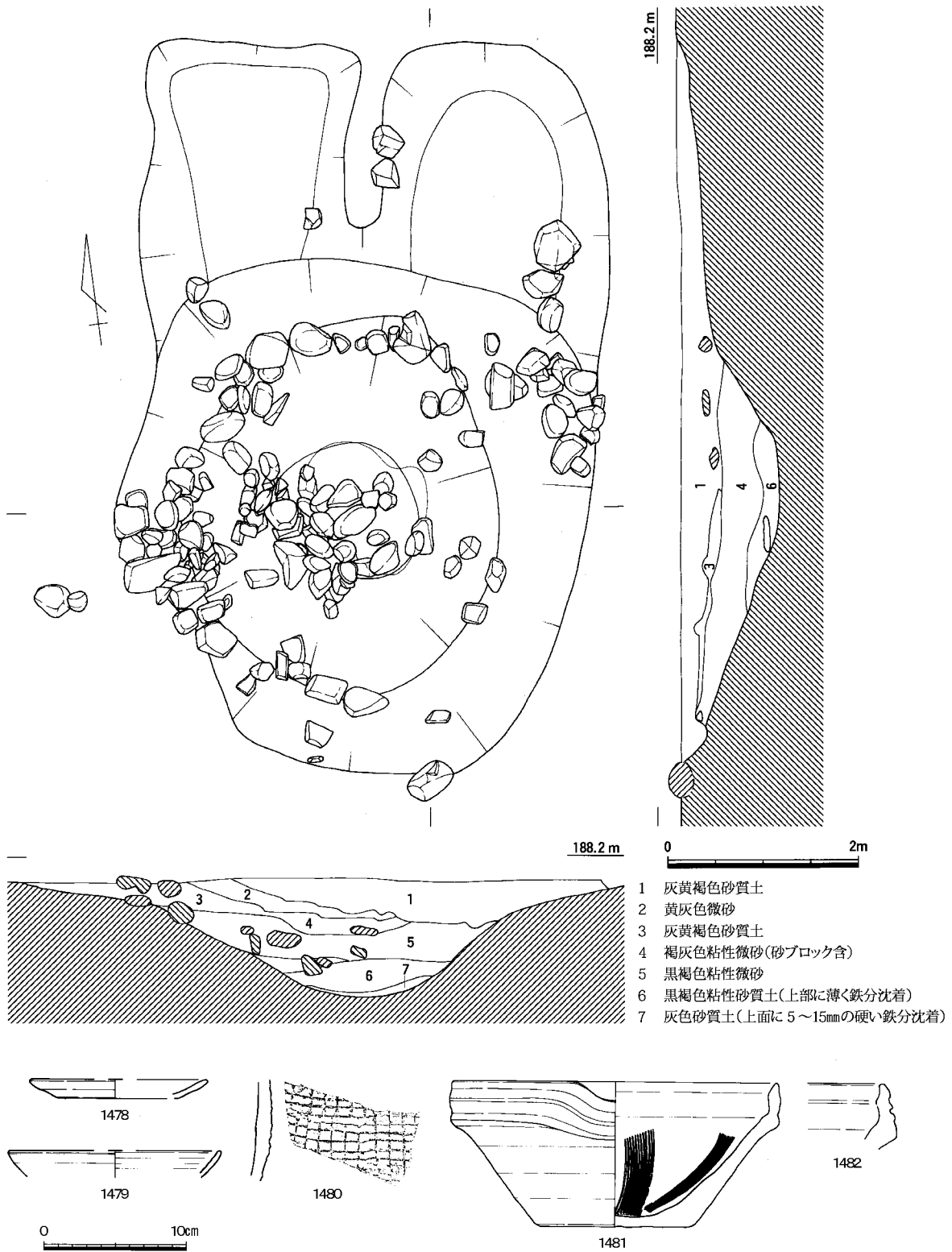


第677図 土壌213 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第3章 発掘調査の概要

土壙214 (第430・678図、図版122・138)

4 200Da区から検出された規模の大きな土壙で、東西方向の溝34を切って造られ、南北方向の溝36

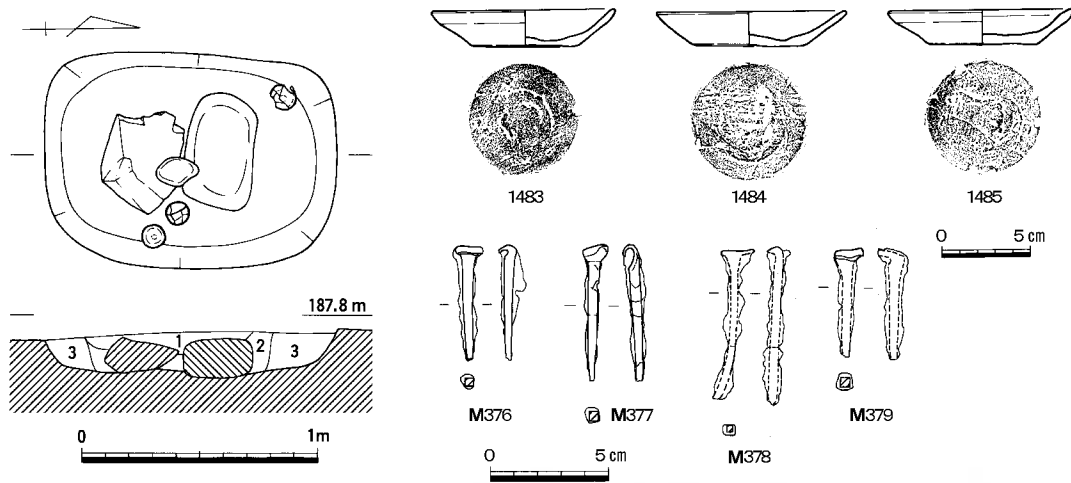


第678図 土壙214 (1/60)・出土遺物 (1/4)

に東側の端部が削平されていた。この土壌は、北側に位置する隅丸長方形と楕円形の2基の浅い土壌に、楕円形に近い形の深い土壌が重なるような様相を呈し、内面には人頭大から拳大の河原石が底面から浮いた状態で数多く認められた。底部のもっとも深い所には、厚さ5～15mmの鉄分が沈着した硬い面が存在した。土壌の計測値は、長径7.6m、短径4.98m、深さ1.22mであった。出土した遺物には、土師器の皿1478、勝間田焼の椀1479、勝間田焼の甕1480、備前焼の播鉢1481・1482がある。（福田）

土壌215（第430・431・679図、写真39、図版138）

4 2 02Cj区で検出した土壌である。平面形は長径1.3m、短径1.01mの隅丸長方形に近い形態を呈し、検出面からの深さは20cmを測り、断面形はⅢaである。この土壌の底面中央部には人頭大の河原石と割り石が据えられ、3点の土師器の皿の完形品1483～1485が口縁部を上にした状態で存在した。土壌内には炭が多く認められ、折れていない4本の釘M376～M379も出土した。（福田）



- 1 黒色土（ほとんど炭） 3 黒褐色砂質土  
2 黒褐色砂質土（炭多混）

第679図 土壌215（1/30）

・出土遺物（1/4,1/3）

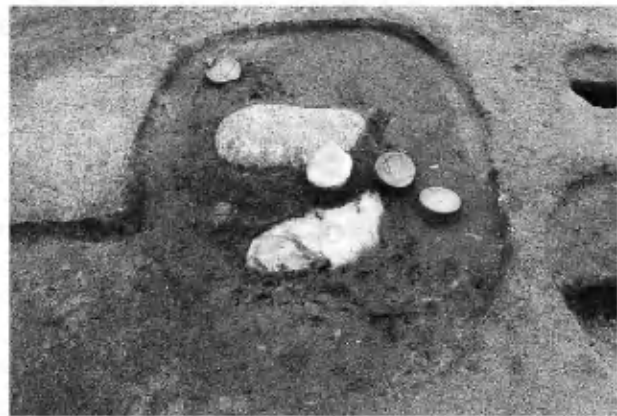
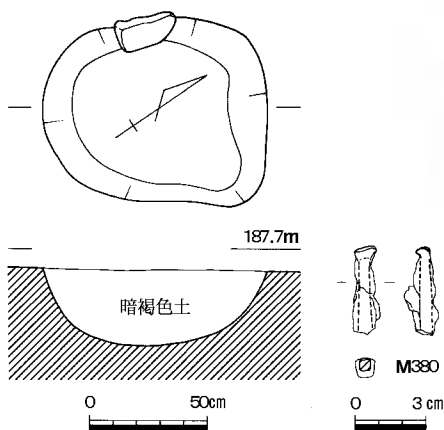


写真39 土壌215（南から）



第680図 土壌216（1/30）・出土遺物（1/3）

土壌216（第431・680図、図版124）

4 2 03Da区で検出した小規模な土壌である。平面形は長径1.0m、短径88cmの不整楕円形に似た形態を呈し、検出面からの深さは31cmを測り、断面形はⅢbである。底面は緩やかに湾曲して、中央

部が深くなっている。内部には暗褐色土が堆積し、釘M380が出土した。 (福田)

土壙217 (第342・681図、図版12)

4 1 08Cc区南東で検出された土壙である。検出された遺構は不整形の平面形を呈する2基が連続して掘られたもので、同時に機能していたと考えている。遺構は検出面から50cm強の深さで、断面形は播鉢形で、井戸状遺構とも考えられる。

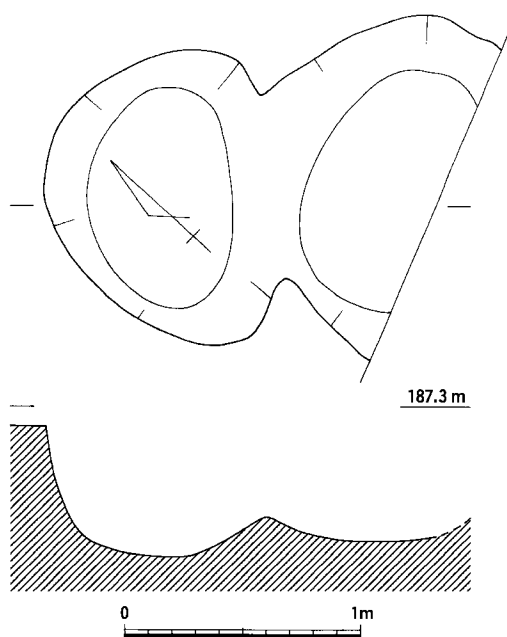
時期は中世と思われる。 (二宮)

土壙218 (第432・682図)

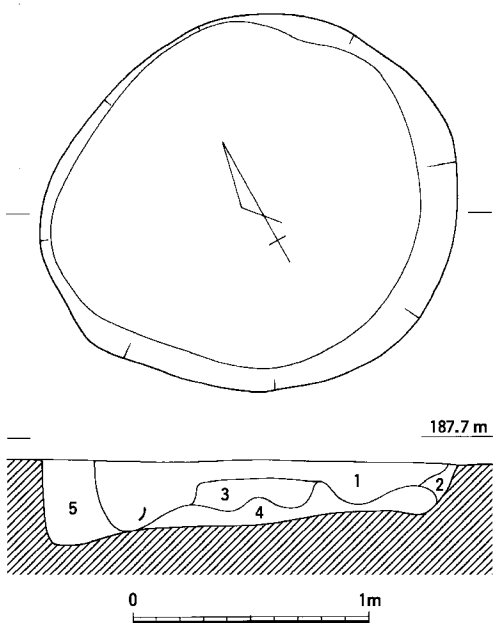
土壙226の南東約10mで4 1 09Cd区のほぼ中央にて検出された1.77×1.59mのほぼ円形の平面形を呈する。検出面からの深さは北西側で36cm、一方南東側では22cmで、規則的で平坦な底面には仕上げられていない。断面形は内傾気味に掘り下げられた逆台形状を示す。遺構の時期は中世が妥当である。 (二宮)

土壙219 (第432・683図、図版124)

4 2 00Cf区北西部で検出された土壙である。検出面での平面形態は円形に近い隅丸形状を呈し、底面は検出面とほぼ同様の様相を示す歪な隅丸方形となっている。遺構の規模は東西1.24m、南北は1.34m、深さは検出面から64cmで底面に達し、東西・南北は92cmを測った。逆

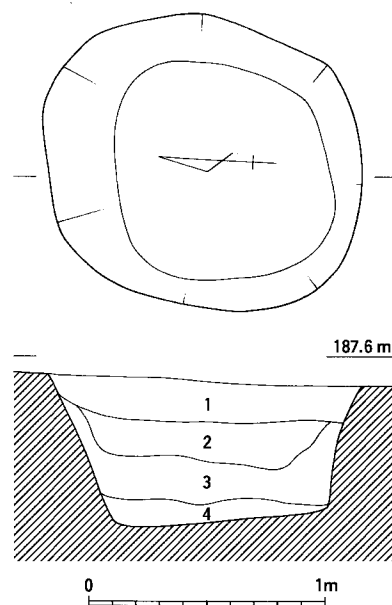


第681図 土壙217 (1/30)



- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1 褐色砂質土         | 4 暗褐色砂質土 (1より濃い) |
| 2 暗褐色砂質土        | 5 黄褐色粗砂          |
| 3 黄褐色砂質土 (鉄分が多) |                  |

第682図 土壙218 (1/30)



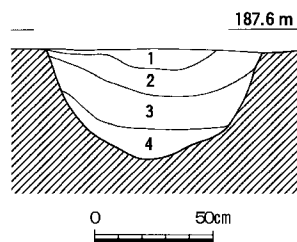
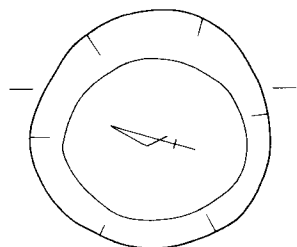
- |         |                        |
|---------|------------------------|
| 1 黒褐色土  | 4 暗褐色土 (黒褐色土がブロック状に入る) |
| 2 濃い褐色土 |                        |
| 3 暗褐色土  |                        |

第683図 土壙219 (1/30)

台形状の断面形に掘り下げ、北側が深く仕上げている。時期は中世と考えられる。 (二宮)

土壌220 (第432・684図)

4 200Ce区北西端で検出された土壌である。検出時の平面形は1.02×1.01mの円形を呈し、深さは47cmを測る。底面は平坦面をもたない。



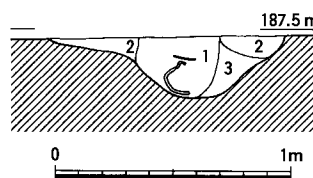
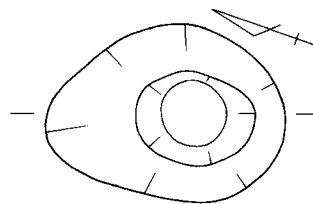
- 1 暗褐色土 (濃い)
- 2 褐色土 (暗褐色が多少混)
- 3 暗褐色土
- 4 褐色土 (2より暗褐色部分が多)

第684図 土壌220 (1/30)

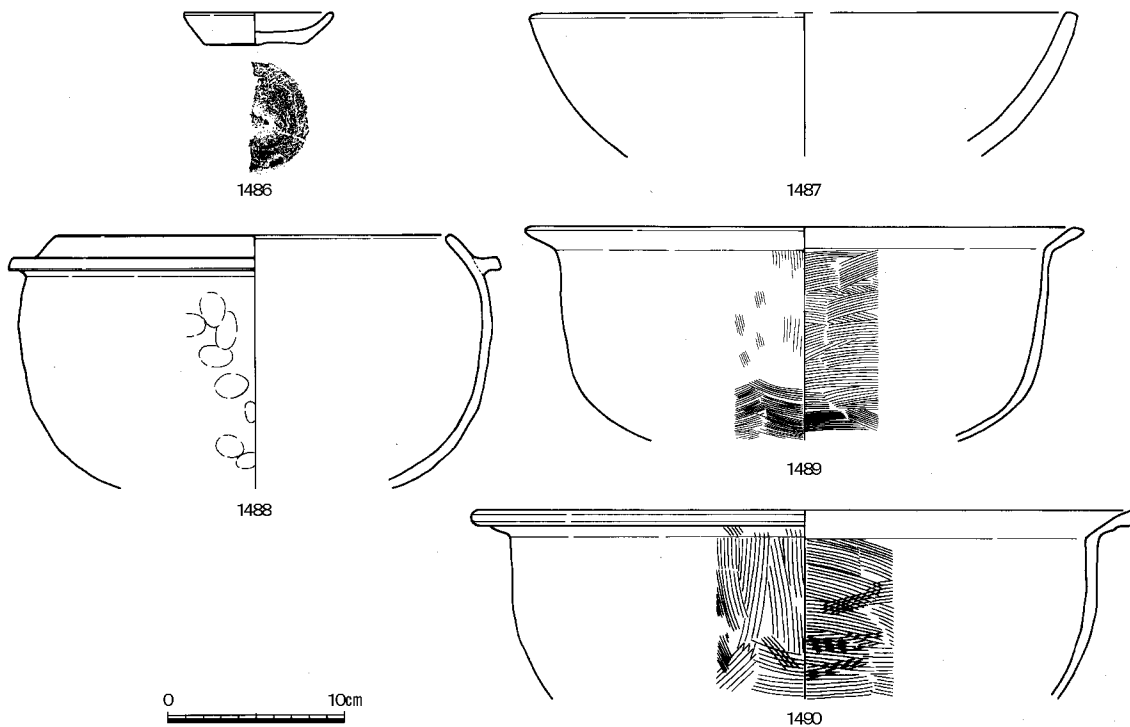
埋土は4層が確認できたが、特記すべき事柄はない。時期は中世に比定される。 (二宮)

土壌221 (第432・685図、写真40、図版138)

4 201Cc区の北東区で検出されている土壌であ



- 1 灰黄褐色土 (黒褐色土混)
- 2 灰黄褐色土
- 3 灰黄褐色土 (黒褐色土多混)



第685図 土壌221 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第3章 発掘調査の概要

る。検出された土壇の平面形は北西―南東に長軸を持ち1.01m、一方短軸は74cmを測る歪な長楕円形を呈している。底面は平坦面をもたず、播鉢状に掘り窪む形状に仕上げている。

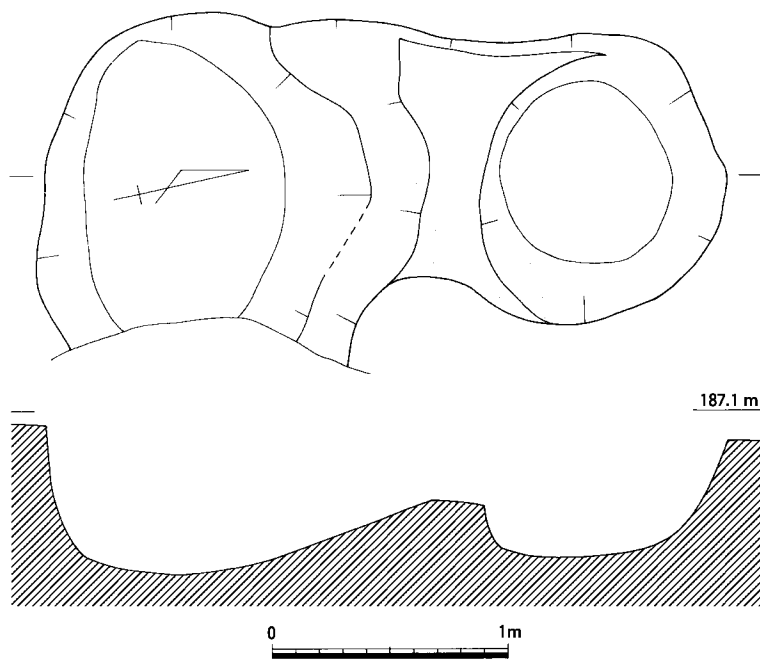
遺物は図化されている1487の勝間田、土師器等が出土している。時期は中世と考えたい。 (二宮)



写真40 土壇221 (西から)

土壇222 (第432・686図)

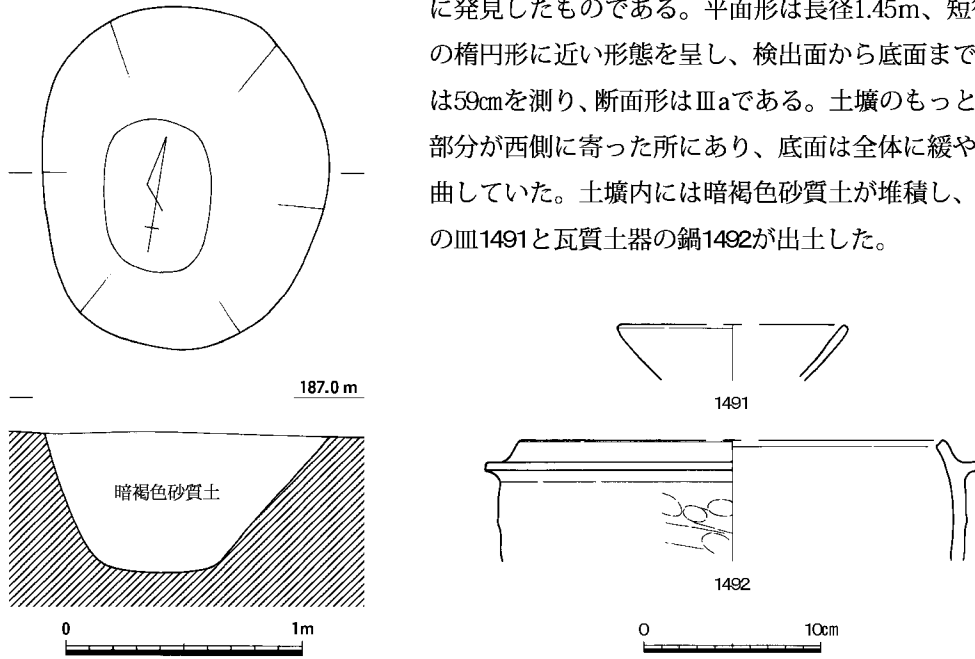
4200cf区西部で検出された土壇である。検出時は溝と重複し、土壇も若干歪ではあるがほぼ円形のもの2基連結して検出できた。井戸状遺構の可能性も考えられる。検出面からの深さは52cm、62cmを測り、底面はわずかな平坦面を有する形状である。時期は中世に比定されよう。 (二宮)



第686図 土壇222 (1/30)

土壌223 (第433・687図)

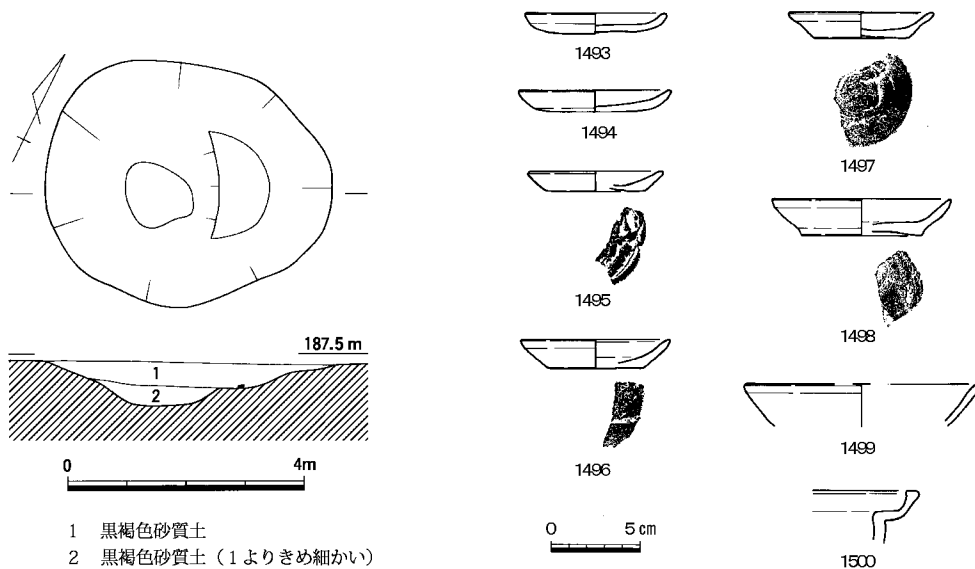
4 2 04Db区で検出した土壌で、土器溜まり14の調査中に発見したものである。平面形は長径1.45m、短径1.2mの楕円形に近い形態を呈し、検出面から底面までの深さは59cmを測り、断面形はⅢaである。土壌のもっとも深い部分が西側に寄った所にあり、底面は全体に緩やかに湾曲していた。土壌内には暗褐色砂質土が堆積し、土師器の皿1491と瓦質土器の鍋1492が出土した。(福田)



第687図 土壌223 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌224 (第433・688図、図版138)

4 2 05Ca区で検出した比較的大きな土壌で、東西方向を示して東端が枝分かれする溝51を切っていた。平面形は長径4.82m、短径4.14mの楕円形に似た形態を呈し、検出面からの深さは72cmを測り、断面形はⅢeである。この土壌も西側に寄った所が深くなり、土師器の皿1493～1498、土師器の椀1499、瓦質土器の鍋1500が出土した。(福田)



第688図 土壌224 (1/100)・出土遺物 (1/4)



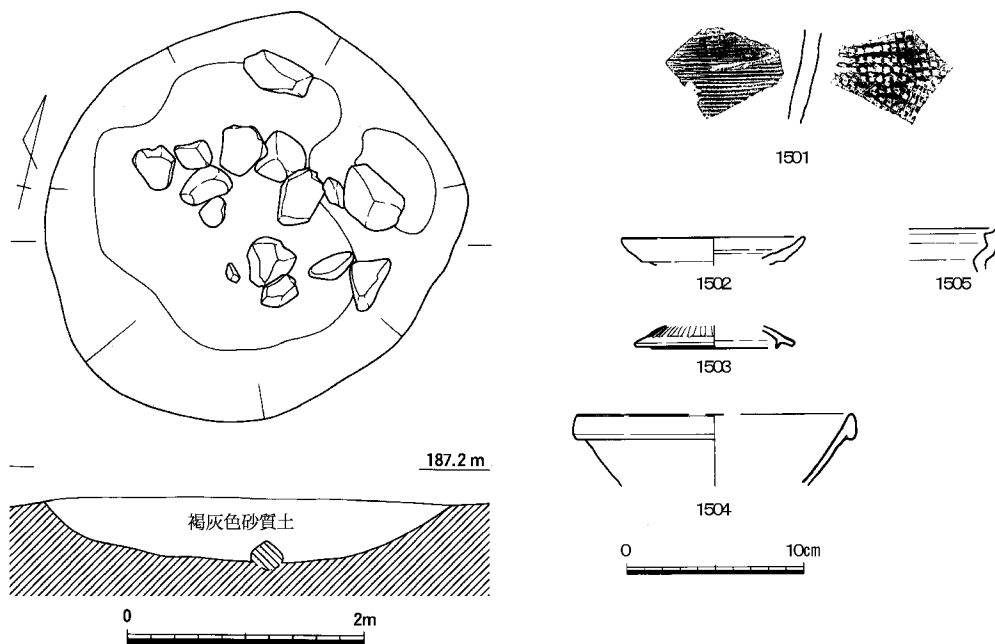
第3章 発掘調査の概要

土壌225 (第433・689図、写真41、図版124・138)

4 2 05Ca区で検出した土壌である。平面形は長径3.56m、短径3.4mの楕円形を呈し、検出面からの深さは52cmを測り、断面形はⅢaである。土壌内には河原石が数多く存在し、勝間田焼1501、土師器の小皿1502、青白磁の合子の蓋1503、白磁の碗1504、瓦質土器の鍋1505が出土した。(福田)

土壌226 (第433・690図)

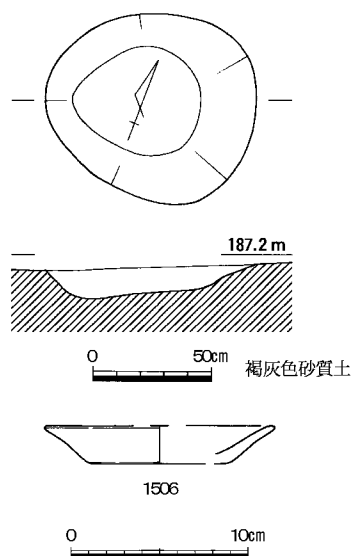
4 2 07Ca区で検出した小規模な土壌である。平面形は長径89cm、短径80cmの楕円形に似た形態を呈し、検出面からの深さは31cmを測り、断面形はⅢeである。この土壌の底面は、東から西に向かって傾斜している。土壌内には褐灰色砂質土が堆積し、土師器の皿1506が出土した。(福田)



第689図 土壌225 (1/60)・出土遺物 (1/4)



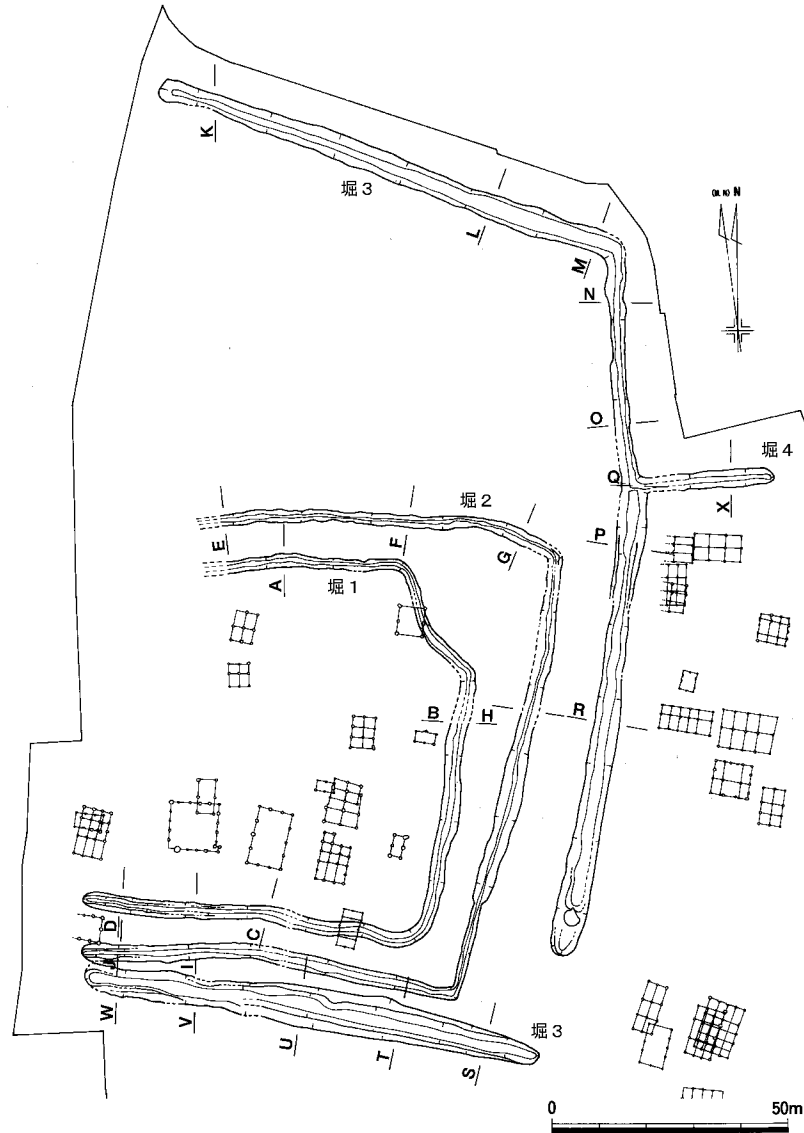
写真41 土壌225 (南から)



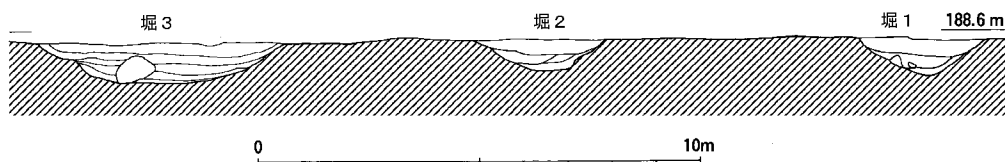
第690図 土壌226 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

11 堀

居館部分を圍繞する3条の堀を内側から順に堀1・2・3とする。堀3は、東南部コーナーで途切れている出入り口部をもつほか、東辺から東に枝状に突出する堀4が存在する。また、居館の西側は吉井川が流れて防衛的機能を果たしたとみられるが、堀はいずれも川との間に空閑地を設けていた。



第691図 堀1～4断面位置 (1/1,500)



第692図 堀1～3断面図 (1/160)

第3章 発掘調査の概要

堀1から3へは、居館の拡充といった時間的推移を示すが、周辺の建物などを含め近世以降の削平を受けおり、すべて同一面での検出となった。(弘田)

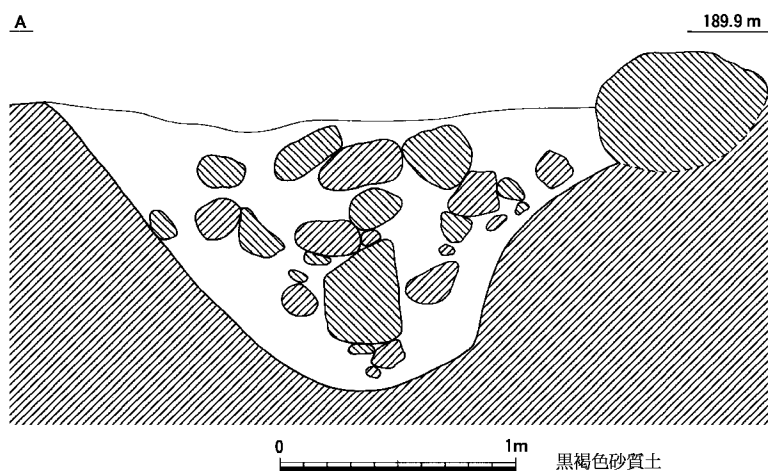
堀1 (第419~423・693~696図、図版124・125・128・139・147)

堀1北辺 西側は後世の削平によって切られていたが、長さ約40mを検出した。この辺りで幅約2.5m、深さ1.1m、底部の海拔高188.4mを測る。埋土は黒褐色砂質土でこれに混じって5~40cm大の礫が投げ込まれたように出土しており、堀2掘削に伴って埋め戻されたと考える。(江見)

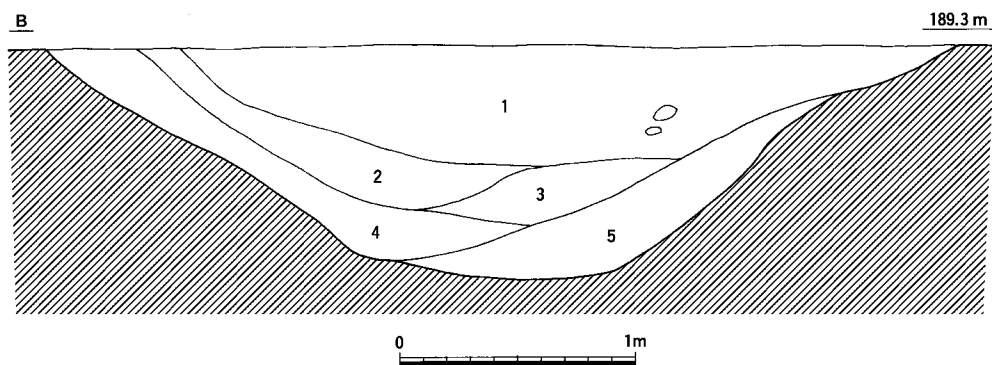
堀1東辺 北端が矩形を呈さないものの長さ約80mを検出した。断面Bの辺りで幅3.8m、深さ1m、底部の海拔高188.2mを測る。断面から明らかなように最低一度の掘り返しがなされている。

遺物は土師器・瓦質土器・備前焼、砥石、銭貨、土錘などが出土しているが、小皿1509~1512、備前焼播鉢1518・1519・甕1521は上層からの出土で混入の可能性が高く、特に、土師器小皿は近世に属すものと思われ、これらを除くと堀として機能していたのは14世紀代と考える。(江見)

堀1南辺 東西方向へ約70mにおよび、上面での最大幅は3.5m、深さが90cmをはかる。埋土や基盤層

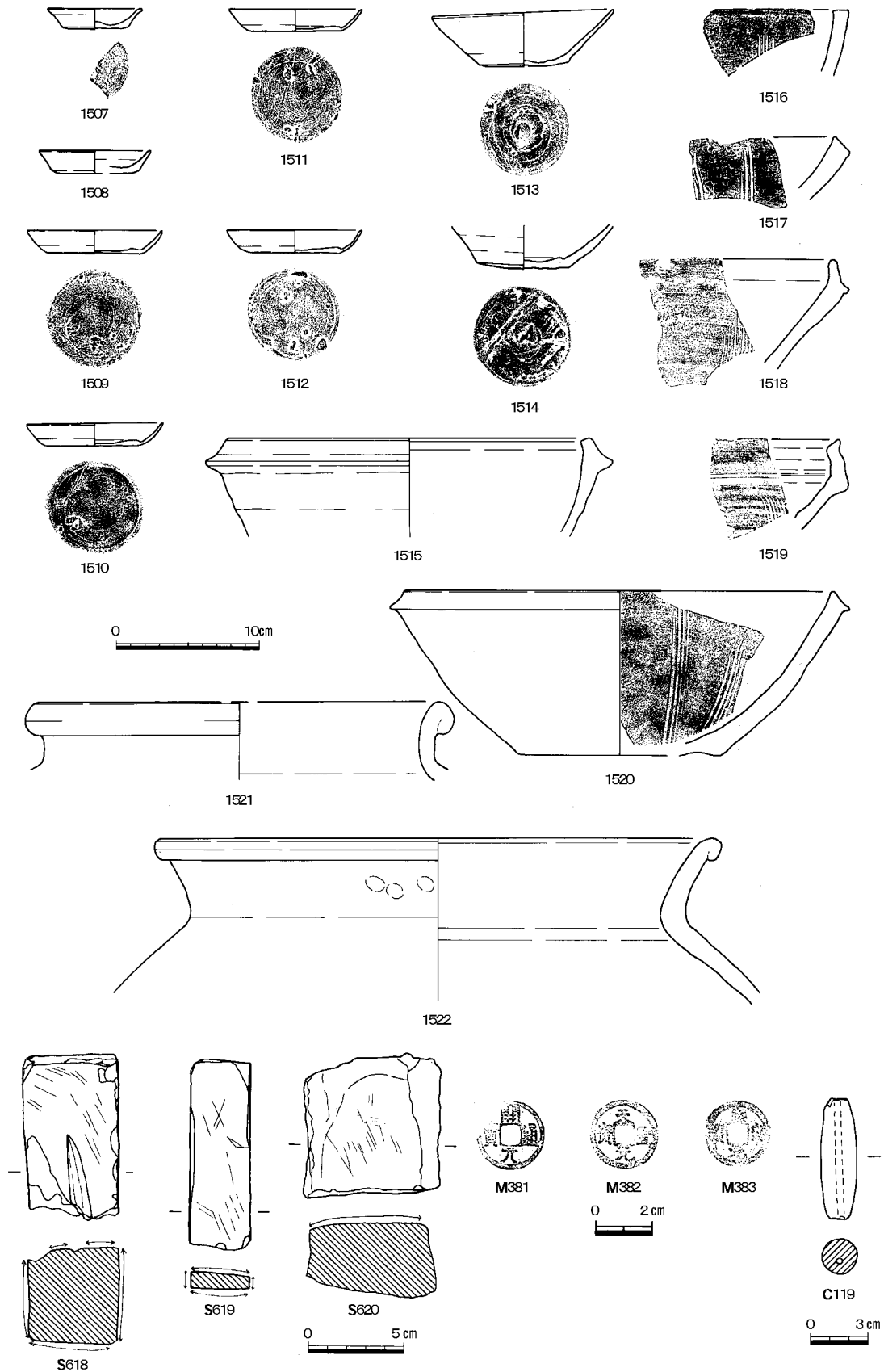


第693図 堀1北辺断面 (1/30)



- 1 褐灰色砂質土 (砂礫混)      3 淡褐灰色砂質土 (砂礫混)      5 暗褐色砂質土
- 2 黄褐色砂質土 (砂礫多量混)      4 灰褐色砂質土

第694図 堀1東辺断面 (1/30)



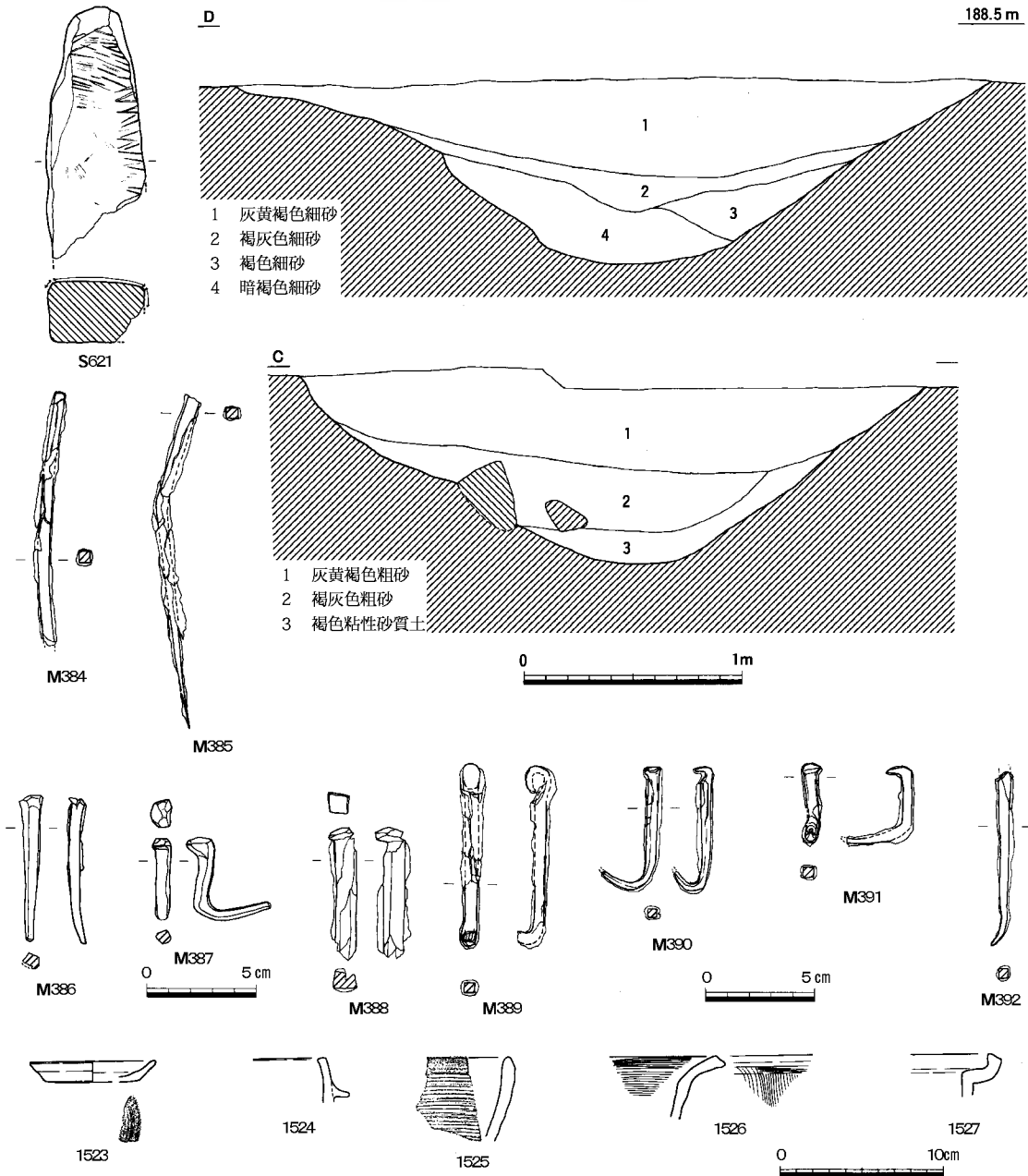
第695図 堀1東辺出土遺物 (1/4,1/3,1/2)

第3章 発掘調査の概要

からみて空堀であろう。西端は吉井川へは通じず、中近世の河道との境に約12mの空閑地があった。明瞭な痕跡はないが、道の可能性もある。出土土器類はごくわずかで、かつ細片であったため、堀の時期を決める根拠にかけ。他には砥石や火箸・釘がある。(弘田)



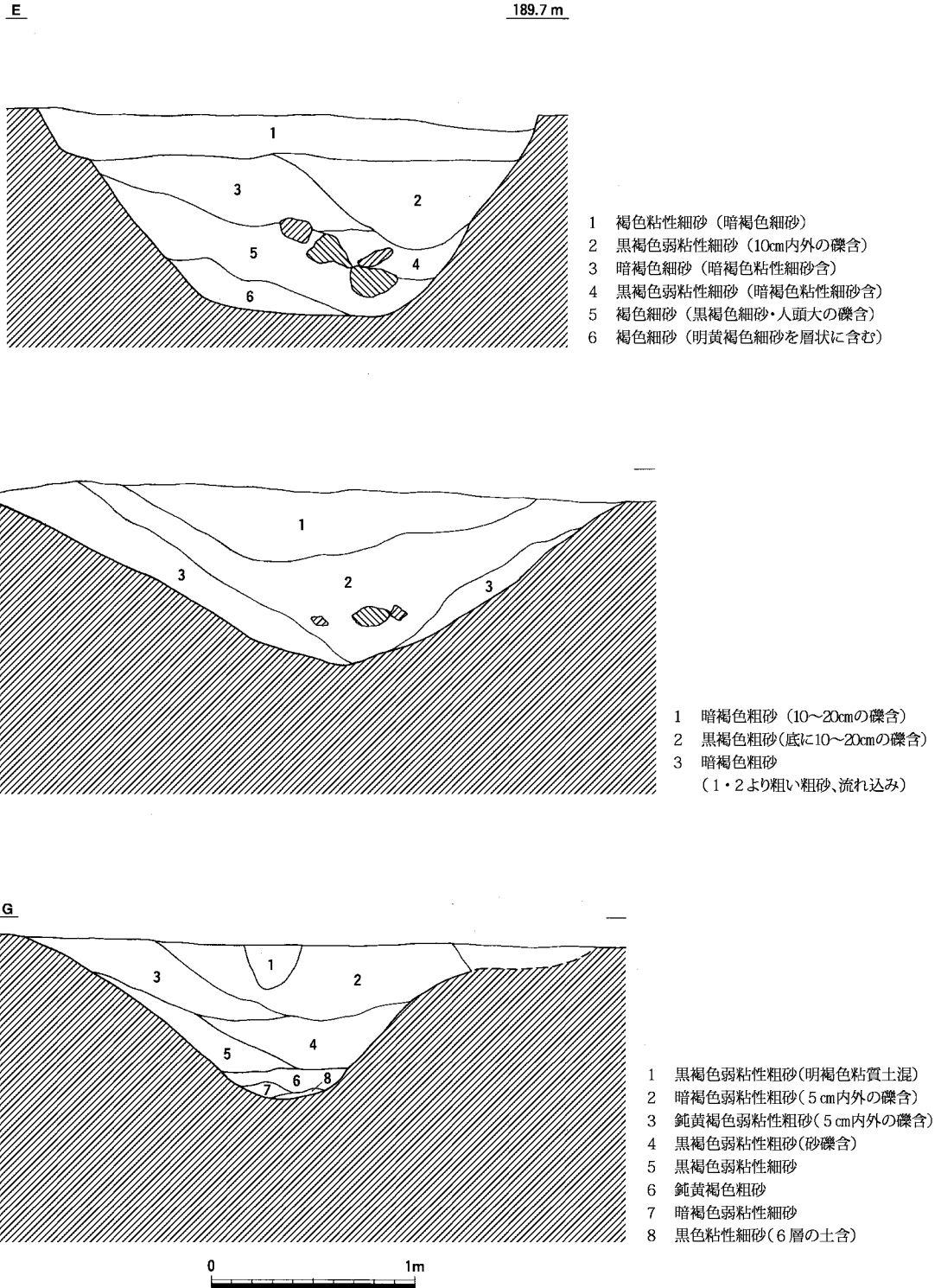
写真42 堀1掘り下げ作業(東から)



第696図 堀1南辺断面(1/30)・出土遺物(1/3,1/4)

堀 2 (第418~423・697~701図、図版125・126・128・139・151)

堀 2 北辺 堀 2 は 3 条ある堀のうち真ん中に位置する堀で、内側の堀 1 に後出すると考えられている。この堀 2 北辺の西部は近代の大規模な攪乱によって完全に削平され旧状を留めていない。幅は2.5~3.0

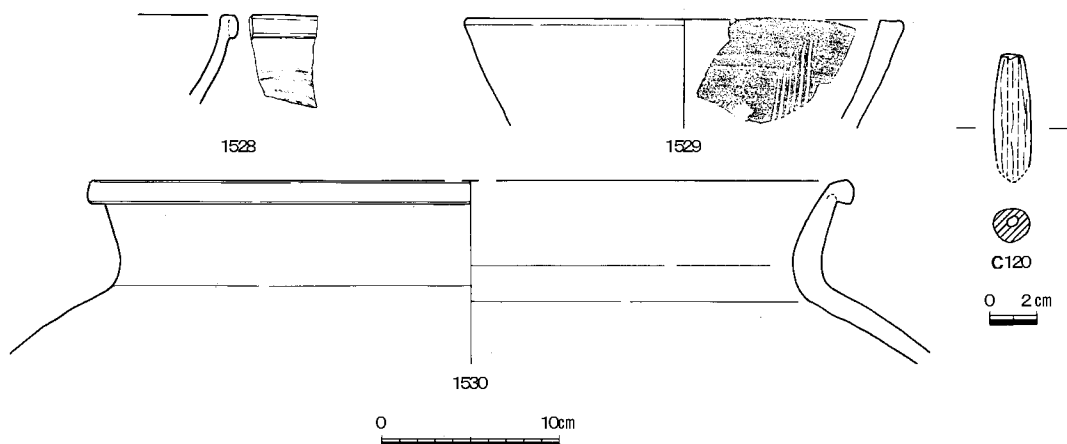


第697図 堀 2 北辺断面 (1/30)

第3章 発掘調査の概要

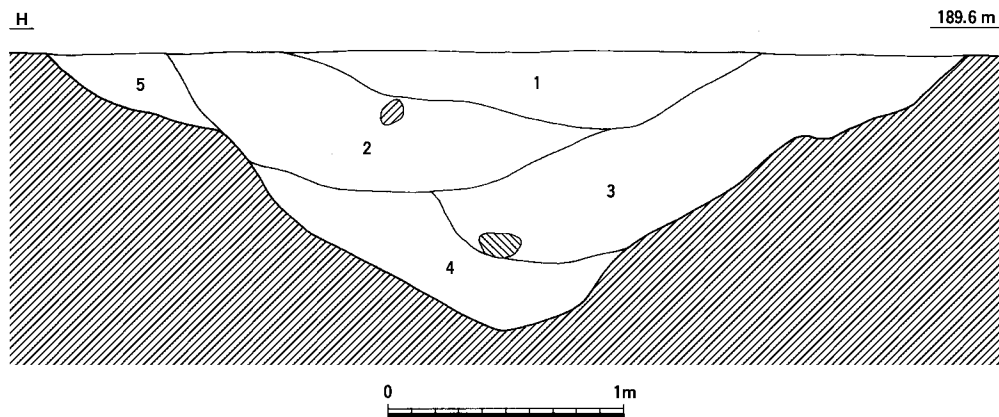
m、深さは0.8~1.0mを測る。断面をみると、F・G断面が逆三角形に近いのに対し、吉井川に近い遺跡西側のE断面では逆台形をなすが、これは南辺の状況とも通じるものがある。

出土した遺物のうち、1528は近世の肥前系陶器であり、混入と考えている。備前焼の播鉢1529や同じく大甕1530はともにⅢ期（鎌倉時代後半～南北朝期）に位置付けられ、堀2掘削から埋立までの時間幅のいずれかの一点を示す可能性があると思われる。（弘田）



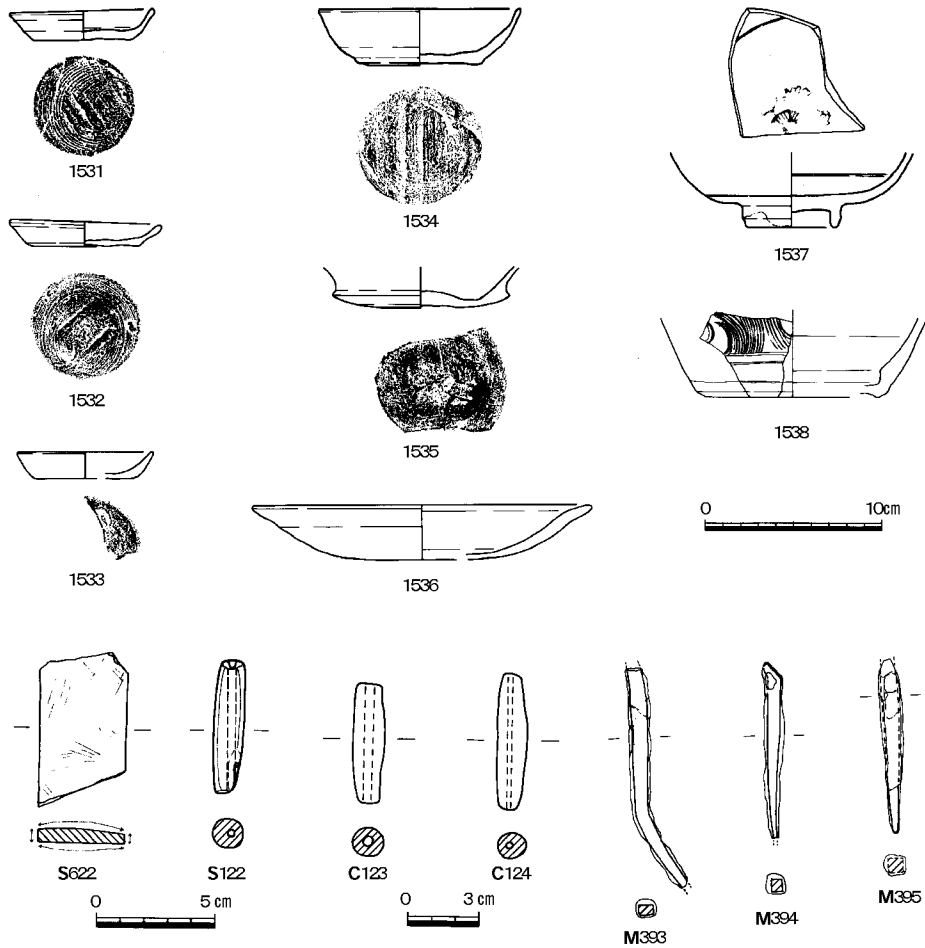
第698図 堀2北辺出土遺物（1/4,1/3）

堀2東辺 堀1の東約10mから検出された。東辺は長さ約95m、幅3.9m、深さ1.2m、底部の海拔高188.3mを測る。断面Hの辺りの断面は緩い「V」字状を呈し、最低一度の掘り返しがなされた状況を呈していた。遺物は土師器の小皿1531~1533、杯1534・1535、皿1536、青磁碗1537、砥石S622、土錘C122~C124、釘M393~M395などである。小皿の底部はいずれも糸切りされており、杯1535も同様である。青磁碗1537は15世紀代、梅瓶1538は13世紀代の年代観をもつもので、他の遺物と合わせれば当堀は14~15世紀にかけて機能していたものと考えられる。（江見）



- 1 灰褐色砂質土（砂礫混）      3 褐色砂質土（砂礫混）      5 淡黄灰色砂質土（砂礫混）
- 2 黄褐色砂質土（砂礫混）      4 暗褐色砂質土（礫量混）

第699図 堀2東辺断面（1/30）



第700図 堀2東辺出土遺物 (1/4, 1/3)

堀2南辺 検出面において、幅が4m、深さは1.1mを測るが、西に行くにつれ幅と深さを減じる。断面は逆台形を呈する。旧地形が南に低く、そのために同じ堀2の北辺や東辺と比べると、堀底の比高差が1mほど低い。

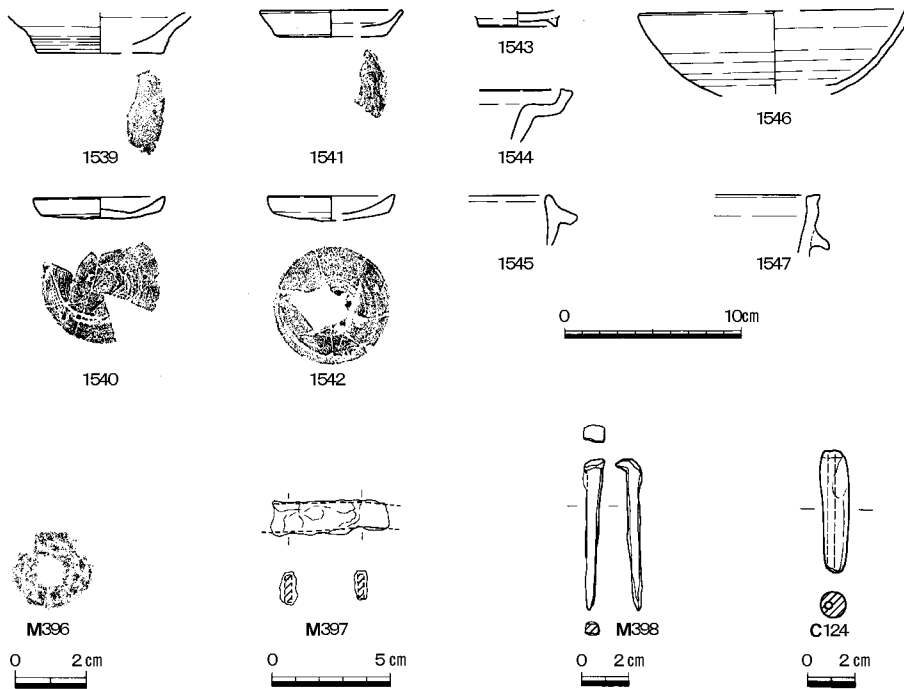
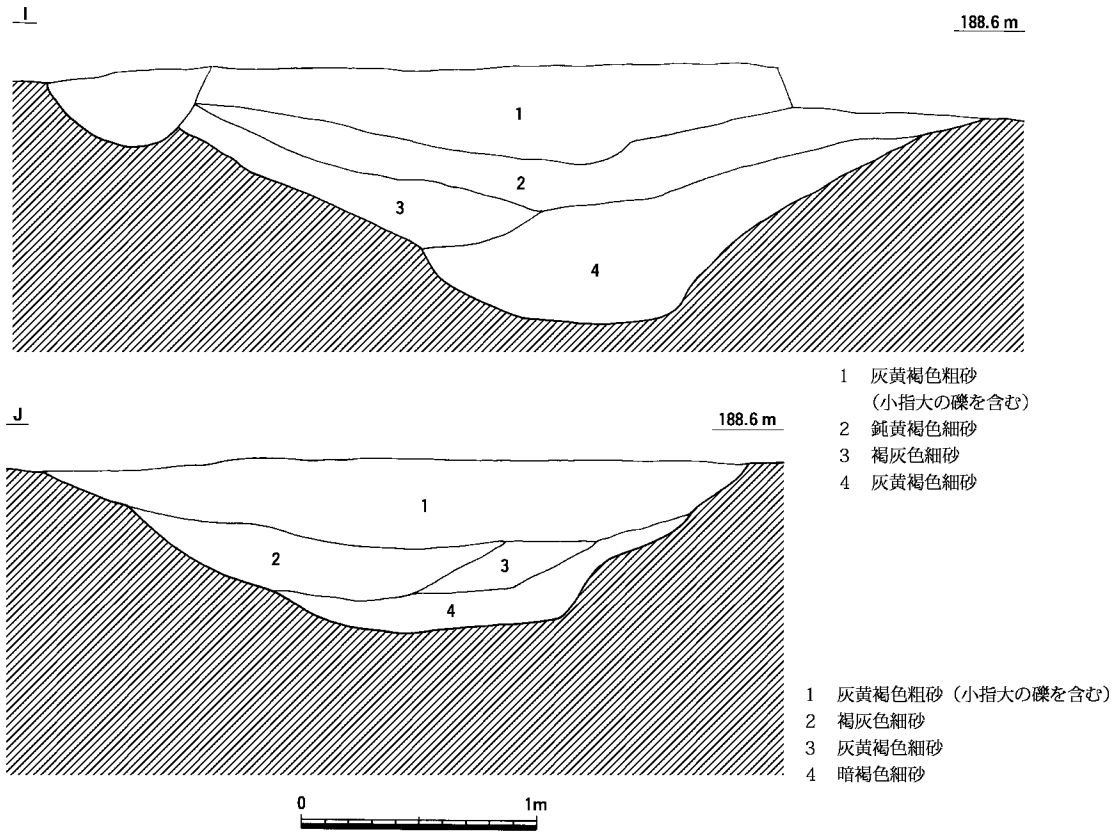
出土遺物は、決して多いとはいえない。土師器では、杯1539、小皿1540～1542に東北地域では出土例が少ない吉備系土師器椀1543、瓦質土器の鍋1544、羽釜1545・1547、勝間田焼の椀2377や土器以外でも銭M396、刀子M397、釘M398に土錘C124がある。1543は14世紀初頭、1546は13世紀前半に位置付けられるが、堀2の年代を表す可能性は低く、埋め立ての際の混入の可能性はある。(弘田)



写真43 堀2南辺作業風景 (東から)



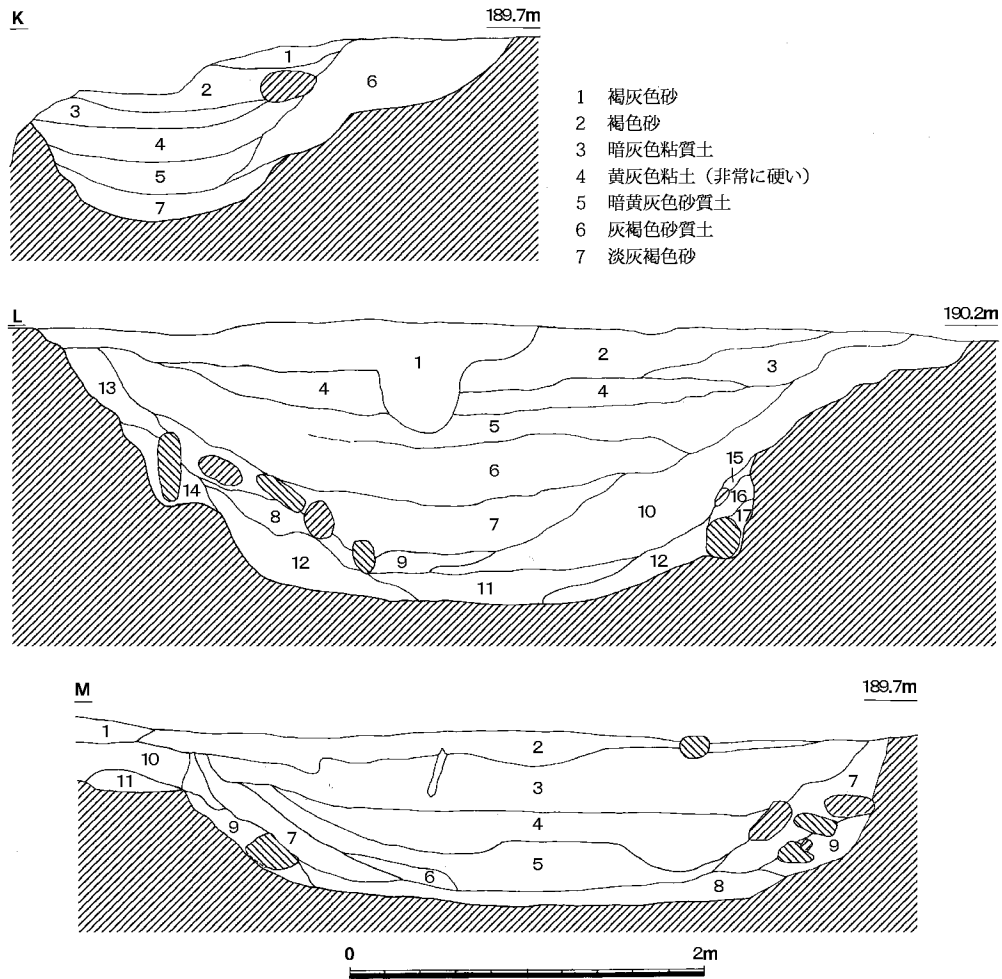
第3章 発掘調査の概要



第701図 堀2南辺断面 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2,1/3)

堀3 (第417~419・421~423・425・702~711図、図版126・127・128・139・151)

堀3北辺 長さが100mに及び、最大幅5.2m、深さ1.6mの逆台形を呈し、両側の側面は、貼石がみられる(第702図)。堀の西端は吉井川に抜けずに終わり、K断面では幅が約3mと減じる。この部分では貼石も不明瞭であったが、6層は貼石の掘り方であろう。貼石は7層(L断面の11・12層、M断面の8層)堆積後の改修時に行われている。また、K・L断面の4層、M断面の3層は非常に硬くしまった粘土で、意図的に埋め戻されたとみられる。遺物は、近世になる最上層を除き皆無に近く、この部分では堀の掘削や貼石構築の時期は確定できなかった。(弘田)

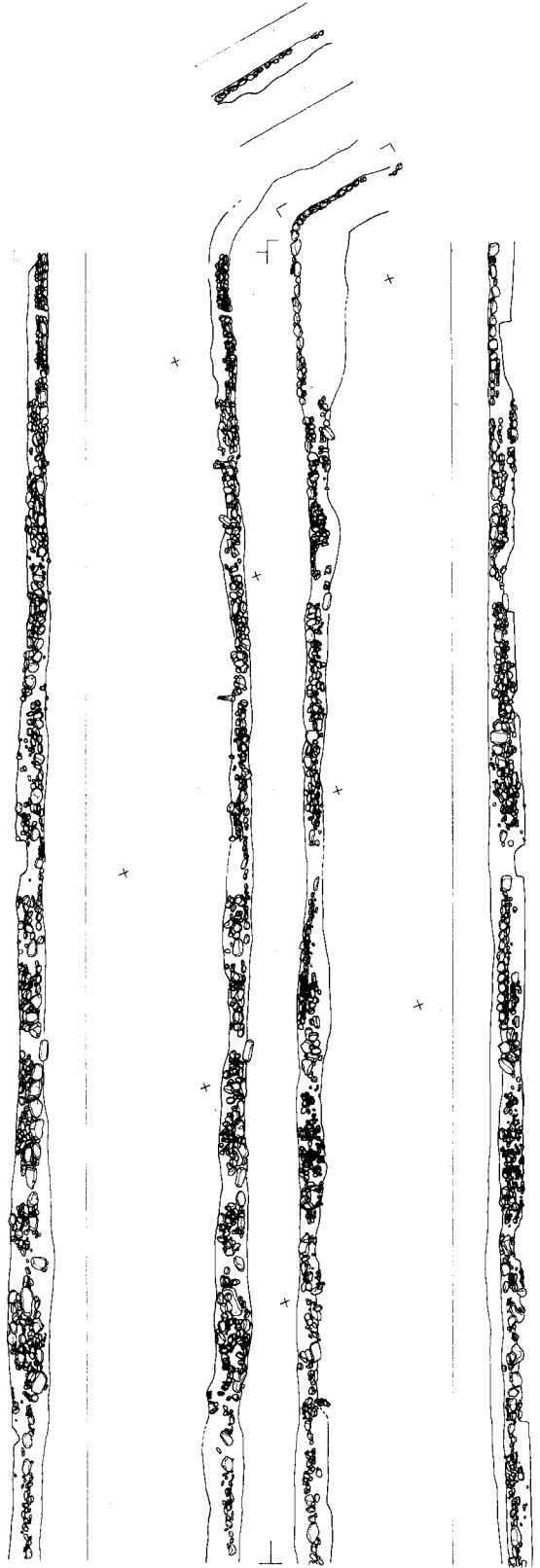


- |          |                |             |                      |
|----------|----------------|-------------|----------------------|
| 1 淡褐色粗砂  | 10 淡褐色灰砂質土(細砂) | 1 暗黄褐色砂土    | 7 褐色粗砂土(小石含)         |
| 2 明黄灰色粘土 | 11 灰色粘質土       | 2 灰褐色土(小石含) | 8 暗灰褐色微砂             |
| 3 暗黄灰色粘土 | 12 暗黄灰色粗砂      | 3 明黄灰色粘質土   | 9 暗灰褐色砂質土            |
| 4 黄灰色粘土  | 13 淡褐色砂質土      | 4 暗黄灰色細砂土   | 10 暗黄褐色微~細砂          |
| 5 暗黄灰色粘土 | 14 褐色砂質土       | 5 灰黄色粗砂     | 11 暗黄褐色微~細砂(10より明るい) |
| 6 淡灰色微砂  | 15 暗青灰色砂質土     | 6 暗黄灰色細砂土   |                      |
| 7 灰色粗砂   | 16 淡褐色砂質土      |             |                      |
| 8 暗灰色粘質土 | 17 暗青灰色砂質土     |             |                      |
| 9 淡灰色粘質土 |                |             |                      |

第702図 堀3北辺断面(1/40)

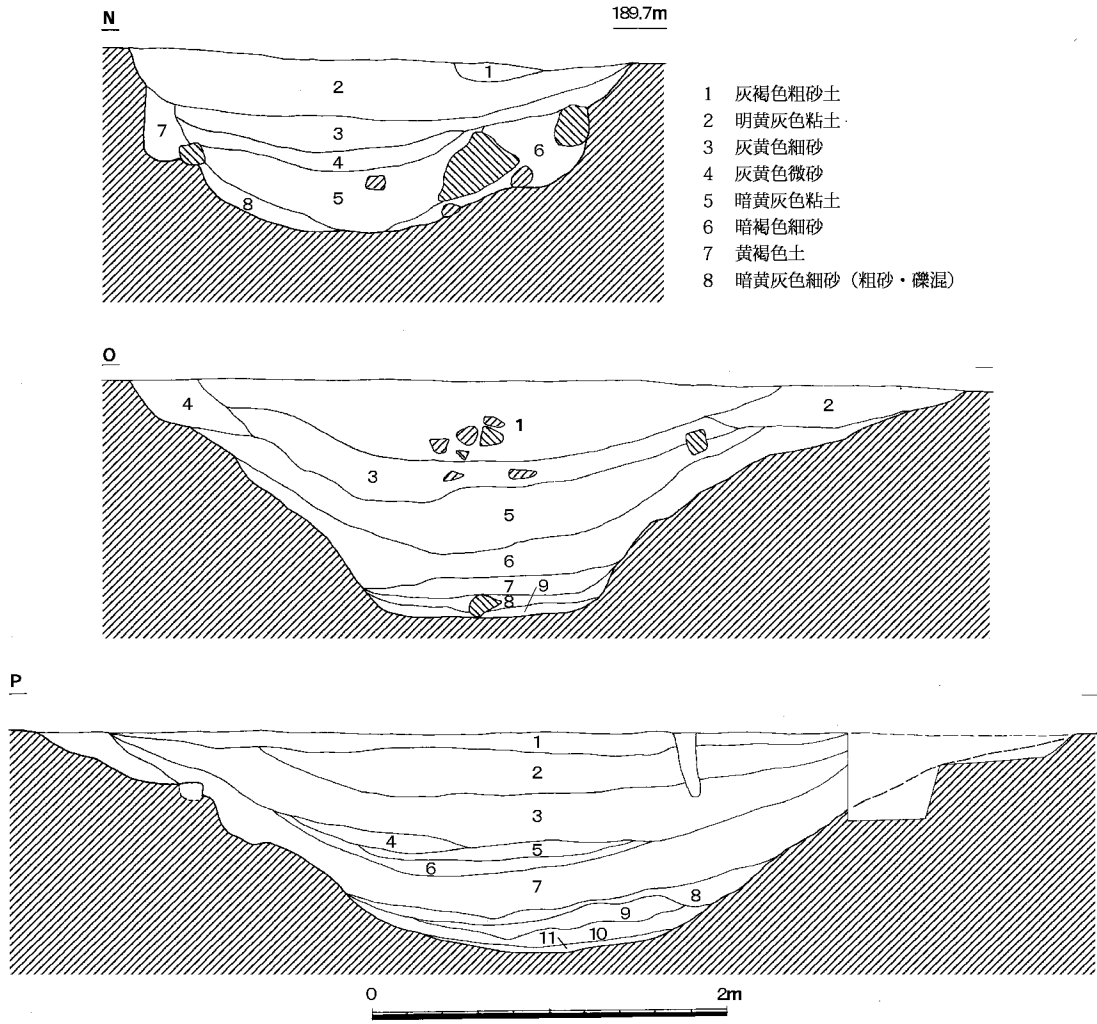


写真44 堀3石貼部分



第708図 堀3北辺貼石平・断面 (1/300)

堀3東辺北半部 検出面での幅が2.8~5.8m、深さは1.0~1.35mを測り、断面逆台形ないし緩いU字状を呈する。北端はやや幅が狭まり、かつ北辺と同様に貼石が存在したようで、根石列がわずかに残存した。O断面の2層、P断面の2・3層は堅牢な粘土層で、近世段階に水溜として利用するために埋め立てられたようである。またこの東辺からは、後述する堀4が分岐する(第705図)が、両者は当初より一連の堀として掘削されたと考えられる。堀4の埋没状況と同様に東(堀4の方向)側から大き



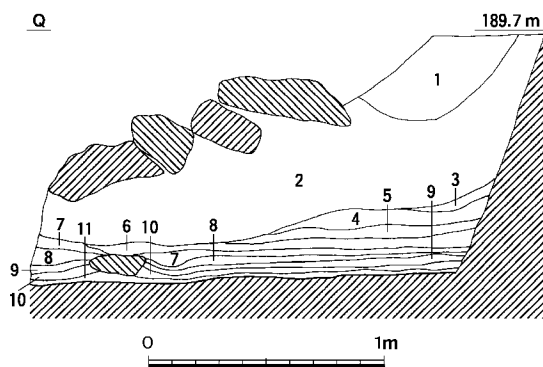
- |                            |                        |                |
|----------------------------|------------------------|----------------|
| 1 暗褐色粘性粗砂(15~20cmの礫を下部に多含) | 1 灰黄褐色粘性粗砂             | 8 黒褐色弱粘性極細砂    |
| 2 鈍黄褐色粘性粗砂                 | 2 鈍黄褐色粘質土              | 9 灰黄褐色弱粘性細砂    |
| 3 鈍黄褐色粘質土(明黄褐色粘質土混)        | 3 鈍黄褐色粘質土に鈍黄橙色粘土質を層状に含 | (褐色粗砂とFeを層状に含) |
| 4 鈍黄褐色粘性粗砂                 | 4 鈍黄褐色の粘質土と粗砂が混        | 10 褐色粗砂        |
| 5 鈍黄褐色粘性粗砂                 | 5 鈍黄褐色粗砂               | 11 黒褐色弱粘性極細砂   |
| 6 黒褐色弱粘性細砂                 | 6 鈍黄褐色粘質土              | 12 鈍黄褐色粘質土     |
| 7 鈍黄褐色粗砂と黒褐色弱粘性細砂が層状に混     | 7 鈍黄褐色(上部は粘質で下は粗砂Fe混)  |                |
| 8 黒褐色粘性極細砂                 |                        |                |
| 9 灰黄褐色細砂(Fe混)              |                        |                |

第704図 堀3東辺断面(1/40)

第3章 発掘調査の概要

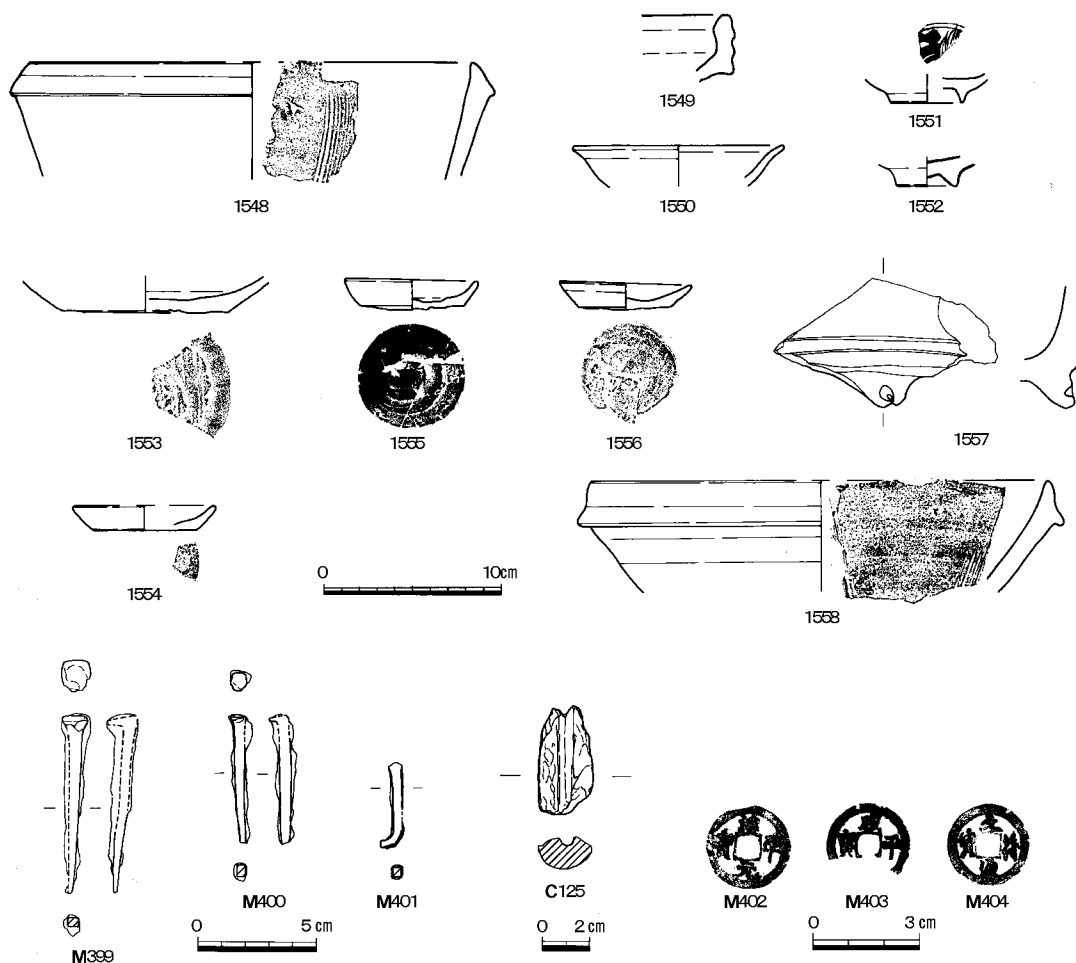
な石材が放り込まれていたが、性格は不明である。

出土した遺物には、土師器、備前焼、青磁、白磁、青花、備前焼、瓦質土器、鉄釘、銭貨、土錘など多種多様である。このうち備前焼には、上層から出土した播鉢1549（V期）、下層から出土した播鉢1558（IV B期）があり、また青花では16世紀後半の皿1551が、最下層から出土した土師器皿1553とともにこの堀の使用時期を示すと考えられる。（弘田）



- 1 黒褐色弱粘性粗砂（暗褐色粘質土魂混）
- 2 暗褐色粘性粗砂（褐色粘質土魂混）
- 3 鈍黄褐色弱粘性細砂（Fe少量混）
- 4 暗褐色弱粘性細砂（Fe混）
- 5 褐灰色粘質土（シルト？）（Fe混）
- 6 灰黄褐色粘質土（鈍黄褐色粗砂混）
- 7 灰黄褐色粘質土（シルト？）
- 8 灰黄褐色弱粘性粗砂
- 9 黒褐色弱粘性粗砂（鈍黄褐色粗砂を層状に混）
- 10 鈍黄褐色粗砂（黒褐色弱粘性粗砂を層状に混）
- 11 黒褐色粗砂

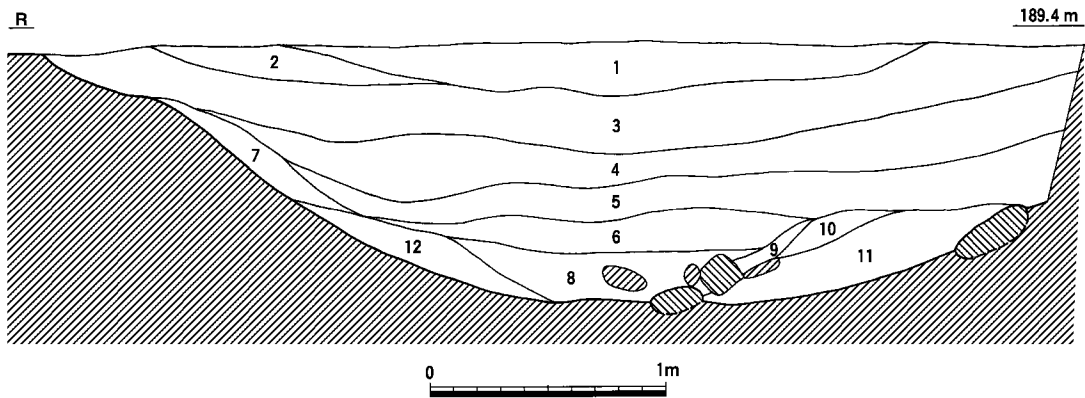
第705図 堀3・4分岐部断面（1/30）



第706図 堀3東辺北部出土遺物（1/4,1/3,1/2）

堀3東辺南半部 堀2の東約20mから検出されたが、東肩部は町道によって調査不可能であった。この辺りで推定幅約5m、深さ1.1m、底部海拔高188.2mを測る。断面は緩やかな逆台形状を呈す。埋土の第8層は厚い粘土層からなり、堀の埋め戻し時に意識的に埋められたものと判断された。遺物は土師器の小皿1559～1564、皿1565～1567、杯1568・1569、備前焼壺1570、瀬戸香炉1571、播鉢1572～1575、甕1576、瀬戸美濃椀1577・1578、青磁1579～1584、砥石、釘など15世紀代遺物が出土した。（江見）

堀3南辺東半部 堀3南辺は東西端部を丸く収めており、堀1、2のように「コ」字状を呈していない。南辺東端部から4m北側で東辺南端部が丸く収められていることから、間は陸橋として活用していたと考えられ、そのことは陸橋部分が出入り口であったことを示している。なお、南辺東端部の底には柱穴が、部分的ではあるが、列状に検出されており、柵の可能性もある。（上村）



- |                             |                           |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1 淡褐灰色弱粘質土（黄褐色粘質土、砂礫少量混）    | 7 黄褐色砂質土                  |
| 2 淡黄灰色弱粘質土（鉄分、黄褐色粘土混、砂礫少量混） | 8 淡黄褐色粘土（シルト？5～20cmの砂礫）   |
| 3 灰褐色弱粘質土（黄褐色粘土混、砂礫少量混）     | 9 淡黄褐色粘土（シルト？5～20cmの砂礫）   |
| 4 褐灰色弱粘質土（黄褐色粘土混、砂礫少量混）     | 10 褐色砂質土                  |
| 5 褐灰色粘質土（黄褐色粘土炭化物、砂礫少量混）    | 11 褐灰色砂質土                 |
| 6 褐灰色弱粘質土（砂礫少量混）            | 12 褐灰色粘質土（黄褐色粘土炭化物、砂礫少量混） |

第707図 堀3東辺南部断面（1/30）・出土遺物（1/4）

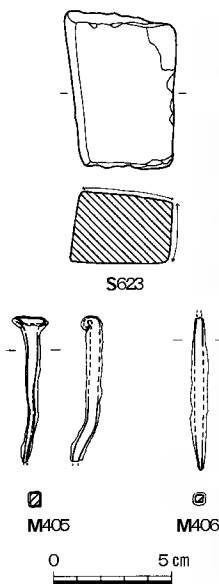
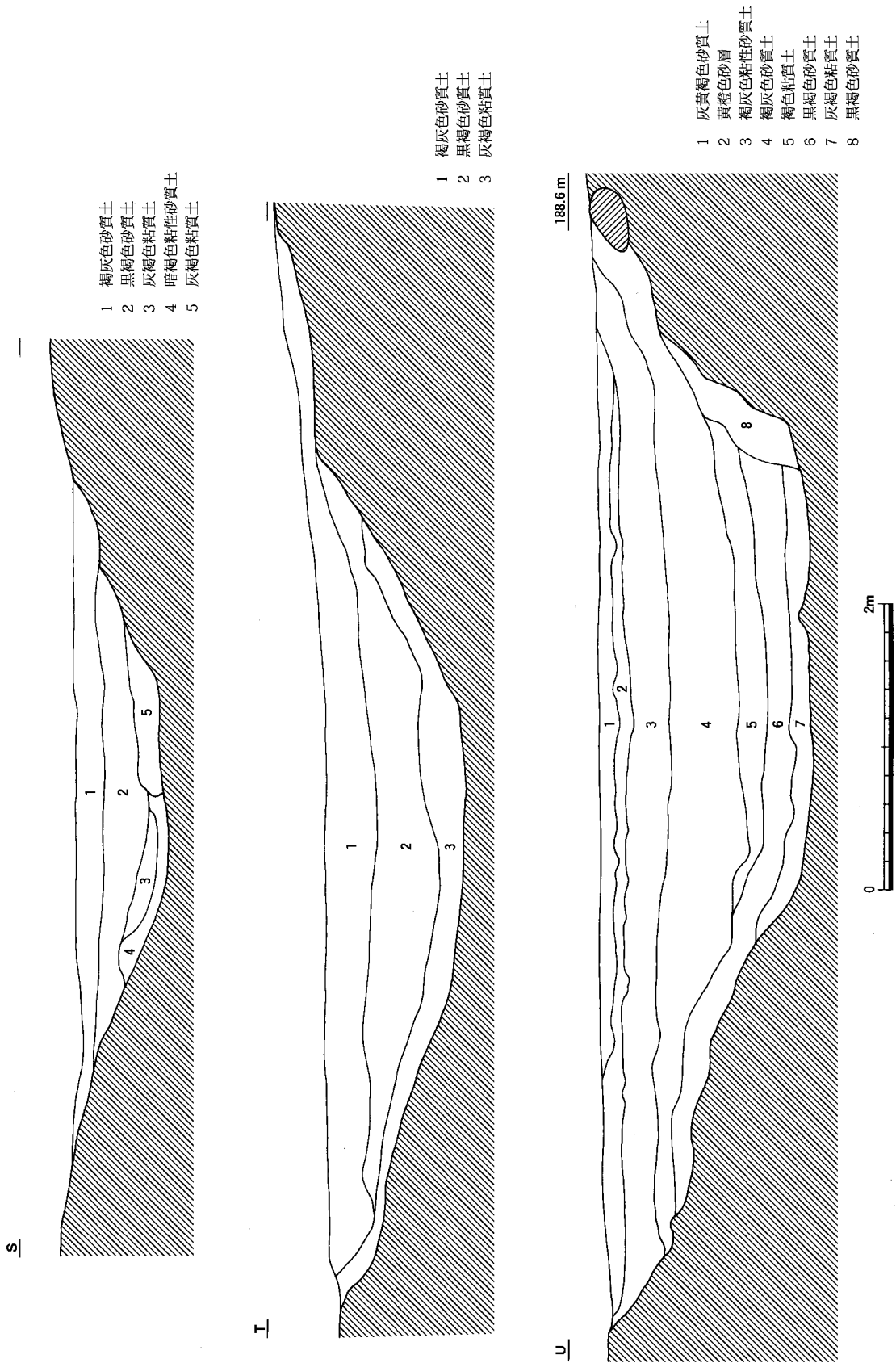
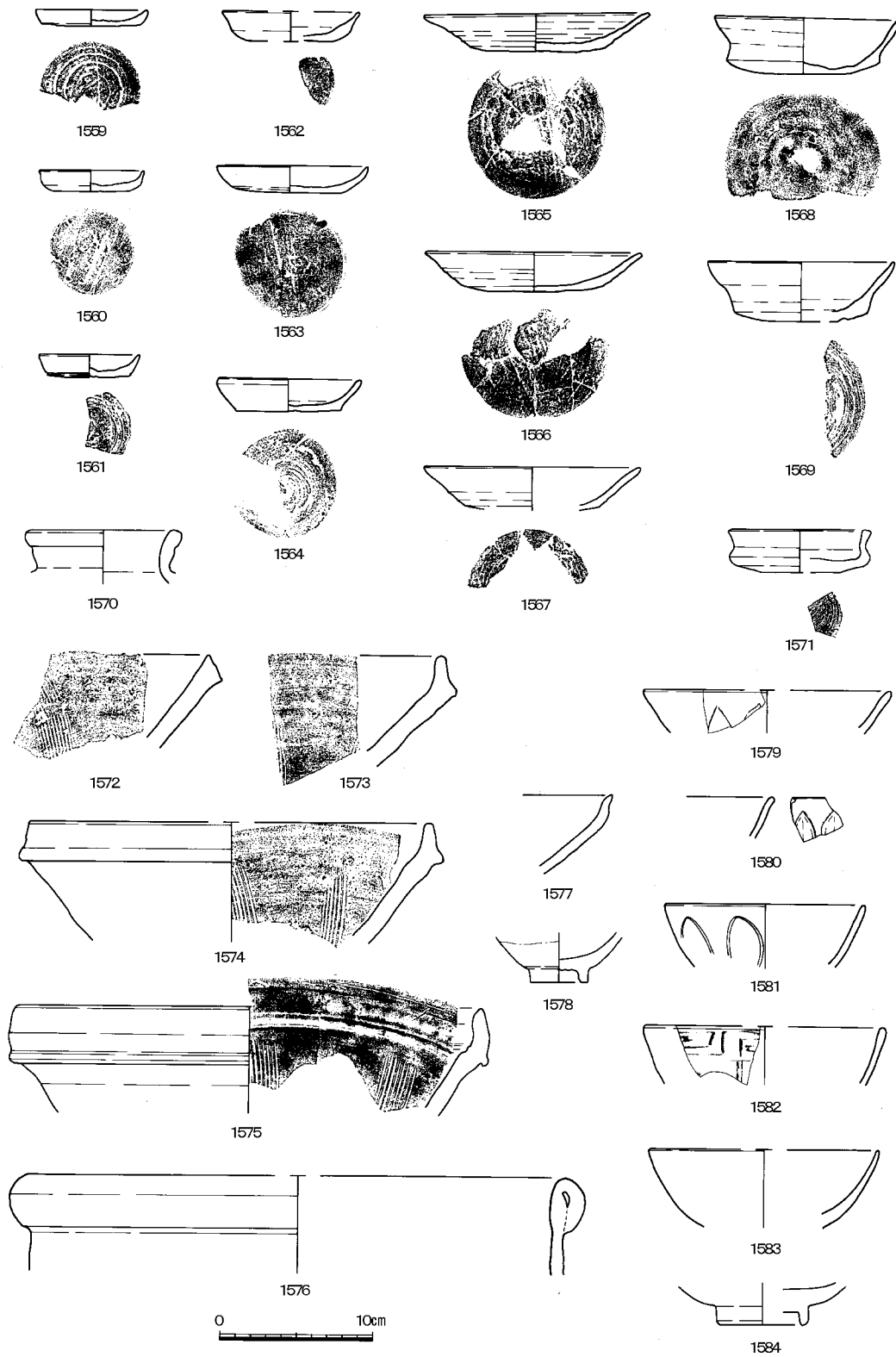


写真45 堀3東辺作業風景



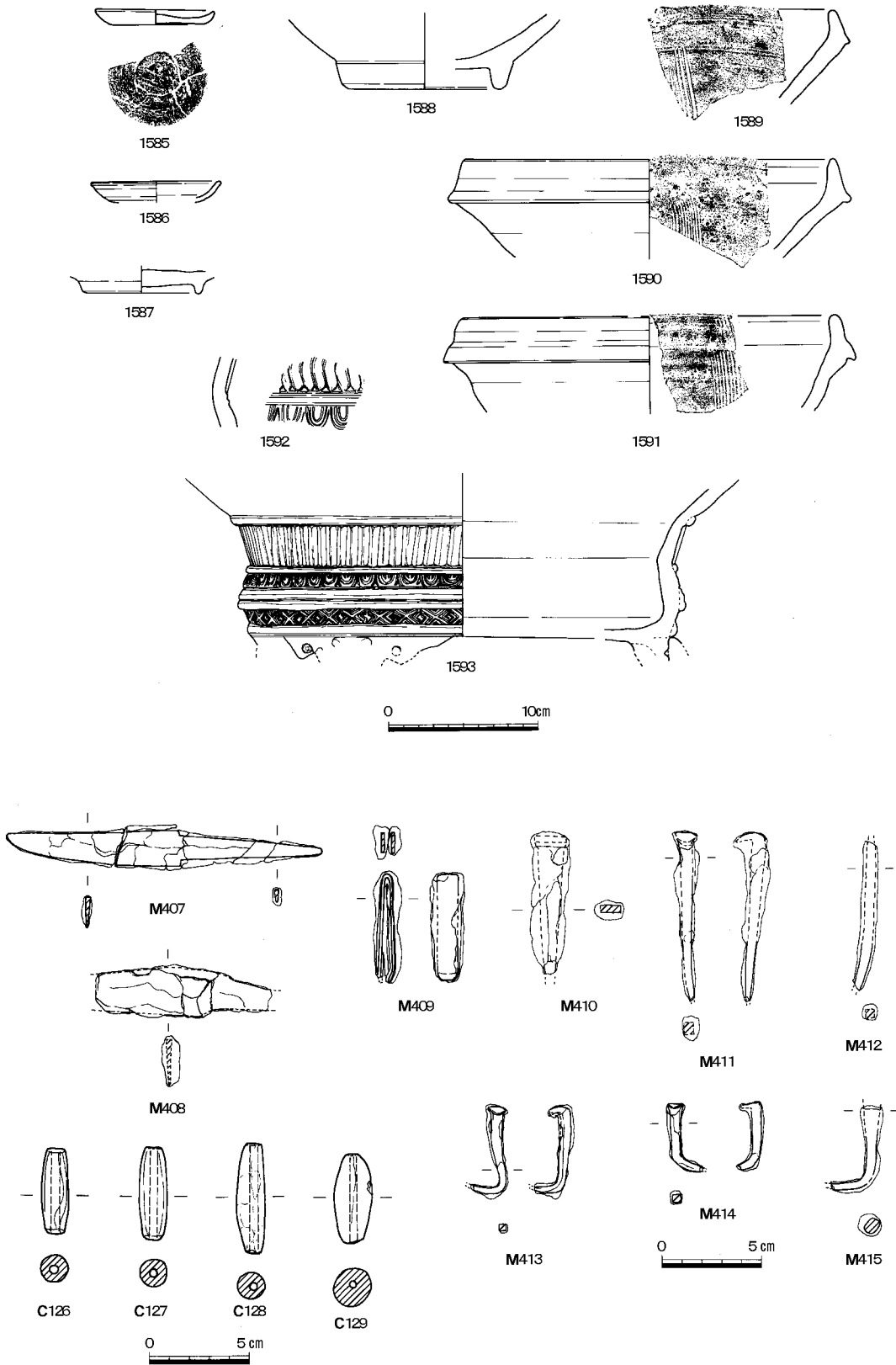
第708図 堀3南辺東部断面 (1/40)



第709図 堀3東辺南部・南辺東部出土遺物 (1/4)



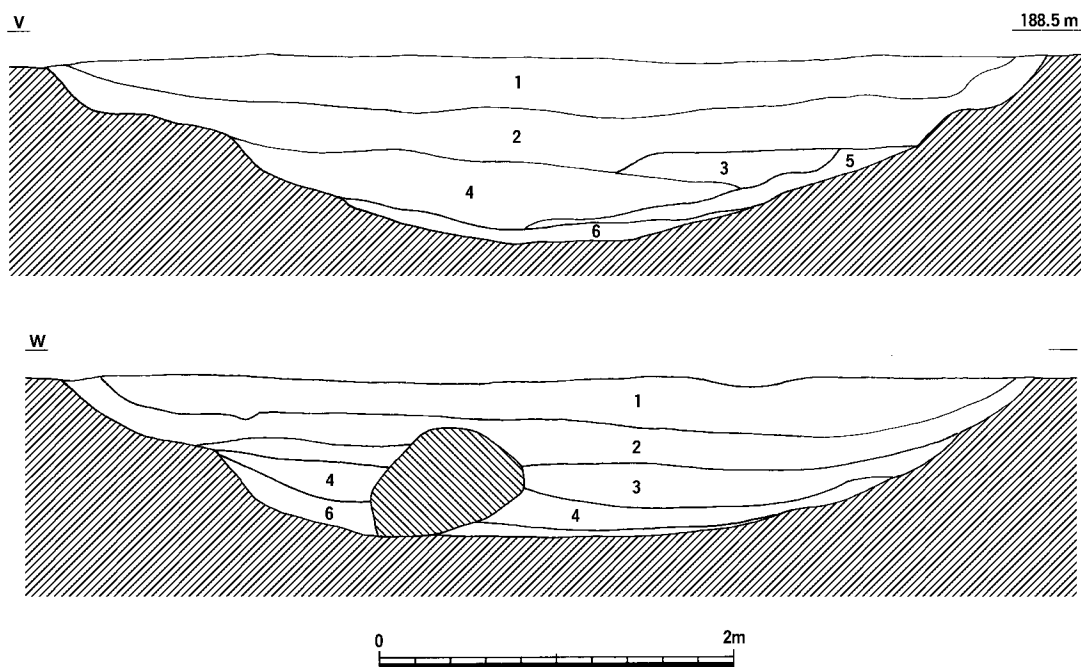
第3章 発掘調査の概要



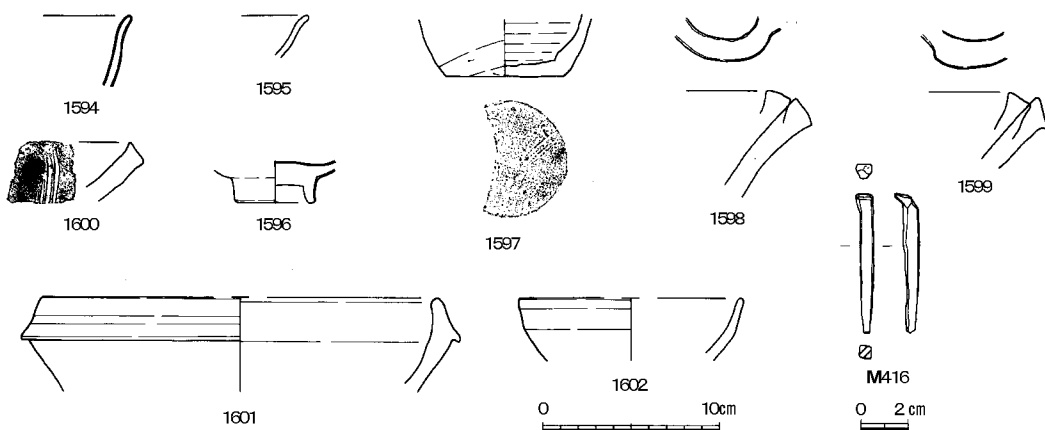
第710図 堀3南辺東半部出土遺物 (1/4,1/3)

堀3南辺西半部 V断面での幅5.7m、深さ1mを測る。断面は、緩やかなU字形となり、北辺や東辺でみられた固い粘土層はみられなかった。ただし、居館内部における掘立柱建物群の検出面と比べて、最大で1mの比高差が存在することからみて、堀3南辺あたりは近世の開田時に地下げされた可能性も考えられる。

出土遺物には、無文の青磁碗1594～1597があり、そのなかでも1596は、底部外面無釉である。備前焼では、壺1597、播鉢1597～1600（IVA期）・1601（IVB期）があるほか、中国産と思われる天目碗1602、鉄釘などもみられる。 (弘田)



- |           |         |                    |
|-----------|---------|--------------------|
| 1 灰黄褐色微砂  | 3 褐灰色細砂 | 5 黒褐色細砂（砂がブロック状に含） |
| 2 褐灰色粘性細砂 | 4 黒褐色細砂 | 6 灰褐色粘質土           |



第711図 堀3南辺西部断面（1/30）・出土遺物（1/4）

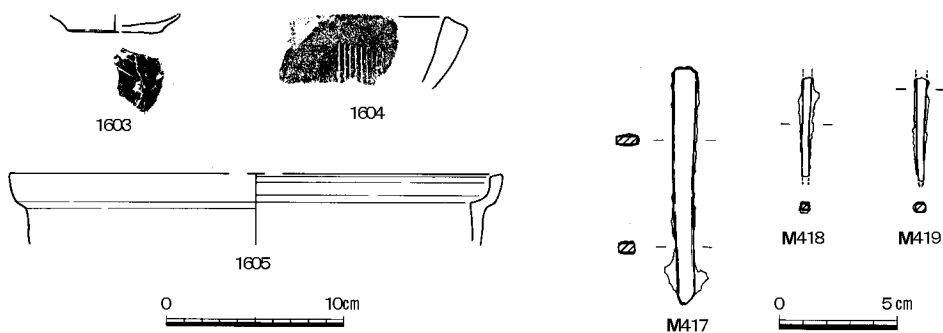
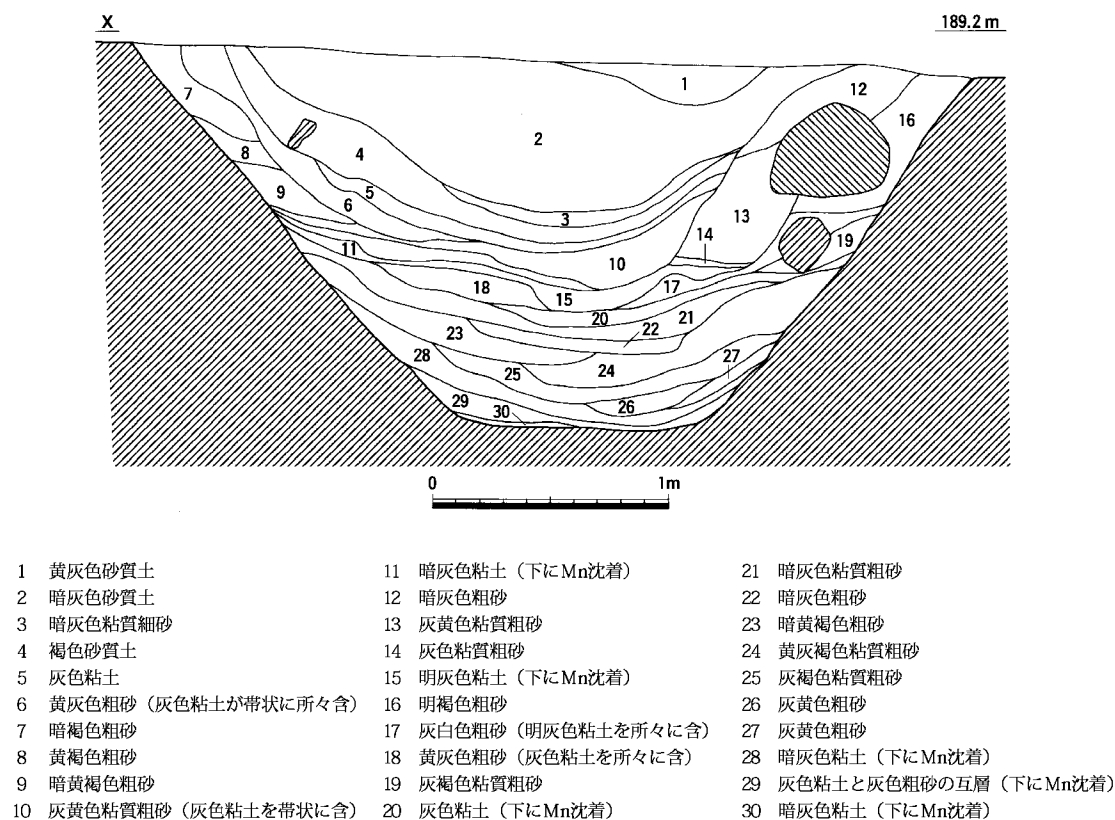
第3章 発掘調査の概要

堀4 (第418・424・712図、図版129)

4 0 03Ci～4 0 03Da区において検出しており、東西方向に30m近くある。東は河道の肩部から西へ2 mの所で終わっていたが、通路であろうか。西側は、居館部外側の堀3とつながる。その分岐部の観察から同時並存していたことが明らかとなった。断面部での幅3.6m、深さ1.55mを測る。底面は東に高く、西に向かって徐々に低くなる。断面部での海拔高は189.62mである。断面土層は複雑であるが半分ほどは徐々に埋まったと考えられ、最後は一気に埋められているようである。その段階において巨大な石も投げ込まれていた。

堀内からの出土遺物は少なく、土器では、土師器小皿の底部2434が1点と、瓦質播鉢3435、瓦質鍋3436が、金属器では、釘M490～492の3本のみである。

この堀の時期は、15世紀後半に掘削され、近世の初頭まで機能していたと考えられる。(伊藤)

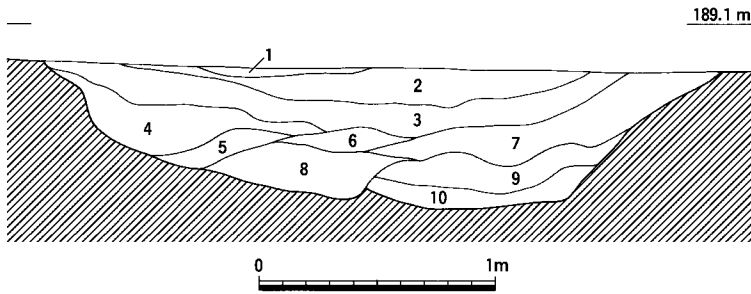


第712図 堀4断面 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

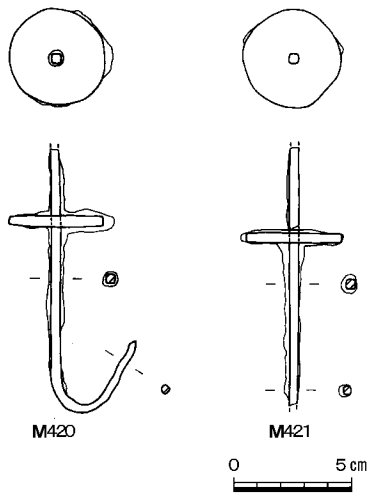
12 溝

溝22 (第421・713図、図版129・148)

4 008Bi区に位置し、幅5.76m、深さ1.18mを測る。1度の掘り直しが認められる。南側は徐々に浅くなり、北側は破壊を受けている。所属時期は埋土から判断して中世の範疇と考える。鉄製紡錘車M



- 1 黒褐色砂質土
- 2 鈍黄褐色砂質土 (黒褐色混)
- 3 黒褐色砂質土 (礫含)
- 4 鈍黄褐色粗砂
- 5 鈍黄褐色砂質土
- 6 暗褐色砂質土
- 7 黒褐色砂質土 (3より暗い) (ガラス多含、礫含)
- 8 7とほぼ同じ (黒褐色、鈍黄褐色を多含)
- 9 鈍黄褐色粗砂 (ガラス多含、礫多含)
- 10 鈍黄褐色砂質土 (礫含、黒色・黒褐色砂質土多混)

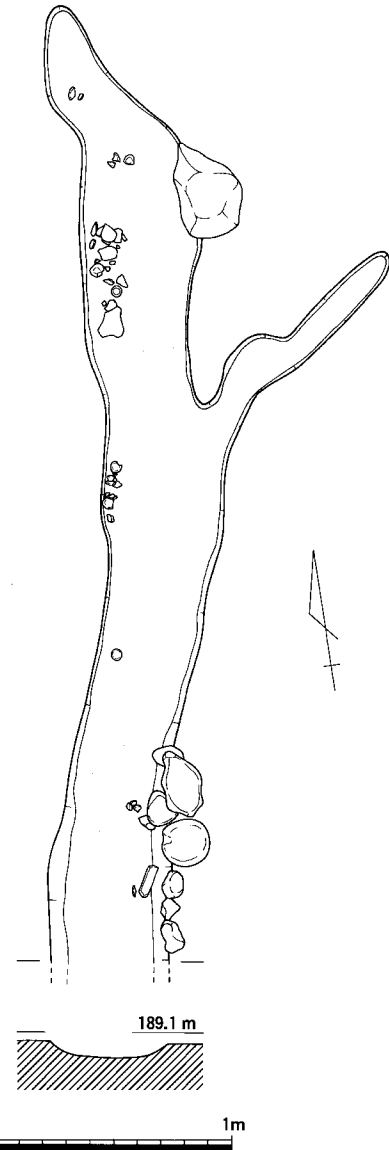


第713図 溝22断面 (1/30)・出土遺物 (1/3)

420・421が7層から出土している。(河合)

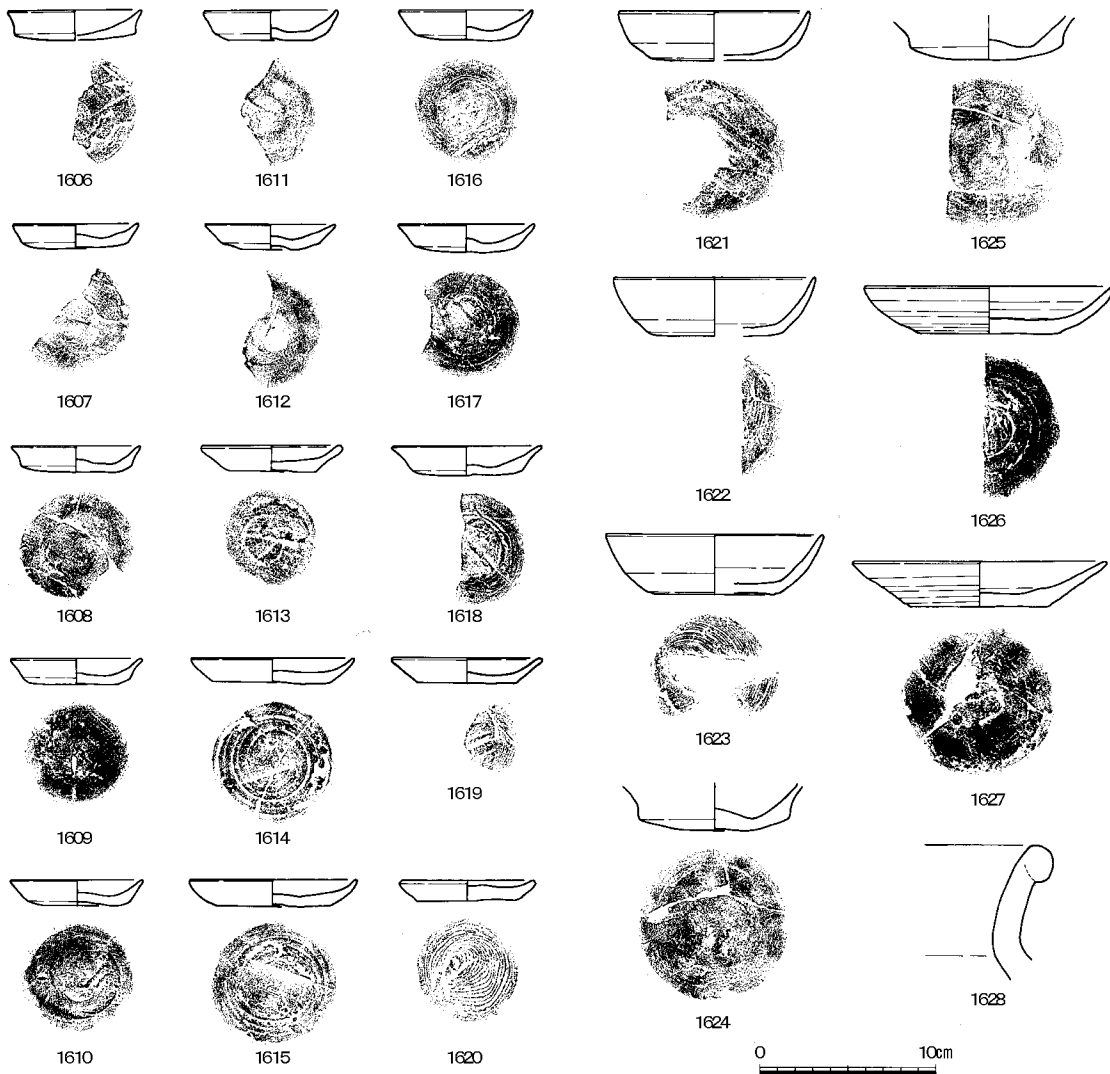
溝23 (第420・422・714・715図、写真46、図版140)

4 008~09Bj区に位置する。周辺も含め、当遺構からは大量の土師器小皿が出土している(1606~1620)。さらに杯1621~1625、皿1626・1627、備前焼甕の口縁部片1628などが認め



第714図 溝23平・断面 (1/30)

られた。小皿の大半が底部糸切り調整で、杯の形態などからも14世紀代と考えられる。(河合)



第715図 溝23出土遺物 (1/4, 1/3)

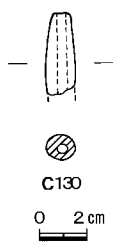


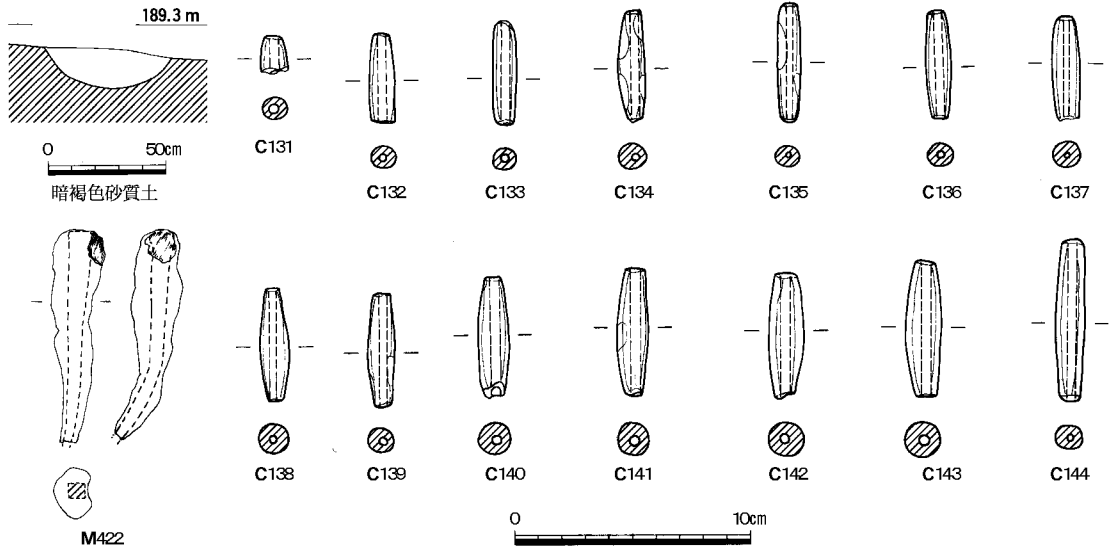
写真46 溝23遺物出土状況 (南から)

溝24 (第421・716図)

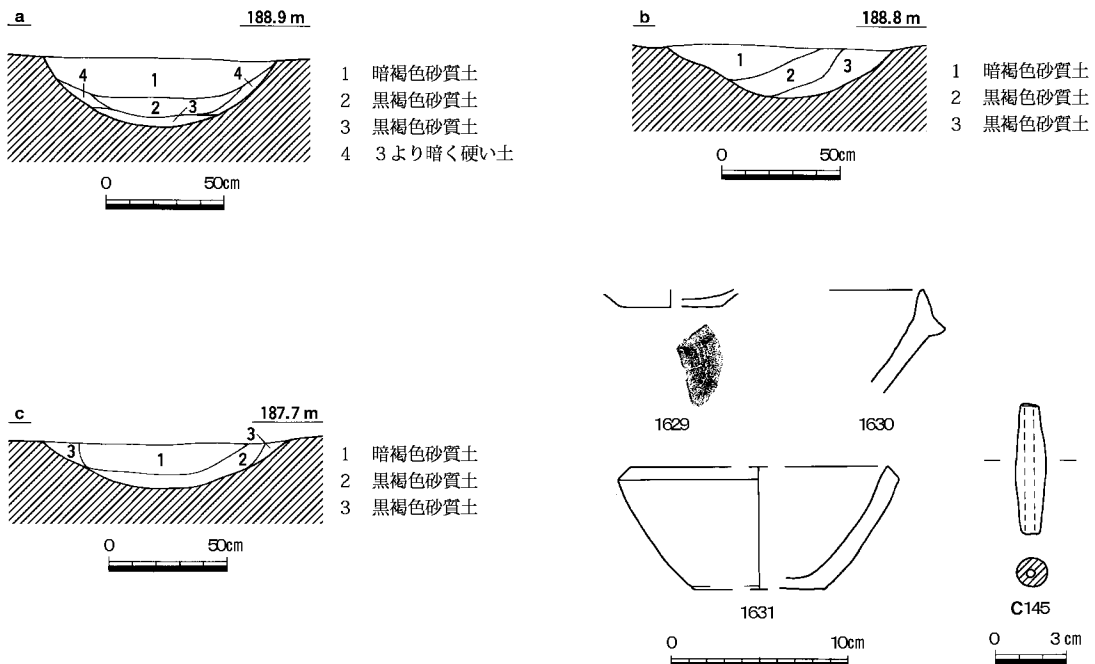
4 0 08Cc区、掘立柱建物6の北側から検出された東西方向に延びる溝で、部分的に長さ16m余りを検出した。幅54cm、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色砂質土で、遺物は土師器細片とともに釘M422、土錘C131~C144が出土した。なお、溝は位置関係から掘立柱建物6に伴う区画溝と考える。(江見)

溝25 (第422・717図)

4 1 00Ca~4 1 02Cf区に位置する。溝25は堀1・2および建物18などに切られており、付近の遺構の中ではもっとも古く位置づけられる。遺物には土師器皿1629、備前焼播鉢1630、捏鉢1631のほか土



第716図 溝24 (1/30)・出土遺物 (1/3)



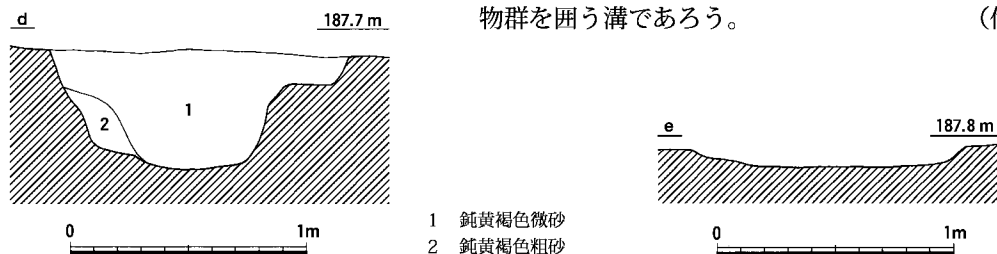
第717図 溝25 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

鍾C145がある。遺構の時期は備前焼捏鉢1631から13世紀中頃と考えておきたい。(河合)

溝26 (第425・718図)

4 1 06Bg~Bi区までほぼ東西に15m走り、Bi区から3mで北に折れ、弧を描きながら6mほどのびる。d断面において幅1.33m、深さ50cmを測る。底部の海拔は187.12mである。e断面では幅1.16m、深さ80cm、底面の海拔は187.58mを測る。南東の建

物群を囲う溝であろう。(伊藤)

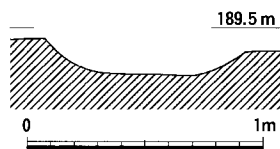


第718図 溝26 (1/30)

溝27 (第424・719図)

4 0 04Cj~4 0 04Da区にあり、ほぼ東西に走る溝状に遺構である。全長10m前後で、幅は80cm前後ある。深さは7cmで、底面の海拔高は、187.68mである。

出土遺物は見られない。掘立柱建物21・22の北側に位置し、これらを取り囲んだ可能性もある。(伊藤)

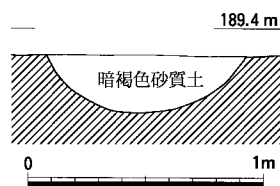


第719図 溝27 (1/30)

溝28 (第424・427・720図)

4 0 05Cj区にあり、全長2m程しか検出できていない。掘立柱建物22の南東角に位置し土壌155に切られている。幅85cm、深さ25cm、底面での海拔高は、189.05mである。

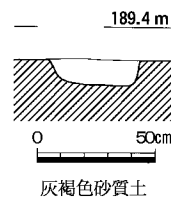
出土遺物は見られない。(伊藤)



第720図 溝28 (1/30)

溝29 (第424・721図)

4 0 05Ci~4 0 06Cj区にあり、北西から南東に走り、全長13m程が残る。断面位置での幅38cm、深さ12cmを測る。底面の海拔高は189mである。建物に伴う排水施設か。時期は中世である。(伊藤)

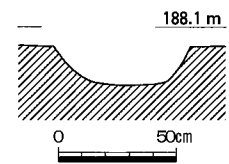


第721図 溝29 (1/30)

溝30 (第429・722図)

4 1 01Dd~4 1 02De区にあり、北西から南東に流れるが、幅60cm前後、延長9mほどで末端は不明である。断面位置での幅58cm、深さ16cmを測る。溝底部の海拔高は187.84mである。

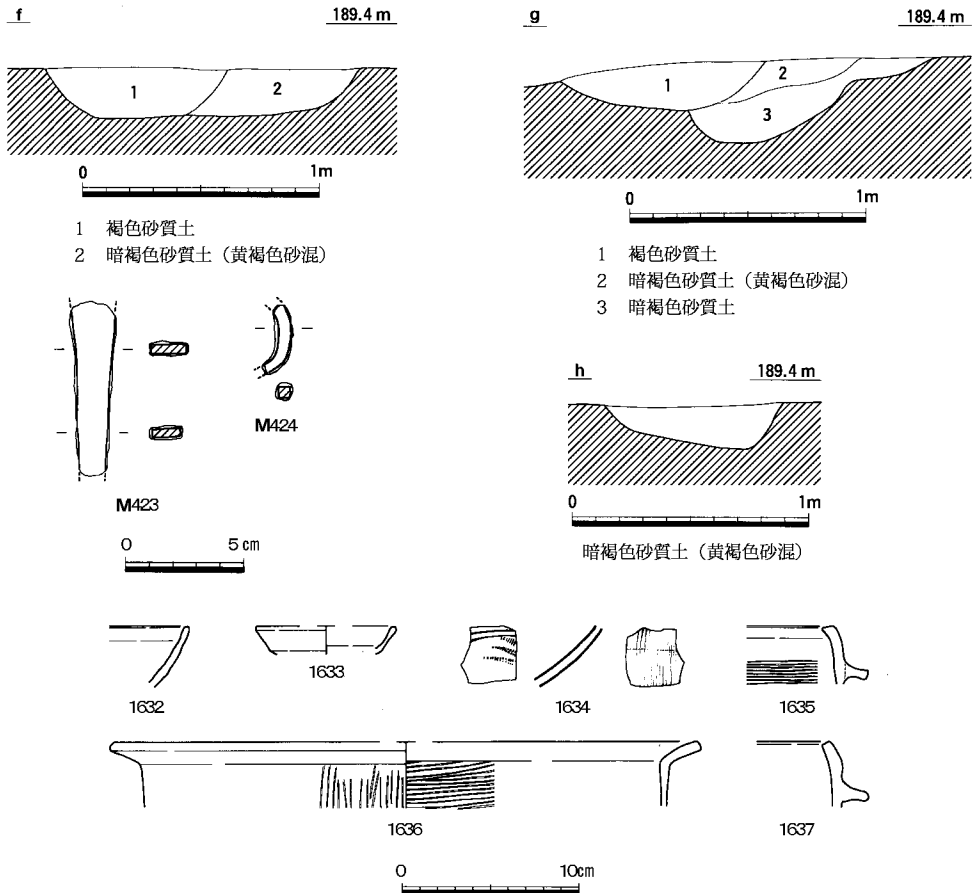
出土遺物は見られないが、中世の溝であろう。(伊藤)



第722図 溝30 (1/30)

溝31 (第424・723図)

4 0 06Ci~4 0 07Db区にあり、ほぼ東西に32m走り、4 0 07Db南東で直角に折れ北に12m伸びる。建物21~24・26を囲う区画溝である。出土遺物には勝間田焼椀皿、同安窯系青磁碗1634、土師器甕、瓦質土器鍋などがみられ、鎌倉時代に属する。(伊藤)

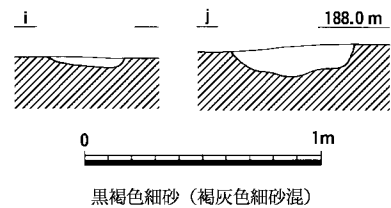


第723図 溝31 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4)

溝32 (第425・724図)

遺跡の中央部西端側の4 1 06Cbに位置する。南側90mでは掘立柱建物35が検出された。

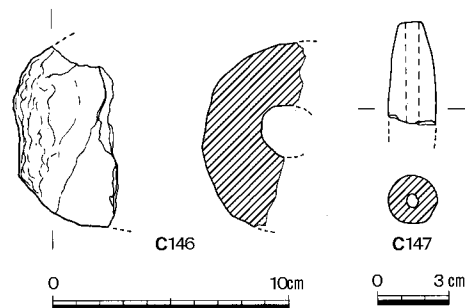
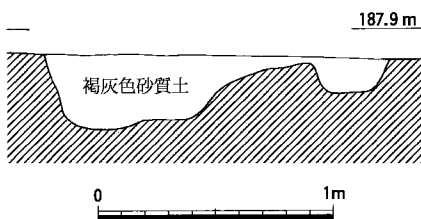
平面形をL字状に屈曲しており、東西長17m、南北長2m、幅50cmを測る。東西辺、南北辺ともに掘立柱建物35に平行することから、屋敷地の区画溝と考えられる。(上柵)



第724図 溝32 (1/30)

溝33 (第425・725図、図版129・149・155)

遺跡の中央部西端側の4 1 07Bjに位置する。



第725図 溝33 (1/30)・出土遺物 (1/3)

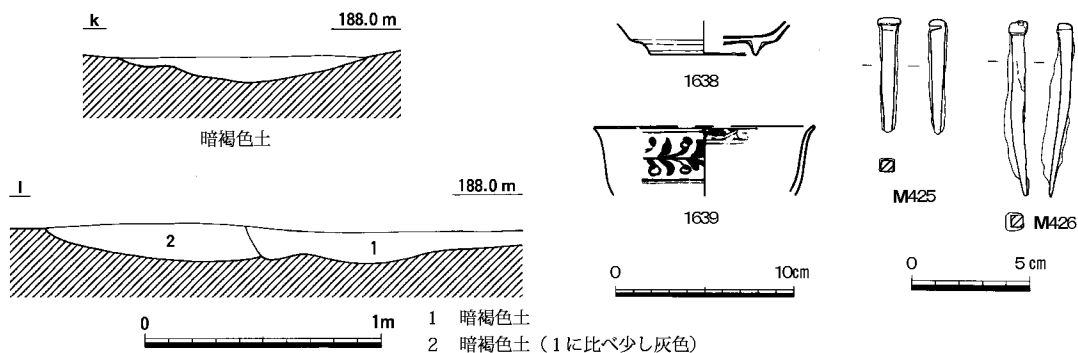


第3章 発掘調査の概要

平面は不整形であり、長さ7m、幅1.48mを測る。底部も凹凸が著しく、検出面からの最深部は32cmである。形状からは性格を特定しにくい。埋土中からは羽口C146や土錘C147が出土している。また、図示していないが鉄滓も多く出土している。 (上村)

溝34 (第430・726図、図版140)

4 2 00Cj区で検出したほぼ東西方向を示して直線的に流れる溝で、東側は土壌224に切られ、西側は溝の痕跡が不明になっていた。検出面での幅は2.02~1.22mを測り、深さが12~12cmで、断面形はⅢeである。出土遺物として、青磁の碗1638、染付の碗1639、釘M425・426がある。 (福田)



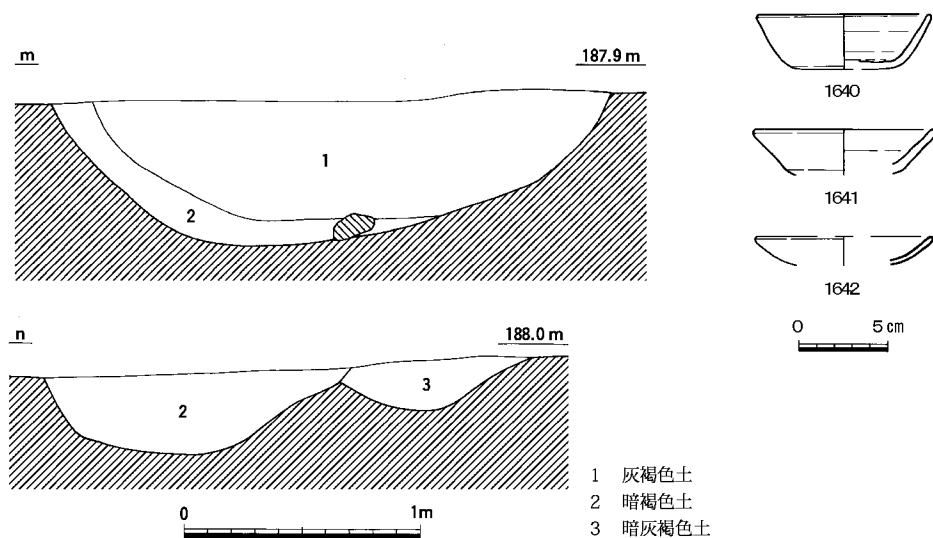
第726図 溝34 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

溝35 (第430・431・727図、図版140)

4 2 02Cj区から4 2 02Da区にかけて検出した直線的に流れる溝で、北東端部は溝30につながっている。検出面での幅は2.9~2.25mを測り、深さが42~29cmで、断面形はⅢeである。溝内には暗褐色土や灰褐色土が堆積し、備前焼の碗1640・1641や白磁の皿1642が出土した。 (福田)

溝36 (第430・728図、図版140)

4 2 00Db区から4 2 01Db区にかけて検出された南北方向の細い溝で、南側は溝30につながっている。



第727図 溝35 (1/30)・出土遺物 (1/4)

た。この溝は土壌214の東端部を削平し、掘立柱建物45に切られていた。検出面での幅は80~72cmを測り、深さは12~10cmである。断面形はⅢaになり、灰褐色土が堆積していた。（福田）

溝37（第429・729図）

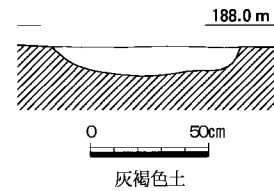
4 2 05Dd区から4 2 05De区にかけて検出した東西方向の細い溝で、延長約9.50mが判明しているだけである。東側には掘立柱建物62が存在し、北側には柱穴列3が確認されている。検出面での最大幅は1.04mを測り、最も深い所で17cmになり、断面形はⅢaである。（福田）

溝38（第429・730図）

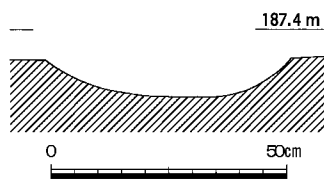
4 2 06Dd区から4 2 06De区にかけて検出した溝で、掘立柱建物47の北側に位置している。掘立柱建物47の桁行方向と溝の方向が一致しないので、この溝が掘立柱建物47の雨落溝にはならないと判断した。検出面での最大幅は84cmを測り、溝の深さが25cmになり、断面形はⅢaである。（福田）

溝39（第429・431・731図）

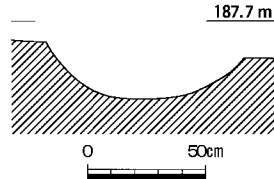
4 2 07Da区から4 2 08De区にかけて検出した溝で、ほぼ直角に屈曲して存在した。屈曲部分から枝分かれして、さらに南方向にも延びていた。この溝は、屋敷地を取り囲む区画溝になるのではないかと考えて溝の北側を精査したが、該当する掘立柱建物は確認できなかった。この溝の検出面での最大幅は65cmで、検出面からの深さは16cmになり、断面形はⅢaである。（福田）



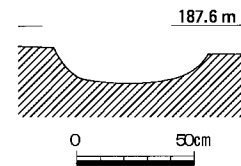
第728図 溝36（1/30）



第729図 溝37（1/30）



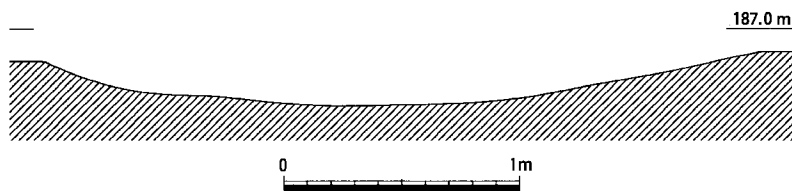
第730図 溝38（1/30）



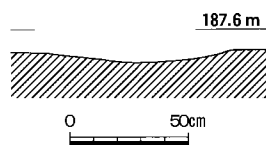
第731図 溝39（1/30）

溝40~42（第425・732~734図）

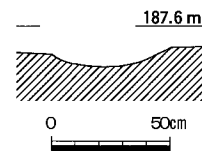
4 1 09Bj~4 1 09Ca区にかけて検出された溝で、北西から南東に流走する。



第732図 溝40（1/30）



第733図 溝41（1/30）



第734図 溝42（1/30）

### 第3章 発掘調査の概要

溝40は4 1 09Bj区東側で逆「く」字状に南西に方向を変えるもので、最大幅が3.08m、深さ約20cmを測る。周辺に建物等も検出されていないため、溝の性格、機能は不明である。

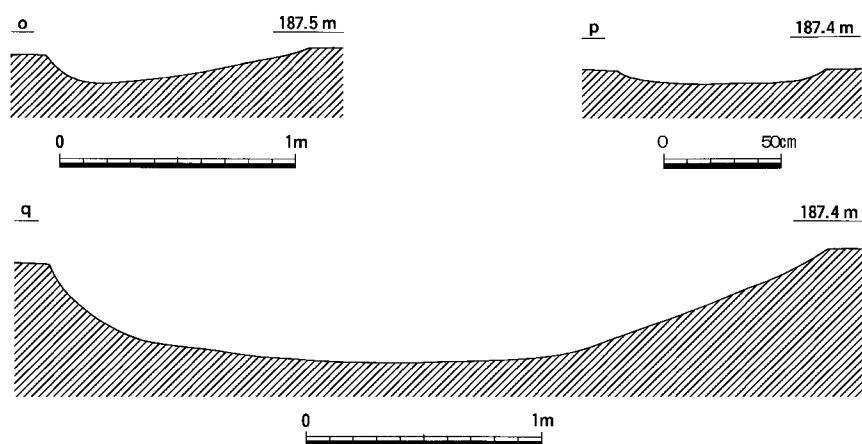
溝41は溝40の北東側に接して検出され、幅75cm、深さ5cm程度で、検出全長は約7mを測る。

溝42は溝40の方向変化部分より南東において検出され、溝41とほぼ方位を同じくする溝で全長約3.8m、幅50cm、深さ7cmを測る。

時期はいずれも中世と考えている。 (二宮)

#### 溝43 (第425・432・735図)

4 1 08Cb～4 2 01Cc区に位置する。検出した幅は70cm～3.5m、深さは約8～45cm、全長は約34m検出した。この遺構は4 2 00Cb区で合流し、さらに4 2 01Cc区で南西に方向を変化して分岐し、土器溜まり15に達している。検出された溝の性格、機能は不明。時期は中世と考えたい。 (二宮)



第735図 溝43 (1/30)

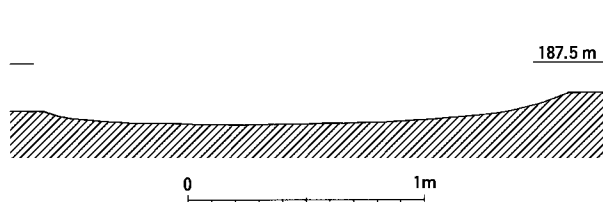
#### 溝44 (第425・432・736図、図版105)

4 1 08Ca～4 2 01Cb区にかけて検出された溝である。検出した幅は最大で5mを測る。南東部で幅約2m、深さ9cmと浅いものであった。全長は約35mで南は土器溜まり15に達している。

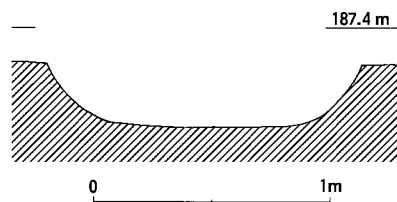
時期は検出面や他の溝から中世と考え、性格は不明である。 (二宮)

#### 溝45 (432・737図)

4 2 00Cb区の溝43から4 2 01Cb区にかけて検出された南北方向の溝である。全長は約7.5mで南端部は丸く終わり、幅は80cm～1.8m、深さは最深部で約25cm残存し、断面は「U」字形を呈する。時期は中世と考えられるが、性格は不明である。 (二宮)



第736図 溝44 (1/30)



第737図 溝45 (1/30)

溝46 (第432・738図)

4 1 09Cc区に位置して検出されたほぼ南北方向を示す溝である。検出全長は約6.5m、幅約30~60cm、深さ約6cm前後を測った。断面形は凹レンズ状を示す。

時期は検出面から中世と考えられるが、性格・機能は不明である。 (二宮)

溝47 (第432・739図)

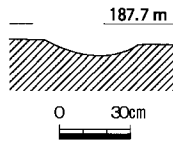
4 1 09Cc区から4 2 00Cc区にかけて検出され、溝46に並行する方向の溝である。検出された全長は約8m、幅約40~90cm、深さ約6cm前後を測る。断面形は凹レンズ状を示す。

溝46と同時期に存在していたものと考えられる。 (二宮)

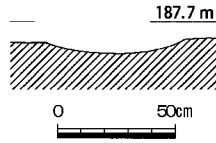
溝48 (第432・740図)

4 1 09Cd区内西半に位置し検出された北東~南西方向の溝である。検出された幅は約30~60cm、深さは5cm前後残存していた。全長は約7m検出したのみである。

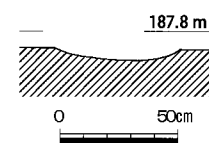
時期は検出面から中世と考えられるが、性格・機能については不明である。 (二宮)



第738図 溝46 (1/30)



第739図 溝47 (1/30)

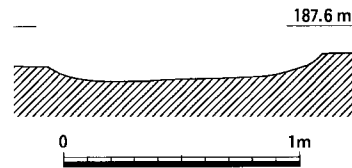


第740図 溝48 (1/30)

溝49 (第432・741図)

4 2 00Cc~4 2 00Cd区にかけて検出された溝である。検出した溝の幅は約90cm~1.4m、深さ8cm前後、全長は約14mを確認したのみである。

溝の時期は、検出面から中世といえるが、その性格は不明である。 (二宮)



第741図 溝49 (1/30)

溝50 (第432・742図)

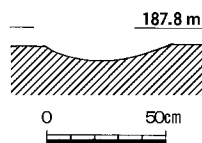
4 2 00Cf区で検出されたほぼ南北方向の溝である。検出した溝の全長は約9.5mで、幅は約40~70cm、深さは約7cm前後残存していたのみである。

検出面から時期は中世と考えるが、機能・性格は不明である。 (二宮)

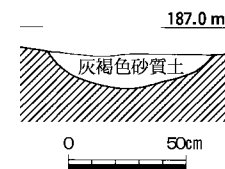
溝51 (第433・743図、図版124)

4 2 05Caで検出した溝で、緩やかに湾曲して東端部が枝分かちれていた。この溝の東側には、土壌225が存在している。この溝は土壌224に切られていたので、溝51が古くて土壌224が新しいことが判明した。溝の幅は、枝分かち

た地点が最も広く、西側へ移行するにしたがって狭くなっていた。検出面での最大幅は65cmで、深さは16cmを測り、断面形はⅢbである。 (福田)



第742図 溝50 (1/30)

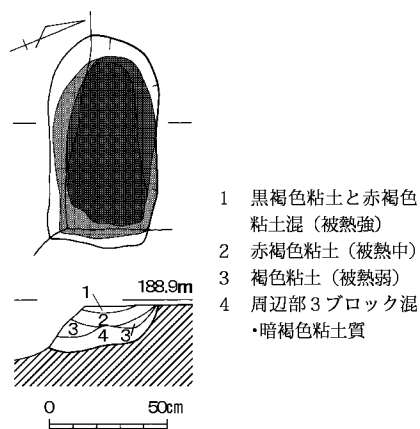


第743図 溝51 (1/30)

### 13 火処

火処78 (第422・744図、図版130)

4 1 01Cd区に位置し、南西部は堀1などに切られている。土層は4層にわけられるが、1～3層に粘土と被熱が認められた。そのうち1層はよく被熱しており、焼けて非常に堅くなっていた。高温の被熱があったものと考えられる。遺構の重複関係から、鎌倉時代のもつと判断される。(河合)



- 1 黒褐色粘土と赤褐色粘土混 (被熱強)
- 2 赤褐色粘土 (被熱中)
- 3 褐色粘土 (被熱弱)
- 4 周辺部3ブロック混・暗褐色粘土質

第744図 火処78 (1/30)

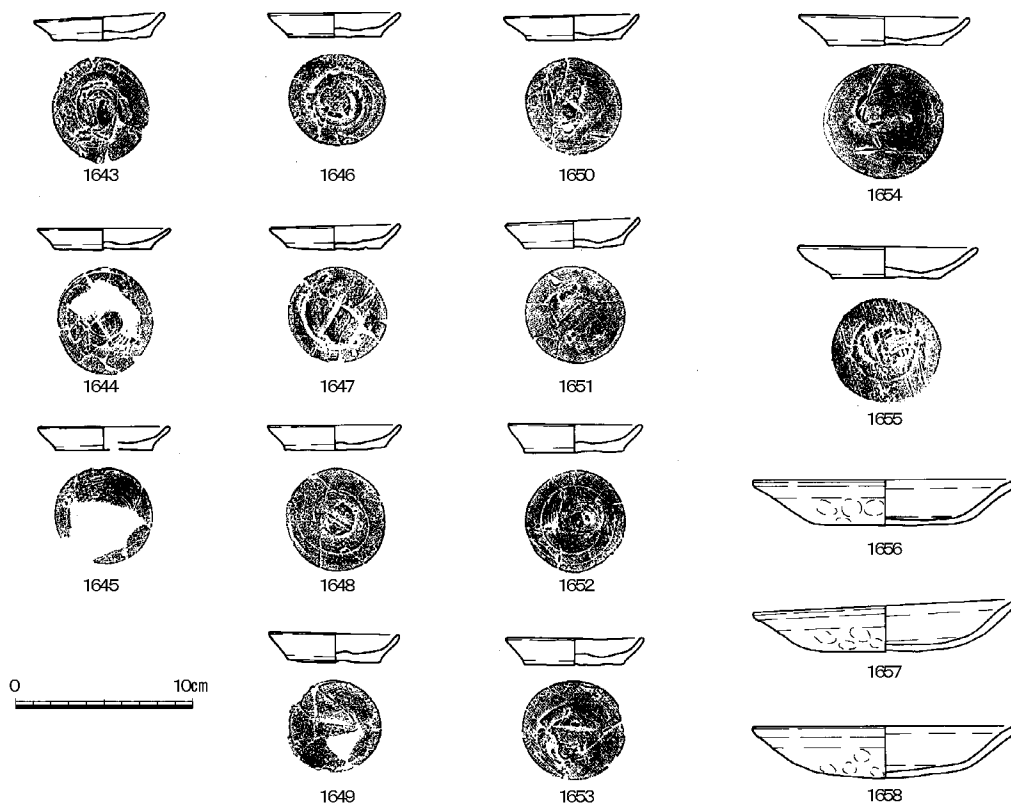
### 14 土器溜まり

土器溜まり12 (第423・745図、図版130・141)

4 1 01Cf区、堀3東辺南部の西側数mから検出されたもので、遺構としての掘り方が確認できなかったため当項に記載した。径数10cmの範囲から小皿が、皿で覆われたような状態で出土しており、何らかの祭祀の跡を窺わせた。いずれも土師器の皿類で、外面押圧痕が残る皿1656～1658の特徴からこれらは15世紀後半のものと考えられる。(江見)

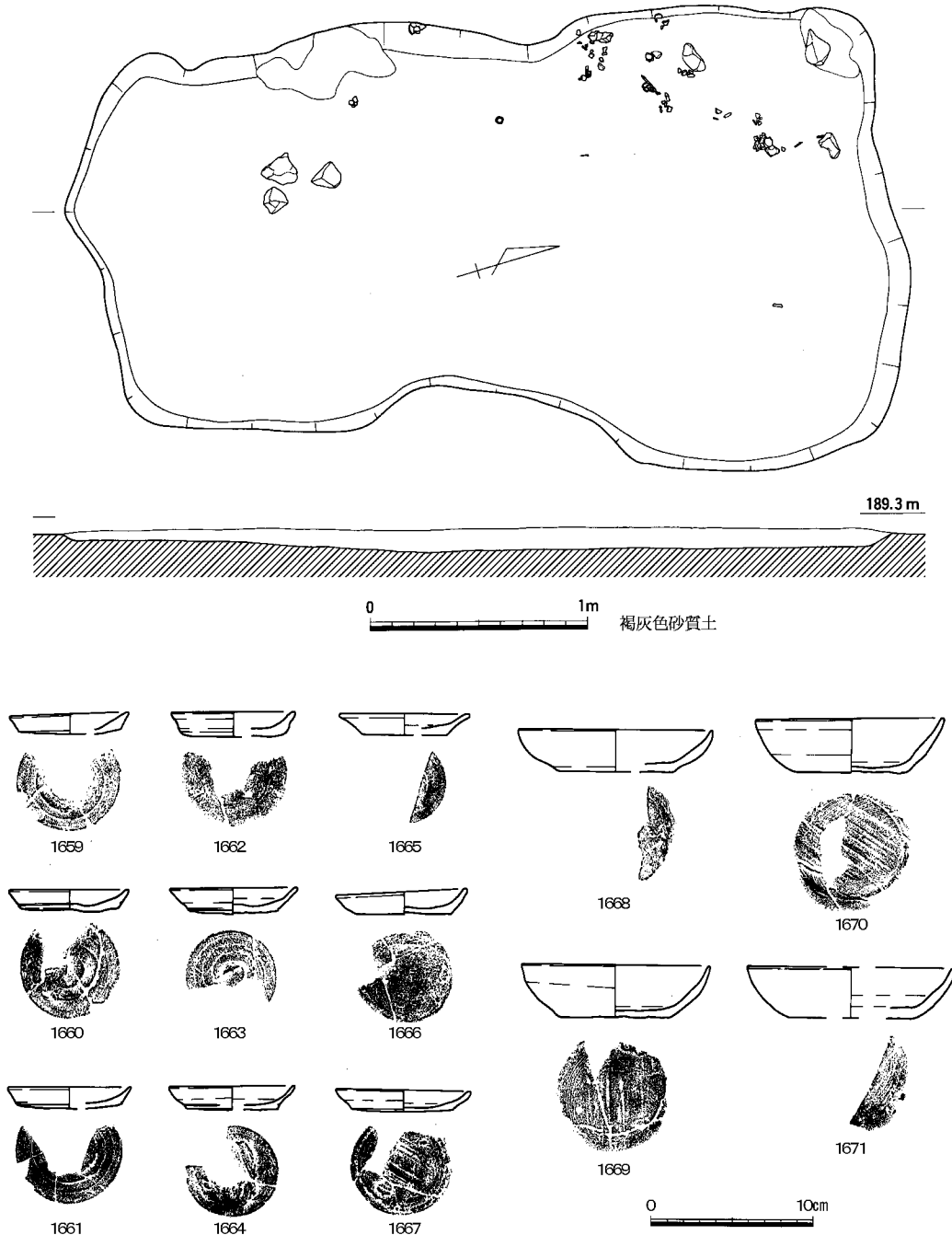
土器溜まり13 (第420・422・746・747図、図版140・141)

4 0 08Cc区、掘立柱建物6の東から検出された土器溜まりで、平面不整長方形を呈すわずかな凹



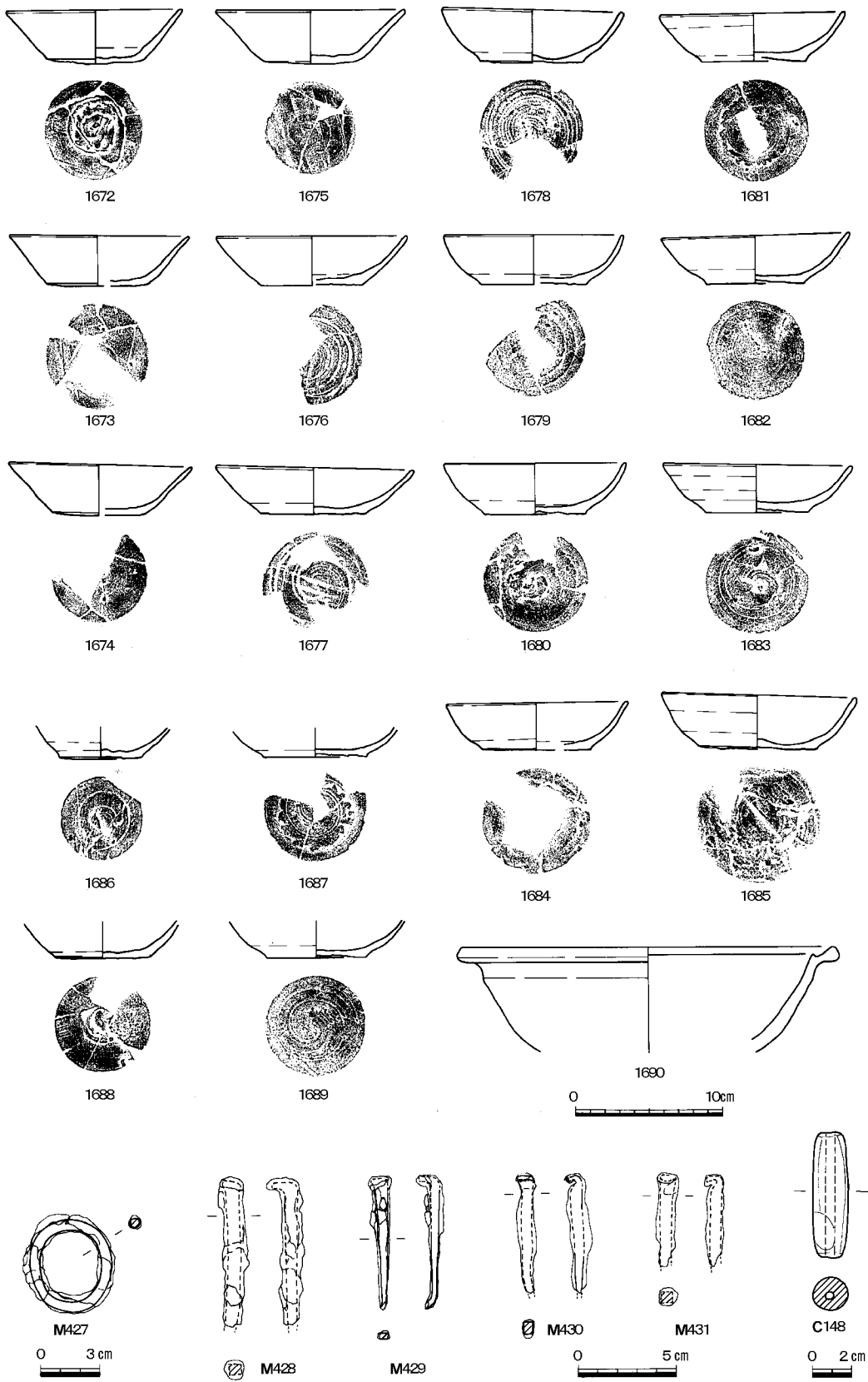
第745図 土器溜まり12出土遺物 (1/4)

みには灰褐色砂質土が堆積しており、拳大～径20cm大の礫、白色粘土塊などに混じって遺物が出土した。特に、北西部から土師器小皿1659～1667、皿1668、瀬戸の盤1690、用途不明鉄器M427、釘M428～M431、土錘C148などが出土している。杯は口縁が斜め外方に直線的にのびる1672～1677、湾曲気味に立ち上がる1669～1671、1678～1689などがあり、この中には1671・1677・1683のように皿との中間的なものも含まれている。1690は14世紀末から15世紀初頭の年代観が与えられ、掘立柱建物6、堀2などとの関連が想起される。(江見)



第746図 土器溜まり13 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第3章 発掘調査の概要



第747図 土器溜まり13出土遺物 (1/4,1/3)

土器溜まり14 (第422・748図、図版141)

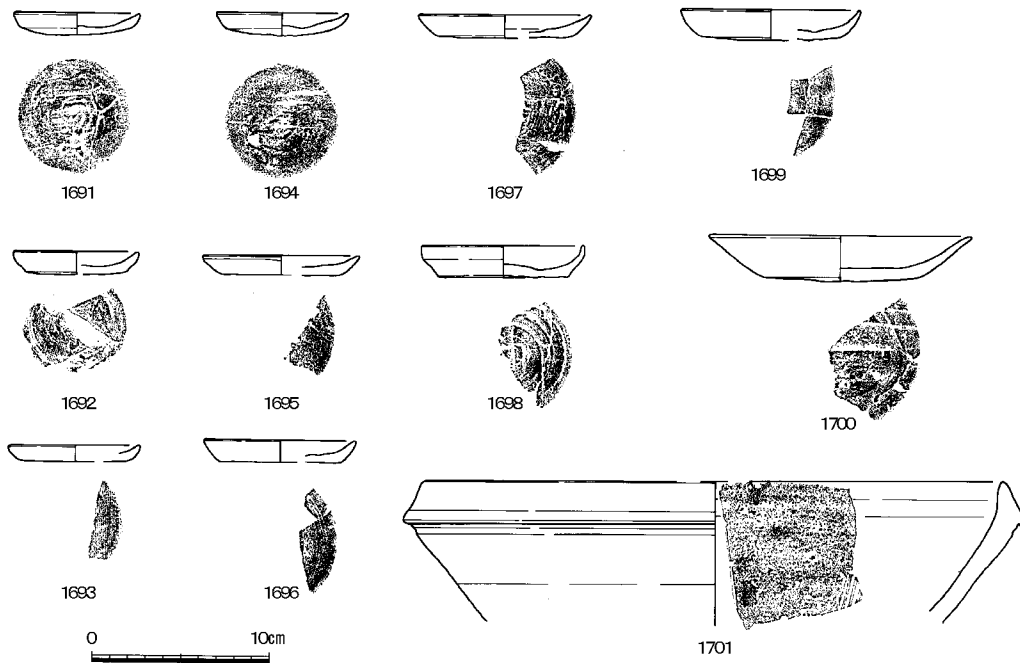
遺跡の中央部西寄りの4 1 02Daに位置する。北東側7 mには掘立柱建物18が検出されている。

2.5×2.25mの範囲に土器が散在していた。土師器の小皿1691～1699、皿1700、備前焼の播鉢1701が出土している。小皿、皿はヘラ切りの後起こしている。1701は口縁部の形態から15世紀中頃～後葉と考えられる。 (上村)

土器溜まり15 (第422・425・749図、図版141)

遺跡の中央部西寄りの4 1 03Caに位置する。堀2、3の間で検出している。

土師器の小皿が5枚出土している。2枚は重なった状態で底部を上に向けており、3枚は底部を下にしていた。なお、3枚のうち2枚は重なった状態であった。 (上村)

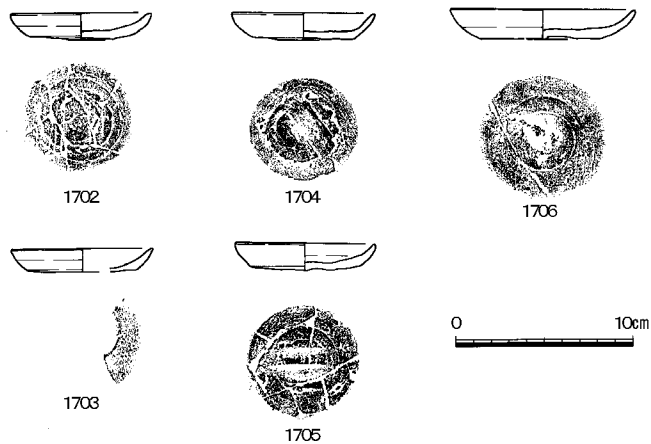


第748図 土器溜まり14 (1/4)

土器溜まり16 (第423・750図、  
図版141)

遺跡の中央部西寄りの4 1 02 Ciに位置している。北東5 mに土壇137が検出されている。

90×40cmの範囲に土師器皿1707・1708・1710とミニチュアの瓦質土器1709が出土した。1710は底部糸切りである。1709は、瓦質土器でミニチュアの茶釜である。 (上村)



第749図 土器溜まり15出土遺物 (1/4)

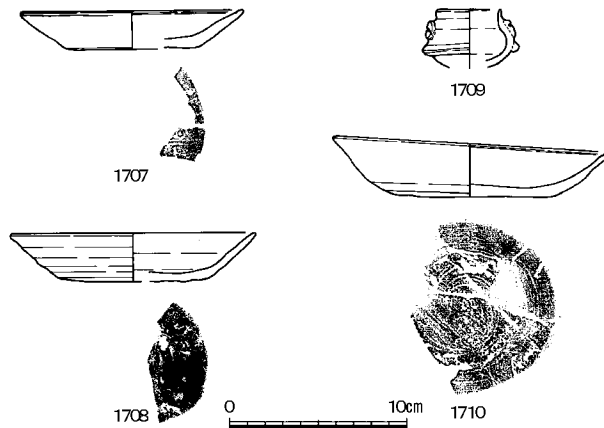


第3章 発掘調査の概要

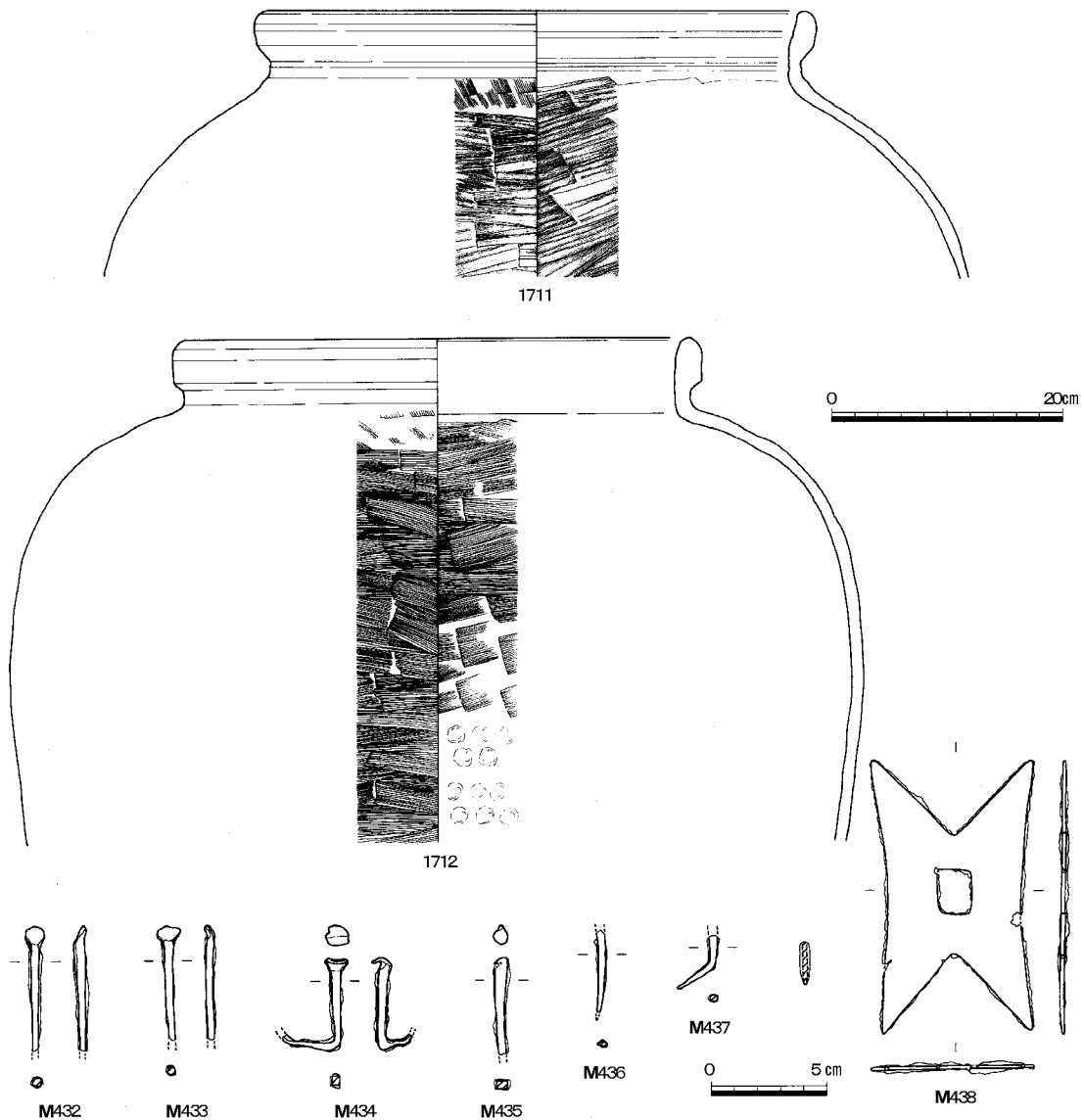
土器溜まり17 (第426・751図、  
図版130・141・150)

4 1 04Ci区において検出した。約  
1 mの範囲に、重なった状態の備前  
焼の大甕 (1711・1712) の破片や鉄  
釘 (M432~437)、不明鉄器 (M438)  
をほぼ面的に検出したが、明確な掘  
り込みは確認できなかった。

掘立柱建物37~40に囲まれた位置  
にあり、これらと関連する遺構と考  
えるべきかも知れない。 (平井)



第750図 土器溜まり16出土遺物 (1/4)



第751図 土器溜まり17出土遺物 (1/4,1/3)

## 15 窪地

### 窪地9 (第426・427・752図)

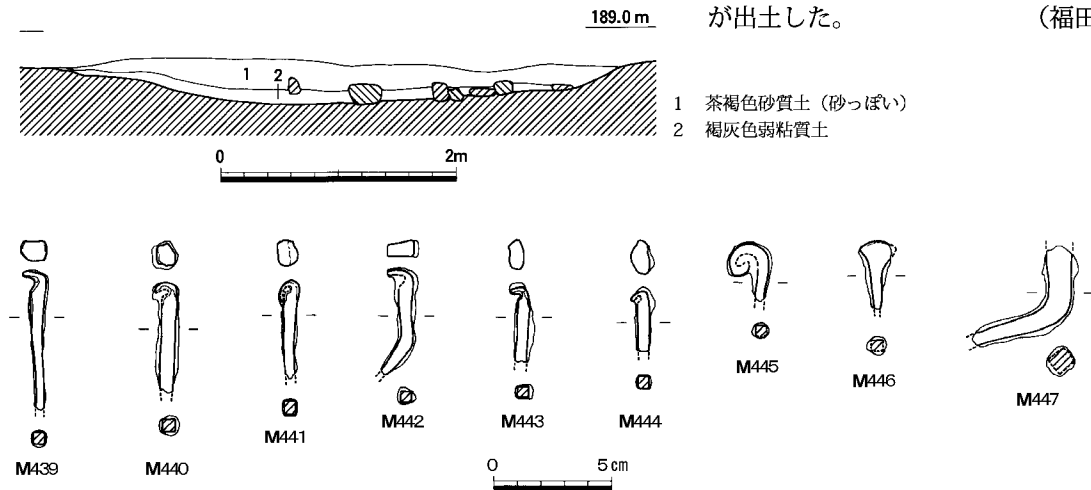
4 1 03~04Da区に位置し、東西4.6m、南北6.6mの不整形円形を呈する。深さは検出面から40cmあり、底面の海拔高は、188.4mである。窪地内は2層に分かれ、上層が茶褐色砂質土、2層が褐灰色弱粘質土で20~40cm前後の礫を多く含む。また窪地内から釘が9本M512~520が出土している。断面は四角になり、全体的に短いものが多く中世末から近世の可能性がある。 (伊藤)

### 窪地10 (第426・427・753図、図版142)

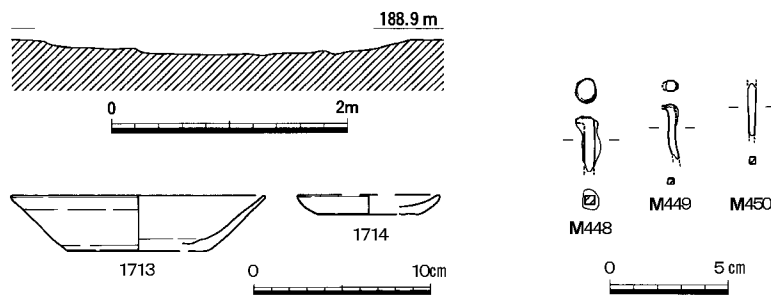
4 1 03Db区、窪地9の北西に位置し、東西3m、南北2mの楕円形を呈する。深さは5~10cmと全体に浅い。底面の海拔高は、188.7mである。窪地内から皿2544、小皿2545、釘M521~523が出土している。皿は、口縁が逆「ハ」の字状に開き、口径14.4cm、器高3.2cmを測る。小皿は口径8cm、器高1cmである。これらの時期は中世末頃と考えられる。 (伊藤)

### 窪地11 (第433・754図、写真47)

4 2 04Ca区から4 2 04Cd区にかけて検出した窪地で、南側には土壌224や溝51が確認され、東側には窪地12が存在している。平面形は不整形な形態を呈し、長径約15m、短径約10mで、検出面からの深さは約35cmと浅くなっていた。内部には炭を含む黒褐色砂質土や褐灰色砂質土が堆積し、土師器の小皿1715や瓦質土器の鍋1716~1719が出土した。 (福田)

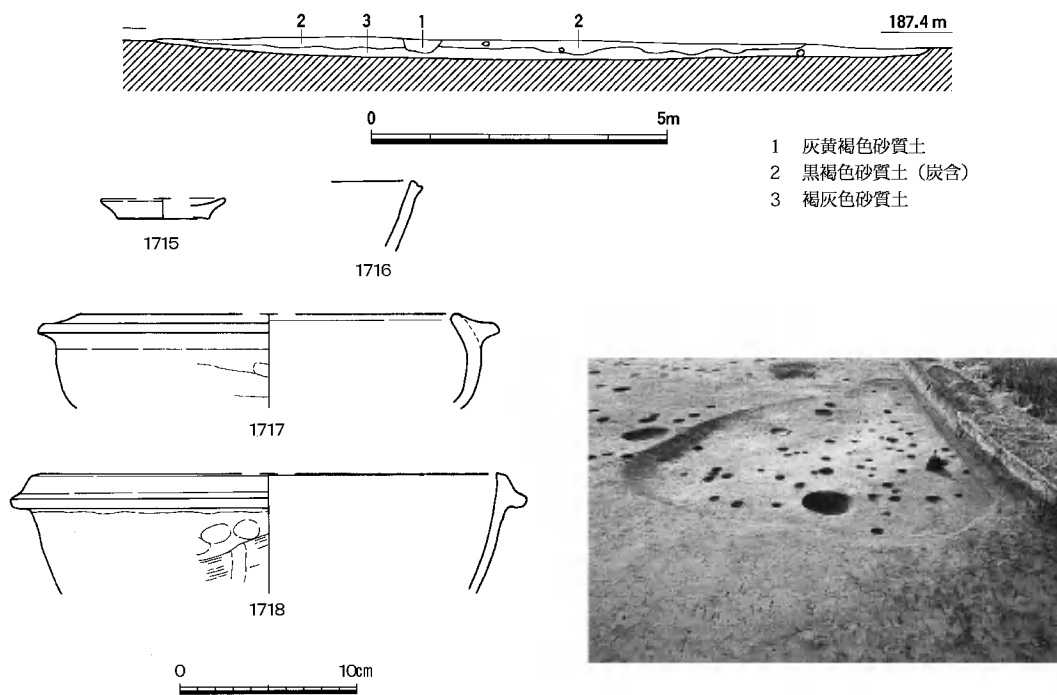


第752図 窪地9断面 (1/60)・出土遺物 (1/3)



第753図 窪地10断面 (1/60)・出土遺物 (1/4, 1/3)

第3章 発掘調査の概要

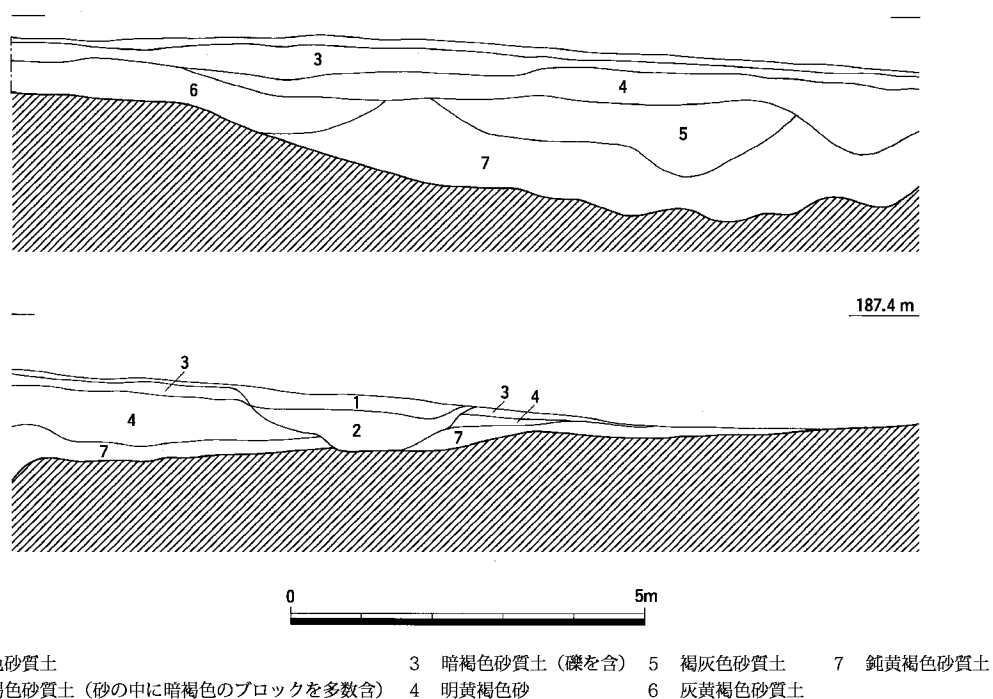


第754図 窪地11断面 (1/120)・出土遺物 (1/4)

写真47 窪地11完掘状況 (東から)

窪地12 (第432・433・840・841図、図版142)

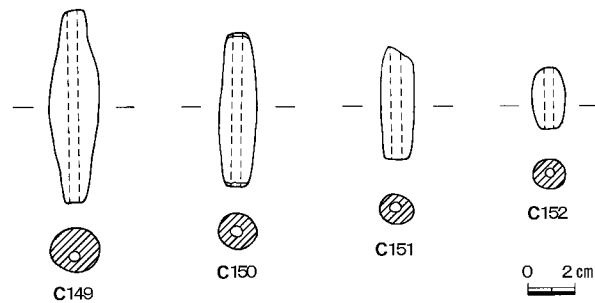
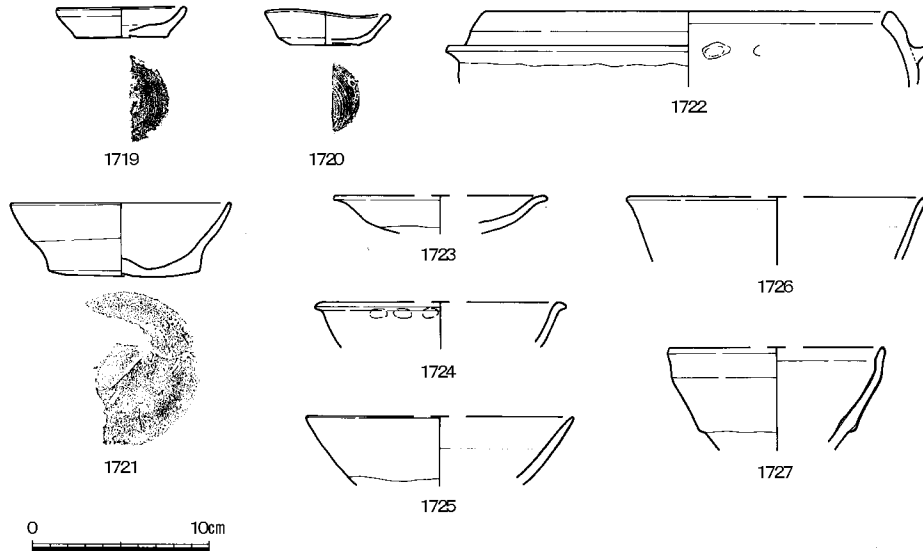
吉井川に面した西側調査範囲の境界地点である4 0 09Bf区から、南側調査範囲の境界地点である4 2 09Cd区にかけての、長大で幅の広い面積を占める窪地で、4 2 03Cc区に差し掛かると大きく蛇行



- |                             |                |           |           |
|-----------------------------|----------------|-----------|-----------|
| 1 褐色砂質土                     | 3 暗褐色砂質土 (礫を含) | 5 褐灰色砂質土  | 7 鈍黄褐色砂質土 |
| 2 暗褐色砂質土 (砂の中に暗褐色のブロックを多数含) | 4 明黄褐色砂        | 6 灰黄褐色砂質土 |           |

第755図 窪地12断面 (1/100)

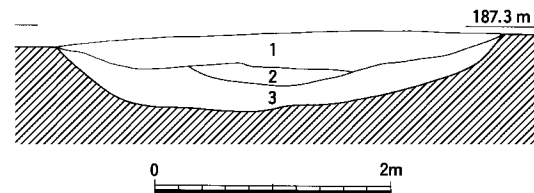
していた。南側調査範囲の境界での幅は約30mにも達し、深さは約2.50mになっていた。この窪地の底面は緩やかな弧を描いて湾曲し、上層から下層にかけて、礫を含む暗褐色砂質土、明黄褐色砂、鈍黄褐色砂質土が堆積していた。この窪地から出土した代表的な遺物として、土師器の小皿1719、勝間田焼の小皿1720、土師器の杯1721、瓦質土器の鍋1722、白磁の皿1723、白磁の碗1724・1725、青磁の碗1726、天目の碗1727、土錘C149～C152が採集されている。(福田)



第756図 窪地12出土遺物 (1/4,1/3)

窪地13 (第431・757図)

4 2 03Ch区から4 2 04Ci区にかけて検出した窪地である。平面形は不整形な形態を呈し、長径約14m、短径約7m、深さは約70cmになっていた。底面は緩やかに湾曲するが、中央部に凹凸も認められた。窪地内には褐灰色砂質土、黒褐色微砂、灰黄褐色砂質土が堆積し、遺物は存在しなかった。(福田)



- 1 褐灰色砂質土
- 2 黒褐色微砂
- 3 灰黄褐色砂質土 (砂ブロック含)

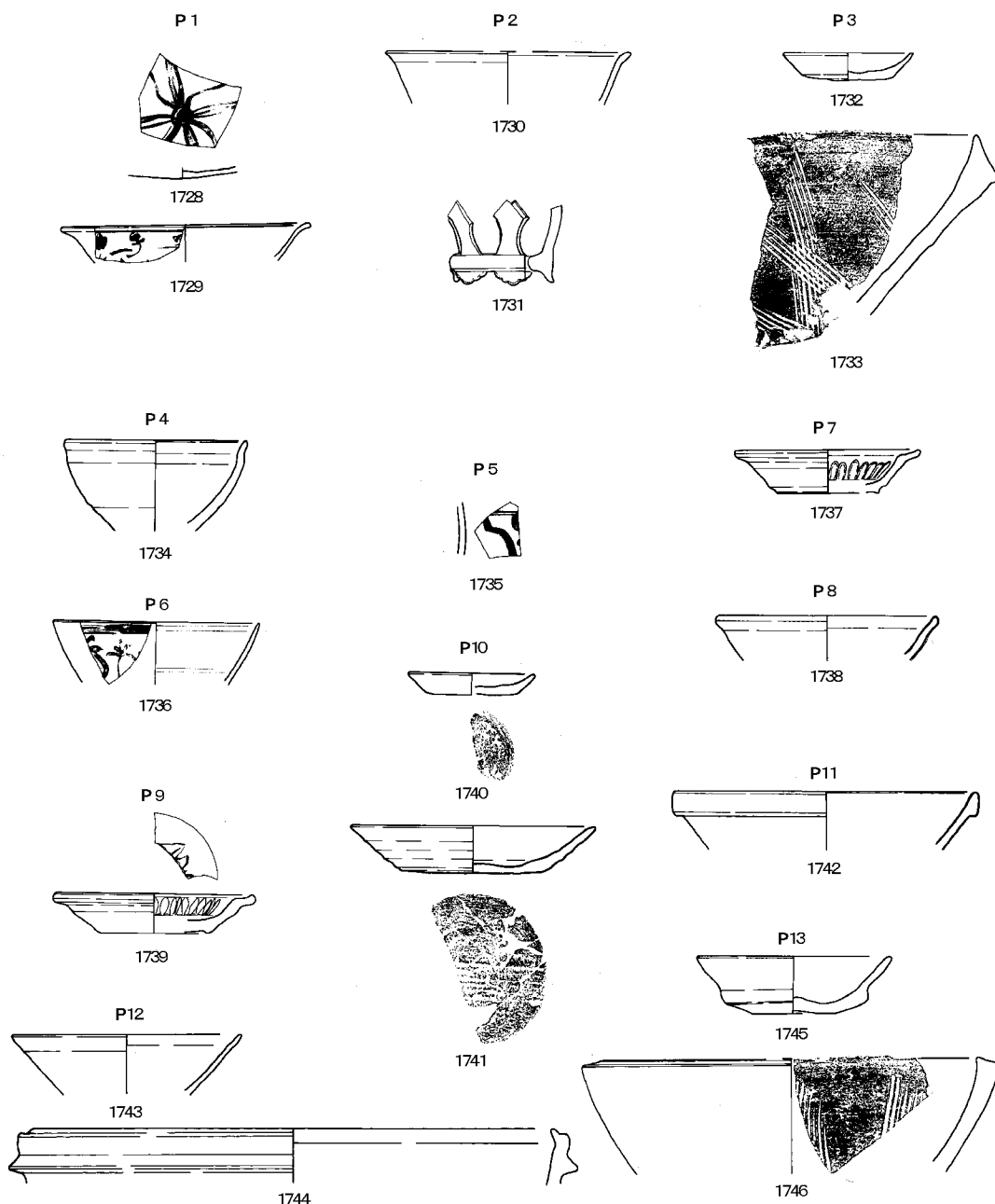
第757図 窪地13断面 (1/60)

## 16 柱穴

柱穴1～13 (第417・420・425図、図版142)

P3からは、土師器皿1732とⅣ期の備前焼播鉢1733が、P13では、土師器杯1745とⅢ期備前焼播鉢1746が共伴する。陶磁器類では、P2において14世紀～15世紀前半頃の青磁Ⅳ類の1730と青磁器台1731が、P8では白磁Ⅳ類碗、P1では、16世紀前～中葉の景德鎮産青花1728・1729が、P6でも、16世紀後半～17世紀初頭の同窯の青花1736がみられる。瀬戸美濃産では、P7・9からは16世紀後半の菊皿1737・1739が、P4で16世紀後半～17世紀の天目碗1734がある。

(弘田)



第758図 柱穴1～13出土遺物 (1/4)

柱穴14 (第418・425・759図、写真48、図版131)

遺跡の中央部西寄りの4 1 07Cbに位置する。西側50cmでは掘立柱建物35、36を検出している。

長さ30cm、幅26cmで、平面は倒卵形を呈する。検出面からの深さは22cmである。内部には備前焼の甕の破片を、真ん中に空隙が生じるように詰め込んでいた。時期は12世紀後葉だろう。(上柵)

柱穴15 (第418・425・760図、図版155)

4 1 07Bj区で、鍛冶工房の可能性のある竪穴遺構1の南1mの位置にある。羽口2点が出土しておりそれとの関連が強い。上屋を支える柱穴であろうか。(弘田)

柱穴16 (第418・761、写真49、図版155)

遺跡の中央部西寄りの4 1 08Caに位置する。北西側5mでは土壙140、141を検出した。

羽口C155が先端部を下にして出土した。先端部は溶融して滓化しており、使用後に破棄したものである。孔径は先端に向かい徐々に狭くなっており、現状で3.5~5cmを測る。(上柵)

柱穴17 (第418・425図、写真50)

遺跡の中央部西寄りの4 1 07Bjに位置する。西側50cmでは溝33を検出した。

埋土中には鉄滓などが多く含まれていた。M451は上から碗形滓、鍛造剥片、粒状滓であり、いずれも鍛冶作業の時に生じる。特に粒状滓は鍛錬鍛冶の前半工程に生じるものである。(上柵)

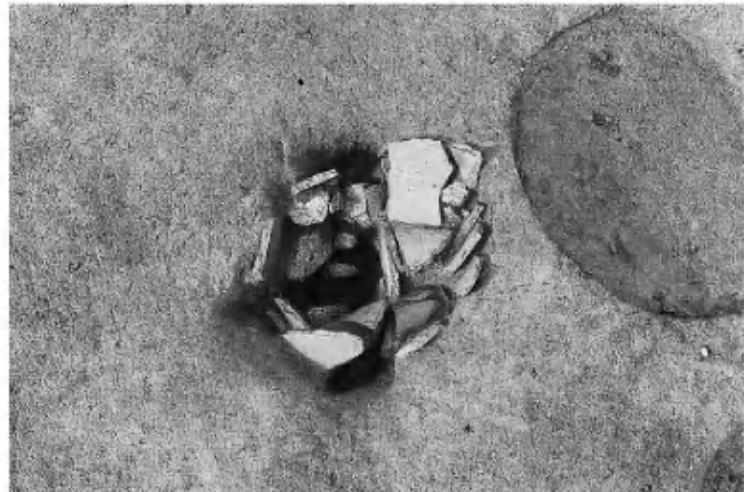
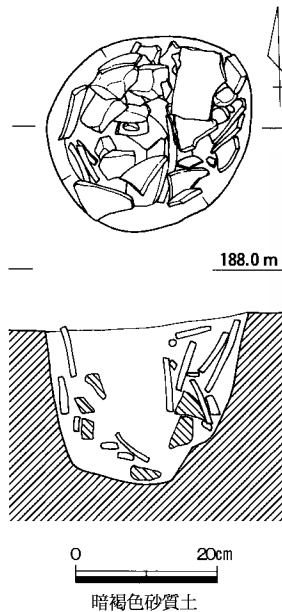
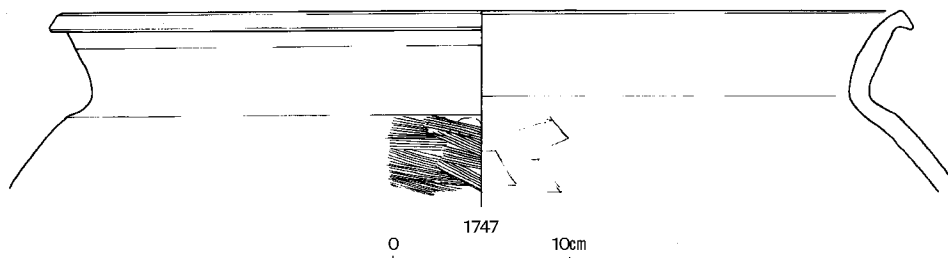
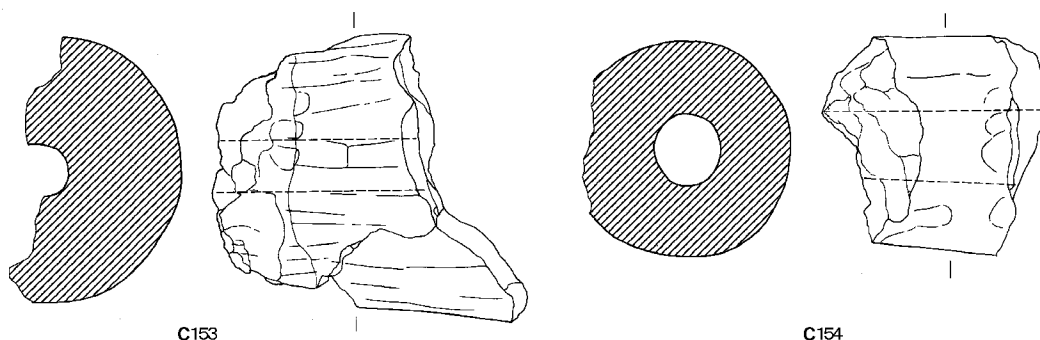


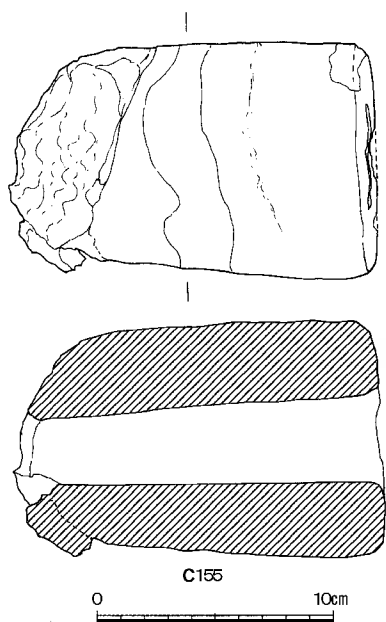
写真48 柱穴14遺物出土状況(南から)



第759図 柱穴14(1/10)・出土遺物(1/4)



第760図 柱穴15出土遺物 (1/4)



第761図 柱穴16出土遺物 (1/4)

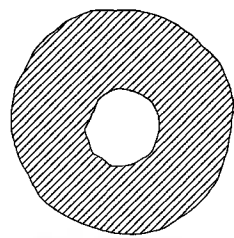
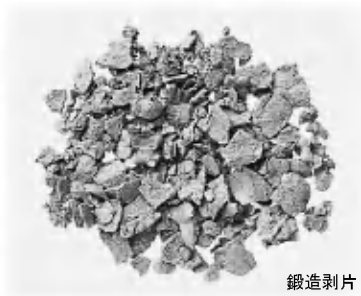


写真49 柱穴16  
遺物出土状況



碗形滓



鍛造剥片



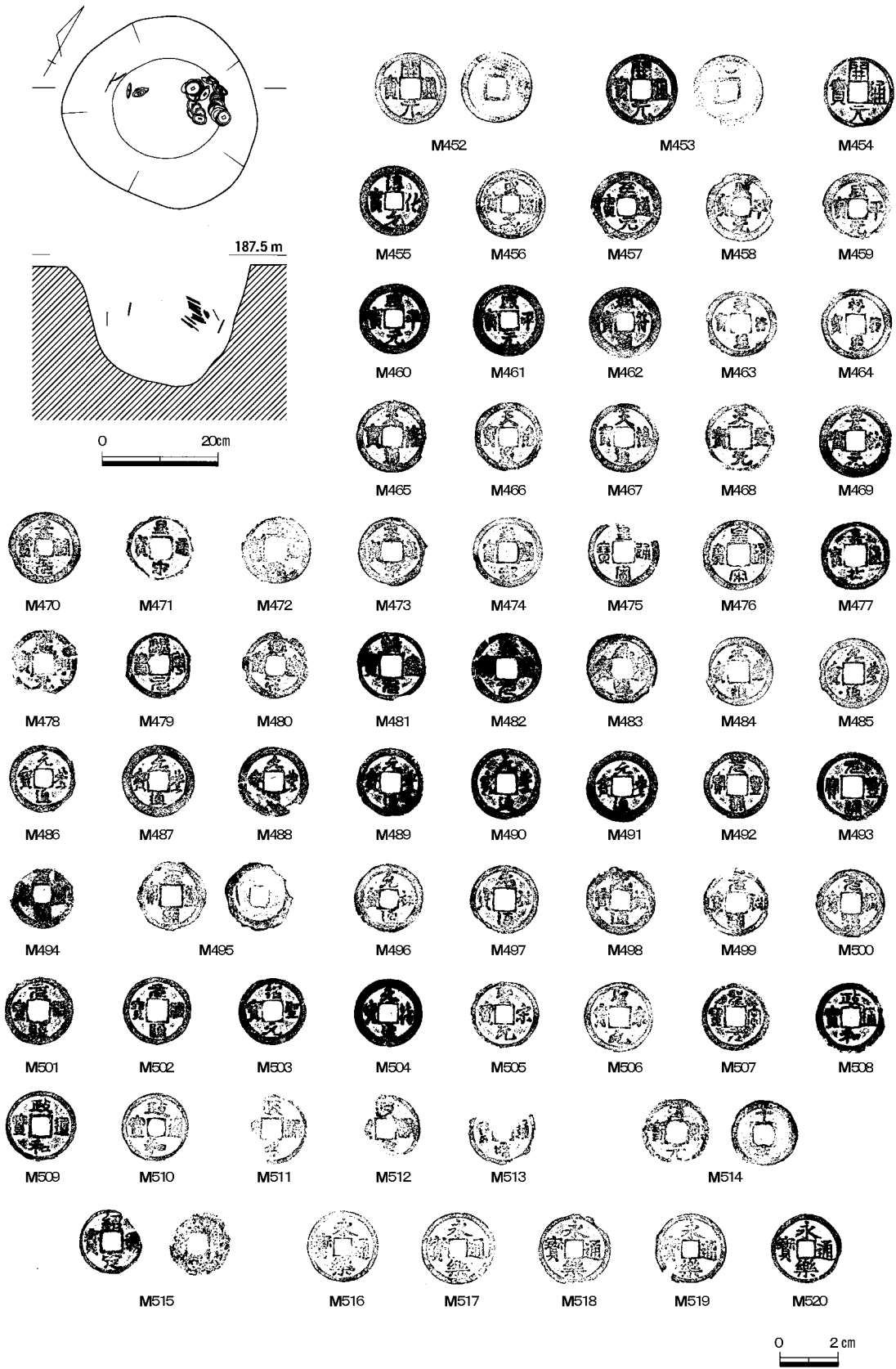
粒状滓

M451

写真50 柱穴17出土遺物

柱穴18 (第432・762図、図版131・152・153)

4200cf区で検出した、古銭が69枚も出土した土壌である。この柱穴はどこにでもあるような普通のもので、周辺には遺構が全く確認されていない。平面形は直径34cm、短径33cmの円形または楕円形に近い形態を呈し、検出面からの深さは21cmを測り、断面形は上方に開いた「U」字形である。この土壌の東側に寄った位置に、重ねた古銭が紐で束ねられた状態になって、縦方向に2列に並んで底面から9cmも浮いて存在したのである。その2列の古銭の束は、斜めに傾いて蛇行し、数枚の古銭は西側の離れた場所に散乱していた。出土した古銭は、開元通寶(初鑄621年)から永樂通寶(初鑄1408年)までの20種類が認められ、背面に銘を有するものも認められた。(福田)



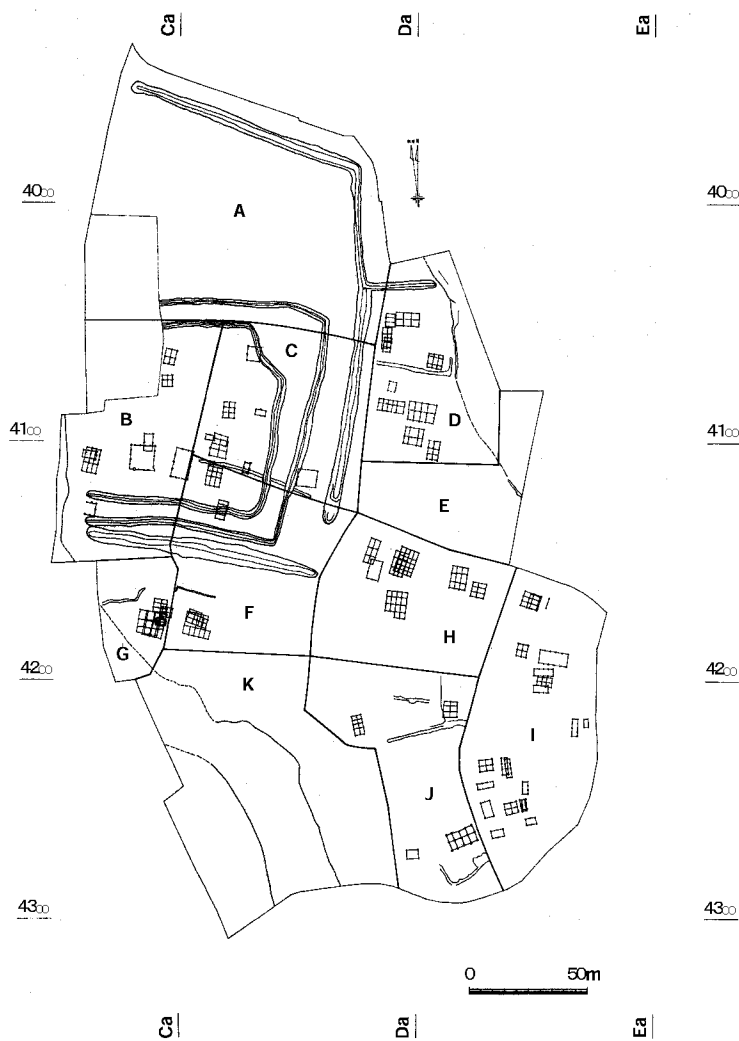
第762図 柱穴18 (1/10)・出土遺物 (1/2)



17 遺構に伴わない遺物 (第763~789図、写真51~53、図版131・143~150・153~156)

これまでに述べた遺構やそこから出土した遺物に比べて、はるかに上回る量の遺物が柱穴や包含層から出土している。

そこでここでは、発掘調査時に設定した調査区を生かして、A~Kの11地区に分けて遺物を取り上げ記述することにした(発掘時の調査区のいくつかを一つの地区としてとらえ、居館内北からA・Bの順に割りふっている)。これは、調査区の設定が現地地形における宅地や水田畦畔に沿ってなされており、第763図に示すとおり中世の建物(屋敷地)、堀と調査地区割りはある一定の相関関係を示すと思われる、中近世段階の土地利用を反映していると思われる。また古代・中世以降は、居住空間が掘立柱建物へと変わってゆくこと、そこからの遺物出土は少ないことから、遺構群の変遷やそれらの性格を特定することが困難であるが、各地区毎に取り上げることで各屋敷群の消長をたどることができると考えられるからである。 (弘田)



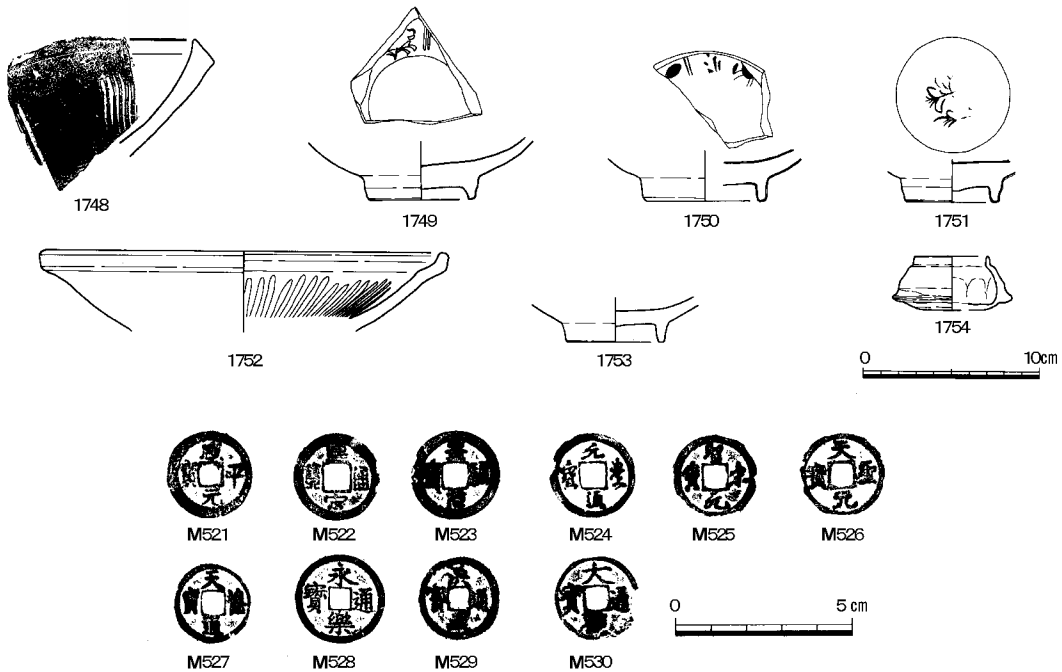
第763図 中世遺構に伴わない遺物の地区割り (1/3,000)

A地区 中世の遺構は希薄な地区である。ただし、これはこの場所が近世から現代にかけての生活域となったため、中世の遺構が削平を受けてしまったとみられることもできる。また、中世に属する遺物の量もごくわずかであった。

出土した遺物には、IVB期の備前焼播鉢1748、青磁類では、碗1749～1751、盤1752が、白磁IV類碗底部1753、その他にも、ミニチュア瓦質羽釜1754がある。渡来銭M521～530は、宋銭、明銭である。中世でも後半期における居館の北への拡充とその時期を示す遺物群である。 (弘田)



写真51 A地区全景（北から）



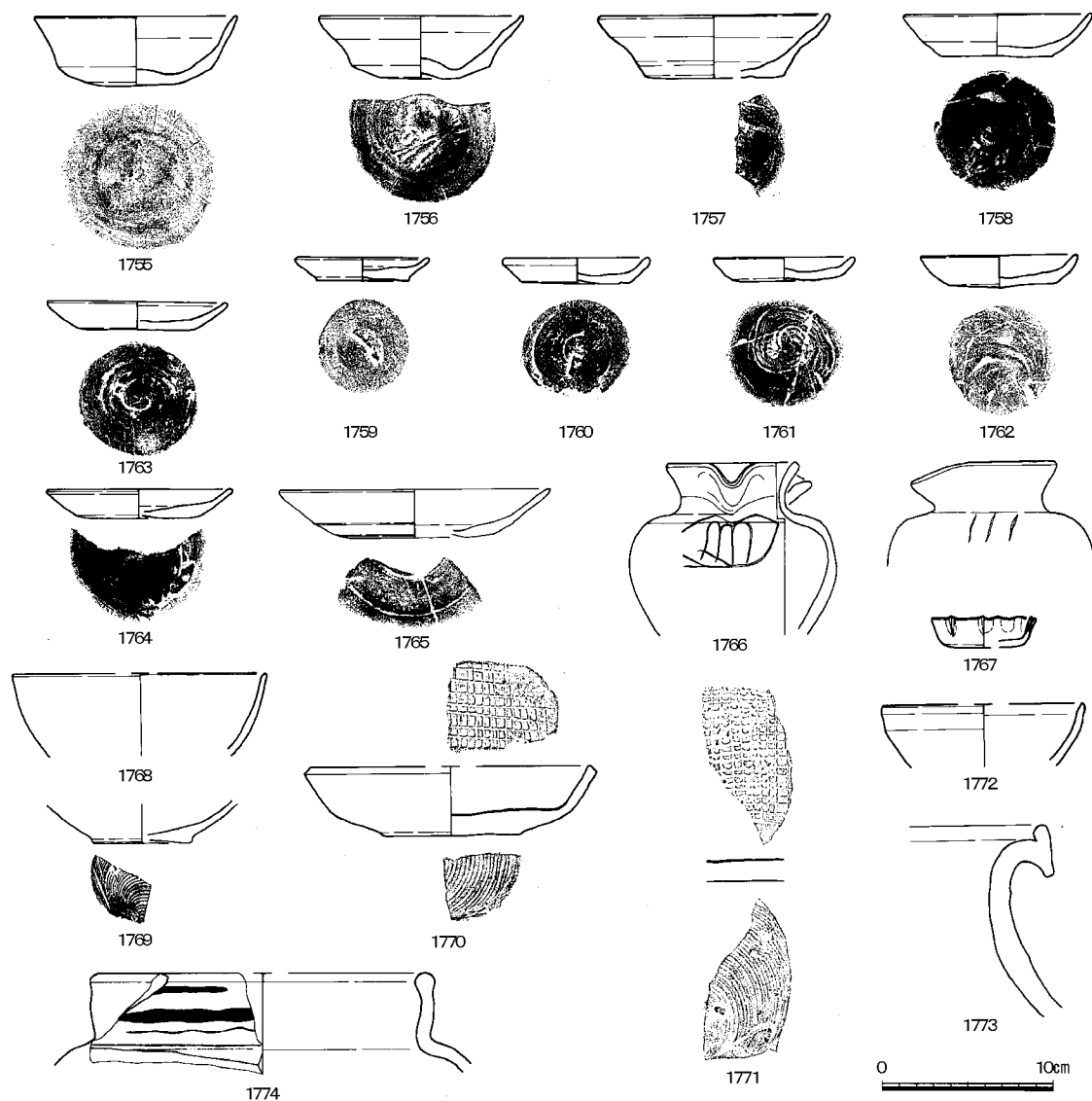
第764図 A地区の遺物（1/4,1/2）

第3章 発掘調査の概要

B地区 居館内の西半部で、堀1に囲われた部分および堀1～3南辺西部にあたり、掘立柱建物や土塋が多くみられた地区である。

出土遺物では、土師器に、杯1755～1757、小皿1759～1762、中皿1758・1763・1764、大皿1765がある。底部の調整は、糸切りが一般的であるが、1755などのように丁寧なナデを施す場合もある。備前焼では、雀口壺1766がある。勝間田焼では、椀1768・1769がある。瀬戸美濃産では、瀬戸・美濃の輪花皿1767、卸皿1770・1771（井上編年7期）、天目碗1772（同10期）がみられる。1767の内底面は、使用によって摩滅が著しい。また、1773は、常滑産の大甕である。壺1774は、中国磁州窯系で元・明代と思われる。勝間田焼や常滑焼、瀬戸・美濃の卸皿などに、13世紀台にさかのぼる遺物がある。

それ以外には、鉄製容器蓋と考えられるM531、和鏡M532（菊花散双鳥鏡）がある。M531は、表中央の紐に金具が取り付け、背面には断面三角形の返りが巡る。筒状容器の蓋であろうか。同型同大のM218が同地区の土塋119からも出土している。また、M532は12世紀末～13世紀中葉の制作年代が考え



第765図 B地区の遺物①（1/4）

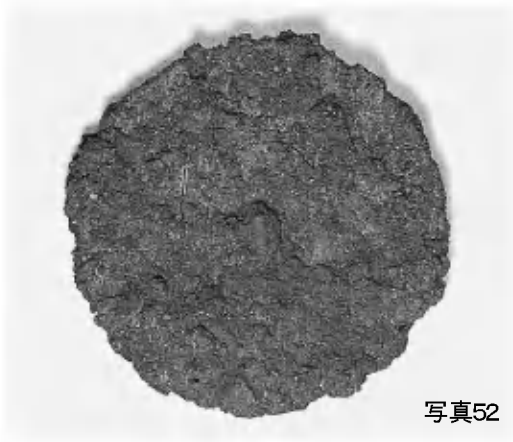
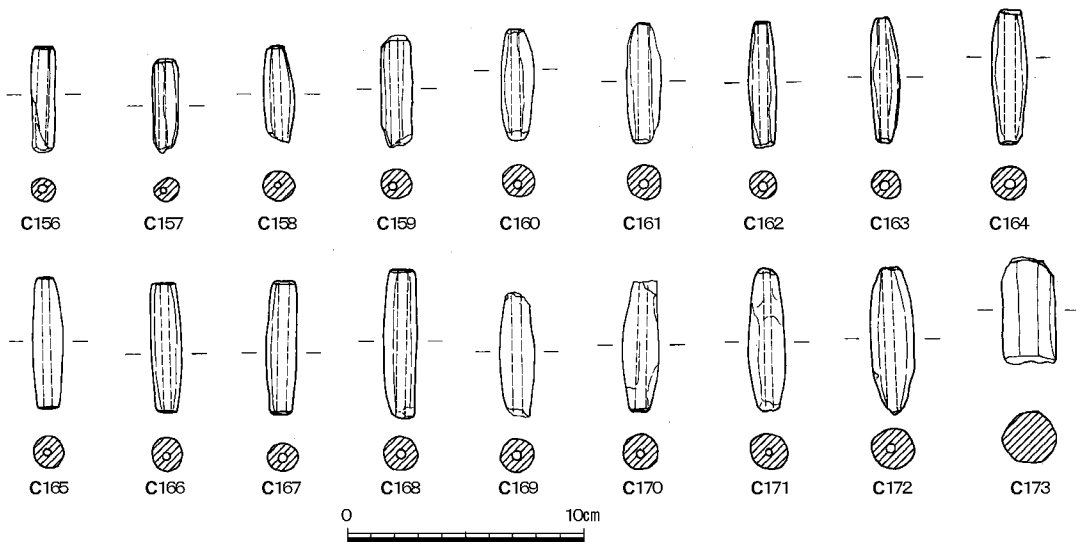
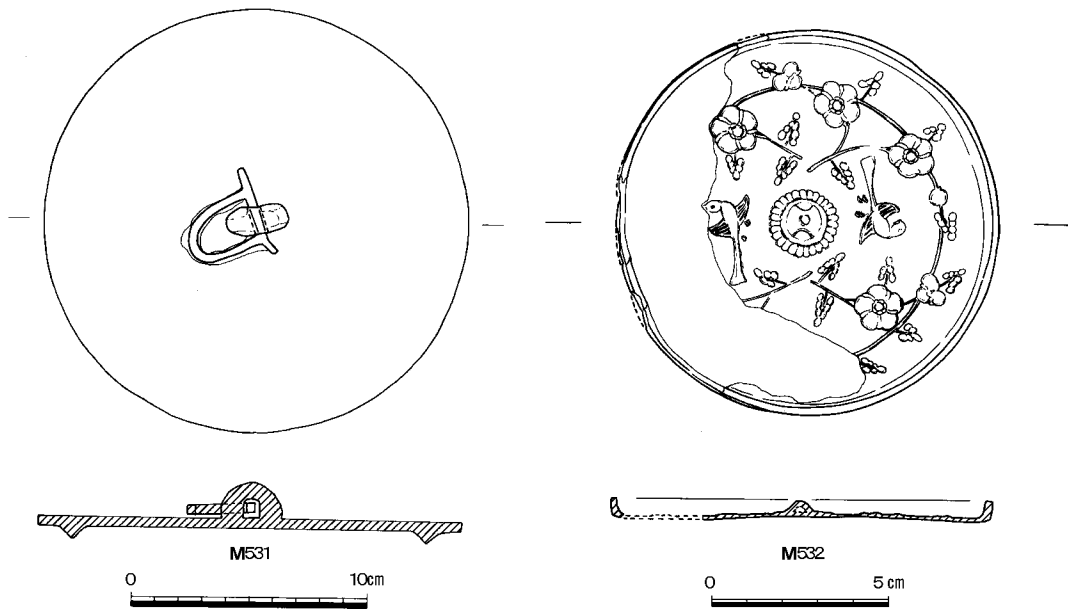
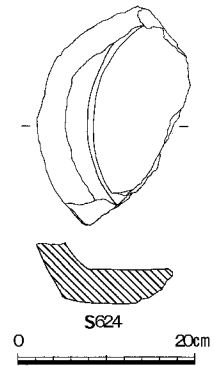


写真52 M531処理前状況



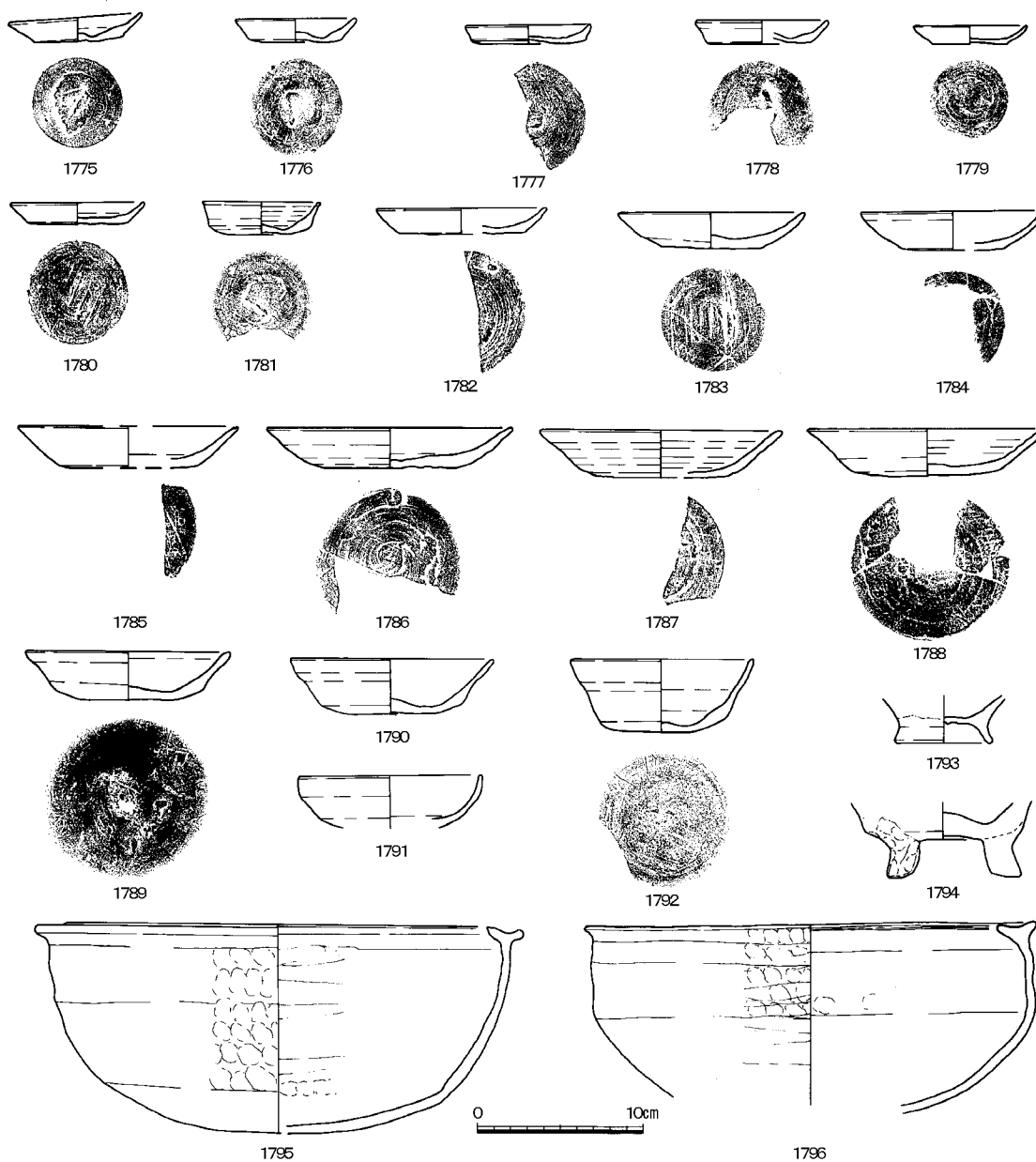
第766図 B地区の遺物② (1/3,1/8)

第3章 発掘調査の概要

られる。なお、時期が古代末にさかのぼり、経塚と思われる集石土壙1もこの地区にあることからそれら遺構との関連も注目される。それら以外にも滑石製石鍋を転用した温石S624、土錘C156~172もみられる。遺物の時期は、鎌倉時代を中心としながらから戦国期にかけての幅がある。(弘田)

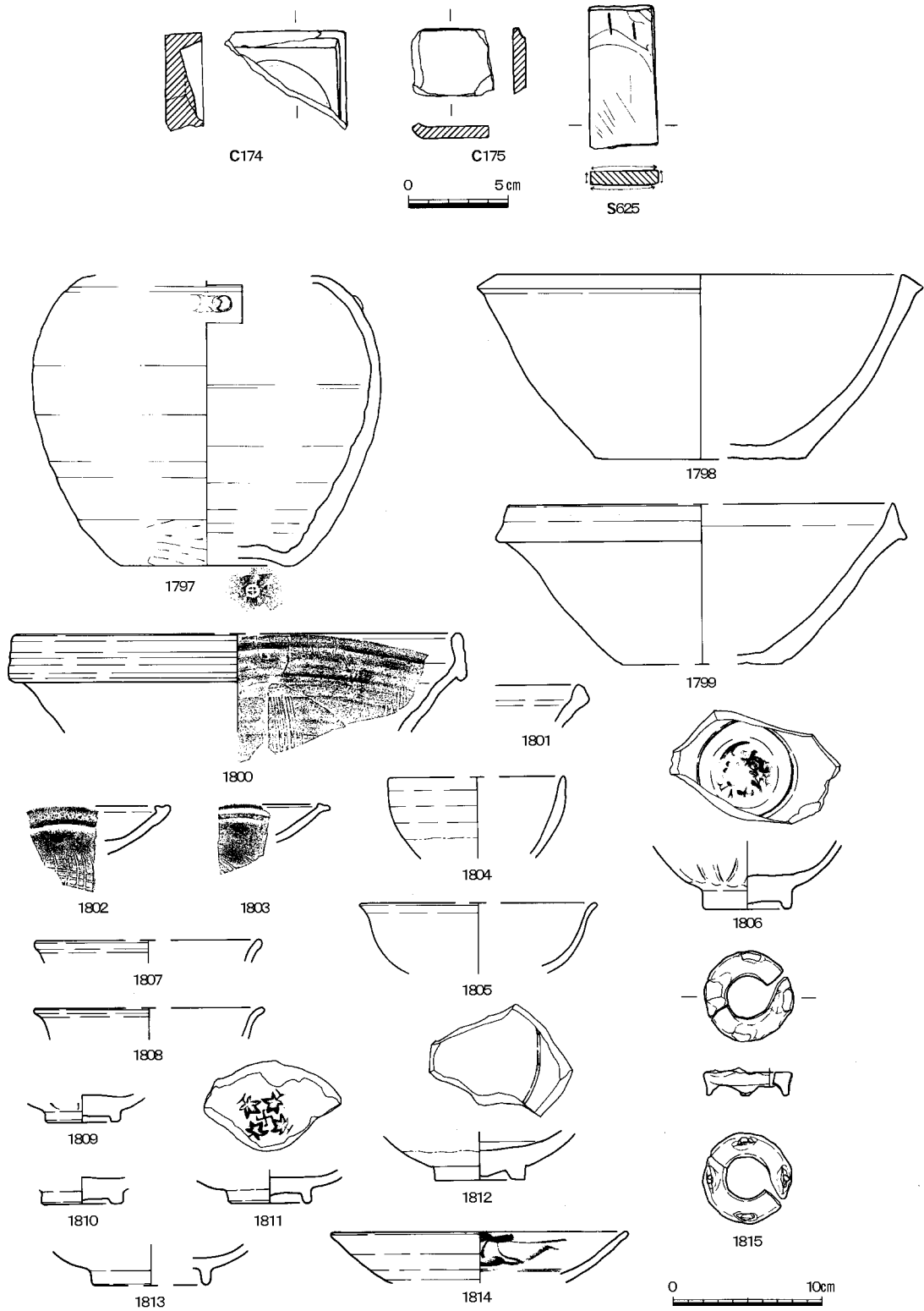
C地区 居館中心からその東側にあたり、堀1~3東辺を含む。居館(堀1~3)の各段階の遺物が存在するとみられる。

出土遺物のうち土師器皿には、小皿1775~1781、中皿1782~1785、大皿1786~1788が、杯では、1789~1792がある。そのほかに足高高台の1793や香炉であろうか三脚付の1794がある。底部の調整は、糸切りが一般的であるが、ヘラ切り1775や最後に丁寧にナデる1789もある。瓦質土器では、羽釜1795・1796がある。備前焼では、外底面に刻印「⊕」のある壺1797は4期以降にみられ、播鉢1798~1800も



第767図 C地区の遺物① (1/4)

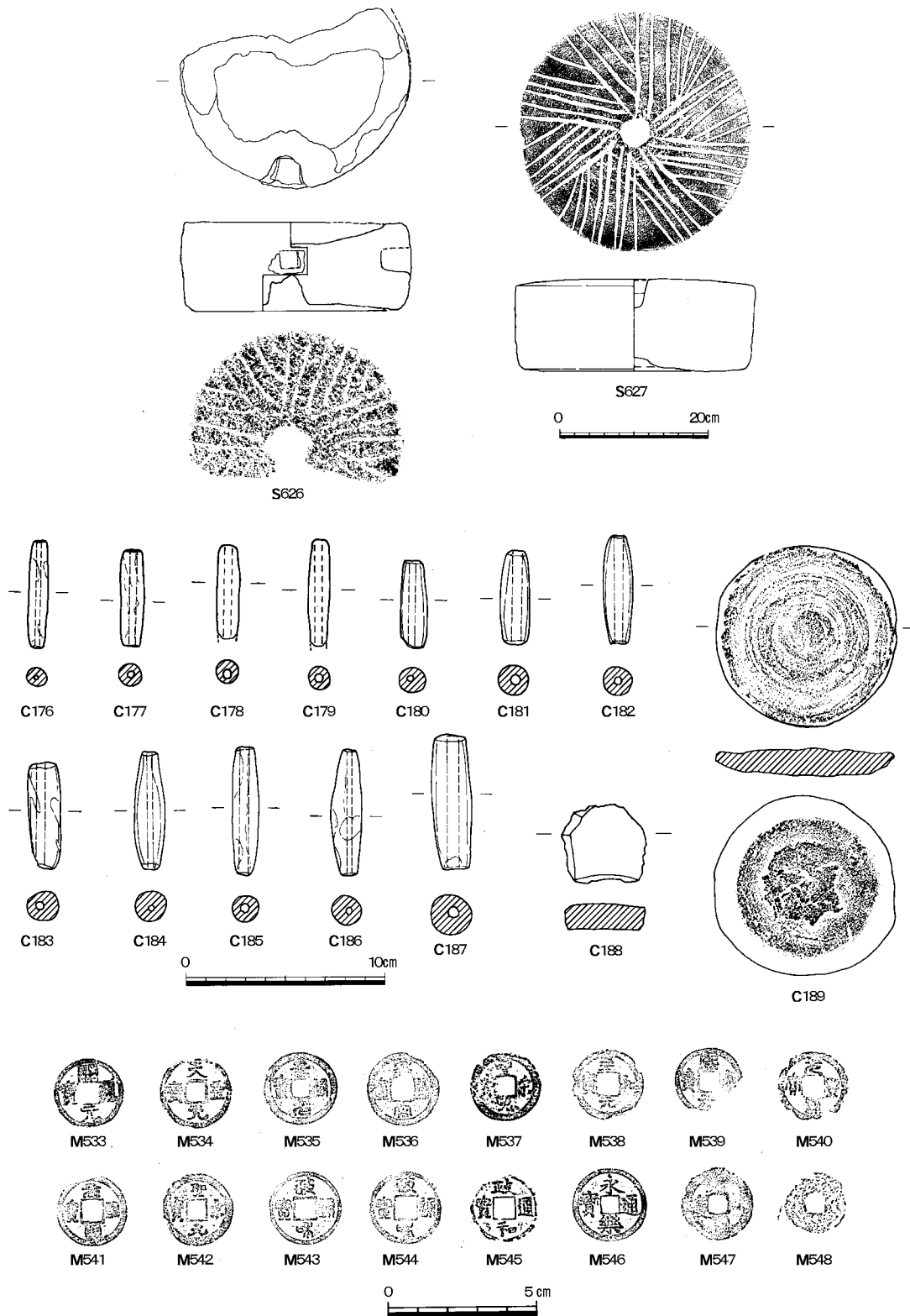
4期の範疇にある。1801は東播系須恵器の捏鉢である。1802～1804は瀬戸美濃産の卸皿と天目椀で、  
 時期は、14世紀末～15世紀代である。貿易陶磁類も出土量が多く、すべて青磁である。無文ないしは



第768図 C地区の遺物② (1/4,1/3)

第3章 発掘調査の概要

片彫り連弁文の碗1806・1809、皿1814は、14世紀以降の年代が考えられる。そのほかにも、器台とみ



第769図 C地区の遺物③ (1/8,1/3,1/2)

られる1815がある。

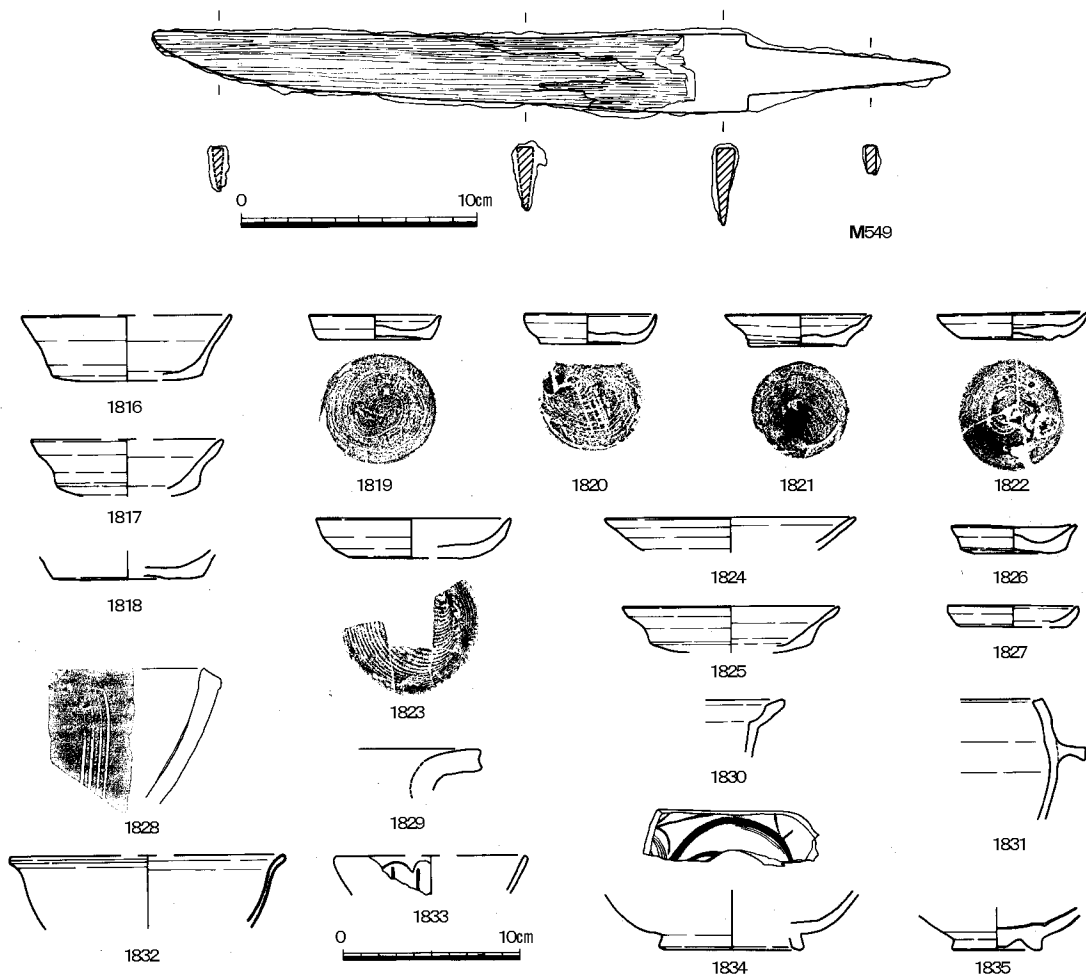
石製品では、砥石S625、石臼S626・627がある。渡来銭には、唐銭から明銭までのM533～548があり、土製品では、陶硯C174のほかC175も硯の可能性がある。土錘C176～187、土器転用円盤状土製品C188・189もみられる。(弘田)

D地区 堀4と溝31に囲われた屋敷地と一部にその南側を含む。

出土遺物のうち、土師器では、杯1816～1818、小皿1819～1822・1826・1827、皿1823～1825がある。備前焼の播鉢1828は、14世紀前葉に、1829は亀山焼で、13世紀代に、1830は瀬戸産の三足盤で、14世紀末にそれぞれ位置づけられる。貿易陶磁類では、同安窯系の1835が12世紀末～13世紀にさかのぼるほかは、14世紀以降に属する。

刀M549は、切先から茎尻までの長さ34cmを測る腰刀で、木製鞘が良好に残る。レントゲン写真では、目釘穴以外で刀身にも穿孔がみられる。出土位置をみると、(第424図)掘立柱建物22の内部にあたるが、建物に伴うものかどうかはわからない。周辺には墓16～22がありそれらと同様に墓の副葬品であった可能性も考えられるが、墓壇の掘り方は確認できなかった(図版131)。(弘田)

E地区 D地区に南接する。柱穴のあり方からみて1つの屋敷地であったと思われる。



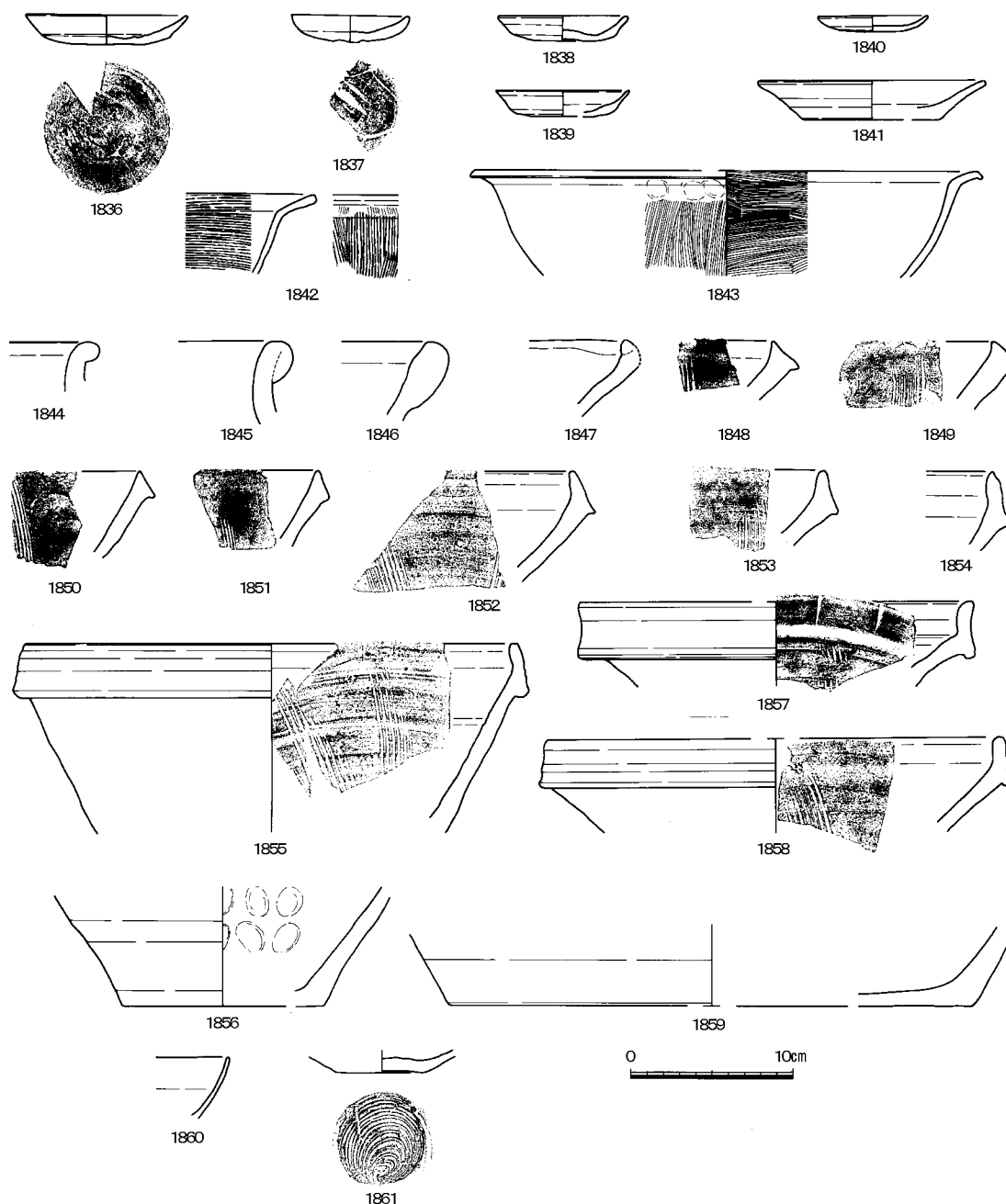
第770図 D地区の遺物(1/4,1/3)



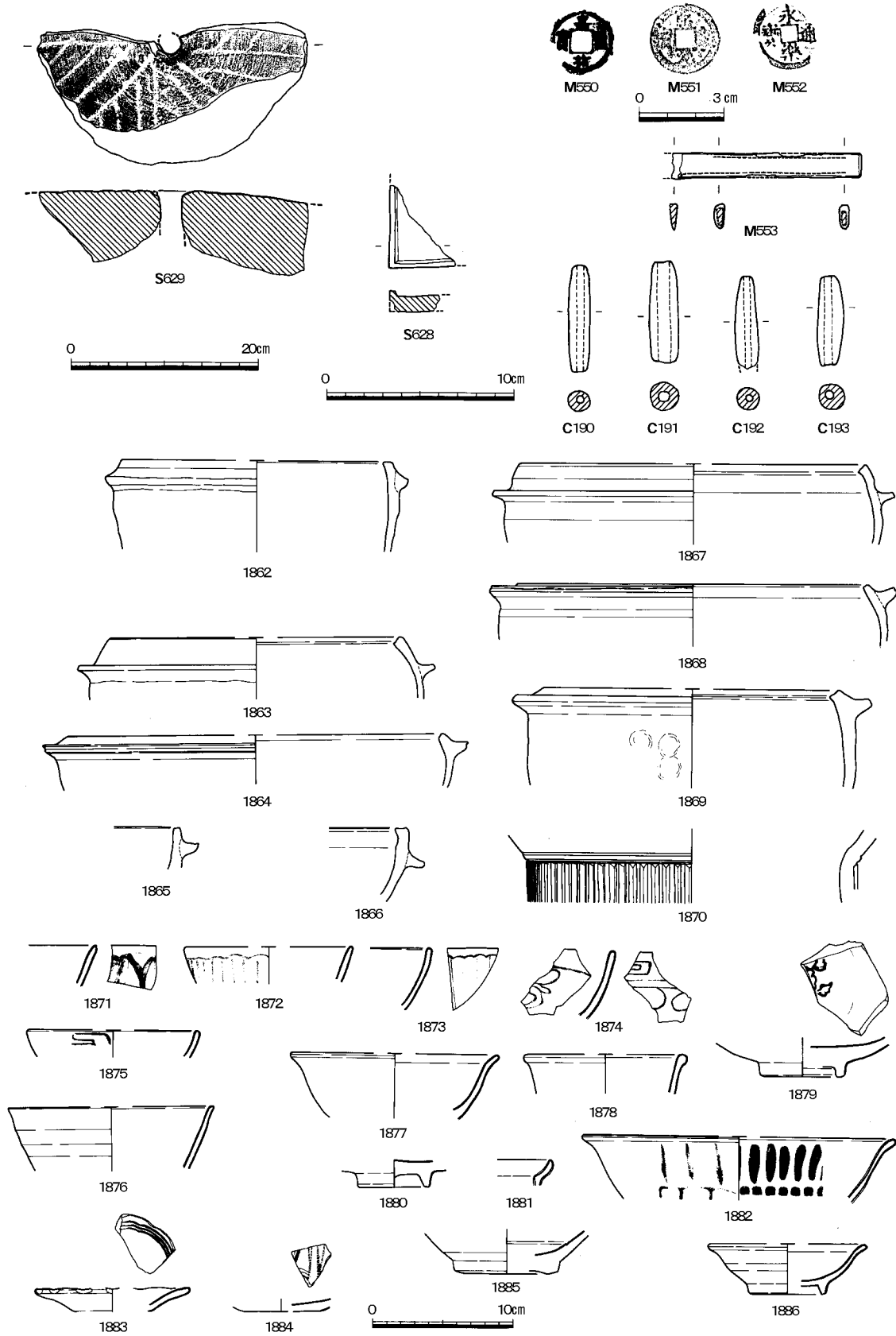
第3章 発掘調査の概要

出土遺物は、土師器の小皿、皿、鍋がある。備前焼では、壺1844（Ⅲ期）・1845（ⅣA期）・1846（ⅣB期）、播鉢1848～1851（ⅣA期）・1852～1858（ⅣB期）がある。このほかには、東播系須恵器の捏鉢1847、勝間田焼椀1860・1861が、瓦質土器では、羽釜1862～1866と風炉1870がある。貿易陶磁では、雷文帯や細連弁文青磁、白磁碗1886など中世後半のものが多いが、同安窯系青磁皿1884、白磁碗1885のように12～13世紀代にさかのぼる例もみられる。土器以外では、硯S 628、石臼S 629、渡来銭M550～552、刀子M553や土錘C 190～193もみられる。（弘田）

F地区 居館南東部で堀1～3の各段階の遺構の時期を示す遺物群とその南部の溝に囲われた屋敷地



第771図 E地区の遺物①（1/4）



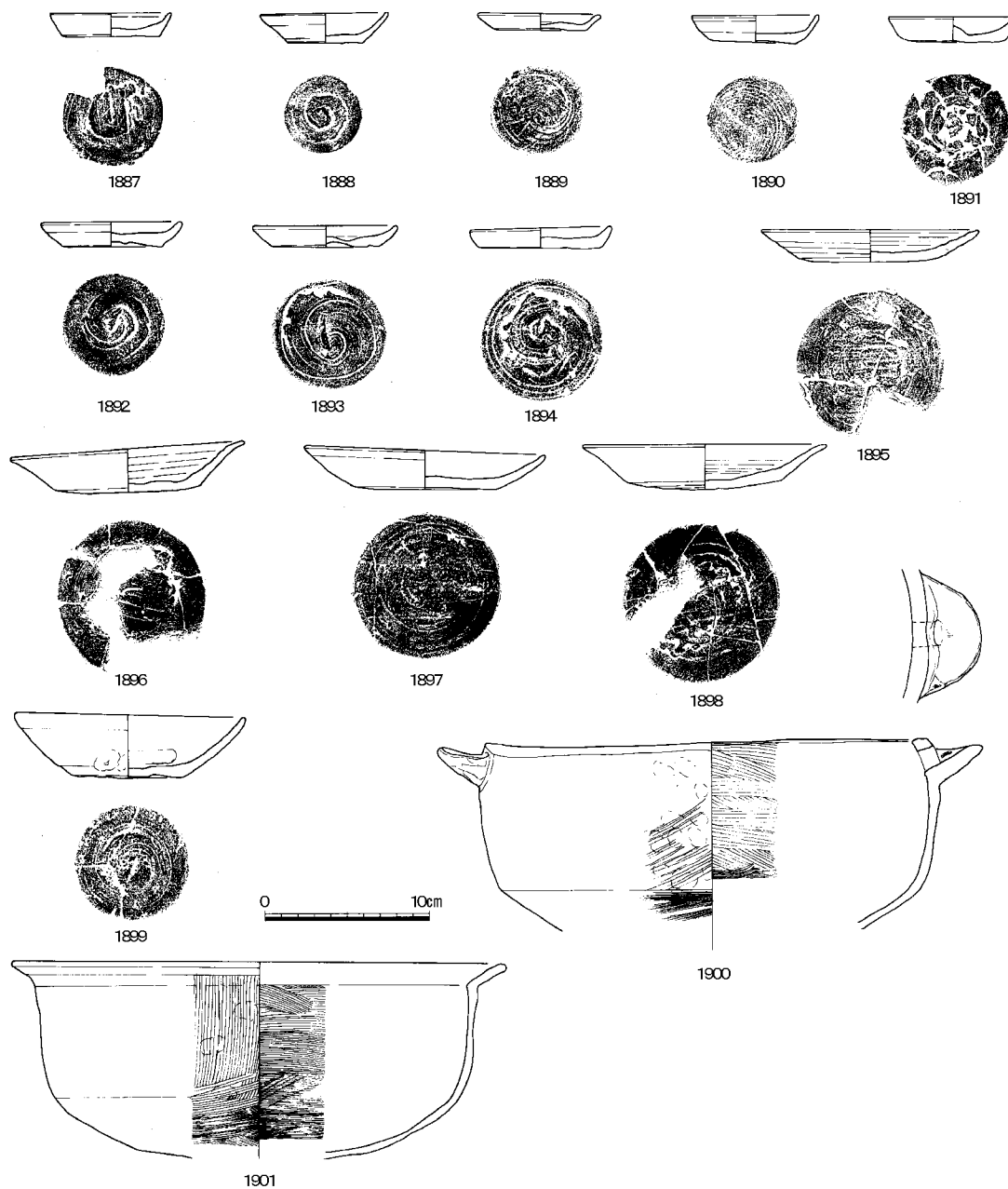
第772図 E地区の遺物② (1/4, 1/8, 1/2, 1/3)

第3章 発掘調査の概要

の遺物を含む。旧調査区の1つであるため、堀の内外を遺物では分離できない。

出土した遺物のうち、土師器小皿では、底部ヘラ切りのち底部に板状工具の圧痕の残る1887、小杯状の器形でヘラ切りの1888と糸切りの1889～1894がある。皿1895～1898は、すべて糸切り後に板状の工具圧痕を残す。土師器杯では、径に対して器高が低い1899がある。ほかにも、瓦質土器の外耳鍋1900、土師器鍋1901がみられる。

備前焼では、播鉢1902～1906がみられる。1905（IVB期）以外はIVA期にあたり、14世紀末～16世紀初めに位置付けられる。1907は、焼成が軟質であり、底外面に糸切りがみられる。形態的には勝間田焼に類似する。1908は、東播系須恵器の捏鉢で、13世紀以降であろう。瀬戸美濃産では、平椀の口縁

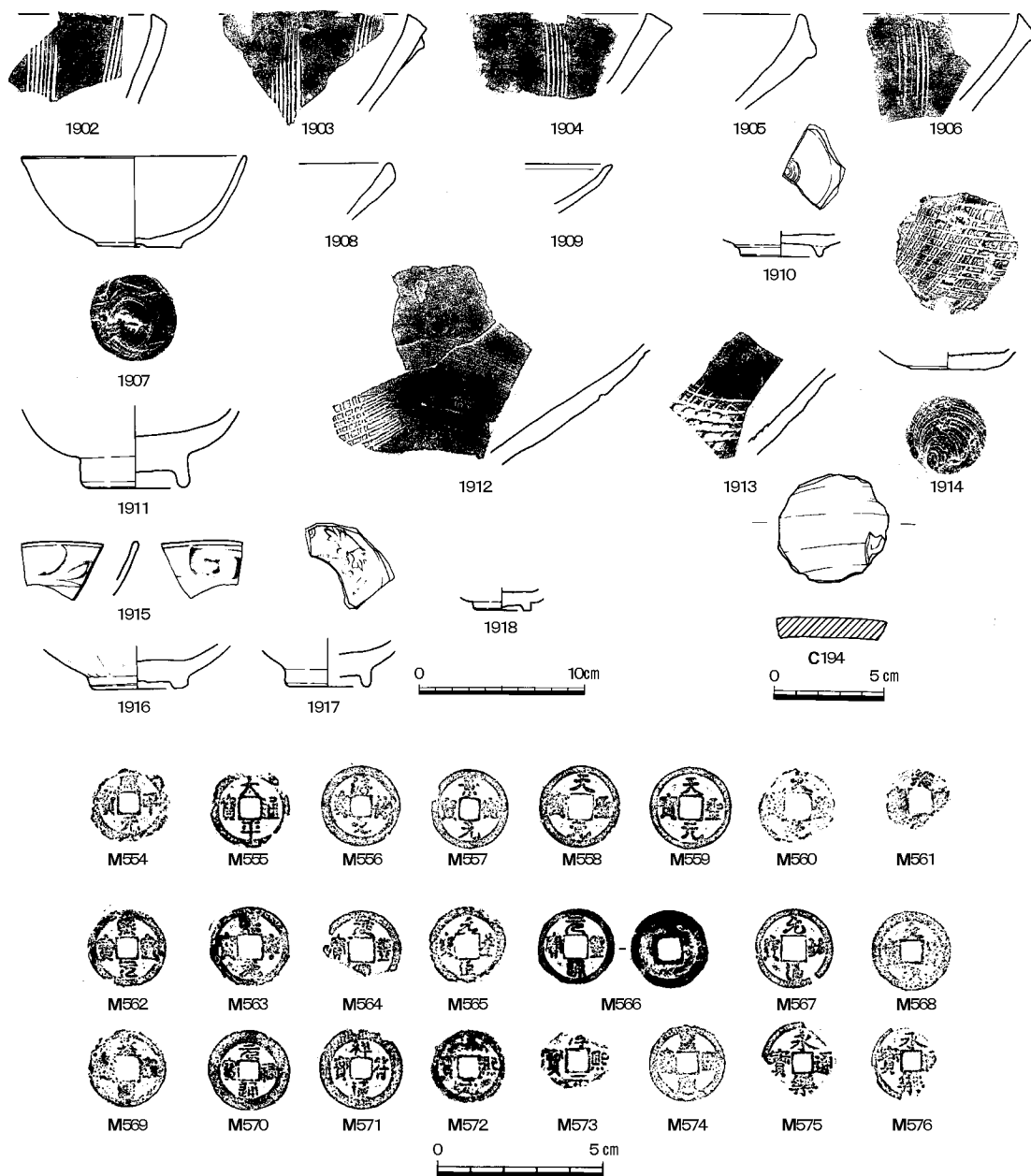


第773図 F地区の遺物①（1/4）

部1909が14世紀末に、1910は貼付高台に糸切り底で14世紀後半に、三足盤1912は15世紀第Ⅲ四半期、1913は15世紀前半、卸皿1914は、15世紀後半に位置付けられる。貿易陶磁類では、雷文帯青磁1915と底部片1916・1917で、いずれも高台内底の釉を掻き取る。1918は白磁小皿で、13世紀代にさかのぼる。

土器以外では、C194が、土器を転用した円盤状土製品である。渡来銭には、宋銭M554～574と、明の永樂通寶M575・576がある。M566は背面に「八」字がみられる。

土錘も多く出土しており、すべては図示し得なかった。形態には筒状のものⅠ類と糸巻き状Ⅱ類を呈する二者があり、さらに大きさからも2～3に細分できそうである。Ⅰ類は、C200・201など（Ⅰa）、C208・209など（Ⅰb）、C203・212（Ⅰc）に分かれる。また、内径もほぼ一定ではあるが、やや



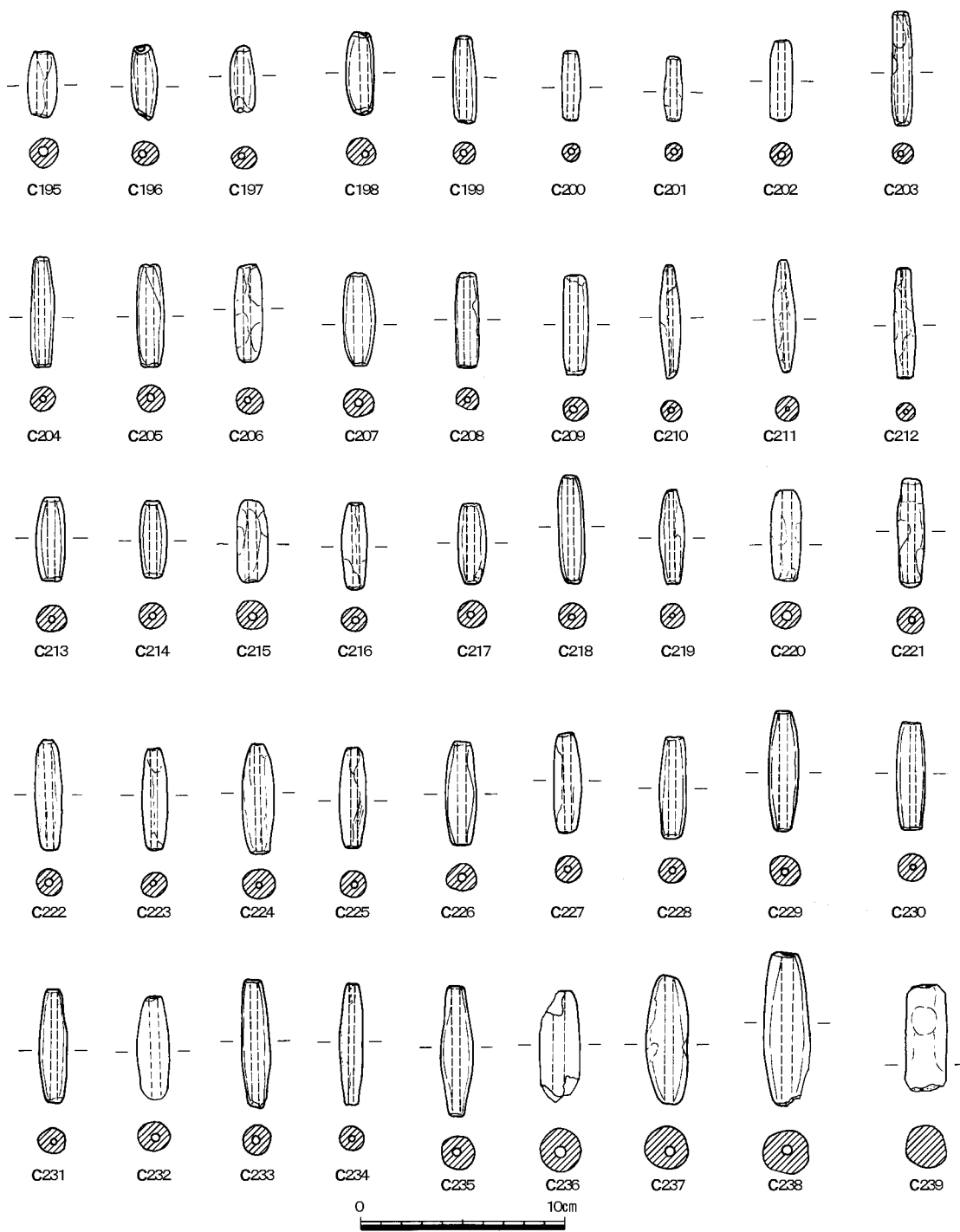
第774図 F地区の遺物②（1/4,1/3,1/2）

第3章 発掘調査の概要

小さいC211などがみられることから機能差も考える必要があるだろう。C239は、鍋類の脚とは思えなかったので土製品として扱ったが用途不明である。 (弘田)

G地区遺物 居館南西部の南側外にある溝に囲われた屋敷地を中心とした地区である。

出土した遺物のうち、土師器には小皿1919~1921、皿1922や鍋1927がある。また、白磁碗1928、備前焼壺1929・1930(Ⅲ期)、播鉢1931(Ⅲ期)・1932(ⅣA期)、勝間田焼の大甕1933、瓦質土器の羽釜



第775図 F地区の遺物③ (1/3)

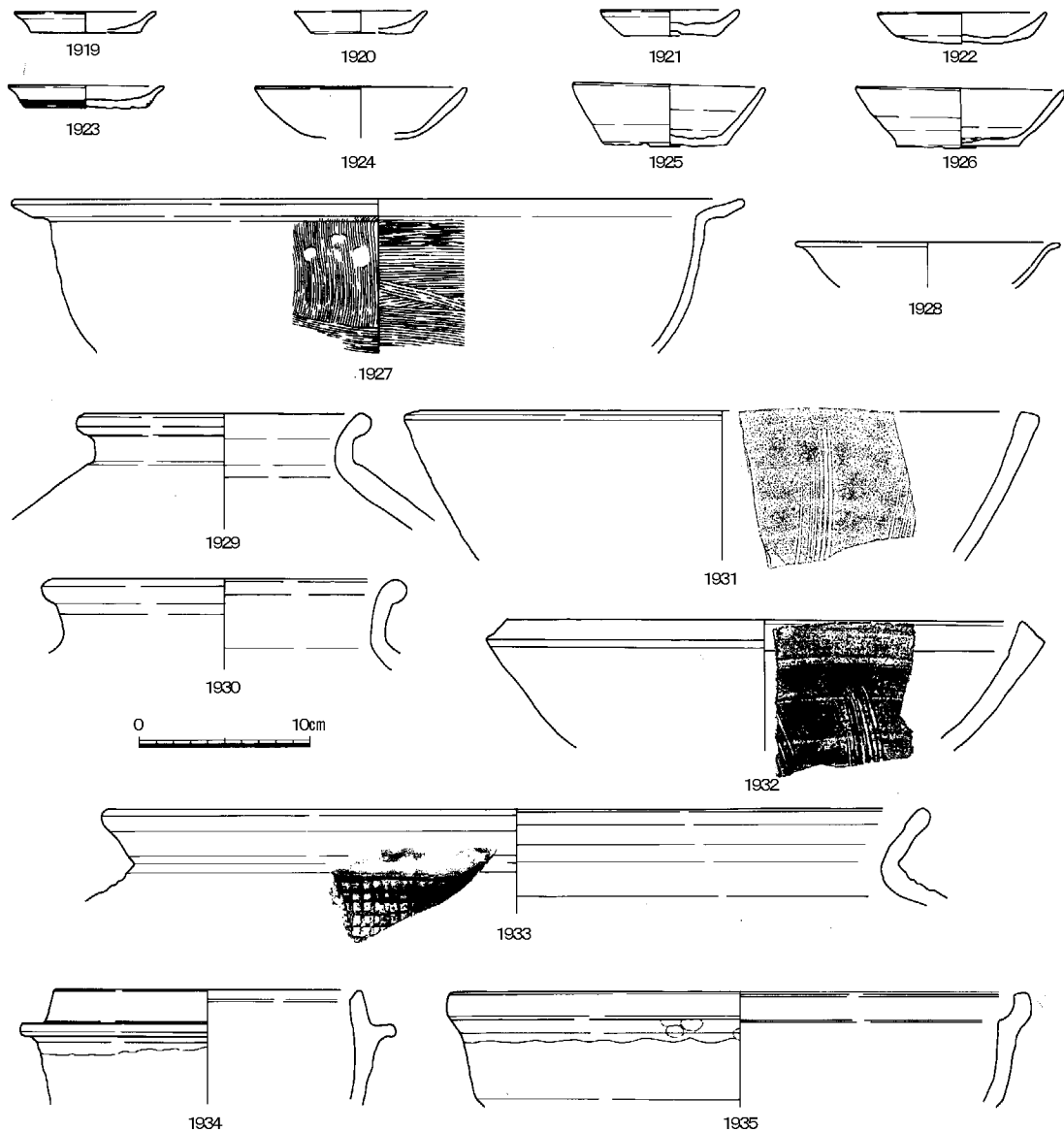
1934、鍋1935がみられる。備前焼と勝間田焼は、13世紀の後半から14世紀代の範疇にある。

この地区は、東隣するF地区とあわせて、鍛冶工房とみられる竪穴遺構1や、羽口、鍛冶滓、鍛造剥片、粒状滓などが出土した土壙、溝、柱穴が多く存在している。さらにここに図示はしていないが、鍛冶滓、ふいごの羽口片も多数出土している。また、周辺の遺構群からみても鍛冶屋敷が想定できる。なお、本文に図示できなかった窪地において砂鉄、製錬滓もみられた。製錬滓はローリングを受けた状態であり、この地区より上流にあたり製鉄炉の存在した久田原遺跡からの流れ込みと考えられる。

(弘田)

H地区 居館南西隅にある出入り口部東側の掘立柱建物群を中心とした地区である。

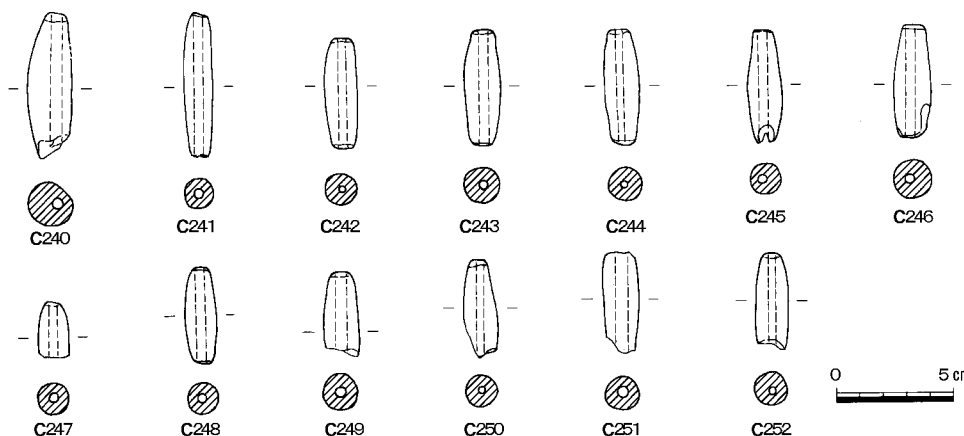
出土遺物のうち、須恵器1945が最も古く、平安時代にまでさかのぼる。久田堀ノ内遺跡において、古代に属する遺構・遺物は極めて乏しく、久田原遺跡でも古代後半の遺物は出土していない。この周



第776図 G地区の遺物① (1/4)

第3章 発掘調査の概要

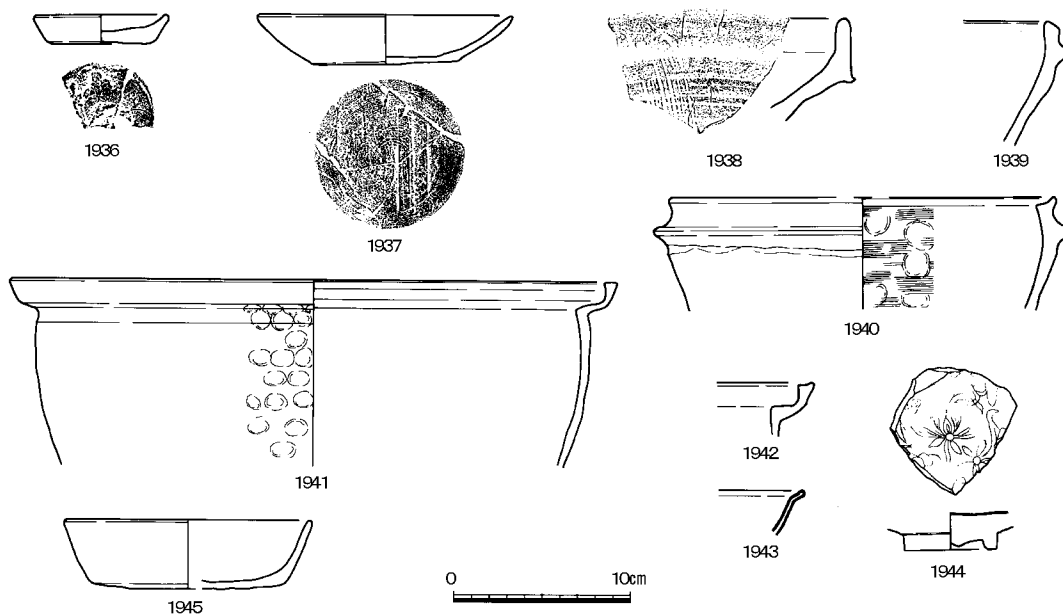
辺に古代の遺構が存在したことを示唆するのだろうか。土師器では小皿1936、皿1937がある。備前焼播鉢1938は、IVA期に相当する。瓦質土器類には、鉢1939・1940、鍋1941・1942がある。さらに白磁碗1943、青磁碗1944がみられる。(弘田)



第777図 G地区の遺物② (1/2,1/3)

I地区 遺跡全体からみると南東隅部にあたり、南北2つに分かれた建物群とその周囲に墓・土壌が展開する。

遺物も少なからず出土しており、図示したものはそのごく一部である。土師質土器皿には、小皿1946～1949、中皿1950～1952がある。備前焼の甕は、IV B期にあたる。1954は、勝間田焼の椀である。瀬戸・美濃産の平椀1955は、14世紀末に位置付けられる。また、瓦質の羽釜1956や14世紀以降、16世紀頃の青磁碗1957～1959もみられる。C253は、土器を転用した紡錘車であろう。

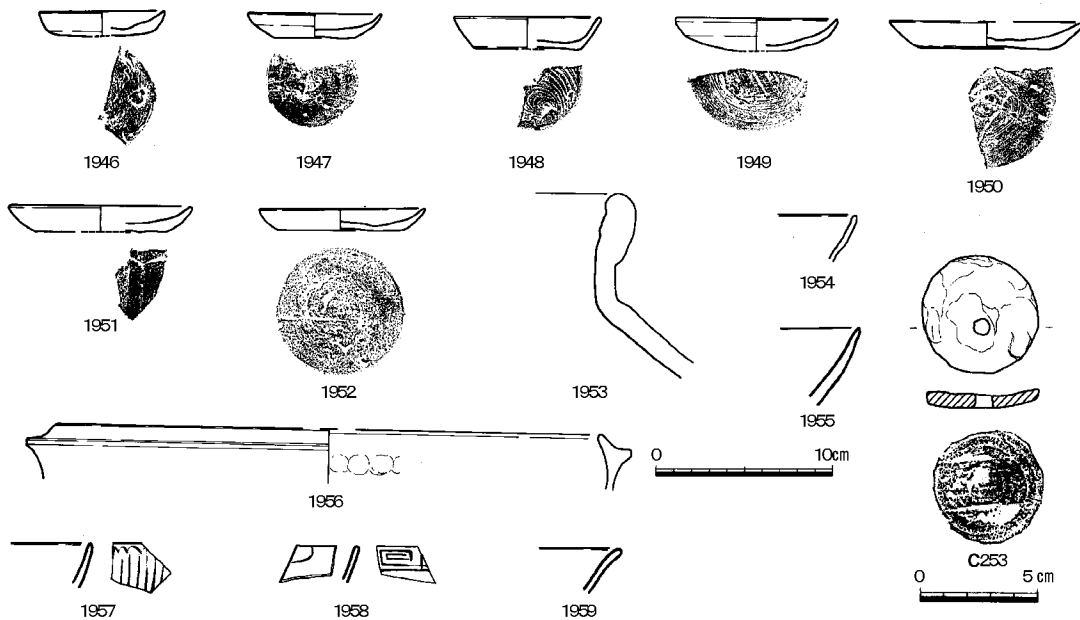


第778図 H地区の遺物 (1/4)

このほかにも図示できていないが、備前焼Ⅱ期の播鉢や瀬戸・美濃10期の椀、漆塗膜の付着した繊維などが柱穴から出土している。遺構出土の遺物とあわせて、13世紀から16世紀代にかけての遺物がまんべんなくみられた。(弘田)

J地区 遺跡南中央部で、南北に長く設定された調査区をそのままJ地区とした。掘立柱建物群は、北と南に別れておりそれぞれ別の屋敷地と思われる。そのうち南側の屋敷地は、遺跡南端にある掘立柱建物47を中心として、I地区南の建物群とともに1つの屋敷地を構成したとみられる。建物47の周辺部にも、柱穴が密集する。

出土遺物のうち土器類には、土師質土器、瀬戸・美濃産、備前焼、貿易陶磁器、瓦質土器がある。土師質土器杯では、杯D類1960～1963、C類1964、A類1965(亀山行雄「中世の久田原遺跡」「久田原



第779図 I地区の遺物(1/4,1/3)

遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2003参照)がある。皿には、小皿1966～1975、中皿1976～1978、大皿1979～1981の三種類がみられる。杯Dは口径に対し器高が高く、同類の中では古い様相を示す可能性がある。底部調整は、糸切りが一般的であるが、1966・1967のような回転糸切りは当遺跡では例が少ない。

備前焼では、小杯1982、内面に漆状の付着物が認められる皿1983や、壺1984(Ⅳ期)、甕1985(Ⅲ期)・1986・1987(ⅣB期)、播鉢1988(ⅣA期)・1989～1991(ⅣB期)がある。1982は竪穴遺構1の屋内土壌から出土したものと近い。

瀬戸・美濃産では、瓶子1993、輪花皿1994、平椀1995～1997、卸皿1998・1999がある。1993・1994は13世紀代に遡るが、平椀や卸皿は15世紀代である。

貿易陶磁器類のうち青磁は、上田秀夫分類のBⅠ～Ⅲ類碗2000～2005、皿2006、盤2007～2010があり、14～15世紀代に属す。

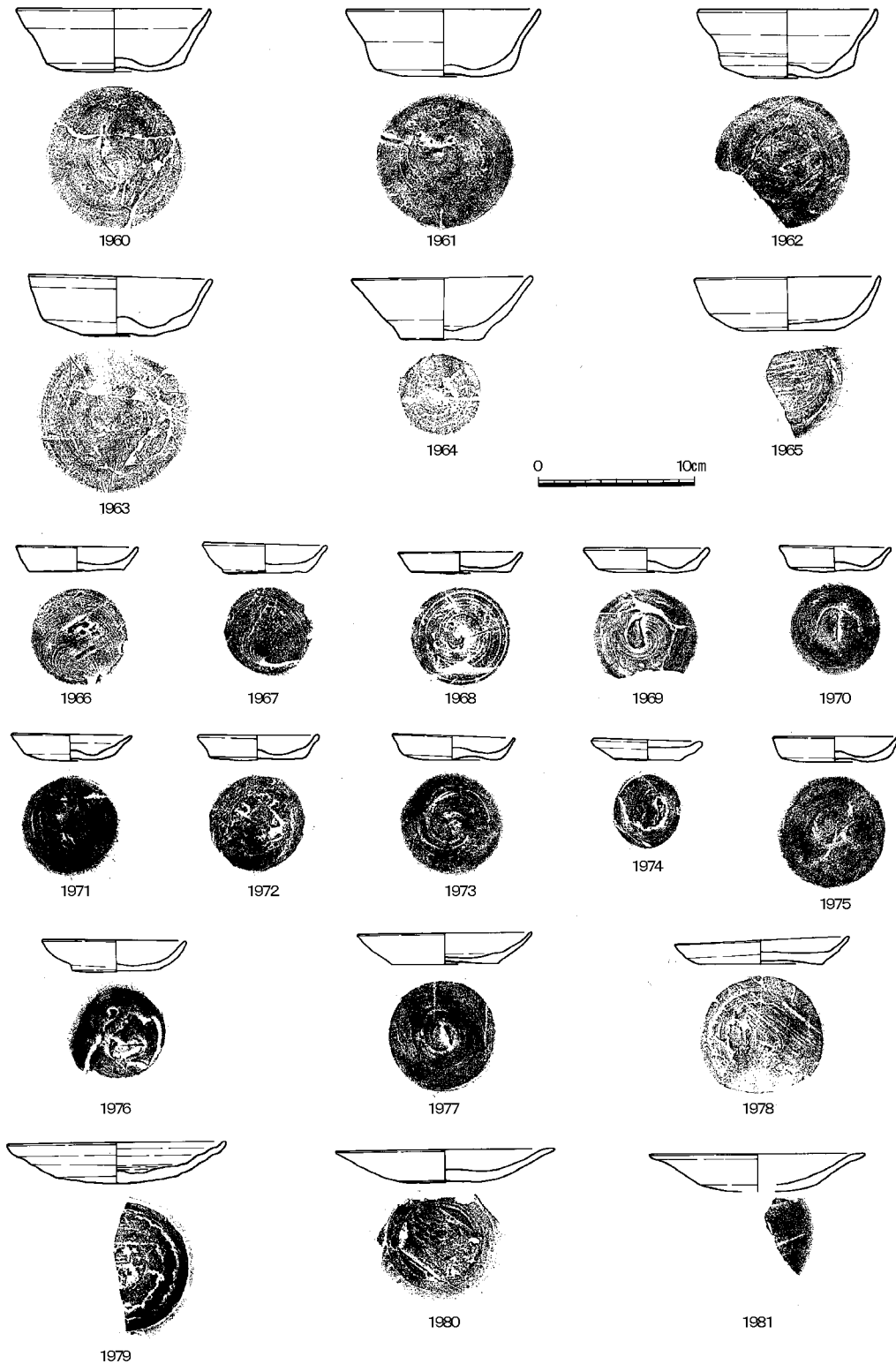
白磁では、碗2011、皿2012～2014、合子2015が、青白磁では、合子2016がある。12～13世紀代に属



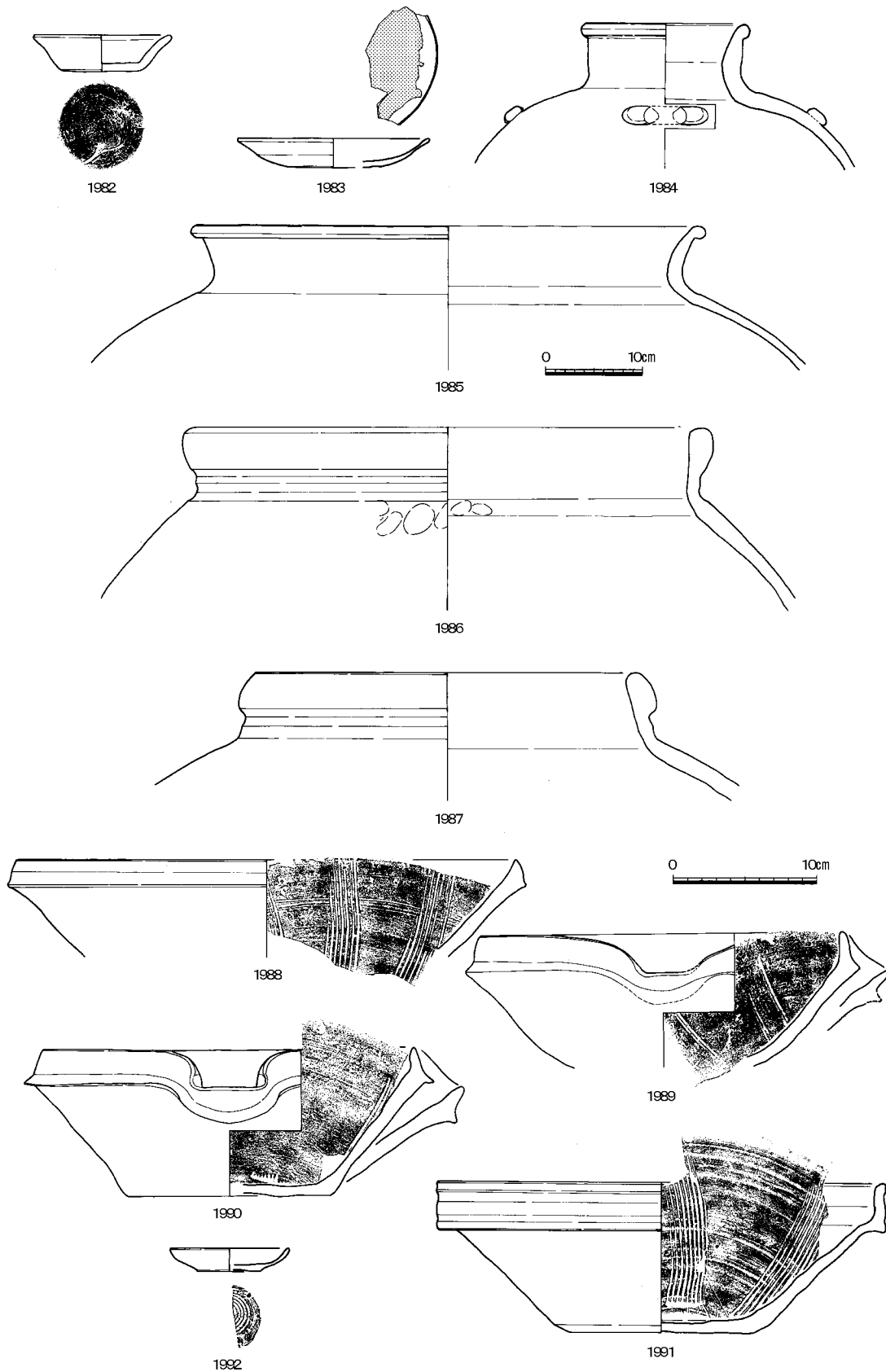
第3章 発掘調査の概要

するものと、2013・2014のようにやや新しく15世紀前半に位置付けられるものがある。青花碗2017は、16世紀末～17世紀代の景德鎮窯産である。

2018は、焼き締め陶器壺の破片で、A地区南東部において出土した個体と接合した。頸部や体部に



第780図 J地区の遺物① (1/4)



第781図 J地区の遺物② (1/4,1/6)

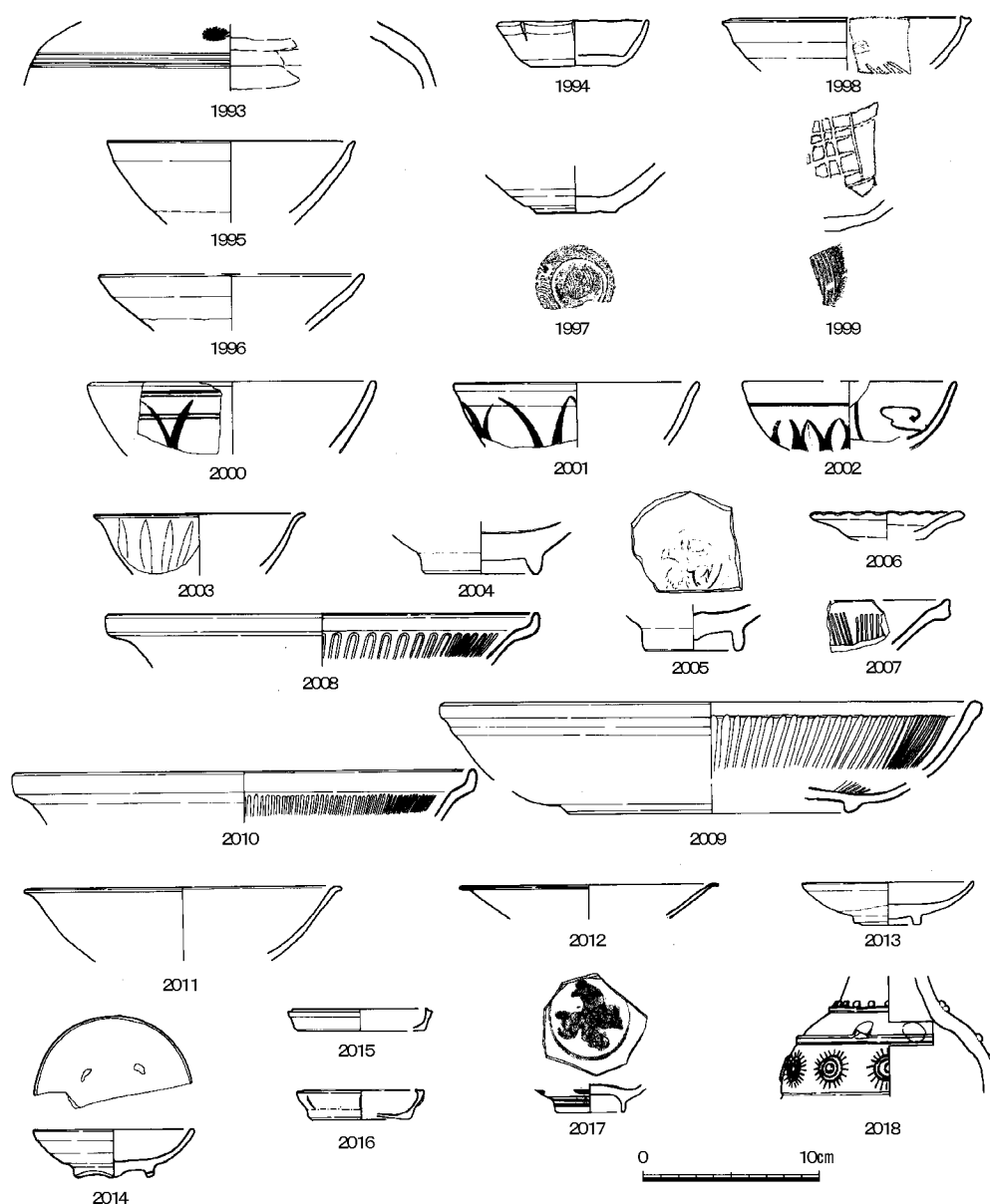
第3章 発掘調査の概要

は円形の浮文を貼る。体部にみられる円形の浮文の周りを放射状に刻むほか、環状の把手がつく。胎土中には、黒色粒子がみられる。中国南部もしくは東南アジア産の可能性はある。

瓦質土器では、羽釜2019~2021や鉢2022がある。内外面にハケを施す2022は、火鉢であろうか。2023は火鉢で、平面が方形をなし、花文のスタンプを押捺する。

土器以外にも多種多様な遺物が出土している。

石器・石製品類では、まず硯S630が目される。直径は3.8cm、奥行きが1cmを測る円形の掘り込みの周囲に連弁を刻んでおり、水溜めと思われる。その水溜めの両側および手前は欠損しているが、その両端と比べて手前は傾斜面をなし、またその部分には墨とおぼしき黒色部分がみられた。一石に水溜め、筆入れなどをそれぞれ彫り込んでいたと思われる。石材は頁岩で、中国産と考えられる。S631



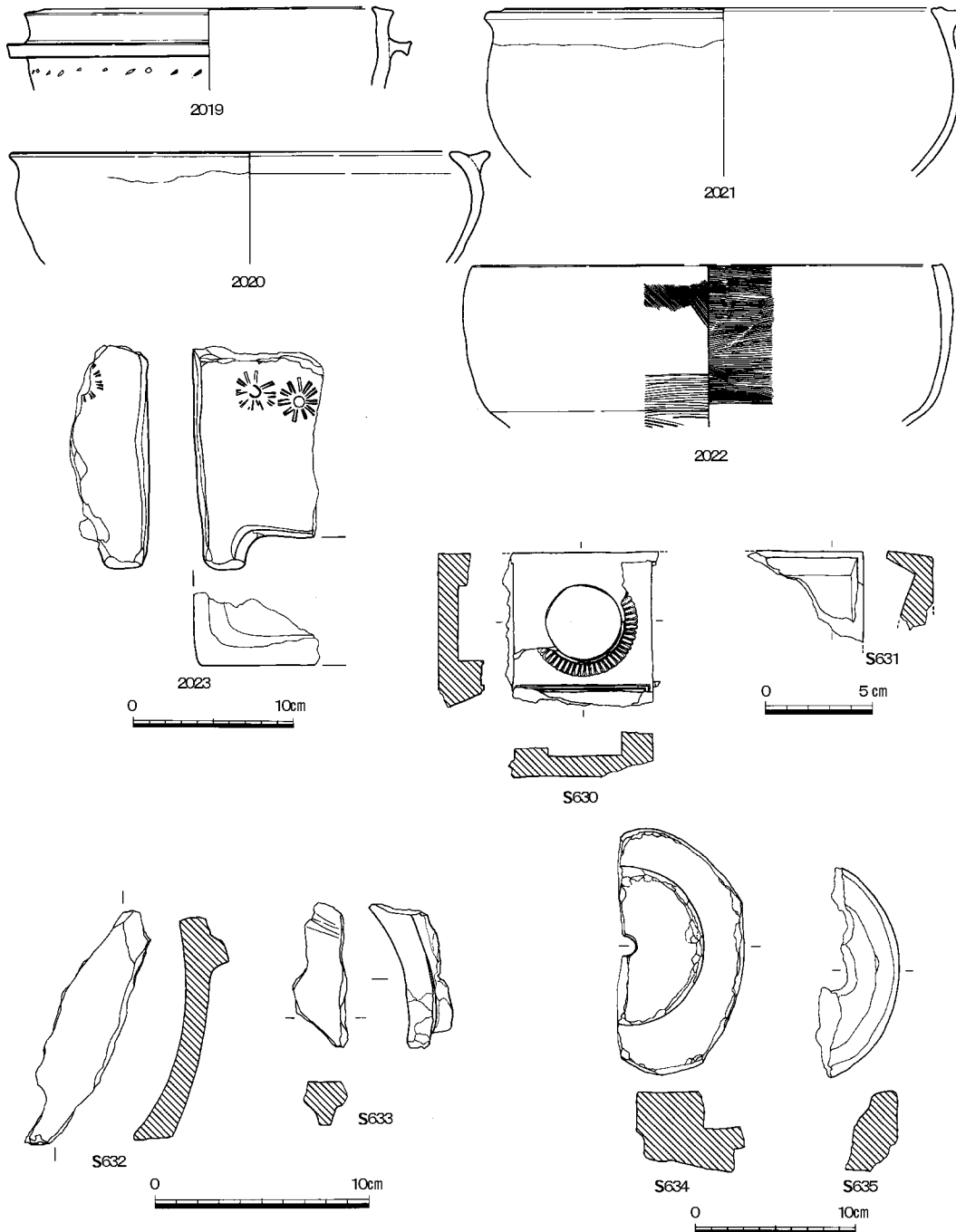
第782図 J地区の遺物③ (1/4)

は、長方形を呈する硯の破片である。さらに、滑石製石鍋を加工した温石 S632・633や石臼 S634・635がある。

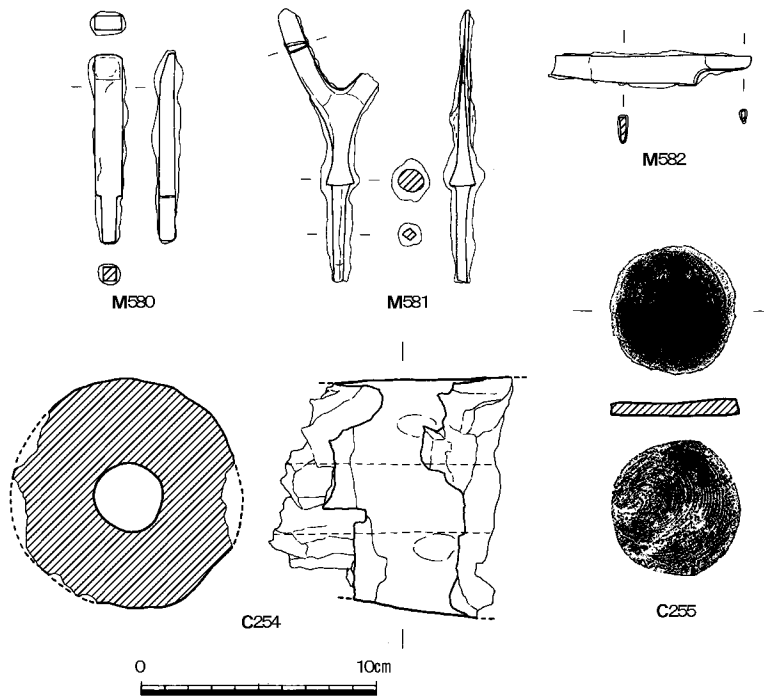
鉄器では、鑿M580、雁又の鉄鏃M581、刀子M582がる。

土製品としては、鞆の羽口C254、備前焼底部を利用した円盤状土製品C255がある。土錘も多く、C256～307がある。

出土遺物からみると、13世紀代に遡る資料も散見できるが、15世紀以降にその量を増加させること



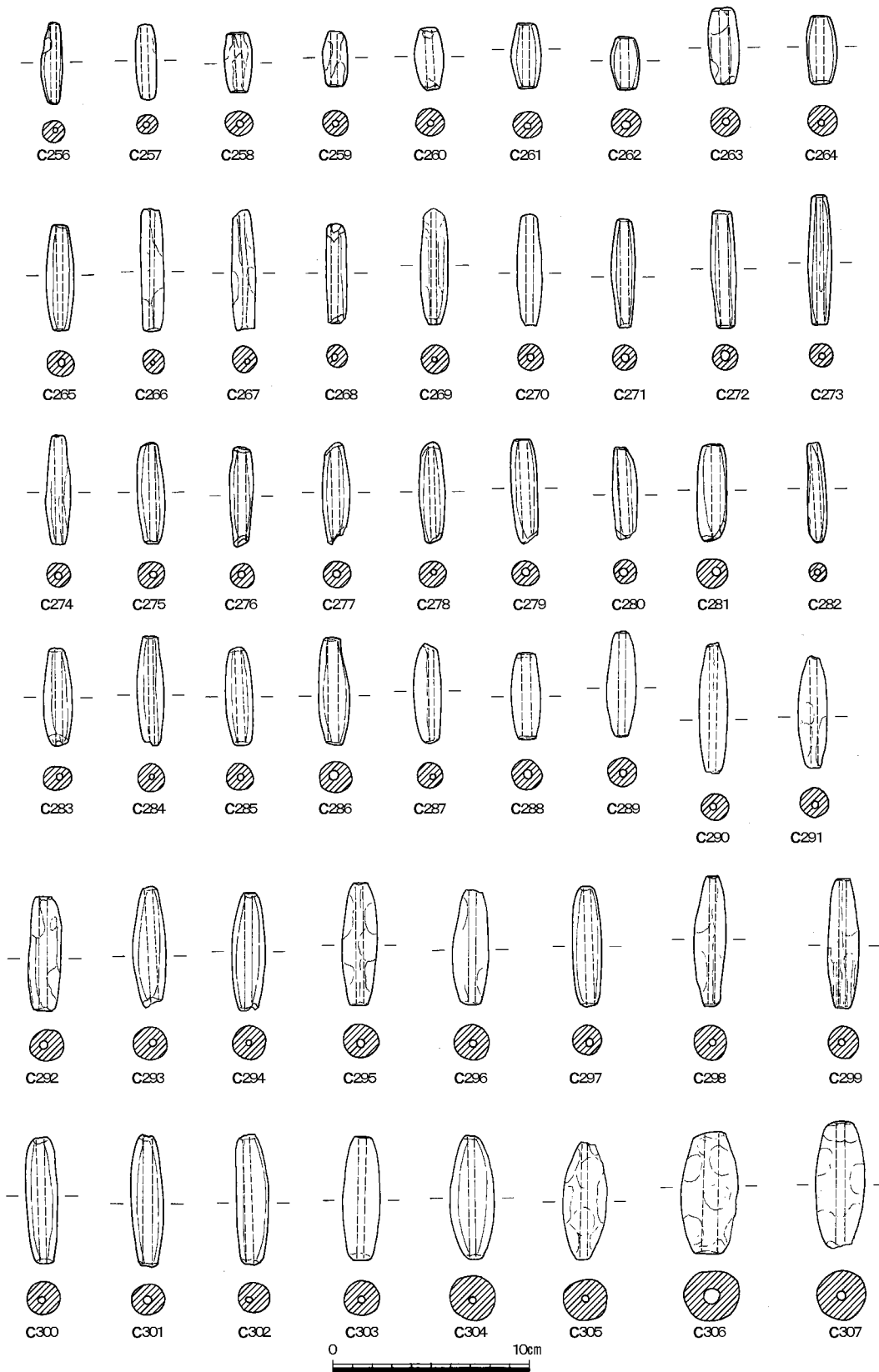
第783図 J地区の遺物④ (1/4,1/8,1/3)



第784図 J地区の遺物⑤ (1/3)



写真53 J地区の航空写真



第785図 J地区の遺物⑥ (1/3)

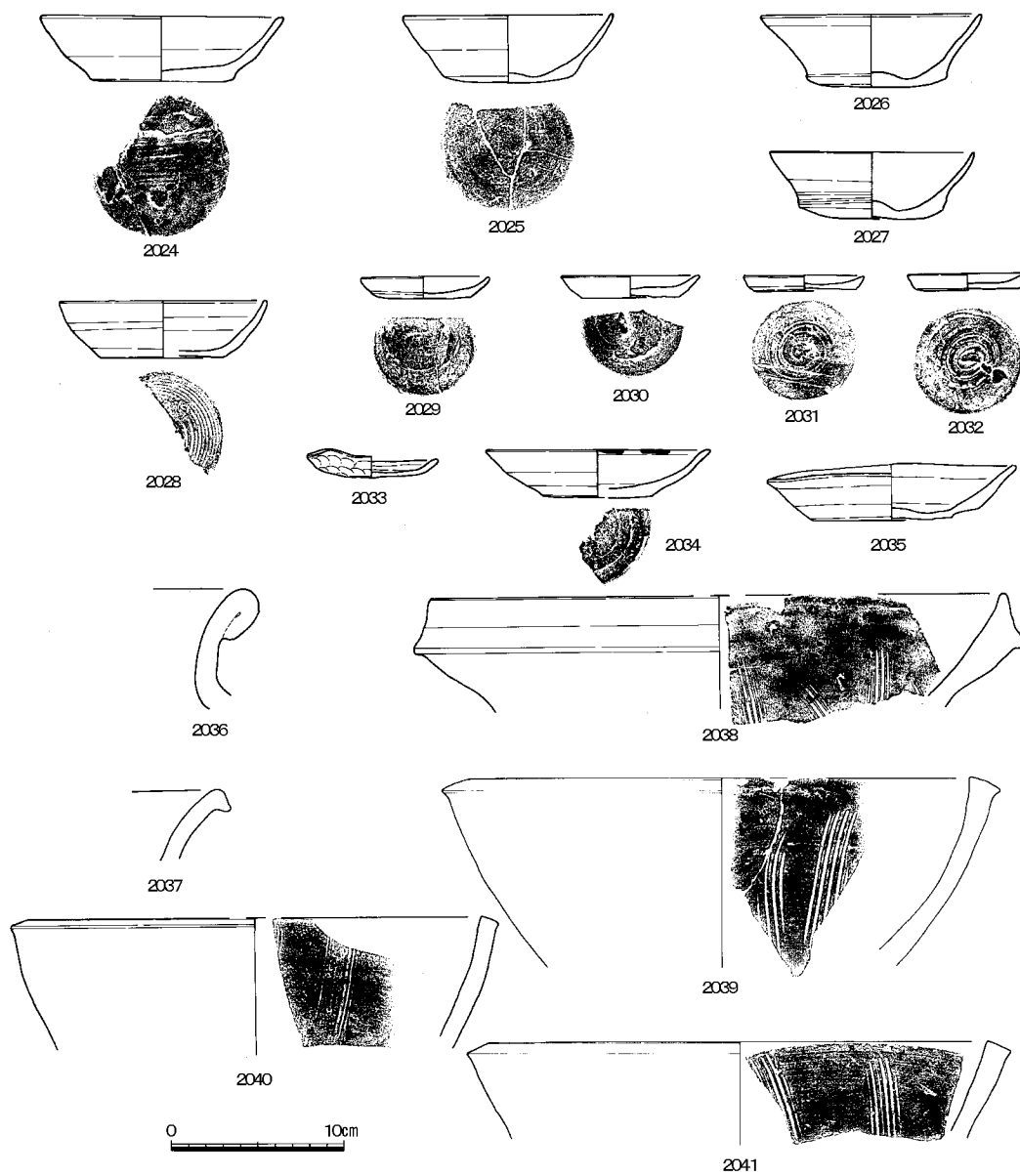
第3章 発掘調査の概要

や、他地区と比べて上物が多いことが特徴となる。そしてこの地区の屋敷は、16世紀末から17世紀初め頃まで存続していたと考えられる。(弘田)

K地区 遺跡の南西隅にあたる。この地区の中央は、縄文時代以降の河道が北西から南東にかけて流れ遺跡の南限となる。中世段階においても、その部分は大きな窪地となって残っていたようであり、遺構は、掘立柱建物がみられず、土壙や窪地を中心としていた。

出土遺物には、土師質土器、備前焼、勝間田焼、東播系須恵器、瀬戸・美濃産、肥前陶器、貿易陶磁器、瓦質土器などがある。

土師質土器では、杯皿類がみられる。杯は、「久田原遺跡」のまとめにおける分類によると、2024・2025がB類、2028はA類、底部が円盤高台状を呈する2026・2027がD類となる。底部外面に板目状の圧痕の残る2024、糸切り後丁寧にナデる2025、糸切りの2028がある。皿には、大小の二種類が存在す



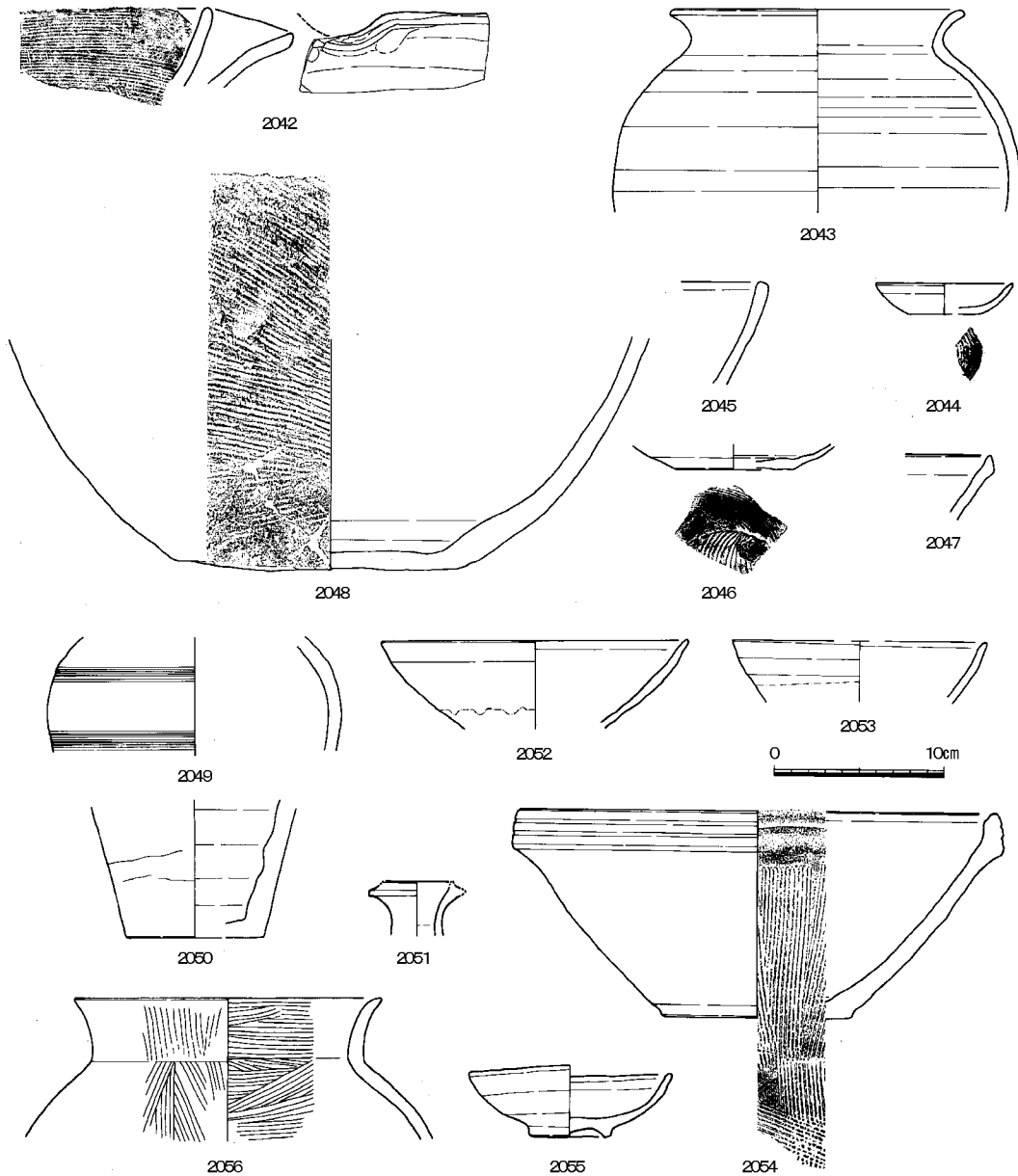
第786図 K地区の遺物① (1/4)

る。小皿2029～2033のうち、底部調整にヘラ切りを施す2029・2030と糸切りの2031・2032がある。また底部に指頭圧痕の残る2033は、京都系である。さらに、大皿の2034は、灯明皿として利用されていた。

備前焼では、甕2036（IV A期）・2037（II期）と播鉢2038（IV A期）・2039～2041（III期）がある。

勝間田焼や東播系須恵器では、捏鉢2042・2045、壺2043、椀・皿2044・2046が勝間田焼、捏鉢2047と甕2048が東播系である。

瀬戸・美濃産では、13世紀末～14世紀初めの瓶子2049・2050、同じく口縁部2051、15世紀後半の平椀2052・2053がみられる。



第787図 K地区の遺物②（1/4）

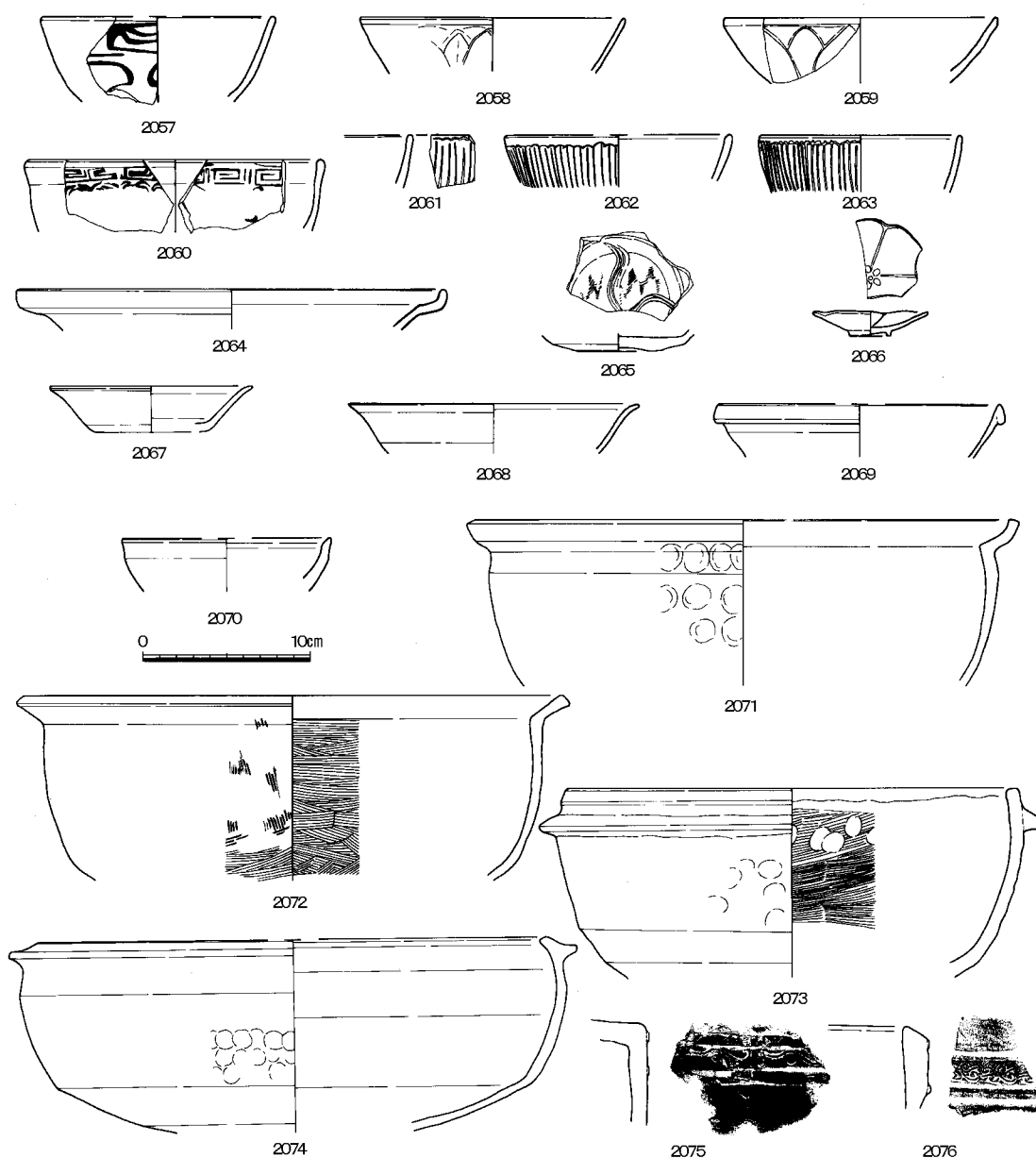


第3章 発掘調査の概要

そのほかにも、堺産の播鉢2054や古唐津の椀2055、産地は不明であるが須恵器質の甕2056がみられる。2055は、天正10年代である。

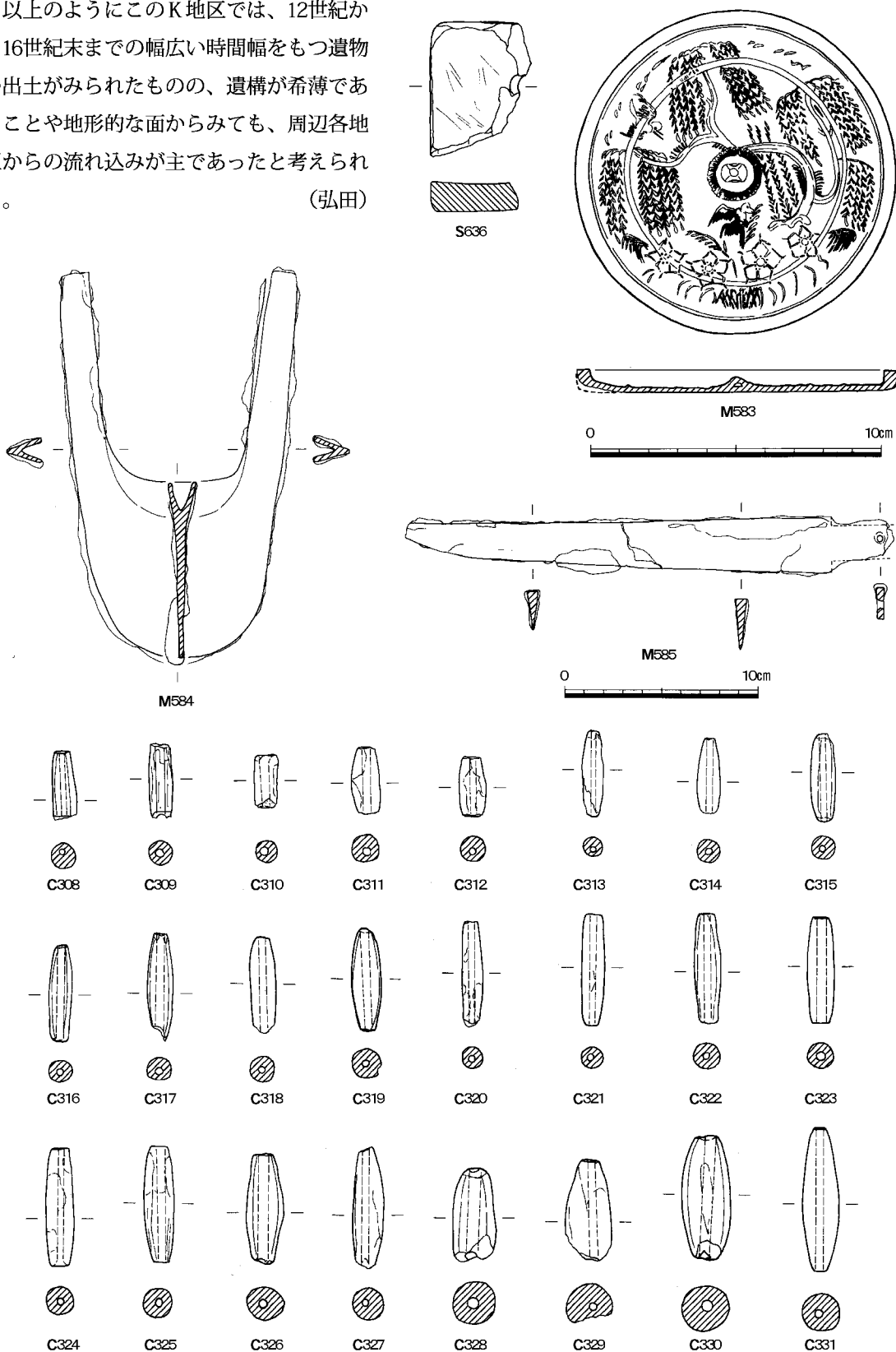
貿易陶磁器のうち青磁では、上田分類のC II類にあたる2057・2060、B I類の2058・2059、B IV類の2061～2063や盤2064、龍泉窯系I類の皿2065があり、14～16世紀代にかけての幅がみられる。青白磁の輪花皿2066は、高台部が無釉で、青磁の新しいグループと同様の年代であろう。白磁では、IX類(口禿)の皿2067、碗VII類2068、IV類碗の2069がある。天目碗2070は、15世紀代に位置付けられる。

鍋釜類のうち、2072が土師質である以外は、鍋2071、羽釜2073・2074、火鉢2075・2076とも瓦質土器である。火鉢は、平面箱型をなし、口縁部下の突線間に唐草文のスタンプを押印する火鉢で、口縁部が内側に張り出す2075と直立した口縁端部に帯状の突帯のめぐる2076がみられる。



第788図 K地区の遺物③ (1/4)

以上のようにこのK地区では、12世紀から16世紀末までの幅広い時間幅をもつ遺物の出土がみられたものの、遺構が希薄であることや地形的な面からみても、周辺各地区からの流れ込みが主であったと考えられる。  
(弘田)



第789図 K地区の遺物④ (1/3)

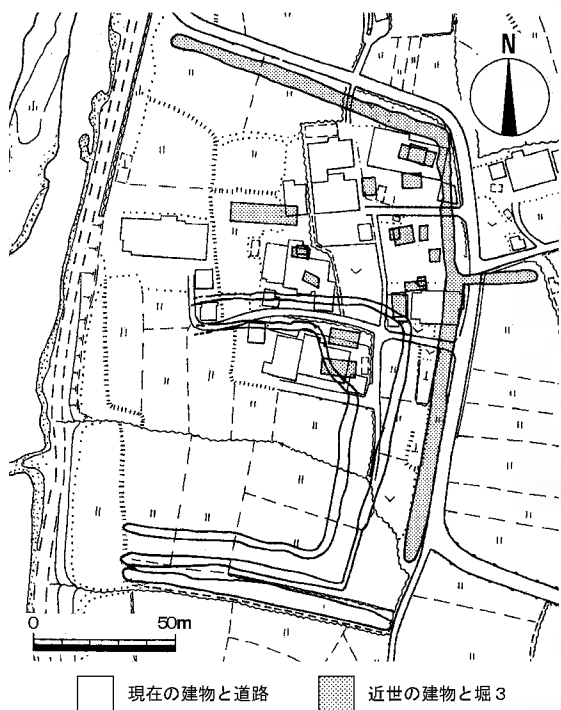
## 第6節 近世以降の遺構と遺物

### 1 概要

検出した遺構には、掘立柱建物、柱穴列、土塋墓、土塋、溝などのほか、それ以前の時代にはみられなかった井戸も存在した。そしてそれらのほとんどが堀3に囲われた内の北半部に集中しており、堀の外の屋敷地は近世には継続しないようである。そして近世の屋敷地は、家屋と屋敷墓、井戸が組み合わさっており、それが数単位で屋敷群を構成していたとみられる。出土遺物には、初期の肥前陶磁類も多くみられ、中世から近世（森氏の美作入封後）へと規模は縮小するものの集落が継続して営まれていたことが明らかとなった。

戦国期に掘削された堀3は、北辺と東辺において当初の深さが1.5mにも及ぶが、その中位を厚さ30cm程の堅牢な黄色の粘土層で埋め立てられていた。粘土層中やそこに掘り込まれているピットなどの出土遺物から、18世紀前半頃（江戸初期）のことと考えられる。またその段階において、南辺はすでに埋め立てられていたようである。さて、その粘土層は東辺中央で一旦堀の上端まで達していたが、その場所は現代の集落内の道と同じ場所にあること、堀3が町道に平行していたことや、近世の建物の位置が現代の家屋と重なることから近世初頭には現代の町割が成立していたと考えられる。近世段階の堀3は、防御としての役割は薄れ、用水として利用したことが考えられる。

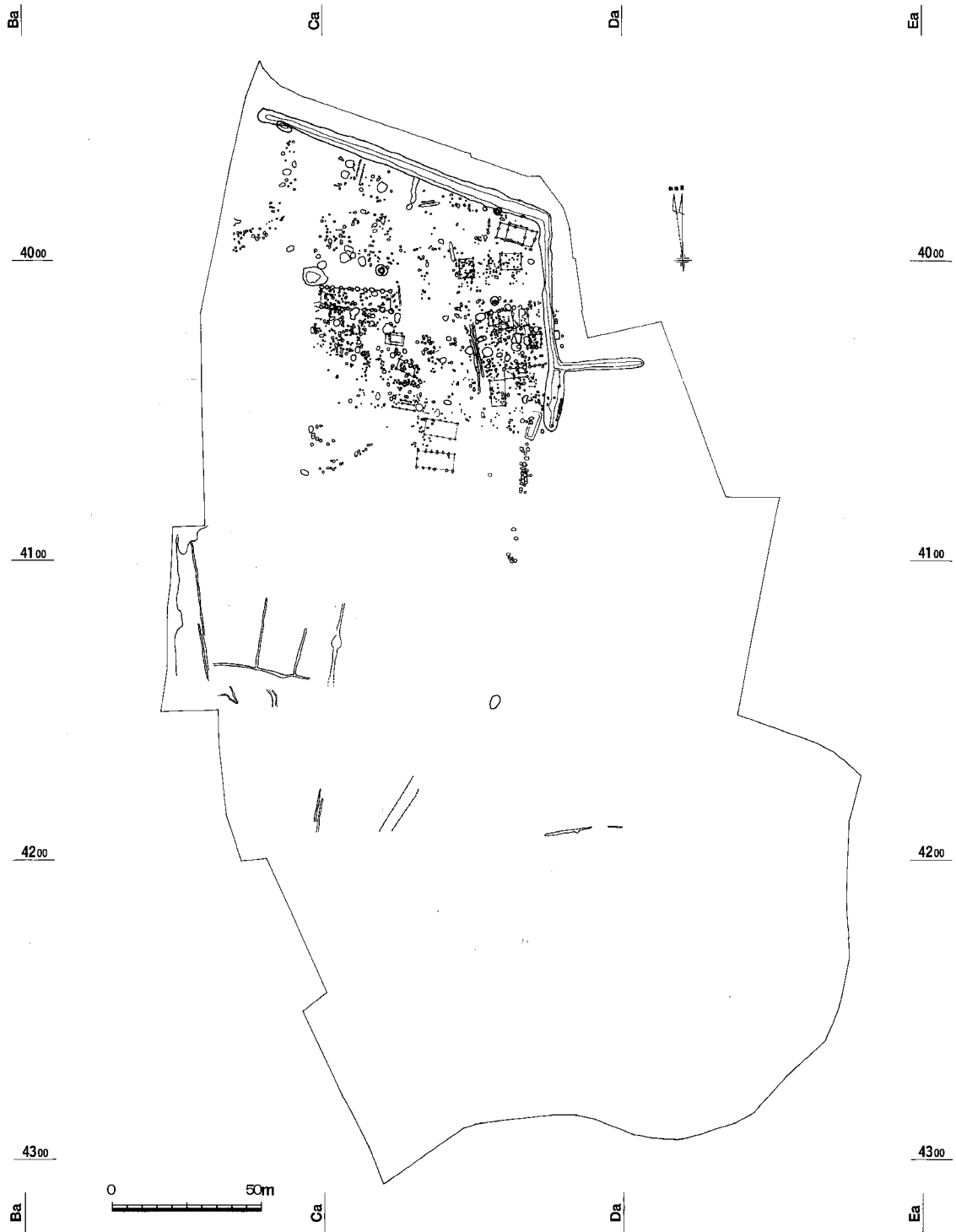
土塋墓は、掘り方が円形ないしは方形を呈し、いずれも桶棺と考えられる。副葬品には、寛永通寶、天保通寶、北宋銭、鉄、毛抜き、キセル、櫛、数珠玉などがみられる。 (弘田)



第790図 近世遺構群と現代の土地利用 (1/2,500)

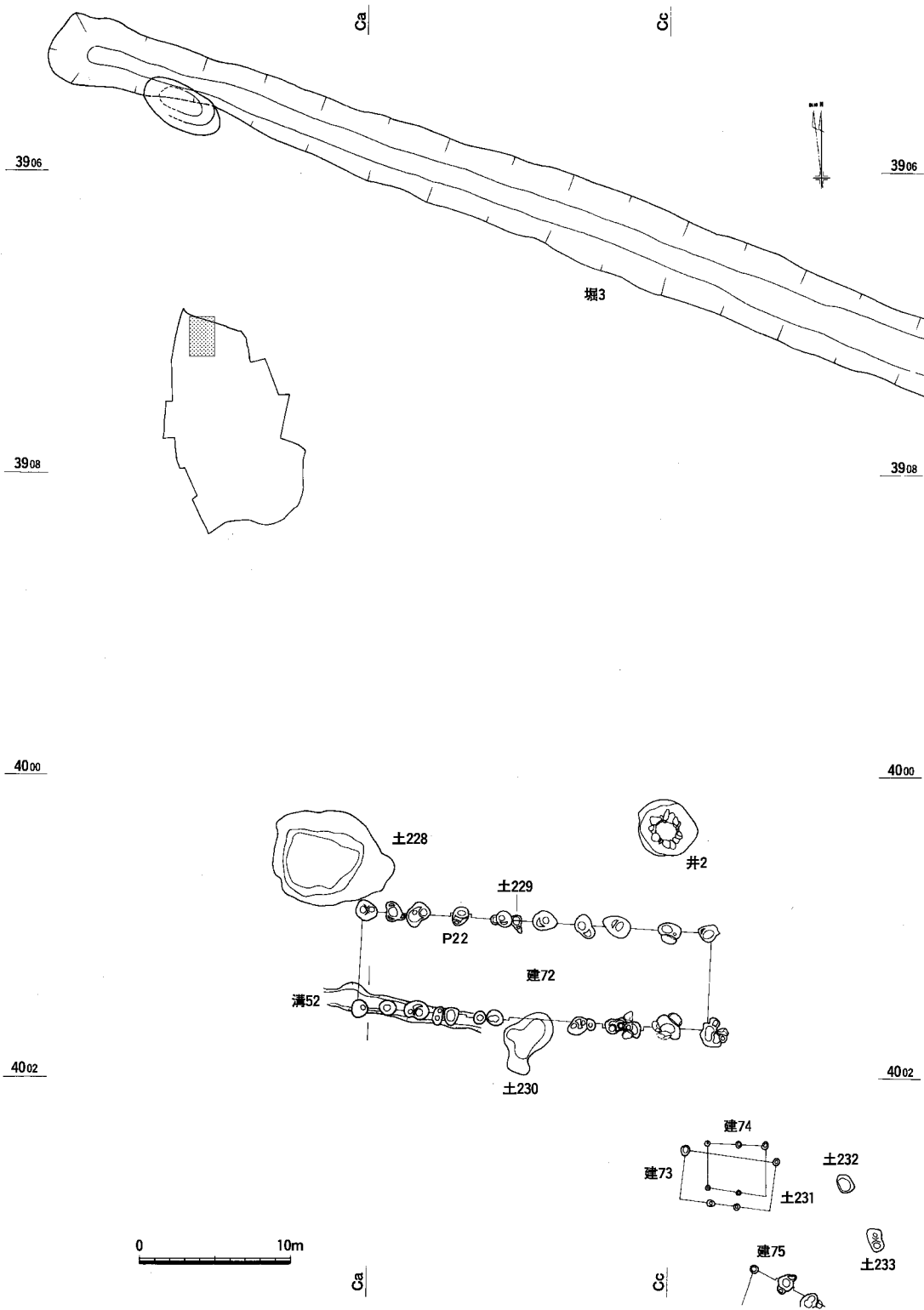


写真54 近世遺構群 (上空から)

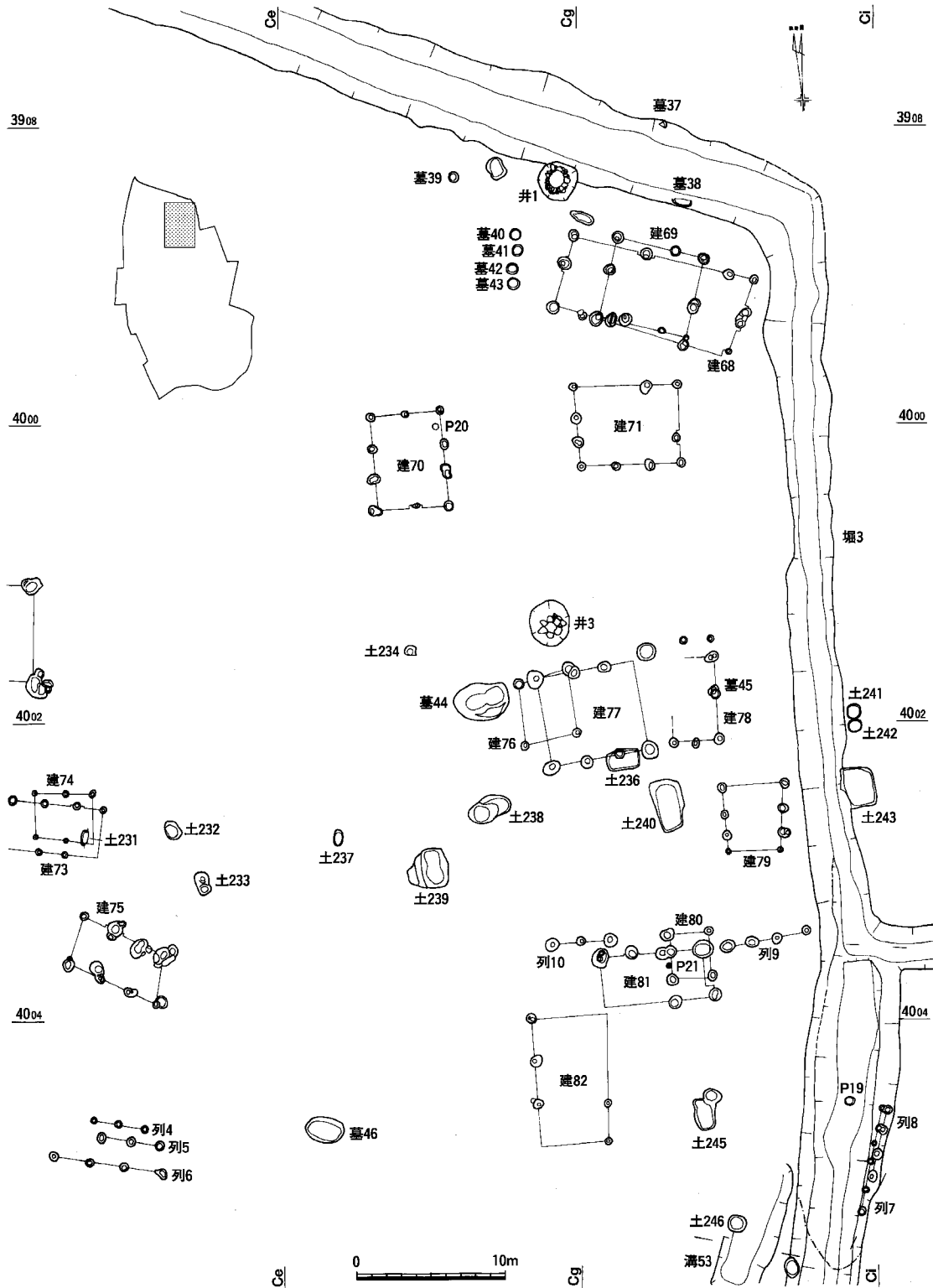


第791図 近世遺構全体図 (1/2,000)

第3章 発掘調査の概要

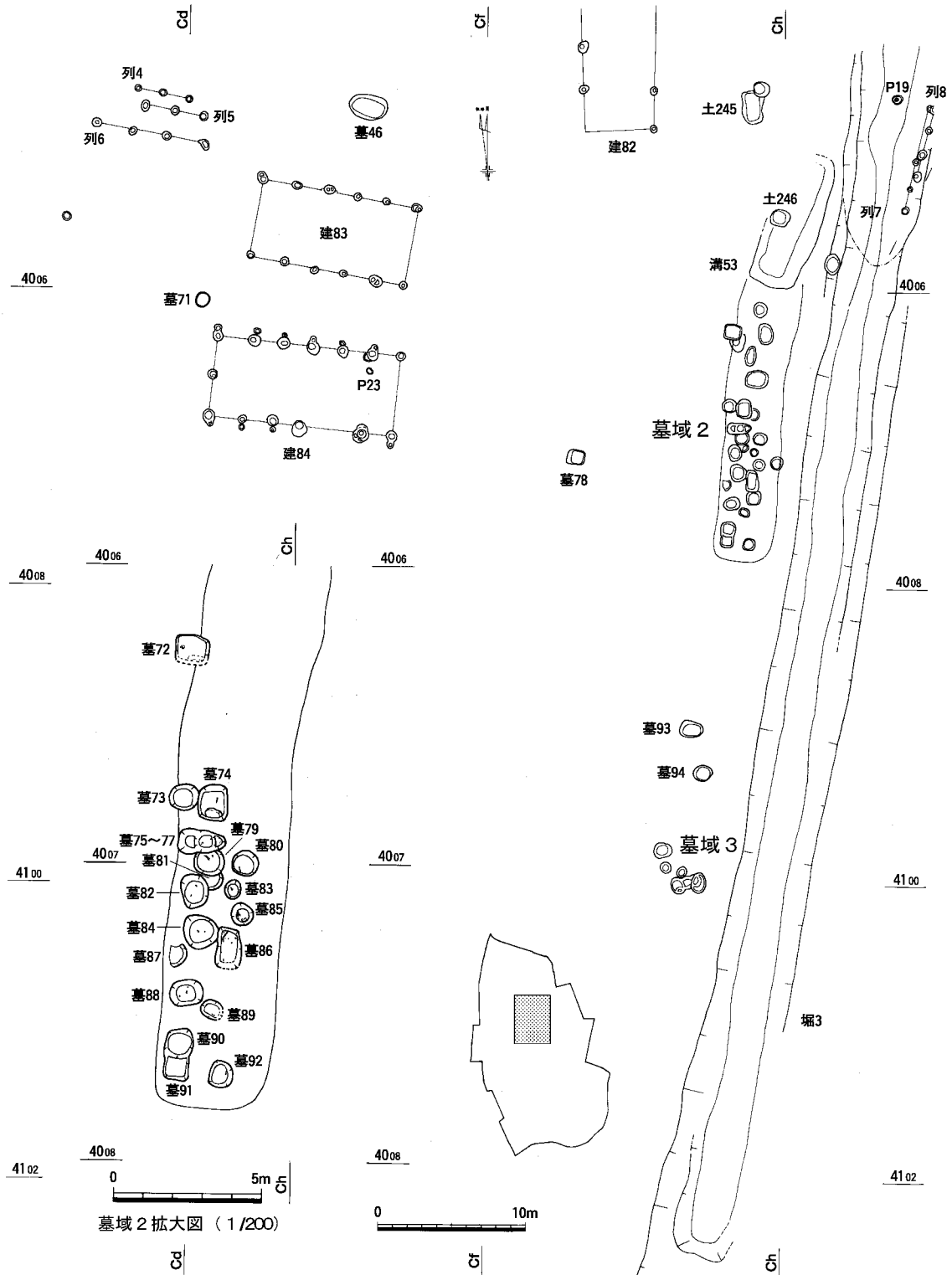


第792図 近世主要遺構部分図① (1/400)

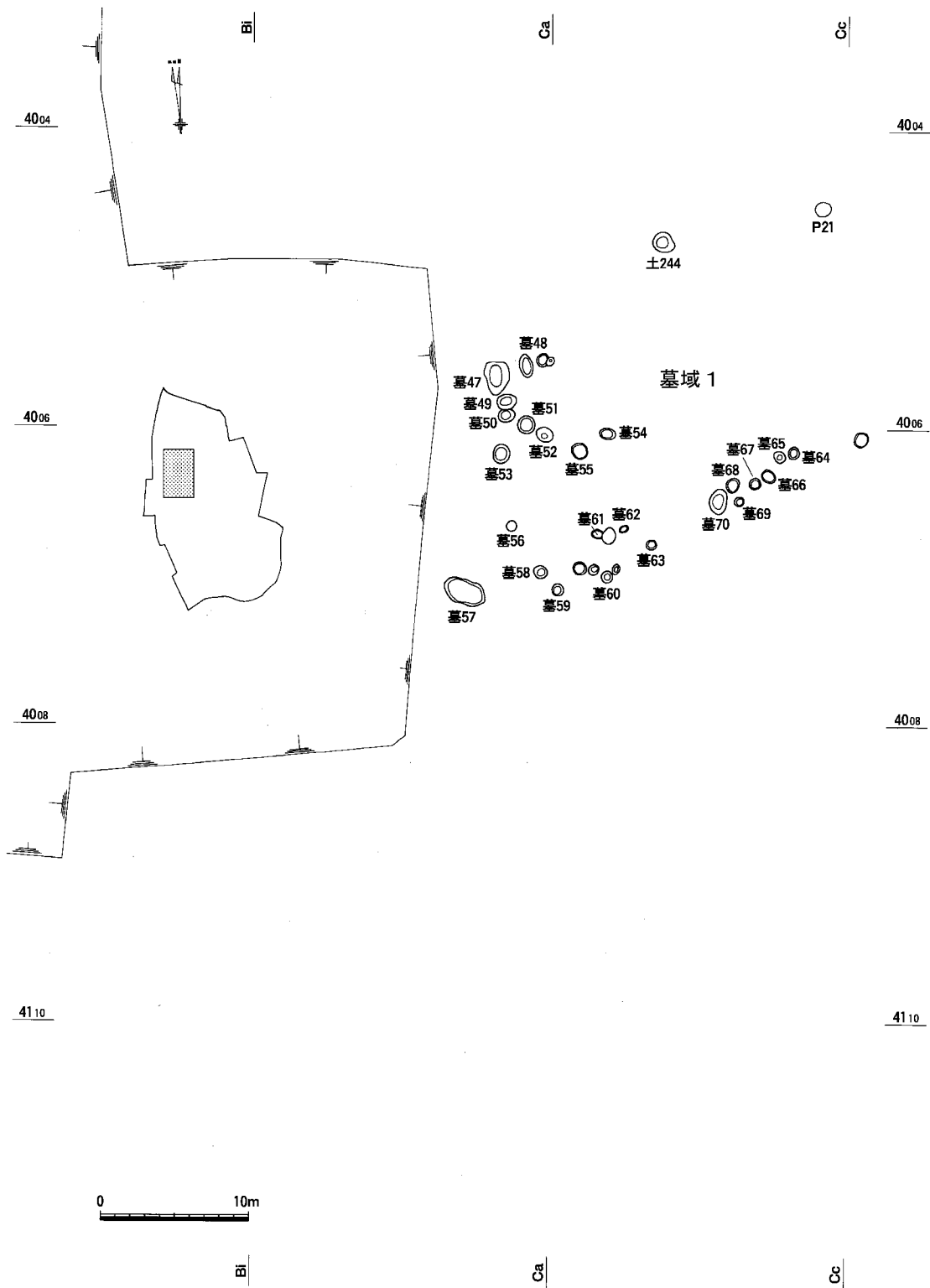


第793図 近世主要遺構部分図② (1/400)

第3章 発掘調査の概要



第794図 近世主要遺構部分図③ (1/400)



第795図 近世主要遺構部分図④ (1/400)



第3章 発掘調査の概要



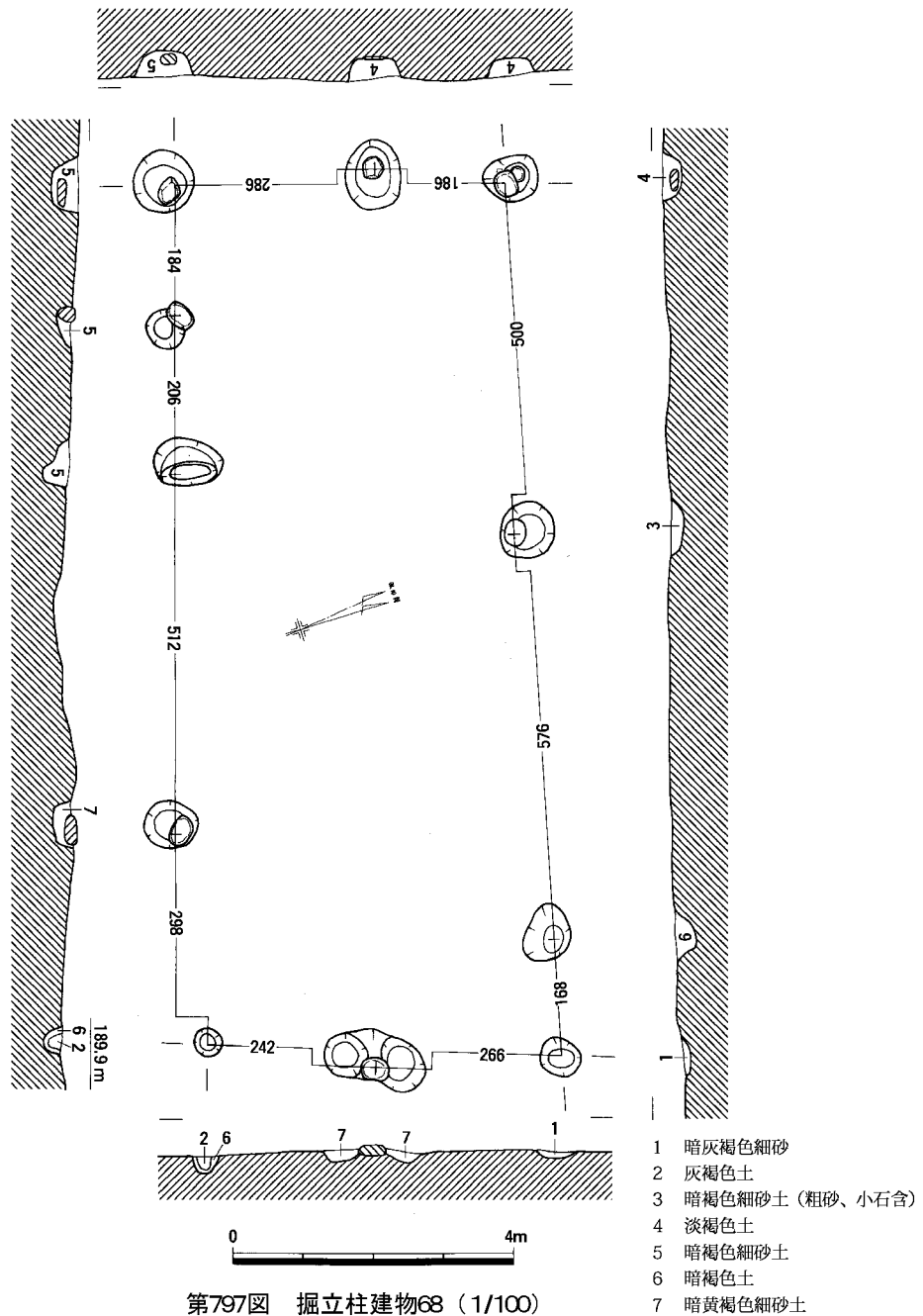
第796図 近世主要遺構部分図⑤ (1/500)

## 2 掘立柱建物

掘立柱建物68 (第793・797図、図版159)

3 9 08Cg区に位置する3×2間の掘立柱建物で、堀3に並行する位置にある。

桁行梁行とも柱間の距離は一定していないが、柱穴は直径40~80cmほどの円形で、表土直下において検出しており、浅く掘り込まれた柱穴内には、扁平な河原石を利用した礎板石を備える場合がある。出土遺物をみなかったが、埋土の色調などから江戸時代の建物と考えられる。(弘田)



第3章 発掘調査の概要

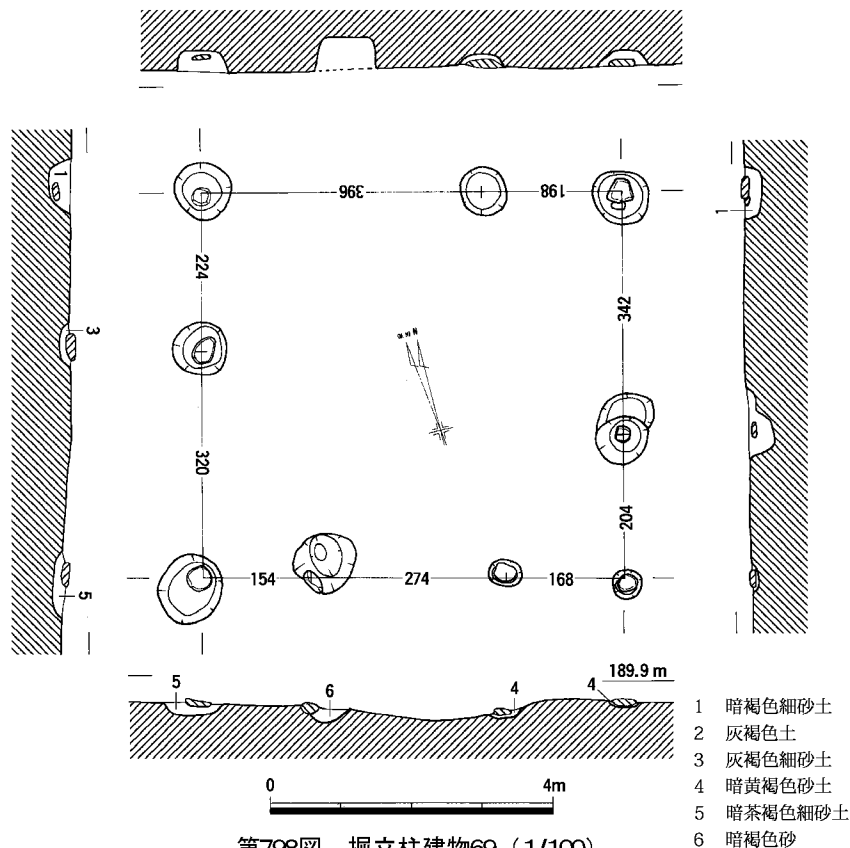
掘立柱建物69 (第793・798図、図版159)

先の掘立柱建物68とほぼ同じ場所に位置する、3×2間の掘立柱建物である。

柱間の通りが少しずれていることから、別棟と考えている。規模も建物68と比べると、ひとまわり小さく、柱間の距離も一定ではなかったものの、やはり礎板石を用いており、建物68とは近接した時期とみられる。

時期は、江戸時代とみられる。

(弘田)



第798図 掘立柱建物69 (1/100)

掘立柱建物70 (第793・799図)

4 000Ce区に位置した3×2間の掘立柱建物である。南北棟で、建物の棟方向はほぼ磁北にのっている。梁間の中間の柱穴は、床束とみられ、規模が小さくて浅い。柱間の距離は比較的一定で、2.0～2.5mの間に収まる。

遺物としては、P 7から出土した備前焼の壺の口縁部2077・底部2088がある。この建物の時期は、江戸時代でも初期と思われる。

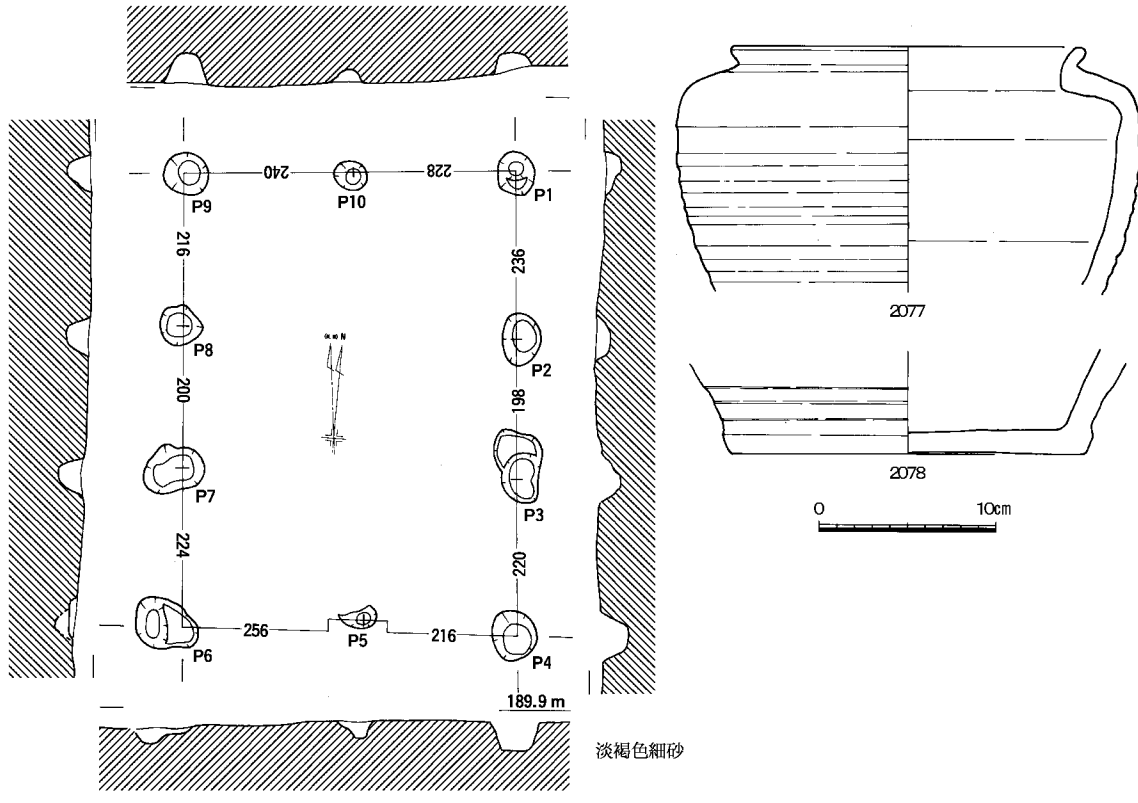
(弘田)

掘立柱建物71 (第793・800図)

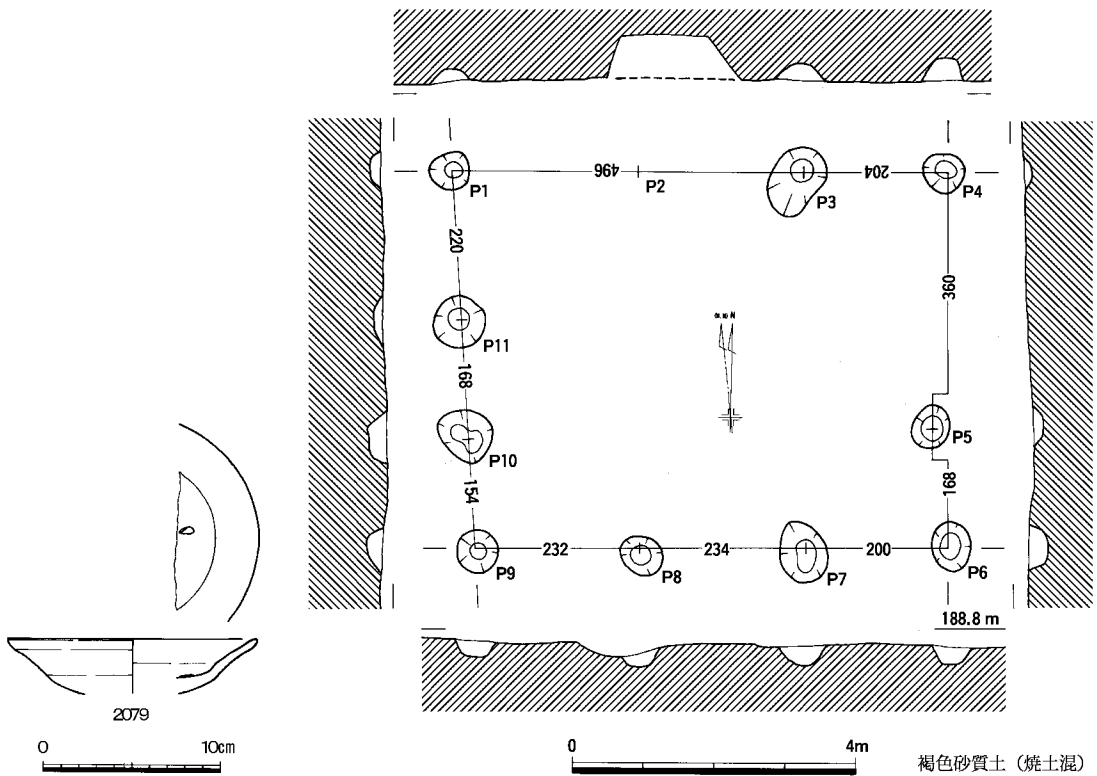
3 909Cg区あたりで検出した掘立柱建物である。東西棟で、先の建物70とほぼ直行する位置にある。埋土の色調は、建物68・69とは異なり、建物70に近い。北側の桁柱列は攪乱によって柱穴1本を欠くが3間で、総長の6.6～6.9mは建物70と同規模といえる。

出土遺物としては、肥前系陶器皿2079がある。胎土目を残し、17世紀初頭の時期が考えられる。この建物も、その前後と考えられよう。

(弘田)



第799図 掘立柱建物70 (1/100)・出土遺物 (1/4)



第800図 掘立柱建物71 (1/100)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物72 (第792・793・801図)

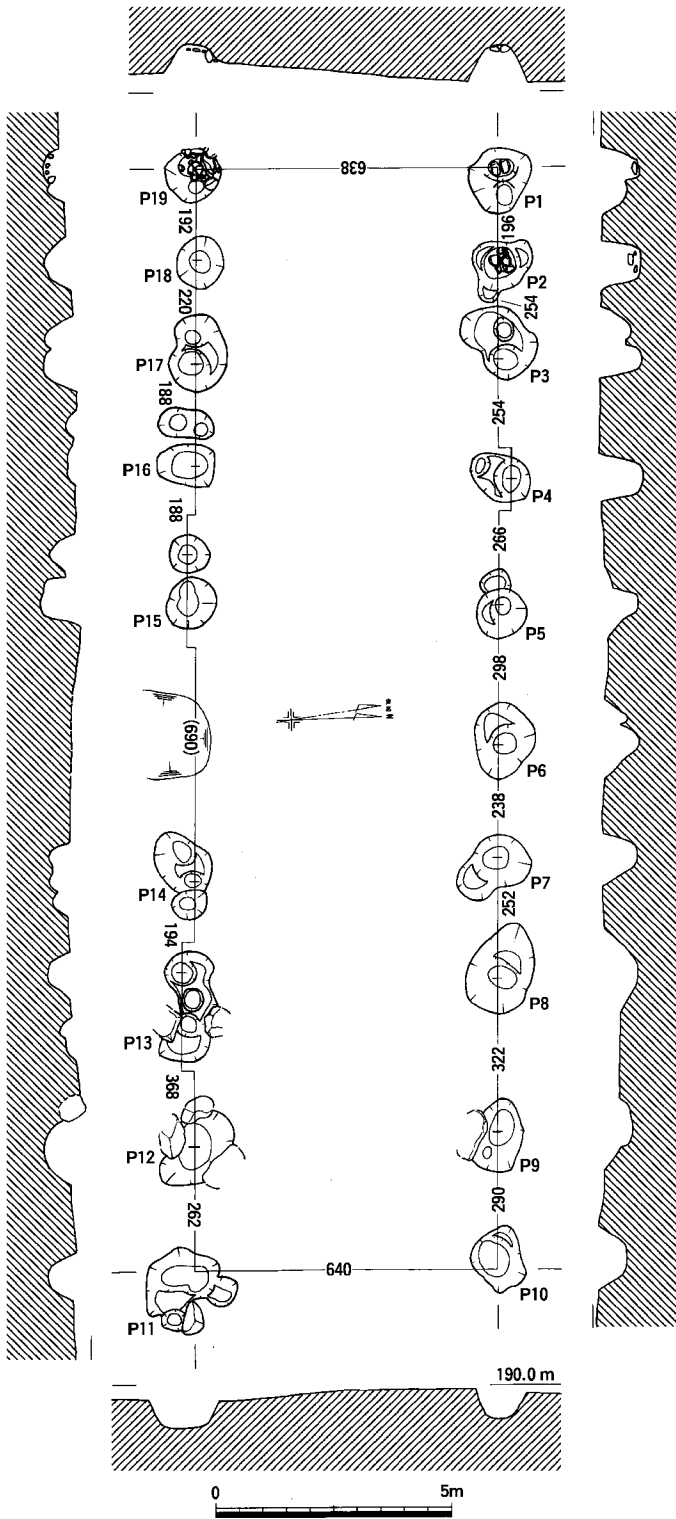
堀3に囲まれた近世集落の中央付近、4001Ca・Cb区で検出された大形の掘立柱建物である。桁行

9間、梁行1間の細長い平面形をもち、棟方向は東西方向をとる。桁行全長が23.7m、梁行は6.4m、床面積は148.8㎡を測り、当遺跡最大の規模をもち、建物内にも多くの柱穴があるため、南北桁行の対向する柱穴間を検討したが、P3とP17、P5とP15、P8とP13の間で束柱らしい小柱穴が2個列ぶようにみえたものの、全体としてはまとまらなかった。

柱穴の形は円形で、不整形な楕円形のものには底部に柱痕跡を複数残し、建て替えによる変形であることがわかる。一時期の柱を確定するのは困難で、このため柱間は1.88~3.68mと差が大きく、柱穴の長径も73cm~1.90mまで変化がある。柱穴は最深が94cmで、各柱穴底面の海拔高はほぼ近似する。

底部に残されたためり込み穴から判断すれば、柱の直径は30~40cm程度あったものとみられる。柱穴の底に石を置くものがある。P1では長径30cmほどの石を二つ接して置き、P2でも集石の上に長径20~25cmの石がやはり二つ置かれ、礎石として利用できそうであったが、P19の集石は礎石の下に敷かれる根石のような感じを受けた。

柱穴内から出土した遺物の多くは近世のもので、一部中世の舶載青磁や染付、IV期の備前焼播鉢も含まれていた。P6から煙管の吸口、P13から「大?通寶」と読める銭貨、P19からは鉄製の毛抜きが出土した。

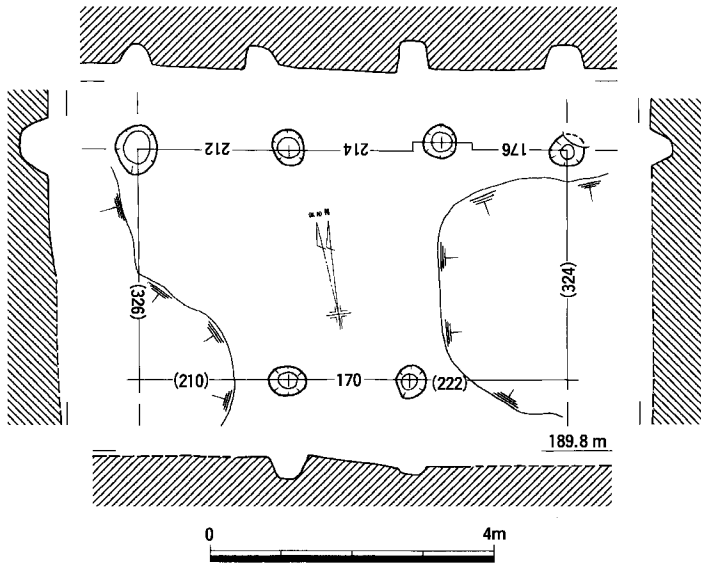


第801図 掘立柱建物72 (1/150)

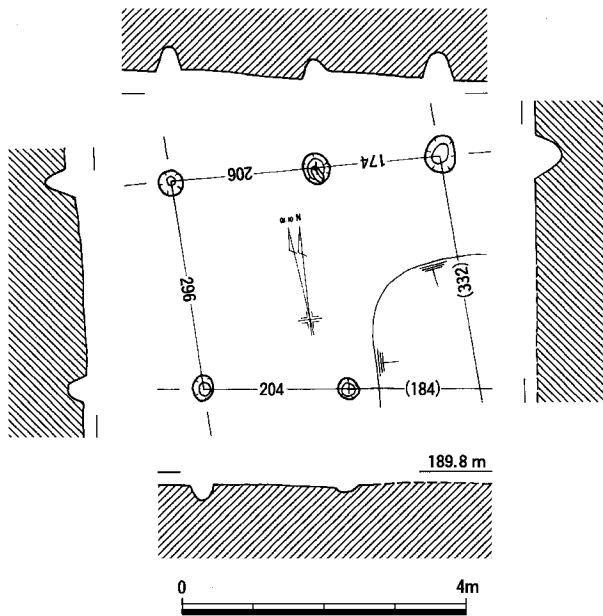
建物のほぼ中間にあたるP5とP6の間には土師器皿を多数埋納していた土壌238が検出され、掘立柱建物72に関する祭祀的な施設の可能性が考えられる。建物から北に5m離れたある井戸2や南東に7m隔てた掘立柱建物73・74なども掘立柱建物72に伴うとみられ、この建物を中心に屋敷地が形成されていたのであろう。掘立柱建物72の時期は江戸時代前半とみられる。(岡本)

掘立柱建物73 (第792・793・802図)

掘立柱建物72の南東7mに位置する桁行3間、梁行1間の掘立柱建物である。棟方向は建物72に近く、これを母屋として、その付属施設と考えたい。



第802図 掘立柱建物73 (1/100)



第803図 掘立柱建物74 (1/100)

桁行全長は6.02m、梁行が3.26m、床面積は19.6㎡を測る。平面形は長方形を呈するが、柱間は一定せず、やや不整形な建物である。柱穴の長径は42~70cm、深さは12~36cmだが、南桁の柱穴が北桁の柱穴より浅い。北西隅の柱穴では底に石が3個敷かれていた。出土遺物はないが、江戸時代前半の建物である。(岡本)

掘立柱建物74

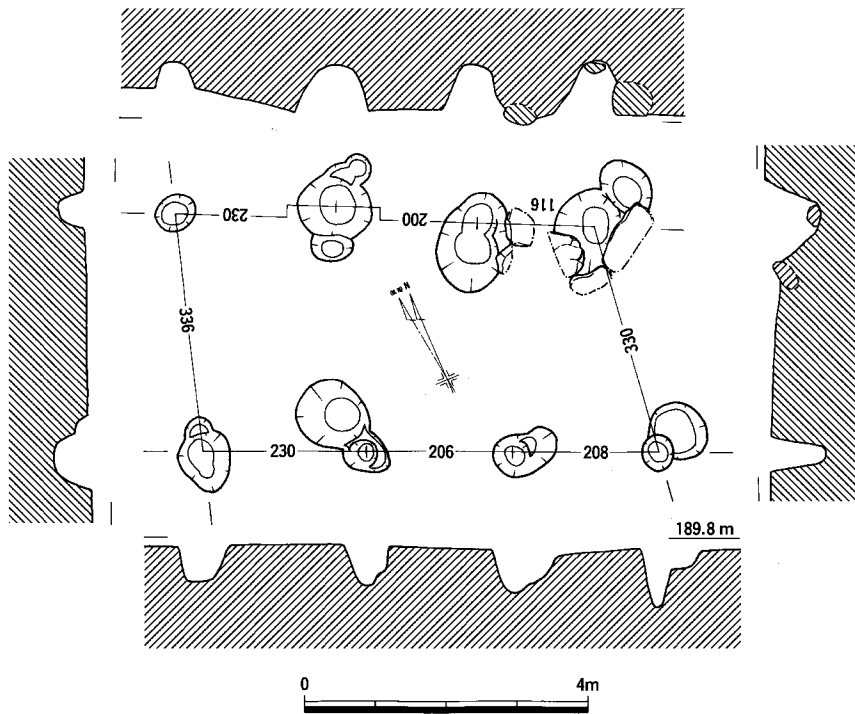
(第792・793・803図)

掘立柱建物73と重複する形で検出された小形の掘立柱建物である。桁行2間、梁行1間の簡単な構造で、柱穴の位置に歪みがみられ、掘立柱建物73と同様に不整形なことから、同じ機能を持った建物と考えられる。先後関係は不明だが、建て替えによる重複とみられる。

掘立柱建物72も建て替えられているため、これに対応するようである。桁行全長は3.80m、床面積は12.0㎡を測る。柱穴の長径は31~53cmである。桁行の中央の柱穴は両端の柱穴より浅い。建物73との関連から判断して江戸時代前半の建物とみられる。(岡本)

掘立柱建物75 (第792・793・804図)

4 0 03Cc区、掘立柱建物73から4 m南東で検出された。桁行3間、梁行1間の掘立柱建物と考えて



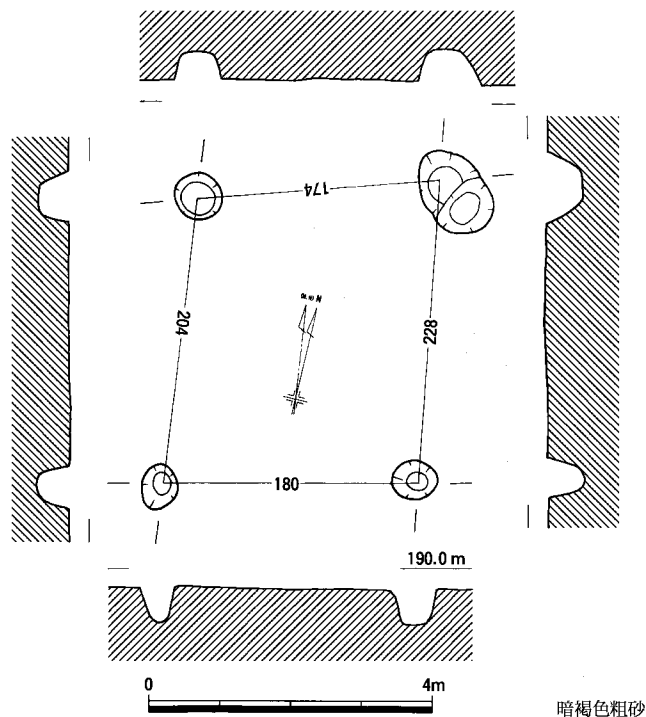
第804図 掘立柱建物75 (1/100)

いるが、それぞれの柱穴で複雑な重複関係がみられ、建て直された可能性が高く、直線で図示した平面形は確実ではない。棟方向はN 31° Wで、周辺の建物とは平行せず、むしろ離れてはいるが、堀3の北辺に近い。柱穴の長径は50~120cmと差が大きい。床面積は20.0 m<sup>2</sup>を測る。出土遺物から近世の建物と考える。(岡本)

掘立柱建物76

(第793・805図)

4 0 01Cf区で検出された桁行、梁行ともに1間の掘立柱建物である。掘立柱建物77と重なっている。建物周辺では柱穴の集中がみられ、さらに東へ1間延びる可能



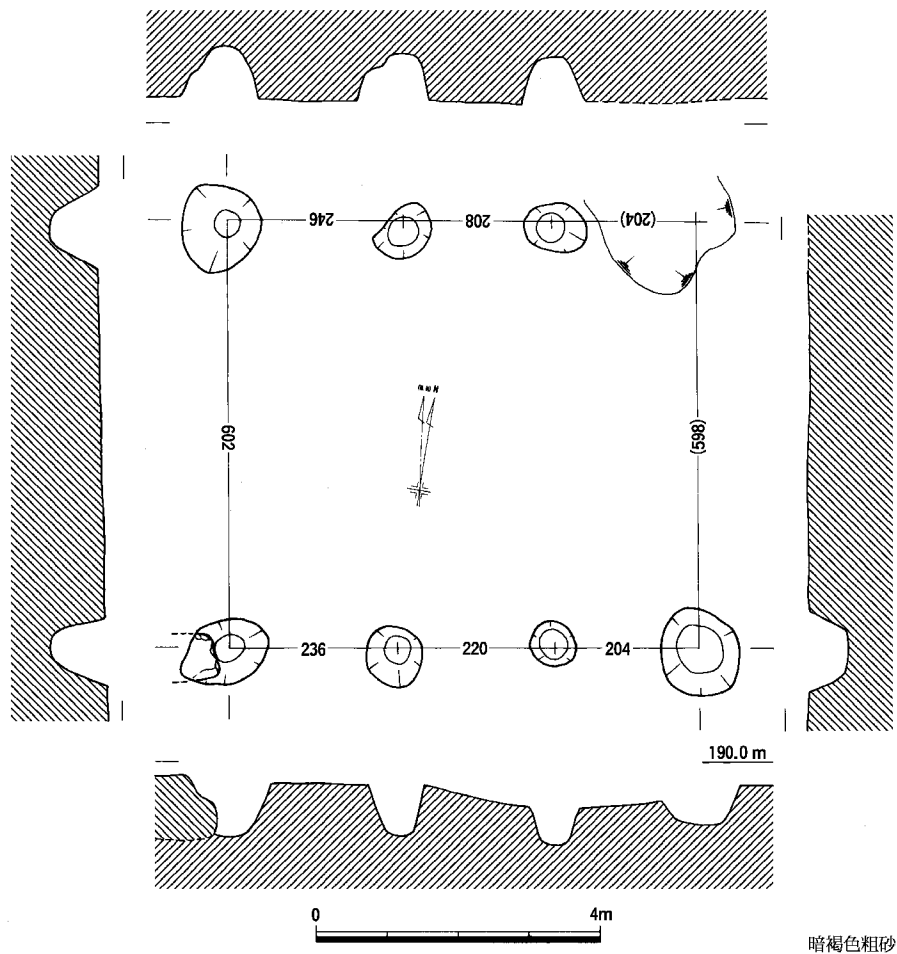
第805図 掘立柱建物76 (1/100)

暗褐色粗砂

性も考慮されたが、明瞭な形では捉えられなかった。ここでは南北棟の建物としておく。桁行は2.28m、梁間が1.80m、床面積は3.6㎡を測る。北東の柱穴から唐津焼の皿が出土した。内底面には釉剥ぎがみられる。出土遺物や重複する建物の年代から近世前半の建物と考える。(岡本)

掘立柱建物77 (第793・806図)

4 0 01・02Cf・Cg区に位置し、掘立柱建物76と重複する。桁行3間、梁行1間の東西棟建物で、桁行全長6.60m、梁間6.02m、床面積は39.8㎡を測る。建物周辺には小形の建物が複数あり、柱穴の集中がみられるなど、一つの屋敷地の様相を呈しているが、この建物77が母屋的な性格を持っていたと考える。角の柱穴は長径が1.3m前後と大きいが、桁行の間の柱穴は長径が66~89cmと小さい。ただ、深さは変わらない。柱穴から近世前半の唐津焼の破片が出土している。(岡本)



第806図 掘立柱建物77 (1/100)

掘立柱建物78 (第793・807図)

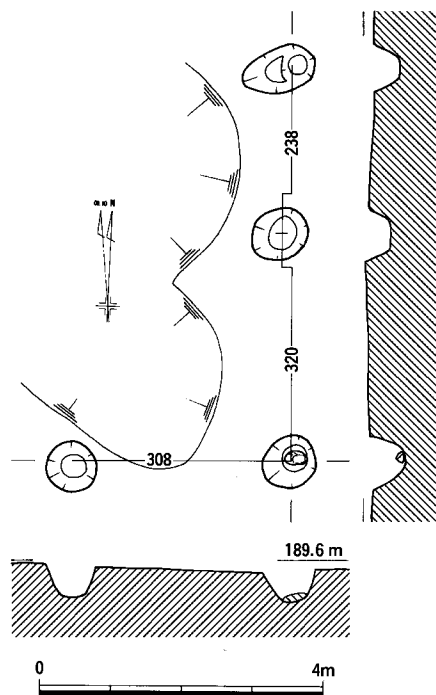
4 0 01・02Cg区において掘立柱建物の一部を検出した。調査の後半で柱穴列を確認したもので、建物の西側についてはすでに攪乱を受けていた。掘立柱建物77のすぐ東に位置していて、この建物と重複する可能性も無視できない。棟方向は不明だが、現状で長辺が5.58m、短辺は3.08mを測る。柱穴の長径は75~104cmである。近世前半の唐津焼かとみられる碗の破片が出土している。(岡本)



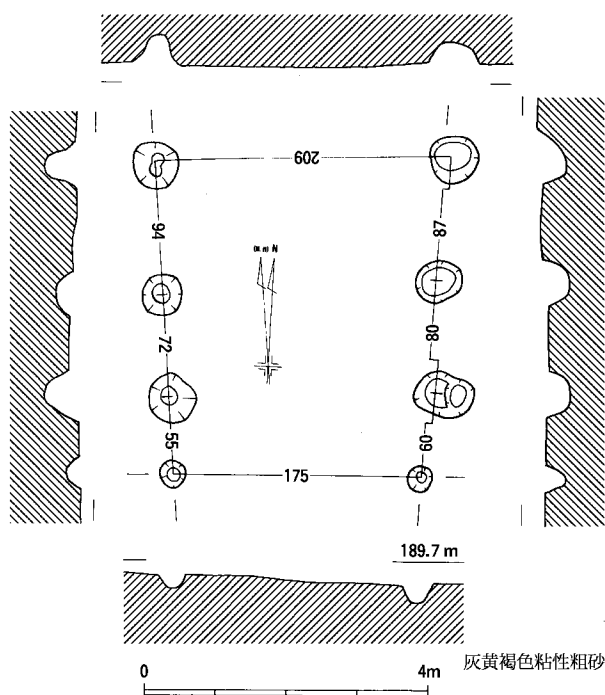
第3章 発掘調査の概要

掘立柱建物79 (第793・808図、写真55)

4 0 02Cg区にあり、堀3から西へわずか1 m離れているにすぎず、掘立柱建物77からは南東に5 m隔っていた。桁行2間、梁行1間の南北棟建物で、南妻側に1間の庇か縁が取り付く構造であったと考えられる。建物本体の柱穴は長径が57~87cmあるが、庇の柱穴は37・41cmと小さく、また浅い。建物の平面形は、南の庇の柱間が1.75mだが、北妻の柱間は2.09mと広く、奥に向かって広がっている。庇部分を含めた床面積は4.3㎡を測る。建物本体の柱穴より鉄製刀子が出土している。(岡本)



第807図 掘立柱建物78 (1/100)



第808図 掘立柱建物79 (1/100)



写真55 掘立柱建物79 (南から)

掘立柱建物80 (第793・809図、図版158、写真56)

4 0 03Cg区に位置し、掘立柱建物81と重複している。掲載図では桁行、梁行ともに1間の構造として

しているが、写真56にあるように南へもう1間延びる可能性が高い。図示したものは桁行1.72m、梁行1.40m、床面積2.4㎡を測る。柱穴の長径は61~100cmとやや大形である。北側梁行の西側延長上に柱穴列10が検出されていて、関連性が疑われる。近世の建物と考えられる。(岡本)

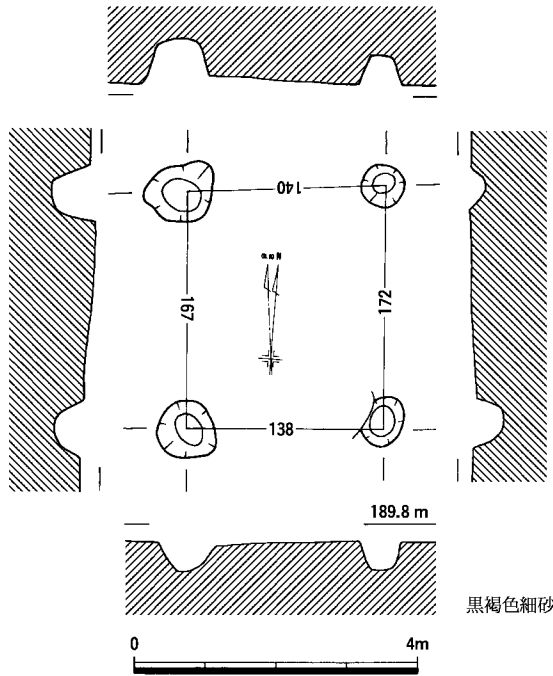
掘立柱建物81 (第793・810図、

図版158、写真56)

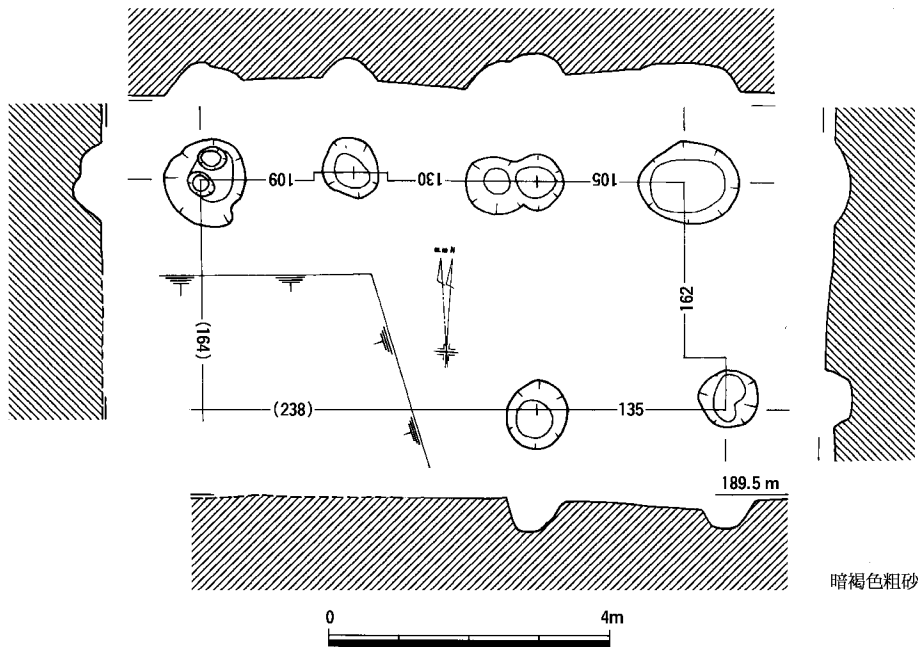
掘立柱建物80と重なる。桁行3間、梁行1間の東西棟建物と考えるが、調査中に北側桁行の柱穴列が注意され、これに対応させて南側桁行の柱穴を見つけ、南西部分は後世の攪乱を受けているため、掘立柱建物として構成することにやや不安はある。北側桁行では掘立柱建物77と同様に角の柱穴が一回り大きくなっている。床面積は推定5.8㎡である。

建物80との関連から近世の建物である。

(岡本)



第809図 掘立柱建物80 (1/100)



第810図 掘立柱建物81 (1/100)

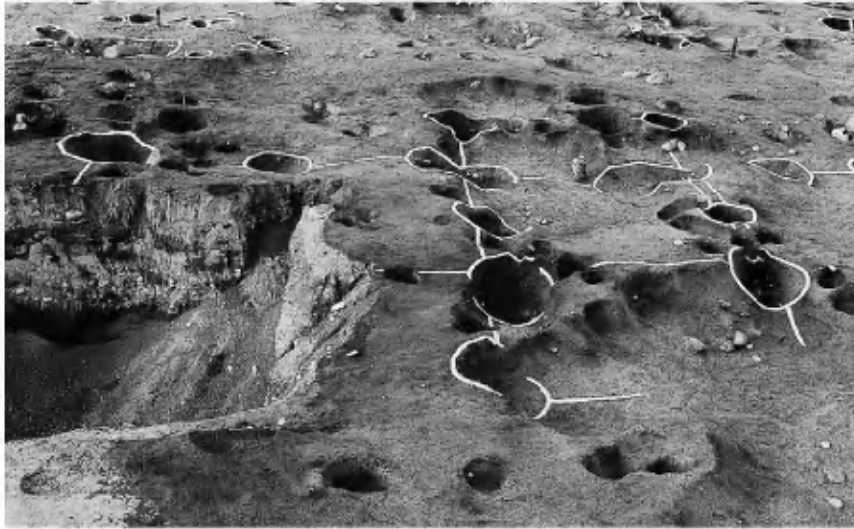
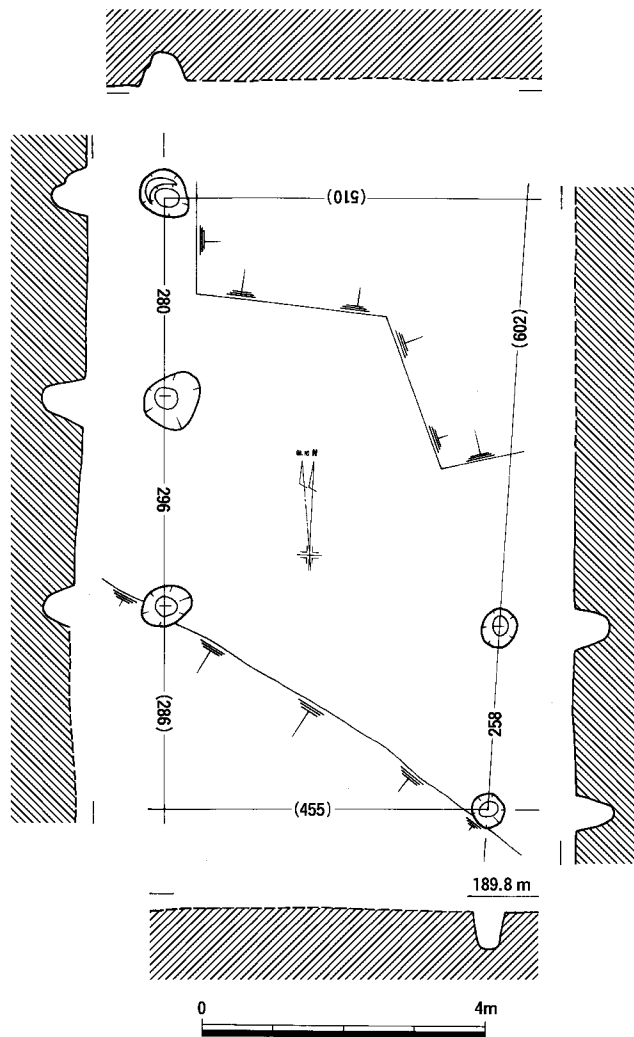


写真56 掘立柱建物80・81（南から）

掘立柱建物82（第793・  
794・811図）

4 0 04Cf区で検出された掘立柱建物である。掘立柱建物81の南西に近接していて、軒の出を考えると同時に存在するのは不可能である。掘立柱建物77を母屋とする屋敷地の南西角に位置しているといえそうである。北東角と南西角をともに後世破壊されているが、西側桁行の柱穴列はすぐ目に付き、これに対応するような形で東側桁行の柱穴を確認した。桁行全長8.6m、梁行全長5.1m、床面積41.6㎡と推定される。柱穴の長径は46～85cmで、南側の柱穴ほど小さく、底面の標高も低くなっている。柱穴からは土師器の小片や網目文を施した伊万里焼の磁器碗が出土している。江戸時代中期の建物の可能性がある。（岡本）



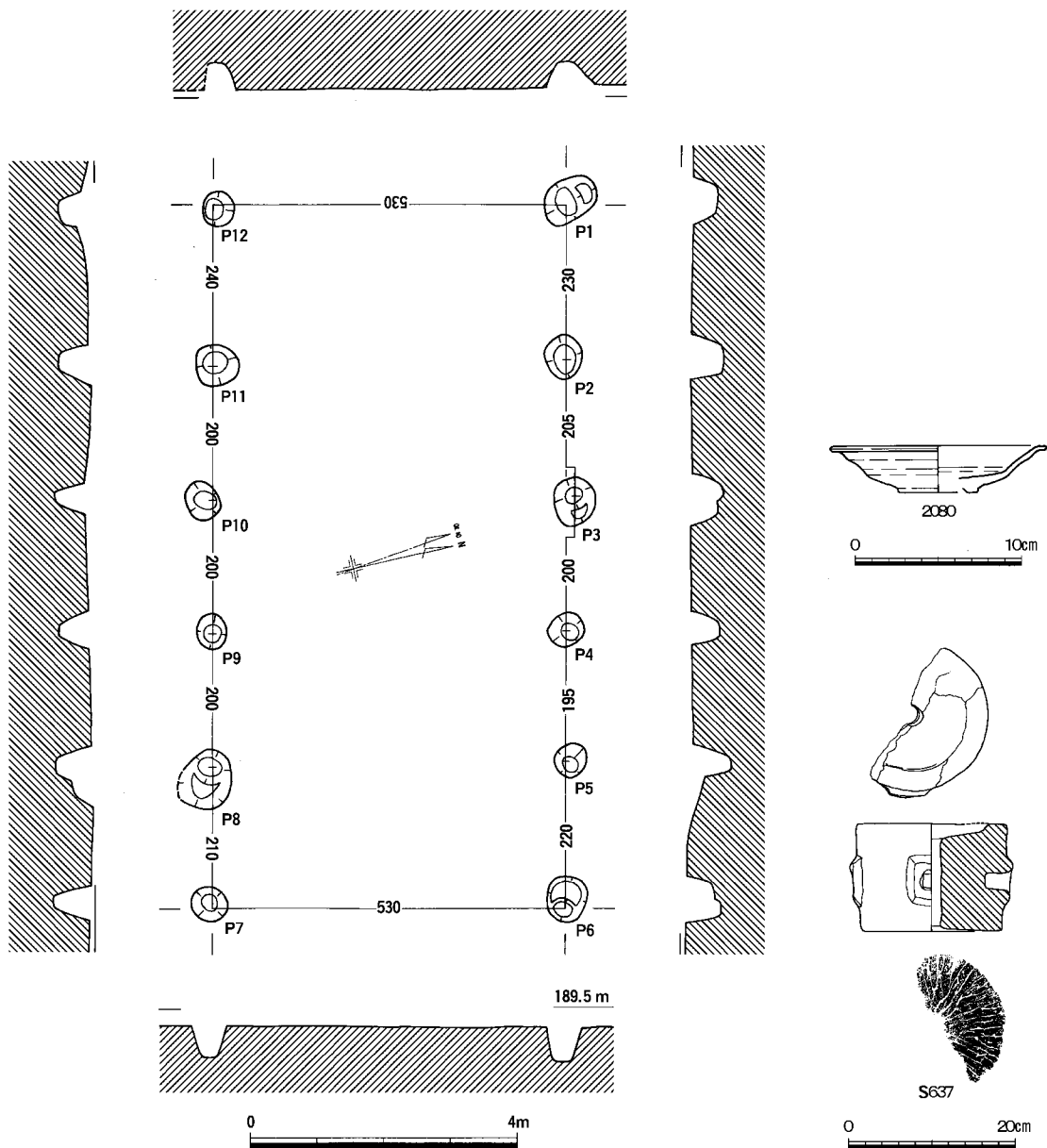
第811図 掘立柱建物82（1/100）

掘立柱建物83 (第794・812図、図版159)

4005Cd区から検出された5×1間の大形の東西棟建物で、棟方向はN75°Eである。規模は桁行10.5m、梁行5.3m、床面積55.6㎡を測る。柱穴間の距離は桁行が2.4~1.95mを測る。柱穴は径80~50cm、深さ60~40cmを測り、埋土は灰色砂質土であった。遺物はP4から唐津焼皿2080、P8から石臼S637が出土しており、近世前半に建てられたものであろう。(江見)

掘立柱建物84 (第880・899図、写真57、図版159)

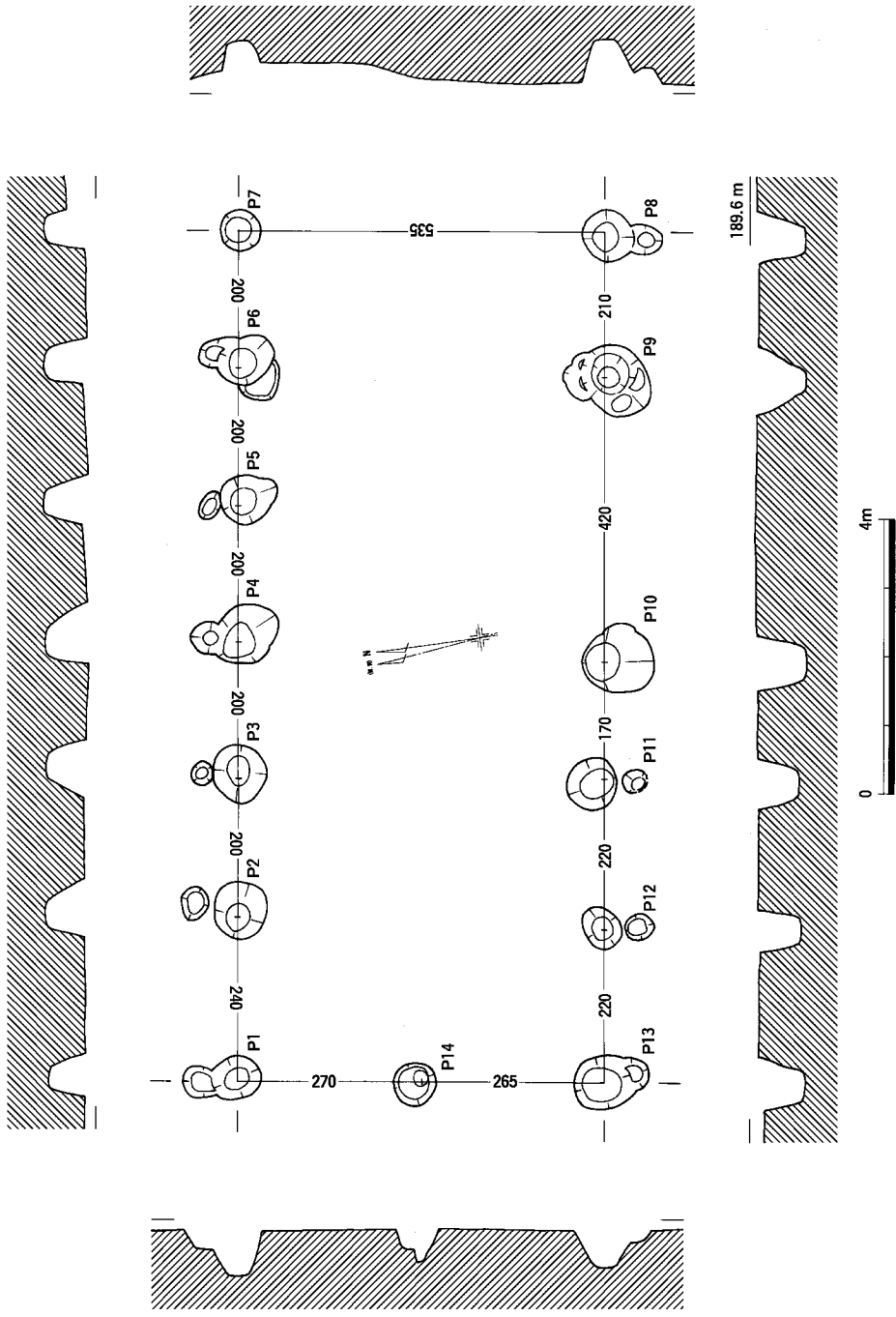
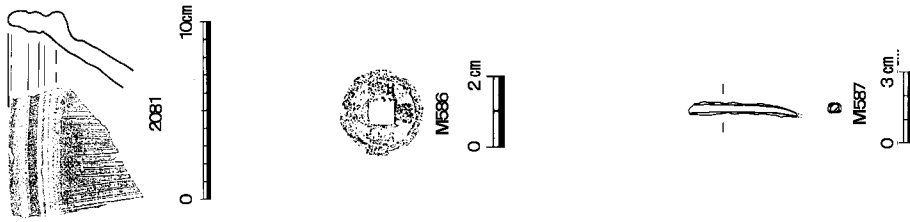
掘立柱83の南から検出された6×2間の東西棟建物で、棟方向はN70°Eである。この時期で最も大形の建物で、規模は桁行12.4m、梁行5.35m、床面積66.3㎡を測る。柱穴の外側には主柱を支えるように、小柱穴が掘られていた。また、南桁行および東梁行からは柱穴が確認されなかった部分があるが、



第812図 掘立柱建物83 (1/100)・出土遺物 (1/4,1/8)

第3章 発掘調査の概要

元々なかったものと考えている。柱穴出土遺物から近世前半に建てられた建物と思われる。(江見)



第813図 掘立柱建物84 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/2, 1/3)



写真57 掘立柱建物84作業風景（東から）

### 3 柱穴列

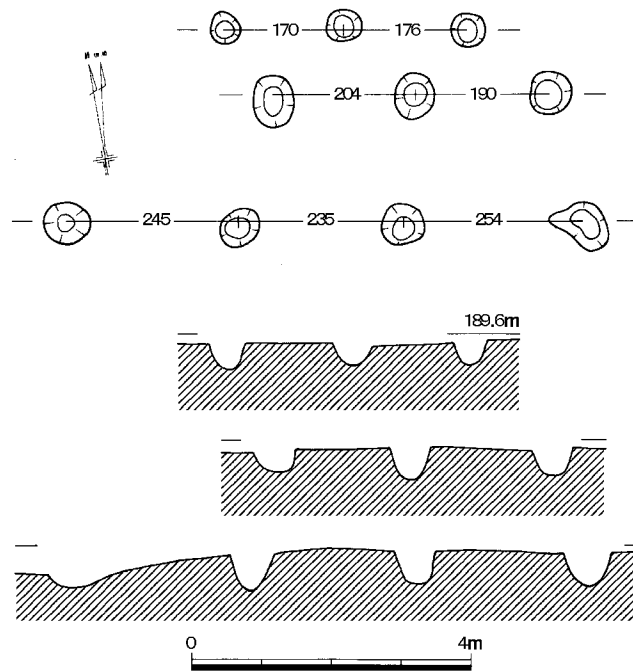
柱穴列4～6（第793・794・814図）

4 0 04Cc区あたりに位置する平行した3条の柱穴列である。それぞれの列間の距離、柱間隔は異なっており、柵などを考えるより、本来は別の掘立柱建物を構成する柱列と思われる。

埋土や周辺の遺構の状況などから判断して、時期は近世であろう。（弘田）

柱穴列7・8（第793・794・815図）

4 0 05Ch区あたりで検出した2条の柱穴列で、切り合い関係から柱穴列7が古く柱穴列8が新しい。また、その位置は堀3の外側肩部にあたり堀に平行していること、このすぐ南は近世段階に埋められてた黄色粘土層が検出面まで高まり土橋状を呈していた



第815図 柱穴列7・8（1/100）

第3章 発掘調査の概要

と考えられることからこの柱穴列の性格は柵であったと考えられる。(弘田)

柱穴列9 (第793・816図)

4 0 03Ch区において検出した柱穴列で、東西方向に3間分を確認している。

掘立柱建物を構成する柱穴列とみてこの周囲の精査をおこなってみたが、これと対になる柱穴列は検出できなかったことから柱穴列9とした。

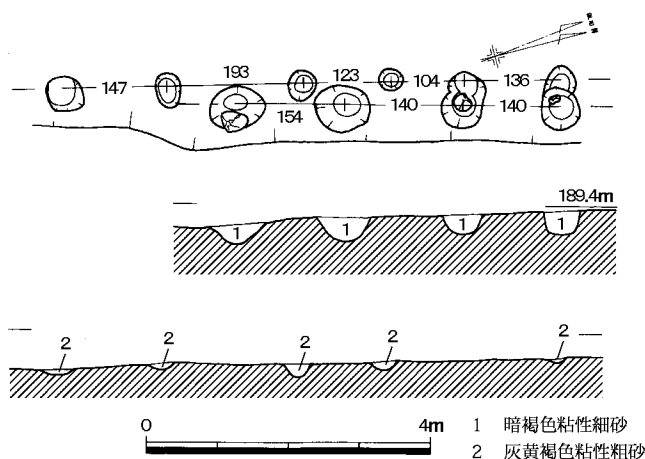
周囲の遺構の状況などから、時期は近世であろう。(弘田)

柱穴列10 (第793・817図)

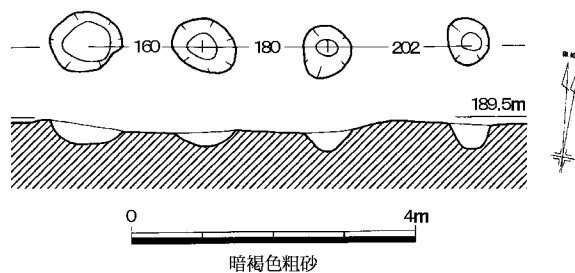
4 0 03Cf区において検出した。本来は建物の柱列であったかもしれない。

P 2 の底に密着して石臼S638が出土している。P 1 においても同様に扁平な河原石を柱穴底に敷いていることから、柱を支える礎板としての機能を持たせていたと考えられよう。

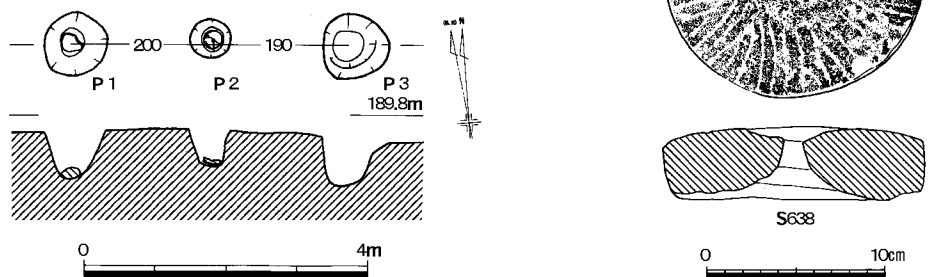
この柱穴列の時期は、近世と考えられる。(弘田)



第815図 柱穴列7・8 (1/100)



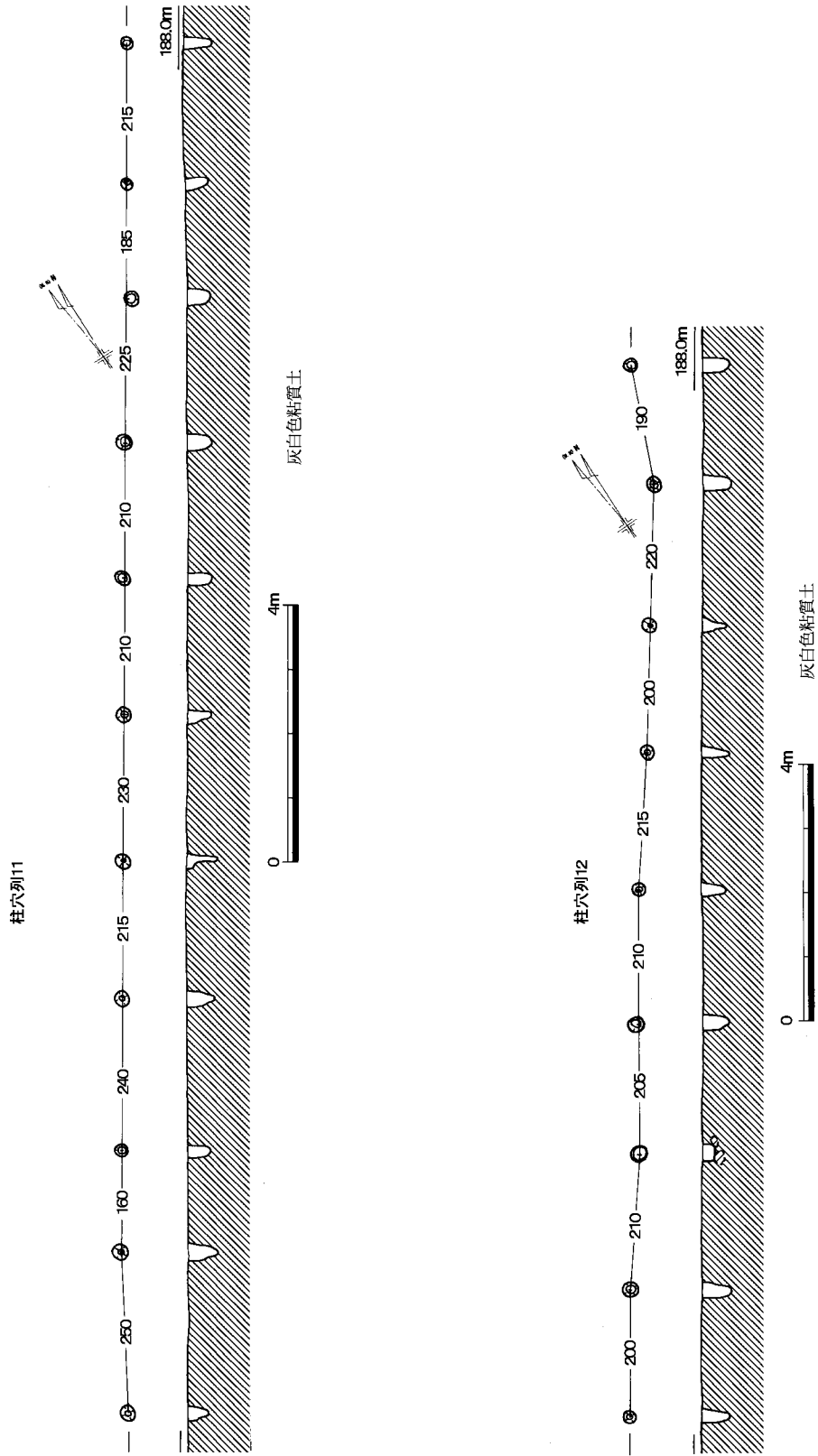
第816図 柱穴列9 (1/100)



第817図 柱穴列10 (1/100)・出土遺物 (1/8)

柱穴列11・12 (第796・818図、図版160)

遺跡の中央部西寄りの4 1 07Cc～4 1 08Ccに位置している。西側に柱穴列11が、東側に柱穴列12があり、ほぼ平行するように連なっていた。柱間の距離は柱穴列11が1.6～2.5m、柱穴列12が1.9～2.2mを測り、前者はばらつきが著しい。そのため両者の柱穴がうまく組み合わせず、掘立柱建物が想定できなかった。なお、柱は直径もしくは一辺10cm程度に復元できる。(上村)



第818図 柱穴列11・12 (1/100)



## 4 井戸

### 井戸1 (第793・819図)

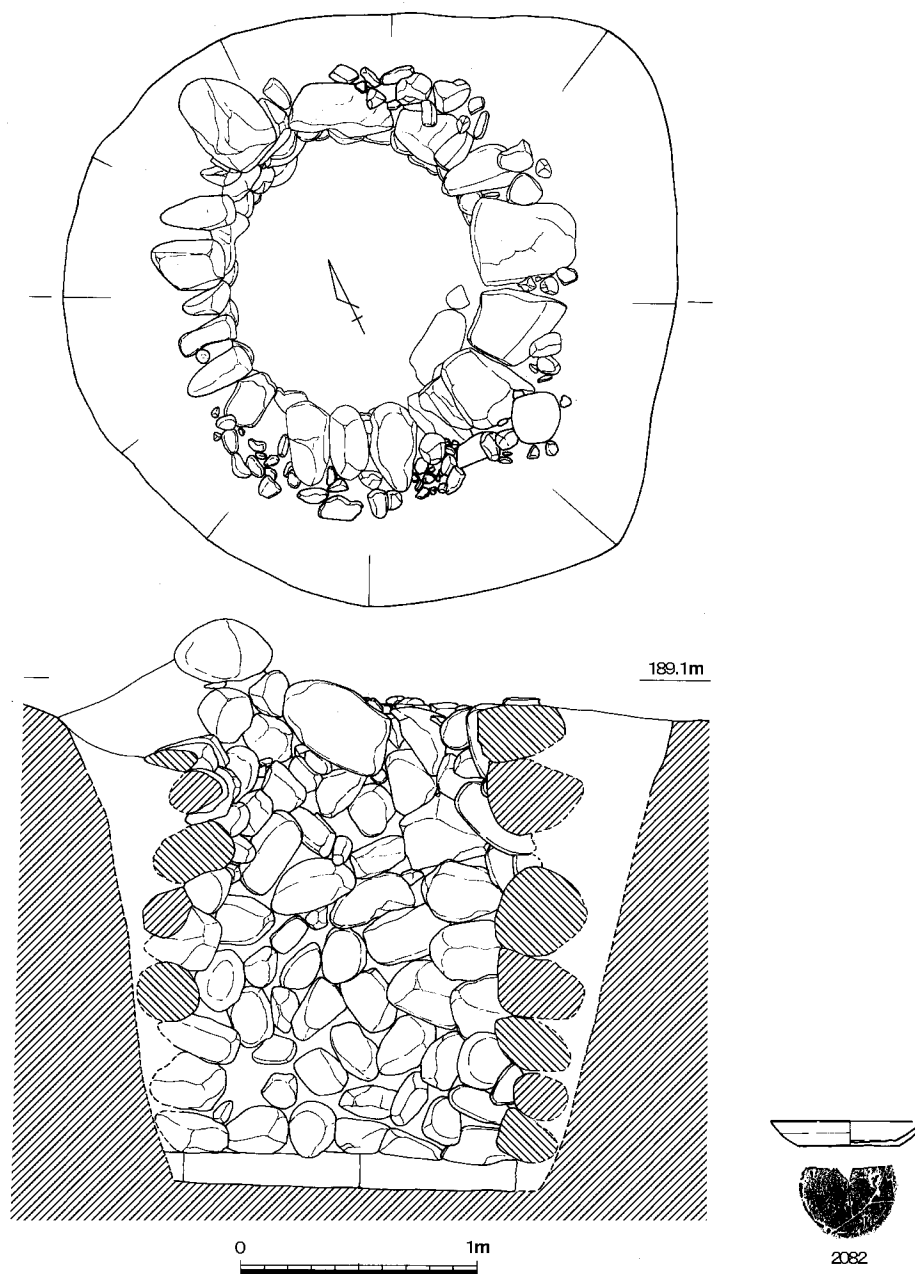
3 9 08Cf区に位置する井戸で、掘り方が堀3を切っていた。底面にまず根太を敷き、その上に角礫を積み上げていた。

土師器皿2082などが出土しており、時期は江戸時代以降であろう。

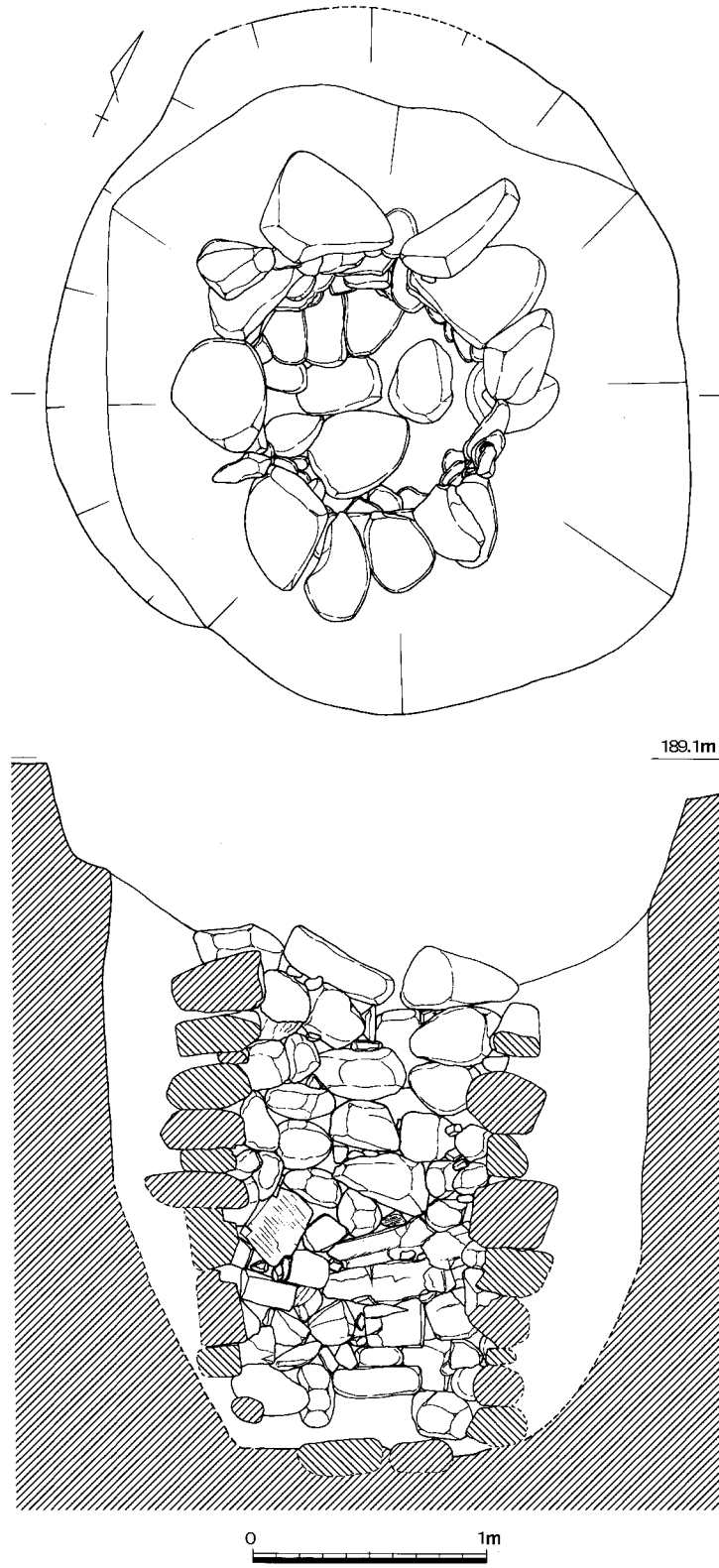
(弘田)

### 井戸2 (第792・820・821図、図版160)

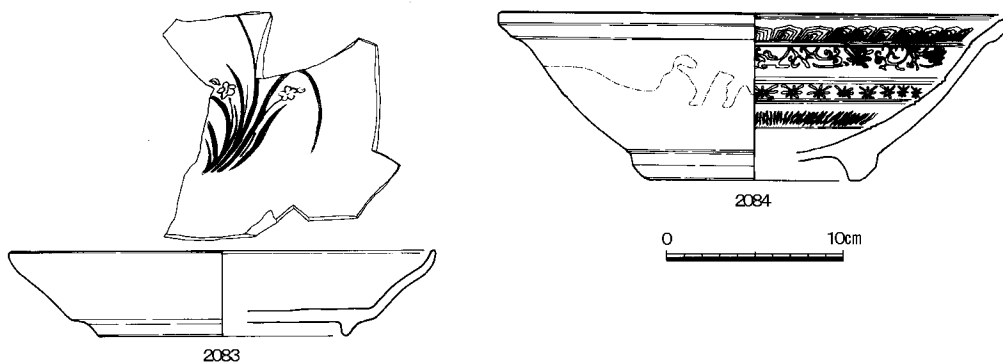
4 0 00Cb区に位置した、円形の石組み井戸である。石組みは、井戸1と比べて丸みを帯びた河原石



第819図 井戸1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第820図 井戸 2 (1/30)



第821図 井戸2出土遺物(1/4)

を利用し、やや乱雑に積み上げている。また、上部は破壊されて、埋め戻されていた。

規模は、深さが約3mで、掘り方の上面径は2.5m、内径は90cmを測る。底面には石敷きがみられ、その海拔高は186.1mであった。

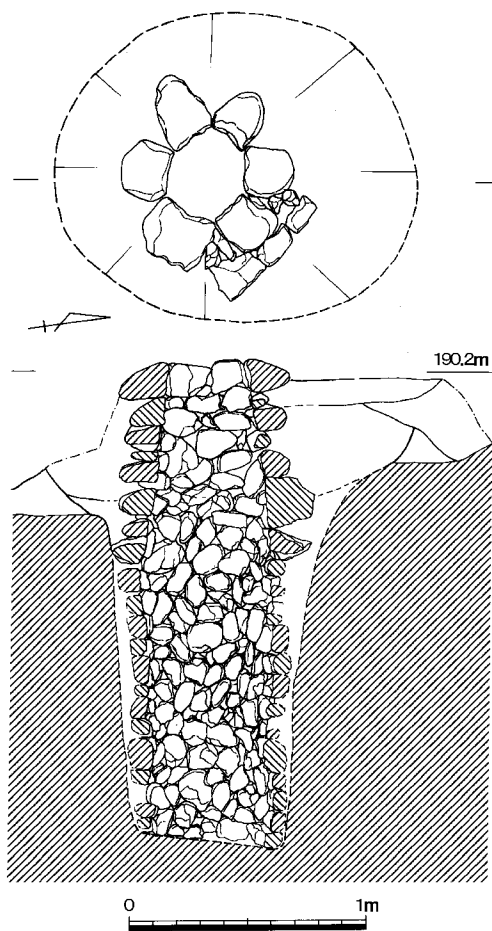
出土遺物には、肥前染付皿2083、陶器皿2084であった。これらから、18世紀後半を前後する時期に埋没したとみられる。(弘田)

#### 井戸3(第793・822図)

4 0 01Ce区において検出した石組の井戸である。この場所は近現代の屋敷地内ではなく、調査前までは畑地として利用されていた所にあたるが、コンクリート製の蓋で覆いをされており、近現代まで使用されていたとみられる。

先述した井戸1・2と比べて小ぶりの垂角礫を乱雑に積み上げており、底面の海拔高は188.2mである。内径は40~50cm程の細い筒状であり、形態的にも時期的にも、井戸1・2とは異なると思われる。

井筒や出土遺物は皆無であったが、この井戸の時期は江戸時代後半以降と考えてよいであろう。(弘田)



第822図 井戸3(1/30)

## 5 墓

### 墓37(第793・823図、図版173)

3 9 08Cg区に位置する。堀3調査中に検出したが、本来は堀3を切って掘られていた可能性が高い。

棺釘が出土しており、掘り方が円形とみられることから、座棺であろう。

時期は、江戸時代と考えられる。 (弘田)

墓38 (第793・824図、図版169)

先の墓37と同様に3908Cg区に位置し、堀3調査中に検出したが、本来は堀3を切って掘られていたと考えられる。残存部は、長方形を呈するが、他例から判断して、本来は矩形であったろう。

寛永通寶が出土しており、時期は江戸時代と考えられる。 (弘田)

墓39 (第793・825図、図版172)

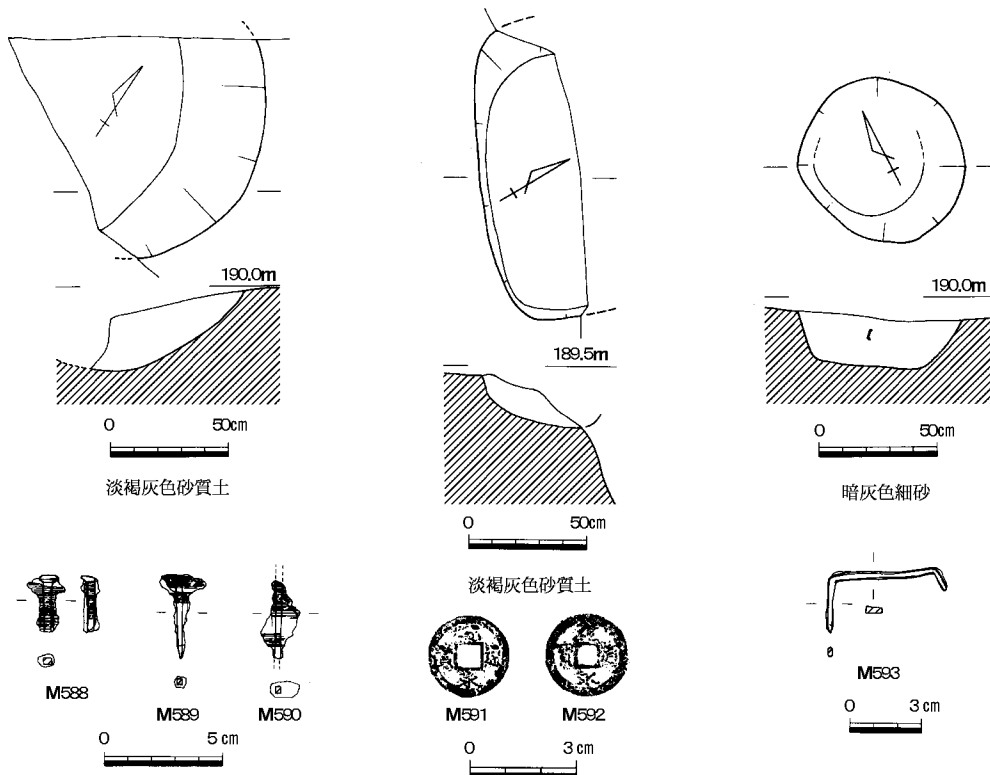
3908Cf区に位置する。人骨はみられなかったが、土壌の規模・形態や周囲の遺構の状況などから判断して墓とした。平面形は、ほぼ正円形を呈し、上面での規模は、直径が70cm、検出面からの深さは20cmを測る。墓壙の形態からみて桶棺で、鏝M593は棺材を緊縛した金具とみられる。

そのほかには副葬品は出土しておらず、時期の特定に苦慮するものの、この墓の時期は、江戸時代と考えられる。 (弘田)

墓40~43 (第793・826~829図)

3908・09Cf区にかけて検出した土壌群である。人骨の出土こそ確認できなかったものの、出土遺物や土壌掘り方の形態などから判断して墓と考えたものである。そこにおいては、4基の墓が掘立柱建物68・69の西側において南北に列状に並んでおり、この建物に付属した1つの屋敷墓とみなすことができよう。

いずれも、掘り方の平面形はほぼ正円形を呈しており、掘り方上面での規模は、直径が70~80cmと



第823図 墓37 (1/30)  
・出土遺物 (1/3)

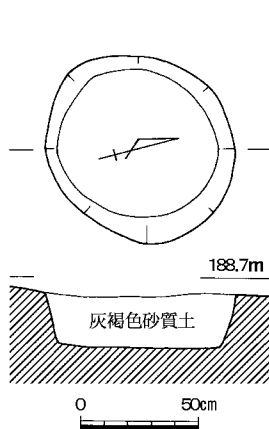
第824図 墓38 (1/30)  
・出土遺物 (1/2)

第825図 墓39 (1/30)  
・出土遺物 (1/3)

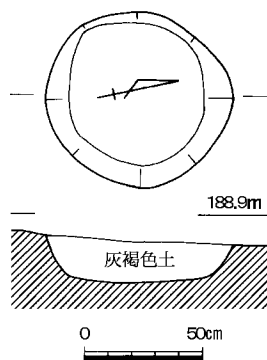
第3章 発掘調査の概要

後述する墓域の墓とくらべてやや小型の掘り方、棺を使用したとみられ、検出面からの深さは、20～40cmを測る。

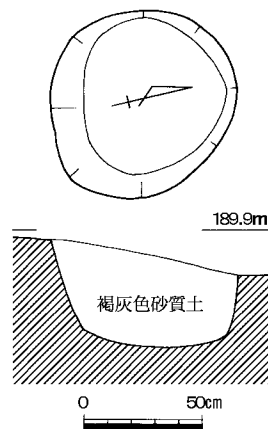
副葬品は貧弱で、銭や刃物類はみられなかった。とりわけ墓40～42においては、副葬品はまったく出土していないものの、墓43からは、棺釘とみられる木質の残存する釘M594～597が土師器皿2058～



第826図 墓40 (1/30)



第827図 墓41 (1/30)



第828図 墓42 (1/30)

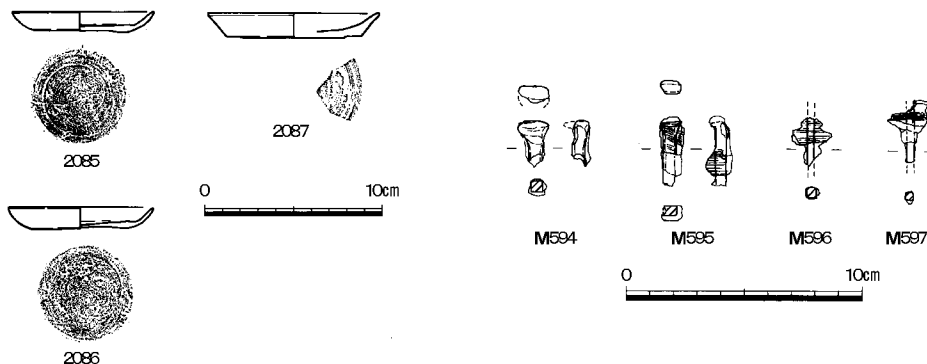
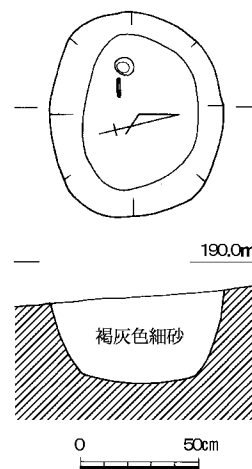
2086とともに出土している。この例から判断して、墓40～42も含めていずれも桶棺であったと考えられる。

土師器皿2085・2086は、器壁も薄く、胎土が精良であり、内底面の縁に沿って浅い溝の巡る皿C類で、底部には回転糸切りを施している。これとは別に、土師器皿2087があるが、静止糸切りで口径もやや大きく、かつ器壁も厚い。中世的様相を呈し、前者とは異なる。

いずれの墓も、江戸時代の範疇にあるとみてよい。(弘田)

墓44 (第793・830図、図版170)

4 0 01Cf区において検出した。埋土の色調も新しい様相を呈しており、断面を残さずに一度に完掘したが、平坦な底面に段差がみられることや平面図における底面の形態からみても、本来は円

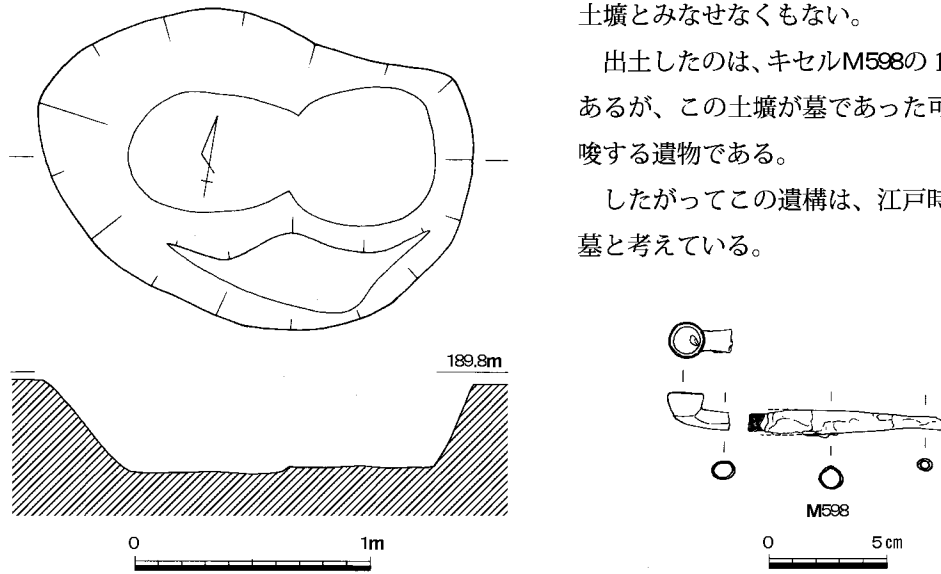


第829図 墓43 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

形もしくは方形を呈した、連続する2基の土壙とみなせなくもない。

出土したのは、キセルM598の1点のみであるが、この土壙が墓であった可能性を示唆する遺物である。

したがってこの遺構は、江戸時代の桶棺墓と考えている。(弘田)



第830図 墓44 (1/30)・出土遺物 (1/3)

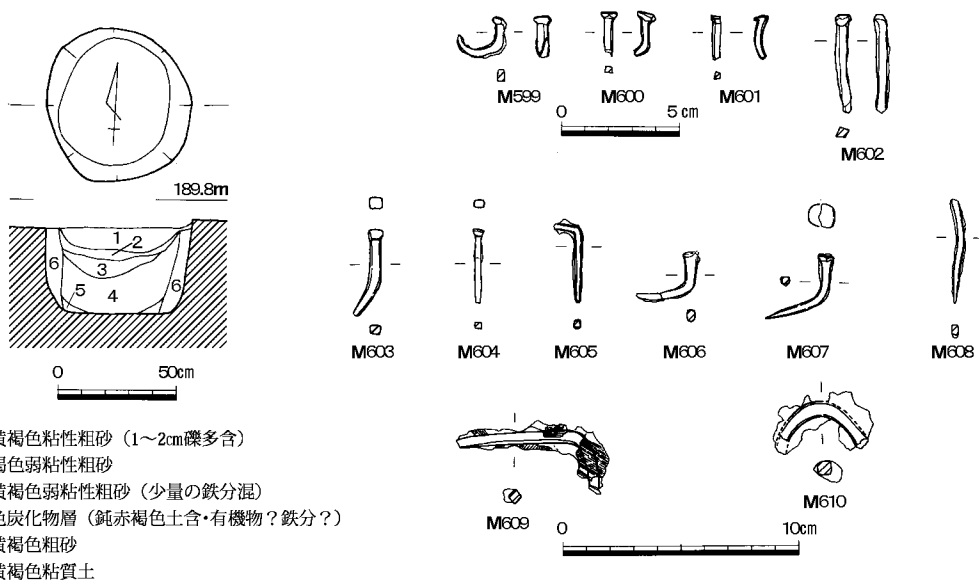
墓45 (第793・831図、図版172)

4 0 01Cg区において検出しており、人骨は確認できなかったものの桶棺墓と考えられた。埋土のうちの第6層は桶の痕跡であり、出土した釘や金具M599～610によって緊結していたようである。また、釘には大小が存在するが、使用部位の違いであろうか。

この墓の時期は、江戸時代と考えている。(弘田)

墓46 (第793・794・832図、写真58、図版169・172)

4 0 04Ce区において検出しており、人骨は存在しなかったものの出土遺物などから墓と考えられる。



- 1 灰黄褐色粘性粗砂 (1~2cm礫多含)
- 2 黒褐色弱粘性粗砂
- 3 灰黄褐色弱粘性粗砂 (少量の鉄分混)
- 4 黒色炭化物層 (鈍赤褐色土含・有機物?鉄分?)
- 5 鈍黄褐色粗砂
- 6 灰黄褐色粘質土

第831図 墓45 (1/30)・出土遺物 (1/3)

第3章 発掘調査の概要

また、土壌内には角礫の集石がみられたが、墓の上部構造が落ち込んだものと理解している。

出土遺物のうち、M611～618は一部に木質も残っており、棺釘と考えられる。M619は鉄銭、M620～629は寛永通寶である。鉄銭は、このほかに数枚は存在したとみられるが、残存状況は悪い。M620～629はいずれも新寛永であったことや、鉄銭の存在から、この墓の年代は江戸時代後半の18世紀中葉以降と見なせる。

(弘田)

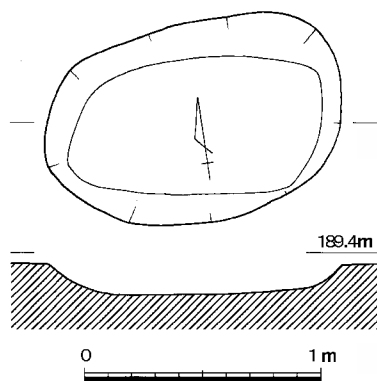
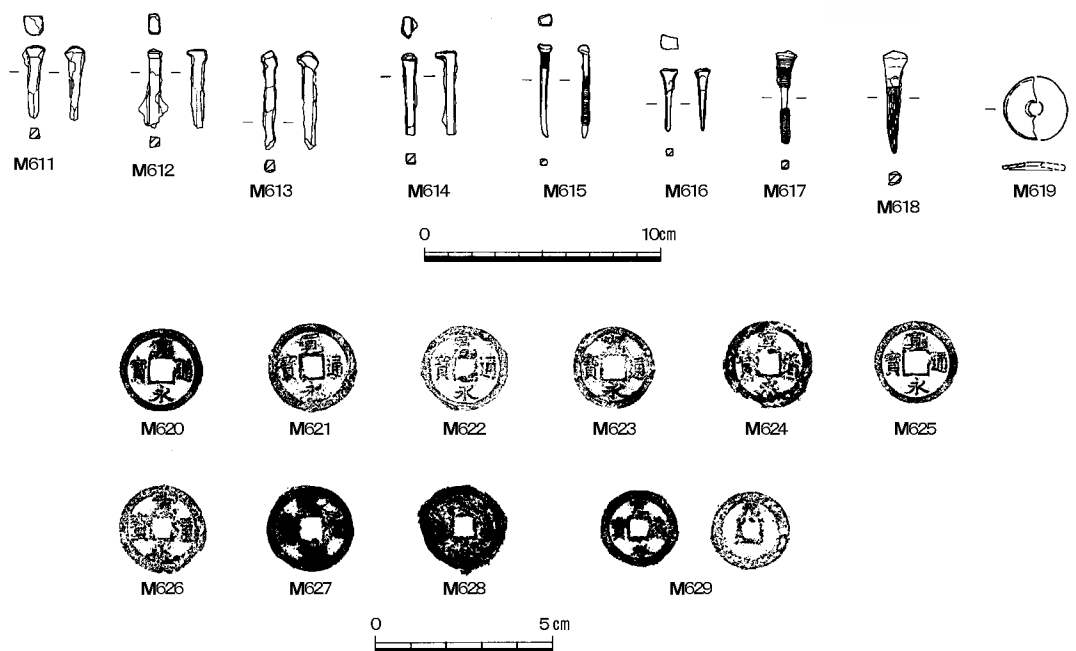


写真58 墓46 (南から)



第832図 墓46 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2)

墓47 (第795・833図、図版160・166)

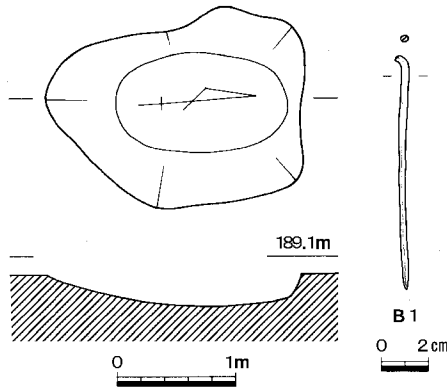
4 0 05Bj区に位置する。平面形は不整形であり、掘り方上面の長さ2.16m、幅1.66m、残存している深さは26cmを測る。出土遺物はかんざしと考えられるB 1がある。棺の形態は箱式木棺 (平棺) の可能性がある。遺構の時期は埋土から判断して、江戸時代後半と考えられる。

(河合)

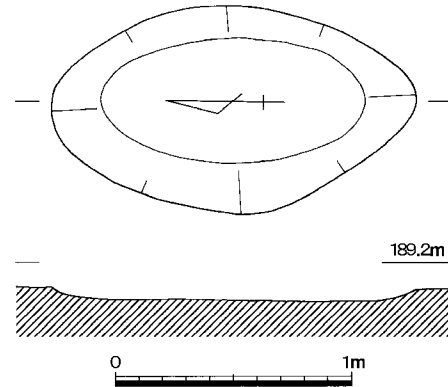
墓48 (第795・834図、図版160)

4 0 05Bj区に位置する。平面形は楕円形であり、掘り方上面の長さ1.54m、幅88cm、残存している

深さは5cmを測る。出土遺物は確認できないが、埋土から判断して、江戸時代後半の墓と考えられる。  
(河合)



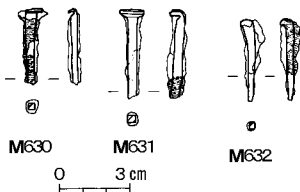
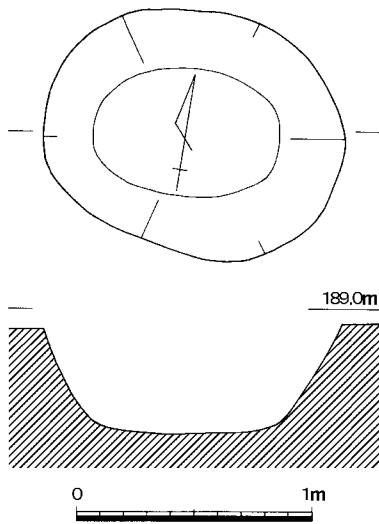
第833図 墓47 (1/60)・出土遺物 (1/3)



第834図 墓48 (1/30)

墓49 (第795・835図、図版160)

4 0 05 Bj区に位置する。平面形は楕円形であり、掘り方上面の長さ1.28m、幅1.04m、残存している深さは45cmを測る。出土遺物は鉄釘M630~632がある。遺構の時期は埋土から判断して、江戸時代後半と考えられる。  
(河合)

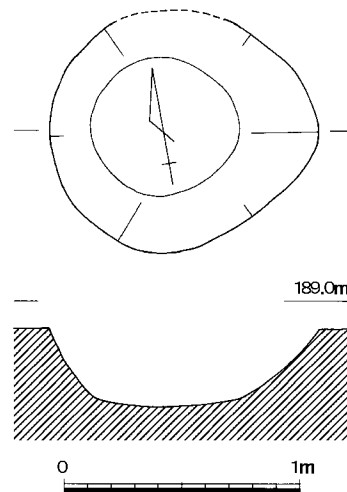


第835図 墓49 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓50 (第795・836図、図版160)

4 0 05 Bj区に位置する。平面形は正円形であり、掘り方上面の長さ1.14m、幅1.02m、残存している深さは33cmを測る。

人骨や出土遺物は確認できなかったものの、周囲の遺構の状況や埋土から判断して、江戸時代後半の墓と考えられる。  
(河合)



第836図 墓50 (1/30)



第3章 発掘調査の概要

墓51 (第795・837図、図版160・169)

4 0 05Bj区に位置する。平面形は正円形であり、掘り方上面の長さ1.24m、幅1.17m、残存している深さは44cmを測る。出土遺物は差し銭M633と不明遺物(平面図参照)がある。M633は寛永通寶77枚が藁状のヒモでつづられていた。

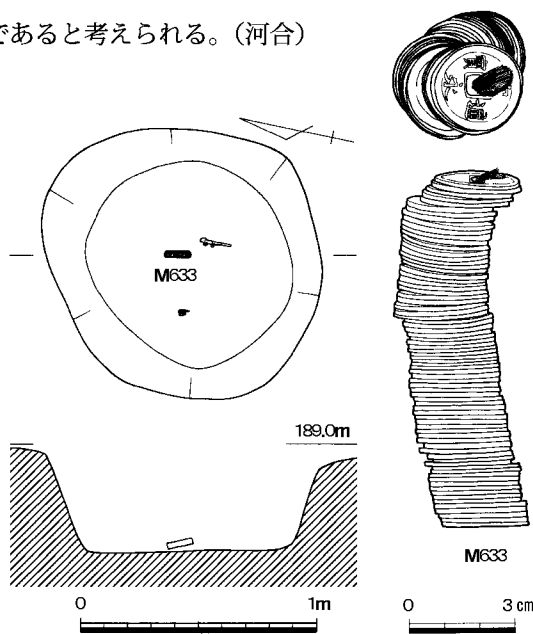
この墓の時期は、江戸時代後半と考えられる。

(河合)

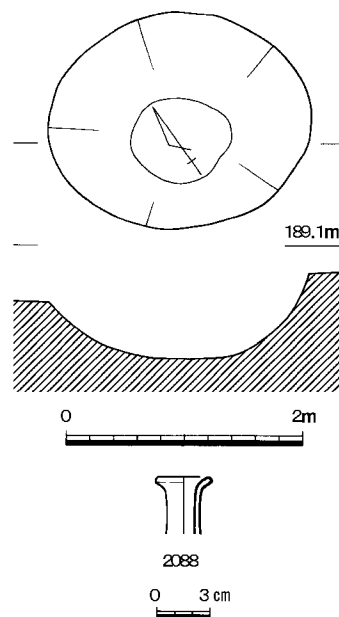
墓52 (第795・838図、図版160)

4 0 06Bj区に位置する。平面形は円形であり、掘り方上面の長さ1.74m、幅1.46m、残存している深さは49cmを測る。出土遺物は肥前陶器瓶2088がある。

埋土から判断して、江戸時代後半の墓であると考えられる。(河合)



第837図 墓51 (1/30)・出土遺物 (1/2)



第838図 墓52 (1/60)・出土遺物 (1/4)

墓53 (第795・839図、図版160)

4 0 06Bj区に位置する。平面形は楕円形であり、規模は、掘り方上面の長さが1.32m、幅1m、残存している深さは15cmを測る。人骨や出土遺物は確認できなかったものの、埋土や周囲の遺構の状況から判断すると、江戸時代でも後半の墓の可能性があると考えられる。

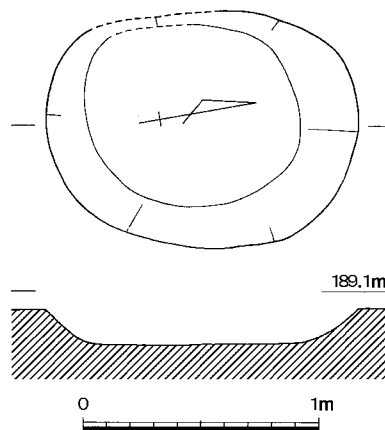
(河合)

墓54 (第795・840図、図版160・172)

4 0 06Ca区に位置する。平面形は楕円形であり、掘り方上面の長さ1.12m、幅79cm、残存している深さは49cmを測る。出土遺物は鉄釘M634・635がある。

遺構の時期は埋土から判断して、江戸時代後半と考えられる。

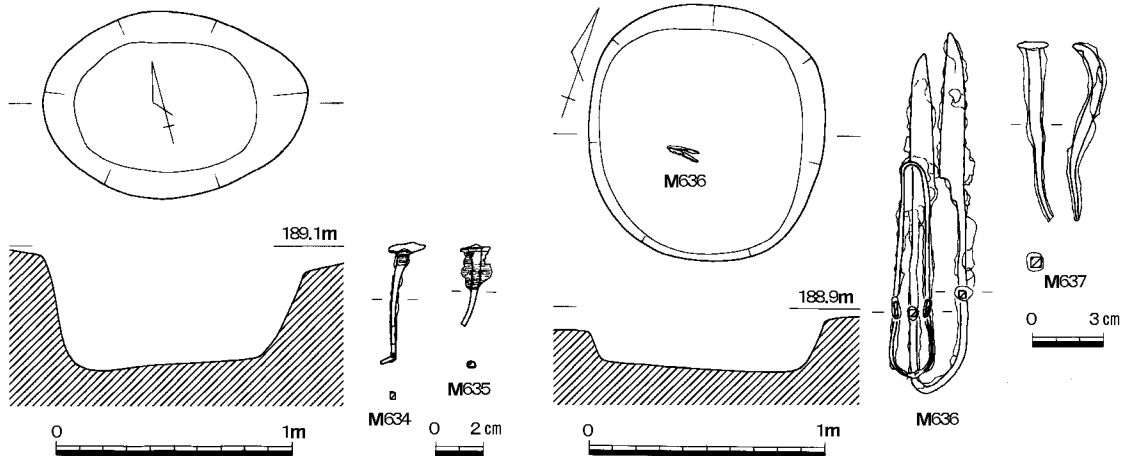
(河合)



第839図 墓53 (1/30)

墓55 (第795・841図、図版160・171)

4 0 06Ca区に位置する。平面形は円形であり、掘り方上面の長さ1.08m、幅1 m、残存している深さは22cmを測る。出土遺物は和ばさみと毛抜きが融着したもの (M636) と鉄釘M637がある。遺構の時期は江戸時代後半と考えられる。(河合)



第840図 墓54 (1/30)・出土遺物 (1/3)

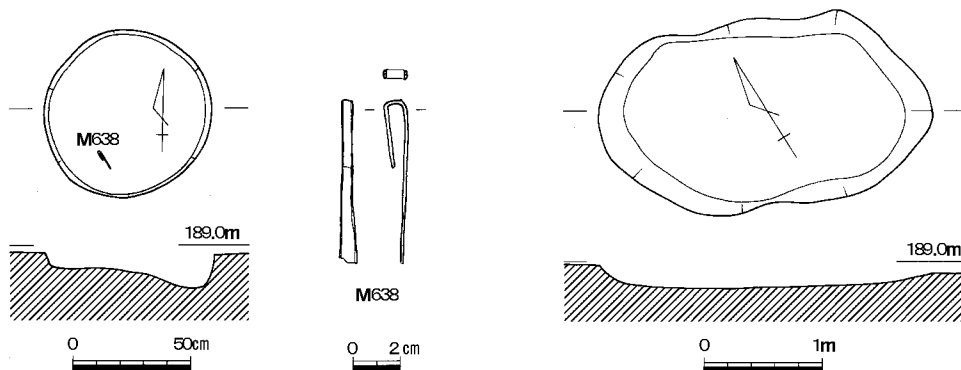
第841図 墓55 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓56 (第795・842図、図版160・171)

4 0 06Bj区に位置する。平面形は正円形であり、掘り方上面の長さ71cm、幅70cm、残存している深さは14cmを測る。出土遺物は銅製の毛抜きM638がある。遺構の時期は埋土から判断して、江戸時代後半と考えられる。(河合)

墓57 (第795・843図、図版160)

4 0 07Bj区に位置する。平面形は不整形であり、掘り方上面の長さ2.82m、幅1.57m、残存している深さは12cmを測る。棺の形態は箱式木棺 (平棺) の可能性がある。出土遺物は確認できないが、埋土から判断して、江戸時代後半と考えられる。当遺構は墓域1の中では最大である。(河合)



第842図 墓56 (1/30)・出土遺物 (1/3)

第843図 墓57 (1/60)

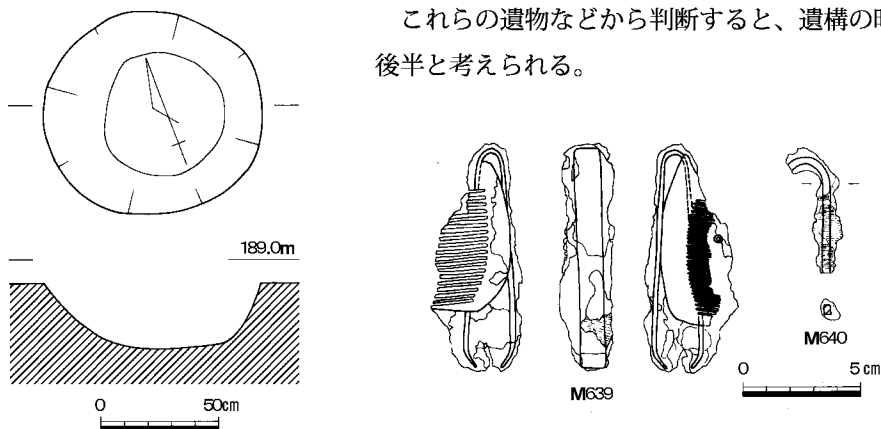
墓58 (第795・844図、図版160・171)

4 0 06Bj区に位置する。平面形は正円形であり、掘り方上面の長さ93cm、幅86cm、残存している深

第3章 発掘調査の概要

さは28cmを測る。出土遺物は鉄製の毛抜きM639のほか、鉄釘M640がある。鉄製の毛抜きM639の両側には形態の異なる二種類の櫛と玉の痕跡が観察できる。

これらの遺物などから判断すると、遺構の時期は江戸時代後半と考えられる。(河合)



第844図 墓58 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓59 (第795・845図、図版160・171)

4 0 07Ca区に位置する。平面形は正円形であり、掘り方上面の長さ78cm、幅76cm、残存している深さは22cmを測る。出土遺物は銅製のキセルの雁首片M641がある。

遺構の時期は、キセルの雁首片M641から判断して、18世紀代の範疇で考えておきたい。(河合)

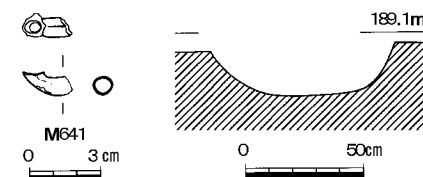
墓60 (第795・846図、図版160)

4 0 06Ca区に位置する。平面形は正円形であり、規模は、掘り方上面での長さが89cm、幅は86cm、残存している深さは12cmを測る。

人骨や出土遺物は確認できなかったが、周囲の遺構の状況や埋土から判断すると、江戸時代後半の墓の可能性を考えておきたい。(河合)

(河合)

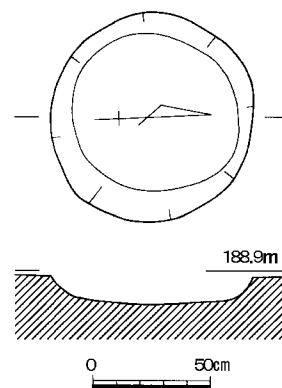
第845図 墓59 (1/30)・出土遺物 (1/3)



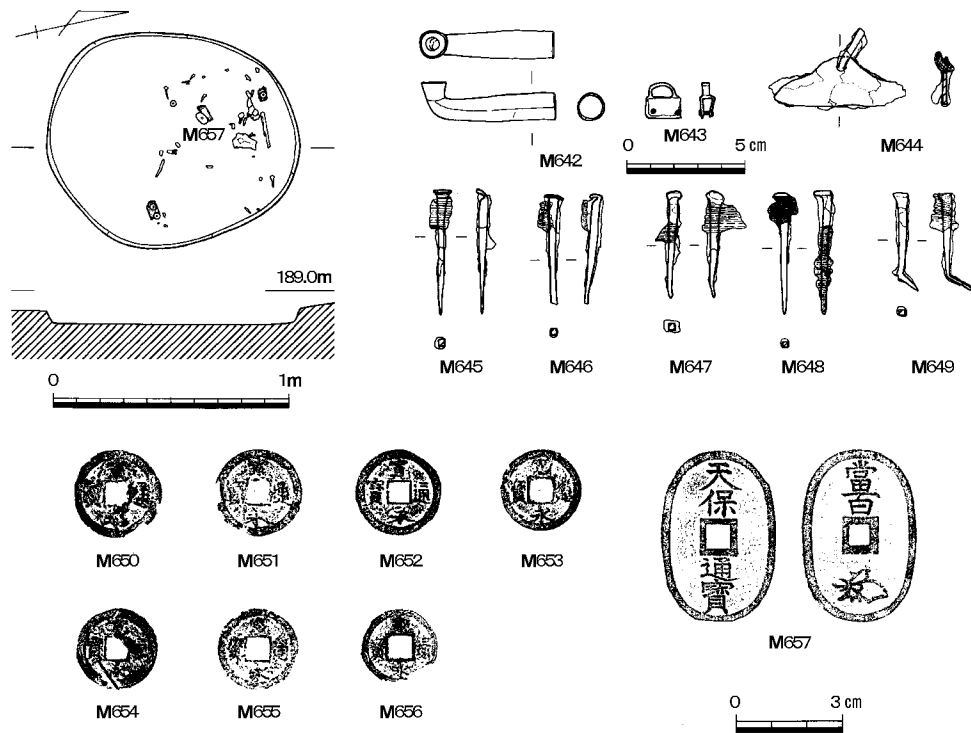
墓61 (第795・847図、図版160・161・173・170~172)

4 0 06Ca区に位置する。平面形は楕円形であり、掘り方上面の長さ1.07m、幅91cm、残存している深さは9cmを測る。出土遺物は銅製のキセルの雁首M642、不明銅製品(止め金具か)M643、火打ち金M644、鉄釘M645~649、寛永通寶M650~656、天保通寶M657があり、寛永通寶には棺材と考えられる木質が付着していた。天保通寶(M657)は背面に「當百文」とあるように、寛永通寶100枚に相当する銭貨である。また、これは天保六年(1835)~明治三年(1870)に造られたものであることから、遺構の時期は江戸時代末期(19世紀中頃)と考えておきたい。

(河合)



第846図 墓60 (1/30)



第847図 墓61 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2)

墓62 (第795・848図、図版160・172)

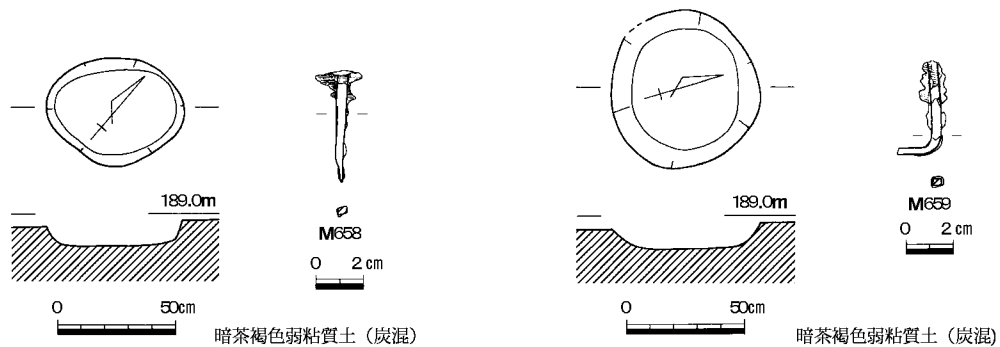
4 0 06Ca区に位置する。平面形は楕円形であり、掘り方上面の長さ59cm、幅46cm、残存している深さは10cmを測る。出土遺物は鉄釘M658がある。遺構の時期は埋土から判断して、江戸時代後半と考えられる。(河合)

墓63 (第795・849図、図版160)

4 0 06Ca区に位置する。平面形は楕円形であり、掘り方上面の長さ65cm、幅63cm、残存している深さは10cmを測る。出土遺物は鉄釘M659がある。遺構の時期は埋土から判断して、江戸時代後半と考えられる。(河合)

墓64 (第795・850図、図版161・170・171)

4 0 06Cb区に位置する。平面形は楕円形であり、掘り方上面の長さ80cm、幅72cm、残存している深



第848図 墓62 (1/30)・出土遺物 (1/3)

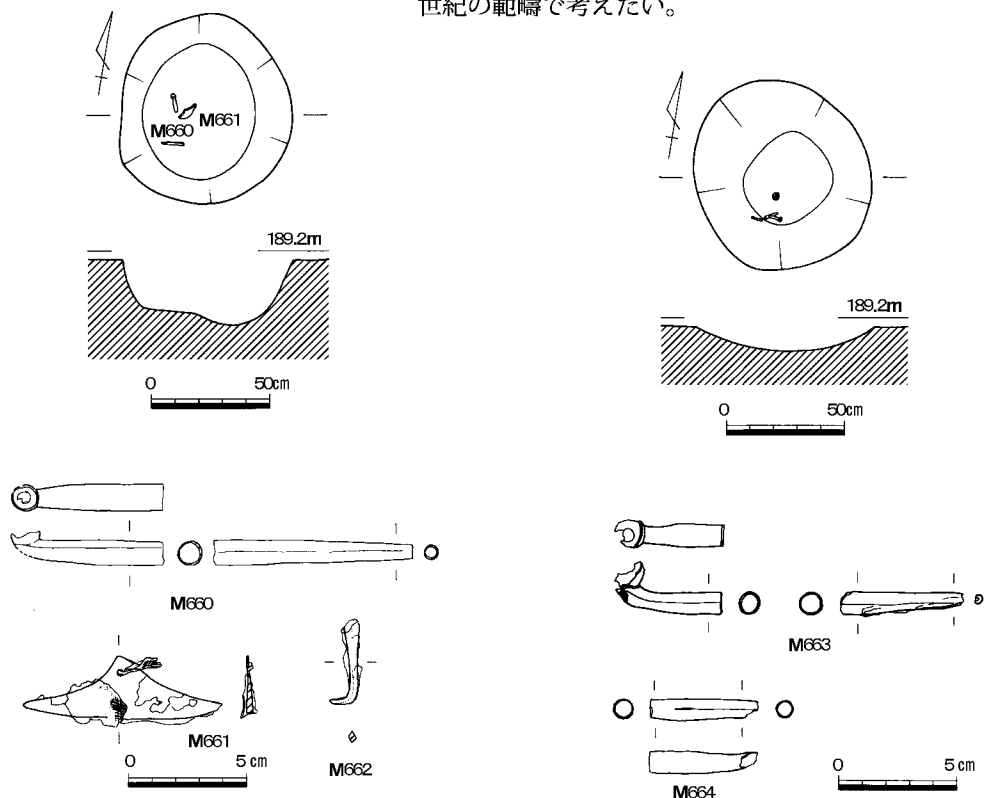
第849図 墓63 (1/30)・出土遺物 (1/3)

### 第3章 発掘調査の概要

さは27cmを測る。出土遺物は銅製のキセルM660、火打ち金M661、鉄釘M662が認められる。火打ち金M661には繊維が付着しており、ヒモ穴には青銅製のものが巻き付けてある。墓の時期はキセルM660から18世紀後半と考える。 (河合)

#### 墓65 (第795・851図、図版161・162・170)

4 0 06Cb区に位置する。平面形は正円形であり、掘り方上面の長さ81cm、幅73cm、残存している深さは10cmを測る。出土遺物は銅製のキセルM663とキセルの雁首片M664が認められ、キセルは合計2点が出土した。遺構の時期はキセルM663から判断して、18世紀の範疇で考えたい。 (河合)



第850図 墓64 (1/30)・出土遺物 (1/3)

第851図 墓65 (1/30)・出土遺物 (1/3)

#### 墓66 (第795・852図、図版161・162・170・171)

4 0 06Cb区に位置する。平面形は楕円形であり、掘り方上面の長さ99cm、幅82cm、残存している深さは24cmを測る。出土遺物は銅製のキセルM665とキセルの雁首片M666のほか、銅製の匙M667、鉄製和ばさみM668が認められる。

遺構の時期はキセルM665から判断して18世紀後半と考える。 (河合)

#### 墓67 (第795・853図、図版161)

4 0 06Cb区に位置する。平面形は円形であり、掘り方上面の長さ77cm、幅75cm、残存している深さは37cmを測る。出土遺物は確認できないが、埋土や位置などから判断して、18世紀後半頃の墓であると考えられる。 (河合)

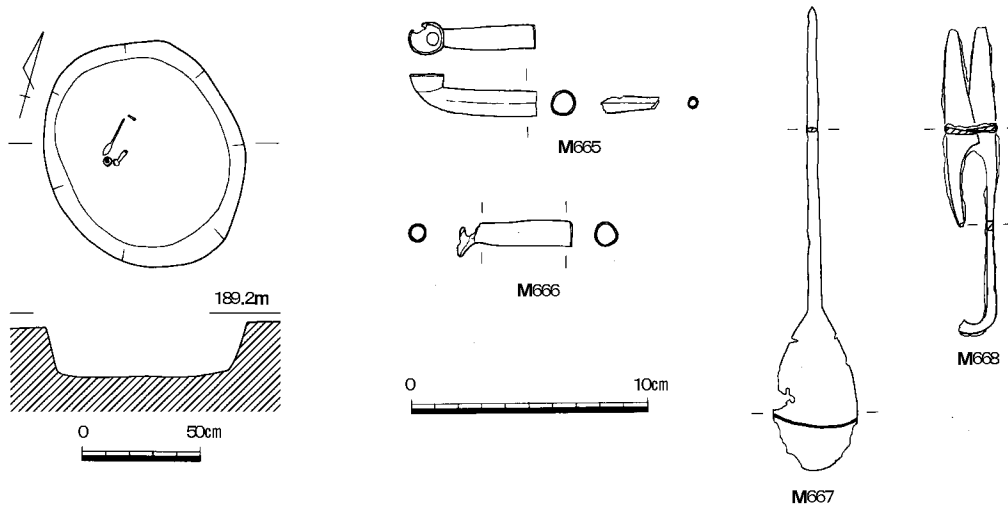
#### 墓68 (第795・854図、図版161)

4 0 06Cb区に位置する。平面形は円形であり、掘り方上面の長さ98cm、幅85cm、残存している深さ

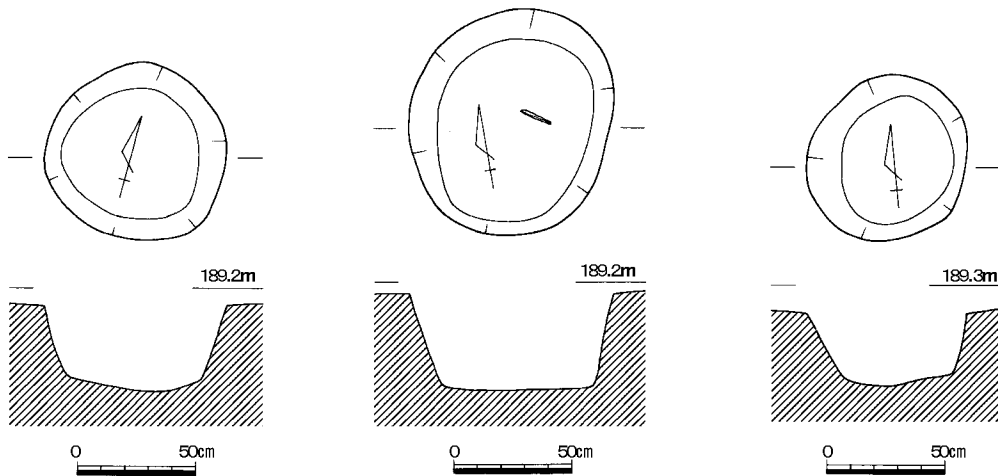
は40cmを測る。出土遺物は確認できないが、埋土や位置などから判断して、18世紀後半頃の墓であると考えられる。(河合)

墓69 (第795・855図、図版161)

4 0 06Cb区に位置する。平面形は正円形であり、掘り方上面の長さ72cm、幅66cm、残存している深さは30cmを測る。出土遺物は確認できないが、埋土や位置などから判断して、18世紀後半頃の墓であると考えられる。(河合)



第852図 墓66 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第853図 墓67 (1/30)

第854図 墓68 (1/30)

第855図 墓69 (1/30)

墓70 (第795・856図、図版161)

4 0 06Cb区に位置する。平面形は楕円形であり、掘り方上面の長さ1.74m、幅1.14m、残存している深さは54cmを測る。出土遺物には鉄釘M669・670がある。遺構の平面形や断面形がやや不整形であるが、鉄釘M669・670の存在や埋土および当遺構の出土位置などから総合的に判断して、江戸時代後半の墓であると考えておきたい。(河合)

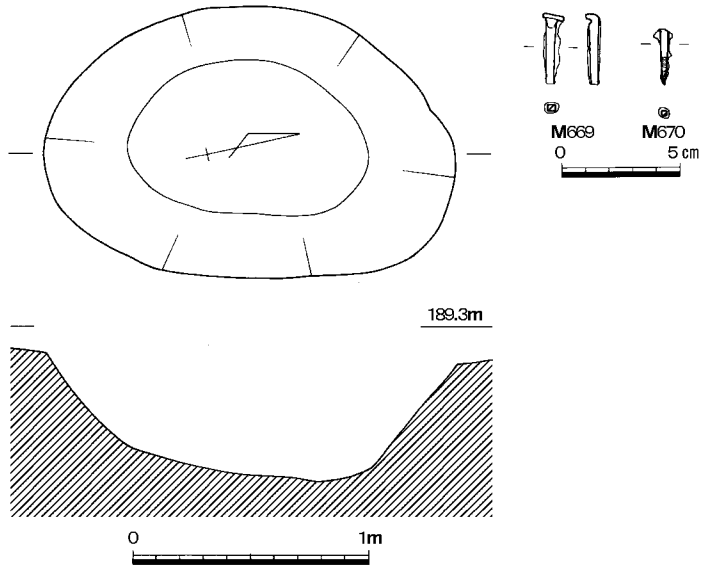
第3章 発掘調査の概要

墓71 (第794・857・942図)

4 0 06Cd区、掘立柱建物84の北西数mから検出された平面不整円形の墓である。後述する墓域2から離れ、単独に発見された。規模は径1×0.9m、深さ25cmを測る。

床面中央北寄りから肥前碗片2089、煙管の雁首M671が出土している。

当墓の南西部には前述の中世土壙墓群が所在し、これらから継続して掘られた近世前半の土葬墓と推定される。(江見)



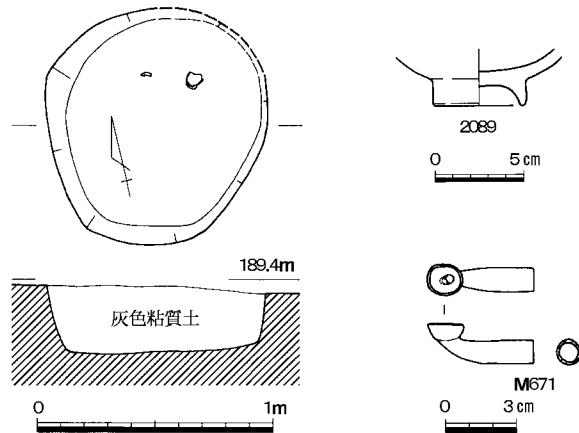
第856図 墓70 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓72 (第794・858図、図版162、

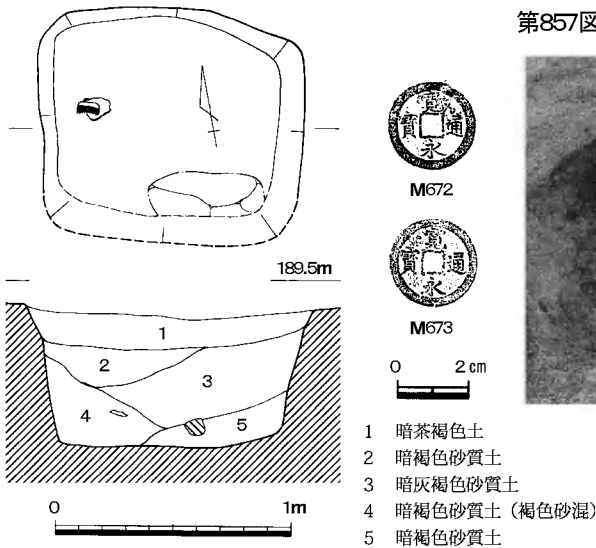
写真59)

4 0 06Cg区から検出された平面方形を呈す墓である。規模は1.1×1 m、深さ55cmを測る。床面中央西寄りからは頭骨の一部および横櫛が、また、埋土下層からは寛永通寶・釘などが出土した。銭貨は新寛永であり、墓の年代は17世紀後半以降であろう。

(江見)



第857図 墓71 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)



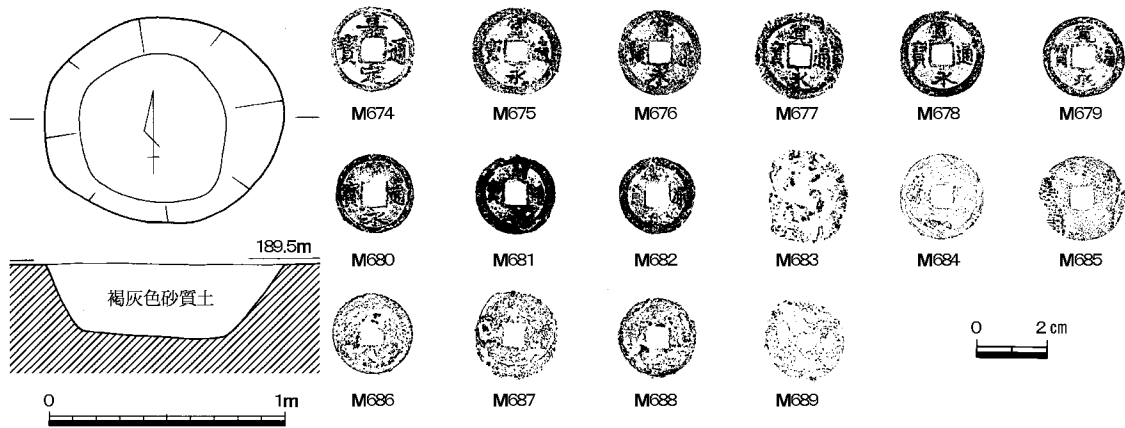
第858図 墓70 (1/30)・出土遺物 (1/2)



写真59 土壙墓72 (東から)

墓73 (第794・859図、写真60、図版162)

墓72の南5mから検出された平面整円形の墓である。規模は径1.03×0.89m、深さ31cmを測る。埋土下層から銭貨16枚・釘などが出土している。銭貨は南宋の嘉定通寶M674、寛永通寶M675~682、銭名不明M683~689であった。18世紀代の墓であろう。(江見)



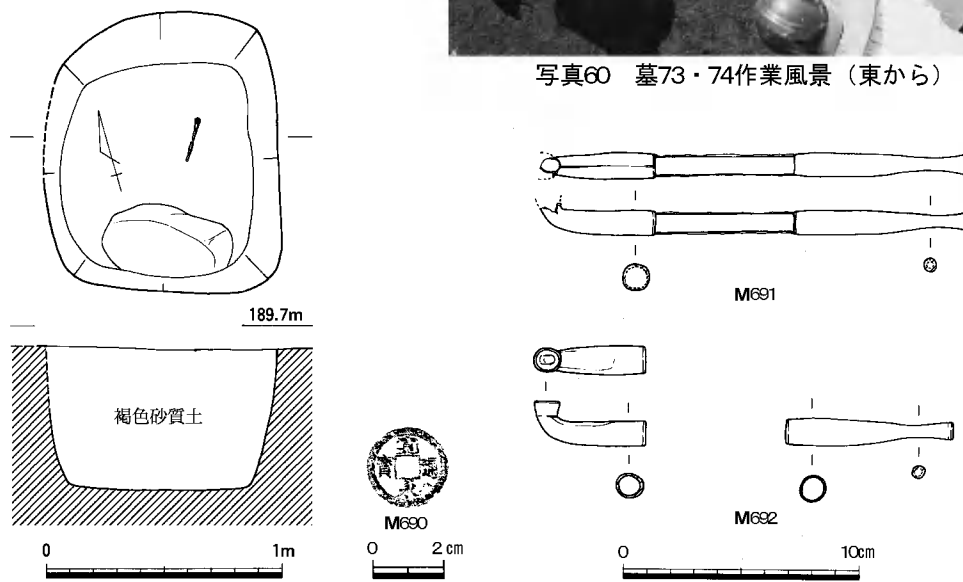
第859図 墓73 (1/30)・出土遺物 (1/2)

墓74(第794・860図、写真60、図版162・170)

墓73の東に接して検出された墓で、平面方形を呈す。規模は1.19×1m、深さ60cmを測る。遺物は検出面から煙管M691が、床中央付近から煙管M692・寛永通寶M690が出土している。なお、M691は検出位置から



写真60 墓73・74作業風景 (東から)



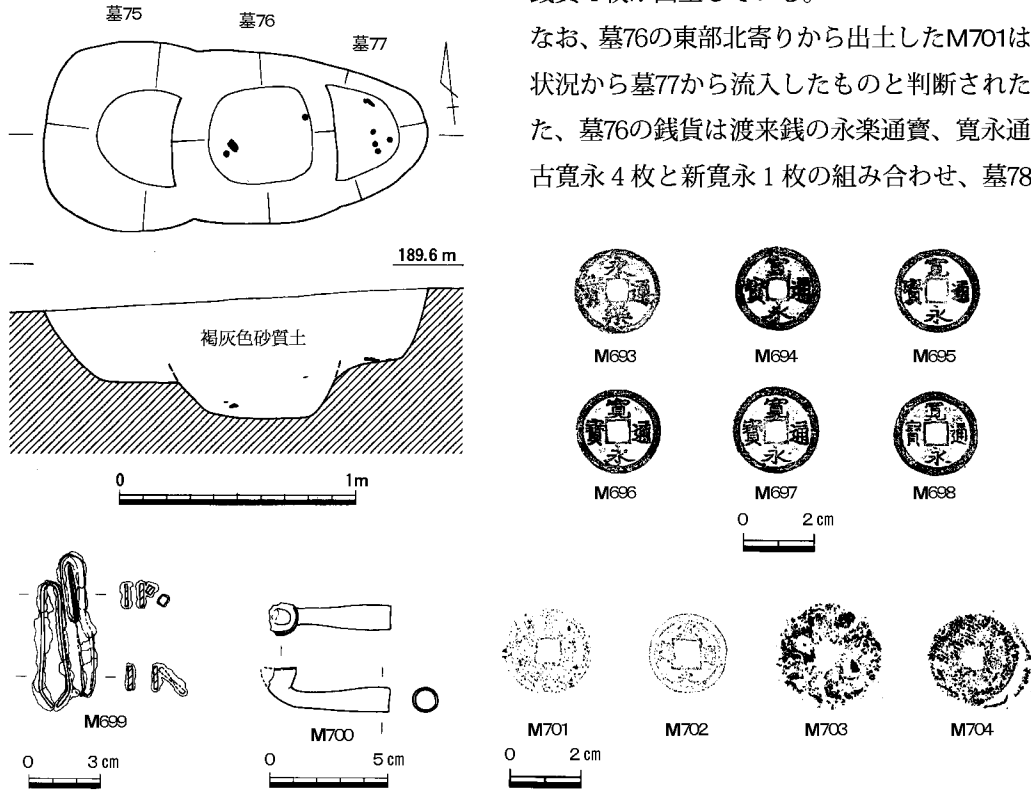
第860図 墓74 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3)



当墓に混入した可能性が高い。新寛永が出土していることから、江戸中期である。 (江見)

墓75～77 (第794・861図、図版162・169・171)

墓74の南から検出された重複する3基の墓である。墓75・77は平面円形を、墓76は方形を呈す。遺物が出土した墓76は一辺70cm、墓77は径60cm、深さ50cmを測る。墓76からは南西部墓壙底からやや浮いた位置から毛抜きと鋏M699、銭貨6枚M693～698が、墓77からは東部の墓壙底から煙管の雁首M700、銭貨4枚が出土している。



第861図 墓75～77 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3)

寛永であることから、墓76は17世紀後半～18世紀前半、墓77は18世紀代の墓と考える。 (江見)

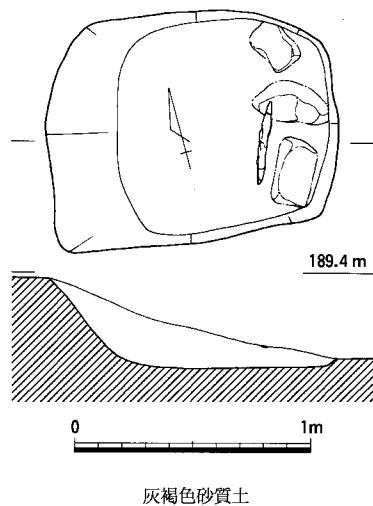
墓78 (第794・862図)

4 0 07Cf区、墓域2の墓群から西に離れた位置から検出された平面方形の墓で、上部は後世の削平を受けていた。規模は1.25×0.95m、深さ40cmを残す。

遺物は東部から南北方向に納められた残存状態の悪い短刀一振りであった。全長約35cm、刃渡り約30cmを測り、刃先を南に向けていた。 (江見)

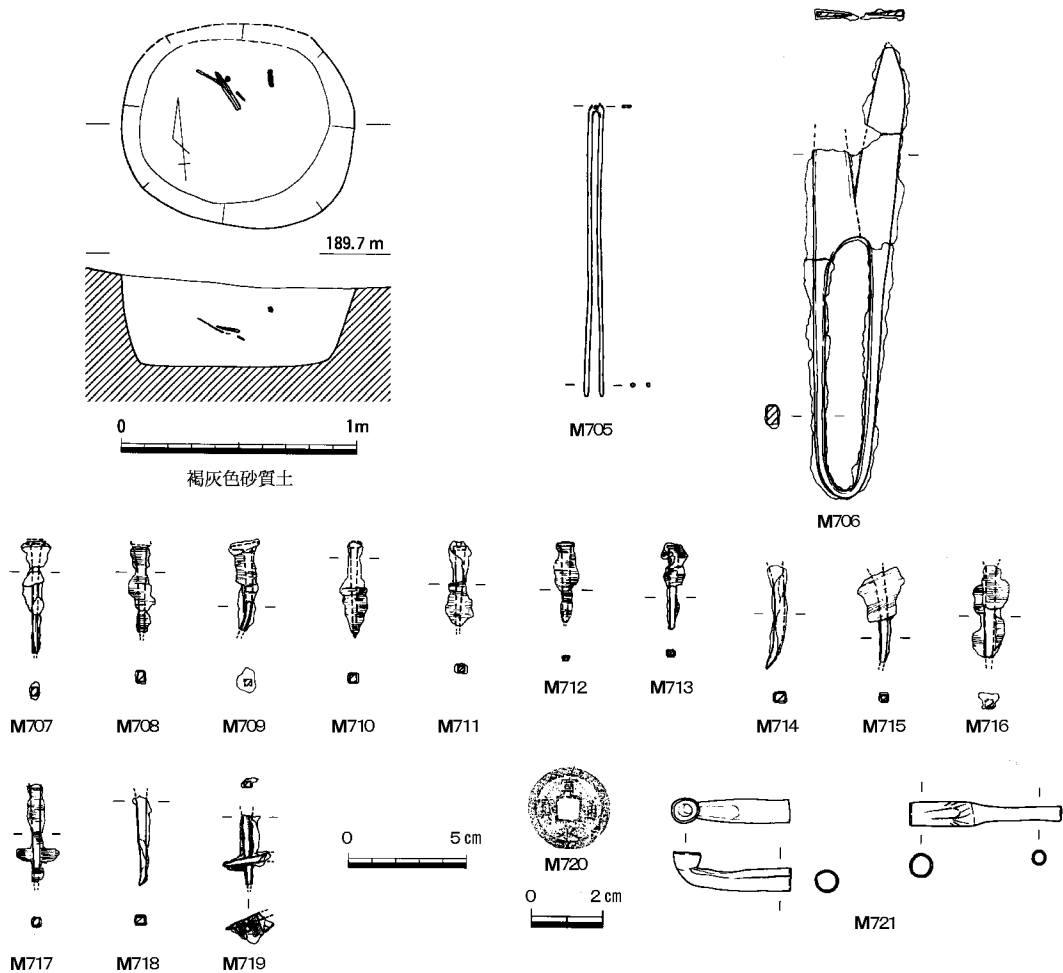
墓79 (第794・863図、図版162・171)

墓75～77の南から検出された平面整円形の墓で、これらの墓によって一部切られている。規模は1.01×0.93m、深さ37cmを測る。遺物は墓壙全体から釘10数本M



第862図 土壙墓78 (1/30)

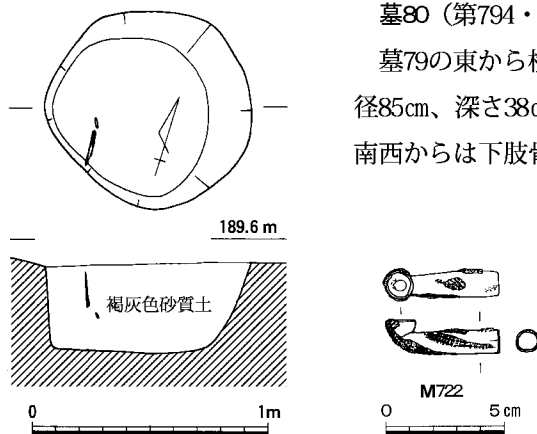
707~719をはじめ、北部からは簪M705、鈇M706、錢貨M720、煙管の吸い口M721がまとめて出土しており、やや北東の浮いたところに布に包まれた煙管の雁首が位置していた。新寛永を伴うことから18世紀代の墓と考える。(江見)



第863図 墓79 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2)

墓80 (第794・864図、図版162)

墓79の東から検出された平面整円形を呈す墓である。規模は径85cm、深さ38cmを測り、埋土は褐灰色砂質土であった。墓壙南西からは下肢骨と思われる一部と、その北側から煙管の雁首M722が、全体から数本の釘が出土している。雁首には繊維質の付着が認められ、布に包まれて納められたものと思われる。18世紀代の墓と考える。(江見)

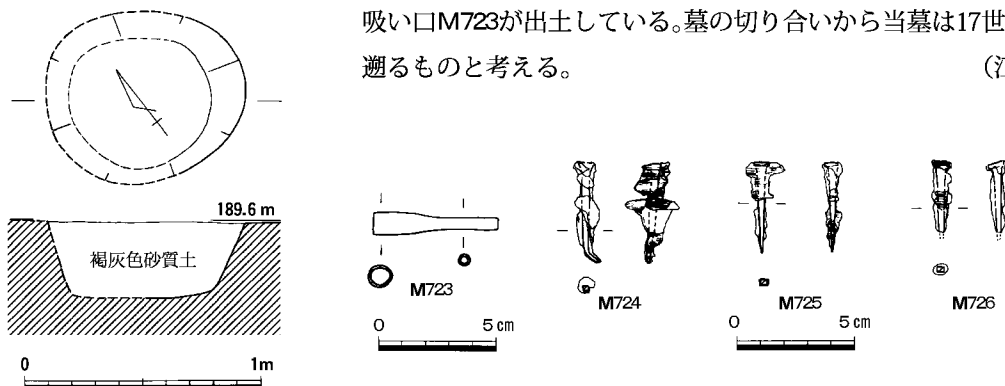


第864図 墓80 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓81 (第794・865図、図版162)

墓79および墓82に切られ、これによって墓壙西部の大半が削平されて検出され

た。平面整円形を呈し、規模は径85×74cm、深さ32cmを測る。埋土は褐灰色砂質土で墓壙内から釘M724～726とともに煙管の吸い口M723が出土している。墓の切り合いから当墓は17世紀に遡るものとする。(江見)



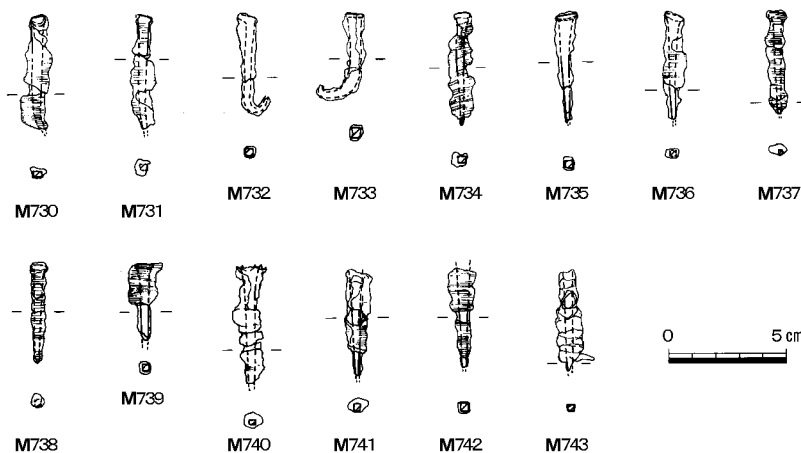
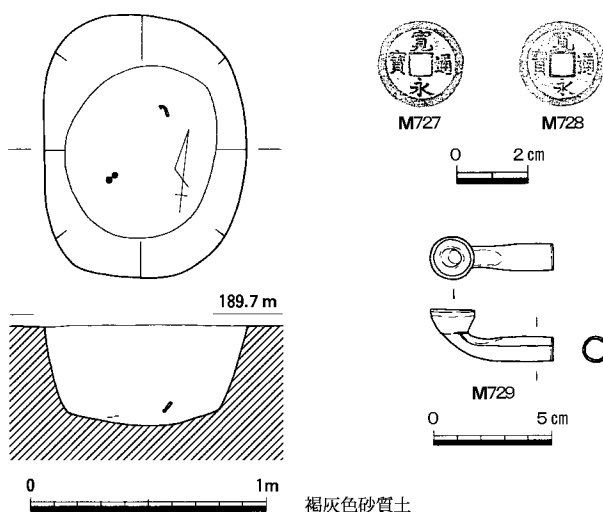
第865図 墓81 (1/30)・出土遺物 (1/3)

墓82 (第794・866図、図版162)

墓81の南東に接して検出された平面楕円形を呈す墓である。規模は1.11×0.86m、深さ43cmを測り、埋土は褐灰色砂質土であった。

遺物は10数本の釘M730～743をはじめ、寛永通寶M727・728、煙管の雁首M729などが出土している。釘は小型で細く、幅5mm前後、長さ5cm余りのものが主体を占める。

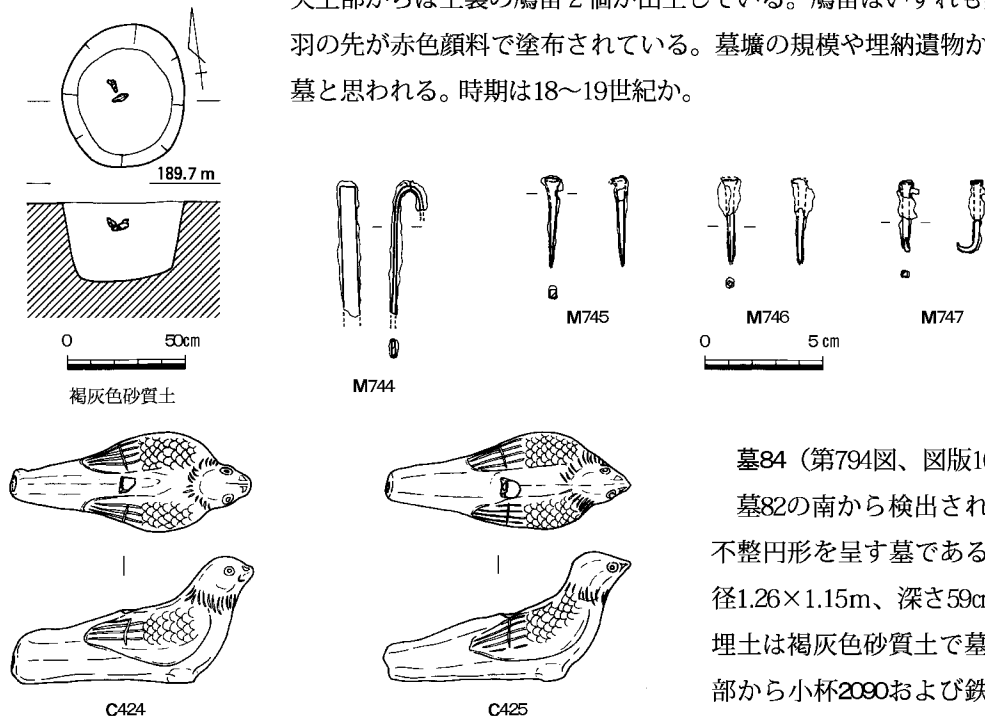
銭貨はすべて新寛永で、18～19世紀代である。(江見)



第866図 墓82 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3)

墓83 (第794・867図、図版172)

墓82の東から検出された小形の墓で、平面整円形を呈す。規模は径61×52cm、深さ33cmを測る。埋土は褐色砂質土で、これに混じって毛抜きM744、釘M745～747などが出土しており、特に、墓壙の中央上部からは土製の鳩笛2個が出土している。鳩笛はいずれも素焼きで、羽の先が赤色顔料で塗布されている。墓壙の規模や埋納遺物から幼児の墓と思われる。時期は18～19世紀か。(江見)



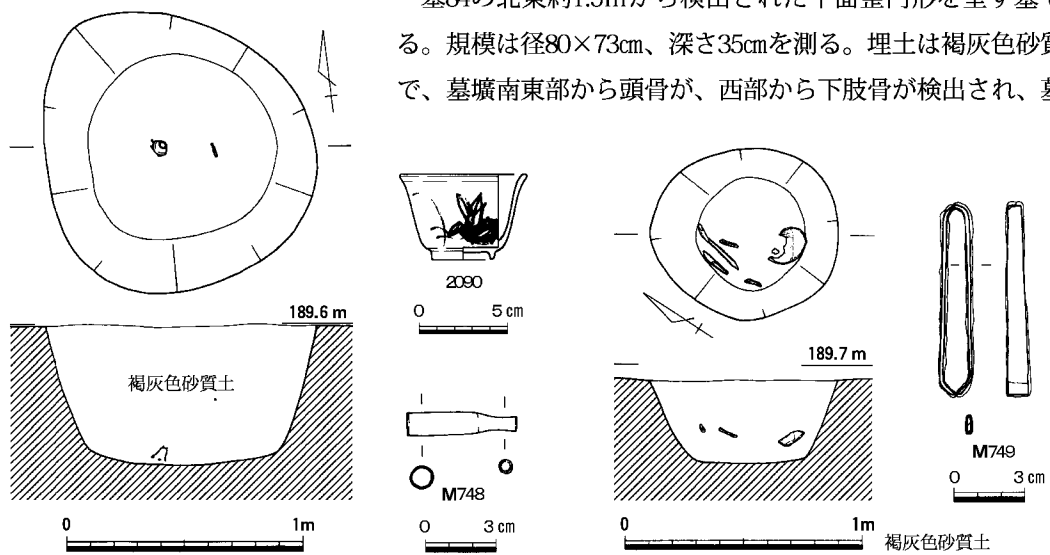
第867図 墓83 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4)

墓84 (第794図、図版162)

墓82の南から検出された、平面不整円形を呈す墓である。規模は径1.26×1.15m、深さ59cmを測る。埋土は褐灰色砂質土で墓壙中央底部から小杯2090および鉄片が、東20cm余りから煙管の吸い口M748が出土している。2090は肥前磁器で染付はコンニャク印判され、その年代観は17世紀末～18世紀前半を示すものであった。(江見)

墓85 (第794図、図版162・163・171)

墓84の北東約1.5mから検出された平面整円形を呈す墓である。規模は径80×73cm、深さ35cmを測る。埋土は褐灰色砂質土で、墓壙南東部から頭骨が、西部から下肢骨が検出され、墓壙



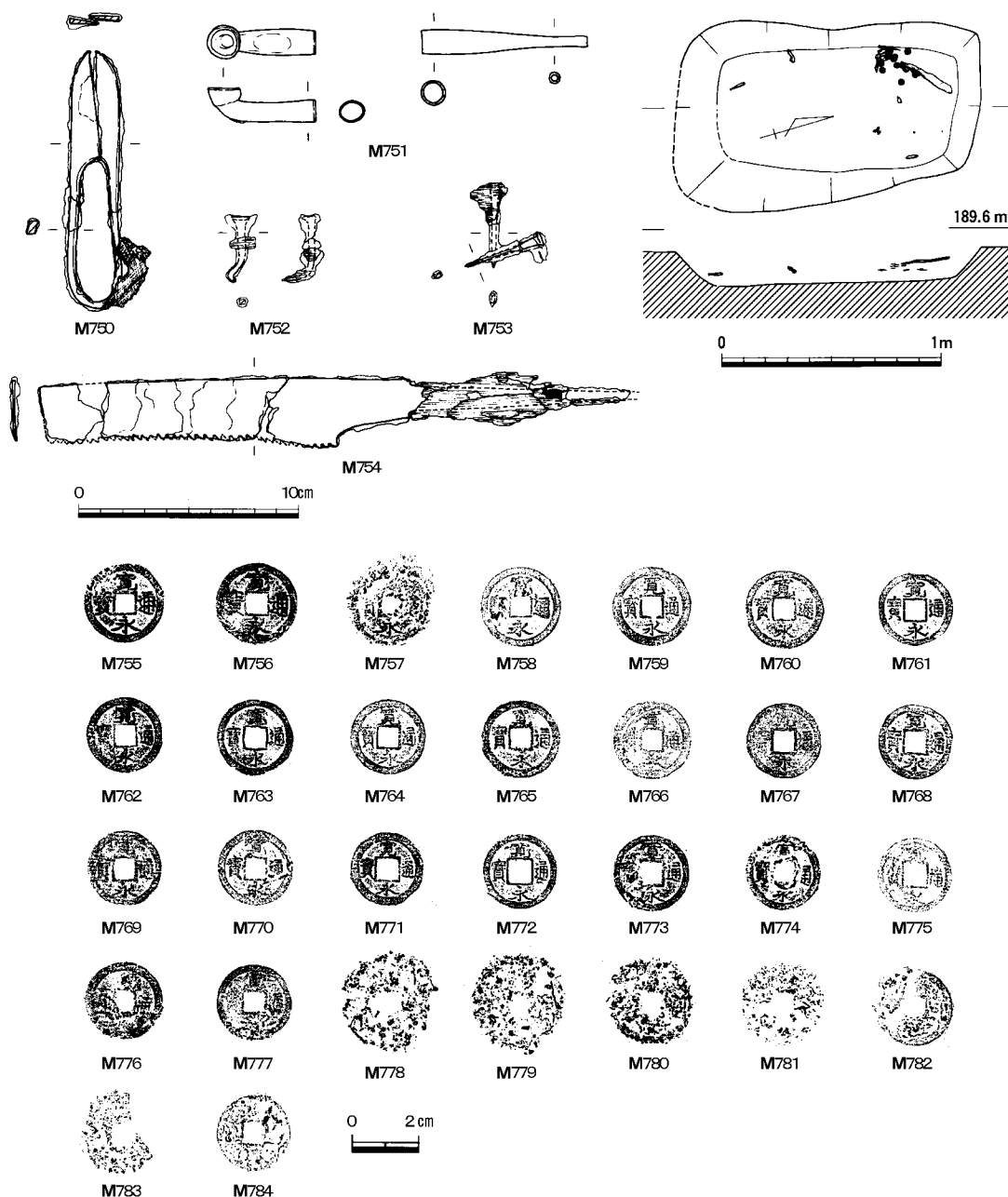
第868図 墓84 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

第869図 墓85 (1/30)・出土遺物 (1/3)

中央寄りから毛抜きM749が出土している。 (江見)

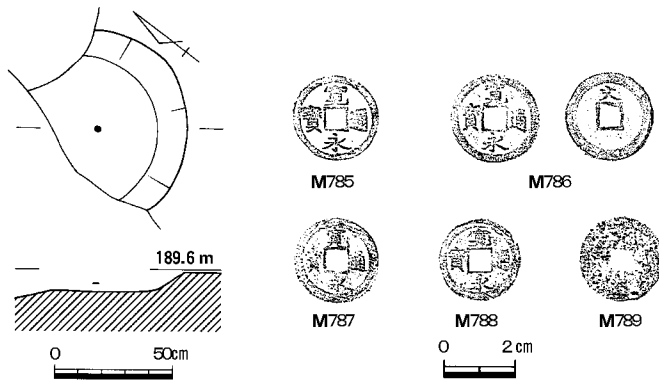
墓86 (第794・870図、図版162・163・171)

墓84の東に接して検出された平面長方形を呈す墓である。主軸をほぼ南北に向け、規模は長さ1.38 m、幅78cm、深さ15cmを測る。埋土は褐灰色砂質土であった。被葬者の残存状況は悪く、わずかに骨片と歯1本を検出するに終わったが、遺物は墓壙北西部から銭貨30枚、鋸M754、鋏M750が、南西部から煙管M751が出土している。また、埋土中から数本の釘M752・M753も出土している。なお、銭貨付近からは6×2 cm、厚さ数mm程の木片が数片出土しており、本来銭貨は木箱に納められていたように推定される。判読できたのはいずれも寛永通寶で、18世紀に造墓されたものか。 (江見)



第870図 墓86 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2)

墓87 (第794・871図、  
図版162)

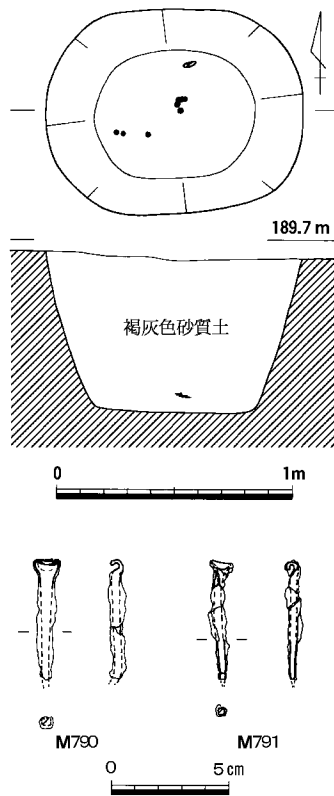


第871図 墓87 (1/30)・出土遺物 (1/2)

墓84の南西から検出された平面円形を呈す墓である。規模は残存長57cm、深さ8cmを測るが、本来は径1m余り、深さ数十cmと推定される。墓壙中央から重ねられた状態で銭貨5枚M785～789が出土している。銭貨は寛永通寶および銭名不明で、寛永通寶は古寛永M785、「文」銭M

786、新寛永M787・788で、切り合い関係からも17～18世紀前半の造墓と考える。(江見)

墓88 (第794・872図、図版162)



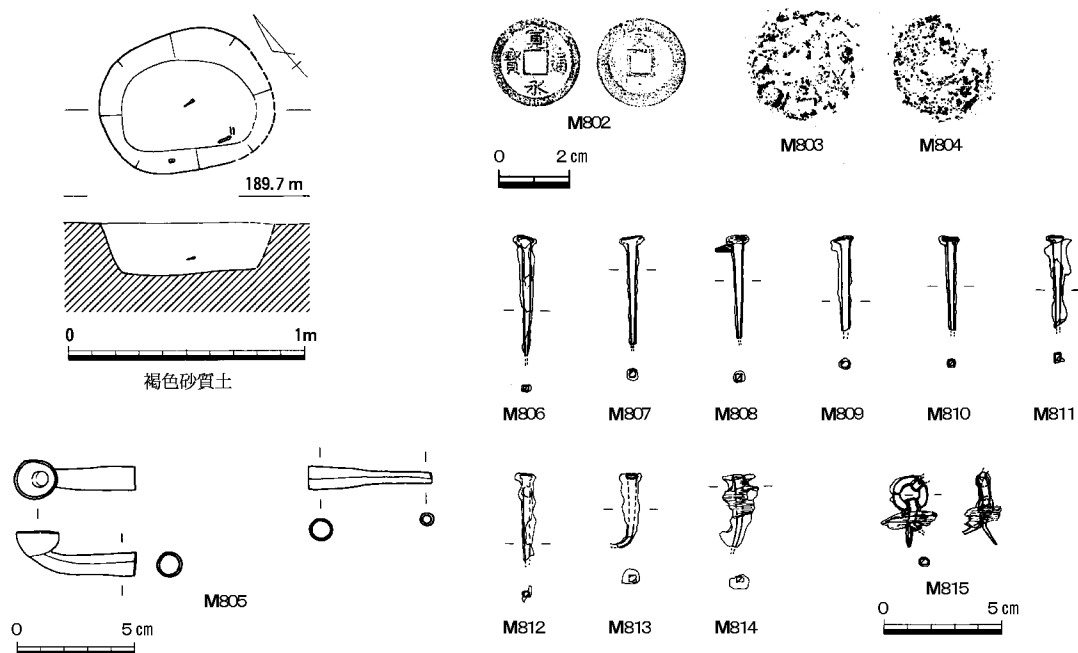
墓87の南から検出された平面楕円形を呈す墓である。規模は1.1×0.87m、深さ66cmを測る。埋土は褐灰色砂質土であった。被葬者の残存状態は悪く、墓壙北部から1骨片を検出するのみであった。遺物は埋土から釘数本、底部付近から銭貨10枚が出土した。銭貨はいずれも寛永通寶で古寛永5枚M792～796、「文」銭4枚M797～800、新寛永M801である。墓87とほぼ同時期であろう。(江見)

第872図 墓88 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2)

墓89 (第794・873図)

墓88の南東から検出された平面楕円形の墓である。規模は径74×58cm、深さ22cmを測る。埋土は褐色砂質土で、遺物は埋土から釘10数本M806～815、南西および南部から銭貨3枚M802～804、中央部から煙管の吸い口M805などが出土している。銭貨は寛永通寶の「文」銭と銭名不明の2枚で、墓87や墓88と近い時期に造墓されたものと思われる。(江見)

第3章 発掘調査の概要



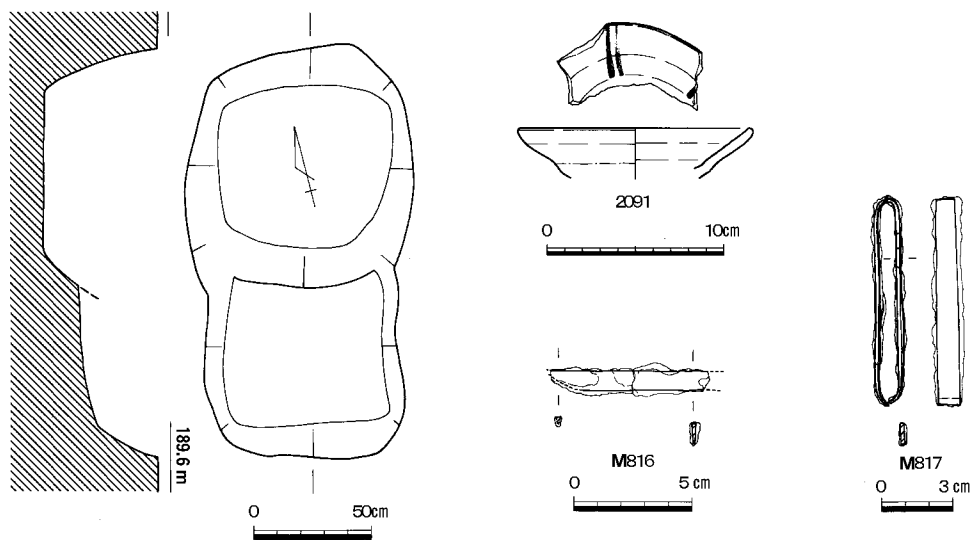
第873図 墓89 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3)

墓90・91 (第794・974図、図版162・171)

墓88の南から検出された平面方形を呈す墓である墓90は一辺約1 m、深さ約50cm、墓91は一辺約90 cm、深さ約30cmを測り、墓90が墓91を切っていた。遺物は墓90から肥前陶磁器の皿片2091、刀子M816、墓91から毛抜きM817が出土している。2091は破片で、副葬されたものとは考えにくい、その年代観は16世紀末～17世紀前半を示す。(江見)

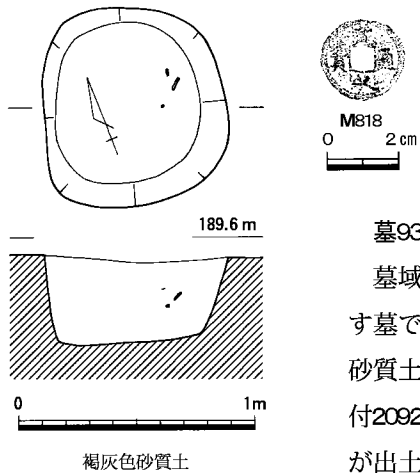
墓92 (第794・875、図版162)

墓91の東から検出された平面不整形円形を呈す墓である。規模は径91×88cm、深さ37cmを測る。埋土



第874図 墓90・91 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

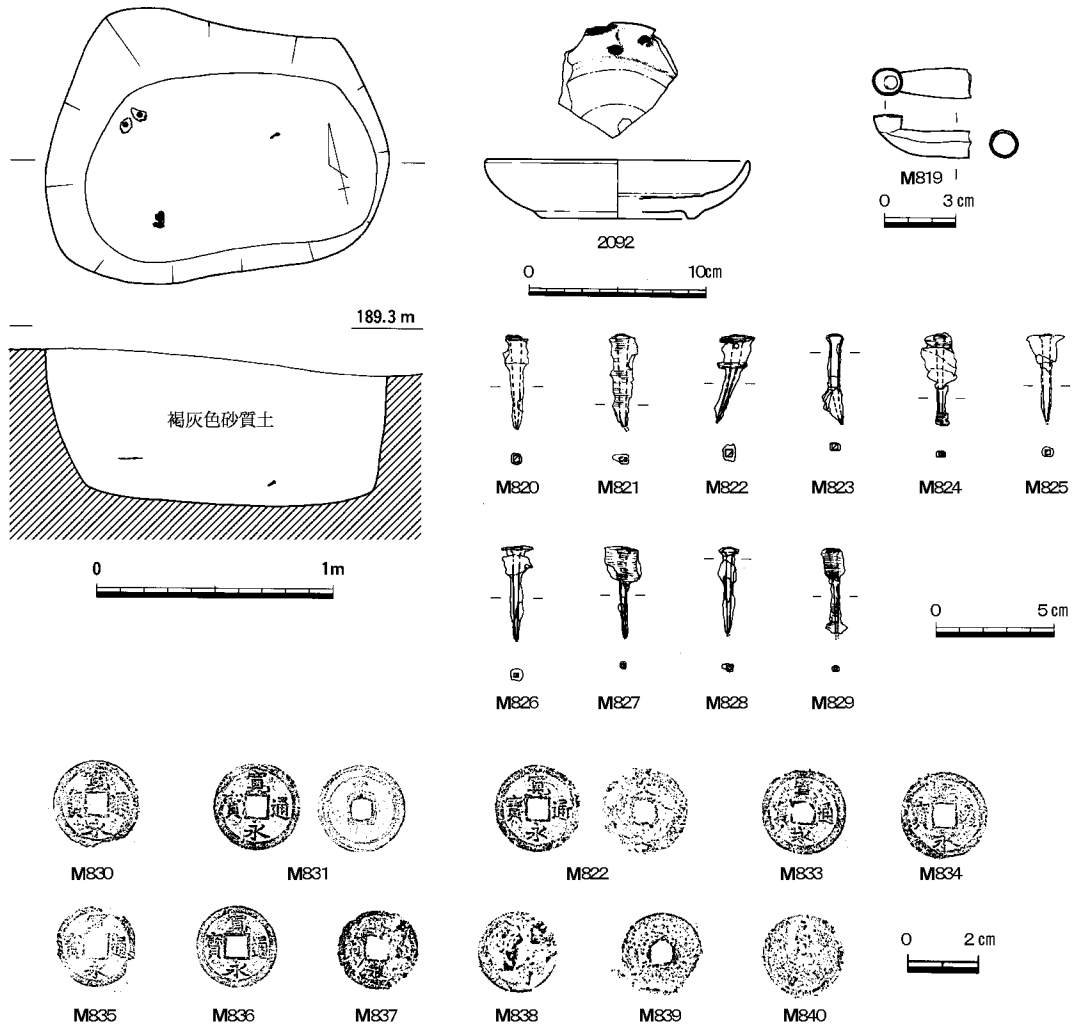
は褐灰色砂質土であった。被葬者の残存状況は悪く、東部北寄りから歯数本を検出するに終わったが、遺物は埋土中からの釘数本をはじめ、東部から毛抜き、銭貨M818などが出土した。M818は新寛永で、18世紀前後に造墓されたものか。(江見)



第875図 墓92 (1/30)  
・出土遺物 (1/2)

墓93 (第794・876図)

墓域2の南12m、墓域3の北部から検出された平面楕円形を呈す墓である。規模は1.45×1.05m、深さ65cmを測る。埋土は褐灰色砂質土であった。遺物は埋土中から釘10数本M820～829、肥前染付2092、中央から煙管M819、北西および南西から銭貨M830～840が出土した。なお、北西の銭貨下からは板片が検出されており、銭貨は木箱に納められていたものと思われる。銭貨および染付から、18世紀代に造墓されたものであろう。(江見)

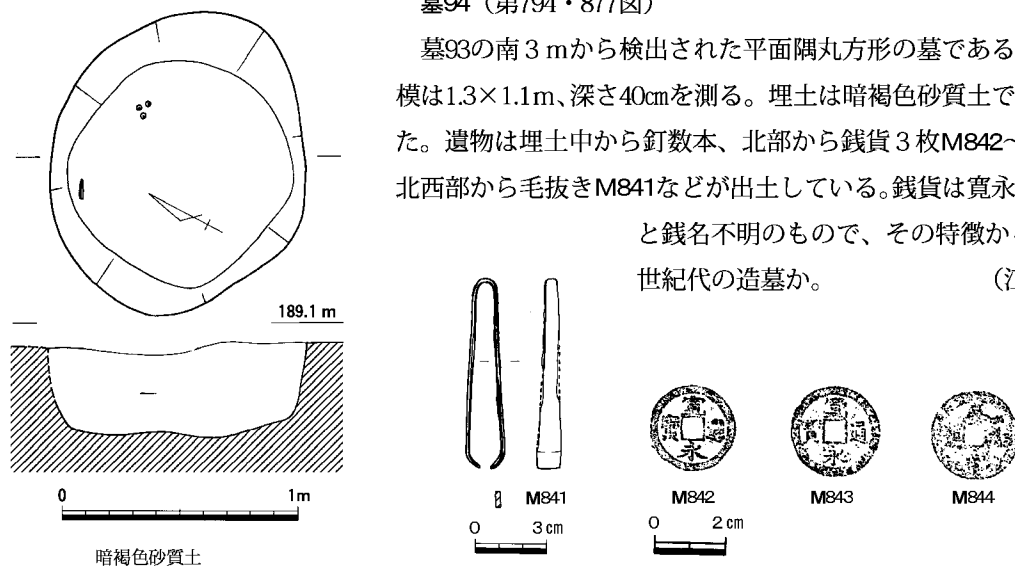


第876図 墓93 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3,1/2)



墓94 (第794・877図)

墓93の南3mから検出された平面隅丸方形の墓である。規模は1.3×1.1m、深さ40cmを測る。埋土は暗褐色砂質土であった。遺物は埋土中から釘数本、北部から銭貨3枚M842~844、北西部から毛抜きM841などが出土している。銭貨は寛永通寶と銭名不明のもので、その特徴から18世紀代の造墓か。(江見)



第877図 墓94 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2)

6 土壇

土壇227 (第793・878図、写真61、図版166)

3 9 08Cg区において検出した土壇で、平面形が長方形を呈する。規模は、長軸が1.72m、短軸は72cmで、深さが17cmを測る。円礫が出土したがまとまりとしては捉えられなかった。

図示したのは、明石産の播鉢2093である。これからみてこの土壇の時期は江戸時代18世紀後半と考えられる。(弘田)

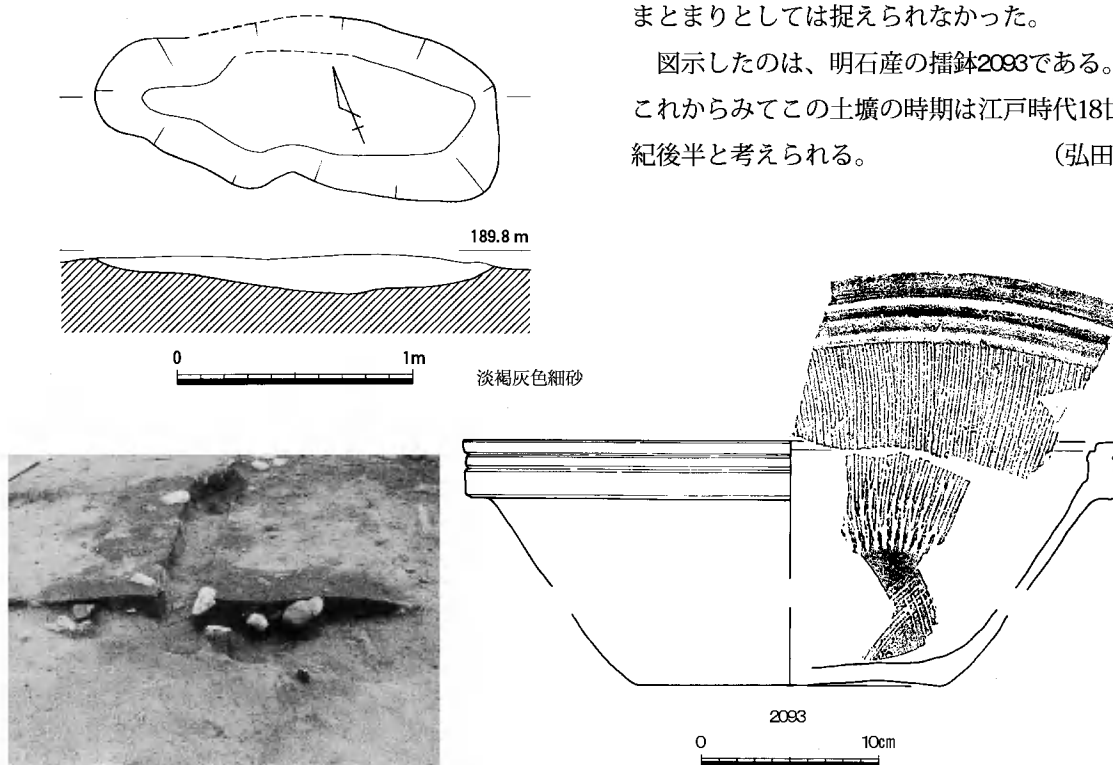


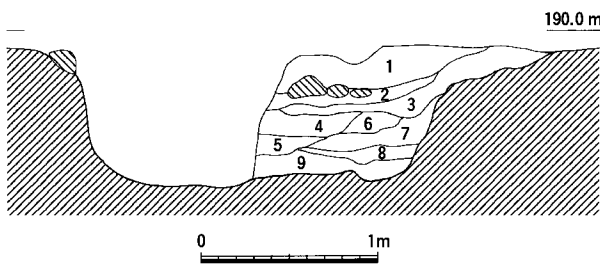
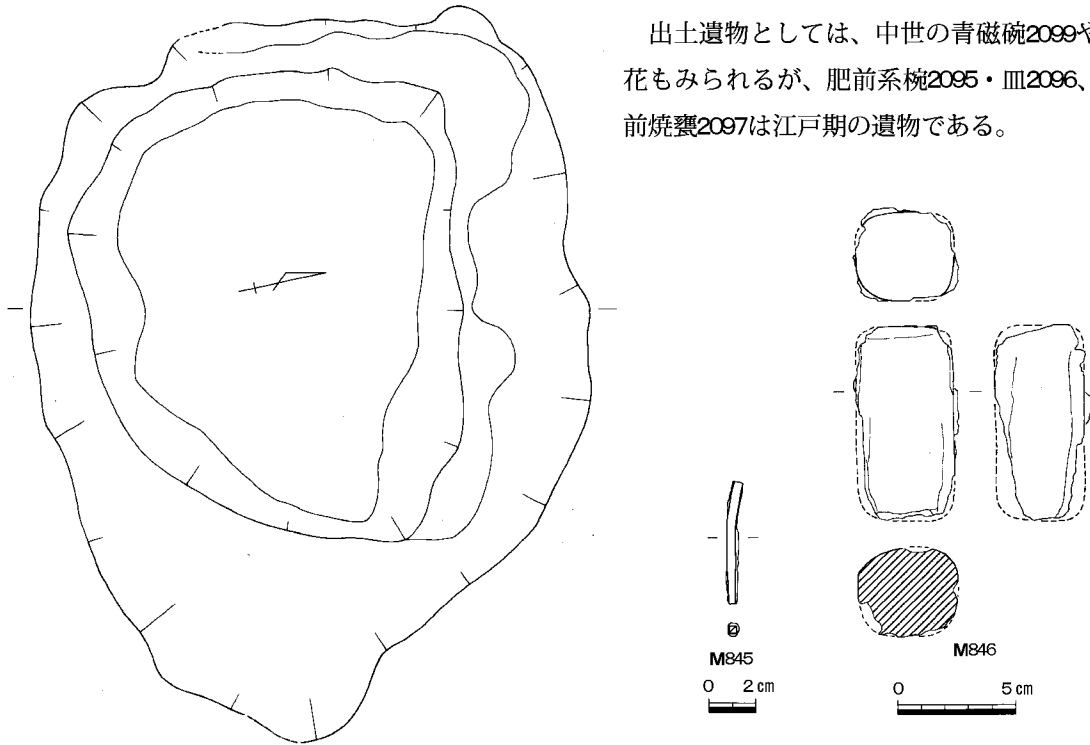
写真61 土壇227 (南から)

第878図 土壇227 (1/30)・出土遺物 (1/3)

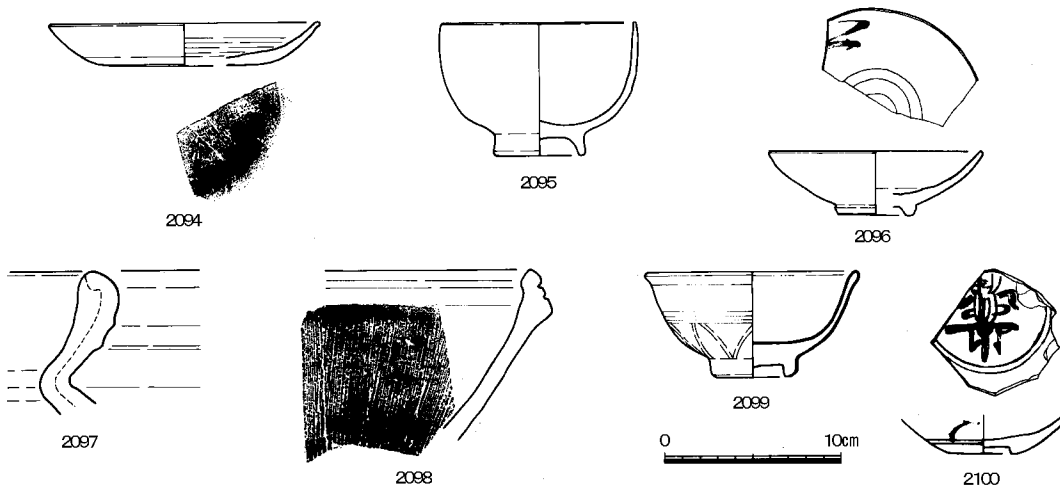
土壌228 (第792・879図、図版164・166・167・171)

4 0 00 Bj区において検出した大型の土壌である。上面は不正形を呈していたが、土壌底の形状から、本来は長方形を呈するとみられる。

出土遺物としては、中世の青磁碗2099や青花もみられるが、肥前系碗2095・皿2096、備前焼甕2097は江戸期の遺物である。



- 1 褐灰色砂質土 (明褐色砂質土を点状に含。礫多含)
- 2 褐灰色粘質土  
(褐色砂質土・白色砂質土を点状に含。1より白色で岩を含)
- 3 暗灰色砂質土 (褐色砂質土を塊状に含。炭少含)
- 4 黄灰色砂質土 (褐色砂質土、Mnを波状に含)
- 5 黄灰色砂質土 (褐色砂質土を点状に少し含。炭少含)
- 6 褐灰色砂質土 (褐色砂質土を塊状に含。炭を点状に含)
- 7 黄灰色砂層 (褐色砂質土を塊状に含。砂層)
- 8 灰色粘質土 (褐色砂質土を点状に少し含。炭斑含)
- 9 灰色粘土 (褐色砂質土を線状に少し含。粘土)



第879図 土壌228 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4)

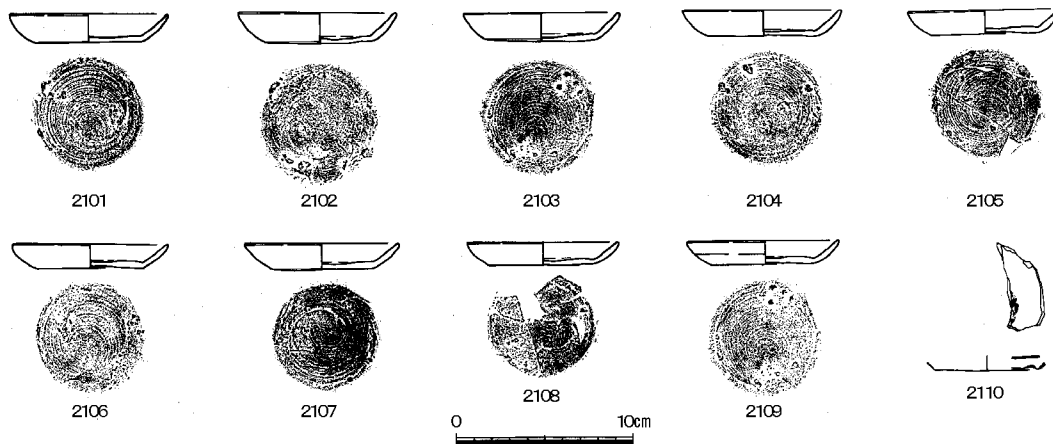
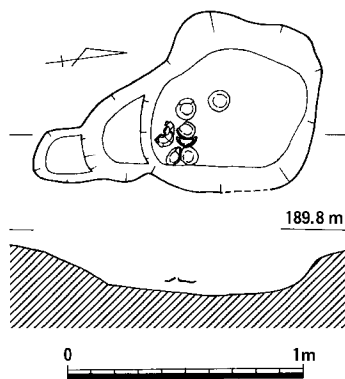
第3章 発掘調査の概要

土壙の時期は、近世であろう。 (弘田)

土壙229 (第図、図版164・167・167)

4 000Ca区に位置する平面形が方形を呈する土壙で、掘立柱建物72北側柱列のほぼ中央に位置した。規模は、長軸1.29m、短軸81cmを測る。

出土した遺物には、土師器皿2101～2109、磁器碗ないしは皿の2110がみられた。皿は静止糸切りで見込みの周縁に浅い溝がめぐる。建物の地鎮に関わる遺構であろうか。この土壙の時期は、江戸時代である。 (弘田)

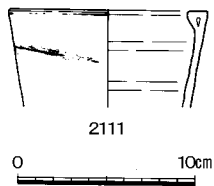
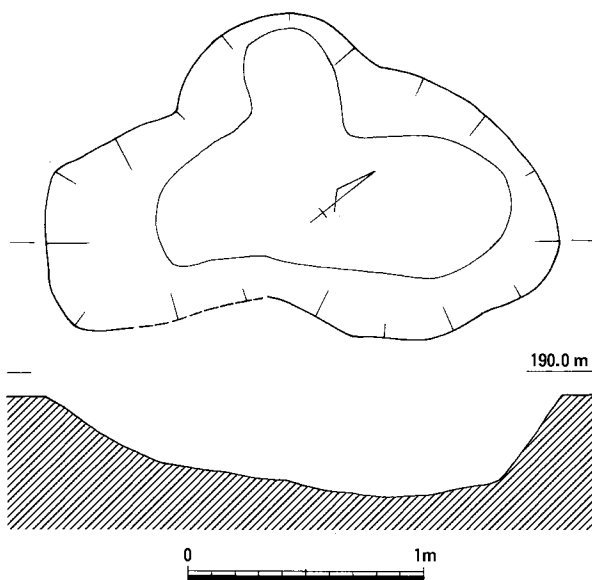


第880図 土壙229 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙230 (第792・881図、図版167)

4 001Cb区に位置する土壙で、平面形は不定形である。規模は、4.3m、2.5mで深さが80cmを測る大型の土壙であった。

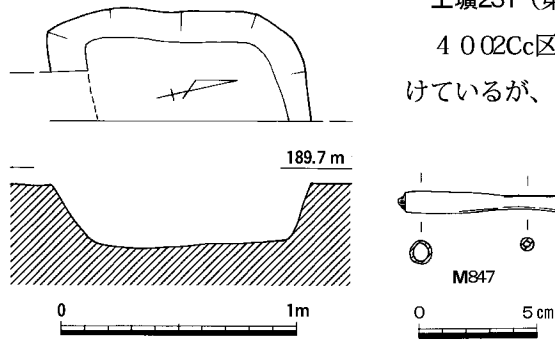
出土したのは火入れ香炉2111で、肥前系の陶体染付である。これからみた土壙の時期は、17世紀中～後半に位置づけられよう。 (弘田)



第881図 土壙230 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壌231 (第792・793・882図、図版165)

4 0 02Cc区に位置する。東側半分は攪乱によって損壊を受けているが、平面形が長方形ないしは矩形を呈していたと思われ、深さは29cmを測る。



第882図 土壌231 (1/30)・出土遺物 (1/3)

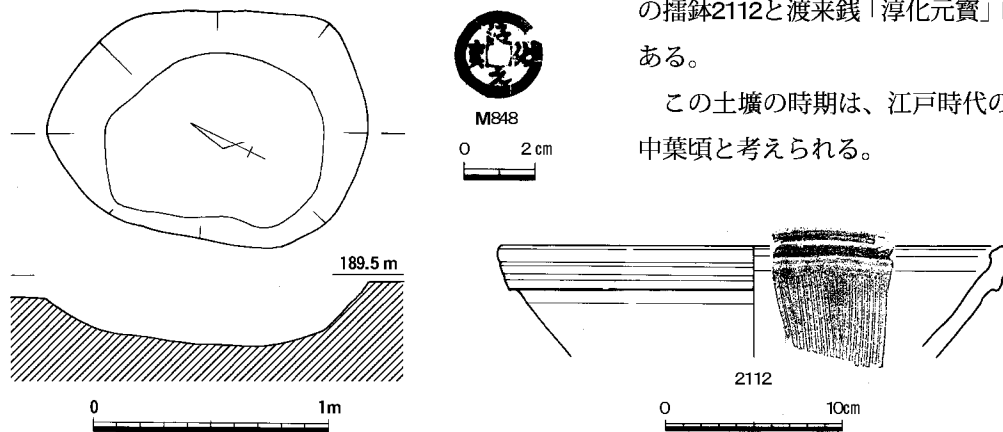
キセルの吸い口部M847が出土しており、墓の可能性もあろう。埋土や周囲の遺構の状況から判断して、この土壌の時期は、江戸時代と考えられる。(弘田)

土壌232 (第792・793・883図)

4 0 02Cd区に位置する土壌である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は、長軸が1.37m、短軸は99cmで、深さが27cmを測る。

出土した遺物には、堺ないしは明石産の播鉢2112と渡来銭「淳化元寶」M848がある。

この土壌の時期は、江戸時代の18世紀中葉頃と考えられる。(弘田)



第883図 土壌232 (1/30)・出土遺物 (1/2,1/3)

土壌233 (第792・793・884図)

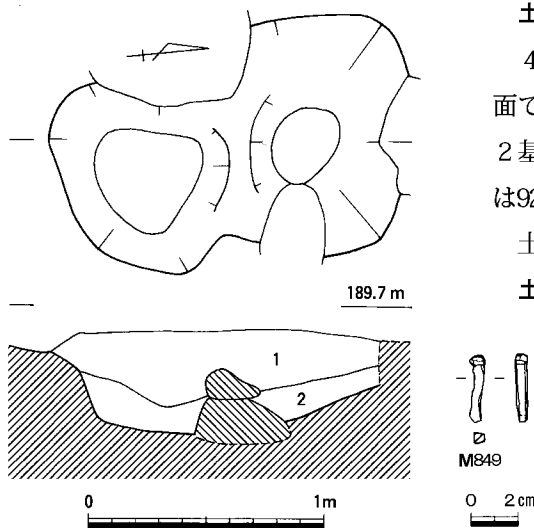
4 0 02Cc区に位置する土壌である。平面形は、検出面では隅丸長方形を呈していたが、掘り下げてゆくと2基の土壌に分かれた。規模は、長軸が1.39m、短軸は92cmで深さが48cmを測る。

土壌の時期は、江戸時代と考えられる。(弘田)

土壌234 (第793・885図)

4 0 01Ce区に位置する土壌である。平面形は不整形円形を呈し、規模は、直径71cmで、深さが6cmを測る。また、掘り込みの周囲が熱影響を受けていたが、出土遺物はみられなかったため機能・用途はわからない。

周辺の遺構からみて、この土壌の時期は、江戸時代と考えられる。(弘田)

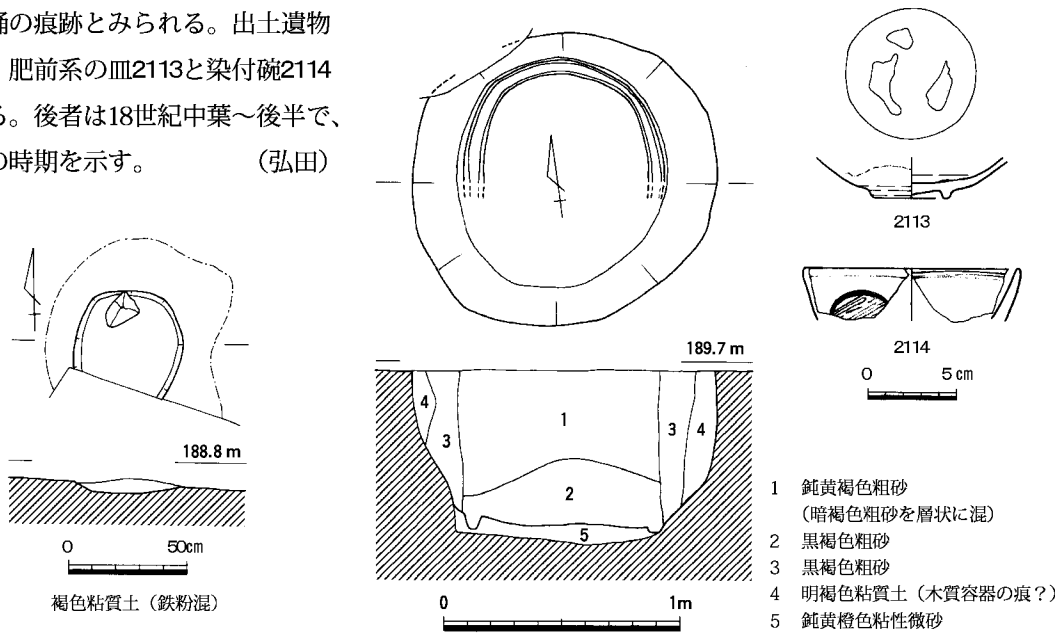


1 暗褐色弱粘質粗砂(粘土塊・炭化物含) 2 黒褐色弱粘性砂  
第884図 土壌233 (1/30)・出土遺物 (1/3)

第3章 発掘調査の概要

土壌235 (第793・886図、図版165)

4 0 01Cg区に位置する土壌である。平面形は円形を呈し、規模は、長軸が1.28m、短軸は1.24mで深さが74cmを測る。第3層は粘土化した桶の痕跡とみられる。出土遺物には、肥前系の皿2113と染付碗2114がある。後者は18世紀中葉～後半で、土壌の時期を示す。(弘田)



第885図 土壌234 (1/30)

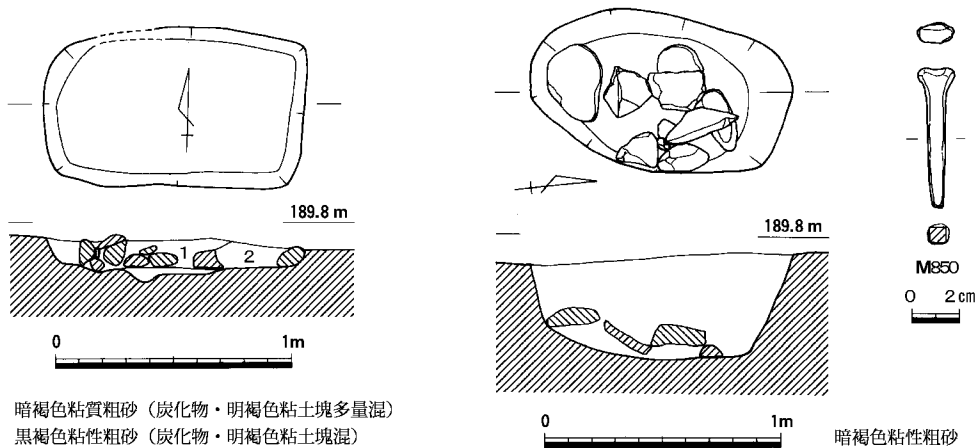
第886図 土壌235 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌236 (第793・887図、図版167)

4 0 02Cg区に位置する土壌である。平面形は長方形を呈し、規模は、長軸が2.2m、短軸は1.34mで深さが36cmを測る。土壌内には、拳大の礫が多くみられた。出土遺物はみられないが、この土壌の時期は、江戸時代と考えられる。(弘田)

土壌237 (第793・888図、図版167)

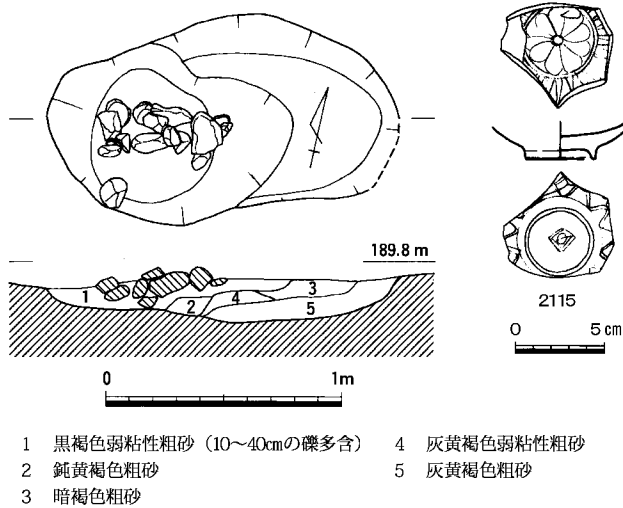
4 0 02Ce区に位置する土壌である。平面形は長方形を呈し、規模は、長軸が1.09m、短軸は67cmで、



- 1 暗褐色粘質粗砂 (炭化物・明褐色粘土塊多量混)
- 2 黒褐色粘性粗砂 (炭化物・明褐色粘土塊混)

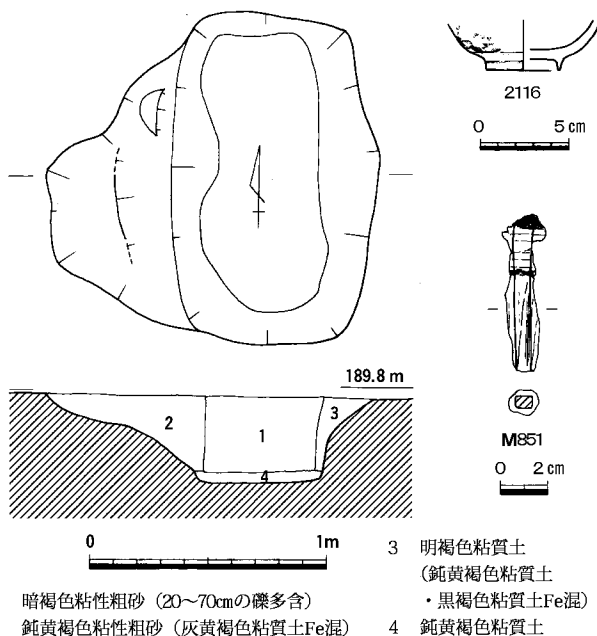
第887図 土壌236 (1/30)

第888図 土壌237 (1/30)・出土遺物 (1/3)



- 1 黒褐色弱粘性粗砂 (10~40cmの礫多含)
- 2 鈍黄褐色粗砂
- 3 暗褐色粗砂
- 4 灰黄褐色弱粘性粗砂
- 5 灰黄褐色粗砂

第889図 土壌238 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 暗褐色粘性粗砂 (20~70cmの礫多含)
- 2 鈍黄褐色粘性粗砂 (灰黄褐色粘質土Fe混)
- 3 明褐色粘質土 (鈍黄褐色粘質土・黒褐色粘質土Fe混)
- 4 鈍黄褐色粘質土

第890図 土壌239 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)

系染付皿2117があり、18世紀後半に位置付けられる。

土壌の時期も、ほぼその頃と考えてよいだろう。

(弘田)

土壌241 (第793・892図)

4 0 01Ch区に位置する土壌である。平面形は方形を呈し、規模は、長軸が1.04m、短軸は1.03mで深さが29cmを測る。埋土中には礫を多く含んでおり、また桶を埋設していた可能性が高い。

この土壌の時期は、江戸時代と考えられる。

(弘田)

土壌242 (第793・893図、図版166)

4 0 02Ch区に位置する土壌である。平面形は方形を呈し、規模は、長軸が95cm、短軸は87cmで、深

深さが44cmを測る。土壌内には扁平な河原石が数個認められた。遺物は、釘M850が1点のみであった。

この土壌の時期は、江戸時代と考えられる。

(弘田)

土壌238 (第793・889図、図版166)

4 0 02Cf区に位置する土壌である。平面形は、楕円形を呈している。切りあった2基の土壌のうち新しい土壌内の規模は、長軸が2.98m、短軸は1.62mで、深さが38cmを測る。

出土遺物には、肥前系の網目碗2115があり、18世紀中ごろと考えている。この土壌の時期もそれに近い時期を考えておきたい。

(弘田)

土壌239 (第793・890図、図版166)

4 0 02Ce区に位置する土壌である。平面形は長方形を呈し、規模は、長軸が2.8m、短軸は90cmで深さが74cmを測る。平面形と土層断面からみて、墓の可能性もある。

肥前系の染付碗2116と釘M851が出土している。2116は、17世紀末~18世紀前半に比定でき、土壌の年代の上限を示す。

(弘田)

土壌240 (第793・891図、図版166)

4 0 02Cg区に位置する土壌である。平面形は長方形を呈し、規模は、長軸が3.64m、短軸は2.08mで、深さが58cmを測る。出土遺物には、肥前

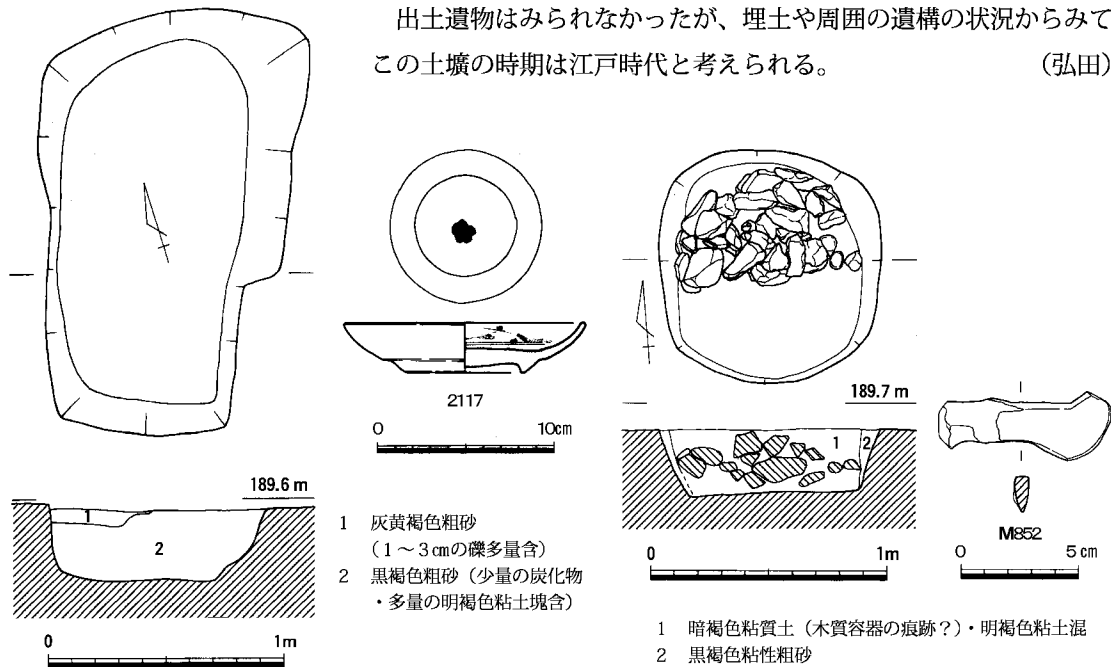
第3章 発掘調査の概要

さが30cmを測る。埋土の状況から、埋桶であろうか。土師器の小皿2118・2119と備前焼灯明皿2120が出土している。土壌の時期は、江戸時代と考えられる。(弘田)

土壌243 (第793・894図、図版165)

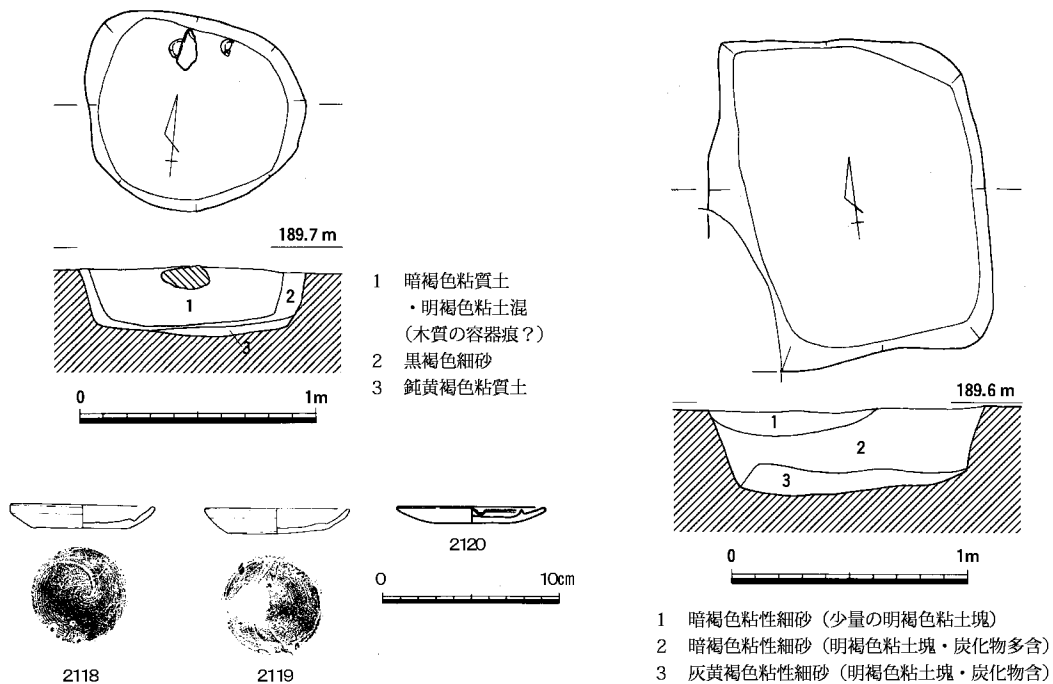
4 0 02Ch区に位置する土壌である。平面形は方形を呈し、規模は、長軸が2.74m、短軸は2.34m、で深さが72cmを測る。

出土遺物はみられなかったが、埋土や周囲の遺構の状況からみて、この土壌の時期は江戸時代と考えられる。(弘田)



第891図 土壌240 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第892図 土壌241 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第893図 土壌242 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第894図 土壌243 (1/30)

土壌244 (第795・895図、図版166)

4 0 04Ca区に位置する土壌である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は、長軸が1.49m、短軸は1.37mで、深さが28cmを測る。出土した遺物には肥前系の陶器皿2121がある。胎土目をもち、17世紀初頭に位置付けられる。

この土壌の時期は、江戸時代と考えられる。 (弘田)

土壌245 (第793・794・896図、図版166)

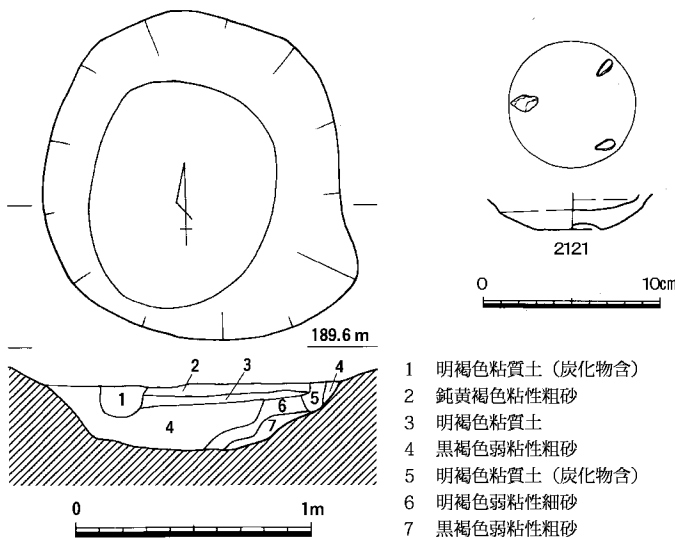
4 0 04Cg区に位置する土壌である。北西隅を別の土壌によって切られるが、平面形は長方形を呈し、軸線が南北方向をとる。規模は、長軸2.92m、短軸は1.58mで、深さが58cmを測る。土師器の小皿2122が出土しているほかは、時期を決定する遺物に欠ける。

この土壌の時期は、江戸時代と考えられる。 (弘田)

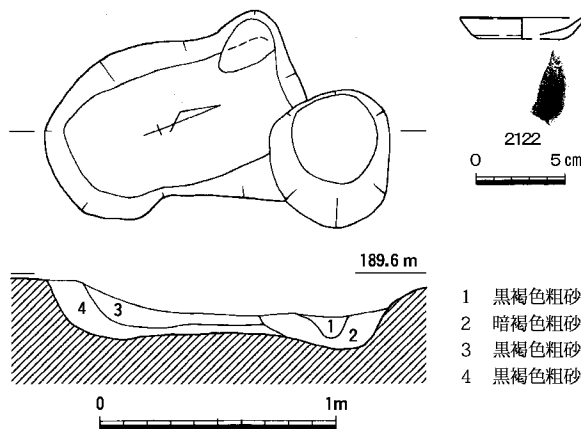
土壌246 (第793・794・897図)

4 0 05Cg区に位置する土壌である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は、長軸が1.3m、短軸は1.19mで、深さが35cmを測る。埋土の2層は人為的に貼られたとみられる粘土層で、水溜などの機能が考えられよう。

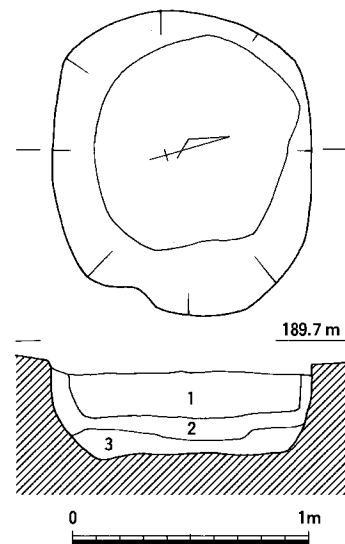
顕著な出土遺物をみないものの、周囲の遺構の状況や埋土から判断してこの土壌の時期は、江戸時代と考えられる。 (弘田)



第895図 土壌244 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第896図 土壌245 (1/30)・出土遺物 (1/4)



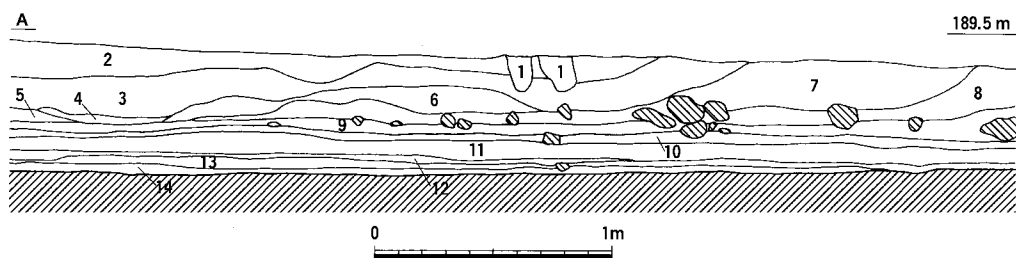
第897図 土壌246 (1/3)



## 7 堀

堀3 (第792~794・898・899図、写真62、図版158・166・168・170・171)

堀1~4のうち、1・2は堀3・4掘削の時点では、すでに埋め立てられていたことは先に述べた。そして、堀3は、江戸時代でも初期の17世紀前葉には、その断面の中位程までを極めて硬く締まった黄色の粘土によって埋め立てられていた。堀は本来、ベースが砂地であったことから空堀とおもわれたが、黄色の粘土層は自然の堆積ではなく、人為的に埋められたものであり、漏水を防止し水を湛えた堀に転換させたものか、あるいは灌漑用の水溜として堀を機能させようとした意図をうかがわせるのである。また、堀3でも、北辺と東辺にこの粘土の層が敷かれていたが、南辺にはみられなかった。この堀3の南辺は字「堀田」に名ごりを留め周囲の水田よりも一段低い水田となっていたが、その埋土中には、江戸時代以降の遺物を含まなかったことから江戸期のごく初期に埋め戻されて水田化していたと考えられる。近世から現代までの遺構の配置・分布状況や土地利用を鑑みても旧居館部の北半



- |                              |                    |
|------------------------------|--------------------|
| 1 鈍黄褐色粘質土                    | 8 暗褐色弱粘性粗砂         |
| 2 鈍黄褐色粘質土 (炭化物・鈍黄橙粘質土を斑状に含)  | 9 鈍黄褐色粘性粗砂         |
| 3 鈍黄褐色弱粘性粗砂 (少量の炭化物・鈍黄粘質土魂含) | 10 鈍黄褐色粘性粗砂 (粘質土混) |
| 4 灰黄褐色粘質土                    | 11 鈍黄褐色弱粘性粗砂       |
| 5 鈍黄褐色粗砂 (暗灰黄色弱粘性細砂とFeを層状に含) | 12 黒褐色弱粘性極細砂       |
| 6 鈍黄褐色粗砂 (Feを層状に含)           | 13 10と同じ (Fe含)     |
| 7 黒褐色弱粘性粗砂                   | 14 褐色細砂と黒褐色弱粘性極細砂混 |

第898図 堀3縦断面 (1/100)

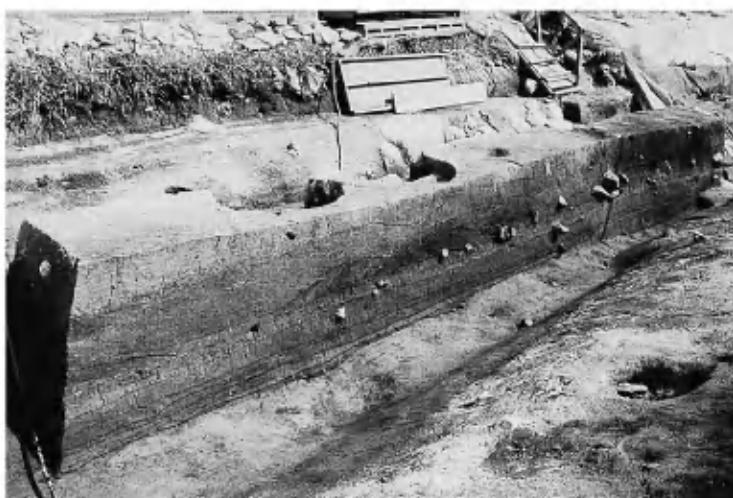


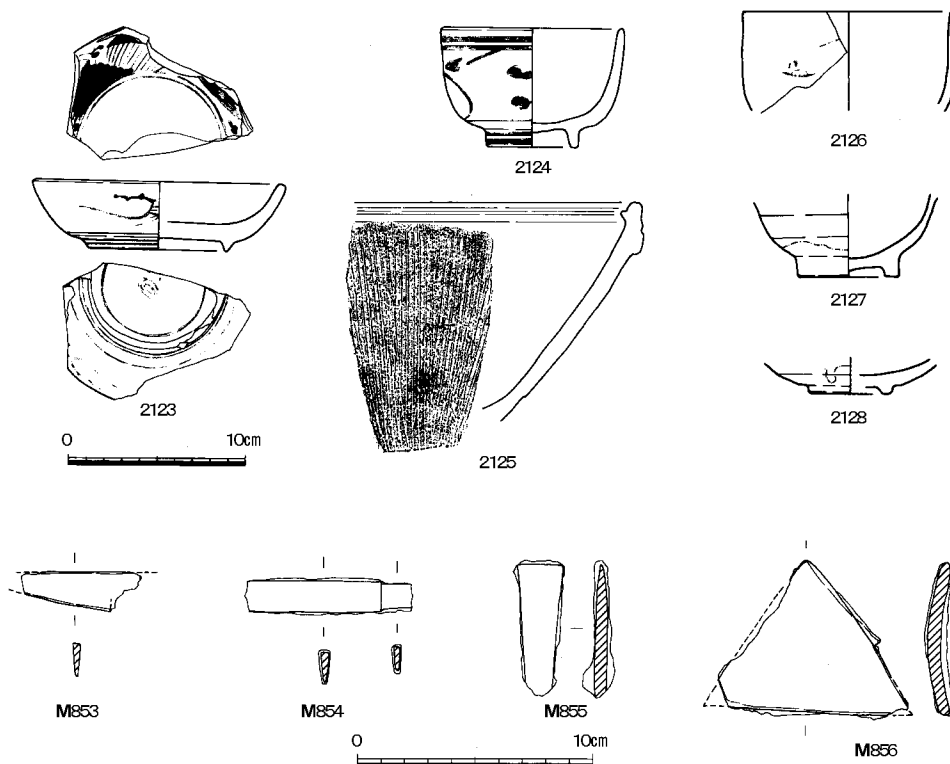
写真62 堀3断面図 (西から)

部に居住域が限定され、それ以外の土地が耕地へと転換していったことをうかがい知ることができるのである。また、江戸幕藩体制下での森氏の美作入封後も、この地に家臣化した有力な人物が存在したことを想起できよう。

堀の出入り口 ところで、第790図に示したとおり、発掘調査前の土地利用状況は、堀3の外側を沿うように町道が敷設されていた。この町道から集落内に入る道が2か所存在したわけであるが、このうちの南側について注目してみたい。第898図と写真62は、ちょうどその部分からすぐ北側の堀の縦断面図および土層断面の写真である。10層位以下は、堀の底に自然に堆積した地層と考えられるが、9層より上の層は、堀の内部を南から北へと埋め立てた状況を示している。先の黄色粘土層（図の第2層、写真の左上の層）も、旧表土層まで上がって終わっている状況がうかがえよう。つまり、17世紀前葉における堀3北・東辺の下半部を埋め戻した段階において、東辺のほぼ中央部は完全に旧表土まで埋め立てられた「土橋部」となっていたとみられるのである。この入口部に接して住まわれていたお宅「門脇氏」は、伝聞であるがそのお名前「カドハキ」が門に由来するということであり、推定した「土橋部」とも関連づけられるのである。

出土遺物 肥前系の染付2123は18世紀中葉から後半、陶胎染付2124は、18世紀前半である。このほかに、堺か明石産の播鉢2125や肥前系の2126・2127などは黄色粘土層の上部より出土しており、その年代は18世紀代の範疇にあるとみられる。肥前系の皿2128は、黄色粘土層より出土しており17世紀前半に位置付けられる。

鉄器類では、刀子M583・584、鉄鎌M855、三角形の鉄片M856がみられた。中世にさかのぼる可能性のあるものであるが、いずれも黄色粘土層より上での出土であり、ここに掲載した。（弘田）



第899図 堀3出土遺物（1/4,1/3）

## 8 溝

### 溝52 (第792・900図)

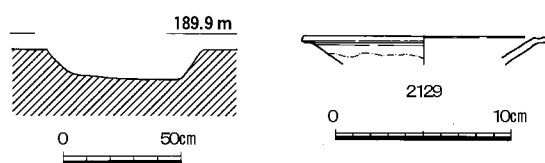
4 0 01Ca区において検出した東西方向の溝で、掘立柱建物72の南側柱列と重なり合う位置にあるが、切り合いからこの溝の方が古いとみられる。出土遺物には、肥前系陶器の折縁皿2129がある。

時期は、江戸時代の17世紀前半である。 (弘田)

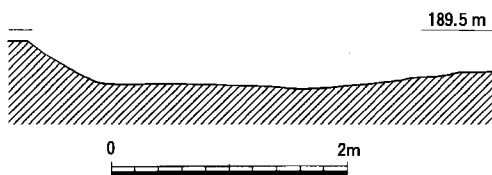
### 溝53 (第793・901図、図版173・170)

4 0 05Ch区あたりにおいて検出した長さ10mにおよぶ溝である。堀3の内側を接するように存在するが堀に開通はしていない。また、この溝の南は近世の墓域となっており溝はそこで終わっていた。

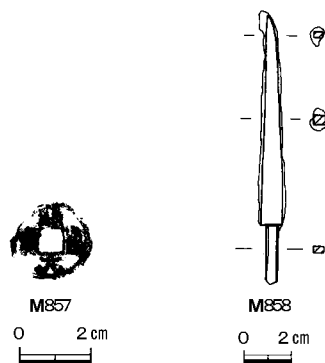
大型の溝状土塋とも呼称すべきであろうが、用途は不明である。出土遺物には、開元通寶M857、鉄鏃M858があるが、溝の時期自体は、江戸時代と考えている。 (弘田)



第900図 溝52 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第901図 溝53 (1/60)・出土遺物 (1/2,1/3)

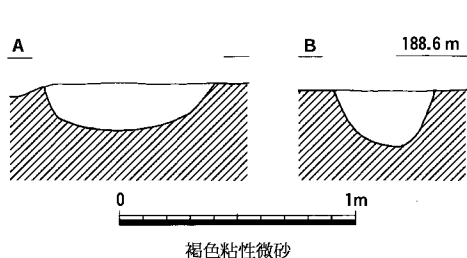


### 溝54 (第796・902図)

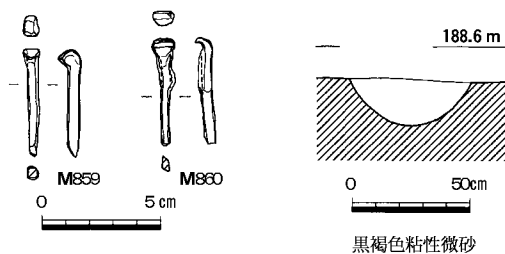
4 1 01Bg・Bj区にかけて検出した溝である。堀3を切って南辺北側に沿って流れていたことから、堀3よりは後出する。現代の水田地割とも一致していたが検出面からみて、時期は江戸時代以降と考えられる。 (弘田)

### 溝55 (第796・903図)

4 1 00~02Bj区において検出した溝で、南北方向に流れて先の溝54に合流する。幅は55~80cm、深さは10cm程度を測る。



第902図 溝54 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第903図 溝55 (1/30)

近世の水田水路と考えている。

(弘田)

溝56 (第796・904図)

4 1 02Bh区で検出した。堀3に合流する溝であるが、堀3がほぼ埋没した上面に流入したとみられ、時期は後出すると考えられる。この南は削平を受けてか検出できていないが、中世の溝19～21と接続していた可能性もある。時期は江戸時代と考えられる。

(弘田)

溝57 (第796・905図)

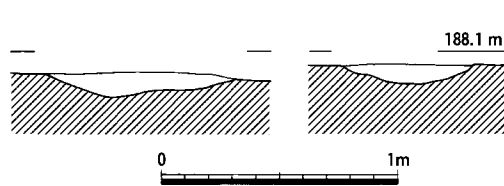
4 0 07Bf～4 1 02Bg区にかけて検出した南北方向の溝である。この溝を境に西側は地形が一段低く、中世以降の水田が認められた。

時期は、江戸時代と考えられる。

(弘田)

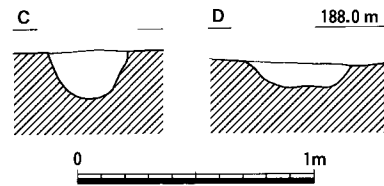
溝58 (第796・906図)

4 1 02Bg区に位置する。中世の建物群よりは後出すると考えられる溝19～21に方向が一致するが、



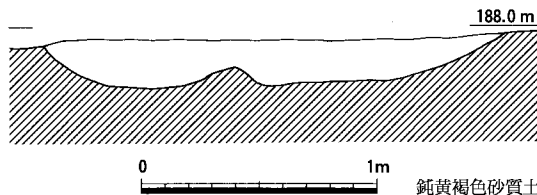
暗灰黄色細砂

第904図 溝56 (1/30)



褐灰色粘性砂質土

第905図 溝57 (1/30)



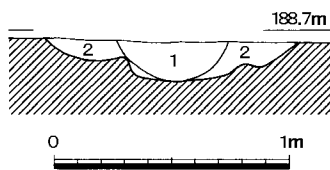
鈍黄褐色砂質土

第906図 溝58 (1/30)

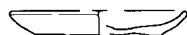
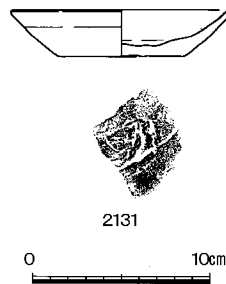
この両者の間では溝は検出できていない。また、堀3埋没過程の最終段階における窪みに合流する。

遺物は出土していないが、この溝の時期は、江戸時代以降で耕作に伴う水路と考えられる。

(弘田)



1 灰黄褐色砂質土  
2 褐灰色砂質土



2130

第907図 溝59 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝59 (第796・907図)

遺跡の中央部西端側の4 0 09Ca～4 1 01Caに位置する。

長さ13m、幅60～200cmであり、検出面からの深さは18cmを測る。ほぼ中央部が幅広になっており、その部分から南側は2層に分層可能で、北側は第1層のみである。第1層は幅50cmほどの溝が長さ13m続く。また、幅広の部分には直径50cmほどの礫があった。礫は2層ともに入り込んでいた。

(上村)

## 9 柱穴

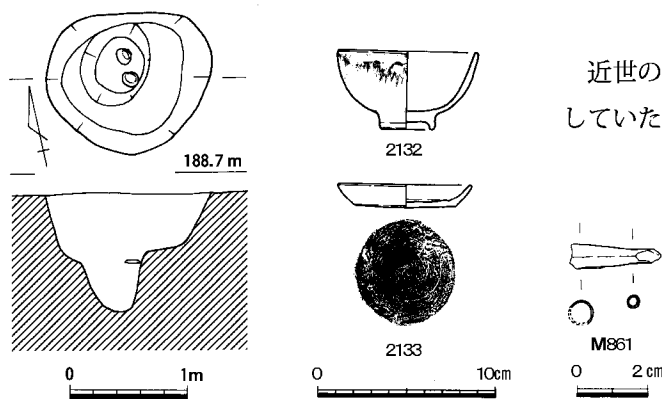
柱穴19 (第793・794・908図、図版168)

4 0 04Ch区にあり、堀3の上面において検出した。平面形が長円形を呈し、規模は長軸が70cm、短軸は60cm、深さが50cm程で、2段に掘り込まれていた。出土遺物としては、肥前系磁器碗2132や土師器皿2133、キセルの吸口部M861がある。17世紀末から18世紀前半と考えられる。 (弘田)

その他の柱穴出土遺物 (第792~795・909図、  
図版168・173)

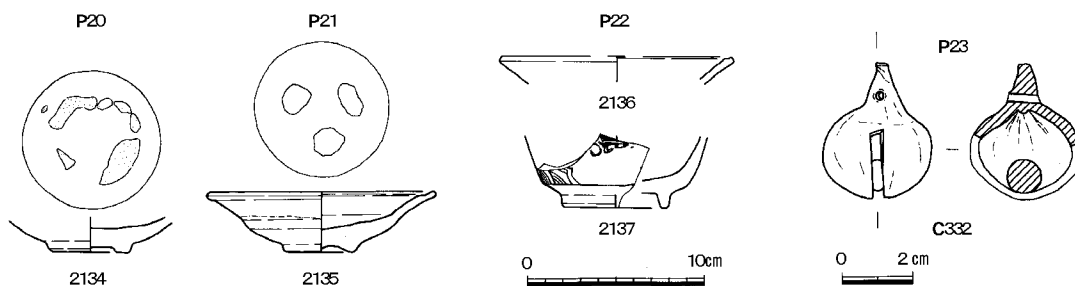
近世の柱穴は、江戸前半まで依然として機能していた堀3によって囲われた空間の北半部に集中してみられた。これらは本来は、掘立柱建物を構成していたと思われるもので、建物群存続の一時期を示すと見なしてよい。

2134・2135は砂目積みの肥前系陶器皿である。同じく陶器皿の2136や肥前系染付碗2137も17世紀代と考えられる。C332は土鈴である。 (弘田)



暗褐色粘土質 (明褐色粘土混)

第908図 柱穴19 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)



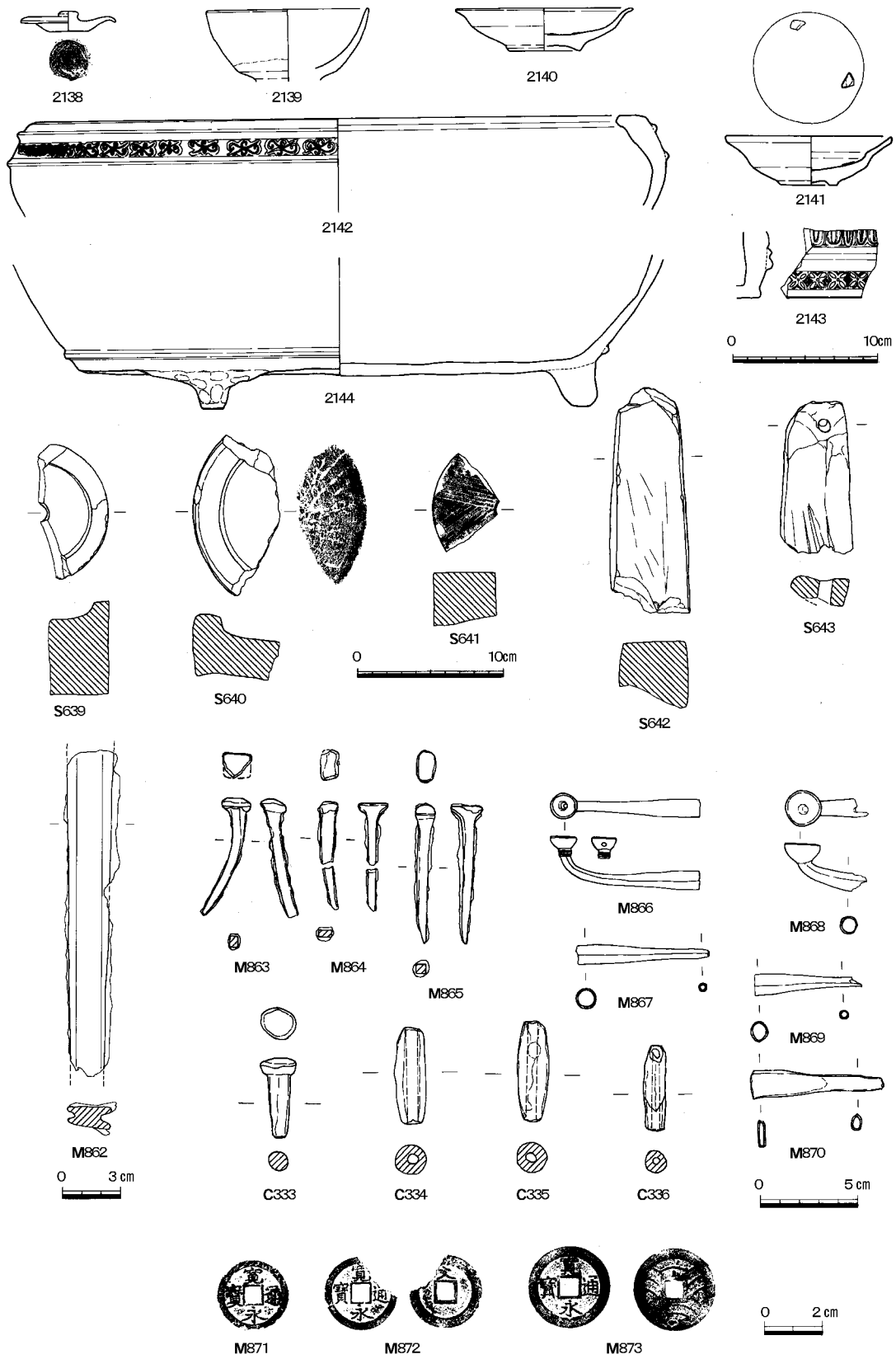
第909図 柱穴出土遺物 (1/4,1/3)

## 10 遺構に伴わない遺物 (第910~913図、図版169・173・170・171)

先に述べたとおり、遺構に伴わない遺物についても、堀3によって囲われた部分のうちの北半部、掘立柱建物や土塙群が集中する箇所によくみられる。宅地移転の際に掘削された穴に投棄された近世から近代にかけての遺物も含めるとその量は多く、ここに図示したのは全体からみればごく一部にすぎない。

第910図に示した遺物は、中世の遺構に伴わない遺物の地区割図 (第763図) におけるA地区からの出土である。

土器では、肥前系の袋物の蓋2138、陶器碗2139、皿2140・2141と瓦質土器の火鉢2142~2143がある。



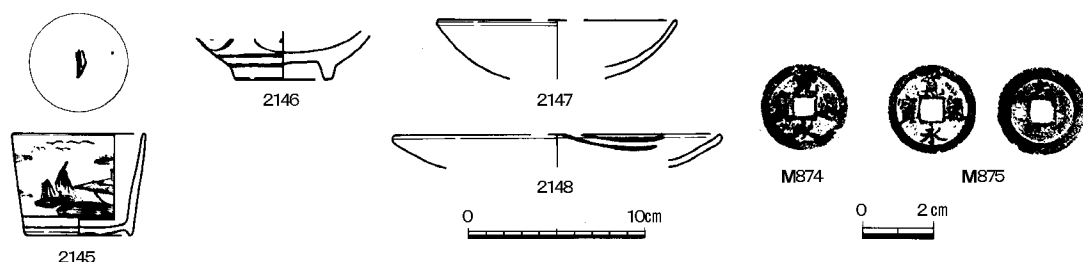
第910図 遺構に伴わない遺物① (1/4, 1/3, 1/2)

第3章 発掘調査の概要

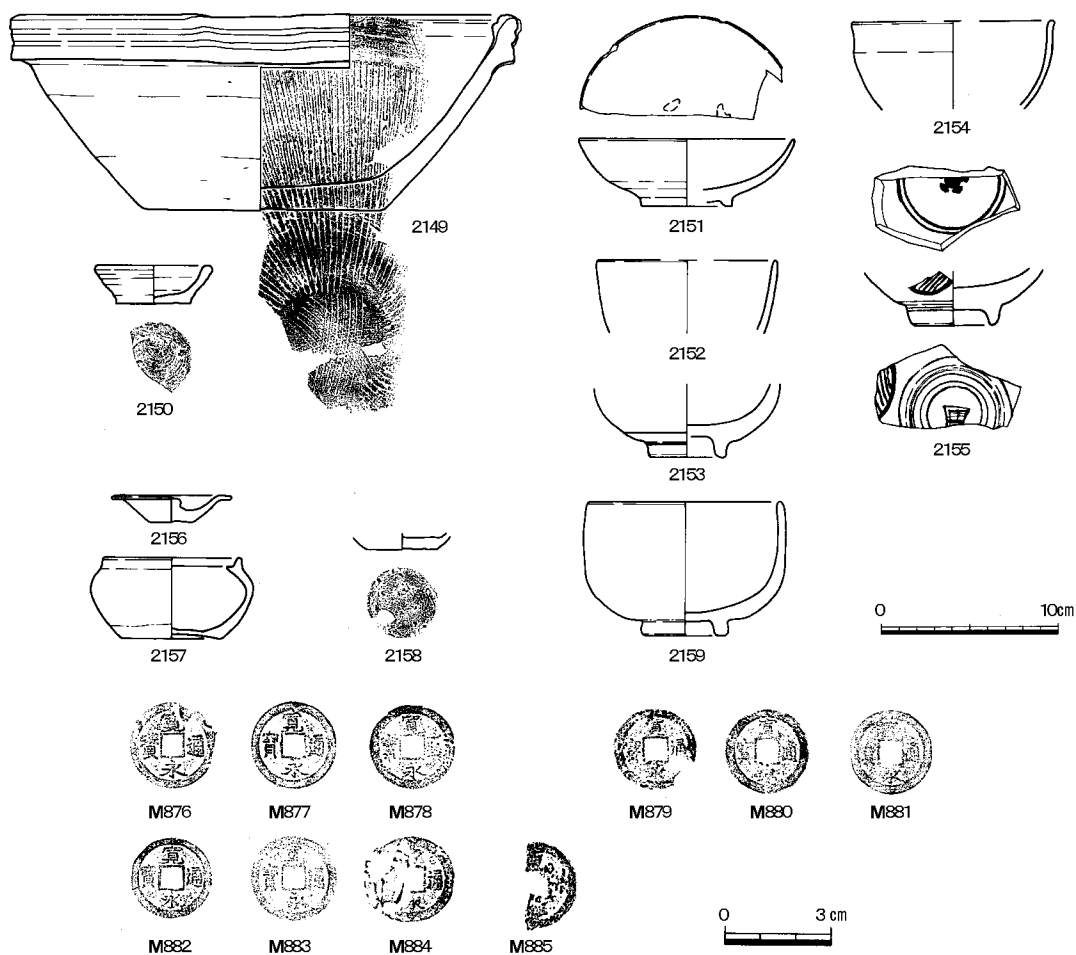
前者では、胎土目の皿2141が最も古くて17世紀の前葉に位置付けられ、そのほかも、17世紀代の範疇にある。後者の火鉢は、唐草や花文のスタンプを押捺しており、中世にさかのぼる可能性がある。

石製品では、石臼にS639~641が、砥石では、荒砥S642、携行用の仕上げ砥S643があるが、中世から近世にかけてと位置付けておく。銭貨はいずれも寛永通寶で、古寛永のM871、新寛永M872、四文波銭のM873がみられる。そのほかにも鉄釘M863~865、キセルM886~870や釘状土製品C333、土錘C334~336などがある。

第911図は、先の第763図に示したB地区出土の遺物である。2148は肥前系もしくは織部の皿で、16



第911図 遺構に伴わない遺物② (1/4,1/2)



第912図 遺構に伴わない遺物③ (1/4,1/2,1/3)

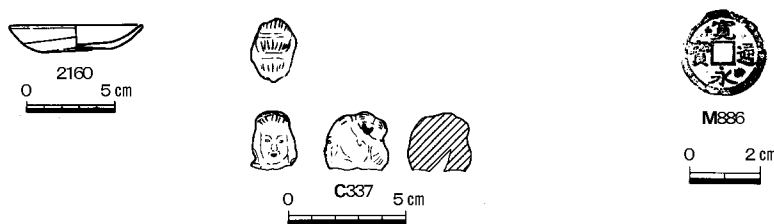
世紀末～17世紀初頭に、肥前系碗で陶胎染付2146や皿は17世紀後半～18世紀前半に、肥前系の染付そば猪口2145は幕末期に、それぞれ位置付けられる。

銭貨では、新寛永M874、「文」銭M875がみられる。

第912図は、同じくC地区の遺物である。2149は、堺産の播鉢で18世紀後半とみられる。2150は、備前焼の小皿である。肥前系の陶磁器類では、胎土目の皿2151が最も古くて17世紀前葉に、陶胎染付2153は、17世紀末から18世紀中葉に、染付碗2155は、17世紀後半に位置付けられる。袋物の2156・2157は、関西系であろうか18～19世紀代であろう。2158は、陶器の底部片であるが、産地は不明である。2159も山陰産の可能性はある。

寛永通寶M876～885では、M876のみが古寛永で、墓は全て新寛永である。

その他の地点からの遺物の出土はごく稀であり、近世の早い段階において水田等の耕地へと転換していったことがうかがえる。備前焼の皿2160や口と髪に赤く彩色を施した伊万里焼の人形C337(18世紀前半)、古寛永のM886はそうした数少ない遺物である。(弘田)



第913図 遺構に伴わない遺物④ (1/4,1/3,1/2)





岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 192

久田堀ノ内遺跡  
苦田ダム建設に伴う発掘調査

3

(第2分冊)

平成17年3月18日 印刷

平成17年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行 国土交通省苦田ダム工事事務所  
岡山県苦田郡鏡野町久田下原1592-4

岡山県教育委員会  
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷 株式会社 中野コロタイプ  
岡山県岡山市玉柏390

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 192

# 久田堀ノ内遺跡

苫田ダム建設に伴う発掘調査

3

(第3分冊)

2005

国土交通省苫田ダム工事事務所  
岡山県教育委員会



# 第3分冊目次

## 第4章 まとめ

第1節 縄文時代の遺構について .....	525
第2節 縄文後期の土器をめぐって .....	527
第3節 縄文晩期の土器について .....	531
第4節 縄文時代の石器について .....	537
第5節 弥生土器について .....	543
第6節 弥生時代の水田について .....	551
第7節 中世の遺構と遺物について .....	555

## 自然科学的分野の研究

1 久田堀ノ内遺跡出土土器の胎土分析 岡山理科大学自然科学研究所 白石 純 .....	575
2 久田堀ノ内遺跡における植物珪酸体分析 (株)パリノ・サーヴェイ .....	581
3 久田堀ノ内遺跡における花粉分析 環境考古研究会 .....	590
4 久田原・久田堀ノ内遺跡出土和鏡の付着物分析 (財)元興寺文化財研究所 .....	593

遺構一覧表

遺物観察表

掲載遺構新旧対照表

写真図版

報告書抄録

# 目次

第914図 深鉢の分類① (1/10) ……………	532	第933図 備前焼などの変遷 (1/6・大甕 1/12) ……	558
第915図 深鉢の分類② (1/10) ……………	533	第934図 貿易陶磁器類の変遷 (1/8) ……………	560
第916図 浅鉢の分類 (1/10) ……………	535	第935図 瓦質土器鍋・釜類口縁部の分類 ……………	561
第917図 石鍬形態分類……………	538	第936図 居館と屋敷地の設定 (1/2,000)……………	562
第918図 石鍬時期別長／幅分布……………	538	第937図 屋敷地 3～6 の遺構配置 (1/900) ……………	564
第919図 石鍬形態分類……………	539	第938図 掘立柱建物の平面形態分類……………	567
第920図 石鍬時期別長／幅・長／重分布 ……………	540	第939図 鍛冶関連遺構群 (1/300) ……………	569
第921図 津山盆地における広口長頸壺と甕の型式分類 (中期後葉) ……………	544	第940図 遺物実測図補遺 (1/4) ……………	572
第922図 久田堀ノ内遺跡及び周辺遺跡の弥生土器編年 (久田堀ノ内 4・5 期) (S = 1/8) ……………	545	第941図 久田堀ノ内遺跡出土縄文晩期土器の胎土比較 (K - C a 散布図)……………	576
第923図 久田堀ノ内遺跡弥生土器編年 (久田堀ノ内 6 期) (S = 1/8) ……………	547	第942図 久田堀ノ内遺跡出土縄文晩期土器の胎土比較 (Z r - S r 散布図) ……………	576
第924図 津山盆地の土器様相 (弥生時代中期末) (S = 1/12) ……………	548	第943図 久田堀ノ内遺跡出土弥生中期の在地・搬入品土 器の胎土比較(K - C a 散布図) ……………	579
第925図 鳥取県青谷上寺地遺跡における類例 (弥生時代中期後葉) (S = 1/12) ……………	548	第944図 久田堀ノ内遺跡出土弥生中期の在地・搬入品土 器の胎土比較(Z r - S r 散布図) ……………	577
第926図 土器様式の広がり (弥生時代中期後葉) ……	549	第945図 資料採取地点の位置……………	579
第927図 岡山県内発見の主な水田 (1/2,000)……………	552	第946図 各地点の土層断面及び資料採取層位……………	580
第928図 土師器杯類の法量分布……………	553	第947図 植物珪酸体群集の層位分布……………	583
第929図 土師器杯・皿の遺構別法量分類① ……………	554	第948図 植物珪酸体含量の層位分布……………	583
第930図 土師器杯・皿の遺構別法量分類② ……………	555	第949図 No. 1 和鏡の紙状繊維の F T - I R スペクトル……………	594
第931図 土師器杯・皿類の編年案 (1/6) ……………	556	第950図 No. 2 和鏡の紙状繊維の F T - I R スペクトル……………	594
第932図 瀬戸・美濃焼の変遷 (1/6) ……………	557		

## 表目次

表5 久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡縄文後期土器の消長 .....	529	表11 編年対照表 .....	545
表6 石器組成表 .....	537	表12 岡山県内水田の面積比率 .....	552
表7 石鏃形態別出土数 .....	538	表13 青磁器種・地区別一覧 .....	559
表8 石鏃時期別長 (cm)・幅 (cm)・厚さ (cm) ・重量 (g) 平均値 .....	538	表14 建物の規模 .....	566
表9 石鏃形態別出土数 .....	539	表15 久田堀ノ内遺跡出土土器の分析一覧表 (%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm .....	575
表10 石鏃時期別長 (cm)・幅 (cm)・厚さ (cm) ・重量 (g) 平均値 .....	539	表16 久田堀ノ内遺跡における花粉分析結果 .....	582
		表17 植物珪酸体分析結果 .....	587

## 写真目次

写真63 植物珪酸体	写真67 No.1 和鏡
写真64 久田堀ノ内遺跡の花粉・孢子	写真68 No.2 和鏡の鏡面付着繊維 (1)
写真65 No.1 和鏡の分析箇所	写真69 No.2 和鏡の鏡面付着繊維 (2)
写真66 No.1 和鏡の鏡背付着物	

## 図版目次

縄文時代	2 火処1 (南から)
図版1 1 袋状土壌1 (東から)	3 火処33 (東から)
2 袋状土壌2 (北から)	図版5 1 河道1最上流部 (北から)
3 土壌1 (西から)	2 河道1断面 (西から)
図版2 1 土壌2 (西から)	2 石器埋納坑 (北から)
2 土壌39 (北東から)	図版6 袋状土壌・土壌出土遺物①
3 土壌43 (南東から)	図版7 土壌出土遺物②
図版3 1 土器溜まり2-A (東から)	図版8 土器溜まり出土遺物①
2 土器溜まり2-D注口土器出土状況 (東から)	図版9 土器溜まり出土遺物②
3 土器溜まり3 (東から)	図版10 土器溜まり出土遺物③
図版4 1 土器溜まり3石器出土状況 (東から)	図版11 土器溜まり出土遺物④
	図版12 土器溜まり出土遺物⑤
	図版13 土器溜まり出土遺物⑥

- 図版14 土器溜まり出土遺物⑦、窪地出土遺物①
- 図版15 窪地出土遺物②、河道1出土遺物①
- 図版16 河道1出土遺物②
- 図版17 河道1出土遺物③
- 図版18 河道2出土遺物①
- 図版19 河道2出土遺物②、河道3出土遺物①
- 図版20 河道3出土遺物②
- 図版21 河道4・5出土遺物、遺構に伴わない遺物①
- 図版22 遺構に伴わない遺物②
- 図版23 遺構に伴わない遺物③
- 図版24 遺構に伴わない遺物④
- 図版25 遺構に伴わない遺物⑤
- 図版26 遺構に伴わない遺物⑥
- 図版27 遺構に伴わない遺物⑦
- 図版28 袋状土壌・土壌・火処・溝  
・土器溜まり出土石器①
- 図版29 土器溜まり出土石器②
- 図版30 土器溜まり出土石器③
- 図版31 土器溜まり出土石器④
- 図版32 土器溜まり出土石器⑤
- 図版33 土器溜まり出土石器⑥
- 図版34 土器溜まり出土石器⑦・石製品
- 図版35 土器溜まり出土石器⑧、窪地出土石器①
- 図版36 窪地出土石器②、河道出土石器①
- 図版37 河道出土石器②
- 図版38 河道出土石器③
- 図版39 河道出土石器④・石製品
- 図版40 遺構に伴わない石器①
- 図版41 遺構に伴わない石器②
- 図版42 遺構に伴わない石器③
- 図版43 遺構に伴わない石器④・石製品
- 図版44 遺構に伴わない石器⑤
- 図版45 遺構に伴わない石器⑥
- 図版46 遺構に伴わない石器⑦
- 図版47 出土土製品①
- 図版48 出土土製品②
- 弥生時代
- 図版49 1 竪穴住居1完掘状況(西から)
- 2 竪穴住居2床面検出状況(南から)
- 3 竪穴住居2完掘状況(南西から)
- 図版50 1 竪穴住居2(上空から)
- 2 竪穴住居3・4(南から)
- 図版51 1 竪穴住居3調査風景(南西から)
- 2 竪穴住居3完掘状況(南から)
- 3 竪穴住居3中央穴土器出土状況(南から)
- 図版52 1 竪穴住居4(東から)
- 2 竪穴住居4土器出土状況(南から)
- 3 竪穴住居4完掘状況(北から)
- 図版53 1 竪穴住居5床面検出状況(南から)
- 2 竪穴住居5(東から)
- 3 竪穴住居5土器出土状況(南東から)
- 図版54 1 竪穴住居5土器出土状況(南から)
- 2 竪穴住居6完掘状況(東から)
- 3 竪穴住居7完掘状況(西から)
- 図版55 1 竪穴住居5、掘立柱建物1(東から)
- 2 竪穴住居9～12溝13・14、河道7(上空から)
- 図版56 1 竪穴住居9～12溝13・14、  
河道7中流全景(北から)
- 2 竪穴住居9～12溝13・14、  
河道7中流全景(北東から)
- 3 竪穴住居9床面検出状況(東から)
- 図版57 1 竪穴住居9完掘状況(東から)
- 2 竪穴住居9(東から)
- 3 竪穴住居12完掘状況(東から)
- 図版58 1 竪穴住居13(南西から)
- 2 竪穴住居13土器出土状況(東から)
- 3 掘立柱建物2(東から)
- 図版59 1 袋状土壌5完掘状況(南から)
- 2 土壌60遺物出土状況(東から)
- 3 土壌69土器出土状況(東から)
- 図版60 1 土壌71土器出土状況(南から)
- 2 土壌72土器出土状況(南から)
- 3 土壌76完掘状況(東から)
- 図版61 1 水田1と河道7(上空から)
- 2 弥生水田(上空から)
- 図版62 1 水田1検出状況(南から)



- 2 水田1 検出状況 (南から)
- 3 水田1 完掘状況 (南西から)
- 図版63 1 水田水口の状況 (南東から)
- 2 水田1 完掘状況 (南から)
- 3 水田1 検出状況 (南から)
- 図版64 1 水田1 全景と洪水砂の関係 (南から)
- 2 水田1 完掘状況 (西から)
- 3 溝7 全景 (南から)
- 図版65 1 溝7 土層断面 (南から)
- 2 溝7 土層断面 (南から)
- 3 溝9 (南東から)
- 図版66 1 溝11・12土層断面 (南から)
- 2 溝13検出状況 (西から)
- 3 溝13・14 (東から)
- 図版67 1 溝15土層断面 (南から)
- 2 溝16全景 (南から)
- 3 河道7 上流部調査風景 (南から)
- 図版68 1 河道7 上流部全景 (南から)
- 2 河道7 中流部全景 (南から)
- 3 河道7 下流部土層断面 (南から)
- 図版69 1 河道7 下流部 (北から)
- 2 河道9 (北から)
- 3 河道8 上流部 (北から)
- 図版70 1 河道9 土層断面 (南から)
- 2 河道9 調査風景 (北から)
- 3 洪水砂の状況 (南東から)
- 図版71 出土土器①
- 図版72 出土土器②
- 図版73 出土土器③
- 図版74 出土土器④
- 図版75 出土土器⑤
- 図版76 出土土器⑥
- 図版77 出土土器⑦
- 図版78 出土土器⑧
- 図版79 出土土器⑨
- 図版80 出土土器⑩
- 図版81 出土土器⑪
- 図版82 出土土器⑫・石製品

図版83 出土土器⑬

図版84 出土土器⑭、土製品

#### 古墳時代

- 図版85 1 竪穴住居14土器出土状況 (東から)
- 2 竪穴住居14土器出土状況 (南から)
- 3 竪穴住居14調査風景 (北から)

- 図版86 1 竪穴住居14完掘状況 (西から)
- 2 墓1 調査風景 (西から)
- 3 墓1 完掘状況 (北から)

- 図版87 1 土壙89完掘状況 (北西から)
- 2 火処76検出状況 (西から)
- 3 火処77検出状況 (南から)

- 図版88 1 土取り跡1 (南東から)
- 2 土取り跡2 調査風景 (東から)
- 3 窪地8 (南から)

図版89 出土土器①

図版90 出土土器②

図版91 出土土器③

図版92 出土土器④、石器、鉄器、土製品

#### 古代・中世

- 図版93 1 居館北東部遺構群 (航空写真)
- 2 居館南東隅遺構群 (航空写真)

- 図版94 1 遺跡南東部遺構群北半部 (航空写真)
- 2 遺跡南東部遺構群南半部 (航空写真)

- 図版95 1 居館南東隅遺構群 (航空写真)
- 2 居館外南部掘立柱建物群 (東から)

- 図版96 1 居館外屋敷地 (南上空から)
- 2 居館外屋敷地 (北上空から)

- 図版97 1 掘立柱建物3 (西から)
- 2 掘立柱建物4 (東から)
- 3 掘立柱建物5 (東から)

- 図版98 1 掘立柱建物6 (東から)
- 2 掘立柱建物7 (南から)
- 3 掘立柱建物8 (北から)

- 図版99 1 掘立柱建物8・10・17 (南から)
- 2 掘立柱建物9 (南から)
- 3 掘立柱建物10 (北から)

- 図版100 1 掘立柱建物11 (東から)

- 2 掘立柱建物12 (南から)
- 3 掘立柱建物14 (東から)
- 図版101 1 掘立柱建物16 (南から)
- 2 掘立柱建物17 (南から)
- 3 掘立柱建物18 (西から)
- 図版102 1 掘立柱建物19 (西から)
- 2 掘立柱建物20 (南から)
- 3 掘立柱建物24 (西から)
- 図版103 1 掘立柱建物26・溝31 (北東から)
- 2 掘立柱建物27・埋甕遺構3 (西から)
- 3 掘立柱建物28 (西から)
- 図版104 1 掘立柱建物29 (南から)
- 2 掘立柱建物30 (南から)
- 3 掘立柱建物36 (北から)
- 図版105 1 掘立柱建物37 (西から)
- 2 掘立柱建物41・42 (東から)
- 3 掘立柱建物43 (西から)
- 図版106 1 掘立柱建物44 (南から)
- 2 掘立柱建物45 (北から)
- 3 掘立柱建物47 (西から)
- 図版107 1 掘立柱建物48・49 (西から)
- 2 掘立柱建物50・51 (西から)
- 3 掘立柱建物5 (北から)
- 図版108 1 掘立柱建物52~56 (南から)
- 2 掘立柱建物57 (北から)
- 3 掘立柱建物62 (北から)
- 図版109 1 掘立柱建物67 (東から)
- 2 竪穴遺構1 (北から)
- 3 竪穴遺構1 屋内土壌遺物出土状況(西から)
- 図版110 1 墓2 (北から)
- 2 墓5 (南から)
- 3 墓6 (北から)
- 図版111 1 墓7 (南から)
- 2 墓8 (南から)
- 3 墓9 (南から)
- 図版112 1 墓11 (南から)
- 2 墓13 (南から)
- 3 墓16漆椀出土状況 (北から)

- 図版113 1 墓17 (北から)
- 2 墓21 (南東から)
- 3 墓22 (東から)
- 図版114 1 墓24 (南から)
- 2 墓24鉄鏃出土状況 (北から)
- 3 墓30 (南から)
- 図版115 1 墓32 (南から)
- 2 墓35 (南から)
- 3 墓36 (南東から)
- 図版116 1 焼成土壌2 (南から)
- 2 埋甕遺構1 (北から)
- 3 埋甕遺構2 (北から)
- 図版117 1 埋甕遺構2完掘状況 (北から)
- 2 集石土壌1 検出状況 (東から)
- 3 集石土壌1完掘状況 (南から)
- 図版118 1 集石遺構2 (北から)
- 2 石敷土壌1 (北から)
- 3 土壌91~99 (西から)
- 図版119 1 土壌116 (東から)
- 2 土壌119 (北から)
- 3 土壌120 (南から)
- 図版120 1 土壌125 (北東から)
- 2 土壌126 (北から)
- 3 土壌129 (南から)
- 図版121 1 土壌129内柱穴 (西から)
- 2 土壌131 (南から)
- 3 土壌134 (南から)
- 図版122 1 土壌182 (東から)
- 2 土壌201 (西から)
- 3 土壌214 (西から)
- 図版123 1 土壌215遺物出土状況 (東から)
- 2 土壌215 (東から)
- 3 土壌217 (北から)
- 図版124 1 土壌219 (南西から)
- 2 土壌224・溝51 (南から)
- 3 堀1北辺土層断面 (西から)
- 図版125 1 堀1東辺土層断面 (南から)
- 2 堀1南辺土層断面 (東から)

3 堀2 東辺土層断面（北から）  
図版126 1 堀2 南辺土層断面（東から）  
2 堀3 北辺端（東から）  
3 堀3 北辺石積・土層断面（東から）  
図版127 1 堀3 東辺土層断面（南から）  
2 堀3 南辺土層断面東から）  
3 堀3 南辺土層断面（東から）  
図版128 1 堀3 南辺完堀状況（東から）  
2 堀1～3 南辺（東から）  
3 居館南西端部（南から）  
図版129 1 堀4 土層断面（東から）  
2 溝22土層断面（北から）  
3 溝23（南西から）  
図版130 1 火処78（南から）  
2 土器溜まり12（西から）  
3 土器溜まり17（南から）  
図版131 1 柱穴14遺物出土状況（南から）  
2 柱穴18遺物出土状況（南から）  
3 D地区包含層刀出土状況（北から）  
図版132 掘立柱建物、墓出土土器①  
図版133 墓出土土器②  
図版134 竪穴遺構、埋甕遺構、集石土壇出土土器  
図版135 土壇出土土器①  
図版136 土壇出土土器②  
図版137 土壇出土土器③  
図版138 土壇出土土器④  
図版139 堀出土土器  
図版140 溝、土器溜まり出土土器①  
図版141 土器溜まり出土土器②  
図版142 窪地、柱穴出土土器  
図版143 遺構に伴わない土器①  
図版144 遺構に伴わない土器②  
図版145 遺構に伴わない土器③  
図版146 遺構に伴わない土器④  
図版147 出土石製品  
図版148 出土金属製品①  
図版149 出土金属製品②  
図版150 出土金属製品③

図版151 出土銭貨①  
図版152 出土銭貨②  
図版153 出土銭貨③  
図版154 出土銭貨④、釘  
図版155 出土土製品①  
図版156 出土土製品②  
近世  
図版157 1 掘立柱建物72周辺遺構群（航空写真）  
2 写真1の南部遺構群（航空写真）  
図版158 1 堀3 東辺と周辺遺構群（航空写真）  
2 掘立柱建物80・81周辺遺構群（南から）  
図版159 1 掘立柱建物68・69、堀3（北から）  
2 掘立柱建物83・84（南から）  
図版160 1 柱穴列11・12（南から）  
2 井戸2（西から）  
3 墓域1（南東から）  
図版161 1 墓64～70（西から）  
2 墓51（南から）  
3 墓61（南から）  
図版162 1 墓65（北から）  
2 墓66（北から）  
3 墓域2（南から）  
図版163 1 墓80（北から）  
2 墓85（北から）  
3 墓86（東から）  
図版164 1 墓域3（南から）  
2 土壇219（東から）  
3 土壇220（東から）  
図版165 1 土壇222（東から）  
2 土壇226（南から）  
3 土壇234（北から）  
図版166 墓、土壇、堀出土土器  
図版167 土壇出土土器  
図版168 堀、柱穴、遺構に伴わない土器  
図版169 出土銭貨  
図版170 出土金属製品①  
図版171 出土金属製品②  
図版172 出土金属製品③、石製品、土製品



## 第4章 まとめ

### 第1節 縄文時代の遺構について

#### 1 はじめに

久田堀ノ内遺跡は、久田原遺跡とは河道をはさんで存在した微高地2上に形成された遺跡である。また、久田原遺跡からつづく微高地1の南端部もこの遺跡の範囲に含まれている（第12図）。

検出した遺構には、袋状土壙4基、焼成土壙1基、土壙53基、火処97基、溝6条、土器溜まり10基、窪地7基、河道5条、性格不明のピット多数がある。これを、久田原遺跡と比較すると、竪穴住居は検出されておらず、袋状土壙も少ないが、火処は100基余りを数えた。そこで本節では、縄文晩期における火処と土器溜まりを中心に微高地の利用状況について述べたい。

#### 2 火処について

火処は、主に微高地2から検出されているが、遺物が出土していないためその時期の比定に困難を覚える。また、掘り方を伴っているものは稀で、多くは地山面に被熱範囲が確認されたのみである。その計測値の平均値は、長軸約74cm、短軸約69cm、下方への被熱状況は約13cmである。地山が砂質土であるため、焼け締まっている状況は認められないようである。

まず火処は、住居に伴う炉であると想定したい。ただ、掘り方などは確認できておらず、かつ火処から上面が洪水等によって削平を受けたとは判断しにくい。また、「竪穴」住居とは想定できない。また、火処周辺から多数のピットが検出されているが、主柱と判断されているものは皆無であり、かつ規則的なまとまりを呈するピット群も認められていないようである。よって、主柱を伴わない平地住居の可能性を考えておきたい。

次に、火処の検出位置をみると（第17・18・20・21図参照）、平面的には4 0 08ラインおよび4 1 02ラインを境として大きく3群に分けられ、さらにこの大群のなかでも細分が可能である。すなわち、①群：土器溜まり2の範囲内およびその北側の一群（火処2～8ほか）、②群：土器溜まり3の範囲内にあり南北に列状を呈する一群（火処9～21）、③群：4 0 03 C c付近の一群、④群：土器溜まり5の北側の一群（火処23～26ほか）、⑤群：土器溜まり7の範囲内の一群（火処32～39）、⑥群：4 1 04 C b付近で窪地4の範囲内の一群（火処41～45、土壙32・33）、⑦群：4 1 04 C e付近の一群（火処46～48）、⑧群：4 0 04 C g付近の一群（火処49～56）、⑨群：4 1 07 C g付近の一群（火処57～62）、⑩群：4 1 08 C h付近の一群（火処63～72）である。このうち、①・②および⑧～⑩は、大きな一群として捉えることも可能であろうし、⑦群以南は、まとまりとしてはやや希薄ともいえる。

次に、各群の火処の配置状況をみてみたい。④・⑥～⑧のように、3～6基程度の火処が径約10～20mの環状ないしは馬蹄形に配置され、中心部に空白地帯が認められるような様相を呈する一群や、②のように直線的に並ぶ一群が存在する。①群は、土器溜まり2と、②群は、土器溜まり3と、④群は

#### 第4章 まとめ

土器溜まり5、⑤群は土器溜まり7（⑥群についても窪地4の土器群と）それぞれ有機的なつながりが想起でき、土器溜まりの遺物出土レベルとほぼ同一であるという。これらのうち④・⑤は、火処群が土器溜まりの北側に偏在し、特に④では環状に配された火処の背後（南・南東側）に「捨て場」（土器溜まり）を形成しているような状況を呈する。いずれの火処群も現象面では興味深い状況である。しかしながら、久田原遺跡を参考にして火処が住居のほぼ中心に位置し、住居の大きさを径4mと仮定した場合、住居が重複ないしは近接してしまうため、住居に伴うと考えるとすべてが同時併存であった可能性は低い。ただし、同一住居内に複数の火処が存在していたことも考えておく必要はある。

さて、これら土器溜まり2・3・5・7の年代および、①群周囲の袋状土壙や土壙、窪地の時期は、すべて晩期前葉後半から中葉前半であることから、火処群のおよその時期がうかがえる。土器溜まりを形成しない微高地南端における⑨、⑩群は、南側に後期末から晩期前葉後半の土壙が形成されるが、これも包含層中に晩期中葉の土器を多く含むこと、さらに晩期初頭の土器溜まり6が火処を伴わないこともあわせて考えると、晩期前葉後半から中葉に位置づけられるべきであろう。久田原遺跡と同様に低位部微高地の定住を想起させる活発な土地利用は、晩期前葉後半から中葉にかけての所産であり、大量の石鍬を用いた開墾によって可能になったとみたい。

### 3 遺構・遺物からみた居住域の変遷について

時期が明確な遺構や包含層遺物から、微高地の利用状況について触れておきたい。まず、微高地1に火処が数基しか存在していないことは、微高地2と比べて対照的である。遺構密度も散漫であるがその北側と南端部あたりに僅かに集中する。時期は、後期中葉、晩期中葉が多い。

次に、久田堀ノ内遺跡の中心たる北西部であるが、後期末から晩期前葉にかけて徐々に微高地が形成されていったようである。南北に溝状を呈する窪地1は、微高地の肩部であろう（第17図）。このラインは、直線を北にのばすと河道3の肩（第16図）にあたる。また、窪地1の南側においても肩口が検出されており、さらに南に行くと河道3へと連続するラインが想定できる。そこで、河道3中流部の状況が問題となる。下層の土器（第221図）は、河道3の下層トレンチから出土したものであり、後期末～晩期初頭の河道肩はさらに東へとのびることが想定できた。つまり、窪地1がその河道肩に相当する可能性を指摘したい。そこで、窪地1土器群（滋賀里Ⅱ並行）は、斜面堆積の産物とみるのである。この点は、窪地1の西側に形成された土壙や窪地、土器溜まりの時期とも矛盾しない。

微高地2南端部では、久田原遺跡ではほとんど見るのでできなかった後期末葉～晩期初頭の遺構や土器の出土がみられた。さらに、晩期初頭の土器群は、微高地2北端部にも集中する。晩期中葉は微高地全体に広がりを見せるが、晩期後葉は古い段階が微高地南端部に、新しい段階は微高地北端に偏在することから、同一微高地における土地利用の時期的変遷がたどれるのである。

### 4 おわりに

久田堀ノ内遺跡は、遺跡全域を発掘調査したといっても過言ではない。しかし、広大な範囲を調査したにもかかわらず、墓壙や貯蔵穴の検出が少ない状況である。後期中葉、晩期前葉、晩期後葉では、遺物出土量に対して、遺構の貧弱さが目につく。今回、集落の性格には触れなかったが、平地住居（おそらくテント式住居か）からイメージされる短期間の居住であったという前提にたつならば、季節的な食物採取地や狩猟地の可能性も視野に入れておく必要があるだろう。（小嶋・弘田）

## 第2節 縄文時代後期の土器をめぐって

ここでは、久田堀ノ内遺跡から出土した縄文時代後期の土器について、まとめを行うとともに、北に隣接する久田原遺跡出土の同期土器の再検討も合わせ、この低位部一帯における人々の活動の一端を考えてみたい。なお、考察にあたっては、図面掲載土器を対象に行う。

久田堀ノ内遺跡から出土した土器のうち、最古のものは縄文時代後期初頭の中津式に属するものである。これ以後は、縄文時代後期さらには、晩期のほぼすべての土器型式を網羅する形で土器の出土がみられる。ただ、出土量や出土地点については当然に変化があり、その変化が人々の活動のあり方を示しているものと考えられる。まず、年代順に各土器型式の土器の実態について述べる。

**中津式** 確実に中津式に属するとみられる土器は750の1点にすぎない。H地区にあって、河道4の西側肩部下層から出土している。底部を欠損しているものの、全形の復元が可能な大形の破片である。包含層出土遺物の説明文でも述べているように、波状口縁で、口縁端部は角張り、口縁部から胴部にかけて一帯となった磨消縄文の文様を飾って、下端にはJ字文を配する。文様を描く2本の沈線は途切れない。中津式は古と新にあたる中津Ⅰと中津Ⅱに細分されているが、中津Ⅰはさらに新古の二段階に分けられる<sup>(1)</sup>。750の文様は、いわゆる窓枠状区画文をもつものと理解されるため、中津Ⅰの古段階と考える。

**福田KⅡ式** この型式に属するとみられる土器はいくらか出土しているが、小破片が多く、確実なものは少ない。また、典型的な3条沈線のものもほとんどみられない。河道1下流部の413、河道4上流部の491・492、F地区包含層の661、G地区包含層の717・718・720・721、H地区包含層の752・754などである。ほとんどが深鉢で、口縁部を肥厚させるものが多い。

**津雲A式** 出土点数は福田KⅡ式より減少し、出土地区も縮小する。河道1中流部の388、下流部の409、G地区包含層の686・722、H地区包含層の756・757などがこの型式に属するとみられる。いずれも深鉢で、口縁部外面を肥厚させ、そこに同心円文を中心とした文様を描くものが多い。また、頸部には、409のように垂下条線を描くものや、686のように条痕調整を縦方向に施すものがある。

**彦崎KⅠ式** 津雲A式よりさらに出土量が減少する。G地区包含層の693・694・719は同一個体の深鉢で、口縁端部を内外に拡張させ、その端面に数条の平行沈線からなる文様を描く。口縁の上面あるいは、内面に沈線で幾何学文を描くという特徴からすれば、この型式に属するものと考えられる。

**彦崎KⅡ式** 久田堀ノ内遺跡から出土した縄文時代後期土器のほとんどを占めるのがこの型式である。彦崎KⅡ式については、近年、資料の増加もあって研究が進み、型式を細分して新しい型式名を提唱する動きもある<sup>(2)</sup>。ここでは、型式名の乱立による混乱を避けるため、彦崎KⅡ式を広く捉えておく。彦崎KⅡ式は年代的に少なくとも3段階に分けられることが言われている。古段階である第1段階は、「通常の縄文を使用し、多条沈線による文様をもつ浅鉢が特徴的な段階」、中段階である第2段階は、「沈線内連続刺突や結節縄文が特徴的な段階」、新段階の第3段階は、「擬似縄文や細い斜線文が特徴的な段階」である<sup>(3)</sup>。このうち、第2、第3段階については指標が明瞭だが、第1段階については個体での識別は困難で、土器群として把握した段階でより明瞭となる。

彦崎KⅡ式古段階は、個体での識別が困難であるが、何点かを指摘することはできそうである。D地区包含層の深鉢631は、口縁部の内面を飾る縄文帯にヘラ描きの内文をもっている。この土器の胴肩

#### 第4章 まとめ

部の文様と同じ文様をもつ、河道3中流部の浅鉢463も同期のものであろう。G地区包含層の725・728は、口縁部と胴部外面を単節縄文で飾る深鉢であるが、口縁部外面に肥厚がみられ、この段階に含まれる可能性が高い。

彦崎KⅡ式中段階は沈線内連続刺突と結節縄文を指標とする。沈線内連続刺突の例としては、河道2上流部の440、B地区包含層の584がある。結節縄文をもつ土器は多数にのぼり、出土した遺構を列挙すると、袋状土壙2(8)、土壙11(24)、土壙13(26)、土壙23(29)、窪地6(280)、河道1最上流部(341~345・347)、河道1上流部(359・360・363・364)となる。包含層ではB地区(526・583・584)で認められている。結節縄文は深鉢に飾られているものが多く、多段化しているものが目立つ。口縁部と胴部の外面に単節縄文を施す深鉢では、359・360のように口縁部内面に飾ったり、胴部上半に多段に施文するものがかなり認められる。また、この種の深鉢の口縁部には412や726・727のように肥厚しないものがみられ、これなどはこの段階に含まれるかもしれない。

彦崎KⅡ式新段階は擬似縄文や細い斜線文が指標となる。この段階の一括資料としては、広島県神辺町大宮遺跡第4次調査出土品<sup>(4)</sup>があるが、磨消縄文を飾る深鉢では胴部上半に両端に刺突を施した弧線文が施されていて、これも指標となる。また、久田原遺跡では近畿地方の元住吉山Ⅰ式と同様のものが出土していて、これもこの段階に含まれる。

擬似縄文を施すものとしては、河道1中流部の384、河道3中流部(南側)の456・457、B地区包含層の582、I地区包含層の844などがあり、384・456・457・844は元住吉山Ⅰ式と同様のものである。細い斜線文をもつものは、河道1最上流部の339・340、河道3中流部(南側)の456・457、I地区包含層の844などで、擬似縄文と組み合わせるものが多い。胴部上半の弧線文では、河道1最上流部の354、河道3中流部(南側)の456・457、F地区包含層の662・663、G地区包含層の732などがある。河道1下流部の408は元住吉山Ⅰ式の深鉢口縁部と同様で、G地区包含層の736・737も同様と考える。

**福田KⅢ式** この型式になると、土器の出土量は大きく減少するが、彦崎KⅡ式以外の型式に比べると多いほうである。小巻貝を使用した凹線文と押圧文が特徴である。土壙46の35~37、河道1最上流部の356、河道1中流部東斜面の378・383・387、河道3中流部(南側)の452、河道4下流部の507・511・512、B地区包含層の540・544、F地区包含層の677~680、H地区包含層の753などがこの型式に属するものとみられる。

久田堀ノ内遺跡から出土した縄文時代後期の土器は、後期のほぼ全期間に及ぶが、土器型式別の出土量には大きな差があり、とくに後半での集中が顕著である。良好な一括資料には恵まれなかったが、土壙46の福田KⅢ式土器や、河道1の最上流部・上流部とA・B地区包含層から出土した彦崎KⅡ式中段階の土器は、この段階の土器型式の内容をより具体的にしてくれるものと期待される。

なお、上述の考察は有文土器についてのものであったが、後期に属するとみられる無文土器も当然に出土している。型式分類は筆者の力量を超えるため、指摘にとどめたい。河道1中流部東斜面の382・385、F地区包含層の665・666、G地区包含層の695~700・746・749などがあげられる。また、注口土器の多くも後期のものと思われる。

次に、久田原遺跡出土の縄文時代後期の土器について振り返ってみたい。久田原遺跡では中津式の土器は出土せず、最古の土器は福田KⅡ式のものである。福田KⅡ式の土器は、河道2(久田堀ノ内遺跡河道4以下同じ)上流部と微高地2(微高地1)南東部斜面で、後続する型式の土器に混じって、わずかが出土したにすぎない。津雲A式の土器もわずかで、微高地1包含層、微高地2の土壙13、



表5 久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡縄文後期土器の消長

遺構名	久田原遺跡	久田堀ノ内遺跡	地区	土器型式							
				中津式	福田KⅡ式	津雲A式	彦崎KⅠ式	彦崎KⅡ式古	彦崎KⅡ式中	彦崎KⅡ式新	福田KⅢ式
河道A	河道1		上流				○			○	
			中流					△			
微高地A	微高地1		北部			○	○	○		○	
			中部					△			
			南部								
河道B	河道2		上流		○		◎		◎	○	
			中流				△		△		○
			下流						○		○
		河道4				○					
			上流							○	
微高地B	微高地2		北部			○	△			○	
			南部		○			◎	◎	○	
		微高地1		北部					△	○	
				南部	○	○	○	○	△	○	○
河道C	河道3								○		
	河道1		上流						◎	○	○
			中流			○			△	○	○
下流				○				△	○		
微高地C	微高地2		北部					△	◎		○
			中部		○			○	◎	○	○
			南部							○	○
河道D	河道2							○			
	河道3		上流							○	○
			中流					○			

◎出土量多 ○出土確認 △時期確定困難

のは河道2上流部、微高地2南東部でわずかに認められたが、微高地2南東部では元住吉山Ⅰ式の深鉢が大形破片で出土した。

福田KⅢ式の出土量はきわめて少なく、彦崎KⅡ式新段階での変化を受けた形になっている。河道2（河道4）中流部と下流部で若干の出土をみたにすぎない。

久田堀ノ内遺跡と久田原遺跡での土器型式別の出土量を比較すると、彦崎KⅡ式が最多を占めることでは共通するものの、彦崎KⅠ式は久田原遺跡に多く、福田KⅢ式は久田堀ノ内遺跡に多いという

それに、北に隣接する夏栗遺跡との境界にある溝状の窪地から出土している。溝状の窪地から出土した土器は数点あるが、これについては夏栗遺跡からの流れ込みの可能性が高い。

彦崎KⅠ式になると、出土土器の顕著な増加がみられる。河道1と河道2（河道4）の分岐部から河道2の上流部にかけて集中した出土がみられ、河道2の最下層では、接合関係から一括遺物と考えられそうなまとまった出土があった。微高地1や夏栗遺跡との境界の窪地からも出土した。

彦崎KⅡ式は久田原遺跡でも後期土器の多くを占める。古段階の土器溜まりが微高地2（微高地1）の東部で検出されている。微高地2中央部の土壌47からは、関東地方の加曾利BⅠ式の注口土器が出土し、この段階に併行する可能性がある。中段階の点数はもっとも多く、河道1、河道2（河道4）上流部・下流部、河道3（河道1）、微高地1、微高地2南東部とほぼ全域で出土した。とくに微高地2南東部で多かった。新段階のもの

#### 第4章 まとめ

ような相違点も明らかとなる。このような事実は、久田原遺跡と久田堀ノ内遺跡を合わせた、吉井川左岸の沖積低地における人々の活動実態を示すものと考えられる。そこで、この沖積低地の各地区ごとの土器形式の消長を表にして、考察の助けとしたい。地区として河道と微高地を別に取り上げるが、久田原遺跡と久田堀ノ内遺跡では、連続する河道や微高地であるにもかかわらず名称が異なるため、新たに、それらの遺構の名称をアルファベットで表記する。それに対応する各遺跡での名称は表5に示すとおりである。

さて、久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡の所在する、吉井川沿いの低位部への人々の進出は、縄文時代後期初頭の中津式期に始まる。微高地Bの南端部で、河道Bの肩口から深鉢の大形破片が出土している。つづく福田KⅡ式から津雲A式にかけては、微高地C、微高地Aと土器の分布範囲を拡大していくが、出土点数はまだ少なく、一時的な活動にとどまっていたことを示している。彦崎KⅠ式期に入ると、土器の出土量がかなり増加するようになる。微高地Bでも継続して出土がみられるが、とくに、微高地Aでの出土が際だっている。ただ、これも継続する時期の出土量に比べればわずかなもので、試行錯誤的な様相が強い。本格的な低位部への進出が、河岸段丘上にある夏栗遺跡にもっとも近接した微高地Aから開始されることは興味深い。

彦崎KⅡ式期になると、ふたたびA・B・Cの3微高地で土器が出土するようになり、微高地Bの中央部あたりでは土器溜まりが形成される。有文・無文、さまざまな器種・器形の土器が含まれ、日常の生活が営まれていたことを知らせてくれる。土器溜まりには石鍬が相伴していた。時期の明確な石鍬としては当遺跡で最古のものである。これ以降、石鍬は爆発的に増加していくこととなる。石鍬は機能的には土掘り具であり、開墾あるいは、収穫のための道具として、農耕との関係が濃厚である。低位部への本格的な進出に農耕が関わっていることは確実であろう<sup>(5)</sup>。

彦崎KⅡ式期の中段階・新段階は、さらに土器の出土量が増大するようになるが、出土地区が微高地B・Cへ集中する傾向をみせるようになる。この傾向は後期末の福田KⅢ式にも引き継がれ、微高地Cを中心とする地区に集中するようになる。出土量としては、福田KⅢ式期に一時減少するものの、晩期初頭になると、微高地C地区で再び急激な増大をみせるようになる。

このように、吉井川左岸の氾濫原とも呼べる低位部への進出が、縄文時代後期中葉以降に本格化し、定住に近い様相を呈していたこと、そして、その動向に農耕が関わっているらしいことを述べた。晩期には土器の出土量は飛躍的に増大し、竪穴住居の存在も確認されるようになる。ただ、その発展を支えた農耕を水田稲作と直結することはできない。弥生時代前期土器の出土量は、この地域ではごく微量に過ぎず、大きな断絶が存在しているのである。 (岡本)

#### 註

- (1) 玉田芳英「中津・福田KⅡ式土器様式」『縄文土器大観』4 小学館 1989
- (2) 平井勝「縄文後期・四元式の提唱」『古代吉備』第15集 古代吉備研究会 1993
- (3) 千葉豊「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会 1992
- (4) 桑原隆博・伊藤実・福島政文『大宮遺跡第4次発掘調査概報』広島県教育委員会 1981
- (5) 杉山一雄「縄文時代の石器について」『久田原遺跡 久田原古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184 岡山県教育委員会 2004

### 第3節 縄文時代晩期の土器について

宮滝式の新相を示す一括資料として、土壙46がある。それ以降は、これまで県下において例の少なかった晩期末・後期初頭の土器群をはじめ、晩期末葉まで途切れることなく型式変遷がたどっていると考えられる。以下に器種毎の類別を行い、今後の検討に備えたい。

#### 1 深鉢の分類

後期末葉宮滝式に系譜をたどれるものをA類とした。まず、口縁部が内湾気味の702、88をA1類とする。次に、外傾する体部から内傾する頸部を経て短く外傾する口縁部へと続くものをA2類とする。このうち690は、外面に凹線を施すが、他にも沈線を施す282・540・478・544、無文で口縁部がより短い636・802・803等がある。A3類は、砲弾ないしはバケツ状の体部から外湾する口縁部がとりつく20・485・118で。調整は、20がヘラミガキ、485はナデ、118はナデの下に条痕が残る。さらに、口縁部は長く、緩やかに外反する383・692（A4類）がある。

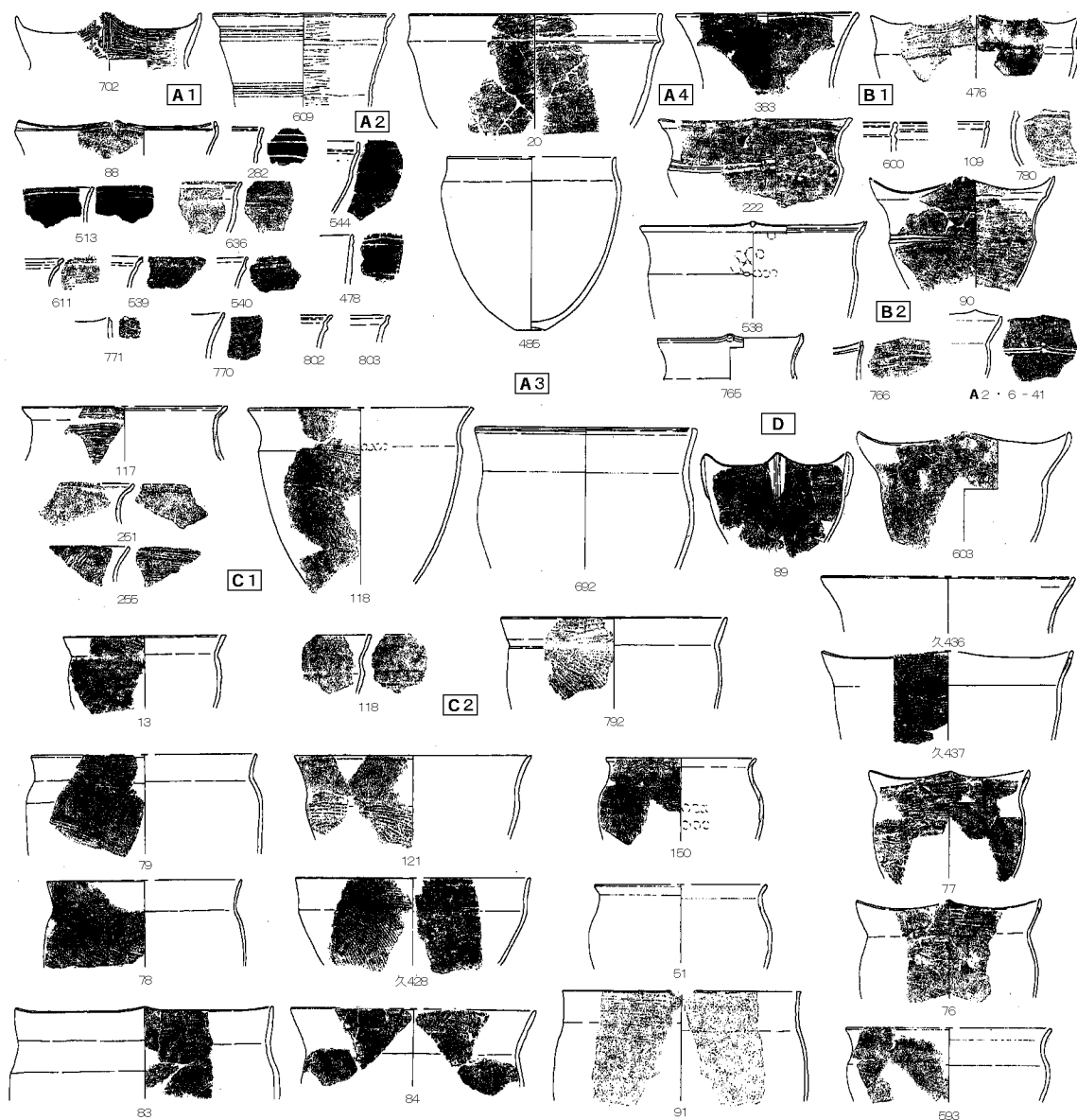
B類は、口縁部内面に段を有した岩田第4類に近似する一群で、ナデ調整を特徴とする。この中には90のように、口縁部がA1類の特徴を有する例もある。このB類では、口縁部と頸部の境が突帯状をなすB1類と口縁部外面が稜を持ち、内面の段は不明瞭なB2類がある。また、頸部内面がなだらかに湾曲するのに対し外面は鋭く屈曲するB1・2類に対して、口縁部内面の段は不明瞭でかつ外面には稜を持たない（本文未掲載：第914図A2・6区41）もある。これは、頸部内面の稜が鋭く、体部と頸部の境の稜は鈍いといった特徴を持つ。さらにB2類には、沈線による文様を持たない例138があるほか、波頂部とその直下の頸部を巻き貝で押す90、円形の押圧222・538、波頂部をつまむもの225がある。

C類は、砲弾形ないしは球形の体部を持ち、そこから外反させる口縁部をもつ。頸部と口縁部外面の境を稜で画す場合をC1類、稜を持たないものをC2類とする。C1類には、117・251・255・13等があり、調整にはナデ・条痕・条痕のちナデ・ケズリの各種が認められる。体部が球体をなし、短く外反する口縁をもつ51・150や長めの口縁部をもつ53・54や593がナデ調整であるほかは、二枚貝条痕や条痕後ナデ調整である。口縁部長の短い78・79等は口径が体部最大径に比べ小さいかほぼ等しく、かつ体上部で肩が強く張る。次に、口縁端部に刻み目を有するものをC3類とする。調整はナデ・擦痕である。口縁部長が短く、肩が強く張る44のようにC2類に近い例も存在する。

無文で、内湾する口縁が波状をなすものをD類とする。波高が高く、口径が体部最大径を超えるもの、波高が低く、口径と体部の最大径がほぼ等しいものがある。これらB～D類の調整は、丁寧なナデが圧倒的であるが、なかには2枚貝条痕を看取できる個体もある。この他には、383・20や無文で砲弾形の深鉢21の様にナデの後ヘラミガキを施す例や2枚貝条痕の明瞭なものもある。

E類は、明瞭に屈曲する頸部をなし、長く発達する口縁部をもつ。竹管状の原体を利用した施文が特徴的である。次の3類に細分する。E1類は、いわゆる爪形の文様を持たず、口縁部を長く緩やかに外反するか直線的に延ばす。久田原遺跡<sup>(1)</sup>（以下、久と略す）—318・320・426・444・545・617・625などがある。このうち444は、無文で口縁端部に小突起を付すが刻み目はない。617は、刻み目をもたない口縁部端から垂下する2条の沈線が片部に付されたボタン状の突起に続く。垂下する2条の

沈線を引く例は備前原遺跡の第4図-1の土器(突起あり)や突起をもたず頸部に刺突を施す372の例がある。これらは、刻み目の有(318・320・625)、無はあるが口縁部外面の調整はナデまたは擦痕である。E2類は、爪形文を施すもので、平坦な口縁端部にはほぼ例外なく刻み目を施し、頸部には爪形文や押し引き文がみられるE類の典型例である。口縁部外面の調整には、ナデ・条痕、ケズリが見られるがナデが主体である。E3類は、口縁端部外面を肥厚させる。外面にヘラガキ沈線による山形ないしX字文を施す久626~630や頸部の文様帯と口縁端部の間隔が短い670・671がある。前者の類例には、原遺跡<sup>(2)</sup>の例や、口縁端部の肥厚はみられないが久217、田益田中遺跡<sup>(3)</sup>晚期深鉢I一類を挙げうる。このうち久629以外は、2枚貝条痕がみられる。さて、当遺跡におけるE類口縁の外面調整は、大半が口縁部ナデまたは擦痕であり、口縁部に2枚貝条痕を施す30・302は、ナデ調整の久382に比べて口縁部高が低くなるのが特徴といえる。また、E1類としたもののうち、久326・425・444のよう

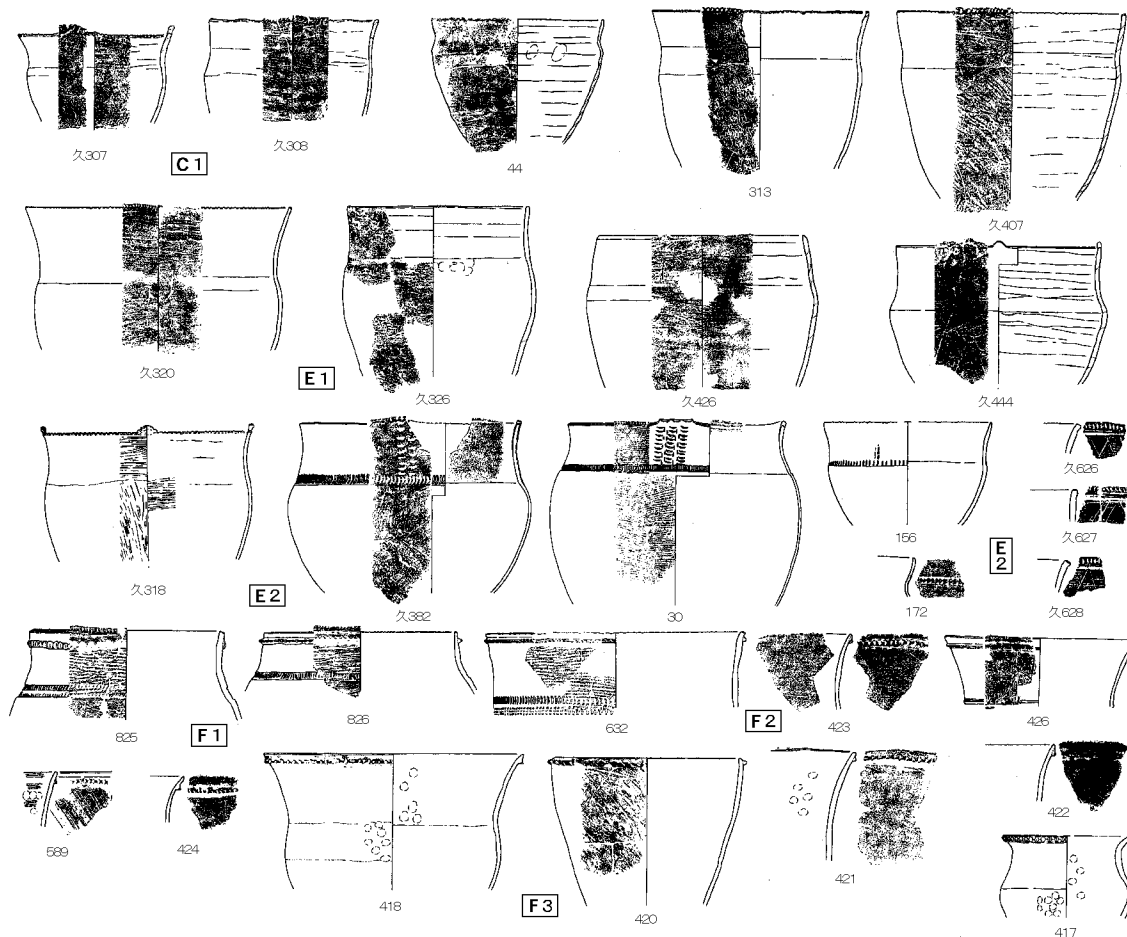


第914図 深鉢の分類① (1/10)

にE 2類に類似した器形を持つものがある。つまり、刻み目の有無は、時期決定上の指標とはならない可能性がある。なお、後述する有文の浅鉢B類、D類に口縁端部を刻む例が存在する。さて、この時期の浅鉢(A 4類)の口縁部にはいくつかのバリエーションが存在するが、その浅鉢の変化と対応させて考えることができるならば、深鉢E 1から3類への変化を想定することも可能であるし、口縁部に2枚貝条痕、頸部に竹管文を施した出現期の突帯文土器への移行はスムーズに理解できよう。E 1・3類はこの期における過渡的な様相を示すのであろうか、良好な出土状況を示す資料を待ちたい。

F類は突帯文土器で、次の1～3類に分ける。F 1類は、平坦な面をなす口縁端部には刻み目を、外面調整には2枚貝条痕を施す。全体のプロポーションがわかる個体はないがE類同様に肩が張る器形で、632・825・826は、頸部に押し引き文がみられる。なお、この期の山陰地方の突帯文土器も二枚貝条痕調整である<sup>(4)</sup>。F 2類は、器壁が薄くなるのが特徴で、端部は、丸みを帯びた角ないしは先が尖り気味となる。口縁端部に刻み目のある例もあるが大半は刻み目はない。頸部の屈曲は緩やかとなり、器表面は丁寧なナデやミガキが認められる。口縁部にヘラ描沈線による文様を施す個体もみられる。426は2条突帯とみられる。F 3類の突帯は、口縁端部直下につくか端部から垂下させる。刻み目の種類や深さはバラエティーに富む。外面の調整は擦痕、ナデが見られる。壺417もこの類の範疇にある。

このほかに、砲弾形のような単純な器形(深鉢G)も多くみられる。調整は、21が丁寧なナデにへ



第915図 深鉢の分類② (1/10)

ラミガキを施す。土器溜まり5の123~125等はナデ、448等は擦痕調整である。

## 2 浅鉢の分類

浅鉢には、主に次の4種がある。A類は、後期末の浅鉢687や680から派生する。口縁部外面には巻貝による扇状圧痕、口縁部内面には沈線や巻貝の押圧がある。皿状の体部を持ち、外湾する頸部を持つ。A類は、次の各類に分かれる。頸部が逆「く」の字に屈折したA0類では、頸部に文様体があり口縁端部内面に段や沈線をめぐらせる場合(A0-1)、文様帯がなく段も不明瞭もしくはみられないもの(A0-2)がある。後者は、前者に比べて口縁部内面の稜線が鋭く、体部外面の稜は鈍い。体部から口縁部にかけての湾曲が緩やかなA0-3は口縁端部内面に抉りを入れる。このA0類に近いが頸部と口縁部が未分離で外上方に立ち、その外面を沈線による文様帯が、内面には段のあるものをA1類とする。このなかには、幅広の口縁部が直立する608もある。このほかにも、短く立つ口縁部の外に沈線を施す(A2類)や端部外面に沈線のない(A3類)と長い口縁の端部内面に突帯を貼る(A4類)がある。A4類は、短くかつ鋭く屈曲する頸部をなし、口縁端部突帯の断面形状から、外端が平坦な面をなし断面台形のA4-1。断面三角形をなすA4-2。断面が幅広で低平な蒲鉾状のA4-3。内面に沈線を引き突帯部を表現するA4-4。口縁部が短く、端部は丸みを帯びて、頸部の屈曲は鈍いA4-5がある。

また、B類では、短く屈曲させた頸部から内湾(B1類)もしくは直線的に延びる長めの口縁部で内面に段を持つ(B2類)がある。1~3条の山形の頂点に円形の圧痕がある場合の他に、頂点の下に来る場合があり、その際の内面の段は浅い。

C類は、頸部が短く屈曲し、そこから短い口縁部が立つ。これは次の5類に細分できる。C1類は、頸部がやや長めで、その屈曲が緩やかである。口縁部内面には明瞭な抉りを入れる。C2類は、口縁部外面と体部と頸部の境及び、頸部の内面が明瞭な稜線をなす。C3類は、頸部外面をヘラで抉るようにして口縁部の稜線をつくり、口縁端部はわずかに内に肥厚させる。C4類は、口縁部外面の稜線はなくなり、端部内面の段も浅く不明瞭となる。C5類は、緩く外反する口縁の端部内面に段、沈線などがみられない。C類には、体部に榎原紋様のある623、弧線文のある690や、幅広の口縁外端面に多重沈線や弧線を施す607・608・622がみられる。

D類は、球形の体部から短く立つ口縁部を持ち、A0類と交代して出現する器形と考える。口縁端部の形態は、A4類とほぼ同様の分類が可能である。

その他にも、単純な皿や鉢状を呈するもの(E類)、後期の浅鉢の系譜を引く椀形の浅鉢も見られる。E類には、榎原文様などを施す例がある。

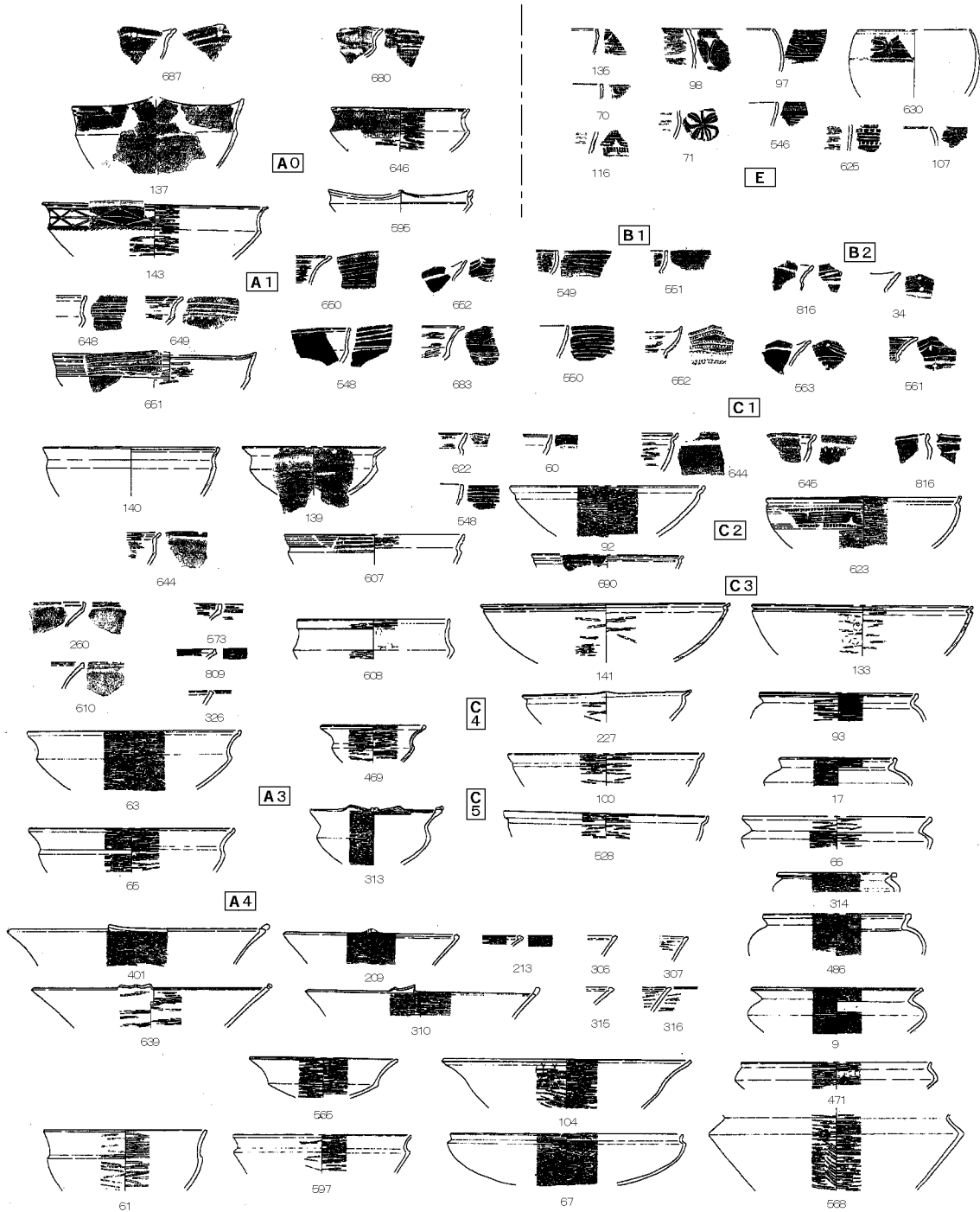
## 3 異系統の土器について

榎原紋様や大洞系の文様をもち、搬入もしくは模倣と考えられるものがある。これについては、中間地域における変容も考えなければならないが、クサリ礫を大量に含む485のように搬入の可能性が高い例もある。そのためにも、胎土の肉眼観察や胎土分析も含めた検討が必要になってくるが、今回は、そこまで立ち入った検討ができなかった。

榎原文様には、上下相対対向三角抉り<sup>(5)</sup>の623が浅鉢C2類であるほかはすべてE類である。また、榎原文の影響が看取できるものには、直線で画された中に刻みのある624・625などE類が多いが、B

1類の口縁部にもみられる。三角決りを欠くか弧線化する455・626~628やへら描楕円文内に直線文630を充填する例や、上下交互の山形の頂部にわずかに刺突の残る88もこれに含める。455・630等のように施文後にナデを加える場合は、新しい要素であろうか。

大洞系の文様が体上半部につく壺312は、退化した羊歯状文で大洞C 1~2式に相当する。河道1最上流部上層（大半が8層）よりE 2類の深鉢とともに出土した。この河道の中層から出土した三叉状入り組み文を持つ壺311は大洞BC式に、鉢状（浅鉢E類）を呈する99は、内湾する口縁部の文様から



第916図 浅鉢の分類 (1/10)

#### 第4章 まとめ

安行3A式に相当しようか。ただ文様帯以下を研磨することや器形からも近畿以西の土器の可能性が考えられる。

### 5 まとめ

統計的なデータの分析を行っていないが、深鉢B類における最終調整としてのナデの省略化と2枚貝調整の顕在化からその後の擦痕・ナデ主体への調整具の変化が認められ、さらにE類からF1類にかけては再び2枚貝調整への転換が図られた。このことは、2枚貝条痕が主体となる中部瀬戸内側と擦痕・ナデを中心とする山陰側との結びつきの強弱を表している。再び起こる晩期中葉段階における、ナデ・擦痕調整手法の具現化と大洞系土器の搬入といった現象は、山陰地域との強い結びつきを示すのではなかろうか。(弘田)

#### 謝辞・追記

高橋護氏、岡田憲一氏には土器を実見して、ご教示頂きました。厚く御礼申し上げますと同時に、本稿に十分に生かせなかったことをお詫びいたします。また、晩期初頭の有文浅鉢を中心に赤色顔料塗布が多数確認できた。蛍光X線分析を行ったところ、2個体でベンガラ、2個体で水銀朱が確認できた。晩期における周辺地域の例では、島根県板屋Ⅲ遺跡<sup>(6)</sup>でベンガラ、岡山県倉敷市菅生小学校裏山遺跡晩期浅鉢<sup>(7)</sup>で水銀朱が確認されている。今後の資料の増加をまって周辺地域<sup>(8)</sup>との比較検討を行いたい。白石純氏には、分析で大変お世話になりました。

#### 参考文献

岡田憲一「滋賀里式再考—西日本縄文晩期土器様式の構造転換」『立命館大学考古学論集』Ⅲ 2003  
奈良県立橿原考古学研究所編『西坊城遺跡Ⅱ』奈良県文化財調査報告書第90集 2003

#### 註

- (1) 岡山県教育委員会編『久田原遺跡・久田原古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184 2004
- (2) 鎌木義昌「岡山県御津町原遺跡」『瀬戸内考古学研究』1996
- (3) 平井勝「縄文晩期の土器」『田益田中遺跡(国立岡山病院)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告141 1999
- (4) 濱田竜彦「目久美遺跡における縄文晩期末から弥生時代前期にかけての土器について」『目久美遺跡』V・VI 財団法人米子市教育文化事業団文化財調査報告書25 1998
- (5) 大塚達朗「橿原式紋様論」『東京大学考古学研究室研究紀要』第13号 1995
- (6) 柴田喜太郎「板屋Ⅲ遺跡出土石器の石材と縄文土器・石器に付着する顔料の検討」『板屋Ⅲ遺跡』1998
- (7) 安田博幸・森真由美「菅生小学校裏山遺跡出土の縄文土器の付着の赤色顔料物質の微量化学分析」『菅生小学校裏山遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81 1993
- (8) 成瀬正和「西坊城遺跡出土赤彩土器に用いられた赤色顔料」『西坊城遺跡Ⅱ』奈良県文化財調査報告書第90集 2003 近畿では後期中葉以降から晩期を通じて朱が優勢的に用いられていたことが指摘されている。関東地方や東北地方はで、晩期に入るとほとんどがベンガラに、九州では、晩期初頭から中葉まで一貫してベンガラであると指摘されている。



## 第4節 縄文時代の石器について

### 1 はじめに

久田堀ノ内遺跡からは、縄文時代の石器が数多く出土している。これらを久田原遺跡<sup>(1)</sup>と同様に大きく4時期（後期後半・晩期前半・晩期中葉・晩期後半）に分け、その様相を概観していきたい。

以下、主要器種の状況を述べる。器種分類・形態分類については、久田原遺跡を踏襲していることをお断りしておく。なお、表で縄文時代と表記しているものは時期不詳のものであり、これらは、遺跡の状況から、ほとんどが晩期に帰属すると思われ、特に晩期前半のものが多いと考えられる。

### 2 主要器種の概要

**石鏃** 片岩製が2点出土している以外には、すべてサヌカイト製である。全体の形状が判明しているものが205点、先端部または基部が欠損しているため形状不明なものが31点出土している（表7）。I A・I B類が多く、II C類は皆無である。形態ごとの時期別出土状況は、晩期前半ではI A類42点、I B類39点であり、この2形態で約80%を占め、晩期中葉ではI A・I B類のみである。後期後半と晩期後半の出土点数が少なく、形態別の変遷状況を述べるにはいたらない。

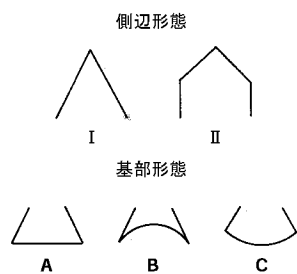
次に、各形態の時期別の計測値についてみてみる（第918図、表8）。I A類は、晩期前半では長さ1.92cm、幅1.37cm、厚さ0.33cm、重量0.8g、晩期中葉では長さ2.98cm、幅1.65cm、厚さ0.36cm、重量1.6gである。ちなみに縄文時代全時期の平均は、長さ2.09cm、幅1.43cm、厚さ0.37cm、重量1.0gとなっている。I B類は、晩期前半では長さ1.9cm、幅1.38cm、厚さ0.33cm、重量0.8g、晩期中葉では長さ2.0cm、幅1.64cm、厚さ0.34cm、重量0.8gとなり、縄文時代全時期では長さ1.9cm、幅1.39cm、厚さ0.33cm、重量0.8gであった。時期別に比較可能な形態がI A・I B類に限られるため断定はできないが、時期が下るにしたがい石鏃の大型化の傾向がうかがえる。

**石錘** 楕円形の扁平な円礫の長軸両端を打ち欠いている石錘が1点（S355）出土したのみである。石器出土量に対する石錘の比率がきわめて低い。このことから、河原で採取した原石をその場で加工し、遺跡内に持ち込まなかったことが想定される。

**石匙** 縦型のS17・S163、横型のS492の3点出土し、いずれもサヌカイト製である。横型のS492

表6 石器組成表

時期	石鏃	石錘	叩石 磨石	石皿	石匙	刃器 類	R.F. U.F.	石鏃	刃部 磨製 石斧	磨製 石斧	砥石	石錐	楔	その 他の 石器	石核	礫	Sn 剥片	剥片	計
後期後半	1					1		8		2			1	1			22		36
晩期前半	106		4	2	2	20	2	61	7	11	1	3	5	3	2	11	867	116	1223
晩期中葉	8		2	1		1	1	27	1	1		1			1	1	166	32	243
晩期後半								2										16	18
縄文時代	121	2	2	2	1	39	39	292	14	20	2	1	19	12	15	16	3663	747	5007
計	236	2	8	5	3	61	42	390	22	34	3	5	25	16	18	28	4734	895	6527



第917図 石鏃形態分類

表7 石鏃形態別出土数

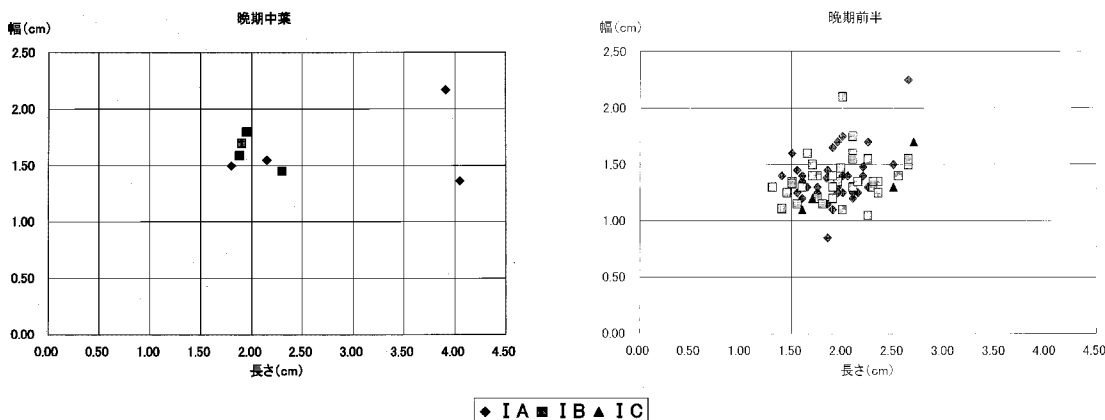
時期	I A	I B	I C	II A	II B	II C	不明	計
後期後半	1							1
晩期前半	42	39	4	10	4		7	106
晩期中葉	4	4						8
晩期後半								
計	47	43	4	10	4		7	115
縄文時代	37	42	4	6	8		24	121
総計	84	85	8	16	12		31	236

は、凹刃に調整加工されている。縦型の刃部は若干幅広の形状を呈し、S17は刃部がやや湾曲している。

刃器類 削器と搔器を分けることが難しいため、遺物台帳では一括りにスクレイパーと表記している。形態は多様であり、長方形・方形・三角形などが認められる。サヌカイト製が多数を占め、その他に片岩製も認められる。剥片の周縁全体ないしは一部に調整加工を施し、刃部を作出している。

横刃形刃器 2点出土している。いずれも片岩系の石材を使用している。

R.F.・U.F. いずれもサヌカイト製である。R.F. は刃器類の破片が含まれる可能性もある。U.F. には、片岩製が存在していると思われるが、その石材の性質から使用痕跡の判定が難しく、あえて除外した。



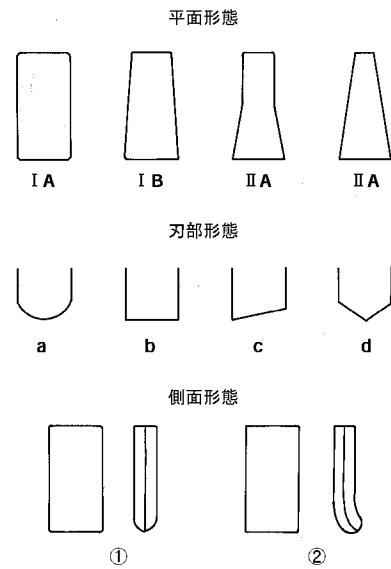
第918図 石鏃時期別長／幅分布

表8 石鏃時期別長(cm)・幅(cm)・厚さ(cm)・重量(g) 平均値

時期	I A				I B				I C				II A				II B				
	長さ	幅	厚さ	重量	長さ	幅	厚さ	重量	長さ	幅	厚さ	重量	長さ	幅	厚さ	重量	長さ	幅	厚さ	重量	
後期後半	1.25	1.39	0.28	0.5																	
晩期前半	1.92	1.37	0.33	0.8	1.94	1.38	0.33	0.8	2.13	1.33	0.35	1.05	2.07	1.41	0.38	1.1	2.09	1.46	0.37	1.03	
晩期中葉	2.98	1.65	0.36	1.6	2.01	1.64	0.34	0.8													
晩期後半																					
縄文時代	2.09	1.48	0.41	1.1	1.86	1.38	0.32	0.7	2.12	1.4	0.37	0.98	1.96	1.23	0.37	0.9	2.05	1.52	0.35	0.92	
全時期	2.04	1.43	0.37	1	1.9	1.39	0.33	0.76	2.12	1.36	0.36	1.01	2.03	1.34	0.38	1.04	2.07	1.5	0.36	0.95	

石鍬 打製石斧と同一のものである。総計390点出土している。これらの中には、刃部または基部のみのものが含まれているが、それらが接合する可能性は皆無に等しい。刃部に使用による欠損が一部認められるものの、全体形が分かるものは205点、そのなかで時期がおさえられるものは58点である(表9)。石材は、安山岩や砂岩が少量散見されるが、緑色片岩などの片岩系石材を選択的に使用している。原礫面が残存している石鍬は約3割認められ、その残存状況は、背面全面が原礫面であるものから胴部・刃部の一部のみに残存しているものまで多様である。原礫面の状況から、原石は河床の転石を使用しているようである。石鍬は、調整剥片の少なさから遺跡内で製作されている痕跡に乏しく、原石採取地で製作されたものが遺跡内に搬入されているようである。

形態分類は久田原遺跡を踏襲し、平面はⅠA・ⅠB・ⅡA・ⅡBの4形態、刃部はa・b・c・dの4形態、側面は①・②の2形態に分類し、それぞれを組み合わせている(第919図)。



第919図 石鍬形態分類

以上に基づいて、各形態ごとの出土点数をみてもみる。平面形態は、ⅠB類がもっとも多く113点を数え、ⅡB類54点、ⅠA類37点、ⅡA類1点である。刃部形態はd類12点を除きその出土点数に大差はない。ただしc類は、a・b類が使用により変形したものが一定量含まれていると考えられる。側面形態は②類が1点のみであり、その他はすべて①類である。平面形態と刃部形態の組み合わせでは、時期がおさえられるものではⅠBc類が多く出土しているが、縄文時代全時期になるとⅠB類の中で

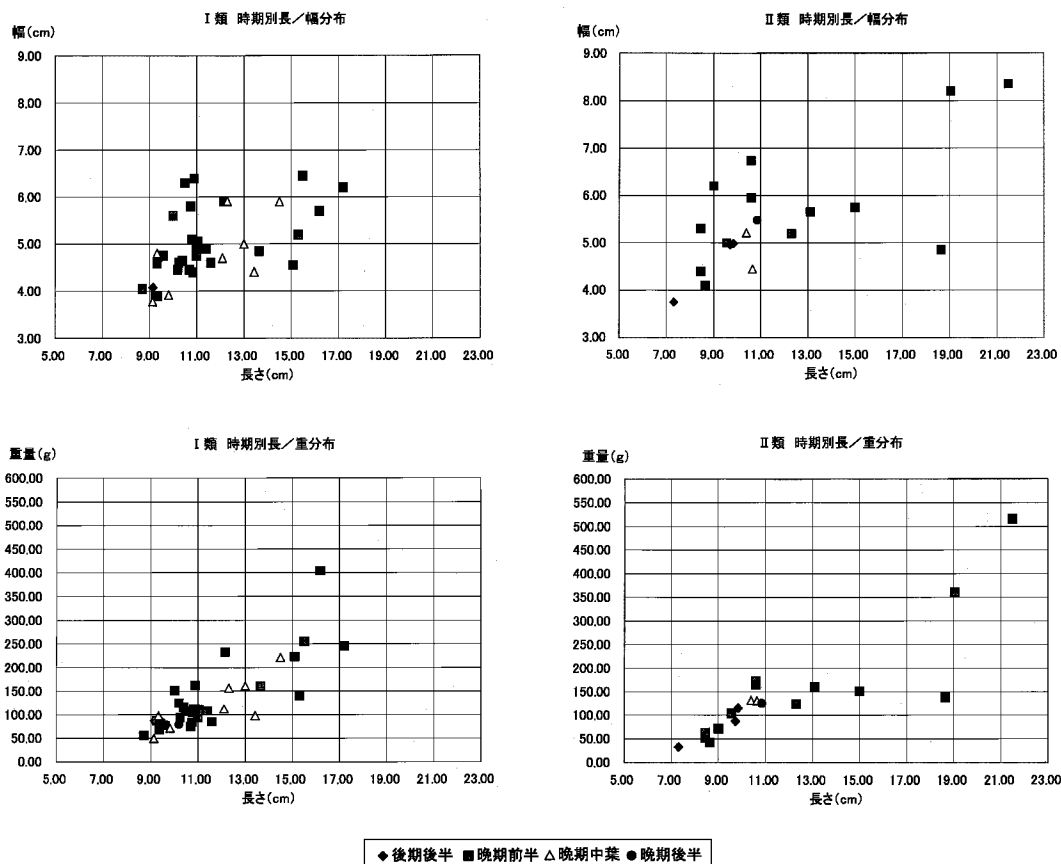
表9 石鍬形態別出土数

時期	ⅠA				ⅠB				ⅡA	ⅡB				計	
	a		b	c	d	a	b	c	d	b	a	b	c		d
	①	②	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①		①
縄文後期							1	1				1	2		5
晩期前半	3	1	2	1	3	5	13			1	2	8	1	1	41
晩期中葉	1			1	1	2	3				1		1		10
晩期後半								1					1		2
計	4	1	2	2	4	8	18			1	3	9	5	1	58
縄文時代	11		8	6	3	24	29	22	8		16	6	14		147
総計	15	1	10	8	3	28	37	40	8	1	19	15	19	1	205

表10 石鍬時期別長(cm)・幅(cm)・厚さ(cm)・重量(g) 平均値

時期	Ⅰ類				Ⅱ類			
	長	幅	厚さ	重量	長	幅	厚さ	重量
後期後半	9.28	4.38	1.59	88.22	8.96	4.57	1.62	78.43
晩期前半	11.58	5.04	1.68	138.27	12.68	5.82	1.66	163.26
晩期中葉	10.84	4.72	1.63	114.25	13.97	5.16	1.84	159.79
晩期後半	10.20	4.48	1.52	79.32	10.85	5.48	1.62	125.76
縄文時代	10.94	4.87	1.59	120.51	10.70	5.24	1.48	104.64
全時期	11.02	4.88	1.61	122.52	11.19	5.34	1.54	119.46

第4章 まとめ



第920図 石鍬時期別長／幅分布

大差がないため、有機的な関係は認められないと思われる。

平面形態別に長／幅分布と長／重分布についてみてみたい（第920図、表10）。

後期後半と晩期後半は出土点数が少ないので対象から外した。I類の長／幅分布は、晩期前半では長さが11cm前後と15cm前後に分布が集中するが、晩期中葉では9cm前後と13cm前後である。幅は5cm未満と6cm前後に分布が集中する。重量は50～100gの小型品、100～150gの中型品、150g以上の大型品に分けられる。II類の長／幅分布は、晩期前半では長さが10cm前後と13cm以上に分布し、20cmを越える超大型品も出土している。晩期中葉では点数が少ないので一概には言えないが、長さは10cm前後に分布している。長さが短くても幅広のものが認められる。重量はI類と同様に50～100gの小型品、100～150gの中型品、150g以上の大型品に分けられ、500gを越える超大型品も出土している。以上のことから、I類では晩期前半が長く、II類では晩期中葉が長いという傾向がうかがえる。

刃部磨製石斧 石材は片岩系と安山岩が使用されている。おおむね刃部への研磨は丁寧であり、なかには蛤刃状の刃部を呈しているものが認められる。また胴部・基部の一部にまで研磨されているものもある。調整加工は比較的丁寧に行われ、形態が整っているものが多い。主に短冊形を呈しているが、撥形もみられる。大きさは、最大のもので長さ16.90cm、幅4.50cm、厚さ2.03cm、重量239.99gであり、平均値は長さ11.38cm、幅4.12cm、厚さ1.72cm、重量120.72gを測る。

この石器は、形態、使用石材および計測値などが石鍬に近似しているため、石鍬の一形態に分類した方が良いかもしれない。

磨製石斧<sup>(2)</sup> 判明している使用石材は玢岩・流紋岩・斑禰岩である。刃部または基部が欠損しているものがほとんどであり、完形品は少ない。研磨は全面に施されているものから一部分のみのものまで認められ、さらに研磨を施しておらず、敲打整形のみのものも出土している。製作工程は原石の採取→剥離調整→敲打調整→研磨であるが、調整剥片、敲石、大型砥石の少なさから遺跡内で磨製石斧を製作している痕跡に乏しい。形態は乳棒状石斧や定角式石斧が認められる。

砥石 流紋岩製が2点、石材不明が1点出土している。S95は砥石面が凹状に若干湾曲し、大きさから磨製石斧ないしは刃部磨製石斧の研磨に用いられた可能性がある。

磨り石・叩き石 総計8点出土している。これらは複数の使用痕跡をもつものが多く、両者を厳密に区分できてはいない。原石は河原で採取可能な円礫ないしは棒状のもので、小口の一方ないしは両方を使用している。

石皿 総計5点出土している。形状は長方形や方形が認められ、最大長20cmを越えるものも出土している。石材鑑定を行ったものでは、すべて玢岩が使用されていた。

石錐 総計5点出土し、すべてサヌカイト製である。形態は、不定形剥片の一端に加工を施しやや長い錐部をもつもの(S12)と短い錐部をもつもの(S25・26)、細長い剥片を用いて棒状を呈しているもの(S52・77)が認められる。いずれの錐部も、断面菱形ないしは多角形を呈し、調整加工は比較的粗い。

楔形石器 両極打撃によって作られた石器で、一辺に階段状剥離をもち、その対辺に明確な細かい潰れ痕跡が認められるものを扱っている。基本的には線打面である。

その他の石器 石棒と思われるものが晩期前半に1点、石槍の先端部が1点、緑色片岩製で剥片の中央部に挟り部を作り出すように調整加工されているものが1点出土している。石核はメノウ(1点:40.35g)、黒曜石(1点:14.82g)、サヌカイト(13点:556.51g)以外にも、石鋏ないしは刃器類の素材剥片を剥離する片岩製の石核(3点:723.08g)が出土している。サヌカイト製の石核は残核となり廃棄されたもの(S319など)が多数を占めているが、それほど消耗しておらず、原礫面が残存しているもの(S321)も出土している。

剥片・碎片など サヌカイト剥片・碎片が4734点(10741.84g)出土している。これらのうち、風化状況から旧石器時代にさかのぼる可能性があるものは2点認められる。その他に黒曜石2点、チャート1点、水晶4点出土し、さらに緑色片岩などの片岩系の剥片が640点(16572.14g)出土している。片岩系の剥片は、大きさが4cm未満<sup>(3)</sup>とそれ以上<sup>(4)</sup>に分けられる。

### 3 石材利用状況

久田堀ノ内遺跡の石材利用状況をみてみる。いわゆる遠隔地石材としてはサヌカイト(13915.12g<sup>(5)</sup>)・黒曜石(21.65g)・メノウ(40.35g)、在地石材としては緑色片岩などの片岩系石材(84950.35g)・安山岩(158.87g)・砂岩(863.74g)・玢岩(5575.82g)・流紋岩(1125.03g)・チャート(3.99g)・水晶(14.12g)などが出土している<sup>(6)</sup>。石核石器・礫石器には主に在地石材が、剥片石器には緑色片岩・サヌカイト・黒曜石・メノウ・チャート・水晶などが使用されている。これらのうち、黒曜石・メノウ・チャート・水晶などは、その内容から遺跡外のものが混入している可能性が高いが、サヌカイトは石核、製品や剥片・碎片の出土量およびその分布状況などから、原石の搬入→石器製作→廃棄という工程がみとれる。

#### 第4章 まとめ

それでは、サヌカイトの搬入形態はどのようなものであったのだろうか。石核は原状を復元することが困難なほど剥片剥離が行われたものが多数を占める。しかし、大型の板状剥片が割れたものないしは垂角礫素材であった可能性を示すような、2面に原礫面を残し、厚さが4cmをこえる石核(S321)が認めらる。またS495は石核として使用されていたものがスクレイパーに転用されており、原状は剥片素材の石核であったと思われる。さらに、原礫面が認められる石器・剥片類が出土している。よって、かなり消費された状態の石核で搬入されることもあったが、ある程度形を留めた板状剥片や垂角礫で搬入されていたものも存在していたのであろう。

### 4 まとめ

第4章第1節で、遺跡の性格は季節的な食物採取地・狩猟地であった可能性を視野に入れておく必要があると指摘した。この前提にたつたうえで、石鍬の大量出土について考えてみたい。先に石鍬は、遺跡内で製作された痕跡に乏しいと述べた。仮に石鍬が根茎類・球根類のための土掘り具としての用途を持っていたとしたならば、通年的に石鍬を保持する必要はない。遺跡近郊の河床で、特定の季節(収穫時期)に必要な量だけ調達すればよいことである。このことは、石鍬の製作工程および製作工具の簡易さや、石鍬の破損のし易さなども要因となっていると思われる。つまり、使い捨ての道具であったゆえに、製作→使用→廃棄というサイクルが繰り返し行われ、その結果、石鍬の大量出土という状況が表れたと考えられないだろうか。

これまで、久田堀ノ内遺跡の縄文時代の石器について概観してきた。久田堀ノ内遺跡では、狩猟具、生産具、工具のほとんどを組成し、活発な生業活動がうかがえる結果となった。また、石材利用の面では、サヌカイトは剥片石器、緑色片岩は石鍬、流紋岩・玢岩は磨製石斧に使用され、石器によって石材の使い分け行われていたことも判明した<sup>(7)</sup>。しかし、サヌカイトの流通経路など不明な点も多く残されており、周辺の遺跡を含めた巨視的な研究が必要であらう。(小嶋)

#### 註

- (1) 杉山一雄 「縄文時代の石器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184 2004
- (2) ほぼ全面に研磨を施した石斧であるが、敲打痕が残存もしくは敲打整形のみのもも含めている。
- (3) 石鍬ないしは刃器類製作時の調整剥片と考えられる。ただし石核の調整剥片も含まれている可能性がある。出土点数は395点、重量は3071.17g。
- (4) 石鍬ないしは刃器類の目的的剥片以外と想定している。ただし、剥片をそのまま用いて使用されているものも存在すると考えられる。点数は245点、重量は13500.97g。
- (5) サヌカイトの時期別の出土量は、後期後半が103.31g、晩期前半が1857.7g、晩期中葉が422.71g、晩期後半が30.38g、時期不詳が11501.02gである。ちなみに久田堀ノ内遺跡の弥生時代のサヌカイト製石器(剥片・碎片含む)の出土点数は666点、総重量は1898.28gである。
- (6) いずれの重量も肉眼鑑定で石材が判明しているもののみである。よって実際は、これ以上の重量を示すと思われる。
- (7) しかし在り地石材の刃器類が出土しており、その在り方が注目される。サヌカイト供給量との関係を想起されるが、最初に述べたとおり時期不詳のものが多く、論を展開するにはいたらない。

## 第5節 弥生土器について

### 1 遺物の概要

久田堀ノ内遺跡で出土した弥生土器は、隣接する久田原遺跡同様、前期から終末期までの各時期のものが揃っている。その中でも、中期後葉の土器は、量的にも多く、その多くが竪穴住居・土壙・溝などの遺構やその周辺部から出土したものであり、時期的にもまとまりがある良好な資料といえる。ここではまず、中期後葉の土器を中心として、若干さかのぼる時期の土器も視野に入れ、編年的位置づけを試みておきたい。後期以降の土器については、夏栗遺跡などに良好な事例が存在するため、最終的なまとめも掲載される夏栗遺跡の報告書にて検討を加えることとしたい。

当遺跡の中期後葉の土器は、後述するように、近在する津山盆地の土器や鳥取県中部地域の土器と多くの共通点をもつものである（第926図）。このため、当遺跡の位置づけや当該期における地域間交流の解明を進めていく上で、これらの周辺地域の土器との比較検討を行うことが重要と考えられる。共有する型式や搬入土器などに注目して、地域間関係についても検討を加えたい。

### 2 土器の編年的位置づけ

#### (1) 前期から中期中葉

久田堀ノ内遺跡で最も古く位置づけられるのは、包含層から出土した前期後半の甕1035～1037である。これを1期とする。久田原遺跡の編年では2期に相当する。

中期前葉（新）に位置づけできる土器として、河道6のものがある。これは当該期の土器が出土した久田原遺跡河道5と同一遺構である。特徴としては、口縁端部の肥厚がない、頸部のしまりが弱いこと、肩部の張り出しが弱いなどが挙げられる。これを2期とする。おおむね久田原6期に対応する。

中期中葉（新）に位置づけられる土器は、調査区西側包含層の壺1038・1039・甕1049、河道7の壺945などである。特徴として、壺では肩部外面に文様帯をもつ（1038・1039）、口縁端部に連続刺突文を施した後に、沈線状の凹線文を施す（1038）、拡張しない口縁部に凹線文を施し、頸部に貼付突帯文を施す（945）、甕では口縁端部に内湾指向が出てくる（1049）などが挙げられる。これを3期とする。当該期の資料は、久田原遺跡でも少なく、包含層出土土器から想定した久田原9期に相当する<sup>(1)</sup>。

#### (2) 中期後葉（第921～923図）

当遺跡の土器は、基本的には津山盆地の土器と同じ土器様相を示す（第924図）。そのため、編年的位置づけには当遺跡周辺のものに加え、津山盆地とその周辺地域の土器も参考としたい。

津山盆地では、中期後葉に属する資料は多く存在し、これまでいくつかの編年案が提出されている<sup>(2)</sup>。しかし、意見の一致をみていない部分があり、型式組列に曖昧な部分も残している。この問題について、筆者もかつて広口壺の型式組列を基準とした土器編年を試みたことがある<sup>(3)</sup>。しかし、当遺跡のように、広口壺の事例が少ない場合は、編年的位置づけが難しいため、複数の形式を検討する必要がある。幸い、これまで良好な資料が少なかった甕については、当遺跡の事例を加えることで、より詳細な検討を加えることが可能となった。そこで、型式組列の検討は、おもに広口壺と甕の口縁部・胴部形態に注目して行うこととし、これに伴関係などの情報を加え、編年的位置づけを行いたい。

広口壺・中型甕の型式組列の検討<sup>(4)</sup> (第921図)

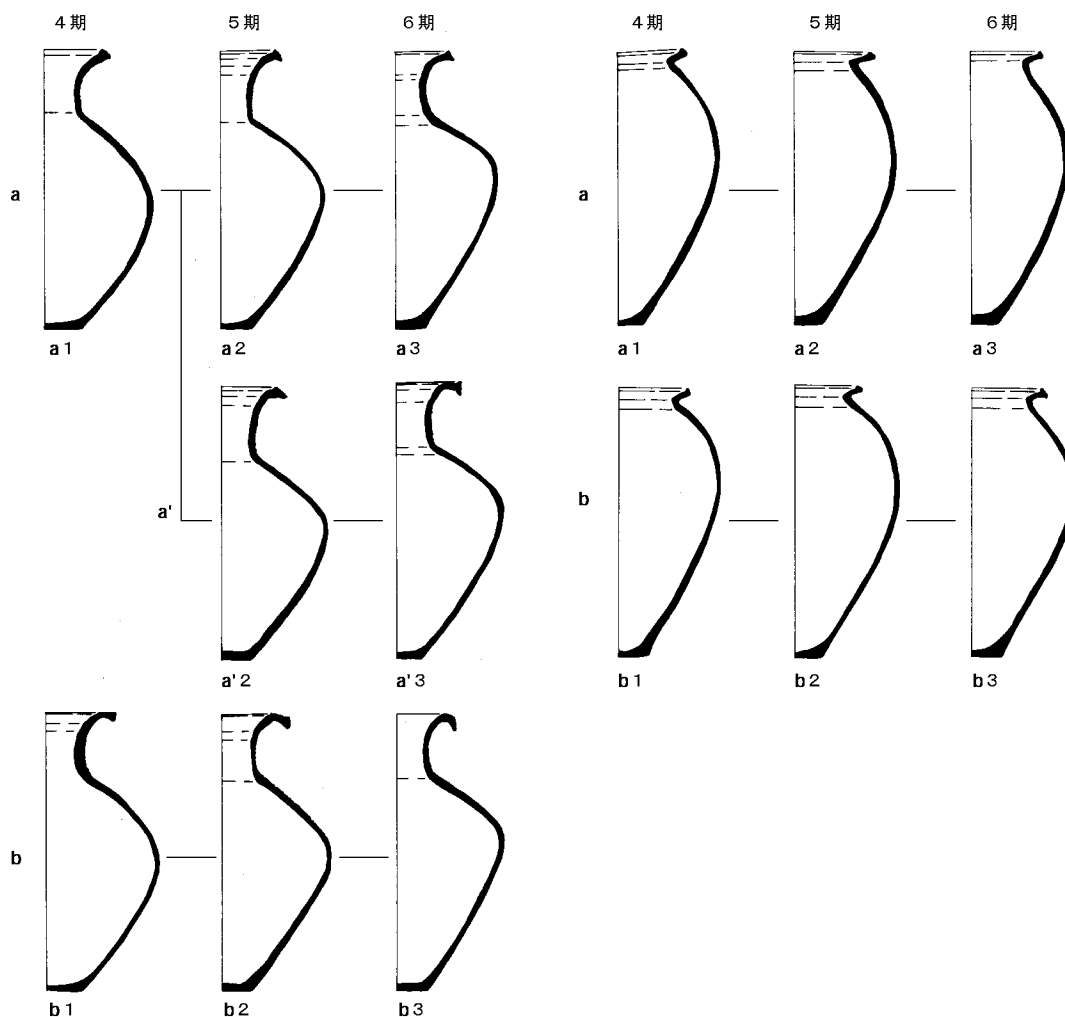
広口壺は口縁部の外反度が小さいもの (a) と大きいもの (b) とに大別が可能であり、a はさらに口縁部が横に広がるもの (a') と広がらないもの (a) とに大別する。全体に共通した変化として、胴部最大径の位置が上昇することを指摘できる。a' は a から派生したものと考えており、口縁部が横へ拡張していく傾向がある。b は口縁部が丸みをもって垂下するもの (b 1) から、屈曲するもの (b 2) へ変化し、さらに屈曲が強まるとともに器壁が厚くなるもの (b 3) へと変化する。

中型の甕は胴部が大きく張り出すもの (b) とそうでないもの (a) とに大別が可能である。全体に共通した変化としては、広口壺とは反対に胴部最大径の位置が下降すること、口縁端部が屈曲 (内湾) するものから強いヨコナデを施し、(上下に拡張し、) 広い面をもつものへと変化するなどが指摘できる。a・bともに4期では口縁端部に凹線文を施さないが、5期以降、aでは凹線文を施すものと施さないものの両者が存在し、bではほぼ凹線文を施すものに統一される。

編年的位置づけ

以上の検討を基礎として、共伴関係などを考慮し、当遺跡出土土器の編年的位置づけを行いたい。

4期 (第922図) : 竪穴住居2が良好な資料として挙げられる。そのほか河道7でも、竪穴住居2付

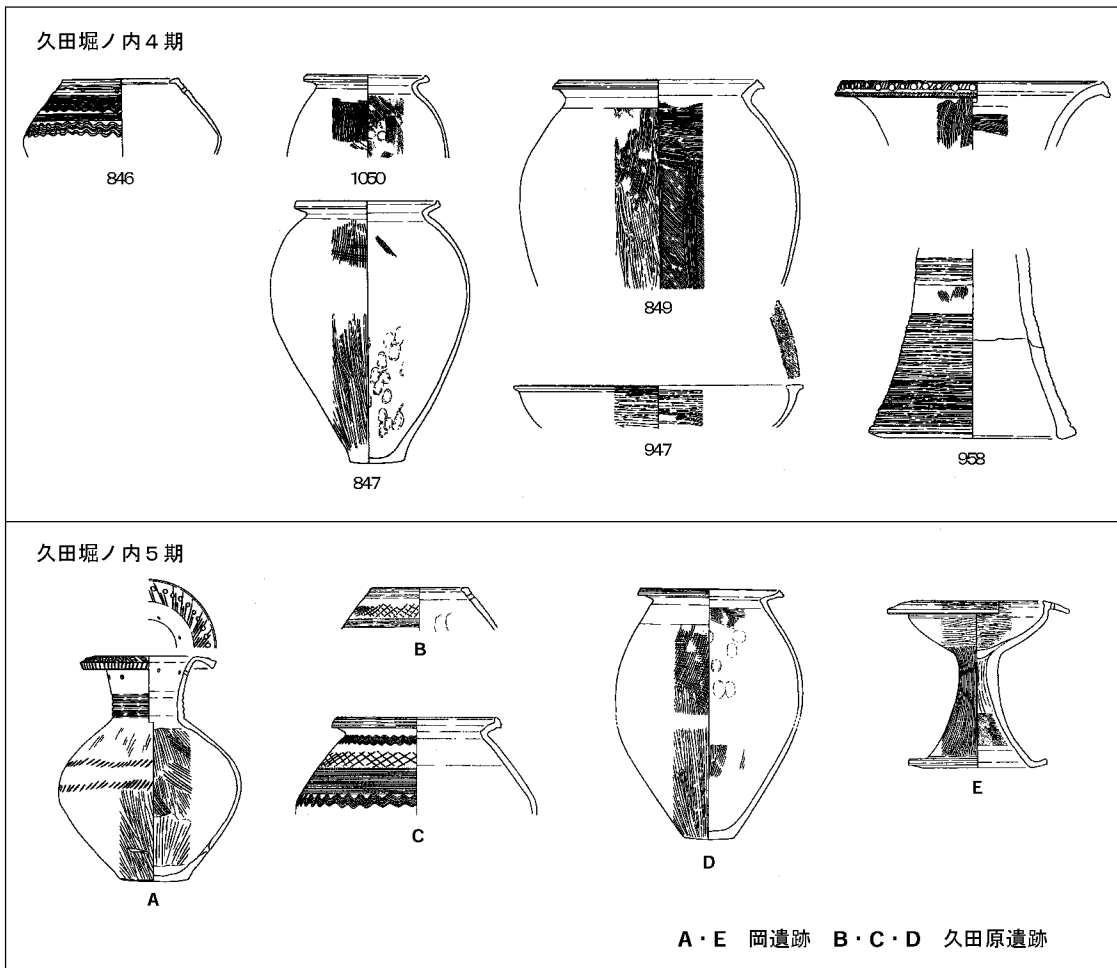


第921図 津山盆地における広口壺 (左) と甕 (右) の型式分類 (中期後葉)



第11表 編年対照表

	百間川	紫雲出	備前・備中南部	津山盆地	久田原	久田堀ノ内	杉	山ノ奥
	江見1980	小林・佐原1964	河合2004b	河合2003	河合2004a	当報告	日下2000	米田2004
前期前半	百・前・I				1			
前期後半	百・前・II				2	1		
	百・前・III				3			
中期前葉	百・中・I	中期 1			4			
					5			
					6	2		
中期中葉	百・中・II	中期 2	(+)	(III-1)	7・8			
			中期II-1					
		中期 3	中期II-2	III-2	9	3	1	
			中期II-3					
中期後葉	百・中・III	中期 4	中期III-1	IV-1		4		中期中葉(新)
			中期III-2	IV-2		5	2	中期後葉(古)
			中期III-3	IV-3		6	3	中期後葉(新)



第922図 久田堀ノ内遺跡及び周辺遺跡の弥生土器編年(久田堀ノ内4・5期)(S=1/8)

#### 第4章 まとめ

近から出土した土器の中に当該期の土器を抽出できる。無頸壺846、甕847、大型甕849、大型鉢947、器台958をこの時期に位置づけたい。包含層出土の甕1050も当該期の土器である。甕1050が第921図 a 1、甕847が同 b 1 にそれぞれ対応する。大型甕849の口縁部には2条の凹線文が確認できる。器台958は口縁部が未発達であり、連続列点文を施した後に1条の凹線文（沈線状）を施している。

5期（第922図）：当遺跡では良好な恵まれないものの、隣接した位置に所在する久田原遺跡竪穴住居5・溝6・窪地1に良好な資料が存在する。当遺跡側では、位置などから判断して、竪穴住居1が当該期に含まれる可能性が高い。また、西側丘陵上に位置する岡遺跡からも当該期の遺物は確認でき、竪穴住居1・土壇1が良好な資料として挙げられる。広口壺A、無頸壺B、甕に近い形態の壺Cのほか、甕D、高杯Eをこの時期に位置づけたい。壺Aは第921図 a' 2、甕Dは同 a 2 にそれぞれ対応する。壺Cは6期には主要な形式の1つになるものであるが、胴部の稜線が6期のものに比べて緩やかであり、口縁部の拡張も顕著ではない。高杯Eは杯端部を丸く収めるところに古い要素が認められる。

6期（第923図）：この時期のものとしては、遺跡中央部に所在する竪穴住居・土壇群と溝13・河道7中流部のこれらに近在する地点からまとめて出土した良好な資料が存在する。全体的な特徴として、稜線が強調されていることを指摘できる。また、壺や甕の口縁端部を拡張するものも顕著になる。各形式を通して凹線文は多用され、壺・台付鉢では、凹線文に斜格子文・波状文・指先連続刺突文などを組み合わせる例が多い。広口壺では a' 3（971）・b 3（1003）、中型甕では a 3（873）・b 3（973）がそれぞれ存在し、甕には把手付きの小型甕（907）も存在する。台付鉢は大型のものが少量ながらも確実に存在し（1033・1064）、注口がつくものもある（1033）。高杯は盤状口縁（879・885）と水平口縁（910・935）の2者が存在する。器台には鋸歯文の中などに赤彩を施すものがある（1034）。

以上で検討した土器の編年的位置づけと既往の土器編年との併行関係は第11表のように考える<sup>(6)</sup>。

### 3 土器などからみる地域間交流と久田堀ノ内遺跡の位置づけ

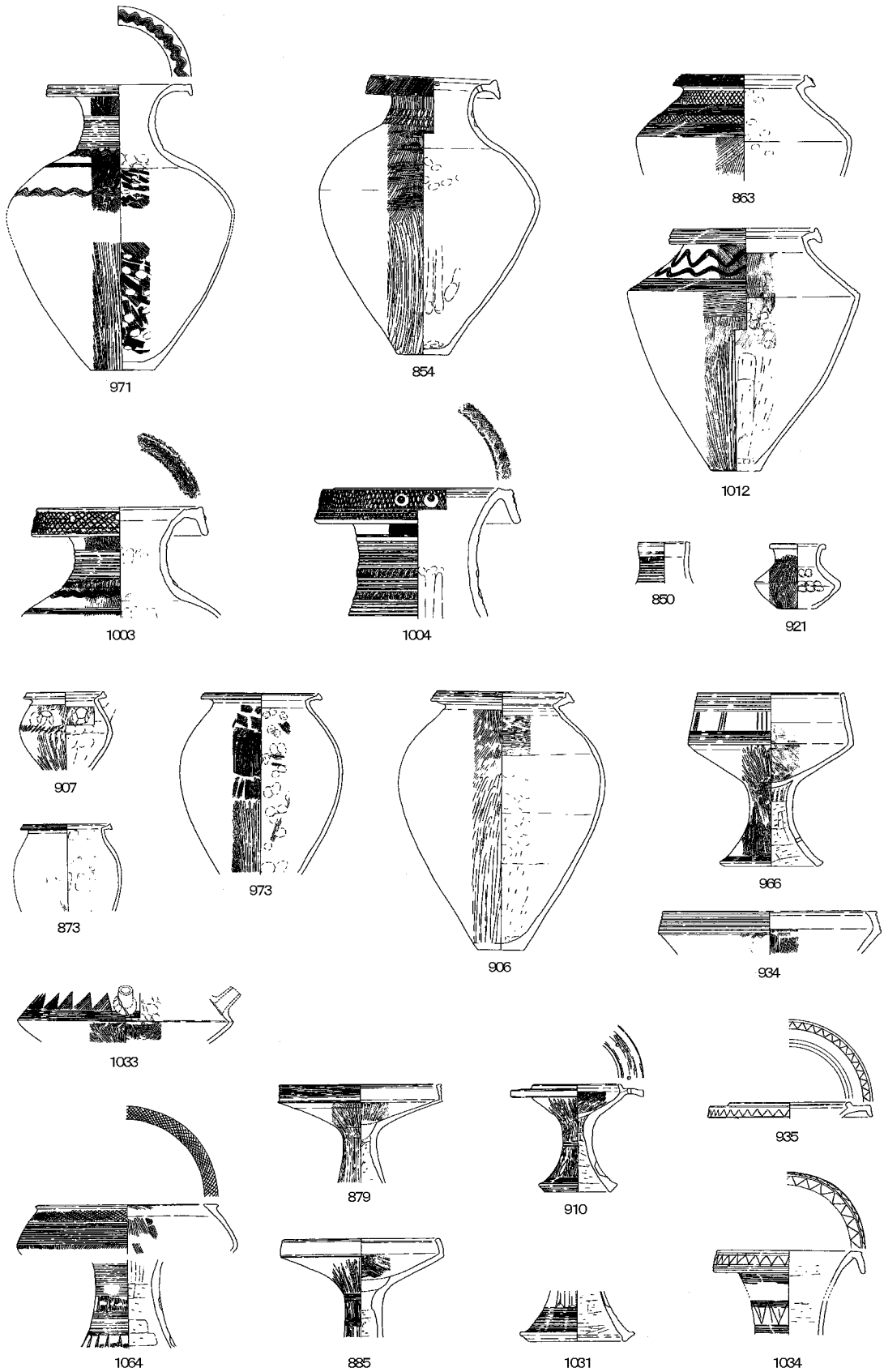
ここでは、中期後葉（末）の当遺跡と周辺地域との土器の比較検討を行い、地域間交流について検討を行った上で、他の考古資料や久田原遺跡での成果を加えて、当遺跡の位置づけを明確にしたい。

まず、津山盆地の土器様相であるが（第924図）、基本的には当遺跡のものと同様である。

次に鳥取県中部地域であるが、まず注目されるのは、近年発掘調査が行われ、多くの遺物が出土した青谷上寺地遺跡である。ここからは、山陰東部地域に分布する土器が主体を占める一方で、当遺跡や津山盆地と同様の特徴を有する土器が定量出土している<sup>(6)</sup>（第925図）。胎土や技法の特徴から搬入品と考えられる3以外は在地産である可能性が高い<sup>(7)</sup>。このことから、これらの土器は搬入・模倣品ではなく、在地の土器として製作・使用された、つまり土器様式の構成要素となっていたと考える。これは他の鳥取県中部地域の遺跡でも定量出土していることから指摘できる（第926図上）。

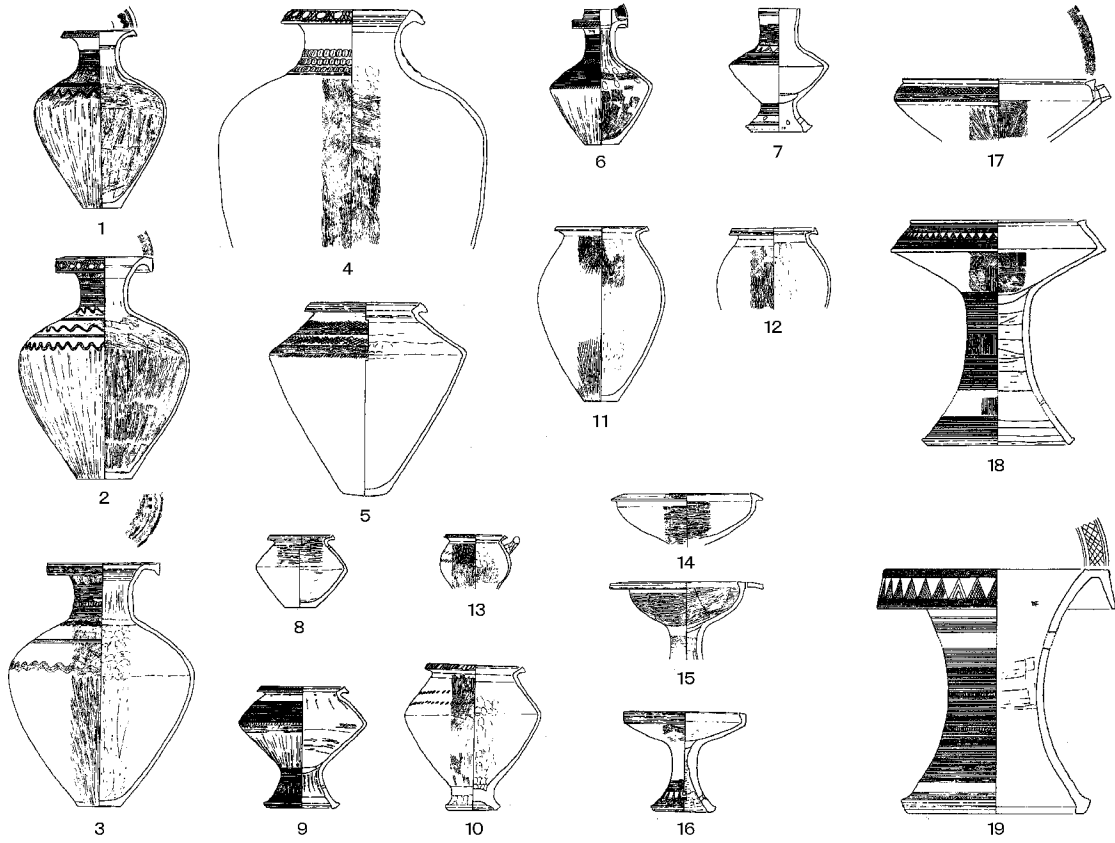
同様のあり方は、津山盆地から吉井川沿いに南に下った位置に所在する佐伯町才地遺跡でも見受けられる（第926図下）。才地遺跡では県南部に分布する土器が主体を占める一方、一部型式の壺・台付鉢・高杯・器台では、定量の津山盆地と共通点を持つものが在地産として存在する。

これらの事例から、隣接した地域の一部型式を共有し、在地で主体を占める型式と組み合わせる製作・使用することが、弥生時代中期後葉の中国地方東部では一般的なあり方であったことが推察される。このことは、弥生土器様式について考える上でも重要である。複数地域の型式を同じ組み合わせで用いる地域の広がりは一定のまとまりをもつことから、地域的な境界の意識はあったと考える。



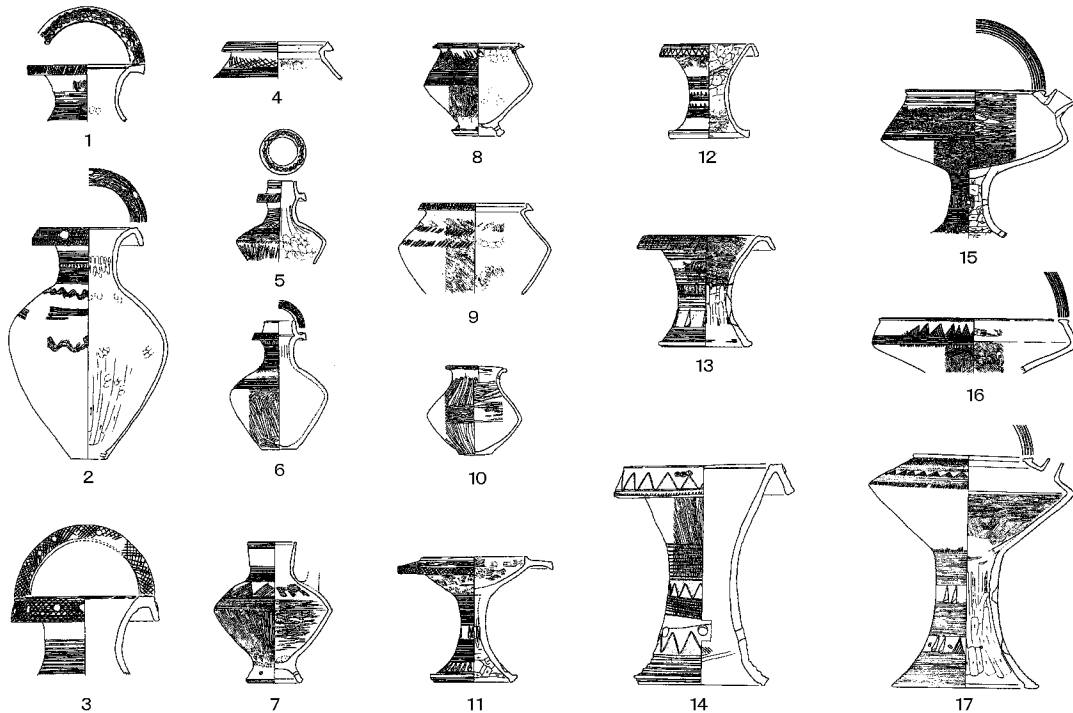
第923図 久田堀ノ内遺跡弥生土器編年（久田堀ノ内6期）（S=1/8）

第4章 まとめ

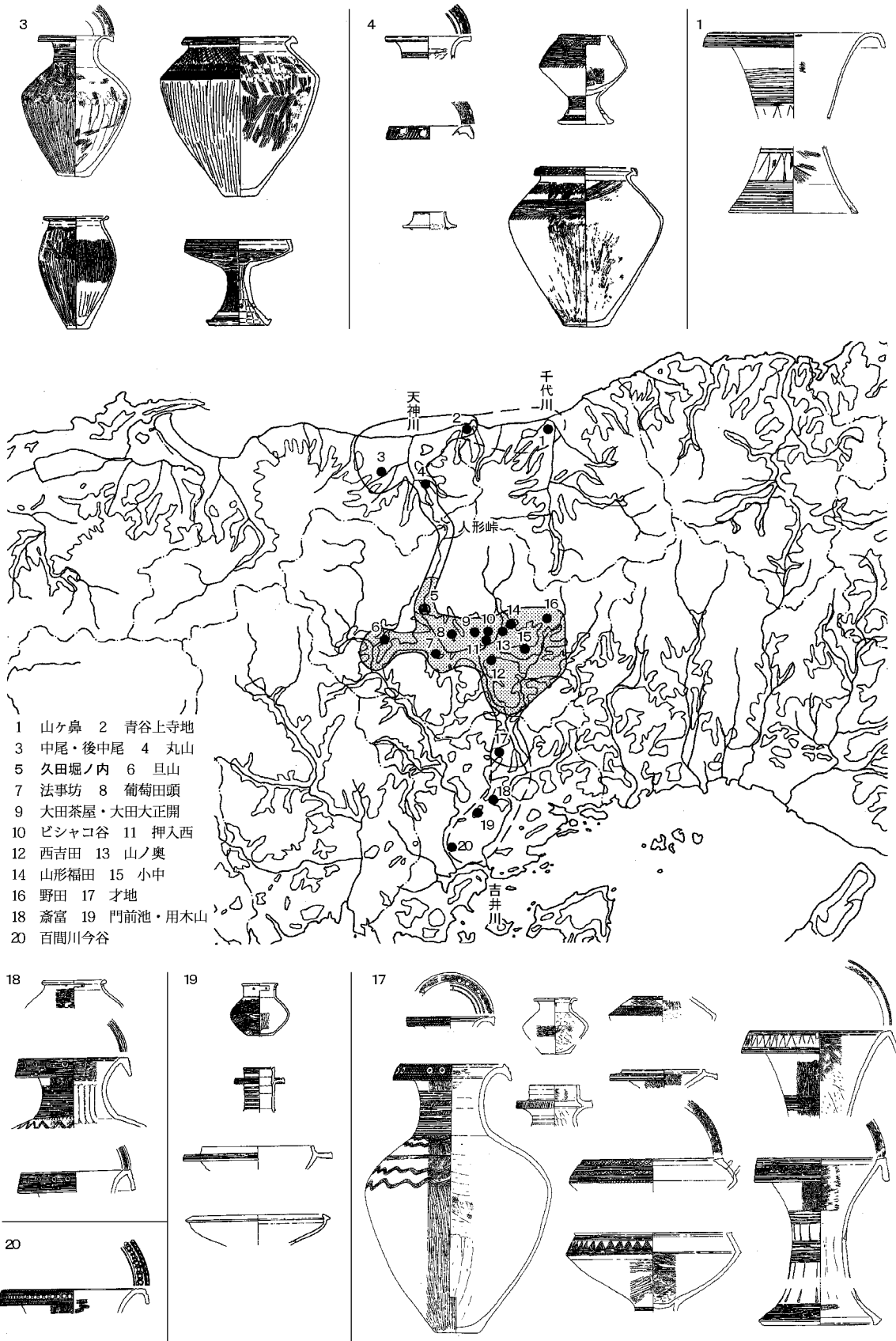


1・2・6・9 津山市ピシャコ谷遺跡 3・4・10・12・13・17 津山市大田茶屋・大田大正開遺跡  
 5・8・16 勝北町山形福田遺跡 7 津山市押入西遺跡 11・14 勝北町山ノ奥遺跡  
 15 鏡野町葡萄田頭遺跡 18 久米町法事坊遺跡 19 津山市西吉田遺跡

第924図 津山盆地の土器様相（弥生時代中期末）（S = 1/12）



第925図 鳥取県青谷上寺地遺跡における類例（弥生時代中期後葉）（S = 1/12）



第926図 土器様式・型式の広がり（弥生時代中期後葉）（土器の縮尺：1/12）

#### 第4章 まとめ

その意味では、当遺跡は津山盆地と同一の土器様式に含まれると判断される。当遺跡は、津山盆地から日本海側に出るための交通の要衝に位置し、青谷上寺地遺跡などの日本海沿岸地域との交流を物語る資料が出土することからも、重要な役割を担った集落遺跡と評価できるであろう。

このことは、土器以外の考古資料からも指摘できることである。久田堀ノ内遺跡竪穴住居9からは碧玉製管玉の製品とともに鉄器製作の存在を示す鉄片も出土しており、西側丘陵上に位置する岨畑遺跡からは中細形銅剣を再加工したと指摘されている銅鏃が出土している。これらは日本海側との交流を示す遺物であり、日本海沿岸地域との強い結びつきを指摘することができる。

日本海沿岸地域の情報は、本稿で検討した土器様式(型式)の広がりから、鳥取県中部地域から天神川—吉井川を介して得られていたことを指摘できる。これは隣接する久田原遺跡の中期初頭～中葉の遺物の検討から推測した成果と同様であることから、中期初頭以降交流を保っていたことがわかる。

一方、県南部地域ともサヌカイトなどの存在から、交流を保っていたと推察する。ただし、中期中葉までとは異なり、土器型式の共有が明瞭でないことから、日本海沿岸地域に対しての交流とのありかたとは質的な違いを指摘でき、より後者に対しての比重が強まっていることを指摘できる。

それは鉄器・青銅器や玉などの考古資料から推測できるように、新しい技術や情報などを重視した結果とも考えられ、この時期を前後して、主要利器が石器(サヌカイトなど)から鉄器へ移り変わっていく過程で、これまで形成されてきた流通のネットワークが再編されると指摘されていること<sup>(8)</sup>とも関わりをもつ動きでもある。後期後葉以降、当地域の土器様式が日本海沿岸地域のものと親縁性を強めていくが、その下地はこの段階には形成されていたとみることができよう。

以上の成果は、豊富な資料を有する当遺跡を含めた久田地域の内容が明らかにされたことによって得られたものである。今後さらに分析を進め、地域間交流をより詳細に検討していきたい。(河合)

#### 註

- (1) 当該期の良好な資料は、近在する杉遺跡土器溜り(奥津町教育委員会『杉遺跡』2000)に存在する。
- (2) 山磨康平「高本遺跡出土の弥生土器について」『県埋文調査報告8』岡山県教育委員会 1975  
行田裕美「西吉田遺跡中期弥生土器編年について」『西吉田遺跡』市埋文調査報告10 津山市教育委員会 1985  
保田義治「金井別所遺跡出土弥生土器の編年的位置」『金井別所遺跡』市埋文調査報告25 津山市教委 1988
- (3) 河合 忍「弥生土器の空間的境界を考える」『中部弥生時代研究会第8回例会発表要旨集』2003
- (4) 型式組列の参考とした資料は次の遺跡資料である。広口壺 a 1 : 作東町高本遺跡、a 2・a'2・b 2 : 津山市金井別所遺跡、a 3・b 3 : 津山市ビシャコ谷遺跡、a'3 津山市大田大正開遺跡、b 1 : 津山市大田茶屋遺跡・同西吉田遺跡、甕 a 1 : 大田茶屋遺跡、a 2 : 久田原遺跡・金井別所遺跡、a 3 : 勝北町山ノ奥遺跡、b 1・b 3 : 当遺跡、b 2 : 津山市一貫西遺跡・山ノ奥遺跡。
- (5) 中期中葉と中期後葉との境は、学史を重視し(小林・佐原1964ほか)、B種凹線文の出現を基準とした。江見正己「時期区分について」『百間川原尾島遺跡1』県埋文調査報告39 岡山県教育委員会 1980  
小林行雄・佐原眞『紫雲出遺跡』詫間町文化財保護委員会 1964  
河合 忍「備前・備中地域」『弥生中期土器の併行関係』埋蔵文化財研究会 2004b  
河合 忍「弥生土器と弥生集落」『久田原遺跡・久田原古墳群』県埋文調査報告184 岡山県教育委員会 2004a  
日下隆春「弥生時代の集落と遺物」『杉遺跡』奥津町教育委員会 2000  
米田克彦「山ノ奥遺跡における弥生時代の集落構造と変遷」『山ノ奥遺跡・池東・途田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告183 岡山県教育委員会 2004
- (6) 青谷上寺地遺跡では、当遺跡以外の津山盆地とその周辺地域では確認例がない、鋸歯文の中に赤彩を施す器台(第924図14)が出土しており、当遺跡と青谷上寺地遺跡との関係を示唆する重要な資料である。
- (7) 資料の実見を行った。実見に際しては、高垣陽子氏をはじめとする鳥取県教育文化財団の職員にお世話になった。なお、比較対象として、播磨地域の土器を実見した際に、龍野市教育委員会の岸本道昭氏にお世話になっている。
- (8) 襦宜田佳男「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店 1998

## 第6節 弥生時代の水田について

本遺跡では、中期後葉の水田遺構を検出した。この水田の1区画の面積は、11～30㎡が50%で、31～50㎡が22%になり、中型の区画が7割を超える。中型以外にも1～10㎡の小型の区画が17%で、50㎡以上の大型区画が11%あり、大きさにバラツキがある。形状は、小型のものが長方形で、大型は正方形に近いものが多い。また小型の区画は、河川に対して直行して築かれる。この水田は、県内で見つかっている他の遺跡と比べて、どのような相違点があるか、古い時期順に見てみる。

前期 前期の水田例としては、北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地藏遺跡<以後北方遺跡群と便宜的に呼称>（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』126、以後『県報告』○と表示）や津島遺跡（『県報告』173）、百間川沢田遺跡（『県報告』51,59,84,119）、加茂政所遺跡（『県報告』138）、清水谷遺跡などがあり、畦畔が明瞭なのは、北方遺跡群、津島遺跡、百間川沢田遺跡である。百間川沢田遺跡（第927図1）は前期中葉で、1区画の面積が1～10㎡が63%、11～30㎡が37%になり、30㎡以内にすべてが収まる。形状は長方形がほとんどである。北方遺跡群、津島遺跡（第927図2）は前期中葉から後葉にかけてで、30㎡以内が多い。一方31㎡以上の区画も見られ始めるが、短辺は30㎡以内の区画と変わらず2～3m前後で、その分長辺が長くなる。

中期 中期の水田例として、久田堀ノ内遺跡のほか、北方遺跡群と百間川沢田遺跡がある。北方遺跡群は、1区画の面積が1～10㎡は52%、11～30㎡が44%でほとんどが30㎡以内となり、規模は前期に似る。この水田は、中期でも古相になるのかもしれない。規模は前期に類似するが、形状は長辺・短辺の差が前期より減るなどの違いがある。百間川沢田遺跡（第927図3）は、前期中葉の時期で、1～10㎡の区画は全くなく、11～30㎡は23%で、小区画が減少する。その一方31～50㎡が63%、50㎡以上が14%と大型区画が増える。形状は、長方形ではあるが、短辺が3～5mになり、長短の差が減る。また近接する区画でも、大小のばらつきが目立つ。

後期 後期の水田例としては、北方遺跡群、百間川沢田遺跡、百間川兼基遺跡、百間川原尾島遺跡などがあり、ほとんどが後期後半の例であるが、津寺遺跡（『県報告』116）では前半と後半の2面ある。前半の水田は、ほとんどが100㎡を超えた大区画であり、後半の水田は100㎡以上の区画が前半より少なくなる。ただし形状は前半より後半の方が正方形に近づく。後期後半は北方遺跡群、百間川沢田遺跡、百間川兼基遺跡（『県報告』51,114）、百間川原尾島遺跡（『県報告』56,88,97,106,179）などがあり、2つのパターンに分かれる。北方遺跡群、百間川沢田遺跡は、1区画の面積が11～50㎡までで全体の7割を占める。形状は限りなく正方形に近づく。また近接した区画に大きさの統一性が見られる。百間川兼基遺跡と百間川原尾島遺跡（第927図5）の例では、50㎡以上が最も多く、中には100㎡以上のものや数は少ないが200㎡を超える区画まで存在する。小型の区画はほとんど無く、30㎡以上に全てが収まっている。形状や面積の統一性は、先のパターンと同じである。

以上をまとめると、前期は1区画当たりが1～30㎡以内に収まる小区画のものが多く、形状は短辺が2～3m前後の長方形が多い。時期が進むにつれて面積は大きくなるが、短辺幅は変わらず、長辺が長くなり、細長い形状になる。中期になると小型の区画と大型の区画のばらつきが見られるようになる。形状は依然長方形であるが、短辺幅が3～5mと広がる。後期になると、1区画の大型化が顕著になる。ほとんどの区画が50㎡を超え、100㎡・200㎡のものも見られる。形状は正方形に近づき、

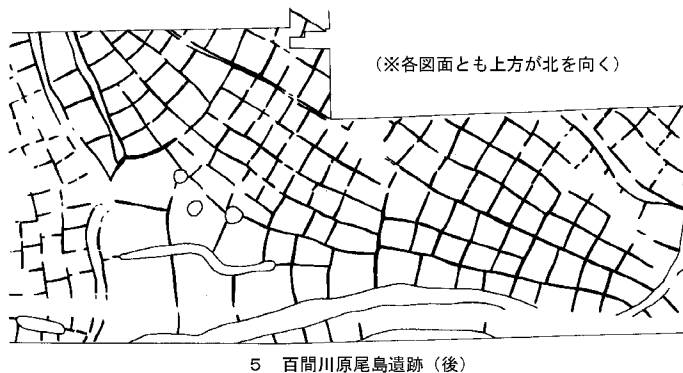
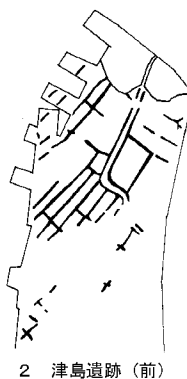
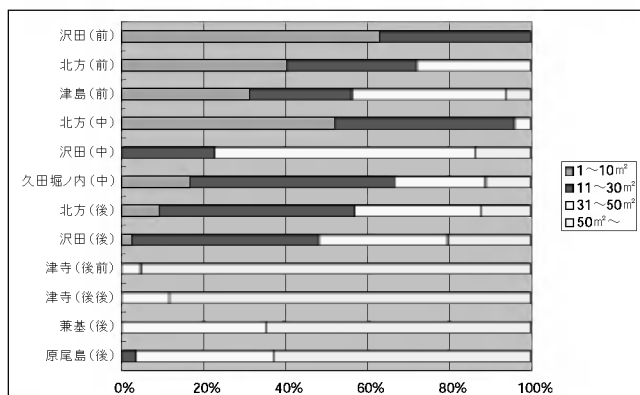
近接した区画での形状と面積が類似するため、整然とした並びになる。

久田堀ノ内遺跡水田と他遺跡水田の相違点

久田堀ノ内遺跡の水田は、1区画あたりの面積をみると、大小様々な大きさが存在する。これは弥生時代でも中期の特徴であり、中期中葉の百間川沢田遺跡でも同じ傾向である。ただし面積比率の数値は、後期の北方遺跡群と百間川沢田遺跡により近い。形状は、小型の区画が長方形、大型の区画が正方形で、前・中期と後期の折衷になる。面積・形状からみると、久田堀ノ内遺跡の水田は、前期から後期へと進化する流れの中で解釈ができる。ただし、区画ごとの高低差が最高約0.5mほどあり、これは、他遺跡では類例がない。また小型の長方形区画が、他遺跡では河川に並行するのに対し、直行するなどの違いもある。このような違いは他遺跡の水田全てが県南部の沖積地で発見されているのに対し、久田堀ノ内遺跡は県北部のしかも標高が高い場所にあることが原因であるかもしれない。また、久田堀ノ内遺跡の水田には、下層に鉄分やマンガン等の沈殿がみられない。同じような状況の前期津島遺跡では、その解釈に「天水田」もしくは「畑」などの可能性を示唆している<sup>(1)</sup>。本遺跡の水田は、面積と形状は後期的な要素はあるものの、百間川原尾島遺跡などにみられるような広大な水田とはかけ離れていると思われ、中期後葉と言えども前期的な流れが続いていたと考えられる。 (小林)

註

(1) 岡本泰典「弥生時代前期の水田について」「津島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』181 岡山県教育委員会 2004



第927図 岡山県内発見の主な水田(1/2,000)〈各報告書を加筆〉



## 第7節 中世の遺構と遺物について

### 1 はじめに

中世の遺構には、居館を囲繞する堀、掘立柱建物、墓、焼成土壙、集石土壙、埋甕遺構、その他の土壙、溝などがある。また、これらの遺構及び包含層からは、土師器、須恵器、備前焼、勝間田焼、亀山焼、瀬戸・美濃焼、常滑焼、瓦質土器、中国産ほか陶磁器、肥前系陶磁器といった多種多量の遺物が出土した。そして、これらのうち製作ないしは使用された年代の明らかな遺物を見ると、12世紀～16世紀にかけての時間幅がみられた。その一方で、後世における開墾が遺跡全体にわたって旧表土面を削平していたため、層位的な発掘によって遺構の配置やその変遷を捉えることは不可能であった。ところで、出土遺物の大半を占める土師質土器については、おおむね地元産と考えられている。これは、吉備系土師器碗を主体とする県南地域とは様相を異にし、それらの年代が押さえられないことには遺構の年代やその変遷について決定できないという問題がある。そこでまず土師質土器の杯皿類を中心に分類を行い、その変化を捉えることにする。

### 2 土器について

#### (1) 土師器杯皿の分類

土師器の杯皿類は、主にハレといった儀礼の場に用いられ、直ちに廃棄されたと考えられている。そこで、一括性が高いとみられる墓・土器溜まりにおける杯皿類の法量の比較や形態から、以下の通りに分類を行う。

##### a 杯類

A類 体部が内湾気味に立ち、口径が11.3～14.8cm、器高2.8～3.9cmを測る。他類に比べて、器高が低い。

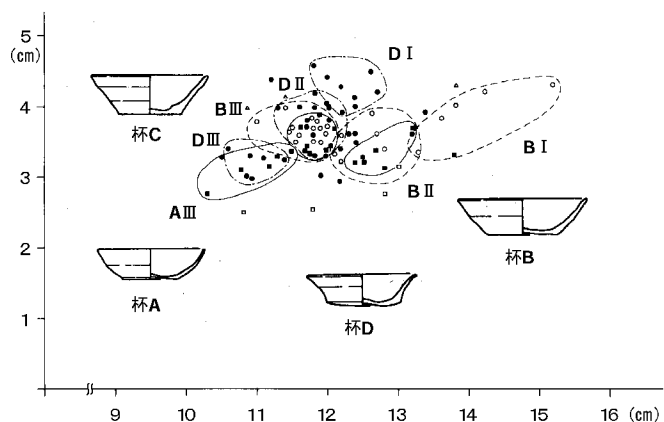
B類 口径が11.0～15.2cm、器高3.2～4.3cmを測り、外上方に直線的にのびる体部をもつ。

C類 B類に比して底径が小さく、口径が10.8～11.4cm、器高は4.0～4.2cmである。体部は、外上方に真っ直ぐに立つ。他類に比べて、出土数は少ない。

D類 円盤高台状を呈し、体部は直立気味に立ったのち大きく外反する。口径が9.5～12cm、器高は3～4.5cmの間にある。外底部が内側に窪むことも特徴である。

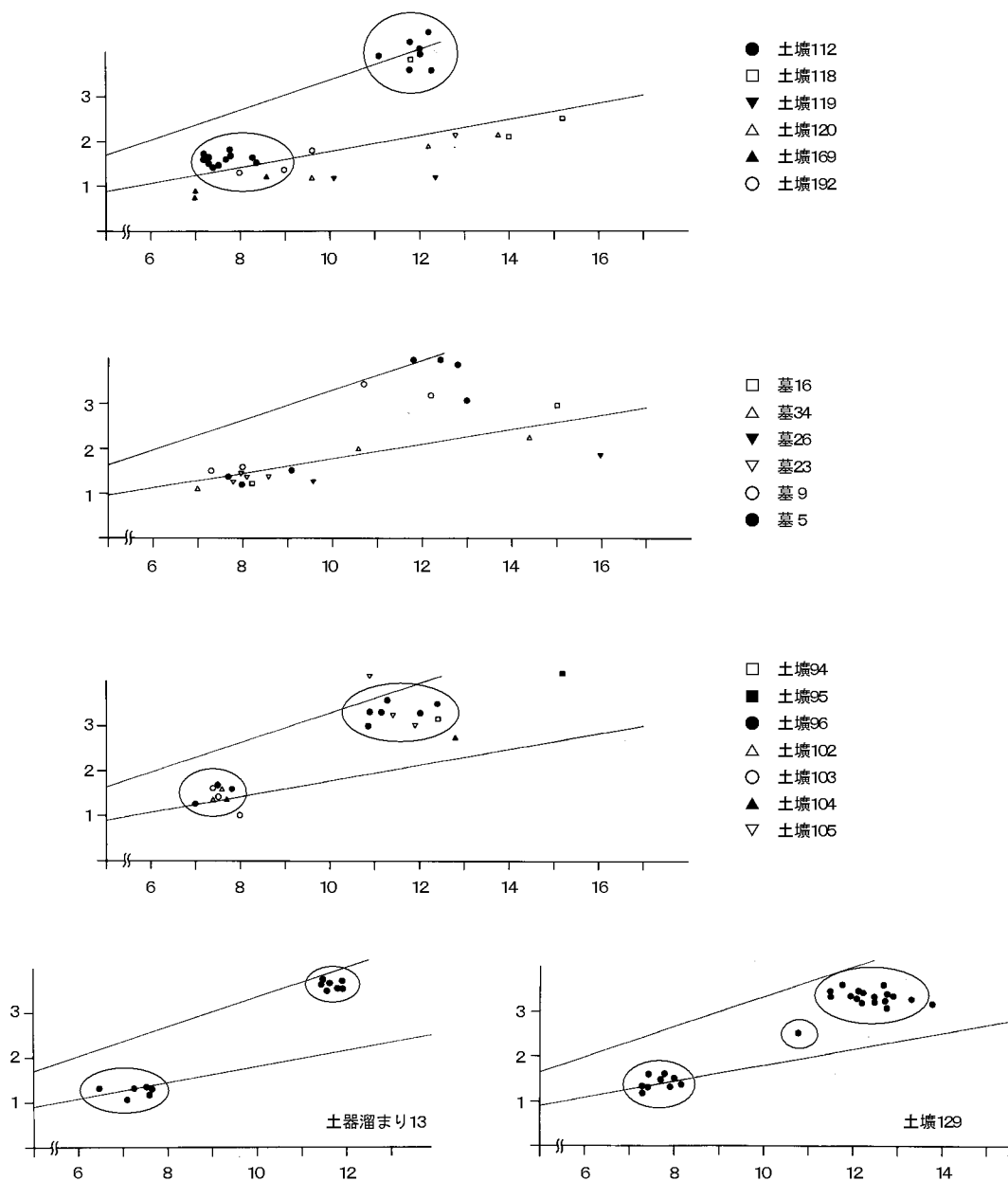
さらに、各類はそれぞれ大きさによって大・中・小のⅠ～Ⅲに細別できる(第928～930図)が、これが時期差を反映している可能性がある。

##### b 皿類



第928図 土師器杯類の法量分布

第4章 まとめ



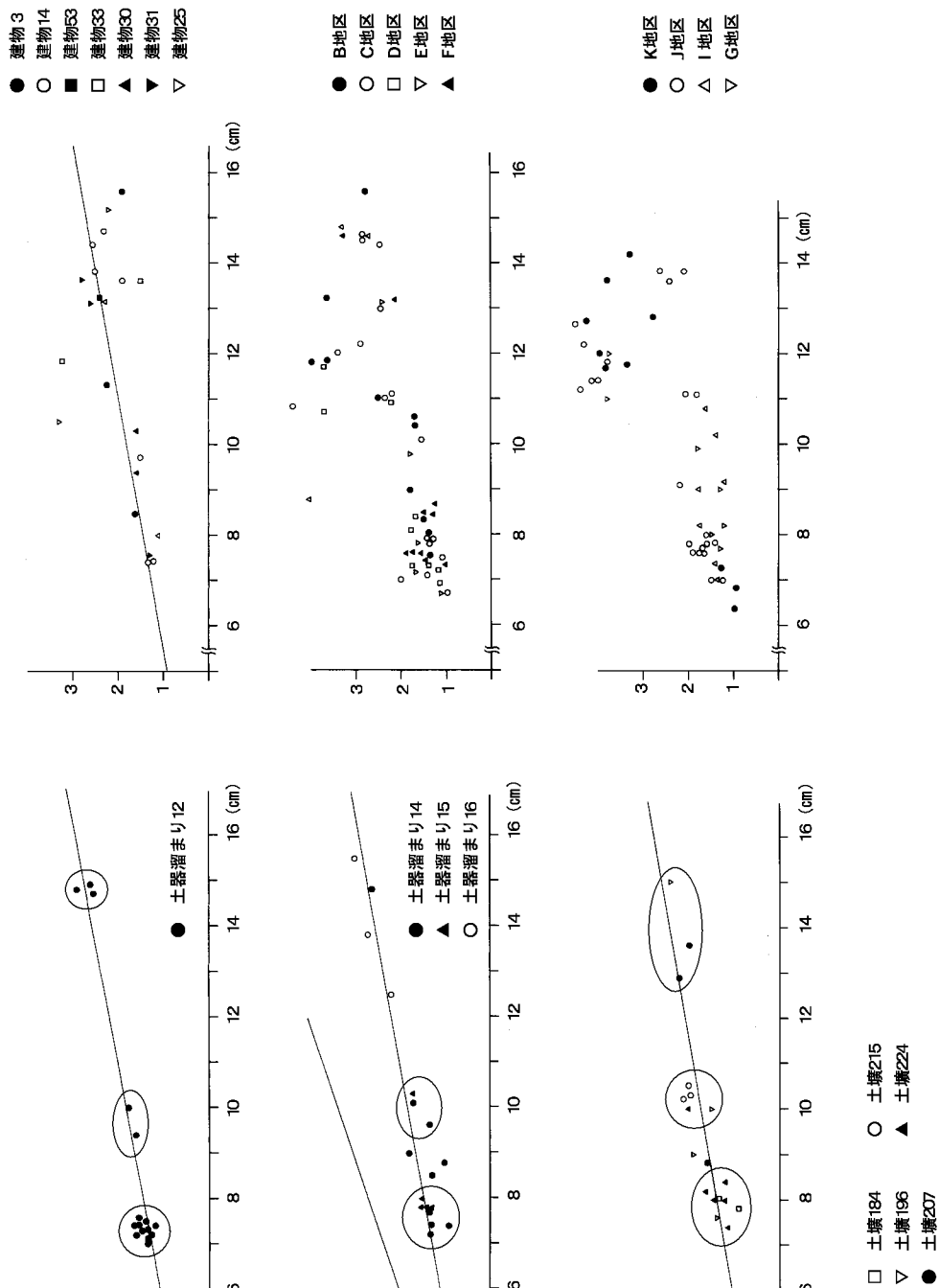
第929図 土師器杯・皿の遺構別法量分類①

皿A類 「久田原遺跡」<sup>(1)</sup> 報文中において、小皿と称したものが圧倒的である。遺跡全体から普遍的に出土し、口径は7.0~8.5cm、器高1.0~2.0cmの中に収まる。底部糸切りが大半ではあるが、ヘラ切りも数個体認められた。器形は、厚い底部に短く立つ口縁を持つもの、ユビオサエの残る2864などバリエーションに富むほか、法量の分化がみられ、先のA I類のほかにも、口径が9~11cmの間にある(A II)。口径は13~15cm程度(A III)、15cm以上を測るA IV類がある。皿B類は口径が10.5~13cmを測る。器高は2.5~3.2cmで、杯・皿A類の中間に相当する。皿C類は、B類に比して器壁が薄く、胎土も精良である。底部はすべて回転糸切りで仕上げられる。また、内底面の周縁に浅い窪みが巡ることも特徴である。時期は、B類に後出し近世と考えられる。

これら以外にも、土師器の播鉢・鍋・釜、香炉が出土している。

(2) 陶器

瀬戸・美濃焼がコンテナ1箱分、破片数にして120点余りが出土している。内訳は、花瓶1点、瓶子5点（口縁部1点、底部1点）・三足盤5点、盤1点、香炉2点、平椀口縁部23点、同底部8点、輪花皿3点、卸皿14点、菊皿2点、天目19点、播鉢1点、不明片口部1点、盤など大形の底部3点、小壺など小形の底部2点を数えた。時期的には、14世紀末（井上編年窖窯10期）<sup>(2)</sup>の資料を中心とするが、



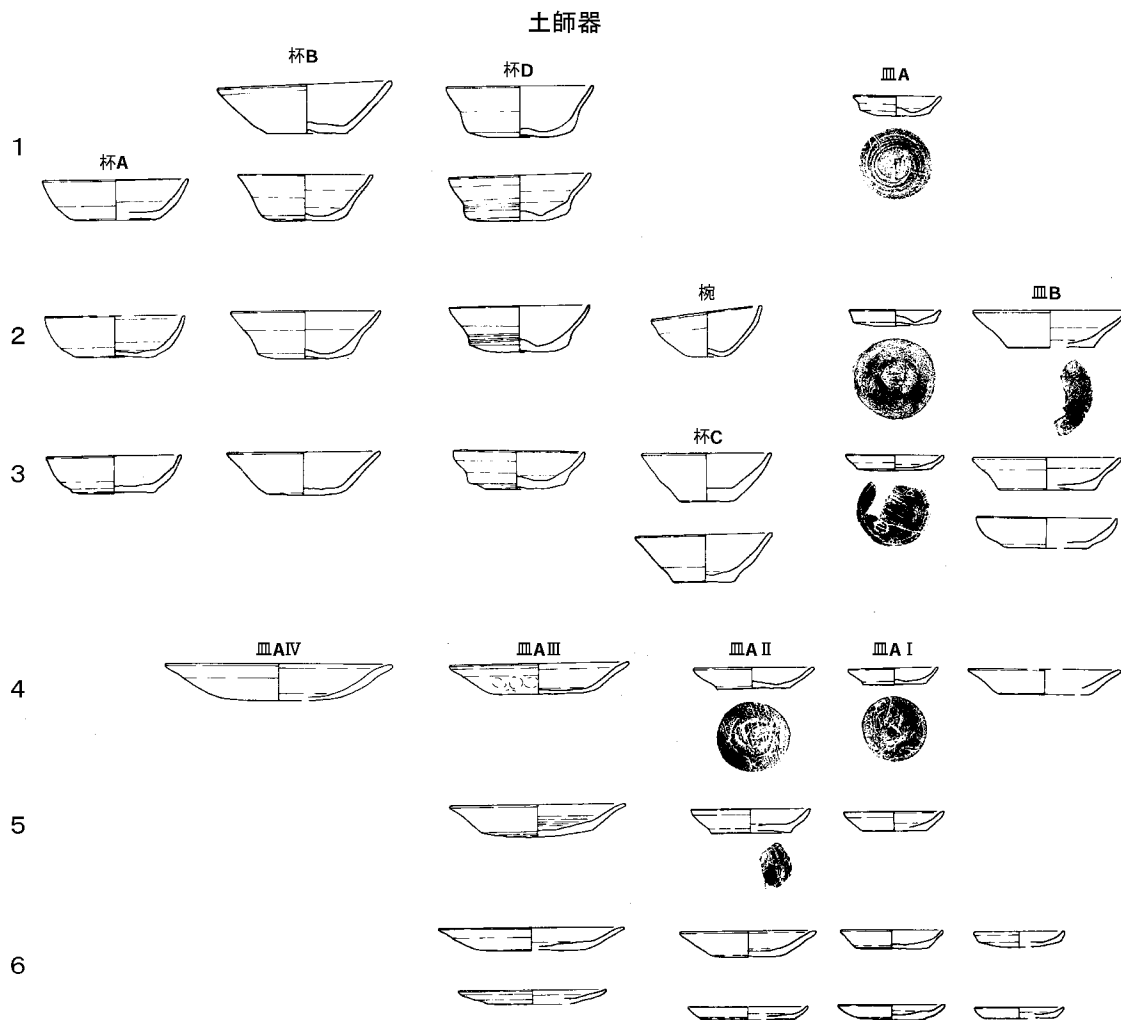
第930図 土師器杯・皿の遺構別法量分類②

13世紀末～14世紀（7・8期）や、15世紀代以降のものも（11～13期、大窯1～Ⅲ期）みられる（第932図）。隣接する久田原遺跡では、骨蔵器として使われた四耳壺が時期的には最も古く、12世紀末頃である。現在のところ、県南部においてこれほどまとまって出土する例はなく、その流通経路は、播磨・但馬・伯耆など美作周辺地域を想定させる。これは、居住集団の性格付けとも関わってくる可能性もあるが、今後の検討課題としたい。なお、古肥前の碗（天正10年代）も出土している。

（3） 炆器

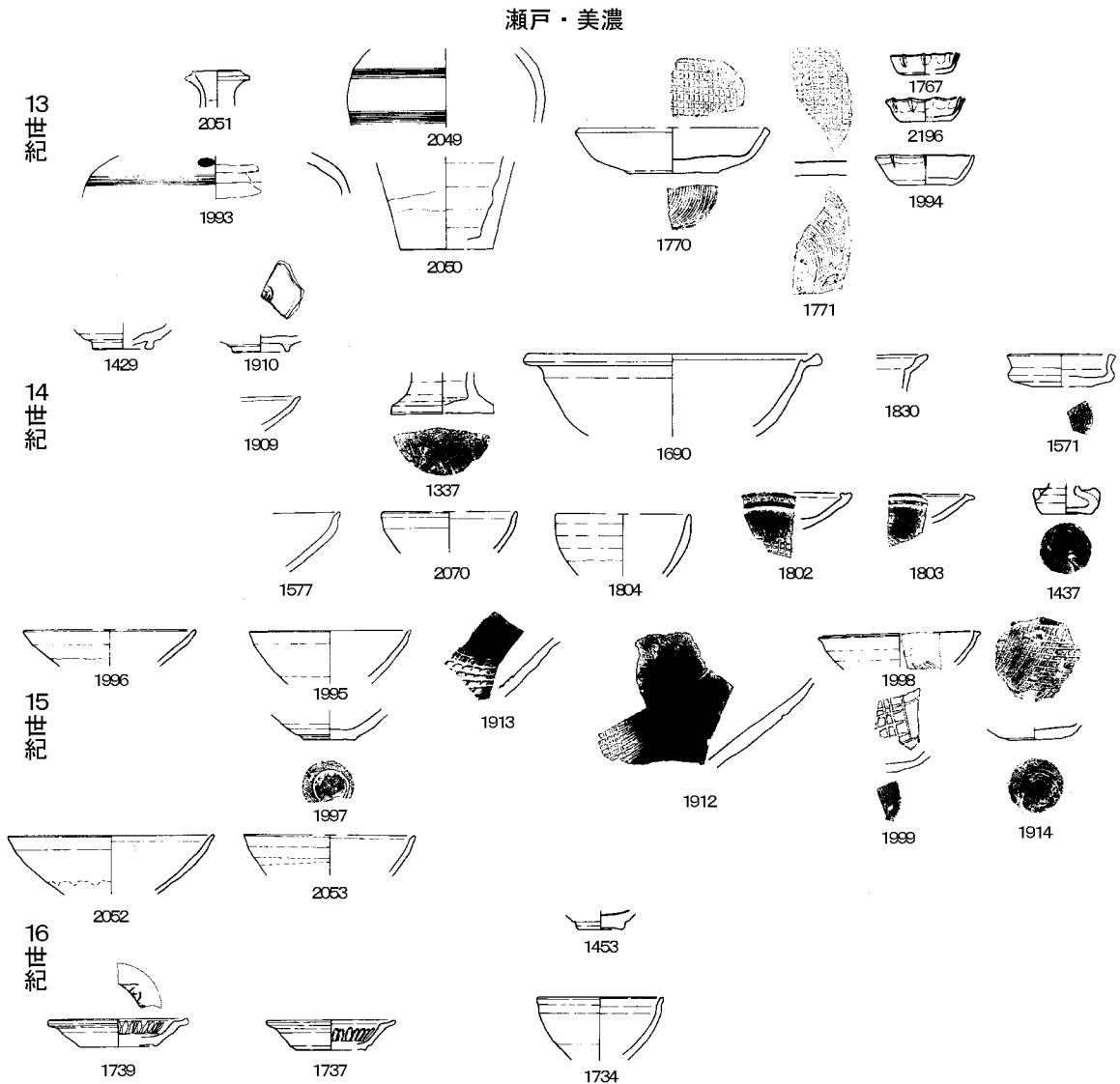
中世の陶器には、備前焼・亀山焼・勝間田焼・常滑焼、東播系須恵器がある。備前焼では、壺・甕・播鉢・捏鉢・杯・徳利・水屋甕・皿などが、また勝間田焼は、壺・甕・捏鉢・碗・小皿が出土している。亀山焼は、甕・播鉢がみられた。さらに出土点数は少ないが、神出・魚住産東播系須恵器では、壺・捏鉢があり、常滑焼では、甕片が出土している。

備前焼は、総数200点以上が出土しているが、うち131点を掲載する。壺12点（内雀口小壺3）、甕32点、播鉢70点、杯9点、徳利1点、水屋甕1点、皿1点である。掘立柱建物の柱穴、竪穴遺構内土壇、墓、埋甕、土壇、館を廻る堀の内部、溝、土器溜まり、柱穴、包含層などからの出土である。



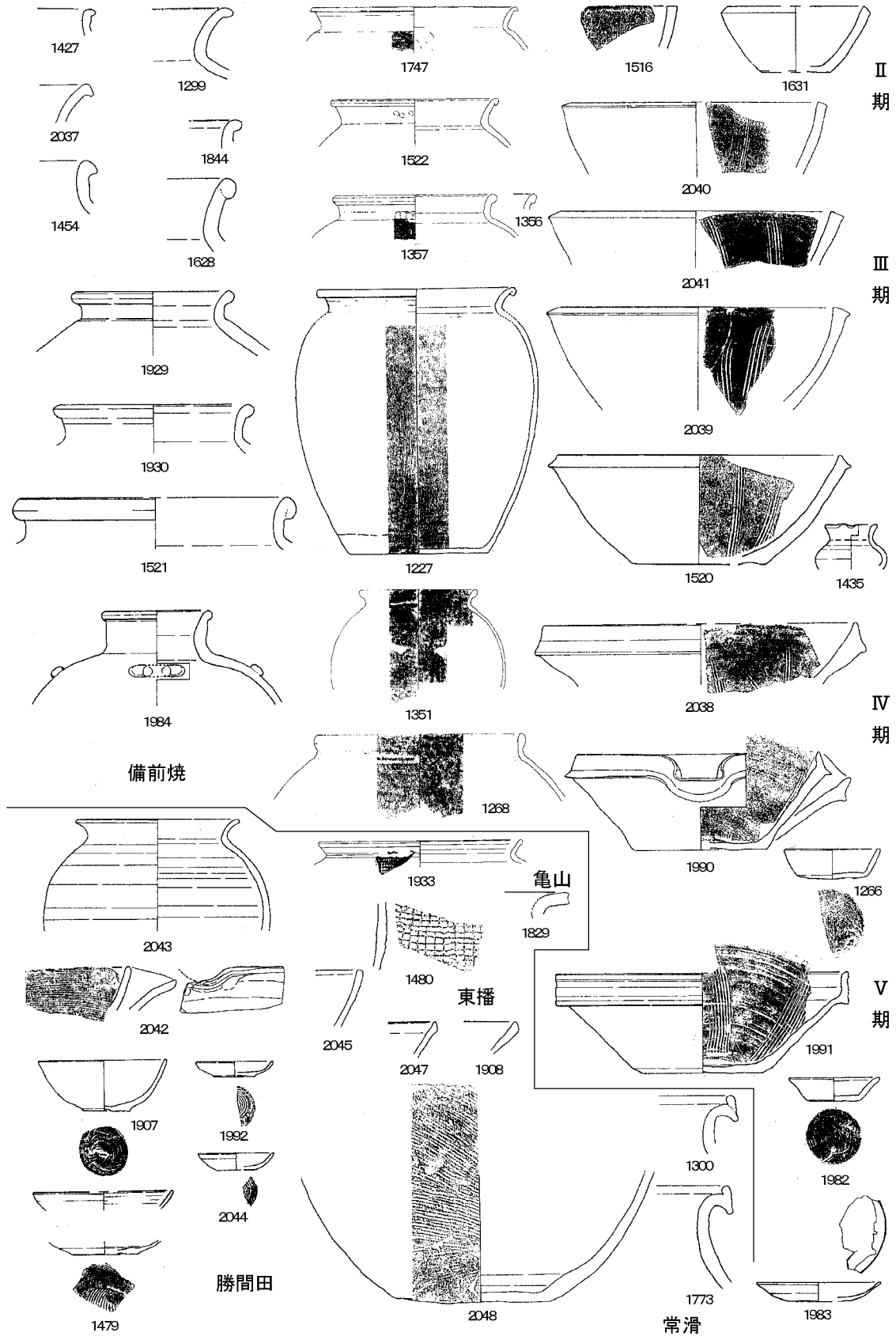
第931図 土師器杯・皿類の編年案（1/6）

時期別に見てみると（第933図）、最も古いものでは、鎌倉時代中頃（おおむね13世紀代）にあたるⅡ期の資料がある。壺は、土壙176-1427、土壙193-1454、E区包含層1844など3点で、小片が多い。甕は6点出土している。土壙102-1299、土壙110-1311・1312、土壙126-1355、柱穴14-1747、K区包含層の2037などである。播鉢は、3点が出土している。堀1東辺1516、堀2北辺1529、K区包含層2040などがある。鎌倉時代後期（13世紀後半～14世紀後半）に位置付けられるⅢ期は、壺2点、甕8点、播鉢14点がある。南北朝から室町時代後半（14世紀末～16世紀初め）頃のⅣ期は、壺2点、甕14点、播鉢44点、椀9点を数える。室町時代末期から江戸時代初期（16世紀末～17世紀初頭）にあたるⅤ期は、壺2点、播鉢4点のみである。Ⅵ期以降の近世のものは、播鉢・甕・水屋甕の3点、ほかに、時期不明のものが8点ある。各器種ともⅡ期の段階から出土しており、Ⅳ期の段階でピークを迎える。特にⅣ期の播鉢の出土量が飛び抜けて多い。Ⅴ期・Ⅵ期は、極端に少なくなり数点の出土である。このように久田堀ノ内遺跡から出土している備前焼から見ると、鎌倉時代中頃から始まり、15世紀代の



第932図 瀬戸・美濃焼の変遷（1/6）

第4章 まとめ



第933図 備前焼などの変遷 (1/6・大甕1/12)

室町時代に頂点に達し、室町時代後半には衰退していつているものと考えられる。

勝間田焼は、土壇内から椀小片が3点、甕腹片2点が、堀2南辺から椀1点、窪地から小皿1点、B区包含層から椀2点、E区包含層から椀2点、G区包含層から甕1点、I区包含層から椀1点、K区包含層から壺1点、捏鉢2点、椀1点、小皿1点などが出土している。最も古い段階のものは出土しておらず、甕は格子叩きのものである。地元美作産の焼き物にしては出土量は少ないことから、久田堀ノ内遺跡の盛期には勝間田焼生産そのものが下火になっていたものと考えられる。

亀山焼は、D区包含層から甕2点と、播鉢1点が出土している。甕は格子叩きを持ち13世紀段階のものと考えられる。また播鉢は瓦質のもので、15世紀前後のものと考えられる。

東播窯のものは、壺あるいは甕の下半部2048と、捏鉢2点1908・2047が出土している。

常滑焼は、甕が2点出土している。甕1点1300は土壇102から出土し、13世紀代のものと思われる。もう1点1773は包含層から出土しているが、時期的にもほぼ同じ時期のものであろう。

#### (4) 貿易陶磁器

遺構からの出土は少なく、いずれも小破片で、全体のわかる資料は少ない。時期的には、12世紀から16世紀末まで<sup>(3)</sup>の幅が認められる(第934図)。

白磁では、小壺1点、Ⅱ類の口縁部1点、Ⅳ類碗の口縁部9点、底部5点、皿1点、Ⅴ類碗の口縁部9点、底部7点、Ⅶ類の底部4点、皿1点、Ⅵ類の皿1点、Ⅸ類の碗口縁部8点、底部3点、皿口縁部1点、同底部4点、B・C類の口縁部5点、底部4点、E類の口縁部6点、同底部12点、四耳壺片3点を数えた。青白磁は12世紀から13世紀にかけての、水注1点、合子2点、蓋2点、小皿1点がある。梅瓶は、口縁部1点、底部2点、体部が7点あり、その文様から2個体分が確認できる。

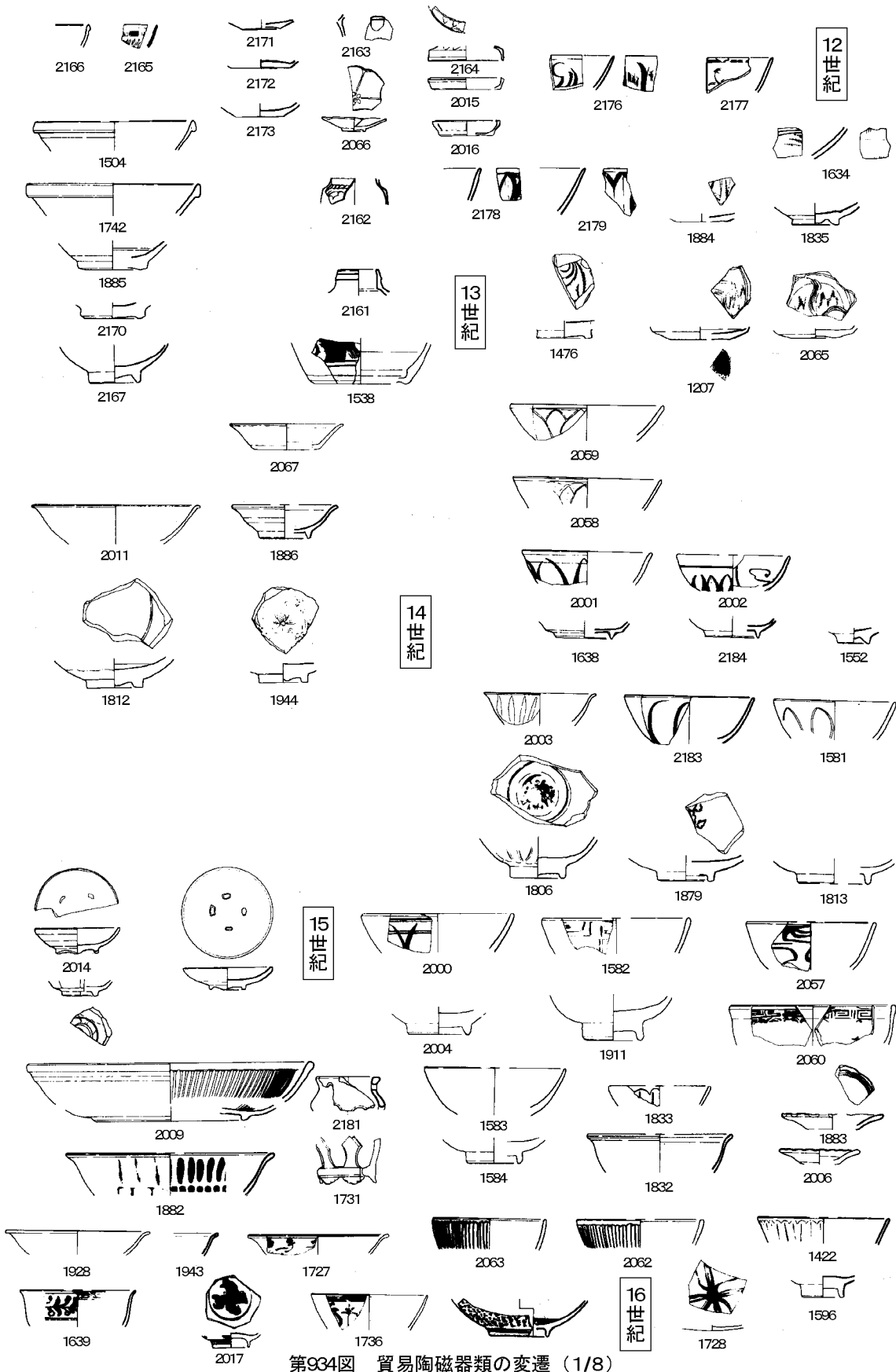
青磁では、同安窯系碗・皿、龍泉窯系Ⅰ・Ⅲ類碗・皿、鎬のない蓮弁文、雷文帯や線描きの連弁文、無文碗。その他の器種に壺、盤、鉢、器台、瓶2187(第941図)がある。白磁、青磁は出土量のピークが、15世紀代にあるが、12・13世紀代の資料も多い。これらは、居館出現の時期よりさかのぼるとみられるが、久田原遺跡から久田堀ノ内遺跡への集落移動を考えるならば、搬入と廃棄の時期のずれと考えることは可能であろう。これは、久田原遺跡における貿易陶磁器の出土量(図化された白磁24点、青磁29点)からも裏付けられる。また、居館外とりわけC2・3区からの出土量が多いが、この部分の柱穴密度が高く屋敷地の長期間、かつ居館部分の削平が想定できることも影響していると思われる。

その他にも、天目、五彩碗、青花では、障州窯や景德鎮窯産の碗・皿が、さらに磁州窯系色絵の壺、中国南部ないしは東南アジア産の焼き締め陶器壺もみられる。

表13 青磁地点・時期別出土数

時期	点数		地区												計	備考
	椀	その他	A1区	A2・6区	A3区	A4区	A7区	A8区	A9区	B1・2区	C1区	C2区	C3区	C4区		
12世紀								2		4		1			7	龍泉1他は同安
13世紀	□15底10	皿5			1		5	9	1	4	2	5	2	1	30	同安窯系1
14世紀前半	□4底5			1	3		1					2	3		10	
14世紀後半	□4底8	皿1			1	1		3	1		2			3	1	12
15世紀前半	□23底16	盤・鉢4	1	3		2	3	10		5	2	2	7	2	37	器台・壺4
15世紀後半	□10底23	盤・鉢・皿12		1			7	4	1	13	3	2	14	1	46	
15世紀末～16世紀	□4底3					1		1		1		3		1	7	
	無文碗1			1			2	4		2	1	4	5	1	22	不明2
	無文碗2			1		1		5		3	1	2	4		18	不明1
	無文碗3						3	3		2	1		3	2	17	不明3
	無文碗4				1			1				1	2		5	
	体部破片				7		1	34	4	11	4	18	27	10	148	不明32
	計				8	12	5	25	74	6	47	14	40	70	321	

第4章 まとめ



第934図 貿易陶磁器類の変遷 (1/8)



(5) 瓦質土器

鍋、釜が大半を占めるが、挿鉢やミニチュア鍋・釜もみられる。釜は、口縁が内湾するAと直立するBがあり、それぞれ1～4類に区分できる。鍋には、受口状口縁をもつA類と短くやや内湾気味に立つ口縁をもつB類がある(第935図)。

a 釜

A類では、鋳部が長く突出し、それより上の口縁部も長い。肥厚する口縁端部は強くナデることによって凹む(A I類)。1類に比べて、口縁部、鋳部とも短く、口縁端部が内傾する面を持つ(2類)。2類よりもさらに口縁部・鋳部の突出度が低く、鋳端がやや丸みを帯びる(3類)。3類と比べて、口縁端部が尖り気味ないしは丸く収まる(4類)。この4類では、口縁部の高さが鋳部のそれより低いものも存在する。

B類は、A類に比べて口縁部が短く、また口径も20cm以下の小型が多い。口縁端部や鋳部の形状とその突出度によって、A類同様に1～4類に分ける。B 3類は、鋳部は断面3角形となり口縁部も短い。口縁端部には、内上方に強くナデあげるものと平坦な面をなす2種類がある。B 4類は、口縁部が短く内傾し、器壁が厚いことも特徴である。

ミニチュア品では、縦に耳の付くものが存在する。

b 鍋

A類では、口縁端部が、強くナデることによって凹んで内外に肥厚さす。頸部内面が内側に突出し、受部をなす(1類)。頸部内面の受部のない(2類)。頸部内外面の稜線がシャープさを欠く(3類)。図示したタイプ以外に、口縁が外上に立ち頸部や口縁端部の稜線が鈍い(4類)がある。

B類には、頸部内面を内側に突出させ、落とし蓋を受ける(1類)、1類に比べ頸部内外面の屈曲が不明瞭となる(2類)、体部から口縁部までほぼ直線的に立ち、内面は段状の受部を作る(3類)がある。多くが小破片でかつ遺構中からの出土は少なく、時期比定の根拠に乏しい。

(6) 土師器の変遷と年代(第931図)

次に、遺構毎に土師器類別の組合せ、備前焼などとの共伴関係をみてゆくことにする。①土壙112では、杯D I・IIと皿Aの組合せがみられる。②墓5・9では、杯D・A IIと皿A・皿Bの組み合わせがある。③土壙96では、杯D IIIと皿Aが、土壙129では、杯B IIIと皿Aの組合せになる。また、土器溜まり13は、杯A II・III、皿Aと皿B(1個体)の組み合わせとなる。④皿がA I～III、皿Bの3種に法量分化する、掘立柱建物14、土器溜まり12、15、16では、すでに杯類は存在しない。①と②を皿Aの法量

釜	A 1	A 2	A 3	A 4
	B 1	B 2	B 3	B 4
鍋	A 1	A 2	A 3	A 4
	B 1	B 2	B 3	B 4

第935図 瓦質土器鍋・釜類口縁部の分類

第4章 まとめ

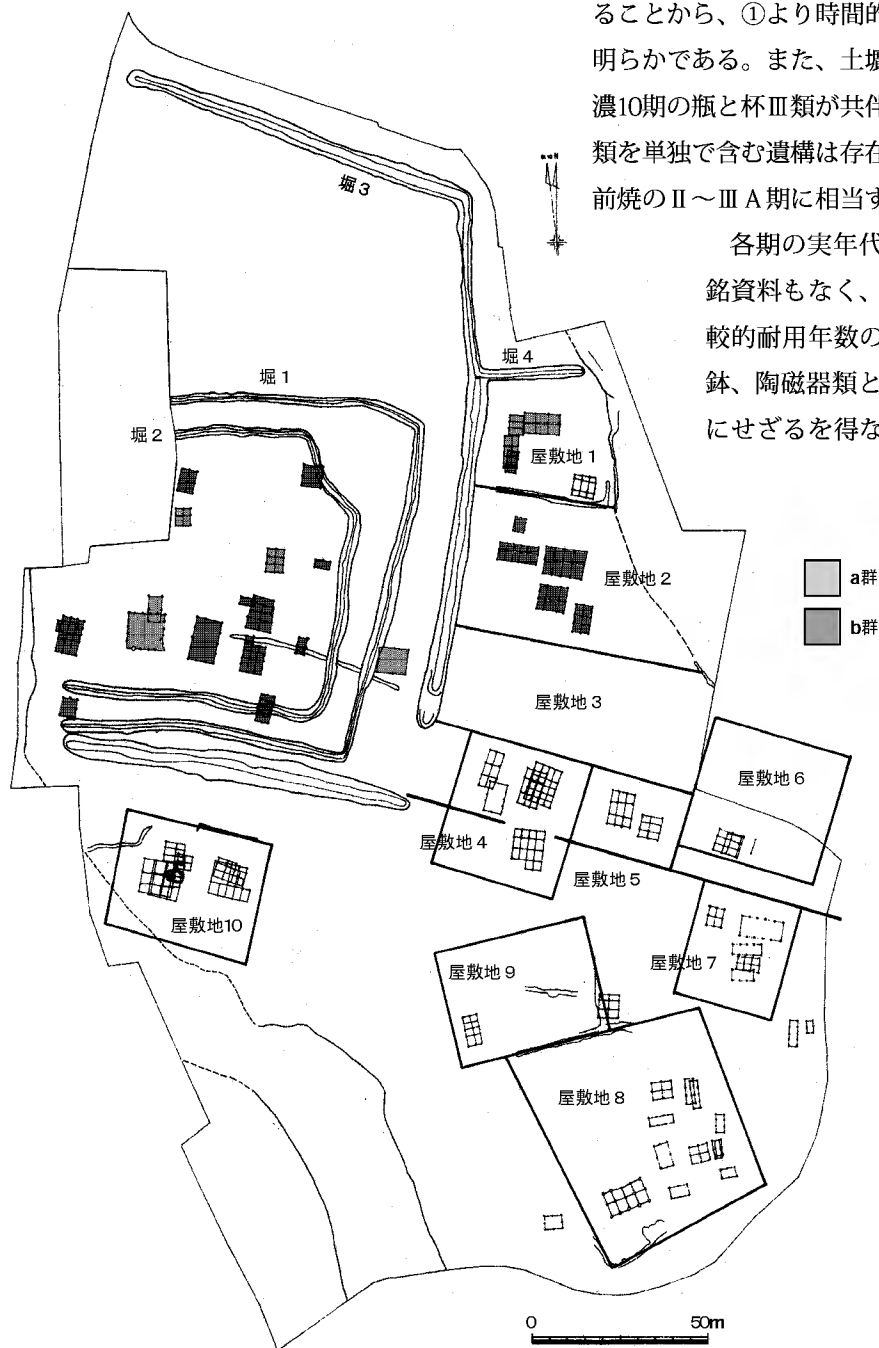
で比べると、杯Ⅰ類を含む土壙112は、器高が高く、古相を示すと見られる。草戸千軒町遺跡の編年<sup>(4)</sup>などから、皿の法量分化が15世紀後半に完成することを参考にすると、杯類が時間を経るにつれ矮小化し、皿に転換する蓋然性は高い。

墓5では、棺に用いられたⅢB期の備前焼甕が、墓9ではⅢ期備前焼の播鉢と土師器へそ碗が出土していることから、杯Ⅱ類は14世紀前葉から中葉に位置付けられる。

③の土器溜まり13からは、14世紀末～15世紀初頭に位置づけられる瀬戸・美濃産の盤が出土しており、少なくともこの遺構の上限はおさえられることから、①より時間的に後出することは明らかである。また、土壙113では、瀬戸・美濃10期の瓶と杯Ⅲ類が共伴する。なお、杯Ⅰ類を単独で含む遺構は存在しなかったが、備前焼のⅡ～ⅢA期に相当する時期を考える。

各期の実年代については、紀年銘資料もなく、土師器と比べて比較的耐用年数の長い備前焼甕・播鉢、陶磁器類との共伴関係を参考にせざるを得ないが、土師器1期

各期の実年代については、紀年銘資料もなく、土師器と比べて比較的耐用年数の長い備前焼甕・播鉢、陶磁器類との共伴関係を参考にせざるを得ないが、土師器1期



第936図 居館と屋敷地の設定 (1/2,000)

から6期に区分し、1期(13～14世紀初頭)、2期(14世紀前葉～14世紀中葉)、3期(14世紀末～15世紀前半)、4期(15世紀後半)、5期(16世紀前半)、6期(16世紀後半)と考えている。

## 2 時期別の遺構変遷

### (1) 居館(堀)の時期

遺構の切り合い関係や出土遺物などから、堀は1～3へと順次掘削と埋め立てを繰り返しながら、居館の規模を外へと拡充していったとみられる。そこで、堀1によって圍繞された居館を、第1段階とし、以下堀2=居館2段階、堀3=居館3段階とする。堀には、土塁を伴うことは十分考えられるが、調査ではその痕跡も見いだせなかった。また堀からは、思いのほか遺物の出土が少なかったことや、掘削と埋没の間は絶えず遺物が流入することも、時期決定を困難にさせる要因であった。

堀1では、土師器BⅢ類の2344、Ⅱ期の備前焼播鉢とともに、備前焼ⅣA期の2348・2349、2351～2353など、中世3期に相当する資料が存在する。そのうちの後者が、堀1の埋没(=堀2掘削)の時期を示す資料ではなかろうか。堀2は出土遺物が極めて少ないが、下層から出土した土師器ⅢAⅢ(4期)をその下限とみなしたい。堀2によって切られた建物20の柱穴から、14世紀代の白磁碗が出土していることも堀1・2の年代押さえる上で重要である。堀3は、17世紀中葉には堀の中位までを埋め立てて、堅牢な粘土を敷き水路として利用していたと考えられる。その下層・最下層からは、土師質4期のⅢAⅢやⅣB期の備前焼が数多く出土しており、堀3掘削の時期を示すと思われる。さて、居館第1段階(堀1の掘削)の開始はいつに求められるであろうか。遺跡全体においては、1期に比べて2期の遺構と遺物(土師器杯類、備前焼ⅢB期)の充実振りがめだつことから、居館第1段階は、14世紀前葉以降の鎌倉時代末～南北朝期に考えておきたい。さらに、居館第2段階は、3期(14世紀末から15A世紀前半)とみる。また、居館第3段階は、15世紀後半に始まり、以降の戦国期から江戸開府までとする。なお、量的にまとまって出土した青磁Ⅲ類や瀬戸・美濃製品がみられはじめるなど、1期を居館に先行する段階として理解できよう。

### (2) 屋敷地の設定と消長

#### a 居館内

最大規模である堀3内の遺構を、一括して扱うこととする。建物は棟方向から、a群:建物6・12・16・20。b群:建物3・4・7～11・13～15・17～19の2群に分けられる(第936図)。建物6は、東に接する土器溜まり13(竪穴状の掘り込みをもつ水溜めか池)と軸線をそろえ、その関連性が考えられる。ともに3期の遺物の出土がみられ、居館2段階に該当する可能性がある。建物12からは、Ⅸ類の白磁碗が出土している。また、建物20は、北西隅の柱が堀2によって切られており、柱穴内からは14世紀代の白磁碗が出土している。ともに、居館1段階の遺構の可能性が強い。以上のように、a群建物は居館第1・2段階に位置付けられる。次に、b群の建物14からは、5期の遺物がまとまって出土している。さらに、遺構の切り合い関係からみて、堀1を切る建物19、堀2を切る建物15が存在することも、b群が居館3段階に属することを示唆している。

また、時期の特定できる土壙113は2期に、墓3・土壙112が3期に、埋葬1周囲の土壙群は4期である。土壙102～105(4期)とその周囲の土壙群は、墓地であろうか。居館1段階以前の遺構としては、経塚遺構とみられる集石土壙<sup>(5)</sup>1・溝25があげられるほか、土壙102から備前Ⅱ期、常滑焼Ⅵ期の甕片が出土している。さて、中心部において傑出した規模を誇る建物には、床面積102㎡を測る建物16

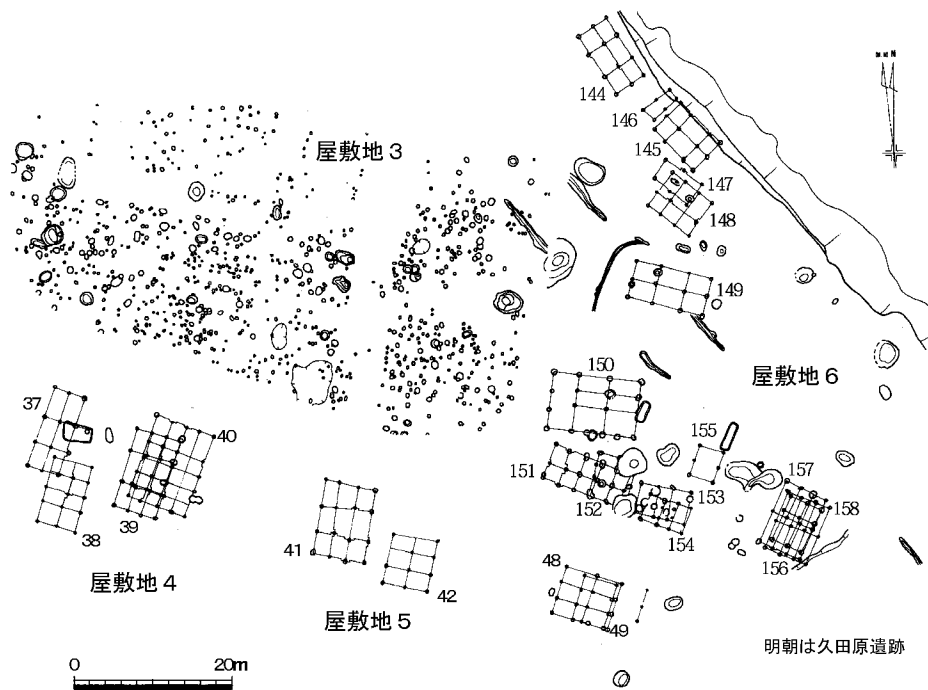
#### 第4章 まとめ

がある。5×5間の矩形を呈し、柱穴内に礎板石をもつ。柱穴掘り方はきわめて浅かったことから、床束は削平された可能性があり、本来は総柱建物であったと思われる。ただし、建物16は居館内においてもやや南にずれて位置することから主屋は別にあったと考えたい。中心建物は、礎石建物であった可能性を考える必要がある。なお、居館内には建物の存在しない空閑地がみられる。とりわけ第3段階における北半部の広大な空閑地（近世には遺構が密集する）は、兵屯地であろうか。

##### b 居館外

屋敷地や各地区の土地利用には、時期的な変化がみられることも想像に難くないが、先にも述べたように層位的な調査ができなかった以上、建物や柱穴のまとまりで大きく括り、便宜的に屋敷地と呼称することとしたい（第936図）。

屋敷地1は、第848図において設定（以下同じ）したD地区の北半部であり、堀3・4・溝31によって囲われた範囲を指す。建物の切り合い関係から、複数時期にまたがるとみられる。建物の棟方向は、居館内と同じ傾向を示し、a群：建物21～23、b群：建物24・26にわかれる。このうちa群は、久田原遺跡の中心部分の建物群において一般的にみられたような、柱穴内に礎板石をもつ建物である。また、溝31は、軸線が一致するb群建物を区画したとみられる。この2群は、後述する桁と梁の比率からも居館内と同様に時期差を示すと考えたい。このほかに時期の判別できる遺構には、墓16・23（4期）がある。屋敷地2は、屋敷地1の南にあたる。柱穴密度は粗であったが5棟の建物が見られる。屋敷地1のb群と棟方向を一致させており、建物25からは5期の遺物が出土した。居館3段階における、単一時期の屋敷地であった可能性がある。埋甕遺構3は、長軸を建物27と一致させており、建物27がもう一間南に延びれば、覆屋となる可能性がある。屋敷地3は、第848図のE地区にあたる。屋敷地Bの南側は幅約10m程の柱穴が希薄な地帯となり、その南は再び柱穴群の密度は増す。複数の建物が存在したとみられる。12～13世紀代の遺物も散見できるが、15世紀代を主体とする屋敷地とみられる（第937図）。屋敷地4は、H地区西半部の建物37～40・43で構成し、居館第3段階における南東



第937図 屋敷地3～6の遺構配置（1/900）

隅の開口部前面に位置する。37～40は棟方向を揃え、このうち建物37は、4期の墓30を切って建てられる。堀3南辺から東に延長した軸線と建物37～40の棟方向が直行しており、その関連性がうかがえる。屋敷地5は、H地区東半部の建物41・42からなる。その周囲は、柱穴も極めてまばらであり、単位一期の屋敷とみられる。屋敷地6は、建物48・49は、北に接する久田原遺跡の建物151・154・155とともに堀3南辺から東に延長した軸線に梁や桁方向を一致させる。このあたりは近世にはすでに水田化するが、「堂ノ上」という字を残す。屋敷地7は、I地区北半部で「堂屋敷」という字が残る。建物52～55で構成され、52からは、4期の遺物が出土している。屋敷地8は、「堂ノ下」という字を残すI地区南半部の建物57～67とJ地区南半部の建物47およびその周辺柱穴群で構成する。溝35・39が区画溝となるかもしれない。建物57からは瀬戸・美濃10期の盤、61からは龍泉窯I類皿が、3期の土師質土器杯AⅢが出土しており、また大形の土壙群からは5～6期の遺物が出土している。大形土壙は、I地区南半建物の廃絶時に掘削されたのであろうか。熱影響やススの付着する陶磁器が多く見られることから15世紀以降に火災を受けたと考えられる。また、建物57～67と47は軸線を大きく異にしており、両者の時期差を表すと思われる。建物47は、柱穴掘り方の規模が他と比べ一回り大きくこの地区の中心的な建物とみられる。I地区の包含層出土遺物からは、4期以降を主体とするものの1・2期の遺物もみられることから、居館第1段階には少なくとも屋敷地Hが成立していたと考えられる。屋敷地9は、溝34、35が区画溝か、溝34の北西に土壙、柱穴が集中する。この溝や土壙207・214は何れも5期以降の遺構で、溝34の2470、包含層2848から、16世紀末～17世紀初頭まで存続したとみられる。屋敷地8・9（J地区）の出土遺物は、瀬戸美濃の7期の瓶子・輪花皿、12～13世紀代の白磁・青白磁合子、14～15世紀代の青磁盤、中国南部か東南アジア産とみられる焼き締め陶器、16世紀末～17世紀に位置付けられる青花、硯、温石などかなりの時間幅を持った遺物の出土がみられた。屋敷地10は、堀3南辺の南部でG地区とF地区南半部に該当する。遺構の切り合いや柱穴集中度から長期間の存続が考えられる。3期の遺構には、埋甕2、墓9がある。周辺の墓も含め墓地であろうか。4期の遺物を出土する遺構に、建物31、33がある。また、備前焼椀（IV B期以降か）が一括出土した竪穴遺構1は、久田原遺跡の例から鍛冶工房と考えられる。周辺の溝、柱穴からも羽口、鍛冶滓、鍛造剥片、粒状滓が出土しており、鍛冶工房に後出する遺構の存在をうかがわせる。包含層からは、2期以降の遺物が出土している。

### （3） 建物について

掘立柱建物を梁行と桁行の長さの比から次の3類に分類する（第938図）。A類は、梁行に比べ桁行が長いほぼ等しい。B類は、梁行の方が長い。その比率が2：1以下の場合をB1類、2：1かそれに近くなる場合をB2類とする。A類は、建物39～41・43（南北棟で梁行き3間以上）、9・22・37にとどまる（両者の数値が近似するものも数棟ある）。B2類の例としては、建物17・26・42・45・48（3×2間でほぼ同規模）や建物28がある。なおこのB2類は、久田原遺跡においても103・125・135などにおいて認められる。次に、主屋とみられる建物の床面積をみたい。居館中心部において中心となる建物を確認できなかったにしても、最大で規模で102㎡を測り、80㎡クラス、50㎡クラス、30㎡クラスの大きく3つに分かれた。

室町時代における住居の規模と階層の関係について触れた研究<sup>(6)</sup>によると、地侍層で住居床面積が80～112㎡、名主層では32～80㎡、被官百姓層では14～60㎡であった。当遺跡では、鎌倉から南北朝時代に属する可能性のあるものも含めて、80㎡以上を測る建物8棟が居館の内外において存在する。

60㎡以上では、11棟を数えた。県下の中世建物と比較して(「久田原遺跡」のまとめ<sup>(7)</sup>第115図)、最大規模の建物となるような80㎡を超える建物が、居館外にも展開することは注目される。

次に、久田原遺跡との比較を行う。まず、南北棟が圧倒的多数の久田原遺跡に比べ、居館内は南北棟が主であるが、居館外は東西棟が主体となることが指摘できる。これは、久田原遺跡が当初、遺跡西を南北に流走する吉井川を基軸に集落が形成されたのに対し、居館を中心にした東西方向の町割が完成したことの表れではないだろうか。久田原遺跡では総柱建物が大半で、母屋クラスでは3～4間を数えるA類建物が多いことに比べ、久田堀ノ内遺跡では梁間2間の総柱建物や梁間2ないし1間のB類建物が中心となる。A類建物からB類建物へと時間的な先後関係がうかがえよう。また、B1類とB2類関係については、B2類にのみ80㎡を超える建物が存在しないことから、新旧関係というより建物の機能・用途を考えておきたい。さらに、「久田原遺跡」のまとめにおいて述べられた建物の企画性は、当遺跡においても認められる。例を挙げると建物14と18は、共に居館内に位置する南北棟で、南側に土間を持つ6×3間の構造で、面積もほぼ等しい。久田原遺跡最大の建物106・116を桁行き梁行きとも1間短くした建物として建物9・47がある。久田原建物118に近似するのは建物14・28・39である。位置的に近接し、時間的には先後関係があることから建物の移築も想定できようか。

表14 建物の規模

	1間	2間	3間	4間	5間
10㎡未満	6				
10㎡～	9	3			
20㎡～	3	8			
30㎡～	1	9			
40㎡～		5			
50㎡～		4	3		
60㎡～		1	1		
70㎡～		1			
80㎡～		1	3	2	
90㎡～					
100㎡～					1

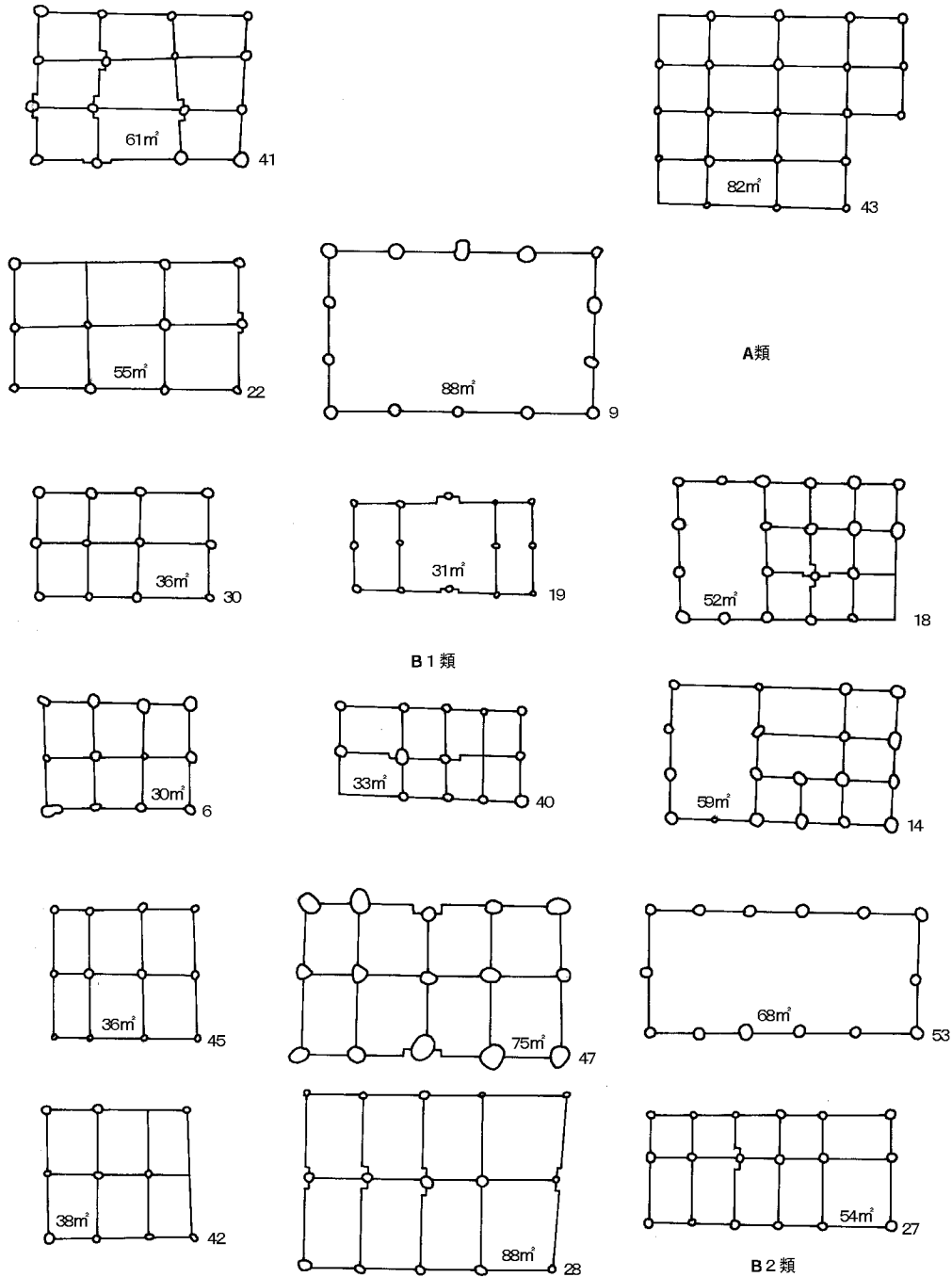
#### 4 居館について

南西部において明らかとなったように、堀1～3とも、遺跡西側に流れる吉井川とは連結させず、また堀3は北東と南東隅を外へと開放させる。第1～3段階とも平面形態は歪な矩形ないし長方形であった。特に第1段階は北東隅が入角状をなす。このような例は、兵庫県初田館<sup>(8)</sup>に例がみられ、旧地形との関係が指摘されているが、防衛上の面も考える必要はあろう。

居館第1段階での規模は、南北75m、東西72mで、堀は幅2.85～3.85m、深さ1.0～1.2mを測り、面積は、5,453㎡であった。規模を拡大させた第2段階は、南北95m、東西80mで、堀は幅2.4～3.9m、深さ0.75～1.2mを測った。面積は、8,294㎡であった。第3段階に至っては規模を飛躍的に拡大させ、南北182m、東西100mで、堀は、最大幅7.5m、深さ1.6mを測った。面積は、12,076㎡にもおよぶ。この第3段階を特徴づけるのは、東側の低位部との間を結ぶように東西方向に堀4を掘削して、遺跡の北側を遮断させた簡単なながらも複式の郭をもつ城館に変容したことである。

次に、県下における館についてふれておきたい。現在中世の館とされる遺跡は70遺跡余りを数えるが、その全容が明らかとなった例は久田堀ノ内遺跡以外にはない。その一部が発掘された例でも、田治部氏館跡<sup>(9)</sup>、赤野遺跡<sup>(10)</sup>、植木遺跡<sup>(11)</sup>、谷尻・赤茂遺跡<sup>(12)</sup>、院庄館跡<sup>(13)</sup>、園井土井遺跡<sup>(14)</sup>、川面遺跡<sup>(15)</sup>が挙げられるのみである。居館の規模については、守護所と見られる院庄館以外と比べると、最小規模の第1段階の館においてすでにほかを凌駕する。また、最大建物について比較をおこなうと、80㎡をこす建物が存在するのは、赤野遺跡、谷尻・赤茂遺跡、久田堀ノ内遺跡があるが、これらの遺跡は堀を囲繞させる点で共通する。園井土井遺跡では、最大で70㎡台の建物がある。丘陵斜面を造成した屋敷地を区画する堀は、斜面下方のみの可能性が強い。最大建物の規模が50㎡台の田治部氏館跡

の場合は、堀が存在しない。つまり、敷地面積と建物規模や居館の構成要素に階層性が反映されるとみなせよう。さらに、他遺跡が15世紀代を中心とし比較的短期間であるのに対し、居館規模を拡大させての継続性と第3段階において院庄館のうち土塁に囲われた範囲とほぼ同規模となったことは注目に値する。これは、在地領主の政治的・経済的安定というよりも久田の地そのものの拠点としての重要性があったのではなかろうか。これらの遺跡以外に、河内構遺跡<sup>(16)</sup>、津寺遺跡土筆山調査区<sup>(17)</sup>、同丸田調査区<sup>(18)</sup>、同西川・中屋調査区<sup>(19)</sup>、高塚遺跡<sup>(20)</sup>、百間川原尾島遺跡<sup>(21)</sup> など溝（堀）によって区



第938図 掘立柱建物の平面形態分類

画された屋敷が複数存在する事例がある。区画された範囲は、1辺30～40m程度で、区画には相対的な大小の違いはあるものの、顕著な格差は存在しない。13世紀後半～14世紀にかけて成立し、津寺遺跡土筆山調査区や高塚遺跡例のように開口部を持つ溝から遮断性の強い溝へと時間的な変遷がたどれる場合がある。居館とは区分して考えられるべきもので、堀に囲われた屋敷群、集村と呼ぶべき遺跡である。先にあげた植木遺跡なども、この事例に入れたほうが良いとみられる。

## 5 鍛冶関係遺構・遺物

屋敷地10の地点では鉄滓や羽口などの鍛冶関連遺物の出土が目立ち、調査区ごとに算定した鉄滓出土重量でも当該調査区が群を抜いている。鍛冶関連遺物は包含層からの出土も多いが、特定の遺構に集中しており、これらの遺構は鍛冶関連遺構として位置付けることができる(第939図)。

竪穴遺構1は4.7×3.43mの長形状を呈している。鍛冶炉は検出できなかったが、埋土中からは精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓、鉄塊系遺物、羽口が出土した。鉄滓の重量は1.5kgを測る。竪穴遺構1の北東5mの不整形な平面形の溝33をからも、鉄滓や羽口が出土している。また、竪穴遺構1の東8mにある土壙140・141には、鍛錬鍛冶滓・鍛造剥片・粒状滓が多く充填されていた<sup>(22)</sup>。土壙140・141の南5mでも鍛錬鍛冶滓・鍛造剥片・粒状滓が充満した土壙を検出している。これらの土壙には、鍛造剥片や粒状滓のような微細遺物を選択的に充填した様子を示していた。同様にP17にも鍛造剥片や粒状滓が多く見られ、椀形滓が1点出土した。P15、P16からは羽口が出土している。P16で出土した羽口は、先端を下に向けた状態でピット内に立てるような出土状況であった。これらの遺構は直径30mの範囲にあり、出土遺物の共通性から相互の関係が示唆された。

北接する久田原遺跡では、中世に比定できる鍛冶炉10基が検出されている<sup>(23)</sup>。そのうち1基は竪穴遺構内で検出され、鍛冶工房とされている。規模は5.5×4.75mと推測されており、時期は14世紀代である。中央付近には鍛冶炉が確認され、その西側には鉄床を据えたと考えられる方形土壙があり、また、東壁際には轆を設置するためと想定された土壙群が検出されている。鍛冶工房の西5.5mで検出された土壙186からは、椀形滓をはじめとする鉄滓が多量に出土しており、位置関係から鍛冶工房の排滓場と考えられている。また、鍛冶工房から南東40～50mの地点では鍛冶炉6基が検出された。鍛冶炉は3～6mの間隔で東西に並んでおり、一定の時間幅をもって順次築かれたものと考えられている。その周辺には鉄滓や羽口などを多く出土した土壙が検出されている。また、炭が堆積した土壙や被熱土壙も近在しており、小炭の生産が想起される。

久田原遺跡の中世鍛冶工房・鍛冶炉の周辺で検出された土壙は、その出土遺物から鍛冶作業で生じた鉄滓などを廃棄するための施設と考えられる。同様に、当該遺跡で検出した鍛冶関連遺構のうち、溝33と土壙140・141については、排滓場と考えていいたいだろう。P15～17は、鍛冶作業の中に具体的に位置付けることは困難である。P16では、上屋を支える柱か柵列の抜き取り穴に、羽口を詰めたような状況を呈していた。掘立柱建物18では、柱の抜き取り穴に礫を詰めた様子が確認されており、同様の所作と考えられる。竪穴遺構1は、鍛冶炉が検出できなかったため工房としては扱えない。しかし、比較的整った平面形や、久田原遺跡の鍛冶工房をわずかに縮小しただけの規模であることなどから、その可能性を完全に否定することはできない<sup>(24)</sup>。

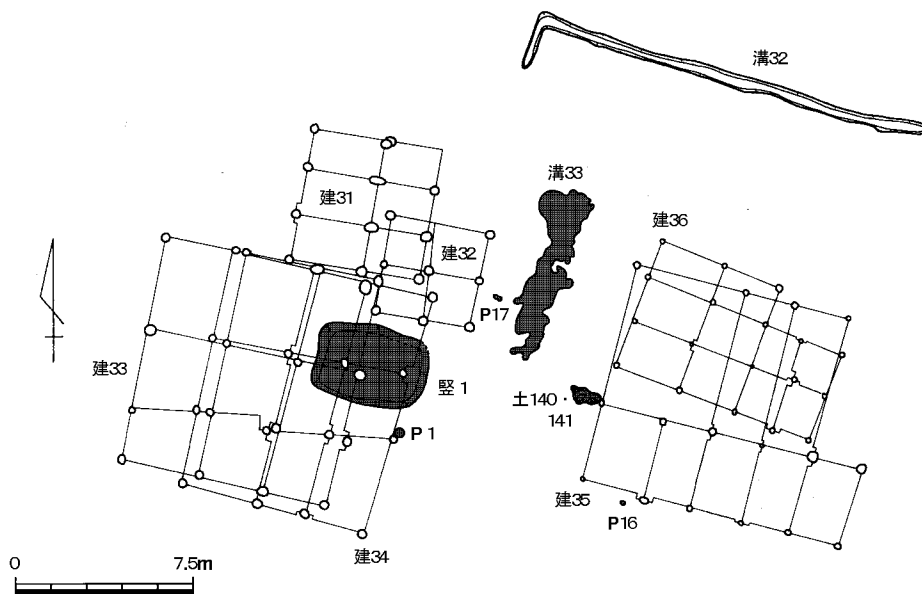
久田堀内遺跡では、明確な炉は確認できなかったものの、付近での鍛冶作業が想定できた。次に出土した鍛冶関連遺物について記述する。



鉄滓には製錬滓と鍛冶滓がある。製錬滓は緻密な流動滓であるが、ごくわずかの比率しか認められなかった。鍛冶滓は、久田原遺跡で大きさや重量をもとに2分類されている。すなわち長さ14.0～14.4cm、幅7.7～11.5cm、重量430gの大形が精錬鍛冶滓、長さ4.2～11.2cm、幅5.4～9.4cm、重量130gの小形が鍛錬鍛冶滓とされている。ここでも重量により分類が可能で、300～650gと130～200gに分けられる。精錬鍛冶滓は、処理する鉄塊がその上部に乗るため窪んだ状態になることが多いと指摘されている<sup>(25)</sup>。椀形滓で、上面が窪んだ状態のものは大形のものに多く認められ、椀形滓の重量と鍛冶工程の相関性がうかがえた。また、鍛造剥片や粒状滓などの微細遺物も多く出土した。

羽口は外径に大小が認められた。P15出土の羽口には外径が16cm以上と、12.5cmの二種類があった。なお、内孔径は前者が3cm、後者が4cmである。P16で出土した羽口はほぼ完形であるが、先端は溶融しており、使用したことは明らかである。長さ20cm、外径11～13.5cm、内孔径3.6～5cmである。外径の大きい羽口が精錬鍛冶に、小さい羽口が鍛錬鍛冶に使用された可能性がある。

以上の出土遺物から屋敷地10の地点で行われた鍛冶作業を具体化する。製錬滓が出土しているが、砂鉄を原料とした製錬が行われた可能性は低い。製錬滓は、外部から持ち込まれた鉄塊に付着していた可能性があり、その場合、ほとんど未処理に近い状態の鉄塊が鉄素材として使われたことを示す。鉄塊は精錬鍛冶により不純物の除去や炭素処理が行われた。精錬鍛冶により処理を行った後に、鍛錬鍛冶により各種鉄器を製作する。ちなみに久田堀ノ内遺跡で出土した中世の鉄器は、短刀、貢金具、鉄鏃、小札、鍬先、釘などがみられる。なお、久田原遺跡では金属学的な調査から、廃鉄器の再利用が想定されているが<sup>(26)</sup>、久田堀ノ内遺跡でも同様のことが行われたと考えるのが妥当だろう。精錬・鍛錬鍛冶により生じた鉄滓などは土壌内に廃棄した。3cm以下の小振りな鉄滓や鍛造剥片・粒状滓はまとめて土壌やピットに廃棄されるが、これらは鍛冶作業の終了後、工房の清掃により集積したものを一括廃棄した可能性がある。一方、溝33からは椀形滓や羽口など比較的大振りな遺物が多く出土しており、久田原遺跡の鍛冶炉の近辺で検出した土壌においても同様の傾向がみられる。この場合、二つの可能性が考えられる。一つは鍛冶作業前に土壌を掘り、作業終了のたびに繰り返し鉄滓などを廃



第939図 鍛冶関連遺構群 (1/300)

## 第4章 まとめ

棄する場合。もう一つは鍛冶作業時には鉄滓などを山積みにし、鍛冶の廃業後に整地のために土壌を掘って廃棄した可能性である。ここでは、後者の可能性を考えたい。

## 6 墓について

人骨の残る例はごくわずかで、かつ副葬品は少ないことから、葬法、時期比定は難しいが、本文中で墓とした以外にも墓と考えられる場合がある。ここではそれも含めて検討していきたい。

墓の形態は多種多様であった。①素掘りの土壌を掘削した場合、②埋喪墓（埋喪遺構1・2も墓の可能性はある。）、③墓27のように粘土化した木棺痕跡が認められる例。③と同様な長方形の掘り方を掘る例は多くが木棺を設えたとみなし、また釘を伴わない。これとは別に墓17・30の様に幅広の墓壇で釘を用いる場合がある。櫃ないし長持などを利用する棺であろうか。木棺墓には、組み合わせ木棺との二者が存在したようである。④直径1 m余りの円形の墓壇内に上部施設と考えられる礫群の落ち込みがみられる場合は桶棺であろう。⑤これ以外にも、石で墓壇の周囲を囲う墓2や、長辺に板石を立て、石囲い自体を棺としたか棺材の支えであったと考えられる墓23がある。

副葬品では、鏡や陶磁器を持つ例はないが、一方で刀を副葬する例は、6基を数える。墓24のように刀、鎌をもつ例は被葬者像を推定しうる。小札と銭を出土した土壌163も墓の可能性があろう。

このほかに墓と想定しうる例に、石敷土壌1、集石1がある。時期は特定できないが、中世全期間を通して遺構が他に存在しない（居館第1段階では村の辺境にある）箇所に立地する。石敷土壌1は、久田原遺跡の土壌墓13・20や草戸千軒町遺跡のS X1789、鏡千人塚遺跡のS X02<sup>(27)</sup>などの墓に例を求められる。久田原遺跡の土壌墓20は、石が熱影響を受け、また側壁の石積みをもつ火葬遺構であったが、石敷土壌1からは、被熱は認められなかった。集石1は、北西に原位置を保つ直線的な石列をみる。現存が1辺2 m程で、方形を呈していたとすると火葬墓にその例をみることができる。

立地では、遺跡全体にわたって存在するが、1～2基程度で存在し屋敷墓と墓地を形成する場合がある。居館内（B地区）の墓3～5西方の土壌群（4期以降）は近世墓群と立地が重なることから墓と想定でき、居館第3段階遺構の墓地とみなすことができる。また、屋敷地10内の墓8～15では、周辺から五輪塔の水輪も出土している。さらに屋敷地9における墓33・34と周囲の土壌215など、墓と考えられる土壌が存在した。屋敷地1内においても、墓16～23が集中してみられた。

## 7 おわりに

久田堀ノ内遺跡は、久田原遺跡と同様に、鎌倉時代初めには開発されたと思われる。その段階に属する確実な遺構は、ほとんど確認できていないが、経塚と考えられる集石土壌1がある。このことから、一般集落とは様相をことにし、戦国時代初めの文献に記された「久多庄」の中心の1つとして理解できるのである。久田原遺跡は荘園の中心「荘所」や荘司の居宅とみられ、隣接する久田堀ノ内遺跡には、その関連施設や農民の屋敷などが存在したと考えられる。居館は、鎌倉時代末から南北朝期に形成され、それとほぼ期をいつにして久田原遺跡から荘園の中心が移ってきたとみられる。久田庄に隣接する富庄がたびたび美作の有力国人である大河原氏に横濫をうけたことなどから、久田堀ノ内遺跡についても、在地領主化した土豪の居館を中心に屋敷群が形成されていったと理解する。そして、居館第3段階は領主単独の館ではなく、城塞としての機能を持つにいたったとみられる。その規模から、有力国人層の居館と位置付けたい。

中世における当遺跡の発展とは、美作国守護所と伯耆国守護所を結ぶルート上にあったこと。開けた可耕地があり、その周囲を険しい山、溪谷で隔絶された天然の要害であること。鉄資源が豊富であること。以上3つの要因が挙げられる。それと同時にこれらの点は、その後の遺跡の衰微と表裏一体の関係でもあったと思われる。守護所の政治的役割の終焉や倉吉往来の整備、江戸幕府の成立と新たな支配者の登場はこの遺跡を解体・縮小させる要因となったのである。

以下の方々に御指導、御教示頂いた。記して感謝いたします（敬称略）。

家田淳一 井上喜久男 大澤正己 久保智康 森村健一

本項は、2（3）を伊藤、5を上柁、その他は弘田が執筆した。

註

- (1) 岡山県教育委員会「久田原遺跡・久田原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184 2004
- (2) 井上喜久男氏にご教示頂いたほか、井上喜久男『尾張陶磁』1992も参考にした。
- (3) 家田淳一氏、森村健一氏にご教示頂いたほか、山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会、森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」、上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号 1982を参考にした。
- (4) 鈴木康之「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』V 広島県教育委員会 1996
- (5) 鏡を経筒の蓋に利用する例は、伯耆宮経塚など山陰に多い。
- (6) 前川 要「中世の家族と住居」『考古学における日本歴史15 家族とすまい』1996
- (7) 亀山行雄「中世の久田原遺跡」「久田原遺跡・久田原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184 2004
- (8) 兵庫県教育委員会「初田館跡」『兵庫県文化財調査報告』第116冊 1992
- (9) 岡山県教育委員会「田治部氏館址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』67 1988
- (10) 岡山県教育委員会「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3 1973
- (11) 岡山県教育委員会「植木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11 1976
- (12) 北房町教育委員会「谷尻遺跡赤茂地区」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』4 1986
- (13) 「史跡院庄館跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第7集 1981 院庄館は、トレンチ調査によって、残存する土塁東側外側で溝が検出された。それを含め東西が2町、南北で2町半を想定する。
- (14) 岡山県教育委員会「園井土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』70 1988
- (15) 岡山県教育委員会「川面遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』5 1974
- (16) 岡山県教育委員会「河内構遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170 2003
- (17) 岡山県教育委員会「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994
- (18) 註(17)に同じ
- (19) 岡山県教育委員会「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 1998
- (20) 岡山県教育委員会「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150 2000
- (21) 岡山県教育委員会「百間川原尾島遺跡」5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 1996
- (22) 鍛造剥片は鍛打工程において飛び散る酸化皮膜であり、精錬・鍛錬鍛冶ともに生じる。粒状率は赤熱した鉄に酸化・滅失を防止するために塗布した粘土汁と鉄酸化物の反応物である。藤尾慎一郎編『国立歴史民俗博物館研究報告』第58・59集 国立歴史民俗博物館 1994
- (23) 亀山行雄・小嶋善邦「鍛冶炉と鍛冶工房」「久田原遺跡・久田原遺跡群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184 2004
- (24) 安間拓己は、鍛冶炉を分類する中で、地上式の炉をⅢ型として想定している。炉床は、粘土などを台状に盛り上げて、そこに構築すると考えている。この場合、地面や床面を掘り込む必要がないため、遺構としての残存率は低い。屋敷地10の地点では炉壁と考えられる遺物も出土している。長さ5cm、幅5cm程度で、厚さは1cmに満たない。炉の内側は滓化しているが、表面のみが溶融した状態である。粘土部

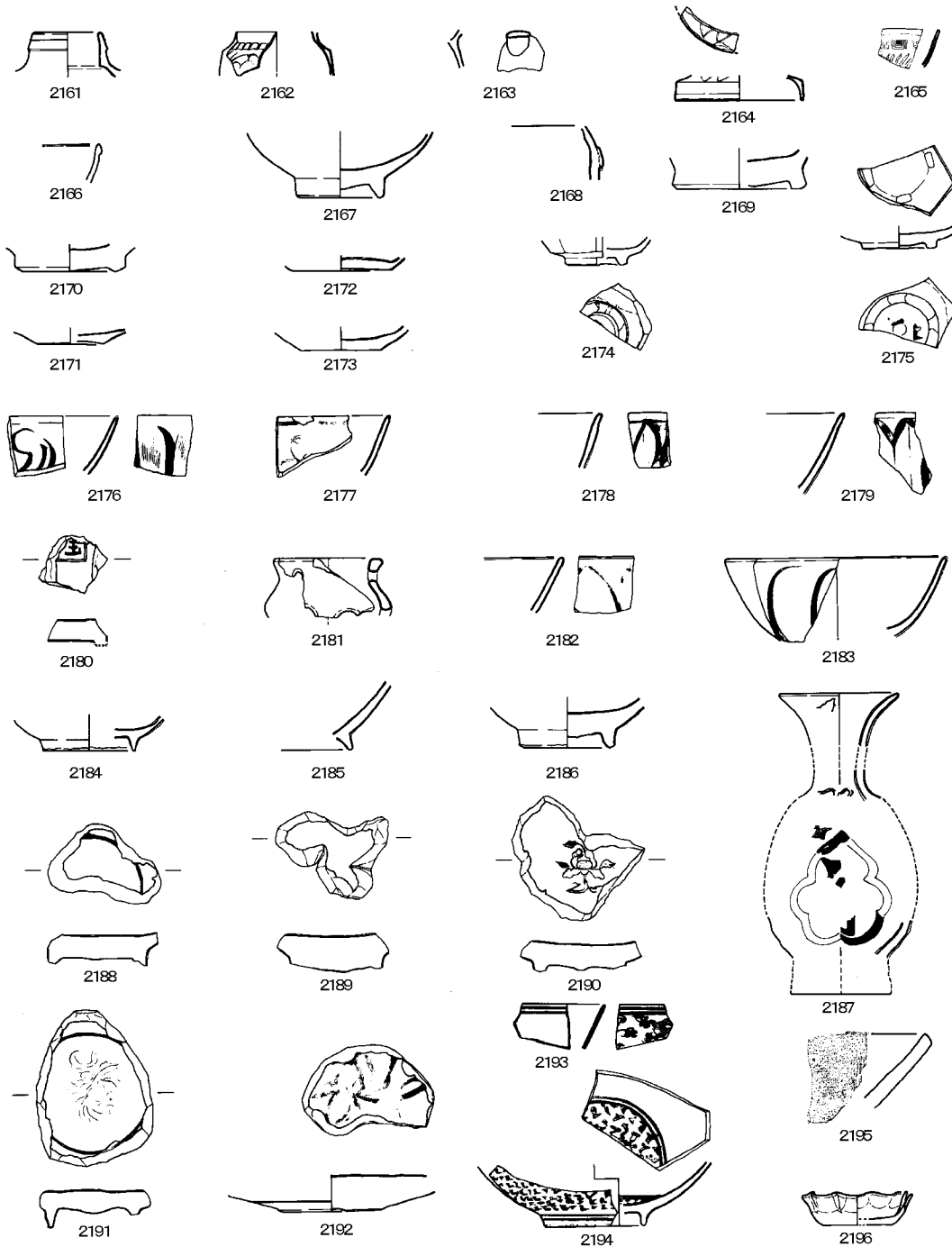
第4章 まとめ

分は褐灰色であった。これが鍛冶炉片の可能性はある。安間拓己「古代の鍛冶炉—その形態および鍛冶工程との関連について—」『考古学研究』第42巻第2号 考古学研究会 1995

(25) 真鍋成史「鍛冶関連遺物」『考古資料大観』7 小学館 2003

(26) 大澤正己「久田原遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『久田原遺跡・久田原古墳群』岡山県教育委員会 2004

(27) 岩本正二「墓の展開と変遷」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』V 広島県教育委員会 1996



第940図 遺物実測図補遺 (1/4)

# 1 久田堀ノ内遺跡出土土器の胎土分析

## —縄文晩期・弥生中期の土器を中心に—

岡山理科大学自然科学研究所  
白石 純

### 1 はじめに

久田堀ノ内遺跡では、縄文時代晩期および弥生時代中期後半の土器で、形態・技法的な分析により搬入品の可能性がある土器が出土している。この分析では、理化学的な胎土分析で、縄文・弥生時代のこれらの搬入品の可能性がある土器の分類が可能であるかどうか検討した。

分析方法は、蛍光X線分析法により胎土中の成分（元素）の量を測定し、実体顕微鏡観察では肉眼観察により土器表面の砂粒の種類、量を調べ、胎土の差異について検討した。

### 2 分析結果

分析した遺物は、表15に示した縄文・弥生時代の土器20点である。器種としては縄文時代晩期が深鉢・浅鉢・注口土器などで、弥生時代中期後葉の土器が壺・甕・高坏・器台などである。

#### 【蛍光X線分析法による胎土分析】

この分析で測定した元素は、主要元素であるSi、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、Pと微量元素のRb、Sr、Zrの合計13元素である。このうち、現在までの分析で胎土に違いがみられる元素としてTi、Fe、Ca、K、Rb、Sr、Zrなどの元素があげられる。ここでは、特に顕著な違いがあったK、Ca、Sr、Zrの元素を用いてX-Y散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。

#### ・縄文晩期土器の分析

久田堀ノ内遺跡の縄文晩期前葉の土器のなかには、形態・文様などから東日本系の土器が出土している。そこで、第941図K-Ca、第942図Zr-Srの散布図では、在地産および搬入品と考えられる土器について比較してみた。また、昨年（2003年）に分析した久田原遺跡<sup>(1)</sup>の在地産の晩期土器（谷尻式）と比較した。

その結果、第941・942図から、久田堀ノ内の在地産（11・12・14）と久田原の在地産の分布域が異なった。そして、久田堀ノ内の東日本系の15・16（亀ヶ岡系）、20（瓢箪形）は後者の久田原の在地産分布範囲に分布した。また、13の在地産（谷尻式）もこの分布域に入った。その他の17・18・19の搬入品の可能性がある土器は、18・19が久田堀ノ内の在地産と分布域がほぼ重なった。

#### ・弥生中期後葉土器の分析

久田堀ノ内の弥生中期後葉の土器は、形態・文様・技法的な分析で在地産と搬入品の可能性があるものに分類が可能である。そこで、第943図K-Ca、第944図Zr-Srの散布図で検討したところ、在地産

のうち4（甕）、5（高杯）が他の1・2・3（壺）と胎土が異なった。また、搬入品の可能性のある土器も6（器台）、7・9（高杯）と8（脚付鉢）の2つに分類された。そして、1・2・3（壺）・8（脚付鉢）と4（甕）、5（高杯）、6（器台）、7・9（高杯）の2つに分類できる。また、1・2・3（壺）・8（脚付鉢）と10（壺）が、久田原遺跡と二宮岡東・押入兼田遺跡の分布領域に入る結果となった。

#### 【実体顕微鏡による胎土観察】

実体顕微鏡により、10倍～30倍で土器表面の砂粒観察（岩石・鉱物）を行った。

この結果、今回観察した久田堀ノ内遺跡の縄文・弥生土器には石英、長石、雲母、角閃石などの鉱物が含まれ、大きく2種類の胎土に分類される。

I類 …… 0.5mm～3mmの石英、長石を含み、少量の黒雲母（0.5mm以下）がみられる。

II類 …… 0.5mm～3mmの石英、長石を含み、少量の角閃石（0.5mm以下）が含まれている。

なお、観察した土器が小破片のため十分な観察ができなかったが、蛍光X線分析との対比では、特にCa量の含有量が少ない土器にはI類の胎土が、逆に多い土器にはII類がほぼ対応している。この傾向は特に縄文土器の胎土観察で、顕著であった。しかし、弥生土器では明瞭な違いはなかった。

### 3 まとめ

久田堀ノ内遺跡から出土した縄文・弥生土器を複数の胎土分析法により検討したところ、以下のことが明らかとなった。

(1) 縄文晩期の胎土分析では、昨年（2003年）分析した久田原遺跡の晩期在地産（谷尻式）と久田堀ノ内の在地産土器の分布域が異なった。これは、在地産と考えられる土器にも時期などにより複数の胎土があることが想定される。たとえば、13の谷尻式は久田原（谷尻式）分布範囲に入る。また、搬入品の可能性のある土器のうち胎土的に類似するものがあるかどうかでは、まともにはみられなかった。しかしながら、この点に関しては、分析点数が少ないこともあり十分な検討が加えられなかった。以上のように、今回の分析では在地産と思われる土器にも複数の胎土があることが推定され、搬入品の可能性のある土器にも複数に分類された。

(2) 弥生中期後葉土器の胎土分析では、久田堀ノ内の在地産が壺と甕で胎土が異なるようである。また、搬入品の可能性のある土器も脚付鉢と高杯・器台で胎土が異なる。また、在地産のものは、久田原および津山市内の土器と胎土的に類似していたが、搬入品の可能性のある土器はこれらに分布域には入らなかった。しかし、4（甕）と5（高杯）が搬入品の可能性のある土器と胎土が類似しており、今回の分析でも在地産、搬入品の分布範囲は明確にならなかった。

6～9の4点は、形態・文様・技法などから鳥取県青谷上寺地遺跡に類例があることが、分析依頼者である河合忍氏の研究<sup>(2)</sup>で明らかになっている。そこで、本報告でも蛍光X線による胎土分析を実施する予定であったが、分析試料の入手等で比較検討できなかった。しかし、青谷上寺地遺跡出土の類似試料を実見および一部ではあるが実体顕微鏡観察を行うことができた。この観察では、青谷上寺地の胎土には安山岩？らしき岩片が観察された。この岩片は、久田堀ノ内の土器にはみられないことから青谷上寺地の特徴と思われるが、一部分の土器しか観察できなかったこともあり、確定までには至っていない。しかし、青谷上寺地遺跡の周辺の地質基盤層には、安山岩の基盤層があることから、

形態・文様・技法的に類似している土器でも、それぞれの遺跡で生産されていたことが現段階では推定される。

以上、久田堀ノ内遺跡の縄文・弥生土器の胎土分析では比較データの少なさ・制約で十分に検討することができなかった。試料の蓄積を行い再検討する必要がある。

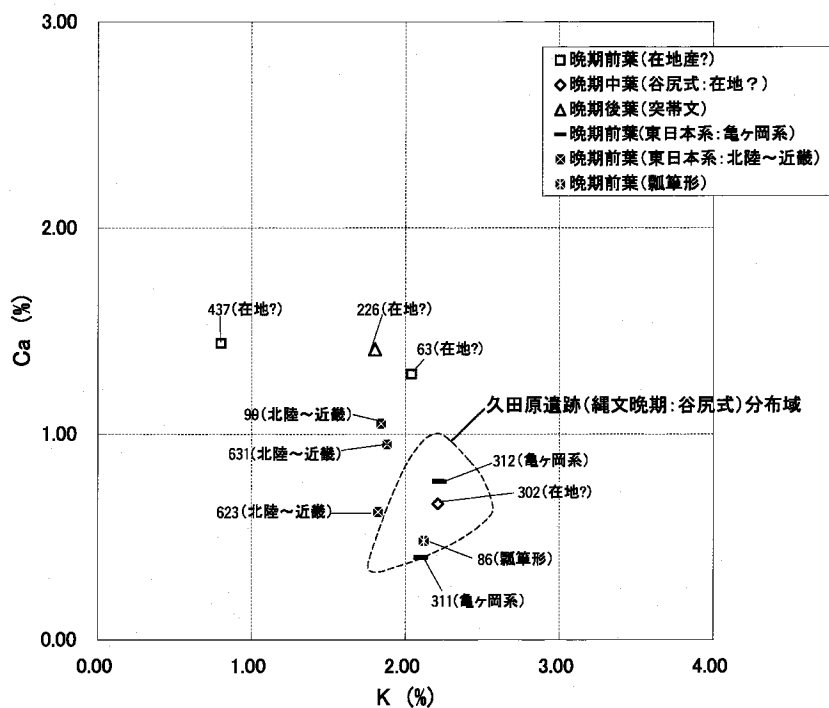
この分析を実施する機会を与えていただいた、弘田和司、河合 忍の両氏および岡山県古代吉備文化財センターの職員に方々にはいろいろお世話になった。また、分析試料では、津山市教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターにお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

註)

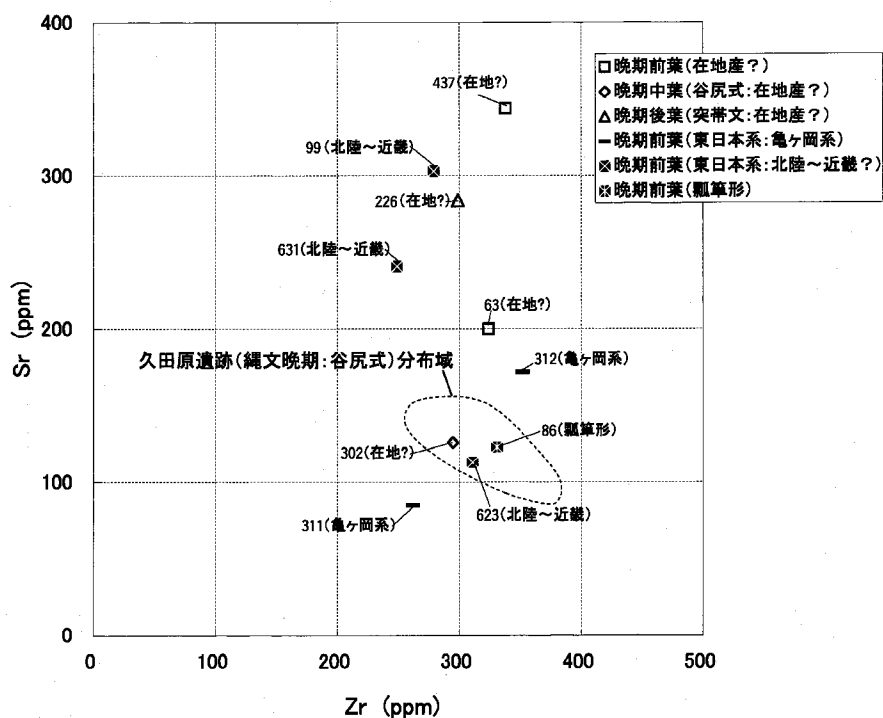
- (1) 白石 純「久田原遺跡出土土器の胎土分析」『久田原遺跡、久田原古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184 岡山県教育委員会 2004年。
- (2) 河合 忍「弥生土器の空間的境界を考えるー弥生時代中期後葉の中国地方東部を題材としてー」『中部弥生時代研究会第8回例会発表要旨集』中部弥生時代研究会 2003年。

表15 久田堀ノ内遺跡出土土器の分析一覧表 (%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm.

実測番号	遺構名	器種	時期	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
854	竪穴住居4	壺	弥生中期後葉	68.61	0.88	19.28	4.48	0.03	1.37	0.48	2.10	1.89	0.70	201	90	263
1004	住居跡群周辺	壺	弥生中期後葉	64.91	0.85	20.59	5.93	0.05	1.52	0.35	3.31	1.57	0.67	198	83	272
895	土壇70	壺	弥生中期後葉	64.38	1.00	21.67	6.02	0.06	1.62	0.38	2.46	1.65	0.58	159	70	265
908	溝13	甕	弥生中期後葉	63.14	1.05	23.35	4.53	0.04	1.41	0.77	2.76	1.94	0.80	213	134	322
886	竪穴住居13	高坏	弥生中期後葉	64.97	0.85	22.57	5.01	0.05	1.40	0.63	2.45	1.83	0.07	205	143	241
1034	包含層	器台	弥生中期後葉	65.31	0.91	21.85	4.84	0.05	1.42	0.75	2.39	1.93	0.33	179	204	324
935	溝13	高坏	弥生中期後葉	64.35	0.81	20.92	4.21	0.04	1.88	0.65	4.63	1.89	0.42	188	171	234
1033	弥生包含層	脚付鉢	弥生中期後葉	65.06	0.98	21.24	5.50	0.06	1.53	0.31	2.61	1.65	0.85	196	85	287
966	河道7	高坏	弥生中期後葉	62.12	0.95	23.58	6.08	0.06	1.47	0.71	2.44	2.03	0.34	215	146	277
1038	弥生包含層	壺	弥生中期中葉	58.09	1.19	26.30	6.70	0.07	1.45	0.34	2.63	1.79	1.25	163	90	388
437	河道2上流部東斜面	深鉢	縄文晩期前葉	55.03	0.96	26.53	7.55	0.09	1.61	1.44	2.64	0.80	3.15	79	344	338
63	土器溜2-A	浅鉢	縄文晩期前葉	61.41	0.91	22.27	6.49	0.08	1.43	1.29	2.33	2.04	1.54	249	200	324
302	河道1最上流部上層	深鉢	縄文晩期中葉	61.47	0.78	24.21	5.43	0.04	1.47	0.66	3.39	2.21	0.07	222	126	295
226	窪地1	深鉢	縄文晩期後葉	59.54	0.95	22.49	7.78	0.09	1.40	1.41	2.71	1.80	1.65	182	284	299
312	河道1最上流部上層	壺	縄文晩期前葉	61.34	0.83	23.81	6.43	0.06	1.53	0.77	2.75	2.22	0.05	226	172	352
311	河道1最上流部中層	注口土器	縄文晩期前葉	66.28	0.59	22.56	4.53	0.03	1.36	0.40	1.67	2.10	0.26	214	85	262
623	C地区包含層	浅鉢	縄文晩期前葉	64.80	1.37	21.01	4.84	0.05	1.45	0.62	2.46	1.82	1.43	199	113	311
99	土器溜II	浅鉢	縄文晩期前葉	65.50	0.90	22.13	4.02	0.04	1.48	1.05	2.49	1.84	0.37	185	303	279
631	D地区包含層	浅鉢	縄文後期中葉	59.97	0.80	26.20	5.76	0.05	1.45	0.95	2.34	1.88	0.34	209	241	249
86	土器溜2-B	瓢箪形	縄文晩期前葉	64.81	1.01	22.22	4.97	0.04	1.34	0.48	2.12	2.12	0.67	218	123	331

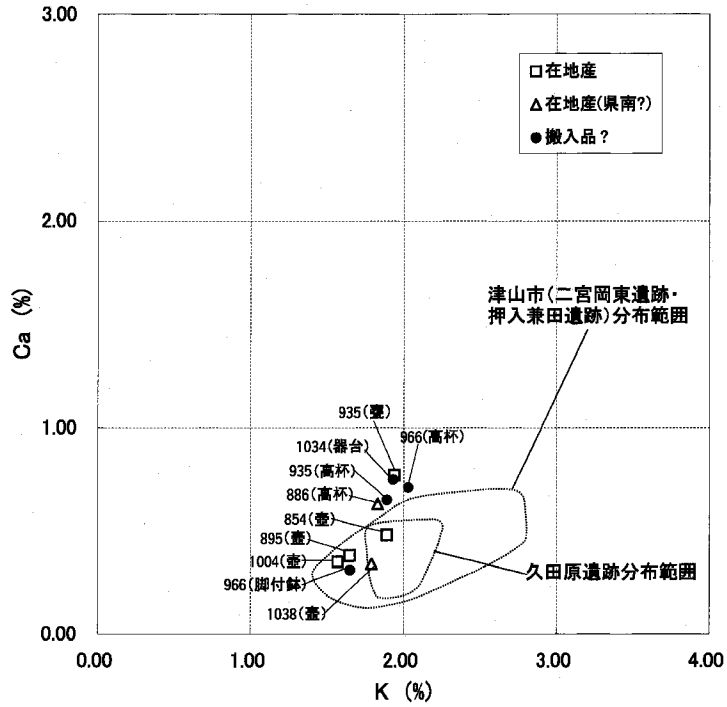


第941図 久田堀ノ内遺跡出土縄文晩期土器の胎土比較 (K - Ca散布図)

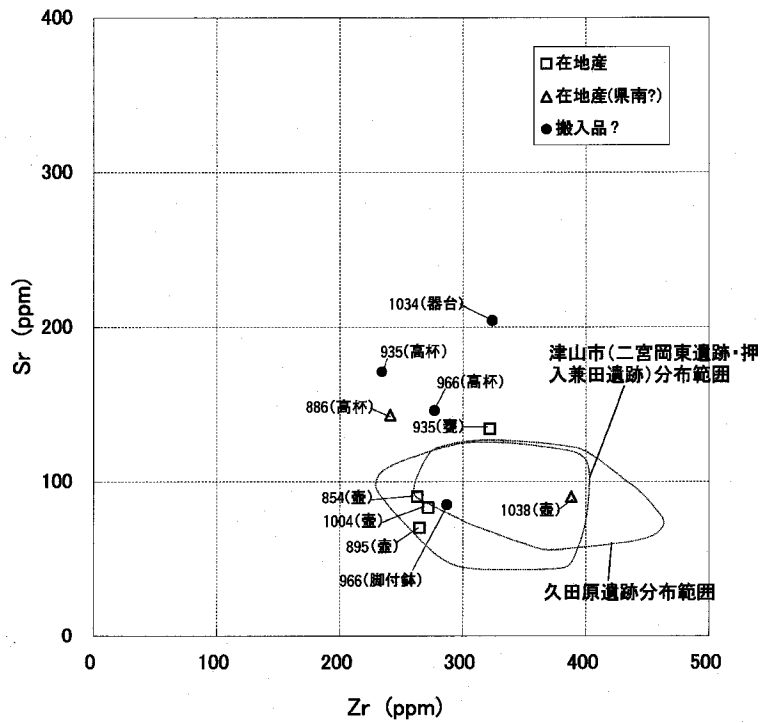


第942図 久田堀ノ内遺跡出土縄文晩期土器の胎土比較 (Zr - Sr散布図)





第943図 久田堀ノ内遺跡出土弥生中期の在地・搬入品土器の胎土比較 (K-Ca散布図)



第944図 久田堀ノ内遺跡出土弥生中期の在地・搬入品土器の胎土比較 (Zr-Sr散布図)



## 2 久田堀ノ内遺跡における植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

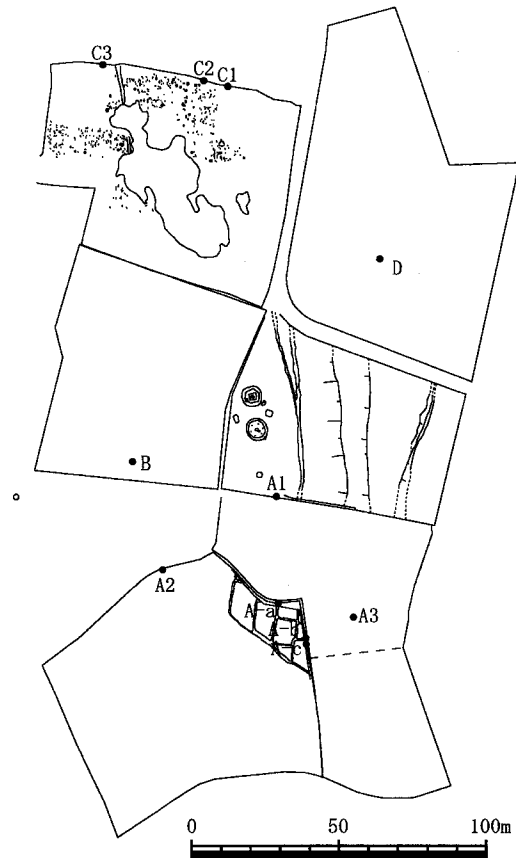
### はじめに

久田堀ノ内遺跡は吉井川上流域左岸の氾濫原に立地する縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世の複合遺跡である。このうち、弥生時代については北側に隣接する久田原遺跡とともに岡山県北部で発掘された最も古い集落跡として注目されている。これまでの発掘調査では、調査区南西部C2区において弥生時代後期～古墳時代初頭と推定される水田状遺構が確認されており、当時の集落の生産域であった可能性が考えられている。そこで、水田状遺構の性格、とりわけ稲作地としての土地利用が行われていたかを明らかにすることを目的として遺構を構成する堆積物を中心に植物珪酸体分析を実施した。その結果、栽培種のイネ属は検出されたものの、その出現率は低く、稲作が行われていたと特定することができなかった。そこで、今回は、C2区およびその周辺調査区の明らかに稲作が行われていない堆積物を対象にして、植物珪酸体分析を実地し、栽培種イネ属の産状を調べることで水田状遺構の性格に関する検討を行う。

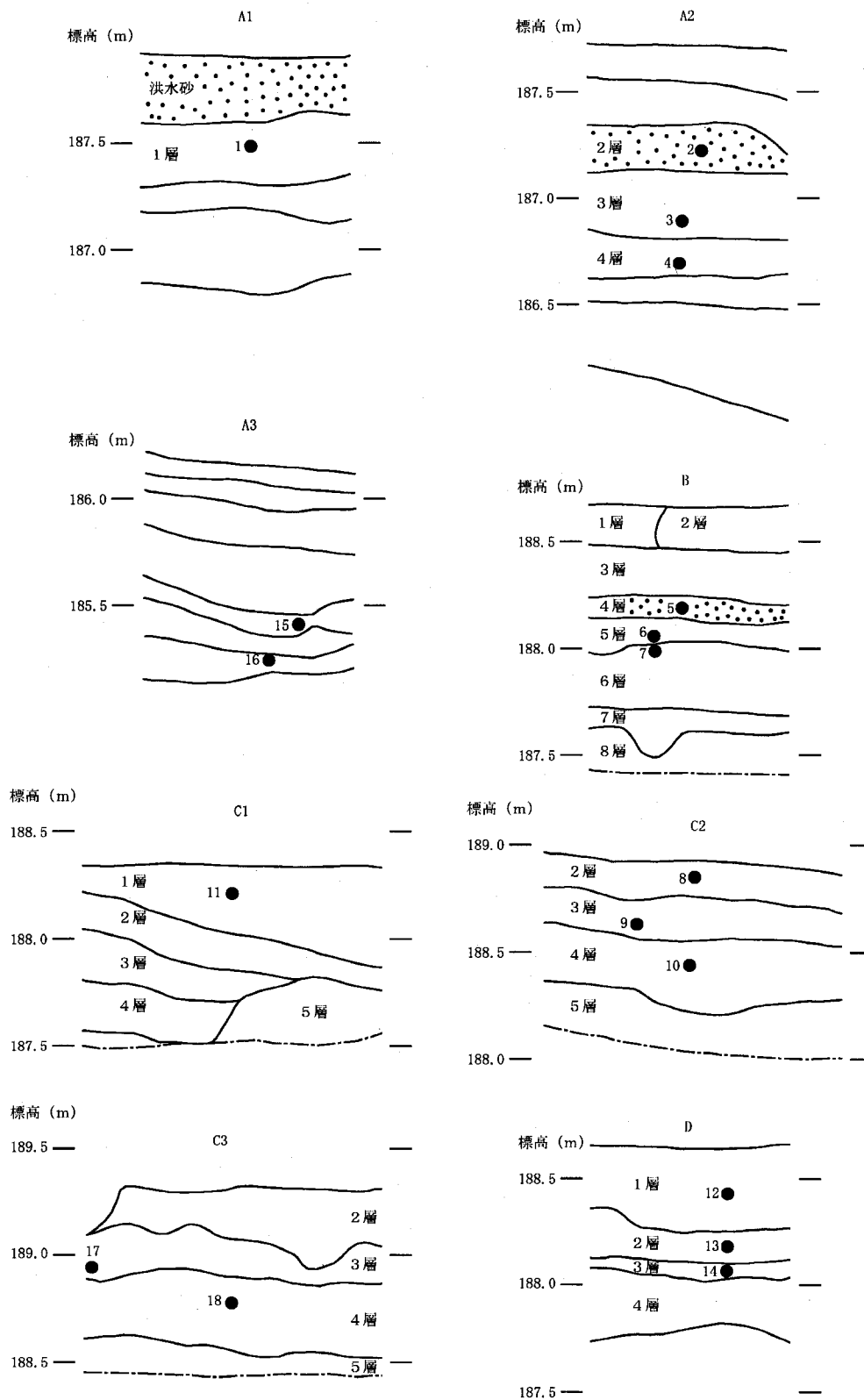
### 1 試料

試料は、A1～A3地点、B地点、C1～C3地点、D地点の計10か所から層位資料として、またA-a～A-bから柱状試料を採取した（第945図）。各地点の試料採取層位等を第946図に示す。いずれの地点も洪水砂およびその下位の堆積物から試料を採取した。このうち、C1～C3地点とD地点では縄文時代晩期～弥生時代中期の堆積物から試料が採取されている。以下に、各地点の堆積層の状況について、発掘調査時の所見に基づいて記載する。

A1・A2地点は同様な層相変化を示す。最下位の黄褐色土は中粒～細粒砂からなり、淘汰は比較的良い。その上位の暗暗褐色～黒褐色土層との層界は凹凸がある。暗暗褐色～黒褐色土は上部に向かい黒色化が強まることから、上部に腐植が集積していることが窺える。本層が弥生時代中期ないし弥生時代中～後期の包含層とさ



第945図 資料採取地点の位置



第946図 各地点の土層断面及び資料採取層位

れる。この上位は、A 1 地点と A 2 地点で異なった状況を示す。A 1 地点では、黄褐色土と黒褐色土が混じる堆積物が認められる。礫も混じり、氾濫による堆積とみられる。A 2 地点では、黒褐色土の上位に暗褐色土が堆積する。下位層との層界が不明瞭であり、弥生時代中期～後期の包含層とみられている。この上位には、氾濫による黄褐色砂が堆積する。なお、A 3 地点では、洪水砂の下位に旧河道が検出され、弥生時代後期の包含層とみられる黒褐色土が堆積する。

B 地点の堆積層は 8 層に分層されているが、堆積状況は A 2 地点と類似する。すなわち、下位より黄褐色土（8 層・7 層）、黒褐色土（6 層）、暗褐色土（5 層）、氾濫性堆積物の黄褐色砂（4 層）が堆積する。この上位には、礫が混じる暗褐色土（3～1 層）が堆積する。6 層・5 層が弥生時代中期包含層、4 層が弥生時代末～古墳時代初頭包含層、3 層～1 層が中世とされている。

C 1～C 3 地点は 5 層に分層される。最下部の 5 層は、砂礫および褐色砂からなる。砂礫と褐色砂との境は明瞭である。4 層は礫が混じる暗褐色土である。上位との境は不明瞭で漸移する。3 層は黄褐色土である。上位との境は乱れている。2 層は暗褐色～黒褐色で、礫や黄褐色土のブロックなどが混じる。1 層は礫混じりの黒褐色土である。4 層・3 層が縄文時代晩期包含層、2 層が縄文時代晩期～弥生時代中期包含層、1 層が弥生時代中期包含層とされている。

D 地点は、下位部に砂礫が認められ、この上位が 1 層～4 層に分層されている。4 層は礫が混じる黄褐色土である。3 層・2 層は暗褐色土である。2 層上部は乱れている。1 層は、縄文時代晩期包含層の黒褐色土である。

試料は、A 1～A 3 地点が弥生時代の堆積物から 6 点、B 地点が弥生時代中期～古墳時代初頭の堆積物から 3 点、C 1～C 3 地点が縄文時代晩期～縄文時代中期の堆積物から 6 点、D 地点が縄文時代晩期およびその下位の堆積物から 3 点、合計 18 点が採取された。これらの中から、縄文時代晩期～弥生時代中期にかけての 13 点を分析試料として選択した。このほか、C 2 区水田遺構の水田部（A- a 地点）、畦部（A- b 地点）、畦部南側水田（A- C 地点）から柱状試料を採取した。

## 2 分析方法

湿重および乾重を正確に計測した試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250 K Hz，1 分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを、カバーガラス上に滴下・乾燥させて、プリユラックスで封入してプレパラートを作成する。分析の際には、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラート数・検鏡した面積を正確に計量し堆積物 1 g あたりの植物珪酸体植物珪酸体含有量を求める。検鏡は、400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部単細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細傍珪酸体と呼ぶ）と葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞計酸体と呼ぶ）を、近藤・佐藤（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から稲作の様態や古植生について検討するため、植物珪酸体群集の層位分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体とも各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。また、堆積物 1 グラム当たりの植物珪酸体含量も図示する。

### 3 結果

結果を表16、第948図に示す。植物珪酸体は各試料から検出されるが、その保存状態は悪い。また、短細胞珪酸体に比べて、機動細胞珪酸体の検出個数が概して少ない。以下、層位ごとの産状について記載する。

・縄文時代晩期の堆積物：C 1・C 2 地点およびD 地点の植物珪酸体含量は約3,500個/g 前後ないしそれ以下である。検出される種類はタケ亜科・ヨシ属・ウシクサ族などであり、タケ亜科の産出が目立つ。また、D 地点試料番号12では栽培植物であるイネ属の機動細胞珪酸体が約60個/g 検出される。

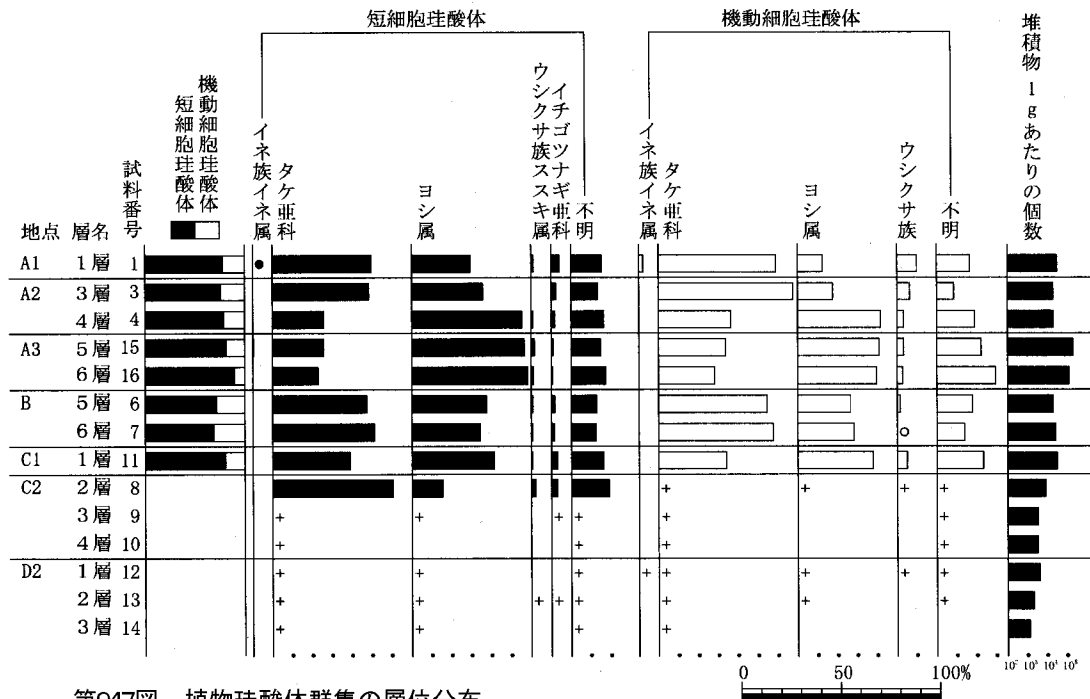
なお、縄文時代晩期～弥生時代中期包含層とされるC 2 地点の試料番号8では同様な種類が検出されるが、植物珪酸体含量が約8,600個/g と増加する。

・弥生時代中期～後期の堆積物：概して、縄文時代晩期の堆積物よりも植物珪酸体の含まれる量が多い。また、A 1・A 2・B・C 1 地点とA 3 地点で含量に大きな違いがみられる。前者は約20,000～30,000個含まれる。この中ではタケ亜科が下位と同様に多産するが、ヨシ属も多産する。特にA 2 地点の試料番号4、C 1 地点の試料番号11では、タケ亜科よりもヨシ属が多く検出される。また、A 1 地点の試料番号1 では、イネ属短細胞珪酸体が約40個/g、イネ属機動細胞珪酸体が約160個/g 検出される。

これに対して、後者のA 3 地点では、堆積物 1 g 当たりに含まれる植物珪酸体含量が約210,000～130,000個と、他の試料と比較して極めて多い。検出される種類は同様であるが、ヨシ属の産出が顕著である。また、試料番号15ではイネ属短細胞家酸体が約900個/g 検出される。

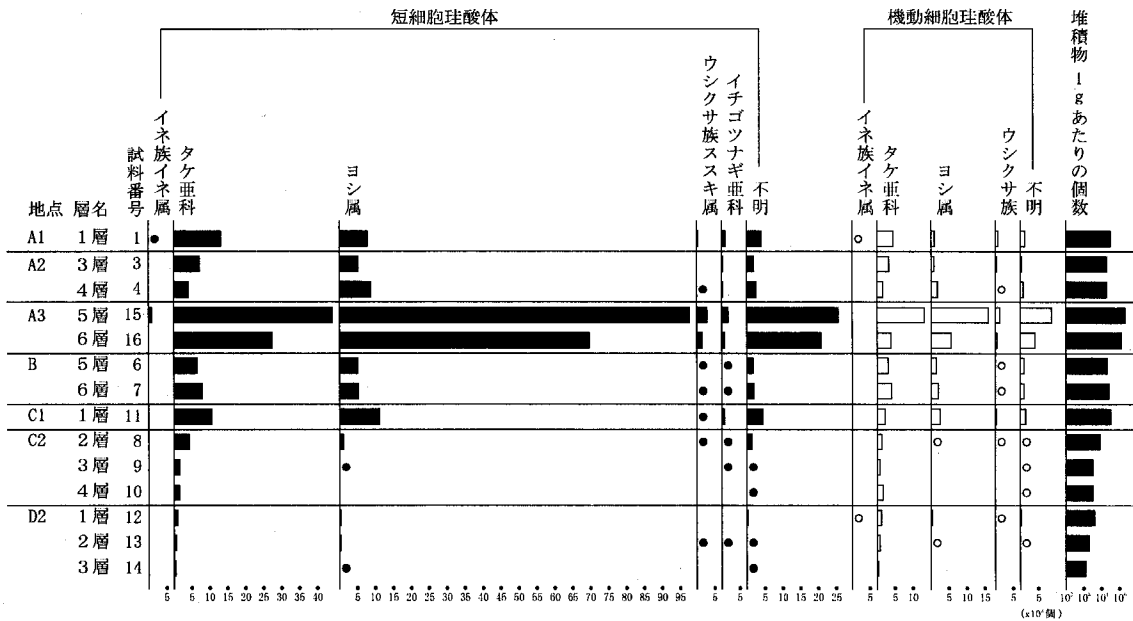
表16 植物珪酸体分析結果

種類	A 1		A 2		A 3		B		C 1	C 2			D		
	試料番号	1	3	4	15	16	6	7	11	8	9	10	12	13	14
イネ科葉部短細胞珪酸体															
イネ族イネ属	1	—	—	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タケ亜科	337	217	122	391	219	167	230	298	165	58	52	36	22	19	
ヨシ属	201	160	263	864	559	132	154	317	42	6	—	10	9	9	
ウシクサ族ススキ属	8	—	4	25	12	3	3	4	6	—	—	—	2	—	
イチゴツナギ亜科	28	11	9	16	6	6	7	23	8	2	—	—	1	—	
不明キビ型	15	11	7	35	13	6	3	19	15	2	1	2	4	1	
不明ヒゲシバ型	68	44	61	166	140	36	41	91	23	3	2	6	—	2	
不明ダンチク型	22	5	10	24	13	3	12	15	14	4	3	2	1	—	
イネ科葉身機動細胞珪酸体															
イネ族イネ属	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—
タケ亜科	113	96	46	116	31	76	116	62	49	28	58	39	29	13	
ヨシ属	24	25	53	141	44	37	57	69	2	—	—	15	2	—	
ウシクサ族	19	9	4	11	3	2	1	9	4	—	—	3	—	—	
不明	32	12	24	77	33	25	28	43	6	3	2	11	5	—	
合計															
イネ科葉部短細胞珪酸体	680	448	476	1529	962	353	450	767	273	75	58	56	39	31	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	192	142	127	345	111	140	202	183	61	31	60	70	36	13	
総計	872	590	603	1874	1073	493	652	950	334	106	118	126	75	44	
堆積物 1 g の総数	33926	19685	20337	211692	133833	19158	22618	33541	8640	2866	3420	3645	2136	1150	



第947図 植物珪酸体群集の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体・イネ科葉身機動細胞珪酸体とも100個未満の試料で検出された種類を示す。



第948図 植物珪酸体含量の層位分布

堆積物1gあたりに換算した個数を示す。なお、●○は200個未満で検出されたものについて示す。

#### 4 考察

縄文時代晩期およびその下位の層順では、堆積物 1 g 当たりに含まれる植物珪酸体量が約3,500個前後ないしそれ以下であり、極めて少なかった。遺跡の立地条件や堆積物の層相を考慮すると、堆積速度が速く蓄積物中に取り込まれる化石数が少なかったことが原因の一つとして考えられ、検出される植物珪酸体は碎屑物とともに集水城内から運搬堆積した異地性のもので反映している植生は比較的広範囲を想定しておく必要がある。

今回の調査地点のうち、縄文時代晩期とみられる層準の植物珪酸体の産状からは、周辺にタケ亜科（タケ類・ササ類含む）やヨシ属などが分布していたことが推定される。ただし、各地点とも上位に向かい植物珪酸体の含量が増加している。また土色も黒色が強くなり、腐植の集積も進行している。これらのことから、周辺は次第に安定した環境へと変化し、植生に覆われるようになったことが推定される。なお、D地点の1層からは植物栽培のイネ属が検出されたが、上位層での生物攪乱作用（植物の根や土壌生物の活動）による落ち込みの可能性が高い。

弥生時代中期および中期～後期の遺物包含層では植物珪酸体含量が増加し、各種類ではヨシ属が増加した。A 2 調査地点でも同様な変化が見られており、C 2 地区の周辺で河川の氾濫の影響が小さくなり、大型の抽水植物のヨシ属が繁茂する草地が形成されたと推定される。この河川沿いの立地条件の変化は、人間が低地へ進出する契機になっている可能性がある。なお、弥生時代後期の河道内にはヨシ属が繁茂していたことが窺え、湿潤な場所であったことが推定される。

弥生時代後期～古墳時代初頭の洪水砂の堆積は、その影響を受けた調査区において立地条件が著しく変化した可能性がある。この洪水層直下の堆積物からは、栽培植物のイネ属がA 1 地点とA 3 地点から検出されたことから、洪水がおこる前には集水域において稲作が行われていたことが推定される。ところで、A 1 地点で産出したイネ属の含量は、短細胞珪酸体が約40個/g、機動細胞珪酸体が約160個/gであった。また、短細胞・機動細胞各珪酸体総数に占める出現率を計算すると、短細胞珪酸体が1%未満、機動細胞珪酸体が約2%である。また、河道埋積物であるA 3 地点の試料番号15では、イネ属短細胞珪酸体が約900個/g、出現率をみると2%である。水田稲作が行われていた土壌では、イネ属機動細胞珪酸体量が5,000個/gを越すという調査例（杉山, 1989; 古環境研究所, 1994など）や稲藁を堆肥として与えている現在の水田におけるイネ属機動細胞珪酸体の占める割合は16%であったという調査例（近藤, 1988）などがある。これらの調査例と比較しても、イネ属の含量・割合も前回の調査同様に低く、調査地点で稲作が行われていたことを示唆するものではない。ただし、今回の結果で注目すべき点として、河道堆積物と、河道周辺の同時期の堆積物における植物珪酸体含量の差があげられる。この差は著しく、河道内が河道周辺に比較して植生に覆われやすい環境にあったとしてもその差は大きすぎる。この差の原因としては、河道周辺の堆積物、すなわち水田状遺構を構成している堆積物が洪水により大きく浸食されていることが示唆される。すなわち、河道周辺の地表面となっていた堆積物はほとんど浸食されている可能性が高い。前回の調査では水田状遺構から栽培種のイネ属が少ないながらも出現していることは、稲作が行われていなかったことを示すのではなく、むしろ耕作が行われていたことを示している可能性が高い。

今回の課題としては、弥生時代中期の層準が弥生時代中期～古墳時代初頭の洪水性堆積物によって浸食されているか、また、どのような土壌構造が認められるか堆積物微細形態観察を行い、検証する

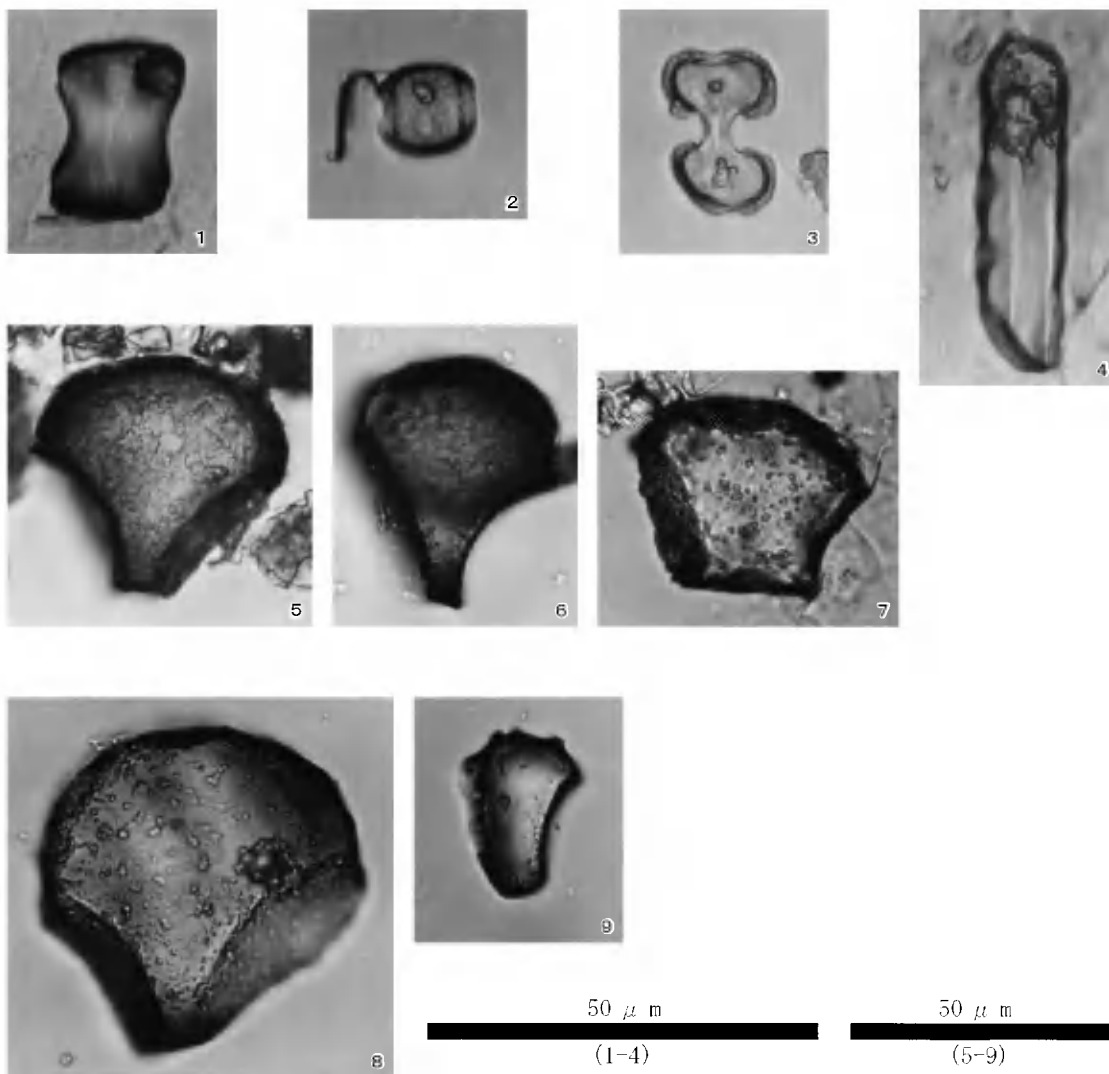


ようにしたい。さらには、河道堆積物の花粉化石の産状を明らかにし、低地の植生変化を明らかにすることも検証したい。

#### 参考文献

- 古環境研究所（1994）塚田遺跡付近のプラント・オパール分析。「塩野西遺跡群塚田遺跡－長野県北 佐久郡御代田町塚田遺跡発掘調査報告書－」，長野県御代田教育委員会，p. 356－358.
- 近藤練三（1988）十二遺跡土壌の植物珪酸体分析。「十二遺跡 長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書」，御代田町教育委員会，p. 377－383.
- 近藤練三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析，その特徴と応用．第四紀研究，25， p. 31－64.
- 杉山真二（1989）プラント・オパール．練馬区弁天池低湿地遺跡の調査，練馬区教育委員会・練馬区 遺跡調査会，p. 133－143

写真63 植物珪酸体



- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| 1 タケ亜科短細胞珪酸体 (9)   | 2 ヨシ属短細胞珪酸体 (15)     |
| 3 ススキ属短細胞珪酸体 (1)   | 4 イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (1) |
| 5 イネ属機動細胞珪酸体 (1)   | 6 イネ属機動細胞珪酸体 (15)    |
| 7 タケ亜科機動細胞珪酸体 (9)  | 8 ヨシ属機動細胞珪酸体 (15)    |
| 9 ウシクサ族機動細胞珪酸体 (1) |                      |

表17 久田堀ノ内遺跡における花粉分析結果

分類群		A6区 No.88 河道			
学名	和名	最上層	第2層	第3層	第4層
Arboreal pollen	樹木花粉				
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1		
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科			1	
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	1	1		1
Trilate type spore	三条溝胞子	2			1
Arboreal pollen	樹木花粉	0	1	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	1	0
Total pollen	花粉総数	0	1	1	0
Unknown pollen	未同定花粉	1	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	3	1	0	2
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)

### 3 久田堀ノ内遺跡における花粉分析

環境考古研究会

#### 1 はじめに

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壤中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

#### 2 試料

試料は、久田堀ノ内遺跡、河道7上流部東半土層より採取された堆積物、最上層（黒褐色粘性細砂）、第2層（黒褐色粘性細砂）、第3層（下層上半）（灰黄褐色粘性粗砂）、第4層（下層下半）（にぶい黄褐色粘性粗砂(黒褐色粘性細砂混)）、以上計4点である。

#### 3 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（?）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模

様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

#### 4 結果と考察

出現した分類群は、樹木花粉1、草本花粉1、シダ植物孢子2形態の計4である。なお、主要な分類群は写真64に示した。同時に寄生虫卵についても観察したが、検出されなかった。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

イチイ科？イヌガヤ科？ヒノキ科

〔草本花粉〕

イネ科

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

久田堀ノ内遺跡河道7上流部東半土層の最上層（黒褐色粘性細砂）、第2層（黒褐色粘性細砂）、第3層（下層上半）（灰黄褐色粘性粗砂）、第4層（下層下半）（にぶい黄褐色粘性粗砂（黒褐色粘性細砂混））の4試料からは、花粉がほとんど検出されなかった。花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境が示唆される。水田跡で乾湿を繰り返す乾田では、花粉などの有機質遺体が分解されることが多いが、本分析からは水田であるかどうかは判断できない。

#### 参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

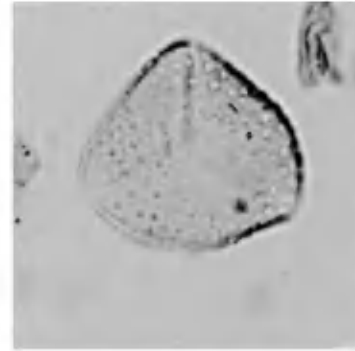
写真64 久田堀ノ内遺跡の花粉・孢子



1 イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科



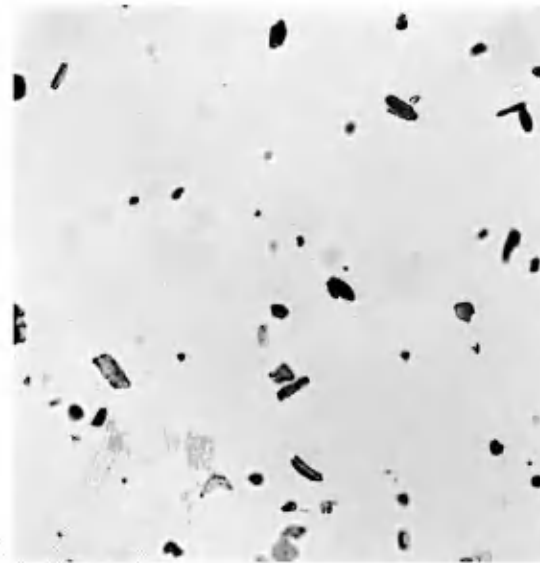
2 シダ植物単条構孢子



3 シダ植物三条構孢子



4 最上層



5 第2層



6 第3層



7 第4層

— 10  $\mu$  m

## 4 和鏡の付着物について

元興寺文化財研究所

### 1 分析資料および分析内容

- ・ No.1 和鏡（久田原遺跡M221）・・・付着物の写真記録、周縁部の木質鑑定と黒色付着物の材質分析
- ・ No.2 和鏡（久田堀ノ内遺跡M532）・・・付着繊維（布と紙）の写真記録と紙の材質分析

### 2 使用機器

- ・ フーリエ変換型赤外分光光度計（F T - I R）（日本電子(株) J I R - 600）
- ・ 生物顕微鏡（(株)オリンパス B X50）
- ・ 金属顕微鏡（(株)オリンパス製 B H - U M A）
- ・ 走査型電子顕微鏡（(株)日立製作所製 S - 3500 N）

### 3 方法および結果

#### 3-1 No.1 和鏡（久田原遺跡M221）

##### 1) 側板の木質

木質は針葉樹で、柾目の薄板であった。

##### 2) 黒色付着物

緑の黒い膜状付着物を F T - I R で分析を行った結果、漆と考えられる吸収が確認された（第949図）。

##### 3) 布の記録

マクロレンズを用いて布の記録を行った。布は平織りであった。また、剥落していた糸を S E M で観察したが、組織が土壌化していたため繊維種の同定はできなかった（写真65～67）。

##### 4) その他

側板に漆が付着していた。

鏡背に接していた土壌に炭化した木質と漆膜がみられた（写真67）。

以上により、和鏡は漆塗りの丸い箱に収められていたものと考えられた。布は箱に用いられていたのか、鏡を包んでいたのかは不明である。

#### 3-2 No.2 和鏡（M532）

##### 1) 布の記録

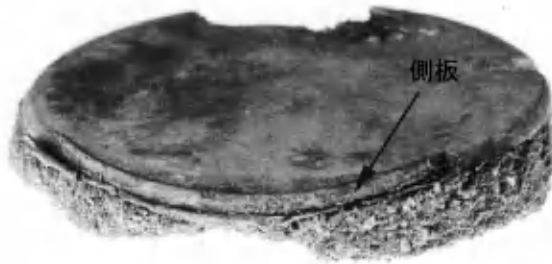
実態顕微鏡で布の観察と記録を行った。鏡面上で、平織りとみられる布と綾織り（二越一沈）の2種類が観察された（写真68・69）。

##### 2) 紙状繊維

マイクロスコープで観察と記録を行った。繊維の状態などから紙と考えられた。F T - I R で分析を行った結果、植物性繊維の吸収が確認された（第950図）。

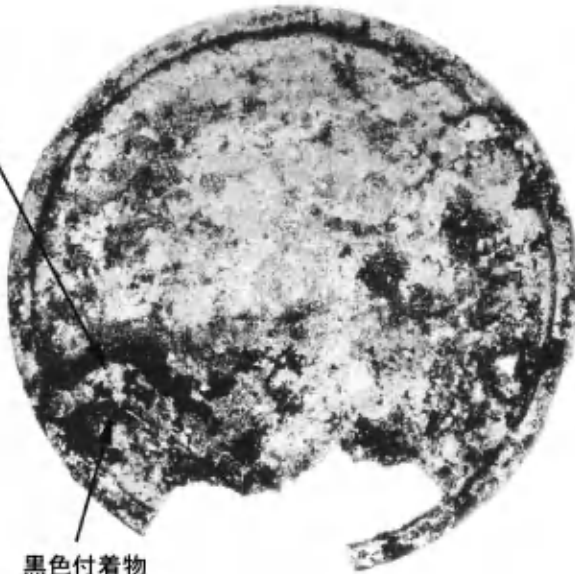


鏡面



側板

布 (SEM 観察)



黑色付着物

鏡背

写真65 No. 1 和鏡の分析箇所



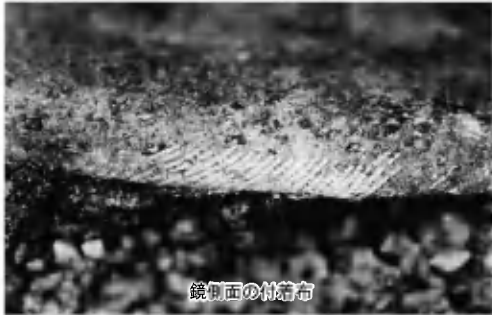


写真66 No. 1 和鏡の鏡背付着物

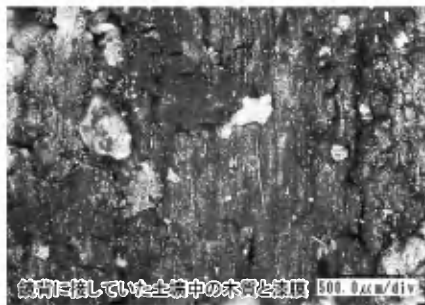
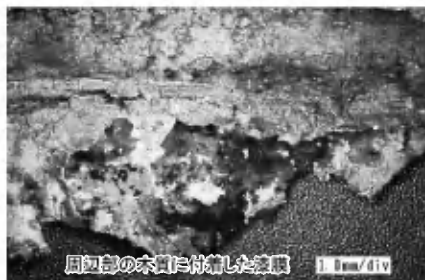
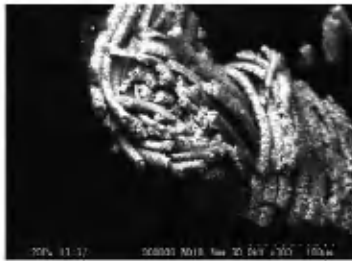


写真67 No. 1 和鏡



a部分 (平織)



b部分 (平織)

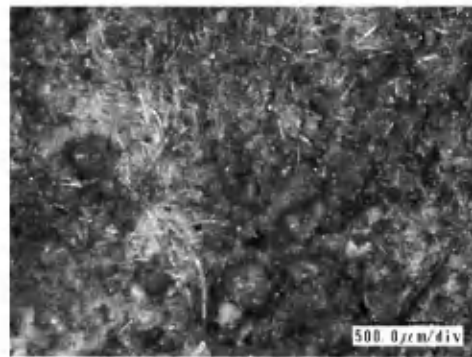
写真68 No. 2 和鏡の鏡面付着繊維 (1)



c部分 (綾織)

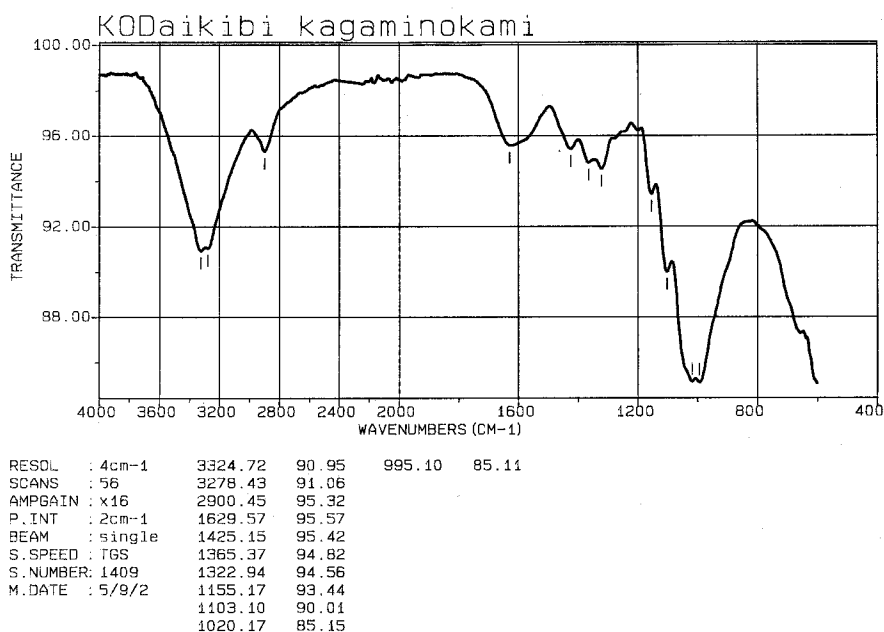


d部分 (綾織)

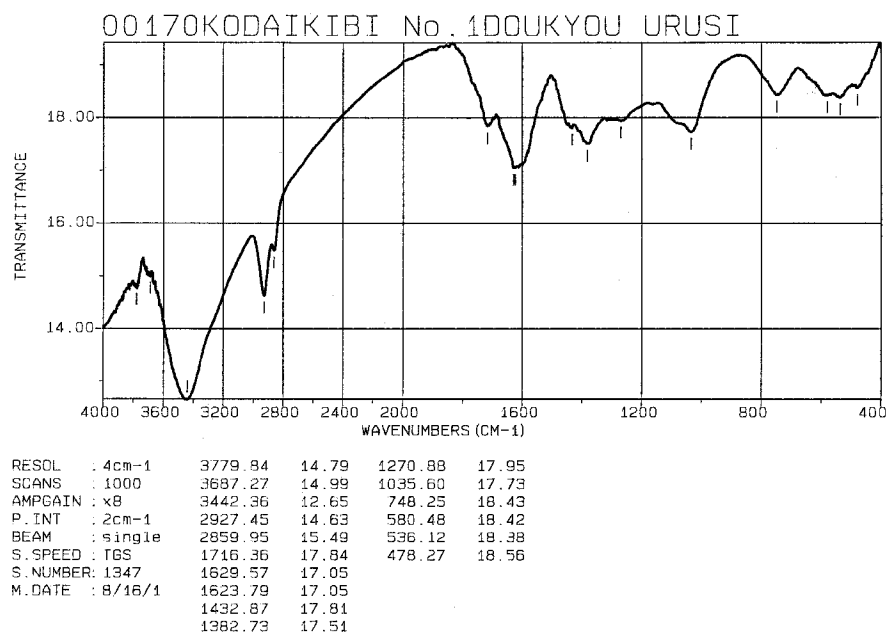


eの拡大 (紙?)

写真69 No. 2 和鏡の鏡面付着繊維 (2)



第949図 No.1和鏡の紙状繊維のFT-IRスペクトル



第950図 No.2和鏡の紙状繊維のFT-IRスペクトル

# 遺構一覽表

## 遺物觀察表

### 新旧遺構名称对照表

#### 1 遺構

豎穴住居・豎穴遺跡一覽表

掘立柱建物一覽表

柱穴列一覽表

埋甕遺構一覽表

井戸一覽表

袋状土壙一覽表

焼成土壙一覽表

土壙墓一覽表

土壙一覽表

集石・石敷土壙一覽表

溝一覽表

火処一覽表

河道一覽表

#### 2 遺物

土器觀察表

石器・石製品一覽表

金属製品一覽表

土製品一覽表

#### 3 新旧遺構名对照表

竪穴住居・竪穴遺構一覧表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	主軸		床面積 (㎡)	床面海拔 高 (m)	柱穴 柱間距離 (cm)	中央穴			方形形土蔵		焼土面	壁 体 溝	高床 部	土 質	砂 利 敷	カマド		備考	
						N°	E°・W				形状	長×短 (cm)	深さ (cm)	長×短 深さ	有						位置			
竪穴住居 1	3306B i	弥生・中期	長方形	376	236	N 5° E	6.82	189.10	無	—	—	—	—	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	
竪穴住居 2	4005D a	弥生中期後葉	凹形	508	503	—	20.47	188.22	4	184~225	凹形	103×102	42	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 3	4101 C e	弥生中期後葉	隅丸方形	(552)	(516)	—	(17.09)	188.02	4	260~216	不整形	120×92	38	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 4 a	4101 C f	弥生中期後葉	隅丸方形	340	316	N 5° W	7.30	187.82	無	—	—	—	—	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 4 b	4101 C f	弥生中期後葉	隅丸方形	(476)	464	N 11° W	(16.92)	187.82	4	284~260	凹形	92×84	26	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 5 a	4103 C d	弥生中期後葉	凹形	61	59	—	—	187.95	6	—	—	—	—	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 5 b	4103 C d	弥生中期後葉	凹形	785	760	—	26.85	188.10	6	—	—	—	—	—	3	無	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 6	4102 C e	弥生中期後葉	長方形	—	129	—	—	188.24	無	—	—	—	—	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 7	4104 C e	弥生中期後葉	長方形	166	130	N 12° W	—	187.94	無	—	—	—	—	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 8	4104 C h	弥生中期後葉	長方形	247	154	N 16° W	—	187.79	無	—	—	—	—	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 9 a	4105 C g	弥生中期後葉	凹形	694	692	—	39.06	187.43	6	281~129	不整形	115×90	53	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 9 b	4105 C g	弥生中期後葉	凹形	—	—	—	—	187.43	4	—	—	—	—	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 10	4107 C f	弥生中期後葉	長方形	291	160	N 15° W	—	187.63	無	—	—	—	—	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 11	4106 c H	弥生中期後葉	長方形	251	211	N 21° E	—	187.52	無	—	—	—	—	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 12	4107 C g	弥生中期後葉	凹形	750	718	—	43.93	187.13	6	236~184	楕円形	102×94	51	—	—	有	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 13	4108 C g	弥生中期後葉	方形	196	180	—	—	187.65	無	—	—	—	—	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴住居 14	4008 B h	古墳	隅丸方形	191	(184)	—	(2.72)	188.22	無	—	—	—	—	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—
竪穴遺構 1	4107 B j	中世	長方形	470	343	—	—	187.72	無	—	—	—	—	—	—	無	—	—	—	—	—	—	—	—

残りが悪い

粘土塊有、中央が凹む

掘立柱建物一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向 N° E・W	備考
				桁	梁					
掘立柱建物1	4103 C e	弥生	3×1	240~232	300	704	300	2097	N 7° E	
掘立柱建物2	4106 C f	弥生	3×1	160~124	256	436	256	1099	N 8° E	
掘立柱建物3	4006 C d	中世	2×1	320~280	535	600	535	32-11	N14° E	
掘立柱建物4	4006 B j	中世	2×2	336~308	226~212	644	448	28-18	N18° E	
掘立柱建物5	4007 B j	中世	2×2	288~194	220~198	482	418	19-96	N11° E	
掘立柱建物6	4008 C c	中世	3×2	220~205	250~230	650	480	30-30	N10° E	
掘立柱建物7	4008 C d	中世	2×1	220~200	215	420	215	9-03	N74° W	
掘立柱建物8	4106 C b	中世	2×1	326~254	412~390	580	412	23-06	N67° E	
掘立柱建物9	4100 C a	中世	4×3	318~288	256~224	318	256	88-18	N19° E	
掘立柱建物10	4009 C b	中世	2×1	200~178	198~194	382	198	7-33	N72° E	
掘立柱建物11	4101 C c	中世	2×1	220~212	226	438	226	9-75	N21° E	
掘立柱建物12	4100 B i	中世	2×1	374~332	360	720	360	25-90	N14° E	
掘立柱建物13	4100 B g	中世	3×2	200~170	306~166	200	306	17-85	N19° E	
掘立柱建物14	4100 B g	中世	3×3	382~186	204~188	382	204	58-99	N20° E	
掘立柱建物15	4102 B g	中世	(2)×2	(214~186)	(278~248)	(214)	(278)	-	N84° W	
掘立柱建物16	4100 B i	中世	5×5	218~190	250~160	218	250	102-84	N 6° E	
掘立柱建物17	4106 C b	中世	2×2	424~292	358~304	728	694	46-33	N21° E	
掘立柱建物18	4101 C b	中世	4×3	402~178	216~178	1014	604	51-82	N19° E	
掘立柱建物19	4102 C b	中世	4×2	215~165	220~175	790	410	164 (3060)	N20° E	
掘立柱建物20	4101 C f	中世	(2×2)	(438)~382	388~(324)	(830)	(712)	57-90	N77° W	
掘立柱建物21	4004 C i	中世	3×1	187~167	403~390	537	397	21-18	N 3° W	
掘立柱建物22	4004 C j	中世	3×2	352~315	295~263	1013	570	55-23	N80° E	
掘立柱建物23	4005 C i	中世	3×2	313~270	209~175	876	388	33-47	N11° W	
掘立柱建物24	4005 C i	中世	3×1	220~190	322~291	612	311	18-42	N15° W	
掘立柱建物25	4007 C i	中世	3×2	119~85	151~146	412	301	12-38	N21° W	
掘立柱建物26	4006 D a	中世	3×2	251~186	182~133	634	315	19-38 (3462)	N70° E	
掘立柱建物27	4008 C i	中世	5×2	306~191	305~184	1093	506	53-91	N73° E	
掘立柱建物28	4008 D a	中世	4×2	372~255	408~374	1167	788	88-36	N76° E	
掘立柱建物29	4009 C j	中世	3×2	394~301	266~64	698	397	27-68 (5464)	N117° W	
掘立柱建物30	4100 D a	中世	3×2	318~217	235~223	765	468	35-57	N15° W	
掘立柱建物31	4106 B j	中世	3×2	198~170	320~240	562	560	30-77	N16° E	図上で復元
掘立柱建物32	4107 B j	中世	2×2	214~202	412~190	422	412	16-77	N15° E	A 8区No41柱列と合成して作成
掘立柱建物33	4109 B i	中世	3×3	400~200	340~250	400	340	85-96	N12° E	図上で復元
掘立柱建物34	4109 B i	中世	3×3	400~272	338~208	1008	848	81-32	N24° E	図上で復元
掘立柱建物35	4107 C a	中世	-	595~325	470~195	925	910	89-80	N69° W	
掘立柱建物36	4107 C a	中世	3×2	285~155	200~165	870	395	42-10	N62° W	
掘立柱建物37	4104 C i	中世	3×2	399~312	241~196	1052	438	42-10	N24° W	
掘立柱建物38	4105 C i	中世	4×2	272~172	289~206	950	496	42-26	N21° W	
掘立柱建物39	4105 C j	中世	3×3	426~283	213~164	1030	581	57-45	N23° W	
掘立柱建物40	4105 C j	中世	5×4	347~159	209~167	1078	772	82-58	N26° W	
掘立柱建物41	4105 D b	中世	3×3	418~260	241~183	958	663	61-18	N17° W	
掘立柱建物42	4106 D c	中世	3×2	300~285	229~204	651	589	37-61	N15° W	
掘立柱建物43	4106 C j	中世	4×4	308~221	220~209	1074	859	81-73	N13° W	
掘立柱建物44	4201 C h	中世	4×2	(286)~166	222~172	818	408	32-53	N 3° W	
掘立柱建物45	4201 D b	中世	3×2	248~162	288~280	652	568	36-31	N13° E	
掘立柱建物46	4207 C j	中世	2×2	270~238	198~178	514	376	19-13	N80° W	
掘立柱建物47	4206 D b	中世	4×2	320~240	360~280	1160	660	75-46	N77° W	
掘立柱建物48	4106 D e	中世	3×2	416~322	216~194	738	619	45-48	N64° E	
掘立柱建物49	4106 D e	中世	3×2	207~183	228~194	592	422	24-78	N26° W	
掘立柱建物50	4201 D g	中世	4×1	199~159	237~227	733	237	16-90	N 9° W	
掘立柱建物51	4201 D h	中世	2×1	182~163	184~176	345	184	6-16	N 5° W	
掘立柱建物52	4108 D e	中世	2×2	272~255	220~179	538	435	22-75	N15° W	
掘立柱建物53	4109 D f	中世	5×2	274~225	295~241	1234	563	67-66	N74° E	
掘立柱建物54	4109 D f	中世	4×1	225~199	310~308	849	310	26-02	N78° E	
掘立柱建物55	4200 D f	中世	3×1	226~200	307~305	631	307	19-14	N77° E	
掘立柱建物56	4200 D f	中世	3×2	254~205	200~166	672	398	24-68	N73° E	
掘立柱建物57	4203 D c	中世	2×2	311~270	244~236	583	480	26-48	N89° E	
掘立柱建物58	4203 D d	中世	3×1	249~231	270~232	717	270	17-73	N 2° W	
掘立柱建物59	4203 D d	中世	4×1	201~192	214~212	791	214	16-68	N 1° W	
掘立柱建物60	4204 D c	中世	3×1	245~212	260~233	697	260	16-98	N90° W	
掘立柱建物61	4204 D e	中世	4×1	193~137	238	655	238	15-61	N 8° W	
掘立柱建物62	4205 D c	中世	2×2	358~328	221~184	693	405	27-36	N 8° E	
掘立柱建物63	4205 D e	中世	2×1	223~204	270~253	430	270	10-98	N87° W	
掘立柱建物64	4205 D e	中世	2×1	266~215	206~191	496	206	9-52	N 2° E	
掘立柱建物65	4205 D e	中世	2×1	252~194	186~166	446	186	7-59	N 1° W	

### 掘立柱建物一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向 N° E・W	備考
				桁	梁					
掘立柱建物66	4205 D d	中世	2 × 2	284~248	246~214	553	460	24.36	N86° W	
掘立柱建物67	4206 D d	中世	2 × 1	275~254	308~304	529	308	15.95	N87° W	
掘立柱建物68	3909 C g	近世	2 × (4)	576~168	286~186	576	286	60.27	N22° W	
掘立柱建物69	3909 C g	近世	2 × (3)	396~154	342~202	396	342	32.04	N21° W	
掘立柱建物70	4000 C e	近世	3 × 2	236~198	256~216	236	256	30.40	N 2° E	
掘立柱建物71	4000 C g	近世	3 × 3	496~200	360~154	496	360	36.14	N 6° W	
掘立柱建物72	4001 C b	近世	9 × 1	368~188	640~638	(2328)	640	148.63	N11° W	
掘立柱建物73	4002 C c	近世	3 × (1)	(222) ~170	(326~324)	602	(326)	19.62	N14° W	
掘立柱建物74	4002 C c	近世	2 × 1	206~174	(332) ~296	(388)	(332)	11.95	N12° W	
掘立柱建物75	4003 C c	近世	3 × 1	230~166	336~330	644	336	20.00	N31° W	
掘立柱建物76	4001 C f	近世	1 × 1	228~204	180~174	228	180	3.61	N 2° W	
掘立柱建物77	4002 C f	近世	3 × 1	246~204	602~(598)	660	602	39.76	N 3° E	
掘立柱建物78	4001 C g	近世	(2 × 1)	320~238	308	558	308	—	N 5° W	
掘立柱建物79	4002 C g	近世	3 × 1	94~55	209~175	227	209	4.27	N 5° E	
掘立柱建物80	4003 C g	近世	1 × 1	172~167	140~138	172	140	2.36	N 2° E	
掘立柱建物81	4003 C g	近世	3 × 1	(238) ~105	(164) ~162	(373)	(164)	5.62	N 4° W	
掘立柱建物82	4004 C f	近世	3 × (1)	(602) ~258	(510~455)	(862)	(510)	41.63	N 7° E	
掘立柱建物83	4005 C d	近世	5 × 1	240~195	530	1050	530	55.65	N75° W	
掘立柱建物84	4005 C e	近世	5 × 1	420~170	535~265	1240	535	66.34	N70° W	

### 柱穴列一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	規模	全長 (cm)	柱間距離 (cm)	棟方向	備考
						N° E・W	
柱穴列 1	4106 D f	中世	2間	410	220~190	N64° E	
柱穴列 2	4204 D d	中世	2間	386	204~182	N 9° W	
柱穴列 3	4204 D c	中世	2間	358	180~178	N84° W	
柱穴列 4	4004 C c	近世	2間	346	176~170	—	
柱穴列 5	4004 C c	近世	2間	394	204~190	—	
柱穴列 6	4004 C c	近世	3間	734	254~235	—	
柱穴列 7	4004 C h	近世	5間	703	193~104	—	
柱穴列 8	4004 C h	近世	3間	460	166~140	—	
柱穴列 9	4003 C h	近世	3間	542	202~160	—	
柱穴列10	4003 C f	近世	2間	390	200~190	—	
柱穴列11	4107 C c	近世	10間	2140	250~160	—	
柱穴列12	4108 C c	近世	8間	1650	220~190	—	

### 埋甕遺構一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	種別	備考
埋甕遺構 1	4101 B i	中世	円形	III b	85	75	42	188.30	備前甕	
埋甕遺構 2	4106 B h	中世	円形	III a	140	—	63	187.42	備前甕	
埋甕遺構 3 A	4008 C i	中世	楕円形	III a	86	70	32	188.77	不明	甕埋納ビット
埋甕遺構 3 B	4008 C i	中世	楕円形	III a	88	70	39	188.71	不明	甕埋納ビット
埋甕遺構 3 C	4008 C i	中世	楕円形	III a	93	80	39	188.67	不明	甕埋納ビット
埋甕遺構 3 D	4008 C i	中世	円形	III a	88	80	36	188.72	不明	甕埋納ビット
埋甕遺構 3 E	4008 C i	中世	隅丸方形	III a	105	95	35	188.72	不明	甕埋納ビット
埋甕遺構 3 F	4008 C i	中世	隅丸方形	III a	100	98	49	188.62	不明	甕埋納ビット
埋甕遺構 3 G	4008 C i	中世	—	III a	86	—	36	188.75	不明	甕埋納ビット

### 井戸一覧表

掲載遺構名	地区名	時期	形態	掘り方平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	備考
井戸1	3908 C f	近世	石組	円形	276	274	208	186.94	軸長は掘り方
井戸2	4000 C b	近世	石組	円形	312	280	278	186.16	軸長は掘り方
井戸3	4001 C f	近世～	石組	円形	288	288	392	188.20	軸長は掘り方

### 袋状土壌一覧表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	最大径 (cm)	床面積 (㎡)	底面海拔高 (m)	備考
袋状土壌1	4005 B j	縄文晩期	整円形	I e	280	254	166	233	0.68	186.82	
袋状土壌2	4104 C h	縄文	円形	III a	230	(199)	124	230	1.1	187.96	
袋状土壌3	4106 C c	縄文	円形	III a	120	114	58	114.00	1.01	186.74	
袋状土壌4	4104 C g	縄文	不整円形	III a	86	71	54	67.00	0.94	186.9	
袋状土壌5	4000 B h	弥生?	不整円形	III e	201	(135)	76	—	—	186.64	半分残存

### 焼成土壌一覧表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	備考
焼成土壌1	4004 B j	縄文	不整円形	III a	171	147	9	188.57	
焼成土壌2	4104 C i	中世	円形	III a	66	60	23	188.43	
焼成土壌3	4105 C j	中世	円形	III b	81	81	23	188.14	

### 墓一覧表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	掘り方上面 (cm)		掘り方底面 (cm)		深さ (cm)	備考
				長さ	幅	長さ	幅		
墓1	4004 C j	古墳	長楕円形	243	75	225	56	12	
墓2	4003 C h	中世	長方形	116	71	80	49	41	
墓3・4	4007 C b	中世	楕円形	332	194	—	—	24	
墓5	4008 C b	中世	整円形	60	58	45	43	45	
墓6	4101 B j	中世	不整形	—	—	—	—	—	
墓7	4101 B i	中世	円形	120	113	70	68	83	
墓8	4106 B i	中世	隅丸長方形	203	152	156	138	22	
墓9	4106 B j	中世	円形	103	96	76	73	25	
墓10	4106 B i	中世	不整円形	—	92	—	54	42	
墓11	4106 B i	中世	隅丸方形	108	100	94	80	60	
墓12	4106 B i	中世	楕円形	100	87	84	70	47	
墓13	4107 B i	中世	円形	141	124	108	88	81	
墓14	4107 B i	中世	隅丸長方形	161	103	117	68	30	
墓15	4108 B j	中世	楕円?	—	—	—	—	—	
墓16	4004 C j	中世	楕円形	91	78	71	62	11	漆碗出土未実測
墓17	4005 C j	中世	長方形	184	105	171	90	51	
墓18	4005 D a	中世	長方形	140	98	124	80	28	
墓19	4005 D a	中世?	楕円形	106	90	78	66	64	
墓20	4005 C i	中世?	隅丸長方形	210	98	178	71	15	
墓21	4006 C j	中世	楕円形	120	84	107	64	25	
墓22	4006 C j	中世	隅丸長方形	124	88	112	66	19	
墓23	4006 C i	中世	隅丸長方形	135	90	124	82	15	
墓24	4007 C j	中世	長方形	177	64	171	59	8	
墓25	4008 C j	中世	—	—	86	—	53	38	

墓一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	掘り方上面 (cm)		掘り方底面 (cm)		深さ (cm)	備考
				長さ	幅	長さ	幅		
墓26	4102 C j	中世	隅丸長方形	128	73	86	45	17	
墓27	4009 D a	中世	円形	198	173	90	42	47	
墓28	4102 D b	中世	長楕円形	264	160	—	—	110	
墓29	4102 D b	中世	不整形	232	145	—	—	103	
墓30	4104 C i	中世	長方形	362	236	170	90	13	
墓31	4203 C j	中世	楕円形	162	78	131	58	22	
墓32	4200 D f	中世	隅丸長方形	153	62	142	52	6	
墓33	4200 C j	中世	長楕円形	253	116	240	98	23	
墓34	4200 C i	中世	長楕円形	340	132	271	117	41	
墓35	4204 D d	中世	隅丸長方形	211	84	182	60	12	
墓36	4109 C d	中世	長方形	184	76	170	44	19	
墓37	3908 C g	近世	—	—	—	—	—	—	
墓38	3908 C g	近世	—	124	—	98	—	21	
墓39	3908 C f	近世	円形	71	70	—	—	20	
墓40	3908 C e	近世	円形	85	75	68	62	23	
墓41	3908 C f	近世	円形	81	79	60	57	18	
墓42	3908 C f	近世	円形	85	76	64	61	45	
墓43	3909 C f	近世	楕円形	86	74	65	50	37	
墓44	4001 C f	近世	楕円形	370	248	—	—	78	
墓45	4001 C g	近世	円形	66	62	53	46	36	
墓46	4004 C e	近世	楕円形	260	170	105	58	28	
墓47	4005 B j	近世	不整楕円形	216	166	146	80	26	
墓48	4005 B j	近世	楕円形	154	88	111	53	5	
墓49	4005 B j	近世	楕円形	128	104	79	50	45	
墓50	4005 B j	近世	整円形	114	(102)	63	56	33	
墓51	4005 B j	近世	整円形	124	117	88	80	44	
墓52	4006 B j	近世	楕円形	174	146	42	36	49	
墓53	4006 B j	近世	楕円形	132	100	90	74	15	
墓54	4006 C a	近世	楕円形	112	79	76	55	49	
墓55	4006 C a	近世	整円形	108	100	94	86	22	
墓56	4006 B j	近世	整円形	71	70	68	66	14	
墓57	4007 B j	近世	不整楕円形	282	157	238	122	12	
墓58	4006 B j	近世	整円形	93	86	51	50	28	
墓59	4007 C a	近世	整円形	78	76	53	52	22	
墓60	4006 C a	近世	整円形	89	86	70	65	12	
墓61	4006 C a	近世	楕円形	107	91	104	88	9	
墓62	4006 C a	近世	楕円形	59	46	51	35	10	
墓63	4006 C a	近世	整円形	65	63	50	45	10	
墓64	4006 C b	近世	整円形	80	72	56	47	27	
墓65	4006 C b	近世	整円形	81	73	38	34	10	
墓66	4006 C b	近世	整円形	99	82	81	68	24	
墓67	4006 C b	近世	整円形	77	75	58	55	37	
墓68	4006 C b	近世	整円形	98	85	80	65	40	
墓69	4006 C b	近世	整円形	72	66	55	46	30	
墓70	4006 C b	近世	楕円形	174	114	110	64	54	
墓71	4006 C d	近世	方形	100	90	85	80	25	
墓72	4006 C g	近世	楕円形	110	100	95	85	55	
墓73	4006 C g	近世	整円形	103	89	62	64	31	
墓74	4006 C g	近世	隅丸方形	119	100	90	82	60	
墓75~77	4006 C g	近世	長方形	152	81	43	40	51	底面規模は墓76
墓78	4007 C f	中世	長方形	125	95	90	88	40	
墓79	4006 C g	近世	整円形	101	93	77	76	37	
墓80	4006 C g	近世	整円形	85	85	67	65	38	
墓81	4007 C g	近世	整円形	85	74	59	55	32	
墓82	4007 C g	近世	楕円形	111	86	73	64	43	
墓83	4007 C g	近世	整円形	61	52	45	40	33	
墓84	4007 C g	近世	不整円形	126	115	78	81	59	
墓85	4007 C g	近世	整円形	80	73	48	46	35	
墓86	4007 C g	近世	長方形	138	78	108	56	15	
墓87	4007 C g	近世	—	(57)	—	(43)	—	8	
墓88	4007 C g	近世	楕円形	110	87	68	55	66	
墓89	4007 C g	近世	楕円形	74	58	57	38	22	
墓90・91	4007 C g	近世	方形	174	96	73	68	50	底面の規模は墓90
墓92	4007 C g	近世	不整円形	91	88	69	66	37	
墓93	4008 C g	近世	長方形	145	105	122	75	65	
墓94	4009 C g	近世	隅丸方形	130	110	90	85	40	



土壤一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	備考
土壇1	3008 C e	縄文	円形	Ⅲ a	120	118	30	188.52	
土壇2	4005 B j	縄文	—	—	—	571	40	188.56	
土壇3	4004 C i	縄文	楕円形	Ⅲ a	70	47	25	188.59	
土壇4	4005 C j	縄文	楕円形	Ⅲ b	80	64	25	188.24	
土壇5	4005 C a	縄文	楕円形	Ⅲ b	90	69	60	187.96	
土壇6	4005 C a	縄文	楕円形	Ⅲ b	122	116	39	188.21	
土壇7	4006 C a	縄文	整円形	Ⅲ b	113	111	35	188.18	
土壇8	4009 C b	縄文	不整円形	Ⅲ e	285	(243)	18	188.94	
土壇9	4009 C b	縄文	不整楕円形	Ⅲ a	173	90	11	188.92	
土壇10	4004 C c	縄文	楕円形	Ⅲ a	92	68	20	188.58	
土壇11	4006 C e	縄文	不整円形	Ⅲ e	182	142	33	187.98	
土壇12	4006 C e	縄文	不整円形	Ⅲ e	280	224	48	187.94	
土壇13	4004 C g	縄文	円形	Ⅲ a	78	76	28	187.87	
土壇14	4004 C g	縄文	不整円形	Ⅲ a	150	105	64	187.88	
土壇15	4003 C j	縄文	長方形	Ⅲ a	125	67	14	188.74	
土壇16	4004 C j	縄文	楕円形	Ⅲ b	114	92	28	188.37	
土壇17	4102 C j	縄文	不整楕円形	Ⅲ e	111	80	24	187.39	
土壇18	4004 D a	縄文	不整長楕円形	Ⅲ e	110	62	27	188.58	
土壇19	4005 C j	縄文	隅丸長方形	Ⅲ a	164	117	50	188.34	
土壇20	4007 D a	縄文	不整方形	Ⅲ a	121	100	37	188.04	
土壇21	4007 D a	縄文	不整長楕円形	Ⅲ e	400	128	82	187.21	
土壇22	4008 D d	縄文	長方形	Ⅲ e	139	82	36	187.35	
土壇23	4008 D e	縄文	長方形	Ⅲ a	136	87	11	187.48	
土壇24	4100 D c	縄文	長楕円形	Ⅲ a	92	62	20	187.88	
土壇25	4101 D a	縄文	長楕円形	Ⅲ a	—	48	24	187.83	
土壇26	4102 D b	縄文	楕円形	Ⅲ a	74	50	35	187.81	
土壇27	4102 D b	縄文	楕円形	Ⅲ a	88	65	48	187.71	
土壇28	4102 D c	縄文	不整方形	Ⅲ a	113	78	15	187.98	
土壇29	4102 D c	縄文	楕円形	Ⅲ a	82	68	25	187.94	
土壇30	4103 D d	縄文?	楕円形	Ⅲ b	109	97	29	187.88	
土壇31	4101 D d	縄文	楕円形	Ⅲ b	160	115	27	187.94	
土壇32	4103 C c	縄文	円形	Ⅲ e	58	52	10	187.52	
土壇33	4103 C c	縄文	円形	Ⅲ e	75	65	17	187.46	
土壇34	4105 C f	縄文	不整楕円形	Ⅲ b	110	80	20	187.48	
土壇35	4105 C f	縄文	不整楕円形	Ⅲ b	160	90	35	187.38	
土壇36	4106 C f	縄文時代後期?	—	Ⅲ e	—	90	27	187.20	
土壇37	4109 C d	縄文	整円形	Ⅲ b	138	137	42	186.26	
土壇38	4109 C d	縄文	楕円形	Ⅲ a	167	107	12	186.24	
土壇39	4200 C e	縄文	整円形	Ⅲ a	58	54	4	186.66	
土壇40	4106 C g	縄文時代後期?	楕円形	Ⅲ b	131	83	30	186.95	
土壇41	4107 C g	縄文時代後期?	楕円形	Ⅲ a	—	48	17	186.90	
土壇42	4106 C g	縄文時代後期?	不整楕円形	Ⅲ b	181	124	43	186.74	
土壇43	4108 C g	縄文時代後期?	円形	Ⅲ b	62	58	24	187.00	
土壇44	4108 C g	縄文時代後期?	楕円形	Ⅲ b	105	77	52	186.08	
土壇45	4108 C h	縄文時代後期?	不整方形	Ⅲ b	90	73	11	186.89	
土壇46	4107 C h	縄文時代晩期	不整方形	Ⅲ b	384	279	50	186.95	
土壇47	4103 D c	縄文?	不整楕円形	Ⅲ a	181	138	29	187.66	
土壇48	4104 D c	縄文?	不整楕円形	Ⅲ e	229	(168)	38	187.63	
土壇49	4105 D c	縄文時代晩期	円形	Ⅲ e	106	99	24	187.57	
土壇50	4106 D a	縄文時代晩期	—	Ⅲ a	—	—	23	187.33	
土壇51	4107 D a	縄文時代晩期	不整楕円形	Ⅲ b	202	158	19	186.99	
土壇52	4107 D a	縄文時代晩期	不整円形	Ⅲ a	116	116	33	186.82	
土壇53	4107 D b	縄文時代晩期	不整楕円形	Ⅲ a	124	100	25	187.24	
土壇54	4005 C b	弥生	楕円形	Ⅲ a	224	154	92	187.80	
土壇55	4003 C j	弥生	長方形	Ⅲ a	120	84	11	189.25	
土壇56	4004 D a	弥生	長楕円形	Ⅲ a	190	84	22	188.60	
土壇57	4004 D a	弥生	楕円形	Ⅲ b	99	64	20	188.56	
土壇58	4004 D b	弥生	—	Ⅲ a	—	—	22	188.45	
土壇59	4004 D b	弥生	—	Ⅲ b	78	—	23	188.45	
土壇60	4004 D b	弥生	不整台形	Ⅲ b	207	150	32	188.38	
土壇61	4005 D a	弥生?	楕円形	Ⅲ a	120	100	32	188.56	
土壇62	4005 D a	弥生	隅丸長方形	Ⅲ a	118	62	20	188.60	
土壇63	4005 D a	弥生	長楕円形	Ⅲ a	102	50	21	188.50	
土壇64	4005 D a	弥生	不整長楕円形	Ⅲ e	228	68	34	188.41	
土壇65	4005 D a	弥生	長楕円形	Ⅲ e	96	54	18	188.62	
土壇66	4005 D a	弥生	隅丸長方形	Ⅲ e	79	70	37	188.36	

土壤一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	備考
土壙67	4005 D a	弥生	隅丸長方形	III a	100	70	12	188.58	
土壙68	4100 B i	弥生	不整形	III a	126	92	37	187.10	
土壙69	4009 C b	弥生	楕円形	III a	54	30	30	187.86	
土壙70	4101 C c	弥生	整円形	III a	87	69	17	188.70	
土壙71	4101 C b	弥生	整円形	III a	117	98	17	188.52	
土壙72	4101 C D	弥生	楕円形	III a	59	46	9	188.36	
土壙73	4101 D b	弥生	楕円形	III b	94	67	26	187.95	
土壙74	4102 C f	弥生	方形	III a	190	133	52	187.36	
土壙75	4102 C g	弥生	長方形	III a	125	68	38	187.52	
土壙76	4101 C d	弥生	長方形	III a	300	50	30	187.60	
土壙77	4106 C c	弥生	円形	III a	180	160	42	186.90	
土壙78	4106 C c	弥生	不整形	III a	210	195	67	186.54	
土壙79	4108 C f	弥生中期後半?	長方形	—	45	34	—	187.86	
土壙80	4200 C e	弥生	長楕円形	III a	140	69	41	188.94	
土壙81	4200 C d	弥生	楕円形	III a	139	77	27	187.16	
土壙82	3908 B g	古墳	不整形	III a	434	390	46	188.18	
土壙83	4002 C g	古墳	不整形	III a	542	420	80	189.12	
土壙84	4006 C j	古墳?	長楕円形	III a	95	60	20	189.07	
土壙85	4005 D a	弥生?	長楕円形	III a	108	70	28	189.03	
土壙86	4100 B i	古墳	楕円形	III a	90	80	30	187.77	
土壙87	4009 C a	古墳	不整形	III b	217	150	54	188.20	
土壙88	4101 C f	古墳	楕円形	III e	143	97	31	189.26	
土壙89	4109 C c	古墳	楕円形	III a	230	95	45	186.47	
土壙90	4203 C e	古墳	整円形	III a	110	92	38	188.62	
土壙91	3909 C b	中世	円形	III b	69	57	40	189.62	
土壙92	4003 C c	中世	円形	III a	176	174	60	188.68	
土壙93	4001 C g	中世	長方形	III a	82	65	37	189.30	
土壙94	4005 C d	中世	楕円形	III a	90	67	20	189.20	
土壙95	4006 C g	中世	方形	III a	86	84	32	189.16	
土壙96	4007 C c	中世	不整形	III a	270	245	40	188.85	
土壙97	4007 C a	中世	不整長楕円形	III a	169	85	15	188.80	
土壙98	4007 C a	中世	楕円形	III a	(97)	69	18	188.77	
土壙99	4007 C a	中世	不整形	III a	76	65	13	188.82	
土壙100	4007 C a	中世	楕円形	III a	183	132	30	188.65	
土壙101	4007 C a	中世	整円形	III a	85	72	15	188.80	
土壙102	4007 C a	中世	楕円形	III b	74	55	24	188.71	
土壙103	4007 C a	中世	楕円形	III a	105	77	18	188.78	
土壙104	4007 C a	中世	整円形	III a	70	60	16	188.80	
土壙105	4007 C a	中世	整円形	III a	80	77	25	188.71	
土壙106	4007 C a	中世	楕円形	III a	80	61	15	188.81	
土壙107	4007 C a	中世	楕円形	III a	77	55	10	188.87	
土壙108	4008 C a	中世	楕円形	III a	116	95	15	188.83	
土壙109	4007 C b	中世	楕円形	III a	125	97	15	188.83	
土壙110	4007 C c	中世	楕円形	III a	110	90	25	189.15	
土壙111	4100 C e	中世	楕円形	III b	292	256	38	188.54	
土壙112	4009 C a	中世	楕円形	III e	194	129	7	188.60	
土壙113	4101 C b	中世	整円形	III a	168	165	19	188.64	
土壙114	4102 C g	中世	整円形	III e	192	188	35	188.38	
土壙115	4009 B j	古墳	長方形	III a	(203)	202	28	188.30	
土壙116	4100 B g	中世	楕円形	III a	105	95	26	187.96	
土壙117	4101 B g	中世	隅丸長方形	III a	134	105	25	187.94	
土壙118	4101 B h	中世	隅丸長方形	III a	247	155	36	187.88	
土壙119A	4100 C a	中世	不整形	III a	104	80	12	188.46	
土壙119B	4100 B j	中世	長方形	III a	130	108	25	188.54	
土壙120	4009 B i	中世	隅丸方形	III b	76	62	22	188.38	
土壙121	4100 B i	中世	長方形	III a	188	110	37	187.82	
土壙122	4101 B i	中世	楕円形	III a	71	61	27	187.94	
土壙123	4101 B j	中世	不整形	III a	75	70	20	188.14	
土壙124	4101 B i	中世	楕円形	III b	80	66	31	187.90	
土壙125	4101 B i	中世	円形	III b	88	85	31	187.86	
土壙126	4101 B j	中世	不整形	III a	74	60	17	188.44	
土壙127	4105 B j	中世	隅丸方形	III a	128	93	26	187.18	
土壙128	4106 B i	中世	長円形	III a	130	90	31	187.60	
土壙129	4106 B i	中世	隅丸方形	III a	180	163	23	187.70	
土壙130	4105 B j	中世	隅丸方形	III a	118	108	26	187.64	
土壙131	4106 B j	中世	隅丸方形	III a	114	91	32	187.68	
土壙132	4106 B j	中世	長方形	III a	—	107	28	187.72	

土壤一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	備考
土壙133	4106 B j	中世	円形	Ⅲ a	175	172	53	187.24	
土壙134	4107 B j	中世	長円形	Ⅲ a	161	85	22	187.56	
土壙135	4100 C b	中世	楕円形	Ⅲ a	120	95	25	188.58	
土壙136	4103 C f	中世	長方形	Ⅲ a	225	163	22	188.48	
土壙137	4104 C f	中世	楕円形	Ⅲ b	170	110	23	188.40	
土壙138	4104 C f	中世	楕円形	Ⅲ a	240	140	17	188.46	
土壙139	4107 B j	中世	円形	Ⅲ a	90	85	48	187.36	
土壙140	4107 C a	中世	長方形	Ⅲ e	75	64	20	187.74	
土壙141	4107 C a	中世	長方形	Ⅲ a	63	45	13	187.78	
土壙142	4107 C a	中世	楕円形	Ⅲ a	120	90	11	187.78	
土壙143	4108 C a	中世	円形	Ⅲ a	110	105	23	187.64	
土壙144	4004 D a	中世	楕円形	Ⅲ a	140	102	33	189.14	
土壙145	4005 C i	中世	円形	Ⅲ a	83	79	11	189.19	漆碗出土未測
土壙146	4005 C j	中世	長楕円形	Ⅲ a	159	115	14	189.10	
土壙147	4006 C i	中世	円形	Ⅲ b	86	82	40	188.55	
土壙148	4007 C i	中世	楕円形	Ⅲ a	132	113	78	188.31	漆膜「吉」字出土
土壙149	4007 C i	中世	円形	Ⅲ a	118	117	72	188.41	
土壙150	4008 C i	中世	—	Ⅲ a	334	—	24	188.82	
土壙151	4008 D c	中世	—	Ⅲ a	147	—	24	188.77	
土壙152	4008 D c	中世	楕円形	Ⅲ a	102	92	19	188.84	
土壙153	4108 C j	中世	円形	Ⅲ a	65	60	16	188.65	
土壙154	4009 C i	中世	楕円形	Ⅲ a	84	74	42	188.73	
土壙155	4009 C i	中世	円形	Ⅲ a	78	74	36	188.68	
土壙156	4008 D a	中世	不整楕円形	Ⅲ a	160	130	23	188.76	
土壙157	4100 C h	中世	—	Ⅲ a	261	—	43	188.70	
土壙158	4101 C h	中世	円形	Ⅲ a	236	220	29	188.73	
土壙159	4101 C j	中世	不整円形	Ⅲ a	246	220	44	188.45	
土壙160	4101 C j	中世	楕円形	Ⅲ a	90	67	30	188.70	
土壙161	4102 C h	中世	楕円形	Ⅲ b	288	262	80	188.13	
土壙162	4102 C i	中世	円形	Ⅲ a	175	148	21	188.54	
土壙163	4102 D a	中世	長楕円形	Ⅲ a	86	54	13	188.85	
土壙164	4101 D a	中世	長楕円形	Ⅲ a	197	93	32	188.50	
土壙165	4102 D b	中世	円形	Ⅲ a	93	90	41	188.49	
土壙166	4102 D a	中世	円形	Ⅲ b	81	75	91	187.96	
土壙167	4101 D d	中世	円形	Ⅲ a	132	132	40	188.31	
土壙168	4101 D d	中世	円形	Ⅲ a	89	80	40	188.39	
土壙169	4102 D d	中世	不整楕円形	Ⅲ b	364	290	42	187.50	
土壙170	4104 D c	中世	楕円形	Ⅲ b	94	90	50	188.07	
土壙171	4104 D c	中世	楕円形	Ⅲ b	74	58	75	187.74	
土壙172	4104 D c	中世	—	Ⅲ b	—	91	48	187.97	
土壙173	4105 C j	中世	円形	Ⅲ a	99	—	32	188.10	
土壙174	4105 C j	中世	楕円形	Ⅲ a	101	90	43	188.00	
土壙175	4105 C h	中世	円形	Ⅲ a	141	139	15	188.42	
土壙176	4106 C j	中世	不整長楕円形	Ⅲ b	—	498	72	187.74	
土壙177	4109 D a	中世	楕円形	Ⅲ b	101	84	31	187.82	
土壙178	4109 C j	中世	楕円形	Ⅲ b	117	109	45	187.60	
土壙179	4106 D e	中世	長方形	Ⅲ a	107	72	27	187.91	
土壙180	4106 D f	中世	楕円形	Ⅲ a	236	162	15	188.05	
土壙181	4200 D f	中世	隅丸	Ⅲ b	125	105	15	187.46	
土壙182	4200 D g	中世	不整長楕円形	Ⅲ e	925	460	80	186.71	
土壙183	4202 D f	中世	長楕円形	Ⅲ a	147	90	22	187.14	
土壙184	4201 D c	中世	—	Ⅲ a	576	—	51	187.44	
土壙185	4202 D b	中世	整円形	Ⅲ a	137	136	69	186.92	
土壙186	4203 D e	中世	楕円形	Ⅲ a	96	87	9	187.36	
土壙187	4203 D e	中世	楕円形	Ⅲ a	111	62	13	187.33	
土壙188	4203 D d	中世	隅丸長方形	Ⅲ a	135	93	18	187.29	
土壙189	4204 D c	中世	長楕円形	Ⅲ a	381	222	20	187.24	
土壙190	4205 D c	中世	円形	Ⅲ a	74	70	18	187.30	
土壙191	4205 D d	中世	円形	Ⅲ a	71	70	16	187.30	
土壙192	4204 D d	中世	不整長楕円形	Ⅲ b	760	486	53	186.90	
土壙193	4205 D e	中世	円形	Ⅲ a	82	78	36	187.12	
土壙194	4205 D e	中世	長楕円形	Ⅲ b	156	82	28	186.95	
土壙195	4205 D e	中世	楕円形	Ⅲ b	150	133	33	187.16	
土壙196	4205 D d	中世	不整長楕円形	Ⅲ b	742	463	64	186.80	
土壙197	4205 D d	中世	円形	Ⅲ a	79	77	15	187.30	
土壙198	4206 D c	中世	楕円形	Ⅲ b	105	91	43	187.02	

## 土壌一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	備考
土壌199	4206 D c	中世	楕円形	III a	134	109	29	187.16	
土壌200	4206 D c	中世	円形	III a	78	75	22	187.15	
土壌201	4206 D e	中世	隅丸長方形	III b	513	410	66	186.61	
土壌202	4208 C b	中世	楕円形	III a	126	78	14	187.00	
土壌203	4109 C i	中世	不整形	III b	89	88	36	187.66	
土壌204	4109 C h	中世	整円形	III a	92	81	27	187.74	
土壌205	4109 C j	中世	整円形	III b	86	82	47	187.52	
土壌206	4109 C i	中世	不整形	III a	110	93	55	187.84	焼石充てん
土壌207	4109 C i	中世	整円形	III b	84	72	60	187.26	
土壌208	4200 C i	中世	整円形	III a	137	114	30	187.56	
土壌209	4200 C i	中世	不整形楕円形	III e	130	87	52	187.38	
土壌210	4109 C i	中世	楕円形	III a	101	82	44	187.50	
土壌211	4200 C h	中世	楕円形	III b	63	53	51	187.32	
土壌212	4200 C i	中世	楕円形	III b	(102)	70	48	187.44	
土壌213	4201 C i	中世	整円形	III a	144	131	37	187.54	
土壌214	4200 D a	中世	方形	III e	760	498	122	186.72	
土壌215	4202 C j	中世	隅丸方形	III a	130	101	20	187.54	
土壌216	4203 D a	中世	隅丸方形	III b	100	88	31	187.28	
土壌217	4108 C c	中世	円形(連結)	III b	—	146	54	186.70	
土壌218	4109 C d	中世	整円形	III a	177	159	40	187.26	
土壌219	4200 C f	中世	整円形	III a	143	129	63	186.68	
土壌220	4200 C e	中世	整円形	III b	102	101	47	187.06	
土壌221	4201 C c	中世	楕円形	III b	102	76	26	187.22	
土壌222	4200 C f	中世	円形(連結)	III b	292	—	62	186.40	
土壌223	4204 C b	中世	楕円形	III a	145	120	59	186.26	
土壌224	4205 C a	中世	楕円形	III e	482	414	72	186.62	
土壌225	4205 C a	中世	整円形	III a	356	340	52	186.44	
土壌226	4207 C a	中世	整円形	III e	89	80	13	187.02	
土壌227	3908 C g	近世	隅丸方形	III a	170	73	17	189.62	
土壌228	4000 B j	近世	長方形	III e	816	632	158	188.24	
土壌229	4000 C a	近世	方形	III a	129	81	28	189.52	
土壌230	4001 C b	近世	不整形	III b	436	252	88	188.96	
土壌231	4002 C c	近世	長方形	III a	—	—	29	189.36	
土壌232	4002 C d	近世	隅丸方形	III a	137	99	27	189.20	
土壌233	4002 C c	近世	長方形	III a	139	92	48	189.12	
土壌234	4001 C e	近世?	不整形円形?	III a	—	71	6	188.66	
土壌235	4001 C g	近世	円形	III a	128	124	74	188.92	
土壌236	4002 C g	近世	長方形	III e	220	134	36	189.28	
土壌237	4002 C e	近世	長方形	III a	109	67	44	189.30	
土壌238	4002 C f	近世	楕円形	III a	298	162	38	189.28	
土壌239	4002 C e	近世	長方形	III a	280	280	74	189.00	
土壌240	4002 C g	近世	長方形	III a	364	208	58	188.92	
土壌241	4001 C h	近世	方形	III a	104	103	29	189.32	
土壌242	4002 C h	近世	方形	III a	95	87	30	189.32	
土壌243	4002 C h	近世	方形	III a	274	234	72	189.20	
土壌244	4004 C a	近世	隅丸方形	III a	149	137	28	189.18	
土壌245	4004 C g	近世	長方形	III a	292	158	58	188.96	
土壌246	4005 C g	近世	隅丸方形	III a	130	119	35	189.20	

## 集石・石敷遺構一覽表

掲載遺構名	地区	時期	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	備考
集石土壌1	4101 B i	古代	長方形	243	225	90	187.5	経塚か?和鏡、青白磁出土。
集石遺構2	4106 C c	中世	方形?	200	180	0	187.90	200×180cmの範囲に集石。墓か?
石敷土壌1	4105 C b	中世	長方形	140	80	26	187.60	墓の可能性あり。

溝一覧表

掲載遺構名	地区名	時期	断面形	幅 (cm)	深さ (cm)	方向	備考
溝1	4004 C g	縄文	Ⅲ b	142	40	北東～南西	
溝2	4003 C j	縄文	Ⅲ a	81	19	北東～南西	
溝3	4102 C i	縄文?	Ⅲ a	147	52	北～南	
溝4	4101 C i～4102 C i	縄文?	Ⅲ a	66	18	北～南	
溝5	4101 C i～4102 C i	縄文?	Ⅲ a	102	17	北～南	
溝6	4103 D c～4104 D d	縄文	Ⅲ b	231	89	北西～南東	
溝7	3909 B j～4000 C c	弥生・後～末	Ⅲ a	82～144	13～46	北～南	A 2・6区No90に続く
溝8	3909 C b	弥生	Ⅲ b	110	28	北～南	
溝9	3909 C c	弥生・中・末	Ⅲ e	90	11	北西～南東	
溝9・10	4003 C h	弥生	Ⅲ e	470	108	北西～南東	
溝11・12	4004 C h	弥生	Ⅲ e	304	80	北西～南東	
溝13	3909 C c～4109 C i	弥生	Ⅲ a	50～167	14～36	北西～南東	
溝14	4103 C h～4106 C h	弥生時代中期?	Ⅲ a	55	48	北～南	
溝15	4204 C i～4208 D a	弥生	Ⅲ e	386	119	北～南	
溝16	4204 D a～4208 D b	弥生	Ⅲ e	220	33	北～南	
溝17	4101 D d～4108 D c	弥生	Ⅲ a	102～358	11～24	北東～南西	
溝18	4202 D e～4205 D g	弥生	Ⅲ a	92	32	北西～南東	
溝19	4205・06 D d	弥生	Ⅲ a	31	4	北西～南東	
溝20	4205 D d	弥生	Ⅲ a	18	5	北～南	
溝21	4205 D d	弥生	Ⅲ a	43	7	北～南	
溝22	4008 B i	中世	Ⅲ e	576	118	南	
溝23	4008 B j	中世	Ⅲ a	82	22	南	
溝24	4008 C c	中世	Ⅲ b	54	16	東西	
溝25	4101 C c	中世	Ⅲ b	95～103	18～30	東西	
溝26	4106 B h	中世	Ⅲ a	126	51	東西	
溝27	4004 C j～4004 D a	中世	Ⅲ a	85	15	北西～南東	
溝28	4005 C j	中世?	Ⅲ a	85	25	北西～南東	
溝29	4005 C i～4006 C j	中世	Ⅲ a	38	12	北西～南東	
溝30	4101 D d～4102 D e	中世	Ⅲ a	57	17	北西～南東	
溝31	4006 C i～4007 D b	中世	Ⅲ a	76～160	20～35	東西南北	
溝32	4106 C a	中世	Ⅲ a	53	12	東西	
溝33	4107 B j	中世	Ⅲ e	148	32	南北	
溝34	4200 C j	中世	Ⅲ e	122～202	12～16	北西～南東	
溝35	4200 C j	中世	Ⅲ e	225～290	29～42	北西～南東	
溝36	4200 D b	中世	Ⅲ a	72～80	10～12	南北	
溝37	4208 D b	中世	Ⅲ a	104	17	東西	
溝38	4206 D b	中世	Ⅲ a	84	25	東西	
溝39	4205 D b	中世	Ⅲ a	65	16	東西南北	
溝40	4109 C a	中世	Ⅲ b	303	23	北西～南東	
溝41	4109 C a	中世	Ⅲ a	78	5	北西～南東	
溝42	4109 C a	中世	Ⅲ a	50	8	北西～南東	
溝43	4109 C b～4200 C c	中世	Ⅲ a	112～330	8～47	北西～南東	
溝44	4109 C a	中世	Ⅲ a	221	13	北西～南東	
溝45	4201 C b	中世	Ⅲ a	133	27	北西～南東	
溝46	4109 C c	中世	Ⅲ b	40	6	南北	
溝47	4109 C c	中世	Ⅲ a	59	6	南北	
溝48	4109 C d	中世	Ⅲ a	53	5	北東～南西	
溝49	4200 C c	中世	Ⅲ a	116	11	北西～南東	
溝50	4200 C f	中世	Ⅲ b	52	7	南北	
溝51	4205 C e	中世	Ⅲ b	68	26	東西	
溝52	4001 B j	近世?	Ⅲ a	132	24	東西	
溝53	4005 C g	近世?	Ⅲ a	392	38	南北	
溝54	4103 B j	近世	Ⅲ a	43～72	20～23	東西	
溝55	4103 B j	近世	Ⅲ b	51	20	南北	
溝56	4104 B i	近世	Ⅲ a	112～160	16～22	南北	
溝57	4100 B f～4103 B j	近世	Ⅲ b	34～44	11～20	南北	
溝58	4104 B g	近世	Ⅲ c	195	20	南北	
溝59	4100 B j	近世	Ⅲ a	106	18	南北	

火処一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	上面海拔高 (m)	備考
火処1	3909 C e	縄文	楕円形	III c	98	77	13	187.66	
火処2	4005 B j	縄文	楕円形	—	93	72	—	188.46	
火処3	4005 B j	縄文	—	—	(34)	79	—	188.48	
火処4	4005 C a	縄文	円形	—	65	63	—	188.64	
火処5	4005 C a	縄文	不整形円形	—	70	60	—	188.66	
火処6	4005 B j	縄文	不整形円形	—	83	73	—	188.54	
火処7	4005 B j	縄文	不整形楕円形	—	164	113	—	188.46	
火処8	4005 B j	縄文	—	—	(45)	86	—	188.48	
火処9	4005 C a	縄文	瓢箪形	—	(30)	63	—	188.50	
火処10	4005 C a	縄文	—	—	100	62	—	188.60	2個連結
火処11	4005 C a	縄文	楕円形	—	(84)	69	—	188.60	
火処12	4005 C a	縄文	楕円形	—	94	62	—	188.42	
火処13	4005 C a	縄文	楕円形	—	83	65	—	188.62	
火処14	4005 C a	縄文	不整形円形	—	63	58	—	188.62	
火処15	4005 C a	縄文	円形	—	65	57	—	188.62	
火処16	4005 C a	縄文	円形	—	109	102	—	188.44	
火処17	4005 C a	縄文	不整形円形	—	70	65	—	188.58	
火処18	4006 C a	縄文	不整形円形	—	80	65	—	188.94	
火処19	4006 C a	縄文	円形	—	53	52	—	188.50	
火処20	4006 C a	縄文	不整形楕円形	—	163	119	—	188.48	
火処21	4006 C a	縄文	不整形楕円形	—	147	99	—	188.46	
火処22	4005 C b	縄文	不整形円形	—	64	50	—	188.60	
火処23	4005 C c	縄文	不整形円形	—	71	60	—	188.70	
火処24	4005 C c	縄文	楕円形	—	97	67	—	188.78	
火処25	4005 B j	縄文	隅丸方形	—	81	73	—	188.78	
火処26	4005 B j	縄文	円形	—	107	105	—	188.78	
火処27	4007 B j	縄文	円形	—	64	56	—	187.98	
火処28	4008 B j	縄文	円形	—	80	68	—	187.82	
火処29	4008 B j	縄文	不整形円形	—	85	65	—	187.80	
火処30	4101 B i	縄文	楕円形	—	95	74	—	186.46	
火処31	4101 B i	縄文	楕円形	—	95	55	9	186.52	
火処32	4009 C b	縄文	楕円形	—	109	85	12	187.94	
火処33	4009 C b	縄文	不整形円形	—	105	101	—	187.90	
火処34	4009 C b	縄文	不整形楕円形	—	96	68	—	187.82	
火処35	4100 C a	縄文	楕円形	—	84	66	—	187.92	
火処36	4100 C b	縄文	不整形円形	—	48	47	—	188.06	
火処37	4100 C b	縄文	円形	—	75	73	—	188.02	
火処38	4100 C b	縄文	不整形円形	—	97	84	—	187.94	
火処39	4100 C b	縄文	不整形円形	—	80	67	—	187.88	
火処40	4008 C e	縄文	隅丸方形	—	159	142	—	188.68	
火処41	4102 C a	縄文	不整形円形	—	106	92	—	187.48	
火処42	4104 C b	縄文	楕円形	III a	136	123	18	187.26	
火処43	4104 C b	縄文	円形	—	27	24	—	187.96	
火処44	4104 C b	縄文	円形	—	31	27	—	187.98	
火処45	4104 C c	縄文	不整形円形	III e	44	33	14	187.74	
火処46	4103 C d	縄文	楕円形	—	69	59	—	188.02	
火処47	4103 C d	縄文	円形	—	68	61	—	187.96	
火処48	4103 C e	縄文	楕円形	—	77	59	—	187.88	
火処49	4103 C f	縄文	楕円形	—	77	74	—	187.74	
火処50	4103 C f	縄文	楕円形	—	70	61	—	187.72	
火処51	4104 C g	縄文	不整形円形	—	87	71	—	187.66	
火処52	4104 C f	縄文	不整形円形	—	46	37	—	187.58	
火処53	4103 C g	縄文	楕円形	—	63	56	—	187.76	
火処54	4104 C g	縄文時代晩期	不整形円形	—	53	46	—	187.64	
火処55	4105 C h	縄文時代晩期	円形	—	55	51	—	187.63	
火処56	4105 C g	縄文時代晩期	不整形楕円形	—	108	80	—	187.61	
火処57	4105 C f	縄文時代晩期	円形	—	72	72	—	187.63	
火処58	4107 C f	縄文時代晩期	楕円形	—	90	75	—	187.43	
火処59	4107 C g	縄文時代晩期	楕円形	—	82	74	—	187.40	
火処60	4106 C g	縄文時代晩期	円形	—	96	93	—	187.98	
火処61	4106 C g	縄文時代晩期	—	—	62	—	—	187.43	
火処62	4106 C g	縄文時代晩期	円形	—	69	63	—	187.29	
火処63	4107 C g	縄文時代晩期	円形	—	45	35	—	187.28	
火処64	4107 C g	縄文時代晩期	円形	—	58	56	—	187.27	
火処65	4107 C h	縄文時代晩期	円形	—	48	48	—	187.21	
火処66	4107 C h	縄文時代晩期	円形	—	88	81	—	187.22	
火処67	4107 C h	縄文時代晩期	楕円形	—	52	35	—	187.29	

### 火処一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	上面海拔高 (m)	備考
火処68	4106 C h	縄文時代晩期	楕円形	—	77	61	—	187.90	
火処69	4107 C h	縄文時代晩期	不整円形	—	71	67	—	187.31	
火処70	4107 C h	縄文時代晩期	—	—	—	—	—	187.25	
火処71	4108 C g	縄文時代晩期	不整円形	—	69	68	—	187.48	
火処72	4107 C h	縄文時代晩期	楕円形	—	58	45	—	187.15	
火処73	4107 C h	縄文時代晩期	楕円形	—	87	68	—	187.17	
火処74	4108 C f	弥生中期後半?	—	—	—	51	—	187.86	
火処75	4207 C f	古墳	円形	Ⅲ b	72	62	—	185.74	
火処76	4207 C f	古墳	円形	Ⅲ a	66	59	—	185.82	
火処77	4207 C f	古墳	円形	Ⅲ a	78	60	—	185.41	
火処78	4101 C a	中世	楕円形	Ⅲ a	52	35	—	187.29	

### 河道一覽表

掲載遺構名	地区名	時期	断面形	幅(・)	深さ(・・)	方向	備考
河道1	3905 B j ~ 4209 D c	縄文	Ⅲ e	36.9	3.5	北~南	未完掘 下層が縄文
		縄文	Ⅲ e	19.0	1.8		
		縄文	—	—	—		
		縄文	Ⅲ a	—	—		
河道2	3907 C c ~ 4005 B j	縄文	Ⅲ e	19.0	1.8	北~南	
河道3	3906 B j ~ 4205 C j	縄文	—	—	—	北~南	
			Ⅲ a	8.44	7.0		
河道4	4009 D e ~ 4209 D c	縄文	—	—	—	北~南	北~南
			—	—	—		
河道5	4100 B f ~ 4208 C i	縄文	Ⅲ a	—	—	北~南	A 9区河道と同一
		縄文	Ⅲ a	—	—		下層が縄文
		縄文	—	—	—		
河道6	3909 C c	弥生中期	Ⅲ e	17.2	1.4	北~南	
河道7	3907 C c	弥生中期~後期	Ⅲ e	12.0	1.3	北西~南東	A 1・5区河道1と続く 下層が縄文
	4006 C f		Ⅲ e	21.0	1.6	北~南	
	4103 C h ~ 4109 C j		Ⅲ e	15.8	1.8		
	4204 C j		Ⅲ a	—	—		
河道8	4008 B g ~ 4208 C i	弥生中期~後期	Ⅲ e	45.2	1.9	北~南	
河道9	4105 D c ~ 4109 D b	弥生時代後期	Ⅲ e	—	1.5	北~南	
河道10	4008 B g ~ 4208 C g	古墳	Ⅲ a	29.4	1.2	北西~南東	

土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1	袋状土壇 1	縄文土器	深鉢	(3080)	—	(560)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一条痕。内面一二枚貝条痕後ナデ。	
2		縄文土器	深鉢	(3590)	—	(1170)	灰褐色(7.5Y R 5・2)	外面一条痕調整後ナデ。内・外面にスス付着。	
3		縄文土器	深鉢	3700	—	(660)	灰色(5 Y 4・1)	外面一ケズリ。内面一条痕のちナデ。	
4		縄文土器	深鉢	(3520)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面一擦痕。内面一ナデ・ケズリ?。	
5	袋状土壇 2	縄文土器	深鉢	—	—	(620)	鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面一二枚貝条痕。内面一条痕のちナデ。	
6		縄文土器	深鉢	—	—	(420)	黒褐色(10Y R 3・2)	外面一二枚貝条痕。スス付着。	
7		縄文土器	深鉢	—	—	(340)	黒褐色(2.5Y 3・1)	外面一条痕。内面一ナデ。	
8		縄文土器	鉢	—	—	(260)	褐灰色(7.5Y R 4・1)	外面一縄文(LR)。	
9	土壇 1	縄文土器	浅鉢	(2740)	—	(720)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内面一ケズリ(?)のちナデ。	
10		縄文土器	浅鉢	擬口径 (244)	—	(670)	灰黄褐色(10Y R 4・2)		
11	土壇 2	縄文土器	深鉢	(2780)	—	(1220)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一タテ方向の工具痕。黒斑	
12		縄文土器	深鉢?	—	—	(590)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一条痕調整。内面一条痕調整。黒斑	
13		縄文土器	深鉢	(2400)	—	(1080)	褐灰色(10Y R 5・1)	外面一条痕調整後ナデ。スス付着。	
14		縄文土器	鉢?	—	—	(380)	鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面一粗いミガキ。内面一ミガキ。	
15		縄文土器	浅鉢	(2300)	—	(380)	鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面一黒斑。	
16		縄文土器	浅鉢	(242~ 244)	—	(29~ 35)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)		
17	土壇 7	縄文土器	浅鉢	(1840)	—	(450)	黒褐色(2.5Y 3・2)		
18		縄文土器	浅鉢	(2640)	—	(690)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面一スス付着。	
19		縄文土器	深鉢	(3560)	—	(945)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一条痕後ナデ。スス付着。	
20	土壇 8	縄文土器	深鉢	(3700)	—	(1680)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面一条痕後ミガキ。内面一条痕後ナデ。	
21		縄文土器	深鉢	(3960)	—	(1740)	黒褐色(7.5Y R 3・1)	外面一条痕後ミガキ。内面一条痕後ナデ。	
22		縄文土器	鉢	—	500	(290)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一条痕後ナデ?	
23	土壇10	縄文土器	深鉢	2040	570	(123~ 132)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面一巻貝?による条痕。	
24	土壇11	縄文土器	鉢	—	—	(295)	橙色(5 Y R 6・6)	外面一縄文後沈線。内面一ミガキ。	波状口径か?
25		縄文土器	浅鉢	(1900)	—	(970)	浅黄色(2.5Y R 7・3)	外面一ナデ。内面一ナデ。黒斑あり。	
26	土壇13	縄文土器	深鉢	—	—	(60~ 76)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面一縄文(RL・結び目文)。沈線1条。ミガキ。内面一ミガキ。	
27	土壇16	縄文土器	深鉢	—	—	(590)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面一沈線文。内面一ミガキ。	
28	土壇19	縄文土器	深鉢	—	—	(300)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面一疑似羽状縄文?。内面一ナデ。	
29	土壇23	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一結節縄文。ナデ。内面一ミガキ。	彦崎 K II
30	土壇39	縄文土器	深鉢	(4480)	—	(281~ 390)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面一口径部刻み目。爪形文。粗い条痕調整。内面一ナデ。	
31	土壇43	縄文土器	深鉢	—	—	(790)	鈍黄褐色(10Y R 5・4)	外面一条痕。	
32		縄文土器	深鉢	—	—	(2390)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一条痕。内面一ナデ。	
33		縄文土器	浅鉢	—	—	(610)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一沈線。内面一条痕。	滋賀里 I・II?
34	土壇45	縄文土器	鉢	—	—	(340)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面一条痕。沈線。刺突(2か所)。赤色顔料付着。内面一ナデ。	滋賀里 I・II?
35	土壇46	縄文土器	深鉢	(2490)	—	(1700)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面一条痕後ミガキ。ミガキ後凹線3条。内面一条痕後ミガキ。	
36		縄文土器	鉢	181~ 192	—	1125	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一条痕。スス付着。内面一条痕。	
37		縄文土器	浅鉢	3000	500	75~90	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一条痕。底部ナデ。内面一口径部刻み目。沈線1条。条痕。	
38	土壇52	縄文土器	深鉢	—	—	(610)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面一口径部刻み目。爪形文。内面一ナデ。	
39	溝 6	縄文土器	浅鉢	—	—	—	黒褐色(10Y R 3・1)	外面一ミガキ。口径部刻み目。沈線2条。内面一ミガキ。	
40		縄文土器	浅鉢	—	—	—	灰黄色(2.5Y 6・2)	外面一ナデ。内面一ミガキ。	
41		縄文土器	鉢	(4820)	—	(1330)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面一条痕後ナデ。内面一条痕後一部ミガキ。	
42		縄文土器	鉢	—	—	—	暗灰色(N 3・)	外面一ミガキ?内面一ナデ。	
43	土器溜まり 1	縄文土器	鉢	1960	480	1625	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一口径部刻み目。ナデ。ヨコ・タテ方向のヘラケズリ。内面一ナデ。全体的に歪み大きい。	
44		縄文土器	深鉢	(2400)	—	(1750)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面一条痕後ナデ。内面一ナデ。	
45		縄文土器	浅鉢	—	—	(560)	橙色(5 Y R 6・5)	内・外面一ミガキ。	
46		縄文土器	浅鉢	—	—	(400)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面一ミガキ。接合痕あり。	
47		縄文土器	浅鉢	—	—	(300)	鈍赤褐色(2.5Y R 5・4)	外面一ミガキ。メガネ状の浮紋。内面一ミガキ。	
48		縄文土器	浅鉢	—	—	(280)	鈍赤褐色(5 Y R 5・4)	外面一ミガキ。メガネ状の浮紋。内面一ミガキ。	
49		縄文土器	浅鉢	—	体部最大 328	(810)	鈍褐色(7.5Y R 5・3)	内・外面一ヨコ方向のミガキのちナデ。	
50	土器溜まり 2-A	縄文土器	深鉢	(1660)	—	(890)	浅黄色(2.5Y 7・3)	外面一貝殻条痕。内面一ヨコ方向ミガキ。表面にスス痕。口径裏面に黒斑?	
51		縄文土器	深鉢	(2540)	—	(1150)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面一条痕後ナデ。外面スス付着。内面一ナデ。接合痕あり。	
52		縄文土器	深鉢	(3140)	—	(650)	褐灰色(10Y R 5・1)	内・外面一条痕後ナデ。	
53		縄文土器	鉢	(4440)	—	(1010)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内面一ヨコナデ。内面一ヨコナデ。表面にスス付着。	
54		縄文土器	深鉢	(2520)	—	(420)	黒褐色(10Y 3・1)	外面一ミガキ。	
55		縄文土器	深鉢	(3460)	—	(850)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面一貝殻条痕。内面一ナデ。口径部裏面に黒斑。	
56		縄文土器	深鉢	—	—	(430)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一貝殻条痕。内面一貝殻条痕後ヨコナデ。黒斑。	
57		縄文土器	深鉢	—	—	(640)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内・外面一ヨコナデ。	
58		縄文土器	鉢	(3560)	—	(890)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	内・外面一ミガキ。スス付着。	
59		縄文土器	鉢	(4740)	—	(880)	褐灰色(10Y R 5・1)		
60		縄文土器	浅鉢	—	—	(390)	鈍黄褐色(10Y R 5・4)	内・外面一ナデ。	
61		縄文土器	鉢	(2640)	—	(980)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	スス付着。黒斑。	
62		縄文土器	浅鉢	(1880)	—	(560)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一ミガキ。	
63		縄文土器	浅鉢	(3450)	—	(960)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面一ミガキ。	
64	縄文土器	浅鉢	(3280)	—	(1100)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一ミガキ。		
65	縄文土器	浅鉢	(3300)	—	(720)	黒色(10Y R 17・1)	内・外面一ミガキ。		



土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
66	土器溜まり 2-A	縄文土器	浅鉢	(3040)	—	(530)	黒褐色(10Y R 3・2)	内・外面—ミガキ。	
67		縄文土器	浅鉢	(3750)	—	(950)	褐灰色(10Y R 5・1)	内・外面—ミガキ。	
68		縄文土器	浅鉢	—	—	(240)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内・外面—ミガキ。	
69		縄文土器	浅鉢	—	—	(350)	灰褐色(75Y R 4・2)	内・外面—ナデ。	
70		縄文土器	浅鉢	—	—	(240)	暗灰黄色(25Y 5・2)	内面—ナデ。	
71		縄文土器	浅鉢	—	—	(460)	黒色(10Y R 17・1)	内面—ミガキ。	
72		縄文土器	浅鉢	—	—	(350)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内面—ミガキ。	
73		縄文土器	浅鉢	—	—	(220)	鈍褐色(75Y R 6・4)	外面—一条痕後ナデ。内面—ヨコナデ。ミガキ	
74	縄文土器	鉢	(700)	—	(080)	黒色(5Y 2・1)	外面—ミガキ。内面—ナデ。穿孔1か所。		
75	土器溜まり 2-B	縄文土器	深鉢	(2550)	—	(1070)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—ヨコナデ。外面スス付着	
76		縄文土器	深鉢	(2720)	—	(1450)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—貝殻条痕後ナデ。波状口縁。	
77		縄文土器	深鉢	(2360)	—	(1590)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—一条痕後ナデ。外面スス付着。	
78		縄文土器	深鉢	(2860)	—	(1220)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—一条痕後ナデ。スス付着。	
79		縄文土器	深鉢	(3320)	—	(1470)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—一条痕後ナデ。内面—黒斑。	
80		縄文土器	深鉢	(3840)	—	(725)	鈍褐色(75Y R 5・3)	内面—一条痕。	
81		縄文土器	深鉢	(2120)	—	(570)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—一条痕後ナデ。	
82		縄文土器	深鉢	(3100)	—	(1225)	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	内・外面—一条痕後ナデ。外面スス付着。	
83		縄文土器	深鉢	(3850)	—	(1410)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—二枚貝条痕後ナデ。内・外面スス付着。波状口縁	
84		縄文土器	深鉢	(3600)	—	(1140)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面—一条痕後ナデ。	
85		縄文土器	鉢	—	—	(510)	灰黄色(25Y 6・2)	内面—ナデ。黒斑あり。	
86	縄文土器	鉢?	(1300)	—	(950)	黒褐色(10Y R 3・2)	外面—ミガキ。		
87	縄文土器	鉢	—	48~50	(260)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—ナデ。		
88	縄文土器	深鉢	(2800)	—	(500)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—一条痕後ナデ。波状口縁。		
89	縄文土器	深鉢	(2100)	—	(1360)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内面—一条痕後ナデ。波状口縁。		
90	縄文土器	深鉢	(2740)	—	(1640)	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面—一条痕後ミガキ。全体的にスス付着。内面—一条痕後ミガキ。スス付着。		
91	土器溜まり 2-C	縄文土器	深鉢	(3550)	—	(1630)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—一条痕後ナデ。黒斑。内面—一条痕後ナデ。全体に黒斑。	
92		縄文土器	浅鉢	(3140)	—	(830)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—一条痕後ミガキ。スス付着。内面—一条痕後ミガキ。	
93		縄文土器	浅鉢	—	—	(450)	黒褐色(10Y R 3・2)	内・外面—ミガキ。	
94		縄文土器	浅鉢	(4880)	—	(450)	灰褐色(75Y R 4・2)	内・外面—ミガキ。	
95		縄文土器	浅鉢	(3560)	—	(560)	灰褐色(75Y R 5・2)	内・外面—ミガキ。	
96	縄文土器	深鉢	—	—	(510)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—沈線。		
97	縄文土器	鉢	—	—	(640)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内面—ミガキ。		
98	縄文土器	鉢	—	—	(690)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—ミガキ。		
99	土器溜まり 2-D	縄文土器	鉢	(2090)	—	152~156	鈍黄色(25Y 6・3)	外面—沈線。縄文(LR)。ミガキ。内面—ナデ。	
100		縄文土器	浅鉢	(3150)	—	(530)	黒褐色(25Y 3・2)	内・外面—ミガキ。	
101		縄文土器	注口土器	—	—	—	暗灰黄色(25Y 5・2)	推定径(17cm)。器表に赤彩が施されている。	
102	縄文土器	注口土器	—	—	—	黒色(25Y 2・1)	外面—ナデ。ミガキ。		
103	土器溜まり 2-E	縄文土器	深鉢	(1820)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—ナデ。接合痕。	
104		縄文土器	鉢	(4020)	—	(800)	黒褐色(25Y 3・1)	内・外面—ミガキ。	
105	土器溜まり 3	縄文土器	深鉢	(4000)	—	(1270)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—一条痕後ナデ。スス付着。内面—一条痕後ナデ。	
106		縄文土器	深鉢	—	—	(350)	黒褐色(25Y 3・2)	器表内・外面スス付着。	
107		縄文土器	鉢	—	—	(300)	鈍黄褐色(10Y R 5・4)	外面—沈線。	
108		縄文土器	鉢	—	55~56	(420)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—ナデ。	
109	土器溜まり 4	縄文土器	深鉢	—	—	(400)	黒褐色(25Y 3・2)	内・外面—ナデ。	
110		縄文土器	深鉢	(3380)	—	(730)	灰色(5Y 4・1)	内・外面—ナデ。	
111		縄文土器	深鉢	(2820)	—	(53~60)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内面—貝殻条痕。内・外面に黒斑。	
112		縄文土器	深鉢	(1620)	—	(930)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—貝殻条痕。内面—一条痕後ナデ。	
113		縄文土器	深鉢	(1790)	—	(1230)	褐灰色(10Y R 5・1)	内・外面—貝殻条痕。	
114		縄文土器	深鉢	(4200)	—	(820)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—貝殻条痕。内面—ナデ。	
115		縄文土器	深鉢	(3400)	—	(1900)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—一条痕後ナデ。スス付着。内面—一条痕後ナデ。	
116		縄文土器	深鉢	—	—	(360)	暗灰黄色(25Y 5・2)	内面—ミガキ。	
117		縄文土器	深鉢	(3020)	—	(840)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—一条痕。	
118		縄文土器	深鉢	(3280)	—	(2610)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—一条痕後ナデ。内面—ナデ。スス付着。	
119		縄文土器	浅鉢	(2480)	—	(1900)	灰黄色(25Y 6・2)	内・外面—一条痕後ナデ。	
120	縄文土器	浅鉢	—	—	(500)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—一条痕。内面—ナデ。		
121	縄文土器	深鉢	(3520)	—	1250	黒褐色(10Y R 3・2)	外面—一条痕。		
122	縄文土器	深鉢	(4400)	—	(1130)	黄褐色(25Y 5・3)	外面—一条痕。黒斑。内面—一条痕後ナデ。		
123	縄文土器	深鉢	(3180)	—	(880)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—一条痕後ナデ。口縁部に黒斑あり。		
124	縄文土器	深鉢	(3620)	—	(1920)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—一条痕後ナデ。内面—ナデ。		
125	縄文土器	深鉢	(3700)	700	3070	褐灰色(10Y R 4・1)	内・外面—一条痕後ナデ。		
126	土器溜まり 5	縄文土器	深鉢	(2400)	—	(800)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—一条痕。スス付着。内面—ナデ。	
127		縄文土器	深鉢	(3080)	—	(1500)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—一条痕後ナデ。内面—ナデ。	
128		縄文土器	深鉢	—	—	(1180)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—一条痕後ナデ。内面—ナデ。	
129		縄文土器	浅鉢	(4040)	—	(830)	褐色(75Y R 6・6)	外面—一条痕。内面—ミガキ。	
130		縄文土器	深鉢	—	480	(290)	鈍褐色(75Y R 5・3)	内・外面—ナデ。	
131		縄文土器	深鉢	—	600	(320)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—ナデ。	
132		縄文土器	深鉢	—	(770)	(390)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—ナデ。底部—刻み目。	
133		縄文土器	浅鉢	(3580)	—	(820)	黒褐色(25Y 3・1)	内・外面—ミガキ。穿孔1か所。*口縁部の一部を削り取った様な痕跡。	
134		縄文土器	浅鉢	—	—	(270)	黄灰色(25Y 4・1)	外面—沈線。内面—ミガキ	
135		縄文土器	鉢	—	—	(410)	暗灰黄色(25Y 5・2)	外面—沈線。内面—ナデ。	
136	縄文土器	浅鉢	—	—	(440)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—ミガキ後沈線。	ベンガラ	

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
137	土器溜まり6	縄文土器	浅鉢	(2730)	—	(1120)	灰褐色(7.5Y R 4・2)	外面—沈線2条。条痕後ナデ。スス付着。内面—条痕後ミガキ。スス付着。	
138		縄文土器	深鉢	(2300)	—	(1700)	浅黄褐色(2.5Y 7・3)	外面—条痕後ナデ。内面—ナデ。	
139		縄文土器	浅鉢	(2300)	—	(980)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—条痕後ナデ。	
140		縄文土器	浅鉢	(2820)	—	(800)	黄褐色(2.5Y 5・3)	内・外面—ナデ。	
141		縄文土器	浅鉢	(4040)	—	(890)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	内・外面—ミガキ。接合痕あり。	
142		縄文土器	浅鉢	—	—	(600)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—擬口縁。赤色顔料付着。	
143		縄文土器	浅鉢	(3660)	—	(860)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面—ミガキ。沈線による菱形文様。刻み目。内面—ミガキ。	
144	縄文土器	鉢	—	2.8~3.1	(3.70)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—ナデ。		
145	縄文土器	鉢	—	(6.40)	(2.40)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	内・外面—ナデ。		
146	土器溜まり7	縄文土器	深鉢	(3480)	—	(135~145)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—貝殻条痕。スス痕。内面—ナデ。	
147		縄文土器	深鉢	(2520)	—	(1130)	鈍赤褐色(5Y R 5・4)	外面—条痕後ナデ。スス痕。	
148		縄文土器	深鉢	—	—	(460)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—条痕。黒斑。内面—条痕後ナデ。	
149		縄文土器	深鉢	—	—	(520)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—条痕。内面—ナデ。	
150		縄文土器	壺	(2220)	—	(1220)	黒褐色(7.5Y R 3・2)	外面—条痕後ナデ。スス痕。	
151		縄文土器	浅鉢?	—	—	(630)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—ミガキ。スス付着。	
152		縄文土器	浅鉢	—	—	(450)	鈍赤褐色(5Y R 5・4)	内・外面—ミガキ。スス付着。	
153	縄文土器	浅鉢	—	—	(790)	灰色(5Y 4・1)	内・外面—ミガキ。		
154	縄文土器	浅鉢	—	—	(620)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—条痕後ナデ。内面—ナデ後ミガキ。	ベンガラ	
155	縄文土器	浅鉢	—	—	3.15	鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面—ミガキ後沈線。内面—ミガキ。黒斑。		
156	土器溜まり8	縄文土器	深鉢	(2340)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—貝殻条痕。爪形文。口縁部に刻み目。黒斑。内面—貝殻条痕。	
157		縄文土器	深鉢	(2360)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—貝殻条痕。口縁部に刻み目。内面—貝殻条痕。黒斑。	
158		縄文土器	深鉢	(1630)	—	—	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—押印文。貝殻条痕。内面—押印文。ミガキ。	
159	縄文土器	浅鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—ミガキ		
160	土器溜まり9	縄文土器	深鉢	—	—	(460)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—口縁端部に刻み目。条痕。	
161		縄文土器	深鉢	—	—	(420)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—口縁端部に刻み目。スス付着。	
162		縄文土器	深鉢	—	—	(430)	鈍褐色(7.5Y R 7・3)	外面—口縁端部に刻み目。条痕後ナデ。内面—条痕後ナデ。穿孔1か所。	
163		縄文土器	深鉢	—	—	(360)	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	内・外面—条痕。	
164	縄文土器	深鉢	—	—	—	暗赤褐色(5Y R 3・2)	外面—木葉文。赤色顔料塗布。内面—ミガキ。		
165	縄文土器	浅鉢	—	—	(460)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	内・外面—ミガキ。		
166	土器溜まり10	縄文土器	深鉢	3700	—	(740)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—口縁端部に刻み目。条痕後ナデ。爪形文。内面—条痕後ナデ。	
167		縄文土器	深鉢	—	—	(480)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—口縁端部に刻み目・爪型紋。内面—ナデ。	
168		縄文土器	深鉢	—	—	(380)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—口縁端部に刻み目。爪形文。	
169		縄文土器	深鉢	—	—	(360)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—爪形文。	
170		縄文土器	深鉢	—	—	(300)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—口縁端部に刻み目・爪形文。	
171		縄文土器	深鉢	—	—	(440)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—口縁端部に刻み目・爪形文。	
172		縄文土器	深鉢	—	—	(560)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—竹管文。	
173		縄文土器	深鉢	—	—	(890)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—口縁端部に刻み目。	
174		縄文土器	深鉢	—	—	(500)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—口縁端部に刻み目。	
175		縄文土器	深鉢	—	—	(890)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—口縁端部に刻み目。爪形文。	
176		縄文土器	深鉢	—	—	(610)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—爪形文。	
177		縄文土器	深鉢	—	—	(630)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—タテ・ヨコ方向の爪形文。	
178		縄文土器	深鉢	—	—	(620)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—爪形文。条痕後ナデ。	
179		縄文土器	深鉢	—	—	(700)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—爪形文。条痕後ナデ。	
180		縄文土器	深鉢	—	—	(460)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—爪形文。条痕後ナデ。	
181		縄文土器	深鉢	—	—	(610)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—爪形文。条痕後ナデ。	
182		縄文土器	深鉢	—	—	(400)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—爪形文。条痕後ナデ。	
183		縄文土器	深鉢	—	—	(390)	鈍黄褐色(10Y R 4・3)	外面—爪形文。条痕後ナデ。	
184		縄文土器	深鉢	—	—	(280)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—爪形文。条痕後ナデ。	
185		縄文土器	深鉢	—	—	(210)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—爪形文。内面—条痕。	
186		縄文土器	深鉢	(2800)	—	(2400)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—口縁端部に刻み目。条痕後ミガキ。	
187		縄文土器	深鉢	—	—	(1000)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	内・外面—条痕。口縁端部に刻み目。	
188		縄文土器	深鉢	—	—	(1240)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—条痕。口縁端部に刻み目。	
189		縄文土器	深鉢	—	—	(530)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—条痕。口縁端部に刻み目。	
190		縄文土器	深鉢	—	—	(720)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—条痕。口縁端部に刻み目。	
191		縄文土器	深鉢	—	—	(900)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—条痕。口縁端部に刻み目。	
192	縄文土器	深鉢	—	—	(960)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—条痕。口縁端部に刻み目。		
193	縄文土器	深鉢	—	—	(730)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—条痕。口縁端部に刻み目。		
194	縄文土器	深鉢	—	—	(630)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—条痕。口縁端部に刻み目。スス付着。		
195	縄文土器	深鉢	—	—	(590)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—口縁端部に刻み目。		
196	縄文土器	深鉢	—	—	(460)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—口縁端部に刻み目。		
197	縄文土器	深鉢	—	—	(540)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—条痕。口縁端部に刻み目。		
198	縄文土器	深鉢	—	—	(870)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—条痕。口縁端部に刻み目。		
199	縄文土器	深鉢	—	—	(370)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—条痕。口縁端部に刻み目。		
200	縄文土器	深鉢	—	—	(410)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—条痕。口縁端部に刻み目。スス付着。		
201	縄文土器	深鉢	—	—	(530)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内面—条痕。スス付着。口縁端部に刻み目。		
202	縄文土器	深鉢	—	—	(410)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内面—条痕。口縁端部に刻み目。		
203	縄文土器	深鉢	—	—	(850)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面—条痕。		
204	縄文土器	深鉢	—	—	(775)	褐灰色(10Y R 4・1)	内・外面—条痕後ナデ。		
205	縄文土器	深鉢	—	—	(430)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—条痕。口縁端部に刻み目。		
206	縄文土器	鉢	—	—	(380)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面—ミガキ。穿孔。		
207	縄文土器	深鉢	—	—	(540)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—口縁端部に刻み目。沈線による模様。内面—竹管紋。		
208	縄文土器	浅鉢	(2820)	—	(770)	褐灰色(10Y R 4・1)	内・外面—ミガキ。		
209	縄文土器	浅鉢	(2800)	—	(520)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	内・外面—ミガキ。		
210	縄文土器	浅鉢	—	—	(500)	鈍褐色(7.5Y R 5・3)	内・外面—ミガキ。		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(c m)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考	
				口径	底径	器高				
211	土器溜まり10	縄文土器	浅鉢	—	—	(320)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面—ミガキ。		
212		縄文土器	浅鉢	—	—	(250)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	内・外面—ミガキ。		
213		縄文土器	浅鉢	—	—	(175)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面—ミガキ。		
214		縄文土器	鉢	—	330	(530)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面一条痕。内面一条痕後ナデ。		
215		縄文土器	鉢	—	300	(390)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	内面一条痕後ナデ。		
216		縄文土器	鉢	—	650	(330)	浅黄褐色(10Y R 8・3)	内・外面一条痕。		
217		縄文土器	鉢	—	280	(240)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面一条痕。内面一条痕後ナデ。		
218		縄文土器	深鉢	—	—	(420)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—沈線。縄文(L R)。赤色顔料の痕跡。	彦崎 K II	
219		縄文土器	深鉢	—	—	(320)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—沈線。内面—ミガキ。		
220		縄文土器	深鉢	—	—	(390)	褐灰色(7.5Y R 4・1)	内面—ミガキ。		
221	縄文土器	深鉢	(2740)	—	(890)	浅黄色(2.5Y 7・3)	内・外面—ナデ。口縁部に傾斜あり。			
222	縄文土器	深鉢	(2770)	—	(1160)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面一条痕後ナデ。内面—ナデ。			
223	縄文土器	深鉢	—	—	(1450)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—ミガキ。内面—ミガキ。スス付着。			
224	窪地1	縄文土器	深鉢	(3460)	—	(2750)	褐灰色(10Y R 5・1)	外面—ナデ。穿孔(1つ完全、1つ僅かに残)。内面—ナデ。スス付着。		
225		縄文土器	深鉢	(2920)	—	(580)	黒褐色(2.5Y 3・1)	外面—貝殻条痕。内面一条痕後ナデ。		
226		縄文土器	深鉢	—	—	(440)	黒褐色(2.5Y 3・1)	内面—ミガキ。		
227		縄文土器	浅鉢	(270~278)	—	(48~51)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内・外面—ナデ。波状口縁。		
228		縄文土器	鉢	—	51~54	(290)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—ナデ。		
229		縄文土器	鉢	—	62~68	(290)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一条痕後ナデ。内面—ナデ。		
230		縄文土器	鉢	—	(520)	(410)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一条痕後ナデ。内面—ナデ。		
231		縄文土器	鉢	—	(450)	(240)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—ナデ。内面一条痕後ナデ。		
232		窪地3	縄文土器	深鉢	(2920)	—	(800)	鈍褐色(7.5Y R 5・3)	外面—ナデ。スス付着。内面—ナデ。	
233		窪地4	縄文土器	深鉢	(2130)	—	(62~68)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	波状口縁	
234	縄文土器		深鉢	—	—	(240)	灰黄色(2.5Y 6・2)	内・外面—ナデ。		
235	縄文土器		深鉢	396	—	325	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一条痕。内面—ていねいなナデ。		
236	縄文土器		深鉢	—	—	(240)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—ミガキ。		
237	縄文土器		深鉢	—	—	(580)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一条痕後ナデ。		
238	縄文土器		深鉢	—	—	(270)	褐灰色(10Y R 5・1)	外面一条痕後ナデ。		
239	縄文土器		深鉢	—	—	(670)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一条痕後ナデ。		
240	縄文土器		深鉢	—	—	(520)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一条痕後ナデ。穿孔。波状口縁?		
241	縄文土器		深鉢	—	—	(440)	浅黄色(2.5Y 7・3)	内・外面—ナデ。		
242	縄文土器		深鉢	—	—	(600)	鈍黄褐色(10Y R 7・4~6・3)	外面一条痕。内面一条痕後ナデ。		
243	縄文土器		浅鉢	(3260)	—	(860)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内・外面—ミガキ。		
244	縄文土器		浅鉢	—	—	(360)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面一条痕後ナデ。スス付着。内面一条痕のちナデ。波状口縁?		
245	縄文土器		浅鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—ナデ。工具を用いたナデ。内面—ミガキ。		
246	縄文土器		浅鉢	—	—	(540)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一条痕後ナデ。内面—ミガキ。		
247	縄文土器		浅鉢	—	—	(460)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一条痕。スス付着。内面一条痕後ナデ。		
248	縄文土器		浅鉢	—	—	(330)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内面—ミガキ。		
249	縄文土器		浅鉢	—	—	(190)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—ミガキ。		
250	縄文土器		鉢	—	(720)	(210)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)			
251	窪地5	縄文土器	深鉢	—	—	(620)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	内・外面一条痕後ナデ。		
252		縄文土器	深鉢	—	—	(570)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内・外面一条痕。		
253		縄文土器	深鉢	—	—	(630)	黒褐色(10Y R 3・1)	内・外面一条痕後ナデ。		
254		縄文土器	深鉢	—	—	(900)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内・外面一条痕後ナデ。		
255		縄文土器	深鉢	—	—	(530)	黒褐色(10Y R 3・1)	内面一条痕後ナデ。		
256		縄文土器	深鉢	—	—	(280)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—ナデ。沈線。内面—ナデ。		
257		縄文土器	深鉢	—	—	(230)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	内・外面一条痕後ナデ。		
258		縄文土器	深鉢	—	—	(800)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面一条痕後ナデ。スス付着。黒斑。		
259		縄文土器	深鉢	—	—	450	浅黄色(2.5Y 7・3)	内・外面一条痕後ナデ。		
260		縄文土器	浅鉢	—	—	(400)	灰褐色(7.5Y R 5・2)	外面一条痕後ミガキ。凹線2条(凹線のへこみの部分に赤色の顔料の痕跡)。内面一条痕後ミガキ。		
261	縄文土器	鉢	—	—	(410)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—ミガキ後凹線。			
262	縄文土器	浅鉢	—	—	(340)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—ミガキ。			
263	縄文土器	浅鉢	—	—	(460)	鈍褐色(7.5Y R 5・3)	内・外面—ミガキ後ナデ。			
264	縄文土器	浅鉢	—	—	(210)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—沈線。縄文(L R)。			
265	縄文土器	鉢	—	—	(350)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一条痕後ミガキ。沈線。結節縄文(L R)。内面一条痕後ミガキ。			
266	窪地6	縄文土器	深鉢	—	—	(200)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—口縁端部に刻み目。		
267		縄文土器	深鉢	—	—	(570)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—沈線1条。縄文(R L)。		
268		縄文土器	深鉢	—	—	(500)	鈍黄褐色(10Y R 4・3)	外面—縄文(L R)。沈線2条。		
269		縄文土器	深鉢	—	—	(360)	鈍褐色(7.5Y R 5・4)	外面—縄文(L R)。沈線7条。		
270		縄文土器	深鉢	—	—	(360)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—縄文(R L)。沈線3条。		
271		縄文土器	深鉢	—	—	(180)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—沈線。掘縄文。		
272		縄文土器	深鉢	—	—	(210)	明黄褐色(10Y R 6・6)	外面—縄文(R L)。沈線3条。		
273		縄文土器	深鉢	—	—	(305)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—貝殻条痕。縄文(R L)。スス付着。内面—スス付着。		
274		縄文土器	深鉢	—	—	(350)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—沈線1条。縄文(R L)。内面—ミガキ。		
275		縄文土器	深鉢	—	—	(490)	鈍褐色(7.5Y R 5・3)	外面—縄文(L R)。スス付着。		
276		縄文土器	深鉢	—	—	(460)	鈍赤褐色(5Y R 5・4)	外面—縄文(L R)。		
277		縄文土器	深鉢	—	—	(360)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—縄文(R L)。沈線文。		
278		縄文土器	深鉢	—	—	(170)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—縄文(L R)。沈線1条。		
279		縄文土器	深鉢	—	—	(500)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—縄文(L R)。沈線。内面一条痕。		
280	縄文土器	注口土器	—	—	(350)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—ミガキ。縄文(L R)。沈線。			
281	縄文土器	注口土器	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—スス付着。内面—ミガキ。			

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(c m)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
282	窪地6	縄文土器	深鉢	—	—	(520)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—沈線(3条)。内面—沈線1条。	
283		縄文土器	深鉢	—	—	(500)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—沈線。	
284		縄文土器	深鉢	—	—	(550)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—沈線。内面—ミガキ。	280と281は接合
285		縄文土器	深鉢	—	—	(600)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—沈線。ミガキ。スス附着。内面—ミガキ。スス附着。	
286		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—沈線(3条)上に刺突文。	
287		縄文土器	浅鉢	(3580)	—	(430)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—沈線5条。	
288		縄文土器	浅鉢	—	—	(320)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—口縁端部に刻み目。沈線文5条。	
289		縄文土器	深鉢	—	—	(485)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—貝殻条痕。内面—貝殻条痕後ミガキ。黒斑?	
290		縄文土器	深鉢	—	—	(510)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—貝殻条痕後ナデ。黒斑?。内面—貝殻条痕後ナデ。黒斑?。	
291		縄文土器	深鉢	—	—	(400)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—貝殻条痕。	
292	縄文土器	深鉢	—	—	(600)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—貝殻条痕。		
293	縄文土器	深鉢	—	500	(330)	鈍褐色(7.5Y R 5・4)	外面—貝殻条痕後ナデ。底部—上げ底。		
294	窪地7	縄文土器	深鉢	(3000)	—	—	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	口唇部刻み目。	
295		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	口唇部刻み目。黒斑。	
296		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	口唇部刻み目。黒斑。	
297		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	口唇部刻み目。黒斑。	
298		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—二枚目による貝殻条痕。貼付突帯。口唇部刻み目。	
299		縄文土器	深鉢	—	—	(270)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—突帯文に刻み目。条痕。	
300	縄文土器	深鉢	—	—	(360)	黒褐色(2.5Y 3・2)	外面—口縁端部刻み目。条痕。		
301	縄文土器	深鉢	—	—	640	鈍褐色(7.5Y 6・4)	外面—口縁端部刻み目。条痕。		
302	縄文土器	深鉢	(3640)	—	(145~153)	褐色(7.5Y R 7・5)	外面—口縁端部刻み目。竹管文。条痕。		
303	縄文土器	深鉢	(3440)	—	(1240)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内・外面—条痕後ナデ。		
304	縄文土器	深鉢	(2900)	—	(430)	鈍黄褐色(10Y R 5・4)	外面—口縁端部刻み目。		
305	縄文土器	深鉢	—	—	(550)	黒褐色(2.5Y 3・1)	内・外面—貝殻条痕。		
306	縄文土器	浅鉢	—	—	(330)	黒褐色(2.5Y 3・2)	内・外面—ミガキ		
307	縄文土器	浅鉢	—	—	(420)	黄灰色(2.5Y 5・1)	内・外面—ミガキ		
308	河道1最上流部上層	縄文土器	深鉢?	—	—	(420)	褐色(5Y R 6・6)	外面—ミガキ。大洞系のメガネ状浮文。沈線を引いたのち浮文をつけている。	
309		縄文土器	深鉢	(2980)	—	(1110)	黒色(2.5Y 2・1)	外面—口縁端部刻み目。条痕。	
310		縄文土器	浅鉢	(3660)	—	(41~52)	黒色(2.5Y 2・1)	内・外面—ミガキ。	
311		縄文土器	壺o R注口土器	—	—	(1070)	オリーブ黒色(5Y 3・2)	外面—三叉文。縄文(L R)。沈線2条。ミガキ。	
312		縄文土器	壺	(1040)	—	(1190)	明黄褐色(10Y R 7・6)	外面—ミガキ。黒斑。内面—沈線1条。ミガキ。	大洞式
313		縄文土器	浅鉢	(2080)	—	(960)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—ミガキ。内面—沈線1条(終始点は2条)。	
314		縄文土器	浅鉢	(1920)	—	(310)	黒褐色(10Y R 3・1)	内・外面—ミガキ	
315		縄文土器	浅鉢	—	—	(290)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—ミガキ。内面—ミガキ。沈線1条。	
316		縄文土器	浅鉢	—	—	(400)	暗灰黄色(2.5Y 4・2)	外面—ミガキ。内面—ミガキ。沈線1条。	
317		縄文土器	注口土器	—	—	—	黄灰色(2.5Y 4・1)	内・外面—ナデ。	
318	縄文土器	深鉢	—	660	(240)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—ナデ。		
319	縄文土器	深鉢	—	(500)	(240)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—ナデ。		
320	縄文土器	深鉢	—	(650)	(200)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面—ナデ。		
321	縄文土器	深鉢	—	—	(740)	浅黄色(2.5Y 7・3)	外面—口縁端部刻み目。条痕。内面—条痕。		
322	縄文土器	深鉢	—	—	(640)	灰色(5Y 4・1)	外面—口縁端部刻み目。条痕。		
323	縄文土器	浅鉢	—	—	(220)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—口縁端部刻み目。条痕。内面—ミガキ。		
324	縄文土器	浅鉢	—	—	(300)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—ミガキ。		
325	縄文土器	浅鉢	—	—	(310)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内面—ミガキ。		
326	縄文土器	浅鉢	—	—	(250)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—口縁端部に沈線1条・ミガキ。内面—ミガキ。		
327	縄文土器	浅鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—ミガキ。内面—ミガキ。沈線1条。		
328	縄文土器	注口土器	—	—	—	浅黄色(2.5Y 7・3)	内・外面—ミガキ。		
329	縄文土器	深鉢	—	—	(270)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—ミガキ。底部—圧痕。		
330	縄文土器	深鉢	—	(320)	(820)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—ナデ。		
331	縄文土器	深鉢	—	(650)	240	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—ミガキ。		
332	縄文土器	深鉢	—	—	(190)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—ナデ。		
333	縄文土器	深鉢	—	520	(180)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—ナデ。		
334	縄文土器	深鉢	—	—	(590)	黒褐色(10Y R 3・2)	外面—口縁端部刻み目。条痕。		
335	縄文土器	深鉢	—	—	(350)	浅黄褐色(10Y R 8・3)	外面—ミガキ。内面—ナデ。		
336	縄文土器	深鉢	—	—	(590)	黒褐色(2.5Y 3・2)	内・外面—ナデ。		
337	縄文土器	深鉢	—	—	(500)	灰黄色(2.5Y 7・2)	外面—沈線4条。ミガキ。内面—ナデ・ミガキ。		
338	縄文土器	深鉢	—	—	(370)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	内面—縄文(L R)。沈線1条。		
339	縄文土器	深鉢	—	—	(490)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—口縁端部に穿孔(貫通している)・L R縄文あり・穿孔(貫通していない)・ミガキ。内面—ナデ・ミガキ。		
340	縄文土器	深鉢	—	—	(370)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面—縄文(L R)。沈線3条。刺突文。ミガキ。内面—ミガキ。		
341	縄文土器	深鉢	—	—	(550)	暗灰黄色(2.5Y 4・2)	外面—結び目文。内面—ミガキ。		
342	縄文土器	深鉢	—	—	(780)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—結び目文?。内面—条痕。		
343	縄文土器	深鉢	—	—	(1000)	黒褐色(10Y R 3・2)	外面—結び目文。内面—条痕後ナデ。		
344	縄文土器	深鉢	—	—	(550)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—凹線4条。結び目文。内面—ミガキ。		
345	縄文土器	深鉢	—	—	(520)	明褐色(7.5Y R 5・6)	外面—沈線のほしに竹管文。縄文(L R)。結び目文。内面—ミガキ。		
346	縄文土器	鉢	—	—	(240)	褐色(7.5Y R 4・3)	外面—沈線の端に刺突。		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法的特徴など	備考	
				口径	底径	器高				
347	河道1最上流部下層	縄文土器	鉢	—	—	(430)	黒色(10Y R 2・1)	外面—沈線の端に竹管文。縄文(L R)。結び目文。内面—ミガキ。		
348		縄文土器	鉢	—	—	(440)	浅黄色(2.5Y 7・3)	外面—竹管文。縄文(R L)。		
349		縄文土器	鉢	—	—	(250)	灰褐色(7.5Y R 4・2)	外面—縄文。内面—条痕後ナデ。		
350		縄文土器	鉢	—	—	(370)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—縄文(R L)。沈線2条。ミガキ。内面—ミガキ。		
351		縄文土器	鉢	—	—	(440)	鈍赤褐色(5 Y R 5・3)	外面—沈線2条。刺突文。縄文。内面—条痕後ナデ。		
352		縄文土器	鉢	—	—	(270)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—沈線3条。縄文(R L)。		
353		縄文土器	鉢	—	—	(320)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—ミガキ。沈線2条。縄文(R L)。内面—ミガキ。		
354		縄文土器	深鉢	—	—	(710)	褐色(7.5Y R 6・6)	外面—縄文(L R)。刺突文。ミガキ。内面—条痕。		
355		縄文土器	深鉢	—	—	(390)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—縄文(L R)。ミガキ。		
356		縄文土器	鉢	—	—	(470)	灰白色(10Y R 8・2)	外面—凹線4条。内面—条痕?		
357		縄文土器	深鉢	—	—	(440)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—縄文(L R)。		
358		縄文土器	深鉢	—	—	(480)	黒褐色(10Y R 3・2)	外面—縄文(L R)。		
359		縄文土器	深鉢	—	—	(550)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	内面—縄文または擬縄文。		
360		河道1上流部上層	縄文土器	深鉢	—	—	(520)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—条痕後ナデ。内面—縄文。巻貝による沈線・刺突。巻貝条痕後ナデ。	
361			縄文土器	深鉢	—	—	(390)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—刺突。縄文(R L?)。沈線。	
362	縄文土器		鉢	—	—	(290)	褐色(7.5Y R 6・6)	外面—沈線。縄文(R L?)。		
363	縄文土器		鉢	—	—	(500)	灰褐色(7.5Y R 5・2)	外面—スリ消し縄文(R L)。内面—ミガキ。		
364	縄文土器		鉢	—	—	—	明褐色(7.5Y 7・2)	R L縄文。		
365	縄文土器		浅鉢	—	—	(380)	明褐色(7.5Y R 5・6)	外面—縄文(R L)。沈線。巻貝による刺突(?)。		
366	縄文土器		鉢	—	—	(320)	褐色(5 Y R 6・6)	外面—縄文(L R)。沈線。		
367	縄文土器		浅鉢	—	—	(320)	灰褐色(7.5Y R 5・2)	外面—縄文。沈線。		
368	縄文土器		鉢	—	—	(280)	褐色(7.5Y R 4・1)	外面—縄文(L R)。沈線。		
369	縄文土器		深鉢	—	—	(410)	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面—刺突。沈線。縄文(R L)。		
370	縄文土器		鉢	—	—	(370)	灰褐色(7.5Y R 5・2)	外面—縄文(L R? o R L R L?)。沈線。		
371	縄文土器		深鉢	—	—	(320)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—沈線。口縁部部に刺突。		
372	縄文土器		深鉢	—	—	(560)	褐色(7.5Y R 6・6)	外面—条痕後ナデ。刻み目。内面—条痕後ナデ。		
373	縄文土器		深鉢	—	—	(790)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—擦痕。貼り付け突帯上に刻み目。		
374	河道1中流部東斜面		縄文土器	深鉢	—	—	(815)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—口縁部部刻み目。条痕。内面—条痕。	
375		縄文土器	深鉢	—	—	(560)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—条痕。内面—ナデ。		
376		縄文土器	鉢	—	—	(390)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—口縁部部刻み目。内面—条痕。		
377		縄文土器	深鉢	—	—	(340)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—ナデ。		
378		縄文土器	浅鉢	—	—	(310)	鈍褐色(7.5Y R 6・3)	外面—条痕。凹線3条。スス付着。内面—条痕。	宮滝式	
379		縄文土器	鉢	—	—	(310)	黄灰色(2.5Y 5・1)	内・外面—条痕。		
380		縄文土器	浅鉢	—	—	(320)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—条痕後ミガキ。		
381		縄文土器	深鉢	—	(520)	(290)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—ナデ。		
382		縄文土器	深鉢	(39-40)	—	(1930)	鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面—条痕後ナデ。スス付着。内面—条痕後ナデ。		
383		河道1中流部東斜面1	縄文土器	深鉢	—	—	(1120)	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面—条痕後ミガキ。内面—沈線上に刺突。条痕後ミガキ。	福田K II式
384	縄文土器		鉢	—	—	(1160)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—口縁部ミガキ後沈線3条・刺突文。頸部—条痕後ミガキ。内面—条痕後ミガキ。	彦崎K II 段階?	
385	縄文土器		深鉢	—	—	(600)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—条痕。スス付着。内面—条痕。		
386	縄文土器		深鉢	—	—	(480)	黄灰色(2.5Y 5・1)	外面—条痕。スス付着。内面—沈線。		
387	縄文土器		深鉢	—	—	(520)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—凹線2条・条痕後ナデ。内面—ナデ。	宮滝式 I ?	
388	河道1中流部東斜面2	縄文土器	注口土器?	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—縄文(R L)。沈線。	彦崎K II	
389		縄文土器	深鉢	—	—	(500)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—口縁部部刻み目。条痕。		
390		縄文土器	深鉢	—	—	(930)	灰黄色(2.5Y 6・2)	外面—条痕。縄文(L R)。	彦崎K II	
391		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—縄文(L R)。内面—黒斑。	彦崎K I	
392		縄文土器	深鉢	—	—	(170)	黄灰色(2.5Y 6・1)鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面—磨消縄文。擬羽状縄文。	彦崎K I	
393		縄文土器	深鉢	—	—	(375)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	内・外面—ナデ。口縁部部—縄文(R L)。		
394		縄文土器	深鉢	—	—	—	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—二枚貝条痕後ナデ。		
395		縄文土器	深鉢	2960	—	—	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—口縁部部刻み目。爪形文。		
396		縄文土器	深鉢	2500	—	—	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—口縁部部刻み目。爪形文。		
397		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—口縁部部刻み目。爪形文。		
398	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰褐色(7.5Y R 4・2)	外面—口縁部部刻み目。爪形文。			
399	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰黄色(2.5Y 6・2)	内・外面—ミガキ。			
400	縄文土器	浅鉢	3000	—	—	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内・外面—ミガキ。			
401	河道1下流部	縄文土器	浅鉢	(44-40)	—	(59~66)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—口縁部部に突起。		
402		縄文土器	深鉢	2880	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	口縁部内・外面—ナデ。		
403		縄文土器	浅鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	内・外面—ミガキ。		
404		縄文土器	浅鉢	—	(480)	(350)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	内・外面—ミガキ。		
405		縄文土器	深鉢	—	270	—	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—ヘラケズリ。内面—ナデ。		
406		縄文土器	浅鉢	—	—	—	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内・外面—ミガキ。内面—沈線2条。		
407		縄文土器	浅鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 6・3)	内・外面—ミガキ。		
408		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	突起部に沈線と刻み目。		
409		縄文土器	深鉢	—	—	(440)	灰白色(10Y R 8・2)	外面—沈線。内面—ミガキ。		
410		縄文土器	深鉢	—	—	(290)	黒褐色(10Y R 3・2)	外面—沈線。ミガキ。		
411		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—沈線後縄文(R L)。		
412		縄文土器	浅鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	内外面—口縁部部縄文(L R)。ミガキ。内面—沈線文。		
413		縄文土器	深鉢	—	—	(300)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—沈線後縄文(R L)と竹管文。内面—ミガキ。		
414		縄文土器	注口土器	—	—	(570)	灰黄色(2.5Y 7・2)	外面—ミガキ。黒斑。内面—ミガキ。		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
415	河道1下流部	縄文土器	深鉢	—	—	(1040)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—ミガキ。凹線1条。縄文(R L)。内面—ナデ。	
416		縄文土器	注口土器	—	—	(860)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—沈線文。内面—ナデ。	加曾利 B1式
417	河道2上流部東斜面	縄文土器	壺?	(1740)	—	(1150)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—ナデ・押圧。内面—押圧とナデ。	
418		縄文土器	深鉢	(3640)	—	(1910)	浅黄色(25Y 7・3)	外面—刻み目。ナデ。内面—ナデ。	
419		縄文土器	深鉢	(3500)	—	(1550)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—一条痕後ミガキ。	
420		縄文土器	深鉢	(2600)	—	(2090)	浅黄褐色(10Y R 8・4)	外面—口縁部刻み目が途中で方向変化。	
421		縄文土器	深鉢	—	—	(1400)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—ナデ。スス付着。内面—ナデ。	
422		縄文土器	深鉢	—	—	(790)	鈍褐色(75Y R 7・4)	外面—貼り付け突帯後刻み目。	
423		縄文土器	深鉢	—	—	(1060)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—一条痕後ナデ。貼り付け突帯上に刻み目。内面—一条痕後ナデ。	
424		縄文土器	深鉢	—	—	(700)	鈍褐色(75Y R 6・3)	外面—一条痕後ナデ。	
425		縄文土器	深鉢	—	—	(430)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—一条痕後ナデ。	
426		縄文土器	深鉢	(2680)	—	(950)	褐灰色(75Y R 5・1)	外面—一枚貝条痕後ナデ。貼り付け後沈線。内面—ナデ。	
427		縄文土器	深鉢	—	—	(380)	鈍褐色(75Y R 5・3)	外面—一条痕。内面—ナデ。	
428		縄文土器	深鉢	—	—	(460)	鈍褐色(75Y R 6・4)	外面—一条痕。黒斑。	
429		縄文土器	深鉢	—	—	(590)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—一条痕。黒斑。	
430		縄文土器	深鉢	—	—	(130~137)	黒色(5 Y 2・1)	外面—一条痕後ナデ。口縁部に突起部あり。内面—一条痕後ナデ。	
431		縄文土器	深鉢	—	—	(700)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—黒斑。沈線。条痕。	
432		縄文土器	深鉢	—	—	(700)	鈍褐色(75Y R 6・4)	外面—一枚貝条痕。内面—ナデ。	
433		縄文土器	深鉢	—	—	(800)	灰黄色(25Y 7・2)	内・外面—一条痕後ナデ。	
434		縄文土器	深鉢	—	—	(670)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—一条痕(擦条)後ナデ。内面—ナデ。口縁部に黒斑。	
435		縄文土器	浅鉢	—	—	(1000)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—一条痕後ナデ。	
436		縄文土器	鉢	(2220)	—	(770)	黒褐色(75Y R 3・1)	外面—ミガキ。内面—押圧。ナデ。	
437		縄文土器	鉢	(2860)	—	(173~175)	鈍赤褐色(5 Y R 5・4)	外面—貝殻条痕。口縁部に小さな輪が2個。内面—貝殻条痕。	
438		縄文土器	深鉢	—	—	(63~73)	黒色(25Y 2・1)	外面—ミガキ。黒斑。内面—ミガキ。	
439		縄文土器	深鉢	—	—	(130~148)	浅黄色(25Y 7・3)	外面—一条痕後ナデ。波状口縁。	
440		縄文土器	鉢	—	—	(380)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—巻具による刺突(2ヶ所)。沈線(4条)。縄文(R L)。	
441	縄文土器	浅鉢	(3500)	—	(1410)	暗灰黄色(25Y 4・2)	外面—磨消縄文(R L)。刺突(2ヶ所)。穿孔(1ヶ所)。		
442	河道3中流部東斜面	縄文土器	深鉢	(3020)	—	(600)	鈍褐色(75Y R 6・3)	外面—口縁部刻み目。突帯文に刻み目。内面—ナデ。	
443		縄文土器	深鉢	—	—	(330)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—刻み目。	
444		縄文土器	深鉢	—	—	(310)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—突帯文に刻み目。	
445		縄文土器	深鉢	(3440)	—	(1750)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—一条痕後ナデ。内面—ミガキ。	
446		縄文土器	深鉢	—	—	(5~58)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—一条痕。黒斑。内面—一条痕。	
447		縄文土器	深鉢	—	—	(820)	黒褐色(25Y 3・1)	外面—一条痕後ナデ。刺突文。	
448		縄文土器	深鉢	4360	131?	3410	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—一条痕。ナデ?・刺突。	
449		縄文土器	浅鉢	—	—	(330)	黒褐色(10Y R 3・1)	内・外面—ナデ。	
450		縄文土器	浅鉢	—	—	(250)	黒褐色(10Y R 3・2)	内・外面—ミガキ。	
451		縄文土器	鉢	(2940)	—	(680)	赤褐色(25Y R 4・6)	外面—一条痕後ナデ。	
452		縄文土器	浅鉢	—	—	(480)	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面—凹線(4条)。条痕後ナデ。	
453		縄文土器	浅鉢	—	—	(440)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—口縁部刻み目。	
454		縄文土器	鉢	—	—	(440)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—細い工具を用いた二重の半円。	
455		縄文土器	浅鉢	—	—	(410)	灰黄色(25Y 6・2)	内・外面—ミガキ。	
456		縄文土器	浅鉢	(940)	—	(1080)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—R L 縄文・L R 縄文と細い沈線による波模様。条痕後ナデ。内面—一条痕後ナデ。	
457	縄文土器	浅鉢	—	—	(860)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—ミガキ。縄文(R L)ないしは擦縄文。内面—ミガキ。		
458	縄文土器	浅鉢	(1840)	—	(450)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—ミガキ。沈線3条。縄文(L R)。内面—ミガキ。		
459	縄文土器	浅鉢	(1360)	—	(350)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—ミガキ。凹線?。黒斑。内面—ミガキ。		
460	河道3下流部(北側)	縄文土器	深鉢	—	—	(400)	鈍黄色(25Y 6・3)	内・外面—ナデ。	
461		縄文土器	深鉢	—	—	(530)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—ナデ。口縁部に黒斑。	
462		縄文土器	深鉢	(2320)	—	(510)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—ヨコ方向ヘナデ。内面—ヨコ方向ヘナデ。	
463		縄文土器	鉢	—	—	(300)	鈍褐色(75Y R 5・4)	外面—一条痕。内面—ナデ。	
464		縄文土器	深鉢	—	—	(270)	暗灰黄色(25Y 5・2)	外面—一条痕。内面—ミガキ。	
465		縄文土器	深鉢	—	—	(500)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—一条痕。内面—軽い押圧とナデ。	
466		縄文土器	鉢	1360	—	850	鈍褐色(75Y R 6・4)	内・外面—ナデ。接合痕。	
467		縄文土器	鉢	—	—	(490)	黒褐色(25Y 3・2)	内・外面—ナデ。	
468		縄文土器	鉢	(2520)	—	(1200)	褐色(5 Y R 6・6)	内・外面—ナデ。	
469		縄文土器	浅鉢	(1640)	—	(610)	暗褐色(10Y R 3・3)	内・外面—ミガキ。	
470	縄文土器	浅鉢	(2520)	—	(100)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面—ナデ。		
471	縄文土器	浅鉢	(3060)	—	(570)	褐灰色(10Y R 4・1)	内・外面—ミガキ。		
472	縄文土器	浅鉢	—	—	(820)	灰白色(25Y 7・1)	外面—ナデ。内面—ミガキ。		
473	縄文土器	浅鉢	—	—	(190)	黒褐色(75Y R 3・2)	内・外面—ミガキ。		
474	河道4上流部西斜面	縄文土器	深鉢	(3280)	—	—	褐色(5 Y R 6・6)	外面—ヘラケズリ。爪形文。口唇部刻み目。黒斑。	
475		縄文土器	深鉢	(3900)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	口唇部に刻み目。	
476		縄文土器	深鉢	(3120)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—沈線5条。内面—沈線1条。	滋賀里 I
477		縄文土器	深鉢	—	—	—	黒褐色(10Y R 3・2)	内・外面—ミガキ。	
478		縄文土器	深鉢	—	—	—	黒褐色(10Y R 3・2)	外面—一枚貝条痕。沈線3条。	滋賀里 I・II?
479		縄文土器	深鉢	—	—	—	浅黄褐色(10Y R 8・3)	外面—凹線。貝がら圧痕?。	
480		縄文土器	深鉢	—	—	—	浅黄褐色(10Y R 8・3)	外面—一枚貝条痕。内面—黒斑。	
481	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面—一条痕後ナデ。		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
482	河道4上流部西斜面	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7・2)	外面一ナデ。外・内面に粘土紐積上げ痕。外面黒斑。	
483		縄文土器	深鉢	(2600)	—	—	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内・外面一ナデ。	
484		縄文土器	深鉢	(2480)	—	—	灰黄色(25Y 7・2)	外面一ニ枚貝条痕。黒斑。	
485		縄文土器	深鉢	(2500)	420	(2570)	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面一貝殻条痕後ナデ。	
486		縄文土器	浅鉢	(2360)	—	—	褐灰色(10Y R 4・1)	内・外面一ミガキ。	
487		縄文土器	浅鉢	—	—	—	鈍橙色(75Y R 6・4)	内・外面一ミガキ。沈線1条。黒斑。	
488		縄文土器	浅鉢	—	—	—	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内面一ミガキ。内・外面一黒斑。	
489		縄文土器	鉢	(1500)	—	—	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面一ミガキ。黒斑。内面一ミガキ。	
490		縄文土器	深鉢	—	(640)	—	灰黄色(25Y R 6・2)	内・外面一ナデ。	
491		縄文土器	深鉢	—	—	—	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面一縄文(R L)。沈線。ミガキ。内面一ミガキ。	福田K II ?
492		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 6・3)	外面一縄文(R L)。沈線。内面一貝殻条痕後ナデ。黒斑。	福田K II
493	河道4下流部西斜面	縄文土器	深鉢	—	—	(600)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一爪形文。スス付着。内面一刺突。	
494		縄文土器	深鉢	—	—	(380)	鈍橙色(75Y R 6・4)	外面一縁端部刻み目。	
495		縄文土器	深鉢	—	—	(43~46)	鈍橙色(75Y R 7・4)	外面一縁端部刻み目。爪形文。	
496		縄文土器	深鉢	—	—	(600)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一縁端部刻み目。爪形文。	
497		縄文土器	深鉢	—	—	(360)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一縁端部に刻み目・条痕後ナデ。スス付着。内面一ナデ。	
498		縄文土器	深鉢	—	—	(490)	鈍橙色(75Y R 6・4)	外面一縁端部刻み目。条痕後ナデ。	
499		縄文土器	深鉢	—	—	(620)	灰褐色(75Y R 4・2)	外面一縁端部刻み目。条痕後ナデ。	
500		縄文土器	深鉢	—	—	(720)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一縁端部刻み目。黒斑。	
501		縄文土器	深鉢	—	—	(450)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面一縁端部刻み目。	
502		縄文土器	深鉢	—	—	(420)	鈍黄褐色(10Y R 4・3)	外面一縁端部刻み目。	
503		縄文土器	深鉢	—	—	(420)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面一縁端部刻み目。	
504		縄文土器	深鉢	—	—	(370)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面一縁端部刻み目。	
505		縄文土器	深鉢	—	—	(390)	鈍褐色(75Y R 5・4)	外面一縁端部刻み目。	
506		縄文土器	深鉢	—	—	(510)	鈍褐色(75Y R 5・4)	外面一縁端部刻み目。	
507		縄文土器	深鉢	—	—	(600)	灰色(5 Y 5・1)	外面一沈線3条。刺突文。内面一沈線1条。	
508		縄文土器	深鉢	—	—	(550)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一爪形文。スス付着。	
509		縄文土器	深鉢	—	—	(620)	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面一爪形文。	
510		縄文土器	深鉢	—	—	(370)	鈍橙色(75Y R 6・4)	外面一爪形文。	
511		縄文土器	深鉢	—	—	(440)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一巻き目による凹線2条。	
512		縄文土器	深鉢	—	—	(780)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面一巻き目による凹線3条。条痕後ナデ。内面一条痕後ナデ。	
513		縄文土器	鉢	—	—	(600)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面一条痕後ナデ。	
514	縄文土器	浅鉢	—	—	(460)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	内・外面一条痕後ナデ。		
515	縄文土器	鉢	—	280	(240)	鈍褐色(75Y R 6・3)	内面一条痕後ナデ。		
516	河道5	縄文土器	深鉢	(3820)	—	(193~200)	黒褐色(75Y R 3・2)	外面一ミガキ。穿孔3ヶ所。	
517	A地区包含層	縄文土器	注口土器	—	—	—	浅黄褐色(10Y R 8・4)	外面一穿孔。沈線1条螺旋状に巡る。	
518		縄文土器	浅鉢	—	—	(240)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面一ミガキ。沈線。縄文。内面一ミガキ。	
519		縄文土器	浅鉢	—	—	(390)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面一ミガキ。縄文。沈線。内面一ミガキ。	
520		縄文土器	浅鉢	—	—	(350)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一沈線。縄文(L R)。	
521		縄文土器	浅鉢	—	—	(370)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面一沈線。縄文(L R)。	
522		縄文土器	深鉢	—	—	(710)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面一ミガキ。	
523		縄文土器	深鉢	—	—	(710)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面一縁端部刻み目。二枚貝条痕後ナデ。	
524		縄文土器	深鉢	—	—	(400)	灰褐色(75Y R 4・2)	外面一ミガキ。メガネ状の浮紋。	
525		縄文土器	深鉢	—	—	(400)	鈍橙色(75Y R 6・4)	外面一沈線。黒斑。内面一ミガキ。	
526		縄文土器	深鉢	—	—	(270)	黒褐色(10Y R 3・2)	外面一凹線1条。結節縄文。内面一ミガキ。	
527		縄文土器	深鉢	—	—	(380)	明褐色(75Y R 7・2)	外面一沈線。縄文(R L)。	
528	縄文土器	浅鉢	(3320)	—	(430)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内・外面一ミガキ。		
529	縄文土器	深鉢	(4240)	—	(67~71)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面一ミガキ。		
530	B地区包含層	縄文土器	深鉢	3300	—	(165~174)	浅黄色(25Y 7・3)	外面一貝殻条痕。内面一条痕後ナデ。	
531		縄文土器	深鉢	3500	—	(1380)	暗灰黄色(25Y 4・2)	内面一条痕。	
532		縄文土器	深鉢	(2920)	—	(111~125)	灰黄色(25Y 7・2)		
533		縄文土器	深鉢	(3080)	—	(900)	黒褐色(25Y 3・2)	内・外面一ミガキ。	
534		縄文土器	深鉢	(4240)	—	(2020)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面一貝殻条痕	
535		縄文土器	深鉢	(1980)	—	(520)	褐灰色(10Y R 4・1)	内・外面一ミガキ。	
536		縄文土器	深鉢	(4020)	—	(900)	鈍褐色(75Y R 5・3)	外面一条痕後ナデ。黒斑。	
537		縄文土器	深鉢	(3460)	—	(800)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一条痕後ナデ。内面一沈線2条。	
538		縄文土器	深鉢	(3320)	—	(138~144)	黒褐色(25Y 3・2)	外面一縁端部に刺突1ヶ所。	
539		縄文土器	深鉢	—	—	(43~47)	暗灰黄色(25Y 4・2)	外面一条痕後ナデ。	
540		縄文土器	深鉢	—	—	(450)	鈍黄色(25Y 6・3)	内・外面一ナデ。	
541	縄文土器	深鉢	—	—	(890)	灰黄色(25Y 7・2)	内・外面一軽い押圧とナデ。		
542	縄文土器	深鉢	—	—	(500)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内・外面一ミガキ		
543	縄文土器	深鉢	—	—	(540)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一ミガキ。沈線2条。内面一ナデ。凹線1条。		
544	縄文土器	深鉢	—	—	(1120)	黒褐色(10Y R 3・2)	内・外面一条痕後ナデ。		
545	縄文土器	浅鉢	—	—	(540)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一縁端部刻み目。沈線文。		
546	縄文土器	浅鉢	—	—	(390)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一沈線文後刻み目。内面一ミガキ。		
547	縄文土器	浅鉢	—	—	(430)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一刻み目。沈線文。内面一ミガキ。		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
548	B地区包含層	縄文土器	浅鉢	—	—	(360)	黒褐色(10Y R 3・2)	外面—ミガキ。沈線文。刻み目。内面—ミガキ。	
549		縄文土器	浅鉢	—	—	(390)	黒色(10Y R 2・1)	外面—沈線5条。内面—ミガキ。	
550		縄文土器	浅鉢	—	—	(520)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—沈線8条。	
551		縄文土器	浅鉢	—	—	(370)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—沈線5条。内面—ミガキ。	
552		縄文土器	浅鉢	—	—	(340)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—ミガキ。沈線文。内面—ミガキ。	
553		縄文土器	浅鉢	—	—	(380)	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	内・外面—山形の沈線文。	
554		縄文土器	浅鉢	—	—	(370)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—ミガキ。沈線文。	
555		縄文土器	浅鉢	—	—	(290)	灰黄色(2.5Y 6・2)	外面—ミガキ。沈線文。	
556		縄文土器	浅鉢	—	—	(390)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—沈線2条。	
557		縄文土器	浅鉢	—	—	(410)	黒色(2.5Y 2・1)	外面—口唇部刻み目。沈線8条。内面—沈線1条。	
558		縄文土器	浅鉢	—	—	(580)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—沈線5条。内面—沈線1条。	
559		縄文土器	浅鉢	—	—	(570)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—沈線5条。内面—沈線1条。	
560		縄文土器	浅鉢	—	—	(410)	黒褐色(10Y R 3・2)	内面—凹線。	
561		縄文土器	浅鉢	—	—	(520)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—沈線。	
562		縄文土器	浅鉢	—	—	(380)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面—沈線文。	
563		縄文土器	浅鉢	—	—	(500)	黒色(7.5Y R 2・1)	外面—沈線文。内面—沈線文。	
564		縄文土器	浅鉢	—	—	(290)	黒褐色(10Y R 3・2)	外面—沈線文。	
565		縄文土器	浅鉢	(2400)	—	(650)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	内・外面—ミガキ。	
566		縄文土器	浅鉢	(2100)	—	(190)	黒褐色(2.5Y 3・2)	外面—ミガキ。	
567		縄文土器	浅鉢	(3040)	—	(220)	黒褐色(7.5Y R 3・1)	内・外面—ミガキ。	
568		縄文土器	浅鉢	—	—	(1240)	黒褐色(7.5Y R 3・1)	内・外面—ミガキ。	
569		縄文土器	浅鉢	—	—	(390)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	内・外面—ミガキ。	
570		縄文土器	浅鉢	(3100)	—	(830)	鈍黄色(2.5Y 6・3)	内・外面—ミガキ。	
571		縄文土器	浅鉢	—	—	(420)	黒褐色(2.5Y 3・2)	内・外面—ミガキ。	
572		縄文土器	浅鉢	—	—	(490)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内・外面—ミガキ。	
573		縄文土器	浅鉢	—	—	(280)	黒褐色(2.5Y 3・2)	内面—ミガキ。	
574		縄文土器	浅鉢	—	—	(340)	黒褐色(10Y R 3・2)	内・外面—ミガキ。	
575		縄文土器	浅鉢	—	—	(270)	鈍黄色(2.5Y 6・4)	外面—凹線1条。	
576		縄文土器	浅鉢	—	—	(410)	黒色(10Y R 2・1)	内・外面—ミガキ。	
577		縄文土器	浅鉢	—	—	(380)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	内・外面—ミガキ。	
578		縄文土器	注口土器	—	—	—	暗灰黄色(2.5Y 4・2)	外面—ミガキ。	
579		縄文土器	注口土器	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面—ミガキ。	
580		縄文土器	注口土器	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	外面—ミガキ。	
581		縄文土器	鉢	—	—	(520)	橙色(7.5Y R 6・6)	外面—縄文(RL)。沈線2条。	
582		縄文土器	鉢	—	—	(280)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面—擬縄文(巻貝)。	
583		縄文土器	深鉢	—	—	(500)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—沈線1条。結節縄文(LR)。	
584		縄文土器	深鉢	—	—	(770)	黒褐色(2.5Y 3・2)	外面—巻貝による凹線と刺突。結節縄文。内面—ミガキ。	
585		縄文土器	浅鉢	—	—	(370)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—凹線文。縄文(RL)。	
586		縄文土器	深鉢	—	—	(510)	黒褐色(10Y R 3・2)	外面—縄文(LR)。	
587		縄文土器	深鉢	—	—	(480)	黒色(2.5Y 2・1)	外面—縄文(LR)。	
588		縄文土器	深鉢	—	—	(520)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—垂下条線。	
589		縄文土器	深鉢	—	—	(770)	黒褐色(10Y R 2・2)	外面—突帯文。内面—ミガキ。	
590		縄文土器	深鉢	—	—	(530)	明赤褐色(5Y R 5・6)	外面—突帯文。内面—ミガキ。	
591		縄文土器	深鉢	—	—	(500)	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面—突帯文。	
592		縄文土器	深鉢	—	—	(550)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—突帯文。	
593		縄文土器	深鉢	(3010)	—	—	灰褐色(7.5Y R 5・2)	外面—スス附着。	
594		縄文土器	深鉢	3600	—	(1310)	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	口縁部の内・外面にスス附着。	
595		縄文土器	深鉢	(2340)	—	(370)	黒褐色(10Y R 3・1)	波状口縁。	
596		縄文土器	浅鉢	(3840)	—	(860)	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	内・外面—ミガキ。スス附着。	
597		縄文土器	浅鉢	(2880)	—	(630)	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	内・外面—ミガキ。内面器表に(赤橙10R 6・6)附着。	
598		縄文土器	深鉢	—	(610)	(160)	鈍橙色(5Y R 6・4)	外面—条痕後ナデ。	
599		縄文土器	深鉢	—	56~58	(780)	鈍黄橙色(10Y R 6・3)	外面—条痕後ナデ。	
600		縄文土器	深鉢	—	—	(430)	橙色(7.5Y R 6・6)	内・外面—ナデ。	
601		縄文土器	深鉢	(3480)	—	(430)	鈍黄橙色(10Y R 7・2)	内・外面—条痕後ナデ。穿孔1ヶ所。	
602		縄文土器	深鉢	1780	—	(620)	鈍橙色(7.5Y R 6・4)	外面—条痕後ナデ。	
603		縄文土器	深鉢	(3910)	—	(1510)	灰黄色(2.5Y 6・2)	外面—二枚貝条痕後ナデ。スス附着。	
604		縄文土器	深鉢	—	—	(860)	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面—貝殻条痕。	
605		縄文土器	深鉢	(1460)	—	(1070)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—ミガキ。	
606	縄文土器	深鉢	(3660)	—	(1470)	橙色(7.5Y R 6・6)	外面—条痕後ナデ。		
607	縄文土器	浅鉢	(2900)	—	(590)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—口縁部沈線3条。	水銀朱	
608	縄文土器	浅鉢	(2460)	—	(650)	鈍黄色(2.5Y 6・4)	内・外面—ミガキ。		



土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法的特徴など	備考	
				口径	底径	器高				
609	C地区包含層	縄文土器	浅鉢	—	—	(370)	橙色(7.5Y R 7・6)	内面—ミガキ。		
610		縄文土器	深鉢	—	—	(550)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	内・外面—条痕後ナデ。		
611		縄文土器	深鉢	(2300)	—	(460)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内・外面—条痕後ナデ。		
612		縄文土器	鉢	(148~145)	—	(590)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	表面器表全体に線刻模様。		
613		縄文土器	鉢	(1370)	—	(1000)	灰黄色(2.5Y 7・2)	内・外面—ミガキ。内面—黒斑。		
614		縄文土器	深鉢	—	(490)	(550)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—条痕後ナデ。内面—スス付着。		
615		縄文土器	深鉢	—	58~60	(400)	鈍黄色(2.5Y 6・3)	内面—スス付着。		
616		縄文土器	深鉢	—	66~69	(180)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	断面—スス付着。		
617		縄文土器	深鉢	—	70~72	(350)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—条痕後ナデ。内面—黒斑。		
618		縄文土器	深鉢	—	—	(470)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面—ミガキ。黒斑。		
619		縄文土器	鉢	(224~216)	—	(46~53)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—沈線文。		
620		縄文土器	浅鉢	—	—	(300)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—沈線文。		
621		縄文土器	浅鉢	—	—	(190)	黒褐色(5 Y R 3・1)	外面—沈線文。内・外面器表に赤彩。	水銀朱	
622		縄文土器	浅鉢	—	—	(350)	黒色(5 Y 2・1)	内面—ミガキ。外面—スス付着。		
623		縄文土器	浅鉢	(3100)	—	(83~85)	黒色(7.5Y R 17・1)	内・外面—ミガキ。		
624		縄文土器	鉢	—	—	(510)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—沈線文。		
625		縄文土器	鉢	—	—	(490)	灰褐色(7.5Y R 5・2)	外面—沈線文。		
626		縄文土器	鉢	—	—	(410)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—沈線文。		
627		縄文土器	鉢	—	—	(390)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—沈線文。		
628		縄文土器	鉢	—	—	(340)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—沈線文。		
629		縄文土器	鉢	(1200)	—	(390)	灰黄色(2.5Y 6・2)	外面—沈線文。		
630		縄文土器	浅鉢	(1460)	—	(1070)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—ミガキ。		
631		D地区包含層	縄文土器	深鉢	318~336	—	146~152	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	縄文(L R)後沈線。波状口縁。	
632			縄文土器	深鉢	(3540)	—	(1050)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—突帯文。刻み目。二枚貝条痕。	
633			縄文土器	深鉢	—	—	(460)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面—条痕。口縁部刻み目。	
634			縄文土器	深鉢	—	—	(470)	明赤褐色(5 Y R 5・6)	外面—口縁部刻み目。	
635			縄文土器	深鉢	—	—	(570)	黒褐色(2.5Y 3・1)	内・外面—条痕後ナデ。	
636			縄文土器	深鉢	—	—	(750)	黒褐色(2.5Y 3・1)	内・外面—条痕後ナデ。	
637			縄文土器	深鉢	—	—	(450)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—口縁部刻み目。縄文(R L)。	
638			縄文土器	深鉢	2560	—	113~123	浅黄色(2.5Y 7・3)	外面—条痕。内面—条痕後ナデ。	
639	縄文土器		浅鉢	(3740)	—	(65~72)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—ミガキ。突起が1か所残。		
640	縄文土器		浅鉢	—	—	(390)	橙色(5 Y R 6・6)	内・外面—ミガキ。		
641	縄文土器		浅鉢	—	—	(390)	明黄褐色(10Y R 6・6)	内・外面—ミガキ。		
642	縄文土器		浅鉢	—	—	(270)	黒褐色(2.5Y 3・1)	内・外面—ミガキ。		
643	縄文土器		浅鉢	—	—	(480)	鈍黄色(2.5Y 6・4)	内面—ミガキ。		
644	縄文土器		浅鉢	—	—	(530)	黄灰色(2.5Y 4・1)	内・外面—ミガキ。		
645	縄文土器		浅鉢	—	—	(460)	黒褐色(2.5Y 3・1)	外面—条痕後ナデ。刺突4か所(赤色顔料で穴を塗られている。)		
646	縄文土器		浅鉢	(2220)	—	(710)	黒褐色(7.5Y R 3・1)	内・外面—ミガキ。外面—沈線文。		
647	縄文土器		浅鉢	—	—	(580)	黒褐色(2.5Y 3・2)	外面—ミガキ。		
648	縄文土器		浅鉢	—	—	(500)	黄褐色(2.5Y 5・3)	外面—凹線7条。		
649	縄文土器		浅鉢	—	—	(460)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面—凹線4条。刻み目。内面—凹線2条。ミガキ。		
650	縄文土器		浅鉢	—	—	(480)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—凹線8条。黒斑。波状口縁。		
651	縄文土器		浅鉢	(3260)	—	(620)	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—凹線5条。内面—ミガキ。		
652	縄文土器		浅鉢	—	—	(49~58)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—凹線文と刺突文。		
653	縄文土器		浅鉢	—	—	(380)	鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面—沈線文		
654	縄文土器		浅鉢	—	—	(560)	黒褐色(2.5Y 3・1)	外面—凹線の間に細い刻み目。		
655	縄文土器		浅鉢	—	—	(470)	黒褐色(2.5Y 3・1)	外面—沈線文		
656	縄文土器		浅鉢	—	—	(340)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—沈線文。		
657	縄文土器		浅鉢	—	—	(700)	黒褐色(2.5Y 3・1)	内・外面—条痕後ミガキ。		
658	縄文土器		深鉢	—	580	(430)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—条痕後ナデ。		
659	縄文土器		深鉢	—	(640)	(490)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面—条痕。内面—ナデ。		
660	縄文土器		深鉢	—	580	(560)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—条痕後ナデ。内面—ナデ。		
661	F地区包含層	縄文土器	深鉢	—	—	(430)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—縄文。内面—ナデ。		
662		縄文土器	深鉢	—	—	(250)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—縄文。内面—ミガキ。		
663		縄文土器	深鉢	—	—	(370)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—縄文後ヘラガキの線刻。竹管文。		
664		縄文土器	深鉢	—	—	(520)	黒褐色(10Y R 3・1)	内・外面—条痕。		
665		縄文土器	深鉢	—	—	(540)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—ナデ。		
666		縄文土器	深鉢	—	—	(490)	灰黄色(2.5Y 6・2)	外面—貝殻条痕。口縁部黒斑。		
667		縄文土器	深鉢	—	—	(730)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—ミガキ。		
668		縄文土器	深鉢	—	—	(36~41)	灰色(5 Y 4・1)	内・外面—条痕。		
669		縄文土器	深鉢	—	—	(480)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—刻み目。二枚貝条痕。		
670		縄文土器	深鉢	—	—	(450)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—条痕。内面—ナデ。		
671		縄文土器	深鉢	—	—	(870)	褐灰色(7.5Y R 4・1)	外面—条痕後ナデ。刺突文。口縁部刻み目。		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
672	F地区包含層	縄文土器	深鉢	—	—	(390)	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—貼付突帯。刻み目。	
673		縄文土器	深鉢	—	—	(360)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—貼付突帯。刻み目。	
674		縄文土器	深鉢	—	—	(495)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—貼付突帯。刻み目。	
675		縄文土器	深鉢	—	—	(270)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—貼付突帯。刻み目。	
676		縄文土器	深鉢	—	—	(470)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—貼付突帯。刻み目。	
677		縄文土器	浅鉢	—	—	(360)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	内・外面—二枚貝条痕後ナデ。	
678		縄文土器	浅鉢	—	—	(380)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—粘土貼付。	
679		縄文土器	浅鉢	—	—	(30~35)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—条痕。	
680		縄文土器	浅鉢	—	—	(53~57)	黒褐色(2.5Y 3・1)	内・外面—ミガキ。	
681		縄文土器	浅鉢	—	—	(400)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—貝殻条痕。	
682		縄文土器	浅鉢	—	—	(370)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—条痕。	
683		縄文土器	浅鉢	—	—	(690)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—条痕。内面—ミガキ。	
684		縄文土器	浅鉢	—	—	(390)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—沈線文。口縁端部刻み目。	
685		縄文土器	浅鉢	—	—	(840)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内面—ナデ。ミガキ。	
686		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—凹線文。条痕。内面—条痕。	津雲A
687		縄文土器	浅鉢	—	—	—	黒褐色(10Y R 3・1)	外面—凹線2条。内面—凹線上に刺突(貫通せず)。	宮滝式
688		縄文土器	深鉢	—	—	—	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—縄文(LR)。スス付着。	
689		縄文土器	浅鉢	(34・10)	—	—	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—凹線。内面—条痕。	宮滝I
690		縄文土器	浅鉢	(2460)	—	—	黒褐色(2.5Y 3・1)	内面—赤色顔料塗布。	滋賀里I・II
691		縄文土器	鉢	(148~164)	(140)	(88~90)	黒褐色(2.5Y 3・2)	外面—口縁部の一部に受け口。	晩期
692		縄文土器	深鉢	(4120)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—貝殻条痕。口唇部刻み目。黒斑。内面—貝殻条痕。	
693		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—沈線文。	緑帯文土器、津雲A?
694		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	口唇部沈線3条。	緑帯文土器、津雲A?
695		縄文土器	深鉢	(34・10)	—	(650)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—貝殻条痕。	
696		縄文土器	深鉢	(3640)	—	(550)	暗黄褐色(2.5Y 4・2)	内・外面—貝殻条痕後ナデ。	
697		縄文土器	深鉢	3200	—	(21・10)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)~灰白色(10Y R 8・2)	外面—二枚貝条痕。	
698		縄文土器	鉢	20・15	—	1420	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	内・外面—ミガキ。	
699		縄文土器	深鉢	—	(760)	—	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	内・外面—ナデ	
700		縄文土器	深鉢	—	8・10	(760)	浅黄褐色(2.5Y 7・3)	内・外面—ナデ	
701		縄文土器	深鉢	—	545	(1440)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—縄文(RL)。貝殻条痕	
702	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—沈線内に縄文(LR)。ミガキ。内面—ミガキ。	滋賀里I	
703	縄文土器	深鉢	(2300)	—	—	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	内・外面—ミガキ。		
704	縄文土器	深鉢	(3670)	—	(1390)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—二枚貝条痕。	晩期	
705	縄文土器	深鉢	(3780)	—	(940)	鈍黄褐色(10Y R 5・4)	口縁部刻み目。		
706	縄文土器	深鉢	(3880)	—	(540)	灰褐色(10Y R 4・1)	外面—口縁端部刻み目。貝殻条痕。		
707	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—沈線2条	晩期前葉	
708	縄文土器	深鉢	—	—	(375)	灰黄褐色(2.5Y 7・2)	外面—沈線2条		
709	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—二枚貝条痕。口唇部刻み目。		
710	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—二枚貝条痕。口唇部刻み目。		
711	縄文土器	鉢	(2260)	—	(540)	黒褐色(10Y R 3・2)黒褐色(5Y R 2・2)	外面—沈線文。赤色顔料塗布。	滋賀里II	
712	縄文土器	鉢	—	—	—	暗黄褐色(2.5Y 5・2)	外面—沈線文。	滋賀里I・II?	
713	縄文土器	鉢	—	—	(220)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—沈線文(沈線内一部赤色顔料塗布)。		
714	縄文土器	鉢	(3100)	—	(380)	黒褐色(2.5Y 3・1)	内・外面—ミガキ。	晩期	
715	縄文土器	壺	(820)	—	—	褐灰色(10Y R 4・1)	外面—ミガキ。沈線内刻み目。	晩期初頭	
716	縄文土器	深鉢	—	(500)	(190)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—ミガキ。		
717	縄文土器	浅鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—磨消縄文(RL)。	福田KII	
718	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—磨消縄文(RL)。	後期前~中葉	
719	縄文土器	深鉢	—	—	(400)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	口唇部沈線文。		
720	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—磨消縄文(RL)。	後期~後葉	
721	縄文土器	深鉢	—	—	—	褐色(7.5Y R 7・6)	外面—磨消縄文(RL)。	中津I・II?	
722	縄文土器	深鉢	2330	—	(350)	明黄褐色(10Y R 7・6)	外面—口縁端部沈線1条。		
723	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—縄文(RL)。赤色顔料一部塗布。内面—ミガキ。		
724	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—縄文(LR)。内面—結節縄文。沈線。ミガキ。	彦崎KII	
725	縄文土器	深鉢	—	—	—	浅黄褐色(2.5Y 7・3)	外面—縄文(RL)。	彦崎KII	
726	縄文土器	深鉢	(2780)	—	(510)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内面—縄文(LR)。	彦崎KII	
727	縄文土器	深鉢	(3630)	—	(850)	灰黄褐色(10Y 5・2)	内面—縄文(LR)。ミガキ。	彦崎KII	
728	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(2.5Y 6・3)	外面—二枚貝条痕。縄文。		
729	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(2.5Y 6・3)	外面—縄文(RL)。貝殻条痕。内面—貝殻条痕。	後期~後葉、彦崎KII?	
730	縄文土器	深鉢	(4180)	—	(660)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)黒褐色(10Y R 3・1)	外面—口縁端部縄文(RL)。	元住吉山I	
731	縄文土器	深鉢	(4480)	—	(820)	褐色(7.5Y R 6・6)鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—縄文(RL)。凹線3条。	元住吉山I	
732	縄文土器	深鉢	—	—	(740)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—縄文(LR)。内面—貝殻条痕。		
733	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰黄褐色(2.5Y 6・2)	外面—縄文(RL)。	後期中	

G地区包含層

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
734	G地区包含層	縄文土器	深鉢	—	—	(280)	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	外面—縄文(LR)。	
735		縄文土器	深鉢	—	—	(290)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—縄文(LR)。	
736		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 5・4)	外面—沈線文。刻み目。	彦崎K II
737		縄文土器	深鉢	—	—	—	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面—刻み目。凹線。	彦崎K II
738		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—沈線文。内面—貝殻条痕。	後期中葉、彦崎K I?
739		縄文土器	深鉢	—	—	(380)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—縄文(RL)。	
740		縄文土器	深鉢	—	—	(280)	鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面—縄文(LR)。擬羽状縄文。	
741		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 6・3)	外面—縄文(RL)。	
742		縄文土器	深鉢	—	—	—	黄灰色(2.5Y 5・1)	外面—縄文(LR)。	彦崎K I?
743		縄文土器	深鉢	—	—	(680)	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—縄文(RL)。	
744		縄文土器	注口土器	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	外面—黒斑。	
745		縄文土器	注口土器	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7・2)		
746		縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—黒斑。スス付着。	
747		縄文土器	浅鉢	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	外面—縄文(LR)。	彦崎K II
748		縄文土器	浅鉢	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7・2)	外面—縄文(LR)。	彦崎K I
749	縄文土器	深鉢	—	3.55	(780)	淡黄色(2.5Y 8・3)	外面—貝殻条痕。内面—黒斑。		
750	H地区包含層	縄文土器	深鉢	(22.60)	—	(208~22.6)	オリーブ黒色(5Y 3・2)	外面—磨消縄文(RL)。内面—ミガキ。	中津 I
751		縄文土器	深鉢	—	—	(370)	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	外面—沈線文。	
752		縄文土器	深鉢	—	—	(5.10)	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面—沈線文。	
753		縄文土器	浅鉢	—	—	(4.05)	鈍黄橙色(10Y R 6・3)	外面—条痕。巻貝凹線3条。内面—条痕。	宮瀧 I
754		縄文土器	深鉢	—	—	(5.00)	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面—沈線文。	縁帯文土器、津雲A?
755		縄文土器	深鉢	—	—	(5.30)	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	外面—縄文(RL)。	
756		縄文土器	深鉢	—	—	(4.00)	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	外面—縄文(LR)。	
757		縄文土器	深鉢	—	—	(7.60)	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面—沈線文。	津雲A併行・山陰的
758		縄文土器	深鉢	—	—	(4.50)	褐灰色(10Y R 4・1)	内・外面—ナデ。	
759		縄文土器	鉢	—	5.80	(2.10)	浅黄色(2.5Y 7・3)	内・外面—ナデ。	
760		縄文土器	注口土器	2.10	—	—	鈍黄橙色(10Y R 6・3)	外面—ミガキ	
761		縄文土器	深鉢	—	—	(2.10)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—突帯文。	
762		縄文土器	深鉢	—	—	(5.00)	鈍黄橙色(10Y R 6・3)	外面—突帯文。	
763		縄文土器	深鉢	—	—	(2.80)	浅黄色(2.5Y 7・4)	外面—突帯文。	
764		縄文土器	深鉢	—	—	(4.00)	浅黄色(2.5Y 7・3)	外面—条痕。口唇部指による刺突。	
765		縄文土器	深鉢	—	—	(3.70)	鈍橙色(7.5Y R 6・4)	内・外面—ミガキ。	
766		縄文土器	深鉢	—	—	(4.70)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	内面—口縁部下沈線1条。ミガキ。	
767		縄文土器	深鉢	(23.20)	—	(3.90)	黒褐色(2.5Y 3・2)	内面—条痕。	
768		縄文土器	深鉢	—	—	(4.35)	鈍黄色(2.5Y 6・4)	外面—沈線。	
769		縄文土器	深鉢	—	—	(5.20)	浅黄色(2.5Y 7・3)	外面—巻き貝による凹線。条痕。	
770		縄文土器	深鉢	—	—	(6.90)	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	外面—沈線。	
771		縄文土器	深鉢	—	—	(3.00)	灰黄色(2.5Y 6・2)	外面—沈線文。	滋賀里
772		縄文土器	深鉢	—	—	(2.50)	鈍橙色(7.7Y R 6・4)	外面—沈線文。ミガキ。内面—ミガキ。	
773		縄文土器	深鉢	—	—	(3.20)	浅黄褐色(10Y R 8・4)	外面—凹線。	
774		縄文土器	深鉢	—	—	(4.70)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—沈線文。	滋賀里 I・II
775		縄文土器	深鉢	—	—	(4.60)	鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面—沈線文。	
776		縄文土器	深鉢	—	—	(3.80)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—沈線。巻き貝の圧痕。	滋賀里
777		縄文土器	深鉢	—	—	(4.70)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—沈線文。ミガキ。	
778		縄文土器	深鉢	—	—	(4.00)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—沈線。竹管文。ミガキ。	
779		縄文土器	深鉢	—	—	(5.60)	浅黄色(2.5Y 7・4)	外面—巻き貝の圧痕。	
780		縄文土器	深鉢	—	—	(8.20)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—沈線文。	滋賀里段階
781		縄文土器	深鉢	—	—	(5.40)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面—縄文(RL)。	彦崎K II
782		縄文土器	深鉢	—	—	(10.00)	鈍黄色(2.5Y 6・3)暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面—縄文(LR)。条痕後ナデ。内面—条痕後ナデ。	彦崎K II
783		縄文土器	深鉢	(38.90)	—	(7.90)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—巻き貝条痕。	
784	縄文土器	深鉢	(37.60)	—	(15.30)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—条痕。内面—条痕後ナデ。		
785	縄文土器	深鉢	(32.20)	—	(14.20)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—ミガキ。		
786	縄文土器	深鉢	—	—	(5.30)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—条痕。		
787	縄文土器	深鉢	—	—	(4.60)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—条痕。内面—ナデ。		
788	縄文土器	深鉢	—	—	(8.00)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—条痕。内面—ナデ。		
789	縄文土器	深鉢	—	—	(3.00)	にふい黄色(2.5Y 6・3)	外面—沈線。		
790	縄文土器	深鉢	—	—	(3.40)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面—条痕。内面—ナデ。		
791	縄文土器	深鉢	—	—	(5.50)	浅黄色(2.5Y 7・3)	内・外面—条痕。		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
792	H地区包含層	縄文土器	深鉢	32.80	—	(12.80)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一条痕後ナデ。内面一ナデ。	
793		縄文土器	深鉢	—	—	(16.70)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面一条痕。内面一ナデ。	
794		縄文土器	深鉢	—	—	(5.7~7.1)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面二枚貝条痕後ナデ。内面一ナデ。	
795		縄文土器	深鉢	—	—	(7.50)	鈍褐色(7.5Y R 5・3)	外面一条痕。内面一ナデ。	
796		縄文土器	深鉢	—	—	(3.90)	暗灰黄色(2.5Y 5・2)	外面一条痕。内面一ナデ。	
797		縄文土器	深鉢	—	—	(5.50)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一条痕後ナデ。内面一ナデ。	
798		縄文土器	深鉢	—	—	(5.50)	浅黄色(2.5Y 7・3)	内・外面一ミガキ。	
799		縄文土器	深鉢	—	—	(3.70)	黒褐色(2.5Y 3・2)	外面一条痕後ミガキ。内面一ミガキ。	
800		縄文土器	深鉢	—	—	(6.10)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一ミガキ。内面一ナデ。	
801		縄文土器	深鉢	—	—	(5.00)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面一条痕後ナデ。内面一ナデ。	
802		縄文土器	深鉢	—	—	(4.95)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面一ナデ。	滋賀里 I・II
803		縄文土器	深鉢	—	—	(4.50)	浅黄褐色(10Y R 8・3)	内・外面一ナデ。	
804		縄文土器	浅鉢	—	—	(1.80)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面一ナデ。内面一条痕後ナデ。	
805		縄文土器	浅鉢	—	—	(3.30)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内・外面一ミガキ。	
806		縄文土器	浅鉢	—	—	(3.30)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面一ナデ・ミガキ。内面一ナデ。	
807		縄文土器	浅鉢	—	—	(2.80)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面一ミガキ。	
808		縄文土器	浅鉢	—	—	(3.30)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一ミガキ。内面一ナデ。	
809		縄文土器	浅鉢	—	—	(1.70)	黒褐色(2.5Y 3・2)	内・外面一ミガキ。	
810		縄文土器	浅鉢	—	—	(3.30)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内・外面一ミガキ。	
811		縄文土器	浅鉢	—	—	(1.80)	黒褐色(2.5Y 3・2)	内・外面一ミガキ。	
812		縄文土器	浅鉢	—	—	(2.10)	黄灰色(2.5Y 5・1)	外面一ナデ。内面一ミガキ。	
813		縄文土器	浅鉢	—	—	(2.80)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一沈線3条。内面一ミガキ。	
814		縄文土器	浅鉢	—	—	(2.60)	浅黄色(2.5Y 7・3)	外面一沈線2条。ミガキ。内面一ミガキ。	
815		縄文土器	浅鉢	—	—	(3.00)	黄灰色(2.5Y 4・1)	外面一凹線3条。ミガキ。内面一ミガキ。	
816		縄文土器	浅鉢	—	—	(4.75)	鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面一沈線3条。	
817		縄文土器	浅鉢	—	—	(5.40)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一沈線1条。	
818		縄文土器	浅鉢	—	—	(3.70)	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一沈線2条。ミガキ。内面一ミガキ。	
819		縄文土器	注口土器	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面一ナデ。	
820		縄文土器	注口土器	2.20	—	—	鈍黄色(2.5Y 6・3)	内・外面一ナデ。	
821	縄文土器	浅鉢	(13.60)	—	(8.00)	鈍黄褐色(10Y R 5・4)	外面一凹線部下沈線3条。胴部逆M字形文様。ミガキ。		
822	縄文土器	壺	(15.20)	—	(12.90)	黄灰色(2.5Y 4・1)	内・外面一ミガキ。		
823	縄文土器	深鉢	—	5.60	(3.60)	浅黄色(2.5Y 7・3)			
824	縄文土器	深鉢	—	6.40	(2.50)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一条痕。内面一ナデ。		
825	縄文土器	深鉢	(24.40)	—	(8.70)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一凹線部刻み目。条痕。貼付突帯。爪形文。内面一ナデ。		
826	縄文土器	深鉢	(26.20)	—	(12.40)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一凹線部刻み目。貼付突帯。条痕。		
827	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰白色(2.5Y 7・1)	外面二枚貝条痕。貼付突帯。		
828	縄文土器	深鉢	—	—	(9.30)	褐色(10Y R 4・1)	外面一凹線部刻み目。		
829	縄文土器	深鉢	(36.00)	—	(20.00)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面一凹線部刻み目。条痕の擦痕。		
830	縄文土器	深鉢	—	—	(6.20)	灰黄色(2.5Y 7・2)	外面一凹線部刻み目。爪形文。		
831	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面二枚貝条痕。口唇部刻み目。		
832	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面二枚貝条痕。口唇部刻み目。		
833	縄文土器	深鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面二枚貝条痕。口唇部刻み目。		
834	縄文土器	深鉢	—	—	(7.10)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面一凹線部刻み目。条痕。内面一条痕。		
835	縄文土器	深鉢	—	—	(7.4~7.7)	灰黄色(2.5Y 6・2)	外面一条痕後ナデ。スス痕。		
836	縄文土器	深鉢	—	—	(5.70)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)~黒褐色(3・1)	外面一凹線部刻み目。条痕。内面一条痕後ナデ。		
837	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰黄色(2.5Y 6・2)	外面二枚貝条痕。口唇部刻み目。内面二枚貝条痕。		
838	縄文土器	浅鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内面一ミガキ。		
839	縄文土器	浅鉢	—	—	(4.00)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面一沈線5条。刻み目(?)。内面一凹線。		
840	縄文土器	浅鉢	—	—	—	灰黄褐色(10Y R 4・2)	外面一ミガキ。		
841	縄文土器	鉢	—	—	(4.25)	褐色(10Y R 4・1)	内・外面一ミガキ。		
842	縄文土器	壺	(13.80)	—	(5.70)	黒色(2.5Y 2・1)	内・外面一ミガキ。		
843	縄文土器	浅鉢	(41.00)	—	(8.10)	黒褐色(2.5Y 3・2)	内・外面一条痕後ミガキ		
844	縄文土器	深鉢	—	—	(3.40)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面一凹線。縄文(L R)。		
845	縄文土器	注口土器	—	—	(3.80)	黒色(2.5Y 2・1)	外面一ミガキ。		
846	竪穴住居 2	弥生土器	壺	(13.00)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一凹線3条。櫛形平行文7条。櫛形波状文6条。口縁部に一対の穴。	
847		弥生土器	甕	15.65	5.65	29.60	鈍褐色(5 Y R 7・4)	外面一タタキのちハケ、口縁・底・胴部にスス。内外面全体に黒斑。内面一ケズリ。	
848		弥生土器	甕	(26.40)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外) ヨコナデ 沈線 条 ハケメ 外面スス付着黒斑あり 内) ハケメ ナデ	

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
849	竪穴住居2	弥生土器	壺	(22・40)	—	—	橙色(7.5YR 6.6)	外面—凹線2条、外面の口縁部に込、全体に黒斑、内面全体に黒斑僅かに込。	
850		弥生土器	長頸壺	700	—	590	鈍黄褐色(2.5Y 6.3)	外面—擬凹線1条、沈線9条、黒斑。	
851		弥生土器	器台	—	—	200	鈍黄褐色(10YR 5.3)	外面—口縁端部に擬凹線2条。	
852	竪穴住居3	弥生土器	甕	13・40	—	570	橙色(5YR 6.6)	外面煤付着。	
853		弥生土器	壺OR甕	—	(6・50)	(1400)	鈍橙色(5YR 7.4~7.6)	外面—ミガキ・ハケ、底部ミガキ。煤付着。内面—煤付着。化粧土剥落?	
854	竪穴住居4	弥生土器	壺	17・10	6・90	39・10	鈍黄褐色(10YR 6.3)	外面—口縁端部に凹線5条と刻み目・黒斑。内面—ヨコ方向ケズリ・工具ナデ。	
855		弥生土器	甕	(12・60)	—	280	橙色(5YR 6.6)	外面—口縁端部に擬凹線。煤付着。	
856		弥生土器	甕	—	—	140	橙色(7.5YR 6.6)	外面—口縁端部に擬凹線2条。	
857		弥生土器	壺・甕	(17・80)	—	(11・90)	灰黄褐色(10YR 5.2)	外面—口縁端部に沈線5条・浮紋4個1組・凹線(4条・6条)・刻み目。	
858	竪穴住居5	弥生土器	壺	(16・70)	—	(27・40)	鈍橙色(7.5YR 7.4)	外面—口縁端部に凹線3条・円形浮紋6個残・格子目文・凹線4条。底部近くに黒斑。	
859		弥生土器	甕	(12・60)	—	(4・80)	鈍黄褐色(10YR 7.3)	外面—口縁端部に沈線3条。スス付着。	
860		弥生土器	甕	(13・00)	—	(1・10)	灰黄褐色(10YR 4.2)	外面—口縁端部に凹線2条。	
861		弥生土器	甕	(12・20)	(3・30)	(20・80)	灰黄色(2.5Y 6.2)	外面—スス付着。内面—ケズリ。	
862	竪穴住居6	弥生土器	甕	(11・60)	—	(8・80)	鈍赤褐色(5YR 5.4)	外面—ハケ(7本・cm)・口縁・胴部にスス。	
863	竪穴住居7	弥生土器	壺	(17・40)	—	(14・00)	鈍橙色(7.5YR 6.4)	外面—浮紋7個残・沈線4条・凹線(7条・6~7条)・ハケ(4本・cm)・スス。	
864		弥生土器	甕	(14・60)	—	(2・80)	灰黄褐色(10YR 5.2)	外面—ハケ(10本・cm)。	
865		弥生土器	器台	—	(21・30)	(10・10)	褐灰色(5YR 4.1)	外面—凹線5条・ハケ(5~8本・cm)。	
866		弥生土器	甕	(13・80)	—	(4・10)	鈍褐色(7.5YR 5.3)	外面—口縁端部に凹線3条。内面—ナデ。	
867	竪穴住居9	弥生土器	高杯	—	(11・70)	(7・60)	鈍黄褐色(10YR 7.4)	外面—ハケ(10~11本・cm)・穿孔3か所(本来6個)・凹線4条。黒斑。	
868		弥生土器	高杯	—	(10・80)	(4・90)	橙色(5YR 7.6)	外面—ハケ(10~11本・cm)・穿孔1か所(実際は6個)。	
869		弥生土器	器台	(14・00)	—	(9・00)	鈍黄褐色(10YR 7.4)	外面—赤色顔料(明赤褐色2.5YR 5.6)付着。	
870		弥生土器	壺	(12・80)	—	(5・80)	鈍黄褐色(10YR 7.3)	外面—口縁端部に凹線3条・ハケメ(4本前後・cm)・凹線5条・刺突文。	
871		弥生土器	甕	(20・20)	—	(5・00)	鈍橙色(7.5YR 6.4)	外面—口縁端部の凹線4条・波状文・櫛描き直線文。内面—ハケ(9~10本・cm)。	
872		弥生土器	甕	(17・60)	—	(7・30)	鈍褐色(10YR 6.4)	外面—口縁端部に凹線4条・ヨコナデ・ナデ。スス付着。内面—ヨコナデ・ナデ。	
873		弥生土器	甕	(12・00)	—	(12・20)	鈍褐色(7.5YR 7.4)	外面—口縁端部に凹線2条・ハケメとミガキの痕跡。スス。	
874		弥生土器	甕	(12・20)	—	(5・95)	灰褐色(7.5YR 5.2)	外面—口縁端部の凹線2条・ハケ(7本・cm)。	
875	竪穴住居12	弥生土器	甕	(11・60)	—	(12・40)	橙色(2.5YR 6.6)	外面—口縁端部に凹線2条・ハケ(6~7本・cm)・ミガキ(工具幅25mm)。内面—ハケメ(6~7本・cm)。	
876		弥生土器	甕	(13・80)	—	(12・40)	明黄褐色(10YR 6.6)	外面—口縁端部に凹線2条・ハケ(7本・cm)。黒斑。	
877		弥生土器	壺	—	(6・20)	(6・60)	鈍褐色(7.5YR 7.4)	外面—ミガキ(工具幅25mm)。内面—ハケ(7~8本・cm)・押圧痕あり。	
878		弥生土器	甕	—	8・20	(5・00)	鈍黄褐色(10YR 5.4)	外面—ミガキ(工具幅は5mm程)・底部ハケ(4~5本・cm)後ナデ。内面—炭化物残。	
879		弥生土器	高杯	(22・40)	—	(13・90)	橙色(5YR 6.6)	外面—口縁端部に凹線4条・ミガキ(工具幅は3mm程)・内面—ハケ(7~8本・cm)後ミガキ(工具幅は3mm前後)。	
880		弥生土器	器台	(27・80)	—	(2・60)	鈍褐色(7.5YR 6.4)	外面—口縁端部に凹線2条と沈線による紋様・ミガキ(工具の幅は25mm程度)。内面—ナデ(押圧)。	
881	竪穴住居13	弥生土器	壺	—	—	(10・80)	黒褐色(10YR 3.2)	外面—格子目と凹線5条(2か所)・刻み目・ハケ。内面—荒いハケ・押圧。	
882		弥生土器	甕	(13・20)	—	(8・00)	鈍褐色(2.5YR 6.3)	外面—口縁端部に凹線3条・頸部にスス?ハケメ。内面—ハケ後軽い押圧。	
883		弥生土器	甕	(15・80)	—	(9・20)	黒色(2.5Y 2.1)	外面—口縁端部に凹線3条。	
884		弥生土器	甕	(14・70)	—	(4・20)	鈍黄褐色(2.5Y 6.3)	外面—ミガキ・スス?内面—ハケメ・ナデ。	
885		弥生土器	高杯	21・20	—	(13・60)	灰褐色(7.5YR 4.2)	外面—凹線2条・ミガキ・沈線4条・タデに沈線(1か所4条、2か所3条)。口縁部~脚部部にかけてスス。内面—ミガキ・円盤充填。	
886		弥生土器	高杯	21・00	—	(6・10)	鈍黄褐色(10YR 6.4)	外面—凹線6条・ミガキ。	
887		弥生土器	台付鉢	—	—	(6・60)	鈍黄褐色(10YR 6.3)	外面—ハケメ後ナデ・ケズリ。内面—ナデ・円盤充填。	
888	土壇56	弥生土器	甕	—	—	(4・50)	褐灰色(10YR 4.1)	内・外面—ヨコ方向のナデ・ハケメ。	
889	土壇58・59	弥生土器	把手	—	—	—	橙色(5YR 6.6)		
890		弥生土器	壺	(14・80)	—	(2・70)	橙色(7.5YR 6.8)	外面—口縁端部に凹線3条・波状紋・刻み目・円形浮文。	
891	土壇61	弥生土器	甕	(17・00)	—	(3・30)	橙色(5YR 6.6)	外面—ナデ。内面—ナデ・ハケメ。	
892		弥生土器	甕	(17・60)	—	(1・30)	褐色(7.5YR 4.3)	外面—口縁端部に凹線2条・ナデ。内面—ナデ。	
893	土壇62	弥生土器	壺	—	—	—	鈍黄褐色(2.5Y 7.2)	外面—口縁端部に櫛描き原体による刻み目。内面—波状紋と円形浮紋(残2個)。	
894	土壇69	弥生土器	壺	20・90	—	(9・80)	鈍褐色(5YR 6.4)	外面—口縁部に凹線4条・円形浮文・刻み目・ハケ(6条・cm)・凹線。煤付着。内面—口縁部に2条一對の斜格子文。煤付着。	
895	土壇70	弥生土器	壺	18・40	—	(12・90)	鈍褐色(7.5YR 6.4)	外面—口縁端部に板状工具刻み目文・斜格子文・櫛描波状文・凹線4条~5条。黒斑。内面—ヨコナデ・ハケ(6条・cm)。	
896		弥生土器	壺	—	—	(1・65)	鈍黄褐色(10YR 5.3)	外面—口縁端部に刻み目後沈線3条・円形浮文。	
897	土壇71	弥生土器	甕	(15・40)	(6・00)	—	鈍褐色(7.5YR 6.4)	外面—口縁端部に凹線3条・ハケ(6~7条・cm)・ミガキ(タタキ工具痕?)・底部ナデ。煤付着。黒斑。内面—押圧痕(爪型が残り)・指オサエ・ヘラケズリ。煤付着。	

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
898	土壇72	弥生土器	甗	(20)20	—	(31)00	橙色(5YR7・4)	外面—口縁端部に凹線4条・ハケ(工具口25cm、タタキ痕か平坦面をもつ)ハケ後ミガキ。煤付着。内面—タタキ当具痕?後ハケ(板状工具)?指圧痕。	
899	土壇73	弥生土器	甗	—	—	(4)75	橙色(7.5YR6・6)	外面—ハケ(11~12本・cm)。	
900		弥生土器	甗	—	—	—	鈍橙色(5YR6・4)	外面—スス。内面—ハケ(7~8・cm)。	
901		弥生土器	甗	—	(6)00	(7)10	灰黄褐色(10YR5・2)	外面—ミガキ(工具の幅は30mm程)。	
902	土壇74	弥生土器	甗	(17)20	—	(6)40	灰黄色(2.5Y7・2)	外面—ハケ(10本・cm)。内面—ハケ(13~14本・cm)。	
903	土壇75	弥生土器	高杯	(23)00	—	(4)60	鈍黄褐色(10YR7・4)	外面—口縁部にスス?黒斑?	
904	溝13	弥生土器	壺	14)20	—	7)40	鈍橙色(7.5YR5・3)	外面—ミガキ(タテ方向)・沈線6条。	
905		弥生土器	壺	—	(7)20	(33)00	鈍橙色(7.5YR6・4)	外面—ハケ状工具による刺突文3段・ミガキ。スス。内面—ハケ(8条・cm)・押圧痕・ミガキ・下にケズリ・赤色顔料?煤付着。	
906		弥生土器	壺	—	—	3)40	鈍黄褐色(10YR7・4)	外面—擬凹線6条。	
907		弥生土器	壺(把手付)	(10)60	—	(10)90	鈍褐色(7.5YR6・3)	外面—把手が剥離・ハケ状工具による刺突文・ミガキ。内外面とも煤付着。	
908		弥生土器	甗	15)20	5)30	(29)00	鈍橙色(7.5YR6・4)	外面—口縁端部に凹線5~6条・ヨコへ斜めにタタキ?煤付着。内面—押圧痕?後ナデ(タタキあて具か?板状工具ナデか)・下へ上にケズリ後ナデ・指オサエ。煤付着。	
909		弥生土器	甗	18)00	(6)40	36)50	鈍橙色(7.5YR7・4)	外面—口縁端部に凹線3条・ハケ(5条・cm)。煤付着。内面—ハケ(3~4条・14mm)・ケズリ後ナデ(若干押圧痕)。	
910		弥生土器	高杯	(12)00	9)10	15)10	鈍橙色(7.5YR6・4)	外面—穿孔・ヘラ描沈線(5線状)2~3条・透かし孔・凹線3条(2か所)。煤付着。内面—絞り痕。煤付着。	
911		弥生土器	壺	18)60	—	3)50	鈍黄褐色(10YR6・4)	外面—口縁端部に凹線2条と波状文。内面—波状文・沈線5条・円形浮文。	
912		弥生土器	器台	—	14)40	10)00	鈍黄褐色(10YR6・4)	外面—工具ナデ・(ハケ?)・沈線3条・擬凹線1条。内面—シボリ痕。	
913		弥生土器	壺	(14)80	—	(1)70	鈍黄褐色(10YR7・3)	外面—口縁端部に凹線3条。内面—口縁部に波状紋。	
914		弥生土器	壺	(18)60	—	(1)50	鈍黄褐色(10YR7・3)	外面—口縁端部に刻み目。内面—口縁部に波状紋と浮紋1個残。	
915		弥生土器	壺	(16)40	—	(3)40	鈍黄褐色(10YR7・3)	外面—口縁端部に凹線4条。内面—口縁部に波状紋と浮紋2個残。	
916		弥生土器	壺	—	—	(1)70	明褐色(7.5YR5・6)	外面—口縁端部に凹線2条と刻み目。内面—波状紋の後穿孔6個残。	
917		弥生土器	壺	(17)80	—	(6)60	鈍黄褐色(10YR6・3)	外面—口縁端部に凹線3条後刻み目・凹線5条。内面—口縁部に波状紋と浮紋10個残。	
918		弥生土器	壺	(15)20	—	(5)90	灰黄褐色(10YR5・2)	外面—口縁端部に凹線3条後斜めに刻み目。	
919		弥生土器	壺	(12)20	—	(5)30	鈍黄褐色(10YR6・3)	外面—口縁端部に凹線4条。内面—口縁部に波状紋と浮紋2個残。	
920		弥生土器	壺	(11)40	—	(9)40	明赤褐色(5YR5・6)	外面—口縁端部に凹線2条残・凹線6条・波状紋(2か所)。内面—口縁部に波状紋。	
921		弥生土器	壺	(7)30	(5)40	(9)10	鈍橙色(10YR6・3)	外面—ミガキ。内面—指オサエ・ナデ。	
922	弥生土器	壺	16)60	—	(5)50	鈍黄褐色(10YR7・4)	外面—口縁端部に刻み目と円形浮紋3個残と凹線?4条。口縁部に黒斑。		
923	弥生土器	壺	(19)20	—	(3)50	鈍黄褐色(10YR5・3)	外面—口縁端部に凹線6条と浮紋2個残・ヨコ方向へナデ。内面—ヨコ方向へナデ。		
924	弥生土器	壺	(20)40	—	(5)70	鈍黄褐色(10YR6・4)	外面—口縁部に格子目・凹線5条?円形浮紋(完形で4個残、1か所痕跡)。内面—口縁部に波状紋・凹線。		
925	弥生土器	壺	(23)10	—	(3)80	鈍橙色(7.5YR7・4)	外面—波状文・円形浮文1つが残存・凹線2条。内面—ヨコナデ。		
926	弥生土器	壺	(17)20	—	(3)30	橙色(5YR6・6)	外面—口縁端部に凹線4条後波状文。		
927	弥生土器	壺	(24)00	—	—	鈍黄褐色(10YR6・3)	外面—口縁端部に波状紋・凹線2条。		
928	弥生土器	甗	(17)80	—	(3)30	橙色(5YR6・6)	内・外面—ナデ。		
929	弥生土器	甗	(20)10	—	(7)10	鈍橙色(7.5YR7・4)	外面—口縁端部に凹線2条・ハケメ。黒斑?		
930	弥生土器	甗	(17)00	—	(7)20	鈍赤褐色(5YR5・4)	外面—口縁端部に凹線3条。内面—軽い押圧とナデ。		
931	弥生土器	甗	(18)00	—	(2)80	鈍黄褐色(7.5YR6・4)	外面—口縁端部に凹線3条。内面—ナデ。		
932	弥生土器	甗	(20)00	—	(2)70	鈍黄褐色(10YR7・4)	外面—口縁端部に凹線6条と浮紋1個残(3個の竹管文)。		
933	弥生土器	甗	(21)60	—	(8)00	鈍黄褐色(10YR6・3)	外面—口縁端部に凹線3条。		
934	弥生土器	鉢?	(29)60	—	(6)00	橙色(7.5YR6・6)	外面—口縁端部に凹線2条・沈線5条・ハケメの後ヨコ方向へナデ。		
935	弥生土器	器台	(16)40	—	(2)30	浅黄褐色(10YR8・4)	内・外面—口縁部に沈線による鋸歯紋(三角の部分に赤色顔料を塗布)。		
936	弥生土器	高杯脚	—	(11)40	(6)80	鈍橙色(7.5YR7・4)	外面—沈線3条(2条は完存、1条は痕跡)。		
937	河道6	弥生土器	甗	(23)80	7)8~8)1	21)40	鈍黄色(2.5Y6・3)	外面—ハケ(約12本・cm)・スス。内面—ハケ(6~7本・cm)・胴部上半にスス。	
938		弥生土器	甗	18)00	5)80	28)2~29)5	鈍黄褐色(10YR6・4)	外面—ハケ(8~9本・cm)・竹管文・ミガキ・底部ミガキ。内面—ハケ後ミガキ・スス。	
939		弥生土器	甗	(19)50	(5)0~5)7	28)90	橙色(7.5YR6・6)	外面—ハケ(7本・cm)・刺突紋。	
940		弥生土器	壺	19)80	6)00	28)1~29)2	鈍黄褐色(10YR7・3)	外面—ハケ(10~11本・cm)・貝殻による刺突文・肩部にスス。内面—ハケ(10~11本・cm)。	

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
941	河道6	弥生土器	甕	—	1000	(2120)	鈍黄褐色(10Y R 5・4)	外面—スス・全体にミガキ・底部—ナデ。内面—中央ぐらいまでスス痕・ミガキ。	
942		弥生土器	高杯	—	(1660)	(530)	橙色(5 Y R 7・6)	外面—スス2個残(推定9個)・沈線紋。内面—ナデ。	
943		弥生土器	甕	(1500)	—	(1700)	明赤褐色(2.5Y R 5・6)		
944	河道7	弥生土器	甕	(1580)	—	(1220)	橙色(5 Y R 7・6)	外面—波状紋(4条)・肩部にスス・ハケ(6~7本・cm)	
945		弥生土器	壺	(1160)	—	(410)	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面—口縁端部に凹線3条・貼り付け+刻み目。内面—ナデ。	
946		弥生土器	壺	(1660)	—	(250)	鈍褐色(7.5Y R 6・3)	外面—ヨコ方向のナデ・ハケ。内面—ヨコ方向のナデ(軽い押圧痕あり。)	
947		弥生土器	高杯	(3220)	—	(480)	黄灰色(2.5Y 5・1)	外面—ミガキ(幅は4mm程度)・口縁端部に格子目・黒斑。内面—ハケのちミガキ。	
948		弥生土器	高杯	(3880)	—	(720)	灰黄褐色(10Y R 5・2)	内・外面—ハケ後ミガキ幅は3mm程・一部布目痕。口縁端部に格子目。	
949		弥生土器	高杯?脚部	—	(2050)	(650)	鈍橙色(5 Y R 6・4)	外面—凹線4条・底部—ナデ。内面—ナデ。	
950		弥生土器	高杯?脚部	—	(1000)	(520)	浅黄橙色(10Y R 8・3)	外面—ミガキ・穿孔・ナデ。内面—ケズリ・ナデ。	
951		弥生土器	壺	—	—	(300)	鈍橙色(5 Y R 7・4)	外面—波状紋・刻み目+棒状浮紋。内面—ナデ。	
952		弥生土器	壺	—	胴部最大径200	(980)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—ナデ?・ハケ5~6本・cm・凹線5条・ミガキ(工具幅は25mm位)内面—ナデ(軽く押圧)・ハケ(12本くらい・1.1cm・工具幅は1.1cmくらい)	
953		弥生土器	甕	(1420)	—	(850)	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面—口縁端部に凹線3条・スス付着・ハケ。内面—ナデ後工具痕?ケズリ。	
954		弥生土器	壺	(1580)	—	(430)	鈍褐色(5 Y R 6・4)	外面—波状紋・口縁部—凹線3条。内面—ハケのちナデ(ハケ7~8本・cm)。	
955		弥生土器	甕	(2420)	—	(370)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	内・外面—ナデ。	
956		弥生土器	甕	(2600)	—	(1000)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—ハケ。内面—ナデ・ハケ。	
957		弥生土器	甕	—	(1160)	(2000)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—ミガキ・ハケ・底部ナデ。スス付着。内面—ハケ後ナデ。	
958		弥生土器	器台	2960	2000	—	鈍褐色(7.5Y R 7・4・6・4)	外面—口縁端部に刻み目後沈線・凹線・凹線。黒斑。内面—ハケ・ナデ・布状の圧痕?	
959		弥生土器	甕	(1620)	—	(420)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—ヨコナデ。内面—ヨコナデ・ナデ。	
960		弥生土器	壺	(1320)	—	(550)	褐色(7.5Y R 7・6)	外面—ハケ・綾杉文・二枚貝腹縁線の刺突文。内面—ヘラケズリ?	
961	弥生土器	甕	(1440)	(510)	(2100)	鈍褐色(5 Y R 6.5・4)	外面—タタキ後ハケ(5条・cm)工具ナデ・回転台圧痕か(端部に全周現存)。煤付着。内面—ケズリ(工具巾が狭くかきとりに近い、ナデ一部入る)・ケズリ(一部ナデに近い)・下に圧痕有。		
962	弥生土器	脚付壺	—	640	(600)	鈍褐色(5 Y R 6・4)	外面—面取り状・工具ナデ。煤化。内面—指オサエ。煤化。被熱で赤変する。		
963	弥生土器	壺	—	—	(190)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	内・外面—口縁端部に凹線3条の後波状文。		
964	弥生土器	甕	(1800)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 5・3)			
965	弥生土器	鉢	(3020)	—	(535)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面—ハケ後ミガキ。黒斑?		
966	弥生土器	鉢	(2010)	1290	2420	鈍褐色(7.5Y R 7・4~6・4)	外面—凹線5(上)・6(下)条・穿孔(3個残)・脚部凹線3条。黒斑。内面—ミガキ・ハケ(8~9条・cm)・ケズリ。		
967	弥生土器	高杯	—	(1100)	(510)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—ハケ・凹線4条。内面—ケズリ。		
968	弥生土器	壺	1040	—	(800)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—口縁端部に凹線4条・穿孔(全体で2個)・凹線9条。内面—ケズリ・ナデ。		
969	弥生土器	高杯脚部	—	840	(580)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内面—左方向ヘケズリ・穿孔(全体で6個、内1個未貫通)。		
970	弥生土器	高杯の脚	—	1440	(1090)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—タテ沈線3条(2か所残)・穿孔(2か所残)・ヨコ方向ヘナデ。		
971	弥生土器	壺	(1760)	(880)	上部136 底部180	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—口縁端部に凹線2条?・頸部凹線7条・ハケ後波状文及び凹線。内面—波状文。		
972	弥生土器	甕	(2320)	—	(720)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—タタキの痕跡?		
973	弥生土器	甕	(1580)	—	(1140)	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面—タタキ・タタキの後ハケ。黒斑。内面—ナデ・押圧(ハケの痕跡)。		
974	弥生土器	高杯脚部	—	1440	(520)	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面—脚部凹線6条残・1部ミガキ・脚部凹線4条。黒斑。内面—ケズリ・ナデ。		
975	弥生土器	甕	(1680)	530	(2290)	鈍黄褐色(10Y R 4・3)	外面—刺突文。内面—ナデ・ミガキ・押圧。		
976	河道8	弥生土器	壺	—	—	(310)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—口縁端部に格子目・矢羽根・凹線。内面—ナデ。	
977		弥生土器	壺	(1820)	—	(250)	浅黄褐色(7.5Y R 8・4)	外面—凹線3条・凹線浮文(5個残)。	
978		弥生土器	甕	(1700)	—	(530)	オリーブ褐色(2.5Y 4・4)	内・外面—荒いハケ目後ヨコ方向ヘナデ。内面—ケズリ。	
979		弥生土器	壺	1520	—	(620)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—口縁・頸部凹線。黒斑。	
980		弥生土器	甕	2230	—	(950)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—ナデ。首部を除く全面にスス。	
981	洪水砂関連遺物	弥生土器	壺	(1030)	—	(700)	鈍黄褐色(10Y R 6・4)	外面—口縁部にスス付着。	
982		弥生土器	壺	—	—	(580)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—口縁端部に凹線5条。内面—軽い押圧。	
983		弥生土器	甕	(1680)	—	(910)	浅黄褐色(2.5Y 7・3)	外面—スス付着。内面—ハケ状条痕。ケズリ。	
984		弥生土器	甕	(1160)	—	(610)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	内・外面—ヨコ方向ヘナデ・ナデ。	
985		弥生土器	甕	(1970)	—	(800)	灰黄褐色(2.5Y 7・2)	外面—口縁端部に凹線3条。スス付着。	
986		弥生土器	甕	(1920)	—	(820)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)		
987		弥生土器	甕	(1600)	—	(380)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
988	洪水砂関連遺物	弥生土器	甕	(1820)	—	(650)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—黒斑・口縁端部—ナデ。	
989		弥生土器	甕	(1560)	—	(760)	明褐色(7.5Y R 5・6)		
990		弥生土器	甕	(1700)	—	(550)	明赤褐色(5Y R 5・6)		
991		弥生土器	甕	(1440)	—	(450)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—ミガキ。内面—ミガキ。	
992		弥生土器	甕	(1560)	—	(690)	褐色(5Y R 7・6)	内面—ヨコ方向にナデ・ケズリ。	
993		弥生土器	甕	(1380)	—	(700)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—凹線状のくぼみ。	
994		弥生土器	甕	(1550)	—	(890)	褐色(5Y R 6・6)	内面—ナデ・右から左へケズリ。	
995		弥生土器	高杯	(1680)	脚柱部27	(830)	褐色(5Y R 6・6)	外面—タテ方向へハケメ。黒斑。	
996		弥生土器	脚部	—	(1450)	(440)	褐色(7.5Y R 6・6)	外面—穿孔4個・ハケメ後ミガキ。	
997		弥生土器	高杯	—	1340	(675)	明赤褐色(2.5Y R 5・6)	外面—指押え・穿孔4個・外面—丹塗り。	
998	弥生土器	壺	1360	—	220	鈍黄褐色(10Y R 5・3)			
999	弥生土器	壺	(1500)	—	(820)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—口縁端部に凹線4条と波状紋・刺突文。内面—ヨコ方向へナデ・軽い押圧痕。		
1000	弥生土器	壺	1700	(700)	(3750)	鈍褐色(5Y R 6.5・4)	外面—口縁端部に凹線4条後刻み目・ハケ(4~7条・c m)、指頭印文。内面—指オサエ後ヨコナデ・ヘラケズリ。		
1001	弥生土器	壺	(1620)	—	(290)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—口縁部に凹線4条と円形浮文(推定8個)。内面—波状文。		
1002	弥生土器	器台	2020	—	(970)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—口縁部に浮紋3個残・黒斑?・波状紋・凹線8条・圧痕紋。内面—ナデ・波状紋。		
1003	弥生土器	器台	2260	—	(1540)	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—格子目紋・円形浮紋(10個?)・ハケ(4~5本・c m)・凹線・直線紋7条。		
1004	弥生土器	椀	(1280)	—	(370)	褐色(2.5Y R 6・8)	内・外面—ミガキ(工具幅は2mm程)*ミガキのち全体に顔料塗布。		
1005	弥生土器	壺	2080	—	(1675)	鈍褐色(7.5Y R 6.5・4)	外面—口縁部に斜格子文・円形浮文上に2か所竹管文・ハケ後ら線状の凹線文・棒状浮文(5本残)・指頭印文。内面—ナデ。		
1006	弥生土器	壺	(1800)	—	(440)	鈍黄褐色(7.5Y R 6・4)	外面—口縁端部に擬凹線3条と円形浮文(4個残)・ナデ。内面—ナデ。		
1007	弥生土器	壺	(1800)	—	(300)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—口縁端部に凹線4条と円形浮文(3個残)。		
1008	弥生土器	壺	2040	—	430	鈍黄褐色(7.5Y R 6・4)	外面—口縁端部に凹線4条・ヨコナデ。内面—ヨコナデ。		
1009	弥生土器	甕	(1980)	—	(690)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—口縁端部に凹線4条後刻み目・格子目。内面—凹線3条。		
1010	弥生土器	甕	(2060)	—	(880)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—口縁端部に凹線3条・ヘラ描き後格子目・凹線5条。		
1011	弥生土器	壺	2000	740	(83) (121)	鈍褐色(7.5Y R 5・3)	外面—口縁端部に凹線3条・波状文(6~7条)・斜格子文・沈線1条・板状工具ナデ・底部ハケ(8条・c m)。煤付着。内面—ケズリ後ハケ・板状工具ナデ。		
1012	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	1980	(680)	3370	明赤褐色(5Y R 5・6)	外面—約5本の波状紋2か所・凹線6条・口縁端部—凹線4条・底部—ミガキ。内面—ハケ・下から上へケズリ・押圧。	
1013	弥生土器	壺?	—	—	—	灰色(N 4・)	外面—沈線11条・ヨコナデ・斜格子文。内面—圧痕後工具ナデ?		
1014	弥生土器	甕	—	—	300	鈍黄色(2.5Y 6・3)	外面—ヨコナデ。内面—ヨコナデ・ケズリ。		
1015	弥生土器	甕	—	520	515	灰黄色(2.5Y 6・2)	外面—ミガキ・底部ナデ。内面—ケズリ後ナデ。		
1016	弥生土器	甕	(1120)	(490)	1985	鈍褐色(7.5Y R 6・3)	外面—口縁端部に凹線2条・ハケ(5条・c m)後ミガキ・底部ナデ。煤付着。内面—ケズリ。		
1017	弥生土器	甕	1300	—	470	褐色(7.5Y R 7・6)	外面—ナデ?内面—ナデ。		
1018	弥生土器	甕	1460	—	580	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面—口縁端部に擬凹線3条。		
1019	弥生土器	甕	(1350)	—	(940)	鈍褐色(7.5Y R 5.5・3)	外面—口縁端部に凹線3条・ヨコへ斜めに平行タタキ(5段・c m)。煤付着。内面—ハケ(あて具?)の後指オサエ。		
1020	弥生土器	甕	(1560)	—	(210)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	外面—口縁端部—凹線3条。内面—ナデ。		
1021	弥生土器	甕	(1860)	—	(970)	鈍褐色(7.5Y R 6・3)	外面—口縁端部に凹線3条。内面—ナデ・下に押圧有。		
1022	弥生土器	甕	—	460	540	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面—ミガキ後ナデ。内面—ナデ。		
1023	弥生土器	高杯	(2060)	—	440	鈍褐色(7.5Y R 7・4)			
1024	弥生土器	高杯	—	—	—	褐色(2.5Y R 6・7)	外面—口縁端部に黒斑・ミガキ。内面—ミガキ。		
1025	弥生土器	高杯	(2520)	—	320	鈍褐色(5Y R 6・4)	外面—擬凹線4条・ナデ。内面—ナデ。		
1026	弥生土器	高杯	1680	—	290	浅黄色(2.5Y 7・3)	外面—擬凹線5条・ナデ。内面—ナデ。		
1027	弥生土器	高杯	2040	1300	167~168	鈍赤褐色(5Y R 5・4)	外面—凹線(5条・3条)・ミガキ・穿孔(おそらく2対)・ハケ(約7~8本・c m)内面—ヨコ方向へナデ・ミガキ・左方向へケズリ?		
1028	弥生土器	高杯	(1040)	—	(690)	鈍褐色(7.5Y R 6・4)	内・外面—ナデ・くもの巣状にミガキ。		
1029	弥生土器	高杯	—	1060	570	浅黄褐色(10Y R 8・4)	外面—ナデ・穿孔・凹線文6条・刺突文。内面—ケズリ・オサエ?・擦痕あり。		
1030	弥生土器	高杯	—	1140	520	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—ハケ・工具痕・凹線1条。内面—ケズリ。		
1031	弥生土器	器台	—	(1360)	710	黄灰色(2.5Y 5・1)	外面—ミガキ・凹線文13条。内面—ケズリ・工具ナデ。		
1032	弥生土器	器台	—	1460	(690)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—摩滅・沈線5条。内面—ナデ・ケズリ。		



土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1033	遺構に伴わない遺物	弥生土器	器台?注 口付	-	-	(660)	鈍赤褐色(5 Y R 4.5・4)	外面-鋸歯文・板状工具凹線5条・刻み目文・ハケ・ミガキ。内面-指オサエ・ナデ。	
1034		弥生土器	壺	(1740)	-	(450)	鈍黄褐色(10 Y R 7・3)	外面-凹線(3条・4条)・ヨコ方向ヘナデ。口縁部に赤色顔料。内面-ナデ。	
1035		弥生土器	甕	-	-	(285)	橙色(7.5 Y R 7・6)	外面-ナデ・沈線。内面-ナデ。	
1036		弥生土器	甕	-	-	(600)	橙色(5 Y R 6・6)	外面-ナデ・ハケ。	
1037		弥生土器	甕	-	-	-	鈍黄褐色(10 Y R 7・3)	外面-ナデ・ヘラ描沈線5条。内面-ナデ。	
1038		弥生土器	壺	(1500)	-	(760)	鈍黄褐色(10 Y R 5・3)	外面-刻み目・沈線4本1組・浮紋3個1組(4か所残)	
1039		弥生土器	甕	-	-	(460)	鈍褐色(7.5 Y R 6・4)	外面-波状文・沈線8条(2か所)・モミ圧痕。内面-軽い押圧とナデ。	
1040		弥生土器	壺	(1420)	-	-	鈍黄褐色(10 Y R 7・4・6・3)	外面-刻み文・沈線1条。内面-浮文・波状文6条。	遺構に伴わない
1041		弥生土器	壺	(1640)	-	(230)	橙色(7.5 Y R 6・6)	外面-口縁端部に刻み目。内面-波状文。	
1042		弥生土器	壺の口縁部	(1920)	-	(140)	鈍黄褐色(10 Y R 6・3)	外面-口縁端部に刻み目。内面-波状文・凹線2条。	
1043		弥生土器	壺の口縁部	(1740)	-	(190)	浅黄色(2.5 Y 7・3)	外面-口縁端部に刻み目・凹線3条。内面-波状文・凹線3条。	
1044		弥生土器	壺	(2120)	-	(240)	鈍黄褐色(10 Y R 6・3)	外面-口縁端部に凹線5条。内面-波状文・浮紋(5個残)・凹線2条。	
1045		弥生土器	壺	(2020)	-	(860)	灰黄褐色(10 Y R 5・2)	外面-口縁端部に凹線4条・円形浮紋・波状紋後凹線4条(2か所)。	
1046		弥生土器	壺	-	-	-	鈍褐色(7.5 Y R 6・4)	外面-格子目紋・沈線14条。	遺構に伴わない
1047		弥生土器	壺	(2100)	-	(400)	鈍黄褐色(10 Y R 7・4)	外面-口縁端部に凹線4条と刻み目・格子目紋。	
1048		弥生土器	壺	-	700	555	鈍黄褐色(10 Y R 6・4)	外面-ハケ後ナデ・底部工具痕。煤付着。内面-ナデ。	
1049		弥生土器	甕	(1420)	-	(590)	橙色(2.5 Y R 6・6)	内面-ハケメ後ナデ。	
1050		弥生土器	甕	1340	-	930	鈍褐色(7.5 Y R 7・4)	外面-タタキ後ハケ。内・外面に黒変・スス付着。	
1051		弥生土器	甕	(1600)	-	(410)	鈍黄褐色(10 Y R 7・3)	外面-ハケメ・口縁端部に凹線2条。	
1052		弥生土器	甕	(1360)	-	(890)	褐色(10 Y R 5・1)	外面-口縁端部に凹線2条。	
1053		弥生土器	壺	-	-	(340)	鈍赤褐色(2.5 Y R 5・3)	外面-口縁端部に凹線。	
1054		弥生土器	甕	1450	-	2540	灰白色(10 Y R 8・2)	内・外面に黒斑。	
1055		弥生土器	壺	(1660)	-	(550)	灰黄褐色(10 Y R 4・2)	外面-ヨコ方向ヘナデ。内面-ヨコ方向ヘナデ・ケズリ?	
1056		弥生土器	高杯	-	-	(250)	鈍黄褐色(10 Y R 5・3)	外面-ヨコ方向ヘナデ・波状文。内面-ヨコ方向ヘナデ。	
1057		弥生土器	高杯	(1840)	-	(380)	鈍褐色(7.5 Y R 5・4)	外面-口縁部-ミガキ?・ハケメの後ミガキ。内面-ナデ・ナデのちミガキ。	
1058		弥生土器	高杯	2560	-	-	鈍黄褐色(10 Y R 5・3)	外面-凹線5条・ヨコ方向ヘナデ。内面-ヨコ方向ヘナデ・ハケメ。	
1059		弥生土器	高杯	(2820)	-	(470)	橙色(5 Y R 6・6)	外面-口縁端部に凹線3条・凹線2条・ヨコ方向ヘナデ・ハケメ。内面-ヨコ方向ヘナデ・ハケメ。	
1060		弥生土器	高杯の脚	-	500	(790)	浅黄褐色(10 Y R 6・4)	外面-凹線7条残・ヨコ方向ヘナデ・凹線5条残。内面-凹線充填・ナデ・シボリ痕。	
1061	弥生土器	高杯の脚	-	-	(630)	橙色(5 Y R 6・6)	外面-沈線文(5条と3条)。内面-凹線充填・ケズリ。		
1062	弥生土器	高杯の脚	2015	-	(630)	橙色(5 Y R 6・6)	外面-沈線文(5条と3条)。内面-凹線充填・ケズリ。		
1063	弥生土器	高杯の脚	-	(920)	(530)	鈍褐色(5 Y R 6・4)	図上復元により透かし孔約8箇所。		
1064	弥生土器	台付無頸壺	(2460)	-	-	灰黄褐色(10 Y R 4・2)	外面-格子目紋・凹線1条・刻み目・高台部に凹線(12条・11条)・ハケ後ナデ。内面-ハケ(約6本・c m)・ケズリ。		
1065	弥生土器	台付無頸壺	-	-	(310)	鈍褐色(7.5 Y R 5・3)	外面-ヨコ方向ヘナデ・凹線2条・格子目。内面-ナデ。		
1066	竪穴住居14	土師器	甕	(1900)	-	(1980)	橙色(7.5 Y R 7・6)	胴部-ハケ後ナデ。外面スス付着。	
1067		土師器	甕	1630	-	(1120)	鈍黄褐色(10 Y R 7・4)	外面スス付着。	
1068		土師器	甕	-	-	(2030)	橙色(7.5 Y R 6・6)	内面-ヘラ状工具によるナデ。スス付着。	
1069	土壇墓1	須恵器	杯蓋	1480	-	450	灰色(7.5 Y 6・1)	外面-ヘラケズリ(砂粒反時計回り)。	
1070		須恵器	杯蓋	146~149	-	420	灰色(N 6・)	外面-ヘラケズリ(砂粒反時計回り)。	
1071		須恵器	杯身	136~126	-	490	灰色(N 5・)	外面-ヘラケズリ(砂粒時計回り)。	
1072	土壇82	土師器	甕	(1480)	-	(570)	鈍黄褐色(10 Y R 7・3)	外面-ハケ?内面-ケズリ。	
1073	土壇83	須恵器	甕	-	-	(2700)	灰色(5 Y 5・1)	外面-タタキ後カキメ。内面-当具痕。	
1074	土壇87	土師器	甕	(1820)	-	(450)	鈍黄褐色(10 Y R 7・4)	外面-ハケ。内面-ケズリ。	
1075		土師器	甕	(1500)	-	(420)	黄褐色(2.5 Y 5・3)	外面-ハケ目後ナデ。内面-ケズリ。	
1076		土師器	高杯	(1670)	-	(490)	鈍褐色(7.5 Y R 5・4)	外面-スス付着。内面-ナデ。	
1077		土師器	高杯	(1400)	-	(380)	鈍褐色(7.5 Y R 6・4)	内・外面-ヨコ方向のナデ。	
1078		土師器	椀	1040	340	42~445	鈍黄褐色(10 Y R 6・4)	外面-ナデ。内面-ナデ・黒斑?	
1079	土壇88	土師器	甕	-	-	-	鈍黄褐色(10 Y R 7・3)		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1080	土壇88	須恵器	甕	—	—	—	灰色(7.5Y 5.1)		
1081	土壇90	須恵器	杯	—	—	(3.70)	灰黄色(2.5Y 6.2)	内・外面—ヨコ方向ヘナデ。	
1082		須恵器	杯	—	—	(2.90)	灰黄褐色(10Y R 6.2)	外面—ヨコ方向ヘナデ。内面—ヨコナデ。	
1083	土取り跡1	須恵器	杯身	(10.40)	—	(2.90)	灰色(N 5.・)	外面—ヨコナデ。内面—ヨコナデ。	
1084		須恵器	杯身	11.60	—	3.75	灰色(N 6.・)	外面—ヨコナデ。内面—ヨコナデ。	
1085	土取り跡2	土師器	椀	(13.00)	約7.2	(4.90)	赤褐色(2.5Y 4.8)	外面—ミガキ。内面—ミガキ。	
1086		土師器	壺	(15.00)	—	(10.90)	黒褐色(10Y R 3.1)	内面—下〜上ヘケズリ後ナデ・ハケメ。	
1087		土師器	甕	(23.60)	—	(15.20)	橙色(2.5Y R 6.6)	外面—ハケメ。内面—下から上ヘケズリ。	
1088		須恵器	甕	(17.40)	—	(5.90)	灰色(5 Y 6.1)	内・外面—ヨコナデ。	
1089	土器溜まり11	須恵器	杯蓋	(12.00)	—	5.50	灰色(N 6.0)	外面—ヨコナデヘラケズリ	
1090		須恵器	杯	11.95	—	4.80	灰色(N 5.・)	外面—ヘラケズリ。内—仕上げナデ。	
1091		須恵器	杯	(14.40)	(7.00)	(5.90)	灰色(N 5.・)	外面—ヘラケズリ。	
1092		土師器	甕	(14.00)	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7.4)		
1093		土師器	甕	(16.80)	—	—	灰黄褐色(10Y R 4.2)	外面—スス。内外面に黒変。	
1094		土師器	壺	(15.80)	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7.3)		
1095		土師器	甕	(19.25)	—	(28.00)	鈍黄橙色(10Y R 7.3)		
1096		土師器	甕	(17.30)	—	—	橙色(7.5Y R 7.6)	外面—スス付着。	
1097		土師器	甕	(17.80)	—	—	鈍橙色(7.5Y R 7.4)	外面—スス付着(口縁〜胴部)。	
1098		土師器	甕	(16.90)	—	—	橙色(7.5Y R 6.6)		
1099		土師器	甕	(11.90)	—	—	鈍橙色(7.5Y R 7.4)	内面—指オサエ。ヘラケズリ。	
1100		土師器	鉢	10.8〜11.7	—	7.20	浅黄橙色(10Y R 8.4)		
1101		土師器	手捏ね	6.80	3.80	3.80	橙色(5 Y R 7.8)		
1102		土師器	甕	—	—	(9.60)	鈍橙色(7.5Y R 6.4)	外面—黒斑。内面—ナデ。ヘラケズリ。	
1103	須恵器	杯	—	—	(3.70)	灰黄色(2.5Y 6.2)	内・外面—ヨコ方向ヘナデ。		
1104	窪地8	土師器	鉢	13.20	—	8.9〜9.8	灰褐色(5 Y R 4.2)	内面—ケズリ後ユビナデ。	
1105		須恵器	甕	(21.80)	—	(7.90)	黒色(7.5Y 2.1)	内・外面—ヨコナデ。	
1106	河道10上流部	須恵器	蓋	基部(15.0)	—	3.10	灰色(N 6.・)	外面—ヘラケズリ。	
1107		須恵器	蓋	(17.90)	—	(1.90)	灰色(N 5.・)	外面—ケズリ後ナデ。内面—仕上げナデ。	
1108		須恵器	蓋	基部(13.6)	—	(2.45)	灰色(N 6.1)	内・外面—ヨコナデ。	
1109		須恵器	蓋	基部(16.8)	—	(2.45)	灰色(N 5.・)	外面—ケズリ後ナデ。内面—仕上げナデ。	
1110		土師器	杯?	—	高台径(9.6)	(2.20)	灰色(5 Y 5.1)	内・外面—ヨコナデ。	
1111		土師器	甕	(16.00)	—	(6.30)	暗灰黄色(2.5Y 5.2)	外面—全体にスス付着。内面—工具ナデ。	
1112		土師器	甕	(20.20)	—	(5.00)	黒褐色(10Y R 3.1)	内面—右方向ヘケズリ。	
1113		土師器	甕	(18.20)	—	(9.65)	鈍黄橙色(10Y R 7.2)	内面—指ナデ。内・外面—スス付着。	
1114		土師器	甕?	(23.60)	—	(6.70)	黄褐色(2.5Y 5.3)	外面—スス付着。	
1115		須恵器	蓋	(15.20)	—	(4.05)	灰色(N 5.・)	外面—ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。	
1116		須恵器	杯	(11.90)	—	(3.20)	灰色(5 Y 5.1)	外面—ヘラケズリ。内面—ヨコナデ。	
1117		須恵器	短頸壺	(7.90)	—	(4.00)	浅黄色(2.5Y 7.3)		
1118		土師器	短頸壺	11.60	—	(5.45)	鈍黄橙色(10Y R 7.3)		
1119		土師器	短頸壺	(11.10)	—	(4.90)	灰黄色(2.5Y 7.2)		
1120		土師器	甕	(17.80)	—	(4.35)	鈍黄橙色(10Y R 6.4)	外面—口縁部にスス付着。タテハケ。	
1121		土師器	甕	(17.00)	—	(5.90)	オリーブ褐色(2.5Y 4.4)		
1122	土師器	甕	(18.00)	—	(4.80)	鈍橙色(7.5Y R 6.4)	外面—タテ方向のハケ。スス付着。		
1123	土師器	甕	(16.80)	—	(5.00)	橙色(5 Y R 6.6)	外面—ヨコナデ。内面—ナデ。ケズリ。		
1124	土師器	甕	(18.60)	—	28.10	暗灰黄色(2.5Y 5.2)	外面—全体にスス付着。内面—こげつき。		
1125	土師器	甕	15.20	—	(26.90)	灰黄色(2.5Y 6.2)	外面—スス。被熱。内底部に被熱痕跡、こげつき。		
1126	河道10下流部	土師器	直口壺	10.00	—	(10.90)	鈍黄橙色(10Y R 6.4)		
1127		土師器	高杯	—	脚径(10.6)	(8.50)	橙色(5 Y R 7.6)	外面—ケズリ後工具ナデ。内面—工具ナデ。	
1128		須恵器	杯蓋	12.55	—	3.60	灰色(N 4.・)	外面—ヘラケズリ。	
1129		須恵器	杯	(12.20)	(1.70)	(4.00)	灰オリーブ色(5 Y 6.2)	外面—ヘラケズリ。	
1130		須恵器	杯	12.10	—	3.75	灰色(10Y 6.1)	外面—ヘラケズリ。内面—仕上げナデ。	
1131		須恵器	壺	12.20	—	(8.00)	灰色(5 Y 6.1〜N 5.・)		
1132	土師器	甕	(23.60)	—	—	明黄褐色(10Y R 6.6)	内・外面—一部黒斑。		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1133	河道10下流部	土師器	碗	845	(240)	745	鈍橙色(75Y R 6・4)	外面一指押えのちナデ。内外面に黒変。内面一工具ナデ。	
1134		土師器	手捏ね	(840)	—	(555)	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	内外面一指ナデ・オサエ。	
1135		土師器	手捏ね	465	—	130	暗灰黄色(25Y 5・2)	内外面全体に黒変。	
1136	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯	(1390)	(700)	—	灰白色(25Y 7・1)	外面一ヘラケズリのちナデ。内面一ヨコナデ。	
1137		須恵器	杯蓋	1500	—	(440)	灰色(75Y 6・1)	外面一ヨコナデ、ケズリ。内面一ヨコナデ。	
1138		須恵器	杯身	基部径121	受部径142	540	灰黄色(25Y 7・2)	外面一ヘラケズリ。内面一ヨコナデ。	
1139		須恵器	杯	(1510)	(360)	(430)	灰色(N 4・)	外面一ケズリ。内面一ヨコナデ。	
1140		須恵器	杯	1460	—	(280)	青灰色(5 P B 6・1)	内・外面一ヨコナデ。	
1141		須恵器	杯	(1320)	—	(350)	灰色(N 5)	外面一ヨコナデ。内面一ヨコナデ・ナデ。	
1142		須恵器	杯	(1205)	—	—	灰オリーブ色(5 Y 6・2)	外面一ヘラケズリ。ヘラ記号。	
1143		須恵器	杯身	102~123	125~143	420	灰色(5 Y 6・1)	外面一ヘラケズリ。内面一ヨコナデ。	
1144		須恵器	高杯	(1230)	—	(480)	灰白色(25Y 8・2)	外面一カキメ。内面一ヨコナデ。	
1145		須恵器	高杯	(1160)	750	760	灰色(75Y 5・1)	内・外面一ヨコナデ・ナデ。	
1146		須恵器	杯身	(820)	(560)	540	灰白色(5 Y 7・2)	内・外面一ナデ。	
1147		須恵器	平瓶	57~63	—	(870)	灰色(5 Y 5・1)	内・外面一ヨコナデ。	
1148		須恵器	短頸壺	(360)	—	(225)	灰赤色(10R 4・2)		
1149		須恵器	壺	(2360)	—	(640)	灰白色(75Y 7・1)	内・外面一ヨコナデ。	
1150		須恵器	甕	(1080)	—	(670)	灰色(5 Y 5・1)	内・外面一ヨコナデ。	
1151		須恵器	大甕	(5540)	—	—	灰色(N 5・1)	外面一波状紋2か所・凹線2条・タタキ。内面一当て具痕。	
1152		土師器	壺	(1180)	—	(1170)	灰黄色(25Y 6・2)	内面一左から右ヘケズリ。	
1153		土師器	甕	(2070)	—	—	鈍橙色(75Y R 6・4)	内・外面一スス付着。	
1154		土師器	甕	(2410)	—	(2830)	浅黄橙色(75Y R 8・3)	内面一ハケ状工具によるナデ。	
1155		土師器	甕	3055	—	(1130)	鈍褐色(75Y R 6・3)	外面一全面にスス。内面一胴部黒変。	
1156		土師器	甕	(1400)	—	(760)	鈍褐色(75Y R 6・4)	外面一ハケメ。内面一ケズリ。	
1157		土師器	甕	(1880)	—	(1725)	鈍褐色(75Y R 7・4)	別の破片にスス付着	
1158		土師器	甕	(2300)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一ヨコナデ。	
1159		土師器	高杯	(1300)	—	—	鈍黄褐色(10Y R 6・3)		
1160		土師器	高杯	(1060)	—	(440)	明赤褐色(25Y 5・6)	内・外面一ハケ後ミガキ。	
1161		土師器	高杯脚部	—	1325	—	橙色(75Y R 7・6)	外面一ハケ後ナデ。内面一ケズリ。	
1162	土師器	碗	(1360)	—	540	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一指オサエ。内面一指オサエ。黒斑。		
1163	土師器	小型甕	850	—	605	浅黄色(25Y 7・3)	外面一ナデ。内面一指オサエ。		
1164	土師器	手捏ね	(500)	—	(550)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面一指オサエ。		
1165	土師器	手捏ね	390	—	125	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	内・外面一指オサエ。		
1166	土師器	手捏ね	230	—	285	浅黄褐色(10Y R 8・3)	内・外面一指オサエ。		
1167	土師器	手捏ね	390	—	220	鈍褐色(75Y R 7・4)	内・外面一指オサエ。		
1168	土師器	手捏ね	295	—	240	橙色(5 Y R 7・6)	内・外面一指オサエ。		
1169	土師器	手捏ね	450	435	260	鈍褐色(75Y R 7・4)	内・外面一指オサエ。		
1170	掘立柱建物3	土師器	小皿	740	(660)	130	鈍褐色(75Y R 7・3)	外面一底部ヘラ切り後ナデ。	
1171		土師器	小皿	850	620	160	明褐色(75Y R 7・2)	外面一ナデ・底部ヘラ切り後ナデ。	
1172		土師器	皿	1130	(620)	225	鈍褐色(5 Y R 7・4)	口縁端部黒変。底部糸切り後ナデ。	
1173	掘立柱建物6	土師器	皿	1560	(860)	190	鈍褐色(5 Y R 6・4)	外面一底部一糸切り後ナデ。	
1174		土師器	杯	1180	(780)	320	黄灰色(25Y 4・1)	外面一底部一糸切り後ナデ。	
1175		土師器	杯	—	(800)	—	灰白色(75Y R 8・2)	外面一糸切り。	
1176	掘立柱建物9	土師器	皿	1400	—	—	浅黄褐色(10Y R 8・3)	内・外面一ヨコ方向ヘナデ。	
1177	掘立柱建物12	白磁	碗	—	—	—	灰白色(10Y 7・1)	内・外面一釉ハギ。	
1178	掘立柱建物14	土師器	小皿	740	(660)	130	鈍褐色(75Y R 7・4)	外面一ヨコ方向のナデ・底部ヘラ切り後ナデ。内面一ヨコ方向のナデ。	
1179		土師器	皿	970	(620)	150	浅黄褐色(10Y R 8・4)	外面一糸切り。	
1180		土師器	小皿	—	(660)	—	浅黄褐色(75Y R 8・3)	外面一糸切り。	
1181		土師器	皿	1360	(850)	190	鈍褐色(5 Y R 6・4)	外面一糸切り。	
1182		土師器	皿	(1450)	(760)	240	灰白色(10Y R 8・2)	外面一糸切り。	
1183		土師器	皿	1380	850	250	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面一糸切り。	
1184		土師器	皿	1440	860	255	鈍黄色(25Y 6・3)	外面一糸切り後ナデ?板目痕。	
1185	掘立柱建物16	青磁	碗	—	—	—	25GY 6・1と5・1	内・外面一ナデ・釉薬。	
1186	掘立柱建物20	白磁	碗	760	330	360	灰白色(5 Y 8・1)		
1187	掘立柱建物23	土師器	小皿	(820)	(600)	160	鈍褐色(75Y R 7・4)		
1188		瓦質	羽釜	—	—	—	灰白色(25Y 8・2)		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1189	掘立柱建物24	土師器	皿	1520	(780)	220	鈍橙色(7.5Y R 7.4)		
1190	掘立柱建物27	土師器	甕	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 6.3)		
1191		備前	搦鉢	—	(1720)	—	暗灰黄色(2.5Y 5.2)		
1192	掘立柱建物30	土師器	皿	940	640	160	鈍橙色(5 Y R 7.4)	外面—底部糸切り。	
1193		土師器	皿	1030	710	160	鈍橙色(7.5Y R 7.4)	外面—底部糸切り。	
1194	掘立柱建物31	土師器	小皿	750	640	130	灰白色(7.5Y R 8.2)		
1195		土師器	皿	1310	1050	260	浅黄橙色(10Y R 8.3)		
1196		土師器	皿	1360	940	280	浅黄橙色(10Y R 8.3)		
1197	掘立柱建物32	土師器	小皿	780	(540)	140	褐灰色(10Y R 5.1)		
1198	掘立柱建物33	土師器	皿	1360	880	150	灰白色(10Y R 8.2)		
1199	掘立柱建物39	備前	杯	1100	760	275	鈍赤褐色(2.5Y R 5.3)	外面—底部糸切り。	
1200	掘立柱建物43	土師器	小皿	630	460	100	鈍橙色(7.5Y R 6.4)	外面—底部糸切り。	
1201	掘立柱建物52	土師器	皿	1320	840	230	灰白色(2.5Y 8.2)	外面—底部ヘラ切り。	
1202		土師器	小皿	(800)	(510)	(110)	鈍橙色(7.5Y R 7.3)	外面—底部ヘラ切り。	
1203		土師器	小皿	—	—	—	橙色(7.5Y R 7.6)		
1204	掘立柱建物59	土師器	小皿	—	—	—	橙色(2.5Y R 6.6)	外面—底部ヘラ切り？	
1205		土師器	小皿	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7.3)	外面—底部調整不明、ヘラ切りか？	
1206	掘立柱建物61	土師器	皿	—	—	—	橙色(5 Y R 7.6)	外面—ナデ。内面—ヨコナデ。	
1207		青磁	皿	—	(640)	—	オリーブ灰色(10Y 6.2)		13C中竜泉皿
1208		掘立柱建物64	土師器	小皿	(800)	(600)	170	鈍橙色(5 Y R 7.4)	外面—底部ヘラ切り。
1209	掘立柱建物65	土師器	杯	(1050)	(640)	330	鈍黄橙色(10Y R 7.3)		
1210	掘立柱建物66	土師器	小皿	800	(660)	150	鈍橙色(7.5Y R 6.4)		
1211		瓦質	羽釜	—	—	—	灰色(N 5.)		
1212	柱穴列 2	土師器	小皿	—	—	—	鈍橙色(7.5Y R 7.4)		
1213	竪穴遺構 1	備前	椀	980	675	290	赤褐色(10R 5.4)	内面—ヘラガキ「井」	
1214		備前	椀	910	575	290	赤褐色(10R 6.6)	内面—ヘラガキ「△」	
1215		備前	椀	960	580	270	鈍赤褐色(10R 6.4)	内面—ヘラガキ「△」	
1216		備前	椀	895	580	270	鈍橙色(2.5Y R 6.4)	内面—ヘラガキ「△」	
1217		備前	椀	935	620	255	赤色(10R 5.6)	内面—ヘラガキ「△」	
1218		備前	椀	960	540	245	褐灰色(7.5Y R 5.1)		
1219		備前	椀	955	625	290	赤褐色(10R 5.4)		
1220		墓 2	土師器	小皿	78~80	56~59	120~135	鈍橙色(7.5Y R 7.3)	外面—底部糸切り。
1221	土師器		小皿	770~785	580	11~12	鈍橙色(7.5Y R 7.3)	外面—底部糸切り。	
1222	土師器		小皿	80~81	59~61	13~16	鈍黄橙色(10Y R 6.3)	外面—底部糸切り。	
1223	墓 3	土師器	小皿	820	61~63	12~13	鈍黄橙色(10Y R 7.3)	外面—底部糸切り。	
1224		備前	甕	—	3420	—	鈍橙色(5 Y R 7.4)		
1225		土師器	小皿	770	(600)	150	浅黄橙色(7.5Y R 8.4)	外面—ヘラ切り後ナデ。	
1226		土師器	杯	—	660	—	灰白色(10Y R 8.2)	外面—ヘラ切り後ナデ。	
1227		備前	甕	4560	3200	6160	鈍黄橙色(10Y R 7.4)		
1228	墓 5	土師器	杯	1240	78~79	400	鈍橙色(7.5Y R 7.4)	外面—底部糸切り。	
1229		土師器	杯	1180	730	400	浅黄橙色(7.5Y R 8.3)	外面—底部糸切り。	
1230		土師器	杯	1300	740	340	浅黄橙色(7.5Y R 8.3)	外面—底部糸切り。	
1231		土師器	杯	1340	900	390	浅黄橙色(7.5Y R 8.3)	外面—底部糸切り。	
1232		土師器	杯	—	(560)	—	浅黄橙色(7.5Y R 8.3)	外面—底部糸切り。	
1233		土師器	杯	—	(490)	—	灰黄褐色(10Y R 5.2)	外面—底部ナデ。	
1234		土師器	杯	—	(790)	—	鈍橙色(7.5Y R 7.4)	外面—底部糸切り。	
1235		土師器	小皿	770	680	138	浅黄橙色(10Y R 8.3)	外面—底部糸切り。	
1236		土師器	小皿	800	625	120	浅黄橙色(7.5Y R 8.3)	外面—底部糸切り。	
1237		土師器	小皿	(910)	(760)	(155)	浅黄橙色(7.5Y R 8.3)	外面—底部糸切り。	
1238	墓 7	土師器	皿	—	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7.4)		
1239		土師器	杯	—	—	—	浅黄橙色(10Y R 8.4)	内・外面—ナデ。	
1240	墓 9	土師器	杯	1170	680	345	橙色(7.5Y R 7.6)	外—糸切り、底部板目痕。	
1241		土師器	杯	1220	680	320	橙色(7.5Y R 7.6)	外—ヘラ切り。	
1242		土師器	皿	805	580	160	鈍黄橙色(10Y R 6.4)	外—ヘラ切り。	
1243		土師器	皿	730	570	160	鈍橙色(7.5Y R 7.3)	外—ヘラ切り。	
1244		土師器	椀	920	265	430	浅黄橙色(10Y R 8.3)		
1245		備前	搦鉢	3230	—	—	灰色(7.5Y 5.1)		
1246	墓 16	土師器	皿	1560	780	300	鈍黄橙色(10Y R 7.4)	外面—底部糸切り。	
1247		土師器	小皿	820	580	120	浅黄橙色(10Y R 8.3)	外—ヘラ切り。	
1248	墓 17	勝間田	椀	—	—	—	灰色(5 Y 6.1)	外) 口縁部に変色	
1249	墓 19	土師器	鍋	—	—	—	浅黄橙色(10Y R 8.4)		
1250	墓 22	土師器	小皿	770	620	110	鈍橙色(5 Y R 6.4)	外面—底部糸切り。	
1251	墓 23	土師器	小皿	800	650	10~15	橙色(7.5Y R 7.6)	外面—底部糸切り。	
1252		土師器	小皿	860	630	13~15	鈍橙色(7.5Y R 7.4)	外面—底部糸切り。	
1253		土師器	小皿	780	595	125	橙色(5 Y R 7.6)	外面—底部糸切り。	
1254		土師器	小皿	810	600	140	橙色(7.5Y R 7.6)	外面—底部糸切り。	

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1255	墓25	土師器	鍋	(30・40)	—	—	鈍黄橙色(10Y R 6・3)		
1256		土師器	鍋	(33・20)	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7・4)		
1257	墓26	土師器	皿	(16・00)	(10・00)	190	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外一ヘラ切り。	
1258		土師器	小皿	(9・60)	(7・20)	130	鈍褐色(7.5Y R 6・3)	外一ヘラ切り。	
1259	墓28	土師器	小皿	(10・00)	(7・80)	—	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外一ヘラ切り。	
1260	墓30	備前	椀	(10・00)	(6・50)	320	鈍褐色(2.5Y 5・4)	外面一底部糸切り。	
1261		天目	碗	(14・00)	—	—	灰黄褐色(10Y R 4・2)		中国産灰被のタイプ。15C代
1262	墓31	土師器	小皿	7・80	—	(1・15)	鈍黄橙色(10Y R 7・3)		
1263		土師器	小皿	7・50	—	(1・40)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)		
1264	墓34	土師器	小皿	7・00	5・60	140	橙色(5Y R 6・6)	外面一底部糸切り。	
1265		土師器	皿	10・60	6・70	18~23	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一底部糸切り。	
1266		土師器	皿	14・40	9・00	230	浅黄褐色(7.5Y R 8・6)		
1267		白磁	碗	(15・80)	—	—	灰オリーブ色(5Y 6・2)		14世紀代
1268	埋葬遺構1	備前	甕	(48・00)	—	—	灰赤色(2.5Y R 5・2)		
1269		備前	甕	(47・20)	18・00	84・60	赤褐色(10R 4・3)		
1270	埋葬遺構2	備前	甕	48・00	43・00	82・80	赤褐色(10Y R 4・3)		
1271	埋葬遺構3 A	土師器	皿	14・65	6・40	2・65	淡褐色(5Y R 8・4)		
1272	埋葬遺構3 F	土師器	小皿	10.3~9.6	6.70	2.10	浅黄褐色(10Y R 8・3)	外面一ヘラ切り後ナデ	
1273	埋葬遺構3 G	土師器	小皿	6.60	5.60	1.30	橙色(5Y R 7・6)	外面一底部ヘラ切り後ナデ	
1274	埋葬遺構3 F	土師器	小皿	7.10	5.60	1.40	橙色(5Y R 7・6)	外一板目	
1275	埋葬遺構3 F	土師器	小皿	6.30	2.40	1.65	橙色(5Y R 7・6)		
1276	埋葬遺構3 G	瓦質	鍋	—	—	—	暗灰色(N 3・)		
1277	集石土壇1	青白磁	合子	3.20	3.10	1.70	明緑灰色(10G Y 7・1)		景徳鎮青白磁12~13C代
1278		土師器	小皿	(8・60)	3・40	135	鈍黄褐色(10Y R 7・3)		
1279	石敷土壇1	土師器	鍋	—	—	—	浅黄褐色(10Y R 8・3)		
1280	土壇91	土師器	皿	12.50	7.50	3.10	鈍褐色(7.5Y R 7・4)		
1281		土師器	皿	12.50	7.80	2.90	鈍褐色(7.5Y R 7・4)		
1282	土壇92	土師器	杯	—	(7・60)	(2・25)	灰白色(10Y R 8・2)	外面一糸切り	
1283	土壇93	青磁	碗	(13・20)	—	(4・65)	明緑灰色(7.5G Y 7・1)		龍泉14C後半~15C前半
1284	土壇94	土師器	杯	12.40	6.80	3.15	褐色(7.5Y R 6・6)	外面一糸切り	
1285	土壇95	土師器	杯	14.1~15.2	6.80	3.6~4.5	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り	
1286	土壇96	土師器	小皿	(7・00)	(6・00)	1.25	褐色(7.5Y R 7・6)		
1287		土師器	小皿	7.50	6.40	1.35~1.65	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り	
1288		土師器	小皿	(7・80)	(4・80)	1.60	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一糸切り	
1289		土師器	杯	(10・85)	8.20	(3・00)	浅黄褐色(10Y R 8・4)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1290		土師器	杯	11.15	8.00	3.1~3.45	褐色(5Y R 7・6)	外面一ヘラ切り。	
1291		土師器	杯	(10.90)	8.70	(3.80)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1292		土師器	杯	(12.00)	(9.80)	(3.30)	明黄褐色(10Y R 7・6)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1293		土師器	杯	(12.40)	(9.00)	(3.50)	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1294		瓦質	鍋	—	—	(3.50)	黄灰色(2.5Y 5・1)		
1295		青磁	碗	—	5.00	(2.10)	黄褐色(2.5Y 5・3)		13c中葉
1296	土壇99	土師器	小皿	8.00	6.00	1.60	浅黄褐色(7.5Y R 8・3)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1297	土壇102	土師器	小皿	7.60	6.25	1.60	浅黄褐色(10Y R 8・3)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1298		土師器	小皿	(13.30)	(5.60)	(1.35)	鈍褐色(5Y R 6・4)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1299		備前	甕	—	—	—	灰色(N 6・)		
1300		常滑	甕	—	—	—	褐色(10Y R 5・1)		
1301	土壇103	土師器	小皿	7.40	6.30	1.60	鈍褐色(7.5Y R 7・3)	外一ヘラ切り後ナデ	
1302		土師器	小皿	7.50	6.50	1.40	鈍褐色(7.5Y R 7・4)		
1303		土師器	小皿	8.00	6.40	1.00	鈍褐色(7.5Y R 7・3)	外底一ヘラ切り	
1304	土壇104	土師器	杯	—	6.75	—	浅黄褐色(10Y R 8・3)	外一ヘラ切り工具痕	
1305		土師器	小皿	7.70	6.10	1.35	浅黄褐色(7.5Y R 8・4)	外一ヘラ切り、ヘラ切り後ナデ	
1306		土師器	皿	6.20	8.20	2.75	灰白色(10Y R 8・2)	外一ヘラ切り後ナデ	
1307		土師器	杯	11.90	9.30	3.05	浅黄褐色(7.5Y R 8・4)	外一ヘラ切り後ナデ	
1308	土壇105	土師器	杯	11.40	8.85	3.25	浅黄褐色(10Y R 8・4)	外一ヘラ切り後ナデ	
1309		土師器	杯	10.85	4.75	5.10	浅黄褐色(7.5Y R 8・4)	外一ナデ	
1310	土壇108	土師器	小皿	7.40	6.2~6.45	1.45	鈍褐色(7.5Y R 7・3)	外一ヘラ切り	
1311	土壇110	備前	甕	46.80	—	—	灰色(5Y 6・1)		
1312		備前	甕	—	(35.00)	—	灰色(5Y 5・1)		
1313	土壇111	土師器	小皿	7.50	6.00	0.90	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一底部ヘラ切り。	
1314		土師器	小皿	(9.50)	(7.30)	1.75	鈍褐色(7.5Y R 6・3)	外面一底部ヘラ切り？	
1315		青磁	碗	(12.20)	—	—	オリーブ灰色(10Y 6・2)		14~15世紀
1316	土壇112	土師器	皿	7.30	5.70	1.3~2.0	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面一底部ナデ。	
1317		土師器	皿	7.20	5.80	1.70	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面一糸切り。内面。黒っぽい付着物。	

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考	
				口径	底径	器高				
1318	土壙112	土師器	皿	720	580	160	鈍橙色(75Y R 7・3)	外面一糸切り		
1319		土師器	皿	730	620	150	鈍橙色(75Y R 7・4)	外面一糸切り		
1320		土師器	皿	750	620	12~17	鈍黄橙色(10Y R 7・2)	外面一糸切り		
1321		土師器	皿	740	580	140	鈍黄橙色(10Y R 7・2)	外面一底部ナデ。		
1322		土師器	皿	770	580	160	鈍橙色(75Y R 7・3)	外面一糸切り		
1323		土師器	皿	780	590	170	灰黄色(25Y 7・2)	外面一底部ナデ。		
1324		土師器	皿	780	—	180	灰黄色(25Y 7・2)	外面一ナデ。		
1325		土師器	皿	830	660	160	橙色(5 Y R 6・6)	外面一糸切り		
1326		土師器	皿	840	640	150	橙色(5 Y R 6・6)	外面一糸切り		
1327		備前	壺	210	—	—	暗赤褐色(5 Y R 3・2)			
1328		土師器	杯	1180	770	360	鈍黄橙色(10Y R 7・2)	内・外面一ナデ。		
1329		土師器	杯	108~113	730	38~40	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一糸切り後ナデ		
1330		土師器	杯	1230	740	360	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一底部ナデ。		
1331		土師器	杯	1200	81~83	37~40	浅黄橙色(10Y R 8・3)	外面一底部ナデ。		
1332		土師器	杯	1180	760	420	灰白色(10Y R 8・2)	外面一底部ナデ。		
1333		土師器	杯	1180	800	460	灰白色(10Y R 8・2)	外面一糸切り後ナデ		
1334		土師器	杯	1220	—	(440)	鈍橙色(75Y R 7・4)			
1335	土師器	杯	1200	840	36~44	灰黄色(25Y 7・2)	外面一糸切り後ナデ			
1336	土壙113	土師器	杯	1140	800	32~45	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一糸切り後ナデ		
1337		瀬戸美濃	花瓶	—	900	—	オリーブ黄色(75Y 6・3)	外面一底部糸切り。	14世紀末	
1338	土壙115	土師器	皿	—	—	—	暗灰黄色(25Y 5・2)			
1339		土師器	甕	—	—	—	灰褐色(75Y R 4・2)	外面一スス付着。		
1340	土師器	杯	—	(860)	—	灰白色(10Y R 8・2)	外面一底部ヘラ切り。			
1341	土壙116	青磁	碗	—	—	—	オリーブ黄色(5 Y 6・3)			
1342	土壙117	土師器	小皿	(860)	(620)	140	灰黄色(25Y 7・2)	外面一底部ヘラ切り?		
1343	土壙118	土師器	皿	(1400)	(840)	240	鈍橙色(75Y R 7・4)	外面一・底部ヘラ切り。		
1344		土師器	皿	1520	89~90	23~27	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面一底部糸切り。		
1345	土壙119	備前	播鉢	2700	1400	1050	灰赤色(25Y R 4・2)			
1346		土師器	小皿	1040	840	145	灰白色(10Y R 8・2)	外面一底部ヘラ切り?		
1347		土師器	小皿	1240	640	145	浅黄橙色(75Y R 8・3)			
1348	土壙120	土師器	小皿	(960)	(760)	120	浅黄橙色(75Y R 8・3)	外面一口縁端部にスス?(少し油っぽい)。	灯明皿	
1349		土師器	皿	(1220)	(760)	190	浅黄橙色(75Y R 8・3)	外面一底部ヘラ切り。		
1350		土師器	皿	(1380)	(900)	240	浅黄橙色(75Y R 8・3)			
1351	土壙124	備前	甕	(4000)	—	—	褐灰色(75Y R 4・1)			
1352		白磁	碗	—	(430)	—	灰白色(25Y 8・2)	内面一釉ハギ。	15世紀	
1353		備前	甕	5080	—	—	灰赤色(25Y R 4・2)			
1354	土壙125	備前	甕	4840	—	—	灰赤色(25Y R 4・2)			
1355	土壙126	備前	甕	4450	—	—	灰色(N 6・)			
1356		備前	甕	—	—	—	灰白色(25Y 7・1)			
1357		備前	甕	3660	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7・2)			
1358	土壙129	土師器	小皿	755	555	130	灰黄色(25Y 6・2)	外一糸切り。		
1359		土師器	小皿	755	580	125	鈍黄橙色(10Y R 6・3)			
1360		土師器	小皿	660	605	145	鈍黄橙色(10Y R 6・3)	外一糸切り。		
1361		土師器	小皿	765	580	125	鈍黄橙色(10Y R 7・2)	外一糸切り。		
1362		土師器	小皿	765	605	125	鈍黄橙色(10Y R 7・2)	外一糸切り。		
1363		土師器	小皿	750	590	130	鈍橙色(75Y R 6・4)	外一糸切り。		
1364		土師器	小皿	760	600	120	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外一糸切り。		
1365		土師器	小皿	755	600	140	浅黄橙色(10Y R 8・3)	外一糸切り。		
1366		土師器	小皿	750	580	130	浅黄色(25Y 7・3)	外一糸切り。		
1367		土師器	小皿	770	595	100	灰黄色(25Y 7・2)	外一糸切り。		
1368		土師器	小皿	770	630	140	浅黄橙色(75Y R 8・4)	外一糸切り。		
1369		土師器	小皿	750	585	080	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外一糸切り。		
1370		土師器	小皿	840	630	130	淡赤橙色(25Y R 7・4)	外一糸切り。		
1371		土壙129	土師器	小皿	730	590	150	鈍黄色(25Y 6・3)	外一糸切り。	
1372			土師器	小皿	(770)	(570)	165	鈍橙色(75Y R 7・4)	外一糸切り。	
1373			土師器	杯	1165	600	365	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外一糸切り。	
1374			土師器	杯	1190	630	350	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外一糸切り。	
1375			土師器	杯	1185	650	380	橙色(75Y R 7・6)	外一糸切り。	
1376			土師器	杯	1145	620	370	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外一糸切り。	
1377			土師器	杯	1155	635	350	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外一糸切り。	
1378			土師器	杯	1180	630	350	橙色(5 Y R 6・6)	外一糸切り。	
1379			土師器	杯	1190	640	370	浅黄色(25Y 7・4)	外一糸切り。	
1380			土師器	杯	1145	570	370	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外一糸切り。	
1381			土師器	小皿	740	570	105	灰黄色(25Y 6・2)	外一糸切り。	
1382			土師器	小皿	765	590	130	灰黄色(25Y 7・2)	外一糸切り。	
1383			土師器	小皿	760	565	145	灰黄色(25Y 6・2)	外一糸切り。	
1384			土師器	小皿	645	580	130	暗灰黄色(25Y 5・2)	外一糸切り。	

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1385	土壇129	土師器	小皿	755	590	190	鈍黄色(2.5Y 6.3)	外一糸切り。	
1386		土師器	小皿	725	575	190	灰黄色(2.5Y 7.2)	外一糸切り。	
1387	土壇131	土師器	杯	(1160)	620	380	浅黄橙色(10Y R 8.3)	外一ヘラ切り。	
1388	土壇132	土師器	皿	770	595	170	鈍褐色(7.5Y R 6.3)	外一ヘラ切り。	
1389		土師器	皿	800	655	163	鈍黄橙色(10Y R 7.3)	外一ヘラ切り。	
1390	土壇135	土師器	小皿	870	620	140	橙色(5 Y R 7.6)	外一ヘラ切り。	
1391		土師器	皿	1030	820	150	浅黄橙色(7.5Y R 8.3)	外面一底部ヘラ切りのちナデ。	
1392	土壇136	土師器	小皿	1000	790	170	鈍褐色(7.5Y R 7.4)	外一ヘラ切り。	
1393		青磁	碗	—	—	—	灰黄褐色(10Y R 6.2)		
1394	土壇137	備前	播鉢	2820	—	—	暗赤褐色(2.5Y R 3.3)		
1395	土壇138	備前	播鉢	—	—	—	鈍赤褐色(2.5Y 4.3)		
1396		備前	播鉢	—	—	—	黒褐色(10Y R 3.2)		
1397	土壇139	土師器	杯	—	660	—	鈍褐色(7.5Y R 7.4)	外面一底部糸切りのちナデ。	
1398	土壇143	土師器	小皿	720	500	090	鈍褐色(7.5Y R 7.3)	外面一底部糸切りのちナデ。	
1399		土師器	小皿	760	630	100	褐色(7.5Y R 7.6)	外面一底部糸切りのちナデ。	
1400	土壇146	土師器	小皿	820	560	145	鈍黄褐色(10Y R 7.4)	外一底部ヘラ切りのちナデ	
1401		備前	播鉢	—	—	—	灰褐色(7.5Y R 4.2)		
1402		青磁	碗	—	—	—	オリーブ灰色(5 G Y 6.1)		15世紀後半
1403	土壇148	土師器	皿	(1400)	(760)	(220)	褐色(7.5Y R 7.6)	外一ヘラ切り?	
1404	土壇149	青磁	碗	—	—	—	緑灰色(7.5G Y 6.1)		13C中葉
1405	土壇150	土師器	小皿	740	640	120	褐色(5 Y R 7.6)	外一ヘラ切り。	
1406	土壇151	土師器	小皿	760	300	100	灰白色(10Y R 8.2)	外一糸切り?	
1407		瓦質	鍋	(2550)	—	—	灰白色(10Y R 8.2)		
1408	土壇154	土師器	皿	(1360)	(700)	(180)	鈍黄褐色(10Y R 7.4)	外一底部ヘラ切り?	
1409	土壇155	勝間田	椀	—	(560)	—	灰色(5 Y 6.1)	外一糸切り	
1410		土師器	小皿	820	(600)	(130)	鈍褐色(7.5Y R 7.4)	外一底部ヘラ切り	
1411	土壇157	瓦質	羽釜	—	—	—	灰色(N 5.1)		
1412	土壇158	瓦質	鍋	—	—	—	暗灰色(N 3.3)		
1413	土壇159	土師器	皿	800	(560)	(140)	浅黄褐色(7.5Y R 8.4)	外面一ヘラ切り	
1414		土師器	小皿	1420	(940)	(215)	浅黄褐色(10Y R 8.3)	外面一ヘラ切り?	
1415	土壇164	土師器	小皿	980	800	120	鈍黄褐色(10Y R 7.4)	外面一ヘラ切り	
1416	土壇166	瓦質	鍋	—	—	—	灰黄色(2.5Y 6.1)		
1417		備前	播鉢	—	(1790)	—	鈍赤褐色(5 Y R 5.3)		
1418	土壇169	土師器	小皿	700	(600)	070	浅黄褐色(10Y R 8.3)	外面一ヘラ切り	
1419		土師器	小皿	(700)	(560)	080	灰白色(10Y R 8.2)	外面一ヘラ切り?	
1420		土師器	小皿	860	(760)	120	浅黄褐色(10Y R 8.3)	外面一ヘラ切り	
1421		瓦質	鍋	—	—	—	灰色(5 Y 6.1)		
1422		青磁	碗	(1400)	—	—	オリーブ灰色(10Y 5.2)		15c 後半
1423		備前	播鉢	—	(1440)	—	鈍褐色(2.5Y R 6.4)		
1424	土壇172	青磁	碗	(1520)	—	—	オリーブ灰色(10Y 5.2)		15C 後半
1425	土壇175	土師器	皿	1380	89~91	250	鈍褐色(7.5Y R 7.4)	外面一ヘラ切り	
1426	土壇176	備前	甕	—	—	—	灰褐色(5 Y R 4.2)		
1427		備前	壺	—	—	—	鈍赤褐色(2.5Y R 5.3)		
1428		備前	播鉢	—	—	—	黄灰色(2.5Y 4.1)		
1429		瀬戸	平椀	—	540	—	灰白色(2.5Y 8.2)	外面一高台は貼り付けているよう。	14C代
1430	土壇180	土師器	小皿	760	(540)	(125)	浅黄褐色(10Y R 8.3)	外面一底部ヘラ切りのちナデ。内面一煤付着。	
1431		土師器	小皿	(660)	(560)	(100)	鈍褐色(7.5Y R 7.4)		
1432	土壇181	土師器	小皿	830	63~64	125~135	鈍褐色(7.5Y R 6.4)	外面一底部ヘラ切り。	
1433	土壇182	土師器	小皿	920	(700)	(135)	浅黄褐色(10Y R 8.3)	外面一底部ヘラ切り?	
1434		土師器	小皿	760	540	09~13	褐色(5 Y R 7.6)	外面一底部ヘラ切り。	
1435		備前	壺	540	—	—	鈍褐色(2.5Y R 6.4)		
1436		土師器	播鉢	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7.4)		
1437		瀬戸美濃	水滴	—	440	—	オリーブ黄色(5 Y 6.3)	スス付着。	井上10期14C末
1438	土壇184	土師器	小皿	(800)	(400)	(140)	鈍褐色(7.5Y R 6.4)		
1439		土師器	小皿	780	460	090	鈍褐色(5 Y R 6.4)		
1440		土師器	杯	—	—	—	灰白色(10Y R 8.2)		
1441		備前	播鉢	—	—	—	灰赤色(2.5Y R 4.2)		
1442		瀬戸	卸皿	—	660	—	灰黄色(2.5Y 6.2)		
1443	土壇187	土師器	小皿	1000	760	170	浅黄褐色(7.5Y R 8.3)	外面一底部ヘラ切り。	
1444		土師器	小皿	940	740	170	鈍褐色(7.5Y R 7.4)	外面一底部ヘラ切り。	
1445	土壇188	土師器	皿	(1460)	(960)	190	鈍褐色(7.5Y R 7.4)		
1446	土壇189	土師器	皿	(1360)	(800)	(180)	鈍褐色(7.5Y R 7.4)	外面一底部ナデ。	
1447	土壇190	土師器	羽釜	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 7.3)		
1448	土壇192	土師器	小皿	79~81	540	115~14	灰白色(10Y R 8.2)		
1449		土師器	小皿	895~905	670	125~14	鈍黄褐色(10Y R 7.3)		
1450		土師器	小皿	960	650	175~18	灰白色(10Y R 8.2)	外面一底部ナデ後オサエ。	
1451		備前	播鉢	—	—	—	灰褐色(7.5Y R 4.2)		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1452		備前	播鉢	—	—	—	灰赤色(10R 4・2)		
1453	土壙192	天目	碗	—	490	—	黒褐色(10Y R 3・2)	削りだし高台	瀬戸大窯1期 16c前半
1454	土壙193	備前	壺	—	—	—	灰色(N 5・)		
1455	土壙194	土師器	小皿	860	(680)	(120)	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	外面—底部糸切り。	
1456		土師器	皿	(1500)	(860)	(245)	鈍橙色(75Y R 7・4)	外面—底部へラ切り。	
1457		土師器	小皿	1000	(900)	(150)	鈍橙色(75Y R 7・4)	外面—底部へラ切り。	
1458		土師器	小皿	900	720	190	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面—底部へラ切り後ナデ。	内面—煤付着。
1459		土師器	小皿	760	(640)	(140)	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面—底部へラ切り後ナデ。	
1460		備前	壺	—	—	—	鈍赤褐色(5Y R 5・4)		
1461		瓦質	羽釜	(2380)	—	—	灰色(N 5・)	全体に煤付着。	
1462	土壙197	土師器	小皿	800	(600)	240	鈍橙色(75Y R 7・4)	外面—底部へラ切り。	
1463	土壙199	備前	播鉢	—	—	—	灰褐色(5Y R 4・2)		
1464	土壙201	瓦質	羽釜	—	—	—	灰色(N 4・)	外面—煤付着。	
1465		土師器	蓋?	1700	—	—	灰黄色(25Y 7・2)		
1466	土壙202	土師器	るつぼ	(760)	—	—	浅黄橙色(10Y R 8・4)	被熱により内面器表が発泡する。*鋳造関連品	
1467	土壙205	備前	播鉢	(2490)	—	—	鈍赤褐色(5Y R 5・4)		
1468		土師器	小皿	(880)	(560)	(160)	鈍黄橙色(10Y R 6・3)	外面—底部糸切り。	
1469	土壙207	土師器	皿	1360	(880)	(200)	鈍黄橙色(10Y R 6・3)		
1470		土師器	皿	1290	900	225	橙色(5Y R 7・6)	外面—へラ切り。	
1471		土師器	小皿	760	(500)	(160)	鈍黄橙色(10Y R 7・3)		
1472	土壙209	土師器	小皿	970	—	—	鈍黄橙色(10Y R 7・4)		
1473		土師器	小皿	(860)	(800)	(140)	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面—底部糸切り後ナデ?	
1474	土壙212	瓦質	羽釜	—	—	—	黄灰色(25Y 4・1)		
1475		土師器	小皿	690	510	10~13	浅黄橙色(75Y R 8・3)	外面—底部へラ切り。	
1476	土壙213	青磁	碗	—	600	—	灰オリーブ色(75Y 6・2)		13~14世紀
1477		瓦質	羽釜	(2070)	—	—	オリーブ黒色(5Y 3・1)	外面—煤付着。	
1478		土師器	皿	(1220)	—	(100)	鈍黄褐色(10Y R 5・3)		
1479	土壙214	勝間田	椀	1480	—	—	黄灰色(25Y 6・1)		
1480		勝間田	甕	—	—	—	灰色(N 6・1)		
1481		備前	播鉢	217~ 270	1100	90~ 111	鈍黄橙色(10Y R 7・4)		
1482		備前	播鉢	—	—	—	灰褐色(5Y R 4・2)		
1483		土師器	皿	1020	600	240	橙色(5Y R 6・6)	外面—へラ切り後ナデ。	
1484	土壙215	土師器	皿	1050	640	19~24	橙色(5Y R 6・6)	外面—へラ切り。	
1485		土師器	皿	1030	610	19~20	橙色(25Y 6・6)	外面—へラ切り。	
1486		土師器	皿	860	560	160	鈍橙色(75Y R 7・4)	外面—糸切り。	
1487	土壙221	勝間田	鉢	(2960)	—	—	浅黄色(25Y 7・3)		
1488		土師質	羽釜	2200	—	—	鈍橙色(5Y R 6・4)	スス付着。	
1489		土師質	鍋	3040	—	—	鈍橙色(5Y R 6・4)		
1490		土師質	鍋	3700	—	—	鈍橙色(5Y R 6・3)		
1491	土壙223	土師器	杯	(1230)	—	—	黒褐色(25Y 3・1)		
1492	土壙223	瓦質	鍋	(2440)	—	—	灰色(N 4・)		
1493		土師器	皿	800	—	120	鈍黄橙色(10Y R 6・4)		
1494		土師器	皿	840	480	120	鈍橙色(75Y R 6・4)		
1495		土師器	皿	740	(560)	(145)	橙色(5Y R 6・6)		
1496		土師器	皿	820	(540)	(165)	橙色(25Y R 6・6)		
1497		土師器	皿	800	540	145	橙色(5Y R 6・6)	外面—へラ切り。	
1498		土師器	皿	1000	680	205	鈍黄橙色(10Y R 6・3)	外面—糸切り。	
1499		土師器	碗	(1300)	—	—	鈍黄橙色(10Y R 6・4)		
1500		瓦質	鍋	—	—	—	灰色(75Y 5・1)		
1501		勝間田	甕	—	—	—	暗赤褐色(25Y R 3・3)		
1502		土師器	皿	(1020)	(770)	(145)	鈍橙色(75Y R 6・4)	外面—へラ切り	
1503	土壙225	青白磁	蓋	基部 (75)	—	—	明緑灰色(10G Y 7・1)		青白磁蓋?蓋 12~13C代
1504		白磁	碗	—	—	—	灰白色(75Y 7・2)		
1505		瓦質	鍋	—	—	—	黄灰色(25Y 6・1)		
1506		土師器	小皿	1280	—	240	浅黄橙色(75Y R 8・4)	外面—へラ切り。	
1507		土師器	小皿	640	460	140	鈍黄橙色(10Y R 7・4)		
1508		土師器	小皿	780	620	160	浅黄橙色(75Y R 8・4)		
1509		土師器	小皿	930	640	160	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面—糸切り。	
1510		土師器	小皿	940	600	160	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面—糸切り。	
1511		土師器	小皿	930	640	160	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面—糸切り。	
1512		土師器	小皿	930	640	160	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面—糸切り。	
1513	堀 1	土師器	杯	1260	620	35~ 395	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面—糸切り。	
1514		土師器	杯	—	650	—	灰白色(25Y 7・1)	外面—糸切り。	
1515		瓦質	羽釜	2520	—	—	黄灰色(25Y 5・1)		
1516		備前	播鉢	—	—	—	灰黄色(25Y 7・2)		
1517		備前	播鉢	—	—	—	暗赤褐色(25Y R 3・3)		



土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1518	堀1	備前	播鉢	—	—	—	灰黄褐色(10Y R 5・2)		
1519		備前	播鉢	—	—	—	灰赤色(2.5Y R 4・2)		
1520		備前	播鉢	3000	(1420)	1150	鈍赤褐色(2.5Y R 5・4)		
1521		備前	甕	(2800)	—	—	灰黄褐色(10Y R 6・2)		
1522		備前	甕	3840	—	—	黄灰色(2.5Y 6・1)		
1523		土師器	小皿	760	(575)	130	鈍橙色(7.5Y R 7・3)		
1524		瓦質	羽釜	—	—	—	灰色(7.5Y 6・1)		
1525		須恵器	鉢	—	—	—	灰色(5Y 5・1)		
1526		土師器	鍋	—	—	—	灰白色(10Y R 8・2)		
1527		土師器	鍋	—	—	—	浅黄橙色(10Y R 8・3)		
1528		肥前系	椀	—	—	—	灰白色(5Y 8・1)		
1529		備前	播鉢	2350	—	—	鈍赤褐色(5Y R 4・3)		
1530	備前	甕	(4250)	—	—	黄灰色(2.5Y 6・1)			
1531	土師器	皿	790	560	16~17	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面—底部糸切り。		
1532	土師器	小皿	830	600	12~15	橙色(7.5Y R 7・6)	外面—底部糸切り。		
1533	土師器	小皿	760	(580)	(160)	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面—		
1534	土師器	杯	1120	700	345	鈍橙色(7.5Y R 7・4~6・4)	外面—糸切り後ナデ。		
1535	土師器	杯	—	(1000)	—	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面—糸切り後ナデ。		
1536	土師器	皿	(1880)	(920)	(310)	鈍黄橙色(10Y R 7・3)			
1537	青磁	碗	—	530	—	オリーブ灰色(10Y 6・2)		15世紀	
1538	青白磁	梅瓶	—	(1080)	—	明緑灰色(5G Y 7・1)		13C中頃	
1539	土師器	杯	—	(720)	(230)	浅黄橙色(10Y R 8・3)	外面—糸切り?		
1540	土師器	小皿	740	670	120	鈍橙色(5Y R 7・4)	外面—糸切り?		
1541	土師器	小皿	800	(640)	(150)	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面—糸切り?		
1542	土師器	小皿	71~725	65~66	140	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面—糸切り?		
1543	土師器	椀	—	(440)	—	鈍黄橙色(10Y R 7・3)			
1544	瓦質	鍋	—	—	—	灰色(N 4・)			
1545	瓦質	羽釜	—	—	—	灰白色(2.5Y 8・2)			
1546	勝間田	椀	(1520)	—	—	灰色(5Y 5・1)			
1547	瓦質	羽釜	—	—	—	暗灰色(N 3・)			
1548	備前	播鉢	(2480)	—	—	灰褐色(7.5Y R 5・2)			
1549	備前	播鉢	(2540)	—	—	鈍赤褐色(5Y R 5・3)			
1550	白磁	碗	1180	—	—	淡水色			
1551	青花	碗	—	410	—	水色		景德鎮回龍文皿。16C第3四半期。	
1552	青磁	碗	—	(340)	—	赤褐色(5Y R 4・6)		14世紀代	
1553	土師器	杯	—	(940)	—	鈍橙色(7.5Y R 6・4)	外面—底部へラ切りのちナデ。		
1554	土師器	小皿	(800)	(580)	140	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面—糸切り?		
1555	土師器	小皿	740	58~59	16~18	浅黄橙色(7.5Y R 8・4)	外面—糸切り?		
1556	土師器	小皿	745	520	13~17	灰白色(7.5Y R 8・2)	外面—糸切り?		
1557	瓦質	火鉢	—	—	—	灰色(N 5・)			
1558	備前	播鉢	(2560)	—	—	灰色(5Y 6・1)			
1559	土師器	小皿	725	640	10~145	灰白色(10Y R 8・2)	外面—糸切り。		
1560	土師器	小皿	670	540	140	橙色(5Y R 6・6)	外面—へラ切り。		
1561	土師器	小皿	650	540	150	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面—糸切り。		
1562	土師器	小皿	(880)	(440)	(195)	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面—糸切り。		
1563	土師器	小皿	970	720	175	橙色(5Y R 6・6)	外面—糸切り。		
1564	土師器	小皿	920	690	21~22	橙色(7.5Y R 6・6)	外面—糸切り。		
1565	土師器	皿	1460	900	22~26	灰白色(10Y R 8・2)	外面—糸切り。		
1566	土師器	皿	1400	920	260	鈍橙色(7.5Y R 7・3)	外面—糸切り。		
1567	土師器	皿	1400	(890)	—	灰白色(2.5Y 8・2)	外面—糸切り。		
1568	土師器	杯	1200	1000	380	浅黄橙色(10Y R 8・4)	外面—ナデ。		
1569	土師器	杯	1220	(870)	390	鈍黄橙色(10Y R 6・3)	外面—糸切り。		
1570	備前	壺	880	—	—	赤褐色(10R 5・3)			
1571	瀬戸美濃	香炉	860	520	285	灰黄色(2.5Y 7・2)			
1572	備前	播鉢	(2240)	—	—	黒褐色(5Y R 3・1)			
1573	備前	播鉢	(3260)	—	—	暗赤褐色(10R 3・2)			
1574	備前	播鉢	(2560)	—	—	灰赤色(2.5Y R 4・2)			
1575	備前	播鉢	(3040)	—	—	褐灰色(7.5Y R 5・1)			
1576	備前	甕	(3520)	—	—	灰褐色(7.5Y R 4・2)			
1577	瀬戸美濃	天目碗	—	—	—	黒色(5Y R 17・1)		10期14C末	
1578	肥前	天目碗	—	(380)	—	赤褐色(10R 5・3)	高台—削り出し。	唐津17C初。	
1579	青磁	碗	(1600)	—	—	オリーブ灰色(10Y 6・2)		13c中	
1580	青磁	碗	—	—	—	明緑灰色(5G 7・1)		13C中	
1581	青磁	碗	(1300)	—	—	オリーブ灰色(10Y 6・2)		16世紀	
1582	青磁	碗	(1540)	—	—	オリーブ灰色(10Y 6・2)		14世紀末~15世紀	

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1583	堀3	青磁	碗	(1500)	—	—	明緑灰色(7.5GY7.1)		14~15世紀
1584		青磁	碗	—	560	—	オリブ灰色(10Y6.2)		15世紀後半
1585		土師器	小皿	740	600	100	鈍橙色(5YR7.4)	外面—ヘラ切り。	
1586		備前	小皿	860	—	—	灰色(N6.)	外面—ヨコナデ。内面—ヨコナデ。	
1587		青磁	碗	—	高台径78	—	灰白色(5Y7.2)		
1588		青磁	碗	—	(1040)	—	黒褐色(7.5YR3.1)		
1589		備前	播鉢	(2820)	—	—	黄灰色(2.5Y6.1)		
1590		備前	播鉢	2460	—	—	赤灰色(2.5YR4.1)		
1591		備前	播鉢	2490	—	—	赤褐色(10R5.3)		
1592		瓦質	火鉢	—	—	—	灰色(N5.1)		
1593		瓦質	風炉	—	—	—	灰色(N4.)		
1594		青磁	碗	—	—	—	オリブ灰色(10Y6.2)		
1595		青磁	碗	—	—	—	オリブ灰色(10Y6.2)		
1596		青磁	碗	—	420	—	オリブ灰色(10Y6.2)		15世紀末~16世紀
1597		備前	壺	—	660	—	鈍赤褐色(2.5YR4.4)		
1598		備前	播鉢	—	—	—	鈍赤褐色(5YR4.3)		
1599		須恵器	播鉢	—	—	—	灰色(5Y4.1)		
1600		備前	播鉢	—	—	—	暗赤褐色(5YR3.3)		
1601		備前	播鉢	(2220)	—	—	暗褐色(7.5YR3.3)		
1602		天目	碗	(1240)	—	—	暗褐色(7.5YR5.6)		中国産14C代?
1603	堀4	土師器	杯	—	540	—	褐灰色(10YR6.1)	外面—ヘラ切り。	
1604		瓦質	播鉢	—	—	—	浅黄橙色(10YR8.4)		
1605		瓦質	鍋	(2780)	—	—	暗灰黄色(2.5Y5.2)		
1606	溝23	土師器	小皿	740	680	170	鈍黄橙色(10YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1607		土師器	小皿	700	600	140	鈍黄橙色(10YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1608		土師器	小皿	720	620	160	橙色(7.5YR7.6)	外面—糸切り後ナデ。	
1609		土師器	小皿	720	560	160	橙色(5YR7.6)	外面—糸切り後ナデ。	
1610		土師器	小皿	740	560	140	鈍黄橙色(10YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1611		土師器	小皿	740	480	170	鈍橙色(7.5YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1612		土師器	小皿	720	550	145	鈍黄橙色(10YR7.3)	外面—糸切り後ナデ。	
1613		土師器	小皿	770	520	150	橙色(5YR7.6)	外面—ヘラ切り後ナデ。内面—黒い付着物。	
1614		土師器	小皿	920	670	130	鈍橙色(7.5YR7.3)	外面—糸切り後ナデ。	
1615		土師器	小皿	940	700	160	灰白色(2.5Y8.2)	外面—糸切り後ナデ。	
1616		土師器	小皿	740	560	170	橙色(7.5YR7.6)	外面—糸切り後ナデ。	
1617		土師器	小皿	760	580	160	鈍黄橙色(10YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1618		土師器	小皿	(820)	(610)	(160)	鈍黄橙色(10YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1619		土師器	小皿	(820)	(560)	(140)	鈍橙色(7.5YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1620		土師器	小皿	740	570	120	浅黄色(2.5Y7.3)	外面—糸切り後ナデ。	
1621		土師器	杯	1030	750	280	浅黄橙色(10YR8.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1622		土師器	杯	(1130)	(770)	(330)	浅黄橙色(10YR8.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1623		土師器	杯	(1220)	(750)	(340)	鈍橙色(7.5YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1624		土師器	杯	—	840	—	鈍橙色(7.5YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1625		土師器	杯	—	850	—	鈍黄橙色(10YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1626	土師器	皿	1390	820	270	鈍橙色(7.5YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。		
1627	土師器	皿	1420	830	260	橙色(5YR7.6)	外面—糸切り後ナデ。		
1628	備前	甕	—	—	—	灰色(10Y5.1)			
1629	溝25	土師器	小皿	—	(580)	—	鈍黄橙色(10YR7.2)	外面—糸切り。	
1630		備前	播鉢	—	—	—	灰赤色(2.5YR4.2)		
1631		備前	播鉢	(1450)	(750)	(690)	灰黄褐色(10YR5.2)	内面—磨減著しい。	
1632	溝31	勝間田	椀	—	—	—	灰色(7.5Y6.1,5.1)		
1633		勝間田	小皿	(780)	—	—	灰色(N5.)		
1634		青磁	碗	—	—	—	灰オリブ色(7.5Y5.2)		
1635		瓦質	羽釜	—	—	—	灰色(N5.)		
1636		瓦質	羽釜	—	—	—	灰色(5Y6.1)		
1637		土師器	鍋	(3290)	—	—	灰黄褐色(10YR5.2)		
1638	溝34	青磁	碗	—	(600)	—	暗オリブ灰色(2.5GY4.1)		14世紀代前半皿
1639		青花	碗	(1020)	—	—	灰白色(7.5Y7.1)		五彩碗。16C後半。
1640	溝35	備前	椀	960	(630)	295	鈍赤褐色(10R5.3)		
1641		備前	椀	900	—	—	鈍赤褐色(2.5YR5.4)	内・外面—ナデ。煤付着。	
1642		肥前系?	皿	970	—	—	灰白色(2.5Y8.2)		肥前(内野山)か? 17C前?
1643	土器溜まり12	土師器	小皿	68~72	55~60	14~16	鈍黄橙色(10YR7.4)	外面—糸切り後ナデ。	
1644		土師器	小皿	740	550	115~125	鈍黄橙色(10YR7.3)	外面—糸切り。	
1645		土師器	小皿	720	—	(130)	鈍橙色(7.5YR7.4)	外面—糸切り。	
1646		土師器	小皿	730	520	13~14	鈍橙色(7.5YR7.4)	外面—糸切り。	
1647		土師器	小皿	710	530	13~14	鈍黄橙色(10YR7.4)	外面—糸切り。	
1648		土師器	小皿	730	570	14~15	鈍橙色(7.5YR7.4)	外面—ヘラ切り。	

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1649	土器溜まり 12	土師器	小皿	720	520	15~17	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一糸切り。	
1650		土師器	小皿	750	590	13~15	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。	
1651		土師器	小皿	740	560	14~17	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面一糸切り。	
1652		土師器	小皿	740	570	15~16.5	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面一糸切り。	
1653		土師器	小皿	760	560	15~16	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面一糸切り。	
1654		土師器	皿	940	640	15~17	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一糸切り。	
1655		土師器	皿	1000	610	17~18	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面一糸切り。	
1656		土師器	皿	1490	800	25~26.5	橙色(7.5Y R 7・6)	外面底部一軽い押圧後ナデ。	
1657		土師器	皿	1470	800	22~26.5	橙色(7.5Y R 7・6)	外面底部一軽い押圧後ナデ。	
1658		土師器	皿	1480	830	290	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面底部一軽い押圧後ナデ。	
1659		土師器	小皿	730	630	14~13	灰白色(10Y R 8・2)	外面一糸切り。	
1660		土師器	小皿	730	60~61	185~14	浅黄橙色(10Y R 8・3)	外面一糸切り。	
1661	土師器	小皿	740	640	130	灰白色(10Y R 8・2)	外面一糸切り。		
1662	土師器	小皿	745	600	160	鈍橙色(7.5Y R 7・3)	外面一糸切り後ナデ。		
1663	土師器	小皿	760	550	155~165	浅黄橙色(10Y R 8・3)	外面一糸切り。		
1664	土師器	小皿	770	560	14~16.5	鈍橙色(5 Y R 6・4)	外面一糸切り。		
1665	土師器	小皿	790	520	130	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一糸切り後ナデ。		
1666	土師器	小皿	800	56~57.5	145~155	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一糸切り後ナデ。		
1667	土師器	小皿	820	61~63	140	鈍黄橙色(10Y R 6・4)	外面一糸切り。		
1668	土師器	皿	1180	700	255	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1669	土師器	杯	1135~115	64~68.5	32~33	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一糸切り。		
1670	土師器	杯	1150	670	34.5~34	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1671	土師器	杯	1280	740	310	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1672	土師器	杯	1180	660	35~37.5	鈍橙色(7.5Y R 7・3)	外面一糸切り。		
1673	土師器	杯	1210	69~70.5	330	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一糸切り。		
1674	土師器	杯	1220	620	32~36.5	浅黄橙色(7.5Y R 8・3)	外面一糸切り。		
1675	土師器	杯	1270	620	360	灰白色(10Y R 8・2)	外面一糸切り後ナデ。		
1676	土師器	杯	680	1285	335	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1677	土師器	杯	1335	720	330	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1678	土師器	杯	1215~128	69~72	34~37.5	鈍黄橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。スス付着。		
1679	土師器	杯	1200	700	335	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1680	土師器	杯	1205	69~71	345	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一糸切り。		
1681	土師器	杯	1250	119~121	325	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1682	土師器	杯	1270	670	34~34	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1683	土師器	杯	1380	695	345	鈍黄橙色(10Y R 7・3)	外面一糸切り。		
1684	土師器	杯	1220	72~73	34~33	鈍黄橙色(10Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1685	土師器	杯	1315	800	350	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1686	土師器	杯	—	56~57	—	浅黄橙色(10Y R 8・3)	外面一糸切り。		
1687	土師器	杯	—	700	—	鈍橙色(7.5Y R 7・3)	外面一糸切り。		
1688	土師器	杯	—	64~65	—	浅黄橙色(10Y R 8・3)	外面一糸切り後ナデ。		
1689	土師器	杯	—	670	—	鈍橙色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1690	瀬戸美濃	盤	2500	—	—	灰黄色(2.5Y 7・2)			
1691	土師器	小皿	71~72	61~62	130	浅黄橙色(10Y R 8・3)	外面一糸切り。		
1692	土師器	小皿	770	630	130	浅黄橙色(10Y R 8・4)	外面一糸切り。		
1693	土師器	小皿	740	580	090	浅黄橙色(10Y R 8・3)	外面一糸切り。		
1694	土師器	小皿	73~74	60~62	130	灰白色(7.5Y R 8・2)	外面一糸切り。		
1695	土師器	小皿	880	650	140	橙色(5 Y R 7・6)	外面一糸切り。		
1696	土師器	小皿	850	680	125	灰白色(10Y R 8・2)	外面一糸切り。		
1697	土師器	皿	960	780	130	淡橙色(5 Y R 8・4)	外面一糸切り。		
1698	土師器	皿	900	730	180	鈍橙色(7.5Y R 7・3)	外面一糸切り。		
1699	土師器	皿	1010	790	170	浅黄橙色(7.5Y R 8・4)	外面一糸切り。		
1700	土師器	皿	1480	860	260	褐灰色(10Y R 5・1)	外面一糸切り。		
1701	備前	掃鉢	3250	—	—	赤褐色(10R 5・4)			
1702	土師器	小皿	780	610	150	橙色(5 Y R 6・6)	外面一糸切り。		
1703	土師器	小皿	780	620	130	橙色(2.5Y R 6・6)	外・内面一ナデ。		
1704	土師器	小皿	800	580	150	橙色(2.5Y R 6・6)	外面一糸切り後ナデ。		
1705	土師器	小皿	780	620	140	橙色(5 Y R 6・6)	外面一糸切り後ナデ。		
1706	土師器	皿	1030	690	170	橙色(7.5Y R 7・6)	外面一糸切り後ナデ。		
1707	土師器	皿	1250	760	245	鈍橙色(7.5Y R 7・4)			
1708	土師器	皿	1380	850	270	鈍黄橙色(10Y R 7・4)			
1709	土師器	ミニチュア羽釜	365	—	—	灰色(5 Y 5・1)			
1710	土師器	皿	1050	980	255~34	灰褐色(7.5Y R 6・2)	外面一糸切り。		
1711	土器溜まり	備前 甕	4620	—	—	暗赤褐色(2.5Y 3・4)			
1712	土器溜まり	備前 甕	4360	—	—	暗赤褐色(2.5Y R 3・2)			

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1713	窪地10	土師器	皿	1430	(800)	315	灰黄褐色(10Y R 5・2)	外面一ヘラ切り。	
1714		土師器	小皿	(800)	(560)	140	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面一ヘラ切り。	
1715	窪地11	土師器	小皿				鈍褐色(7.5Y R 6・4)		
1716		瓦質	鍋	—	—	—	灰色(7.5Y 4・1)		
1717		瓦質	鍋	(2320)	—	—	灰色(5 Y 6・1)		
1718		瓦質	鍋	(2280)	—	—	オリーブ褐色(2.5Y 4・3)	スス付着。	
1719	窪地12	土師器	小皿	720	490	170	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一糸切り？	
1720		備前	小皿	675	380	200	灰色(5 Y 6・1)		
1721		土師器	杯	(1235)	850	445	浅黄褐色(7.5Y R 8・4)	外面一糸切り後ナデ。	
1722		瓦質	鍋	2275	—	—	灰白色(N 7・)		
1723		白磁	皿	(1180)	—	—	灰白色(2.5Y 8・1)		14世紀代
1724		白磁	碗	(1720)	—	—	灰白色(5 Y 7・2)		12世紀代 白磁
1725		白磁	碗	(1240)	—	—	灰オリーブ色(5 Y 6・2)		V類 15世紀代
1726		白磁	碗	(1480)	—	—	鈍黄色(2.5Y 6・3)		
1727		天目	碗	(1400)	—	—	褐色(10Y R 4・4)		
1728		柱穴1	青花	皿	—	—	—	明緑灰色(7.5G Y 8・1)	
1729	青花		碗	1460	—	—	明緑灰色(7.5G Y 7・1)		16C前半～16C中玉取り獅子皿。景德鎮窯。
1730	柱穴2	青磁	碗	(1440)	—	—	オリーブ灰色(2.5G Y 6・1)		14C～15C前半龍泉窯
1731		青磁	器台	580	—	—	灰オリーブ色(7.5Y 5・3)		14C～15C前半龍泉窯
1732	柱穴3	土師器	皿	780	560	170	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一ヘラ切り。	
1733		備前	搦鉢	—	—	—	灰褐色(5 Y R 4・2)		
1734	柱穴4	天目	碗	1080	—	—	黒色(10Y R 2・1)		16C後半～17C大窯皿期
1735	柱穴5	肥前	袋物	—	—	—	明緑灰色(7.5G Y 8・1)		景德鎮16C末～17C初
1736	柱穴6	青花	碗	1240	—	—	灰白色(5 G Y 8・1)		16C後～17C初。景德鎮窯。碗
1737	柱穴7	瀬戸美濃	皿	1100	(620)	(260)	オリーブ黄色(5 Y 6・4)		美濃産灰釉折縁皿(瀬戸)大窯皿期(1570年代)
1738	柱穴8	天目	皿	1300	—	—	黒褐色(7.5Y R 3・2)		16C代か？
1739	柱穴9	瀬戸美濃	皿	1190	(670)	240	灰オリーブ色(7.5Y 5・3)		
1740	柱穴10	土師器	小皿	750	(520)	1300	鈍褐色(7.5Y R 7・3)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1741		土師器	皿	1460	870	285	鈍褐色(7.5Y R 7・3)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1742	柱穴11	白磁	碗	1820	—	—	明オリーブ灰色(2.5G Y 7・1)		12C～13C
1743	柱穴12	土師器	杯	1380	—	—	鈍褐色(7.5Y 7・3)		
1744		瓦質	羽釜	3120	—	—	灰色(7.5Y 4・1)		
1745	柱穴13	土師器	杯	1170	86～88	350	明褐色(7.5Y R 7・2)	A 4 S 6	
1746		備前	搦鉢	770	600	130	鈍黄褐色(10Y R 7・4)		
1747	柱穴14	備前	甕	4740	—	—	灰黄色(2.5Y 7・2)		
1748		備前	搦鉢	—	—	—	鈍褐色(7.5Y R 5・3)		
1749	A地区の遺物	青磁	碗	—	580	—	オリーブ灰色(10Y 6・2)		15世紀前半
1750		青磁	碗	—	660	—	オリーブ灰色(10Y 6・2)		15世紀前半
1751		青磁	碗	—	540	—	緑灰色(7.5G Y 6・1)		15世紀前半
1752		青磁	盤	—	—	—			
1753		白磁	碗	—	560	—	灰白色(5 Y 7・1)		
1754		瓦質	ミニチュア羽釜	400	430	305	灰色(N 6・1)		
1755		B地区の遺物	土師器	杯	1160	900	400	浅黄褐色(7.5Y R 8・4)	外面一糸切り後ナデ。
1756	土師器		杯	1160	470	370	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一糸切り。	
1757	土師器		杯	1320	800	360	鈍褐色(7.5Y R 6・3)	外面一ナデ。	
1758	土師器		杯	1030	660	24～25	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一糸切り。	
1759	土師器		小皿	750	530	135	鈍褐色(7.5Y R 7・4)	外面一糸切り。	
1760	土師器		小皿	830	640	150	褐色(5 Y R 6・6)	外面一糸切り。	
1761	土師器		小皿	800	605	140	淡褐色(5 Y R 8・4)	外面一糸切り。	
1762	土師器		小皿	900	620	1850	褐色(5 Y R 7・6)	外面一糸切り。	
1763	土師器		皿	104～98	62～68	16～17	鈍褐色(7.5Y 7・3)	外面一糸切り。	
1764	土師器		皿	1060	740	170	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一糸切り。	
1765	土師器		皿	1560	700	280	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一糸切り？	
1766	備前		壺	74～83	—	—	鈍褐色(7.5Y R 5・3)		
1767	瀬戸	輪花皿	—	—	—	灰白色(5 Y 7・1)			
1768	勝間田	椀	(1460)	—	—	灰色(5 Y 5・1)			
1769	勝間田	椀	—	560	—	灰色(5 Y 5・1)			
1770	瀬戸焼	卸皿	—	—	—	黄灰色(2.5Y 6・1)			
1771	瀬戸美濃	卸皿	—	—	—	灰白色(7.5Y 7・1)			
1772	瀬戸美濃	天目碗	(1160)	—	—	暗褐色(10Y R 3・3)			

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考	
				口径	底径	器高				
1773	B地区の遺物	常滑	大甗	—	—	—	黒褐色(10Y R 3・2)			
1774		磁州系	壺	(1900)	—	—	灰白色(5 Y 8・1)		磁州窯系鉄絵模倣白花粧元・明代	
1775	C地区の遺物	土師器	小皿	790	535~54	12~165	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面一ヘラ切り。		
1776		土師器	小皿	740	540	140	鈍褐色(7.5 Y R 7・4)	外面一ヘラ切り。		
1777		土師器	小皿	740	(700)	140	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面一ヘラ切り。		
1778		土師器	小皿	780	630	140	鈍褐色(7.5 Y R 7・4)	外面一ヘラ切り。		
1779		土師器	小皿	670	440	140	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一ヘラ切り。		
1780		土師器	小皿	78~80	60~61	11~11.5	褐色(5 Y R 6・6)	外面一ヘラ切り。		
1781		土師器	小皿	700	680	19~20	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一ヘラ切り。		
1782		土師器	皿	1040	(760)	155	浅黄褐色(10Y R 8・3)	外面一ヘラ切り。		
1783		土師器	皿	1110	640	220	鈍褐色(7.5 Y R 7・4)	外面一ヘラ切り。		
1784		土師器	皿	1100	(620)	(235)	褐色(5 Y R 7・6)	外面一ヘラ切り。		
1785		土師器	皿	(1300)	(840)	245	鈍褐色(7.5 Y R 7・3)			
1786		土師器	皿	1440	840	245	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一糸切り。		
1787		土師器	皿	1450	(800)	(285)	灰白色(10Y R 8・2)	外面一糸切り。		
1788		土師器	皿	1420	900	28~29	鈍褐色(7.5 Y R 7・3)	外面一糸切り。		
1789		土師器	杯	1220	50~55	290	浅黄褐色(10Y R 8・4)	外面一糸切り・後ナデ。		
1790		土師器	杯	1200	820	340	褐色(7.5 Y R 7・6)			
1791		土師器	杯	1080	—	—	灰黄色(2.5 Y 7・2)			
1792		土師器	杯	1080	740	440	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面一糸切り・後ナデ。		
1793		土師器	椀?	—	560	—	鈍褐色(5 Y R 7・4)			
1794		土師器	香炉	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・4)			
1795		C地区の遺物	瓦質	羽釜	2520	—	123~126	灰色(7.5 Y 4・1)		
1796			瓦質	羽釜	2680	—	—	灰色(7.5 Y 4・1)		
1797			備前	壺	—	(1120)	—	灰色(5 Y 5・1)		
1798			備前	播鉢	2700	(600)	117~1225	灰褐色(7.5 Y R 4・2)		
1799			備前	播鉢	2560	(820)	(1065)	鈍赤褐色(5 Y R 5・3)		
1800			須恵器	播鉢	2940	—	—	灰色(N 4・)		
1801			東播系	捏鉢	—	—	—	灰黄色(2.5 Y 7・2)		
1802			瀬戸美濃	鉢皿	—	—	—	灰オリーブ色(7.5 Y 5・2)		
1803			瀬戸美濃	鉢皿	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・2)		
1804			瀬戸美濃	天目碗	—	—	—	黒色(N 2・)		16世紀後半~17世紀初
1805	青磁		碗	(2560)	—	—	オリーブ灰色(2.5 Y 6・1)		15世紀前後?	
1806	青磁		碗	—	(560)	—	オリーブ灰色(2.5 Y 6・1)		16世紀後半	
1807	青磁		碗	(1500)	—	—	明オリーブ灰色(5 G Y 7・1)		15世紀後半	
1808	青磁		碗	(1520)	—	—	明緑灰色(7.5 G Y 7・1)		15世紀後半	
1809	青磁		碗	—	500	—	オリーブ灰色(2.5 Y 6・1)		13C後半	
1810	青磁		碗	—	550	—	灰オリーブ色(5 Y 5・2)		14世紀前後	
1811	青磁		碗	—	520	—	オリーブ灰色(5 G Y 6・1)		15世紀前半	
1812	白磁		碗	—	600	—	灰白色(5 Y 7・1)		12~13世紀	
1813	青磁		盤	—	(740)	—	灰オリーブ色(7.5 Y 4・2)		14世紀後半	
1814	肥前		皿	1940	—	—	灰色(10Y 6・1)		肥前系大皿18世紀代。	
1815	青磁		器台	—	—	—	オリーブ灰色(2.5 Y 6・1)	足の位置一3カ所残で1カ所こわれている。		
1816	土師器		杯	(1170)	(840)	(370)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面一ヘラ切り後ナデ。		
1817	土師器		杯	1070	—	(370)	浅黄褐色(7.5 Y R 8・4)	外面一ヘラ切り。		
1818	土師器		杯	—	(850)	—	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面一ヘラ切り。		
1819	土師器		小皿	735~695	635~610	140	鈍褐色(7.5 Y R 7・4)	外面一ヘラ切り。	灯明皿	
1820	土師器		小皿	730	540	175	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面一糸切り後ナデ。		
1821	土師器		小皿	815	545	180	黄灰色(2.5 Y 6・1)	外面一糸切り。	灯明皿	
1822	土師器		小皿	840	640	165	褐色(7.5 Y R 7・6)	外面一糸切り。		
1823	土師器		皿	1090	—	(225)	褐色(7.5 Y R 7・6~6・6)	外面一糸切り。		
1824	土師器	皿	1395	—	—	灰白色(10Y R 8・2)				
1825	土師器	皿	1240	890	—	鈍褐色(7.5 Y R 7・4)				
1826	土師器	小皿	720	590	120	浅黄褐色(7.5 Y R 8・3)	外面一ヘラ切り。			
1827	土師器	小皿	695	600	165	灰白色(2.5 Y 8・2)		灯明皿		
1828	備前	播鉢	—	—	—	灰色(5 Y 6・1)				
1829	亀山焼	甗	—	—	—	灰色(N 6・)				
1830	瀬戸	三足盤	—	—	—	オリーブ黄色(7.5 Y 6・3)		14C末		
1831	瓦質	羽釜	—	—	—	灰色(5 Y 6・1)				
1832	青磁	碗	1525	—	—	オリーブ灰色(10Y 5・2)		15世紀後半		
1833	青磁	碗	(1070)	—	—	緑灰色(10G 6・1)		15世紀後半		
1834	青磁	碗	—	(760)	—	オリーブ灰色(5 G Y 6・1)		13C中葉		
1835	青磁	碗	—	490	—	灰白色(5 Y 7・1)		同安窯系13c前半		
1836	E地区の遺物	土師器	皿	980	790	180	浅黄褐色(7.5 Y R 8・6)	外面一ヘラ切り。		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1837	E地区の遺物	土師器	小皿	720	—	170	橙色(5YR7・6)	外面一ヘラ切り。	
1838		土師器	小皿	760	360	160	鈍橙色(7.5YR6・4)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1839		土師質	小皿	8・10	—	—	灰色(5Y6・1)		
1840		土師器	小皿	670	405	100	鈍黄橙色(10YR7・3)	外面一ヘラ切り後ナデ。	
1841		土師器	皿	13・10	820	240	浅黄橙色(7.5YR8・4)		
1842		土師器	鍋	—	—	—	黒褐色(2.5Y3・2)		
1843		土師器	鍋	(3100)	—	—	灰褐色(7.5YR5・2)		
1844		備前	甕	—	—	—	灰色(N6・)		
1845		備前	甕	—	—	—	黒褐色(10YR3・2)		
1846		備前	甕	—	—	—	鈍赤褐色(2.5YR5・3)		
1847		東播系	捏鉢	—	—	—	灰褐色(5YR4・2)		
1848		備前	摺鉢	—	—	—	赤褐色(10R5・3)		
1849		備前	摺鉢	—	—	—	赤灰色(2.5YR5・1)		
1850		備前	摺鉢	—	—	—	橙色(2.5YR6・6)		
1851		備前	摺鉢	—	—	—	灰黄褐色(10YR4・2)		
1852		備前	摺鉢	—	—	—	鈍赤褐色(2.5YR5・2)		
1853		備前	摺鉢	—	—	—	黄灰色(2.5Y4・1)		
1854		備前	摺鉢	—	—	—	灰色(7.5Y4・1)		
1855		備前	摺鉢	3150	—	—	赤灰色(2.5YR4・1)		
1856		備前	甕	—	(1240)	—	黄灰色(2.5Y4・1)		
1857		備前	摺鉢	(2410)	—	—	鈍赤色(7.5R4・4)		
1858		備前	摺鉢	(2790)	—	—	褐灰色(7.5YR4・1)		
1859		備前	甕	—	(3200)	—	灰色(N6・)		
1860		勝間田	椀	—	—	—	灰色(7.5Y6・1)		
1861		勝間田	椀	—	565	—	灰白色(5Y7・1)		
1862		土師器	羽釜	(1820)	—	—	灰白色(2.5Y8・2)		
1863		瓦質	羽釜	(2070)	—	—	灰白色(5Y7・1)		
1864		瓦質	鉢	2660	—	—	灰色(7.5Y4・1)		
1865		土師	羽釜	—	—	—	灰色(5Y4・1)		
1866		瓦質	羽釜	—	—	—	鈍橙色(7.5YR6・4)		
1867		瓦質	羽釜	(2440)	—	—	灰色(7.5Y4・1)		
1868		瓦質	羽釜	2500	—	—	暗オリーブ灰色(2.5GY3・1)	スス附着。	
1869		瓦質	羽釜	(2100)	—	—	暗灰色(N3・)	スス附着。	
1870		瓦質	火鉢	—	—	—	灰色(N4・)		
1871		青磁	碗	—	—	—	オリーブ灰色(5GY6・1)		13C中葉
1872		青磁	碗	(1160)	—	—	緑灰色(10GY6・1)		15世紀後半
1873		青磁	碗	—	—	—	オリーブ灰色(2.5GY6・1)		15世紀後半
1874		青磁	碗	—	—	—	灰オリーブ色(7.5Y5・2)		
1875		青磁	碗	(1200)	—	—	明オリーブ灰色(5GY7・1)		
1876		磁器	碗	(1440)	—	—	灰白色(N・8)		
1877		青磁	碗	(1470)	—	—	灰オリーブ色(7.5Y6・2)		
1878		青磁	碗	1060	—	—	灰オリーブ色(7.5Y6・2)		
1879		青磁	碗	—	540	—	灰白色(10Y7・2)		16世紀後半
1880		青磁	碗	—	500	—	オリーブ灰色(10Y6・2)		
1881		青磁	皿	—	—	—	緑灰色(7.5GY6・1)		16世紀後半
1882		青磁	鉢	(2200)	—	—	灰オリーブ色(7.5Y5・2)		15世紀後半
1883		青磁	稜花皿	(1070)	—	—	明緑灰色(7.5GY7・1)		15世紀後半
1884	青磁	皿	—	(530)	—	灰白色(5Y7・2)			
1885	白磁	碗	—	(560)	—	鈍黄橙色(10YR7・3)		V類 15世紀	
1886	白磁	碗	1100	540	360	灰白色(5GY8・1)		14世紀代	
1887	土師器	小皿	73~75	57~60	140	鈍橙色(7.5YR7・3)	外面一ヘラ切り。		
1888	土師器	小皿	760	460	190	橙色(7.5YR6・6)	外面一ヘラ切り。		
1889	土師器	小皿	730	52~55	100	橙色(7.5YR7・6)	外面一糸切り。		
1890	土師器	小皿	760	—	175	橙色(5YR7・6)	外面一糸切り。		
1891	土師器	小皿	760	62~63	155	浅黄橙色(10YR8・4)	外面一糸切り。		
1892	土師器	小皿	84~85	61~63	150	浅黄橙色(7.5YR8・4)	外面一糸切り。		
1893	土師器	小皿	855~87	65~66	12~13	鈍黄橙色(10YR6・3)	外面一糸切り。		
1894	土師器	小皿	84~85	73~74	11~14	鈍橙色(7.5YR6・4)	外面一糸切り。		
1895	土師器	杯	127~132	88~89	18~245	鈍橙色(7.5YR7・3)	外面一糸切り。		
1896	土師器	杯	142~146	88~91	22~33	鈍橙色(5YR7・4)	外面一糸切り。		
1897	土師器	杯	141~146	890	21~27	鈍黄橙色(10YR7・3)	外面一糸切り。		
1898	土師器	杯	140~148	935~95	33~20	浅黄橙色(7.5YR8・3)	外面一糸切り。		
1899	土師器	杯	860	660	405	浅黄橙色(7.5YR8・4)	外面一糸切り。		

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1900	F地区の遺物	瓦質	外耳鍋	2500	—	—	暗灰黄色(25Y 5・2))	スス付着。	
1901		瓦質	鍋	2980	(1980)	(1180)	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	スス付着。	
1902		備前	播鉢	—	—	—	灰色(N 5・)		
1903		備前	播鉢	—	—	—	灰褐色(5 Y R 4・2)		
1904		備前	播鉢	—	—	—	鈍褐色(75Y R 5・3)		
1905		備前	播鉢	—	—	—	鈍赤褐色(5 Y R 5・3)		
1906		備前	播鉢	—	—	—	灰色(5 Y 5・1)		
1907		土師質	椀	1350	51~53	53~57	鈍黄褐色(10Y R 5・3)	外面—ヨコナデ・底部糸切り。	勝間田 横 倣か?
1908		東播系	捏鉢	—	—	—	灰色(N 5・)		
1909		瀬戸美濃	平碗	—	—	—	灰オリーブ色(75Y 6・2)		
1910		瀬戸	碗	—	(450)	—	灰白色(5 Y 7・2)		
1911		青磁	碗	—	560	—	明緑灰色(75G Y 7・1)		
1912		瀬戸美濃	盤	—	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7・2)		
1913		瀬戸美濃	鉢	—	—	—	オリーブ黄色(5 Y 6・3)		
1914		瀬戸美濃	御皿	—	450	—	鈍黄褐色(10Y R 7・3)		
1915		青磁	碗	—	—	—	オリーブ灰色(10Y 6・2)		15前半
1916		青磁	碗	—	600	—	灰オリーブ色(10Y 5・2)		13C中葉
1917		青磁	碗	—	(480)	—	オリーブ灰色(10Y 5・2)		15前半。砥石に転用。
1918		白磁	碗	—	355	—	灰白色(10Y R 8・2)		15世紀代
1919	G地区の遺物	土師器	小皿	(820)	(640)	120	鈍黄褐色(10Y R 7・2)		
1920		土師器	小皿	770	600	190	鈍黄褐色(10Y R 7・2)		
1921		土師器	小皿	(800)	(550)	(150)	灰黄褐色(10Y R 6・2)		
1922		土師器	小皿	98~99	80~82	180	褐灰色(10Y R 4・1)		
1923		土師器	小皿	(900)	(725)	190	灰白色(10Y R 8・2)		
1924		土師器	杯	(1220)	(660)	(300)	浅黄褐色(10Y R 8・3)		
1925		土師器	杯	(1100)	72~78	380	浅黄褐色(75Y R 8・3)		
1926		土師器	杯	1200	720	375	鈍黄褐色(10Y R 7・2)		
1927		土師器	鍋	4240	—	—	鈍褐色(75Y R 5・3)	スス付着。	16世紀代。景徳鎮
1928		白磁	碗	1520	—	—	灰白色(10Y 8・1)		
1929	備前	甕	1600	—	—	灰赤色(10R 4・2)			
1930	須恵器	壺	1970	—	—	灰色(N 6・)			
1931	備前	播鉢	3500	—	—	オリーブ褐色(25Y 4・3)			
1932	備前	播鉢	3000	—	—	灰赤色(25Y R 4・2)			
1933	亀山焼	甕	4770	—	—	黄灰色(25Y 6・1)			
1934	瓦質	羽釜	1760	—	—	灰色(N 4・)	スス付着 (外面一部)		
1935	瓦質	鍋	3360	—	—	灰色(N 4・)			
1936	H地区の遺物	土師質	小皿	720	620	170	鈍褐色(75Y R 6・4)	外面—ヘラ切り。	
1937		土師器	皿	142~143	840	26~29	鈍褐色(5 Y R 7・4)	外面—ヘラ切り。	
1938		備前	播鉢	—	—	—	暗赤灰色(10Y 3・1)		
1939		瓦質	羽釜	—	—	—	黄灰色(25Y 4・1)	スス付着。	
1940		瓦質	鍋	2160	—	—	灰黄褐色(10Y R 5・2)		
1941	瓦質	鍋	3400	—	—	灰色(5 Y 5・1)	外面—スス付着。		
1942	H地区の遺物	瓦質	鍋	—	—	—	灰白色(25Y 8・1)		16世紀代。景徳鎮
1943		白磁	碗	—	—	—	灰白色(10Y 8・1)		14世紀代
1944		青磁	碗	—	52~53	—	灰色(5 Y 6・1)		12~13C代
1945	須恵器	杯	1380	1060	390	灰色(5 Y 6・1)			
1946	I地区の遺物	土師器	小皿	700	(480)	(140)	灰白色(10Y R 8・2)	外面—糸切り。	
1947		土師器	小皿	740	460	140	灰黄色(25Y 6・2)	外面—糸切り。	
1948		土師器	小皿	820	(600)	(180)	鈍褐色(75Y R 6・4)	外面—糸切り。	
1949		土師器	小皿	900	(300)	18	灰白色(10Y R 8・2)	外面—糸切り。	
1950		土師器	小皿	1080	720	160	灰黄褐色(10Y R 6・2)	外面—糸切り。	
1951		土師器	小皿	1020	(740)	(140)	灰白色(10Y R 8・2)	外面—糸切り。	
1952		土師器	小皿	92	700	12	浅黄色(25Y 7・3)	外面—糸切り。	
1953		備前	甕	—	—	—	暗オリーブ灰色(5 Y 4・3)		
1954		勝間田	椀	—	—	—	灰色(5 Y 6・1)		14C末
1955		瀬戸	椀	—	—	—	オリーブ黄色(5 Y 6・3)		
1956		瓦質	鍋	(3060)	—	—	黄褐色(25Y 5・3)		15世紀~16世紀
1957	青磁	碗	—	—	—	灰オリーブ灰色(10Y 5・2)			
1958	青磁	碗	—	—	—	オリーブ灰色(10Y 6・2)		14C後~15C	
1959	青磁	碗	—	—	—	オリーブ灰色(10Y 6・2)		14C後~15C	
1960	J地区の遺物	土師器	杯	123~126	860	36~45	浅黄褐色(10Y R 8・3)	外面—糸切り。	
1961		土師器	杯	1220	850	430	鈍褐色(75Y R 7・4)	外面—糸切り。	
1962		土師器	杯	1120	840	440	鈍褐色(75Y R 7・4)	外面—糸切り後ナデ。	
1963		土師器	杯	1160	940	36~40	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—糸切り後ナデ。	
1964		土師器	杯	1140	500	39~41	鈍褐色(75Y R 7・3)	外面—糸切り。	

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
1965	J地区の遺物	土師器	杯	1180	740	340	鈍橙色(7.5Y R 6.4)	外面一糸切り。	
1966		土師器	小皿	760	600	165~165	鈍黄褐色(10Y R 5.3)	外面一糸切り。	
1967		土師器	小皿	1280	550	17~205	鈍黄褐色(10Y R 7.4)	外面一糸切り。	
1968		土師器	小皿	780	630	140	橙色(5 Y R 6.6)	外面一糸切り。	
1969		土師器	小皿	780	640	160	浅黄褐色(10Y R 8.3)	外面一糸切り。	
1970		土師器	小皿	700	580	12~175	浅黄褐色(10Y R 8.3)	外面一糸切り後ナデ。	
1971		土師器	小皿	760	610	15~17	鈍橙色(7.5Y R 7.4)	外面一糸切り。	
1972		土師器	小皿	760	540	165~19	淡褐色(5 Y R 8.3)	外面一糸切り。	
1973		土師器	小皿	770	630	(14~17)	鈍橙色(7.5Y R 7.4)	外面一糸切り。	
1974		土師器	小皿	68~70	42~46	125~15	鈍褐色(7.5Y R 5.4)	外面一糸切り。	
1975		土師器	小皿	80(12.9)	690	165	鈍橙色(7.5Y R 7.4)	外面一糸切り。	
1976		土師器	小皿	910	56~62	20~22	橙色(7.5Y R 6.6)	外面一糸切り。	
1977		土師器	皿	1100	680	205	灰白色(10Y R 8.2)	外面一糸切り後ナデ。	
1978		土師器	皿	1140	800	13~18	鈍黄褐色(10Y R 7.2)	外面一糸切り後ナデ。板目痕。	
1979		土師器	皿	1380	810	260	灰白色(2.5Y 8.2)	外面一ヘラ切り。	
1980		土師器	皿	1380	600	210	褐色(5 Y R 6.6)	外面一ヘラ切り。	
1981		土師器	皿	1300	—	—	鈍黄褐色(10Y R 5.3)	外面一糸切り。	
1982		備前	椀	91~95	580	25~26	灰褐色(7.5Y R 6.2)		
1983		備前	皿	1310	680	200	灰黄褐色(10Y R 5.2)	内外面一うるし。底部ヘラ切り。	
1984		備前	壺	1080	—	995	鈍褐色(7.5Y R 5.3)		III b期
1985		備前	甃	5160	—	—	黄灰色(2.5Y 6.1)		III期
1986		備前	甃	3520	—	—	鈍赤褐色(5 Y R 4.3)		IV b期
1987		備前	甃	2600	—	—	暗灰黄色(2.5Y 5.2)		IV b期
1988		備前	播鉢	3450	—	—	灰褐色(5 Y R 5.2)		IV A期
1989		備前	播鉢	2500	—	—	赤褐色(10R 5.3)		IV b期
1990		備前	播鉢	2570	1400	75~102	黄灰色(2.5Y 6.1)		IV b期
1991		備前	播鉢	3090	1280	1040	灰赤色(10R 5.2)		IV b期
1992		勝間田	小皿	810	430	160	灰色(5 Y 6.1)		
1993		瀬戸美濃	瓶子	—	—	—	灰オリブ色(7.5Y 6.2)		
1994		瀬戸美濃	輪花皿	82~86	520	26~27	灰白色(2.5Y 7.1)	刻みは8か所か。底部糸切り。	
1995		瀬戸	平椀	1390	—	—	灰黄褐色(10Y R 5.2)		
1996		瀬戸	平椀	1490	—	—	鈍い黄褐色(10Y R 7.2)	露胎あり。	IV期15世紀前半
1997		瀬戸	平椀	—	460	—	灰黄色(2.5Y 7.2)		
1998		瀬戸美濃	卸皿	1400	—	—	灰オリブ色(7.5Y 6.2)		
1999		瀬戸美濃	卸皿	—	—	—	灰黄褐色(10Y R 5.2)		
2000		青磁	鉢	(1580)	—	—	オリブ灰色(10Y 6.2)		15世紀後半
2001		青磁	碗	1380	—	—	灰白色(2.5Y 7.1)		16世紀後半
2002		青磁	碗	1200	—	—	灰白色(N 7.0)		14世紀前半
2003		青磁	碗	1180	—	—	灰白色(2.5Y 7.1)		14世紀前半
2004		青磁	碗	—	640	—	オリブ灰色(10Y 5.2)		15C前半
2005		青磁	碗	—	540	—	明オリブ灰色(2.5G Y 7.1)		15世紀後半
2006		青磁	稜花皿	(820)	—	—	緑灰色(10G Y 6.1)		15世紀後半
2007	青磁	盤	—	—	—	オリブ灰色(10Y 6.2)		15世紀後半	
2008	青磁	盤	2420	—	—	灰オリブ色(7.5Y 4.2)		15世紀後半	
2009	青磁	盤	3000	1600	(440)	灰オリブ色(7.5Y 5.3)		15世紀後半	
2010	青磁	鉢	(2600)	—	(290)	オリブ色(7.5Y 3.2)		15世紀後半	
2011	白磁	碗	(1720)	—	—	灰白色(7.5Y 7.1)		15世紀後半	
2012	白磁	碗	(1440)	—	—	灰白色(2.5Y 8.1)		V類15世紀代	
2013	白磁	皿	960	340	260	灰白色(5 Y 8.1)		15世紀代	
2014	白磁	碗	900	520	270	灰白色(10Y 8.1)		15世紀代	
2015	白磁	合子	740	(700)	(125)	灰白色(7.5Y 7.1)			
2016	青白磁	合子	620	(560)	(170)	明オリブ灰色(5 G Y 7.1)		中国青白磁13C代。	
2017	青花	碗	—	380	—	灰白色(5 Y 8.1)		景德鎮。16世紀第4四半期。	
2018	陶器	壺	—	—	—	灰白色(N 7.0)		東南アジア産	
2019	瓦質	羽釜	—	—	—	暗灰色(N 3.0)	外面一刺突?		
2020	瓦質	羽釜	2520	—	—	鈍黄褐色(10Y R 7.2)	外面一煤付着。		
2021	瓦質	羽釜	2700	—	—	灰色(5 Y 4.1)	外面一煤付着。		
2022	瓦質	鉢	(2920)	—	—	鈍褐色(7.5Y R 6.4)	内面一黒斑。煤付着。		
2023	瓦質	火鉢	—	—	—	灰色(N 4.0)			
2024	土師器	杯	1360	820	380	鈍黄褐色(10Y R 7.4)	外一ヘラ切り?板目痕。内一黒斑。		
2025	土師器	杯	1200	760	395	浅黄褐色(7.5Y R 8.4)	外面一糸切り後ナデ。		
2026	土師器	杯	1270	800	420	鈍黄褐色(10Y R 7.3)	外面一糸切り後ナデ。		
2027	土師器	杯	1170	825	380	鈍黄褐色(10Y R 7.3)	外面一糸切り後ナデ。		
2028	土師器	杯	1175	705	330	鈍褐色(7.5Y R 7.4)	外面一糸切り。		



土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
2029	K地区の遺物	土師器	小皿	725	560	130	橙色(5YR6・6)	外面一糸切り。	
2030		土師器	小皿	760	670	155	鈍橙色(7.5YR7・4)	外面一糸切り。	京都系
2031		土師器	小皿	660	640	095	淡橙色(5YR8・4)	外面一糸切り後ナデ。	
2032		土師器	小皿	635	620	100	橙色(5YR7・6)	外面一糸切り後ナデ。	
2033		土師器	小皿	740	645	165	鈍橙色(5YR7・4)		京都系
2034		土師器	皿	1260	620	260	浅黄橙色(7.5YR8・4)		灯明痕
2035		土師器	皿	1420	970	330	淡橙色(5YR8・4)		
2036		備前	甕	—	—	—	鈍赤褐色(2.5YR4・3)		
2037		備前	甕	—	—	—	黄灰色(2.5Y6・1)		II期
2038		備前	播鉢	(3720)	—	—	灰褐色(5YR5・2)		IVb期
2039		備前	播鉢	2860	—	—	褐色(7.5YR4・3)		III期
2040		備前	播鉢	(2620)	—	—	鈍黄褐色(10YR4・3)		III期
2041		備前	播鉢	2860	—	—	赤灰色(5R5・1)		III期
2042		勝間田	鉢	—	—	—	灰黄色(2.5Y7・2)		片口
2043		勝間田	壺	1660	—	—	灰色(N4・)		
2044		勝間田	小皿	800	(400)	(160)	暗灰黄色(2.5Y5・2)		
2045		勝間田	鉢	—	—	—	灰色(5Y5・1)		
2046		勝間田	椀	—	—	—	灰白色(5Y7・1)		
2047		東播	控鉢	—	—	—	灰色(5Y6・1)		
2048		東播系	甕	—	17-15	—	灰色(N5・~N6・)		
2049		瀬戸	瓶	—	—	—	オリーブ灰色(10Y6・2)		55・96と同一
2050		瀬戸焼	瓶子	—	800	—	浅黄色(5Y7・3)		7か8期、13C末~14C初
2051		瀬戸	瓶子	—	(410)	—	灰オリーブ色(5Y6・2)		
2052		瀬戸	平椀	1760	—	—	灰オリーブ色(7.5Y6・2)		12期15C後半
2053		瀬戸	椀	(1490)	—	—	鈍橙色(7.5YR6・4)		12期15C後半
2054		関西系	播鉢	2790	1120	1240	褐灰色(5YR5・1)		
2055		肥前系	碗	1170	470	420	鈍赤橙色(10R6・3)		16世紀後半、天正10年代
2056		須恵質	甕	1760	—	—	鈍黄褐色(10YR7・3)		産地不明。中世陶器
2057		青磁	碗	(1360)	—	—	オリーブ灰色(5GY6・1)		
2058		青磁	碗	1570	—	—	灰オリーブ色(5Y5・3)		13C中葉
2059		青磁	碗	1620	—	—	灰オリーブ色(7.5Y5・2)		13C中葉
2060		青磁	碗	1560	—	—	オリーブ灰色(5GY6・1)		
2061		青磁	碗	—	—	—	灰オリーブ色(5Y6・2)		15~16世紀
2062		青磁	碗	(1340)	—	—	オリーブ灰色(2.5GY6・1)		15~16世紀
2063		青磁	碗	1200	—	—	オリーブ黄色(7.5Y6・3)		15~16世紀
2064		青磁	盤	2530	—	—	オリーブ灰色(10Y4・2)		15世紀後半
2065		青磁	皿	—	460	—	明オリーブ灰色(5GY7・1)		竜泉窯13世紀中
2066		青磁	輪花皿	(66、59)	250	145	灰白色(2.5Y8・2)		12世紀代 青白磁
2067		白磁	碗	1205	—	(275)	灰黄褐色(10YR5・2)		
2068		白磁	碗	1720	—	—	灰白色(5Y7・2)		V類 15世紀代
2069		白磁	碗	1670	—	—	灰黄色(2.5Y6・2)		
2070		天目	碗	(1230)	—	—	黒色(5Y2・1)		中国 15世紀
2071		瓦質	鍋	(3220)	—	—	灰色(5Y4・1)		
2072		瓦質	鍋	3185	—	—	灰黄褐色(10YR4・2)		
2073		瓦質	釜	(2690)	—	—	暗灰色(N3・)		
2074		瓦質	鍋	3035	—	—	灰色(N4・)		
2075		瓦質	火鉢	—	—	—	暗灰色(N3・)		
2076		瓦質	火鉢	—	—	—	暗灰色(N3・)		
2077		掘立柱建物70	備前	壺	(2490)	(2000)	—	灰色(N5・)	
2078	掘立柱建物70	備前	壺	(2490)	(2000)	—	灰色(N5・)		
2079	掘立柱建物71	肥前系	皿	(1400)	—	(340)	灰白色(10Y7・2)	胎土目 1590~1610年代	
2080	掘立柱建物83	肥前系焼	皿	(1270)	(460)	275	灰オリーブ色(5Y6・2)	内面一砂目積みの痕跡。 1610~1630年代	
2081	掘立柱建物84	備前	播鉢	(3620)	—	(710)	赤褐色(10R5・4)		
2082	井戸1	土師器	小皿	—	—	—	(7.5YR8・3)	外面一底部回転糸切り。	
2083	井戸2	肥前系	皿	2360	700	485	明緑灰色(10GY7・1)	外面一・釉ハギ・底部重ね焼き痕跡。	青磁染付皿(有田)1670年代~
2084		肥前系	鉢	(2860)	1200	940	明赤褐色(2.5YR5・6)		鉢oR皿17C末~18C前
2085	墓43	土師器	小皿	790	530	11~12	鈍橙色(7.5YR7・4)	外面一底部糸切り。	
2086		土師器	小皿	80~81	525~535	12~13	鈍橙色(7.5YR7・4)	外面一底部糸切り。	
2087		土師器	小皿	(970)	(760)	140	鈍橙色(7.5YR7・4)	外面一底部へら切り。	
2088	墓52	染付	瓶	(260)	—	(320)	明緑灰色(7.5GY8・1)		18~19C
2089	墓71	肥前系	椀	—	500	—	鈍黄褐色(10YR7・4)		17世紀
2090	墓84	肥前系	小杯	700	330	460	灰白色(N8・)	外面一コンニャク印判	17世紀末~18世紀前半

土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
2091	墓90	肥前系	皿	(1300)	—	280	鈍褐色(75Y R 6・3)		絵唐津、1590～1610年代
2092	墓93	肥前系	皿	(1470)	(870)	(390)	灰白色(75Y 7・1)	外面脚部—無釉。内面—釉ハギ(?)	18世紀中～後半
2093	土壙227	堺・明石	播鉢	(3680)	(1710)	(1380)	鈍赤褐色(25Y R 4・3)		
2094		土師器	皿	(1500)	(960)	(240)	橙色(5Y R 7・6)	外面—底部糸切り?	
2095		肥前系	椀	(1080)	480	750	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—底部釉ハギ。	内野山1610～1630年代
2096		肥前系	椀	(1200)	(220)	365	灰白色(10Y)	内面—釉薬・釉ハギ。	葉佐見17C末～18C前半
2097		備前	甗	—	—	(810)	赤灰色(10R 5・2)		
2098		備前	播鉢	—	—	(960)	赤褐色(10R 5・3)		
2099		青磁	椀	1160	400	600	明緑灰色(10G Y 7・1)	外面—釉ハギ。*貫入多い。	
2100		青花	椀	—	350	(220)	明緑灰色(10G 7・1)	外面—釉ハギ。	景徳鎮寿字文皿。16C第3四半期。
2101		土師器	小皿	885～895	625	145～165	浅黄褐色(75Y R 8・3)	外面—底部糸切り。	
2102		土師器	小皿	88～90	605～610	17～18	鈍褐色(75Y R 7・3)	外面—底部糸切り。	
2103		土師器	小皿	880	630	160	鈍褐色(75Y R 7・4)	外面—底部糸切り。	
2104		土師器	小皿	890	620	150	浅黄褐色(10Y R 8・3)	外面—底部糸切り。	
2105		土師器	小皿	86～87	60～61	13～14	鈍黄褐色(10Y R 7・3)	外面—底部糸切り。	
2106		土師器	小皿	880	60～61	13～14	鈍黄褐色(10Y R 7・4)	外面—底部糸切り。	
2107		土師器	小皿	870	57～58	14～15	鈍褐色(75Y R 7・3)	外面—底部糸切り。	
2108		土師器	小皿	850	590	130	浅黄褐色(75Y R 8・3)	外面—底部糸切り。	
2109		土師器	小皿	860	595	130～135	浅黄褐色(75Y R 8・3)	外面—底部糸切り。	
2110		青磁	椀	—	(600)	(085)	灰オリーブ色(75Y 5・3)	外面—釉ハギ。	
2111	土壙230	肥前系	鉢	(1100)	—	(550)	灰白色(10Y 7・1)		肥前染付 陶体染付 17C中～後半 火入香炉
2112	土壙232	堺・明石	播鉢	—	—	(620)	赤褐色(10R 4・3)		
2113		肥前系	椀	—	430	(225)	鈍褐色(75Y R 6・4)	外面—底部ケズリ出し。内面—砂目積。	
2114	土壙235	肥前系	椀	(1200)	—	(290)	明オリーブ灰色(25G Y 7・1)		椀(葉佐見) 18C中～後半
2115	土壙238	肥前系	椀?	—	390	(210)	淡い水色	外面底部—釉薬裏跡。	肥前 18C前半
2116	土壙239	肥前系	椀?	—	(420)	(285)	淡い水色		17C末～18C前半
2117	土壙240	肥前系	椀	(1350)	64～66	280	灰白色(5G Y 8・1)	外面—釉はぎ。内面—釉はぎ。	肥前(葉佐見) 18C後半。五弁花(スタンプ)
2118		土師器	小皿	8・10	540	125～140	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面—底部糸切り。	
2119		土師器	小皿	80～82	540	12～14	鈍黄褐色(10Y R 7・2)	外面—底部糸切り。	
2120		備前	燈明皿	(840)	(410)	090	灰赤色(25Y R 4・2)		
2121	土壙244	肥前系	椀	—	31～32	(205)	鈍褐色(75Y R 6・4)	外面—スス付着?内面—胎土目。	
2122	土壙245	土師器	小皿	(690)	(460)	(125)	浅黄褐色(75Y R 8・4)	外面—底部ヘラ切り。	
2123		肥前系	椀	(1390)	(780)	385	暗オリーブ灰色(25G Y 7・1)		肥前 葉佐見皿18C中頃～後半
2124		肥前系	椀	—	—	675	オリーブ灰色(10Y 6・2)	外面—釉ハギ。	肥前 葉佐見陶体染付17C末? 18C前半
2125		堺・明石	播鉢	—	—	(1230)	鈍赤褐色(10R 6・4)		
2126		肥前系	椀	(1180)	—	(590)	明緑灰色(75G Y 7・1)	口縁部—釉薬なし。	
2127		肥前系	椀	—	560	(460)	灰白色(75Y 7・2)	外面底部—ケズリ出し。	
2128		肥前系	椀	—	(440)	(200)	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—底部ケズリ出し。	
2129	溝52	肥前系	皿	(1380)	—	(160)	灰白色(10Y 7・1)		
2130		土師器	小皿	(980)	(700)	(135)	浅黄褐色(75Y R 8・4)	外面—底部糸切りのちなデ。	
2131	溝59	土師器	皿	(1220)	(720)	260	灰白色(75Y R 8・2)	外面—底部ヘラ切り。	
2132	柱穴19	肥前系	碗	770	310	440	灰白色(75Y 7・1)		17C末～18C中頃(コンヤク印版)
2133		土師器	皿	740	570	130	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	外面—底部糸切り。一部黒斑あり。	
2134	柱穴20	肥前系	皿	—	(440)	(210)	灰オリーブ色(75Y 6・2)	外面—内面—砂目積。	
2135	柱穴21	肥前系	皿	(1260)	400	33～35	灰白色(10Y 7・1)	外面—底部に砂目付着。内面—砂目積。	砂目、1610～1630代
2136	柱穴22	肥前系	皿	(1280)	—	(150)	灰オリーブ色(75Y 5・3)		
2137	柱穴23	肥前系	碗	—	(580)	—	灰色(N 8・)	外面—釉ハギ。	17C前半
2138		肥前系	蓋	(540)	(260)	140	暗褐色(75Y R 3・3)	内面—糸切り。	17C代
2139		青磁	盤	(2240)	—	(450)	灰オリーブ色(75Y 6・2)		15C後半
2140		肥前系	椀	(1200)	(560)	(290)	オリーブ灰色(5G Y 6・1)	内面—胎土目。	
2141		肥前系	椀	(1120)	390	340	鈍黄褐色(10Y R 6・3)	内面—胎土目。	
2142		瓦質	火鉢	(2060)	—	(650)	褐色(10Y R 4・1)		
2143		瓦質	火鉢	—	—	(450)	灰色(75Y 4・1)		
2144		瓦質	火鉢	—	—	(1030)	黒褐色(10Y R 3・1)		
2145		肥前系	そば猪口	(750)	(580)	580	灰白色(75Y 7・1)	底部釉ハギ。	18C末～19C初

土器観察表

掲載 番号	遺構名	種別	器種	計測値(・・)			色調(外面)	形態・手法の特徴など	備考
				口径	底径	器高			
2146	遺構に伴わ ない遺物	肥前系	椀	—	(550)	(270)	オリーブ灰色(25G Y 6・1)	外面—底部軸ハギ。	陶器架付碗。 17末～18前
2147		肥前系	皿	(1340)	—	(330)	灰白色(5 Y 7・2)		内野山 17C 後半～18C 前半
2148		肥前系	皿	(1840)	—	(180)	灰色(5 Y 4・1)		肥前陶器皿か 綾部? 16末～ 17初
2149		堺・明石	播鉢	264～ 268	134～ 137	109～ 110	鈍赤褐色(25Y R 5・4)		
2150		備前	小皿	(640)	(420)	220	黄灰色(25Y 5・1)	外面—・底部糸切り。	
2151		肥前系	皿	(1200)	(500)	380	灰黄色(25Y 7・2)	脚部—削り出し。	1610～1630 年代
2152		肥前系	椀	(1000)	—	(400)	淡黄色(25Y 8・4)		17世紀後半
2153		肥前系	椀	—	(400)	(440)	灰白色(10Y 7・1)		陶胎架付け、 17世紀末～ 18中
2154		肥前系	椀?	(1120)	—	(490)	灰黄色(25Y 7・2)		17世紀前半
2155		肥前系	椀	—	480	(340)	灰白色(5 Y 7・1)		17世紀後半
2156		陶器	蓋	680	240	155	灰褐色(75Y R 4・2)	外面—底部糸切り。	
2157		陶器	袋物	760	270	450	鈍橙色(75Y R 6・4)		関西なら18～ 19世紀
2158		陶器	小皿	—	380	(090)	灰黄色(25Y 7・2)	外面—底部糸切り。	
2159		肥前系	椀	1060	420	750	明青灰色(10B G 7・1)	外面脚部—削り出し(?)	出雲 石見辺り・ 18世紀か?
2160		備前	小皿	760	395	160	鈍赤褐色(5 Y R 5・4)		
2161		白磁	皿	960	390	23～ 245	灰白色(5 Y 8・1)	外面—底部ケズリ出し(重ね焼き痕)。	14C末～15C 前半

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm	幅・径)・cm	厚み・cm	重量・g	備考
S 1	袋状土壌 1	縄文晩	磨り石	角閃ヒン岩	1075	745	50	425.14	
S 2		縄文晩	石鏃	緑色片岩	105	63	15	107.86	完品、礫面あり
S 3		縄文晩	石鏃	サヌカイト	265	15	0.33	1.02	
S 4		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	78	33	0.9	27.68	
S 5	袋状土壌 2	縄文晩	石槍先端?	サヌカイト	175	17	0.65	2.13	
S 6		縄文晩	石鏃	サヌカイト	184	138	0.24	0.54	
S 7		縄文晩	鏃?	サヌカイト	855	46	0.76	22.02	
S 8		縄文晩	石鏃	緑色片岩	97	53	1.57	92.13	基部欠損
S 9		縄文晩	刃部磨製石斧	緑色片岩	595	4.62	0.54	20.35	基部欠損
S10	土壌 2	縄文晩	石鏃	サヌカイト	16	14	0.28	0.71	
S11		縄文晩	石鏃	サヌカイト	225	13	0.5	1.1	
S12		縄文晩	石鏃	サヌカイト	345	1.55	0.33	1.21	
S13		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	16	27	0.6	4.22	
S14	土壌19	縄文晩	石鏃	サヌカイト	125	1.39	0.28	0.46	
S15	土壌42	縄文後	スクレイパー	サヌカイト	825	5.05	0.85	34.5	
S16	火処30	縄文晩	石鏃	緑色片岩	1055	4.9	1.62	98.43	
S17	溝 1	縄文晩	石匙	サヌカイト	785	3.3	0.8	21.0	
S18		縄文晩	磨製石斧	流紋岩	607	5.05	1.64	91.18	基部欠損
S19	溝 6	縄文晩	石鏃	サヌカイト	405	1.36	0.37	0.92	
S20		縄文晩	石鏃	緑色片岩	54	5.0	1.16	30.71	刃部欠損
S21	土器溜まり 1	縄文晩	石鏃	サヌカイト	18	1.5	0.24	0.61	
S22		縄文晩	石鏃	サヌカイト	19	1.7	0.3	0.74	
S23		縄文晩	石鏃	サヌカイト	245	1.55	0.35	0.87	
S24		縄文晩	石鏃	サヌカイト	23	1.45	0.3	0.61	
S25		縄文晩	石鏃	サヌカイト	195	1.8	0.4	0.81	
S26		縄文晩	石鏃	サヌカイト	26	1.7	0.4	1.42	
S27		縄文晩	石鏃	緑色片岩	94	4.1	1.3	52.99	刃部半分欠損
S28		縄文晩	石鏃	緑色片岩	735	5.25	1.9	78.77	刃部欠損
S29		縄文晩	石鏃	緑色片岩	84	4.95	0.85	46.11	刃部・基部欠損、礫面あり
S30		縄文晩	石鏃	緑色片岩	145	3.45	1.3	103.66	刃部欠損・礫面あり
S31		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1065	4.45	1.95	131.29	完品、刃部礫面
S32		縄文晩	叩き石	砂岩	115	8.5	3.8	608.74	
S33		縄文晩	石皿	砂岩	1205	10.05	8.4	1568.8	
S34	土器溜まり 2 - A	縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	60	3.95	0.9	24.23	
S35		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	435	3.55	0.8	10.24	
S36		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	52	3.3	0.8	16.86	
S37		縄文晩	石鏃	サヌカイト	145	1.25	0.23	0.4	
S38		縄文晩	石鏃	サヌカイト	155	1.45	0.17	0.32	
S39		縄文晩	石鏃	サヌカイト	16	1.2	0.25	0.45	
S40		縄文晩	石鏃	サヌカイト	13	1.3	0.3	0.65	
S41		縄文晩	石鏃	サヌカイト	165	1.3	0.4	0.86	
S42		縄文晩	石鏃	サヌカイト	175	1.25	0.32	0.65	
S43		縄文晩	石鏃	サヌカイト	20	1.1	0.27	0.56	
S44		縄文晩	石鏃	サヌカイト	235	1.35	0.42	1.35	
S45		縄文晩	石鏃	サヌカイト	20	2.1	0.5	1.42	
S46		縄文晩	石鏃	サヌカイト	17	1.2	0.3	0.51	
S47		縄文晩	石鏃	サヌカイト	185	1.45	0.35	0.76	
S48		縄文晩	石鏃	サヌカイト	23	1.3	0.33	0.85	
S49		縄文晩	石鏃	サヌカイト	27	1.7	0.45	2.05	
S50		縄文晩	石鏃	サヌカイト	24	1.6	0.38	1.54	石鏃?
S51		縄文晩	石鏃	サヌカイト	205	1.45	0.32	0.91	
S52		縄文晩	石鏃	サヌカイト	365	0.95	0.4	1.83	
S53		縄文晩	石鏃	緑色片岩	845	4.4	1.05	52.82	完品、礫面あり
S54		縄文晩	石鏃	緑色片岩	96	5.3	1.6	122.69	刃部欠損
S55		縄文晩	磨製石斧	ヒン岩	83	5.25	2.7	170.85	完品、敲打痕残
S56		縄文晩	石台?	流紋岩	4677	21.2	3.9	5850	

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm・	幅・径)・cm・	厚み・cm・	重量・g・	備考	
S57	土器溜まり2-B	縄文晩	磨製石包丁?	片岩?	52	59	08	2875	石包丁か?	
S58		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	51	345	07	1352		
S59		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	54	48	095	2764		
S60		縄文晩	剥片	黒曜石	32	305	058	59		
S61		縄文晩	石鏃	サヌカイト	195	135	02	044		
S62		縄文晩	石鏃	サヌカイト	225	13	035	096		
S63		縄文晩	石鏃	サヌカイト	21	16	035	077		
S64		縄文晩	石鏃	サヌカイト	255	14	06	145		
S65		縄文晩	石鏃	サヌカイト	265	155	043	14		
S66		縄文晩	石鏃	サヌカイト	19	12	035	083		
S67		縄文晩	石鏃	サヌカイト	21	155	027	086	石鏃?	
S68		縄文晩	石鏃	サヌカイト	25	15	03	102		
S69		縄文晩	石鏃	サヌカイト	15	135	028	058		
S70		縄文晩	石鏃	サヌカイト	15	16	028	05		
S71		縄文晩	石鏃	サヌカイト	20	175	028	096		
S72		縄文晩	石鏃	サヌカイト	185	085	02	035		
S73		縄文晩	石鏃	サヌカイト	185	115	04	09		
S74		縄文晩	石鏃	サヌカイト	175	12	028	06		
S75		縄文晩	石鏃	サヌカイト	225	105	024	066		
S76		縄文晩	石鏃	緑色片岩	885	56	17	7819	未製品	
S77		縄文晩	石鏃	サヌカイト	56	115	054	428		
S78		縄文晩	石鏃	緑色片岩	162	57	32	40424	完品、礫面あり	
S79		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1215	59	26	23295	完品、礫面あり	
S80		縄文晩	石鏃	緑色片岩	131	565	18	16079	完品	
S81		縄文晩	石鏃	緑色片岩	116	46	115	8529	完品	
S82		縄文晩	石鏃	緑色片岩	96	475	16	7769	完品	
S83		縄文晩	石鏃	緑色片岩	91	52	14	8104	基部欠損	
S84		縄文晩	石鏃	緑色片岩	104	465	17	11591	完品	
S85		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1025	46	165	9425	完品	
S86		縄文晩	磨製石斧未製品	ヒン岩	1105	53	335	29123	基部欠損・敲打痕残	
S87		縄文晩	磨製石斧未製品	角閃ヒン岩	88	48	30	19108	刃部欠損・礫面あり敲打痕残	
S88		縄文晩	磨石	ヒン岩	58	57	044	18495		
S89		縄文晩	叩き石	ヒン岩	875	76	575	54003		
S90		縄文晩	台石	?	4400	2405	1201	1830000		
S91		土器溜まり2-C	縄文晩	石鏃	サヌカイト	215	125	03	072	
S92			縄文晩	石鏃	サヌカイト	16	11	03	057	
S93	縄文晩		スクレイパー	サヌカイト	815	515	08	3774		
S94	縄文晩		石鏃	砂岩	1105	505	17	11202	基部欠損?	
S95	土器溜まり2-D	縄文晩	砥石	流紋岩	172	113	63	92885		
S96		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	50	36	035	757		
S97		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	435	515	115	2986		
S98		縄文晩	凹石	ヒン岩	110	94	295	45162	凹石?	
S99		縄文晩	石鏃	緑色片岩	215	835	255	51593	完品、裏面・刃部礫面	
S100	縄文晩	石鏃	緑色片岩	1865	485	116	13814	完品		
S101	縄文晩	石棒?	ホルンフェルス	214	52	21	30853			
S102	土器溜まり2-E	縄文晩	石鏃	サヌカイト	215	135	03	089		
S103		縄文晩	石鏃	サヌカイト	155	145	035	075		
S104		縄文晩	石鏃	サヌカイト	225	17	03	096		
S105		縄文晩	石鏃	流紋岩	117	475	16	10998	基部欠損	
S106		縄文晩	石鏃	緑色片岩	107	46	14	795	刃部欠損、礫面あり	
S107		縄文晩	磨製石斧	ヒン岩	880	550	370	24528	基部欠損	
S108		縄文晩	磨製石斧	片岩?	825	50	29	18548	基部欠損、敲打のみ	
S109	土器溜まりその他の地点	縄文晩	石鏃	サヌカイト	150	135	020	032		
S110		縄文晩	石鏃	サヌカイト	175	13	03	072		
S111		縄文晩	石鏃	サヌカイト	25	15	055	143		

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm・	幅・径)・cm・	厚み・cm・	重量・g・	備考
S 112	土器溜まりその他の地点	縄文晩	スクレイパー	砂岩?	11.25	4.65	1.5	90.31	
S 113		縄文晩	石鍬	緑色片岩	8.45	5.3	1.15	62.66	完品、礫面あり
S 114		縄文晩	石鍬	緑色片岩	10.75	5.8	1.3	83.72	完品
S 115		縄文晩	石鍬	緑色片岩	10.6	5.95	2.3	165.47	完品
S 116		縄文晩	石鍬	緑色片岩	10.1	7.0	2.9	246.17	基部欠損
S 117		縄文晩	石鍬	緑色片岩	9.55	5.0	1.62	103.65	完品
S 118		縄文晩	石鍬	緑色片岩	9.9	3.7	1.75	89.29	完品、礫面あり
S 119		縄文晩	磨製石斧	角閃ヒン岩	12.0	5.3	2.4	223.82	刃部欠損、敲打のみ
S 120		縄文晩	石鍬	片岩?	10.5	5.75	2.8	245.47	刃部欠損、礫面あり
S 121		縄文晩	刃部磨製石斧	片岩?	11.9	4.95	2.25	186.78	一部磨製・完品、礫面あり
S 122		縄文晩	刃部磨製石斧	片岩?	10.7	3.15	0.9	45.2	完品
S 123		縄文晩	刃部磨製石斧	安山岩	8.95	4.0	1.45	78.97	
S 124		縄文晩	石鍬	緑色片岩	8.8	7.3	1.2	99.45	基部欠損
S 125		土器溜まり 3	縄文晩	石鍬	サヌカイト	1.75	1.2	0.32	0.56
S 126	縄文晩		石鍬	サヌカイト	1.6	1.15	0.2	0.41	
S 127	縄文晩		石鍬	サヌカイト	1.55	1.25	0.33	0.66	
S 128	縄文晩		石鍬	サヌカイト	1.75	1.2	0.25	0.52	
S 129	縄文晩		石鍬	サヌカイト	1.65	1.3	0.24	0.58	
S 130	縄文晩		石鍬	サヌカイト	2.0	1.4	0.38	0.94	
S 131	縄文晩		石鍬	サヌカイト	2.0	1.25	0.3	0.67	
S 132	縄文晩		石鍬	サヌカイト	1.95	1.3	0.48	1.16	
S 133	縄文晩		石鍬	サヌカイト	2.1	1.3	0.35	0.8	
S 134	縄文晩		石鍬	サヌカイト	2.2	1.4	0.4	1.25	
S 135	縄文晩		石鍬	サヌカイト	2.35	1.25	0.3	0.78	
S 136	縄文晩		石鍬	サヌカイト	2.1	1.75	0.38	1.04	
S 137	縄文晩		石鍬	サヌカイト	1.95	1.25	0.37	0.65	
S 138	縄文晩		石鍬	サヌカイト	2.35	1.35	0.5	1.24	
S 139	縄文晩		石鍬	サヌカイト	2.2	1.4	0.2	0.66	
S 140	縄文晩		スクレイパー	サヌカイト	3.3	2.55	0.6	6.95	
S 141	縄文晩		スクレイパー	サヌカイト	4.95	4.55	0.4	8.23	
S 142	縄文晩		石鍬	角閃ヒン岩	10.85	4.4	1.8	112.96	完品
S 143	縄文晩		磨製石斧	緑色片岩	9.7	6.0	3.5	262.25	未製品、刃部欠損、礫面あり
S 144	縄文晩		石鍬	緑色片岩	15.1	4.55	2.4	223.51	完品、礫面あり
S 145	縄文晩		石鍬	角閃ヒン岩	19.05	8.2	2.32	360.84	完品、刃部礫面
S 146	縄文晩		磨製石斧	角閃ヒン岩	10.4	5.9	4.8	407.89	刃部欠損
S 147	縄文晩		磨製石斧	安山岩	6.4	6.4	2.45	153.72	基部欠損
S 148	縄文晩		刃部磨製石斧	片岩?	5.65	3.6	1.1	34.8	一部磨製・基部欠損
S 149	縄文晩	台石	?	47.00	27.50	17.60	3000.00		
S 150	土器溜まり 4	縄文晩	石鍬	サヌカイト	1.6	1.3	0.2	0.52	
S 151		縄文晩	楔	サヌカイト	2.75	3.4	0.95	11.95	
S 152		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	5.6	3.7	0.68	12.85	
S 153		縄文晩	石鍬	緑色片岩	8.65	4.1	1.1	42.64	完品
S 154		縄文晩	石鍬	緑色片岩	8.7	4.05	1.2	56.32	完品、刃部礫面
S 155		縄文晩	石鍬	砂岩	10.7	4.45	1.45	75.16	完品
S 156		縄文晩	石鍬	緑色片岩	10.2	5.6	1.55	93.04	基部一部欠損
S 157	土器溜まり 5	縄文晩	石鍬	サヌカイト	1.31	1.3	0.37	0.4	完品
S 158		縄文晩	石鍬	サヌカイト	1.8	1.15	0.29	0.47	完品
S 159		縄文晩	石鍬	サヌカイト	1.7	1.5	0.34	0.75	完品
S 160		縄文晩	石鍬	サヌカイト	1.9	1.4	0.21	0.57	完品
S 161		縄文晩	石鍬	サヌカイト	2.75	1.8	0.46	2.36	完品
S 162		縄文晩	石鍬	サヌカイト	2.31	1.4	0.5	1.54	先端部欠損
S 163		縄文晩	石匙・	サヌカイト	4.75	3.75	0.53	9.57	先端部欠損、縦長の石匙か?
S 164		縄文晩	U・F・	サヌカイト	5.6	3.2	0.64	8.87	
S 165		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	10.0	4.6	1.15	47.71	

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm・	幅(径)・cm・	厚み・cm・	重量・g・	備考
S166	土器溜まり5	縄文晩	石鏃	緑色片岩	925	39	17	87.13	完品
S167		縄文晩	石鏃	緑色片岩	935	39	146	67.9	完品
S168		縄文晩	石鏃	緑色片岩	102	4.45	175	125.12	完品、表面礫面
S169		縄文晩	石鏃	緑色片岩	172	6.2	183	245.72	完品
S170	土器溜まり6	縄文晩	石鏃	サヌカイト	17	1.5	0.85	0.68	完品
S171		縄文晩	石鏃	サヌカイト	175	17	0.25	0.53	未製品
S172		縄文晩	石鏃	サヌカイト	175	18	0.89	0.93	完品
S173		縄文晩	石鏃	サヌカイト	165	13	0.28	0.57	完品
S174		縄文晩	石鏃	サヌカイト	19	1.65	0.27	0.72	完品
S175		縄文晩	石鏃	サヌカイト	195	12	0.4	1.19	完品
S176		縄文晩	石鏃	サヌカイト	185	1.5	0.84	0.86	完品
S177		縄文晩	石鏃	サヌカイト	19	1.4	0.4	0.85	完品
S178		縄文晩	石鏃	サヌカイト	19	1.3	0.82	0.78	完品
S179		縄文晩	石鏃	サヌカイト	23	1.35	0.5	1.19	完品
S180		縄文晩	石鏃	サヌカイト	23	1.35	0.44	0.97	完品
S181		縄文晩	石鏃	サヌカイト	225	1.55	0.42	1.06	完品
S182		縄文晩	石鏃	サヌカイト	2.5	1.3	0.86	1.07	完品
S183		縄文晩	石鏃	サヌカイト	18	1.15	0.29	0.58	基部一部欠損
S184		縄文晩	石鏃	サヌカイト	17	1.3	0.84	0.74	未製品
S185		縄文晩	石鏃	サヌカイト	205	1.4	0.27	0.79	完品
S186		縄文晩	石鏃	サヌカイト	2.1	1.95	0.31	0.91	完品
S187		縄文晩	石鏃	サヌカイト	2.1	1.25	0.3	0.83	完品
S188		縄文晩	石鏃	サヌカイト	205	1.45	0.5	1.18	完品
S189		縄文晩	石鏃	サヌカイト	22	1.48	0.33	0.99	完品
S190		縄文晩	石鏃	サヌカイト	2.5	1.6	0.48	1.99	完品
S191		縄文晩	石鏃	サヌカイト	38	1.85	0.47	3.0	基部欠損
S192		縄文晩	楔	サヌカイト	385	3.75	1.2	14.64	
S193		縄文晩	R・F・	サヌカイト	695	4.2	0.96	29.33	
S194		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	32	3.95	0.69	11.11	
S195		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	8.45	4.1	1.05	31.97	
S196		縄文晩	石鏃	緑色片岩	10	5.6	2.12	151.96	基部欠損?
S197		縄文晩	石鏃	緑色片岩	10.9	6.4	1.86	162.52	完品、表面礫面
S198		縄文晩	石鏃	緑色片岩	10.8	5.1	1.86	104.79	完品
S199		縄文晩	石鏃	緑色片岩	11.4	4.9	1.44	108.79	完品、表面礫面
S200		縄文晩	石鏃	緑色片岩	12.3	5.2	1.95	124.33	完品、表面礫面
S201		縄文晩	磨製石斧	ヒン岩	10.9	5.55	3.05	251.67	刃部欠損、敲打のみ
S202	土器溜まり7	縄文晩	石鏃	緑色片岩	9.0	6.2	1.26	71.33	
S203		縄文晩	石鏃	緑色片岩	11.0	4.75	1.3	93.69	
S204		縄文晩	石鏃	緑色片岩	11.0	4.9	1.64	107.74	
S205		縄文晩	石鏃	緑色片岩	13.65	4.85	1.66	161.84	
S206		縄文晩	石鏃	緑色片岩	15.3	5.2	1.1	140.28	
S207		縄文晩	石鏃	緑色片岩	15.5	6.45	1.95	255.58	
S208		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	8.6	4.1	1.2	33.09	
S209		縄文晩期	丸玉	翡翠か蛇紋岩	0.71	1.02	—	0.97	孔径0.87
S210	土器溜まり8	縄文晩	石鏃	サヌカイト	1.88	1.59	0.37	0.84	
S211		縄文晩	刃部磨製石斧	緑色片岩	5.4	4.61	1.05	44.77	破損品 研磨?
S212		縄文晩	石鏃	緑色片岩	7.18	5.1	1.35	57.35	基部欠損
S213		縄文晩	石鏃	緑色片岩	10.39	5.21	1.87	132.23	完品
S214	土器溜まり9	縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	3.79	8.07	0.71	20.36	
S215		縄文晩	石鏃	緑色片岩	12.29	4.79	1.79	132.54	未製品 粗削状態 素材剥片
S216		縄文晩	石鏃	緑色片岩	13.43	4.41	1.68	98.07	完品、表面一部礫面
S217		縄文晩	石鏃	緑色片岩	9.81	3.92	1.36	71.35	完品
S218		縄文晩	石鏃	緑色片岩	9.13	3.78	1.18	49.68	一部欠損
S219		縄文晩	石鏃	緑色片岩	9.51	4.48	1.42	82.71	刃部欠損
S220		縄文晩	石鏃	緑色片岩	9.43	4.74	2.32	135.15	刃部欠損

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm	幅・径)・cm	厚み・cm	重量・g	備考	
S221	土器溜まり9	縄文晩	石鏃	緑色片岩	837	50	139	79.11	刃部欠損	
S222		縄文晩	石鏃	緑色片岩	842	5.13	162	90.81	刃部欠損	
S223		縄文晩	石鏃	緑色片岩	861	5.64	162	98.74	刃部欠損	
S224	土器溜まり10	縄文晩	石鏃	緑色片岩	932	48	182	98.26	基部欠損	
S225		縄文晩	石鏃	緑色片岩	123	5.91	1.58	156.65	完品	
S226	窪地1	縄文晩	石鏃	サヌカイト	17	14	0.33	0.71		
S227		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	95	4.85	10	40.02		
S228		縄文晩	石鏃	サヌカイト	155	1.25	0.3	0.53		
S229		縄文晩	石鏃	サヌカイト	175	1.4	0.4	0.69		
S230		縄文晩	石鏃	サヌカイト	165	1.6	0.4	0.82		
S231		縄文晩	石鏃	サヌカイト	19	1.1	0.25	0.44		
S232		縄文晩	石鏃	サヌカイト	2.1	1.2	0.5	0.94		
S233		縄文晩	石鏃	サヌカイト	23	1.3	0.32	0.94		
S234		縄文晩	石鏃	サヌカイト	19	1.1	0.3	0.62		
S235		縄文晩	石鏃	サヌカイト	14	1.4	0.3	0.48		
S236		縄文晩	石鏃	サヌカイト	17	1.7	0.28	0.86		
S237		縄文晩	石鏃	サヌカイト	265	2.25	0.24	1.74		
S238		縄文晩	石鏃	サヌカイト	16	1.35	0.4	0.76		
S239		縄文晩	石鏃	サヌカイト	1.95	1.7	0.2	0.82		
S240		縄文晩	石鏃	サヌカイト	24	1.8	0.5	1.33		
S241		縄文晩	石鏃	緑色片岩	118	5.95	2.75	272.12	基部欠損、礫面あり	
S242		縄文晩	石鏃	緑色片岩	15	5.75	1.3	151.48	完品、礫面あり	
S243		縄文晩	刃部磨製石斧	角閃ヒン岩	7.85	6.15	3.1	186.18	基部欠損、礫面あり	
S244		縄文晩	刃部磨製石斧	片岩?	7.65	4.9	1.26	60.03	一部磨製・基部欠損	
S245		縄文晩	凹石	角閃ヒン岩	84	7.9	4.76	454.18		
S246		窪地6	縄文晩	石鏃	緑色片岩	7.31	3.75	1.05	32.51	完品
S247			縄文晩	石鏃	緑色片岩	9.15	4.08	1.62	87.63	完品・礫面あり
S248			縄文晩	石鏃	緑色片岩	9.72	4.96	1.59	87.5	完品
S249			縄文晩	石鏃	緑色片岩	7.05	5.12	1.43	71.1	基部欠損、礫面あり
S250	縄文晩	石鏃	黒色片岩	6.31	4.16	1.18	46.64	刃部欠損・礫面あり		
S251	窪地7	縄文晩	石鏃	緑色片岩	10.2	4.48	1.52	79.32	完品	
S252		縄文晩	石鏃	緑色片岩	10.85	5.48	1.62	125.76	完品、礫面あり	
S253	河道1最上流部上・中層	縄文晩	石鏃	サヌカイト	1.9	0.95	0.27	0.41		
S254		縄文晩	石鏃・	サヌカイト	3.55	2.05	0.45	3.02		
S255		縄文晩	石鏃	片岩	9.4	4.85	1.3	76.88	完品、礫面あり	
S256		縄文晩	石鏃	片岩	9.85	4.2	1.9	70.19	完品	
S257		縄文晩	石鏃	片岩	8.7	5.6	1.65	107.63	基部欠損	
S258		縄文晩	石鏃	片岩	9.3	5.3	1.5	85.54	完品、刃部礫面?	
S259		縄文晩	石鏃	片岩	7.3	5.0	1.2	56.59	刃部欠損、礫面あり	
S260		縄文晩	石鏃	片岩	7.3	3.95	1.2	42.92	刃部欠損、表面礫面	
S261		縄文晩	石鏃	片岩	7.8	4.3	1.2	56.22	刃部欠損、表面礫面	
S262		縄文晩	磨製石包丁	緑色片岩	10.5	4.95	0.6	47.1		
S263		縄文晩	石鏃	片岩	11.3	4.55	1.75	93.63	基部欠損	
S264		縄文晩	石鏃	片岩	9.1	3.7	1.7	64.25	完品、基部礫面	
S265		縄文晩	石鏃	片岩	7.3	4.1	1.7	54.58	完品、使用による摩滅か?	
S266		縄文晩	石鏃	片岩	9.0	4.7	1.7	95.44	完品、礫面あり	
S267		縄文晩	石鏃	片岩	10.2	4.7	2.1	108.04	刃部欠損、礫面あり	
S268	河道1最上流部下層	縄文晩	R F	サヌカイト	3.03	3.86	0.78	8.61		
S269		縄文晩	R F	サヌカイト	3.05	4.4	0.77	10.05		
S270		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	6.54	3.6	0.75	17.0		
S271		縄文晩	スクレイパー・ (or鏃?)	サヌカイト	6.7	5.3	1.35	45.0		
S272		縄文晩	石鏃	片岩	9.85	5.0	1.15	55.86	完品	
S273		縄文晩	石鏃	片岩	10.95	4.0	1.4	65.97	完品、刃部礫面	
S274		縄文晩	石鏃	片岩	11.55	4.9	1.9	153.15	完品、礫面あり	
S275		縄文晩	石鏃	片岩	10.6	5.75	1.55	121.82	完品、礫面あり	



石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm	幅(径)・cm	厚み・cm	重量・g	備考
S276	河道1最上流部下層	縄文晩	石鏃	片岩	113	5.1	1.85	137.1	刃部欠損、表面礫面
S277		縄文晩	石鏃	片岩	66	3.65	1.2	42.47	基部欠損
S278		縄文晩	石鏃	片岩	97	4.1	1.55	69.73	完品
S279		縄文晩	石鏃	片岩	115	4	1.95	101.96	完品、礫面あり
S280		縄文晩	石鏃	片岩	955	4.1	2.0	88.57	刃部欠損、礫面あり
S281		縄文晩	石鏃	片岩	92	4.8	2.4	116.67	刃部欠損、表裏礫面
S282	河道1上流部上層	縄文晩	石鏃	片岩	945	3.8	1.31	59.91	完品
S283		縄文晩	石鏃	片岩	96	5.0	1.67	84.96	完品
S284		縄文晩	石鏃	片岩	115	4.2	2.17	96.25	完品
S285		縄文晩	石鏃	片岩	103	4.5	1.8	71.62	基部左側縁欠損
S286		縄文晩	石鏃	片岩	132	5.9	2.1	182	完品
S287		縄文晩	石鏃	片岩	118	4.58	1.96	98.38	刃部欠損
S288		縄文晩	石鏃未製品?	片岩	875	4.85	1.28	69.35	
S289		縄文晩	石鏃未製品?	片岩	65	5.5	1.25	87.6	刃部欠損
S290		縄文晩	石鏃	サヌカイト	27	1.82	0.44	1.75	
S291		縄文晩	石鏃	サヌカイト	178	1.74	0.84	0.73	完品
S292		河道1中流部東斜面	縄文晩	磨製石斧	緑色片岩	425	4.75	0.75	21.7
S293	縄文晩		石鏃	緑色片岩	96	6.2	1.85	146.3	頭部欠損
S294	河道1下流部	縄文	石鏃	頁岩	625	3.65	0.90	22.96	
S295		縄文	石鏃	黒色片岩	1260	3.45	1.52	43.71	下部欠損
S296		縄文	石鏃	流紋岩	945	4.90	1.09	74.87	刃部研磨
S297	河道2上流部東斜面	縄文晩	石鏃	サヌカイト	305	2.28	0.51	3.33	
S298		縄文晩	石鏃	片岩	98	4.95	2.0	142.86	刃部欠損、表面礫面
S299		縄文晩	石鏃	片岩	993	4.35	1.72	102.3	完品
S300		縄文晩	石鏃	片岩	106	5.0	1.03	75.97	完品、研磨あり
S301		縄文晩	石鏃	片岩	96	4.45	1.72	86.66	完品
S302		縄文晩	石鏃	片岩	935	4.9	2.11	115.79	刃部欠損、表裏研磨
S303		縄文晩	磨製石斧?	片岩	1875	4.85	3.07	379.83	完品、裏面敲打、表面研磨および礫面、
S304		縄文晩	石鏃	片岩	1355	4.53	2.06	172.9	刃部欠損? 礫素材か?
S305		縄文晩	磨製石斧	片岩	1155	4.3	2.56	190.9	刃部欠損、敲打痕残存
S306		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	92	5.95	1.28	50.43	
S307		河道3下流部(北側)	縄文晩	勾玉	ヒスイ	1.90	1.90	0.40	1.26
S308	河道4上流部西斜面	縄文晩	R・F・	サヌカイト	222	1.58	0.42	1.48	石鏃未製品か?
S309		縄文晩	石鏃	サヌカイト	169	1.71	0.35	0.78	
S310		縄文晩	楔	サヌカイト	343	1.78	0.78	5.20	スボール
S311		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	401	5.42	0.64	14.49	
S312		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	445	8.22	0.71	37.51	石包丁状
S313		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	321	6.14	0.82	16.41	スクレイパー・
S314		縄文晩	R・F・	サヌカイト	456	6.50	0.67	20.37	
S315		縄文晩	R・F・	サヌカイト	299	4.40	0.61	8.81	
S316		縄文晩	R・F・	サヌカイト	222	4.21	0.52	5.57	スクレイパー・
S317		縄文晩	R・F・	サヌカイト	241	3.60	0.93	6.88	
S318		縄文晩	R・F・	サヌカイト	199	3.26	0.89	4.32	
S319		縄文晩	石核	サヌカイト	330	3.58	1.24	11.56	
S320		縄文晩	石核	サヌカイト	391	5.79	1.58	44.29	表皮あり
S321		縄文晩	石核	サヌカイト	552	7.63	4.11	208.73	表皮あり
S322		縄文晩	磨製石斧	緑色片岩	1451	6.34	3.58	438.23	刃部一部欠損 研磨
S323		縄文晩	刃部磨製石斧	緑色片岩	824	4.97	1.49	88.67	完品、表裏礫面、刃部磨製
S324		縄文晩	石鏃	砂岩	1131	5.68	3.16	344.57	未製品
S325		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1832	7.48	1.94	383.24	完品
S326		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1342	6.23	2.40	253.10	完品
S327	縄文晩	刃部磨製石斧	緑色片岩	1208	4.07	2.64	157.82	刃部一部欠損、表裏礫面残存	
S328	縄文晩	石鏃	緑色片岩	954	4.00	1.59	80.53	完品、表面一部礫面	
S329	縄文晩	石鏃	緑色片岩	968	3.84	1.58	60.10	完品	
S330	縄文晩	石鏃	緑色片岩	900	4.15	2.05	90.80	基部欠損	

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm	幅・径)・cm	厚み・cm	重量・g	備考
S331	河道4上流部西斜面	縄文晩	石鏃	緑色片岩	867	4・19	158	8406	基部欠損
S332		縄文晩	石鏃	緑色片岩	624	5・28	169	7592	基部欠損
S333		縄文晩	石鏃	緑色片岩	835	4・12	085	37・11	刃部一部欠損
S334		縄文晩	石鏃	緑色片岩	522	4・49	131	4144	刃部欠損
S335		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1180	5・00	180	17460	頭部欠損 表面礫面
S336		縄文晩	石鏃	砂岩	1300	5・00	190	16150	頭部礫面裏面節理面残 完品
S337		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1210	4・70	140	11300	礫面残 完品
S338		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1450	5・90	200	22150	表面礫面 完品
S339	河道5	縄文	石鏃	片岩	965	5・10	192	13563	
S340	A地区包含層	縄文	石鏃	サヌカイト	149	1・63	020	036	
S341		縄文	石鏃	サヌカイト	230	1・40	040	098	
S342		縄文	石鏃	片岩	990	4・75	210	10215	完品
S343		縄文	石鏃	片岩	1105	5・40	187	10486	完品、刃部礫面
S344	B地区包含層	縄文晩	石鏃	ろう岩	1415	5・40	263	30309	完品
S345		縄文晩	石鏃	片岩	1070	5・42	187	14292	
S346		縄文晩	石鏃	サヌカイト	240	1・36	035	11	完品
S347		縄文晩	石鏃	サヌカイト	230	1・40	036	096	完品
S348		弥生	鏃?	サヌカイト	1030	3・65	095	2506	
S349		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	845	4・36	106	3331	
S350		弥生	スクレイパー	サヌカイト	655	4・35	093	2202	
S351		縄文晩	石鏃	サヌカイト	210	1・48	028	076	完品
S352		縄文晩	石鏃	片岩	990	4・65	183	13096	石鏃素材時F11
S353		縄文晩	石鏃未製品?	片岩	1095	4・25	155	9409	石鏃素材時F11
S354		縄文晩	石鏃	片岩	770	4・15	114	4714	石鏃素材時F11
S355		縄文晩	石鏃	?	1520	7・55	346	49123	叩き石でも可
S356		縄文晩	石鏃	サヌカイト	210	1・65	038	095	完品
S357		縄文晩	石鏃	サヌカイト	206	1・30	028	079	完品
S358		縄文晩	石鏃	サヌカイト	203	1・45	030	083	完品
S359		縄文晩	石鏃	サヌカイト	162	1・14	027	051	完品
S360		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	825	3・65	107	348	
S361		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	980	4・20	134	3834	
S362		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	695	4・35	100	2968	
S363		縄文晩	刃部磨製石斧	片岩	1078	3・78	192	12168	完品
S364		縄文晩	磨製石斧	角閃石ヒン岩	1000	4・69	408	2983	刃部欠損
S365		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1635	4・55	268	295	完品
S366		縄文晩	石鏃(未製品?)	緑色片岩	1700	6・70	216	37925	石鏃素材剥片
S367		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1760	6・20	313	47249	刃部欠損、礫面あり
S368		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1970	7・05	286	45953	刃部欠損、表面礫面、側縁 ツブレ
S369		縄文晩	刃部磨製石斧	緑色片岩	1690	4・50	203	23999	表面礫面、側縁ツブレ
S370		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1540	6・05	165	21761	完品
S371		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1380	5・90	150	17132	完品
S372	縄文晩	石鏃	緑色片岩	1015	4・98	163	980	完品、表面礫面	
S373	縄文晩	石鏃	緑色片岩	955	4・35	150	9069	刃部欠損か?、礫面あり	
S374	縄文晩	石鏃	緑色片岩	955	4・35	151	7964	刃部欠損、表面礫面	
S375	縄文晩	石鏃	緑色片岩	915	3・73	136	5719	完品、表面礫面	
S376	縄文晩	石鏃	緑色片岩	820	4・20	130	5474	刃部欠損	
S377	縄文晩	石鏃	緑色片岩	975	4・10	144	7053	完品、基部原礫のママ	
S378	縄文晩	石鏃	緑色片岩	1015	4・43	210	9108	完品	
S379	縄文晩	石鏃	緑色片岩	847	5・20	242	13102	基部欠損	
S380	縄文晩	磨製石斧?	緑色片岩	1190	6・25	328	32131	基部欠損(未製品か)	
S381	縄文晩	石鏃	緑色片岩	980	7・10	350	26326	基部欠損、製作時に破損した	
S382	C地区包含層	縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	815	4・10	055	2145	
S383		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	490	3・10	060	709	
S384		縄文晩	R・F・	サヌカイト	360	3・10	060	606	

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm・	幅・径)・cm・	厚み・cm・	重量・g・	備考	
S 385	C地区包含層	縄文晩	石鏃	サヌカイト	480	190	060	535	石鏃?	
S 386		縄文晩	石鏃	サヌカイト	160	130	090	051		
S 387		縄文晩	石鏃	サヌカイト	215	130	030	058		
S 388		縄文晩	石鏃	サヌカイト	220	125	024	067		
S 389		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1560	560	240	26968	完品、刃部一部礫面	
S 390		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1205	660	200	20045	完品、礫面あり	
S 391		縄文晩	石鏃	緑色片岩	925	470	100	6045	完品	
S 392		縄文晩	定角式石斧	流紋岩	870	480	220	14041	完品	
S 393		縄文晩	楔	サヌカイト	280	270	120	894		
S 394		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	310	295	070	917		
S 395		縄文晩	楔	サヌカイト	365	255	100	1337		
S 396		縄文晩	楔	サヌカイト	330	335	060	949	楔?	
S 397		縄文晩	楔	サヌカイト	535	255	126	2216		
S 398		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	600	390	090	1622		
S 399		縄文晩	石鏃	サヌカイト	140	130	040	043		
S 400		縄文晩	石鏃	サヌカイト	135	155	040	065		
S 401		縄文晩	石鏃	サヌカイト	170	145	025	052		
S 402		縄文晩	石鏃	サヌカイト	150	145	033	062		
S 403		縄文晩	石鏃	サヌカイト	170	130	030	067		
S 404		縄文晩	石鏃	サヌカイト	190	140	048	099		
S 405		縄文晩	石鏃	サヌカイト	165	155	040	104		
S 406		縄文晩	石鏃	サヌカイト	185	095	027	048		
S 407		縄文晩	石鏃	サヌカイト	180	120	045	083		
S 408		縄文晩	石鏃	サヌカイト	215	140	040	097		
S 409		縄文晩	石鏃	サヌカイト	220	140	035	077		
S 410		縄文晩	石鏃	サヌカイト	225	110	030	063		
S 411		縄文晩	石鏃	サヌカイト	175	140	025	070		
S 412		縄文晩	石鏃	サヌカイト	180	165	023	077		
S 413		縄文晩	石鏃	黒色片岩	920	455	105	5615	完品	
S 414		縄文晩	石鏃	黒色片岩	880	490	160	7362	刃部一部欠損	
S 415		縄文晩	石鏃	緑色片岩	835	480	150	8165	刃部欠損	
S 416		縄文晩	石鏃	緑色片岩	925	530	150	9864	完品	
S 417		縄文晩	石鏃	安山岩	1020	560	150	10087	刃部一部欠損	
S 418		縄文晩	刃部磨製石斧	角閃ヒン岩	480	560	180	6298	基部欠損	
S 419		縄文晩	刃部磨製石斧	片岩?	655	430	130	5661	基部欠損	
S 420		縄文晩	叩き石	角閃ヒン岩	915	810	400	37203		
S 421		縄文晩	凹石	ヒン岩	950	880	670	78767		
S 422		縄文晩	敲石	ヒン岩	990	720	680	68422		
S 423		縄文晩	石皿?	ヒン岩	1500	880	490	79651		
S 424		D地区包含層	縄文晩	石鏃	サヌカイト	155	125	032	065	基部一部欠損
S 425			縄文晩	石鏃	サヌカイト	196	140	040	073	完品
S 426			縄文晩	石鏃	サヌカイト	235	140	037	117	完品
S 427	縄文晩		石鏃	サヌカイト	230	145	040	093	完品	
S 428	縄文晩		スクレイパー	サヌカイト	720	360	103	2307		
S 429	縄文晩		石鏃	緑色片岩	795	415	120	5047	完品	
S 430	縄文晩		石鏃	サヌカイト	170	120	031	055	完品	
S 431	縄文晩		石鏃	サヌカイト	155	125	028	059	完品	
S 432	縄文晩		石鏃	サヌカイト	175	140	035	076	完品	
S 433	縄文晩		石鏃	サヌカイト	185	135	027	066	基部欠損	
S 434	縄文晩		石鏃	サヌカイト	175	152	033	092	先端部欠損	
S 435	縄文晩		石鏃	サヌカイト	165	155	038	079	完品	
S 436	縄文晩		石鏃	サヌカイト	200	170	040	148	完品	
S 437	縄文晩		石鏃	サヌカイト	210	150	045	091		
S 438	縄文晩		石鏃	サヌカイト	140	155	040	077	先端部欠損	

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm	幅・径)・cm	厚み・cm	重量・g	備考
S 439	D地区包含層	縄文晩	石鏃	サヌカイト	255	170	033	095	完品
S 440		縄文晩	石鏃	サヌカイト	161	120	030	050	先端部欠損
S 441		縄文晩	石鏃	サヌカイト	195	125	035	081	先端部欠損
S 442		縄文晩	石鏃	サヌカイト	192	115	044	080	完品
S 443		縄文晩	石鏃	サヌカイト	200	130	290	070	完品
S 444		縄文晩	石鏃	サヌカイト	215	131	029	070	完品
S 445		縄文晩	石鏃	サヌカイト	232	147	025	093	完品
S 446		縄文晩	石鏃	サヌカイト	222	158	034	113	完品
S 447		縄文晩	石鏃	サヌカイト	250	140	045	126	完品
S 448		縄文晩	石鏃	サヌカイト	190	120	034	066	完品
S 449		縄文晩	石鏃	サヌカイト	210	115	029	068	完品
S 450		縄文晩	石鏃	サヌカイト	230	120	049	104	完品
S 451		縄文晩	石鏃	サヌカイト	205	120	025	058	完品
S 452		縄文晩	石鏃	サヌカイト	255	155	048	142	基部欠損
S 453		縄文晩	石鏃	サヌカイト	235	110	036	104	完品
S 454		縄文晩	石鏃	サヌカイト	500	130	040	223	基部欠損
S 455		縄文晩	石鏃	サヌカイトか?	322	235	063	441	未製品
S 456		縄文晩	R・F・	サヌカイト	335	390	130	1265	スクレイパーにしては刃が鋭い
S 457		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	600	415	070	1772	
S 458		縄文晩	U・F・	サヌカイト	620	380	059	1205	
S 459		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	600	470	103	2290	石包丁か?
S 460		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	525	410	086	1762	
S 461		縄文晩	磨製石斧	片岩?	930	540	410	31068	基部欠損
S 462		縄文晩	磨製石斧	ヒン岩	870	500	295	20368	刃部欠損、敲打のみ
S 463		縄文晩	石鏃	緑色片岩	795	415	133	5353	基部欠損
S 464		縄文晩	石鏃	緑色片岩	905	480	100	5141	完品
S 465		縄文晩	石鏃	緑色片岩	915	435	086	3903	石鏃か?
S 466		縄文晩	石鏃	緑色片岩	925	475	148	7394	完品
S 467		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1090	490	093	6751	完品、礫面あり
S 468		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1035	505	155	11532	完品
S 469		弥生	石鏃	安山岩	1035	560	252	15446	完品、礫素材
S 470		縄文晩	石鏃	緑色片岩	970	450	126	7039	
S 471		縄文晩	石鏃	緑色片岩	785	645	131	8740	基部欠損
S 472		縄文晩	石鏃	ホルンフェルス	950	630	130	9411	基部欠損
S 473		縄文晩	石鏃	緑色片岩	930	570	168	14386	基部欠損
S 474		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1200	540	130	11180	刃部欠損
S 475		縄文晩	横刃型刃器	ホルンフェルス	1630	660	090	13101	
S 476		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	635	410	060	1488	
S 477		縄文晩	石鏃	サヌカイト	285	145	049	150	完品
S 478		縄文晩	石鏃	サヌカイト	290	190	045	117	完品
S 479		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	910	500	110	5097	
S 480		縄文晩	刃部磨製石斧	片岩?	925	490	117	7685	
S 481		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1410	540	275	26893	刃部欠損
S 482		縄文晩	刃部磨製石斧?	片岩?	1400	470	200	18689	完品
S 483		縄文晩	磨製石斧	流紋岩	735	360	126	4922	完品、側縁敲打のみ
S 484	縄文晩	縄文磨製石斧	斑礫岩	1075	570	345	32888		
S 485	縄文晩	磨製石斧	流紋岩	1810	545	600	98814	完品	
S 486	縄文晩	石核	サヌカイト	323	449	138	2026		
S 487	縄文晩	獣形勾玉	緑閃石	-	-	156	190	破損品	
S 488	縄文晩	石鏃	緑色片岩	996	415	143	7694	完品	
S 489	縄文晩	石鏃	安山岩	1125	460	180	10907	完品	
S 490	縄文晩	太型蛤刃石斧	砂岩	1448	632	372	52461		
S 491	縄文晩	石鏃	サヌカイト	333	112	060	202	鏃か?	
S 492	縄文晩	石匙	サヌカイト	312	667	079	1003		

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm	幅・径)・cm	厚み・cm	重量・g	備考
S 493	G地区包含層	縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	550	365	062	1681	石包丁状
S 494		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	424	639	080	2408	石包丁状石器
S 495		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	981	1209	135	15605	「バカ包丁」
S 496		弥生?	定角式石斧	流紋岩	605	360	093	3672	完品
S 497		縄文晩	定角式石斧	流紋岩	726	401	173	8156	定角式石斧
S 498		縄文晩	磨製石斧	玢岩	1334	506	334	31357	刃部欠損
S 499		縄文晩	磨製石斧	玢岩	1314	550	450	52309	敲打痕残存
S 500		縄文晩	太型蛤刃石斧	玢岩	1590	670	470	66024	基部欠損
S 501		縄文晩	磨製石斧?	斑瀾岩	1280	690	375	53763	基部欠損
S 502		縄文晩	石鏃	角閃石玢岩	1192	622	203	20948	基部欠損、表面レキ面 裏側剥離面で研磨
S 503		縄文晩	刃部磨製石斧	緑色片岩	1079	497	194	13046	完品 刃部研磨
S 504		縄文晩	刃部磨製石斧	黒色片岩	682	485	124	5411	完品
S 505		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1070	595	120	9120	完品
S 506		縄文晩	石鏃	黒色片岩	974	512	162	9644	完品、刃部礫面
S 507		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1030	445	175	11243	完品
S 508		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1065	565	155	11947	完品
S 509		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1085	570	230	18080	完品
S 510		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1190	500	150	12397	完品
S 511		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1178	607	291	24996	刃部欠損・礫面あり・敲打
S 512		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1304	540	135	14397	完品 刃部研磨
S 513	縄文晩	石鏃	緑色片岩	1340	575	165	14757	完品 表面レキ面	
S 514	縄文晩	石鏃	砂岩	1329	467	190	13223	完品、基部付近礫面	
S 515	縄文晩	石鏃	緑色片岩	1230	560	160	12208	完品	
S 516	縄文晩	石鏃	緑色片岩	1570	610	135	15315	完品	
S 517	縄文後	磨製石斧	流紋岩	1134	603	340	22990	刃部一部欠損	
S 518	縄文後	乳棒状石斧	流紋岩	1359	488		33529	石鏃の石材製	
S 519	H地区包含層	縄文晩	石鏃	緑色片岩	1405	590	210	20800	表面礫面
S 520		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1610	560	180	23110	表面節理面残存、刃部研磨 裏面礫面残存
S 521		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1640	540	210	21150	礫面一部残存、エグレ状の調整あり
S 522		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1210	570	170	14540	裏面礫面 完品
S 523		縄文晩	スクレイパー	サヌカイト	675	840	160	8750	
S 524		縄文晩	刃部磨製石斧	緑色片岩	980	325	100	4170	表・裏面とも刃部研磨 表面は礫面
S 525		縄文晩	刃部磨製石斧	安山岩	1100	360	125	4980	表・裏面とも刃部研磨 表面礫面残
S 526		縄文晩	磨製石斧	玢岩	840	640	280	24700	胴上半欠
S 527		縄文晩	石鏃	緑色片岩	940	470	125	7630	礫面一部残 刃部一部礫面
S 528		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1085	455	085	9590	頭部左一部欠損
S 529		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1115	420	120	6270	表面礫面
S 530		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1090	470	200	13060	表面礫面 刃部一部欠損
S 531		縄文晩	石鏃	緑色片岩	895	510	130	7910	礫面あり
S 532		縄文晩	石鏃	緑色片岩	935	370	140	6100	裏面刃部礫面
S 533		縄文晩	石鏃	黒色片岩	985	360	165	6020	表面一部礫面残存
S 534		縄文晩	石鏃	緑色片岩	915	510	215	11040	頭部一部欠 礫面一部残存
S 535		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1290	520	270	20280	刃部欠損
S 536		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1395	475	220	15650	
S 537		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1555	735	300	43650	表・裏面礫面残存礫 素材から製作
S 538		縄文晩	石鏃	緑色片岩	1680	505	220	19750	左側欠損、表面礫面および刃部研磨
S 539	I地区包含層	縄文	横刃型削器	?	1300	555	108	11550	
S 540		縄文?	石鏃	サヌカイト	210	180	037	120	
S 541		縄文	磨製石斧	ヒン岩	2120	810	370	92344	下部欠損
S 542		縄文	石鏃	ホルンフェルス	1405	715	277	33603	
S 543		縄文	石鏃	片岩?	1215	590	116	15483	
S 544	竪穴住居 2	弥生	石鏃	サヌカイト	204	172	063	174	完品

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm	幅・径)・cm	厚み・cm	重量・g	備考
S 545	竪穴住居 2	弥生	石鏃	サヌカイト	2・19	1・49	0・26	0・75	完品
S 546		弥生	石鏃	サヌカイト	1・81	1・32	0・24	0・55	
S 547		弥生	石鏃	サヌカイト	1・90	1・10	0・26	0・60	完品
S 548		弥生	石鏃	サヌカイト	1・75	—	0・24	0・53	破損品
S 549		弥生	石鏃	サヌカイト	2・30	1・10	0・25	0・59	
S 550		弥生	石鏃	サヌカイト	2・34	1・21	0・35	1・21	
S 551		弥生	石鏃	サヌカイト	3・10	0・71	0・42	1・06	棒状
S 552		弥生	石鏃	サヌカイト	3・21	2・11	0・49	3・83	
S 553		弥生	磨製石包丁	緑色片岩	—	—	0・75	9・38	破損品
S 554		弥生	R・F・	サヌカイト	3・21	6・94	0・77	17・52	43・44が接合、楔のちすクレイパーか
S 555		弥生	磨製石斧	流紋岩	10・83	3・25	1・33	90・43	完品
S 556		弥生	砥石	流紋岩	3・79	4・62	1・31	25・36	
S 557		弥生	砥石	流紋岩	6・80	6・39	1・88	104・76	
S 558		弥生	石核	黒色片岩	19・41	5・92	3・68	560・25	石鏃の石核、被熱?
S 559		竪穴住居 3	弥生	石鏃	サヌカイト	(1・65)	1・25	0・28	0・53
S 560	竪穴住居 5	弥生	磨製始刃石斧	片岩?	(8・20)	(6・60)	4・85	413・17	刃部欠損
S 561		弥生	石鏃	サヌカイト	1・85	1・55	0・20	0・68	完品
S 562	竪穴住居 7	弥生	台石	片岩?	28・70	20・30	10・70	1150・00	
S 563	竪穴住居 9	弥生	管玉	緑色凝灰岩	1・58	0・87	—	0・90	半分減。孔径0・24cm
S 564		弥生	石槍	サヌカイト	2・52	1・71	0・79	3・37	先端のみ
S 565		弥生	石鏃	サヌカイト	3・71	1・98	0・42	3・97	完品
S 566		弥生	石鏃	サヌカイト	3・52	1・69	0・45	2・38	完品
S 567		弥生	石鏃	サヌカイト	2・93	3・00	0・60	3・87	完品
S 568		弥生	石鏃	サヌカイト	2・17	1・68	0・39	1・33	完品
S 569		弥生	石鏃	サヌカイト	1・82	1・13	0・25	0・40	完品
S 570		弥生	石鏃	サヌカイト	2・12	1・51	0・29	0・88	
S 571		弥生	石鏃	サヌカイト	2・20	1・29	0・26	0・67	
S 572		弥生	石鏃	サヌカイト	1・90	(1・25)	0・28	0・46	
S 573		弥生	石鏃	サヌカイト	2・93	2・21	0・34	1・85	未製品?
S 574		弥生	楔	サヌカイト	2・99	1・52	0・68	4・44	
S 575		弥生	楔	サヌカイト	3・62	1・28	0・75	2・62	スボール
S 576		弥生	楔	サヌカイト	5・79	2・44	0・91	8・20	スボール
S 577		竪穴住居12	弥生	石鏃	サヌカイト	2・18	1・51	0・36	0・85
S 578	弥生		石杵	玢岩	10・48	8・12	7・97	780・40	
S 579	弥生		磨り石	ホルンフェルス	12・81	(8・79)	10・02	1452・47	磨り石?
S 580	弥生		磨り石	玢岩	14・69	11・57	9・61	2420・00	
S 581	土壌57		弥生	磨製石斧	緑色片岩	10・19	5・70	1・53	166・88
S 582	水田 1	弥生中期	磨製石包丁	緑色片岩	7・24	3・50	0・60	22・82	
S 583	河道 7	弥生	磨製石包丁	緑色片岩	4・92	13・82	0・65	71・93	
S 584		弥生	石鏃	サヌカイト	3・01	1・79	0・49	2・21	完品
S 585		弥生	磨製石斧	緑色片岩	7・41	3・40	0・91	38・53	
S 586	河道 9	弥生	石鏃	黒色片岩	12・60	3・45	1・52	43・71	下部欠損
S 587	河道 9	弥生	石鏃	砂岩	12・90	6・50	1・80	141・60	完品
S 588		弥生	石鏃	緑色片岩	13・35	5・30	1・45	131・20	刃部、礫面 完品
S 589	住居跡群周辺出土遺物	弥生	磨製石包丁	頁岩	(4・35)	(7・65)	0・63	29・26	欠損
S 590		弥生	磨製石包丁	砂岩	(8・19)	(5・50)	0・78	37・40	
S 591		弥生	磨製石包丁	緑色片岩	(8・45)	(6・43)	0・64	48・45	欠損
S 592		弥生	石包丁	緑色片岩	9・50	6・25	1・33	120・96	
S 593		弥生	磨製石斧未製品	ヒン岩	14・70	5・85	3・15	320・11	敲打のみ
S 594		弥生	磨製石斧	ヒン岩	8・55	5・25	3・26	238・02	基部欠損
S 595		弥生	石匙	玉ずい	3・60	2・40	0・80	6・28	
S 596		弥生	砥石	流紋岩	7・70	22・50	75・30	2500・00	石包丁、石斧などに使用か?
S 597		弥生	磨製石包丁	流紋岩	12・75	5・20	0・77	71・48	
S 598		弥生	磨製石包丁	流紋岩	13・20	4・20	0・64	53・03	完品
S 599	弥生	磨製石包丁	流紋岩	5・20	3・38	0・60	15・15		
S 600	弥生	磨製石包丁	頁岩	5・50	3・60	0・40	11・04		

石器・石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	時期	種別	材質	長さ・cm・	幅・径）・cm・	厚み・cm・	重量・g・	備考
S 601	遺構に伴わない遺物	弥生	石鏃	片岩?	1865	465	1.16	138.14	完品
S 602		弥生	磨製石包丁	流紋岩	825	4.16	0.94	38.82	
S 603		弥生	磨製石包丁	黒色片岩とケイ質片岩の互層	1095	4.00	0.77	51.94	
S 604		弥生	磨製石包丁	流紋岩	540	(9.91)	0.61	44.66	未製品、穿孔未
S 605		弥生	石包丁	緑色片岩	(49.50)	38.00	6.80	(15.60)	半分弱残る。
S 606		弥生	磨製石包丁	緑色片岩	880	4.70	0.74	41.78	
S 607		弥生	石鏃	サヌカイト	3.50	1.66	0.42	3.24	
S 608		弥生	環状石斧	砂岩(細粒)	9.32	8.15	2.31	159.97	
S 609	窪地 8	古墳	砥石	流紋岩	11.45	3.45	1.80	96.73	
S 610	遺構に伴わない遺物	古墳	砥石	流紋岩	8.85	4.90	3.65	187.12	
S 611	掘立柱建物52	中世	砥石	流紋岩	19.00	3.98	4.00	472.20	
S 612	墓13	中世	石鍋	滑石	6.80	8.40	1.20	—	内外面共にノミでケズリ、後丁寧に磨きあげている
S 613	土塚138	中世	硯	頁岩	3.30	3.05	2.90	—	
S 614	土塚191	中世	砥石	流紋岩	7.70	3.90	2.70	80.40	
S 615	土塚198	中世	石臼	流紋岩	33.00	—	9.05	1200.00	粉ひき臼
S 616	土塚201	中世	茶臼	流紋岩	14.15	—	7.25	3500.00	下臼
S 617	土塚208	中世	砥石	流紋岩	4.20	2.40	1.20	17.87	
S 618	堀 1	中世	砥石	流紋岩	(87.50)	50.00	51.50	(369.20)	一部欠損
S 619		中世	砥石	流紋岩	10.02	31.50	11.50	57.90	
S 620		中世	硯	頁岩	(49.90)	(60.50)	18.20	(40.80)	欠損
S 621		中世	砥石	流紋岩	11.50	4.03	3.16	216.57	
S 622	堀 2	中世	砥石	流紋岩	(65.50)	36.80	6.90	24.90	一部欠損
S 623	堀 3	中世	砥石	流紋岩	6.50	4.70	3.20	138.00	
S 624	遺構に伴わない遺物	中世	温石	滑石	127.00	86.50	20.50	(276.20)	欠損
S 625		中世	砥石	流紋岩	(72.00)	34.50	16.70	57.40	
S 626		中世	石臼	花崗岩	—	308.00	119.00	(11300.00)	孔径32cm
S 627		中世	石臼	砂岩	—	323.00	124.00	20700.00	孔径265cm
S 628		中世	硯	頁岩	—	—	—	—	
S 629		中世	石臼	流紋岩	28.80	13.90	8.40	4500.00	
S 630		中世	硯	粘板岩	7.80	7.10	2.00	—	
S 631		中世	硯	頁岩	4.15	5.40	2.16	37.12	
S 632		中世	温石	滑石	10.95	59.50	20.00	82.20	
S 633		中世	温石	滑石	67.50	41.00	20.80	43.85	
S 634	中世	茶臼	流紋岩	9.90	16.05	—	5600.00	下臼、孔径24cm	
S 635	中世	石臼	流紋岩	30.00	—	11.20	2500.00	上臼(粉挽ぎ)	
S 636	中世	温石	滑石	—	—	—	—		
S 637	掘立柱建物83	近世	石臼	—	—	194.00	129.00	(3100.00)	半分欠損。上皿。21cm。
S 638	柱穴列10	近世	石臼	礫岩	293.00	24.00	82.00	107.00	完品
S 639	遺構に伴わない遺物	近世	石臼	砂岩	190.00	内径(30.0)	127.00	3000	破損
S 640		近世	石臼	礫岩	280.00	—	94.00	26000	破損
S 641		近世	石臼	砂岩	外径22.0	内径(30.0)	(82.0)	(1220.8)	破損
S 642		近世	砥石	流紋岩	12.70	4.00	3.44	225.76	
S 643		近世	砥石	流紋岩	7.92	3.62	2.07	55.96	

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
M 1	竪穴住居 5	鉄片	440	(125)	(0.15)	394	
M 2	竪穴住居 9	ヤリガンナ	385	(100)	(0.40)	279	
M 3		不明	405	(125)	(0.50)	1094	
M 4		不明	300	(0.75)	(0.30)	202	
M 5		不明	382	(0.58)	(0.20)	106	
M 6		不明	210	(0.55)	(0.15)	074	
M 7		不明	(240)	(130)	020	120	
M 8		不明	265	(0.85)	(0.15)	111	
M 9		不明	245	(130)	013	096	
M10		不明	167	(0.99)	(0.24)	103	
M11		不明	183	(140)	(0.31)	228	
M12		不明	155	160	026	147	
M13		不明	107	(0.94)	(0.33)	064	
M14		竪穴住居12	不明	185	(110)	(0.10)	056
M15	溝 7	鎌	655	(170)	(0.20)	568	
M16	土壌墓 1	鎌	1515	(365)	(0.40)	4701	
M17		鎌	1440	(375)	(0.40)	4255	
M18		鎌	1250	(305)	(0.40)	2692	
M19		刀子	1529	225	047	3832	
M20	土壌84	鎌	1455	345	055	3363	
M21	土壌87	釘	(378)	063	066	(358)	
M22	窪地 8	鋤先	900	225	070	1687	
M23	河道10上流部	刀子	(749)	138	050	991	
M24		不明鉄器	305	086	027	340	
M25		不明鉄器	(349)	086	029	408	
M26		不明鉄器	253	102	025	318	
M27		不明鉄器	348	129	043	745	
M28		鎌	910	220	018	1652	
M29	遺構に伴わない遺物	鎌	560	290	045	2542	
M30	掘立柱建物 3	銅銭	2470		125	273	元祐通寶
M31	掘立柱建物 9	火打金	596	360	046	1707	
M32		釘	337	049	059	237	
M33		釘	379	055	055	381	
M34		釘	541	055	064	792	
M35		釘	654	094	102	744	
M36	掘立柱建物12	鑿	722	092	058	1463 ?	
M37	掘立柱建物13	銅銭	240	240	0110	211	政和通寶
M38	掘立柱建物13	銅銭	248	248	0125	239	皇宋通寶
M39	掘立柱建物15	釘	749	061	062	745	
M40		釘	594	052	061	335	
M41	掘立柱建物18	釘	—	—	—	—	
M42		釘	—	—	—	—	
M43	掘立柱建物22	銅銭	—	—	—	—	永樂通寶
M44		釘	—	(0.35)	(0.40)	508	
M45	掘立柱建物26	釘	703	(0.57)	065	713	
M46		釘	—	044	(0.39)	301	
M47	掘立柱建物27	釘	720	042	049	669	
M48		釘	—	(0.43)	(0.35)	110	
M49		釘	—	039	046	113	
M50		釘	—	039	036	083	
M51	掘立柱建物28	釘	617	088	073	1292	
M52	掘立柱建物29	鎌茎?	—	085	(0.34)	382	
M53	掘立柱建物30	貴金具	(346)	(0.94)	034	786	
M54	掘立柱建物33	銅銭	(245)	(245)	01~015	(229)	紹聖元寶
M55		銅銭	245	245	01~015	(234)	□平元寶
M56		銅銭	(240)	(240)	01~015	(176)	元祐通寶
M57		銅銭	(245)	(245)	01~015	(231)	政和通寶
M58	掘立柱建物37	釘	—	(0.40)	(0.42)	302	
M59		釘	—	039	(0.47)	224	
M60		釘	—	(0.38)	(0.54)	479	
M61	掘立柱建物53	釘	—	(0.47)	(0.50)	345	
M62	掘立柱建物57	刀子	—	(142)	(0.34)	1622	
M63	掘立柱建物59	茎	—	064	029	136	
M64	掘立柱建物61	釘	—	031	037	045	
M65	墓 3	鉄釘	580	(0.50)	(0.61)	740	
M66	墓 5	銅銭	244	244	014	357	開元通寶背面に「月」
M67		銅銭	244	244	012	305	開元通寶
M68		銅銭	242	242	014	236	開元通寶



金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
M69	墓 5	銅銭	248	248	0.105	237	宋通元寶背面に「星」
M70		銅銭	242	242	0.125	251	咸平元寶
M71		銅銭	240	240	0.11	163	皇宋通寶
M72		銅銭	243	243	0.15	374	治平元寶
M73		銅銭	239	239	0.135	325	熙寧元寶
M74		銅銭	248	248	0.135	348	元豊通寶
M75		銅銭	245	245	0.14	197	元豊通寶
M76		銅銭	243	243	0.125	213	
M77		銅銭	239	239	0.16	163	
M78		銅銭	240	240	0.145	363	紹聖元寶
M79		銅銭	250	250	0.13	273	紹聖元寶
M80		銅銭	234	234	0.14	241	聖宋元寶
M81		銅銭	245	245	0.15	249	慶元通寶背面に「四」1198年
M82	墓 6	銅銭	235	235	0.135	294	開元通寶
M83		銅銭	231	231	0.145	180	開元通寶
M84		銅銭	246	246	0.125	238	紹聖元寶？
M85		銅銭	—	—	0.110	(0.85)	紹聖元寶
M86	墓 7	銅銭	249	249	0.095	214	皇宋通寶
M87		銅銭	240	240	0.115	290	皇宋通寶
M88		銅銭	244	244	0.140	336	熙寧元寶
M89		銅銭	227	227	0.110	233	熙寧元寶
M90		銅銭	233	233	0.125	269	熙寧元寶？
M91		銅銭	224	224	0.110	200	治平元寶
M92	墓 8	釘	581	046	061	725	
M93		釘	—	061	053	355	
M94		釘	—	077	079	377	
M95		釘	475	039	036	242	
M96	墓 9	刀？	—	(230)	(050)	1760	
M97	墓10	銅銭	(245)	—	0.1~0.15	(102)	開元通寶
M98		銅銭	(245)	—	0.1~0.15	(134)	元祐通寶
M99		釘	—	090	060	1270	
M100	墓11	釘	650	061	072	582	
M101		釘	606	060	057	367	
M102		釘	629	066	091	744	
M103		釘	738	061	070	662	
M104	墓13	鑿	622	225	081	1750	
M105		釘	—	068	066	924	
M106	墓14	刀	1830	190	040	6424	
M107	墓15	刀	(2420)	290	065	12948	
M108	墓17	釘	—	(037)	(037)	213	
M109		釘	—	049	048	439	
M110		釘	—	048	062	378	
M111		釘	—	(062)	056	289	
M112	墓21	刀子	—	(140)	(030)	2259	
M113	墓22	釘	—	053	055	172	
M114		釘	—	051	048	229	
M115		釘	—	(035)	(040)	2190	
M116		釘	—	(043)	(046)	283	
M117		釘	—	(060)	(060)	319	
M118		釘	—	(045)	(030)	287	
M119		釘	—	(050)	(037)	130	
M120		釘	—	(030)	(030)	100	
M121		釘	—	(025)	(020)	070	
M122		釘	—	(027)	(032)	045	
M123		釘	—	(036)	(036)	036	
M124		釘	672	(039)	083	593	
M125		釘	630	(055)	057	447	
M126		釘	613	049	036	195	
M127		釘	633	053	(055)	386	
M128	釘	566	(068)	039	253		
M129	釘	—	(030)	(040)	284		
M130	釘	—	(055)	042	395		
M131	釘	—	(065)	(050)	189		
M132	墓23	紡錘車	—	(065)	(040)	4465	
M133		釘	—	055	(045)	458	
M134		釘	570	(072)	(067)	689	
M135	墓24	鎌	—	(360)	(110)	4997	
M136		鎌	—	370	060	2473	

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
M137	墓24	鎌	15.10	3.71	(0.89)	37.65	(雁股鎌)	
M138		鎌	—	(3.50)	(0.65)	22.37		
M139		鎌	—	3.10	(0.80)	71.26		
M140		鎌	—	(3.95)	(0.70)	35.05		
M141		鎌	—	3.25	(0.67)	31.77		
M142		鎌	(14.70)	(3.90)	(1.50)	42.23		
M143		鎌	—	(0.83)	(0.46)	12.65	(長頸鎌)	
M144		鎌の茎	—	(0.63)	(0.51)	8.42		
M145		鎌の茎	—	(0.67)	(0.64)	5.95		
M146		鎌の茎	—	0.58	0.39	2.79		
M147		釘	—	0.54	1.46	2.81		
M148		釘?	—	(0.52)	(0.47)	1.85		
M149		刀子茎	—	1.47	0.57	10.05		
M150		刀	(32.70)	(3.20)	(0.60)	199.71		
M151		(短)刀	35.66	(3.70)	(0.86)	222.65		
M152		墓25	刀子	12.98	(1.63)	(0.33)	16.61	
M153			釘	—	(0.46)	(0.43)	3.16	
M154			釘	—	(0.50)	(0.43)	5.46	
M155			不明	—	0.60	0.55	12.63	
M156	不明		—	(0.65)	(0.55)	19.77		
M157	不明		—	(0.60)	(0.55)	24.54		
M158	不明		—	(0.78)	(0.65)	52.76		
M159	墓26	釘	3.62	(0.50)	(0.47)	3.04		
M160		釘	—	(0.75)	(0.55)	4.26		
M161		釘	—	(0.55)	(0.60)	3.72		
M162		釘	—	(0.68)	(0.68)	6.29		
M163		釘	—	(0.35)	(0.52)	3.42		
M164		釘	—	0.64	0.54	3.51		
M165		釘	—	(0.40)	(0.40)	2.31		
M166		釘	—	(0.50)	(0.45)	2.49		
M167		釘	—	(0.57)	(0.38)	2.18		
M168		釘	—	(0.30)	(0.30)	1.26		
M169		釘	—	(0.51)	(0.45)	1.81		
M170		釘	—	(0.30)	(0.40)	1.10		
M171		鎌茎?	—	(0.64)	0.51	3.24		
M172	墓28	銅銭	2.55	2.55	—	1.95	天福通寶	
M173		釘	—	0.52	(0.48)	4.04		
M174		釘	—	0.40	0.42	1.85		
M175	墓29	刀子	—	(1.44)	(0.20)	5.26		
M176		釘	—	(0.48)	(0.42)	2.59		
M177		釘	—	0.50	0.43	2.85		
M178		釘	—	0.45	0.48	1.95		
M179		釘	—	0.41	0.40	1.58		
M180		釘	—	0.41	0.39	1.26		
M181		釘	—	(0.51)	(0.51)	3.26		
M182		釘	—	0.50	0.43	2.53		
M183	墓30	釘	5.65	(0.35)	(0.50)	3.63		
M184		釘	—	0.34	0.31	1.58		
M185		釘	—	(0.65)	(0.60)	3.88		
M186		釘	3.40	(0.40)	(0.45)	1.84		
M187		釘	—	(0.55)	(0.60)	3.05		
M188		釘	2.15	(0.40)	(0.60)	2.17		
M189	墓31	銅銭	2.35	—	0.14	1.63	嘉祐通寶	
M190	墓32	腰刀	34.42	3.90	1.58	287.25		
M191	墓33	銅銭	2.40	2.40	0.24	2.88	皇宋通寶	
M192		釘	6.65	(0.80)	(0.65)	12.32		
M193	墓34	釘	8.40	0.35	0.50	6.34		
M194		釘	5.90	0.50	0.52	4.69		
M195		鉄釘	—	(0.25)	(0.50)	2.68		
M196		鉄釘	—	(0.45)	(0.52)	2.92		
M197		不明	(7.60)	(5.90)	(1.40)	76.54		
M198	墓35	腰刀	30.00	3.54	1.31	181.43		
M199	焼成土壙 1	釘	—	0.43	0.51	4.33		
M200		釘	—	0.40	0.48	3.28		
M201		釘	—	0.33	0.40	2.29		
M202	埋喪遺構 1	釘	4.50	0.57	0.57			
M203	埋喪遺構 3	釘	—	(0.55)	(0.51)	3.35		
M204		釘	—	(0.50)	(0.45)	5.43		

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
M205	埋裏遺構 3	釘	—	0.60	(0.56)	4.77	
M206		釘	—	(0.45)	(0.45)	2.45	
M207		刀子茎	—	1.02	0.31	2.07	
M208		刀子茎	—	0.92	0.24	1.97	
M209		不明	—	(0.62)	(0.63)	15.90	
M210	集石土壙 1	鏡	8.80	8.60	0.38	—	水草蝶鳥鏡
M211	土壙93	釘?	5.75	(0.55)	(0.50)	7.93	
M212	土壙95	釘	16.20	(1.20)	(0.50)	36.57	
M213	土壙96	鉄鍋?	—	底径 (14.0)	—	107.07	
M214		釘	—	—	—	—	
M215		釘	—	—	—	—	
M216		釘	—	—	—	—	
M217	土壙118	釘	—	0.94	0.82	(8.75)	
M218	土壙119	容器蓋	(18.00)	—	2.65	—	破損著しい
M219		釘	—	0.42	0.46	2.37	
M220		釘	—	0.55	0.39	2.33	
M221		釘	—	0.49	0.54	2.99	
M222		釘?針	—	0.61	0.55	13.52	
M223	土壙123	釘	—	0.68	0.67	2.77	
M224		釘	—	0.53	0.61	1.82	
M225	土壙124	釘	—	0.47	0.48	5.14	
M226		釘	—	0.36	0.36	1.53	
M227	土壙125	釘	—	0.61	0.54	3.70	
M228		釘	—	0.54	0.47	2.87	
M229		釘	—	0.80	0.68	7.40	
M230	土壙129	釘	—	0.50	0.50	5.85	
M231		釘	6.25	0.55	0.50	4.93	
M232	土壙131	鉄片	14.80	10.90	0.66	354.70	
M233		釘	6.10	0.65	0.45	5.15	
M234	土壙137	茎	—	(1.00)	(0.25)	7.97	
M235		釘	—	—	—	—	
M236		釘	—	—	—	—	
M237	土壙143	釘	—	—	—	—	
M238	土壙144	釘	—	(0.44)	(0.50)	4.48	
M239	土壙146	釘	—	(0.50)	(0.52)	3.25	
M240	土壙147	鏝?	—	0.72	0.26	4.04	
M241		鏝?	—	1.54	0.30	3.68	
M242		貴金具?	—	0.23	0.52	1.64	
M243		釘	—	(0.45)	(0.50)	2.76	
M244	土壙150	釘	—	(0.40)	(0.55)	4.53	
M245		釘	—	(0.45)	(0.43)	2.38	
M246	土壙152	釘	—	(0.55)	(0.54)	3.11	
M247	土壙153	釘	—	(0.62)	(0.54)	3.51	
M248	土壙156	釘	—	(0.50)	(0.50)	5.88	
M249	土壙157	釘	—	(0.30)	(0.40)	2.41	
M250		鉄片	—	(2.30)	(0.30)	8.65	
M251	土壙158	不明	—	(1.00)	(0.70)	37.54	
M252		釘	—	(0.30)	(0.45)	2.72	
M253	土壙159	釘	—	(0.50)	(0.67)	6.33	
M254		釘	4.41	(0.24)	(0.40)	1.63	
M255		釘	—	(0.39)	(0.39)	1.93	
M256	土壙160	釘	—	(0.50)	(0.30)	1.41	
M257	土壙161	釘	5.10	(0.75)	(1.00)	9.07	
M258		釘	4.15	(0.50)	(0.40)	2.57	
M259		鉄片	2.80	1.70	(0.30)	6.64	
M260	土壙163	銅銭	2.36	2.36	—	1.10	銅銭 (元豊通寶)
M261		小札	4.16	2.43	0.22	6.20	
M262	土壙164	鐵茎?	—	(0.65)	(0.35)	2.02	
M263	土壙165	貴金具	—	0.16	0.99	4.71	
M264	土壙166	釘	5.80	(0.42)	0.48	4.39	
M265		釘	—	(0.59)	(0.56)	7.56	
M266		釘	—	(0.56)	0.59	4.07	
M267	土壙167	釘	—	(0.70)	(0.70)	7.26	
M268		釘	—	(0.80)	(0.70)	7.76	
M269		釘	—	(0.50)	(0.40)	2.14	
M270		釘	—	(0.60)	(0.40)	2.49	
M271		釘	—	(0.25)	(0.30)	0.51	
M272	土壙168	釘?	—	(0.73)	(0.61)	5.08	

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
M273	土壌169	刀子?	—	(149)	(029)	524		
M274		釘	—	(042)	(044)	132		
M275	土壌170	貴金具	(329)	(243)	033	720		
M276		釘	—	(061)	(075)	367		
M277		鐵莖?	—	(082)	(036)	652		
M278	土壌171	釘	—	(055)	(064)	493		
M279	土壌173	不明	—	(686)	(106)	8963		
M280	土壌176	釘	585	(045)	(055)	390		
M281		釘	—	(046)	048	261		
M282		釘	—	(060)	(064)	661		
M283		釘	—	(035)	(050)	201		
M284		釘	—	(052)	(045)	503		
M285		釘	—	(050)	(030)	152		
M286		釘	—	(050)	(040)	214		
M287		釘	—	046	047	261		
M288		釘	—	(030)	040	145		
M289		釘	—	(060)	(050)	166		
M290		釘	—	044	040	088		
M291		釘	—	(050)	(030)	104		
M292		釘	—	(055~06)	(070)	1871		
M293		釘	—	(055)	(050)	1448		
M294		釘	—	(050)	(045)	801		
M295		不明	—	174	047	181		
M296		不明	(282)	(055)	(069)	1495		
M297		不明	—	354	025	831		
M298		土壌177	釘	—	(039)	(045)	174	
M299			釘	—	036	035	163	
M300		土壌178	釘	—	057	049	445	
M301			釘	—	079	069	527	
M302		土壌179	釘	—	040	048	109	
M303	土壌180	釘	—	(070)	(083)	1643		
M304	土壌182	鐵莖	764	301	052	1865		
M305		—	—	118	145	1161		
M306		夕ガネ	493	209	118	3300		
M307		釘?	—	058	053	861		
M308		釘	—	047	056	406		
M309		釘	—	048	058	257		
M310		釘	—	058	052	322		
M311		釘	—	058	079	434		
M312		釘	—	059	062	589		
M313		釘	—	058	060	253		
M314		釘	—	061	065	676		
M315		釘	—	060	070	569		
M316		莖	—	068	027	169		
M317		釘	—	045	044	333		
M318		釘	—	065	067	327		
M319		釘	—	037	035	154		
M320		釘?	—	078	069	524		
M321		釘	—	037	037	091		
M322		釘	—	044	036	177		
M323		釘	—	124	059	2816		
M324		釘?	—	098	105	2489		
M325		釘	—	(095)	060	1053		
M326		釘	615	085	099	1466		
M327	釘	—	070	082	1102			
M328	土壌183	不明	—	(480)	(057)	4094		
M329		不明	—	—	(100)	8084		
M330	土壌184	釘	—	064	064	645		
M331		釘	—	075	062	562		
M332		釘	—	043	054	338		
M333		釘	—	(062)	(050)	1800		
M334	土壌185	釘	—	054	039	184		
M335	土壌186	不明	—	(381)	(298)	21679		
M336	土壌188	釘	—	078	080	253		
M337		刀子	—	181	089	1408		
M338	土壌189	釘	—	110	070	246		
M339		釘	—	156	101	1056		
M340	土壌191	鏝?	—	118	121	4518		

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
M341	土壌192	釘	550	128	089	578	
M342		釘	—	078	064	156	
M343		貴金具	331	322	102	538	
M344	土壌195	釘	—	(063)	(063)	664	
M345	土壌196	釘	—	119	109	998	
M346		釘	—	118	097	772	
M347		釘	—	080	088	682	
M348		釘	—	110	092	605	
M349		釘	—	081	075	353	
M350		釘	—	042	042	033	
M351		釘	—	084	077	124	
M352		釘	—	057	058	117	
M353		釘	—	236	141	804	
M354		鏝?	—	282	091	994	
M355		刀子?	—	206	096	1587	
M356		刀子	—	134	059	703	
M357		土壌198	釘	—	090	069	1250
M358	土壌199	毛抜き	(766)	(140)	(034)	1369	
M359	土壌200	釘	—	051	050	242	
M360	土壌201	釘	438	(056)	(065)	518	
M361		釘	—	(056)	(057)	435	
M362		釘	—	(049)	(038)	436	
M363		釘	—	(053)	053	226	
M364		釘?	—	(059)	(061)	1075	
M365	土壌203	釘	—	060	055	953	
M366	土壌204	釘	—	(050)	(045)	430	
M367	土壌206	釘	680	(058)	(055)	864	
M368		釘	—	(060)	(065)	1402	
M369	土壌207	釘	—	(075)	(062)	741	
M370		釘	—	(040)	(045)	484	
M371	土壌208	釘	—	(065)	(050)	668	
M372	土壌209	釘	—	(050)	(055)	358	
M373	土壌210	釘	600	035	055	324	
M374		釘	—	050	050	640	
M375	土壌212	釘	—	050	040	267	
M376	土壌215	釘	—	060	045	401	
M377		釘	—	048	050	441	
M378		鉄釘	680	(055)	(040)	619	
M379		鉄釘	—	(055)	(055)	422	
M380		土壌216	鉄釘	—	(060)	(055)	394
M381	堀 1	銅銭	245	245	—	232	銅銭 (開元通寶)
M382		銅銭	245	245	—	250	銅銭 (天聖元寶)
M383		銅銭	237	237	—	229	銅銭 (熙寧元寶)
M384		火箸?	1160	(055)	(055)	1519	
M385		火箸?	1530	(055)	(055)	1998	
M386		釘	—	068	074	596	
M387		釘	—	074	064	620	
M388		釘	—	108	116	1375	
M389		釘	—	—	—	—	
M390		釘	—	—	—	—	
M391		釘	—	—	—	—	
M392		釘	—	—	—	—	
M393		堀 2	釘	—	—	—	—
M394	釘		—	—	—	—	
M395	釘		—	—	—	—	
M396	銅銭		243	243	—	133	*腐食が激しく種類 (文字) 等不明瞭
M397	茎		—	(112)	(029)	1337	
M398	釘		639	057	061	599	
M399	堀 3	釘	—	(067)	(048)	814	
M400		釘	—	(050)	(050)	556	
M401		釘	—	(057)	(045)	241	
M402		銅銭	240	240	0100	267	銅銭 (治平元寶)
M403		銅銭	240	240	0100	(100)	銅銭 (咸平元寶)
M404		銅銭	235	235	0130	291	銅銭 (元符通寶)
M405		釘	—	—	055	574	
M406		釘	—	—	040	399	
M407		刀子	1580	185	(025)	2905	
M408		刀子	880	(240)	(030)	2788	

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
M409	堀3	毛抜き	500	(100)	(0.15)	2081	
M410		釘	—	—	—	—	
M411		釘	—	—	—	—	
M412		釘	—	—	—	—	
M413		釘	—	—	—	—	
M414		釘	—	—	—	—	
M415		釘	—	—	—	—	
M416		釘	500	0.51	0.61	436	
M417	堀4	不明	—	(100)	(0.40)	1628	
M418		釘	—	(0.35)	(0.30)	195	
M419		釘	—	0.44	0.39	185	
M420	溝22	紡錘車	—	円盤 40 棒 0.4	—	4896	
M421		紡錘車	—	—	—	4445	
M422	溝24	釘	—	(0.90)	(0.70)	3868	
M423	溝31	不明	—	(1.78)	(0.77)	1838	
M424		釘	—	0.50	0.46	373	
M425	溝34	釘	—	0.60	0.65	524	
M426		釘	7.40	0.60	0.50	9.13	
M427		?	(4.60)	(4.20)	(0.40)	20.19	
M428	土器溜まり13	釘	—	(7.00)	(7.50)	19.05	
M429		釘	—	(7.20)	(5.00)	7.47	
M430		釘	—	(5.00)	(6.20)	9.65	
M431		釘	—	(7.00)	(6.00)	6.49	
M432		釘	—	(0.44)	(0.48)	2.46	
M433	土器溜まり17	釘	—	0.38	0.34	2.30	
M434		釘	—	(0.40)	(0.46)	3.42	
M435		釘	—	(0.34)	(0.57)	2.96	
M436		釘	—	0.35	(0.25)	0.97	
M437		釘	—	0.38	(0.27)	0.73	
M438		不明	—	4.45	0.17	18.98	
M439	窪地9	釘	—	(0.52)	(0.58)	5.67	
M440		釘	—	(0.58)	(0.68)	6.49	
M441		釘	—	(0.59)	(0.59)	4.69	
M442		釘	—	(0.64)	(0.50)	5.87	
M443		釘	—	0.47	0.55	3.29	
M444		釘	—	(0.55)	(0.48)	3.40	
M445		釘?	—	(0.64)	(0.47)	5.07	
M446		釘	—	(0.51)	(0.49)	3.69	
M447	釘	—	(1.03)	(0.74)	17.90		
M448	窪地10	釘	—	(0.45)	(0.40)	2.60	
M449		釘	—	0.35	(0.30)	0.74	
M450		釘	—	0.35	0.30	0.55	
M451	柱穴17	鍛冶滓	—	—	—	—	
M452	柱穴18	銅銭	2.52	2.52	0.125	285	開元通寶背面「月」
M453		銅銭	2.49	2.49	0.11	252	開元通寶背面「月」
M454		銅銭	2.46	2.46	0.125	330	開元通寶
M455		銅銭	2.40	2.40	0.15	391	淳化元寶
M456		銅銭	2.42	2.42	0.145	365	至道元寶
M457		銅銭	2.42	2.42	0.12	317	至道元寶
M458		銅銭	2.40	2.40	0.10	213	咸平元寶
M459		銅銭	2.44	2.44	0.11	1.49	咸平元寶
M460		銅銭	2.45	2.45	0.125	329	咸平元寶
M461		銅銭	2.50	2.50	0.135	387	咸平元寶
M462		銅銭	2.49	2.49	0.1	281	祥符通寶
M463		銅銭	2.42	2.42	0.24	4.15	祥符通寶
M464		銅銭	2.45	2.45	0.13	265	祥符通寶
M465		銅銭	2.53	2.53	0.11	296	天禧通寶
M466		銅銭	2.39	2.39	0.145	3.43	天禧通寶
M467		銅銭	2.43	2.43	0.13	2.60	天禧通寶
M468		銅銭	2.43	2.43	0.12	280	天聖元寶
M469		銅銭	2.54	2.54	0.13	3.63	景祐元寶
M470		銅銭	2.50	2.50	0.13	2.19	景祐元寶
M471		銅銭	?	—	—	—	皇宋通寶
M472		銅銭	2.41	2.41	0.11	2.67	皇宋通寶
M473		銅銭	2.42	2.42	0.09	1.44	皇宋通寶
M474		銅銭	2.42	2.42	0.11	2.40	皇宋通寶
M475		銅銭	2.47	2.47	0.11	1.26	皇宋通寶

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
M476	柱穴18	銅銭	249	249	0.12	238	皇宋通寶	
M477		銅銭	241	241	0.125	305	嘉祐通寶	
M478		銅銭	232	232	0.13	207	熙寧元寶	
M479		銅銭	222	222	0.11	181	熙寧元寶	
M480		銅銭	235	235	0.12	190	熙寧元寶	
M481		銅銭	239	239	0.135	341	熙寧元寶	
M482		銅銭	244	244	0.125	234	熙寧元寶	
M483		銅銭	242	242	0.10	228	元豊通寶	
M484		銅銭	242	242	0.12	207	元豊通寶	
M485		銅銭	245	245	0.11	297	元豊通寶	
M486		銅銭	233	233	0.13	295	元豊通寶	
M487		銅銭	251	251	0.11	336	元豊通寶	
M488		銅銭	244	244	0.11	159	元豊通寶	
M489		銅銭	240	240	0.125	329	元豊通寶	
M490		銅銭	241	241	0.125	259	元豊通寶	
M491		銅銭	249	249	0.1	251	元豊通寶	
M492		銅銭	232	232	0.115	211	元豊通寶	
M493		銅銭	246	246	0.1	273	元豊通寶	
M494		銅銭	217	217	0.12	234	元豊通寶	
M495		銅銭	240	240	0.14	318	元豊通寶背面「月」	
M496		銅銭	239	239	0.12	202	元祐通寶	
M497		銅銭	240	240	0.115	258	元祐通寶	
M498		銭銅	243	243	0.11	252	元祐通寶	
M499		銅銭	228	228	0.13	148	元祐通寶	
M500		銅銭	239	239	0.14	361	元祐通寶	
M501		銅銭	238	238	0.1	249	元祐通寶	
M502		銅銭	235	235	0.13	329	元祐通寶	
M503		銅銭	236	236	0.135	328	紹聖元寶	
M504		銅銭	248	248	0.125	291	元符通寶	
M505		銅銭	237	237	0.12	205	聖宋元寶	
M506		銅銭	245	245	0.145	358	聖宋元寶	
M507		銅銭	236	236	0.135	325	聖宋元寶	
M508		銅銭	243	243	0.115	246	政和通寶	
M509		銅銭	246	246	0.115	302	政和通寶	
M510		銅銭	235	235	0.135	323	政和通寶	
M511		銅銭	244	244	0.125	153	政和通寶	
M512		銅銭	234	234	0.11	160	政和通寶	
M513		銅銭	240	240	0.12	098	政和通寶?	
M514		銅銭	238	238	0.13	248	淳熙元寶背面「十五」1188年	
M515		銅銭	243	243	0.12	233	紹定通寶背面「三」1230年	
M516		銅銭	251	251	0.13	284	永樂通寶	
M517		銅銭	251	251	0.125	145	永樂通寶	
M518		銅銭	253	253	0.11	183	永樂通寶	
M519		銅銭	250	250	0.165	250	永樂通寶	
M520		銅銭	246	246	0.15	252	永樂通寶	
M521		A地区の遺物	銅銭	248	248	0.130	312	咸平元寶
M522			銅銭	248	248	0.125	273	皇宋通寶
M523			銅銭	252	252	0.105	298	銅銭(元寶)
M524			銅銭	243	243	0.125	274	元豊元寶
M525			銅銭	241	241	0.145	262	聖宋元寶
M526	銅銭		243	243	0.125	286	天聖元寶	
M527	銅銭		228	228	0.125	231	天禧通寶	
M528	銅銭		253	253	0.125	335	永樂通寶	
M529	銅銭		233	233	0.160	278	洪武通寶	
M530	銅銭		243	243	0.150	(294)	大観通寶	
M531	B地区の遺物	容器蓋	(径18.0)	—	2.70	636.40		
M532		山吹双鳥鏡	1080	1080	—	5340	鏡面に若干であるが布目痕跡有り。	
M533	C地区の遺物	銅銭	236	236	—	266	開元通寶	
M534		銅銭	247	247	—	278	天聖元寶	
M535		銅銭	249	249	—	314	景祐元寶	
M536		銅銭	246	246	—	227	皇宋通寶	
M537		銅銭	—	—	2.45	323	聖宋通寶	
M538		銅銭	244	244	—	226	至和元寶	
M539		銅銭	236	236	—	220	熙寧元寶	
M540		銅銭	240	240	—	199	元豊通寶	
M541		銅銭	242	242	—	230	元祐通寶	
M542		銅銭	244	244	—	237	聖宋元寶	
M543	銅銭	245	245	—	228	政和通寶		

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
M544	C地区の遺物	銅銭	247	247	—	248	政和通寶
M545		銅銭	—	—	—	138	政和通寶
M546		銅銭	200	200	—	292	永樂通寶
M547		銅銭	242	242	—	243	
M548		銅銭	249	249	—	101	
M549	D地区の遺物	刀	33.93	(331)	(0.76)	263.99	
M550	E地区の遺物	銅銭	232	232	—	160	嘉祐通寶
M551		銅銭	—	—	—	—	文字不明瞭
M552		銅銭	—	—	—	—	永樂通寶
M553		刀子	10.10	1.40	0.40	21.18	基部分銅板巻いている
M554	F地区の遺物	銅銭	—	—	1.11	1.70	咸平元寶
M555		銅銭	242	242	1.15	1.62	太平通寶
M556		銅銭	242	242	1.00	2.14	淳化元寶
M557		銅銭	242	242	1.10	1.59	景德元寶
M558		銅銭	250	250	1.25	1.88	天聖元寶
M559		銅銭	252	252	1.20	2.54	天聖元寶
M560		銅銭	—	—	1.30	1.31	天聖元寶
M561		銅銭	—	—	1.25	(1.26)	熙寧元寶
M562		銅銭	239	239	—	—	熙寧元寶
M563		銅銭	239	239	—	—	熙寧元寶
M564		銅銭	—	—	1.30	(1.93)	元豐通寶
M565		銅銭	—	—	1.35	2.05	元豐通寶
M566		銅銭	232	232	1.20	2.04	元豐通寶
M567		銅銭	242	242	1.30	1.55	元祐通寶
M568		銅銭	244	244	1.10	2.24	元祐通寶
M569		銅銭	234	234	1.15	2.96	元祐通寶
M570		銅銭	252	252	1.25	3.17	元祐通寶
M571		銅銭	252	252	1.20	2.00	祥符通寶
M572		銅銭	220	220	1.00	2.81	淳熙元寶
M573		銅銭	—	—	—	(1.25)	淳熙元寶
M574		銅銭	234	234	1.00	2.69	皇宗通寶
M575		銅銭	—	—	1.00	(1.03)	永樂通寶
M576		銅銭	—	—	1.20	(0.67)	
M577	G地区の遺物	銅銭	245	245	0.1~0.15	1.43	開元通寶
M578		銅銭	239	239	0.130	1.57	熙寧元寶
M579		銅銭	—	—	0.115	(1.10)	永樂通寶
M580	J地区の遺物	ノミ	7.90	1.20	0.65	22.68	
M581		鎌	11.50	(3.25)	1.60	30.97	
M582		刀子	(8.50)	1.30	0.28	9.89	
M583	K地区の遺物	山吹折枝鏡?	(外径) 11.00	(外縁幅) 0.45	—	145.91	
M584		鋤 or 鎌	19.90	12.00	1.50	314.10	
M585		腰刀	25.10	2.85	0.60	122.61	
M586	掘立柱建物84	銅銭	247	247	—	2.05	元豐通寶
M587		釘	—	0.30	0.43	2.62	
M588	墓37	釘	—	(0.40)	(0.35)	1.62	
M589		釘	3.55	(0.30)	(0.28)	1.46	
M590		釘	—	(0.30)	(0.35)	1.91	
M591	墓38	銅銭	230	230	0.130	2.43	寛永通寶 新寛永
M592		銅銭	234	234	0.130	3.13	寛永通寶 新寛永
M593	墓39	かすがい	(5.01)	0.78	0.31	3.65	
M594	墓43	釘	—	(0.72)	(0.50)	1.72	
M595		釘	—	(0.62)	(0.45)	1.99	
M596		釘	—	0.34	(0.46)	1.04	
M597		釘	—	0.39	(0.36)	1.54	
M598	墓44	キセル	8.32	—	0.08	8.34	最大径:100cm
M599	墓45	釘	—	0.44	0.35	1.16	
M600		釘	—	0.30	0.31	0.30	
M601		釘	—	0.32	0.35	0.29	
M602		釘	4.10	0.52	0.49	2.06	
M603		釘	3.72	0.51	0.44	1.73	
M604		釘	3.19	0.33	0.33	0.55	
M605		釘	3.34	(0.29)	(0.31)	1.24	
M606		釘	2.20	0.52	0.51	1.23	
M607		釘	2.77	(0.44)	0.39	1.69	
M608		釘	4.45	(0.30)	(0.38)	1.61	
M609		釘	6.06	0.54	0.50	6.72	
M610		釘	(3.68)	0.63	0.63	10.63	



金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
M611	墓46	釘	3・10	0・49	0・55	167	
M612		釘	3・33	0・47	0・51	249	
M613		釘	4・14	0・44	0・45	290	
M614		釘	3・46	0・49	0・50	201	
M615		釘	3・94	0・33	0・33	124	
M616		釘	2・61	0・41	0・42	100	
M617		釘	3・89	0・39	0・34	169	
M618		釘	4・32	0・76	0・55	234	
M619		銅銭	2・66	2・66	(0・16)	702	内孔径 0・52cm
M620		銅銭	2・36	2・36	0・120	201	寛永通寶
M621		銅銭	2・53	2・53	0・120	343	寛永通寶
M622		銅銭	2・45	2・45	0・110	374	寛永通寶
M623		銅銭	2・32	2・32	0・110	271	寛永通寶
M624		銅銭	2・49	2・49	0・140	282	寛永通寶
M625		銅銭	2・35	2・35	0・110	246	寛永通寶
M626		銅銭	2・44	2・44	0・110	317	寛永通寶
M627		銅銭	2・42	2・42	0・095	226	寛永通寶
M628		銅銭	2・33	2・33	0・100	438	寛永通寶
M629		銅銭	2・20	2・20	0・120	246	背面に「元」古寛永?
M630		墓49	釘	3・30	(0・49)	(0・32)	204
M631	釘		3・70	(0・42)	(0・40)	269	
M632	釘		3・52	(0・48)	(0・38)	239	
M633	墓51	銅銭	1000	—	—	26995	緋銭77枚
M634	墓54	釘	5・15	(0・42)	(0・30)	205	
M635	墓54	釘	3・45	(0・60)	(0・25)	171	
M636	墓55	はさみ	15・03	(2・45)	(0・45)	3908	
M637	墓55	釘	7・60	(0・58)	(0・48)	1025	
M638	墓56	毛抜き	6・95	0・70	—	400	
M639	墓58	毛抜き	9・30	2・19	—	4572	櫛、数珠玉付着
M640	墓59	釘	4・95	0・38	0・30	626	
M641	墓59	キセル	2・10	—	0・05	078	最大径・075cm
M642	墓61	キセル	5・65	—	0・10	1383	最大径・110cm
M643		不明銅製品	100	100	0・45	061	
M644		火打金	(2・35)	(5・88)	0・20	1140	
M645		釘	5・30	(0・50)	(0・40)	271	
M646		釘	4・68	(0・42)	(0・38)	272	
M647		釘	4・50	(0・40)	(0・38)	265	
M648		釘	5・20	(0・45)	(0・38)	312	
M649		釘	4・20	(0・50)	(0・45)	270	
M650		銅銭	2・27	—	0・11	151	寛永通寶
M651		銅銭	2・49	—	0・17	1296	寛永通寶
M652		銅銭	2・46	—	0・15	380	寛永通寶
M653		銅銭	2・29	—	0・10	200	寛永通寶
M654		銅銭	2・32	—	0・15	241	寛永通寶
M655		銅銭	2・32	—	0・10	308	寛永通寶
M656		銅銭	2・51	—	0・14	287	寛永通寶
M657		銅銭	4・88	—	0・29	2281	天保通寶
M658		墓62	釘	4・70	(0・48)	(0・32)	298
M659	墓63	釘	400	0・40	0・40	487	
M660	墓64	キセル	雁首 6・45 吸口 8・50	—	0・10	2198	最大径・110cm 最小径・065cm
M661		火打金	2・70	(8・60)	0・23	1274	
M662		釘	3・50	(0・32)	(0・30)	174	
M663	墓65	キセル	雁首 4・40 吸口 5・20	—	0・08	704	最大径・100cm 最小径・048cm
M664		キセル	4・60	—	0・08	424	最小径・065cm
M665	墓66	キセル	雁首 5・40 吸口 2・45	—	0・08	1286	最小径・050cm
M666		キセル	4・10	—	0・05	445	最大径・100cm 最小径・075cm
M667		匙	19・70	3・60	0・20	990	
M668		はさみ	12・92	2・15	0・47	1526	
M669		釘	2・95	(0・48)	(0・40)	183	
M670	墓70	釘	2・40	(0・35)	(0・28)	105	
M671	墓71	キセル	4・50	—	0・10	470	最大径・109cm
M672	墓72	銅銭	2・50	2・50	—	274	寛永通寶
M673		銅銭	2・51	2・51	—	283	寛永通寶
M674	墓73	銅銭	2・40	2・40	—	342	嘉定通寶
M675		銅銭	2・58	2・58	—	361	寛永通寶
M676		銅銭	2・40	2・40	—	241	寛永通寶

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
M677	墓73	銅銭	—	—	—	515	錆びた銭が1枚付着。
M678		銅銭	2.47	2.47	—	337	寛永通寶
M679		銅銭	2.31	2.31	—	261	寛永通寶
M680		銅銭	2.24	2.24	—	1.83	寛永通寶
M681		銅銭	2.27	2.27	—	1.99	寛永通寶
M682		銅銭	2.18	2.18	—	2.07	寛永通寶
M683		銅銭	—	—	—	3.44	鉄が付着。
M684		銅銭	2.41	2.41	—	1.63	
M685		銅銭	2.46	2.46	—	2.06	
M686		銅銭	2.31	2.31	—	2.46	
M687		銅銭	—	—	—	2.99	寛永通寶
M688		銅銭	2.21	2.21	—	2.52	
M689		銅銭	—	—	—	2.63	
M690	墓74	銅銭	—	—	—	2.15	寛永通寶
M691		キセル	18.00	—	—	34.96	最大径・1.10cm 最小径・0.60cm
M692	キセル	雁首 4.70 吸口 7.10	—	0.10	19.12	最小径・0.52cm	
M693	墓76	銅銭	2.46	2.46	—	2.40	永楽通寶
M694		銅銭	2.44	2.44	—	2.68	寛永通寶
M695		銅銭	2.44	2.44	—	3.66	寛永通寶
M696		銅銭	2.42	2.42	—	2.74	寛永通寶
M697		銅銭	2.45	2.45	—	2.79	寛永通寶
M698		銅銭	2.45	2.45	—	3.77	寛永通寶
M699		毛抜き	5.30	1.25	0.95	18.11	
M700	墓77	キセル	5.15	—	0.09	4.60	最大径・1.05cm
M701		銅銭	2.47	2.47	—	1.88	寛永通寶
M702		銅銭	2.25	2.25	—	2.49	寛永通寶
M703		銅銭	—	—	—	3.45	錆付着。
M704		銅銭	—	—	—	4.52	布付着及び2枚重ね。
M705	墓79	かんざし	12.40	—	0.20	4.06	全体に細かく腐食、錆膨れあり。
M706		はさみ	(19.20)	0.35	0.75	67.05	裏側に布が残っている。
M707		釘	—	0.35	0.60	2.66	
M708		釘	—	0.38	0.50	2.20	
M709		釘	—	0.28	0.25	3.60	
M710		釘	3.90	0.28	0.30	2.47	
M711		釘	—	0.30	0.30	2.99	
M712		釘	—	0.35	0.30	3.12	
M713		釘	—	0.40	0.30	2.34	
M714		釘	—	0.38	0.45	2.72	
M715		釘	—	0.25	0.20	3.74	
M716		釘	—	0.28	0.30	4.03	
M717		釘	—	0.30	0.38	1.29	
M718		釘	—	0.25	0.40	2.32	
M719		釘	—	0.28	0.20	2.32	
M720	銅銭	2.39	0.29	—	2.40	寛永通寶	
M721	墓80	キセル	11.35	—	0.07	6.55	最大径・1.00cm 最小径・0.60cm
M722		キセル	4.60	—	0.10	7.74	最大径・1.00cm *布付着あり。
M723	墓81	キセル	5.32	—	0.10	(5.64)	最大径・1.01cm 最小径・0.49cm
M724		釘	4.20	0.38	0.38	3.59	
M725		釘	3.80	0.40	0.35	1.33	
M726	釘	—	0.35	0.28	1.88		
M727	墓82	銅銭	2.51	2.51	—	3.52	寛永通寶
M728		銅銭	2.43	2.43	—	2.88	寛永通寶
M729		キセル	5.25	—	0.10	12.35	最大径・1.05cm
M730		釘	—	(0.38)	(0.25)	4.30	
M731		釘	—	(0.30)	(0.25)	4.65	
M732		釘	—	(0.30)	(0.30)	3.55	
M733		釘	—	—	—	—	
M734		釘	4.75	(0.30)	(0.30)	3.77	
M735		釘	—	(0.30)	(0.30)	4.52	
M736		釘	—	(0.30)	(0.30)	3.73	
M737	釘	—	(0.35)	(0.40)	3.66		
M738	釘	4.15	(0.28)	(0.25)	3.32		
M739	釘	—	(0.30)	(0.25)	3.13		
M740	釘	—	(0.30)	(0.30)	4.19		
M741	釘	—	0.28	(0.35)	4.23		
M742	墓82	釘	—	0.55	(0.50)	3.76	
M743		釘	—	(0.32)	(0.32)	4.46	

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
M744	墓83	毛抜き	—	0.65	0.18	423		
M745		釘	4.60	0.25	0.30	1.46		
M746		釘	3.06	(0.28)	(0.30)	1.57		
M747		釘	2.95	(0.25)	(0.22)	1.1		
M748	墓84	キセル	4.70	—	0.10	522	最大径・100cm 最小径・0.60cm	
M749	墓85	毛抜き	8.00	0.90	0.17	12.11		
M750	墓86	和ばさみ	11.72	2.30	6.00	30.19		
M751		キセル	4.85	—	0.10	892	最大径・100cm	
M752		釘	3.00	(0.35)	(0.30)	1.97		
M753		釘	3.80	0.40	(0.22)	3.86		
M754		のこぎり	26.60	3.05	2.90	48.54	裏に布(細かい目)が付着。	
M755		銅銭	2.46	2.46	—	3.19	寛永通寶	
M756		銅銭	2.50	2.50	—	2.97	寛永通寶	
M757		銅銭	—	—	—	10.16	寛永通寶	
M758		銅銭	2.44	2.44	—	2.99	寛永通寶	
M759		銅銭	2.44	2.44	—	2.99	寛永通寶	
M760		銅銭	2.43	2.43	—	2.85	寛永通寶	
M761		銅銭	2.35	2.35	—	2.08	寛永通寶	
M762		銅銭	2.29	2.29	—	2.28	寛永通寶	
M763		銅銭	2.35	2.35	—	3.24	寛永通寶	
M764		銅銭	2.32	2.32	—	2.61	寛永通寶	
M765		銅銭	2.43	2.43	—	3.08	寛永通寶	
M766		銅銭	2.37	2.37	—	2.37	寛永通寶	
M767		銅銭	2.30	2.30	—	2.56	寛永通寶	
M768		銅銭	2.31	2.31	—	3.06	寛永通寶	
M769		銅銭	2.31	2.31	—	2.14	寛永通寶	
M770		銅銭	2.32	2.32	—	2.03	寛永通寶	
M771		銅銭	2.25	2.25	—	2.10	寛永通寶	
M772		銅銭	2.31	2.31	—	2.46	寛永通寶	
M773		銅銭	2.32	2.32	—	2.67	寛永通寶	
M774		銅銭	2.31	2.31	—	3.49	寛永通寶	
M775		銅銭	2.28	2.28	—	1.78	寛永通寶	
M776		銅銭	2.39	2.39	—	2.84	寛永通寶	
M777		銅銭	2.31	2.31	—	2.54	寛永通寶	
M778		銅銭	—	—	—	3.69		
M779		銅銭	—	—	—	3.44		
M780		銅銭	—	—	—	3.38		
M781		銅銭	—	—	—	3.17		
M782		銅銭	2.21	2.21	—	3.63		
M783		銅銭	—	—	—	1.87		
M784		銅銭	2.31	2.31	—	2.58		
M785		墓87	銅銭	2.42	2.42	—	3.53	寛永通寶
M786			銅銭	2.52	2.52	—	3.16	寛永通寶裏「文」
M787			銅銭	2.42	2.42	—	3.03	寛永通寶
M788			銅銭	2.23	2.23	—	2.65	寛永通寶
M789			銅銭	2.42	2.42	—	3.35	
M790	墓88	釘	51.00	(6.00)	(3.80)	400		
M791		釘	—	—	—	—		
M792		銅銭	2.47	2.47	—	3.54	寛永通寶	
M793		銅銭	2.44	2.44	—	3.02	寛永通寶	
M794		銅銭	2.39	2.39	—	3.45	寛永通寶	
M795		銅銭	2.36	2.36	—	2.40	寛永通寶	
M796		銅銭	2.42	2.42	—	3.41	寛永通寶	
M797		銅銭	2.55	2.55	—	3.21	寛永通寶裏「文」	
M798		銅銭	2.55	2.55	—	2.93	寛永通寶裏「文」	
M799		銅銭	2.53	2.53	—	3.79	寛永通寶裏「文」	
M800		銅銭	2.53	2.53	—	3.65	寛永通寶裏「文」	
M801		銅銭	2.49	2.49	—	2.97		
M802	墓89	銅銭	2.55	2.55	—	3.42	寛永通寶裏「文」	
M803		銅銭	—	—	—	4.00	錆付着。	
M804		銅銭	—	—	—	5.99	錆付着 2枚重ね。	
M805		キセル	13.40	—	0.11	5.01	最大径・0.92cm 最小径・0.52cm	
M806		釘	(5.10)	0.35	0.45	3.14		
M807		釘	(4.58)	0.35	0.40	2.65		
M808		釘	(3.49)	0.30	0.30	2.34		
M809		釘	(4.05)	0.29	0.30	3.03		
M810		釘	(3.93)	0.22	0.30	2.50		
M811		釘	(3.85)	0.30	0.40	2.68		

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
M812	墓89	釘	(370)	032	030	278		
M813		釘	(315)	036	030	187		
M814		釘	(315)	025	020	214		
M815		釘	(310)	—	—	324		
M816	墓90	刀子?	660	080	(015)	726		
M817	墓91	毛抜き	880	115	090	1539		
M818		銅銭	236	236	—	217	寛永通寶	
M819	墓93	キセル	410	—	010	505	最大径・140cm	
M820		釘	3980	050	040	193		
M821		釘	3950	048	031	210		
M822		釘	3900	045	038	190		
M823		釘	3720	028	030	180		
M824		釘	3870	048	032	196		
M825		釘	3600	030	028	178		
M826		釘	4010	022	029	180		
M827		釘	3700	038	030	198		
M828		釘	3630	025	030	159		
M829		釘	3620	045	028	133		
M830		銅銭	250	250	—	331	寛永通寶	
M831		銅銭	252	252	—	363	寛永通寶裏「文」	
M832		銅銭	247	247	—	263	寛永通寶	
M833		銅銭	244	244	—	320	寛永通寶	
M834		銅銭	243	243	—	249	寛永通寶	
M835		銅銭	221	221	—	132	寛永通寶	
M836		銅銭	236	236	—	292	寛永通寶	
M837		銅銭	231	231	—	227	寛永通寶	
M838		銅銭	—	—	—	324	鉄錆付着。	
M839		銅銭	235	235	—	770	錆びた鉄銭が1枚付着。	
M840		銅銭	236	236	—	333		
M841		墓94	毛抜き	800	265	098	888	
M842			銅銭	244	244	—	229	寛永通寶
M843			銅銭	260	260	—	254	寛永通寶
M844			銅銭	256	256	—	242	寛永通寶
M845		土壌237	釘?	—	(035)	(033)	248	
M846			鉄塊	—	(415)	(380)	49376	
M847		土壌240	キセル	—	—	015	1544	最大径・091cm 最小径・055cm
M848		土壌241	銅銭	—	250	0105	158	淳化元寶
M849	土壌242	釘	—	037	041	151		
M850	土壌246	釘	—	(090)	(070)	1088		
M851	土壌248	釘	—	(084)	(060)	498		
M852	土壌250	刀子・鎌?	—	(267)	061	1916		
M853	堀3	刀子?	—	160	(038)	852		
M854		刀子	—	(130)	(050)	1123		
M855		ノミ	—	(190)	(045)	1601		
M856		鉄板	(640)	(770)	(050)	8720		
M857	溝53	銅銭	230	230	0095	123		
M858		槍	1150	(090)	(045)	2482		
M859		釘	—	043	060	349		
M860		釘	—	038	052	304		
M861	柱穴19	キセル	—	—	008	140	最大径・104cm 最小径・057cm	
M862	遺構に伴わない遺物	鋤の先	—	(240)	(140)	12305		
M863		釘	—	(090)	(080)	867		
M864		釘	—	(075)	(075)	870		
M865		釘	—	(075)	(070)	1048		
M866		キセル	—	—	010	533	最大径・093cm	
M867		キセル	—	—	009	636	最大径・095cm 最小径・036cm	
M868		キセル	—	—	006	517	最大径・094cm	
M869		キセル	—	—	007	307	最大径・005cm 最小径・045cm	
M870		キセル	684	135	007	730		
M871		銅銭	242	242	0125	205	寛永通寶	
M872		銅銭	252	252	0110	149	寛永通寶	
M873		銅銭	284	284	0120	508	寛永通寶	
M874		銅銭	252	252	0120	244	寛永通寶	
M875		銅銭	245	245	0120	245	寛永通寶	
M876		銅銭	244	244	—	372	寛永通寶	
M877		銅銭	246	246	—	310	寛永通寶	
M878		銅銭	238	238	—	244	寛永通寶	
M879		銅銭	236	236	—	225	寛永通寶	

金属製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
M880	遺構に伴わない遺物	銅銭	232	232	—	191	寛永通寶
M881		銅銭	241	241	—	268	寛永通寶
M882		銅銭	231	231	—	334	寛永通寶
M883		銅銭	246	246	—	376	寛永通寶
M884		銅銭	240	240	—	366	寛永通寶
M885		銅銭	—	—	—	190	錆付着。欠損部は105・5。
M886		銅銭	(245)	—	0.1~0.15	(2.15)	寛永通寶

土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	時期	長さ(…)	幅(…)	厚み(…)	孔径(…)	重さ(…)	色調	備考
C 1	袋状土城 1	円盤状土製品	縄文時代	3.00	2.85	0.50	—	6.00	灰黄色 (2.5Y 6・2)	
C 2		円盤状土製品	縄文時代	3.70	3.50	0.40	—	6.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)	
C 3		円盤状土製品	縄文時代	2.85	2.80	0.60	—	6.00	暗灰黄色 (2.5Y 5・2)	
C 4	土城 2	円盤状土製品	縄文時代	4.15	4.10	0.60	—	15.00	暗灰黄色 (2.5Y 5・2)	
C 5		円盤状土製品	縄文時代	4.65	4.20	0.65	—	16.00	褐灰色 (10Y R 4・1)	
C 6	土城 8	円盤状土製品	縄文時代	5.20	6.00	—	—	26.35		
C 7	土城12	耳飾か	縄文時代	—	2.80	—	—	7.00	黒色 (10Y R 2・1)	
C 8	土器溜まり 2 - A	円盤状土製品	縄文時代	2.60	2.55	0.50	—	4.00	鈍黄色 (2.5Y 6・3)	
C 9		円盤状土製品	縄文時代	2.80	2.50	0.60	—	4.00	灰黄褐色 (10Y R 5・2)	
C10		円盤状土製品	縄文時代	2.85	2.60	0.55	—	9.00	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)	
C11		円盤状土製品	縄文時代	3.10	2.90	0.40	—	5.00	暗灰黄色 (2.5Y 5・2)	
C12		円盤状土製品	縄文時代	2.95	2.90	0.70	—	7.00	黄灰色 (2.5Y 4・1)	
C13		円盤状土製品	縄文時代	2.90	2.80	0.60	—	6.00	鈍褐色 (7.5Y R 5・4)	
C14		円盤状土製品	縄文時代	3.10	3.00	0.40	—	5.00	暗灰黄色 (2.5Y 5・2)	
C15		円盤状土製品	縄文時代	3.90	3.90	0.50	—	6.00	鈍黄褐色 (10Y R 7・4)	
C16		円盤状土製品	縄文時代	3.50	3.35	0.50	—	6.00	暗灰黄色 (2.5Y 5・2)	
C17		円盤状土製品	縄文時代	3.70	3.40	0.60	—	8.00	鈍黄褐色 (10Y R 5・3)	
C18		円盤状土製品	縄文時代	4.60	4.40	0.55	—	14.00	鈍黄色 (2.5Y 6・3)	
C19	土器溜まり 2 - D	円盤状土製品	縄文時代	4.60	4.40	0.60	—	17.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・4)	
C20		円盤状土製品	縄文時代	4.80	4.65	0.60	—	16.00	鈍褐色 (7.5Y R 5・4)	
C21		円盤状土製品	縄文時代	5.20	4.70	0.80	—	22.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・4)	
C22	土器溜まり 2 - E	冠状土製品	縄文時代	—	4.00	—	—	25.00	灰黄色 (2.5Y 6・2)	
C23	土器溜まり 2 以外の地点	円盤状土製品	縄文時代	3.15	3.00	0.55	—	6.00	暗灰黄色 (2.5Y 5・2)	
C24		円盤状土製品	縄文時代	3.60	3.50	0.55	—	8.00	黄褐色 (2.5Y 5・3) 灰黄褐色 (10Y R 4・2)	
C25		円盤状土製品	縄文時代	3.60	3.50	0.65	—	9.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)	
C26		円盤状土製品	縄文時代	3.70	3.60	0.55	—	9.00	鈍黄褐色 (10Y R 7・2)	
C27		円盤状土製品	縄文時代	4.90	4.80	0.75	—	22.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)	
C28		不明	縄文時代	—	3.40	—	—	15.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・4)	(土器の一部か)
C29		土器溜まり 3	円盤状土製品	縄文時代	4.20	3.70	0.40	—	9.00	鈍黄褐色 (10Y R 5・3)
C30	土器溜まり 4	円盤状土製品	縄文時代	3.25	2.95	0.65	—	8.00	灰黄色 (2.5Y 6・2)	
C31		円盤状土製品	縄文時代	3.50	3.25	0.50	—	6.00	鈍黄褐色 (10Y R 7・4)	
C32		円盤状土製品	縄文時代	3.50	3.25	0.60	—	6.00	鈍褐色 (7.5Y R 7・4)	
C33		円盤状土製品	縄文時代	3.40	3.40	0.60	—	9.00	黄灰色 (2.5Y 4・1)	
C34	土器溜まり 7	円盤状土製品	縄文時代	4.00	3.60	0.40	—	6.00	褐色 (7.5Y R 6・6)	
C35		円盤状土製品	縄文時代	3.70	4.50	0.70	—	11.00	褐灰色 (10Y R 4・1)	
C36	窪地 1	円盤状土製品	縄文時代	4.20	3.80	0.65	—	12.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)	
C37		円盤状土製品	縄文時代	4.20	3.85	0.70	—	13.00	鈍黄色 (2.5Y 6・3)	
C38		円盤状土製品	縄文時代	4.80	4.70	0.80	—	21.00	暗灰黄色 (2.5Y 5・2)	
C39		円盤状土製品	縄文時代	5.70	5.90	0.85	—	25.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)	
C40		不明 (注口土器の把手部か)	縄文時代	—	4.90	—	—	68.00	黒褐色 (7.5Y R 3・1)	
C41	窪地 5	円盤状土製品	縄文時代	3.50	3.60	0.55	—	9.00	灰黄褐色 (10Y R 5・2)	
C42		円盤状土製品	縄文時代	2.60	2.90	0.40	—	4.00	鈍褐色 (7.5Y R 5・3)	赤彩の痕跡あり。
C43		円盤状土製品	縄文時代	3.60	3.90	0.50	—	10.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・4)	
C44		円盤状土製品	縄文時代	3.90	3.90	0.45	—	9.00	灰黄褐色 (10Y R 4・2)	
C45		円盤状土製品	縄文時代	3.80	3.40	0.60	—	10.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・4)	
C46		円盤状土製品	縄文時代	3.90	3.60	0.70	—	10.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・4)	
C47		円盤状土製品	縄文時代	3.95	3.95	0.45	—	9.00	鈍黄褐色 (10Y R 6・4)	
C48		円盤状土製品	縄文時代	4.10	4.50	0.80	—	13.00	鈍黄褐色 (10Y R 5・4)	
C49	河道 2 上流部東斜面	円盤状土製品	縄文時代	3.50	3.40	0.60	—	—	淡黄色 (2.5Y 8・3)	
C50		円盤状土製品	縄文時代	4.90	4.90	0.60	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)	
C51	河道 3 下流部	紡錘車の未製品	縄文時代	3.60	3.20	—	—	0.70	鈍黄褐色 (10Y R 5・3)	外面にミガキ痕あり
C52	河道 4 上流部西斜面	円盤状土製品	縄文時代	4.20	—	0.50	—	7.00	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)	
C53		円盤状土製品	縄文時代	4.00	—	0.90	—	4.00	灰黄褐色 (10Y R 6・2)	
C54	B地区包含層	円盤状土製品	縄文時代	4.50	4.60	0.50	—	—	黒褐色 (2.5Y 3・1)	器表・ミガキ痕あり
C55		円盤状土製品	縄文時代	4.80	4.40	0.60	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)	器表・条痕後ナデ
C56		円盤状土製品	縄文時代	4.50	4.00	0.60	—	—	暗灰黄色 (2.5Y 4・2)	器表・ミガキの痕跡あり
C57		円盤状土製品	縄文時代	4.00	4.40	0.60	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 5・3)	
C58		円盤状土製品	縄文時代	4.10	3.90	0.70	—	—	灰黄褐色 (10Y R 5・2)	器表・条痕後ナデ
C59		円盤状土製品	縄文時代	3.80	4.00	0.50	—	—	暗灰黄色 (2.5Y 5・2)	
C60		円盤状土製品	縄文時代	3.50	3.70	0.60	—	—	鈍黄色 (2.5Y 6・3)	器表・ミガキ
C61		円盤状土製品	縄文時代	3.50	3.80	0.70	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)	
C62		円盤状土製品	縄文時代	3.80	3.60	0.55	—	—	黒褐色 (10Y R 3・2)	器表・ミガキ
C63		円盤状土製品	縄文時代	3.60	4.20	0.70	—	—	暗灰黄色 (2.5Y 4・2)	
C64		円盤状土製品	縄文時代	3.80	3.60	0.70	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)	
C65	円盤状土製品	縄文時代	3.60	3.80	0.40	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 6・4)	器表・ミガキの痕跡あり	

土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	時期	長さ (..)	幅 (..)	厚み (..)	孔径 (..)	重さ (.)	色調	備考
C66	B地区包含層	円盤状土製品	縄文時代	390	380	080	—	—	黄灰色 (25Y 4・1)	
C67		円盤状土製品	縄文時代	360	390	050	—	—	黒褐色 (25Y 3・2)	器表・ミガキ
C68		円盤状土製品	縄文時代	310	360	050	—	—	浅黄色 (25Y 7・3)	
C69		円盤状土製品	縄文時代	300	290	065	—	—	黒褐色 (25Y 3・2)	
C70		滴巻形土製品	縄文時代	230	300	060	—	—	鈍黄橙色 (10Y R 7・4)	
C71	C地区包含層	円盤状土製品	縄文時代	380	360	075	—	1200	鈍黄橙色 (10Y R 7・3)	
C72		円盤状土製品	縄文時代	490	480	080	—	2100	鈍黄色 (25Y 6・3)	
C73		円盤状土製品	縄文時代	290	220	050	—	300	黄灰色 (25Y 4・1)	
C74		円盤状土製品	縄文時代	380	345	045	—	700	黄灰色 (25Y 4・1)	
C75		円盤状土製品	縄文時代	340	340	060	—	800	鈍黄橙色 (10Y R 6・4)	
C76		円盤状土製品	縄文時代	265	265	035	—	300	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)	
C77		円盤状土製品	縄文時代	410	400	055	—	1100	鈍黄褐色 (10Y R 5・3)	
C78		円盤状土製品	縄文時代	450	420	060	—	1000	鈍黄褐色 (10Y R 6・4) 灰黄色 (25Y 6・2)	
C79	D地区包含層	円盤状土製品	縄文時代	390	320	050	—	600	褐灰色 (10Y R 4・1)	
C80		円盤状土製品	縄文時代	370	340	060	—	900	黄灰色 (25Y 4・1)	
C81		円盤状土製品	縄文時代	370	350	060	—	900	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)	
C82		円盤状土製品	縄文時代	430	380	060	—	1100	黄褐色 (25Y 5・3)	
C83		円盤状土製品	縄文時代	(330)	410	060	—	1100	鈍赤褐色 (5 Y R 5・4)	
C84		円盤状土製品	縄文時代	520	490	070	—	1600	黒褐色 (75Y R 3・1)	
C85		円盤状土製品	縄文時代	550	500	070	—	2300	暗灰黄色 (25Y 5・2)	
C86		円盤状土製品	縄文時代	810	720	070	—	4800	鈍黄褐色 (10Y R 7・4)	
C87		円盤状土製品	縄文時代	860	720	085	—	5700	鈍黄色 (25Y 6・3)	
C88	竪穴住居2	円盤状土製品	弥生時代	369	350	055	—	840	赤褐色 (5 Y R 4・6)	
C89	住居跡群周辺出土遺物	紡錘車	弥生時代	270	290	055	035	490		土器転用
C90		紡錘車	弥生時代	390	370	060	(外) 05 (内) 03	960		土器転用
C91		紡錘車	弥生時代	480	310	060	—	1000	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)	土器転用
C92	遺構に伴わない遺物	紡錘車	弥生時代	—	—	—	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 6・4)	
C93		紡錘車	弥生時代	—	—	060	径30~ 39	800	鈍黄褐色 (10Y R 7・4)	
C94		紡錘車	弥生時代	300	310	060	—	700	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)	土器転用
C95	河道10下流部	鏡形土製品	古墳時代	460	440	185	—	2288	黄灰色 (25Y 5・2)	良
C96	竪穴遺構1	土錘	中世	—	—	—	—	—	暗灰色 (N 3・)	
C97	墓3	土錘	中世	520	135	—	—	800	灰褐色 (5 Y R 5・2)	
C98		土錘	中世	515	105	—	—	400	浅黄褐色 (10Y R 8・3)	
C99	墓34	土錘	中世	520	150	150	—	1100	灰白色 (5 Y 7・1)	黒斑あり。
C100	土壇96	土錘	中世	—	119	115	—	—	—	
C101		土錘	中世	—	139	140	—	—	—	
C102		土錘	中世	—	147	135	—	—	—	
C103		土錘	中世	—	144	130	—	—	—	
C104	土壇121	円盤状土製品	中世	475	460	—	—	—	黄灰色 (25Y 6・1)	瓦質土器の転用
C105	土壇128	土錘	中世	480	140	—	—	904	鈍黄褐色 (10Y R 7・2)	
C106	土壇131	土錘	中世	570	130	—	—	939	橙色 (5 Y R 6・6)	
C107	土壇135	土錘	中世	460	125	—	—	700	鈍褐色 (75Y R 7・3)	
C108	土壇151	土錘	中世	480	139	134	—	825	灰黄色 (25Y 7・2)	
C109		土錘	中世	594	139	139	—	1284	鈍黄褐色 (10Y R 7・2)	外面・赤色顔料塗布。
C110		土錘	中世	333	117	118	—	477	褐灰色 (10Y R 6・1)	
C111	土壇162	土錘	中世	—	172	182	—	—	灰白色 (10Y R 8・2)	
C112	土壇182	土錘	中世	—	185	190	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 7・2)	
C113		土錘	中世	—	180	—	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 7・2)	
C114	土壇184	土錘	中世	—	145	150	—	—	橙色 (25Y R 6・6)	
C115	土壇185	土錘	中世	580	130	120	—	900	灰黄色 (25Y 7・2)	
C116	土壇192	土錘	中世	590	155	150	—	1500	鈍褐色 (75Y R 6・4)	
C117	土壇196	土錘	中世	—	130	120	—	—	灰黄色 (25Y 7・2)	
C118	土壇211	土錘	中世	510	140	150	—	800	灰黄褐色 (10Y R 5・2)	
C119	堀1	土錘	中世	630	190	180	—	—	灰黄色 (25Y 7・2)	
C120	堀2	土錘	中世	—	160	140	—	—	鈍褐色 (75Y R 6・3)	
C121		土錘	中世	565	132	125	—	1010	灰黄褐色 (10Y R 6・2)	
C122		土錘	中世	505	130	120	—	900	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)	
C123		土錘	中世	570	120	140	—	900	浅黄色 (25Y 7・3)	
C124		土錘	中世	513	1110	140	—	690	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)	
C125	堀3	土錘	中世	—	230	—	—	—	鈍褐色 (75Y R 7・3)	
C126		土錘	中世	438	140	140	—	821	赤色 (10R 5・6)	
C127		土錘	中世	468	138	135	—	905	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)	
C128		土錘	中世	550	142	130	—	942	淡黄色 (25Y 8・3)	

土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	時期	長さ(…)	幅(…)	厚み(…)	孔径(…)	重さ(…)	色調	備考	
C 129	堀 3	土鍾	中世	446	203	190	—	1544	灰黄色 (25Y 7・2)		
C 130	溝23	土鍾	中世	—	(125)	—	—	—	鈍赤褐色 (10R 6・4)		
C 131	溝24	土鍾	中世	—	—	—	—	—	鈍赤褐色 (5 Y R 5・3)		
C 132		土鍾	中世	—	110	100	—	—	鈍褐色 (5 Y R 6・4)		
C 133		土鍾	中世	473	099	090	—	340	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)		
C 134		土鍾	中世	470	119	140	—	450	鈍黄褐色 (10Y R 7・4)		
C 135		土鍾	中世	503	095	088	—	460	鈍赤褐色 (5 Y R 5・3)		
C 136		土鍾	中世	464	108	100	—	430	黄灰色 (25Y 5・1)		
C 137		土鍾	中世	—	114	110	—	—	灰黄褐色 (10Y R 6・2)		
C 138		土鍾	中世	427	125	125	—	560	褐色 (25Y R 6・6)		
C 139		土鍾	中世	480	117	110	—	520	浅黄褐色 (10Y R 8・3)		
C 140		土鍾	中世	—	140	138	—	700	灰褐色 (5 Y R 5・2)		
C 141		土鍾	中世	542	135	138	—	770	灰褐色 (75Y R 5・2)		
C 142		土鍾	中世	528	147	140	—	930	灰黄褐色 (10Y R 5・2)		
C 143		土鍾	中世	580	152	145	—	1050	鈍黄褐色 (10Y R 7・2)		
C 144		土鍾	中世	687	119	840	—	840	鈍褐色 (7・3)		
C 145		溝25	土鍾	中世	550	130	130	—	—	灰色色 (5 Y 6・1)	
C 146		溝33	羽口	中世	—	—	—	—	—	鈍褐色 (75Y R 7・4)	タール状。
C 147	土器溜まり 13	土鍾	中世	—	210	—	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 7・2)		
C 148	窪地12	土鍾	中世	639	181	165	—	2000	鈍黄褐色 (10Y R 7・2)		
C 149		土鍾	中世	820	210	190	—	2100	灰白色 (10Y R 8・2)		
C 150		土鍾	中世	650	160	150	—	1400	鈍赤褐色 (5 Y R 5・3)		
C 151		土鍾	中世	480	150	130	—	700	鈍褐色 (75Y R 5・3)		
C 152		土鍾	中世	260	140	—	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)		
C 153	柱穴15	羽口	中世	—	—	—	—	—	—		
C 154	柱穴16	羽口	中世	(960)	(925)	(940)	—	—	—		
C 155	柱穴16	羽口	中世	1560	980	—	—	137918	明褐色 (75Y R 5・6)	被加熱により変色や裂け。	
C 156	B地区の遺物	土鍾	中世	460	140	095	—	—	灰黄褐色 (10Y R 4・2)		
C 157		土鍾	中世	394	116	100	—	429	鈍黄褐色 (10Y R 7・4)		
C 158		土鍾	中世	—	136	125	—	—	鈍赤褐色 (25Y R 5・4)		
C 159		土鍾	中世	—	134	130	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)		
C 160		土鍾	中世	470	140	130	—	900	黒褐色 (10Y R 3・2)		
C 161		土鍾	中世	510	150	140	—	900	灰黄色 (25Y 6・2)		
C 162		土鍾	中世	530	120	140	—	700	暗灰黄色 (25Y 5・2)		
C 163		土鍾	中世	530	130	130	—	700	暗灰黄色 (25Y 5・2)		
C 164		土鍾	中世	570	160	140	—	1000	灰白色 (25Y 8・2)		
C 165		土鍾	中世	505	133	135	—	978	鈍赤褐色 (5 Y R 5・3)		
C 166		土鍾	中世	542	142	145	—	1042	灰褐色 (75Y R 5・2)		
C 167		土鍾	中世	563	123	120	—	845	鈍赤褐色 (25Y R・3)		
C 168		土鍾	中世	624	124	145	—	1165	鈍赤褐色 (25Y R 5・4)		
C 169		土鍾	中世	—	147	145	—	—	—	灰色 (5 Y 5・1)	
C 170		土鍾	中世	(560)	1600	150	—	—	—	灰色 (5 Y 5・1)	
C 171		土鍾	中世	600	164	155	—	1424	鈍黄褐色 (10Y R 6・3)		
C 172	土鍾	中世	6140	1350	170	—	1612	灰褐色 (10Y R 8・2)			
C 173	土鍾	中世	—	227	220	—	—	—	浅黄色 (25Y 7・3)		
C 174	C地区の遺物	陶硯	中世	—	—	—	—	—	—		
C 175		陶硯	中世	(3360)	407	820	—	—	—		
C 176	D地区の遺物	土鍾	中世	542	101	100	—	540	浅黄褐色 (10Y R 8・3)		
C 177		土鍾	中世	484	119	120	—	720	鈍褐色 (75Y R 5・3)		
C 178		土鍾	中世	470	115	145	—	(600)	灰黄褐色 (10Y R 5・2)		
C 179		土鍾	中世	(540)	(110)	(120)	—	(600)	明褐色 (75Y R 5・6)		
C 180		土鍾	中世	—	134	130	—	—	—	灰黄褐色 (10Y R 5・3)	
C 181		土鍾	中世	473	149	150	—	940	浅黄褐色 (75Y R 8・6)		
C 182		土鍾	中世	547	149	140	—	1180	鈍赤褐色 (25Y R 5・4)		
C 183		土鍾	中世	549	164	150	—	1400	灰黄褐色 (10Y R 4・2)		
C 184		土鍾	中世	543	150	150	—	1200	鈍褐色 (75Y R 5・3)		
C 185		土鍾	中世	649	137	130	—	1070	鈍黄褐色 (10Y R 5・3)		
C 186		土鍾	中世	631	157	150	—	1320	鈍赤褐色 (5 Y R 5・4)		
C 187		土鍾	中世	682	207	200	—	2680	暗灰黄色 (25Y 5・2)		
C 188		円盤状土製品	中世	380	415	120	—	2900	灰色 (N 5・)	備前焼の加工品	
C 189		円盤状土製品	中世	—	—	—	—	—	—	—	
C 190	E地区の遺物	土鍾	中世	570	120	—	—	—	褐色 (5 Y R 6・6)	全体の2・3に黒変がみられる	
C 191		土鍾	中世	540	155	—	—	—	浅黄褐色 (10Y R 8・4)	中央部に黒斑	
C 192		土鍾	中世	—	125	—	—	—	浅黄褐色 (10Y R 8・3・8・4)	黒変あり	
C 193	F地区の遺物	土鍾	中世	480	145	—	—	—	灰色 (5 Y 6・1～5・1)		
C 194		紡錘車	中世	470	495	—	—	3400	灰黄褐色 (10Y R 5・2)		
C 195		土鍾	中世	322	150	145	—	615	鈍黄褐色 (10Y R 7・3)		



土製品一覧表

掲載 番号	掲載遺構名	種別	時期	長さ (..)	幅 (..)	厚み (..)	孔径 (..)	重さ (.)	色調	備考
C196	F地区の遺物	土錘	中世	364	131	115	—	4.17	橙色 (7.5Y R 7.6)	
C197		土錘	中世	—	149	105	—	—	橙色 (7.5Y R 7.6)	
C198		土錘	中世	409	140	130	—	7.12	橙色 (2.5Y R 6.6)	
C199		土錘	中世	—	143	107	—	—	鈍黄橙色 (10Y R 7.4)	
C200		土錘	中世	336	088	088	—	2.97	黄灰色 (2.5Y 5.1)	
C201		土錘	中世	307	093	090	—	2.69	灰色 (5 Y 6.1)	
C202		土錘	中世	—	143	110	—	—	橙色 (5 Y R 6.6)	
C203		土錘	中世	553	102	095	—	5.42	灰白色 (10Y R 8.2)	
C204		土錘	中世	549	117	115	—	7.30	鈍赤褐色 (5 Y R 5.4)	
C205		土錘	中世	500	130	128	—	8.61	灰黄褐色 (10Y R 4.3)	
C206		土錘	中世	476	140	125	—	8.57	灰黄色 (2.5Y 7.2)	
C207		土錘	中世	455	152	135	—	8.80	橙色 (7.5Y R 7.6)	
C208		土錘	中世	462	115	115	—	6.19	鈍橙色 (5 Y R 6.4)	
C209		土錘	中世	485	120	115	—	7.55	鈍黄褐色 (10Y R 5.3)	
C210		土錘	中世	550	103	110	—	5.04	鈍黄褐色 (10Y R 7.3)	
C211		土錘	中世	548	123	120	—	6.34	鈍黄褐色 (10Y R 7.3)	
C212		土錘	中世	535	094	090	—	4.96	鈍褐色 (7.5Y R 6.3)	
C213		土錘	中世	415	139	128	—	6.93	鈍橙色 (7.5Y R 7.3)	
C214		土錘	中世	379	130	125	—	5.95	鈍橙色 (7.5Y R 7.3)	
C215		土錘	中世	402	153	135	—	9.12	灰黄色 (2.5Y 6.2)	
C216		土錘	中世	422	120	110	—	5.90	明赤褐色 (2.5Y R 5.6)	
C217		土錘	中世	535	134	130	—	8.25	黄灰色 (2.5Y 5.1)	
C218		土錘	中世	393	134	128	—	6.34	鈍黄褐色 (5 Y R 5.2)	
C219		土錘	中世	458	125	120	—	6.17	鈍褐色 (7.5Y R 5.3)	
C220		土錘	中世	432	155	130	—	8.55	鈍黄褐色 (10Y R 6.3)	
C221		土錘	中世	526	131	128	—	8.19	橙色 (5 Y R 5.5)	
C222		土錘	中世	525	132	130	—	9.37	暗灰黄色 (2.5Y 5.2)	
C223		土錘	中世	493	125	122	—	7.76	灰色 (5 Y 6.1)	
C224		土錘	中世	530	160	145	—	12.28	灰色 (5.1)	
C225		土錘	中世	494	134	130	—	8.61	灰黄色 (2.5Y 6.2)	
C226		土錘	中世	560	149	135	—	9.40	黄灰色 (2.5Y 4.1)	
C227		土錘	中世	488	129	125	—	8.65	明褐色 (7.5Y R 7.2)	
C228		土錘	中世	497	127	125	—	7.67	鈍褐色 (7.5Y R 5.3)	
C229		土錘	中世	582	145	145	—	11.59	浅黄色 (2.5Y 7.3)	
C230		土錘	中世	524	135	130	—	9.63	鈍黄褐色 (10Y R 5.3)	
C231		土錘	中世	556	133	120	—	8.70	黄灰色 (2.5Y 5.1)	
C232		土錘	中世	—	160	140	—	—	黄灰色 (2.5Y 5.1)	
C233		土錘	中世	623	140	140	—	10.55	灰黄褐色 (10Y R 5.2)	
C234		土錘	中世	585	125	120	—	7.68	灰黄色 (2.5Y 7.2)	
C235		土錘	中世	636	170	168	—	12.41	鈍橙色 (5 Y R 6.4)	
C236		土錘	中世	—	220	215	—	—	灰黄色 (2.5Y 7.2)	
C237	土錘	中世	628	213	200	—	24.61	灰白色 (2.5Y 8.2)		
C238	土錘	中世	745	226	210	—	31.16	鈍橙色 (7.5Y R 6.4)		
C239	土錘	中世	—	207	210	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 6.4)		
C240	G地区の遺物	土錘	中世	—	190	180	—	—	褐色 (10Y R 4.1)	
C241		土錘	中世	610	125	125	—	8.35	黄灰色 (2.5Y 6.1)	
C242		土錘	中世	470	140	140	—	8.74	鈍黄褐色 (10Y R 7.2)	
C243		土錘	中世	490	150	150	—	10.40	明褐色 (7.5Y R 7.2)	
C244		土錘	中世	490	145	140	—	9.52	鈍褐色 (7.5Y R 6.4)	
C245		土錘	中世	(480)	140	130	—	(7.10)	浅黄褐色 (10Y R 8.4)	
C246		土錘	中世	480	160	160	—	11.86	淡赤褐色 (2.5Y R 7.4)	
C247		土錘	中世	—	130	130	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 7.3)	
C248		土錘	中世	410	130	130	—	6.29	鈍黄褐色 (10Y R 7.3)	
C249		土錘	中世	—	150	150	—	—	浅黄褐色 (10Y R 8.3)	
C250		土錘	中世	—	140	140	—	—	鈍褐色 (7.5Y R 7.3)	
C251		土錘	中世	—	150	150	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 7.3)	
C252		土錘	中世	—	140	140	—	—	浅黄褐色 (10Y R 8.4)	
C253		I地区の遺物	紡錘車	中世	500	500	07	0.65	16.00	橙色 (5 Y R 6.6)
C254	J地区の遺物	羽口	中世	1030	970	970	300	—	灰黄色 (2.5Y 6.1)	
C255		円盤状土製品	中世	54~ 57	—	05~ 07	—	29.00	鈍赤褐色 (2.5Y R 5.4)	備前焼の加工品
C256		土錘	中世	406	142	140	—	3.81	浅黄褐色 (10Y R 8.3)	
C257		土錘	中世	380	108	098	—	—	灰黄色 (10Y R 5.2)	
C258		土錘	中世	305	140	125	—	5.47	鈍褐色 (7.5Y R 5.3)	
C259		土錘	中世	283	133	130	—	4.97	浅黄褐色 (10Y R 8.3)	
C260		土錘	中世	317	150	140	—	5.35	浅黄褐色 (10Y R 8.3)	
C261	土錘	中世	330	154	135	—	6.20	明褐色 (7.5Y R 7.2)		

土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	時期	長さ(…)	幅(…)	厚み(…)	孔径(…)	重さ(…)	色調	備考	
C 262	J地区の遺物	土錘	中世	267	146	143	—	5.19	淡赤褐色 (2.5Y R 7.4)		
C 263		土錘	中世	382	155	150	—	8.76	灰黄色 (2.5Y 7.2)		
C 264		土錘	中世	343	155	163	—	7.87	灰白色 (10Y R 8.2)		
C 265		土錘	中世	533	142	130	—	9.74	灰白色 (2.5Y 7.1)		
C 266		土錘	中世	620	129	130	—	9.03	灰白色 (2.5Y 8.2)		
C 267		土錘	中世	620	122	130	—	8.76	灰白色 (10Y R 8.2)		
C 268		土錘	中世	—	118	113	—	—	—	灰色 (5 Y 5.1)	
C 269		土錘	中世	584	142	145	—	12.06	黒褐色 (2.5Y 3.1)		
C 270		土錘	中世	562	120	130	—	8.22	黄灰色 (2.5Y 6.1)		
C 271		土錘	中世	556	122	125	—	6.84	灰褐色 (7.5 Y R 5.2)		
C 272		土錘	中世	555	129	128	—	8.53	鈍褐色 (7.5 Y R 6.3)		
C 273		土錘	中世	662	122	118	—	8.22	鈍黄褐色 (10Y R 6.3)		
C 274		土錘	中世	551	125	118	—	6.84	褐灰色 (10Y R 6.1)		
C 275		土錘	中世	511	140	132	—	8.44	灰黄色 (2.5Y 6.2)		
C 276		土錘	中世	503	124	121	—	6.47	鈍黄褐色 (10Y R 7.2)		
C 277		土錘	中世	514	138	—	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 7.2)		
C 278		土錘	中世	494	134	135	—	8.43	鈍黄褐色 (10Y R 7.2)		
C 279		土錘	中世	528	135	128	—	8.48	灰黄色 (2.5Y R 5.1)		
C 280		土錘	中世	—	123	123	—	—	—	赤灰色 (2.5Y R 5.1)	
C 281		土錘	中世	490	158	150	—	11.29	褐灰色 (10Y R 5.1)		
C 282		土錘	中世	506	096	093	—	3.39	鈍色 (橙 5 Y R 7.4)		
C 283		土錘	中世	493	143	120	—	7.88	灰白色 (2.5Y 8.2)		
C 284		土錘	中世	555	146	143	—	10.48	灰白色 (2.5Y 8.2)		
C 285		土錘	中世	494	140	138	—	9.19	鈍黄色 (2.5Y 6.3)		
C 286		土錘	中世	548	161	160	—	10.95	鈍褐色 (5 Y R 6.4)		
C 287		土錘	中世	502	134	125	—	8.67	浅黄色 (2.5Y 7.3)		
C 288		土錘	中世	434	153	150	—	8.45	鈍褐色 (7.5 Y R 5.3)		
C 289		土錘	中世	535	153	150	—	11.05	灰白色 (5 Y 7.1)		
C 290		土錘	中世	668	141	130	—	11.08	浅黄褐色 (10Y R 8.3)		
C 291		土錘	中世	568	156	155	—	11.52	灰白色 (2.5Y 8.1)		
C 292		土錘	中世	574	175	160	—	18.18	灰黄色 (2.5Y 6.2)		
C 293		土錘	中世	610	172	165	—	14.69	灰白色 (10Y 8.2)		
C 294		土錘	中世	605	174	170	—	16.03	暗灰黄色 (2.5Y 5.2)		
C 295		土錘	中世	622	173	175	—	18.12	灰黄色 (2.5Y 6.2)		
C 296		土錘	中世	582	183	180	—	19.41	灰黄色 (2.5Y 6.2)		
C 297		土錘	中世	608	147	145	—	13.67	鈍黄褐色 (10Y R 7.3)		
C 298		土錘	中世	665	168	180	—	15.25	鈍黄褐色 (10Y R 7.3)		
C 299		土錘	中世	659	171	165	—	16.67	灰黄色 (2.5Y 6.2)		
C 300		土錘	中世	639	168	165	—	18.23	鈍黄褐色 (10Y R 7.3)		
C 301		土錘	中世	663	171	158	—	17.46	灰黄褐色 (10Y R 6.2)		
C 302		土錘	中世	658	159	158	—	17.53	褐灰色 (10Y R 6.2)		
C 303		土錘	中世	627	176	175	—	20.72	灰黄色 (2.5Y 7.2)		
C 304		土錘	中世	628	234	225	—	28.21	灰黄色 (2.5Y 7.2)		
C 305		土錘	中世	600	224	208	—	25.49	灰黄色 (2.5Y 7.2)		
C 306		土錘	中世	622	292	250	—	42.06	灰黄色 (2.5Y 7.2)		
C 307		土錘	中世	(655)	260	250	—	(34.30)	鈍黄褐色 (10Y R 7.3)		
C 308		K地区の遺物	土錘	中世	—	124	13	—	—	浅黄褐色 (10Y R 8.3)	
C 309	土錘		中世	—	130	12	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 6.3)		
C 310	土錘		中世	—	125	115	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 6.4)		
C 311	土錘		中世	304	150	142	—	7.15	鈍黄褐色 (10Y R 7.3)		
C 312	土錘		中世	304	130	13	—	5.43	褐色 (5 Y R 7.6)		
C 313	土錘		中世	442	170	10	—	5.29	褐色 (7.5 Y R 4.4)		
C 314	土錘		中世	—	125	12	—	—	—	灰黄色 (2.5Y 6.2)	
C 315	土錘		中世	—	134	12	—	—	—	オリーブ黒色 (5 Y 3.1)	
C 316	土錘		中世	496	120	112	—	6.56	灰黄色 (2.5Y 6.2)		
C 317	土錘		中世	—	129	12	—	—	—	灰黄色 (2.5Y 7.2)	
C 318	土錘		中世	—	135	132	—	—	—	灰白色 (2.5Y 8.2)	
C 319	土錘		中世	525	157	15	—	10.27	鈍黄褐色 (10Y R 6.4)		
C 320	土錘		中世	—	112	11	—	—	—	鈍黄褐色 (10Y R 7.4)	
C 321	土錘		中世	575	117	11	—	8.18	灰色 (5 Y 6.1)		
C 322	土錘		中世	565	144	135	—	9.62	黄灰色 (2.5Y 6.1)		
C 323	土錘		中世	542	140	132	—	10.27	灰黄色 (2.5Y 7.2)		
C 324	土錘		中世	605	146	15	34~35	12.58	鈍赤褐色 (2.5Y 5.3)		
C 325	土錘		中世	509	165	155	36~46	15.59	浅黄色 (2.5Y 7.3)		
C 326	土錘		中世	564	192	17	500	16.73	鈍黄褐色 (10Y R 6.3)		
C 327	土錘		中世	620	162	16	38~40	14.80	鈍黄褐色 (10Y R 6.3)		

土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	時期	長さ (..)	幅 (..)	厚み (..)	孔径 (..)	重さ (.)	色調	備考
C.328	K地区の遺物	土錘	中世	470	233	22	560	2055	鈍橙色 (7.5Y R 7.3)	
C.329		土錘	中世	—	235	135	3.5~4.1	—	灰黄色 (2.5Y 7.2)	
C.330		土錘	中世	633	253	230	550	3299	鈍橙色 (7.5Y R 7.3)	
C.331		土錘	中世	732	198	195	3.6~3.8	2442	浅黄色 (2.5Y 7.3)	
C.332	墓83	鳩笛	近世	690	270	—	—	2600	浅黄橙色 (10Y R 8.3)	羽の先端1cm位に朱付着。
C.333		鳩笛	近世	680	280	—	—	2500	浅黄橙色 (10Y R 8.3)	羽の先端1cm位に朱付着。
C.334	遺構に伴わない遺物	土鈴	近世	385	300	0.15	—	500	鈍黄橙色 (10Y R 6.4)	
C.335		釘形土製品	近世	4.10	(頭) 1.90 (胴) 1.15	—	—	—	鈍橙色 (5Y R 6.4)	
C.336		土錘	近世	490	160	—	—	—	黄灰色 (2.5Y 5.1)	
C.337		土錘	近世	520	160	—	—	—	鈍赤褐色 (2.5Y R 4.4)	
C.338		土錘	近世	440	120	—	—	—	明赤褐色 (5Y R 5.6)	
C.339		色絵婦人像	近世	—	—	—	—	—	灰白色 (10Y 8.1)	口と髪に赤く採色。伊万里18C前半。

新旧遺構名対照表

掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名
竪穴遺構 1	福田	A 4 S 区	No.15住居状遺構	掘立柱建物31	福田	A 4 S 区区	建物 B	掘立柱建物79	岡本	A 6 区	No.6 建物
竪穴住居 1	弘田	A 1 区	住居 1	掘立柱建物32	福田	A 4 S 区区	A 8 区 No.41柱列	掘立柱建物80	岡本	A 6 区	No.63建物
竪穴住居 2	二宮	B 1・2 区	住居 1	掘立柱建物33	福田	A 4 S 区区	岡上復元	掘立柱建物81	岡本	A 6 区	No.62建物
竪穴住居 3	江見	A 7 区下層	No.下 5 住居	掘立柱建物34	福田	A 4 S 区区	岡上復元	掘立柱建物82	岡本	A 6 区	No.76建物
竪穴住居 4 a	江見	A 7 区下層	No.下 6 住居 A	掘立柱建物35	平井	A 8 区	No.39建物	掘立柱建物83	江見	A 7 区	No.25建物
竪穴住居 4 b	江見	A 7 区下層	No.下 6 住居 A	掘立柱建物36	平井	A 8 区	No.38建物	掘立柱建物84	江見	A 7 区	No.24建物
竪穴住居 5 a	平井	A 8 区	No.70竪穴住居	掘立柱建物37	平井	C 1 区	No.7 建物	柱穴列 1	福田	C 4 区	No.71柱穴列
竪穴住居 5 b	平井	A 8 区	No.70竪穴住居	掘立柱建物38	平井	C 1 区	No.13建物	柱穴列 2	福田	C 4 区	No.72柱穴列
竪穴住居 6	平井	A 8 区	No.69竪穴建物	掘立柱建物39	平井	C 1 区	No.11建物	柱穴列 3	福田	C 4 区	No.73柱穴列
竪穴住居 7	平井	A 8 区	No.63竪穴建物	掘立柱建物40	平井	C 1 区	No.12建物	柱穴列 4	岡本	A 6 区	No.79柱穴列
竪穴住居 8	平井	C 1 区	No.40土壌	掘立柱建物41	平井	C 1 区	No.9 建物	柱穴列 5	岡本	A 6 区	No.78柱穴列
竪穴住居 9 b	平井	C 1 区	No.32住居	掘立柱建物42	平井	C 1 区	No.10建物	柱穴列 6	岡本	A 6 区	No.77柱穴列
竪穴住居 9 a	平井	C 1 区	No.32住居	掘立柱建物43	平井	C 1 区	No.8 建物	柱穴列 7	岡本	A 6 区	No.56柱穴列
竪穴住居 10	平井	C 1 区	No.34土壌	掘立柱建物44	福田	C 3 区	No.66建物	柱穴列 8	岡本	A 6 区	No.57柱穴列
竪穴住居 11	平井	C 3 区	No.33土壌	掘立柱建物45	福田	C 3 区	No.64建物	柱穴列 9	岡本	A 6 区	No.64柱穴列
竪穴住居 12	平井	C 4 区	No.31住居	掘立柱建物46	福田	C 3 区	No.47建物	柱穴列 10	岡本	A 6 区	No.75柱穴列
竪穴住居 13	平井	C 5 区	No.30土壌	掘立柱建物47	福田	C 2 区	No.65建物	柱穴列 11	平井	A 8 区	No.36柱穴列 1
竪穴住居 14	江見	A 3 区下層	No.下 32 住居	掘立柱建物48	福田	C 4 区	No.51建物	柱穴列 12	平井	A 8 区	No.柱穴列 6
掘立柱建物 1	平井	A 8 区	No.74建物	掘立柱建物49	福田	C 4 区	No.52建物	井戸 1	弘田	A 5 区	井戸 1
掘立柱建物 2	平井	A 8 区	No.83建物	掘立柱建物50	福田	C 4 区	No.58建物	井戸 2	弘田	A 1 区	井戸 1
掘立柱建物 3	江見	A 7 区	No.31建物	掘立柱建物51	福田	C 4 区	No.59建物	井戸 3	岡本	A 2・6 区	No.89井戸
掘立柱建物 4	江見	A 3 区	No.57建物	掘立柱建物52	福田	C 4 区	No.53建物	墓 1	伊藤	B 1・2 区	土壌墓 1
掘立柱建物 5	江見	A 3 区	No.58建物	掘立柱建物53	福田	C 4 区	No.54建物	墓 2	岡本	A 6 区	No.54土壌墓
掘立柱建物 6	江見	A 7 区	No.28建物	掘立柱建物54	福田	C 4 区	No.55建物	墓 3・4	江見	A 3 区	No.51・52土壌
掘立柱建物 7	江見	A 7 区	No.29建物	掘立柱建物55	福田	C 4 区	No.57建物	墓 5	江見	A 3 区	No.2 土壌墓
掘立柱建物 8	江見	A 7 区	No.51建物	掘立柱建物56	福田	C 4 区	No.56建物	墓 6	江見	A 4 区	No.10土壌
掘立柱建物 9	弘田	A 4 区	No.建物	掘立柱建物57	福田	C 4 区	No.60建物	墓 7	弘田	A 4 区	No.19土壌
掘立柱建物 10	江見	A 7 区	No.54建物	掘立柱建物58	福田	C 4 区	No.61建物	墓 8	伊藤	A 4 S 区	No.6 土壌
掘立柱建物 11	江見	A 7 区	No.38建物	掘立柱建物59	福田	C 4 区	No.62建物	墓 9	伊藤	A 4 S 区	No.2 土壌
掘立柱建物 12	弘田	A 4 区	No.13建物	掘立柱建物60	福田	C 4 区	No.63建物	墓 10	伊藤	A 4 S 区	No.13土壌
掘立柱建物 13	弘田	A 4 区	No.45建物	掘立柱建物61	福田	C 4 区	No.64建物	墓 11	伊藤	A 4 S 区	No.4 土壌(墓)
掘立柱建物 14	弘田	A 4 区	No.23建物	掘立柱建物62	福田	C 4 区	No.65建物	墓 12	伊藤	A 4 S 区	No.5 土壌(墓)
掘立柱建物 15	弘田	A 4 区	No.24建物	掘立柱建物63	福田	C 4 区	No.70建物	墓 13	伊藤	A 4 S 区	No.10土壌
掘立柱建物 16	弘田	A 4 区	No.14建物	掘立柱建物64	福田	C 4 区	No.67建物	墓 14	伊藤	A 4 S 区	No.12土壌
掘立柱建物 17	江見	A 7 区	No.52建物	掘立柱建物65	福田	C 4 区	No.68建物	墓 15	伊藤	A 4 S 区	p160
掘立柱建物 18	江見・平井	A 7 区・A 8 区	A 7 区 No.55・A 8 区 10 建物	掘立柱建物66	福田	C 4 区	No.66建物	墓 16	伊藤	B 1・2 区	土壌 24
掘立柱建物 19	平井	A 8 区	No.15建物	掘立柱建物67	福田	C 4 区	No.69建物	墓 17	伊藤	B 1・2 区	土壌 23
掘立柱建物 20	江見	A 7 区	No.35建物	掘立柱建物68	弘田	A 5 区	建物 2	墓 18	伊藤	B 1・2 区	土壌 19
掘立柱建物 21	伊藤	B 1・2 区	建物 4	掘立柱建物69	弘田	A 5 区	建物 1	墓 19	伊藤	B 1・2 区	土壌 22
掘立柱建物 22	伊藤	B 1・2 区	建物 3	掘立柱建物70	弘田	A 5 区	建物 4	墓 20	伊藤	B 1・2 区	土壌 34
掘立柱建物 23	伊藤	B 1・2 区	建物 2	掘立柱建物71	弘田	A 5 区	建物 3	墓 21	伊藤	B 1・2 区	土壌 28
掘立柱建物 24	伊藤	B 1・2 区	建物 1	掘立柱建物72	岡本	A 2 区	No.71建物	墓 22	伊藤	B 1・2 区	土壌 27
掘立柱建物 25	伊藤	B 1・2 区	建物 6	掘立柱建物73	岡本	A 6 区	No.81建物	墓 23	伊藤	B 1・2 区	土壌 36
掘立柱建物 26	伊藤	B 1・2 区	建物 5	掘立柱建物74	岡本	A 6 区	No.82建物	墓 24	伊藤	B 1・2 区	土壌墓 1
掘立柱建物 27	伊藤	B 1・2 区	建物 7	掘立柱建物75	岡本	A 6 区	No.87建物	墓 25	伊藤	B 1・2 区	土壌 A
掘立柱建物 28	伊藤	B 1・2 区	建物 8	掘立柱建物76	岡本	A 6 区	No.73建物	墓 26	伊藤	B 1・2 区	土壌墓 3
掘立柱建物 29	伊藤	B 1・2 区	建物 9	掘立柱建物77	岡本	A 6 区	No.72建物	墓 27	伊藤	B 1・2 区	土壌 53
掘立柱建物 30	伊藤	B 1・2 区	建物 10	掘立柱建物78	岡本	A 6 区	No.74建物	墓 28	伊藤	B 1・2 区	土壌墓 1

新旧遺構名対照表

掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名
墓29	伊藤	B 1・2区	土墳墓2	墓79	江見	A 7区	No14土墳墓	土墳14	岡本	A 2・6区	No99土墳
墓30	平井	C 1区	No 4土墳	墓80	江見	A 7区	No12土墳墓	土墳15	伊藤	B 1・2区	土墳62
墓31	福田	C 3区	No34土墳墓	墓81	江見	A 7区	No27土墳墓	土墳16	伊藤	B 1・2区	土墳63
墓32	福田	C 4区	No 5土墳	墓82	江見	A 7区	No15土墳墓	土墳17	伊藤	B 1・2区	土墳59
墓33	福田	C 3区	No 7土墳墓	墓83	江見	A 7区	No16土墳墓	土墳18	伊藤	B 1・2区	土墳64
墓34	福田	C 3区	No21土墳墓	墓84	江見	A 7区	No18土墳墓	土墳19	伊藤	B 1・2区	土墳50
墓35	福田	C 4区	No18土墳	墓85	江見	A 7区	No20土墳墓	土墳20	伊藤	B 1・2区	土墳47
墓36	二宮	A 9区	No 3土墳	墓86	江見	A 7区	No 21土墳墓	土墳21	伊藤	B 1・2区	土墳48
墓37	弘田	A 5区	墓 2	墓87	江見	A 7区	No22土墳墓	土墳22	伊藤	B 1・2区	土墳66
墓38	弘田	A 5区	墓 1	墓88	江見	A 7区	No23土墳墓	土墳23	伊藤	B 1・2区	土墳67
墓39	弘田	A 5区	土墳 9	墓89	江見	A 7区	No33土墳墓	土墳24	伊藤	B 1・2区	土墳60
墓40	弘田	A 5区	土墳 8	墓90・91	江見	A 7区	No 3・11土墳墓	土墳25	伊藤	B 1・2区	土墳58
墓41	弘田	A 5区	土墳 7	墓92	江見	A 7区	No 4土墳墓	土墳26	伊藤	B 1・2区	土墳55
墓42	弘田	A 5区	土墳 6	墓93	江見	A 7区	No59土墳墓	土墳27	伊藤	B 1・2区	土墳56
墓43	弘田	A 5区	土墳 5	墓94	江見	A 7区	No38土墳墓	土墳28	伊藤	B 1・2区	土墳54
墓44	岡本	A 2・6区	No 5土墳	袋状土墳1	江見	A 3区	No下43削竅穴	土墳29	伊藤	B 1・2区	土墳53
墓45	岡本	A 6区	No18土墳	袋状土墳2	岡本	A 2・6区	No98袋状土墳	土墳30	伊藤	B 1・2区	土墳22
墓46	岡本	A 2区	No60土墳	袋状土墳3	平井	A 8区	No62土墳	土墳31	伊藤	B 1・2区	土墳46
墓47	江見	A 3区	No35土墳墓	袋状土墳4	平井	A 8区	No79土墳	土墳32	平井	A 8区	No53土墳
墓48	江見	A 3区	No37土墳墓	袋状土墳5	弘田	A 4区	No50袋状土墳	土墳33	平井	A 8区	No54土墳
墓49	江見	A 3区	No34土墳墓	焼成土墳1	岡本	A 2区	No106焼成土墳	土墳34	平井	A 8区	No84土墳
墓50	江見	A 3区	No33土墳墓	焼成土墳2	平井	C 1区	No 3土墳	土墳35	平井	A 8区	No85土墳
墓51	江見	A 3区	No31土墳墓	焼成土墳3	平井	C 1区	No18土墳	土墳36	平井	C 1区	No72土墳
墓52	江見	A 3区	No30土墳	埋喪 1	江見	A 4区	No 4土墳	土墳37	二宮	A 9区	No15土墳
墓53	江見	A 3区	No32土墳墓	埋喪 2	伊藤	A 4 S区	No 1土器	土墳38	二宮	A 9区	No16土墳
墓54	江見	A 3区	No27土墳墓	埋喪 3 A	伊藤	B 1・2区	土墳58	土墳39	二宮	A 9区	No17土墳
墓55	江見	A 3区	No28土墳墓	埋喪 3 B	伊藤	B 1・2区	土墳59	土墳40	平井	C 1区	No69土墳
墓56	江見	A 3区	No29土墳墓	埋喪 3 C	伊藤	B 1・2区	土墳60	土墳41	平井	C 1区	No71土墳
墓57	江見	A 3区	No48土墳墓	埋喪 3 D	伊藤	B 1・2区	土墳61	土墳42	平井	C 1区	No70土墳
墓58	江見	A 3区	No44土墳	埋喪 3 E	伊藤	B 1・2区	土墳62	土墳43	平井	C 1区	No67土墳
墓59	江見	A 3区	No54土墳墓	埋喪 3 F	伊藤	B 1・2区	土墳63	土墳44	平井	C 1区	No73土墳
墓60	江見	A 3区	No43土墳	埋喪 3 G	伊藤	B 1・2区	土墳64	土墳45	平井	C 1区	No68土墳
墓61	江見	A 3区	No39土墳墓	集石土墳1	弘田	A 4区	No20土墳墓	土墳46	平井	C 1区	No66土墳
墓62	江見	A 3区	No49土墳墓	集石 2	平井	A 8区	No31集石遺構	土墳47	伊藤	B 1・2区	土墳20
墓63	江見	A 3区	No40土墳	石散土墳 1	平井	A 8区	No44石散土墳	土墳48	伊藤	B 1・2区	土墳21
墓64	江見	A 3区	No20土墳墓	土墳 1	弘田	A 5区	土墳14	土墳49	平井	C 1区	No42土墳
墓65	江見	A 3区	No21土墳墓	土墳 2	江見	A 3区下層	No下10竅穴	土墳50	平井	C 1区	No43土墳
墓66	江見	A 3区	No22土墳墓	土墳 3	岡本	A 2・6区	No107土墳	土墳51	平井	C 1区	No76土墳
墓67	江見	A 3区	No23土墳墓	土墳 4	江見	A 3区下層	No下36土墳	土墳52	平井	C 1区	No75土墳
墓68	江見	A 3区	No24土墳墓	土墳 5	江見	A 3区下層	No下35土墳	土墳53	平井	C 1区	No44土墳
墓69	江見	A 3区	No25土墳墓	土墳 6	江見	A 3区下層	No下34土墳	土墳54	江見	A 3区下層	No下 2土墳
墓70	江見	A 3区	No26土墳墓	土墳 7	江見	A 3区下層	No下33土墳	土墳55	伊藤	B 1・2区	土墳 1
墓71	江見	A 7区	No63土墳墓	土墳 8	江見	A 7区	No下18土墳	土墳56	伊藤	B 1・2区	土墳65
墓72	江見	A 7区	No61土墳墓	土墳 9	江見	A 7区	No下19土墳	土墳57	伊藤	B 1・2区	土墳61
墓73	江見	A 7区	No 2土墳墓	土墳10	岡本	A 2・6区	土器 1	土墳58	伊藤	B 1・2区	土墳73
墓74	江見	A 7区	No 1土墳墓	土墳11	江見	A 7区	No下21土墳	土墳59	伊藤	B 1・2区	土墳74
墓75～77	江見	A 7区	No10・25・26土墳墓	土墳12	江見	A 7区	No下20土墳	土墳60	伊藤	B 1・2区	土墳51
墓78	江見	A 7区	No 3土墳	土墳13	岡本	A 2・6区	No96土墳	土墳61	伊藤	B 1・2区	土墳49

新旧遺構名対照表

掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名
土壌62	伊藤	B 1・2区	土壌52	土壌110	江見	A 7区	No23土壌	土壌157	伊藤	B 1・2区	土壌65
土壌63	伊藤	B 1・2区	土壌71	土壌111	江見	A 7区	No39土壌	土壌158	伊藤	B 1・2区	土壌55
土壌64	伊藤	B 1・2区	土壌72	土壌112	江見	A 7区	No49土壌	土壌159	伊藤	B 1・2区	土壌32・33
土壌65	伊藤	B 1・2区	土壌70	土壌113	江見	A 7区	No47土壌	土壌160	伊藤	B 1・2区	土壌39
土壌66	伊藤	B 1・2区	土壌69	土壌114	江見	A 7区	No46土壌	土壌161	伊藤	B 1・2区	土壌37
土壌67	伊藤	B 1・2区	土壌68	土壌115	弘田	A 4区	No26・36土壌	土壌162	伊藤	B 1・2区	土壌44
土壌68	弘田	A 4区	No52土壌	土壌116	弘田	A 4区	No28土壌	土壌163	伊藤	B 1・2区	土壌30
土壌69	江見	A 7区	No58土壌	土壌117	弘田	A 4区	No27土壌	土壌164	伊藤	B 1・2区	土壌41
土壌70	江見	A 7区	No41土壌	土壌118	弘田	A 4区	No25土壌	土壌165	伊藤	B 1・2区	土壌29
土壌71	江見	A 7区	No40土壌	土壌119A	江見	A 4区	No16土壌	土壌166	伊藤	B 1・2区	土壌19
土壌72	江見	A 7区下層	No下2土壌	土壌119B	江見	A 4区	No17土壌	土壌167	伊藤	B 1・2区	土壌9
土壌73	伊藤	B 1・2区	土壌57	土壌120	江見	A 4区	No11土壌	土壌168	伊藤	B 1・2区	土壌1
土壌74	平井	A 8区	No71土壌	土壌121	江見	A 4区	No18土壌	土壌169	伊藤	B 1・2区	土壌10
土壌75	平井	A 8区	No72土壌	土壌122	江見	A 4区	No2土壌	土壌170	伊藤	B 1・2区	土壌4
土壌76	平井	A 8区	No68土壌	土壌123	江見	A 4区	No7土壌	土壌171	伊藤	B 1・2区	土壌6
土壌77	平井	A 8区	No60土壌	土壌124	江見	A 4区	No3土壌	土壌172	伊藤	B 1・2区	土壌7
土壌78	平井	A 8区	No61土壌	土壌125	江見	A 4区	No6土壌	土壌173	平井	C 1区	No20土壌
土壌79	平井	C 1区	No37土壌	土壌126	江見	A 4区	No8土壌	土壌174	平井	C 1区	No21土壌
土壌80	二宮	A 9区	No12土壌	土壌127	伊藤	A 4 S区	No16土壌	土壌175	平井	C 1区	No1土壌
土壌81	二宮	A 9区	No13土壌	土壌128	伊藤	A 4 S区	No8土壌	土壌176	平井	C 1区	No5土壌
土壌82	弘田	A 1区	土壌13	土壌129	伊藤	A 4 S区	No7土壌	土壌177	平井	C 1区	No24土壌
土壌83	岡本	A 6区	No36土壌	土壌130	伊藤	A 4 S区	No21土壌	土壌178	平井	C 1区	No25土壌
土壌84	伊藤	B 1・2区	土壌20	土壌131	伊藤	A 4 S区	No3土壌	土壌179	福田	C 4区	No3土壌
土壌85	伊藤	B 1・2区	土壌21	土壌132	伊藤	A 4 S区	No9土壌	土壌180	福田	C 4区	No2土壌
土壌86	弘田	A 4区	No49土壌	土壌133	伊藤	A 4 S区	No14土壌 (A 8・No35土壌)	土壌181	福田	C 4区	No7土壌
土壌87	弘田	A 4区	No21・22土壌	土壌134	伊藤	A 4 S区	..(A 8区 No43土壌)	土壌182	福田	C 4区	No8土壌
土壌88	江見	A 7区	No36土壌	土壌135	平井	A 8区	No3集石遺構	土壌183	福田	C 4区	No11土壌
土壌89	二宮	A 9区	No14土壌墓	土壌136	平井	A 8区	No9土壌	土壌184	福田	C 4区	No48土壌
土壌90	福田	C 2区	No69土壌	土壌137	平井	A 8区	No7土壌	土壌185	福田	C 3区	No36土壌
土壌91	弘田	A 1区	土壌9	土壌138	平井	A 8区	No8土壌	土壌186	福田	C 4区	No49土壌
土壌92	岡本	A 2区	No84土壌	土壌139	平井	A 8区	No33土壌	土壌187	福田	C 4区	No50土壌
土壌93	岡本	A 6区	No15土壌	土壌140	平井	A 8区	No21土壌	土壌188	福田	C 4区	No26土壌
土壌94	江見	A 7区	No11土壌	土壌141	平井	A 8区	No22土壌	土壌189	福田	C 4区	No21土壌
土壌95	江見	A 7区	No18土壌	土壌142	平井	A 8区	No29土壌	土壌190	福田	C 4区	No34土壌
土壌96	江見	A 7区	No19土壌	土壌143	平井	A 8区	No20土壌	土壌191	福田	C 4区	No35土壌
土壌97	江見	A 3区	No12土壌	土壌144	伊藤	B 1・2区	土壌9	土壌192	福田	C 4区	No15土壌
土壌98	江見	A 3区	No13土壌	土壌145	伊藤	B 1・2区	土壌15	土壌193	福田	C 4区	No30土壌
土壌99	江見	A 3区	No8土壌	土壌146	伊藤	B 1・2区	土壌12	土壌194	福田	C 4区	No23土壌
土壌100	江見	A 3区	No4土壌	土壌147	伊藤	B 1・2区	土壌39	土壌195	福田	C 4区	No41土壌
土壌101	江見	A 3区	No7土壌	土壌148	伊藤	B 1・2区	土壌52	土壌196	福田	C 4区	No16土壌
土壌102	江見	A 3区	No19土壌	土壌149	伊藤	B 1・2区	土壌46	土壌197	福田	C 4区	No36土壌
土壌103	江見	A 3区	No9土壌	土壌150	伊藤	B 1・2区	土壌36	土壌198	福田	C 4区	No38土壌
土壌104	江見	A 3区	No10土壌	土壌151	伊藤	B 1・2区	土壌42	土壌199	福田	C 4区	No39土壌
土壌105	江見	A 3区	No11土壌	土壌152	伊藤	B 1・2区	土壌43	土壌200	福田	C 4区	No43土壌
土壌106	江見	A 3区	No6土壌	土壌153	伊藤	B 1・2区	土壌36	土壌201	福田	C 4区	No17土壌
土壌107	江見	A 3区	No5土壌	土壌154	伊藤	B 1・2区	土壌51	土壌202	福田	C 2区	No15土壌
土壌108	江見	A 3区	No16土壌	土壌155	伊藤	B 1・2区	土壌50	土壌203	福田	C 3区	No19土壌
土壌109	江見	A 3区	No18土壌	土壌156	伊藤	B 1・2区	土壌54	土壌204	福田	C 3区	No26土壌

新旧遺構名対照表

掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	
土城205	福田	C 3区	No.6土城	河道3	平井	A 8区	No.87河道	溝24	江見	A 7区	No.27溝	
土城206	福田	C 3区	No.17土城	河道4	伊藤	B 1・2区	縄文下がり	溝25	江見	A 7区	No.37溝	
土城207	福田	C 3区	No.18土城		平井	C 1区	No.81下がり	溝26	福田	A 4 S区	No.28溝	
土城208	福田	C 3区	No.11土城	河道5	福田	C 2区	No.25河道	溝27	伊藤	B 1・2区	溝1	
土城209	福田	C 3区	No.20土城		福田	C 3区	No.61河道	溝28	伊藤	B 1・2区	溝3	
土城210	福田	C 3区	No.25土城		弘田	A 4区	No.55河道	溝29	伊藤	B 1・2区	溝2	
土城211	福田	C 3区	No.22土城	河道6	岡本	A 2区	No.97弥生河道	溝30	伊藤	B 1・2区	溝1	
土城212	福田	C 3区	No.24土城	河道7	弘田	A 1・5区	河道1	溝31	伊藤	B 1・2区	溝4・5	
土城213	福田	C 3区	No.31土城		岡本	A 2区	No.88河道	溝32	平井	A 8区	No.45溝	
土城214	福田	C 3区	No.33土城		江見	A 7区	河道(弥生)	溝33	平井	A 8区	No.37溝	
土城215	福田	C 3区	No.41土城		平井	C 1区	No.35河道	溝34	福田	C 3区	No.32溝	
土城216	福田	C 3区	No.40土城		福田	C 3区	No.61河道	溝35	福田	C 3区	No.9溝	
土城217	二宮	A 9区	井戸状土城2		河道8	福田	C 2区	No.25河道(弥生)	溝36	福田	C 3区	No.3溝
土城218	二宮	A 9区	No.4土城	河道9	平井	C 1区	No.78河道	溝37	福田	C 3区	南溝①	
土城219	二宮	A 9区	No.6土城	河道10	福田	C 2区	No.25河道(古墳時代)	溝38	福田	C 3区	南溝②	
土城220	二宮	A 9区	No.8土城	溝1	岡本	A 6区	No.103溝	溝39	福田	C 3区	南溝③	
土城221	二宮	A 9区	No.2土城	溝2	伊藤	B 1・2区	溝6	溝40	二宮	A 9区	No.12溝	
土城222	二宮	A 9区	井戸状土城1	溝3	伊藤	B 1・2区	溝4	溝41	二宮	A 9区	No.9溝	
土城223	福田	C 2区	No.22土城	溝4	伊藤	B 1・2区	溝3	溝42	二宮	A 9区	No.10溝	
土城224	福田	C 2区	No.1土城	溝5	伊藤	B 1・2区	溝5	溝43	二宮	A 9区	No.7・8・16溝	
土城225	福田	C 2区	No.33土城	溝6	伊藤	B 1・2区	溝2	溝44	二宮	A 9区	No.18溝	
土城226	福田	C 2区	No.14土城	溝7	弘田	A 1区	溝2	溝45	二宮	A 9区	No.17溝	
土城227	弘田	A 5区	土城2		岡本	A 2・6区	No.90溝	溝46	溝46	二宮	A 9区	No.5溝
土城228	弘田	A 1区	土城11		江見	A 3区下層	No.下1溝	溝47	溝47	二宮	A 9区	No.4溝
土城229	岡本	A 2区	No.69土城		江見	A 7区	No.57溝	溝48	溝48	二宮	A 9区	No.3溝
土城230	岡本	A 2・6区	No.83土城	溝8	弘田	A 1区	溝3	溝49	二宮	A 9区	No.6溝	
土城231	岡本	A 2・6区	No.35土城	溝9	弘田	A 1・5区	河道1右岸溝4	溝50	二宮	A 9区	No.2溝	
土城232	岡本	A 6区	No.34土城	溝9・10	岡本	A 2・6区	No.92・93溝	溝51	福田	C 2区	No.34溝	
土城233	岡本	A 2・6区	No.38土城	溝11・12	岡本	A 2・6区	No.100・101溝	溝52	岡本	A 2・6区	No.70溝	
土城234	岡本	A 6区	No.13焼成土城	溝13	弘田	A 1区	河道1左岸溝5	溝53	岡本	A 6区	No.48溝	
土城235	岡本	A 6区	No.16土城		岡本	A 2・6区	No.91溝	溝54	溝54	弘田	A 4区	No.32溝
土城236	岡本	A 6区	No.22土城		岡本	A 6区	No.105溝	溝55	溝55	弘田	A 4区	No.34溝
土城237	岡本	A 2・6区	No.24土城		江見	A 7区	No.下3溝	溝56	溝56	弘田	A 4区	No.39溝
土城238	岡本	A 6区	No.32土城		平井	C 1区	No.38溝	溝57	溝57	弘田	A 4区	No.44溝
土城239	岡本	A 6区	No.33土城		平井	C 1区	No.38溝	溝58	溝58	弘田	A 4区	No.41溝
土城240	岡本	A 6区	No.28土城	溝14	江見	A 7区	No.下1溝	溝59	平井	A 8区	No.12	
土城241	岡本	A 6区	No.9土城		平井	C 1区	No.29A溝	火処1	火処1	弘田	A 5区	火処1
土城242	岡本	A 6区	No.8土城		平井	C 1区	No.29C溝	火処2	火処2	江見	A 3区	No.下23火処
土城243	岡本	A 6区	No.17土城	溝15	福田	C 3区	No.62溝	火処3	江見	A 3区	No.下22火処	
土城244	岡本	A 2・6区	No.67土城	溝16	福田	C 3区	No.63溝	火処4	江見	A 3区	No.下5火処	
土城245	岡本	A 6区	No.45土城	溝17	伊藤	B 1・2区	溝7	火処5	江見	A 3区	No.下6火処	
土城246	岡本	A 6区	No.51土城		平井	C 1区	No.80A溝	火処6	火処6	江見	A 3区	No.下25火処
河道1	弘田	A 1区	河道2	溝18	福田	C 4区	下層溝跡面(4)	火処7	江見	A 3区	No.下16火処	
	岡本	A 2・6区	No.97河道	溝19	福田	C 4区	トレンチ内溝状遺構版3	火処8	江見	A 3区	No.下26火処	
	伊藤	B 1・2区	縄文晩期下がり	溝20	福田	C 4区	トレンチ内溝状遺構版2	火処9	江見	A 3区	No.下14火処	
	平井	C 1区	No.38河道	溝21	福田	C 4区	トレンチ内溝状遺構版1	火処10	江見	A 3区	No.下15火処	
河道2	岡本	A 2区	No.97河道	溝22	江見	A 3区	No.4溝	火処11	江見	A 3区	No.下4火処	
河道3	弘田	A 4 S区	No.55河道	溝23	江見	A 3区	No.8溝	火処12	江見	A 3区	No.下28火処	

新旧遺構名対照表

掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	担当者	旧地区名	旧遺構名
火処13	江見	A 3区	No下13火処	火処61	平井	C 1区	No51焼土面	窪地9	伊藤	B 1・2区	たわみ2
火処14	江見	A 3区	No下17火処	火処62	平井	C 1区	No61焼土面	窪地10	伊藤	B 1・2区	たわみ3
火処15	江見	A 3区	No下18火処	火処63	平井	C 1区	No58焼土面	窪地11	福田	C 2区	No21タワミ
火処16	江見	A 3区	No下19火処	火処64	平井	C 1区	No59焼土面	窪地12	福田	C 2区	No25たわみ
火処17	江見	A 3区	No下20火処	火処65	平井	C 1区	No62焼土面	窪地13	福田	C 2区	No31たわみ
火処18	江見	A 3区	No下21火処	火処66	平井	C 1区	No63焼土面				
火処19	江見	A 3区	No下41火処	火処67	平井	C 1区	No56焼土面				
火処20	江見	A 3区	No下 8火処	火処68	平井	C 1区	No54焼土面				
火処21	江見	A 3区	No下 7火処	火処69	平井	C 1区	No55焼土面				
火処22	江見	A 3区	No下44火処	火処70	平井	C 1区	No60焼土面				
火処23	江見	A 3区	No下45火処	火処71	平井	C 1区	No57焼土面				
火処24	江見	A 3区	No下46火処	火処72	平井	C 1区	No65焼土面				
火処25	江見	A 7区	No下23火処	火処73	平井	C 1区	No64焼土面				
火処26	江見	A 7区	No下22火処	火処74	平井	C 1区	No36焼土面				
火処27	江見	A 3区	No下38火処	火処75	福田	C 3区	No35焼土土壌				
火処28	江見	A 3区	No下39火処	火処76	福田	C 3区	No37焼土				
火処29	江見	A 3区	No下40火処	火処77	福田	C 3区	No38焼土				
火処30	弘田	A 4区	No54焼土面	火処78	江見	A 7区	No45焼土				
火処31	弘田	A 4区	No53火処	土器溜まり 1	弘田	A 1・5区	土器溜まり				
火処32	江見	A 7区	No下11火処	土器溜まり 2	江見	A 3区	土器溜まり 2				
火処33	江見	A 7区	No下 9火処	土器溜まり 2 A	江見	A 3区	土器溜まり A				
火処34	江見	A 7区	No下10火処	土器溜まり 2 B	江見	A 3区	土器溜まり B・C				
火処35	江見	A 7区	No下16火処	土器溜まり 2 C	江見	A 3区	土器溜まり D				
火処36	江見	A 7区	No下12火処	土器溜まり 2 D	江見	A 3区	土器溜まり E				
火処37	江見	A 7区	No下13火処	土器溜まり 2 E	江見	A 3区	土器溜まり H				
火処38	江見	A 7区	No下14火処	土器溜まり 3	江見	A 3区	土器溜まり 1 (No下31タワミ)				
火処39	江見	A 7区	No下15火処	土器溜まり 4	江見	A 3区	土器溜まり G (No下2タワミ)				
火処40	江見	A 7区	No下24火処	土器溜まり 5	江見	A 7区	溜まり橙				
火処41	平井	A 8区	No55火処	土器溜まり 6	江見	A 7区	溜まり青				
火処42	平井	A 8区	No58火処	土器溜まり 7	江見	A 7区	溜まり桃				
火処43	平井	A 8区	No57火処	土器溜まり 8	江見	A 7区	No29単独出土				
火処44	平井	A 8区	No56火処	土器溜まり 9	伊藤	土器溜り 1	土器溜り 1				
火処45	平井	A 8区	No59火処	土器溜まり10	平井	No41土器溜り	No41土器溜ま り				
火処46	平井	A 8区	No80火処	土器溜まり11	福田	C 3区	古墳土器溜ま り				
火処47	平井	A 8区	No81火処	土器溜まり12	江見	A 7区	No34単独出土				
火処48	平井	A 8区	No66火処	土器溜まり13	江見	A 7区	No26土器溜ま り				
火処49	平井	A 8区	No67火処	土器溜まり14	平井	A 8区	No 2土器溜ま り				
火処50	平井	A 8区	No75火処	土器溜まり15	平井	A 8区	No13土器溜ま り				
火処51	平井	A 8区	No77火処	土器溜まり16	平井	A 8区	No 4土器溜ま り				
火処52	平井	A 8区	No78火処	土器溜まり17	平井	C 1区	No 2土器溜ま り				
火処53	平井	A 8区	No64火処	窪地 1	江見	A 3区	No下 3溝				
火処54	平井	C 1区	No46焼土面	窪地 2	江見	A 3区	No下29たわみ				
火処55	平井	C 1区	No48焼土面	窪地 3	江見	A 3区	No下30たわみ				
火処56	平井	C 1区	No47焼土面	窪地 4	平井	A 8区	No52窪地				
火処57	平井	C 1区	No49焼土面	窪地 5	江見	A 7区	No下26タワミ				
火処58	平井	C 1区	No53焼土面	窪地 6	伊藤	B 1・2区	たわみ 4				
火処59	平井	C 1区	No52焼土面	窪地 7	伊藤	B 1・2区	たわみ 1				
火処60	平井	C 1区	No50焼土面	窪地 8	福田	C 3区	古墳たまり				



1 袋状土壇 1  
(東から)



2 袋状土壇 2  
(北から)



3 土壇 1  
(西から)





1 土壌 2  
(西から)



2 土壌 39  
(北東から)



3 土壌 43  
(南東から)

1 土器溜まり 2-A  
(東から)



2 土器溜まり 2-D  
注口土器出土状況  
(東から)



3 土器溜まり 3  
(東から)

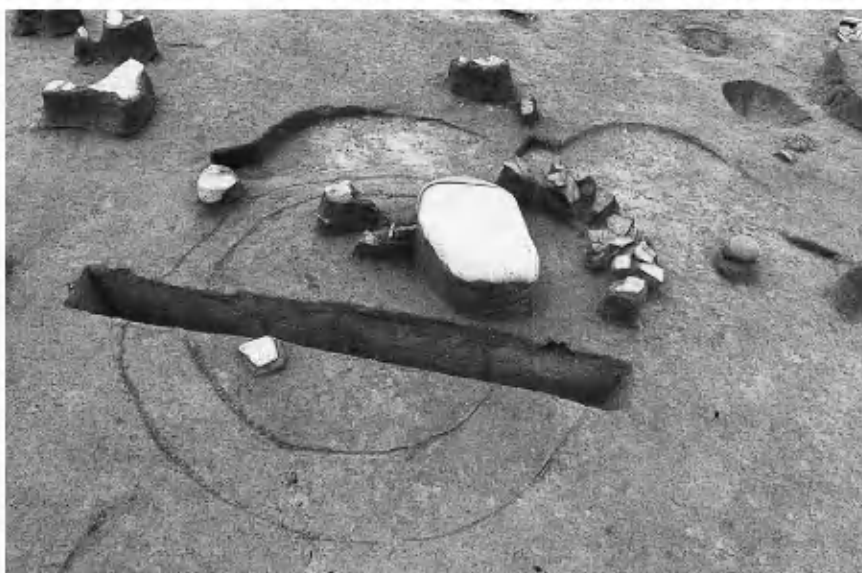




1 土器溜まり3  
石器出土状況  
(東から)



2 火処 1  
(南から)



3 火処33  
(東から)

1 河道1 最上流部  
(北から)

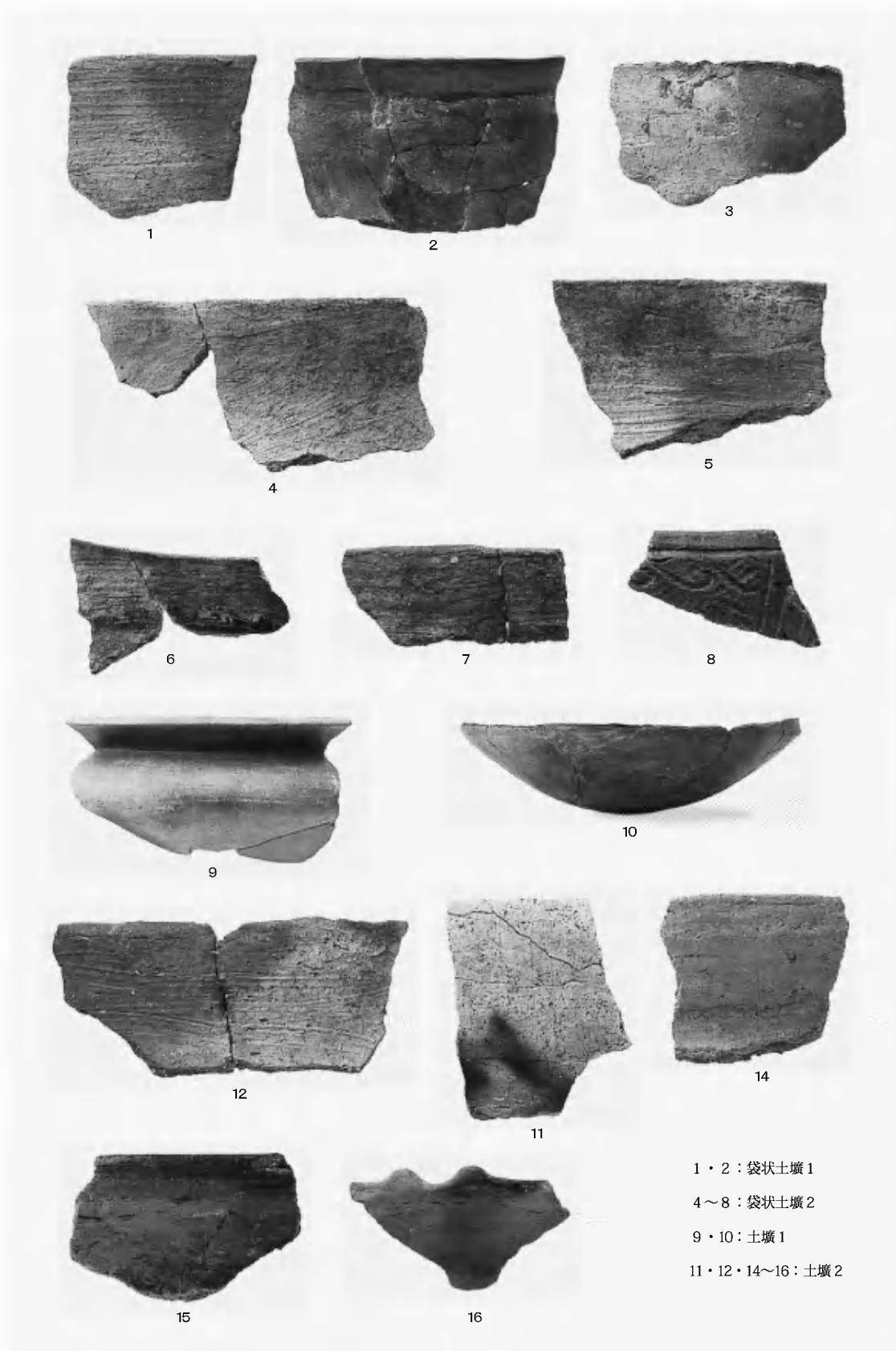


2 河道1 断面  
(西から)

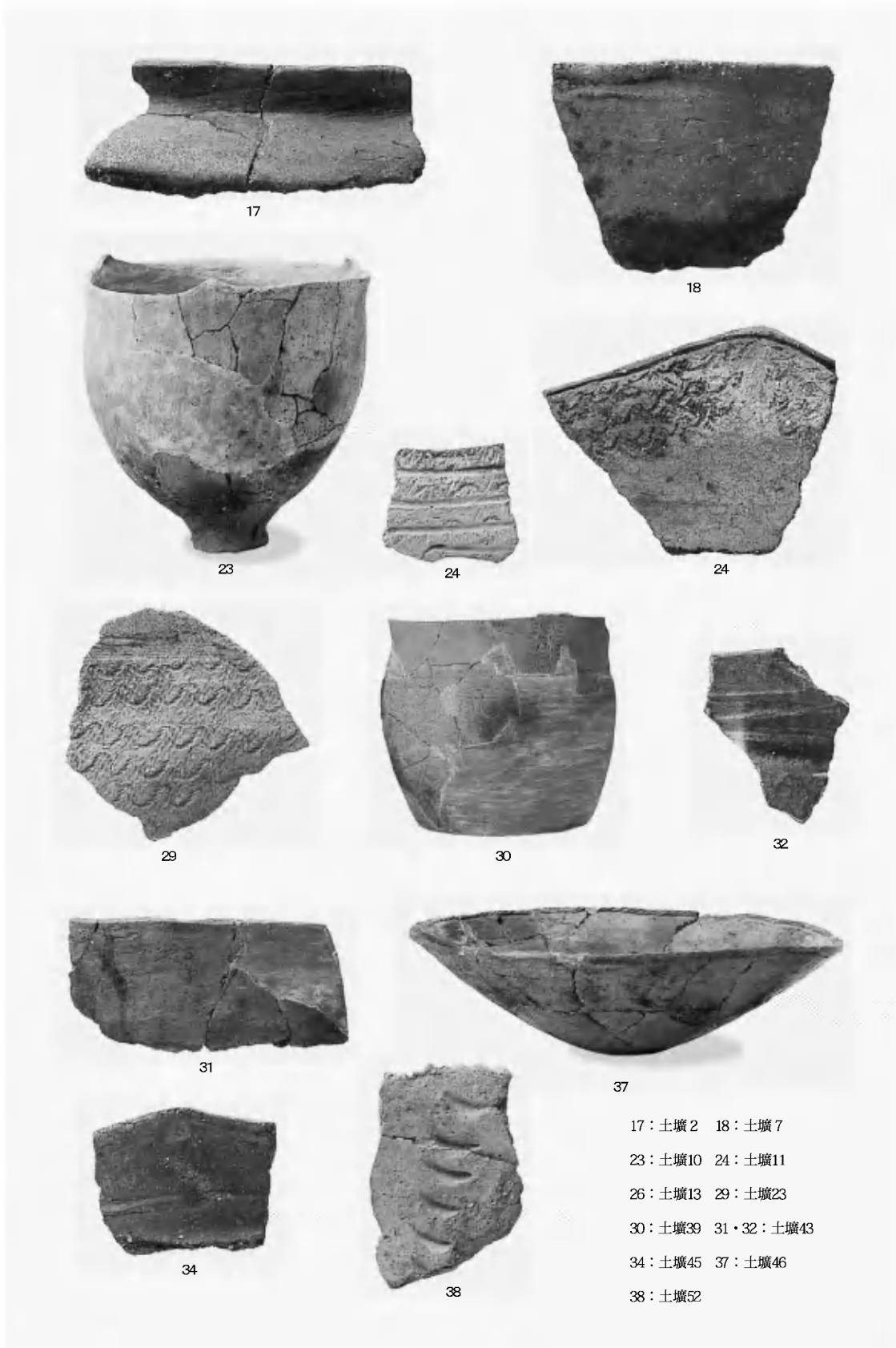


3 石器埋納壕  
(北から)

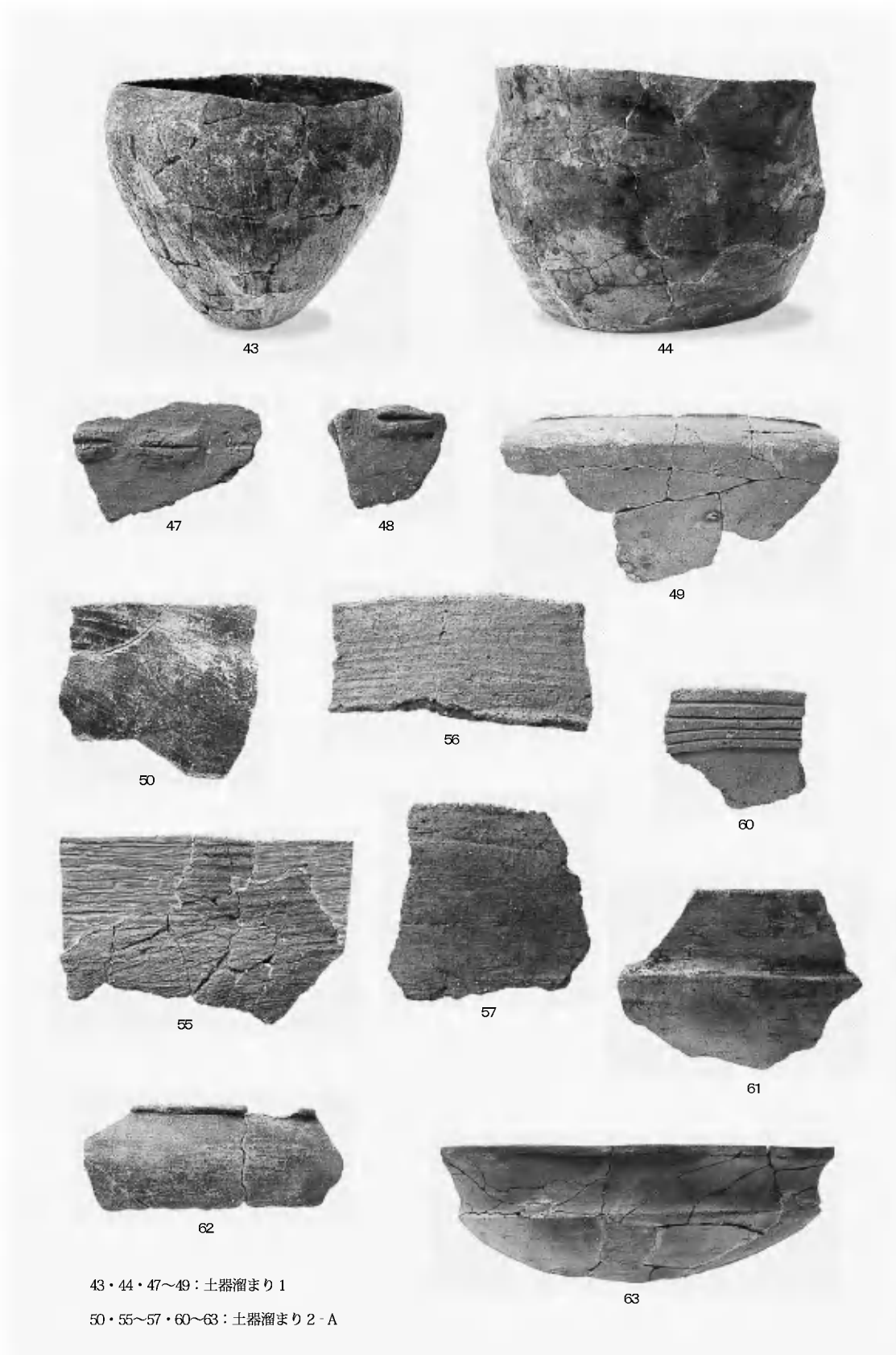




袋状土壙・土壙出土遺物①



土壙出土遺物②



43・44・47～49：土器溜まり 1

50・55～57・60～63：土器溜まり 2 - A





64



65



68



69



70



72



73



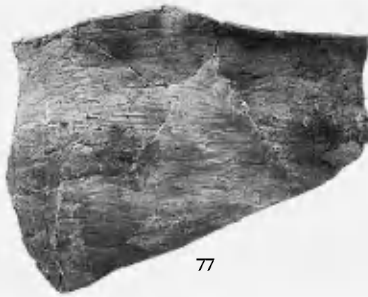
74



71



76



77



75



79



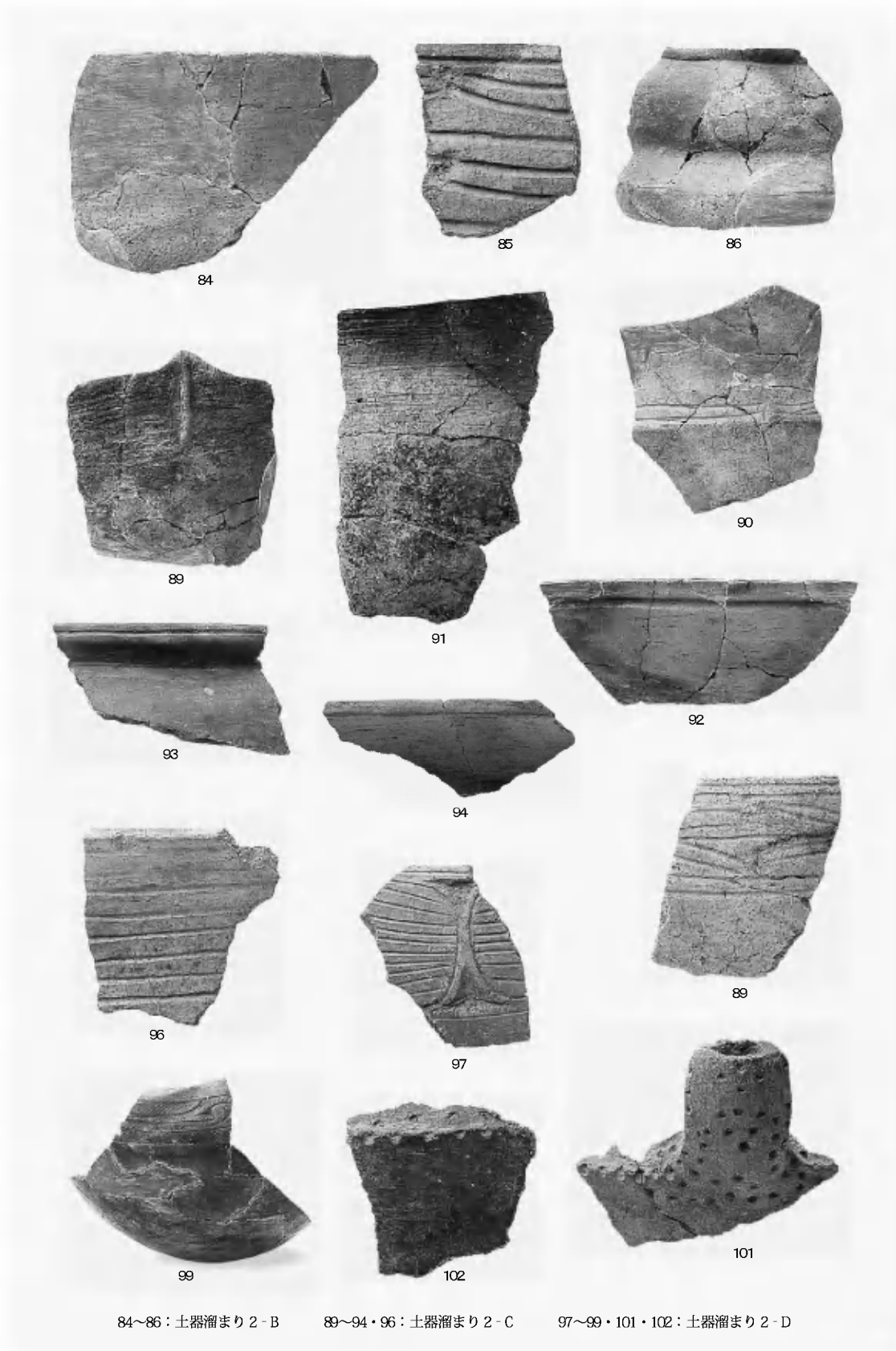
80

64・65・68～74 :

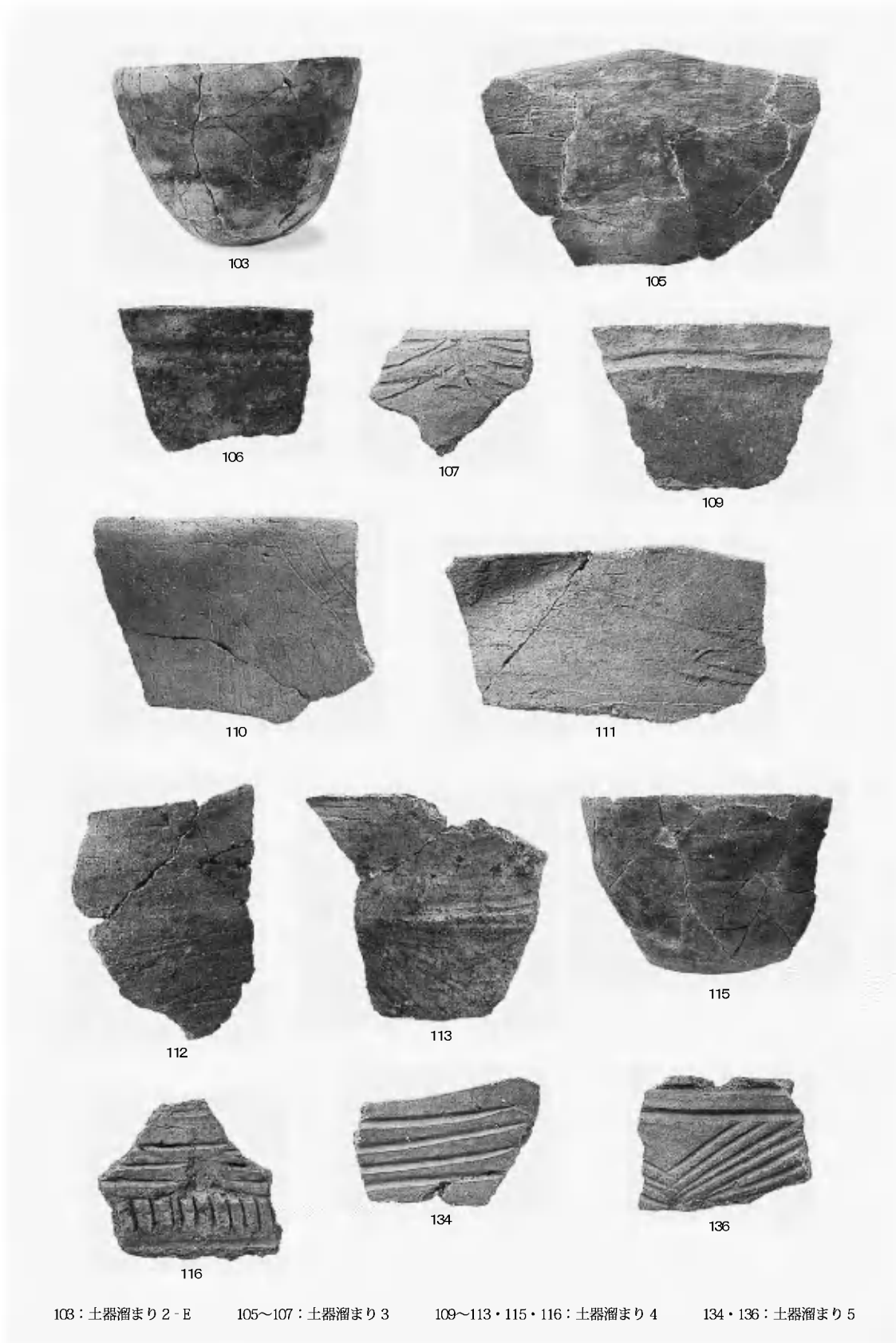
土器溜まり 2-A

75～77・79・80 :

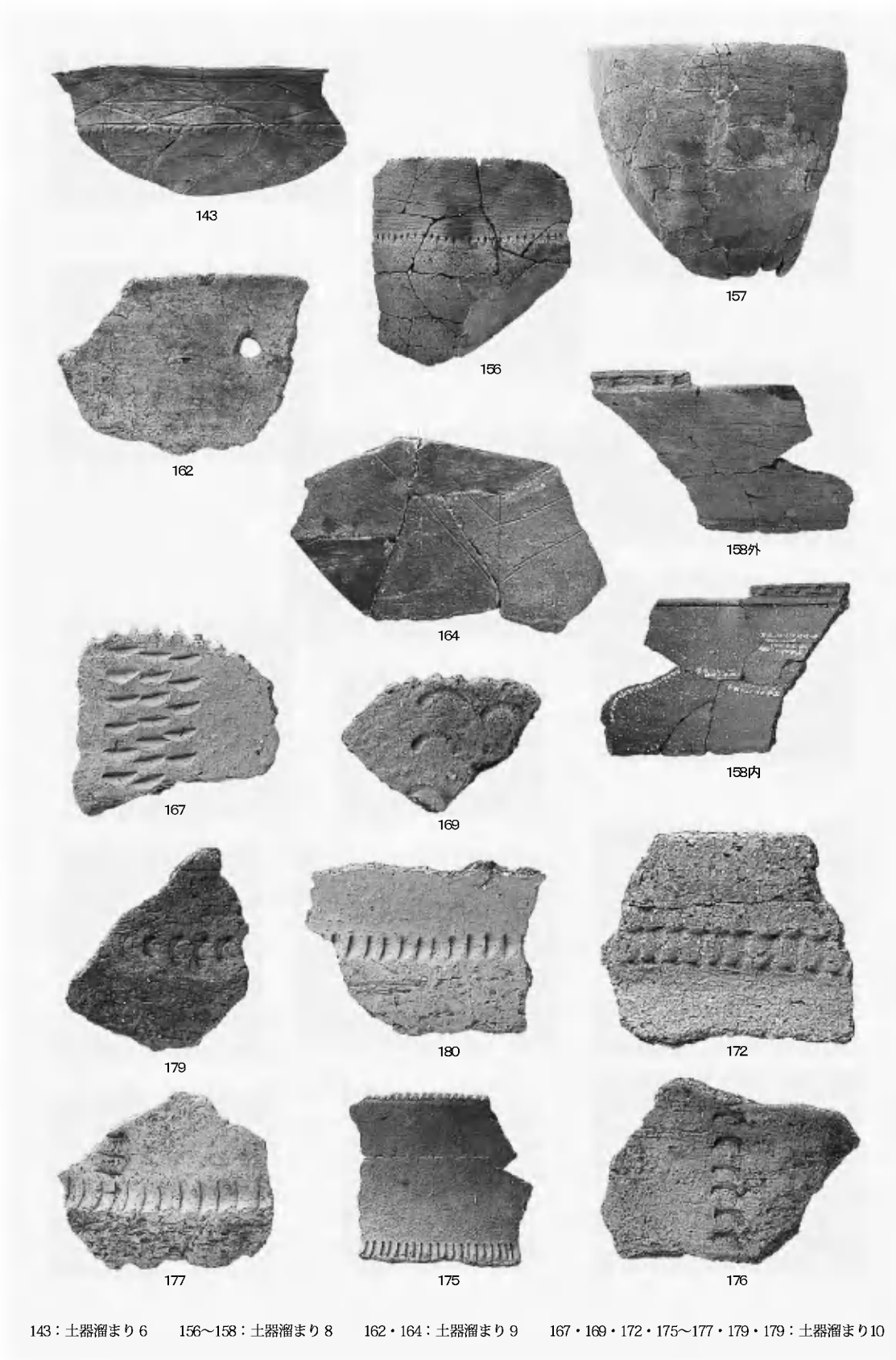
土器溜まり 2-B



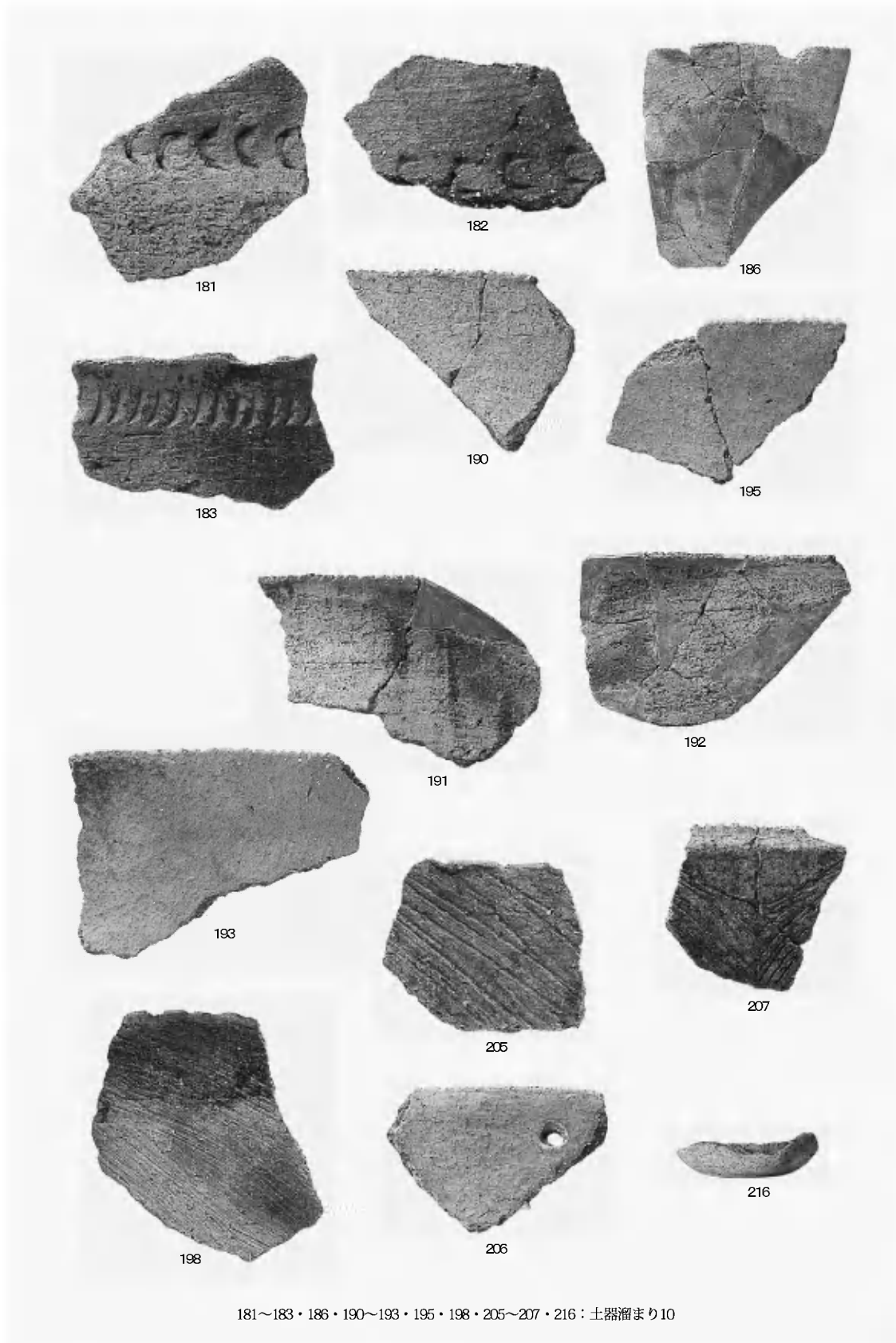
土器溜まり出土遺物③



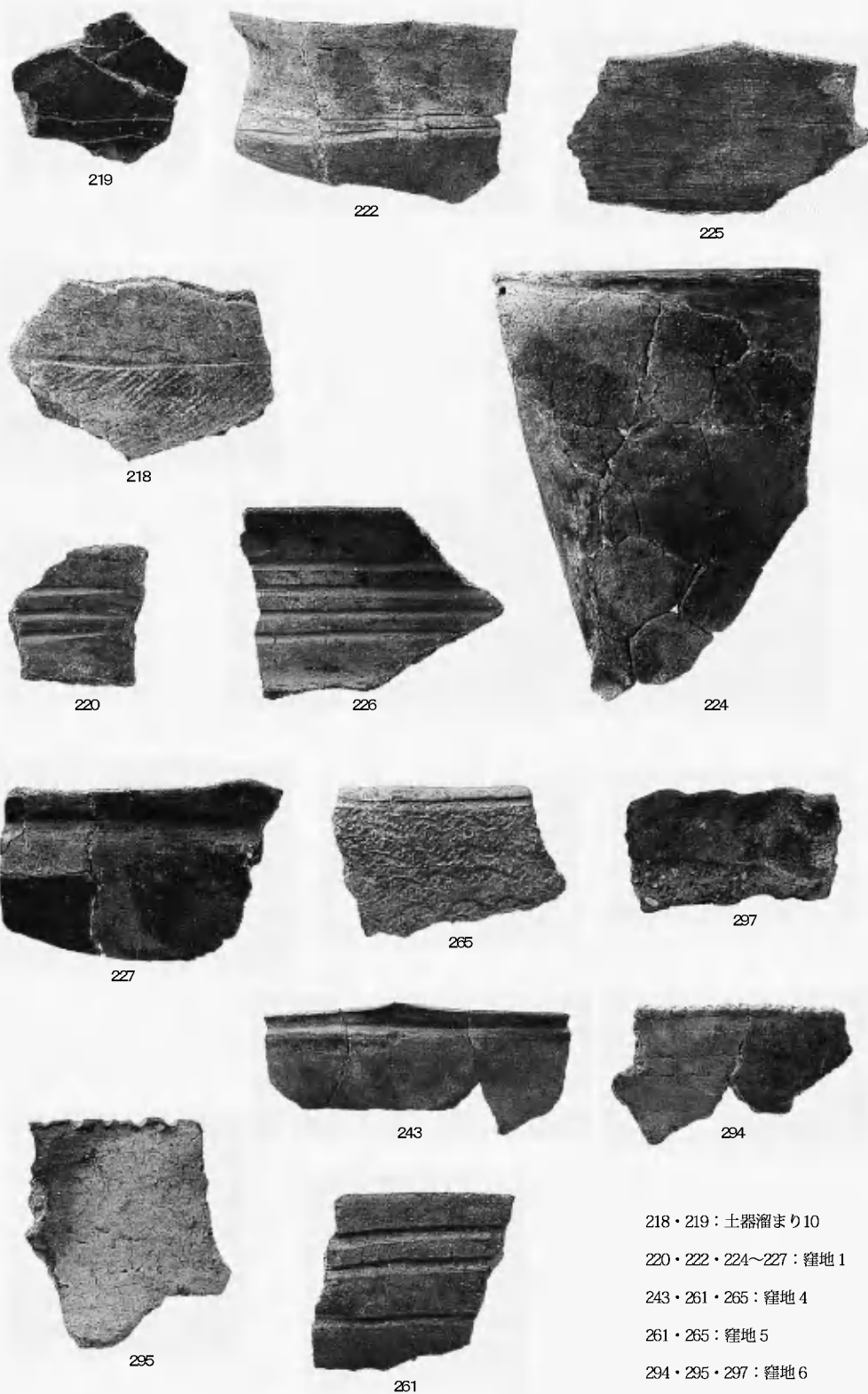
土器溜まり出土遺物④



土器溜まり出土遺物⑤

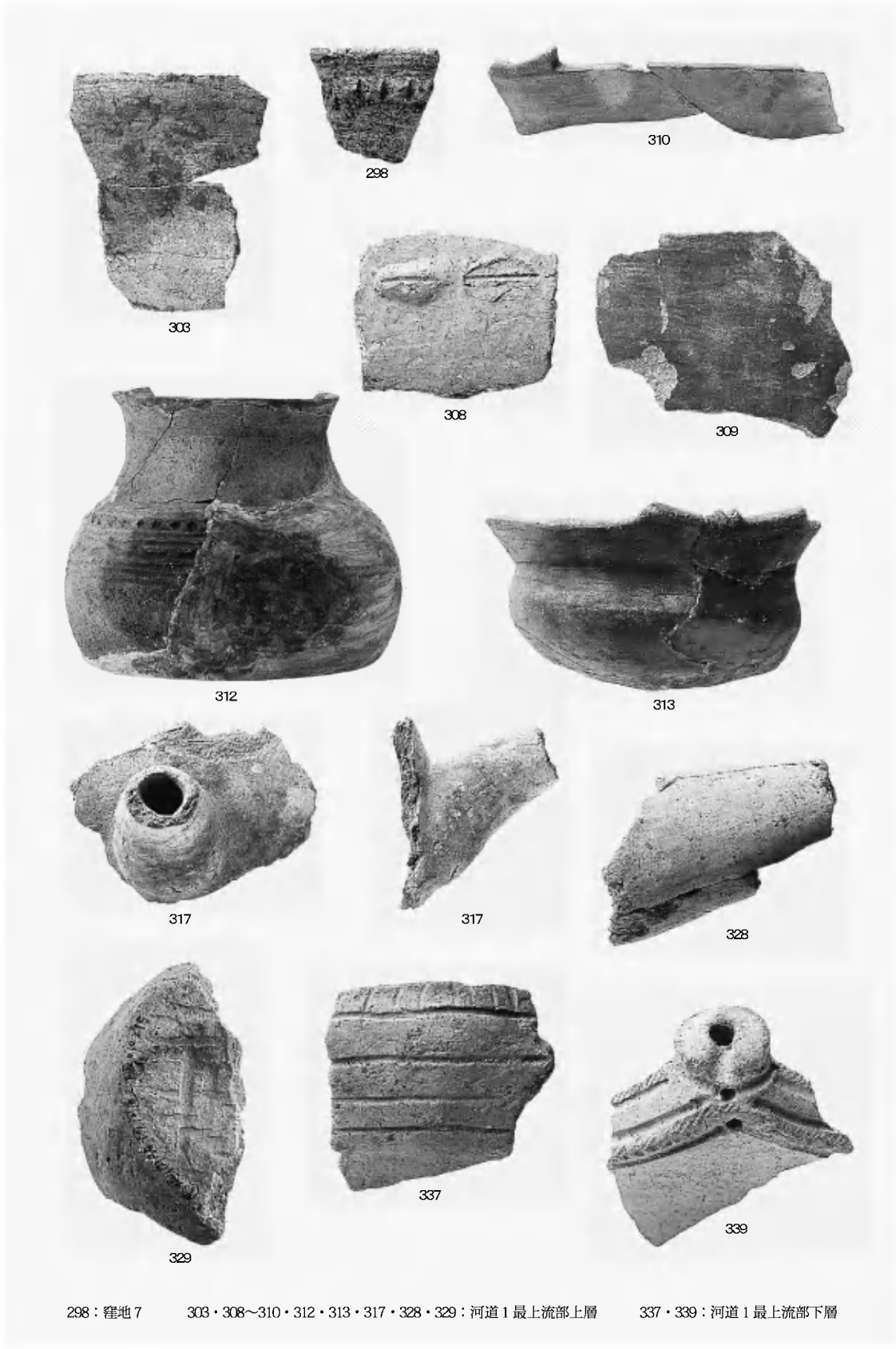


土器溜まり出土遺物⑥



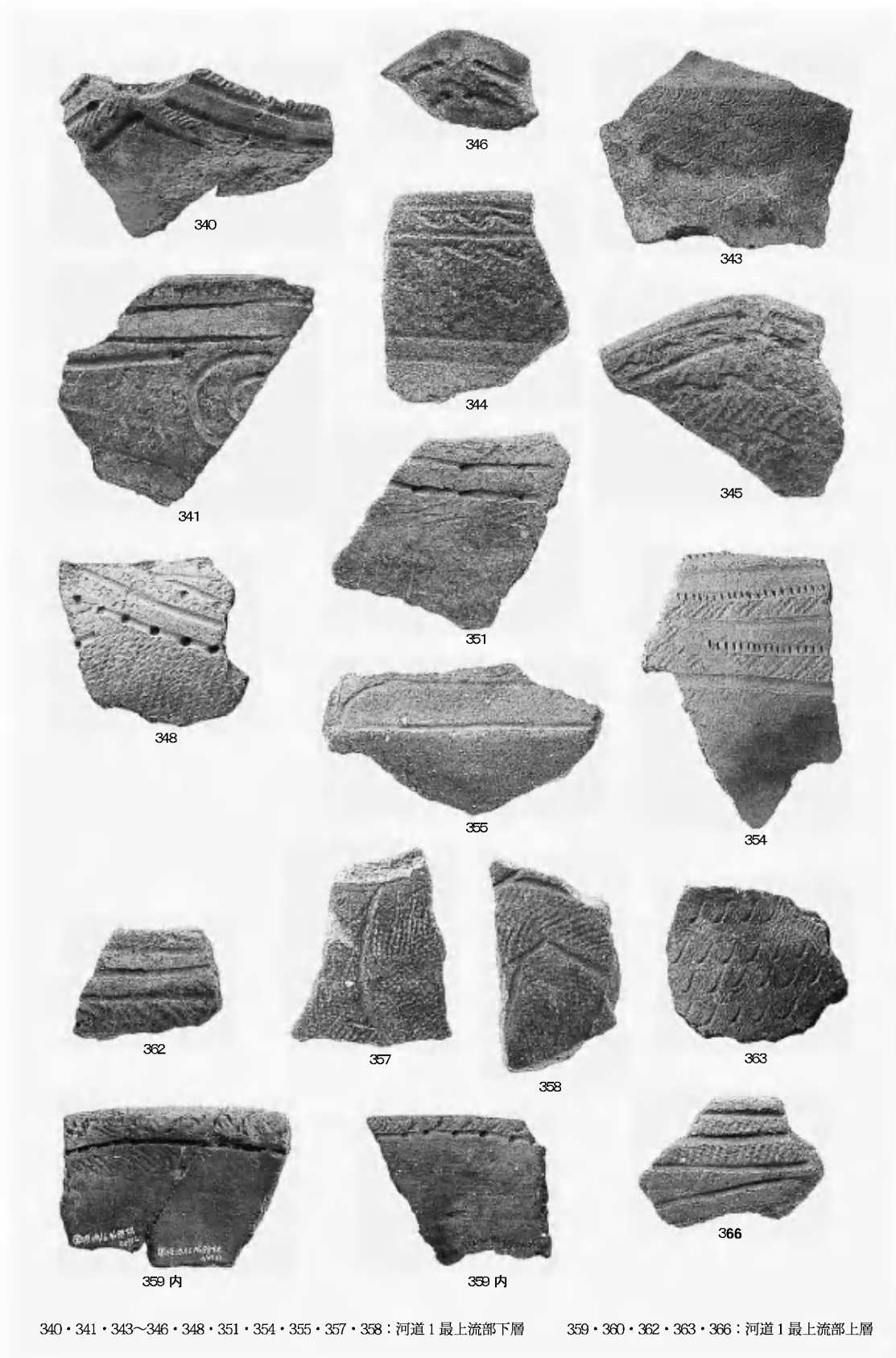
218・219：土器溜まり10  
220・222・224～227：窪地1  
243・261・265：窪地4  
261・265：窪地5  
294・295・297：窪地6

土器溜まり出土遺物⑦、窪地出土遺物①



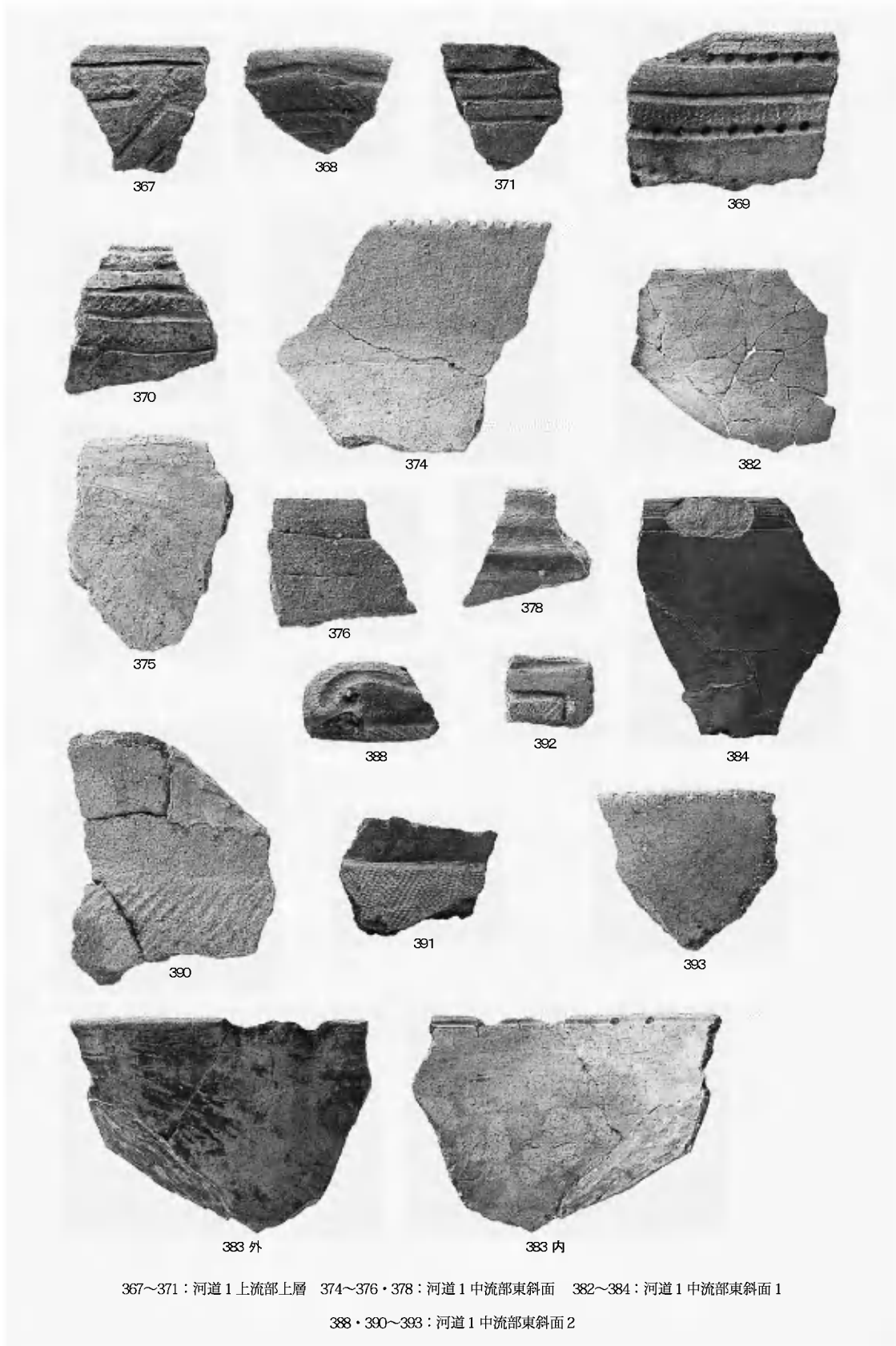
298 : 窪地 7      303・308~310・312・313・317・328・329 : 河道 1 最上流部上層      337・339 : 河道 1 最上流部下層

窪地出土遺物②、河道 1 出土遺物①

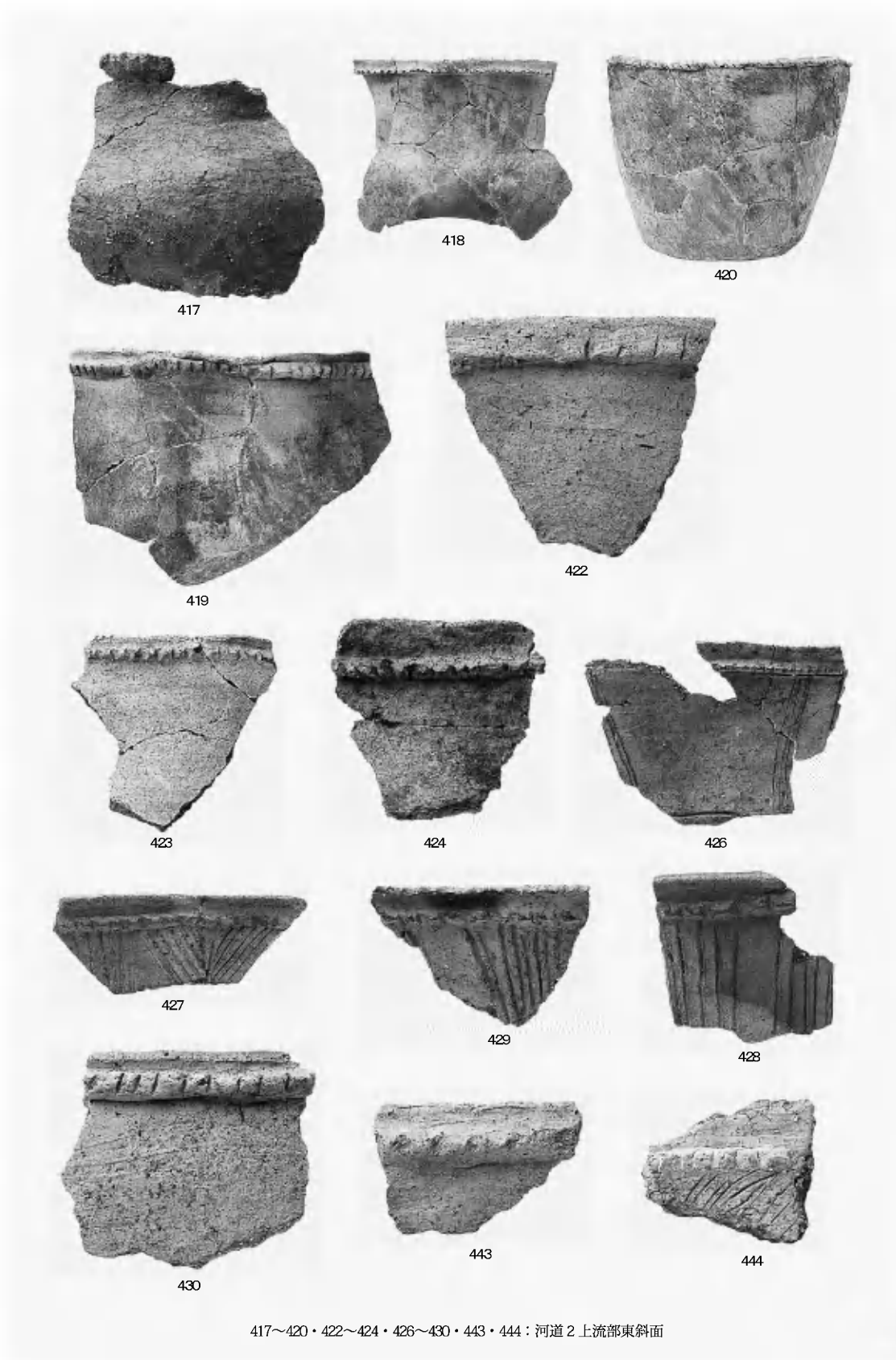


河道1 出土遺物②



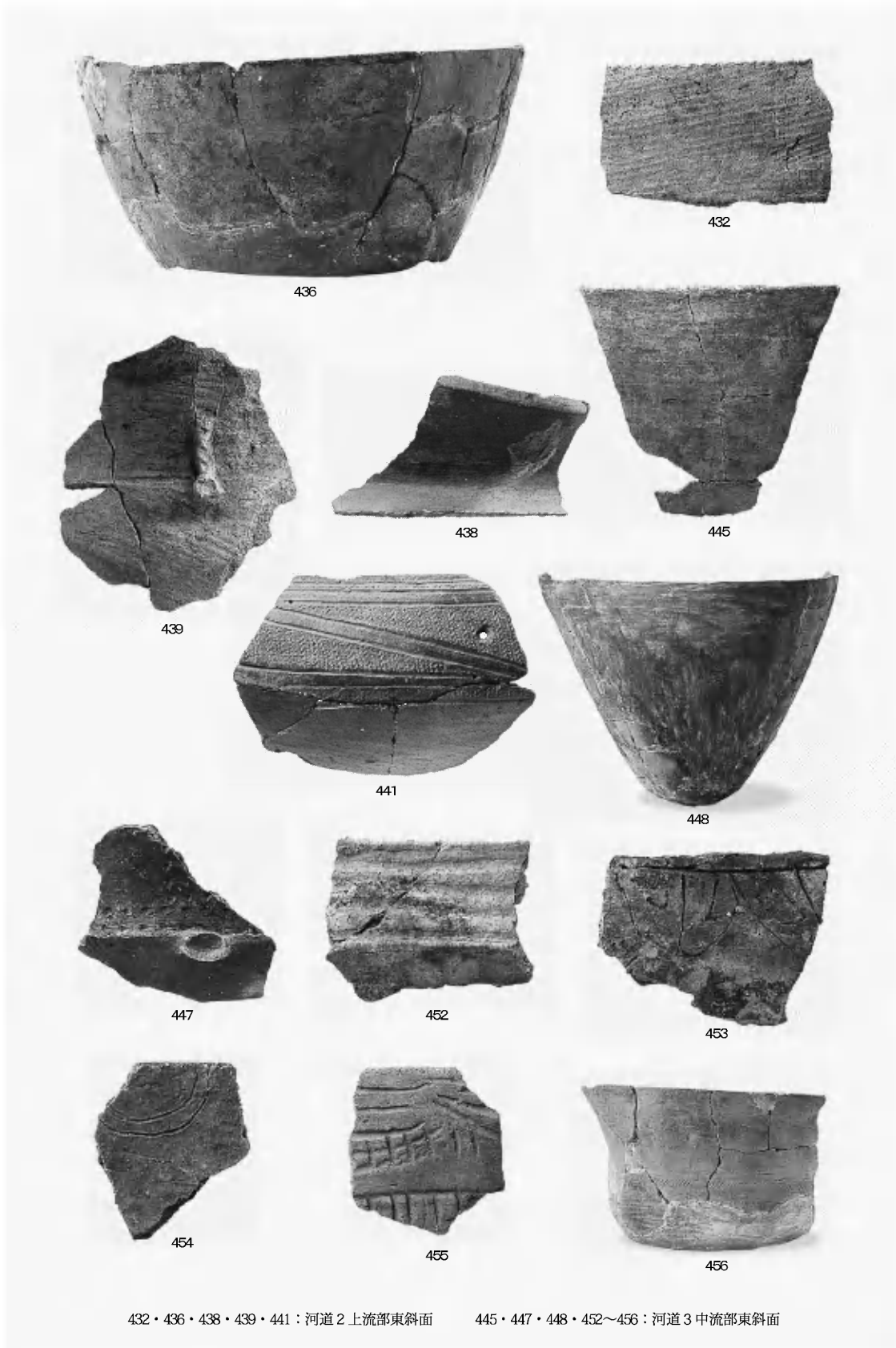


河道1 出土遺物③

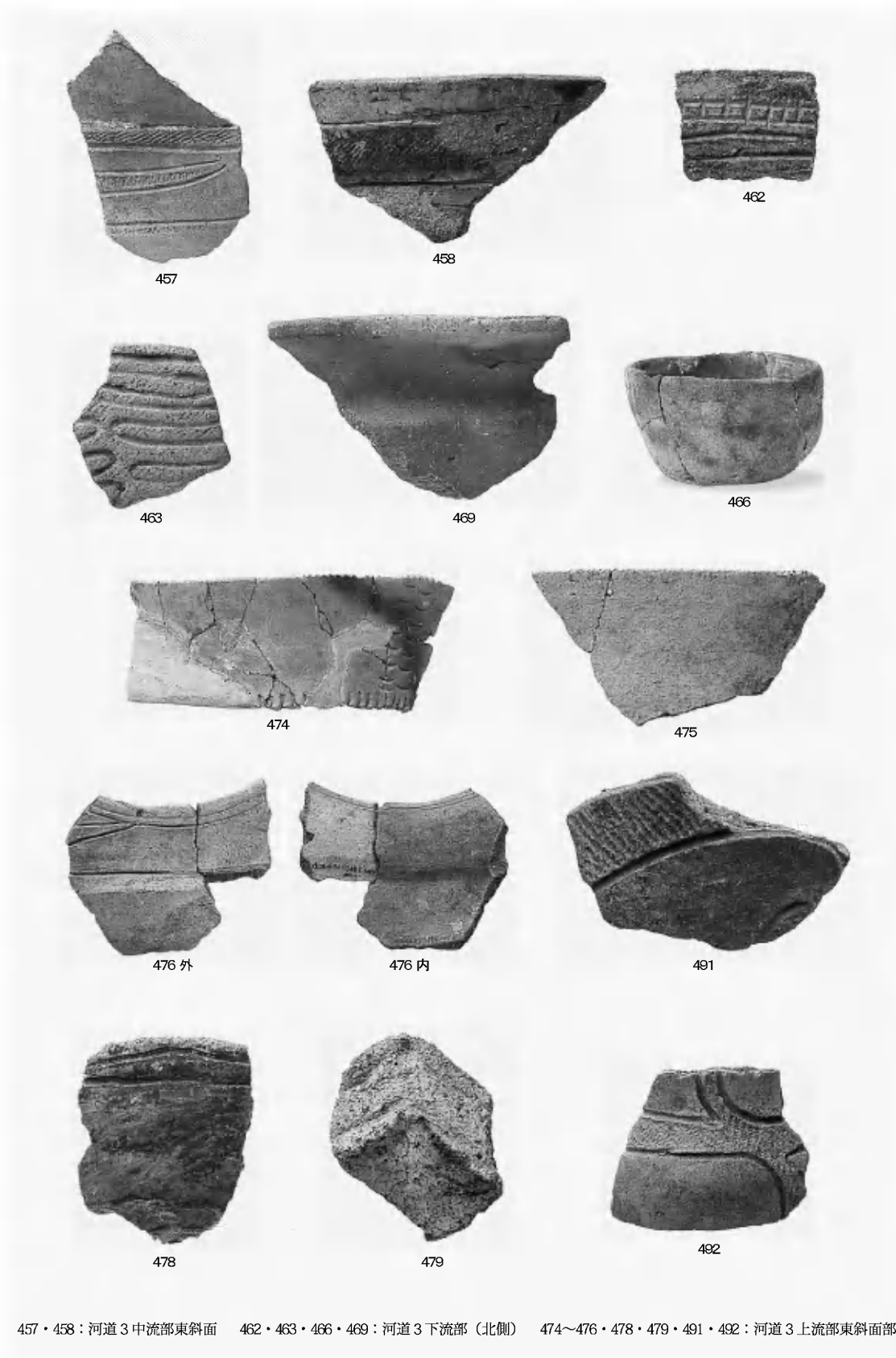


417~420・422~424・426~430・443・444：河道2 上流部東斜面

河道2 出土遺物①



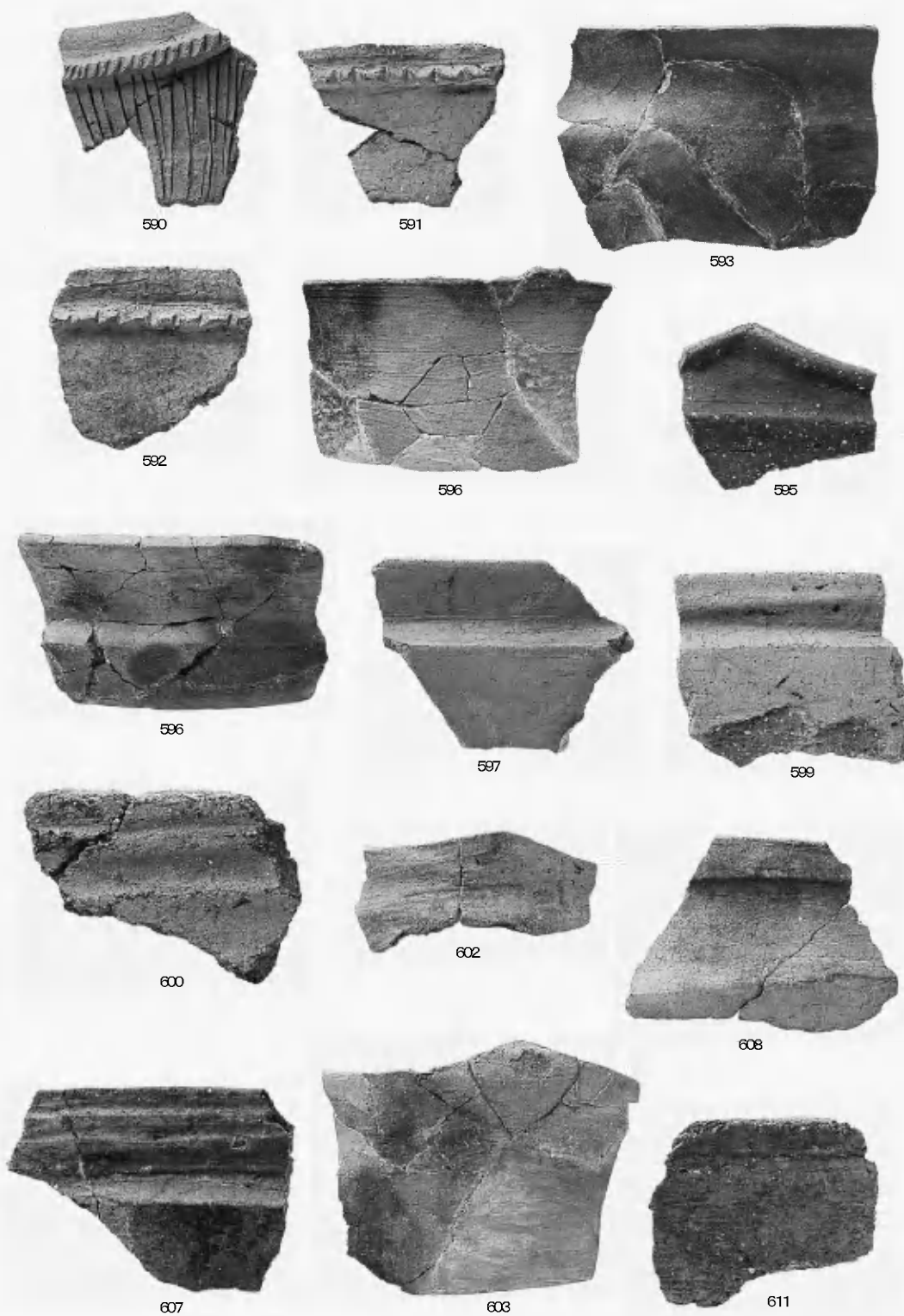
河道2出土遺物②、河道3出土遺物①



河道3出土遺物②



河道4・5出土遺物、遺構に伴わない遺物①

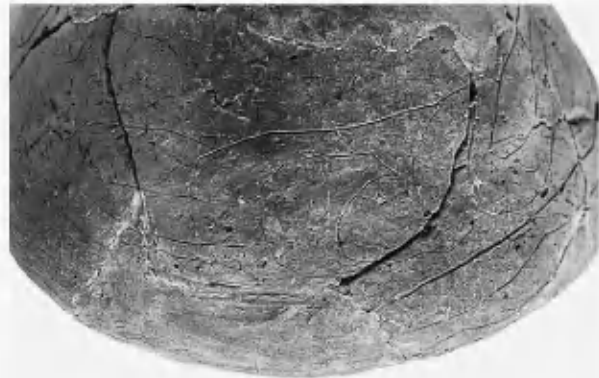


590～593：B地区包含層

594～597・600・602・603・607・608・611：C地区包含層



612



612



612



619



618



620



621



622



625



624



623



626



628



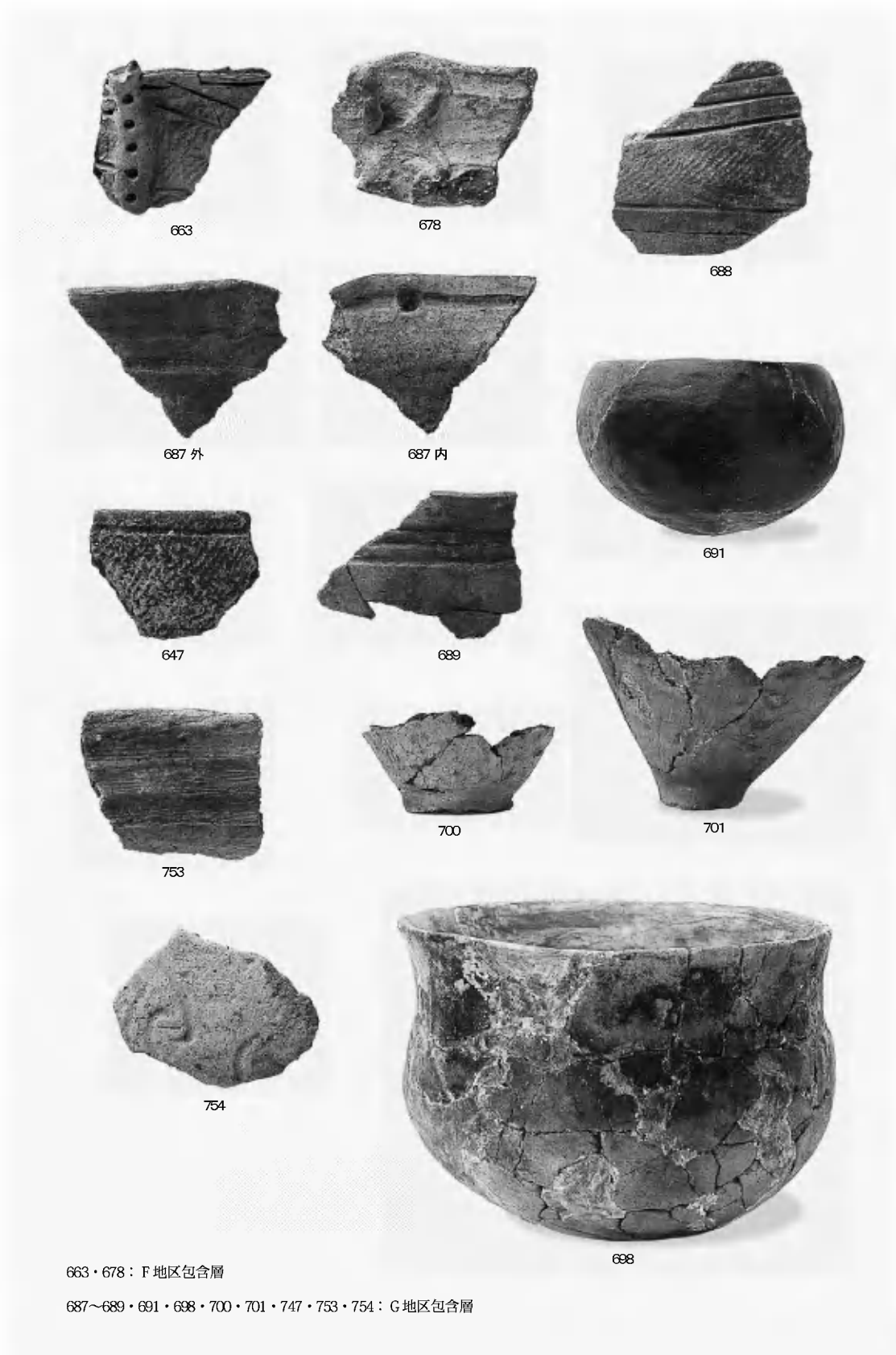
629



630

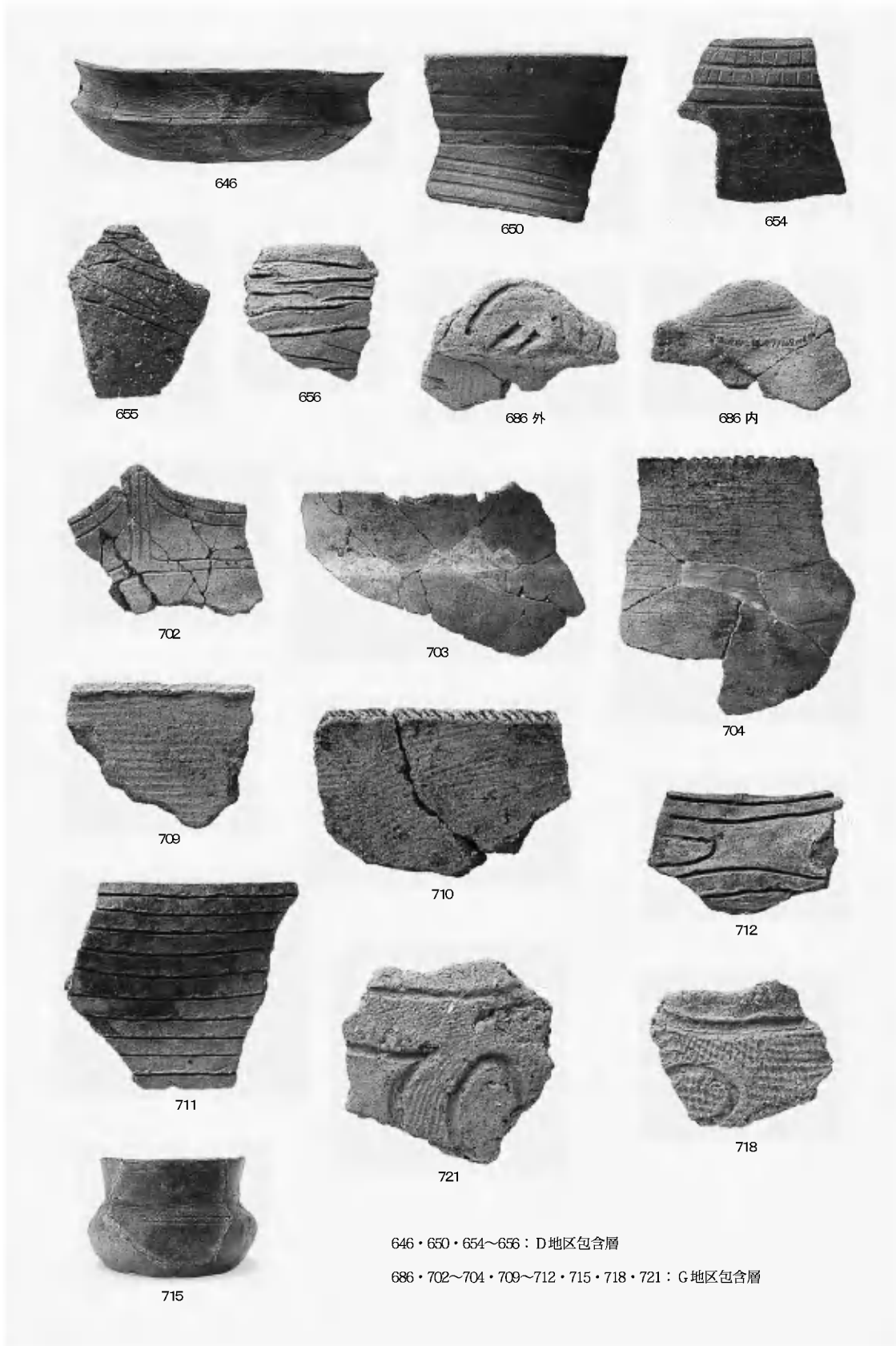
612・618～626・628～630：C地区包含層

遺構に伴わない遺物③

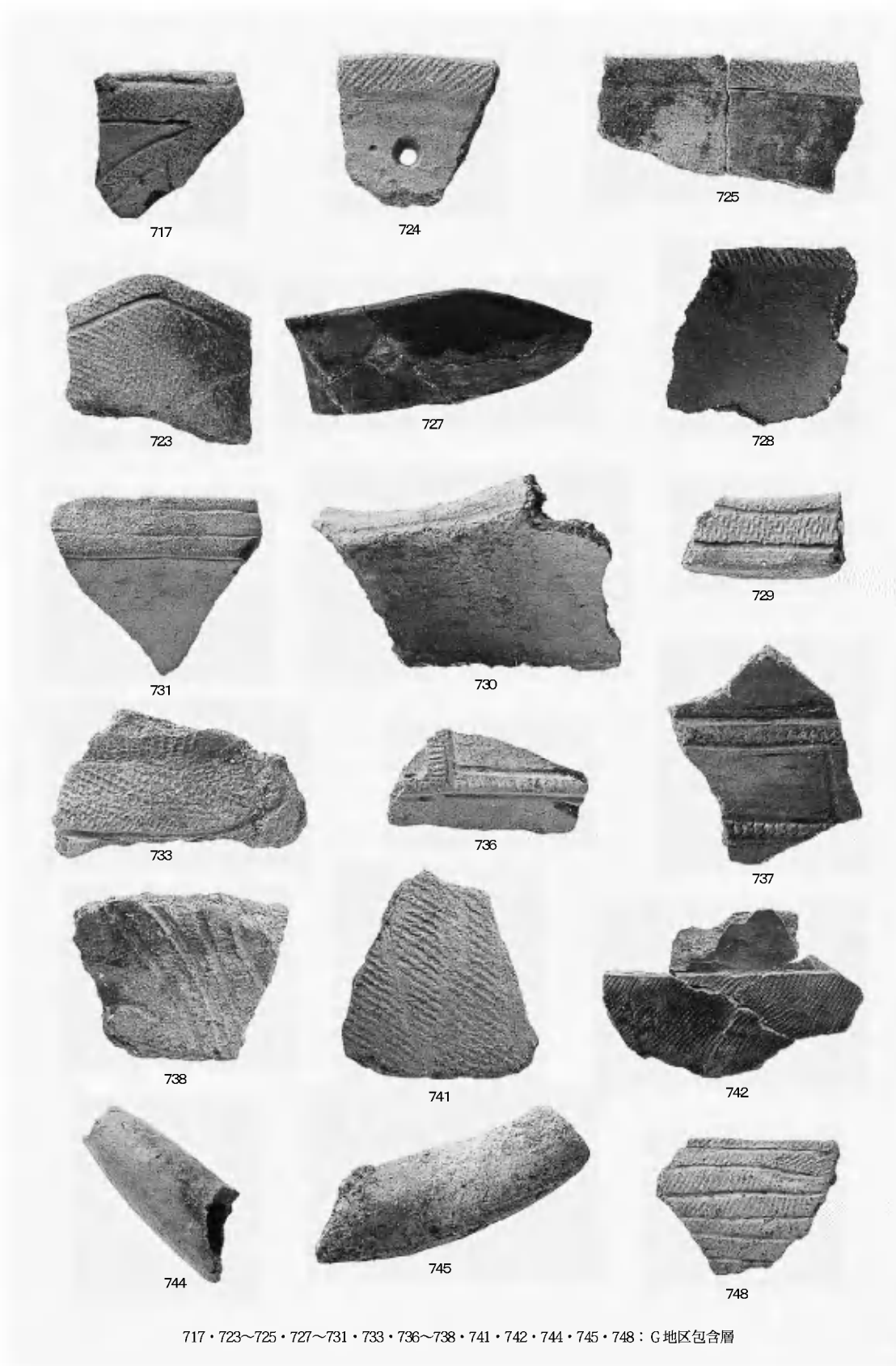


遺構に伴わない遺物④





遺構に伴わない遺物⑤



遺構に伴わない遺物⑥



757



750



760



774



780



760 外



760 内



820



822

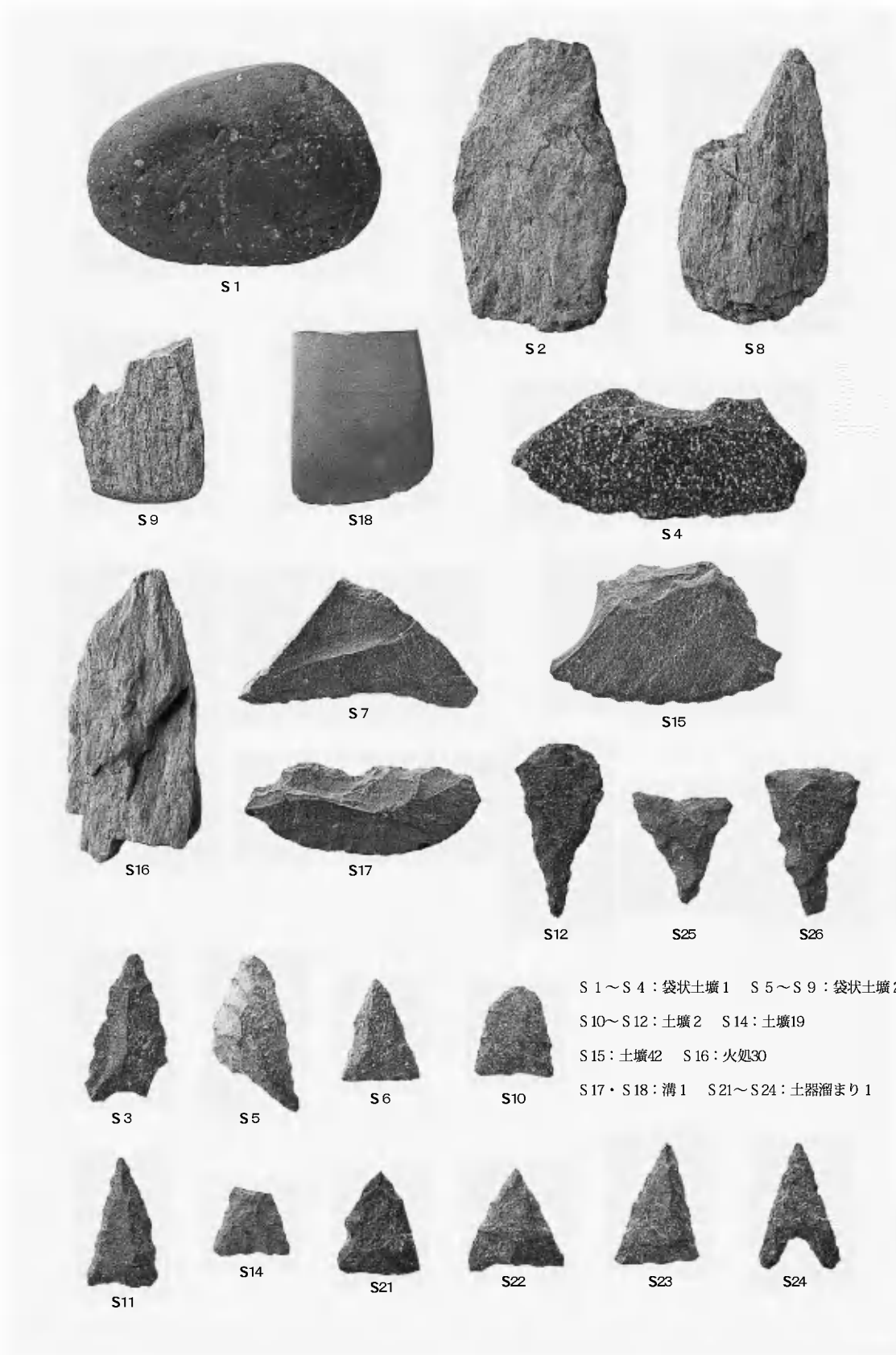


826

750・757・760・774・780・781・820・822：H地区包含

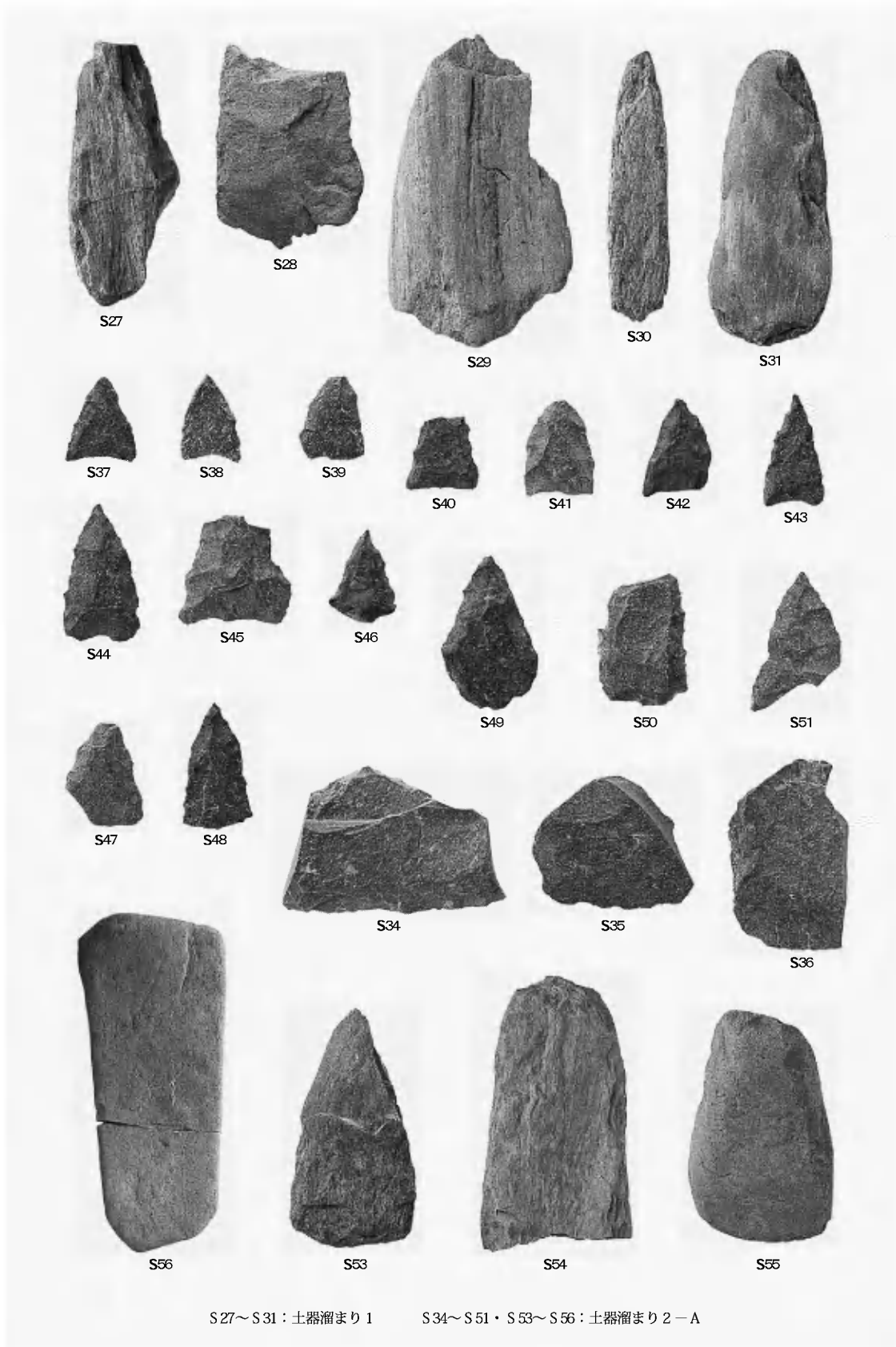
826：I地区包含層

遺構に伴わない遺物⑦

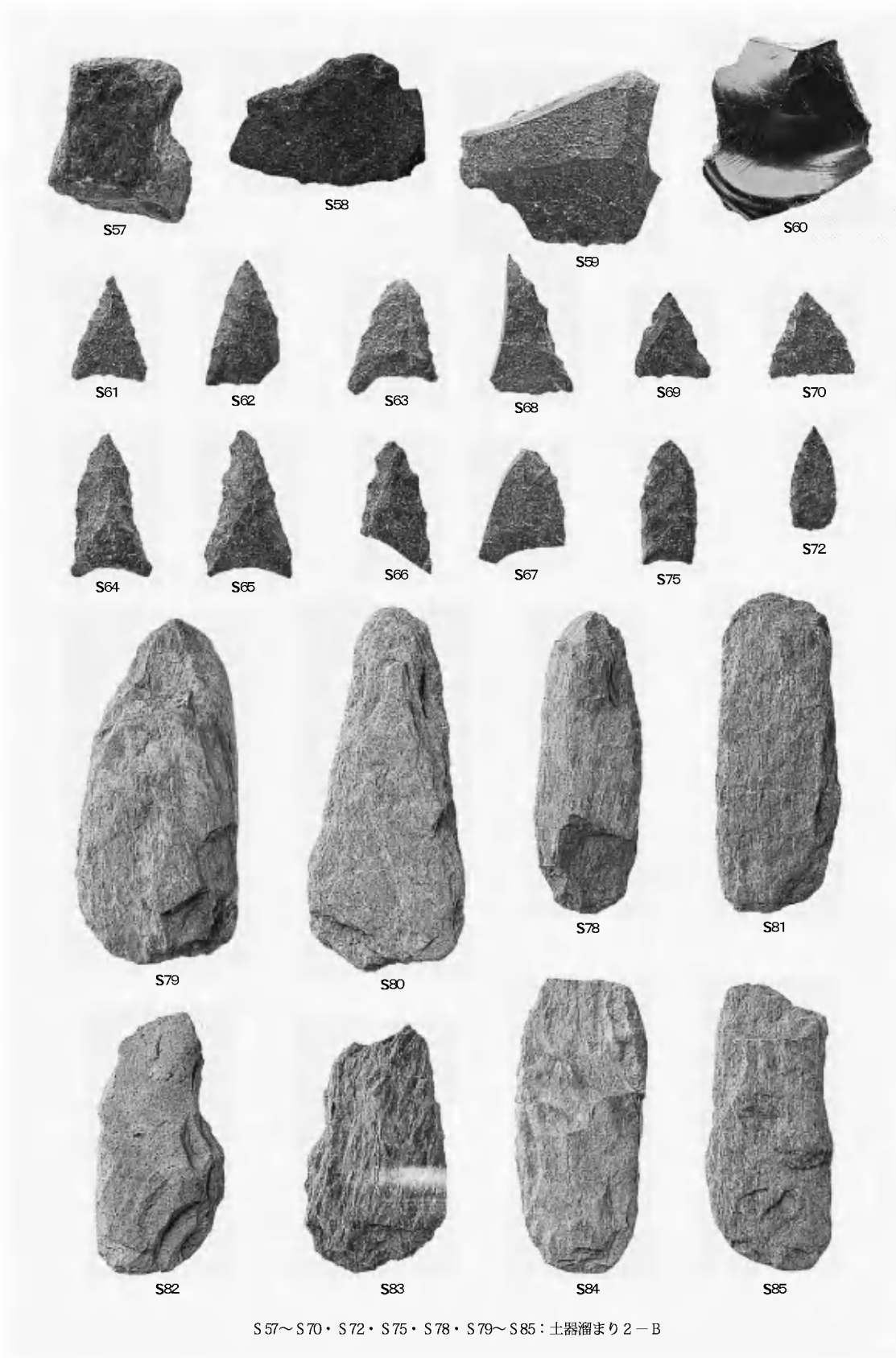


S 1～S 4：袋状土壘 1 S 5～S 9：袋状土壘 2  
 S10～S12：土壘 2 S14：土壘19  
 S15：土壘42 S16：火処30  
 S17・S18：溝 1 S21～S24：土器溜まり 1

袋状土壘・土壘・火処・溝・土器溜まり出土石器①

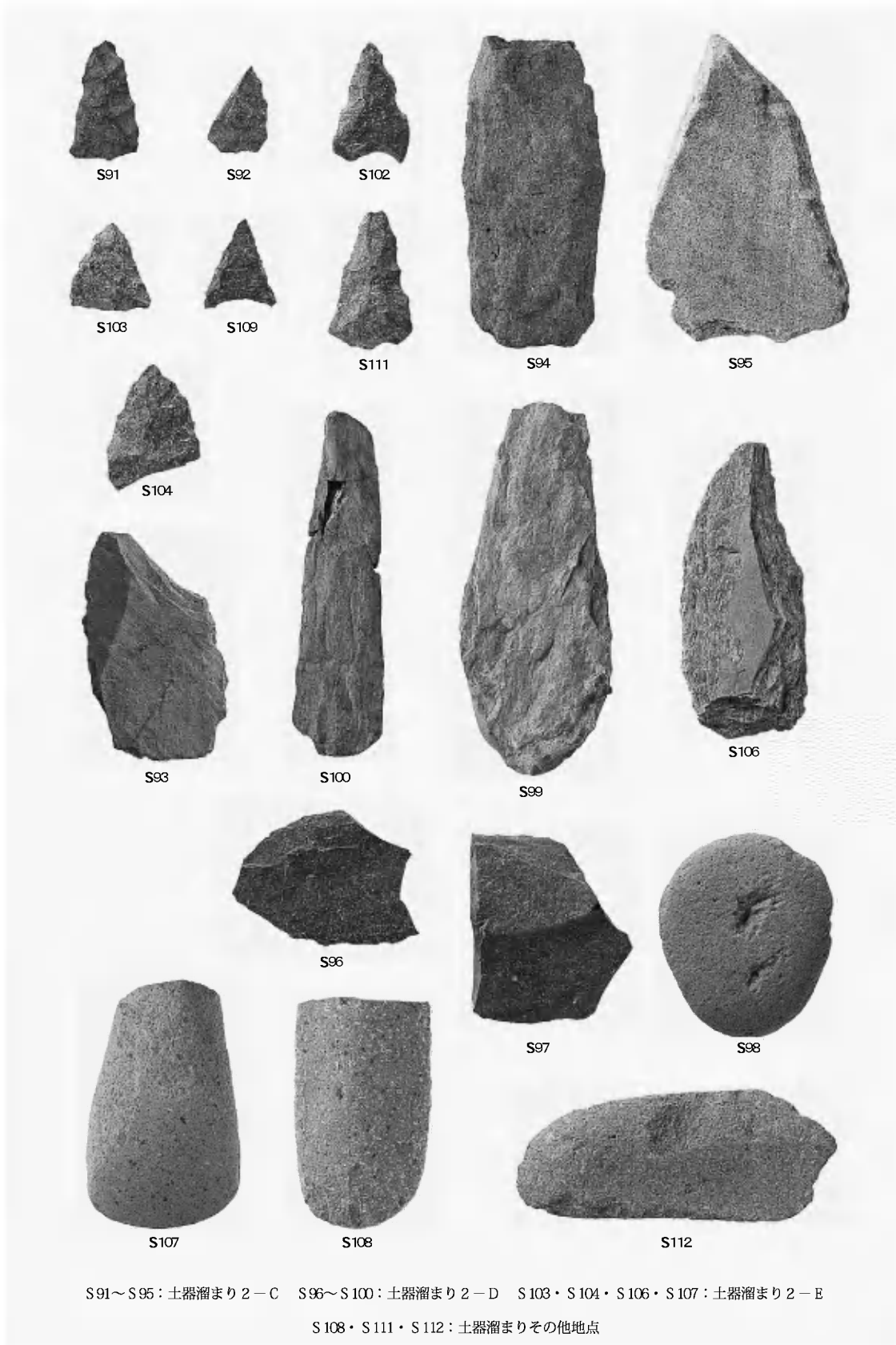


土器溜まり出土石器②

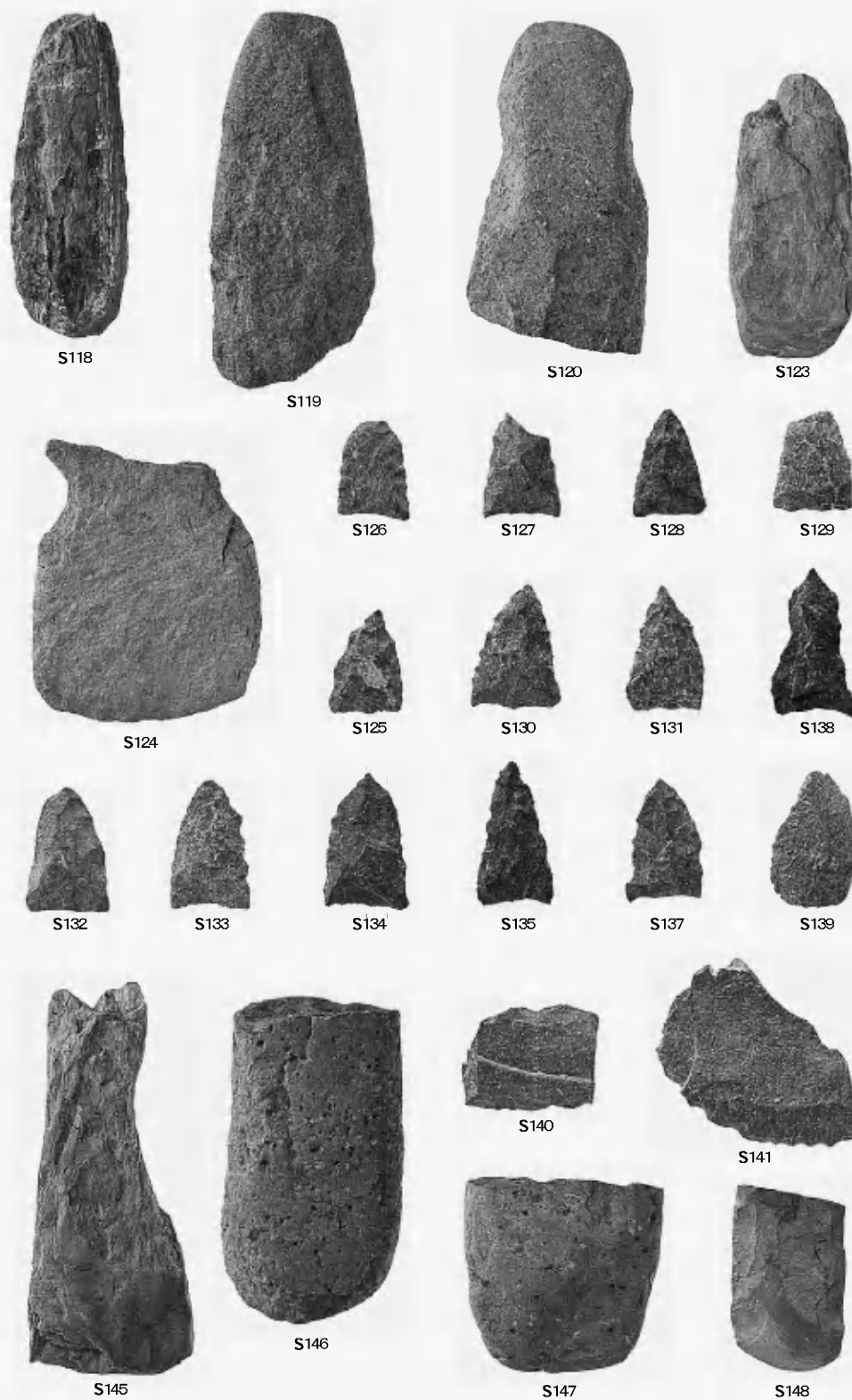


S 57～S 70・S 72・S 75・S 78・S 79～S 85：土器溜まり 2-B

土器溜まり出土石器③

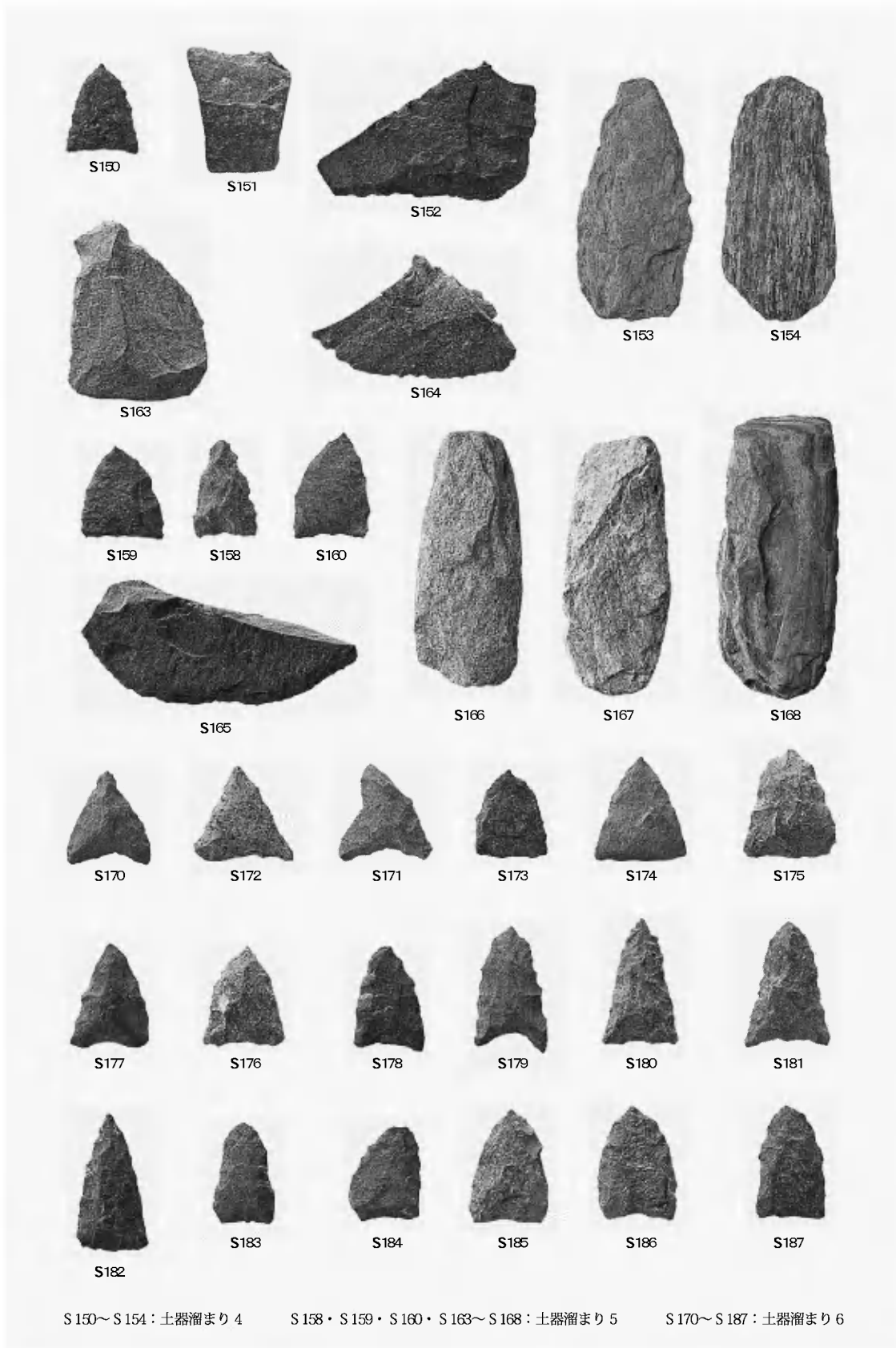


土器溜まり出土石器④

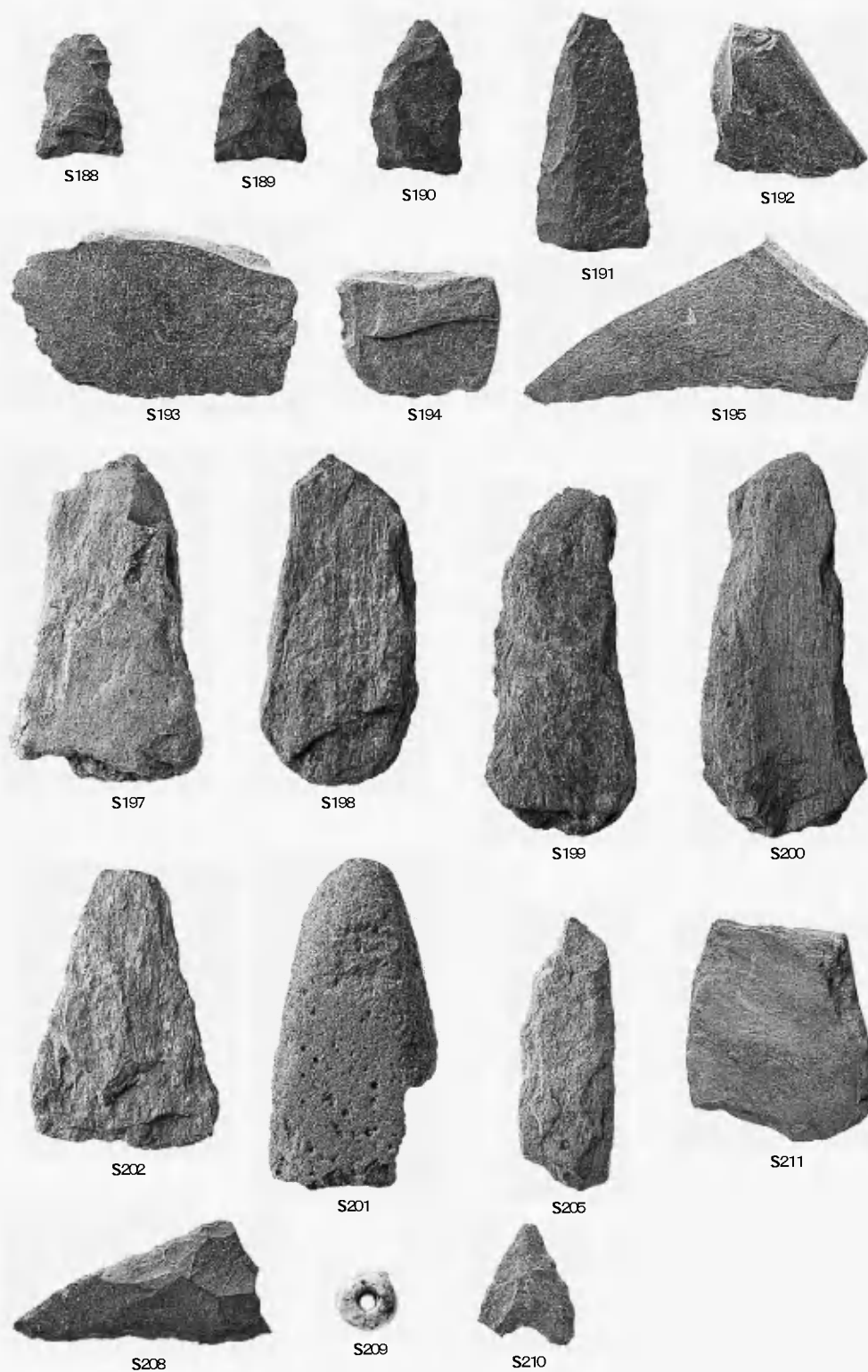


S 118～S 120・S 123：土器溜まりその他地点 S 124～S 135・S 137～S 141・S 145～S 148：土器溜まり 3



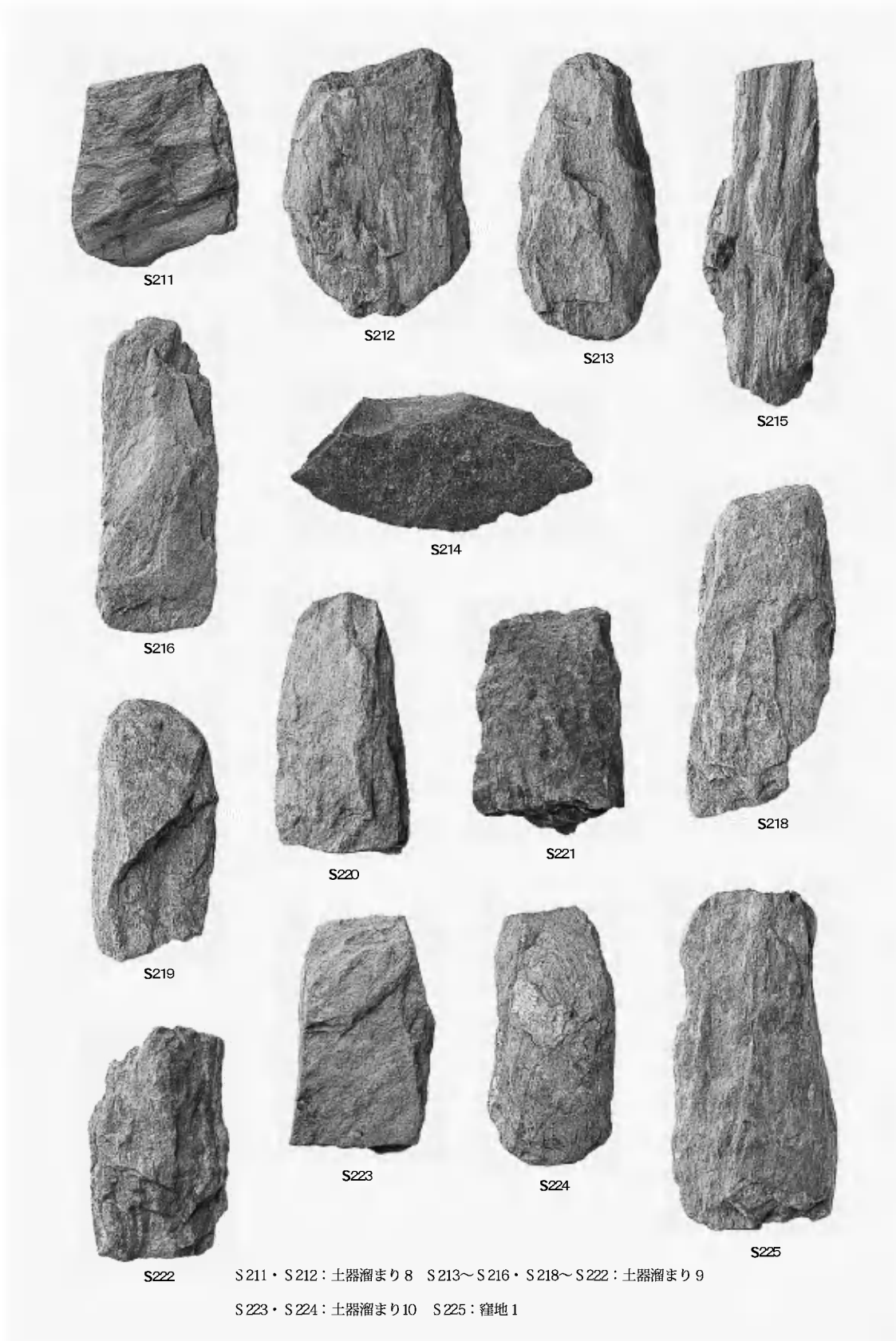


土器溜まり出土石器⑥

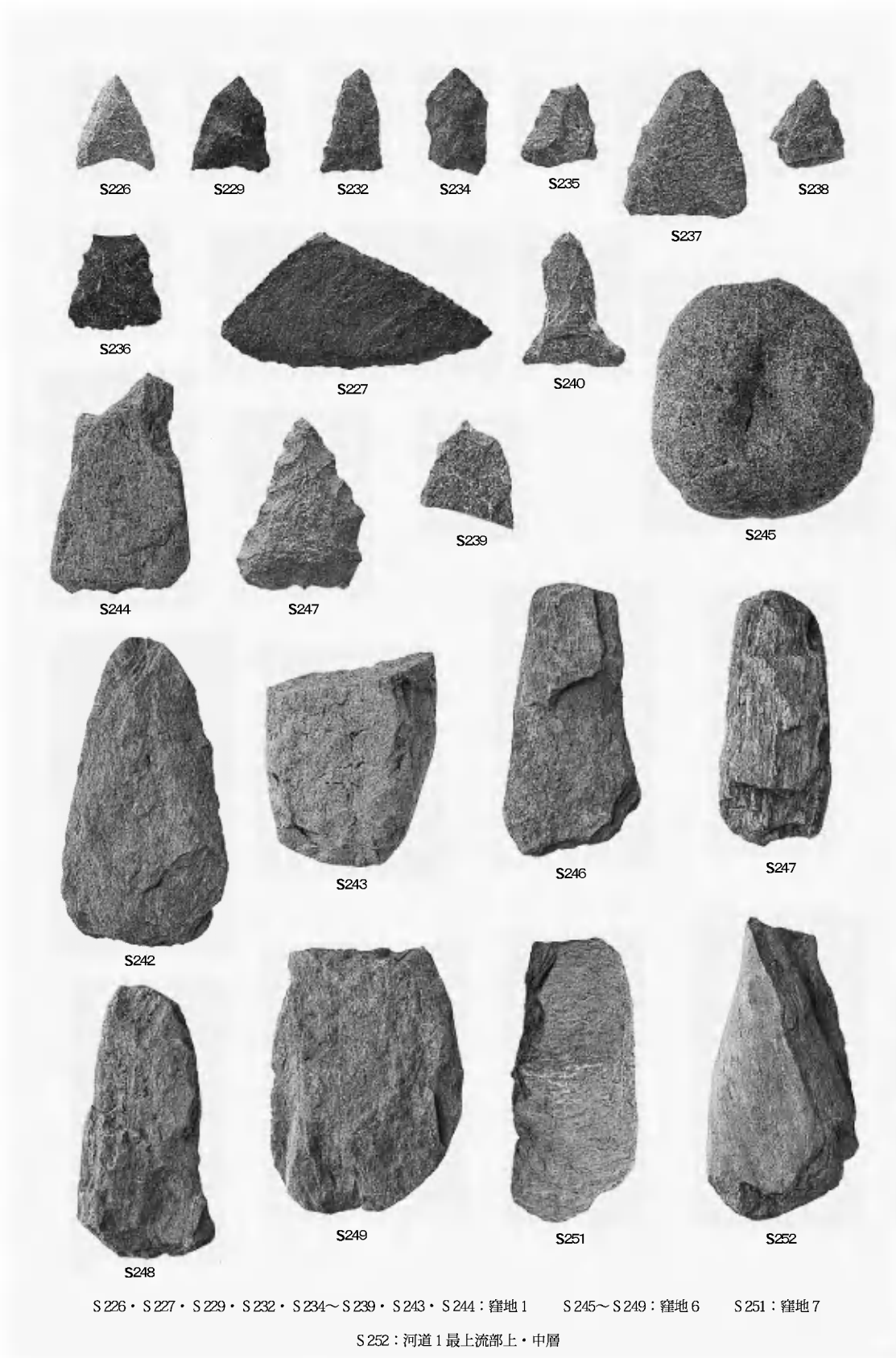


S 188～S 195・S 197～S 200：土器溜まり 6

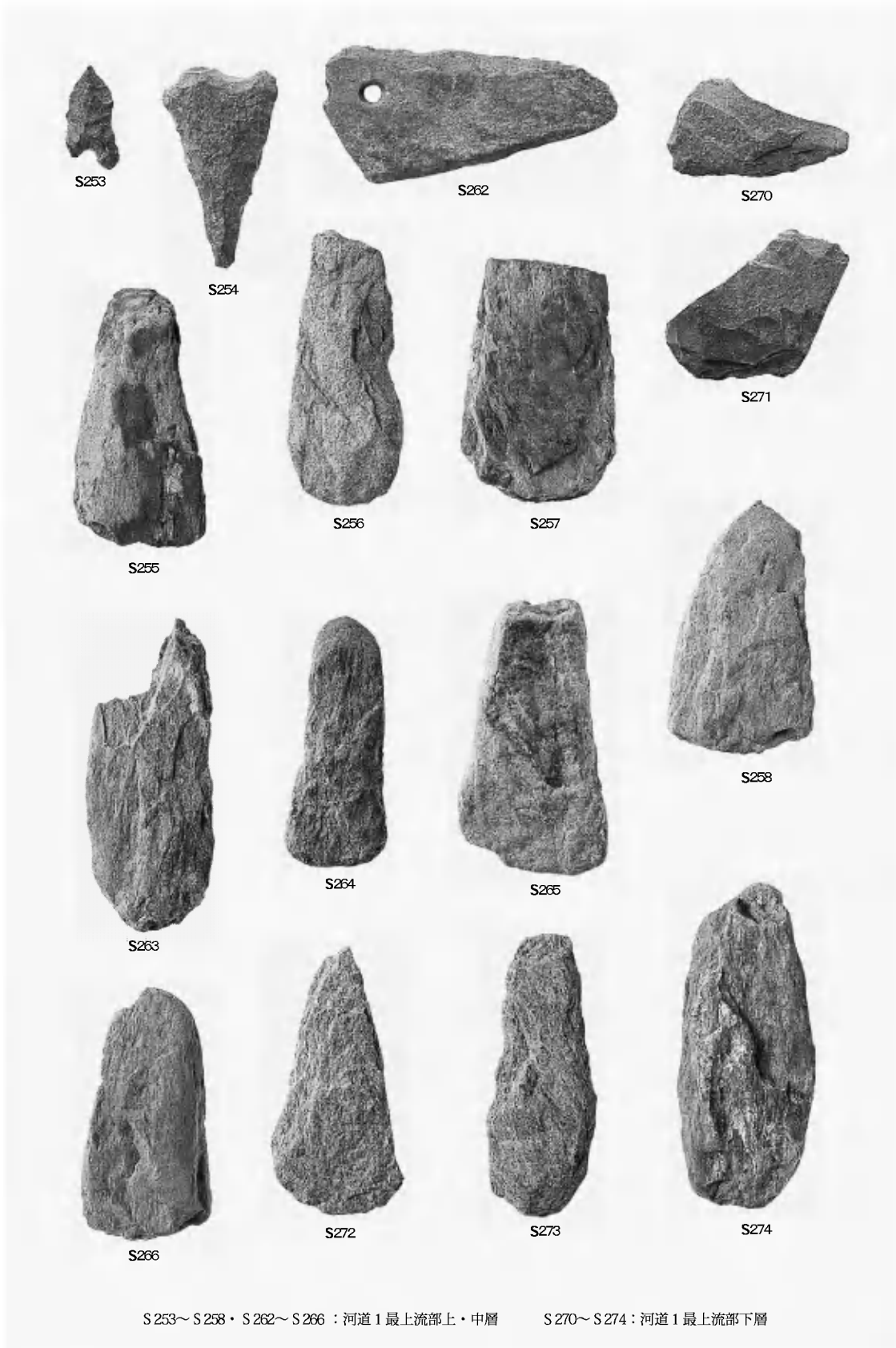
S 201・S 202・S 205・S 208～S 211：土器溜まり 7



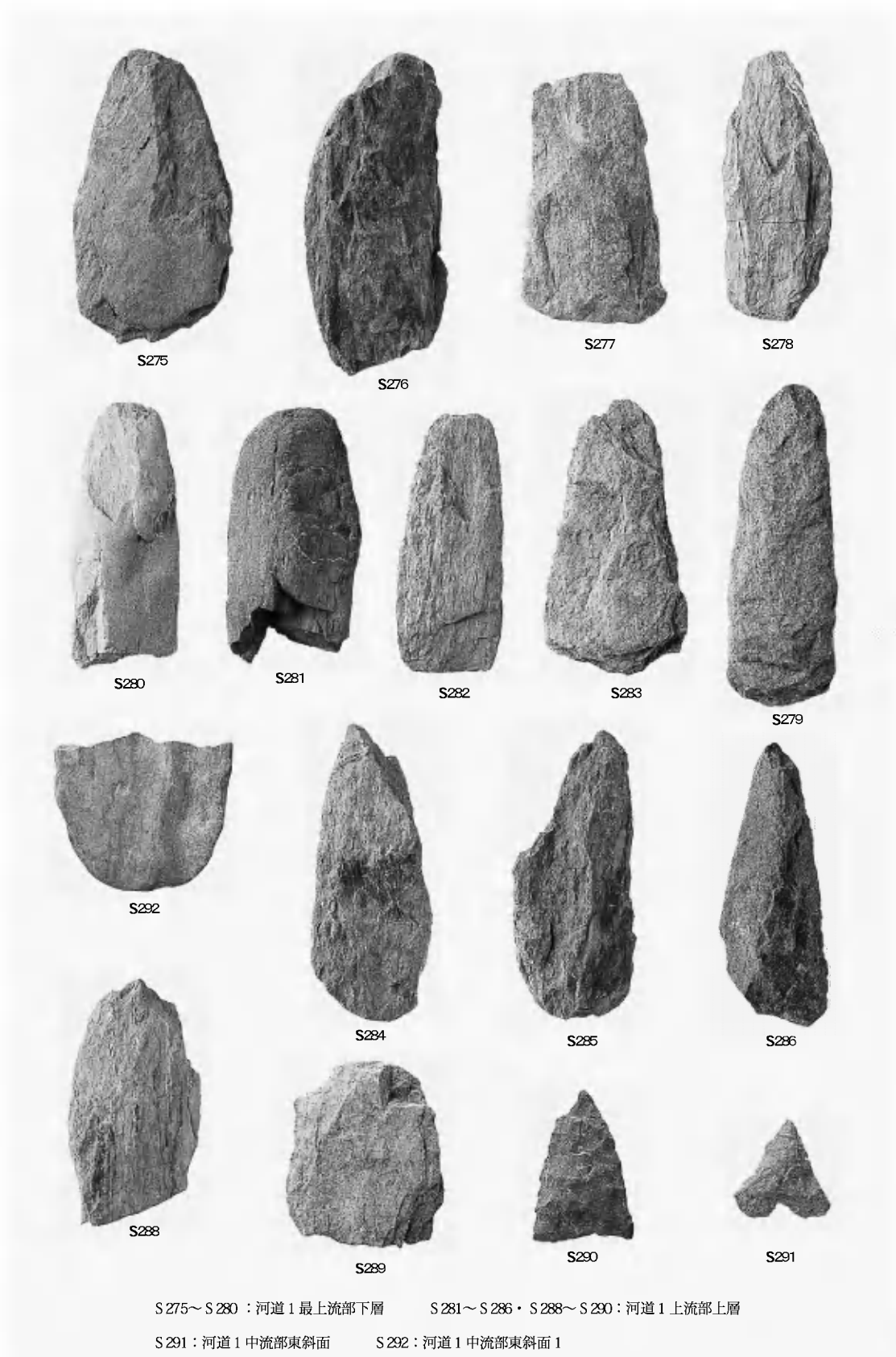
土器溜まり出土石器⑧、窪地出土石器①



窪地出土石器②、河道出土石器①



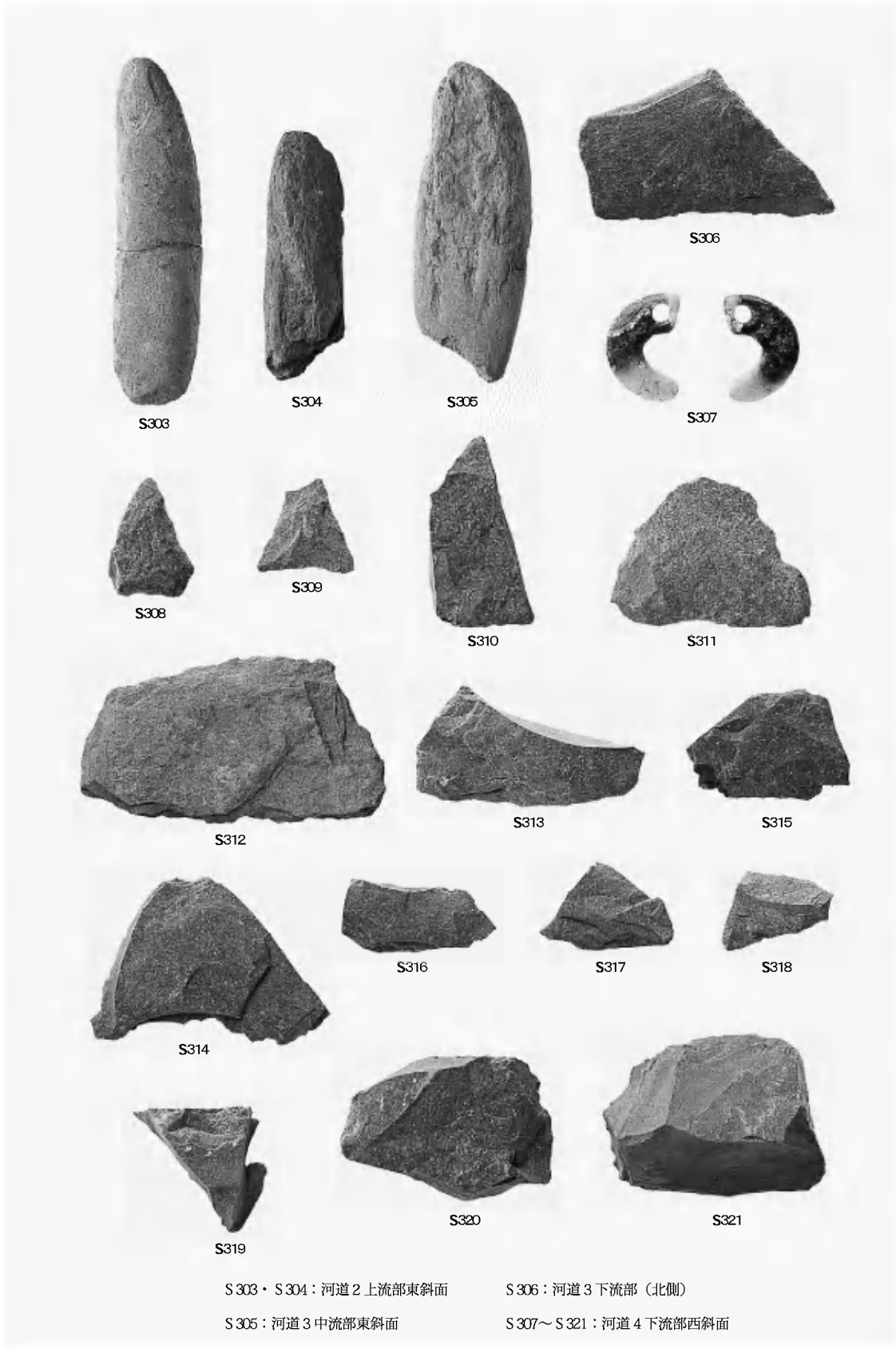
河道出土石器②



S275~S280 : 河道1 最上流部下層      S281~S286・S288~S290 : 河道1 上流部上層

S291 : 河道1 中流部東斜面      S292 : 河道1 中流部東斜面1

河道出土石器③



S303

S304

S305

S306

S307

S308

S309

S310

S311

S312

S313

S315

S314

S316

S317

S318

S319

S320

S321

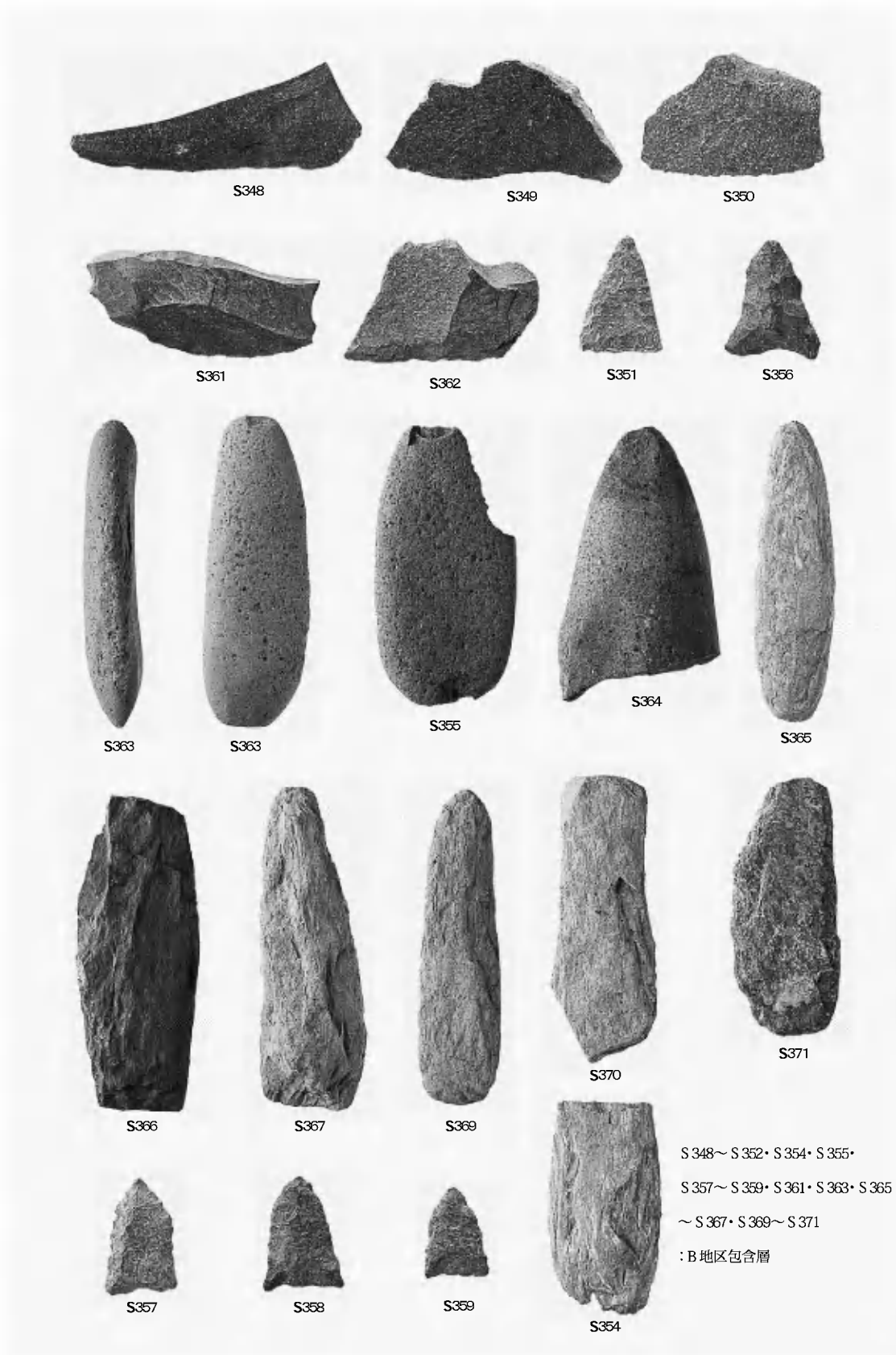
S303・S304：河道2上流部東斜面

S306：河道3下流部（北側）

S305：河道3中流部東斜面

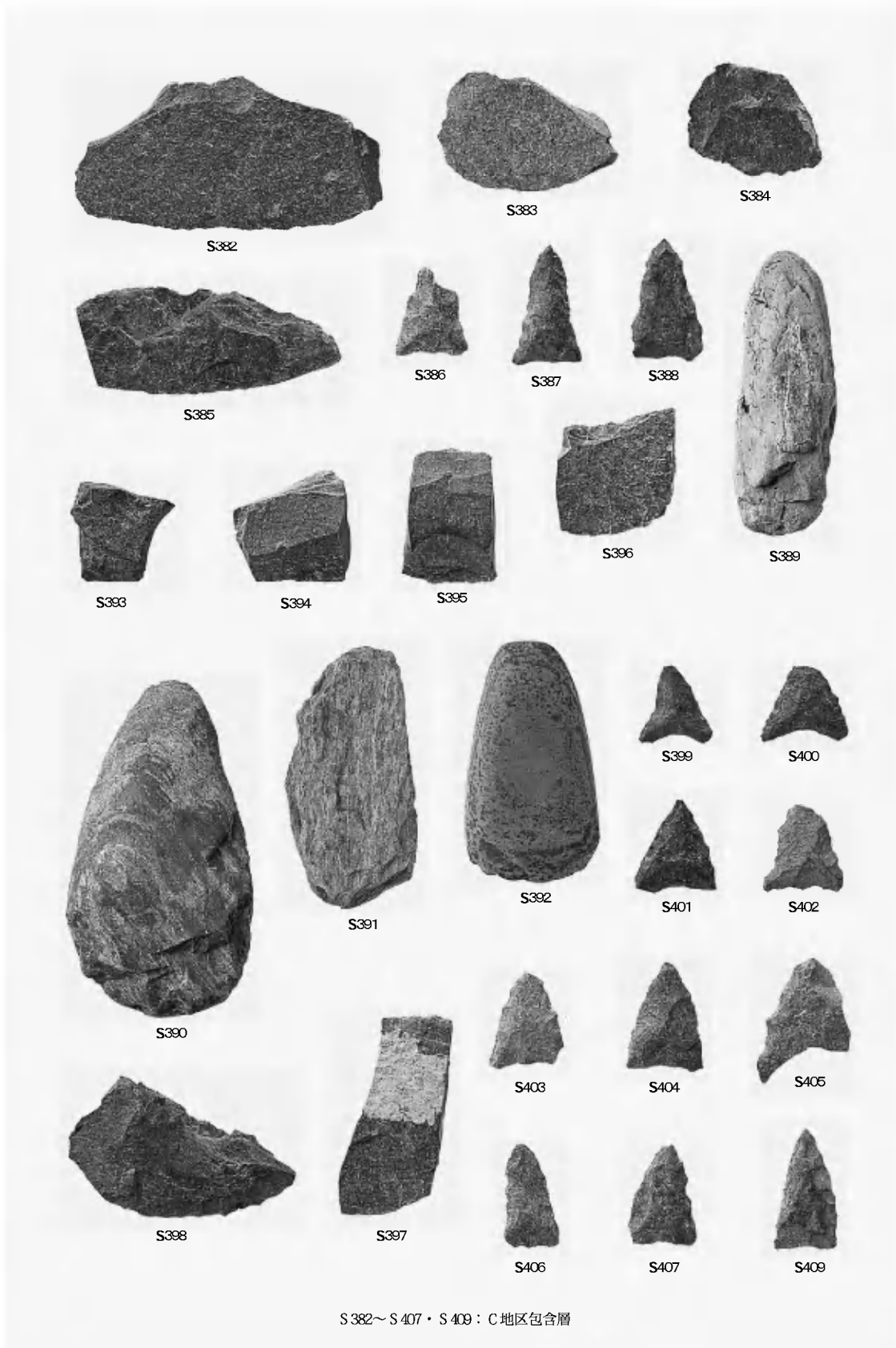
S307～S321：河道4下流部西斜面

河道出土石器④・石製品



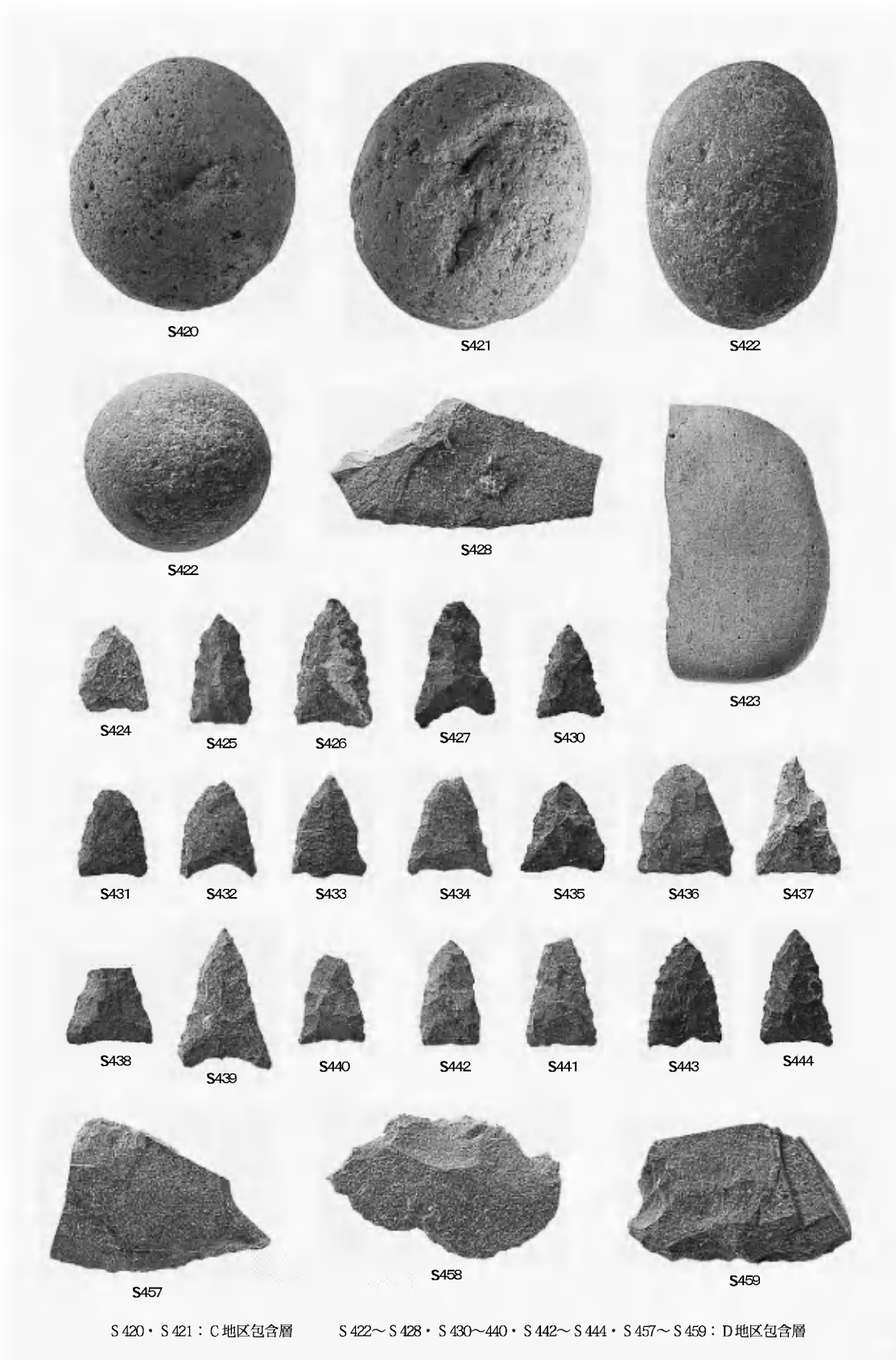
遺構に伴わない石器①





S382~S407・S409：C地区包含層

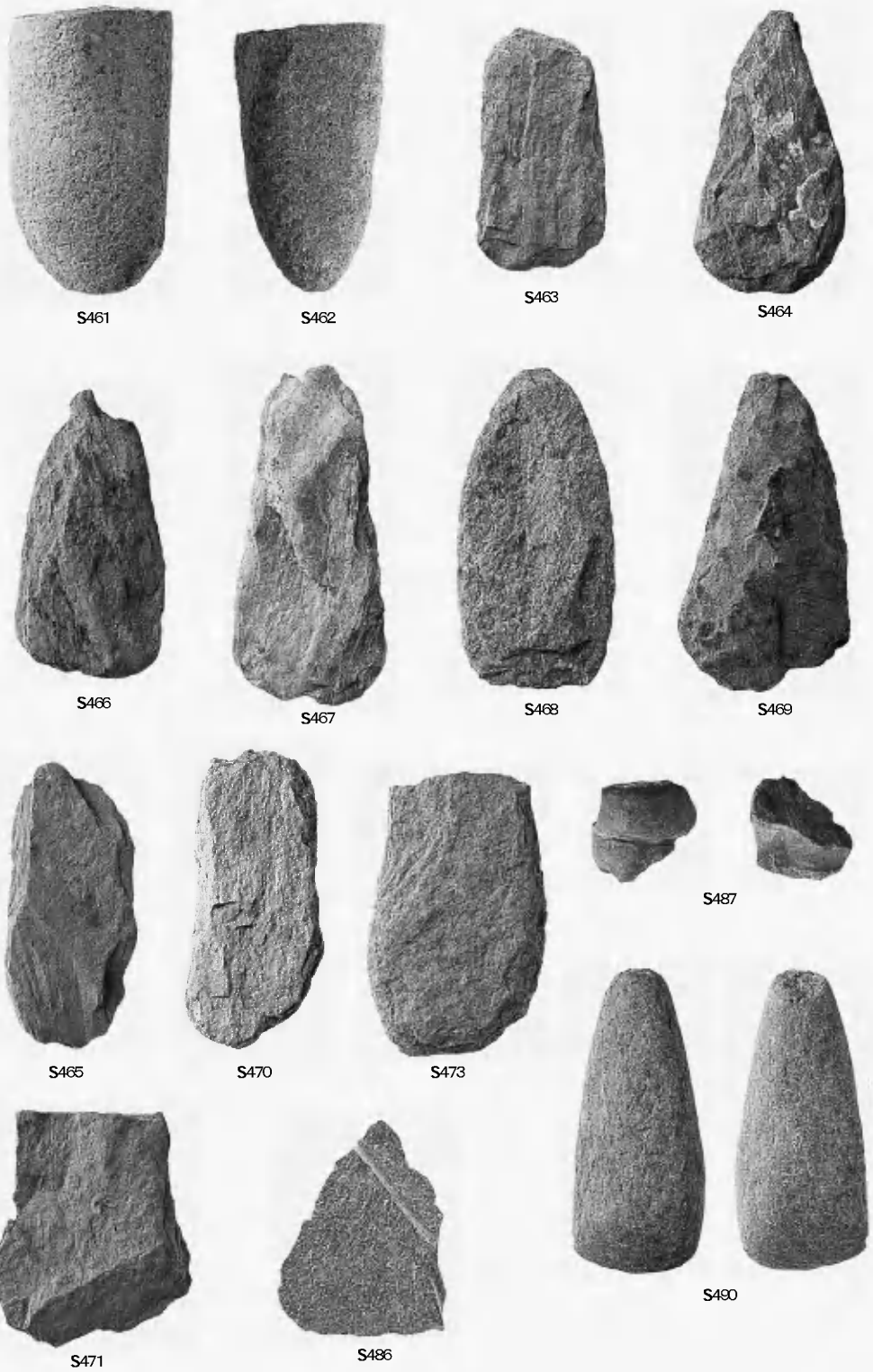
遺構に伴わない石器②



S 420・S 421 : C 地区包含層

S 422～S 428・S 430～440・S 442～S 444・S 457～S 459 : D 地区包含層

遺構に伴わない石器③

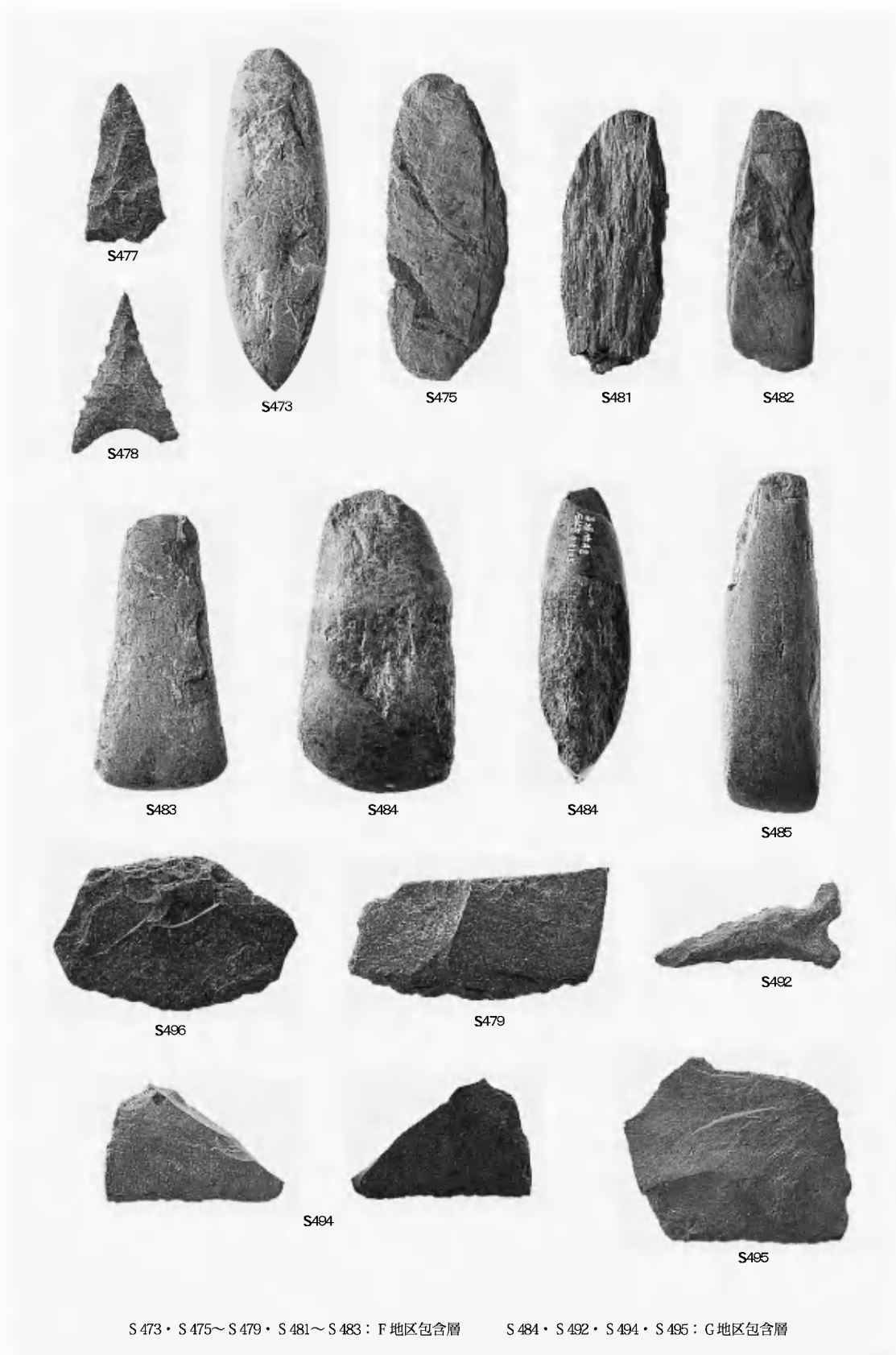


S 461～S 471 : D地区包含層

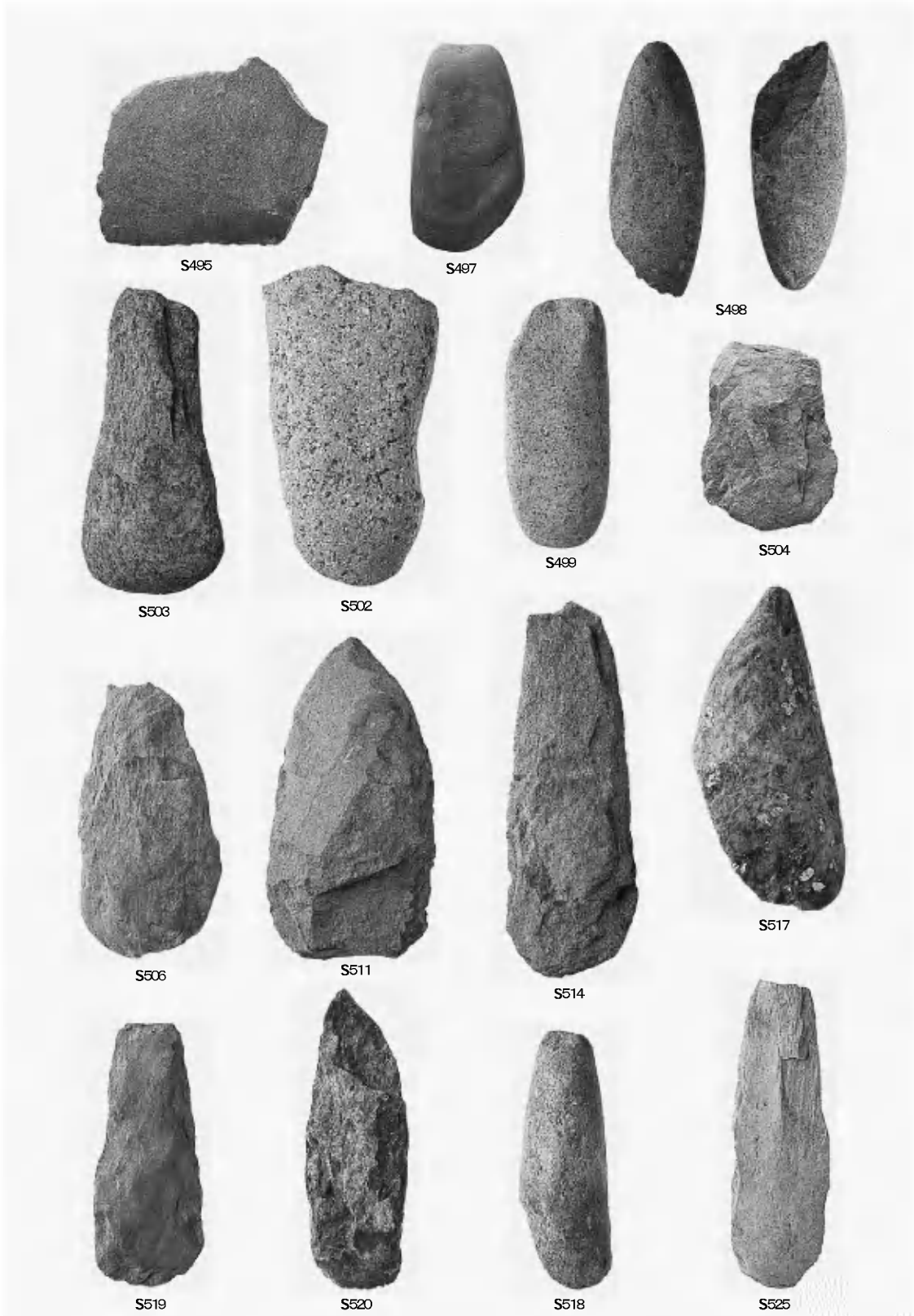
S 473 : F地区包含層

S 486・S 487・S 490 : G地区包含層

遺構に伴わない石器④・石製品

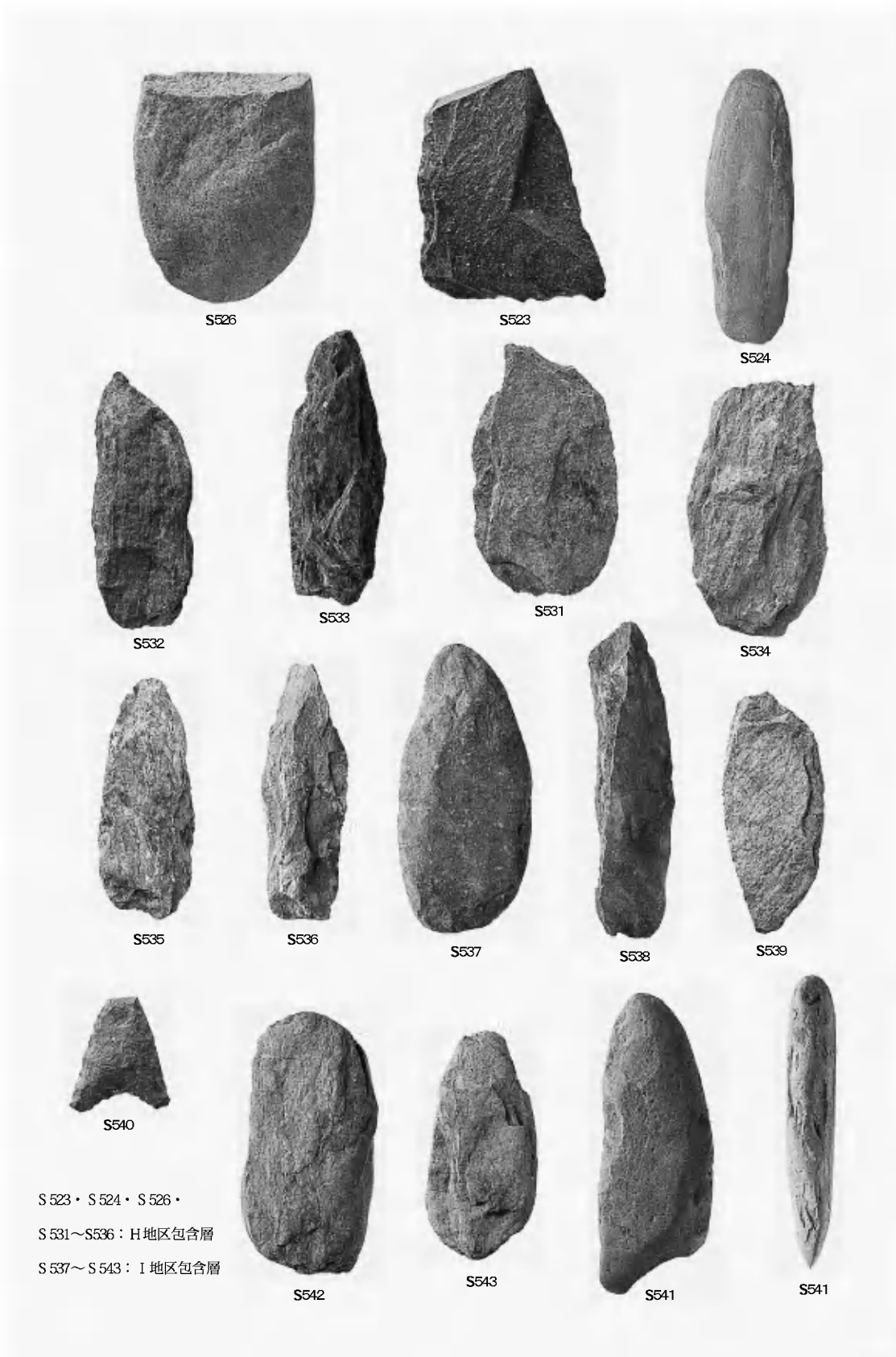


遺構に伴わない石器⑤

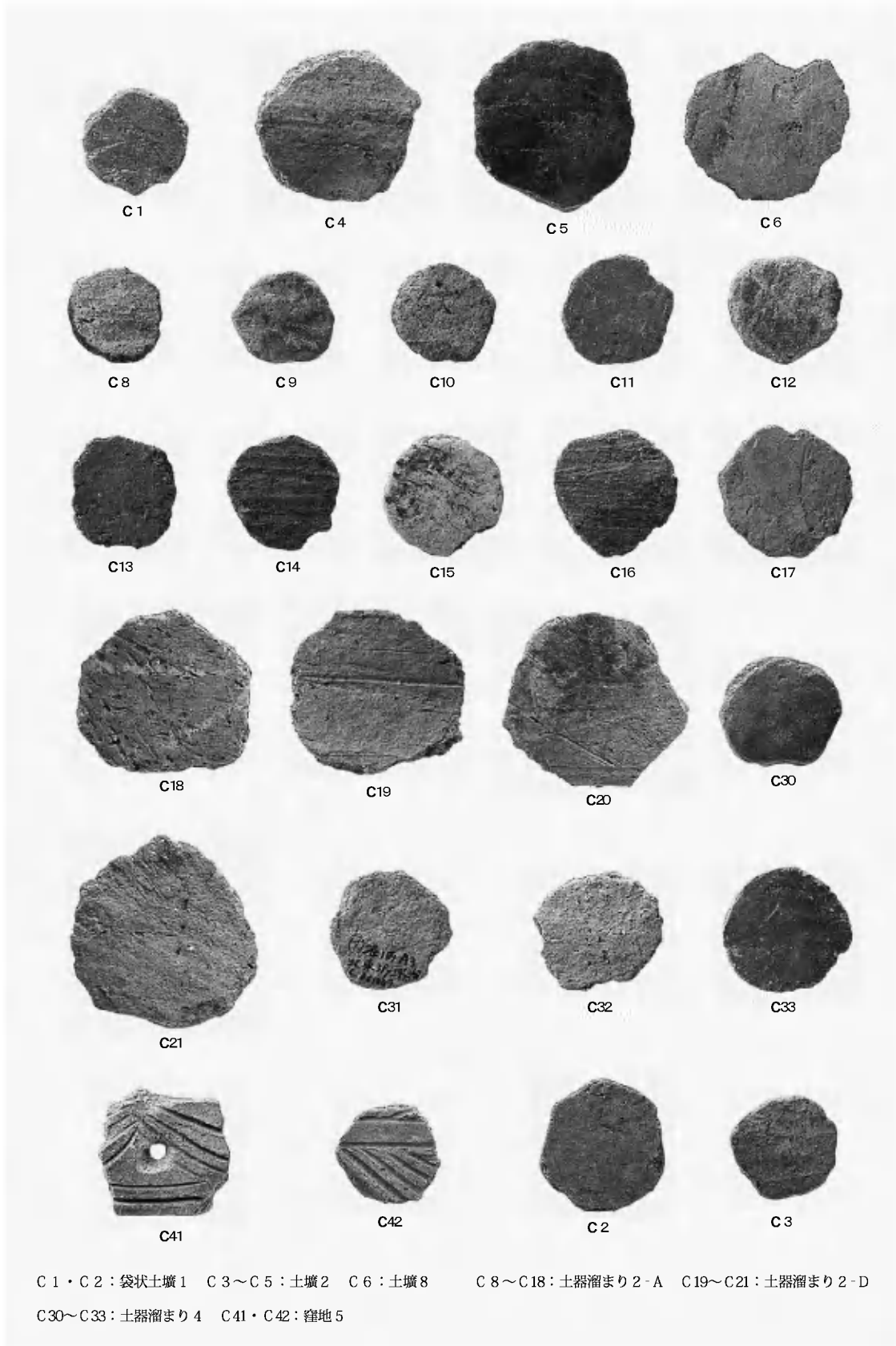


S 495・S 497～S 499・S 502～S 504・S 506・S 511・S 514：G地区包含層 S 517～S 520・S 525：H地区包含層

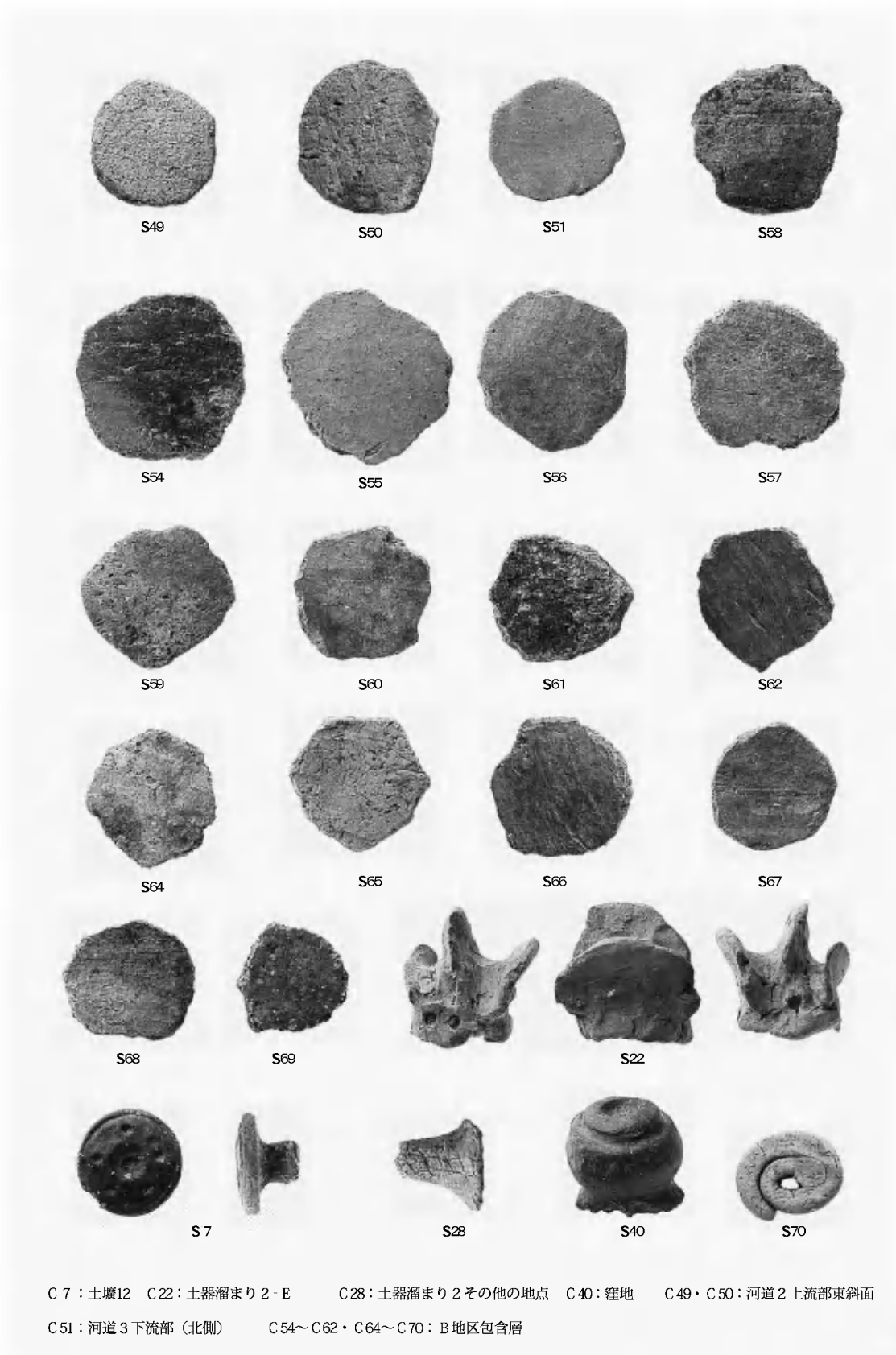
遺構に伴わない石器⑥



遺構に伴わない石器⑦



出土土製品①



C 7 : 土城12 C 22 : 土器溜まり 2 - E C 28 : 土器溜まり 2 その他の地点 C 40 : 窪地 C 49・C 50 : 河道 2 上流部東斜面  
 C 51 : 河道 3 下流部 (北側) C 54~C 62・C 64~C 70 : B 地区包含層



1 竪穴住居 1  
完掘状況  
(西から)

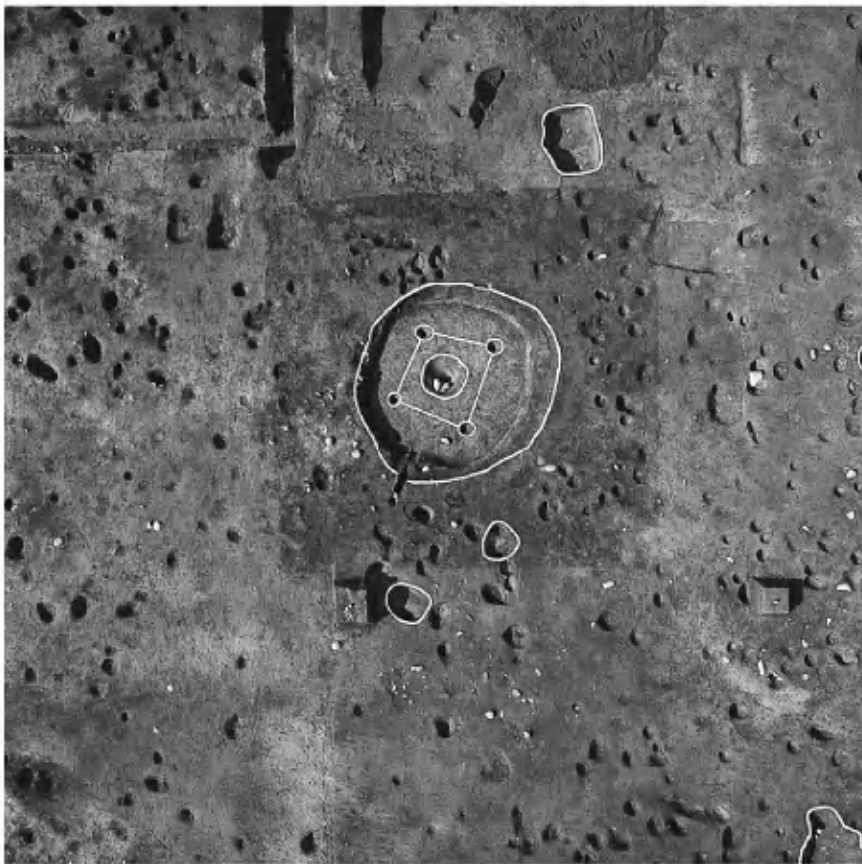


2 竪穴住居 2  
床面検出状況  
(南から)



3 竪穴住居 2  
完掘状況  
(南西から)





1 竪穴住居 2  
(上空から)

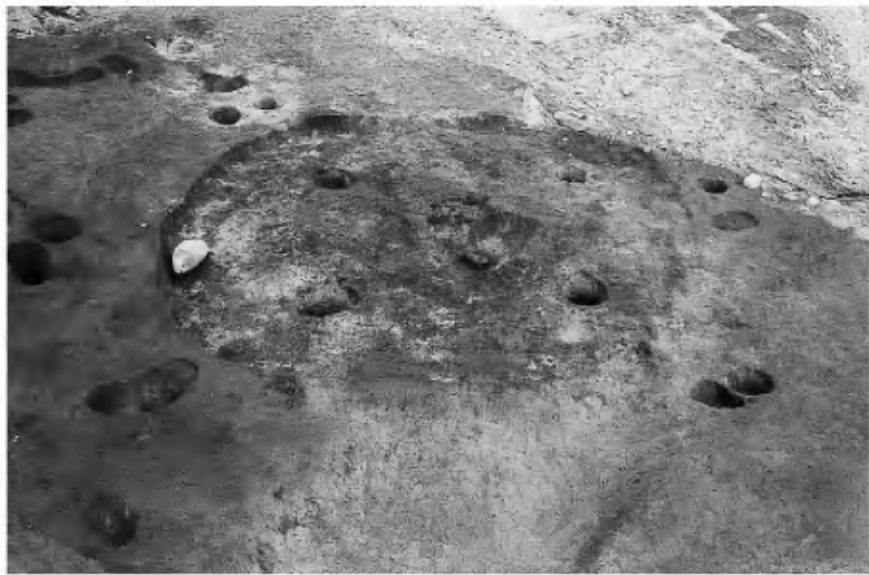


2 竪穴住居 3・4  
(南から)

1 竪穴住居3  
調査風景  
(南西から)



2 竪穴住居3  
完掘状況  
(南から)



3 竪穴住居3  
中央穴土器  
出土状況  
(南から)





1 竪穴住居 4  
(東から)

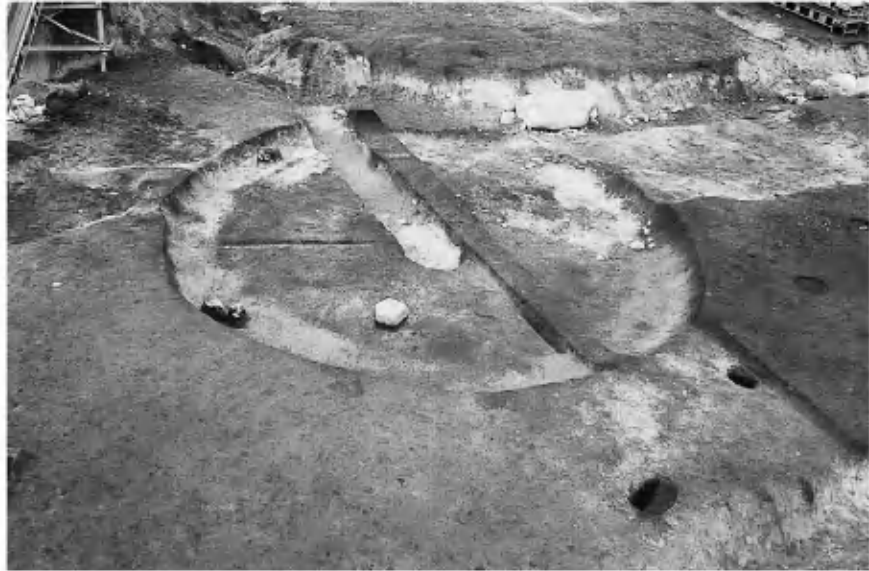


2 竪穴住居 4  
土器出土状況  
(南から)



3 竪穴住居 4  
完掘状況  
(北から)

1 竪穴住居5  
床面検出状況  
(南から)



2 竪穴住居5  
(東から)



3 竪穴住居5  
土器出土状況  
(南東から)





1 竪穴住居5  
土器出土状況  
(南から)



2 竪穴住居6  
完掘状況  
(東から)



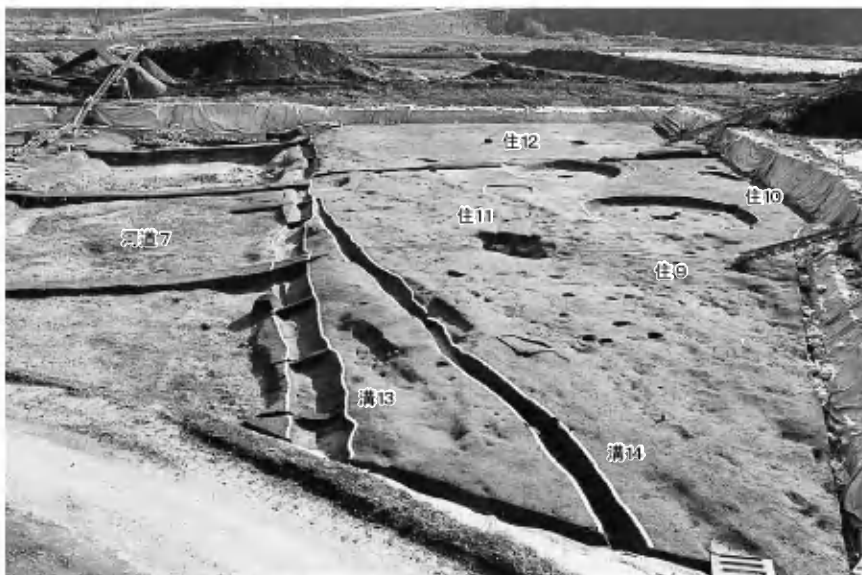
3 竪穴住居7  
完掘状況  
(西から)

1 竪穴住居5、  
掘立柱建物1  
(東から)



2 竪穴住居9～12  
溝13・14、河道7  
(上空から)





1 竪穴住居9～12  
溝13・14  
河道7中流  
全景  
(北から)



2 竪穴住居9～12  
溝13・14  
河道7中流  
全景  
(北東から)



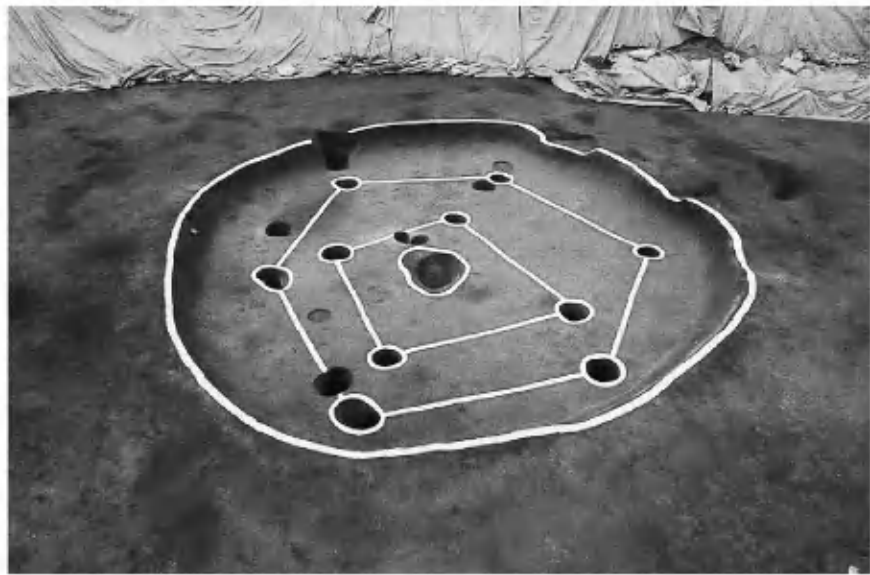
3 竪穴住居9  
床面検出状況  
(東から)



1 竪穴住居9  
完掘状況  
(東から)

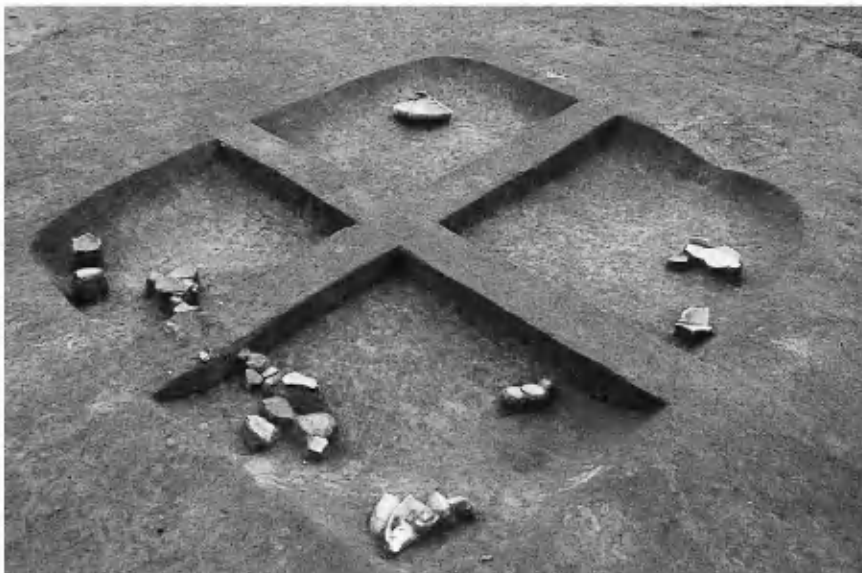


2 竪穴住居9  
(東から)



3 竪穴住居12  
完掘状況  
(東から)

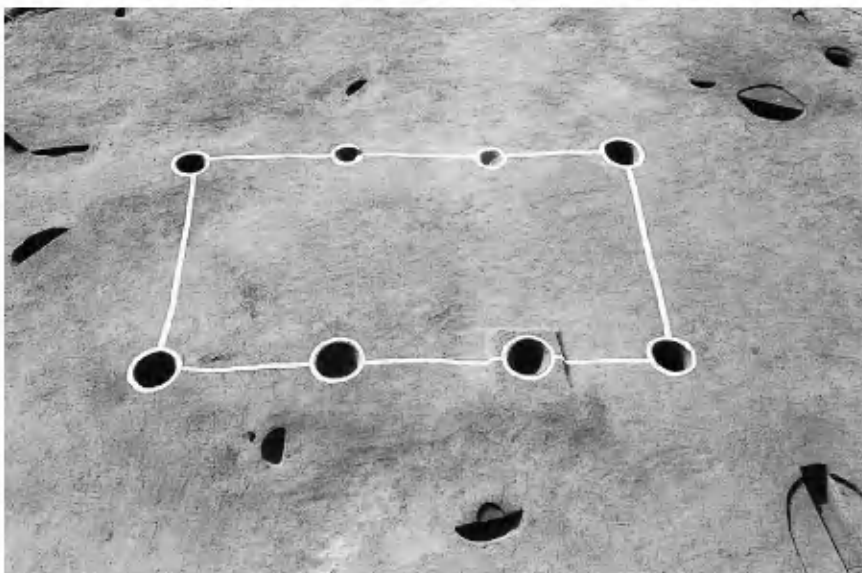




1 竪穴住居13  
(南西から)



2 竪穴住居13  
土器出土状況  
(東から)



3 掘立柱建物2  
(東から)

1 袋状土壙5  
完掘状況  
(南から)



2 土壙60  
遺物出土状況  
(東から)

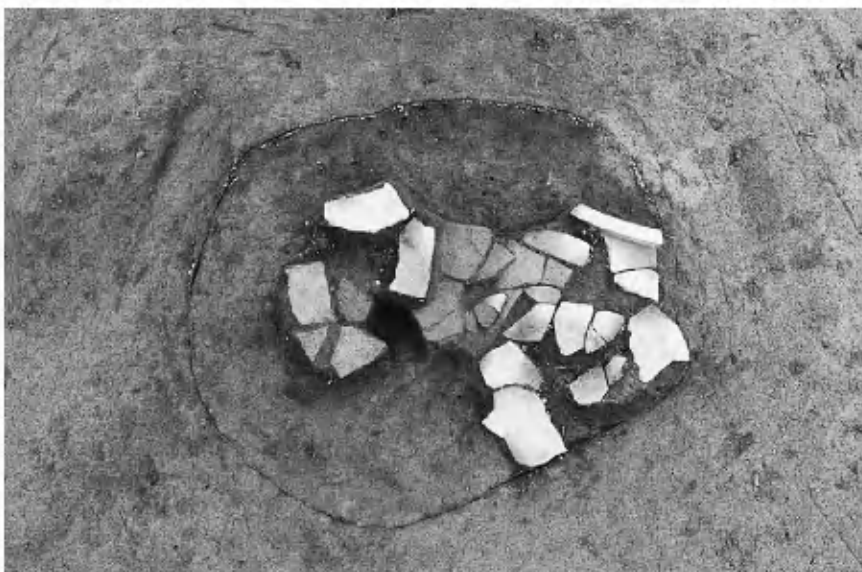


3 土壙69  
土器出土状況  
(東から)





1 土壙71  
土器出土状況  
(南から)



2 土壙72  
土器出土状況  
(南から)



3 土壙76  
完掘状況  
(東から)

1 水田1と河道7  
(上空から)



2 弥生水田  
(上空から)





1 水田 1  
検出状況  
(南から)

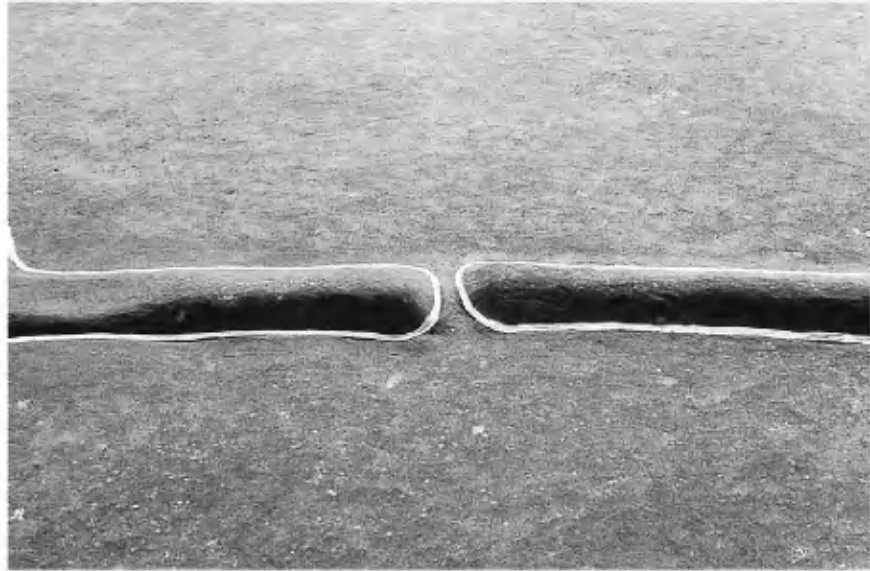


2 水田 1  
検出状況  
(南から)

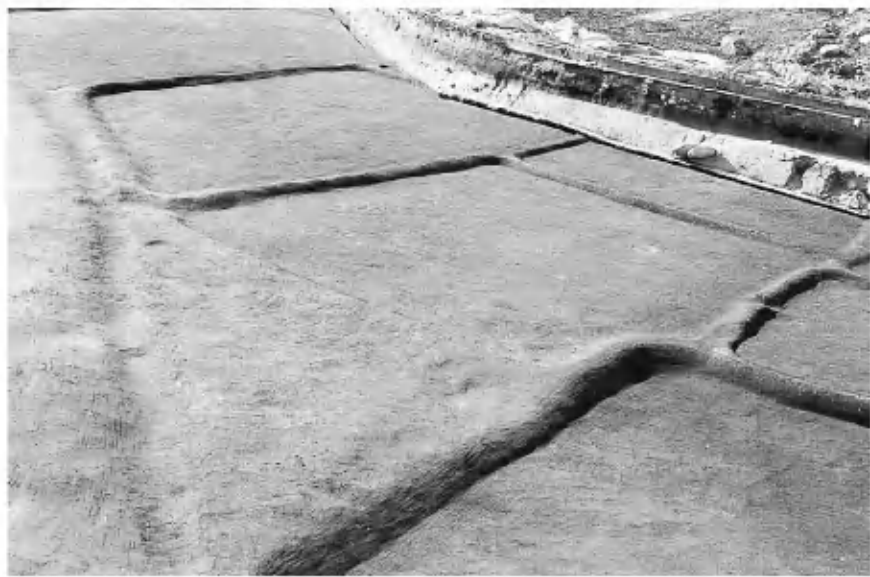


3 水田 1  
完掘状況  
(南西から)

1 水田 1  
水口の状況  
(南東から)



2 水田 1  
完掘状況  
(南から)



3 水田 1  
検出状況  
(南から)





1 水田 1 全景と  
洪水砂の関係  
(南から)



2 水田 1  
完掘状況  
(西から)



3 溝 7  
全景  
(南から)



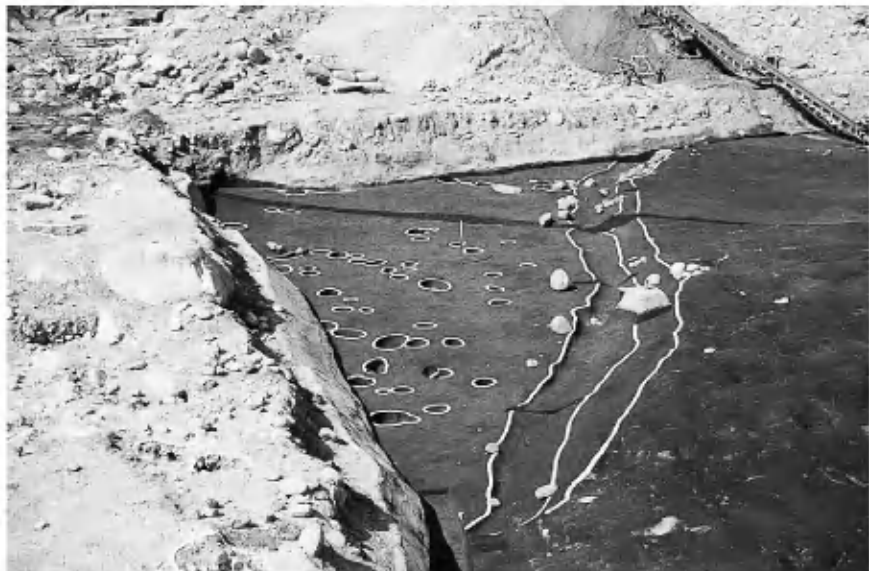
1 溝7  
土層断面  
(南から)



2 溝7  
土層断面  
(南から)



3 溝9  
(南東から)





1 溝11・12  
土層断面  
(南から)



2 溝13  
検出状況  
(西から)



3 溝13・14  
(東から)

1 溝15  
土層断面  
(南から)



2 溝16  
全景  
(南から)



3 河道7上流部  
調査風景  
(南から)





1 河道7上流部  
全景  
(南から)



2 河道7中流部  
全景  
(南から)



3 河道7下流部  
土層断面  
(南から)

1 河道7下流部  
(北から)



2 河道9  
(北から)



3 河道8上流部  
(北から)





1 河道9  
土層断面  
(南から)



2 河道9  
調査風景  
(北から)



3 洪水砂の状況  
(南東から)



846



847



849



848



850



857



861



854



858



862

846~849：竪穴住居2 850：竪穴住居3 854：竪穴住居4 857・858・861：竪穴住居5

862：竪穴住居6 863：竪穴住居7 869：竪穴住居9



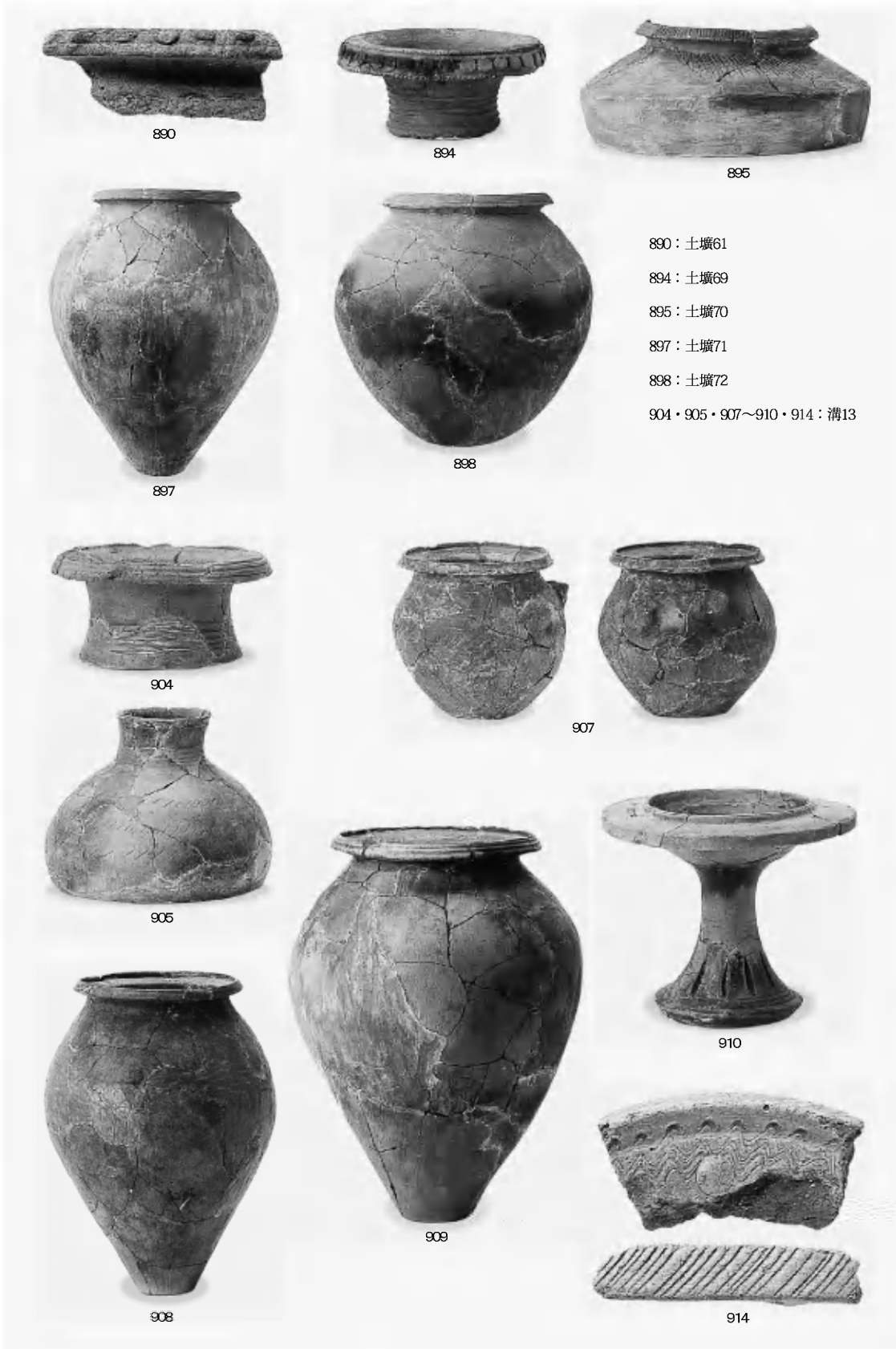
863



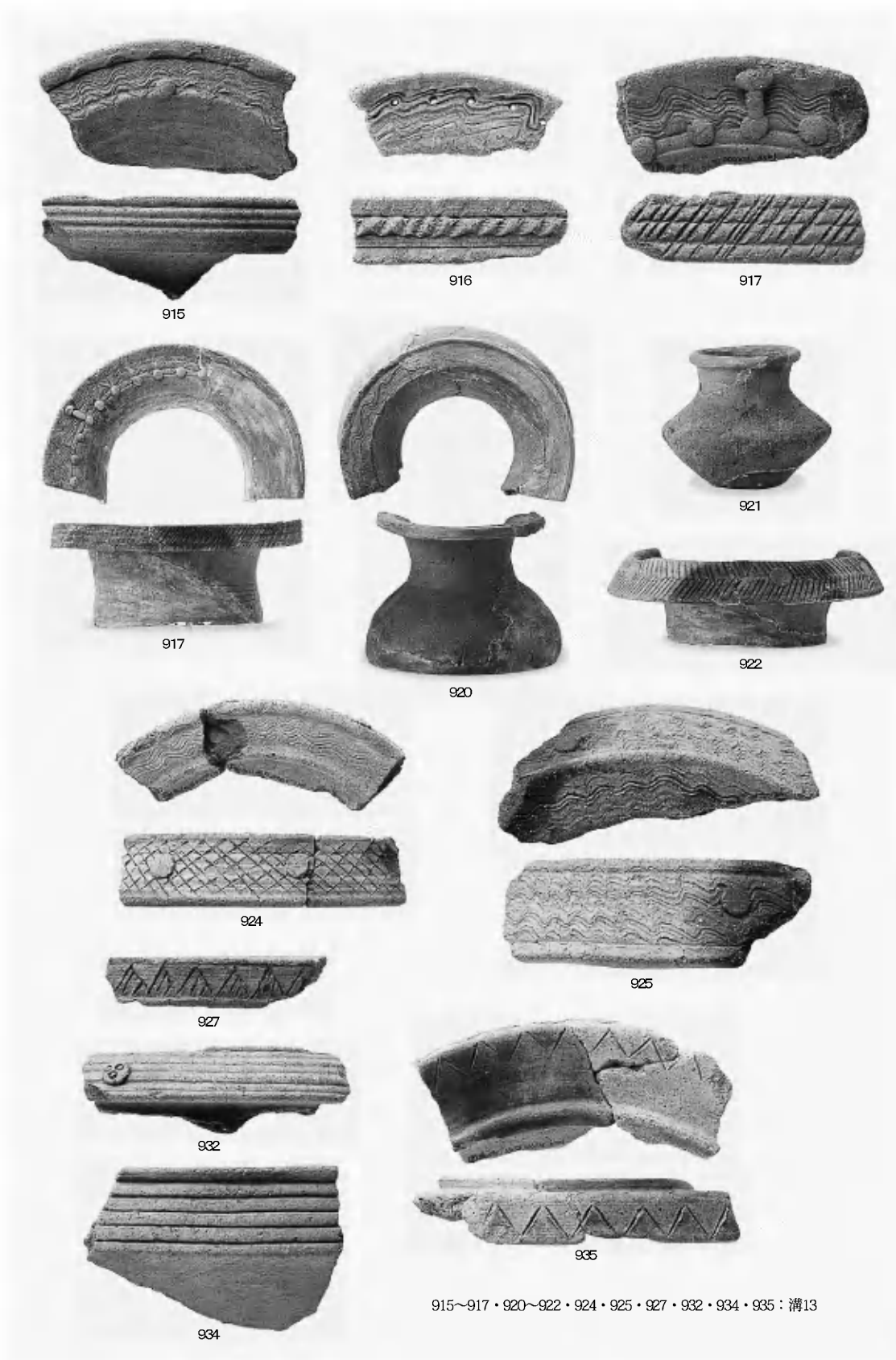
869



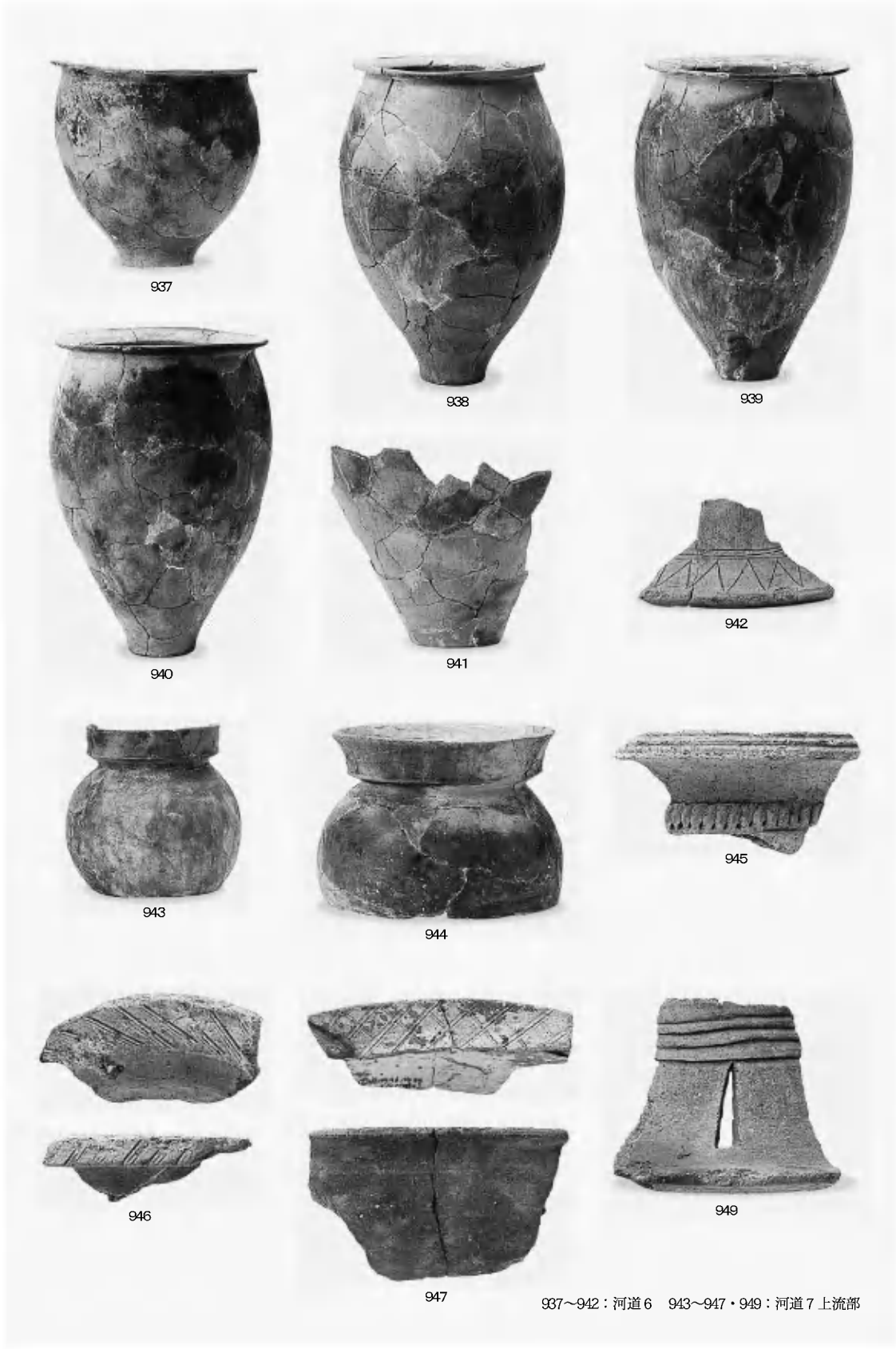




出土土器③



915~917・920~922・924・925・927・932・934・935：溝13



937

938

939

940

941

942

943

944

945

946

947

949

937~942: 河道6 943~947・949: 河道7 上流部



950



952



954



951



953



955



956



957



958



959



961



966

950~958: 河道7 上流部

961・966: 河道7 中流部



968



971



970



969



973



975



976



977

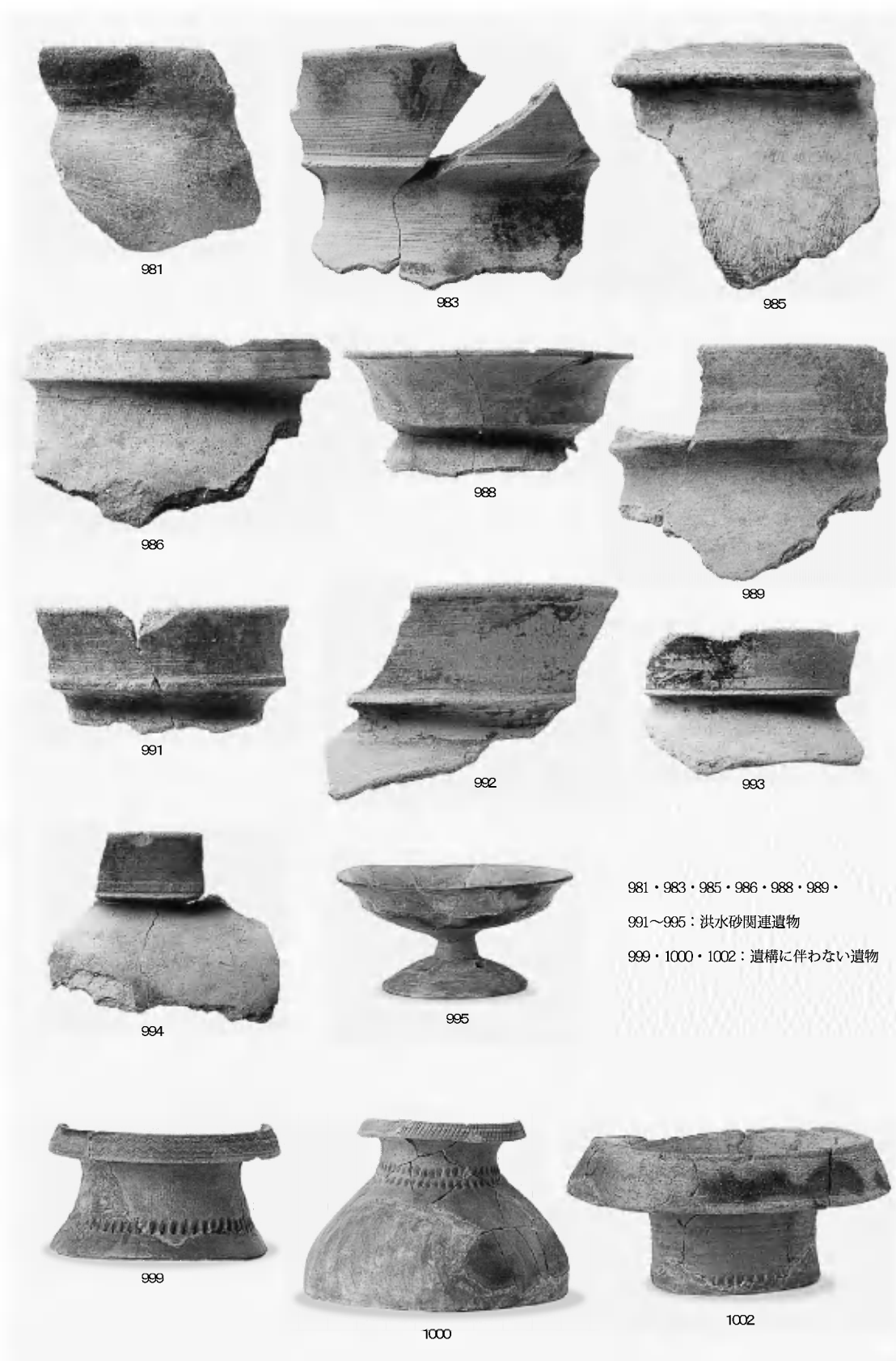


978

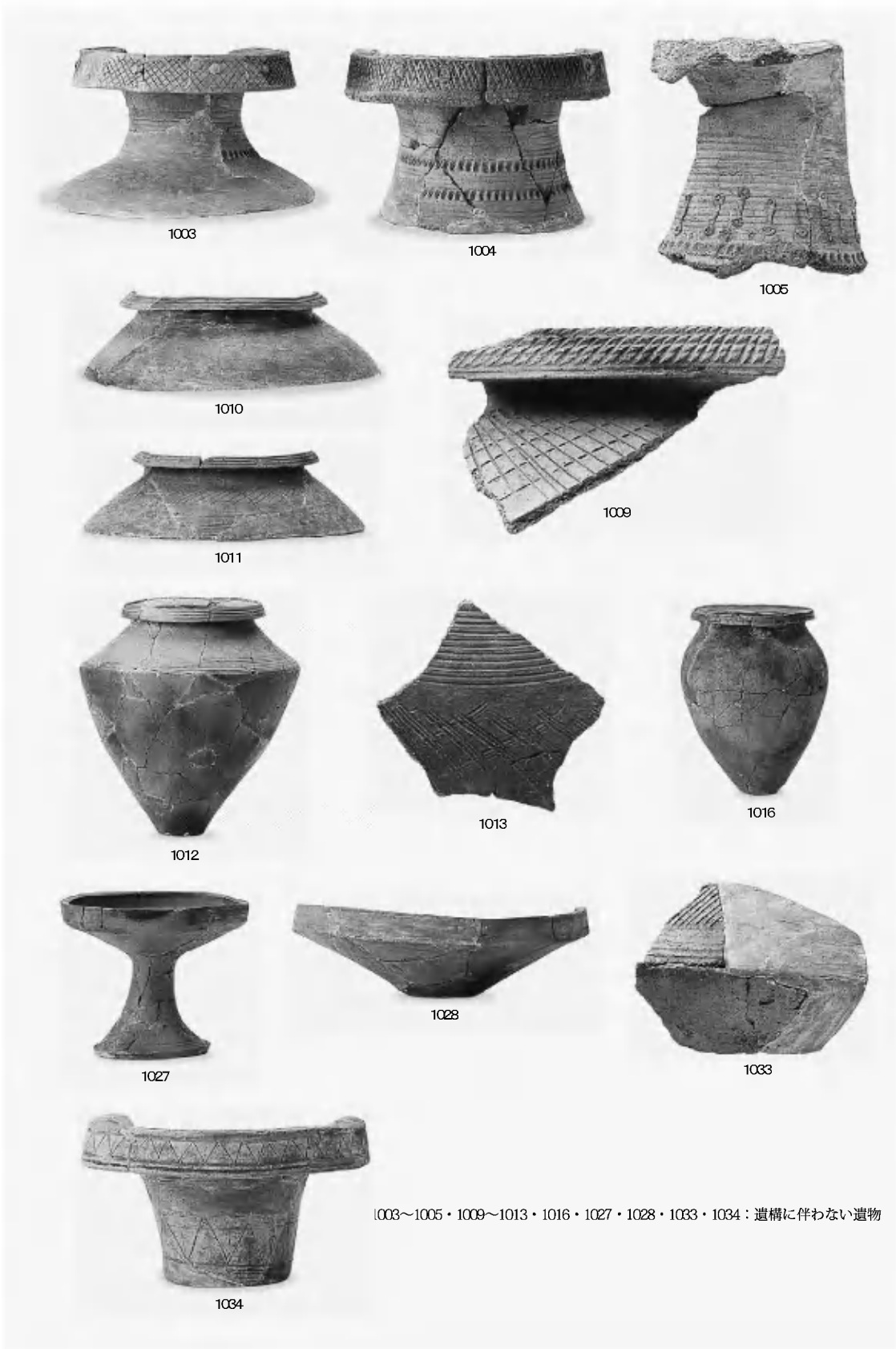


979

968~971・973・975：河道7下流部 976~978：河道8上流部 979：河道8下流部



出土土器⑧



1003

1004

1005

1010

1009

1011

1012

1013

1016

1027

1028

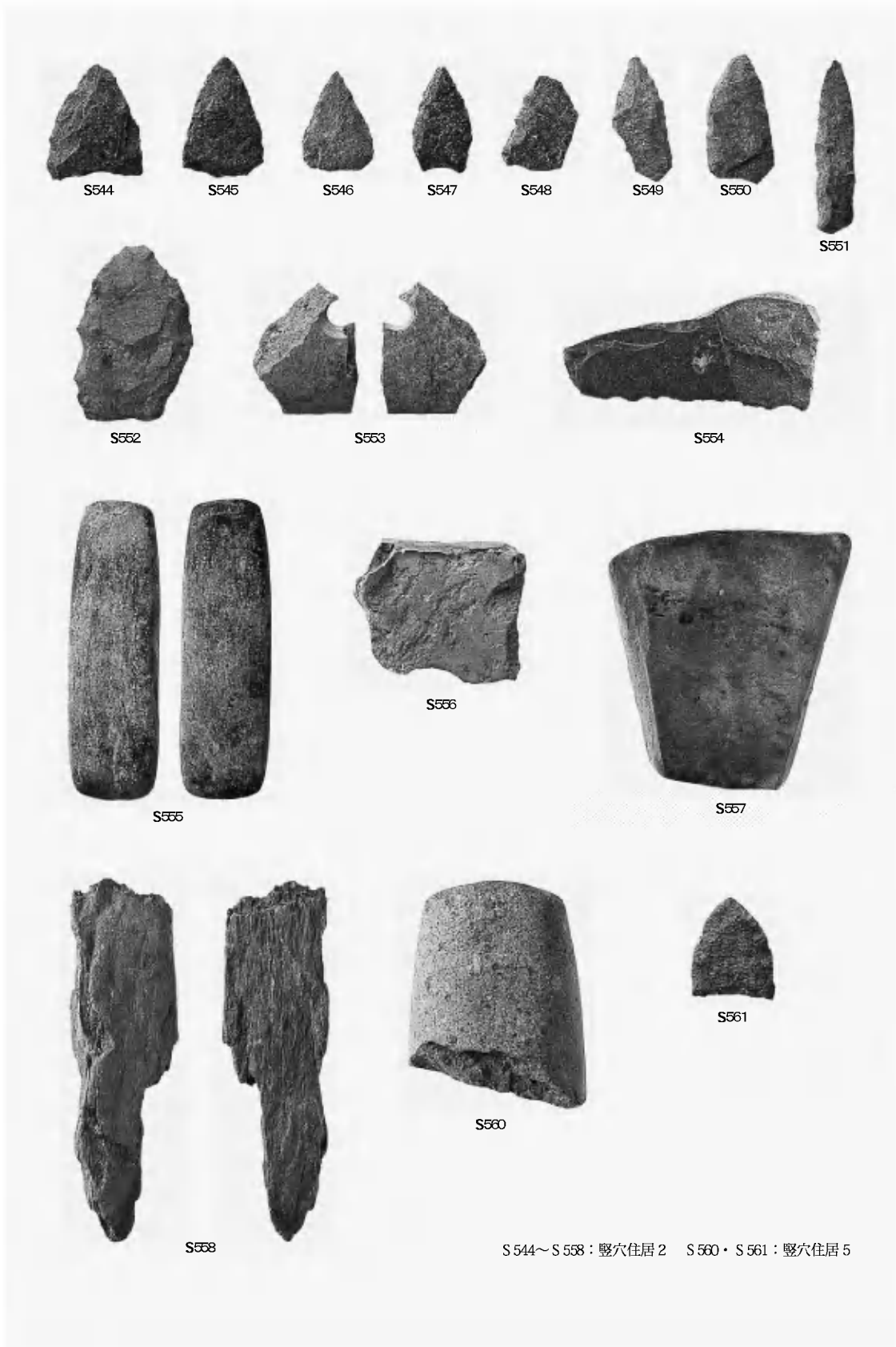
1033

1034

1003~1005・1009~1013・1016・1027・1028・1033・1034：遺構に伴わない遺物







S544

S545

S546

S547

S548

S549

S550

S551

S552

S553

S554

S555

S556

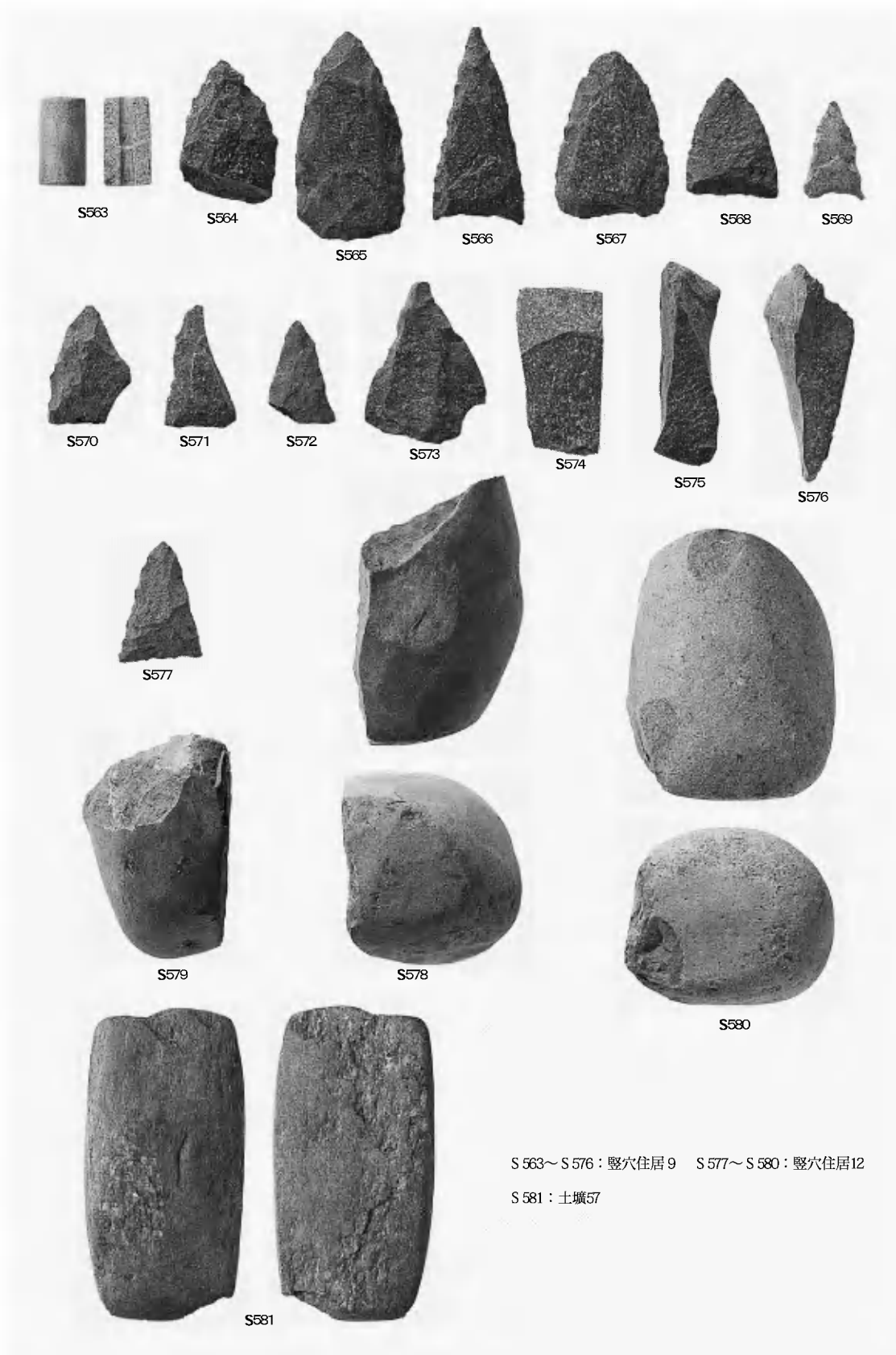
S557

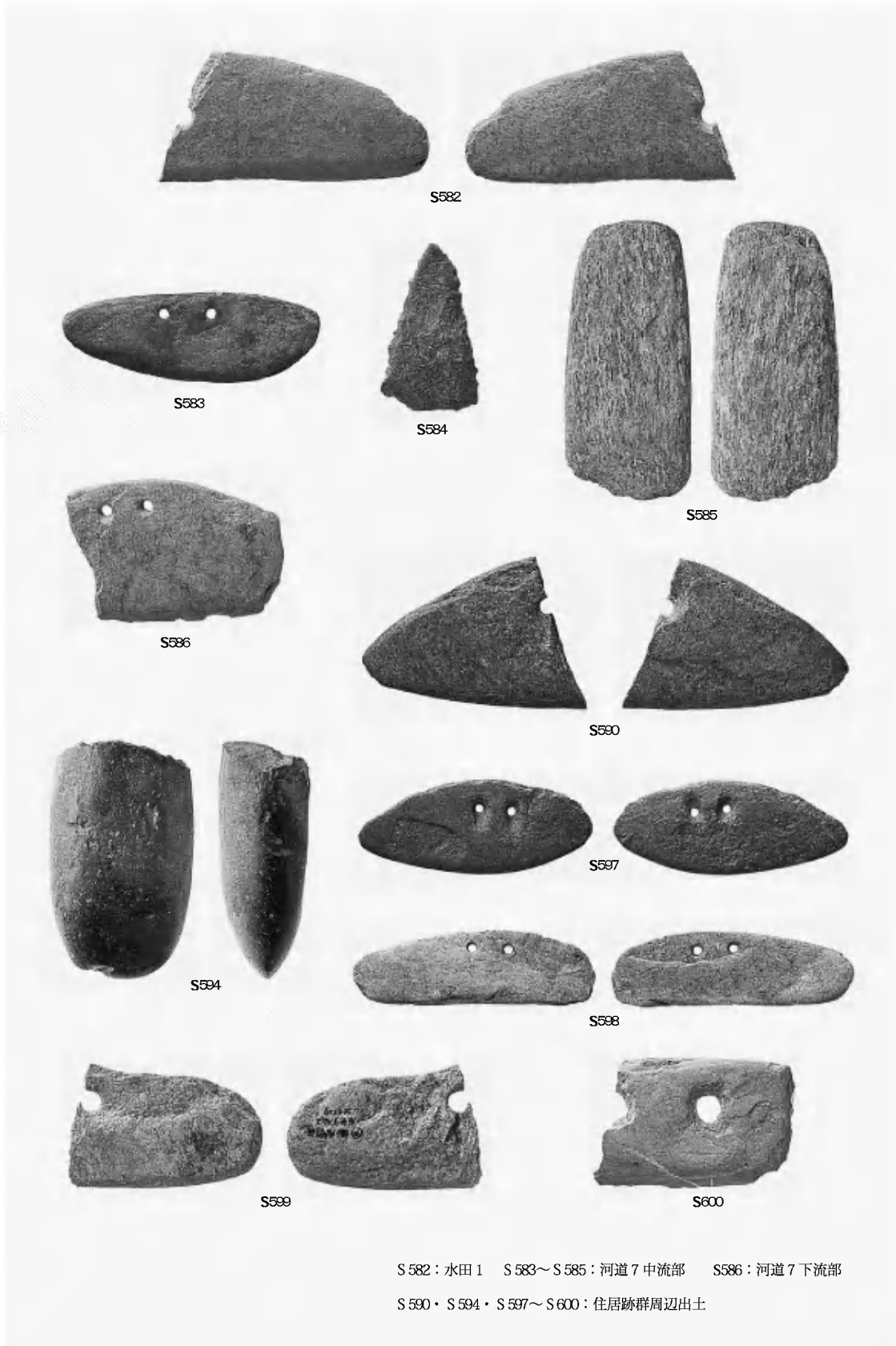
S558

S560

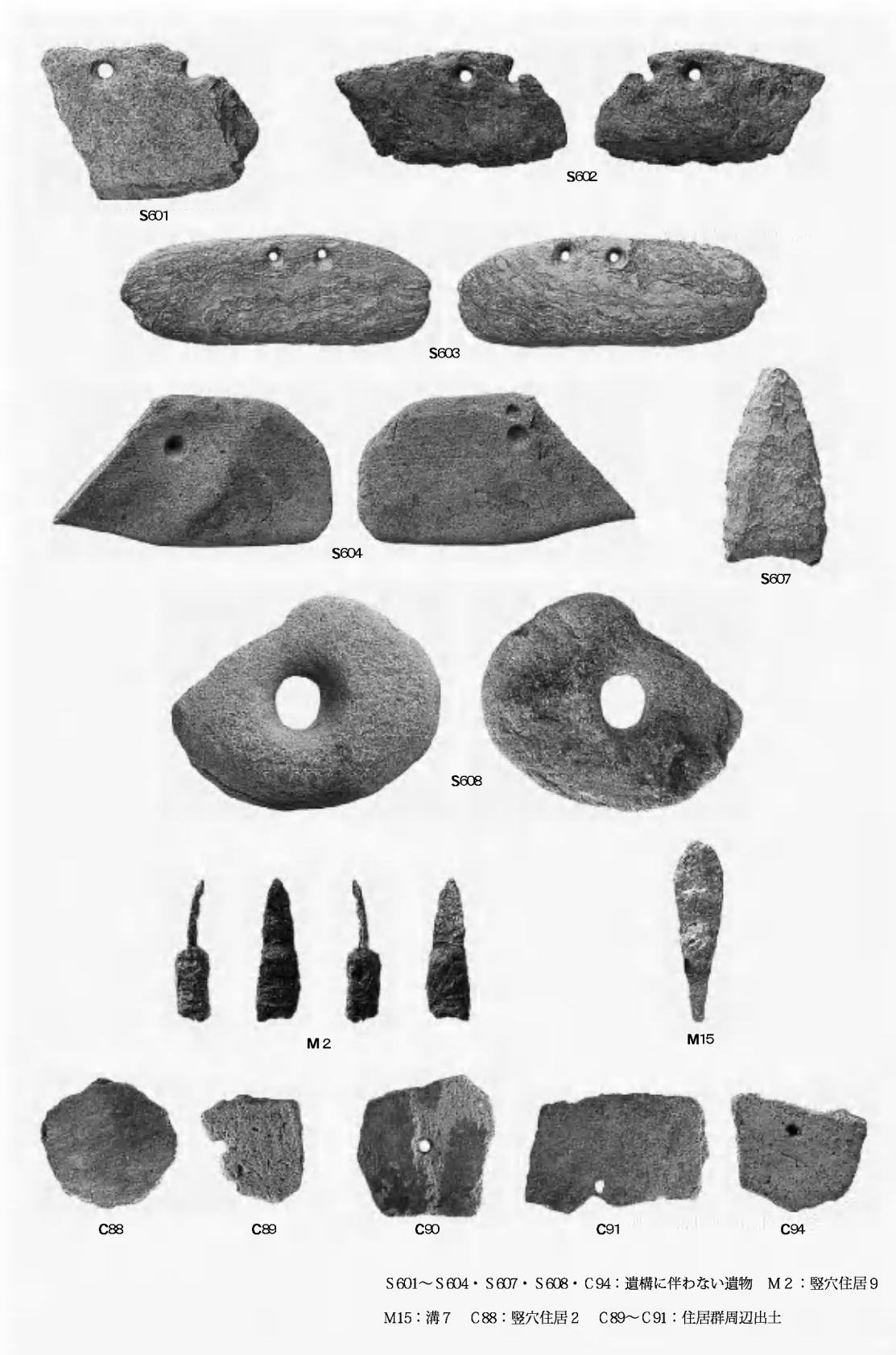
S561

S 544～S 558：竪穴住居 2 S 560・S 561：竪穴住居 5





出土石器③



S601～S604・S607・S608・C94：遺構に伴わない遺物 M2：竪穴住居9  
M15：溝7 C88：竪穴住居2 C89～C91：住居群周辺出土

1 竪穴住居14  
土器出土状況  
(東から)



2 竪穴住居14  
土器出土状況  
(南から)



3 竪穴住居14  
調査風景  
(北から)

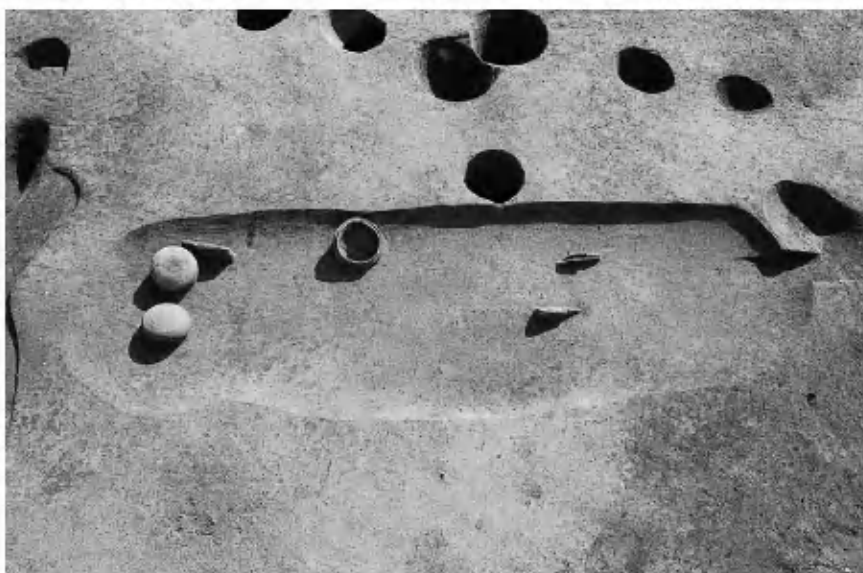




1 竪穴住居14  
完掘状況  
(西から)



2 土壙墓1  
調査風景  
(西から)

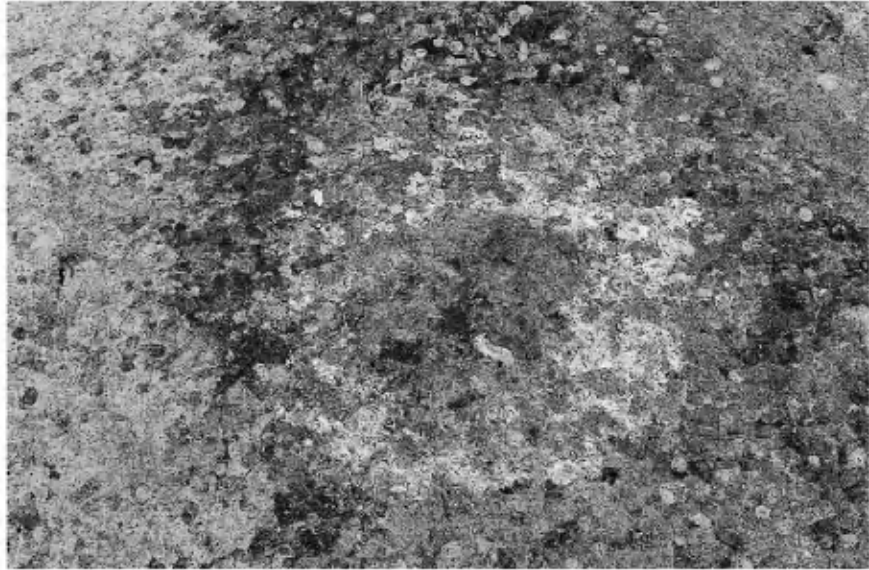


3 土壙墓1  
完掘状況  
(北から)

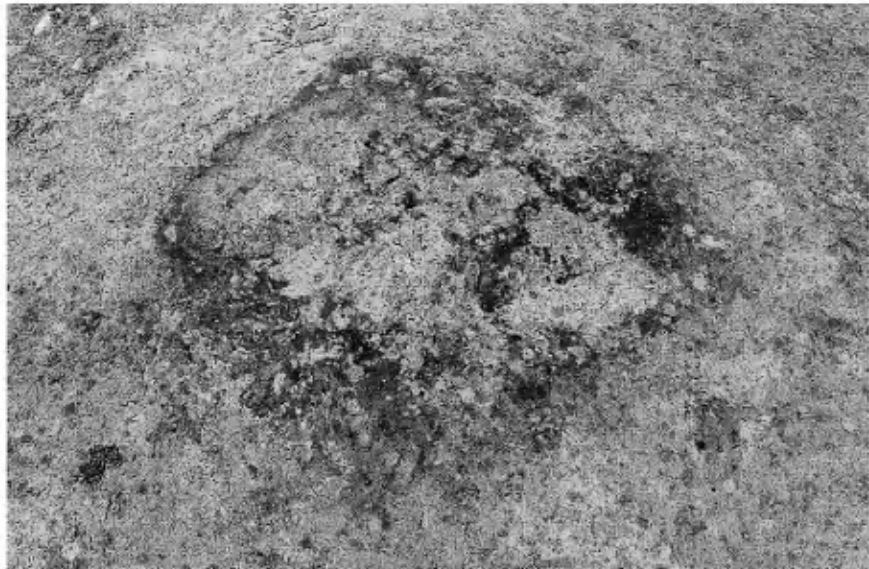
1 土壙89  
完掘状況  
(北西から)



2 火処76  
検出状況  
(西から)



3 火処77  
検出状況  
(南から)





1 土取り跡 1  
(南東から)



2 土取り跡 2  
調査風景  
(東から)



3 窪地 8  
(南から)





1067



1066



1068



1069



1070



1071



1072



1073



1074



1075



1077



1078



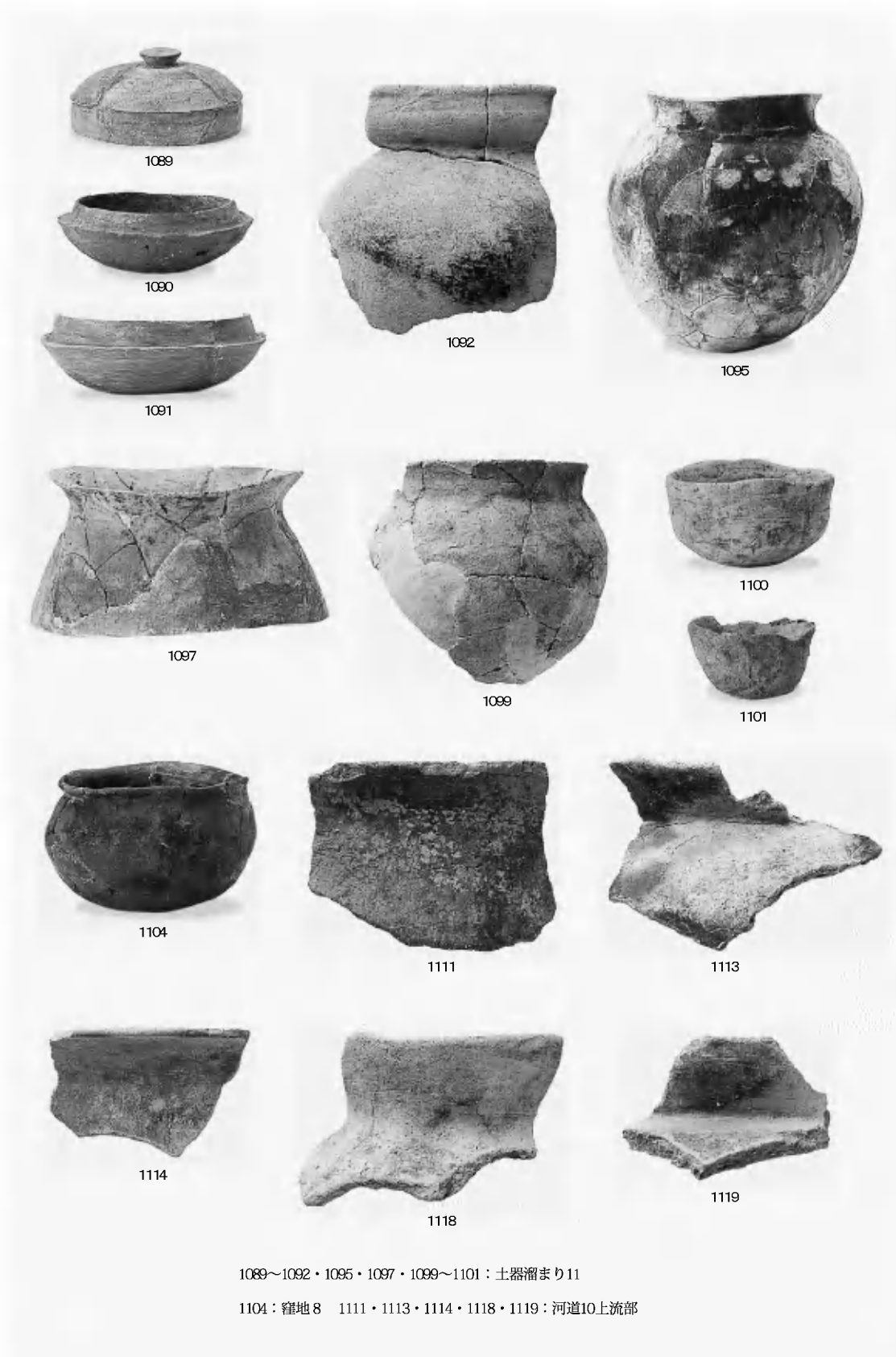
1084

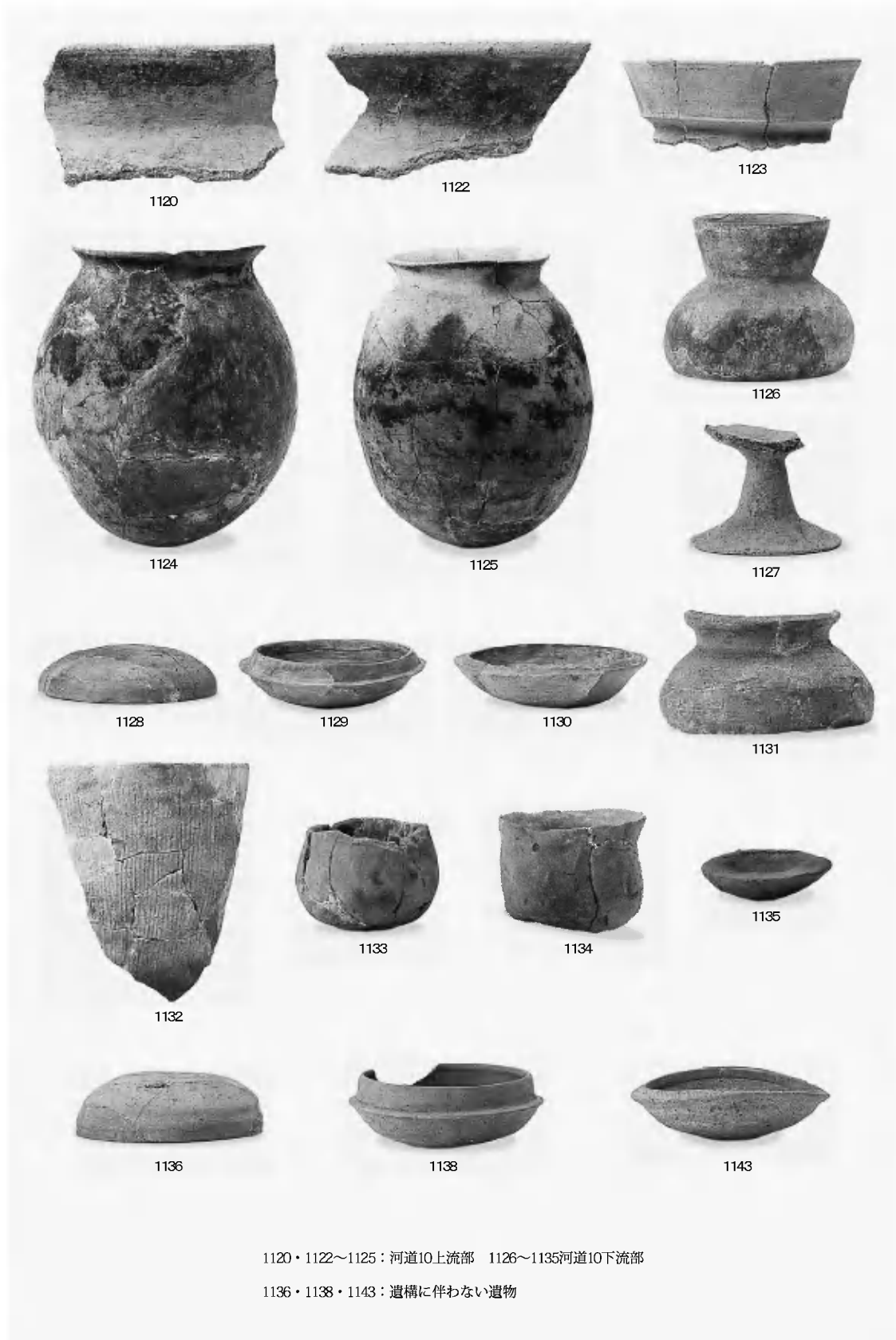


1085

1066~1068: 竪穴住居14 1069~1071: 墓1 1072: 土壙72 1073: 土壙83

1074・1075・1077・1078: 土壙87 1084: 土取り跡1 1085: 土取り跡2





出土土器③



1145



1147



1163



1164



1167



1165



1168



S609



S610



M16



M17



M18



M19

1145・1147・1163～1165・1167

・1168・S610・M29：遺構に伴わない遺物

S609・M22：窪地8

M16～M19：土塚墓1

M20：土塚84 M28・C95：河道10



M20



M22



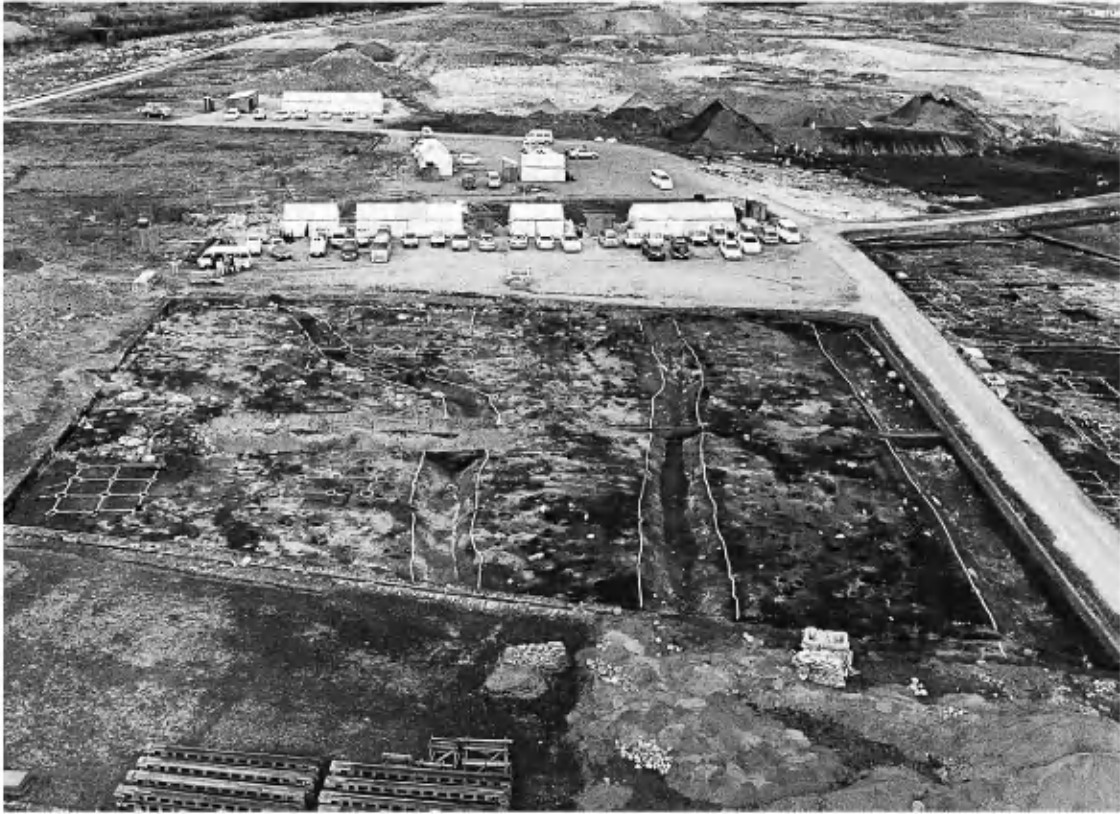
M28



M29



C95



1 居館北東部遺構群（航空写真）



2 居館南東隅遺構群（航空写真）



1 遺跡南東部遺構群  
(北半部)  
(航空写真)



2 遺跡南東部遺構群  
(南半部)  
(航空写真)



1 居館南東隅遺構群  
(航空写真)



2 居館外南部掘立柱建物群 (東から)

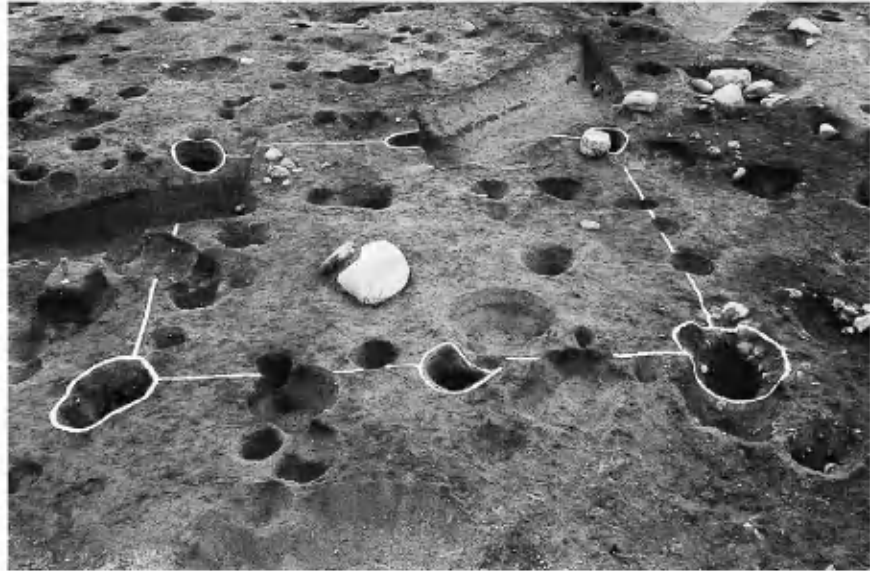


1 居館外屋敷地（南上空から）

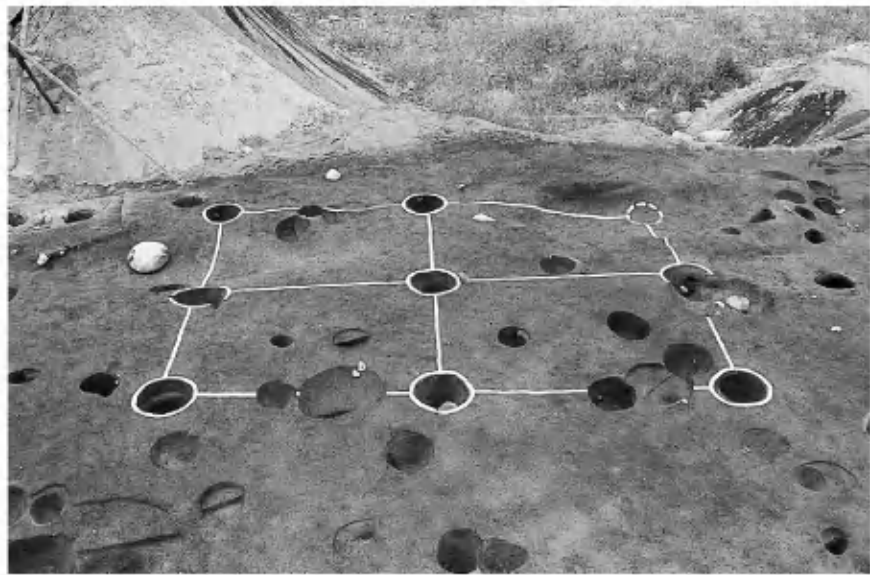


2 居館外屋敷地（北上空から）

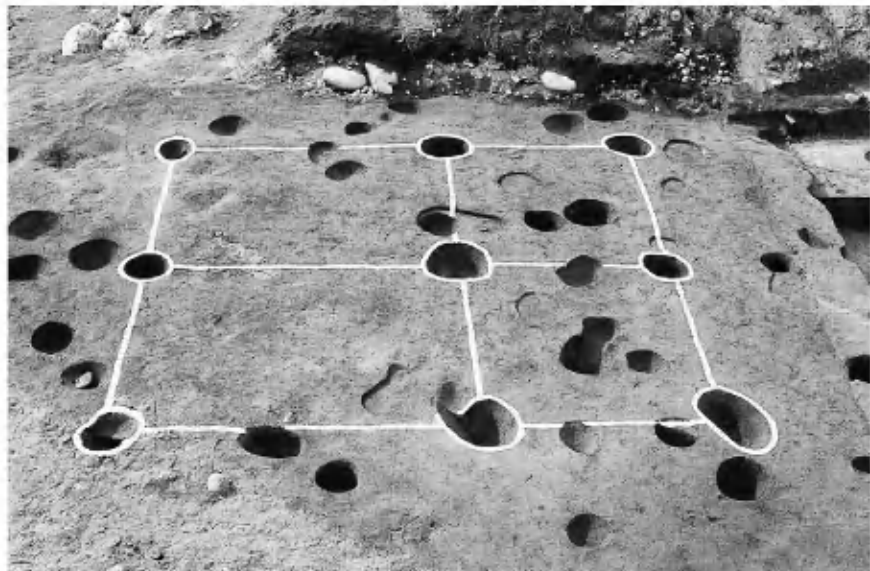




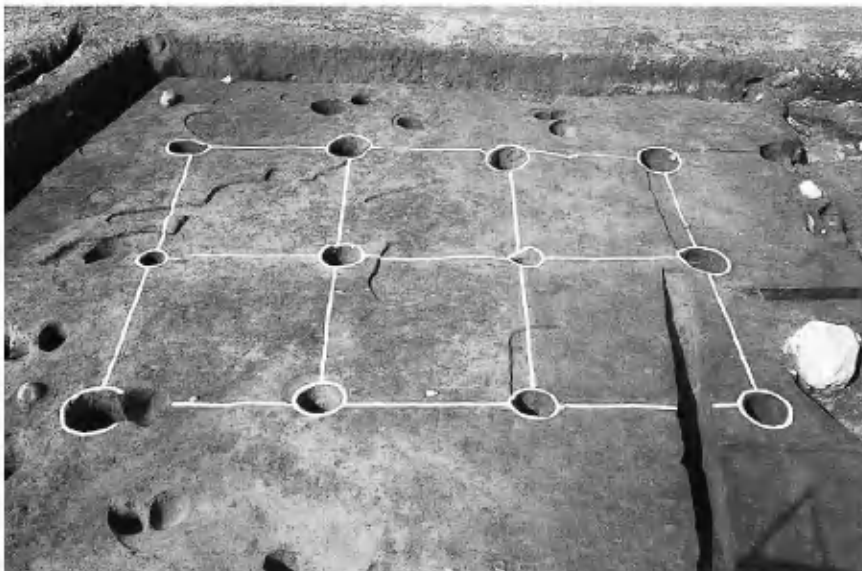
1 掘立柱建物3  
(西から)



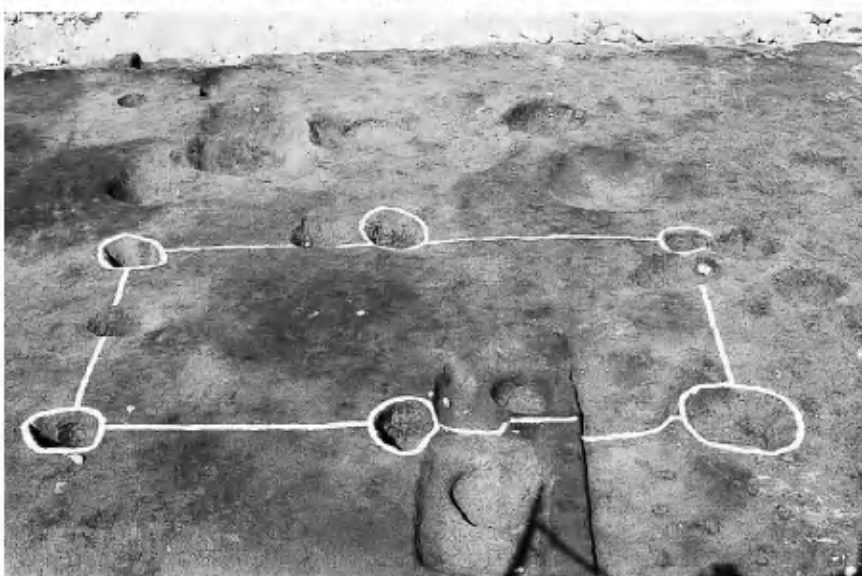
2 掘立柱建物4  
(東から)



3 掘立柱建物5  
(東から)



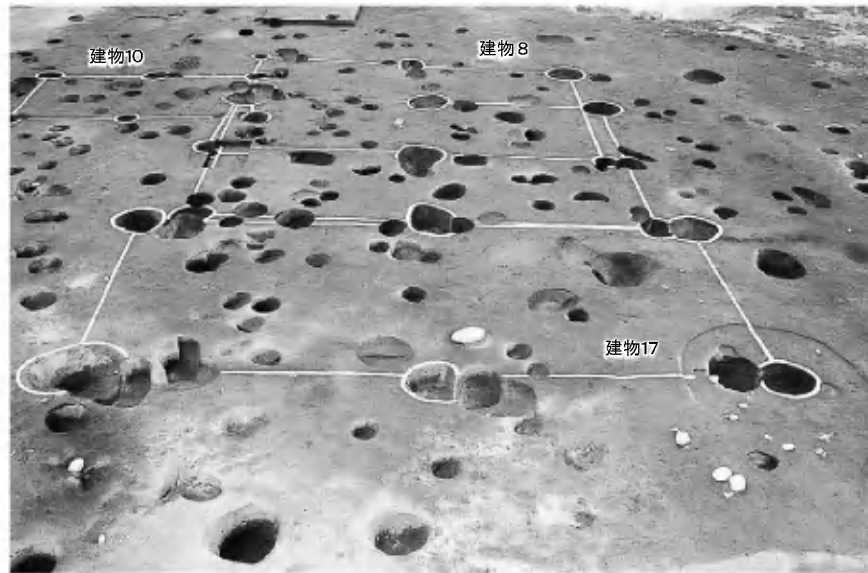
1 掘立柱建物6  
(東から)



2 掘立柱建物7  
(南から)



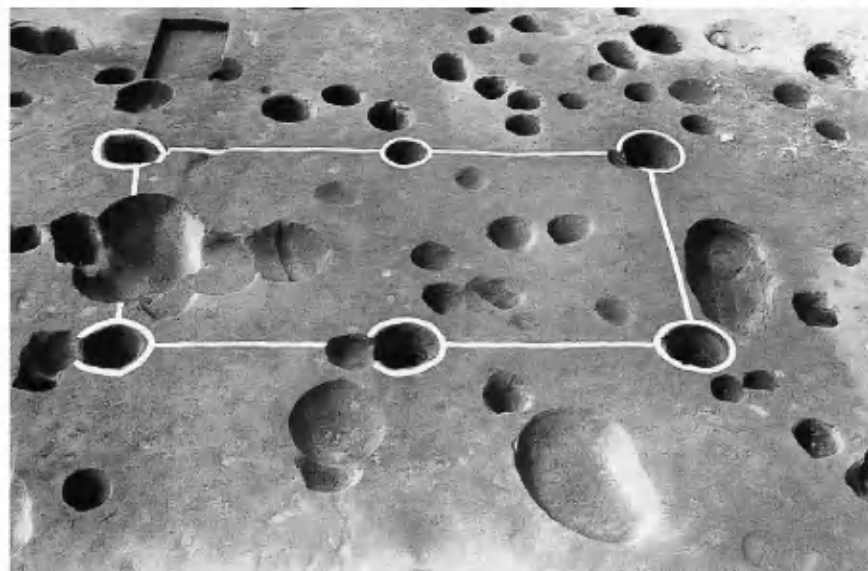
3 掘立柱建物8  
(北から)



1 掘立柱建物 8  
・ 10 ・ 17  
(南から)



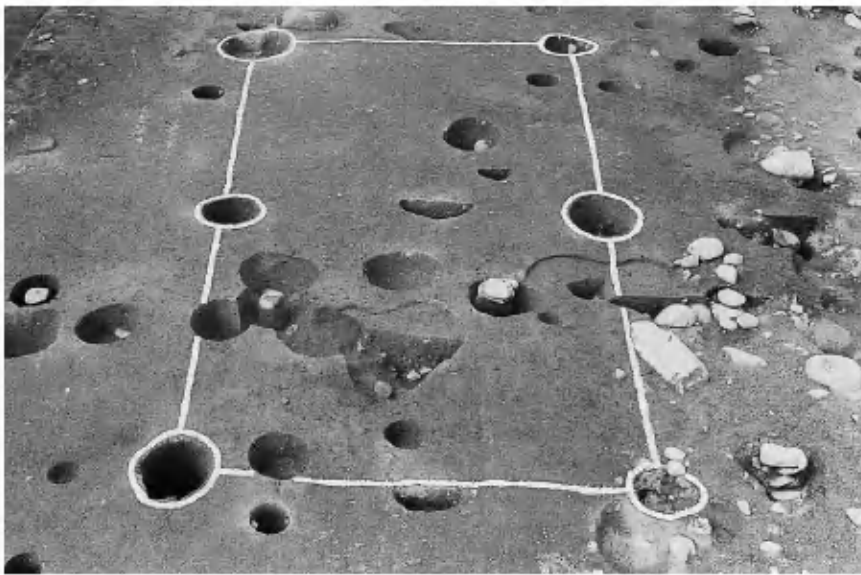
2 掘立柱建物 9  
(南から)



3 掘立柱建物 10  
(北から)



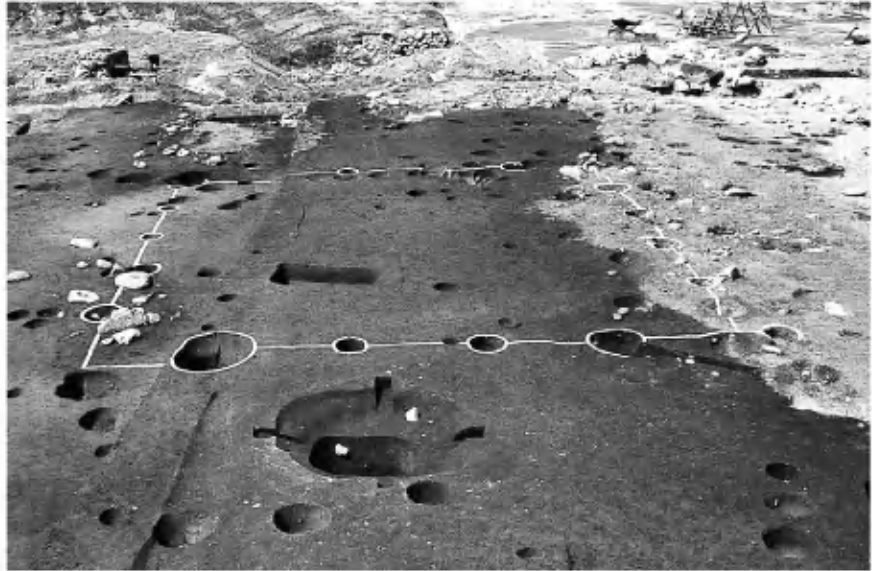
1 掘立柱建物11  
(東から)



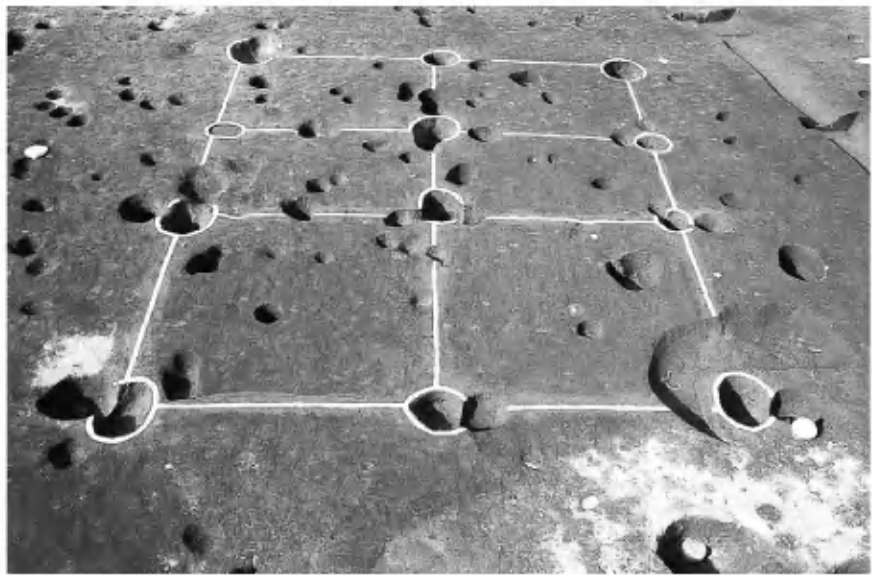
2 掘立柱建物12  
(南から)



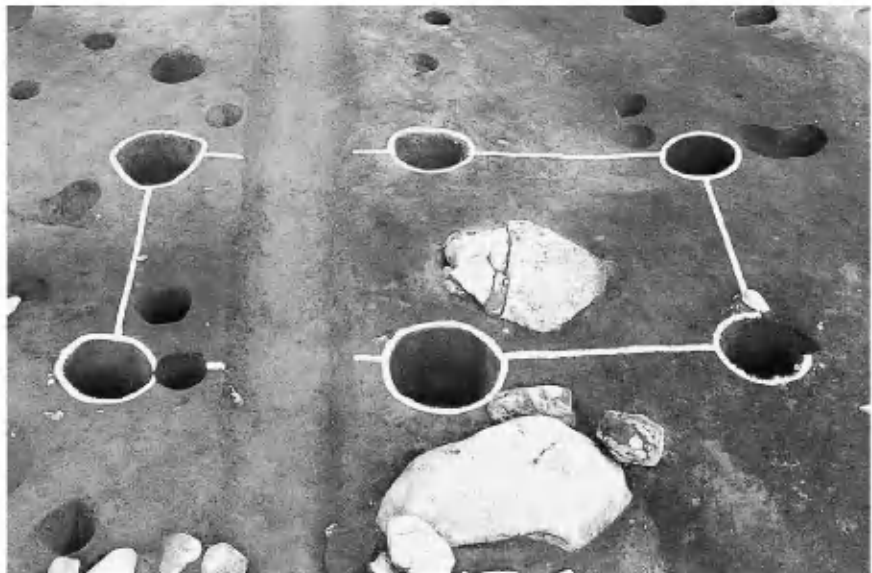
3 掘立柱建物14  
(東から)



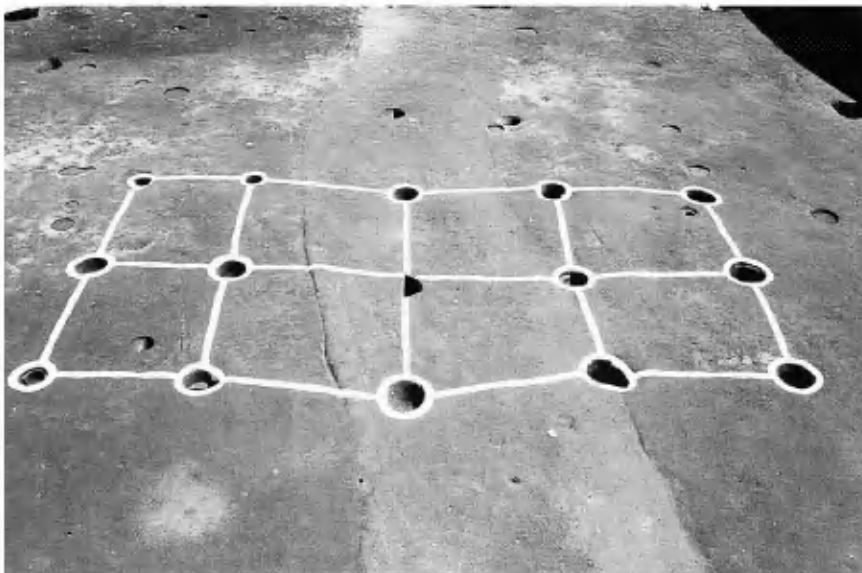
1 掘立柱建物16  
(南から)



2 掘立柱建物17  
(南から)



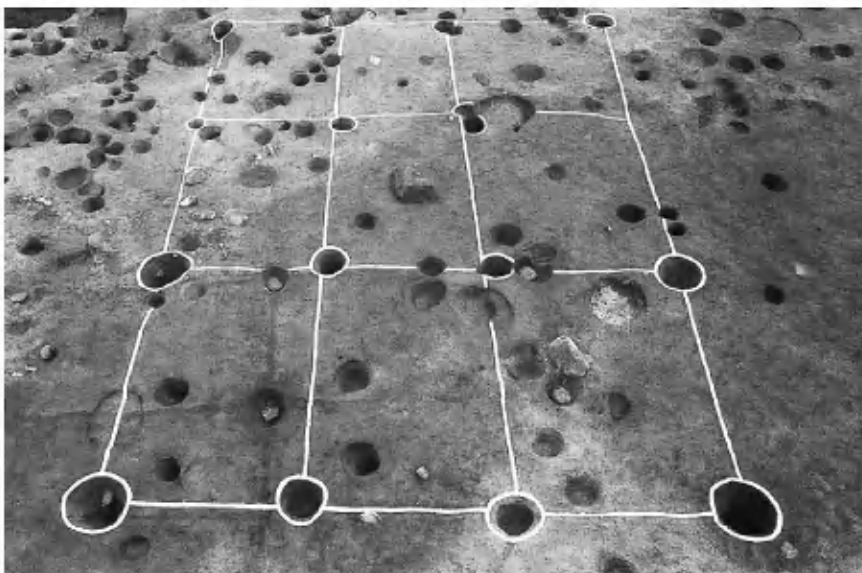
3 掘立柱建物18  
(西から)



1 掘立柱建物19  
(西から)

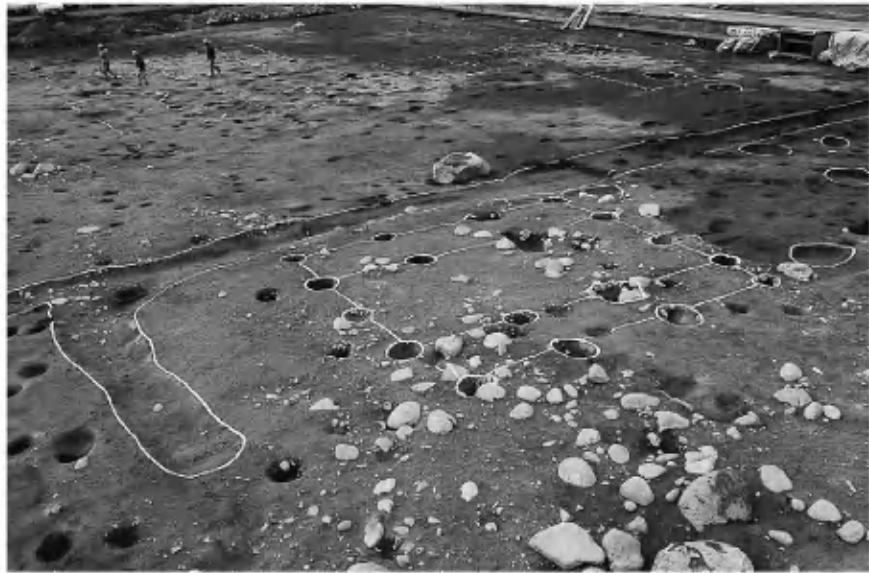


2 掘立柱建物20  
(南から)

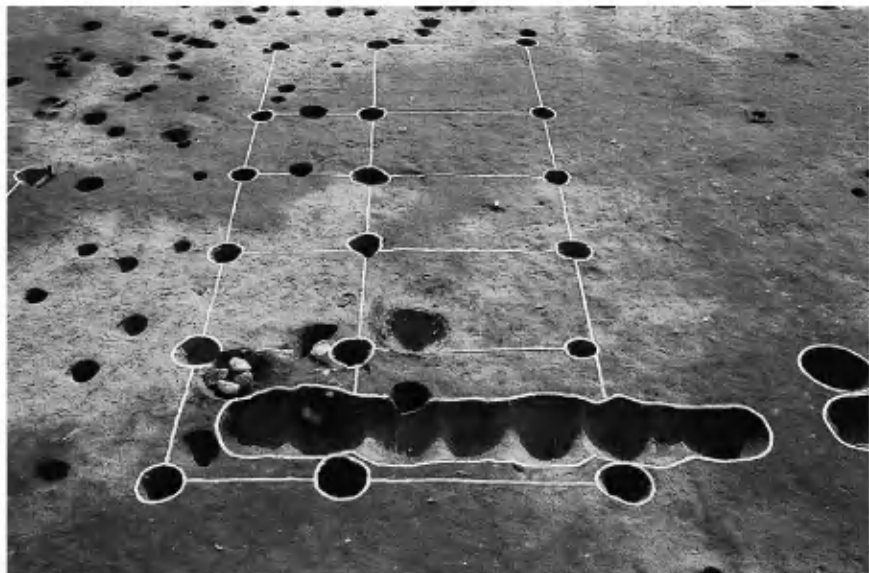


3 掘立柱建物24  
(西から)

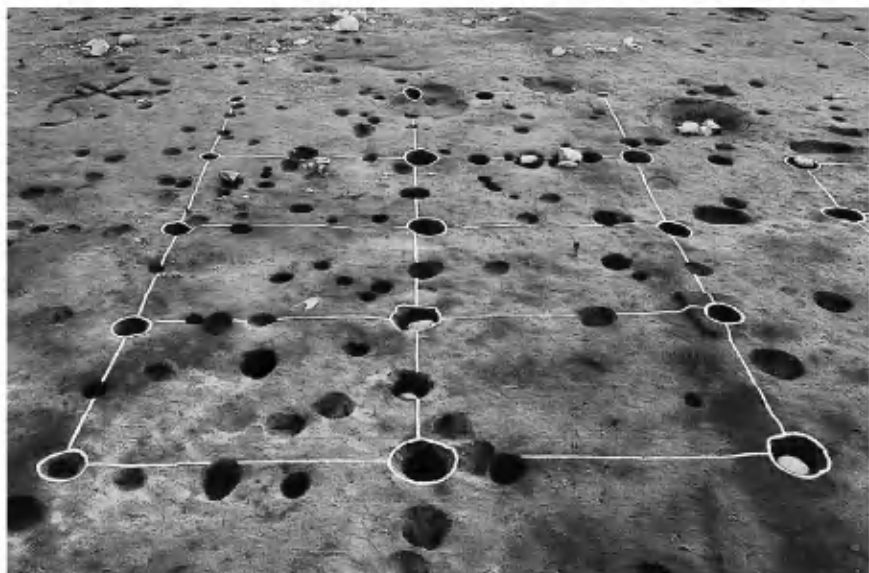
1 掘立柱建物26  
・溝31  
(北東から)

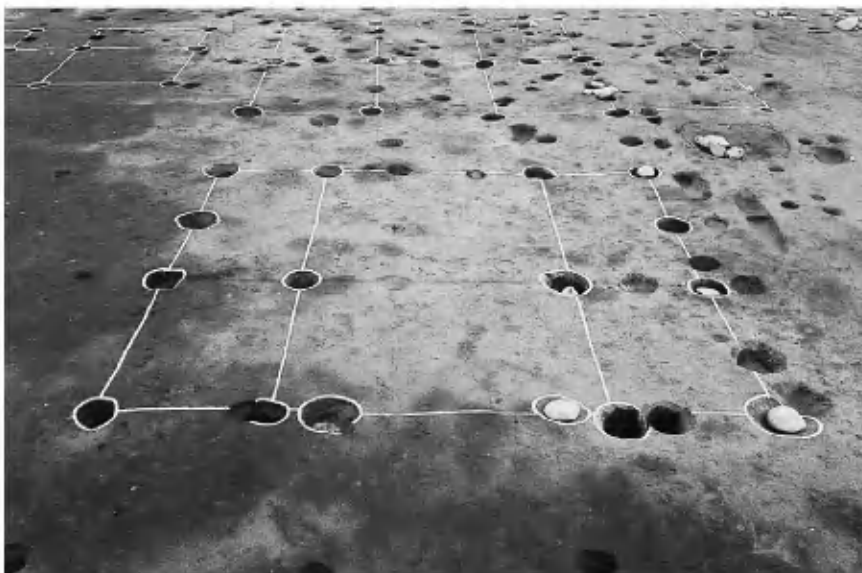


2 掘立柱建物27  
・埋甕遺構3  
(西から)

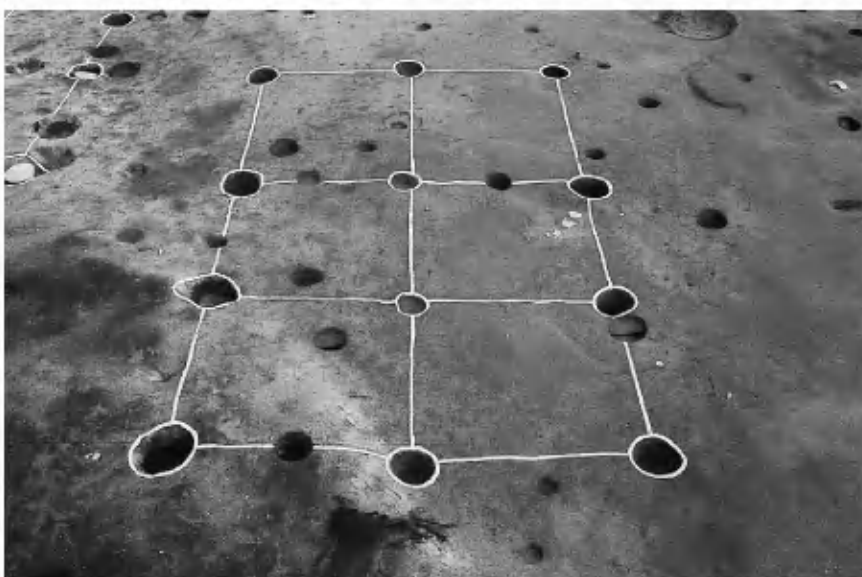


3 掘立柱建物28  
(西から)





1 掘立柱建物29  
(南から)



2 掘立柱建物30  
(南から)



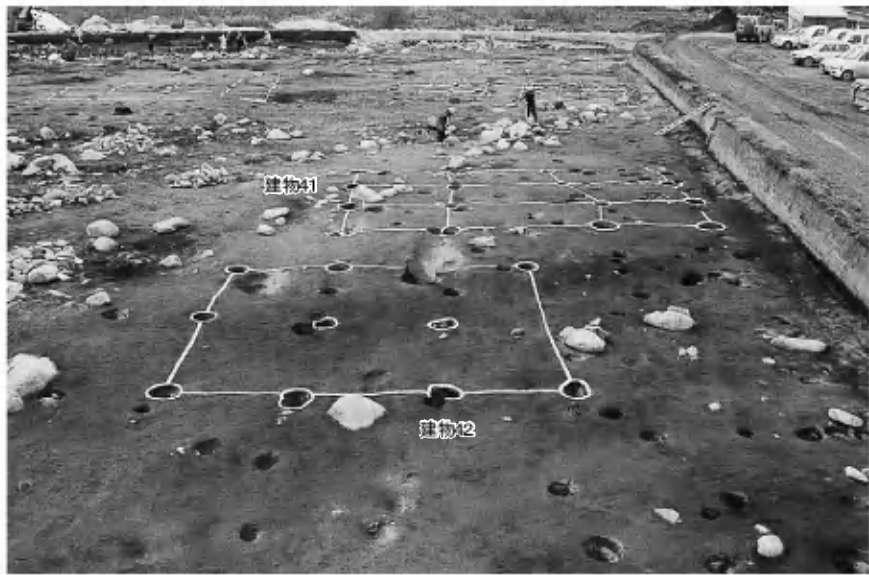
3 掘立柱建物36  
(北から)



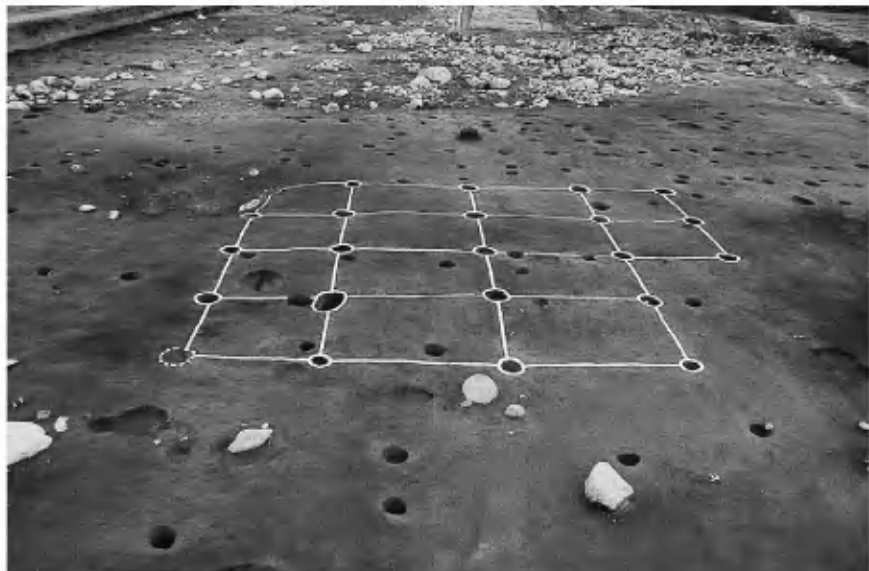
1 掘立柱建物37  
(西から)

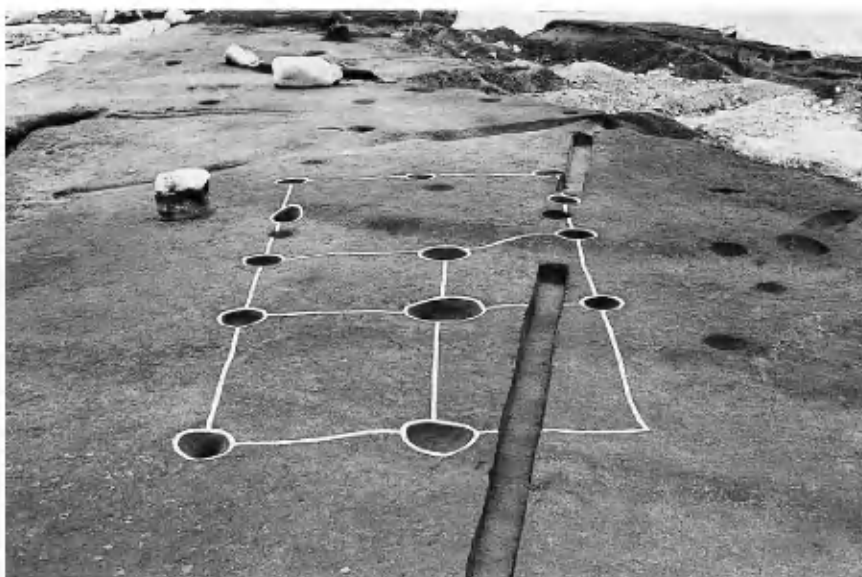


3 掘立柱建物41  
・42  
(東から)

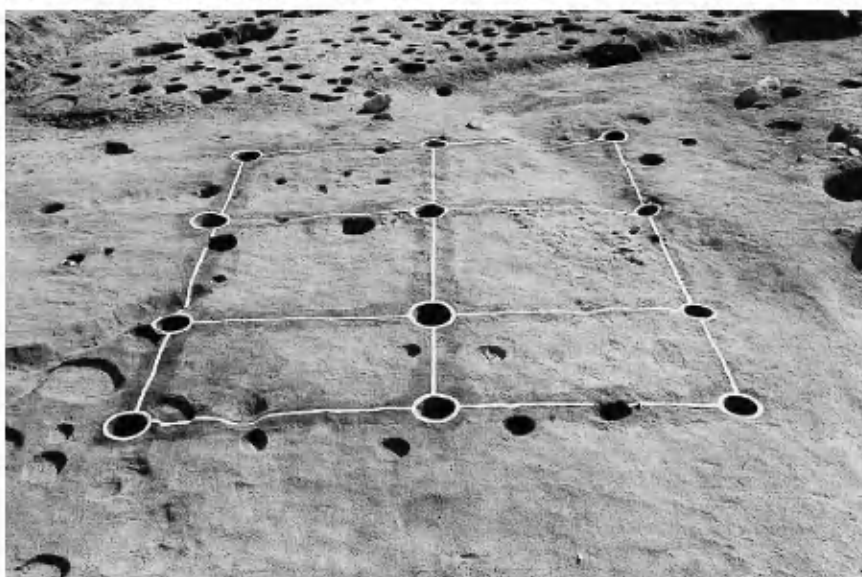


3 掘立柱建物43  
(西から)





1 掘立柱建物44  
(南から)

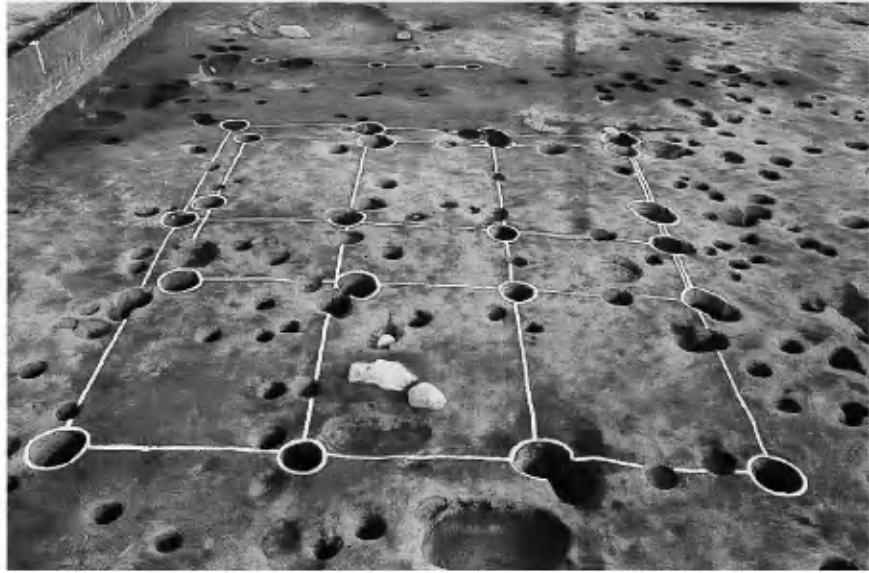


2 掘立柱建物45  
(北から)



3 掘立柱建物47  
(西から)

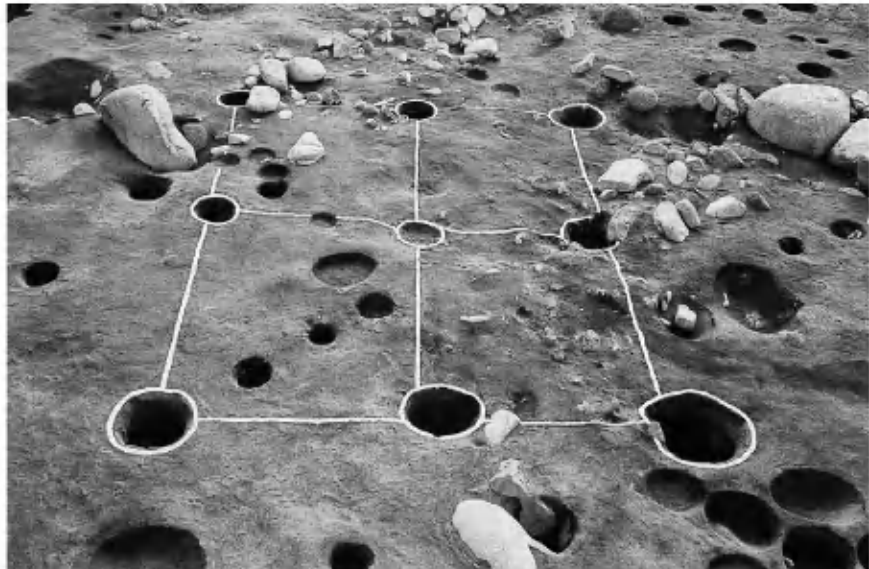
1 掘立柱建物48  
・ 49  
(西から)

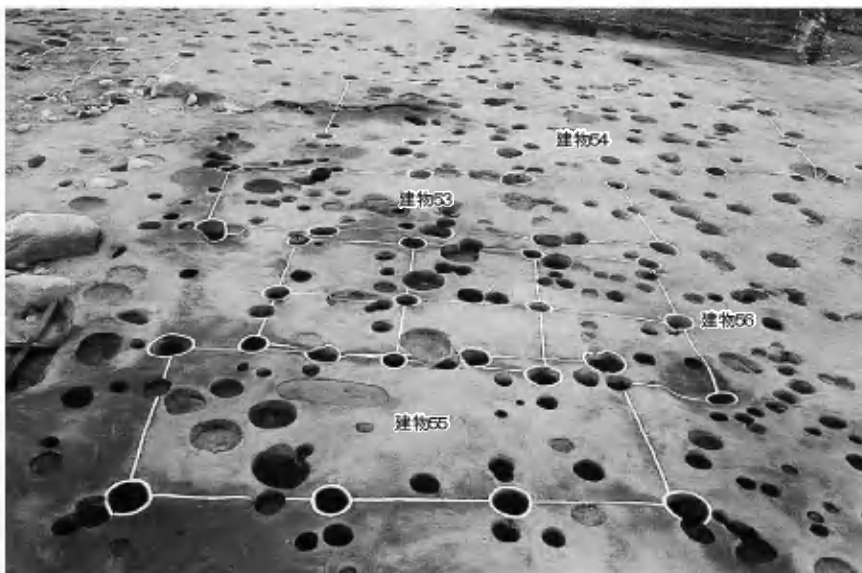


2 掘立柱建物50  
・ 51  
(西から)



3 掘立柱建物52  
(北から)

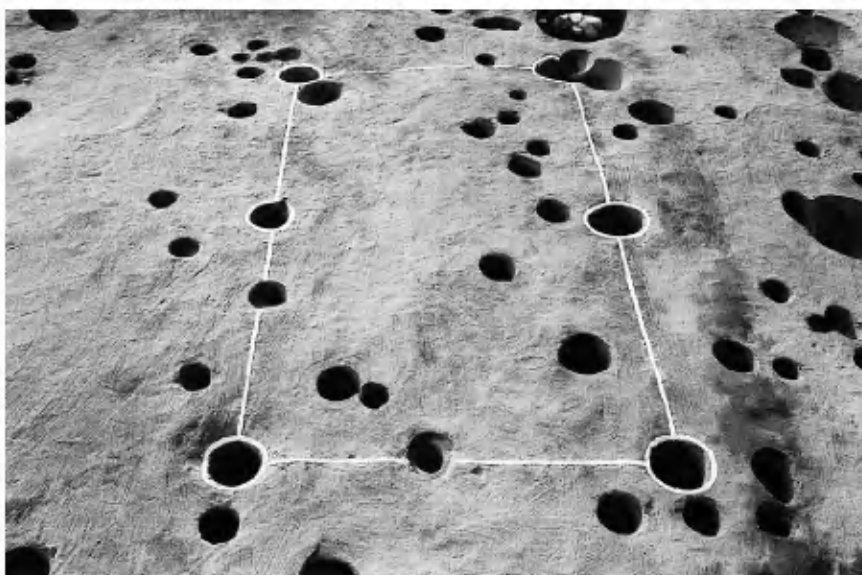




1 掘立柱建物52  
~56  
(南から)

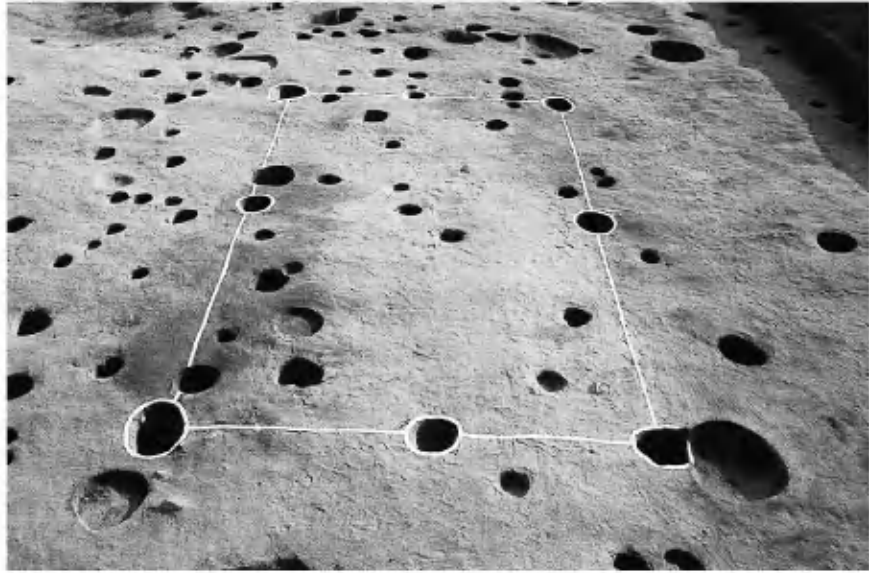


2 掘立柱建物57  
(北から)



3 掘立柱建物62  
(北から)

1 掘立柱建物67  
(東から)



2 竪穴遺構1  
(北から)



2 竪穴遺構1 屋内  
土壙遺物出土状況  
(西から)

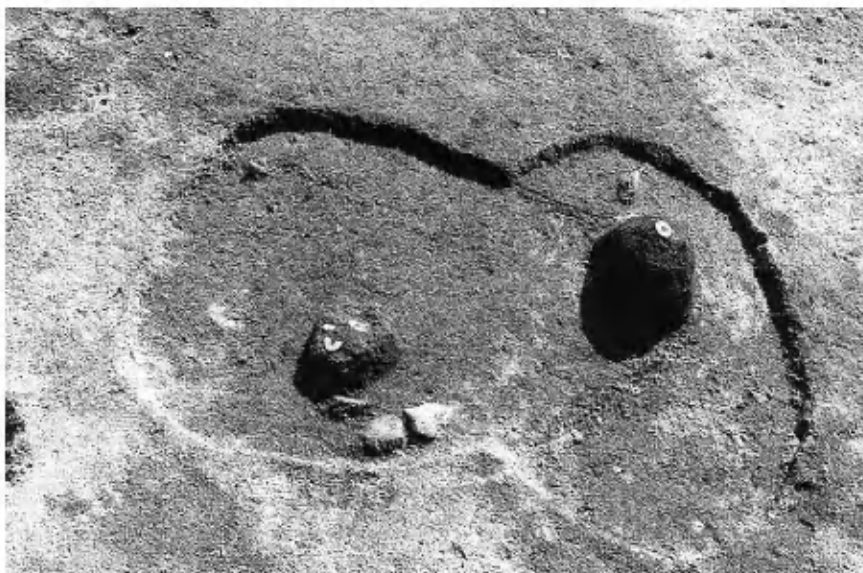




1 墓2  
(北から)



2 墓5  
(南から)



3 墓6  
(北から)

1 墓7  
(南から)



2 墓8  
(南から)



3 墓9  
(南から)





1 墓11  
(南から)



2 墓13  
(南から)



3 墓16  
漆塗り椀出土状況  
(北から)



1 墓17  
(北から)



2 墓21  
(南東から)



3 墓22  
(東から)





1 墓24  
(南から)



2 墓24鉄鍬  
出土状況  
(北から)



3 墓30  
(南から)

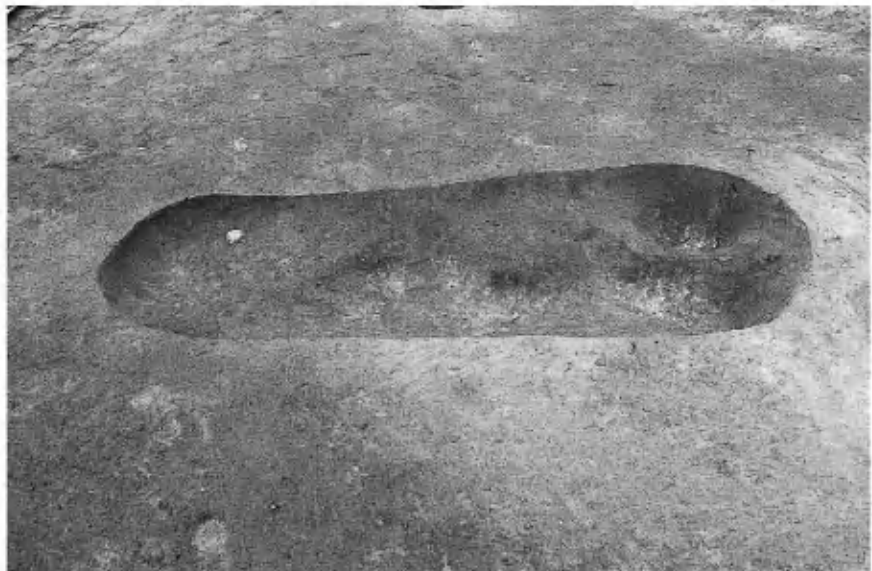
1 墓32  
(南から)



2 墓35  
(南から)



3 墓36  
(南東から)





1 焼成土壌 2  
(南から)



2 埋甕遺構 1  
(北から)

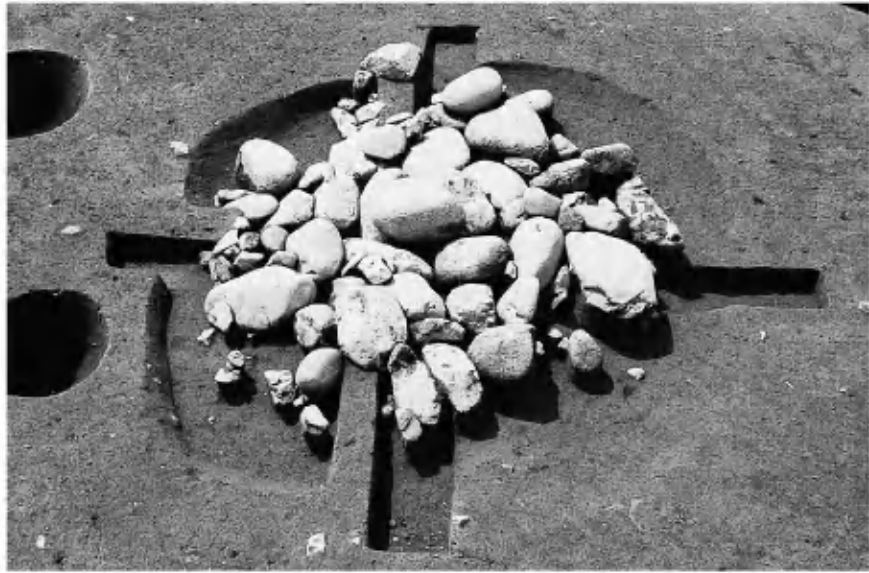


3 埋甕遺構 2  
(北から)

1 埋甕遺構 2  
完掘状況  
(北から)

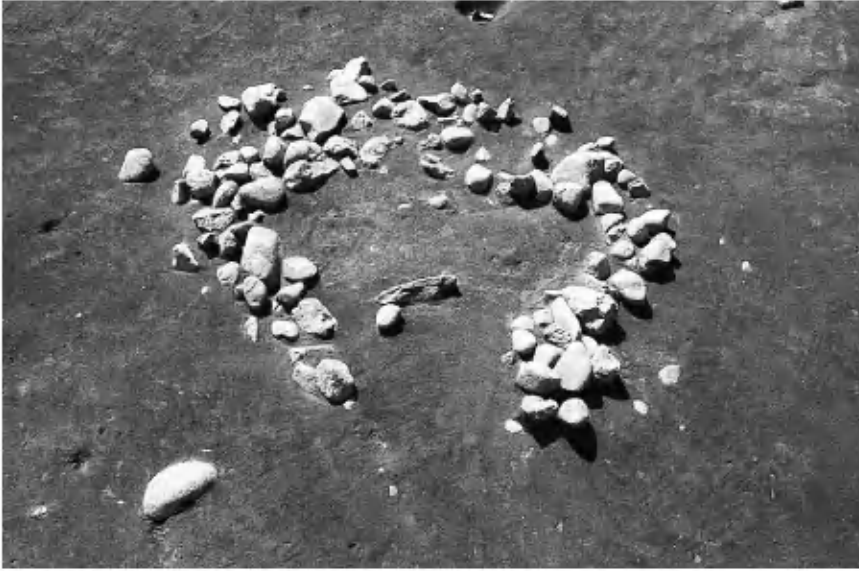


2 集石土壇 1  
検出状況  
(東から)



3 集石土壇 1  
完掘状況  
(南から)





1 集石遺構 2  
(北から)



2 石敷土壇 1  
(北から)



3 土壇91~99  
(西から)

1 土壙116  
(東から)



2 土壙119  
(北から)



3 土壙120  
(南から)

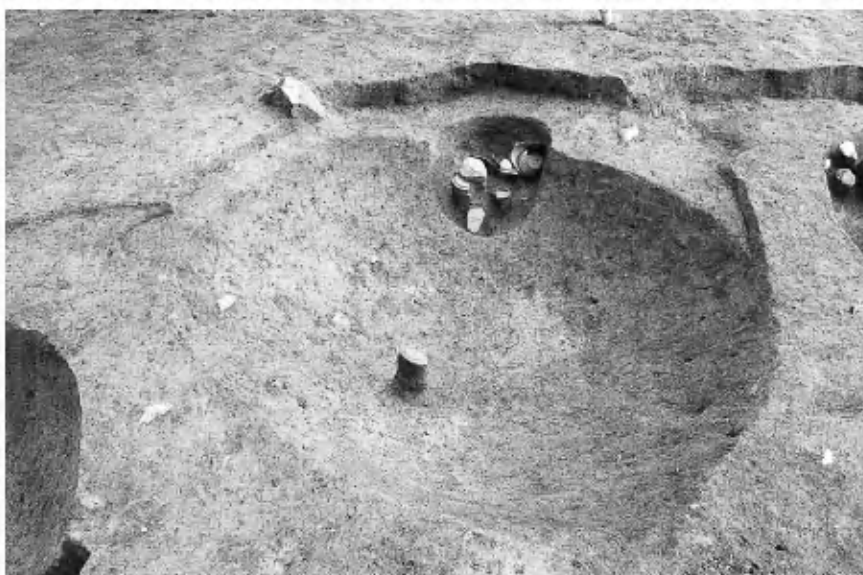




2 土壙125  
(北から)



2 土壙126  
(北から)



3 土壙129  
(南から)



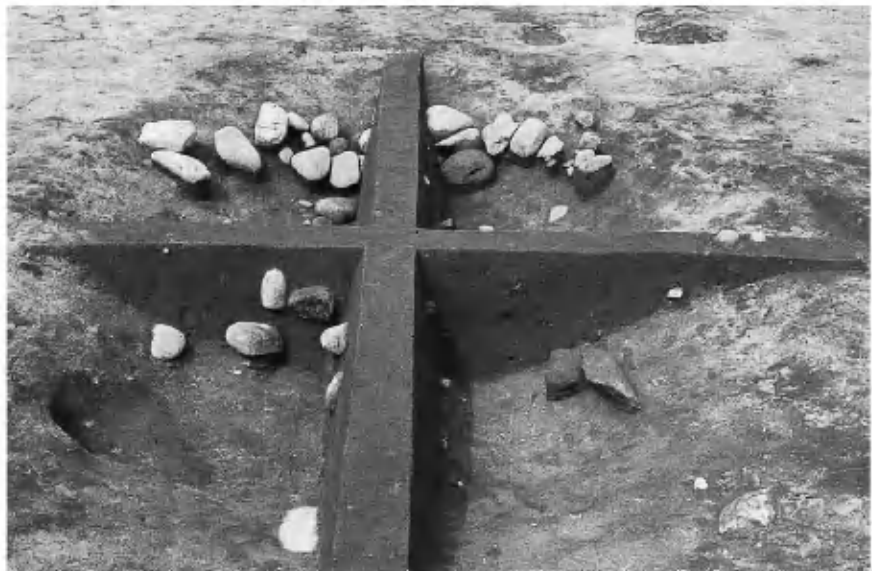
1 土壙129内柱穴  
(西から)

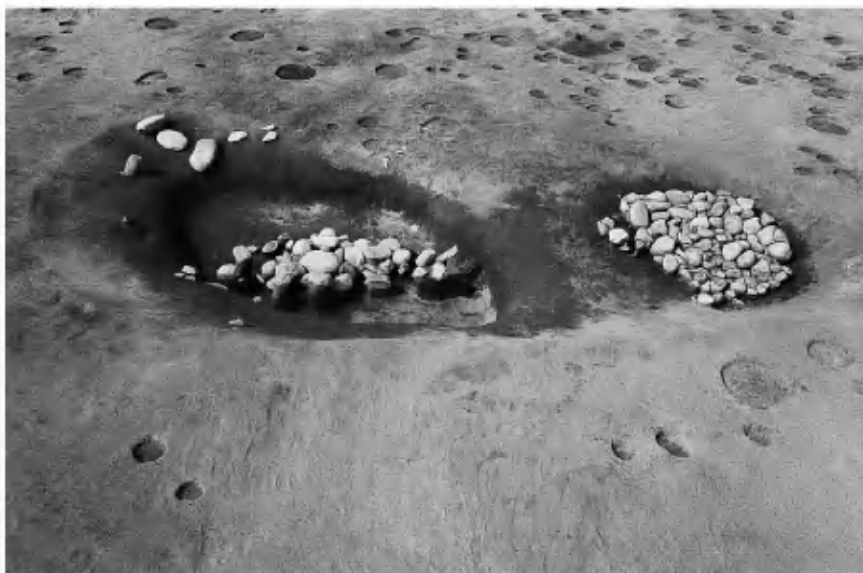


2 土壙131  
(南から)



3 土壙176  
(南から)





1 土壙182  
(東から)



2 土壙201  
(西から)

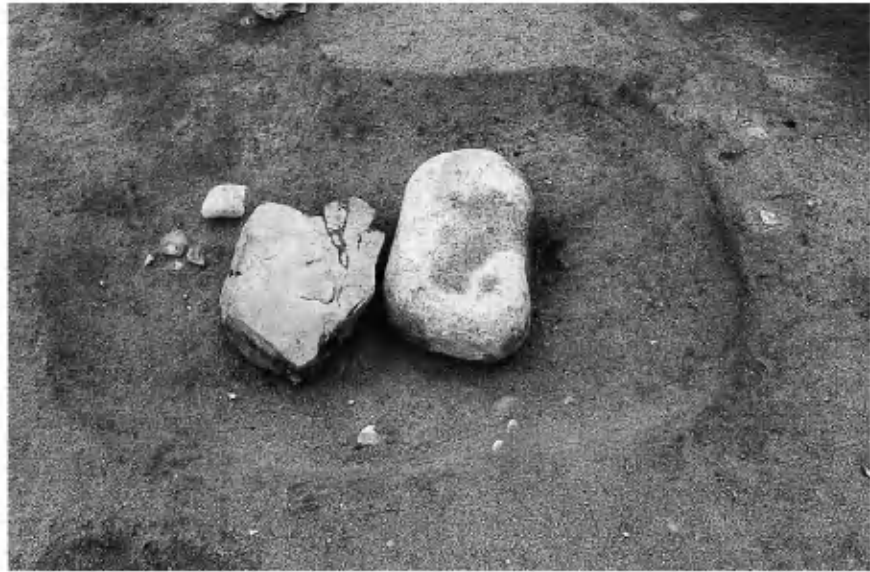


3 土壙214  
(西から)

1 土壙215  
遺物出土状況  
(東から)



2 土壙215  
(東から)



3 土壙217  
(北から)





1 土壇219  
(南西から)



2 土壇225・溝51  
(南から)



3 堀1北辺  
土層断面  
(西から)

1 堀1東辺  
土層断面  
(南から)

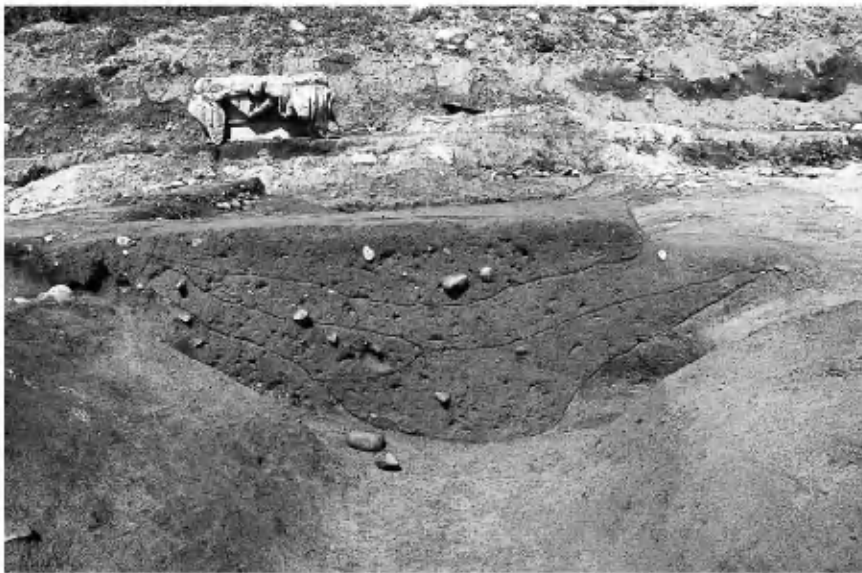


2 堀1南辺  
土層断面  
(東から)



3 堀2東辺  
土層断面  
(北から)





1 堀2南辺  
土層断面  
(東から)



2 堀3北辺  
西端  
(東から)



3 堀3北辺石積  
・土層断面  
(東から)

1 堀3東辺  
土層断面  
(南から)



2 堀3南辺  
土層断面  
(東から)



3 堀3南辺  
土層断面  
(東から)





1 堀3南辺  
完掘状況  
(東から)



2 堀1～3南辺  
(東から)



3 居館南西端部  
(南から)



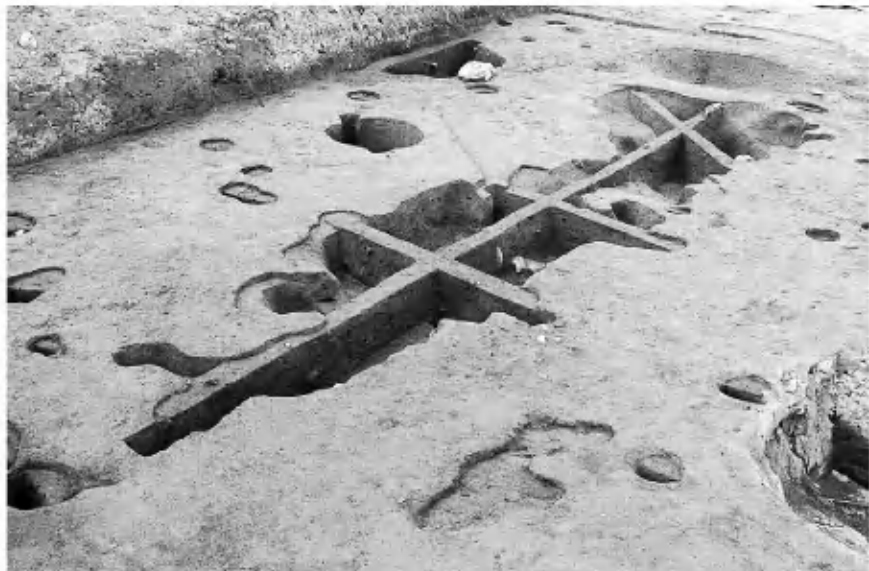
1 堀4  
土層断面  
(東から)



2 溝22  
土層断面  
(北から)



3 溝33  
(南西から)





1 火処78  
(南から)



2 土器溜まり12  
(西から)

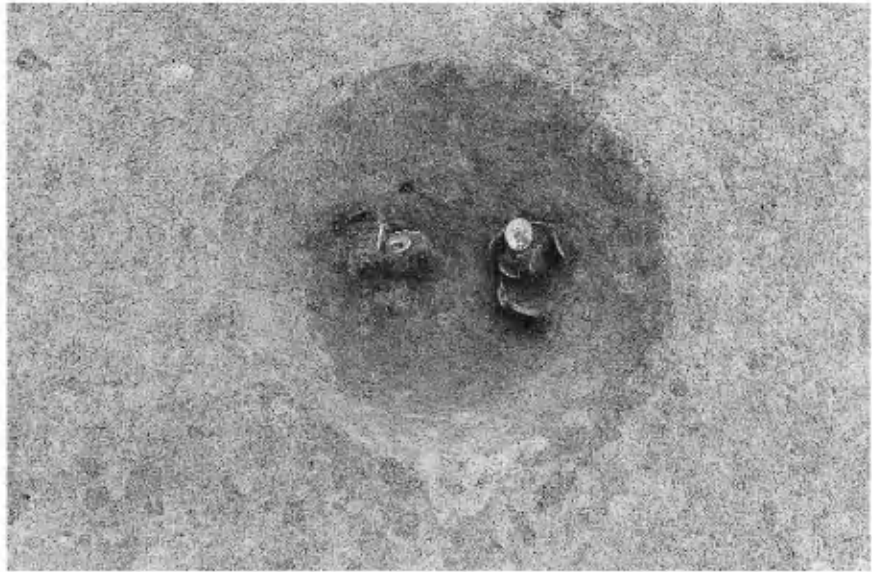


3 土器溜まり17  
(南から)

1 柱穴14  
遺物出土状況  
(南から)

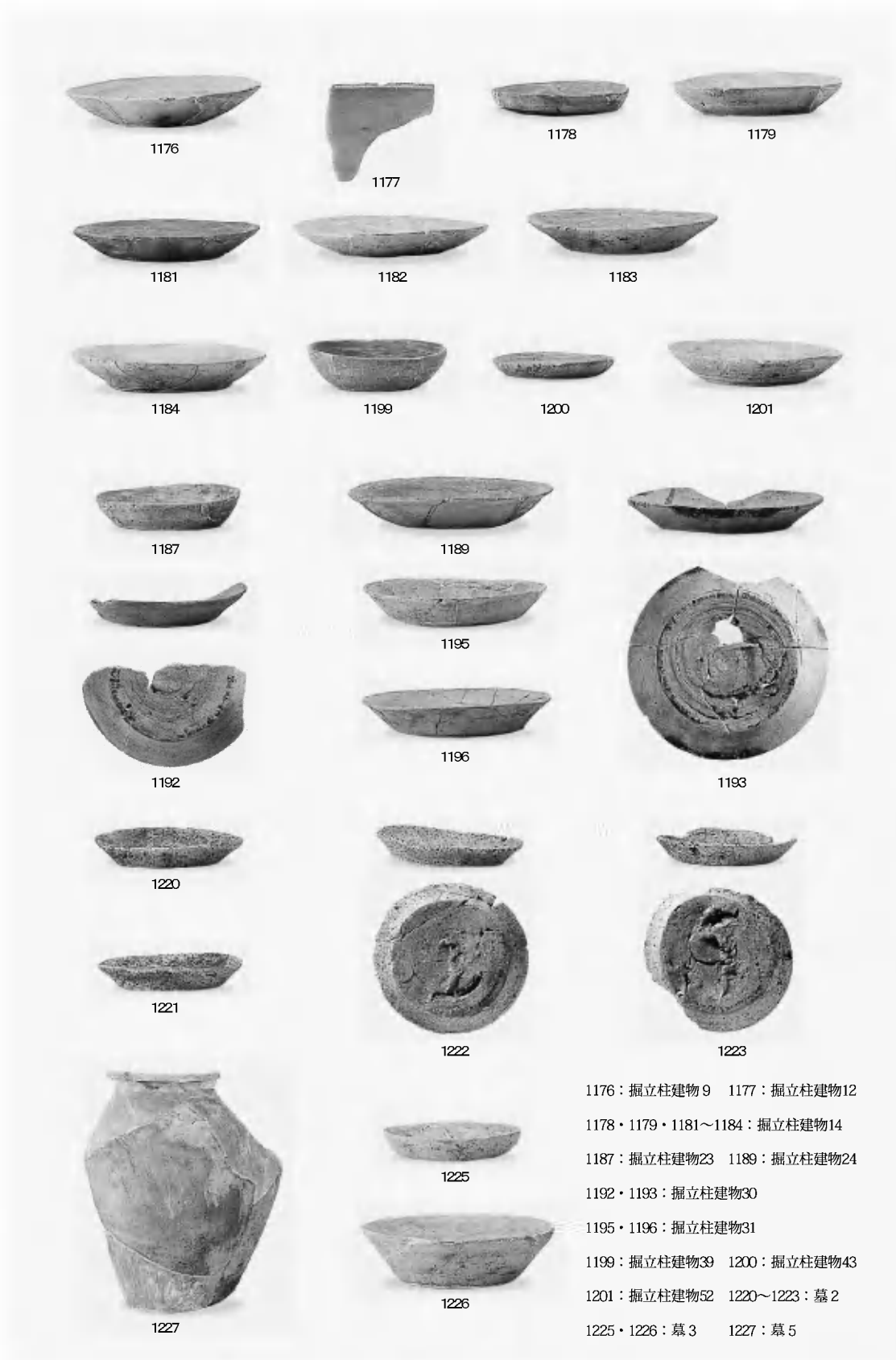


2 柱穴18  
遺物出土状況  
(南から)



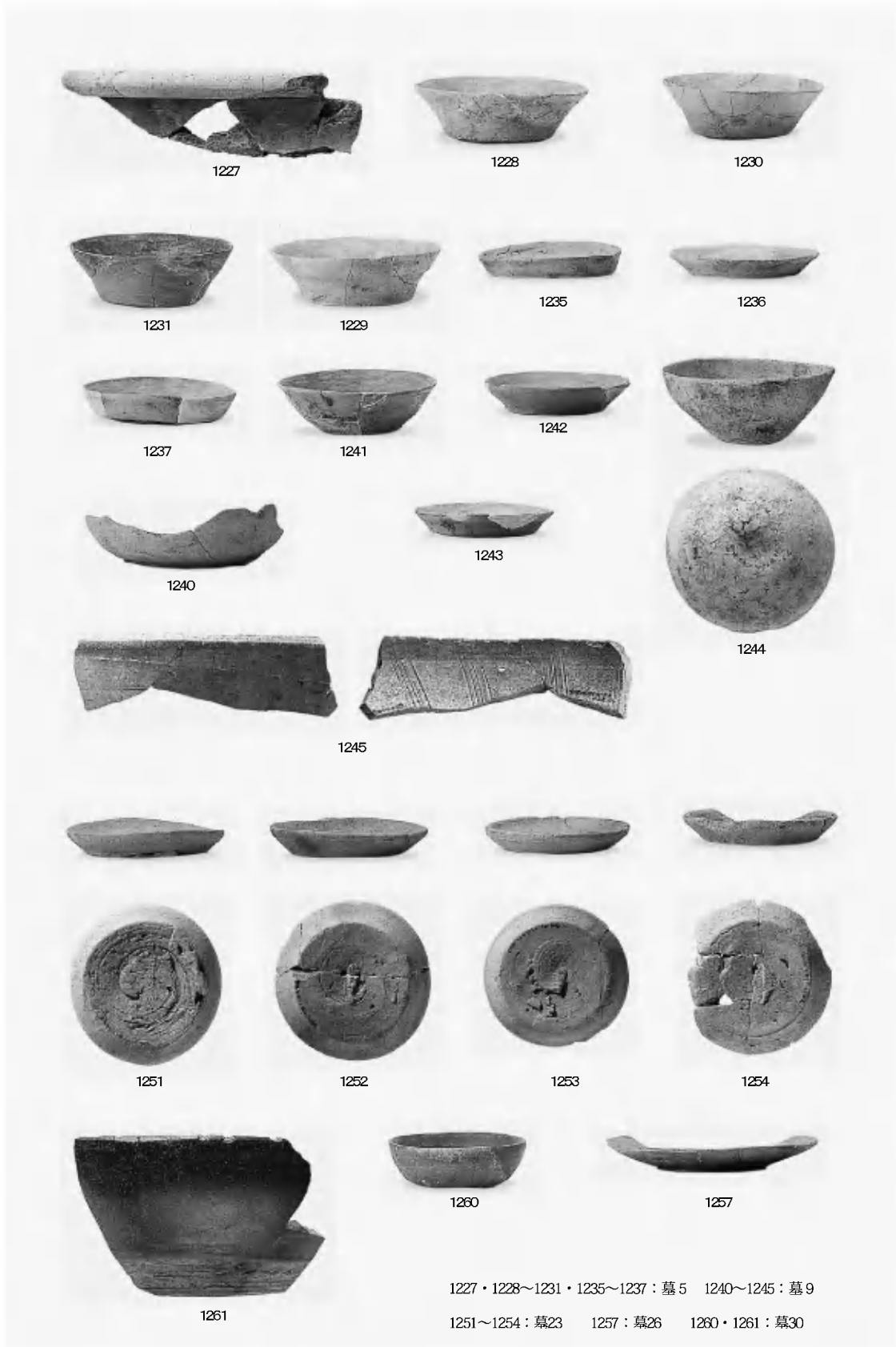
3 D地区包含層  
刀出土状況  
(北から)





1176：掘立柱建物9 1177：掘立柱建物12  
 1178・1179・1181～1184：掘立柱建物14  
 1187：掘立柱建物23 1189：掘立柱建物24  
 1192・1193：掘立柱建物30  
 1195・1196：掘立柱建物31  
 1199：掘立柱建物39 1200：掘立柱建物43  
 1201：掘立柱建物52 1220～1223：墓2  
 1225・1226：墓3 1227：墓5

掘立柱建物、墓出土土器①



1227・1228~1231・1235~1237：墓5 1240~1245：墓9

1251~1254：墓23 1257：墓26 1260・1261：墓30



1213



1214



1216



1269



1270



1268



1278



1277

1213・1214・1216：竖穴1屋内土壙

1270：埋甕遺構2

1268・1269：埋甕遺構1

1277・1278：集石土壙1

竖穴遺構、埋甕遺構、集石土壙出土土器



1283



1284



1285



1287



1289



1290



1292



1296



1297



1298



1305



1299



1300



1306



1307



1308



1309



1327



1317



1319



1320



1328

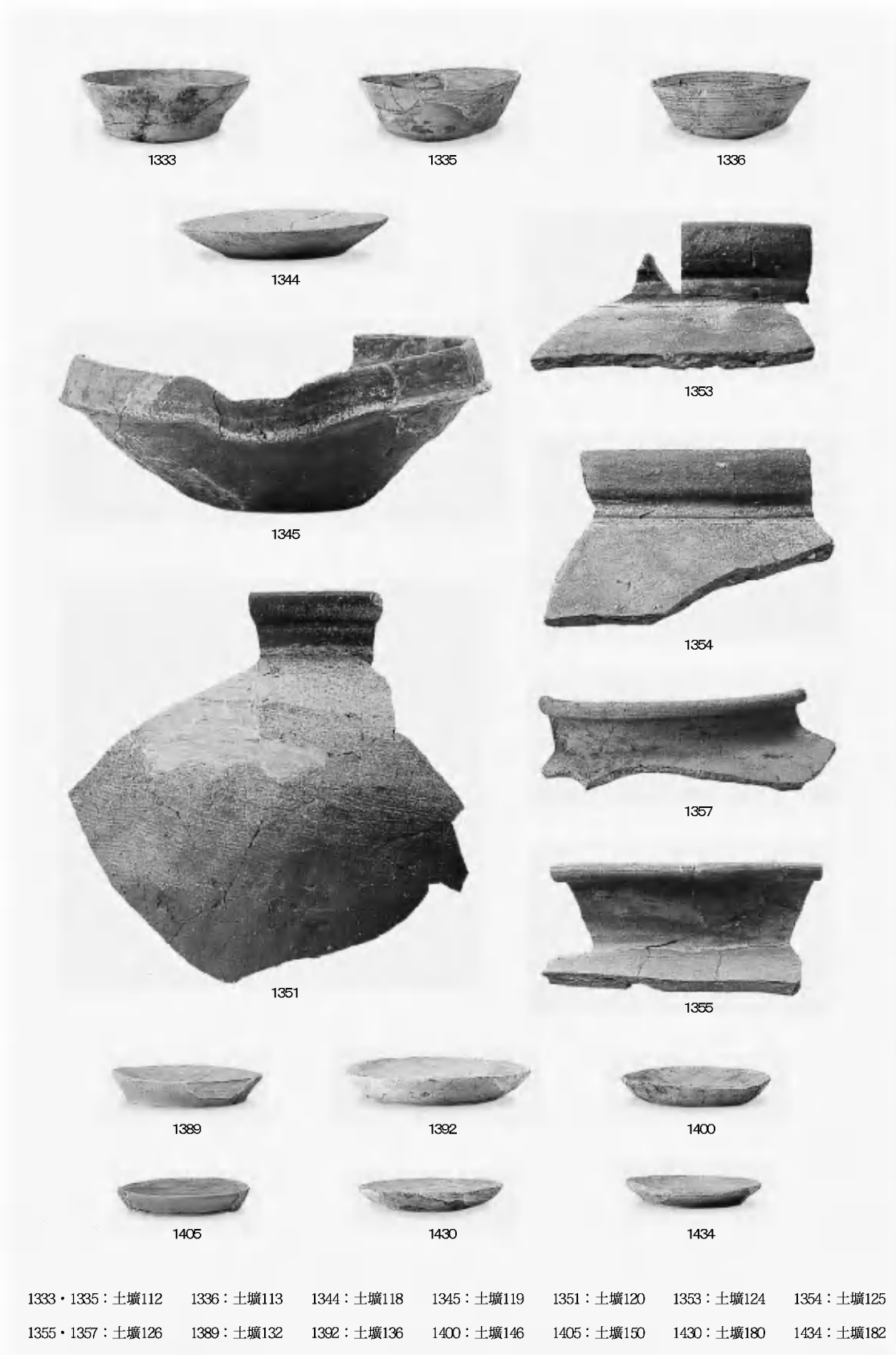


1332



1329

1283 : 土壙93    1284 : 土壙94    1285 : 土壙95    1287・1289・1290・1292 : 土壙96    1296 : 土壙99    1297~1300 : 土壙102  
1305・1306 : 土壙104    1307~1309 : 土壙105    1317・1319・1320・1327~1329・1332 : 土壙112



土壙出土土器②





1373



1374



1375



1376



1377



1380



1378



1379



1358



1360



1359



1361



1362



1363



1371



1383



1385



1386



1381



1382



1384

1358~1362・1370・1371・1373~1386：土壙129



1437



1465



1457



1459



1481



1488



1483



1489



1484



1490



1485



1494



1495



1496



1497



1498



1503

1437：土壙182

1457・1459：土壙196

1465：土壙201

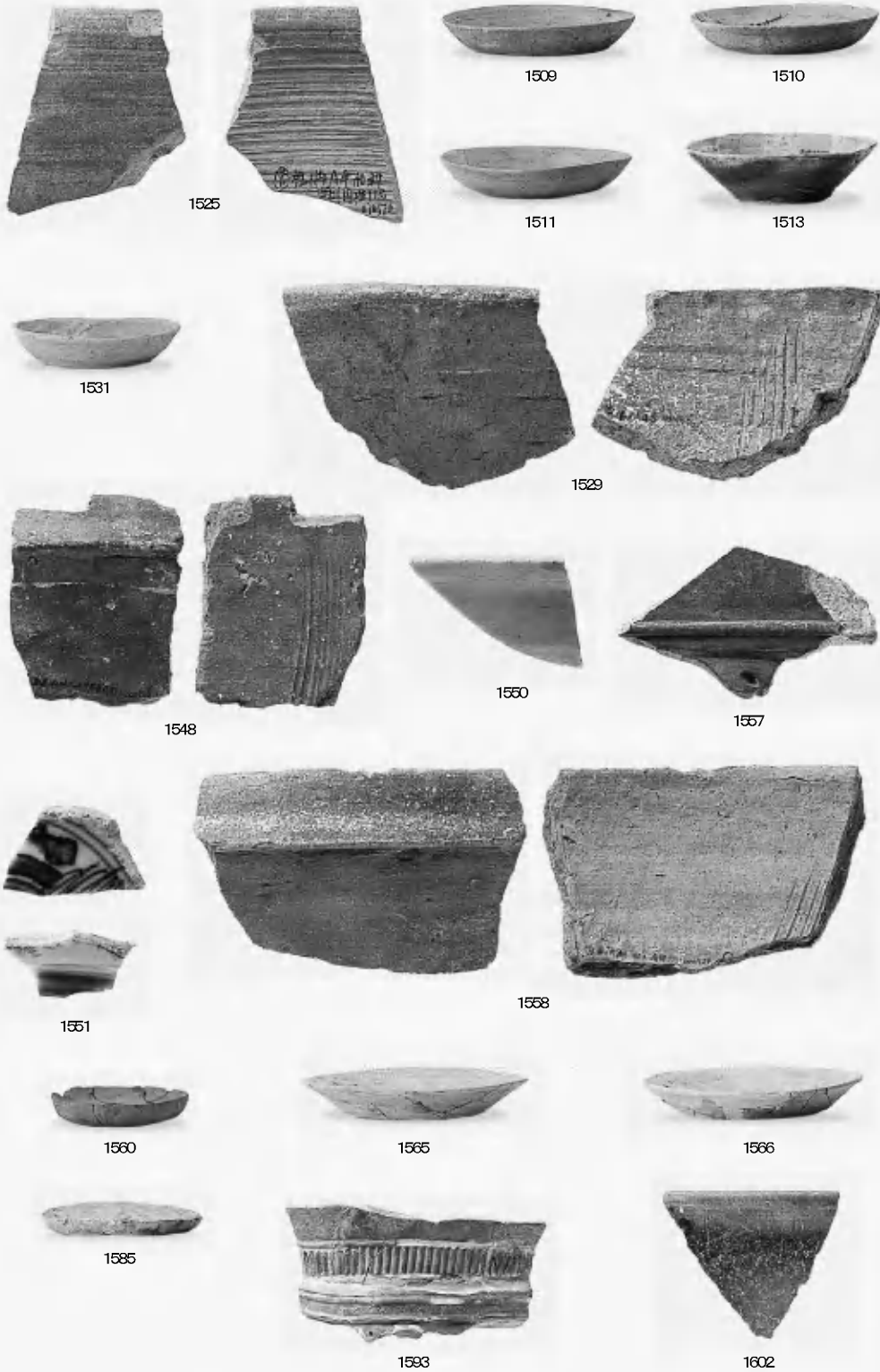
1481：土壙214

1483~1485：土壙215

1488~1490：土壙221

1493~1498：土壙224

1503：土壙225



1509~1511・1513・1525：堀1

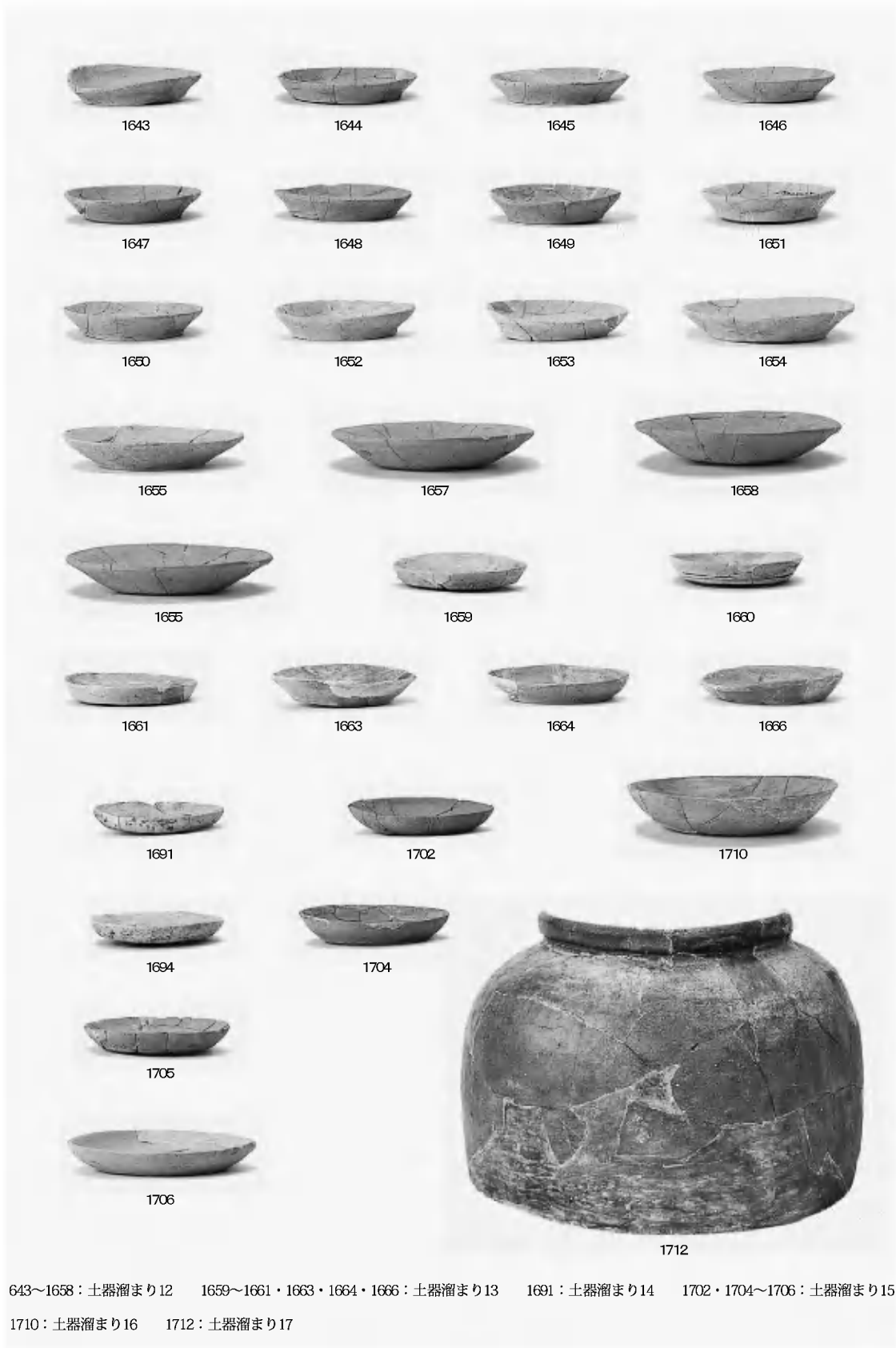
1529・1531：堀2

1548・1550・1551・1557・1558・1560・1565・1566・1585・1593・1602：堀3



1617・1618・1620～1623・1626～1628：溝23 1639：溝34 1640・1641：溝35 1669・1670・1672～1674・1678・1680～1685：土器溜まり13

溝、土器溜まり出土土器①



643~1658 : 土器溜まり12    1659~1661・1663・1664・1666 : 土器溜まり13    1691 : 土器溜まり14    1702・1704~1706 : 土器溜まり15  
 1710 : 土器溜まり16    1712 : 土器溜まり17

土器溜まり出土土器②



1713



1721

1713: 窪地10 1721・1727: 窪地12

1728~1731・1733~1737・1739

・1742・1745: 柱穴1~13



1727



1728



1731



1729



1730



1733



1734



1745



1736



1737



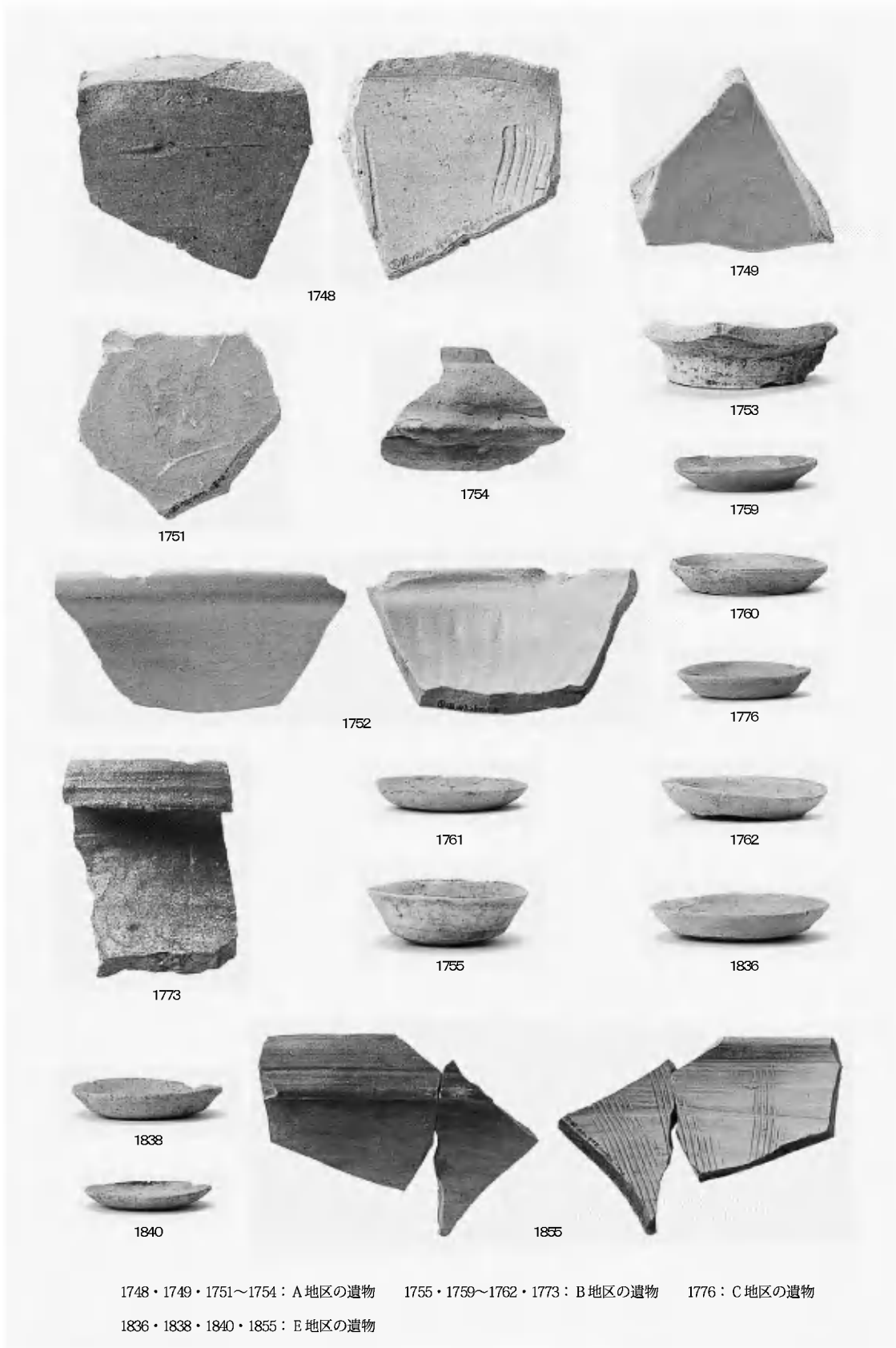
1742



1735



1739



1748・1749・1751～1754：A地区の遺物    1755・1759～1762・1773：B地区の遺物    1776：C地区の遺物  
 1836・1838・1840・1855：E地区の遺物

遺構に伴わない土器①



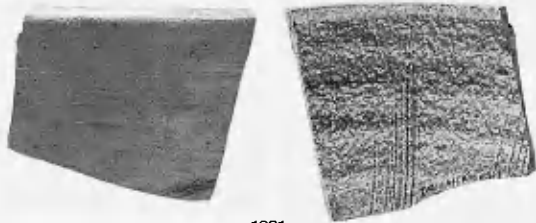
1900



1927



1901



1931



1934



1932



1937



1907



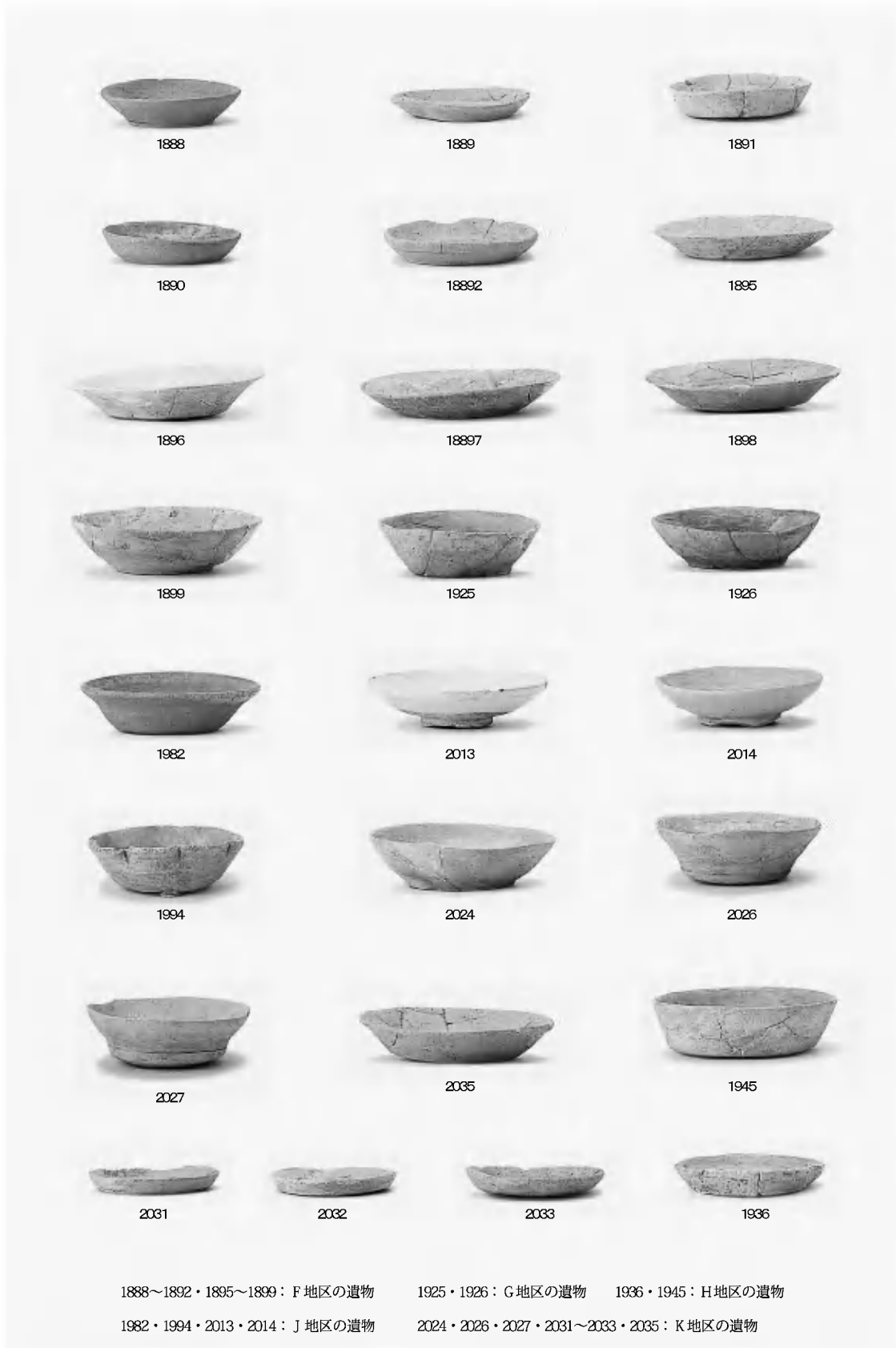
1883



1984

1900・1901・1907：F地区の遺物 1927・1931・1932・1934：G地区の遺物 1937：H地区の遺物 1883・1984：J地区の遺物





1888～1892・1895～1899：F地区の遺物      1925・1926：G地区の遺物      1936・1945：H地区の遺物  
 1982・1994・2013・2014：J地区の遺物      2024・2026・2027・2031～2033・2035：K地区の遺物

遺構に伴わない土器③



2018



2023



2043



2054



2063



2055



2013



2060



2057



2066



2071



2073

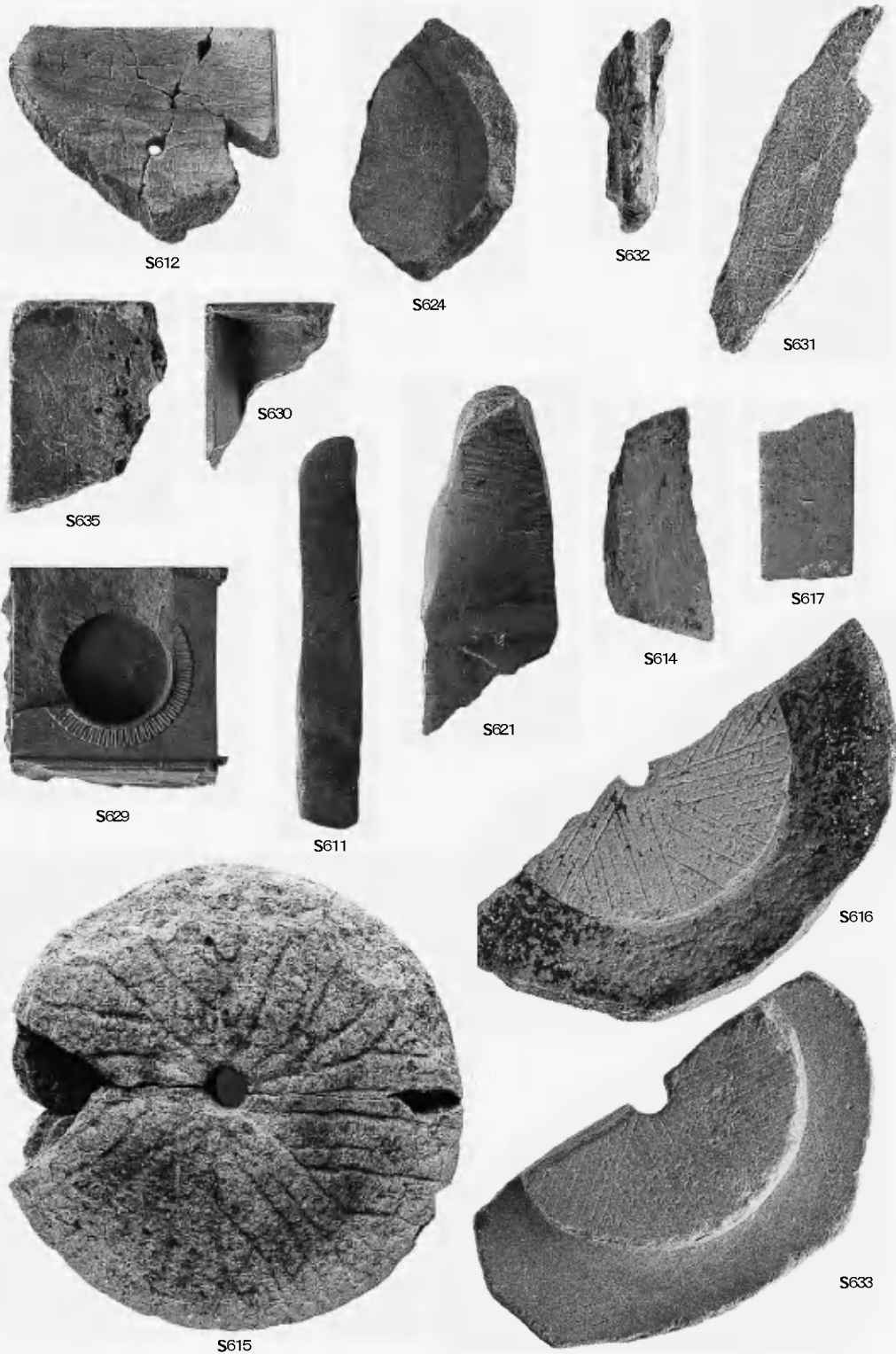


2074



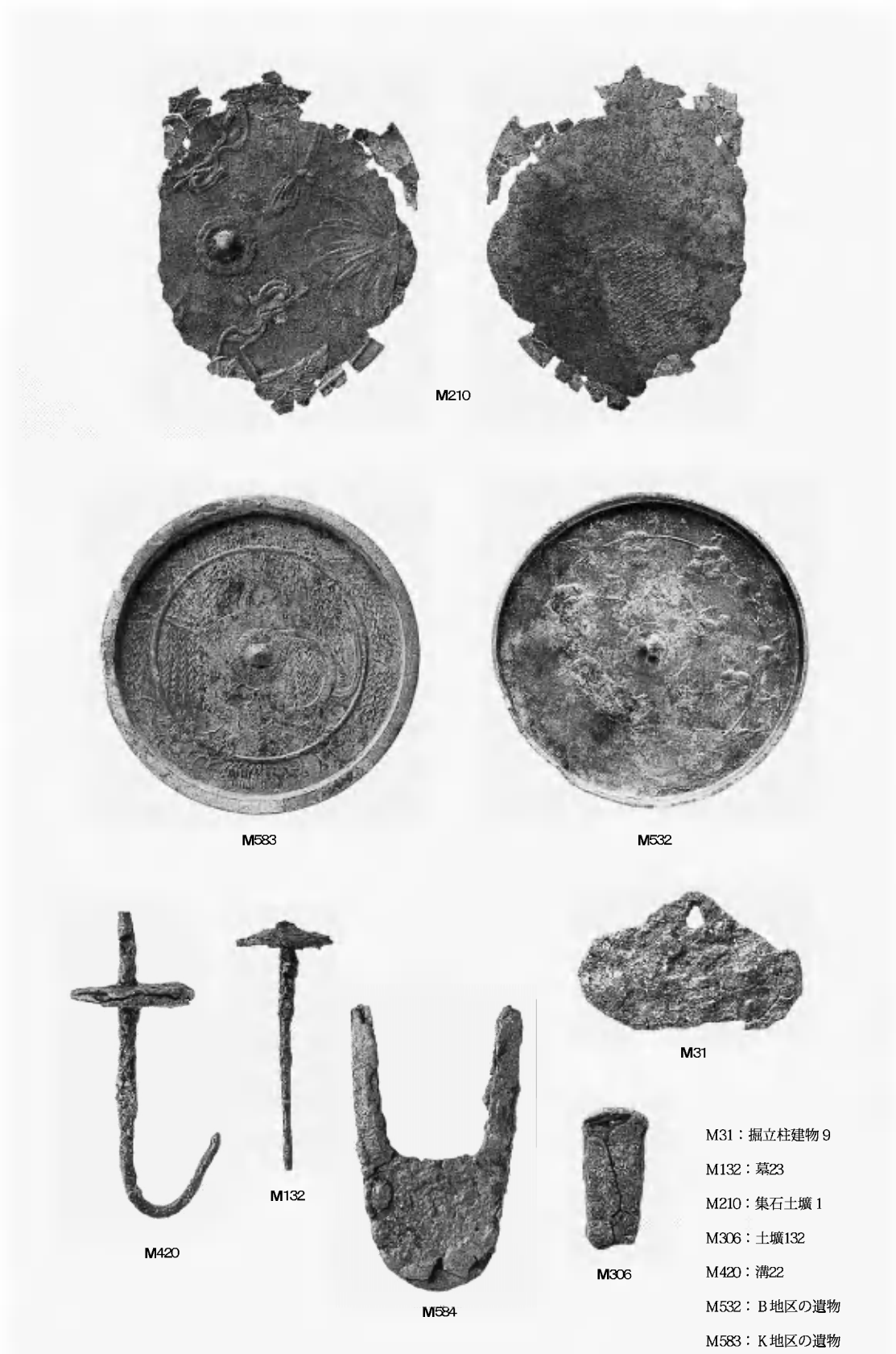
2072

2013・2018・2023：J地区の遺物 2043・2054・2055・2057・2060・2063・2066・2071～2073・2074：K地区の遺物

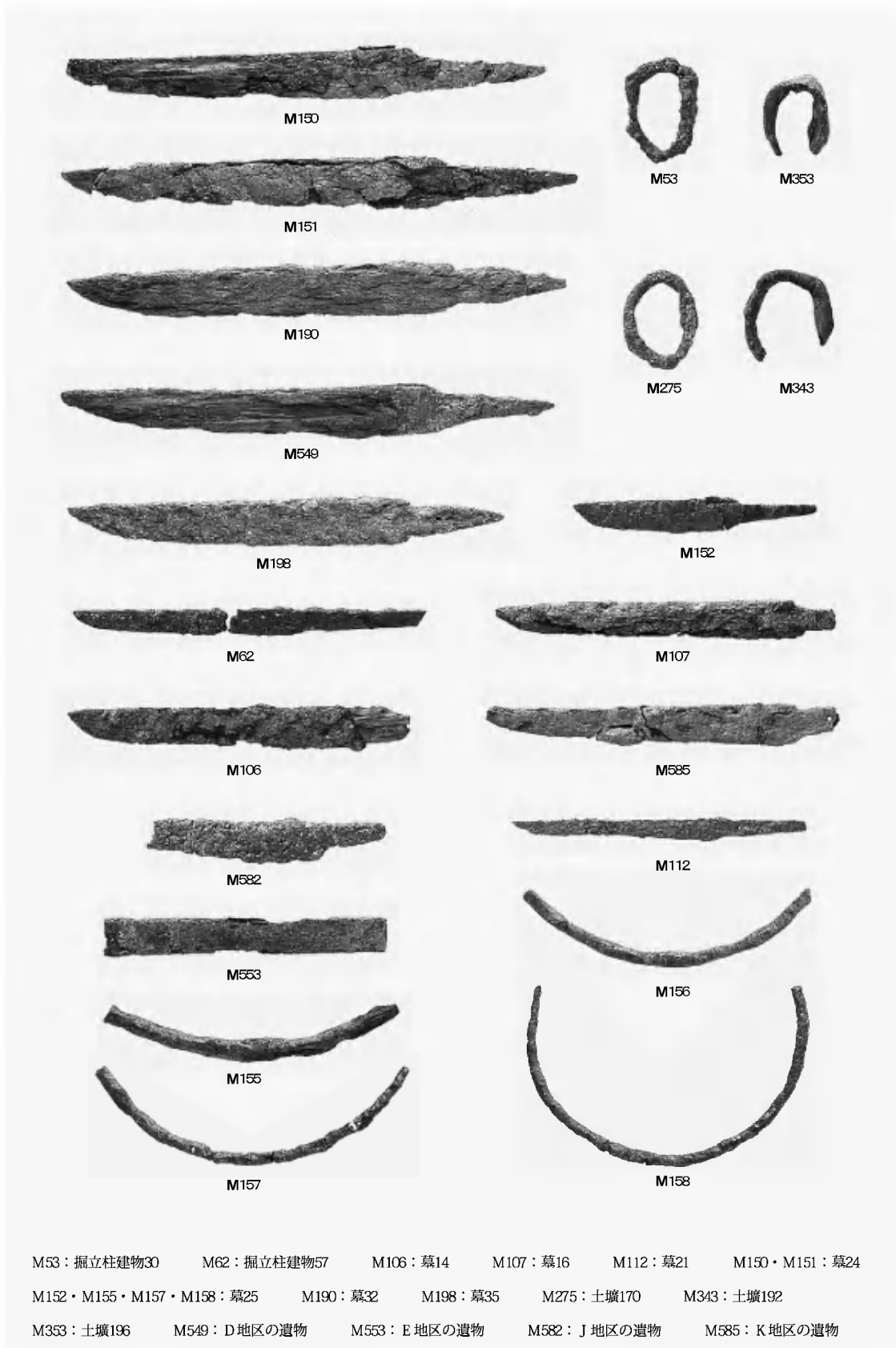


S 611 : 掘立柱建物52    S 612 : 墓13    S 614 : 土壙182    S 615 : 土壙189    S 616 : 土壙192    S 617 : 土壙199    S 621 : 堀 1  
 S 624 : B 地区の遺物    S 629 ~ S 633 : J 地区の遺物    S 635 : K 地区の遺物

出土石製品



出土金属製品①



出土金属製品②



M135



M138



M136



M137



M142



M140



M141



M139



M143



M144



M145



M146



M305



M304



M581



M438



M354



M149



M261

M135~M146・M149：墓24

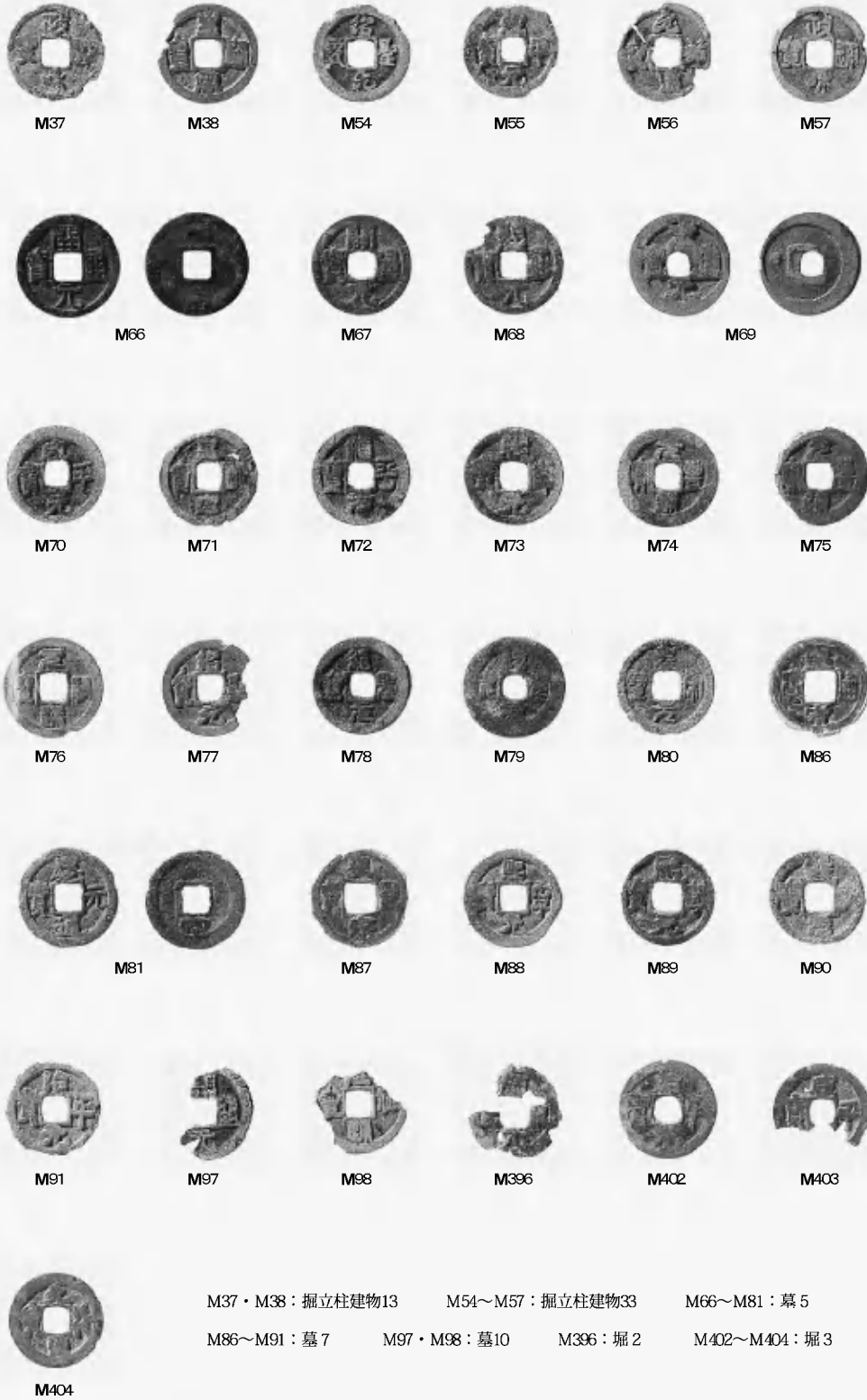
M261：土壇163

M304・M305：土壇182

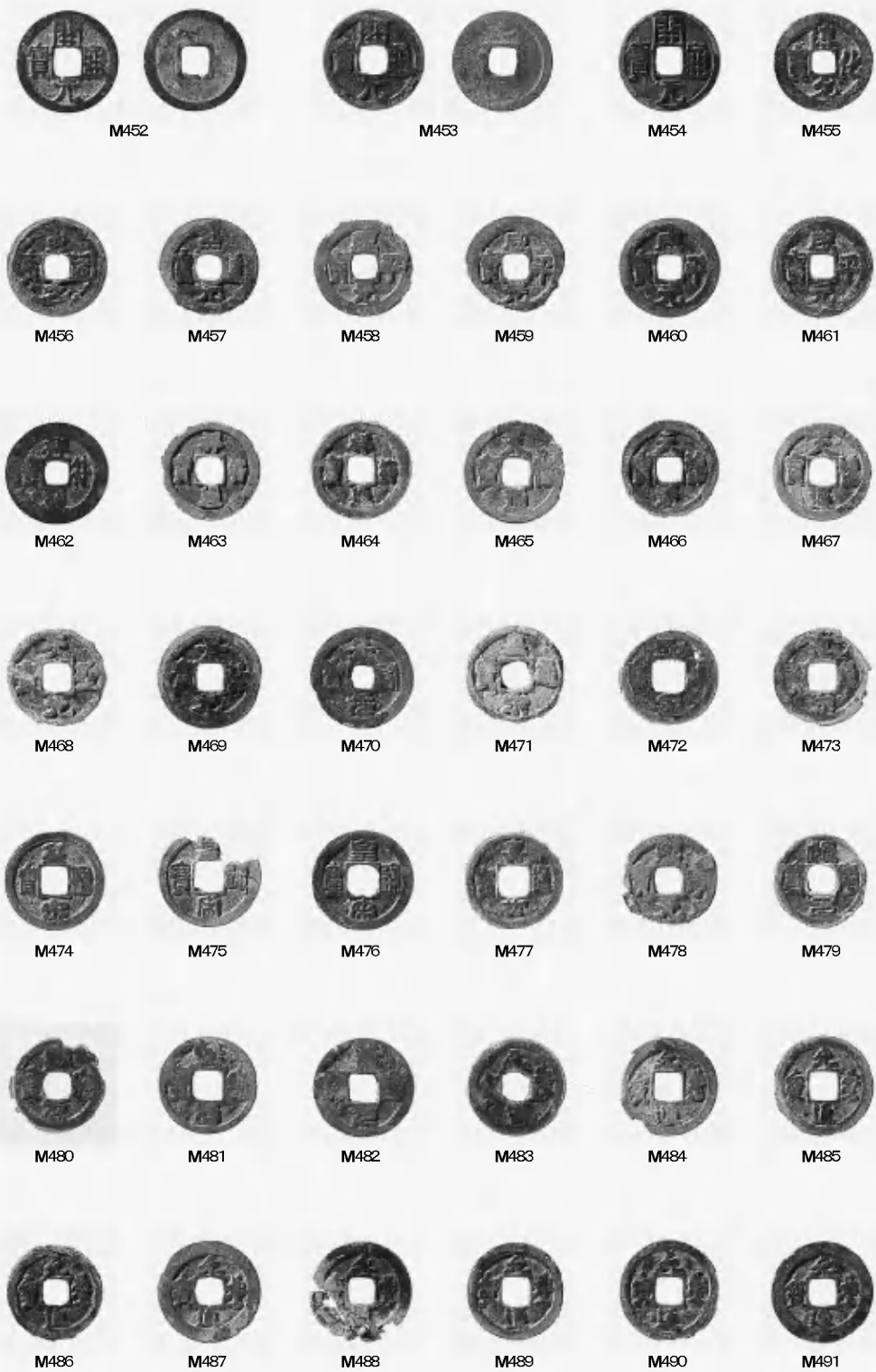
M354：土壇196

M438：土器溜まり17

M581：J地区の遺物

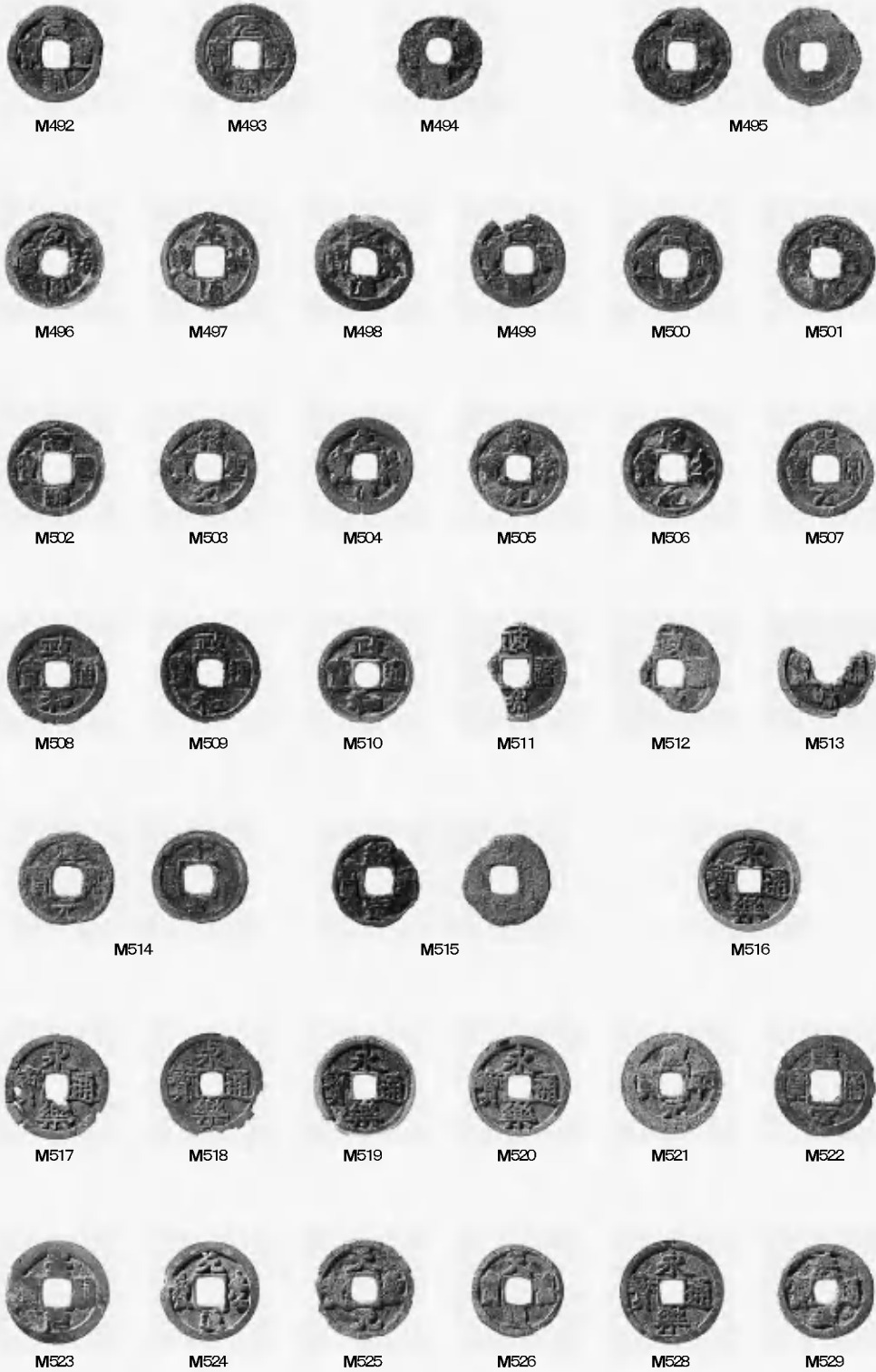


M37・M38：掘立柱建物13      M54～M57：掘立柱建物33      M66～M81：墓 5  
 M86～M91：墓 7      M97・M98：墓10      M396：堀 2      M402～M404：堀 3



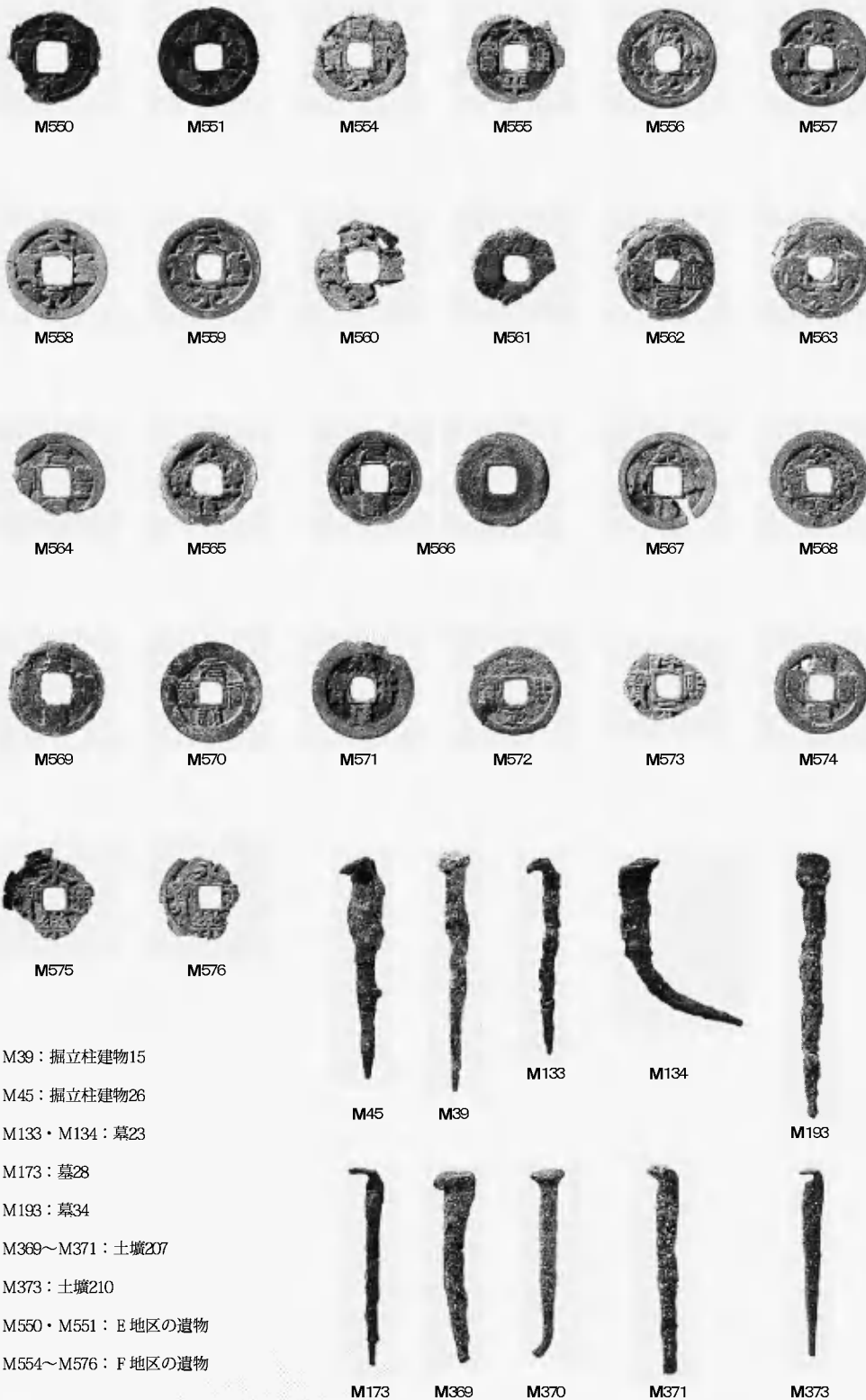
M452~M491 : 柱穴18





M492～M520：柱穴18

M521～M524・M526～M529：A地区の遺物



M39：掘立柱建物15

M45：掘立柱建物26

M133・M134：墓23

M173：墓28

M193：墓34

M369～M371：土壇207

M373：土壇210

M550・M551：E地区の遺物

M554～M576：F地区の遺物



C154



C146



C104



C155



C189



C153



C254



C255

C104：土壙121

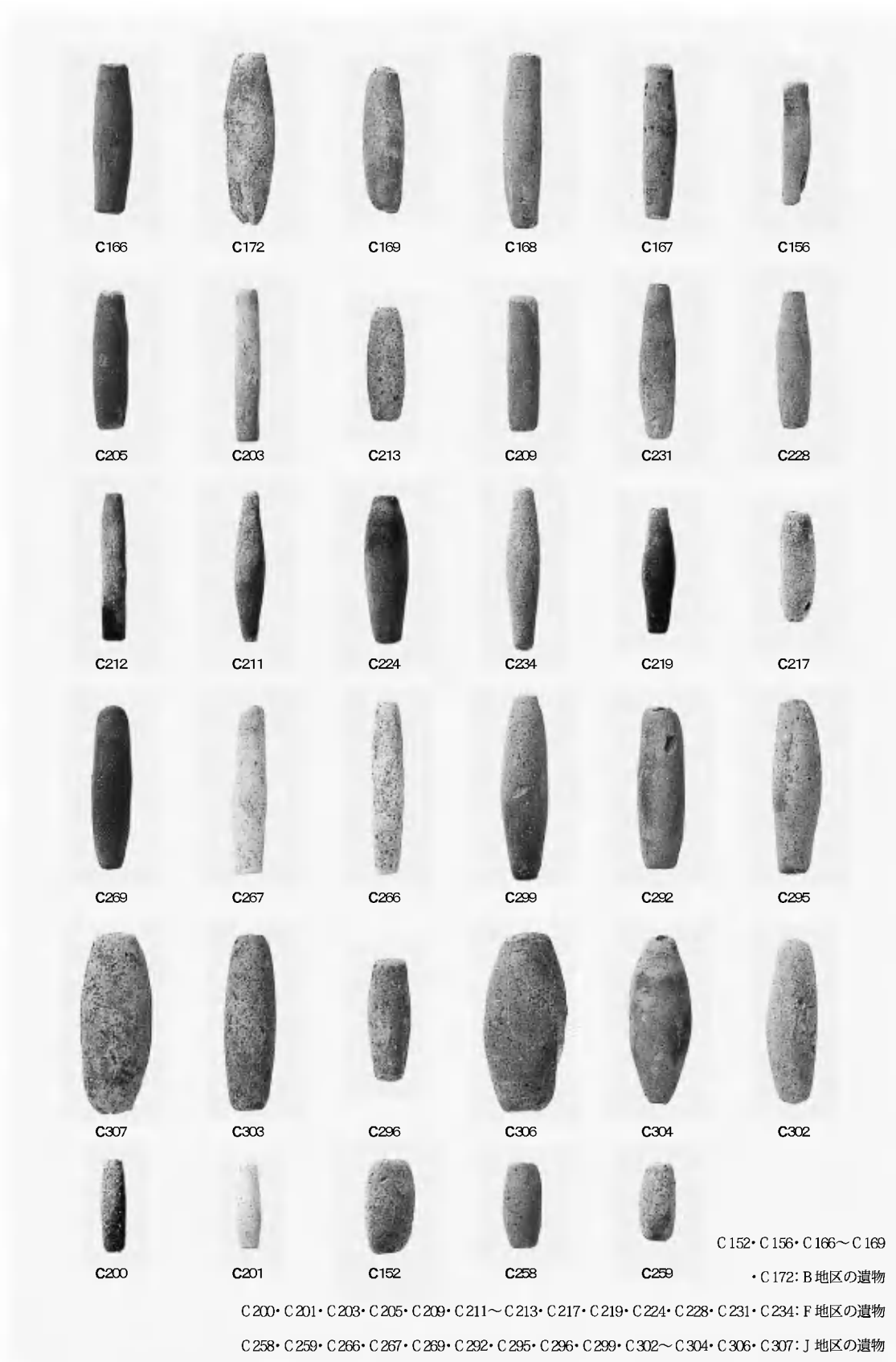
C146：溝33

C153・C154：柱穴15

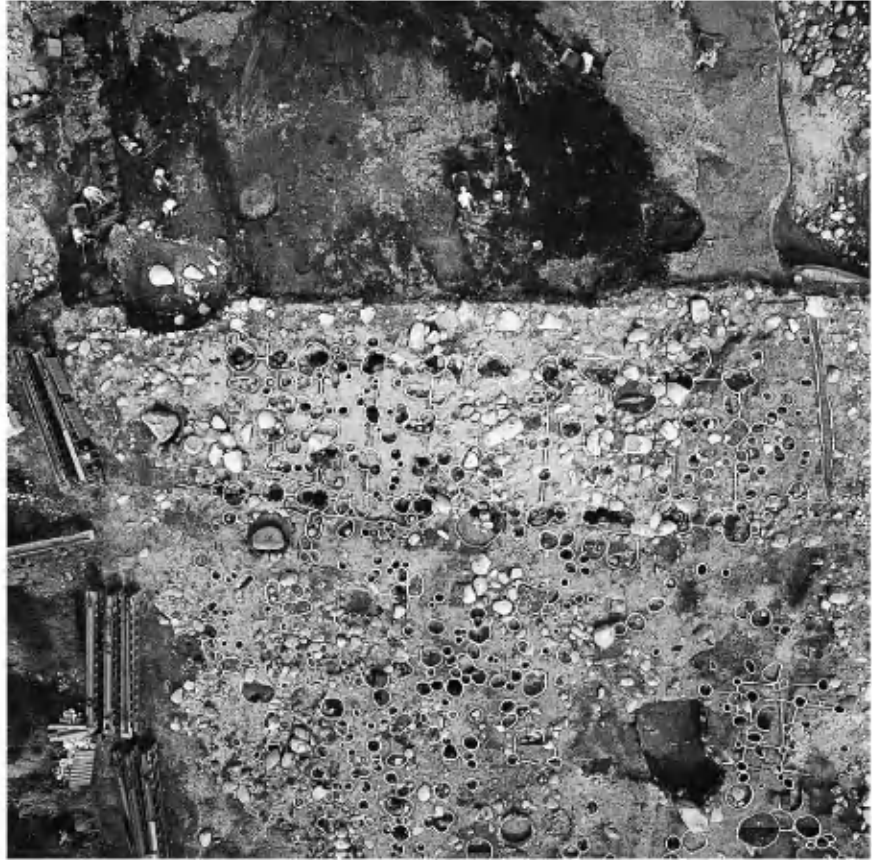
C155：柱穴16

C189：C地区の遺物

C254・C255：J地区の遺物



1 掘立柱建物72  
周辺遺構群  
(航空写真)



2 写真1の南部  
遺構群  
(航空写真)





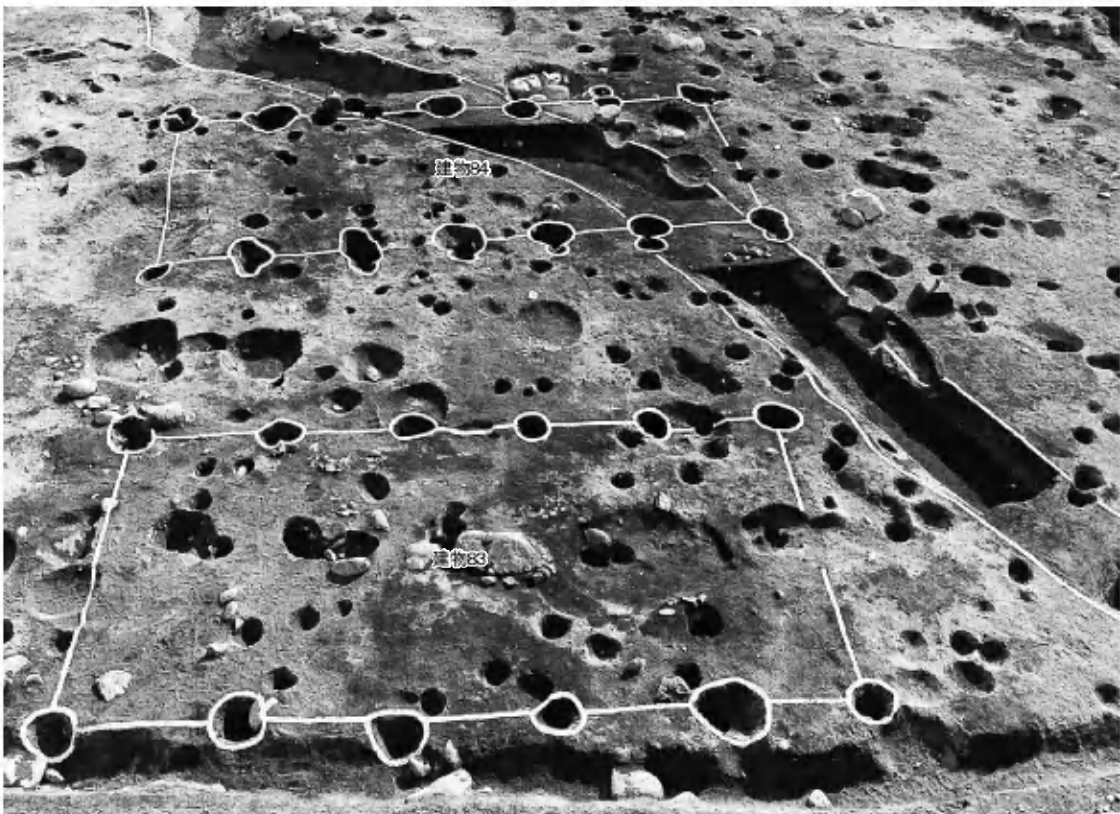
1 堀3東辺と  
周辺遺構群  
(航空写真)



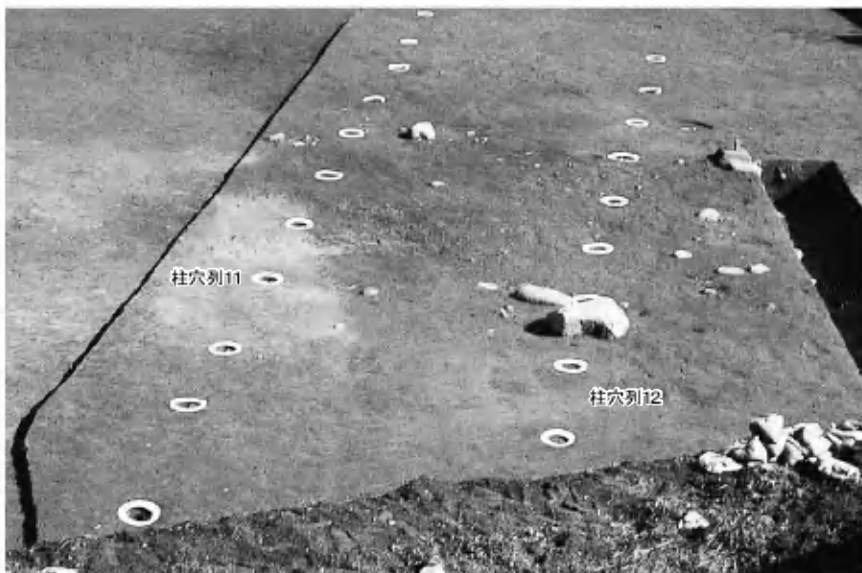
2 掘立柱建物80  
・81周辺遺構群  
(南から)



1 掘立柱建物68・69・71、堀3（北から）



2 掘立柱建物83・84（南から）



1 柱穴列11・12  
(南から)



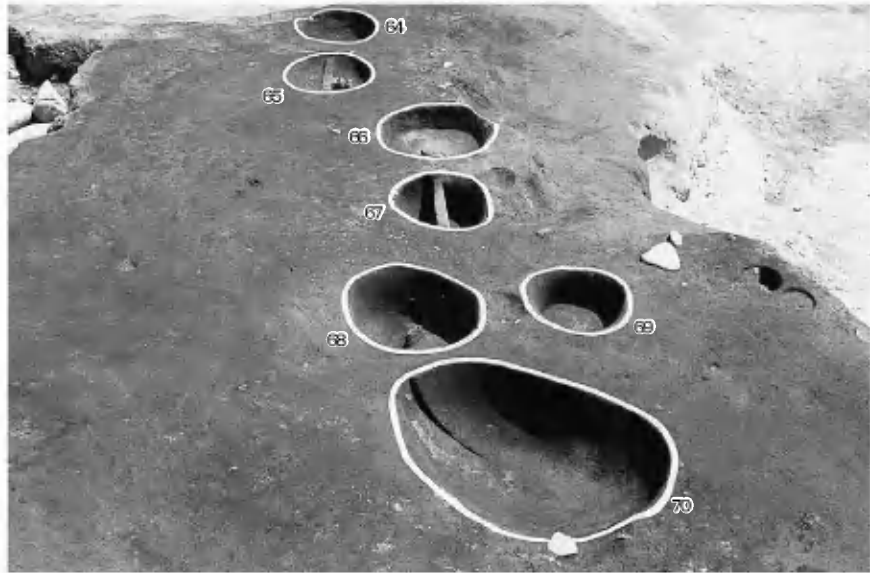
2 井戸2  
(西から)



3 墓域1  
(南東から)



1 墓64~70  
(西から)



2 墓51  
(南から)



3 墓61  
(南から)





1 墓65  
(北から)



2 墓66  
(北から)



3 墓域 2  
(南から)

1 墓80  
(北から)



2 墓85  
(北から)



3 墓86  
(東から)





1 墓域3  
(南から)

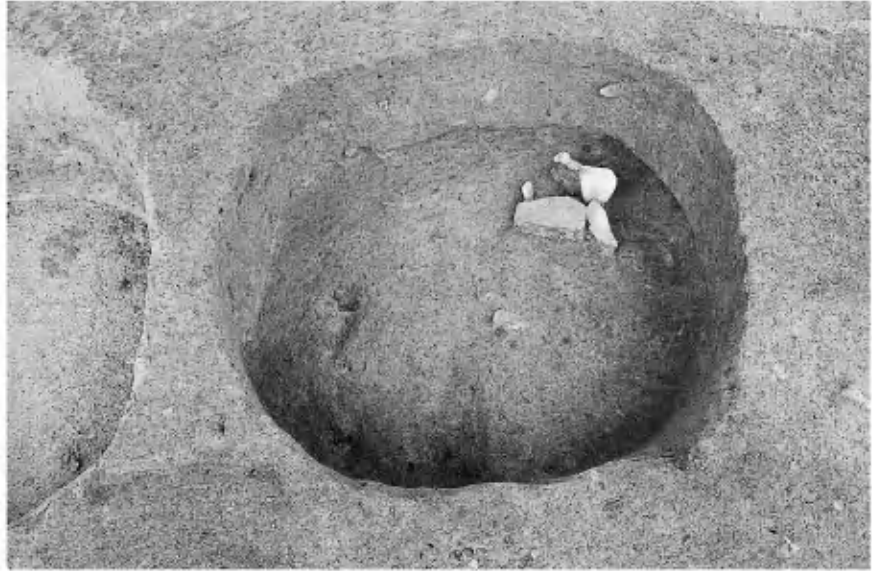


2 土壇228  
(東から)



3 土壇229  
(東から)

1 土壙231  
(東から)

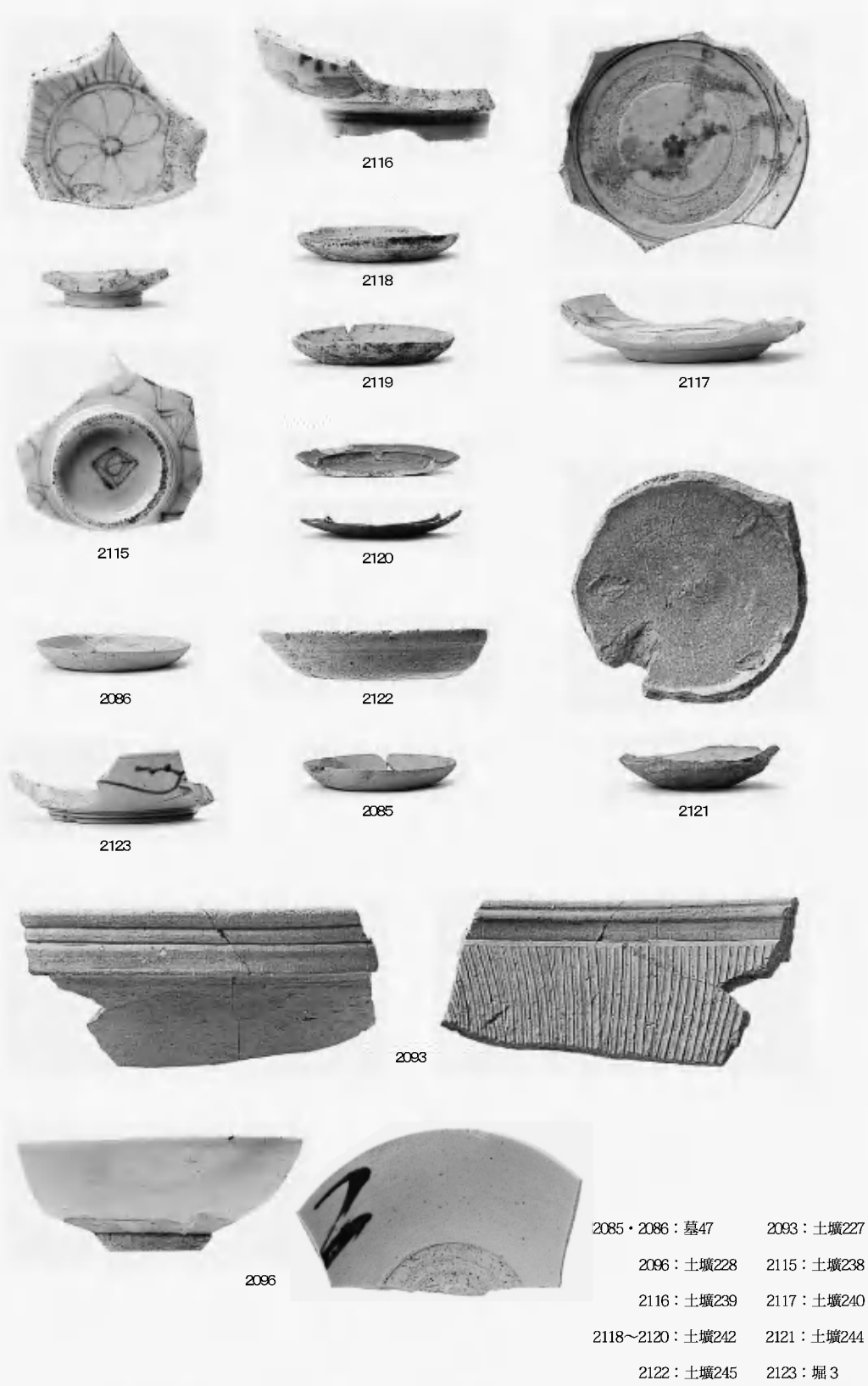


2 土壙235  
(南から)



3 土壙243  
(北から)





墓、土壙、掘出土土器



2097



2098



2101



2102



2104



2100



2103



2105



2107



2106



2108



2111



2109

2097・2098・2100：土壙228

2101～2109：土壙229

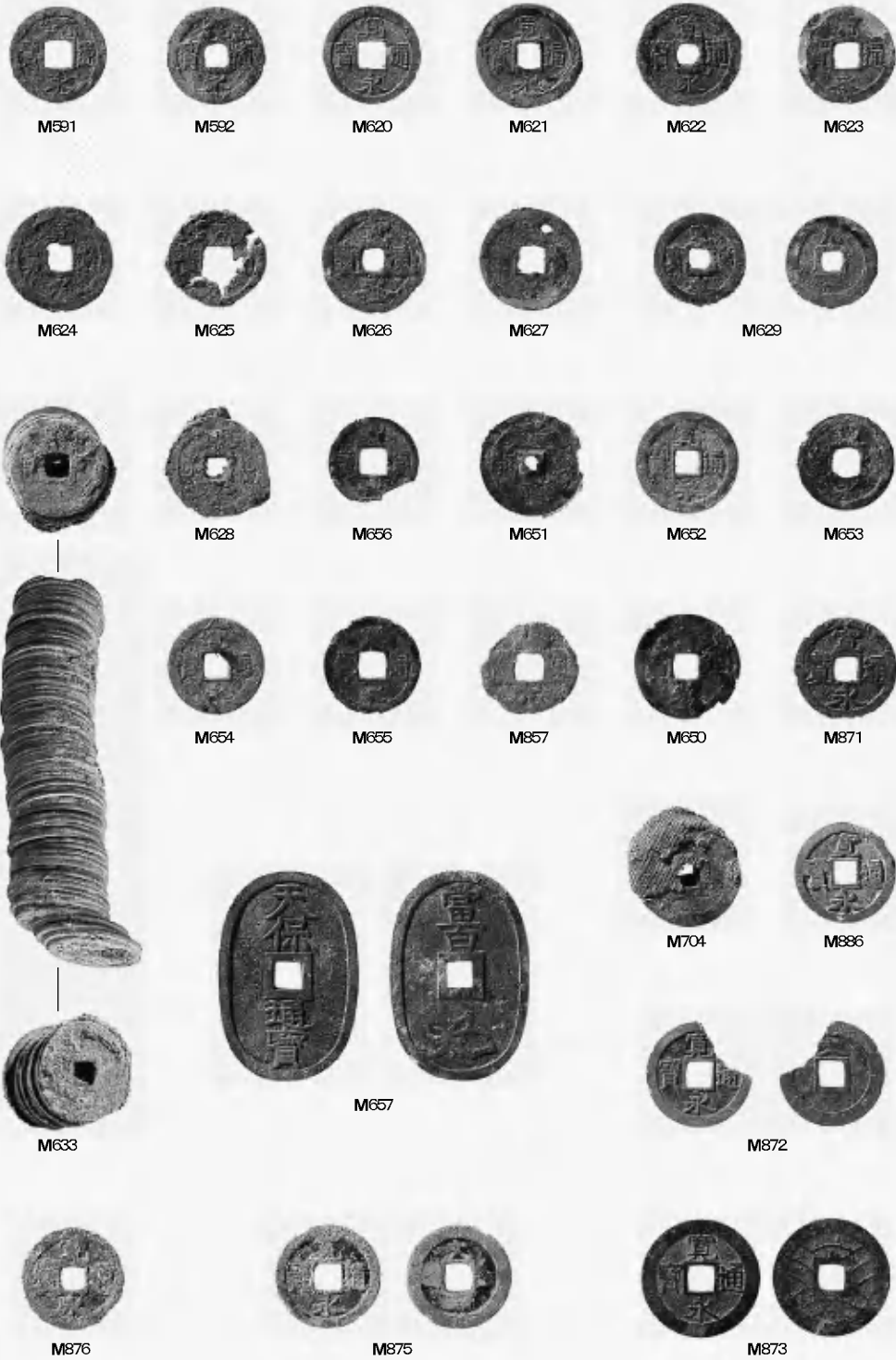
2111：土壙230

土壙出土土器

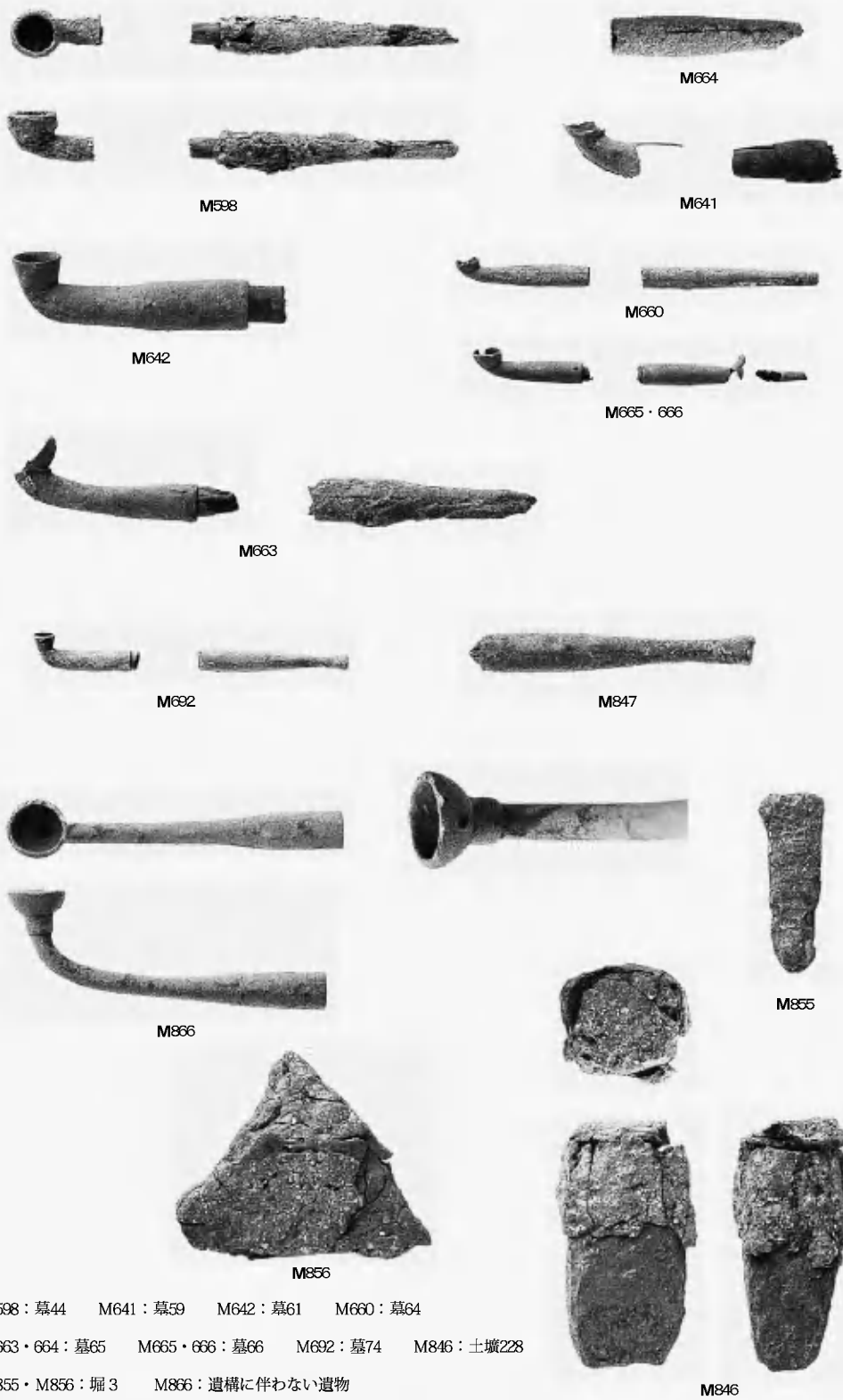


堀、柱穴、遺構に伴わない土器

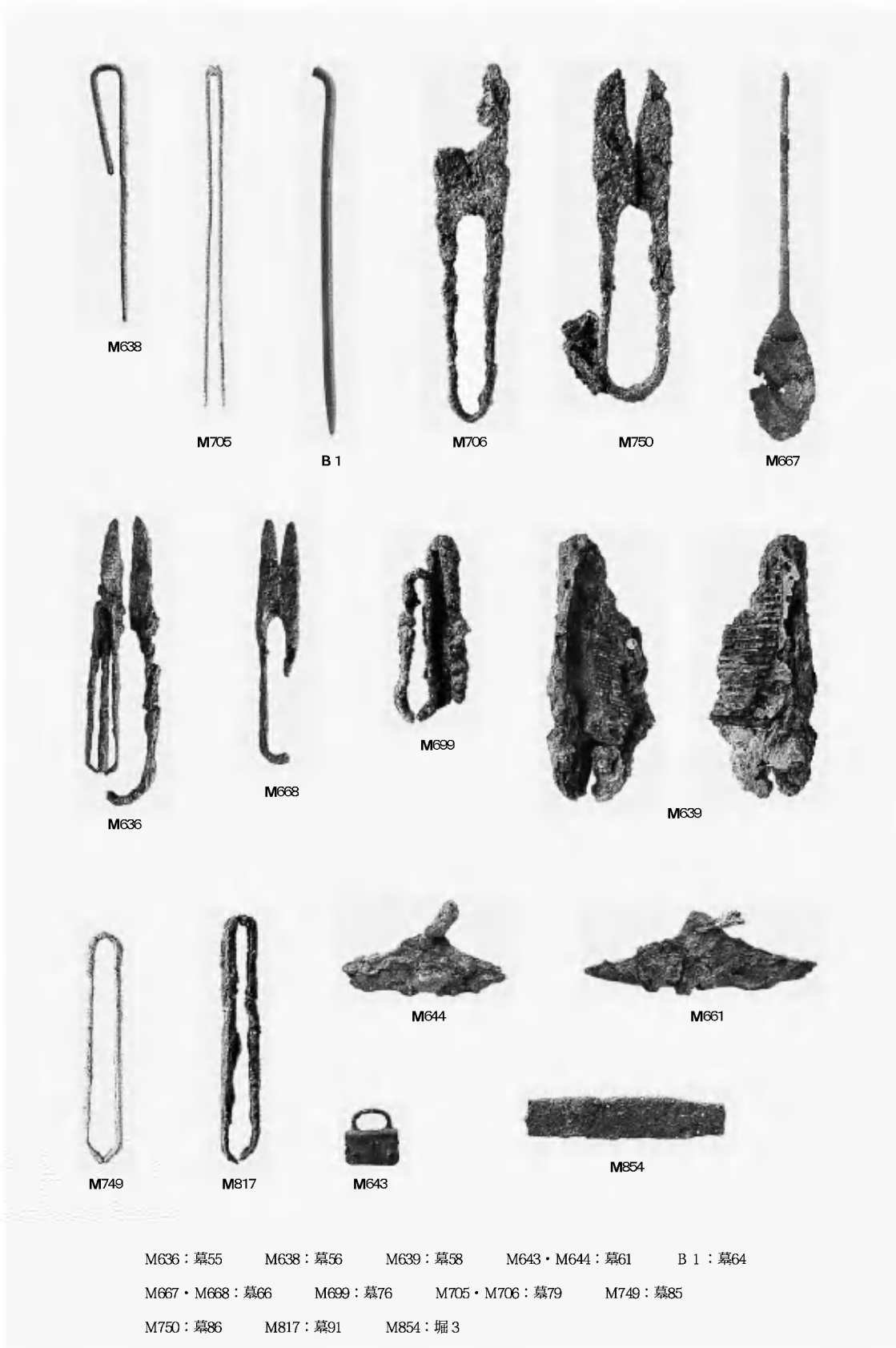




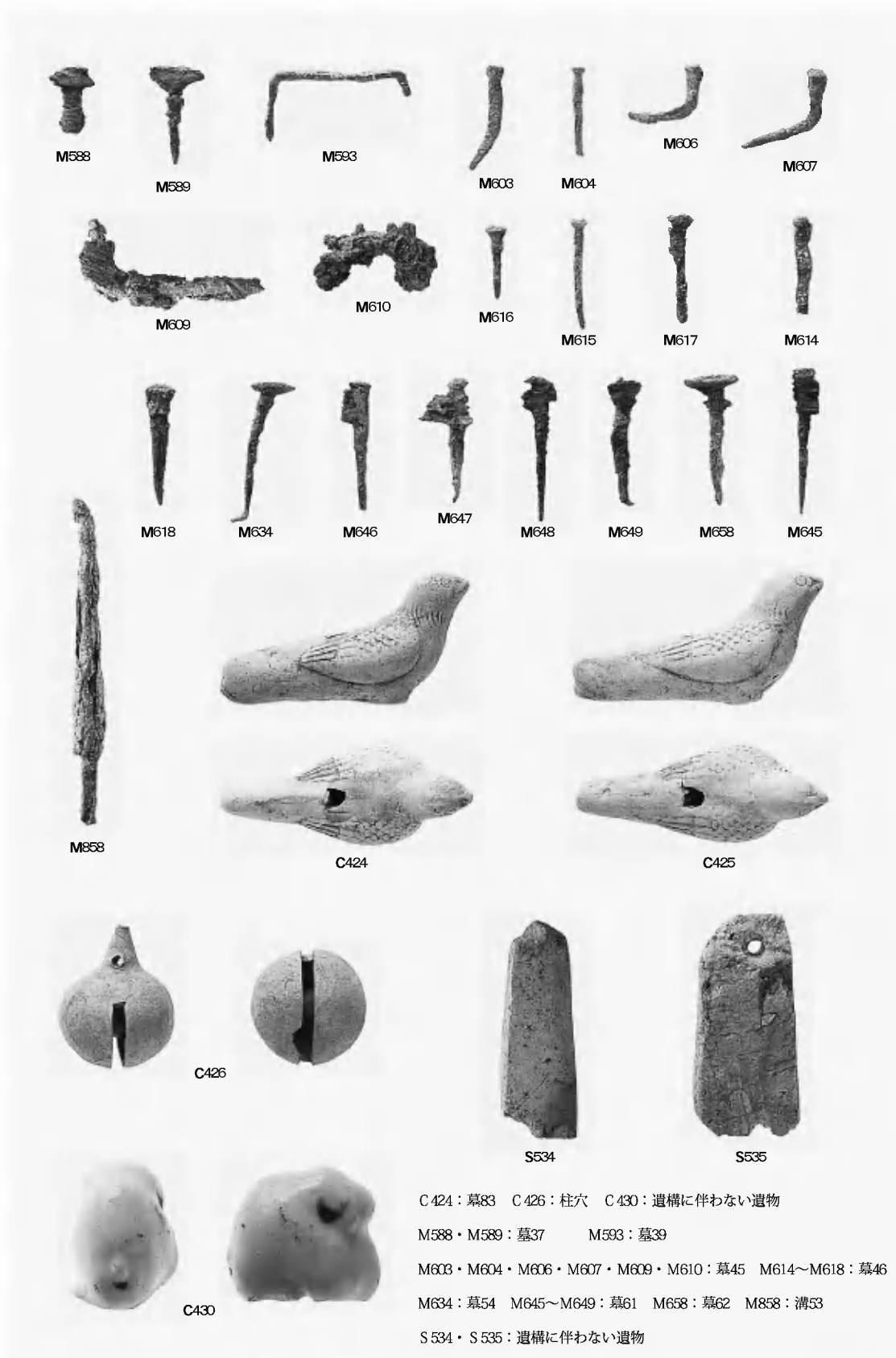
M591・M592：幕38    M620～M629：幕46    M633：幕51    M650～M657：幕61  
 M704：幕77    M857：溝53    M871～M873・M875・M876・M886：遺構に伴わない遺物



出土金属製品①



出土金属製品②



出土金属製品③、石製品、土製品

# 報告書抄録

ふりがな	くたほりのうちいせき							
書名	久田堀ノ内遺跡							
副書名	苦田ダム建設に伴う発掘調査							
巻次	3							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	192							
編著者名	弘田和司 伊藤 晃 江見正己 岡本寛久 小嶋善邦 河合 忍 二宮治夫 福田正継 平井泰男 上梶 武 和田 剛 岡田 博 佐藤寛介 白石 純							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3					TEL 086-293-3211		
発行機関	国土交通省苦田ダム工事事務所・岡山県教育委員会							
所在地	〒708-0433 岡山県苦田郡鏡野町久田下原1592-4					TEL 0868-52-2152		
	〒700-8570 岡山県岡山市中山下2-4-6					TEL 086-224-2111		
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	岡 山 県	市町村	遺跡番号	。'。"	。'。"			
くたほり 久田堀ノ うちいせき 内遺跡	岡山県苦田郡 鏡野町 久田下原	33606	169	35°08'00"	133°53'00"	1999.4.1~ 2001.3.31	52,885	苦田ダム建設に伴う埋没予定地
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
久田堀ノ内遺跡	集落	縄文時代	袋状土壙・焼成土壙・土壙・溝・火処・土器溜まり・窪地・河道		後期・晩期土器、打製石鏃・石鏃・石包丁・スクレイパー・磨製石斧・勾玉・獸形勾玉・スタンプ形土製品・円盤状土製品		東日本系の搬入土器、檀原文様の土器、翡翠・黒曜石	
	集落・水田	弥生時代	竪穴住居・掘立柱建物・袋状土壙・土壙・火処・水田・溝・河道		弥生土器・石包丁・環状石斧・打製・磨製石斧・砥石・石鏃・スクレイパー・紡錘車		岡山県北部初の弥生水田遺構	
	集落・墳墓	古墳時代	竪穴住居・墓・土壙・火処・土取り跡・土器溜まり・窪地・河道		須恵器・土師器・鉄鏃・鉄鎌・刀子・砥石			
	集落・墳墓	中世	掘立柱建物・柱穴列・竪穴遺構・井戸・墓・焼成土壙・埋甕遺構・土壙・堀・溝・土器溜まり・窪地・柱穴		陶磁器・瀬戸美濃・常滑焼・備前焼・勝間田焼・須恵器・土師器・瓦質土器・和鏡・甲冑の小札・刀・鉄鏃・銭・硯・砥石・石臼・土錘・鍛冶滓		堀を巡らす居館、経塚遺構、和鏡3面、刀・鉄鏃を副葬する墓、鍛冶工房	
	集落・墳墓	近世	掘立柱建物・柱穴列・墓・土壙・溝		陶磁器・土師器・簪・毛抜き・鋏・天保通寶・寛永通寶・鳩笛・人形			



岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 192

久田堀ノ内遺跡

苦田ダム建設に伴う発掘調査

3

(第3分冊)

平成17年3月18日 印刷

平成17年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行 国土交通省苦田ダム工事事務所  
岡山県苦田郡鏡野町久田下原1592-4

岡山県教育委員会  
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷 株式会社 中野コロタイプ  
岡山県岡山市玉柏390

